女勇者セレス

松宮星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女勇者セレス

【Ｎコード】
Ｎ４２１８Ｓ

【作者名】
松宮星

【あらすじ】
女嫌いの『勇者の剣』を背負い、処女嫌いの傭兵には『馬鹿女』とののしられ、武闘僧には『一般教養に欠ける小娘でもあなたは勇者、旅のリーダーでしょ』と責められ、家族と村の仇を追っていた格闘家の少年には『さすがセレス様！』と尊敬され、忍者にはストーカーまがいにつきまとわられ、大魔術師からはセクシー・ポーズを求められてしまう……そんな熱血漢でおひとよしで世間知らずな美少女と従者達の話です。シリアスあり、コメディーあり、バトルあり、恋愛・友情・涙・お色気もほんのちょっとあるファンタジ

ーです。作者の趣味で、おじさん、おじいさんが活躍してます。若干、上品ではない話もあります。本編は終了しました。番外編をアップ中です。

旅のはじまり　＊　セレス・アジャン・ナーダ　＊　序（前書き）

ファンタジー世界的にありえない衣装・風俗が出てくる話や、男性の同性愛が絡む話があります。Ｒ１５指定内の表現におさめますが、苦手な方はどうぞご注意ください。
時間・長さ・面積等の単位は現実のものをそのまま利用しています。
興醒めかもしれませんが、ご容赦ください。

旅のはじまり　＊　セレス・アジャン・ナーダ　＊　序

「行って参ります」

馬上の少女は、槍をささげ敬礼する隔壁の衛兵に、にこやかに笑みを返した。

西の大国エウロペ、その首都クリサニア。王城を中心に八つの隔壁が巡らされる、西国一堅固な都市だ。

暦の上では春とはいえまだ肌寒さを感じる早朝、第四隔壁の内側から東の大通りに風変わりな三騎が現れた。いずれも馬に鞍袋や寝具を積んでいる。

先頭の栗毛には、男装の少女が跨(またが)っていた。

馬上だというのに、その小さな体に不釣り合いな大剣を背負ったまま。

手の指から足の爪先までを白銀の鎧で覆う重装備だったが、不思議なことに少女は冑(かぶと)は被っていなかった。鞍に下げてもいない。

朝の陽光に照らされる金の髪、首の後ろで一つに束ねられたそれは、軽いウェーブを描きながら背の大剣の鞘にかかりそのまま腰の長さまで流れていた。

白い肌、澄んだ泉のような瞳、すらりとした鼻、微笑をたたえる愛らしい唇……

少女にみとれ足を止める者が一人、二人と増えてゆく。開店の準備に追われていた露天商達も三人を目で追っていた。街中なので並足でゆっくりと東へ進む三騎は、街の外壁へと向かっている。

周囲にざわめきがうまれた。

「女勇者セレス様だ」
「勇者セレス様が大魔王退治に旅立たれるんだ」

一月（ひとつき）ほど前、ユーラティアス大陸中の光の信仰を貫く者達のもとに託宣が下った。
闇の王を討つべし……と。
大魔王ケルベゾールドの復活を知らせる警告だった。
大魔王の復活は数日とおかず大陸中に知れ渡り……
そして、今……
大魔王を倒せるただ一人の人間……勇者が旅立つのだが……
通りの人々は物珍しそうに、こそこそと囁き合ったり忍び笑いを漏らしながら勇者一行を見送っていた。
中には『お気を付けて』とか『頑張って』と声援を送る者もいた。
女勇者は笑みをもって声に応えてはいたが、面白半分に手を振っている人々は真剣味に欠けていた。

なにしろ……

十三回目の降臨なのだ、これで。

初代ケルベゾールドが初代勇者ラグヴェイに倒されてから既に七百有余年。
数十年の時をおいて人の世に現れるケルベゾールドは今まですべ

て、この世の支配者となれぬまま、勇者（ラグヴェイの子孫。エウロペの侯爵家の者）に討たれている。

十二回も討伐されているのだ。

たいていは降臨後、一、二年で（早い時にはたった半年で）。七代目勇者ロイドの時代は討伐まで十三年の時を要したものの、三年以上かかったのは稀。闇の王の脅威を知らしめる間もなく、ケルベゾールドは今世より消滅してきたのだ。

勇者が大魔王を倒せなければ世界は闇に包まれる、この世の終わりだ……と、寺院の司祭達が繰り返し説いても、危機感など募るはずもない。

又、永遠の平和の都と称えられるクリサニアの住人である事も、人々ののんきさを助長していた。都市の周囲を何重にも囲む隔壁自体が防御結界であり、聖騎士からなる王宮騎士団、エウロペ教大寺院、魔術師協会本部に守護されているのだ。クリサニアに魔族による被害などあろうはずもない。

この三百年、大魔王の復活も、復活と共に数を増す魔族も、大魔王教徒の暴動も、クリサニアの人々には無縁だった。大魔王軍の侵攻など、何処か遠い異国の天災ぐらいにしか思えないのだ。

しかし……

平和ボケしているクリサニアの人々とてさすがに、何の不安もないわけではなかった。

女勇者の背にある大剣こそが、初代勇者ラグヴェイがエウロペ神より賜った聖なる武器『勇者の剣』。この地上最強の剣。いかなる武器、いかなる魔法にも傷一つ負わない大魔王を滅ぼせる唯一の武

器なのだが……

その武器を称える詩には必ず、語り継がれてきた勇者の冒険譚やお伽噺にも必ず、決まって同じ文句が使われる。

『勇者の剣は女を嫌う』

ユーラティアスに住む者ならば誰もが知っている言葉だ。いつ誰が言い始めたことかはわからなかった。二代目勇者ホーランの代に従者の一人であった女魔法使いが魔の手下に堕ちた事があった為に生まれた、根拠のない風評ともいわれている。

しかし、もうずっと何百年も従者にすら女性はいない。ましてや女の勇者など前代未聞だ。

心弱き女性では魔の誘惑に勝てない、そう信じられてきたのだ。

あの少女に『勇者の剣』が扱えるのだろうか？

『勇者の剣』を背負う姿が痛々しく見えてしまうほど小柄で愛らしい少女。

一族に適齢の男性がいなかった為に、仕方なく、次代の勇者が育つまで便宜上『今世の勇者』を名乗っていたであろう侯爵令嬢。

あの少女が、たった二人だけの従者を伴って、諸国を巡り、魔族を浄化し、大魔王教徒を鎮めて世直しをし、やがては大魔王を討伐する……？

苦笑いを浮かべ、人々は女勇者を見送った。

侯爵家にはまだ彼女の甥がいる。魔術師協会が強力な結界の内に保護し、聖騎士の精鋭達が教育にあたっている、次代の勇者が。まだ大剣を握ることすらできない子供だそうだが……

女勇者の旅が失敗に終わっても、その子供の成長を待てばいい。大魔王討伐まで時間がかかってしまうかもしれないが、今までどうにかなってきたのだから今世も大丈夫だろう……クリサニアの人々はどこまでも楽天的だった。

女勇者の右手やや後方を赤毛の戦士が騎乗で進んでいた。

『勇者の剣』に劣らぬ巨大な大剣を背負った彼は、大柄で筋骨逞しい、なかなかの美丈夫だった。が、肩当と胸当てだけの軽装備で、胴衣も脚絆も麻。騎士でも貴族でもなさそうだ。革のブーツを履き、ベルトにナイフや小袋をつけている。額に布を巻き、太い手首に金属の腕輪をつけてるのも防具がわりなのだろう。

旅慣れた動きやすい恰好といえたが、大魔王討伐の暁には英雄と称えられるであろう勇者の従者にしては見栄えが悪い。白銀の鎧姿の女勇者と並ぶと下男のようだ。

しかし、男には卑屈さはなかった。

気ままな方向を向いた獣のたてがみのような赤い髪、意志の強そうな太い眉、前方をみすえる鋭い緑のまなざし、にやりと笑っているかのような口元。

造作が整っているだけに、不敵なその面構(つらがま)えにのぼせる女も少なくなさそうだ。

「ありゃ誰だい？勇者様の従者に選ばれたんだからどこぞの名のある戦士なんだろ？」

「選ばれたも何も……あんた知らないのか？国王陛下が従者を募ったこの一カ月の間に名乗り出たのはあそこの二人だけだったんだぜ。

で、二人がそのまま従者になったのさ」
「たった二人？……そりゃひどい……」
「あの赤毛はエーゲラ一の戦士だそうだ。エーゲラの女王様の推挙らしいが、よくわかんねえんだよ素性が。家名を挙げるわけではなし、軍人ならどこそこ隊所属士官ってのをバーンと箔づけに使うはずだがそれもないし」
「しかし、従者候補が二人だけだったとはねえ……先代勇者ランツ様の時には従者候補が王城に列を成したってのに……女勇者様の従者じゃ、なるだけ損ってことで皆なりたがらなかったのかねえ」
「今回の大魔王討伐は長引きそうだからなあ、自国の備えやら警備でどこの国も教団もお忙しいんだろうよ」

勇者一行がクリサニアの東外縁近くにさしかかった時だった、通りに佇んでいた人々が一斉に合掌したのは。
禿頭に僧衣のインディラ僧侶達と頭にターバンを巻いた俗人達（商人が多い）。故国を離れ異国で暮らしている（或いは行商のために訪れている）インディラ人達だ。インディラ人街近くのこの区画で勇者一行が通りかかるのをずっと待っていたのだろう。
女勇者はインディラ式拝礼を送る一団を驚いたように見渡してから、道の左右に分かれ佇む人々に丁寧に頭を下げて会釈した。
しかし、インディラ人が拝礼している相手は今世の勇者ではなかった。
女勇者の左手後方に、戦士よりも大柄で更に逞しい体のインディラ僧がいた。
身にまとっているのは通常の僧衣より下衣が短い、武闘僧専用の僧衣だ。武器は所持しておらず、防具らしき物もない。両の手首から肘、両の足首から膝までを、黒光する滑らかな装身具で覆っているだけだ。材質が金属とも甲殻ともつかぬ不思議な装身具だ。
馬上の武闘僧は、インディラ人達に鷹揚に頷きを返し、悠然と歩

を進めていた。彼らの敬意を当たり前のように受け止めている。
体格のわりに顔立ちは端正で、武骨さはない。青の瞳も糸目ではあるものの僧侶らしい凛とした気品に溢れていた。

「あの大男、インディラ教の大僧正候補らしいぜ」
「大僧正？」
「インディラ教団のトップだよ、エウロペ教でいえば教皇様だね。大僧正もその候補も普段は総本山の山ん中の寺院に籠っていて、めったに俗人の前にゃ姿を見せんらしい」
「はあ、それであいつら有難がって手を合わせてるわけか。けど、そんなお偉いさんがよく女勇者様の従者になったもんだ」
「勇者様の世直しの旅には、インディラ寺院は必ず従者を出してるからなあ。インディラ教の始祖バラシンからして勇者ラグヴェイ様の従者だったんだし。女勇者様でも、勇者様は勇者様。教団一の僧侶を送らなきゃ恰好つかなかったんだろう」
「教団の対面を守る為に送られたってわけか。貧乏クジ引いたね、あの大男も」

女勇者一行は第八隔壁の東の大門に消えて行った。
東門から出発したということは、東の隣国シルクドを目指すのだろう。
しばらくの間、通りの人々は、美少女勇者と二人の従者の話題に花を咲かせ……それからいつもの日常に戻っていった。大魔王の影がまったくない平和な日常へと……

大魔王の闇の力は（むろん憑代（よりしろ）となった人間の技量にもよるが）

降臨直後は非常に弱い。神の恩恵に満ちた世界では魔族の能力は狭められてしまうからだ。しかし、現世にとどまる時間が長くなればなるほど、光に対抗する術を身につけ、大魔王は本来の力を取り戻してゆく。

現在のクリサニアは、綿密な計画をもとに都市自体に強力な結界機能を備えるよう設計・再構築された都市だ。

旧クリサニアは約三百年前に灰燼（かいじん）に帰している。大魔王配下の邪龍の炎によって。

七代目勇者ロイドが大魔王討伐に時をかけすぎた為だ。三百年前、大魔王復活後も人の世の争いが続き、ロイドの旅は難航した。大魔王討伐まで十三年の時を要したことで、強力な魔族が数多く召喚され、エウロペは焦土と化し、各国にも深刻な損害が残った。

クリサニアの人々はまったく夢想だにしていないが……

女勇者の旅が失敗に終われば……

ロイドの時代の再来もありえ、更に恐ろしい未来もありうるのだった。

旅のはじまり　＊　セレス・アジャン・ナーダ　＊　1話

「目的地はシャイナだったな」
そう言って戦士は前方をすがめ見た。
クリサニアを旅立ってからはや八時間。田畑、民家も背後に消え、辺りは常緑樹に囲まれていた。この森の先に小さな街があり、馬の旅にして二日ほど東に進んで王国領を抜け、更に七つの貴族領を超えてようやく隣国シルクドとの国境に着く。砂漠と草原が広がる内陸の国シルクドの、更にその東にシャイナ国は位置している。
「……遠いな」
赤い髪をぼりぼり掻いて溜息をもらす男。
その横の禿頭の大男も、道沿いに延々と続く森を見つめていた。信仰の証として頭を丸めた、インディラの武闘僧だ。
「神々の託宣は大魔王の復活についての警告だけでしたから、未だ大魔王が憑依している肉体もその潜伏先も不明です。大魔王の本拠地がシャイナだってはっきりしていれば、宮廷魔術師の移動魔法で送ってもらえたでしょうが」
上空で雲雀が鳴く。木々の梢の間から見える蒼天も陰りを見せ始めている。夕暮れに赤く染まるのもそう遠くないだろう。
「ただ何となくあやしいってだけの理由では、あの魔力消耗の激しい魔法をねだれませんものねえ。大魔王の本拠地については、各国、各宗教団体、魔術師協会が鋭意捜索中です。何らかの情報提供が得られるまでは、まっとうに進んで行く先々で世直しつつ、我々も大魔王の本拠地を探すべきでしょう」
「まっとうに……か」
「大魔王教徒の活動が活発化しているのは、シャイナと島国ジャポネ。女勇者様が目指すのにふさわしい国は、この二国か北方諸国でしょう」
「北方？」

「あの三国に大魔王がいても、おかしくはありません」
「だが、北には行けん」
「ええ。北方諸国と国交が断絶して間もなく百年です。国レベルでも民間レベルでも交流のない三国には容易に入国できません。エウロペ国王は非常事態を宣言し三国に協和を求める親書を送られたようですが、まあ、期待するだけ無駄でしょう。国交が断絶している間に、大魔王は二度も復活を果たしています。今世の勇者様の代で三度目の復活となったわけですが、北方諸国は大魔王の脅威に晒されても、勇者に援助の手をさしのべず救援も求めず、沈黙を守り続けています。今世も北方諸国は動かないでしょう。かつて北方は勇者の従者を八人も輩出した土地だというのに嘆かわしいことです」
赤毛の戦士は眉をしかめ、武闘僧を睨んだ。
「……よくしゃべる男だ」
「ああ、すみませんね。一般常識をべらべらとしゃべってしまって」
僧侶はにっこりと微笑んだ。
「北方をあまり快く思っておりませんもので、つい」
「ふん」
「北方諸国は我がインディラ教団を領土から追い立て、九十七年前には信仰の為の残留を望んだシベルアの僧正以下四十八人の僧侶と信者を非道にも火刑に処したのです。たとえ通行書が発行されたとしても、はっきり言って北には行きたくありませんね、私は」
「てめえの都合なんざ聞いちゃいねえ」
苛立たしげにそう吐き捨ててから、赤毛の戦士は重々しく息を吐いた。
「だが……俺も北行きには反対だ。行けるはずもないしな」
「じゃあ当面の目的地は、やはりシャイナですね。ここからシャイナまで、馬の旅ならば急げば二カ月、余裕を見ても三カ月ほどで着くでしょう」
「馬ならな！」
赤毛の戦士はジロリと背後を振り返った。右手に手綱を握り、引

き馬をしながら。
「シャイナに着くまでに、俺達は白髪のジジイになるんじゃねえのか？」
「それはないでしょう」
二頭を引き馬している武闘僧が、のほほんと答える。
「まだ大魔王復活直後ですからさほどの被害は出ていませんが、時が経つほどケルベゾールドが現世に及ぼせる力も強くなってゆき魔族の数も増えてゆきます。我々が老人になる前にケルベゾールドが大陸を支配しちゃうでしょうから、この世は消滅、我々もあの世逝きでしょう」
「ケッ！　ありがたいご指摘、いたみいるぜ！」
「まあ、何にせよ……」
足を止め、武闘僧も背後を振り返った。
「スピードアップしないといけませんよね」
赤毛の戦士と武闘僧の視線の先には……
太く長い枝を杖代わりによろよろと歩く金髪の少女がいた。ウェーブのかかった長い髪を後ろで一つに束ね、白銀の鎧をまとい、背に大剣を背負った彼女こそ……
当代の勇者……女勇者セレスであった。

「待ってよ……これ、なんか、ますます重くなってきちゃって……」
セレスはもう息も絶え絶えだ。少女らしい幼さの残る美貌には、くっきりと色濃く疲労が刻まれている。汗が入ったのか瞳を細め、不快そうに唇を尖らせる。
杖を頼りにどうにか立っている少女を、二人の大男は冷ややかに見つめた。
「だから、気が進まなかったんですよ、女性の従者になるのは」
武闘僧は、嫌だ、嫌だとばかりに頭を左右に振った。

「大剣を背負っての旅など、深窓のご令嬢には無理だとわかっていましたからね」

セレスは武闘僧をキッ！と睨んだ。

「普通の大剣なら、何時間背負ったって平気よ！　こう見えても私、エウロペの聖騎士よ！　国王陛下の近衛兵だって務めてたんだから！」

「金で買った役職じゃねえのか？」

と、赤毛の戦士も不審の眼差しを向けている。

「違うわよ！　だから、何度も言ってるでしょ！この『勇者の剣』がおかしいの！　クリサニアに居た頃は普通の大剣の重さだったのよ！　それがどんどん重くなってきて、私の馬がへばっちゃうし……こうして背負って歩いてもどんどん、どんどん重くなってるのよ！　今じゃ、カゴいっぱいの大岩を運んでるみたいなんだから！」

セレスは涙をこらえ、二人を睨んだ。何でこんな薄情な男どもが私の従者なのよ！と、身の不幸を嘆きながら。

赤毛の戦士は、エーゲラ国が国一番の戦士として推薦してきた傭兵だ。名はアジャン、年齢は二十五。『勇者の剣』よりも巨大な大剣をふるう一騎当千の強者だそうだが……彼にはセレスはひどく失望していた。まず、下品なのだ。言葉使いが汚いのはまだ許せるのだが、卑猥な冗談を飛ばしたり、女とみれば口説いたり……。だが、何より失望したのは旅に加わった理由だ。金目当てなのだ。勇者一族の主君たるエウロペ国王からセレスの護衛依頼を受け、莫大な成功報酬の為に同道しているだけなのだ。

もう一人のハゲの大男は、インディラ教の次期大僧正候補の武闘僧。名はナーダ、年は二十八。一見、礼儀正しい徳深い僧侶に見えるのだが、セレスに対してもアジャンに対しても皮肉すれすれの発言ばかりをしている。そもそも初対面で『女勇者の従者になんかなりたくありませんでしたが、大僧正様が直々に、この役目を私にとご命じになられたのでねえ。仕方ありませんから、たかが女と侮らずあなたを助けてあげますよ』と言ってセレスを憤慨させた、慇懃

無礼な男なのだ。
この二人は……
セレスが『勇者の剣』が異常に重たくなったのだと幾ら訴えても、下馬してよろよろと歩いても（枝を拾えねば歩くことすらできなかったのに！）、手を貸してくれるわけでもなく、心配する素振りすら見せてくれない。ナーダがセレスの馬を引き馬してくれているのだけが唯一の手助けなのだ。
炎の色の髪をボリボリと掻いてから、傭兵はチッと舌うちを漏らした。
「とろくせぇ女だぜ、まったく……」
そう言って、アジャンはスタスタとセレスの元へ歩み寄った。
「このまんまじゃ日が暮れちまう。持ってやるから背中のモノをよこせ」
「アジャン、『勇者の剣』を代わりに持つ気ですか？」
と、武闘僧がのんびりと尋ねてくる。
「街も近いってのに野宿なんざしたかねえ。とっとと行くぞ」
「そうはおっしゃいましてもねえ、『勇者の剣』は女勇者様の一族のもので」
「うるせえなあ、ネコババはしねえよ。ただ、しばらく持ってやるだけだ」
と、言いつつアジャンはセレスの背の『勇者の剣』の柄（つか）に右手をかけた。
その瞬間！
澄み渡る大空に、閃光が走り……
雷の魔法がアジャンを直撃した。
遅れて響く雷鳴。
体中に電撃が走り、皮膚に軽い火傷が広がる。
赤毛の傭兵は、その場にがくっと片膝をついた。
「あ～あ、だから、やめろと言いましたのに」
「……言ってねえぞ、クソ坊主」

「エウロペの侯爵家、つまり初代勇者ラグヴェイの血筋の者しか『勇者の剣』は扱えないのですよ。資格が無い者が剣を持つと、怒りに触れ雷が落とされるのです」
「……そういう事は先に言いやがれ」
余計な魔法を使わせないでくださいよと文句を言いながら、僧侶が癒しの魔法を唱える。視線を東に向けつつ。
一本道の先から幌馬車と数騎からなる隊商が近づいてくる。商人とその護衛の傭兵のようだ。まだ距離は開いているが。
女勇者セレスは、心配そうに赤毛の戦士を見つめた。剣の怒りはアジャンにのみ向けられたようで、彼と触れていたセレスや引き馬には落雷の被害はなかった。
「ごめんなさい、アジャン、私のせいで……」
赤毛の戦士に対しセレスは頭を下げた。だが、傭兵は謝られた後の方がむしろ不快そうな顔になり、怪我が癒えるとセレスに喰ってかかった。
「俺達は一刻も早く大魔王の本拠地を探し出さなきゃいけねえんだろうが。この大陸にゃあ国は十、島国ジャポネも合わせれば十一国もあるんだ。シャイナやジャポネが外れだったら、シルクド・インディラ・ペリシャ・トゥルク・エーゲラ・エウロペか、北方諸国のケルティ・バンキグ・シベルアを見て回らにゃならねえ。わかってんのか？」
「え？　……ええ」
「亀の足じゃ、世直しはできねえぞ！」
「……そうね」
「なら、その足どうにかしろ！ちょっとばっかし時間をやるから、いい案、思い浮かべろよ」
アジャンはフンと鼻をならし、目の端で武闘僧をジロリと見た。東の道の先を見つめつつ、僧侶の口は何か言葉を紡いでいる。
「お姫様のお守りは任せたぞ、クソ坊主。あっちは俺が引き受ける」
何かを詠唱し終えた僧侶が、糸目で傭兵を睨む。

「私の名前はナーダです、クソ坊主ではありません」
ニヤリと笑ってから赤毛の戦士は己の馬に乗馬し、馬の腹を蹴った。
「え？」
何ごと？　とセレスは目を丸める。
ざわざわと道ぞいの森の茂みが揺れ……
木々の間から火焔の雨が飛来する。火焔魔法だ。
「！」
道ぞいの両の森からの炎。身構える暇すらない。セレスは炎に包まれた。
かと思ったのだが……
セレス達と三頭の馬を飲み込む前に、炎は四散し、空へと消えてゆく。目に見えぬ障壁に阻まれたのだ。
炎が消えゆく前に、森の茂みから潜んでいた者達が飛び出して来る。農夫のような恰好だが、手に剣や槍を持っている。
まず槍が、つづいて剣の刃がセレスは襲う。しかし、届かない。武器を空に弾かれ、彼らは目的を達せられなかった。
「……結界魔法」
セレスは、はたと目を武闘僧に向けた。インディラ僧は、両膝を曲げ腰を落とし背筋を伸ばした姿勢で拳を構えていた。格闘家の迎撃のポーズだ。
「結界があるからって油断してはいけません、いつでも動けるようにしておいてください。その背の重い荷物、下ろした方がいいですよ」
「荷物……」
「しばらくは結界を維持しますけどね。馬は魔法で寝かせました、暴れられる心配はありません」
尚も悔しそうに刃を突き立ててくる男達。彼らの血走った眼には鬼気迫るものがあった。彼等はセレスだけを見つめている。その命を欲して……

彼等の奇声に交じって、やや遠くから剣戟の音や悲鳴が響く。
赤毛の戦士が下馬して戦っていた、東の幌馬車のそばで。既に騎乗の男達は倒したようで、乗り手を失った馬がいないないていた。
「あの隊商も敵……？」
「見てませんでした？　火焔魔法とほぼ同時ぐらいに、あちらから矢を射かけてきたんですよ。まあ、あやしすぎたから警戒してましたけどね。だいぶ前から横列になって道を塞いでましたし、そもそも夕暮れにもなろう時間に近くの街を背にクリサニアに向かおうってのが不自然でしたしね」
「……」
「東は隊商に扮した部隊、西は伏兵のうちの戦士達で道を塞いだところで、南北の森からの魔術師の魔法で女勇者一行を丸焼き……って作戦だったんでしょう。もっとも、あああからさまに殺気を漂わせているような輩じゃ、伏兵など務まりませんがね」
「う……」
セレスは顔をしかめた。森の中に人が潜んでいたなどまったく気づかなかったし、隊商に注意を払ってもいなかった。
遠方で戦う赤毛の戦士が、セレスの視界に入る。
戦士は、ぶんと大剣を振り回し、幌馬車から武器を片手に飛び出して来る敵を薙ぎ倒している。敵の攻撃を避け己の身を地面すれすれに低くしたかと思うと、次の瞬間にはアジャンは横に跳び剣を突き上げ獲物を斬っている。間合いをつめてきた敵には蹴りや肘打ちをお見舞いし、背後を取られても体を沈め半回転させた大剣で相手の頭部を叩き潰してしまう。まるで四方に目があるようだ。
（すごい）
セレスは呆然とアジャンの動きを目で追った。
正規の剣術とはかけ離れたそれは、先が読めず、まるで剣の舞のようであった。周囲の敵を全て葬り、己が身長ほどもある大剣を抜いたまま、赤毛の戦士が駆け寄ってくる。嬉々とした笑みを浮かべながら。

森より飛来する魔法の炎すら見切り、避けられぬと判断するや大剣を上段から振りおろし迫りくる炎を両断する。

「ほう」

セレスの横で、武闘僧が感嘆の声をあげる。

「剣を媒介に気の力で魔法を退けましたか。『エーゲラ一(いち)』というのもハッタリじゃなかったわけですね」

セレスの眼前の男の頭部が、ひしゃげる。アジャンの大剣に叩き潰されたのだ。血飛沫と肉片が舞う。勢いのまま倒れる仲間と鬼神のごとき戦士、それを目にした男達は、ある者は悲鳴をあげて森へと逃げゆき、ある者は無謀にも赤毛の戦士へと斬りかかってゆく。

赤毛の戦士は近づいて来る者すべて、道端の草を刈るようにあっさりと倒してゆく。

「結界を解きます」

言うが早いかナーダは走りだしていた。近寄って来た武闘僧に、恐慌(パニック)に陥った男が槍の穂先を向ける。が、次の瞬間、男は後方に吹き飛んでいた。距離をつめられ、右手を突き上げた掌にはじかれて槍を手放したところで、腹部に拳を叩きこまれたのだ。

槍は武闘僧の手に渡っていた。槍を旋回させて近くの敵を薙ぎ、その棍底で突き飛ばすと、武器を迷わず北の森の茂みに遠投のように投げる。茂みから悲鳴があがった。が、その結末を見もせずに武闘僧は南の森へと向かう。

森から放たれる魔法の炎を両腕の黒い装身具で全て防ぎ、森の中に潜んでいた者達を重い拳で次々と一撃で倒していく。

（……）

セレスは杖を頼りにしゃがみ、何重にもほどこされた留め金を外して、右肩から左腰までのバンドごと背の大剣を外した。重々しい音を立て、鞘と共に地に落ちる『勇者の剣』。土埃が舞い上がる。大剣は半ば地面に埋もれていた。もはや持ち上げることすら難しそうだ。セレスはうつむいた。

敵の中を縦横無尽に駆け巡る、戦の申し子のような傭兵。

魔法でセレスを守り、その後、熟練の武闘の技で敵を倒している武闘僧。

彼等に比べ、自分はあまりにも未熟で無力だと痛烈に思いしりながら。

三才の時、十二代目勇者であった祖父ランツが病で亡くなり、祖父の遺言によってセレスは『勇者の剣』の守り手となった。それが『セレスに勇者としての資質を見出しての選択』ならば良かったのだが……ラグヴェイの子孫に男子がいなかった為、ランツは二人の孫、セレスとその姉を比べ、内向的な姉ではなく外遊びが好きだったお転婆な妹を選んだ……それだけだった。

世の人々にお飾りの勇者と嘲笑われるまでもなくセレス自身わかっていた、自分など次代の勇者が育つまでの繋ぎ役にすぎない、と。

男子として育てられ、勇者たるべく学問や武術や馬術も習った。祖先の栄光を習い、十二人の勇者（『勇者の剣』の守り手は生存中は全員『今世の勇者』と呼ばれ勇者として遇される。だが、死後も勇者として称えられる者は大魔王を討伐した者のみ）の活躍に胸をときめかせ、自分も愛する者達のいる世界を守りたいと思い続けていた。世の為に働きたいと切に願い、聖騎士資格を得て国王の近衛兵の任も得た。

しかし……

セレスは事あるごとに自分の性別を意識し恥じ入った。同輩に比べ、女性である自分は非力で体力がなさすぎた。

又、『今世の勇者』を名乗りながら、『勇者の剣』を持たぬ身がつらかった。振るうどころか、装備する事も、剣を鞘から抜いた事すらなかったのだ。『勇者の剣は女を嫌う』と言われている為に。大魔王が復活しなければ、生涯、剣に触れる事すら許されなかっただろう。

女を捨てて勇者たろうとしても、男にはなれず……

女でしかなく……

そして、今も……

世を救うべく立ち上がったはずの勇者が『勇者の剣』もまともに扱えず、ただ従者に守られているのだ。彼らのように戦うことはできないし、それどころか敵の襲撃にすら気づけなかったのだ。

恥ずかしくって顔から火が出そうだった。

「手を出さんでも良かったのに」

森の奥へと逃げてゆく背を目で追いながら、アジャンは鼻でフンと笑った。

「雑魚など二十こようが三十こようが同じだ」

「魔術師たちがあなたに『麻痺』やら『呪い』やらを唱えていましたので」

南の森の茂みからナーダが現れる。右の手首から肘までの黒い装身具を左手で静かに撫でつつ。

「私のコレと違って、目に見えぬ弱体魔法は弾(はじ)きづらいでしょ、気合だけじゃ」

赤毛の傭兵は舌打ちした。

「神聖防具か……」

「神獣クールマの甲羅より生まれた装甲……インディラ一(いち)の武闘僧のみがまとえる神聖防具です。鋼よりも硬く、絹よりも軽く、熱や冷気から装備者を守り、邪を退け、魔力を防ぐ尊(たっと)き防具です。どれほどの守護力を見せてくれるかは、装備者次第なんですがね」

「ふん？」

「神のおぼえめでたき人物かどうかで防御力が変わるってことです。信仰心、精神、肉体、その全てがすこやかでなければいけません。未熟な者が装備しても神聖防具は応えてくれないのですよ」

「ケッ！」

赤毛の戦士は血と脂を軽く拭き取った愛剣を背に収めた。道に動

く敵の姿は、もはやない。怪我人も全て動ける者は皆、逃げている。残るは死骸だけだ。襲撃者は特に名乗りをあげなかったが、大魔王教徒に間違いはあるまい。

「女勇者様の、その胃（かぶと）のない常識外れの鎧一式も神聖防具とは存じ上げておりましたが」

武闘僧と戦士の視線がセレスへと向く。『勇者の剣』を大地に下ろし、二頭の馬のそばに女勇者はしゃがんでいた。二人に背を向けて深く頭を垂れながら。

「馬もいましたし、今回は安全策でいきました」

女勇者の力量を信頼できなかったから結界を張ったのだと、遠回しに皮肉る武闘僧。

それに対して、女勇者は沈黙を守るばかりだ。

赤毛の戦士は肩をすくめた。

「おいおい、お姫様、だんまりか？　助けてやったんだぜ、礼の一つも言ったらどうだ？」

アジャンはニヤニヤと笑いながら、セレスの元へ歩み寄った。

「なんならお礼は口づけで勘弁してやってもいいぜ」

セレスを立たせ、その顎を右の親指でぐいっと上げ……アジャンはぎょっと驚いた。

セレスは顔中を真っ赤に染め、顔をくしゃくしゃに歪めながらぽろぽろと涙をこぼしていたのだ。

「ごめ……ごめんな、さい。ありが……とう」

声を震わせてそれだけ言うと、顔を両手で覆い、わーっと声をあげて派手に泣き出してしまった。

「どうした！　どっか怪我でもしたのか？」

アジャンの問いに、セレスは激しくかぶりを振った。

「じゃあ……そうか！そこのクソ坊主に何かされたんだな？」

「失礼ですね！　僧侶の私が女性に何かするはずないでしょ！」

「だが、この女のそばにいたのはおまえだ」

「知りませんよ、あなたの下品さに呆れ果てて泣いているんじゃな

いんですか？」
「ちが……ちがう、の……そうじゃ、なくって……」
何とかしゃべろうとするものの、感情が昂りすぎて言葉にならない。
泣き続けるセレスを、アジャンは両手を中途半端に開いたまま見つめ続けた。抱きしめて慰めてやろうかと迷いながら。

しかし……
（わけわかんねえ、女……）
泣きやんだセレスから涙の理由を聞いて、アジャンは心底呆れてしまった。
（傭兵が傭兵に徹して何が悪いってんだ。俺は契約通りの仕事をしただけだ。なのに何でそれが『自分が恥ずかしくて泣いた』になるんだ？　勇者は従者より強くなくっちゃ恥ずかしいのかよ。なら一人で旅しろってんだ、馬鹿野郎）

ナーダはナーダで……
（やはり女の人ですねえ……実力不足が悔しいのなら鍛錬を積めばいいだけの事。癇癪を起こして泣くなんて、みっともない）

二人の冷ややかな視線が、セレスを一層、落ち込ませた。が、何とか涙は堪える。
「それで『勇者の剣』のことなんだけど……大魔術師カルヴェル様を頼ろうと思うの」
「カルヴェル？」
誰だそりゃあという顔のアジャンに、武闘僧が糸目で軽蔑の眼差しを送る。

「ご存じないんですか？　先代勇者ランツ様の従者だった魔術師ですよ」
「ああ、そういや、最近、そんな話、聞いたような」
「当代随一の魔術師ですよ。エウロペ国王は今世の世直しの旅に加わってくれるよう何度も依頼の書簡を送られたようですが、一度も返信が無かったそうです。当代随一の魔術師様はご自宅にはおられないのではありませんか、女勇者様？」
「……その『女勇者様』っていうのやめてくれる？」
セレスはふぅと溜息をついた。
「今の私が『勇者』を名乗るのなんておこがましいわ。普通に『セレス』って呼んで。アジャン、あなたもね」
「俺もか？」
「私、『お姫様』でもないわ。『お姫様』みたいな恰好したことないもの」
「だが、侯爵令嬢だろ？」
アジャンが皮肉っぽい笑みを浮かべる。
「俺は卑しい傭兵だぜ。お貴族様を尊称ぬきで呼んだら、普通は鞭打ち刑だ」
「……敬意を感じない相手への尊称なんて意味ないわ。形式だけの尊敬なんていらない」
セレスは両の拳を握りしめた。
「……今の私、このパーティで最弱の人間でしょ？　当分はあなた達のお荷物にならないよう、それだけを心掛けて行動するわ。少しづつ鍛錬をつんでいって『勇者の剣』にふさわしい人間になれるよう頑張ってみるけれど……それまでは私はただの『セレス』よ。『勇者』なんかじゃないわ」

セレスからの告白を聞いてナーダは……
（ほう。女の方にしては根性がありますねえ）

と、多少ではあったが、セレスへの評価を改めた。

けれども、アジャンは……

（しちめんどくせえ、女）

と、心底うんざりした。

（こいつのお説は、結局は、お貴族様のお高いプライドから生まれたもんだ。最下層の人間が、どんな気持ちで、くだらねえ上流階級の奴に尊称を使っているのか知りもしないで……むかつく。この女、どっかおかしいんじゃねえか？）

大魔術師カルヴェルの居城は、クリサニアから南の山の頂上にあった。麓の村まで馬なら三日の距離だった。が、『勇者の剣』を背負ったセレスの足では一カ月以上かかりそうだった。

「剣はここに置いていけ」

アジャンが面倒くさそうに言う。

「セレスの一族しか剣には触れん。盗まれる心配はない」

剣の番に残ろうかと思っていたナーダも、

「なるほど、もっともですね」と、同意する。

それでも、一応、鞘に収まった『勇者の剣』を古木の根の草むらに隠す細工だけはして、その日は森の先の街に一泊し、一行は翌日からカルヴェルの居城を目指した。

山に行きつくまでに大魔王教徒の襲撃が更に二度あった。その度に、赤毛の戦士は大剣をふるって敵を薙ぎ殺してゆき、武闘僧は相手の鎧を曲げてしまうほどの重い打撃技で近づく敵を倒していた。

最初の戦いで敵が落としていった片手剣を、セレスは拾って装備していた。しかし、セレスが一人と対戦している間に、アジャンはばったばったと敵を倒してゆき、ナーダはセレスから離れすぎないよう気を遣いつつ四、五人を倒している。二人と彼女とでは戦闘力

が大人と子供ほど開きがあった。
セレスは涙をこらえ、できるだけ二人の戦いを観察した。
むろん、アジャンのような変則的な動きで器用に大剣を操れるとも、ナーダのような一撃必殺の重い拳の格闘ができるとも思っていない。彼等とセレスでは戦闘スタイルが違いすぎる。しかし、正規の戦闘方法しか知らなかったセレスにしてみれば、彼等の戦い方はよい意味で刺激となった。
腕力の劣る自分でも、戦い方次第では彼等と同列になれるかもしれない。いや、ならねばいけないのだと思いながら。

旅のはじまり　＊　セレス・アジャン・ナーダ　＊　2話

麓の村に馬を預け、一行は緑多い山へと入って行った。

一応、道はあるのだが、蔓や草が生い茂りすぎていて、森と道の別がつき難い。道は全く整備されていない。大魔術師カルヴェルの機嫌を損なうのを恐れ、麓の村の者がこの山に足を踏み入れない為だろう。

無愛想でいつも不機嫌そうだが、アジャンは気のきく男だった。セレスが喉の渇きを堪えて斜面を登っていると、無言で水筒を差し出したりしてくれる。常に先頭を歩くようにして、ナイフで蔓を切ったり、足元の草を刈ったりブーツの底で草を踏み敷いたりするのも、セレスを歩きやすくするための配慮だ。

彼の親切に対し、セレスは素直に感謝の気持ちを伝えた。が、赤毛の傭兵はひどくひねくれた性格のようで、礼を言えば言うほど機嫌が悪くなるのだ。

「おまえさんが半人前以下だから、仕方なくやってるんだ。護衛対象の健康を守るのも仕事のうちだからな」

あーあ、子守はめんどうだ、めんどうだ、と不平をこぼす。セレスはムッと顔しかめながらも、今の自分は反論できる立場にはないと自分を宥め、怒りを静めた。

（今に……今に、きっと、見返してやるわ！）

赤毛の戦士への反発を糧に、セレスは山登りを続けた。アジャンは嘲り笑うような発言を何度もしたが、道を切り開くことをやめず、自分が疲れたと言って適度なタイミングで一行に休憩をとらせた。

セレスは岩の上に腰を下ろし、汗をぬぐい、乱れていた息を整えた。見かけこそ全身を白銀の鎧で覆う重装備だが、疲労しているのは鎧のせいではない。セレスの鎧は神聖防具。神の祝福によって、鋼鉄よりも硬く邪悪を退け魔力を防ぎ、そして、絹のように軽く内に熱や湿度が籠らない鎧なのだ。

体力不足から息を乱しているセレスに対し、赤毛の戦士は平然と斜面を見据えている。武闘僧も涼しげな顔のままだ。誰のための休息なのかは明らかだった。

セレスはぎりっと唇を噛みしめた。

と、そこへ……

木々の合間から、羽ばたく鳥達が舞い降りてくる。セレスの顔のそばを通り過ぎ、羽毛を散らせ、鳥達が舞い降りた先は……

ナーダの両の指先から腕、肩だった。ナーダは五羽の小鳥を体にとまらせて、それぞれに向かい、

「チチチチ」

と、話しかけるように舌を鳴らしていた。

「すごい」

セレスはポカーンと口を開いた。旅の途中、今までもたまにナーダの肩に鳥が止っていることがあった。が、野生の鳥がこれほど無警戒に人間に懐くとは……

「餌をあげているの？」

そう問うと、心外だと言わんばかりにナーダは眉をしかめた。

「まさか。心清き生き物が私の徳を慕って集まって来ただけですよ」

「ケッ！」

馬鹿馬鹿しい！とアジャンが、そっぽを向いた。が、セレスは『ふーん、やっぱり、インディラの修行僧ってすごいのねえ』と素直に感心した。

休憩中、ナーダは鳥たちと何事かを語らっていた。舌を鳴らしているだけのようだったが、意志の疎通はできているようで、ナーダはやがて眉根をよせ、難しいことを思い悩む表情になった。

「今、六合目くらいですかねえ？」

鳥達を帰してから、ナーダはアジャンに尋ねた。

「そんなもんだな」

「大魔術師様の居城は山頂……このペースだと着くのは夕方になってしまいますし……仕方ありませんねえ」

ナーダは苦虫を噛み潰したかのような顔となって、セレスを見つめた。
「私の背にのってください。おぶってあげます」
「え、でも、そんな」
「おい、坊主、そいつを甘やかすな。ちょっとは鍛えんと使い物にならん」
「私だって、できればおぶりたくないですよ！　女の方を背負うなんて！　あああ、穢らわしい！」
声を荒げてから、しまったという表情になり、ナーダはコホンと咳払いをした。
「ですが……ちょっと、非常事態になりまして。鳥達が教えてくれたのですが、その……」
言いにくそうに、ナーダは言葉を続けた。
「『勇者の剣』が……消えてしまったそうです」
「消えた……？」と、セレス。
「ええ。多分、何らかの魔法が働いたのだと思うのですが、地面に飲み込まれ、地中深くに潜って消えていったそうです」
「『勇者の剣』が……消えた……？」

頭が、まっしろ……

ふら～と倒れかけたセレスをアジャンが支える。
「拾いに……拾いに行かなきゃ！」
「そうです。その為には、何としても大魔術師様のお力をお借りしなくては。私、掘削向けの攻撃魔法は使えませんし、あなたも駄目でしょ？」
ナーダの問いに、セレスはぶんぶん頷いた。
「神聖魔法しか使えないわ！」

「神聖魔法には穴掘りに適した魔法はありませんし……これが敵の策略なら、鍬で掘り起こせる深さに『勇者の剣』が埋もれていてくれるとも思えません」
「お……」
ふらふらと歩きつつ、山の頂に向かいセレスが叫ぶ。
「お師匠様～！」
「どうどうどうどう」
アジャンはセレスの鎧の肩をむずっと掴んで引き寄せ、ナーダめがけて彼女をドンと突き飛ばす。
「話はわかった。ナーダ、おまえがそいつをおぶれ」
「ナーダ？」
傭兵に呼び捨てにされたことで、武闘僧は面白くなさそうな顔をした。大僧正候補である彼を尊称ぬきで呼べるのは、本来は大僧正と国王だけなのだ。しかし、『クソ坊主』よりはマシですねと嘆息し、傭兵の無礼を許す事に決める。そして、ひきつった笑みをセレスに向けた。
「急ぎましょう、セレス……背中にのってください」

アジャンとナーダは道なき道を飛ぶように駆け、頂上を目指した。足場の悪さも道を塞ぐ木々や灌木、蔦や草を苦にせず、今までの数倍の速さで斜面を登る。
その時、錯乱しているセレスはまったく気づかなかったのだが……彼女を背負う武闘僧の腕にはびっちりと鳥肌が立っていた。

山の頂上には、わずかな岩場と何処までも天に向かって伸びている白い壁があった。壁の上部は雲に埋もれている。どれほどの高さがあるのかはわからなかったが、途方もなく高く、乗り越えられるものではない事だけはわかった。

「お師匠様ーっ！」
ナーダの背から下りたセレスが一直線に走る。波紋のような模様が施された壁の前に立ち止まり、両の拳で力任せに壁を叩く。
「セレスです！　たいへんな事になってしまいました！　門を開けてください！」
「門？　あれが？」
ただの壁にしか見えないと首を傾げるナーダに、
「おい、『お師匠様』ってのはどういうことだ？」
と、アジャンが尋ねる。
ナーダはやれやれと肩をすくめた。
「セレスの神聖魔法の師は、当代の大魔術師様ですよ。セレスのあの、頭部が無防備なイカれた鎧も、大魔術師様からの聖騎士就任祝いだったそうで。その話も、私達の前で、エウロペ国王がしてくださったはずですけれど？」
「どうでもいい事はすぐに忘れるようにしている」
「よくそれで今まで生き延びてこられましたねえ」
「おまえこそ」
アジャンは意地の悪い笑みをつくった。
「女嫌いのくせに、よく女勇者の従者になったな」
武闘僧は一瞬、カッと頬を赤く染めた。が、すぐに涼しげな表情をつくり、そっぽを向いた。
「私にも……いろいろ事情があるのですよ」
「だろうな」
二人が歩み寄ってくる間、ずっとセレスは壁を叩き続けていた。が、『門』のはずの模様つきの『壁』が開く気配はなかった。
「やはり、お留守なのでは？」
「居ると思うわ……お師匠様、よく居留守を使うの」
「けど、門が開かんことにはなあ」
セレスは唇を噛みしめ、顔を真っ赤に染めた。
「……最後の手を使うしかないわね」

「最後の手？」
　キッ！と、セレスは二人を睨みつけた。
「あなた達、ちょっとの間、頂上から遠ざかって、通ってきた道の何処かで待っていて！　後で迎えに行くから！　そこで頂上とは反対の方向を向いて耳を塞いでいて！」
「なんでだ？」
「なんででもいいでしょ！　お願いだから、絶対、絶対、絶対、ぜぇっ～たい覗かないでね！」

「あそこまで言われたら、見たくなるのが人情だな」
「本当、悪趣味で下品ですね、あなたは」
　木の枝に登り、遠方を目をこらしてみているアジャン。対するナーダは、馬鹿正直に両の耳を大きな手で塞いで、その木を背にして山裾の方角を見つめていた。
「お？　おおおおおお！」
　アジャンが身を乗り出す。
「セレスの奴、鎧を脱いだぞ！　あれ、魔法か何かで一発で脱げるんだな。ほほう、けっこう胸がでかいなあ。腰もきゅっとくびれてるし、尻も抱き心地がよさそうだ」
　アジャンの声が届いているであろうに、武闘僧はツーンと澄ました顔のままだ。
「おい、おい、そこで止めか？　もったいぶらずに全部見せろよ」
　アジャンは木から飛び降り、木の陰、岩の陰へと移動し、徐々に頂上を目指してゆく。
　武闘僧は溜息をついたが、デバガメを止める気もないようで、足元の先を見つめ続けていた。

「お師匠様ぁ、セレスのお・ね・が・い、聞いてくれなきゃ、いや

ぁん」

（……）

「何やってんだ、あいつ……」

鎧を外し、シャツとズボン姿になったセレスは、くいっと腰を突き出したり、豊かな胸を強調するかのようにしなをつくったり、投げキスをしたりしている。

「セレス、お師匠様にお会いしたいのぉ。門を開けてくださらなきゃ、泣いちゃうわぁん」

「……」

岩陰に隠れながら、アジャンはボリボリと頭を掻いた。

「馬鹿じゃねえの、あの女……」

「うぅぅむ、腰のひねりがイマイチ」

「！」

背後からのしわがれた声。

アジャンは背の大剣の柄を握り、バッと背後を振り返った。

直前まで何の気配もなかったのに……

そこには、長い白髪、長い白髭を無造作に垂らし、ジャポネの菓子『煎餅』をバリバリと噛む、黒のローブの老人が居た。老人はホホホホと笑い、右手に持っていた魔術師の杖でポカリとアジャンの頭を叩いた。

「これ、騒ぐな、セレスに見つける。こういうのはのぅ、物陰からこっそり覗くから風情があるものなのじゃ」

老人は『体の発育は抜群じゃが、セレスはボギャブラリーに欠けるのう』と呟き、ホホホと笑う。

「大魔術師……カルヴェルとかいう奴か？」

アジャンの問いに、老人は頷きを返した。

「さよう。エーゲラの女王陛下の情夫殿」
眉をしかめる赤毛の傭兵に、老人は愉快そうな笑みを見せる。
「たいそうな女好きのようじゃが、セレスには手を出すでないぞ。あれが処女を失えば『勇者の剣』の機嫌が悪ぅなる。『勇者の剣』が求めるのは剣と一心となって邪悪を討つ剣士。恋する乙女なぞ、剣にとっては穢れにすぎん」
「フン、千里眼の魔法で何でもお見通しか？」
「何でもではないが、ある程度の事は知っておる。セレスが世直しの旅に旅立ったこともの。わしももういい年のジジイじゃし、隠居の身じゃ。かわゆき弟子の頼みでも、大魔王退治の旅には出とぅない」
「それで居留守か？」
「うむ」
「だが、情報が古いぜ、ジジイ」
「ふむ？」
「セレスは世直しの旅に誘いに来たんじゃねえ。『勇者の剣』の救助を依頼しに来たんだ」

「お師匠様！」
アジャンを伴って岩場から姿を見せたカルヴェルに、セレスが子供のように抱きつき、ぱくぱくと口を開く。
「よい、よい。言わずともわかっておる。地中に潜った『勇者の剣』を掘り出し、異常に重たくなっておる剣をどうにかして欲しいのじゃろ？」
「そうです！　さすがお師匠様！　お願いします！」
大魔術師カルヴェルはホホホと笑う。
「当代一の大魔術師への依頼は、高くつくぞ」
「高いって……お師匠様がお金を望まれるはずないし……まさか！」
「その、まさかよ」

「でも……」
「嫌ならよいぞ、セレス。わしは城に戻る」
「……やります！　やりますから、『勇者の剣』のこと、お願いします！」
「しかと聞いたぞ、その言葉。では、参ろう。そこの傭兵、もそっとセレスの傍に寄れ」
その指示にアジャンは従った。その途端……
フッと体が浮遊する感覚が訪れ……
眼の前にナーダがいた。
「あ？」
再び体が宙に飛ばされたような感覚に襲われ……気が付くと森に佇んでいた。あやしい老人も、呪文で神聖鎧を装着しているセレスも、呆然としているナーダも一緒だ。そこは、数日前に『勇者の剣』を隠した場所に間違いなさそうだ。見覚えのある古木が天に向かって聳え立っている。
「移動魔法ですね……しかし、無詠唱の連続移動が可能とは……」
移動魔法は多大な魔力を費やして始めて可能となる魔法で、跳ぶ距離・運ぶ人数によって魔力消耗が激しくなり、呪文の詠唱も長くなる。移動魔法に秀でている者が多い宮廷魔術師ですら、めったに連続使用はしないし、よほどの事がない限り国家間のような長距離移動はしない。又、並みの魔法使いでは街を一つこえるぐらいが限界で、一旦、跳んだら二、三日は魔力が枯渇し、魔法が使えなくなるのだ。
「わしは大魔術師じゃからの」
えっへんと胸をそらせる老人と、武闘僧の視線が合う。
「……あなたがカルヴェル様ですか？」
「おぬしがナーダか」
二人はしばし無言のまま見つめ合い……
「まったくナラカに似ておらんのぅ」と、老人が言い、
「あなたは、私が想像していた通りの方のようです」と、不愉快そ

うに眉をしかめて武闘僧が言う。
あくまでにこやかな老人と、嫌悪の情を隠そうともしない武闘僧は、そのまま見つめ合っていたが……
「お師匠様！　こっちです！　『勇者の剣』は、あの大木の草むらに！　キャーッ！大穴が！　大穴が開いている！　穴の底が見えません！　あの中に『勇者の剣』が～！」
と、やかましく騒ぐセレスによって、二人の間の異様な緊張は解けてしまった。老人はセレスの元へとひょこひょこと移動し、武闘僧はその背に侮蔑の眼差しを送っていた。
赤毛の傭兵アジャンの視線に気づくと、ナーダはツーンと顔をそむけ知らぬふりをする。
（女勇者といい、この僧侶といい……愉快な旅になりそうだぜ、まったく！）
アジャンは早くもこの旅に出発したことを後悔し始めていた。
エーゲラの王宮で女王の愛人として暮らす日々にも飽きていた。豪胆を装っていても、女王も女だった。彼女の嫉妬深さと独占欲には、うんざりしていた。
女王自身もアジャンにのめりこみすぎている自分を律っしたかったようで、彼に『勇者の従者』となるよう話をもちかけたのも彼女だった。見事ケルベゾールドを討ち滅ぼせば、女勇者の庇護者であるエウロペ国王から莫大な報奨金を取れるであろうし、英雄の一人としての勲章を得られれば今後の傭兵稼業も楽になる。乗り気になったアジャンに、女王は冷たい笑みを見せた。
『女勇者様は見目麗しい十六の乙女じゃそうじゃ。そなたには難しきことであろうが、女勇者様の操（みさお）、奪うでないぞ。女勇者様は処女であらねばならぬと聞く。そなたが女勇者様を犯せば、勇者は消え、この世は闇に満ちる。そなたは大魔王の天下を助けた大罪人となり、地獄に堕ちるであろう』
（あのババア、女を抱けずに悶える俺を嘲笑いたかったんだろうが）
カルヴェルの魔法によって、地中深くに埋もれていた大剣が引き

上げられる。セレスは涙を流して、泥だらけになった『勇者の剣』を愛しそうに抱きしめていた。

そんな彼女を見つめていると……不快感を抑えられなくなる。

（ババアの見込み違いだ。いくら美人でも、あんなしちめんどくせえ貴族のお姫様なんざ趣味じゃねえ。しかも、処女じゃな！）

アジャンは処女を抱くのが嫌いだった。性交は彼の愛撫に女が悦んでよがるから面白いのだ。痛がって泣いて抵抗する者を抱いても、興醒めなだけなのだ。

（とっとと大魔王を倒して、あの女と別れよう）

セレスを見ていると、妙に落ち着かず、苛々する。

アジャンは目を伏せ、彼女を視界から消し去った。

「土中のお籠りは、敵の仕業ではない。剣が自ら潜ったのじゃ」

柄や鞘の泥を布で拭っていたセレスが驚いて尋ねる。

「『勇者の剣』が自ら動いたのですか……？」

「うむ。『勇者の剣』は、持ち手が呼べば遠方より飛来し、持ち手が危機とあらば自ら魔法さえ使う、魔法剣じゃ。伝説として残っておるじゃろ？」

「ええ。でも……作り話と思っていました。だって、この剣、今まで亡きおじい様のお部屋にずっと飾られていて……一度も動いた事なんか」

「ランツの部屋に置かれておったから、おとなしくしておったのじゃ」

老人はフーッと溜息をついた。

「『勇者の剣』は、今、おそらく拗ねておるのじゃ」

カルヴェルの言葉に、一同の目は点になった。

「『勇者の剣』が拗ねる？」

「さよう」

カルヴェルはうむうむと頷いた。

「昔、ランツが、この大剣には人格……いや、剣格と言うべきかの、まあ、ともかくじゃな、魂がこもっておると、言っておった」
「名品には巨匠の魂がこめられているとよく言われますけれど……」と、ためらいがちにセレスが尋ねる。
「そういう意味じゃなくって……？」
「うむ。しゃべる事こそできんが、この大剣には思考能力や感情があるようなのじゃ。こやつの機嫌が良いと剣は紙のように軽く、不機嫌になると鉛のように重たくなると、昔、ランツは言うておった」
「剣の機嫌……？」と、セレス。
「どうやってご機嫌とるんだよ、剣の」と、アジャン。
「不機嫌にするのは簡単じゃ。手入れを怠る、塩水に漬ける、悪口を言う、長期間放置する、剣を本来の目的と違う用途で使用する」
「本来の目的とは違う用途？」と、ナーダ。
「髭剃り、トンカチの代用、漬物石がわりに使ったり……うぅぅむ、後、何じゃったか？おぉ、雪山を降りる時、鞘に収め橇代わりに使った時も怒っておったのぅ」
「……おじい様が、そういう事やったんですか？」
「うむ。あやつ、結構、ものぐさでおおざっぱじゃったからのぅ」
そこで武闘僧が女勇者に冷たい視線を送る。
「……ご立派なおじい様だったのですね」
「うるさいわね！」
顔を真っ赤にしたセレスが老人に尋ねる。
「で、ご機嫌をとるにはどうしたらいいんですか？」
「丁寧に手入れをし、魔族を葬る為に剣を使う」
「それだけ……ですか？」
「基本的には、の。その魔法剣は自らの力で刃を常に鋭利に保っておる。ぶっちゃけて言えば、人間の手入れなんぞ不要じゃ。しかし、そこはそれ、親交を深めるにはスキンシップが大切。毎日、欠かさず、愛情をこめて手入れをしてやるがよい」
「はい」

「じゃが、最も大切なことは……持ち手が剣にふさわしい者となること……剣に愛されねば、『勇者の剣』は振るえん」

「剣に愛される……」

「戦士としての技量を高め、武の道を極めるしかないのぅ。この剣が愛するのは猛き武人のみ。セレス、おぬしは性別で既にハンデを負っている。なれば、かよわきおなごと侮られぬよう、凄まじい実力を見せつけて剣を見返してやらねばなるまい」

「難しいですね……今の私には……でも、」

セレスはぐっと拳を握りしめた。

「やります！　当代の勇者として世を救えるように頑張ります！」

盛り上がるセレスに、やんややんやと拍手を送るカルヴェル。アホらしいと、あさっての方角を見つめるアジャン。正義を信じ勇者の使命に燃えるセレスを好ましく思いながらも、ナーダはカルヴェルの不真面目な態度に眉をひそめていた。

と、そこへ、いきなり、カルヴェルから話を振られる。

「そこでじゃ、ナーダ、セレスが剣に好かれるまで、その剣を背中に預かってもらえまいか？」

「はあ？」

ナーダは糸目をぱちくりとさせる。

「私は初代勇者ラグヴェイの血筋ではありません。剣の怒りに触れ雷を落とされるのは嫌ですよ」

「それは大丈夫」

老人は低くまじないを唱え、セレスの手の中の大剣の柄へと、杖の先端を当てる。
天を裂き、雷が走り……
まばゆい光は老人の杖へと吸収されていった。
「『勇者の剣』を説得した。しばらくの間はわしやナーダが『勇者の剣』に触れても、剣は怒らぬ。剣を振るおうとすれば怒るであろうが、持っている分には無害じゃ」
「お師匠様とナーダなら大丈夫なんですか？」
セレスが、きょとんと眼をしばたたかせる。
「アジャンは？」
「駄目じゃ。赤毛の傭兵、おぬしは剣に触れるなよ」
「頼まれたって触んねえよ」と、アジャン。
カルヴェルは魔術師の杖を地に置き、セレスの手から『勇者の剣』をひょいと奪う。
「ふむ。並みの剣の重さじゃな」
両手で持っていたそれの柄を、ナーダへと向ける。武闘僧はためらいつつもそれを受け取り、柄を握りしめた。
しばらく待っても、落雷は訪れなかった。
「……軽いですね。紙とまではいきませんが、パンぐらいの重さのものを持っている感じです」
「ほほぉ。やはり、その剣、若い男の方が好きなようじゃな。困った剣じゃ」
「おい、おまえら、何でそれを持てるんだ？」
剣の怒りに触れ落雷の被害に合っているアジャンが不満そうに尋ねる。
「剣を説得したって言ったな？　何をしたんだ？」
カルヴェルはホホホと愉快そうに笑った。
「ランツの義兄弟とその血筋の者にも触れる権利を寄越せと頼んだだけじゃ」
「義兄弟？」

「さよう。わしと、先代勇者ランツ、それに僧侶のナラカは、大魔王を倒した仲間。義兄弟の契りを交わした深き友情で結ばれておる。そこのデカい僧侶はまったくナラカに似ておらんが、ナラカの妹の子供、ナラカの甥じゃ。だから、触れても剣は怒らぬ」

「おじい様の従者……僧侶ナラカ様って」

セレスはハッと瞳を見開き、口元を押さえた。

「大魔王との戦いで命を落とされた英雄……」

「違います」

不機嫌そうな顔で、ナーダが吐き捨てるように言う。

「僧侶ナラカは、先代勇者ランツとの旅で堕落し、道を誤った単なる愚か者です。英雄なんかじゃありません」

そこで、ナーダは少しよろける。不思議そうに、『勇者の剣』を見つめながら。

「何か……急に重くなりました。今は普通の大剣なみの重さです」

「おぬしがランツやナラカを快く思っておらぬからじゃ」

老人は愉快そうに声をたてて笑った。

「剣にとっては、ランツもナラカもこのわしも共に苦難を乗り越えた仲間。仲間を侮辱されて喜ぶ阿呆はおらん」

「そういう事ですか……わかりました。剣の前ではお三人への悪感情は控えるようにいたします」

「それが賢明じゃて」

森の中に老人の笑い声が響き渡った。

移動魔法でアジャンとナーダは麓の村へ送られ、セレス一人がカルヴェルの城に招待された。

「明日の朝には、おぬしらの宿までセレスを送ってやる。今宵はのんびりと旅の疲れをとるがよい」

麓の村には温泉もあるぞと笑いながら、老人はセレスを連れて移動魔法で消えてしまった。

「……旅の疲れをとれと言われてもなあ」
宿屋の寝台の上に寝転がっているアジャンが、ぶつぶつと文句を言う。
「こんな小さな村じゃ、娼館もありゃしねえ」
「だからって、村の純朴そうな娘さんを誘惑してはいけませんよ」
大剣を背負う為の紐を買い求めてきたナーダは、アジャンの隣の寝台に腰掛け、紐の長さを調整していた。
「まっとうなご家庭の娘さんは、結婚まで純潔を守らねば世間に顔向けできませんからね。初夜に夫に処女を捧げるのが女性の本懐。みだらな獣欲で女性の操(みさお)を奪う男は地獄に堕ちてしまいますよ」
「……本気で言ってるのか、それ？」
「は？」
何のことです？という顔で、武闘僧が首を傾げる。
アジャンは頭を抱えた。
（こいつの頭の中もセレスと五十歩百歩だ……世間知らずにしても度を超している。わけわかんねえ）
何でこんな馬鹿と同室なんだ……と、一室しか部屋のない、名ばかりの貧相な宿屋を怨んだ。
「俺はもう寝る。話しかけるなよ、クソ坊主」
そっちが話しかけてきたくせにと不満顔の僧侶を無視して、アジャンは瞼を閉じた。山の上であの女は何をしているのだろうと、思いながら……

「これが空気のように軽く、清らかな光で邪悪を斬れる『虹の小剣』。こちらは撃っても撃っても矢筒から矢が絶えない『エルフの矢筒』と破魔の弓『エルフの弓』のセットじゃ。『勇者の剣』が扱えるようになれるまで、戦闘時にはこの二つの聖なる武器を使え。良い武器の助けさえあれば今のおぬしならば、従者の男どもには及ばなくとも、並みの戦士の五、六倍の働きはできるじゃろう」

「あぁ……ありがとうございます、お師匠様」
両手を組んでうるうると瞳をうるませるセレス。今は白銀の鎧をとり、男ものの上着に脚絆（ズボン）のみの気軽（ラフ）な姿だ。
「用事はこれで済んだ。後はおまえに約束を果たしてもらうだけじゃの」
ギクッ！と、セレスの顔が強張る。
「『勇者の剣』を救った報酬じゃ、しかと払ってもらうぞぃ」

「そこで腰を落として、うっふ～んと悩ましげに声をあげて、ウインクじゃ。これ！片目をつぶればよいというものではない。流し目で男を誘うような表情を作るのじゃ。口元には微笑、色っぽくの」
「……恥ずかしいです、お師匠様」
「泣き言を申すな。わしを満足させるセクシー・ポーズができなんだら、依頼料未払いで麓に帰してやらんぞ」
「……わかりました、やります」
「しっかりの」
ホホホと老人は愉快そうに笑う。
十二の少女の頃、セレスは大魔術師カルヴェルのこの城に、一か月ほど滞在した。聖騎士を目指していたセレスに、当代の大魔術師が自ら指導にあたってくれたのだ。神聖魔法を習得するには、才ある者でも、普通、半年から一年かかる。けれども、セレスはたった一か月で魔法を習得できた。カルヴェルの師としての才が桁外れに優れていたおかげだ。
が……
カルヴェルには妙な癖があった。遊び心旺盛といえば聞こえはいいが……要は、人をからかって遊ぶのが何よりも好きなのだ。
セレスは少女の頃に『魔法習得には絶対必要』と騙されて、セクシー・ポーズの練習をさせられたのだ。『精神の高揚こそが魔法には大事。何事も形から入るのじゃ』と、にまにま笑うカルヴェルを

本気で信じて、頑張って練習に励んだのだ。
後に老人から『あれは冗談じゃ。本気にするとはまぬけな奴め』と、さんざん笑われ、セレスは大ショックを受けた。
だが、その時、老人はこうも言っていたのだ。
『セクシー・ポーズを覚えておいて損はないぞ。愛しい男を誘惑できるし、わしに何か頼みごとがある時にも効き目がある。おぬしがわしをうならすポーズを取れたなら、どんな望みも叶えてやるぞい』と。

「ほうほう、ちょっとはマシになってきたかのう。そこで、もっと胸をぷるんぷるんと揺らす。せっかく豊かなのじゃ、使わねば損」
「ああ～ん」
「そう言えば、セレス……おぬしからもエウロペ国王からも何度か手紙が来ておったが、おぬし、世直しの旅にわしにも加わって欲しいのかの？」
「え？一緒に来ていただけるんですか！お師匠様がご一緒してくださるのなら、百人力、いえ、百万人力です！」
「行ってもよいぞ」
にこにこにこにこ、老人は笑っている。
「その願いを聞きどけるのに値するセクシー・ポーズを、おぬしがとれたらの」
「……やはり遠慮します。『勇者の剣』をお救いくださった分だけのセクシーポーズで勘弁してください」
「気概の無い奴め」

その夜、一晩中、大魔術師カルヴェルの城で、女勇者セレスは奇妙な修行を積んだ。が、まったく身につかなかった。
カルヴェルより『才能ないのう、おぬし』と呆れられ、お情けで

許されたセレスは思った。この技を会得するのは武人の道を極めるよりも難しいのではないかと。

翌朝、カルヴェルの魔法で麓に送ってもらったセレスは、従者達と合流し、東へと向かった。

東国シャイナを目指しつつ、行く先々で邪悪と戦い、大魔王の本拠地を探す、世直しの旅に旅立ったのである。

旅のはじまり　＊　セレス・アジャン・ナーダ　＊　2話（後書き）

『旅のはじまり　＊　セレス・アジャン・ナーダ　＊』　完。

次回は『希望の光』。舞台はシルクド、赤毛の戦士アジャンの話です。

希望の光　1話

「いい加減にしろ！世間知らずにもほどがある！」

赤毛の傭兵アジャンは不機嫌だった。

エウロペの首都クリサニアを出発してからずっと、セレスの師匠カルヴェルの元を訪れた時も、エウロペの貴族領を旅している時も、シルクド国に入って荒野を超える時も、ただ、ただ、怒りまくっていたのだ。

侯爵令嬢のセレスが世間知らずであろう事は、まあ、ある程度は予想していたのだが……

セレスの世間知らずは、度を超えていた。

まず第一に、経済感覚がまったく発達していないのだ。求められるままに通常の五十倍のチップを払うあたりは、まだかわいい方で……物乞いの少年に同情して金袋ごと恵んだり、いかにもな悪徳商法にひっかかって粗悪品の非常食やら首飾りやらマントやらを買わされたり……

シルクド国に着く前に、アジャンはセレスから金袋を奪い、ナーダに預けた。

しかし、武闘僧も、セレスと五十歩百歩の世間知らずであった。

いや、ある意味、もっと質（たち）が悪かった。貨幣単位すら知らなかったのだから。『私は七つから大僧正様の下で修行を積んできましたから、世俗にはうといのです』と、悪びれずに堂々と答える僧侶から金袋を奪ったのは言うまでもない。

セレスとナーダは、焚き火の焚き方も知らない、薪の種類も知らない、狩りもした事がない（セレスはキツネ狩りの経験ならあるそ

うだが、大人数で馬や犬で獲物を追い詰める遊びの経験では意味がない）、料理をした事すらないので非常食・携帯食の作り方も知らない、水場の探し方も知らない、縄の編み方も知らない、の、ないないづくしの役立たずだった。

召使役までやる気はなかったので最低限の仕事（薪拾い、焚き火の管理、食事作りの手伝い）はやらせたが、お世辞にも要領がよいとは言えない彼らの仕事ぶりに、アジャンは、又、いらいらした。

その上……

セレスは……

大魔王教徒の襲撃の度に、アジャンを怒らせる非常識さを発揮してくれた。

大魔術師カルヴェルから武器を借りてからは、セレスも多少は戦えるようになった。『戦力』と言えるほどはアテにできなかったが、自分の身を守るぐらいはできるようになったのだ。

だが、戦闘に余裕がでてくると、セレスはアジャンの行動を非難するようになったのだ。

『戦意を失って逃げた敵を後ろから斬っては駄目よ』

『大魔王教徒だって人間よ。話し合えばわかり合えるかもしれないわ』

『私達の敵は大魔王ケルベゾールドと魔族よ。魔に魅入られた心弱き人々は、真の敵ではないわ。刃を向けてくる彼等とは戦わないわけにはいかないけれど……彼等が己の罪を認め悔い改めたら、許さなきゃいけないわ』

セレスは殺せる敵を何度も助けた。『改心した』と口先だけの恭順を示す敵に、あっさりと騙されて。同じ敵に待ち伏せされ、騙し討ちされ、負傷しても、尚、同じ事を繰り返す。喜んで敵を見逃すのだ。

アジャンには、セレスは度し難い馬鹿に思えた。己の命をかけて信用に値しないクズを助け続けるなど、馬鹿以外の何ものでもない。こんな非常識な人間を護衛しなくてはいけないなんて、不幸としか

思えなかった。
　ナーダもセレスの非常識さに呆れてはいるようだったが、『確かにセレスは愚かだと思います。でも、寛容の精神に富んだ、ある意味、勇者にふさわしい方ですよね。女の方にしておくのが惜しいくらいです。これで実力さえ伴ってくれれば、何をしようが文句は言わないのですが』と、セレスの愚行を喜んでもいるようだった。

　アジャンの苛立ちは日に日にひどくなってゆき……

　そして、ついに……

　シルクドの首都ガダーラの王宮で、アジャンの怒りは爆発したのであった。

　東をシャイナ、西をエウロペ、南をペリシャ・インディラに面しているシルクドは内陸の交易国として知られている（百年前までは北の国境が面しているバンキグとも交易があったが、現在はまったく交流がない）。
　文化も人種も雑多。ガダーラの街は区画ごとに、ペリシャ風、エウロペ風、シャイナ風の建築物が並び、それぞれがペリシャ・トゥルク、エウロペ・エーゲラ、シャイナ・インディラ・ジャポネの行商人のこの大陸での商売の拠点となっていた。
　大魔王ケルベゾールドが復活した今も尚、ガダーラの都は活気にあふれ、治安も良かった。まだ復活から二カ月ほどのため魔族の数も少なく、各国の軍隊・聖職者・魔術師による自国の街道ぞいの魔族掃討が徹底している事もあって、人々の行き交いも多い。

ガダーラの街に入都してすぐ、一行は、王宮へと案内された。
アジャンはこの国で何度か仕事をした事があった。と、いっても、雇用主は商人か下級貴族、仕事も隊商の護衛やら用心棒、貴族の遠出の警護程度のもの。
王宮に入ったのは初めてだった。
近衛兵に案内されたのは、複雑な模様のタイル画やガラスで壁面を隙間なく覆った豪奢な造りの、ペリシャ風ともトゥルク風ともつかない白亜の宮殿。天井が高く、ひたすら広かった。そのくせ家具はエウロペ風が多く、行きかう使用人や軍人は西国人もいれば東国人、インディラ人、ペリシャ人と雑多。実にシルクドらしい。

勇者が自国を訪れた時には、資金を援助し、情報を提供し、求めがあれば軍隊をも貸与して、その旅を助けるのが各国の伝統であり義務であった。しかし、どれほどの援助をするのかは国主に一任されている。王宮に招待しその日の夜に宴を開くなど、最大級の歓迎といえるだろう。
宮殿の大広間に大臣や文化人を集めて宴を開き、東西の粋を集めた豪勢な料理で舌を楽しませ、トゥルク風の楽の音で耳を楽しませ、美しい踊り子達の舞で目も楽しませようという歓待ぶり。
更にシルクド国王は、女勇者セレスとインディラ教次期大僧正候補のナーダの席を自分の横にもうけていた（何の肩書もないアジャンの席は二人から遠く離れた末席だったが）。遊牧民風の丈長のチュニックを着てはいたが頭のペリシャ風ターバンを見ればわかる、国王はペリシャ教徒だ。ペリシャ教では女は男の所属物とされる、半人前の存在なのだ。女の席を自国の大臣達よりも上座に用意するなど、本来はありえない厚遇なのだ。
エーゲラの王族のごとく富貴の証として肥満を貴んでいる国王は、まだ三十と若い。歓談を求め自分の傍に女勇者を侍らせたのも、その美貌に心惹かれた為……その程度の理由だろう。白銀の鎧姿（

これが勇者の正装なのだと、セレスはいつもの姿だ）では色気に欠けていたが。

しばらくは笑いの絶えぬなごやかな時が流れた。

ところが、その宴席でセレスは……

あろうことか……

シルクド国王に喰ってかかったのである。

「ご歓迎の志には感謝いたします。でも、大魔王退治の旅は、私とナーダ、それにエーゲラ一の戦士アジャンの三人で続けてきました。私とナーダが上座で、アジャンだけが下座のそれも末席だなんて納得がいきません」

セレスがそんな事を言い出すまで……

王宮から渡されたお仕着せ（丈長のチュニックにズボン。この国の貴族の服）こそ堅苦しくて着心地が悪かったものの、薄絹をまとって腰をくねらせて踊る美女たちにウインクを送ったり、宮廷料理に舌鼓を打ったりと、アジャンはそれなりに楽しく宴を楽しんでいたのだ。上座からかなり離れた末席ではあったが、不満はなかった。傭兵を招いてくれるだけ、国王に度量があるというものだ。

上座に険悪な雰囲気が広がり、国王の顔が怒りで赤くなる。ナーダが制しても尚、セレスの声は大きくなった。末席のアジャンの耳にも届くほどに。

「アジャンは一騎当千の戦士です。身分こそ傭兵で無位ですが、彼なくしては大魔王退治の旅は成り立ちません。国王陛下、大魔王を倒しいずれは英雄の一人となる彼を不当に扱われては、後世の恥となるのでは？」

アジャンは舌打ちし、席を立った。そして、上座に対し跪いて深々と頭を下げ、セレスの声を消し去るほどの大きな声で国王への賛辞を述べたのだった。

「偉大なるシルクド国王よ。広大な国土を統べ、華麗なる文化の守り手として民を愛する慈悲深き王よ。この度は、素晴らしい宴に、卑しい傭兵までご招待いただき、誠に感謝の念に絶えません。これ

ほどの厚遇を、身分の低き者が受けられるのは稀な事。心広きシルク国王こそ、真の王と感服いたしました」

「むぅ……」

まだ不機嫌そうな顔の王と、何事？といった顔のセレス、おもしろそうに見ているナーダ、周囲の大臣、学者達、給仕達、踊り子達の視線を意識しながら、アジャンは慎重に言葉を選んだ。

「ですが、たいへん申し訳ございませんが、女勇者様は昨夜から体調を崩され、高熱に苦しんでおられます。王のご厚情に感謝し喜んで宴に出席いたしましたが、熱によって錯乱し、心にもない事を口にしている様子。王よ、宴が始まって間もない時ではありますが、女勇者様をご寝所に案内し休ませる非礼をお許しいただけますか？」

「熱ですって？なにを言って、モガッ！」

余計な事を言われる前に、セレスの口をナーダが塞ぐ。

シルクド国王は、赤毛の傭兵とセレスに何度か視線を移す。ムスッと顔をしかめたまま。

アジャンはそこで顔をあげ、少々、下品な笑みを口元に浮かべた。

「女性ゆえに誠に仕方ない事にございますが、女勇者様は、今、月のもののアレの最中で……その期間の女性は精神が不安定になるもの……男にはわからぬ女の理屈でヒステリーを起こします。寛大なる王よ、どうかご容赦を」

そう言って更に深く低頭する。

「月のもの……か」

シルクド国王は快活な笑い声をたてた。

「ならば、仕方あるまいのう。月のもののおなごの言う事に、いちいち腹を立ててはおられんからのう」

「まことに」

「まことに」

と、国王の家臣達も追従し、笑い声をあげる。

笑われているセレスは耳まで真っ赤だった。

「エーゲラ一（いち）の傭兵、主人（あるじ）を寝所に連れて行け。道中の話は大僧正

候補殿に伺うゆえ、女勇者には休んでもらって構わん」
「ご厚意、感謝いたします」
アジャンは立ち上がると、きびきびと歩を進め、国王の前で拝礼してから、（セレスを睨みながら）跪いた。
「女勇者様、失礼いたします」
ナーダに口を押えられていたセレスを、アジャンは抱き上げ、両腕に抱えたのである。西国人にしては小柄なセレスは、アジャンの腕の中だと年齢より幼く見える。
「ちょっと、アジャン！何を！」
「おぉ、熱がまだ高いようですね、さ、女勇者様、寝室に急ぎましょう」
わざとらしく大声をあげると、抱きかかえている右手でセレスの口を塞ぎ、国王と大臣に礼をとってから広間を足早に立ち去った。
廊下を歩いている時は無表情だった。が、女勇者用の西国風の広い部屋から彼女づきとして手配された女官を下がらせるや、アジャンは憤怒の表情となり、寝台の上にセレスを投げ落としたのだった。
「馬鹿か、きさまは！」
「馬鹿って、何よ！だいたい、私、熱なんかないし、それに……それに……生理でもないわ！」
「馬鹿を馬鹿と言って何が悪い！おまえ、自分の立場がわかってない！ただ諸国を歩き回ってりゃ、そのうち大魔王を倒せるとで思ってるのか？いいか、よく聞け！おまえは各国の王と友好関係を築いていくのが義務なんだ。国王から資金的援助を受け、情報を受け取り、国の中で自由に行動する許可をもらわなきゃ、真実には近づけん！大魔王の本拠地なんざ、一生わかんねえぞ！」
「……」
「国王が多少バカをやっても、おまえは笑って許さなきゃ駄目だ。くだらねえ理屈をこねて、国王を侮辱するなんざ、勇者として下の下だ。国王の機嫌をとって、多額の活動資金をせしめ、情報をたっぷりともらい、旅を楽にするのがおまえの務めだろうが、バーカ！」

セレスは青ざめ、うつむいた。
「……ごめんなさい」
肩を震わせ、涙を堪えながら、セレスは言葉を続けた。
「私……あなただけが一人ポツンと、とても離れた席にいたし……王の傍の大臣達があなたの事をひどく侮辱したから、つい……」
「俺を侮辱？」
「……あなたが、体で、その……エーゲラの女王陛下にとりいって、エーゲラ一の戦士の称号を得たって言ってたの。何だっけ、えっと『おとこめかけ』とも言ってたわ、意味わからないけど嫌らしい顔で得意そうに」
「……言いたい奴には言わせておけばいいじゃねえか」
「でも」
「でも、じゃねえ！」
セレスは顔を上げ、まっすぐに赤毛の戦士を見つめた。
「でも！あなたは超一流の戦士よ！あなたほど大剣を操れる人、私、他に見たことないもの！エーゲラ一と称えられて当然よ！それを侮辱するなんて許せないわ！」
「馬鹿！侮辱を聞き流せなきゃ、人の下でなんざやっていけねえんだよ！誇り高いお貴族様にはわからねえだろうけどな、生きていく為にはくだらねえ野郎どもにも媚びるさ。心の中で舌を出しながら、きっちり礼儀正しくご身分の高い方々を持ち上げてさし上げるのさ。それが処世術だろうが！」
「アジャン……あなた……」
セレスの青い瞳が潤む。今にも泣きだしそうな悲しげな顔を、赤毛の戦士にまっすぐに向けて……
「今まで……相当、苦労してきたのね。かわいそうに……」
プッツン……と。

アジャンの堪忍袋の緒が切れた。

「この馬鹿女！言っていい事と悪い事の区別もつかんのか！いい加減にしろ！世間知らずにもほどがある！」

「で、家出ですか？」

ようやく宴から解放されいささかうんざりといった顔のナーダが、いつもの肩当と胸当てだけの鎧に着替え旅支度を始めているアジャンを、呆れたように見つめていた。

「家出じゃねえ。街まで女を買いに行って来る」

セレスのものとは比べようもないほど狭い部屋で、アジャンは荷物を全てまとめ背に大剣を背負った。

「王宮なら兵隊もわんさと居る。護衛役は二人もいらんだろ？だから、女勇者様の従者は、勇者様の為に街まで情報収集に出かけるのさ。そういう風に、上には話しておいてくれ」

「……ここが安全とも言い切れませんけどね」

「何？」

「王宮ぐるみ、魔族にとりこまれている可能性もあります。先代勇者の代、大魔王の憑代はトゥルクの王宮に居ました。少なくとも今日ぐらいは、セレスの傍を離れない方が良いのでは？」

「俺がセレスの傍にいた方がいい？ほう、傍になあ。だが、ナーダ、俺のこの召使用の部屋とセレスの豪勢なお部屋とは建物が違うんだぜ。どこが傍なんだよ？セレスが暗殺者に襲われたって、俺が駆けつける頃には、あの女くたばってるだろうさ」

「そうかもしれませんねえ」と、ナーダは苦笑を浮かべた。

「俺はここに居るだけ無駄だ。じゃ、後は頼んだぜ、クソ坊主。おまえの部屋はセレスの隣だからな」

そのまま立ち去ろうとする背に、武闘僧が声をかける。

「これだけはお耳に入れておいた方が良いと思うので言いますが……今夜の宴、最初はセレスも笑って相手の侮辱を聞き流していたんですよ」

「……」

「国王陛下も大臣のお歴々も、女性を蔑視しておられましてねえ。女勇者の実力を危ぶむ発言やら、男性と肩を並べようとする女性一般への侮辱やら、まあ、いろいろ。女性を男性の所属物と考えるペリシャ教の方々が多かったので、セレスへの攻撃にも容赦がなく、結構ひどい悪口を面と向かって言ってましたよ」

「……」

「それでもセレスはにこにこ笑って、国王陛下のご機嫌を伺っていました。セレスが怒り出したのは、あなたに関する悪い噂とあなたへの侮辱を大臣達が嬉々として話し始め陛下も同調してからです。自分への侮辱は聞き流せても、仲間への侮辱は我慢ならなかったのでしょうねえ」

「だから、何なんだ？」

アジャンを振り返り、声を荒げた。

「『何っておやさしい女勇者様！』と、感激の涙でも流せとでも言うのか？あの女は世間知らずの馬鹿だ！馬鹿を馬鹿と言って何が悪い！」

ナーダは特大の溜息をついた。

「……別にいいですけどね。私達は『大魔王を倒す』という共通の目的の為に集まっただけの間柄ですから。仲良しこよしの三人組になんかなれないだろうし、なりたくもありませんしね」

「同感だな」

再び背を向けたアジャンに、ナーダはのんびりとした声をかけた。

「何処へなりとも行ってくださって構いませんが、明日の午前中には帰って来てくださいね」

「午前中？何でだ？」

「私、インディラ寺院支部に用事があるんです。各国の寺院支部を

訪れ、各国の僧正様にご挨拶をするのも、大僧正候補の務めですから」

「ケッ！お忙しいこって！」

「行けば王宮とは違う視点から集めた情報も得られます。この地の寺院支部は、ガダーラのシャイナ人街にあります。行って帰って来るのに半日かかりませんが、その間、セレスを一人にはできないでしょ？」

「わかった。昼前には戻る」

「アジャン！」

翌日、街より戻った後、赤毛の戦士はナーダの部屋に向かった。しかし、あいにく武闘僧は部屋に居らず、それで仕方なくセレスの部屋に向かったのだが……

傭兵を見るなり、女勇者は真っ直ぐに駆け寄って来た。すまなそうな顔で瞳をうるませて。

「昨日はごめんなさい。本当にごめんなさい。私、考えなしのバカで、本当、恥ずかしいわ……」

澄んだ青い瞳がまっすぐに、赤毛の戦士を見つめる……

子供のように穢れを知らない……

まっさらな瞳が……

「これからは、できるだけあなたに迷惑をかけないようにするし、もうちょっと考えて何事についても話すようにするわ。だから、許して、お願い。あなたに失礼な事を言ってしまって……本当、ごめんなさい」

すがるような瞳に見つめられれば見つめられるほど……

アジャンは不機嫌になっていった。

セレスの顔を見て、その声を聞くと、無性に苛々してくるのだ。

アジャン自身、自分の不可解な感情に戸惑いはあった。無能で愚かな雇い主など、今まで幾らでもいた。しかし、セレスほど不愉快

な存在は初めてなのだ。傍にいるだけで気持ちが落ち着かなくなる。彼女の子供っぽい話を聞くと、頭に血がのぼる。できればセレスなど視界に入れたくないのだが……彼女は護衛対象なのだ。

「それから……ありがとう、あなた、街まで情報収集に行ってくれてたんですって？ナーダから聞いたわ。私があんなバカやった後だというのに、私の為に休まず働いてくれるだなんて、本当、頭が上がらないわ。あなた無しには大魔王退治の旅はありえない。あなたが私の従者になってくれて、嬉しいわ」

「……」

アジャンは部屋を見渡した。部屋の奥からのっそりと武闘僧が歩み寄って来るのが見えた。しかし、セレス付きの女官は部屋には居らず、他に部屋に人影はない。ならば演技の必要はあるまいと、アジャンは内面の苛立ちを女勇者にぶつける事に決めた。

彼女の子供のような瞳など……もう見ていたくない。

「ナーダが何を言ったかは知らんが」

と、そこで鼻で笑って、

「俺が行って来たのは娼館だ」

「しょーかん？」

何それ？という顔のセレス。

アジャンは声を荒げた。『娼館も知らんとはどこまで世間知らずなんだ、この馬鹿は！』と、思いながら。

「娼館ってのはな！金を払って女を買う場所だ！女を素っ裸にひんむいて、女の体を撫でたり舐めたりさんざん楽しんで、俺のぶっといので女を悦ばせて、スカッとする所だ！」

セレスは呆然とした顔をしていた。その横でナーダが『あ～あ。せっかく誤魔化しておいたのに台無しですね』と言いたそうな顔をしていた。

セレスは……

やがて顔中を赤く染めた。アジャンの言った言葉の意味が、侯爵令嬢の彼女にも何となくわかったのである。

「そ……そ、そう、なの。そんな所に情報収集に？」
「な、わけねえだろ。一発抜きに行って来たんだ。もっとも、昨晩は一発じゃ済まなかったがな。床上手の娼婦相手に三回戦勝負だったぜ」
「え？えっと……？」
「三回やってきたって事だよ、バーカ」
「え？え？え？でも、何で、わざわざ？」
「気晴らしの為だ！昨日は、おまえをぶん殴って裸にひん剥いてヒィヒィよがり泣きさせてやりたくなるぐらムカついていたんだ！」
「嘘……」
「嘘じゃねえよ！おまえが女勇者じゃなかったら、昨晩のうちにおまえの処女をいただいておいたさ！クソ生意気な女を懲らしめる為に、な！」
「アジャン……」
「もっとも、おまえみたいな胸糞悪い女、抱きたかねえけどな！おまえを見ていると吐き気がする！傍に寄られるだけでうっとうしい！」
「やめて……アジャン」
「ハン！俺が怖いのか、処女の女勇者様？安心しろ、おまえなんか大金積まれたって抱くものか！俺はなあ、処女は嫌いなんだ！ギャーギャーわめいてうるさいし、キツキツすぎてこっちも痛い！おまえは肉体も最低なら気立ても最悪。おまえなんかより、商売女や熟れた後家を抱く方が遥かに気持ちがいい！」
「やめて！やめてったら！」
セレスは涙目になっていた。
「なんで……そんな事を言うの？」
彼女の震える瞳に見つめられていると……
アジャンはあまりにも気の毒でいたたまれない気分になった。恐ろしい罪を犯している気すらした。
けれども、口から出る言葉を止める事はできなかった。

「おまえの事が虫酸が走るほど嫌いだからさ！」
セレスは息をのみ……それから、両手で顔を隠し、わーっと声をあげて泣き始めた。
「泣くな！やかましい！」
アジャンが怒鳴れば怒鳴るほど、セレスの鳴き声は一層、激しくなった。
「泣けば済むと思ってるのか、え？この馬鹿！うるせぇんだよ、いいかげんにしろ！」
泣き続けるセレスと、怒鳴るのを止めないアジャン。
二人を見つめ、武闘僧は溜息をついた。
「お取込み中、たいへん申し訳ありませんが……私、そろそろ出かけてもよろしいでしょうか？」
アジャンはカッと頬を赤く染めた。
「とっとと何処へでも行きやがれ、クソ坊主！」
「『勇者の剣』は置いて行きます。インディラ寺院支部に居ますから、御用の際はそちらにご連絡ください」
多分、聞いていないであろうセレスにそう言ってから、アジャンの左肩を叩く。
「隣の私用の部屋で待機していてください。あそこからならセレスに何かあれば駆けつけられます。この部屋に居なくても、充分、護衛できますよ」
「……うるせえ」
武闘僧は肩をすくめ、部屋を後にした。
アジャンも、火がついたように泣いている女勇者を睨み、
「隣に居る。何かあったら呼べ」
と、怒鳴るように声をかけ、部屋を飛び出したのだった。

希望の光　2話

初代勇者ラグヴェイの従者バラシンは、大魔王討伐後、大陸のほぼ中央やや南の彼自身が神の啓示を受けた山を聖山と定め、寺院を建立した。インディラ教の始まりである。大陸中央部から東のシャイナ・ジャポネはインディラ教を受け入れ、国教と定めてすらいる。

寛容と慈悲の心をもって和を貴び魔族のみを敵とするインディラ教は、他宗教と摩擦を起こした例（ためし）がない。北方諸国を除く全ての国々は、インディラ寺院の建立を許可し、インディラ教徒の国内での活動を容認している。各国の首都や大都市には必ずインディラ寺院支部があり、その国における宗教活動を統括する僧正位の上級僧が存在するのだ。

大僧正候補であるナーダは、女勇者の従者になるよう大僧正から命じられた際に、各地の僧正の元を訪れ親交を結ぶようにも命じられていた。大僧正は全ての寺院の頂点に立つ最高位、各地の僧正と信頼関係を築いておいた方がいい……これが表の理由だ。

裏の理由は、インディラ教団の情報網を利用した情報収集の為と、ナーダの個人的な部下と（セレス達にも内密に）接触する為であった。

ナーダには護衛役兼諜報員の役目を果たす部下達がいた。普段、彼等との連絡には鳥を使っており、口寄せで招きよせた鳥を魔法で操り、部下に文（ふみ）を送ったり部下からの文を受け取ったりしているのだ。

旅立って間もなく、森に隠しておいた『勇者の剣』が消失した事件があったが、その事実をナーダがいち早く知ったのは部下からの文を受け取ったからだった。二人には『鳥が教えてくれた』と、あたかも鳥と意思疎通ができるかのような嘘をついたのは、ナーダの部下は非公式な存在の為、表に出すわけにはいかないからだ。

シルクドの僧正と歓談し、僧正に用意してもらった人払いをした

客間で部下との接触を終えると、全ての用事は済んだ。
シルクド国内では、大魔王教徒はさほど活動をしておらず、魔族絡みの大きな事件もない。
ただ、東北部の草原地帯に、魔族のものと思われる事件が幾つかあった。シルクド国軍、聖職者達・魔術師達も積極的に魔族討伐をしてはいたが、広大な国土全てをカバーできるはずもなく、都市や街道ぞいで魔族討伐は行われている。シャイナ国への道中は、魔族出現の噂のある閑散とした土地を訪れ、可能な限り妖しいものを片付けてゆくべきだろう。
王宮に戻り、セレス達と話し、シルクド東北部に向かう準備をすべきだと頭ではわかっていた。
だが、ナーダの足取りは重かった。刺々(とげとげ)しい傭兵も不愉快なら、泣きわめくばかりの脆弱なセレスにも鳥肌が立つ。あの二人の元に戻りたくなどなかった。
(何であそこまで相性が悪いんでしょ、あの二人。セレスがウブすぎるせいで、アジャンは具体的な説明をしすぎてどんどん下品になってゆくし、抑えがきかなくなっていくし……セレスも子供っぽい正義感はナニですが、貴族のわりに階級を鼻にかけない、素直な子なのに……処世術に長けてるアジャンがどうしてあれほど反発するんでしょう?)
ナーダは仲裁役などやった事はなかった。
(気に喰わない奴の面目を潰してやるとか、馬鹿をからかって話をぶち壊すとかなら得意なのですが……)
と、インディラ教大僧正候補にあるまじき事を思いながら、落日の日に染まる寺院内の庭園にさしかかった時だった。
「ナーダ様」
背後から声をかけられた。振り返ればそこには、涼しげな顔立ちの二十代前半の僧侶が居た。まとった上級僧の衣からも、しなやかな所作からも、僧正付きとわかる。ナーダは笑みを浮かべた。
「おや、ヴァジュラではありませんか」

ナーダがそう言うと、僧侶は嬉しそうに微笑んだ。
「感激です。ナーダ様、私の名前を覚えていてくださったのですね」
「忘れるものですか。三年前、あなたが総本山での修行を終え、生国の寺院に戻られた時、私もたいへん悲しく思ったものです。なにしろ……私とあなたは魂で語り合った仲ですものね」
僧侶は恥じらうように頬を赤く染めた。
「ナーダ様、今、お時間よろしゅうございますか？私も僧正様からほんお少しですが、お暇をいただいて参りました。私の房にて、人間の根源について再び語り合えたら、望外の幸せにございますが……」
「……」
ナーダは顎の下に手をそえて、首を傾げた。
早く戻った方がいいのは当然であったし、目の前の僧侶ヴァジュラとは数回肌を重ねてはいたものの、数多くいた遊び相手の一人に過ぎなかった。
今、何をなすべきかは明らかだったが……
結局、帰りたくないという欲求が勝ってしまった。
ナーダはヴァジュラの肩を抱き、大柄な体で年下の僧侶を包みこむように寄り添った。
「私も忙しい身の上ではありますが、ここでお会いしたのも神のお導き……共に語り合わねばなりませんね」
「ああ……ナーダ様」

と、いうインディラ寺院での、男同士の乱れた関係はさておき……

「……遅い」
アジャンは苛々しながら、ナーダ用の部屋の中を歩き回っていた。

「もう夜中じぇねえか、何してるんだ、クソ坊主！」
アジャンは隣室に繋がる壁を睨んだ。昼前に部屋を飛び出したっきりセレスとは会っていない。女勇者は部屋に籠ったまま、うんともすんとも言ってこないのだ。
（まさか……まだ泣いているなんて事はねえよな）
アジャンは眉をしかめた。ナーダが戻ったら、様子を見に行かせようと思っていたのだが……

セレスの部屋の前で逡巡し、ノックしようとしては果たせず手を下げて……そんな事を何度か繰り返してから、アジャンは頭を滅茶苦茶に掻きむしった。
（馬鹿か、俺は！）
ノックも無しに、セレスの部屋の扉を開ける。
「入るぞ」
蝋燭の明かりはついていたが、三間もある豪奢な部屋にも浴室にもトイレにも人影はなく……
突き当りの部屋のバルコニーに、セレスは居た。
月明かりの下で……
部屋に背を向ける形で……
『勇者の剣』を持ち上げようとしてはふらついて足元に落とし、掛け声と共にほんの少し宙に浮かせては、又、落とす。その繰り返しをしていた。
「何やってんだ、おまえ」
セレスは振り返った。
「アジャン！」
多少腫れぼったい顔をしていたが、もう泣いてはいない。セレスは不機嫌そうに唇を尖らせた。
「見てわからない？素振りをしていたのよ」
「見てもわかんねえよ」

「これでもだいぶマシになったのよ。こうやって毎晩続けていれば、そのうち頭の上まで持ちあがるようになるわ」
「毎晩やってるのか、それ？」
「ええ。敵襲の危険のある野宿の時は無理だけど、できるだけやってるわ」
セレスは苦笑を浮かべた。
「早く一人前の勇者になりたいもの」
「……」
アジャンは、手近にあった椅子をひっぱってきて跨いで座った。
「アジャン？」
「俺に構わず続けろ」
セレスはチラリチラリと背後を気にしながら、やがて素振り（と、本人が言い張る動作）を再開した。『勇者の剣』をほんの少し持ち上げてはよろけ、ほんの少し持ち上げてはよろけ、その繰り返しだ。
しばらく見つめてから、アジャンは立ち上がった。
「もういい、やめろ。やるだけ無駄だ」
セレスはムッとして傭兵をねめつけた。
「無駄かどうかは、まだわからないでしょ。ずっと続けていればそのうち」
「先の事はどうでもいい。今、そんな訓練を積んでも、実戦じゃ何の役にも立たんと言っているのだ、俺は」
アジャンは腰をかがめ、部屋の中で背の大剣を抜き、刃の切っ先を床へと向けた。
「無理に持ち上げる必要はない。床を這うように剣を構え、体をひねらせたり、回転させたりして、剣を振り回せ。敵が近づいて来たら、その一瞬だけ、気合を入れて持ち上げればいい」
手本を示すかのように、アジャンは腰を低くし、床にかかる形で大剣を構え、ぶんと振り回し、一瞬だけ微かに刃を上げ、又、下げる。
「この構えの弱点は、弓矢を防げない事と、跳躍して空中から攻撃

をしかける敵への対応が遅れる事だ。はっきり言えば、今、おまえが戦闘時に『勇者の剣』を使ったって危ないだけだ。だが、ここぞという時に使う分には、或いは効果があるかもしれん。敵はおまえが『勇者の剣』を使えんと思いこんでいる。その油断をつけ。『勇者の剣』を隠し玉として使えるよう、重い物でもそれなりに扱える訓練を積むべきだ」

「……」

背に大剣を戻すアジャンに、セレスは素直に気持ちを伝えた。

「ありがとう、アジャン……これからは、あなたの助言に従って訓練をつむわ」

「俺は傭兵だからな……」

赤毛の戦士はそっぽを向いた。

「料金分の仕事はする。気に喰わない女でも護衛するし、女が死なないよう助言もするさ」

「そうね……あなた、傭兵としてついて来てくれているのよね。私みたいな馬鹿女、大嫌いなのに……」

セレスは溜息をついた。

「私ね、子供の頃から、ご先祖様の勇者様達の活躍のお話を聴くの、大好きだったの。勇者様に協力する従者の方々も、とても個性的でご立派な方達ばかりで……。勇者様と従者が信頼し合って共に戦うなんて素敵だと思ったわ。だから、私、大魔王退治の旅が決まった時、従者の方達と、絶対、仲良くなろうと誓ったの。おじい様が従者の方々と義兄弟の契りを交わしたように、私も、あなた達とう～んと仲良くなろうと……」

「あなた方と義兄弟だなんて、ゾッとしますね」

二人が驚いて振り返ると、部屋の扉の前に武闘僧が両腕を組んで佇んでいた。扉自体はアジャンが開けっ放しにしていたので開閉音がしなくても当然なのだが、人の気配に敏い傭兵までもが何時入って来たのかわからなかったのだ。

「セレス、あなた、あなたのおじい様が従者とどういう義兄弟だっ

たのか、ご存じなのですか？」
「え？義兄弟って、意気投合した人達が絆を深め合う為に兄弟の約束を交わした関係……でしょ？違うの？」
「違いませんが、あの三人の場合……」
「え？まさか義理の兄弟とか？それとも配偶者の兄弟？じゃなかったら、兄弟姉妹に婚姻関係の方がいらっしゃるの？」
「違います！血縁関係でも縁戚関係でもありません！あの三人と同じ関係になろうとしたら、あなた方と穢らわしくも」
「おい、クソ坊主」
赤毛の戦士がじろりと武闘僧を睨む。
「やけに遅かったじゃねえか。半日かからねえで用事は終わるんじゃなかったのか？」
「ええ、まあ……情報収集に忙しかったので……」
平然とした顔で、武闘僧はしらを切った。
「それで、いくつか情報を掴んだのですが、この国の東北部の草原で」

三日後、勇者一行は王宮を離れ、シルクド東北部のティンザを目指した
赤毛の傭兵が先頭で馬を走らせ、その後をセレスが続き、『勇者の剣』の運び役のナーダが後尾を務める。荒野や砂漠を越えるので、全員、日よけ・埃よけのフードマンを目深に被っている。
アジャンには不思議な能力があった。彼は地図をほとんど見ない。一瞥しただけでかなり細かい記載まで記憶してしまうからだ。旅の途中で地図を確認するのはもっぱらナーダで、アジャンは迷うことなく馬を進めてゆく。砂漠をできるだけ迂回する最短ルートを選んで。しかも、地図にないオアシスや井戸に一行を導いたり、隊商の接近に気づいたり、夜盗をやり過ごしたりと、『旅慣れている』の一言では説明できない独特の勘の良さを発揮して。

「何となくわかる」と、アジャンは言う。
「どの方角に何があるのかまではわからんが、どっちに行けばいいのかはわかる。ろくでもないものが待ち受けている方角は、その方向に体を向けただけで総毛立つ。逆に役立つものがある方角を向くと、気分がいい」
「便利な勘ね」と、セレスが素直に驚く。
「その勘、外れた事ないんですか？」と、ナーダ。
「無い。俺はこの勘を頼りに今まで生きてきた」
「戦場でも？」
「ああ。何となくどっちが勝つかわかる。俺は勝ち組にしか自分を売り込まんから、負け戦の経験はない」
「ほう」
ナーダが感嘆の声を上げる。
「それは一種の予知能力ですね。アジャン、あなた、きちんと寺院か神殿で修行を積めば、預言者になれますよ。それだけの資質があると思います」
「ケッ！くだらねえ！」
僧侶になる気も神官になる気もねえと、アジャンは話を打ち切った。ナーダは『もったいないですねえ』と残念そうだったが、本気でアジャンを僧侶に勧誘する気はなさそうだった。

ガダーラの王宮を旅立ってから十二日後、ついに乾燥地帯を抜け、山岳地帯に入った。
まばらだった緑が、少しづつ周囲に息をふきかえしてゆく。山に登るに従って、丈の低い草や木が増え始め、水も容易に手に入るようになっていった。
セレスは喜んで小さな川で、顔を洗った。全身や髪も洗いたそうだったが、その欲求を口に上らせる事はなかった。多少は大人の判断ができるようになったという事だ。

アジャンとセレスはこの十二日の間、ほとんど口をきかなかった。セレスはアジャンに遠慮し、アジャンはセレスを故意に無視していた。だが、そのくせ就寝前にはセレスに剣の稽古をつけてやったりしていた。必要最低限の指示しか与えずに、だったが。

更に四日後……

山ふところの原野。そこは山腹でもあり、青々と草が茂った原野が果てしなく遠く山まで続いている。遠くに山羊や羊の群れが見えた。遊牧民の家畜だ。しかし、家畜を追う人の姿は見当たらなかった。

「そろそろ目的地ですね」

いつものように野鳥を肩にのせ、ナーダ（道なき道を強行軍で来たので身なりを整えていない。黒い髪や髭が薄く生えている）は地図を開いた。地図からおおよその距離を測ろうと思ったのだ。

だが、アジャン（こちらも髭が伸び、一層、野性味あふれる顔となっている）は、周囲をしばらく見渡した後、

「こっちだ」

と、絶対の自信をもって馬を走らせて行ってしまう。慌ててセレスが後を追い、やれやれとナーダが鳥を空に放し二人に続く。

アジャンが二人を導いたのは、草原の果て、南に面した斜面だった。崖崩れでもあったのか、山肌はめくれ、草木一本なく岩ばかりがごろごろと並んでいる。なだらかに下降していく斜面がずっと遠くまで続いている。

「ここが……何？」

そこでセレスは気づき、びくっ！と体を強張らせた。

岩と見えたものの中には、しゃれこうべも混ざっていた。人骨が点々と散らばっている。

「ここはもともと風葬儀礼の斎場だったそうです」

と、合掌してインディラ式拝礼をしつつ、ナーダが説明をする。

「この地方では、風葬がさかんに行われています。屍は、見通しの良い場所に岩によりかからせる形で置いておき、鳥や野獣に食してもらうのです」

「風葬……」

セレスもエウロペ教の印を切った。死者を弔う意味をこめて。エウロペ教では死者は土葬で眠りに就かせる。死骸を獣に食べさせるなど、馴染みのない考え方だ。

「なんでも、早く骨だけになる人の方が善人なのだとか。死者の魂は死後、白い鳥になるとも信じられています。だからでしょうかねえ、獣よりも鳥に食べられる事を望み、この先の麓からわざわざ、鳥の多いこの山腹の辺りまで死体を運んでくる喪主が多いのですよ。亡骸は、ここ、南に面する斜面の岩に横たわらせて安置されるのです」

「ふぅん」

「その風葬儀礼の斎場が一変しました、二月ほど前からです。ありうべからざる『岩の怪』によってね」

「『岩の怪』？」

「この地方で死者を岩によりかからせるのは、その岩に人の魂を染み込ませる為です……しかし、その魂の安息は破られました。二月ほど前から、人の魂と縁を結んだ岩を憑代にして魔族が続々と出現しているのです。ロック・ゴーレムです」

「五代目勇者様や八代目勇者様が戦った魔人よね、ロック・ゴーレムって」

「ええ。この地方の宗教上、ありえない怪異です、ロック・ゴーレムなんて……」

「よその国の大魔王教徒が邪法を用いたのかしら？」

「かもしれませんが、何でわざわざこんな辺鄙な場所で？って疑問は残りますね。二月ほど前から夜ごとロック・ゴーレムが旅人や遊牧民を襲っているようなのです。彼等は動きは遅いのですが攻撃力は凄まじく、馬の首もひとひねりで落としてしまうとか。岩なので

刃が通らず、火にも屈せず、執拗に攻撃してくるそうです。足が遅いし活動できるのは夜だけなので、襲われたら馬に乗って一目散に逃げればまず無事だそうですが、地元の方々、ロック・ゴーレムに大切な家畜をずいぶん奪われているようです」

「……なんか、みみっちい話だよな」

アジャンはボリボリと頭を掻いた。

「シルクド軍が放置して後回しにしてるわけだ。どんな魔族が絡んでいるか知らんが、ロック・ゴーレムを操って家畜泥棒とはな！」

「みみっちい話じゃありません。魔族が利用しているのは斎場の岩なのですよ。父祖の魂が穢されているのです、地元の方には大問題です」

「だが、死人が出ているわけでもない」

「そういうことではなく、宗教上の」

「宗教？魂が白い鳥になるんだか、岩にこもるだか知らんが、岩は岩だ。魔族に利用されている物なら壊すだけだろ？」

赤毛の戦士の不敬な発言に、武闘僧は片眉をしかめた。

「この地方では、死者の魂は、一時、岩で安息し、それから白い鳥になると信じられているのです。斎場の岩は死者の亡骸も同然なのですよ」

不愉快そうに眉をしかめたまま、武闘僧は説明を続けた。

「それから、ロック・ゴーレムの家畜泥棒は、多分、最終目的じゃありませんよ。ロック・ゴーレムは日ごとに数を増し、最近は軍事教練の真似事を行っているようです。いずれは都市を攻めにゆく気なのかもしれません」

「ほう、軍事教練の真似事だと？その話は初耳だな」

赤毛の傭兵はじろりと武闘僧を睨む。

「何処で仕入れた情報（ネタ）だ、そりゃ？」

おまえ、この所、ずっと俺達と一緒に居ただろう？との突っ込みに、ナーダは澄まして答えた。

「むろん、鳥に教えてもらったのですよ」

「ふ～ん、世の中にゃ『鳥目』って言葉もあるよな。鳥って、夜、目が見えないんじゃなかったっけか？」
「うっ……」
一瞬、ナーダは喉を詰まらせたものの、
「……夜に活動する鳥もいますよ、梟とか、みみずくとか」と、ひるまず答えたのだが、
「おまえが梟とかミミズクを肩にとまらせているのは見た事がないな」
と、にやりと笑われてしまう。
「ま、いい。夜までこの辺で休むぞ。頭と顎でも剃って暇潰してな、クソ坊主。ケルベゾールドが自らやってるたぁ思えねえセコイ事件だが、魔族絡みの事件を解決してゆくのが勇者様の務めだ。とっとと片付けちまおう」
そこで不機嫌そうな顔で武闘僧が傭兵に嫌味を言う。
「いいですけど……今夜、多分、あなた、ほとんど役立たずですよ、アジャン」
「何？」
「相手がロック・ゴーレムだからです。岩を相手に、ご自慢の大剣を刃こぼれさせたくはないでしょ？」
「俺の剣は岩をも斬れる」
「そういう問題じゃないんです。ロック・ゴーレムは魔人です。邪法によって今世の物質と融合した魔族に、物理攻撃は効果がありません。斬っても斬っても再生してしまいます。滅するには、魔界と今世を結んでいる絆を浄化するしかありません」
「まわりくどい言い方はよせ。どういう事だ？」
「ロック・ゴーレムを滅ぼせるのは、神聖魔法か聖なる武器による攻撃だけって事です。聖なる武器とは人ならざるものが鍛えし武器、つまり『勇者の剣』や『虹の小剣』『エルフの弓』がそれにあたります。あなたは魔法は使えませんしねえ……」
ナーダは意地の悪い笑みを浮かべた。

「セレスから『虹の小剣』か『エルフの弓』を借りられてはいかがです？」

赤毛の傭兵と女勇者が顔を合わせる。カルヴェルから借りた『虹の小剣』を鞘ごと腰から抜き、セレスは傭兵へと差し出した。

「アジャン、あの、良かったら……」

皆まで言わせず、赤毛の傭兵は大声を出した。

「ンなオモチャみてえな武器、使えるか！」

「でも、私、神聖魔法なら使えるし、武器がなくても」

「いらん！」

セレスから顔をそむけ、アジャンはナーダを睨んだ。

「確か、僧侶は、武器に祝福を与える魔法が使えたよな。刃に神聖魔法を宿らせる手もあるはずだ」

「その手も、まあ、ありますけどねえ」

嫌そうにナーダが言葉を続ける。

「効果時間短いですよ、五分ぐらいしかもちません」

「効果が切れる度に魔法をかけ直せ」

ナーダはツーンとそっぽを向いた。

「嫌です」

「何だと？」

「そんな面倒くさいこと、やってられません」

「きさま！」

赤毛の傭兵が、武闘僧の僧衣の胸元をぐいっと掴む。横でセレスがはらはらと二人を見つめている。

「……どういうつもりだ？」

脅されるように睨まれても、武闘僧は涼しい顔だ。

「あなたのわがままにつきあってなんかいられません」

「わがままだと？」

「ええ。『虹の小剣』を借りられないのは、あなたの勝手でしょ？はっきり言いまして、次の戦いで一番役に立つのは高位の神聖魔法まで使えるこの私です。邪法を浄化する役目は、セレスでは荷が重

すぎます。あなたのお手伝いができるほど、私、暇じゃないんですよ」

「……」

「でも、どうしても、大剣に神聖魔法をかけてもらいたいのでしたら」

ナーダは、にっこりと笑みを浮かべた。

「セレスに頼みなさい。セレスも剣に祝福の魔法をかけられます。ね、そうですよね、セレス」

「え？ええ……」

セレスは戸惑った顔で、アジャンを見つめていた。

「私の魔法じゃ三分も効果は続かないけど、一応、使えるわ」

「と、いうわけです」

武闘僧は強引にアジャンの手をふりほどいた。力勝負ならば、武闘僧は赤毛の戦士よりも遥かに強いのだ。

「戦闘中は仲良くくっついていてください。離れすぎると困るのはセレスではなく、アジャン、あなたですよ」

歯ぎしりを漏らす赤毛の傭兵に背を向け、武闘僧は鼻歌を歌った。苦手な仲裁はやってみた。これで、二人の仲がどうなるかは神のみぞ知るだが。

希望の光　3話

草原が夜の帳（とばり）に包まれ……

満点の星の下、異形達が蠢き始めた。

そこかしこで……

岩が少しづつ大地より盛り上がり、頭、体、手足からなる岩の形となって動き出す。その大きさは高さも幅も人の三倍から五倍はある。

動き始めた岩を……

アジャンの大剣が一刀のもとに切り裂く。あるべき姿に戻り、岩はただの岩となって大地に転がった。

セレスはアジャンの横で『エルフの弓』を構え、矢を次々に射た。聖なる武器に貫かれたロック・ゴーレムは全て、魔の呪縛から離れ、大地へと帰っていった。

「援護を頼みますよ」

頭を丸め髭をそって僧侶にふさわしい姿に戻ったナーダが、背に『勇者の剣』を背負ったまま走る。手で印を切り、ロック・ゴーレムの群れに向かって浄化魔法を放つ。彼から広がった光を浴びて、全ての魔人があえなく消滅していった。

「セレス！」

アジャンからの催促だ。神聖魔法が解けてしまったのだ。ロック・ゴーレムが斬れなくなったので、仕方なくゴーレムの巨大な右手を刃で受け止め、攻撃を堪えている。セレスは素早く呪文を詠唱し、傭兵の大剣に祝福を与えた。再び魔人が斬れるようになった大剣を振るい、傭兵がゴーレムを斬り捨ててゆく。

しかし、それも、じきに……

「セレス！」

魔法の効果が切れてしまう。

早く魔法をかけろと傭兵が要求してくる。思うように攻撃できな

い傭兵は次第に苛立っていったが、セレスも、又、かなり苛々していた。

「アジャン、一人で勝手に走って行かないでよ！」

「うるせえ！のろま！」

傭兵は気の向くままに敵の群れに走って行き、大剣を振るう。背後からついていくセレスなど、まったく気にかけずに。そのくせ、神聖魔法をかけろと要求してくるのだ。

彼の身勝手さに、セレスは、久々に怒りを覚えた。ガダーラの王宮の宴で失敗して以来、セレスはアジャンに対し妙に萎縮して遠慮してしまい、素直な気持ちを伝えられないでいた。だが、今は……

「馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！離れすぎ！死ぬわよ！私を置いて行かないでよ！」

「早く魔法をかけろ、馬鹿女！」

「馬鹿ですって！馬鹿はあなたよ！」

「無駄口叩く暇があったら神聖魔法を唱えろ！」

ぎゃいのぎゃいのと騒いでいる後方の二人に、武闘僧はちらりと視線を走らせる。

（仲が良くなったのは結構なんですが……援護になってませんよ、まったく、もう！）

ナーダは、周囲を岩の魔人に囲まれていた。魔人は彼が放つ浄化魔法や拳にこめて放つ聖なる力に警戒し、不用意には近づいて来ない。だが、岩や木を投げて来たり、ナーダの死角を狙いかわるがわる襲って来る。

ところが、背後から近づいて来たロック・ゴーレムは、彼が背負っている『勇者の剣』に触れた途端、岩と土くれに戻り崩れ落ちた。『勇者の剣』の浄化の力だ。それは、武闘僧の想像を凌駕する強力なものだったのだ。

（これを背負っている限り、背後はほぼ安全）

ナーダは口元に笑みを浮かべ、気を高め、手で次々と印を切り、呪文を唱えた。

（あなた方とは信仰する神が異なるでしょうが、我が信心をもって、あなた方、彷徨える魂をお救いいたしましょう！）

武闘僧の体から光の渦が生まれる。凄まじい勢いで広がってゆく、それは、斜面の上に居たあらゆるものを巻き込み、光の内に溶かしてゆく。

アジャンが斬るはずだった敵も、又、ただの岩に戻り、形を保てず崩れてしまった。セレスは構えていた弓を下ろし、ナーダの神聖魔法で浄化されてゆく魂を見送った。

日の光のようにまばゆくあたたかな光は、全ての異形を飲み込み、浄化していった……

光はやがて収縮し……

武闘僧はその場に、がくっと片膝をついた。

「ナーダ！」

心配して駆け寄ったセレスに、武闘僧は苦々しい顔を見せた。

「しくじりました」

「え？」

「術の最中に、地中から魔法波を感じたのです……ロック・ゴーレムを生み出し操っている呪具が地中に埋もれています。それを壊さない限り、この邪悪な魔法は止まりません」

ナーダの視線は足元に向いていた。

「浄化したかったのですが、地下数十メートルの地中だったので、光は届きませんでした」

深呼吸をして息を整えてから、武闘僧は再び気を高め始めた。

「呪具を浄化します」

「でも」

神聖魔法には、穴掘りに適した魔法はない。セレスは神聖魔法しか使えないし、ナーダは数系統の魔法を操れるものの攻撃系の魔法は使えない。

地中深くの呪具をどうやって浄化するのだろう？

武闘僧は右の二の指で、コンコンと額を叩いた。

「信仰心と柔軟な思想さえあれば、困難は乗り越えられるものです。遠方とはいえ、その間を塞ぐのは岩と土だけ。ならば、浄化できるものを浸み通してしまえばいいだけです」

開いた両手を地面につけて、ナーダは精神集中を始めた。が、まだ幾らかの余裕はあるようで、セレスに指示を与える。

「私はこちらにかかりきりになるので、魔族のお相手はお任せします」

「え？」

「宙に邪悪な気が浮かんでいます。おそらく、呪具を埋めた術師。さほど強い気ではありませんが、聖なる武器か神聖魔法でなければダメージを与えられないのでお忘れなく」

呪文を詠唱し、ナーダは……

両手の指先に、邪を払う聖なる水を呼び寄せた。インディラ教の始祖バラシンが神より賜った浄化の泉。インディラ教の総本山の森にある尽きる事のない奇跡の泉、遥か彼方の泉の水を魔法で指先に呼び寄せているのだ。地中深くまで浸み通るほどの大量の水を呼び寄せ、浄化の水で呪具を清めるつもりなのだ。

セレスの背後から剣戟が響き渡った。

振り返ると、少し距離が開いたところで、アジャンが黒のローブの男と戦っていた。敵のローブの裾は宙に浮かんでおり、手にした細剣でアジャンの大剣を軽く受け止めていた。

《面白い、これほどの男が野に埋もれておるとは》

声ではない声が聞こえた。セレスは矢をつがえ放った。が、それは黒衣の男を貫く前に空を反れ、思いがけない方向に飛んで行ってしまった。敵が大気を操り、空間を曲げてしまったのだろう。

《何という柔軟な魂なのだ……偉大なる御方を受け入れてもおまえならば壊れぬ。この世界の制約もおまえを通せば無となる。御力のままに、ケルベゾールド様は、この世に存在できる。これほど理想的な器は滅多におらぬ。これを献上すれば、ケルベゾールド様もさぞやお喜びになられるだろう。ククク、ウズベル様に命じられて

のつまらぬ実験で、思いもよらぬ手柄が得られた！》

「うるせえぞ、きさま！」

アジャンは敵の細剣を弾き飛ばし、黒衣の男の体を斬って捨てるべく刃を振り下ろした。

けれども……

黒衣を半ば斬ったところで、大剣は動かなくなった。いや、男の黒衣が絡みつき、大剣を捉えていると言った方が正しいか。黒衣は形を変え、黒い霧となってアジャンを包み込もうと広がっていった。

「アジャン！」

セレスは叫び、走った。彼の大剣に祝福を与えてやりたいのだが、まだ距離が開きすぎている。セレスの魔法では届かない。

《人としての心はいらぬ。欲しいのは、その魂と肉体。シャーマンよ、己をケルベゾールド様に捧げよ》

「くそっ！」

大剣の柄を離し、後方へと逃れようとする赤毛の戦士。けれども、人の形を捨てて完全に黒い霧と化した敵は、意のままに形を変え、アジャンを包みこんでゆく。

「アジャン！」

セレスは、赤毛の傭兵へと手を伸ばした。

《心を解き放て！憎悪を思い出すのだ！》

現実に重なるように幻が見えた……

吹き荒ぶ雪……

目も開けていられないほど、激しい雪嵐。頬を叩きつける風が、刺すように痛く冷たい。

『アジャン！』

ぼろぼろの布を防寒服代わりに体に巻きつけている少年が、力なく倒れている小さな体を抱きしめ叫んでいた。

『俺だ！アジャン！目を開けてくれ！』

少年は腕の中の者をきつく抱きしめた。吹き荒ぶ風が、腕の中の者のフードを取り去った。見事な赤毛が風に舞い……生気のない白い顔が晒される。五、六才の幼いその顔は、既に魂を失っていた。

『アジャニホルト！』

幼子（おさなご）を抱きしめ、少年は肩を震わせた。凄まじい怒りを抑えられずに……

少年は頭をあげ、雪嵐を睨みつけた。

『神よ！そこにおわすのなら聞け！我が一族は古えからの神との契約を守り滅びた！父は名誉なき死を与えられ、母も姉も凌辱の果てに殺された！おまえは俺から幼き妹すら奪い、そして、今、最後の血族アジャニホルトを奪った！何故、おまえは我等を見捨てる？崇め奉られるばかりで何もせんのが神か？ならば、神などいらぬ！俺はきさまとの契約を破棄する！』

《そうだ、憎め》

《全てを憎むのだ》

《おまえの血族の命を奪ったものを……》

《おまえから誇りを奪い辱めたものを……》

《無慈悲で強欲な支配者達を……》

《強者にへつらい、地べたを這いずるみすぼらしい民を……》

《全ての愚かなる人間を……》

《憎み、見下せ》

《人としての情などいらぬ……》

《憎悪に染まりきった魂さえあればよい……》

《シャーマンよ、その身をケルベゾールド様に捧げよ》

「駄目ぇぇぇぇぇぇ！」

セレスは望んだ。
真の光を。
闇に覆われかけている男を救える、純粋な光を。

望みのままに、光が集う。
セレスの両手に……
『勇者の剣』が握られた。

不思議な事に、それは空気のように軽かった。

セレスは『勇者の剣』で、アジャンの周囲を覆っていた黒い霧を斬り裂いた。

《馬鹿な……》
斬られた面から光が広がり、黒い霧はその光に溶かされ形を保てずに消えてゆく。
《そんな馬鹿な……女が『勇者の剣』を使いこなすなど、ありえぬ……女が『勇者の剣』を……》
パサァァァァ……と、黒い霧は消滅した。一握の白い塩だけを残して。
「くっ……」
アジャンが頭を抱え、大柄な体をふらつかせる。
その体を支えてやろうとして、
「きゃあああああ！」
逆にセレスが、前のめりに倒れてしまう。『勇者の剣』が、物凄く重たいのだ。両手でも支えきれないほどに。仕方ないので、大地に突き刺して両手を離した。
（でも、これって、『勇者の剣』が私の所まで飛んで来てくれたって事よね。『勇者の剣』はナーダが背負ってくれていたんだし）

『勇者の剣』は持ち手が呼べば遠方より飛来し、持ち手が危機とあらば自ら魔法さえ使う、魔法剣じゃ。

セレスは魔法の師匠カルヴェルの言葉を思い出した。

『勇者の剣』に持ち手として認められず、徹底的に嫌われているセレスだが……心からアジャンを救いたいと願ったあの時、剣はセレスに応えてくれたのだ。

赤毛の傭兵が頭を押さえたまま、じろりとセレスを睨みつける。

「……助かった」

「え？」

「今日は俺が悪かった……」

「え？え？え？」

「聖なる武器を借りなかったのは、失敗だった。くそ！次からは魔族相手の時は、おまえさんのオモチャを遠慮なく貸してもらう。あのくそ忌々しい魔族を、俺の手で斬り殺してやりたかった！」

己の赤毛を押さえる両の手は小刻みに震えていた。

「……嫌な事、思い出させやがって……」

「アジャン……」

セレスも、又、アジャンの雪の記憶を共有していた。

雪嵐の中、幼い弟の亡骸を抱き、神への怨み言を叫んでいたのは……昔の赤毛の傭兵なのだろう。彼が口にしていたのは異国の聞きなれない言葉だったが、何と言っているのかは不思議とわかった。けれども、あの記憶の中で、彼は弟を『アジャニホルト』或いは『アジャン』と呼んでいた。

セレスの物問いたげな表情を読み取り、聞かれる前に傭兵は答えた。

「弟と名前を取り替えたんだ。あいつの遺髪を指輪にして持っていたんだが……いろいろあって無くしちまってな。何もかも無くしちまうのも嫌だったんで、あいつの名を貰った。『アジャン』って

のは俺が弟につけた偽名だったが……本名の『アジャニホルト』よりも、あいつに馴染みのある名前だった。だから、貰ってずっと名乗っている」

「じゃあ、あなたの本名は『アジャン』じゃないのね？」

「ああ」

「本当の名前は何ていうの？」

赤毛の傭兵は不愉快そうに顔をしかめた。

「忘れた」

「忘れた？」

「本名で呼ばれていたのはガキの頃だけだ。ずっと本名を隠してきたし、弟も妹も『兄ちゃん』としか呼んでくれなかったし、な。きれいさっぱり忘れた」

「でも……」

そう簡単に忘れるものだろうか？

忘れられるものだろうか？

追及したかったが、傭兵があまりその話題に触れられたくなさそうだったので、セレスは話題を変えた。

「そういえば、あの魔族、あなたを『シャーマン』と呼んでいたわね」

「……親父が部族の『シャーマン』だったからだろ」

「お父様が？」

「なるほど……あなたの予知能力は血筋でしたか」

突然かかった声の方角に顔を向けると……

疲労困憊といった顔の武闘僧が、弱々しく手を振りつつ歩み寄ってきていた。呪具は浄化できたようで、その口元には満足そうな笑みが浮かんでいた。

「きちんと修行をつめば『シャーマン』になれるのに……傭兵稼業で天賦の才を無駄使いしているわけですね……もったいない……父祖からの贈り物を大切にしないと罰が当たりますよ」

「ケッ！」

知ったことか！という顔のアジャン。
セレスは心配そうに武闘僧へと歩み寄った。
「ナーダ、あなた、顔色悪いわよ、大丈夫？」
近寄ってくるセレスに、ナーダは右の掌をあげ、とどまるように手振りで意思を伝えた。
「大丈夫です。でも、セレス、かすり傷適度の怪我でしたら、しばらくは唾でもつけて治してくださいね。私、当分、魔法を使えそうにありませんから」
ふらふらと、武闘僧がよろめく。魔法を使いすぎて、魔力が枯渇してしまったのだろう。体力もかなり消耗しているようだ。
「それにしても……すごいじゃないですか、セレス、『勇者の剣』を呼び寄せるだなんて」
大地に突き刺さる『勇者の剣』を見て、ナーダがにっこりと笑みを浮かべた。
「なかよしこよしの三人組にはなれませんが……私達、勇者一行として何とかやっていけそうですね？」
その問いはアジャンに向けられたものだったが、傭兵は肩をすくめ、答えずにそっぽを向いてしまう。
代わりに答えたのは、微笑んでいるセレスだった。
「あなた達が協力してくれるのなら……多分ね」

南の斜面の斎場近くで一夜を明かしてから、一行は東を目指し馬を走らせた。
旅の目的地シャイナは、もう間近だった……

希望の光　3話（後書き）

『希望の光』　完。

次回は『旅のはじまり　＊　シャオロン　＊』。舞台はシャイナです。

旅のはじまり　＊　シャオロン　＊　1話

一番最初に見えたのは青い瞳だった……

せつなそうな……
悲しそうな瞳……

泉よりも、尚、澄んだ、それが……

細められ、優しい笑みを形作る。

何か話しかけられる。
けれども、最初、声は意味をなさなかった。ただ笛の音のように綺麗な声だと、ぼんやりと思うだけだった。
しばらくして、『共通語』で話しかけられているのだと気がついた。
『共通語』なんて、隣村の学問所で習ったきりだった。遠くの町まで出れば耳にする機会もあったけれど……こんな田舎では、普段、誰も『共通語』を使わない。
外の国から来た人なのだ……
青い瞳……
白い肌……
金の巻き毛……
白銀の鎧を纏った……女神のように美しい方（ひと）。
「もう大丈夫よ。あなたは助かったのよ」

右手を掴まれたのを感じた。
体が鉛のように重い……
動く気にすらならない……
「私の名前はセレスよ。あなたは？」
やさしく微笑むその顔を見つめていると、冷たい体に生気が戻ってくるような気がした。
自然と口元に笑みが浮かぶ。
「……シャオロン、です」

「そう、シャオロンってお名前なの、よろしくね、シャオロン……
…本当に、もう大丈夫だから……何もかももう終わったから……
…今は眠って……体を休めて」

夢を見た……

夏風邪が村に流行っていた。だから、床（とこ）にふせた家族（みんな）の為に、山まで薬草を摘みに行ったのだ。
いつもは元気な、ヤン兄さん、フェイホン兄さん、ティエンレン兄さん、タオ兄さんも……
働き者の母さんも……
熱が高く……
父さんですら咳こんでいたのだ。シャイナ一（いち）の武闘家の父さんが！父さんが病にかかったのなんて初めて見た！
山で六人分の薬草を摘んでいる時……
ふと空を見ると……
黒い煙が見えた……
山裾の村から煙が立ち上っていたのだ。

火事だ！
父さん！
母さん！
兄さん！
慌てて山道を駆け下りた。
下生えの草や木の根に足をとられ、何度も転んだ。
むちゃくちゃに枝をかきわけ進んだせいで、あっちこっち切り傷だらけだったけど、ただ、走った。
村に近づくにつれ、黒煙がひどくなり、木材が焼ける匂いが濃くなってゆき……
そして……
村は燃えていた……
十軒の家が全て……
赤らかな炎に包まれていたのだ。
オレの喉がふるえる。
何かを叫んでいるんだけど、自分でも何って言ってるんだかわからなかった。
必死に叫んで見回した。
誰か……誰かいないのか？
父さん、母さん、兄さん、テジュン、レン、チュンランさん、リーさん、ウォンさん……
誰か……
家を目指した。
村の一番奥に……
家がある……
オレの家が……
正面の扉から入ると、そこは道場で……
三人組手ができる広さで……
村のみんなが毎日、修練に来ていたそこには……
いつも、父さんが……

父さん……母さん……兄さん……
どうか、無事で……
『まだ生き残りがいやがったのか』
背後からの声……
背に激痛が走り……
血が舞い上がった。
オレは地面に倒れた。
這って逃げようとすると……
何度も何度も……
刃が振り下ろされてきた……
見たこともない……知らない男達が……笑いながらオレに剣を……
『ガキじゃ材料にならねえよな』
『運ぶ必要はない。サリエル様がお望みなのは武闘家の肉体だ。こんな痩せっぽちの子供からでは、何も造れん』
……武闘家？
……父さん？
……兄さん？
皆、無事なのだろうか……？
怖くて、痛くて、たまらなく不安だったのに……
やがて、何も感じなくなった。
死にかけているのだと思った時……
馬の蹄の音が聞こえた。
誰かの怒声が響いた。
女の人が悲鳴をあげた。
誰かが抱き起してくれた。
あたたかな光に包まれるのを感じ……

そこで、全てが真っ暗になった。

目覚めると、又、青い瞳が見えた。
「おはよう」
にっこりと微笑む綺麗な……優しい顔があった。

木漏れ日……
朝の光だ……
鳥が鳴いている……
この女性と森で野宿したのだろうか？体に毛布をかけられている。
でも、何か……変な……
匂いが……

金髪の女性が、改めて自己紹介をした。
「私はセレス。勇者ラグヴェイの末裔……大魔王ケルベゾールドを倒すべく旅をしている者よ。それから」
と、金髪の女性は、右手に控えていた禿頭（ハゲ）の大男を掌で示した。
「彼はナーダ。インディラの武闘僧よ。彼が癒しの魔法であなたの怪我を治癒してくれたの」
「よろしく、シャオロン」
武闘僧が笑みを浮かべ、会釈する。頷きは返したけれども……
頭が、まだ、ぼうとしていた。
「それからあっちで見張りに立っている、背の高い赤毛の戦士がアジャン。私達は三人で旅をしていて」
「セレス」
少し離れた位置に佇んでいる赤毛の戦士が、責めるような顔で女の人を見ていた。
「とっとと話を聞き出せ」
「でも……」
女の人が心配そうに、顔を覗いてくる。

「もうちょっと待って。この子、まだ意識が朦朧としているみたいなの」
「ふん」
近寄ってきた赤毛の男がしゃがみこみ、ぐいっと肩をつかんだ。
「起きろ、ボーズ。しっかり目を覚まして見ろ。おまえの村がどうなったのかを、な」
体を支えられて起こされる。
森の先には……
焼け焦げた大地があった。
瓦礫と炭からなる焼け残った建物の残骸が点々としていた。
それは元の形がわからないほど崩れていたけれども……
その残骸の並び……
地形から……
そこが何処かはわかった。
「火は、そこの坊主が、村に結界を張って真空にして消した」
村にはオレの家を含め、十軒の家があった。父ユーシェンを慕って弟子達が集まって、いつの間にか村になってたんだって前にヤン兄さんが教えてくれた。
そんな昔のことはオレは知らない。オレが物心ついた時から、ここは村だった。皆、半猟半農となって暮らしながら、毎日、父さんの道場で鍛錬を積んでいた。みんな家族みたいだった……デキの悪いオレにもみんなやさしくて……
家族持ちも多かった。みんな、ここに根ざして暮らしていたんだ……
幼馴染もいた。テジュン、レン……すぐ上のタオ兄さんと一緒に冬の間は、オレ達は隣村のインディラ寺院の外房に下宿させてもらって学問所に通っていた。年が近いオレ達は何をするのも一緒だった……
「ここいらを真空にする前に、呼びかけを続け、可能な限り見て回ったんだが」

オレ達は何をするのも一緒だったんだ……
ずっと……
ずっと……

「生き残りはおまえ一人だった」

赤毛の男の声が耳に届いた。

生き残りはおまえ一人……？

では、あの夢は……

夢ではなく……

現実を思い出していたのか……？

走った。
ただ一直線に。
体は多少ふらついたが、迷わず走った。
ひきとめようとする声が聞こえたが、止まる気はなかった。
村の一番奥に……
丘の上に家はある。
そこで生まれ……

そこで育ってきたのだ……

けれども……

そこには、焼け焦げた家の残骸があるだけ。

「父さん！母さん！」

兄さん達の名前も叫んだが、答えはなく……

焦げた匂いを風が運んでくるだけだった……

「シャオロン」

振り返ると金髪の女の人が立っていた。今にも泣き出しそうな悲しそうな顔で。

「ごめんなさい……シャオロン」

そして、ぎゅっと抱きしめてくる。

「ごめんなさい……間に合わなかったの……私達が駆けつけた時には、もう……」

白銀の鎧をが小刻みに揺れていた。

「許して……シャオロン」

オレを抱きしめて女の人が泣きじゃくる。

泣くまいと思ったのに……

『武闘家たる者、何時、いかなる時にも涙を見せてはならぬ』と、教えられ続けていたのに……

涙があふれてきて……

女の人に抱きついて、そのまま泣いた。
声を限りに泣き叫んだ。

「オレ、山に行ってたんで、何があったのかわからないんです。ただ、オレが山から戻った時……」

思い出せる限り、三人に話した。
オレを殺そうとしていた男が口にした名『サリエル様』が首謀者であろう事、その目的は『武闘家の肉体から何かを造る事』だとも話した。
その後、武闘僧がいろいろと質問をしてきた。オレに親類縁者はいないかで始まり（親戚はいないけど、隣村の人達は父さんを拳法の師匠として慕っていたと答えた）、家族や村人の名前や人数、それから信教となった。
「オレの家族はシャイナ教です」
「お弟子やそのご家族は？」
「同じです」
と、答えると、武闘僧はちょっと困ったような顔をして、インディラ僧の私が弔っては死者への礼を欠いてしまいますねえと首を傾げる。武闘僧は赤毛の戦士に視線を向けた。
「この辺に、シャイナ教の神官、居ませんかねえ？」
「……何で俺に聞く？」
「あなたの勘で、どこら辺にいるかパパーッ！とわかりません？」
「わかるかっ！」
「この辺にはシャイナ教の神殿はありません。隣村にあるのもインディラ寺院ですし……もっと都に行かないと無いんです。村での祭礼は全て村長の父さんがやってました。だから……役不足だけど、オレがみんなを送ります」

「シャイナ教の葬式がどんなだか俺は知らんが」
赤毛の戦士は不機嫌そうだった。
「時間をかければかけるほど敵は逃げるぞ、略式でやれ」
「略式……？」
「ああ、シャオロン、アジャンの言うことは気にしなくていいです。葬儀はあなたがやりたいように執り行ってください。ちゃっちゃと終わらせたところで、どうせ敵を追っかけられないんですから」
「え？」
「あのね、シャオロン」
金髪の女性が申し訳なさそうな顔で説明する。
「普通は、多人数で村を襲撃した場合、襲撃者は必ず痕跡を残しちゃうものなのよ。馬の蹄の跡、武器や火薬を運ぶ馬車や荷車の跡、足跡なんかが、地面に残ってしまうわけ。そうゆうものを辿れば、敵がどちらの方角に行ったのかわかるんだけど……不思議な事に、あなたの村の周囲には襲撃者の痕跡が全く無いのよ」
「その上、アジャンが村に残っていた大魔王教徒を皆殺しにしてしまうし……」と、武闘僧。
「うるせえ！ちゃんと一人は口を割らせる為に生かしておいた！それを勝手に舌を噛んでくたばりやがったんだ！」
女の人が溜息をつく。
「敵は移動魔法を使ったのかもしれないし、浮遊魔法を使ったのかもしれないし、巨大鳥のような魔法生物を使役しているのかもしれないのだけれど、その方法を探る手段すら私達には無いの……ごめんなさいね」
「そうなんですか……仇は、もうどこかに行ってしまったんですね」
でも、手がかりはある。
サリエル……
その名を名乗るものが……
「シャオロン……」

女の人が、又、心配そうにオレを見ている。
オレは、今、どんな顔をしてるんだろ？
泣きそうな顔でもしてるんだろうか？
仇を追うのは後だ……
まずは……
「……セレス様？でしたっけ？」
「え？ええ、私の名前はセレスだけれど……」
女の人に頭を下げた。
「命を助けてくださって、ありがとうございました。セレス様と、えっと……」
武闘僧に顔を向けると、やさしそうな笑みが返された。
「ナーダです」
「ナーダ様、癒してくださってありがとうございました。それで、えっと、あちらの方は……」
「アジャンだ」
「アジャン様？」
赤毛の戦士が、きつい眼差しで睨んでくる。
「『様』づけで呼ばれるほど、お偉い身分じゃねえ」
「じゃあ、あの、アジャンさん、助けてくださってありがとうございました。オレ、あのままだったら、絶対、死んでました。今、オレが生きているのはみなさんのおかげです。本当、ありがとうございました。オレまで死んじゃったら、村のみんなを送る人間が居なくなる所でした。みんなの魂が迷わないように、葬ってあげたいんです。それで……すみませんが、少しでいいですからお金を貸してもらえないでしょうか？せめて別れのお酒ぐらいはみんなに捧げたいし、葬礼の舞用の布が欲しいんです。お願いします」

旅のはじまり　＊　シャオロン　＊　2話

シャイナ式の正式な葬儀には、本来、三年の月日が必要なのだと、東国の少年は説明した。月命日や祭礼の日には供え物をして、喪主には死者と対話し続ける義務があった。追悼を怠れば、死者は幽霊に姿を変え、生きている者を迷わす悪しき存在となってしまうからだ。

「でも、事情を話せば、父さんも母さんも村のみんなもわかってくれると思います。オレ、三年もここにとどまれないし……村の最後の生き残りとして……武闘家ユーシェンの息子として、やるべきことをやらなきゃ」

そう言う東国の少年の体は、緊張しすぎているせいか、小さく震えていた。

赤毛の戦士はこの村と懇意だった隣村（馬で数時間かかる距離だが）に向かい、家族と村人の亡骸を探す少年をナーダとセレスは手伝った。

少年は西国風大きなのシャツに腰紐を結び、チュニックのように着ていた。彼の道着が刀傷で破れ血に染まってボロボロだったので、出かける前に赤毛の戦士が『やる』と言って投げてよこした着替えだ。

大柄な戦士の服を着ると少年の手足の細さが、より目立つ。かぼそく、少女めいたやさしい顔立ちの少年。首の後ろで束ねた黒の長髪を風に靡かせ、小さな体は、黙々とやるべきことをやっていた。

異臭がただよう中、焼け焦げた瓦礫をどけ、その下に埋もれているだろう遺体を探している間も……

正視するのが難しいほど変わり果てた、半ば炭化した遺体を見つめている時も……

体型や焼け残った装身具、家の並びから、その遺体が誰であるか推している時も……

少年は無表情だった。

遺体に手を合わせその名を呼んで別れを告げると、又、黙々と瓦礫を片付け始める。

照りつける日差しの中で……

何の感情も浮かんでいない顔で。

生家から母親の遺体が見つかった時ですら、その表情は変わらなかった。

涙も枯れてしまったのだろうか？セレスは胸が痛んだ。

日が沈み、闇に包まれても、尚、少年は村人を探そうとした。セレスに止められてようやく捜索をやめたのだが、その場に蹲ったまま動かなくなった。眠ってしまったのだ。

そんな少年を武闘僧は、焚き火の傍まで運び毛布をかけ、疲労回復の魔法をかけて休ませた。

少年の生家を合わせ三軒の瓦礫を片付けたのだが、見つかった遺

体は四人だけ、女性と赤子の遺体だった。少年の父も四人の兄も、隣家の男性とその息子も、その向かいの家の男性も、遺体はなかった。

翌日、昼前に、少年に頼まれた買い物をしてきた（一升ほどの酒樽と陶器の盃三十、白く細い布。他に少年の着替え用の袍と食糧と飲料水も買っていた）赤毛の戦士が戻り、この村の惨事を聞いて同道を望んだ隣村の者五人を少年にひきあわせた。

村長の息子と壮年の男三人に、若いインディラ僧が一人。

ユーシェンやその弟子は、十数年前、隣村を盗賊団から救っている。隣村にとって恩人であり、格闘の師でもあった。隣村の者達はユーシェン等の死を悼み、シャオロンを慰め、遺体を探すのを手伝った。

インディラ僧も、よるべのない身の上となったシャオロンにいたく同情していた。冬の間、この村の子供は隣村のインディラ寺院に身を寄せ、学問所に通っていた。僧侶とシャオロンは既知の間柄だった。僧侶は、葬儀の後は寺院に来るよう熱心に誘った。

シャオロンは彼等に丁寧に礼を述べたが、隣村に住む事は頑なに断っていた。

「あたたかいお言葉ありがとうございます。でも、オレにはやらなきゃいけないことがあります……みんなの埋葬がすんだら旅に出て、武闘家ユーシェンの息子としてなすべき事を果たします」

と、感情のこもらない声で言い続けていた。

人手が増えた為、日没までに、遺体の捜索は終わった。

村の傍で、セレス達勇者一行は焚き火を囲っていた。少年は隣村の人々と共に少し離れた所で野宿している。インディラ教大僧正候補とエウロペ貴族と同じ火の席には恐れ多くて就けないと、隣村の

者達が固辞したからだ。
セレスは焚き火を見つめていた。
明日、遺体を埋葬し、葬儀を執り行ったら、大人達は隣村へと戻る。けれども、少年は……
「……あの子、一緒につれていけないかしら？」
少年と隣村の人々が、シャイナ語でどんな会話を交わしていたかは、武闘僧が教えてくれた。
セレスは顔をしかめた。
「あんな小さい子が、家族や村人の仇を討つ為に旅に出る気なのよ……放っておけないわ」
「小さい？あいつ、十二だろ？」
呆れたように、アジャンが言う。
「俺は七つの年から親の庇護なしで生きてきたぞ」
「だから、何？放っておけというの？」
「ああ」
「ひどいわ！」
「ひどい？ひどいのは、おまえさんの方だろ？」
「私が？」
「俺は言ったぜ、明日には、ここを離れようってな。善意いっぱいの隣村の奴等が駆けつけてくれたんだ、あの小僧はもう任せちまえともな」
「でも」
「明日までここに残るってのが女勇者様の判断なら、従者の俺は従うだけだ。けどな、大魔王軍に侵略されてるのは、ここだけじゃねえ。まだ大魔王の復活から間もないから魔族の数は少ないが、調子に乗った大魔王教徒どもが各地で暴れてる。都市部や街道の被害はそれほどでもねえが、警備兵すらろくに巡回に来ない田舎の村がどうなってきてるかは……想像できるよな、女勇者様？」
「……」
「おまえがノロノロしてりゃ、それだけ被害が広がる。あのボーズ

みたいな戦災孤児が、どんどん増えてくんだぜ」
「……」
「かわいそうなガキに同情して『何てやさしいのかしら、私は』ってうっとりしたいんなら、まずやる事をやれ。おまえの仕事は世直しだ。大魔王教徒を鎮め、魔族を狩り、大魔王を倒す。その為の旅だろうが」
「わかってるわ！」
女勇者は赤毛の傭兵をキッ！と睨みつけた。
「わがままだってことはわかってる！でも、放ってなんかおけない！あの子が、たった一人で、この村を焼き討ちした仇に挑む気なのよ！何人いるんだか何十人いるんだかわからない組織を相手にするのよ！しかも、手がかりは首謀者格の男の『サリエル』って名前だけ！無理よ！あの子、仇に行きつく前に死んでしまうわ！」
「見るからに腕力のなさそうな細い腕ですものねえ、あの子。武闘家ユーシェンの五男とは思えないほどに。まあ、足は速かったですけど」
と、ナーダ。
「シャイナ一（いち）と称えられていたユーシェンの御名は、インディラにも伝わっていました。シャオロンのお父上は、皇帝の御前試合で百勝しただの、シャイナ中の猛者の集まる武術大会で十連覇しただの、武勇談の多い方で……しかも、五爪からなる聖なる武器『龍の爪』の所持者でもありました。そのユーシェンを討ち取ったのです、敵は相当な手練れでしょうね」
「ええ……そうね、そうだと思うわ。だからこそ、私達が手助けしてあげるべきだわ……あの子が仇を討つまで」
「あの子の境遇にあなたが心を痛める気持ちもわからなくはないんですが……」
武闘僧は重々しく息を吐いた。
「でも、セレス、一緒に仇を討つという事は、あの子におぞましい真実をつきつける事になります。敵があの子の父や兄達それに村の

男性の方々の肉体を何の為に集めているのかを……或いは利用された結果を、あの子に見せたいのですか？」

「……」

「魔族はこの世に現れる時、地上に存在する何かに憑依します。草木、花、岩、水、鳥、獣……そして、時には『人間』……武闘家の肉体を運んだ理由は、その肉体に魔族を下ろす為に、ほぼ間違いないでしょう。魔人となり果てた家族とあの子を再会させたいのですか？」

「……」

「私達がなすべき事は、あの子の仇討ちを助ける事ではなく、仇討ちを諦めさせる事じゃないんですか？」

「その通りだ。あのボーズにゃ、俺達が仇をとってやるって言って、残らせりゃいい。シャイナ式の葬儀が三年かかるのなら結構じぇねえか、ここに留まらせる理由になる」と、アジャン。

「隣村の方々に、私からもお願いしておきましょう。大丈夫です、インディラ寺院は他宗教の信徒にも寛容です。あの子が一人立ちするまで寺が庇護しますよ」と、ナーダ。

セレスは言葉をのみこみ、うつむいた。

二人の言うことが正しいとわかってはいた。が……

目を閉じれば、昼間の少年の姿が甦る。感覚がマヒしてしまったかのような無表情で、親しい者達の亡骸を一心に求める少年の姿が……。

夕方になり、昼間のぎらつくような日差しが嘘のように弱まり、穏やかな風が吹き抜けてゆく。

蝉が狂ったように泣いている。森から山から蝉の命の詩が響いている。

大人達は村の瓦礫を片付け、今夜の葬礼の舞のための場所を開けていた。
村の墓地にいるのは少年だけだ。
セレスは、一人、少年の元に向かった。
シャオロンは母親の墓の前で手を合わせていた。
見つかった十二の遺体は隣村の者の手を借りて、全て埋葬した。
墓地とされていた場所に……。シャオロンの父がこの地に移ってから生まれた新しい村には、今まで墓は二つしかなかった。老爺と生まれてすぐに亡くなった赤子の墓、その傍に十二の新しい墓が作られたのだ。
シャオロンの母親と、村の女性達、隣家の赤子、幼児に、シャオロンの幼馴染のテジュンとレン。
遺体は、女子供ばかりだった。
全ての墓の前には、酒で満たした小さな杯が置かれている。別れの盃だ。
「シャオロン」
セレスの呼びかけに、後ろで束ねた黒の長髪をなびかせ、少年は振り返った。小鹿のようなつぶらな瞳、やさしそうな眉……顔には幼さが残っているが、この三日で頬はやつれ、ほんの少し大人びた印象になった。
「今、少しいいかしら?」
少年は小さく頷いた。
セレスはしばしためらい、それから口を開いた。
「お葬式は、今夜の鎮魂舞までしょ?明日には私達は旅立つし、隣村の方も村に戻られるのよね?」
「……はい」
「シャオロン、あなた、隣村の方達についていった方がいいわ」
「……」
少年の黒の瞳が真っ直ぐに女勇者を見つめる。
「あなたの無謀を誰も喜ばない。隣村の方々も、私達も……亡く

なったご家族や村の方も、あなたが強く生きていく事を望んでいるわ。亡くなった方の分も……あなたは生きるべきだわ」

「……」

「隣村に住んで、この村の方達の魂の安息を祈ってあげなさい。ね？」

「いいえ……」

少年は静かに答えた。

「オレ……行きます」

何の気負いも感じられない、淡々とした声だ。

「オレ、みんなの仇を討たなきゃ……」

「……」

「オレなんかじゃ、返り討ちにあっちゃいそうだけど……このままじゃ、絶対、駄目なんです……」

「……シャオロン」

「父さんが亡くなった今……オレがこの村の村長です。務めを果たします」

「……あなたの村を襲ったのは、ただの野盗じゃないわ。大魔王教徒よ。その背後には魔族がいるかもしれない」

「敵が誰でも……オレ、戦います。みんなの無念を晴らさなきゃ」

「……」

「オレがちゃんとしなきゃ……だって、母さんが……母さんが見てる。『おまえならできるよ』っていつも言ってくれてたんです……オレみたいなデキの悪い奴に、いつも、いつも……あきらめなきゃ、できるよって……」

「シャオロン……」

「テジュンはおっちょこちょいだけど、いつも明るくてよくオレを励ましてくれた……レンは頭がよくって、次の春に上の学校に行くはずだった。医者になるんだって、みんなのために……チュンランさんはこの春に赤ちゃんが生まれたばかりでとても喜んでたのに……その小さな赤ちゃんまであいつらが……」

少年は泥だらけの拳をぎゅっと握りしめた。
無表情だった顔に微かに感情が戻る。
瞳の奥に炎が宿る。
激しい怒りのままに。
「絶対、許さない……死んでもいい……命なんかいりません……仇さえ討てれば……」
「その事なんだけど、シャオロン……仇討ち、私達に任せてくれないかしら？」
少年が大きく瞳をひらいて、見つめてくる。セレスは胸の痛みを感じた。
「大魔王教徒や魔族を討つのが私の役目。勇者としての私の義務よ。私は非道を許さない。サリエルは必ず倒すわ。あなたの村の仇は絶対、討つわ。だから、あなたは」
「セレス様……」
少年は瞳を凝らして、女勇者を見つめている。すがりつくように……
「オレも一緒に連れて行ってください……」
「シャオロン……」
「何でもします……どんなおいいつけでも果たします……だから……だから、オレに」
少年の顔がくしゃっと歪む。
顔中を歪め、涙を浮かべ、少年は叫んだ。
大きな声で。
感情のままに。
「仇を討たせてください！どうかお願いします！お願いします！」
土下座し、少年は地面に頭をなすりつけた。そして、何度も何度も同じ言葉を叫ぶのだ。
「オレに仇を討たせてください！お願いします！」
慌ててセレスは少年の肩に手をあて、顔をあげさせた。少年はポロポロと涙を流していた。

「オレ……たぶん、おそばにいても、何のお役にも立たないと思います……昔から、オレ、すごく腕力がなくて、その上、気が弱くて、父さんから『武術の才なし』って見捨てられてたんです。走り回ったり体を動かすのは好きだけど、殴り合う武闘は性に合わなくて……父さんの不肖の息子でした。なんで、オレが、オレなんかが一人だけ……兄さん達の方が、ずっとずっとシャイナ一の武闘家の跡継ぎにふさわしかったのに……」

「シャオロン……」

「でも、もうオレしか居ないんです！オレが父さんの跡継ぎ！この村の村長です！オレがみんなの仇を討たなきゃ！」

「……」

女勇者は、ゆっくりと瞼を閉じた。

シャオロンの姿は、悲しいほど昔のセレスに似ていた。

女に生まれた自分を卑下し、筋力の弱さを嘆き、穢れた女と嘲笑われ、『勇者の剣』を持たぬ名ばかりの勇者と陰口をたたかれ……

でも、それでも……

勇者にふさわしい人間になりたい、と……不可能とわかっていても望まずにはいられなかった彼女に、少年はそっくりだった。

セレスは瞼をあけ、少年に微笑みを見せた。

「わかったわ、シャオロン、一緒に行きましょう。それで、旅をしながら、武闘家としての鍛錬を積みなさい。自分で自分を恥じてばかりいては駄目よ。自分で自分を誇れるような、自分が自分を大好きになれるような……そんな人間になるのよ。私も及ばずながら力を貸すから」

「セレス様……」

「つらい旅になると思うわ。構わない？」

「はい！」

少年は再び、セレスに向かい、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます！セレス様！オレ、一生、セレス様のために働きます！」

「馬鹿か、おまえは！俺はあの小僧を隣村に置いていけと言ったんだぞ！」
「何とでも言ってくれて結構よ！私があの子を連れて行く！私の馬に乗せてあげるし……戦闘になったら、私があの子を守るわ！」
「守るぅ？誰が誰を？」
「私がシャオロンを、よ！」
「寝言は寝てからほざけ！」
「何ですって！」
「お静かに……」
怒鳴り合うアジャンとセレスの間に、武闘僧が割って入る。
「そろそろ準備が整ったようですよ。これからシャオロンが葬礼の為の鎮魂舞を舞うんです。口をつぐまねば、死者への冒涜行為になりますよ」

三日月の夜、所々に篝火を焚いた村の跡地で……
袍を着て白い肩巾（ひれ）をかけた少年が、一歩、一歩、一定のリズムで踵で大地を踏みしめ進んでゆく。背中をしゃんと伸ばし、時には肩巾（ひれ）を振り、両手と顔の向きだけで全てを表現している。観客を意識した商業的な踊りとは、明らかに一線を画している。非常に宗教色の濃い、大地に根ざした踊りだ。
大人達は少年の踊りを見守って、篝火の傍に座していた。インディラ教を信仰している隣村の者達は、ずっと手を合わせ死者への礼を尽くしていた。
彼等とは少し離れた所に、勇者一行は座っていた。
女勇者セレスは、少年の踊りを静かに見つめていた。死者を悼む少年の胸中を思いやりながら。
その隣の武闘僧ナーダは、少年の凛とした動きに感心していた。

武闘家としての技量は低そうだが、舞踏家としての素質には間違いなく光るものがある。

その横で赤毛の戦士アジャンは、あくびを噛み殺していた。

ナーダは、死者への礼を欠片も示さない赤毛の戦士を不快に思っていた。しかも、傭兵は途中から大きく動くようになったのだ。しきりに耳を叩き、きょろきょろと周囲を見回し、いぶかしそうに頭を傾げて、と。

武闘僧は赤毛の傭兵を糸目で睨み、小声で諫めた。

「アジャン、きちんと座ってください。今、葬礼の最中なんですよ、失礼です」

「……楽の音が聞こえる」

「は？」

武闘僧は耳を澄ました。が、とりたてて何も聞こえなかった。

「どんどん音がでっかくなってきやがる……どこで鳴ってるんだ？」

少年が体の向きを変えて右手で大きく肩巾を振ると、赤毛の傭兵は両耳を押さえ、うるさそうに顔をしかめた。

「アジャン、あなた、まさか……」

「誰……だ？耳元でしゃべってるのは？」

武闘僧は眉をしかめ、赤毛の傭兵を見つめた。赤毛の傭兵は非常に即物的な性格をしているのだが、異常なほど勘が良い。『シャーマン』であった父の能力を継いでいるのだ。しかし、傭兵稼業に身をやつしている彼はそっち方面の才能を伸ばす気が全くなく、天賦の才を腐らせていた。

けれども、今、死者に捧げるシャオロンの踊りがきっかけとなって、眠っている才が動き始めたようだ。

「東だと……東のどこだ……？」

ぶつぶつとつぶやいてから、赤毛の傭兵はふらりと立ち上がった。

「アジャン？」

セレスも何事？と傭兵を見上げる。

傭兵は両の瞼を閉じたまま、右手を水平にあげる。二の指で東の彼方を指し、彼のものではない厳かな声を張り上げた。シャイナ語だった。

「隣国ジャポネへ行け……シャオロンよ」

少年が、隣村の大人達が、驚いて赤毛の傭兵を見つめる。アジャンが発した声は、彼らにとって馴染み深い人の声だった。

「わしが守っていた『龍の爪』は魔族に奪われた。ジャポネの霊山の麓の湖『龍神湖』へ行け。そこには、わしのものと対をなす左手用の『龍の爪』が眠っておる。試練を乗り越え、『龍の爪』の所有者となるのだ。さすれば、いずれ右手の爪を持つ者が、おまえの前に現れよう。その時こそ、わしらを卑劣な策で滅ぼした奴に、おまえが天誅を下す時」

「あ……」

少年は肩巾（ひれ）を握りしめ、傭兵に向かって叫んだ。

「父さん！」

「わしらの霊魂は天に昇る。我らの肉体が幽鬼となろうとも、惑わされるな。穢れしものは土へ返せ。ゆめゆめ忘れるでない」

「はい……わかりました、父さん」

赤毛の傭兵は、彼らしくない老成した笑みを浮かべた。

「勇者殿、愚息をお願いいたします」

シャイナ語がわからないセレスはきょとんとしていたが、武闘僧から事情を耳打ちされ、慌てて死者に答えを返した（共通語でだが）。

「はい！責任をもってお預かりいたします！」

「わしらの肉体を奪ったのは、余禄にすぎぬ。魔族の真の目的は聖なる武器の収集……気をつけられよ」

赤毛の傭兵は、がくんと頭を垂らし……

それからハッ！と顔をあげた。

「あん？」

セレスもナーダもシャオロンも隣村の人々も、皆、赤毛の傭兵を

見つめていた。中にはありがたそうに手を合わせている者すらいる。全員の注目を集めている事に、アジャンは、ただ戸惑うばかりだった。

「何で、おまえまでシャオロンを連れてくのに賛成なんだ?隣村の奴等も、コロっと態度を変えやがって。何が、がんばって仇討ちをしてこい、だ!ひきずってでも、シャオロンを隣村に連れてくんじゃなかったのか?」

武闘僧は溜息をついた。赤毛の傭兵は憑依されていた間の記憶が無い。この頑固な男を納得させるのは難しそうだ。

「言ったでしょ、シャオロンのお父上の霊とあの子を連れて行くと約束しちゃったんだって。破ったら祟られますし、あの子の仇討ちはこの辺一帯の総意になってしまったんです」

「霊?そんなモノ、ほいほい現れるか。交霊や降霊は、それなりの儀式や魔法があってこそだろ?俺は今まで戦場で死骸をさんざん見てきたが、一度も、幽霊なんぞ見たことない。魔族が死骸を利用するところならあるがな。だいたい、」

(あああ、嫌だ、嫌だ!自覚のないシャーマン体質なんて!シャオロンのお父上に現実との接点を与えたのは、あなたでしょうが!)

傭兵はしつこく幽霊の非現実さを説いている。武闘僧は両耳を両手で塞ぎ、傭兵を無視することに決めた。

翌日、勇者一行は、隣村の人々に送られ、シャオロンが生まれ育った村を後にした。

まずは近隣の街へ行ってシャオロンの旅支度を整えてから、世直しの旅に向かう。シャイナで大魔王を倒したとしても、その後、少年の為にジャポネに向かう事をセレスは決めていた。

セレスと同じ馬上から、東国の少年は一度だけ故郷を振り返り…

……以後、ただひたすら前を見つめた。
見つめ続けていた……

旅のはじまり　＊　シャオロン　＊　2話（後書き）

『旅のはじまり　＊　シャオロン　＊』　完

次回は『あなたがいれば』。舞台はシャイナ。シャオロンから見た勇者一行の話です。

あなたがいれば　《セレス》

女勇者セレス様。
とてもお美しくて、おやさしくって、お強くって……
オレがこの世で一番、尊敬している方です！
セレス様は本当は『こーしゃくれーじょー』という貴族のお姫様なんだそうです。でも、この世を救う為、男の人みたいな鎧を着て旅をしているのです。
大魔王は『勇者の剣』でなきゃ倒せません。その剣を振るえるのは、セレス様だけなのだとか！

だけど、セレスは女の方なので、『勇者の剣』を思うように扱えないのだそうです。
普段、『勇者の剣』はナーダ様が背負っておられます。『勇者の剣』はナーダ様にはものすごく軽いのに、セレス様にはアジャンさんを担ぐのより重いのだそうです。
でも、それでも、セレス様は、毎晩、努力しておられます！重たい『勇者の剣』を扱えるようになろうと、アジャンさんとの剣の稽古を欠かしません！
本当に、えらい方です！

「お待ちもうしあげておりました、女勇者様……」
と、村長と村人達に深々と頭を下げられた者は……
自分を指さし、『女勇者とは自分に対して言っているのか？』と

目で尋ねた。たいへん大柄な人物で、シャイナ人の老村長とは大人と子供ほど身長差があった。頭を上げた村長が力強く頷きを返すと、その者は青ざめ、右手で顔の半分を覆った。

「どこをどー見たら、筋骨逞しいこの私が女に見えるんです……そんなわけないでしょ！」

ああああああ、おぞましい！と言いたいところをグッと堪え、武闘僧ナーダは顔を伏せた。

「失礼いたしました。お人違いをして申し訳ございません」

と、村長が次に頭を下げたのは……まばらに無精髭を生やした赤毛の傭兵アジャンだった。赤毛の戦士も、ぴくぴくと頬をひきつらせている。

「気色悪いことぬかすな！」

「おや、ですが、そうなると……どなたが？」

「勇者ラグヴェイの末裔は私です！」

落ち込んでいる武闘僧と、怒り爆発寸前の赤毛の戦士を押し退け、セレスが村長の前に身を乗り出す。

村長は白銀の鎧姿の金髪の少女に視線を向け、いぶかしそうにその背の弓矢と腰の小剣を見つめた。

「あなた様が女勇者様？ですが、『勇者の剣』はどこに？身長ほどもある大きな大剣を背負う者こそ勇者だと、私は幼い頃から昔話に聞いておりましたが？」

「ゆえあって、『勇者の剣』はそちらにいる武闘僧に預けているのです。でも、勇者として魔族と戦う覚悟は、歴代勇者様に負けていません！魔族の事でお困りとの噂を聞いてやって来ました。何なりとご相談ください！」

しかし、セレスを見つめる村長の目は冷たい。ざわめく村人達も、あからさまに不審のまなざしを向けてきている。

赤毛の戦士は不機嫌そうな顔で、仲間にしか聞こえないほどの小声で吐き捨てるようにつぶやいた。

「ンな気分悪い村は無視して、先に行こうぜ、先に」

「おや、珍しいですね、アジャン、あなたと意見が一致するなんて」
武闘僧もボソボソとセレスに話しかける。
「村長さん、私達をカタリだと思ってますよ。心を開いてくださる気もないようですし、助けるだけ無駄じゃ」
セレスは二人をキッ！と睨みつけた。
「魔の危機に瀕している方々を無視しろって言うの？一人でも多くの方を救うのが私の務めでしょ！私は勇者としての使命を果たすわ！」
「ですが、セレス……」
「相手にどう思われようが構わないわ！魔族を倒すのは、人々から感謝されたいからでも、謝礼が欲しいからでもない！私は誰にも、私のせいで死んでもらいたくない！私が何もしない為に人が死ぬのは、絶対に嫌よ！」
赤毛の戦士と武闘僧は顔を見合わせ、やれやれと肩をすくめた。

その時、シャオロンは……
感動のあまり泣きそうになりながら、セレスを熱い瞳で見つめていた。自分を侮る者すら見捨てず、セレスは正義の為に戦っているのだ。
（すごい！さすがです！セレス様！）
うるうると瞳をうるませながら、シャオロンは考えた。旅の途中、セレスが女性であるという理由だけで侮る男達を見た。何度も見た。そして、今、『勇者の剣』を背負っていない為に、勇者の偽者と思われているのだ。セレスが辱められるのは、自分が侮辱されるよりも百万倍、悲しかった。
世の人々に、セレスの素晴らしさを理解してもらうにはどうすればいいのか？
シャオロンは頭をひねった。
何の役にも立たない子供を従者にとりたててくださった恩を万分

の一でもお返しするのだ！と、シャオロンは真剣に考え……
良い案を思いついた。

昼間のうちにシャオロンは、村長宅の武闘僧ナーダ用の部屋に相談に行った。魔族は夜遅くに、村はずれにある村長の父祖の墓の辺りを徘徊しているのだそうだ。夜になる前に相談を終わらせようと、少年は思いつく限りのことを懸命に語った。どちらかというと口下手な方なので、うまく説明できなかったが。

しかし、武闘僧は笑みを絶やさず聞いてくれ、説明不足の時は言葉を補って彼なりの解釈でこういう意味か？と質問までしてくれるので、話しやすかった。

「とてもよくわかりました。素晴らしい策ですね、シャオロン。あなたが策士だったとは、本当に意外です」

「『さくし』？」

「策士とは謀のうまい人の事です」

「『はかりごと』……？オレは、ただ、単に、村長さんにお願いしようと思っただけです。でも、オレみたいな子供が言うより、ナーダ様のお言葉の方が説得力があると思ったから、それで」

武闘僧は得意そうに胸をそらせた。

「その通りです。人選も正しい。セレスやアジャンではなく私に相談したあたり、センスも良いですよ」

「はあ」

「後は任せてください。交渉は私の得意分野です」

ナーダは日が沈む前に、村長と内密に面談して魔族退治の報酬について交渉し、諜報員の部下と鳥で連絡をとった。

そして……何も知らない女勇者は従者達と共に、その夜のうちに、村長の父祖の墓を穢していた魔族を退治したのだった。

で、一月後……勇者一行は、シャイナの首都ペクンを訪ねたのだが……

シャオロンは初めての大都会で、その大きさに驚き、建物の高さと豪華さと数の多さに驚き、人の数に驚き、そして、流行りものに驚いたのだった。

「すごい！すごい！あっちこっちセレス様の姿絵（ポスター）だらけですよ！ほら、本屋さんも！」

「『女勇者セレス　悪霊鎮魂編』？『女勇者セレス　早春、旅立ち編』？なに、これ？」

セレスは下馬し、露店の本屋の共通語の本を手に取って目をぱちくりさせた。同じ表紙のシャイナ文字で書かれた本も山積みになっている。

「セレス様！あっちでは、セレス様が村長さん家（ち）のお墓を守った事件がお芝居になってますよ。チラシがあります、ほらほら、血わき肉躍る冒険活劇なんですって！」

ペクンでは、すっかり女勇者ものが流行だった。彼女の活躍が、芝居や詩歌、本になってあふれていた。

ふと気づけば、一行の周囲を本を手にしたシャイナ人達が囲んでいた。顔を真っ赤にし早口のシャイナ語で話しかけてくる彼等に、セレスは戸惑うばかりだった。

「みなさん、何て言ってるの？」

「『女勇者セレス様か？』って尋ねてらっしゃいます、『本物か？』って」と、シャオロン。

セレスが頷きを返す前に、馬上の武闘僧がにっこりと笑みを浮かべシャイナ語で何かを叫び西を指さし、群衆を散らしていた。

「え？え？え？」

シャイナ語のわかるシャオロンは不思議そうにナーダを見つめている。セレスは武闘僧に尋ねた。

「何て言ったの？」
「『旅の一座です、三日後に公演いたします、チラシはあちらで配っておりますのでどうぞよろしく』です」
「はぁ？」
「馬鹿正直に名乗ったら、書責（サイン）めにあって動けなくなります。まずは、どこかの宿に落ち着きましょうよ。王宮にも連絡しなきゃいけないし」

「どういうこった、これは？」
宿屋の武闘僧の部屋で、赤毛の戦士がジロリと僧侶を睨みつける。
「おまえ、何しやがった？」
「私の策ではありません。シャオロンの策ですよ」
ナーダはおもしろそうに笑っている。
「あの子、魔族や大魔王教徒退治の暁には、被害者に『セレス様のおかげで助かった』と、声高に言って欲しいと考えたんです。セレスがいかに強く美しく優しかったかも、ね。で、私はシャオロンの策に則って、この一月、我々の働きへの報酬として被害者の方々にセレスの宣伝をお願いしてきたのです。セレスの評判は噂が噂を呼んで膨らんで……今、ペクンですごい事になっています。ここは流行の発信地ですからね、じきにシャイナ中、いえ東国中に広まるでしょう。最初は私も人気を煽る為に、詩歌を作らせたり芸人を雇ったりしてたんですがねえ。今やってるのは『女勇者セレス』シリーズの版元に最新情報を流すくらいで、後のお祭り騒ぎはノー・タッチですよ」
「こんな事して何の意味がある？」
「地道に続けていれば、セレスの評判が高まります。なにしろ、女勇者ですからね。最初から世の期待は薄く、評判も地を這っています。セレスが人気者になれば、私達も、もっと活動しやすくなると思うのですが？」

赤毛の戦士は扉をかすかに開け、向かいの部屋の様子を伺った。
セレスの部屋の前にはこの宿の客やら使用人やらが、集まっていた。物見高い性（さが）のシャイナ人達はそれぞれ自分だけでも女勇者に会おうと、がやがやと騒いでいた。
「群衆に囲まれちまったら、護衛どころじゃなくなる。あの女、暗殺者に刺されるぞ」
「大丈夫ですよ」
武闘僧はしれっと答える。
「じきに王宮から迎えが来ますから。一般大衆はセレスに近寄れなくなります」
「……なんでわかる？」
武闘僧はにっこりと笑った。
「この国の大臣の間でも『女勇者セレス』シリーズは人気ですし、皇太子殿下の西国語の教師も通俗小説の愛読家です……確たるところから得た情報です」
「ケッ！」
赤毛の戦士は肩をすくめた。
武闘僧のアレンジが入ったとはいえ、被害者を利用してセレスの評判を高めようとしたシャオロンの発想は悪くない。
だが……
「すっごい人気ですね！やっぱ、セレス様はすごいです！」
セレスの部屋から、興奮しきっている少年の声が響く。
素質はあるのかもしれないが、素直すぎるあの性格では策士など無理だ。
アジャンは笑いを堪え、口元を押さえた。

あなたがいれば　《アジャン》

アジャンさんは……

赤毛の戦士とか、赤毛の傭兵と、よく呼ばれます。本当に見事な赤い色の髪です。炎みたいな色ですねって言ったら笑われちゃったけど。

最初は気むずかしいおっかない人かと思ったんだけど、とても親切な、やさしい方です。ケンカの仕方とか、体術とか、旅のコツとか、馬の世話や手入れ、獣のさばき方、それにバクチとかワイダン（よく意味がわからないんだけど）とかいろいろ教えてくださるし……

セレス様やナーダ様とは、しょっちゅう口ゲンカしてるけれども……

オレ、知ってます。アジャンさんは、ひねくれたしゃべり方が好きなだけだって。

仲間の誰かが危機とわかると、アジャンさん、すっごく真剣な顔で助けに行くし……

本当は、セレス様やナーダ様のこと、好きなんですよね、アジャンさん。

「又、娼館に行くの？街に着く度に行くのね」

「抜かなきゃ、体に悪い」
「下品ね！」
「セレス、放っておきましょう。アジャンは淫らな獣欲を娼館へ行かなきゃ処理できないのです。ここで娼館通いを禁止しようものなら恐ろしい事になりますよ」
「恐ろしい事？」
「行き場のなくなった性欲が鬱屈し、性犯罪に走るとか」
「おい」
「行き場のなくなった性欲が暴発し、漏らしちゃうとか」
「するか！」
「行き場のなくなった性欲が暴走し、セレスを襲うとか」
「それだけは絶対にない！」

（……）

シャオロンは小首を傾げていた。
時々、三人の言葉（共通語）は、さっぱりわからなくなる。専門用語が多くなりすぎると、まったくわからないなあ、と。

あなたがいれば　《ナーダ》

ナーダ様は『じきだいそーじょーこうほ』で、とても身分の高いインディラ僧です。オレの隣村のお坊さんも『ごそんがんをはいえつし、きょうえくしごく』って感激してたし、ペクンのお坊様も『ほんらいなら、しもじものものとは、まじわるきかいすらない、たっといおかた』なんだって教えてくだすったし……

えっと……すっごく偉いみたいです！

ペクンでは、ナーダ様のお供の役をしてインディラ寺院に行きました。すごく大きな建物がいっぱいあって、神像もいっぱいあって、お香が焚かれていました。隣村の寺院もけっこう大きいと思ってたんだけど、ペクンのは比べらんないほど大きくて、お坊様がいっぱいいました。みんな、ナーダ様に拝礼するんで、びっくりしました。

ナーダ様は、とても物知りで、いろいろためになる事を教えてくださいます。

それに、格闘技も手取り足取り教えてくださいます。ナーダ様は兄さん達より、ずっとずっとお強いです。もしかしたら、父さんと同じくらいお強いのかも。武闘の型がぜんぜん違うので、はっきりとはわからないけれど。

野宿の、焚き火を囲んでの、さびしい夕食の時間のことだった。

「旅に出た理由？」
と、尋ね返すセレスに、シャオロンはにっこりと笑みを見せた。
「はい。ぜひ、みなさんのお話をうかがいたいんです」
「私はもちろん世直しの為よ。でも……」
セレスはちらりと視線を赤毛の傭兵に向けた。その視線を感じながら、アジャンはフンと鼻を鳴らし、
「金と名声の為だ」
と、虚飾なく、きっぱりと答える。
そう言われても、シャオロンはショックを受けた様子もなく、そうなんですかと、にこにこと笑っている。どうも少年は傭兵の言葉を額面通りに受け取らず、頭の中で好意的に解釈し直して理解しているようにみうけられる。
「ナーダ様は？」
「私も世直しの為ですね」
と、武闘僧が答えると、女勇者と赤毛の戦士が驚いてぎょっと目を丸める。
「え？そうだったの？」
「見栄をはるなよ、クソ坊主」
「見栄なんてはってませんよ」
乾燥しきった固いパンを食べながら、武闘僧は言葉を続けた。
「中庸の精神を貴ぶ私達インディラ僧には、この世の均衡を崩す魔族は忌むべきもの、滅ぼすべきものなのです。セレスの従者とならなければ、私はインディラで魔族と戦ってましたよ」
「ふぅん」と、セレス。
「でも、じゃ、どうして、あなた、従者になったの？従者にならなくても戦えるのなら、無理に私に付き合わなくても良かったんじゃないの？」
「初対面の時に『勇者の従者になんかなりたくなかった』って言い

きってたもんな、おまえ」と、アジャン。
「ええ、そうなんですよ」
ふーっと、ナーダは溜息をついた。
「できればインディラで大僧正様の下にずっといたかったのですが……私、優秀すぎるもので……」
「は？」
「大僧正様から勇者の従者になるよう、直にご命令をいただいてしまったのです。勇者の従者になるのは最も力のある修行僧に課せられる使命……ある種の名誉職なんです。始祖バラシンの昔から、勇者の傍らには必ずインディラ僧が居ました。勇者の従者となるのは、インディラ僧侶の由緒正しい伝統。だから、大僧正候補という身分の高さに加え、学問も魔法も武術も容姿も性格も申し分のない私が選ばれてしまったというわけです」
「……」
「あああ、もっと何事にも手を抜いておくんだった！大僧正様からお褒めのお言葉をいただきたい一心で、学問も武術も全力を尽くしすぎたが為に、大僧正様のお膝元を離され、こんなドサ回りの境遇に堕とされようとは！」
「……悪かったわね。私ごとき女の従者になんかなっていただいて」
セレスはプンプン怒りながら、干し肉を口にした。
「それじゃあ、ナーダ様は、今、ご不幸なんですか？」
しょぼんとした顔で、シャオロンが尋ねる。
「オレ、ナーダ様にいろいろ教えてもらえて、とても嬉しく思っていたんですけど……ナーダ様にとって旅が嫌なものならば、オレなんかといるのも」
「あ、いや、それは、そのぉ」
武闘僧はうろたえた。
「嫌々、始めた旅ではありますが……寺院にいてはできない経験もできましたし……そのぉ、今ではあなた方と一緒に見聞を広め

るのも悪くないかと思っていますよ」
「本当ですか？」
少年の顔がパッと輝く。
「はい」
「良かった！オレ、セレス様もナーダ様もアジャンさんも大好きです！みなさんと旅ができて本当に幸せです！」
シャオロンがそう言うと、セレスとナーダは微笑み、ひねくれ者の傭兵でさえ口元を微かに緩めるのだった。

あなたがいれば　《カルヴェル》

大魔術師カルヴェル様は……
セレス様の神聖魔法のお師匠様で『とーだいずいいち』のすごい魔法使いなのだそうです。

今からうん十年前、セレス様のおじい様の十二代目勇者様の従者をつとめられたご立派な方なのだとか。

えっと……

あとはよく知りません……

お会いしたことがないので……

セレスは窓から外を眺め、溜息をついた。宿屋の外はすごい人だかりだ。女勇者を一目見ようと、或いは掛け軸や本に書（サイン）をもらおうと、町中の者が押しかけているのだ。
このところ、何処の村や町に着いても、こうなのだ。正体がバレないよう全員フードマントを被って旅をしているというのに、女勇者が何処から何処へ向かっているのか情報が流布しており、隠して

もすぐに正体が知られてしまう。熱烈な追っかけでもいるのだろうか？

歓迎してもらえるのは嬉しいのだが……キャーキャー黄色い声をかけられたり、『髪の毛ください』とか『ツメをください』とか『下着をださい』とか頼まれるのは……何か違う気がする。

「すごい人気じゃのう、セレス」

背後からかかった声に振り返ると、そこには、白髪、白髭の黒のローブの老人がいた。

「お師匠様！」

突然、移動魔法で現れた老人。さほど驚いた様子もなく、セレスは笑みを浮かべ、師に対し礼をとった。

「シャオロン、こちらが当代随一の魔術師、私の魔法の師のカルヴェル様よ」

「はじめまして、シャオロンと申します」

「うむ」

老人は目を開き、ジーッと少年を見つめた。体も手足も細く、幼さの目立つ愛らしい顔をしている。武闘家の道着と不釣り合いなほどに。

「親父殿にはあまり似ておらんが、よい骨相をしておる。見るからに人徳が高そうじゃ」

「……父さんをご存じなんですか？」

「うむ。茶飲み友達じゃ。ユーシェン殿はシャイナ一の武闘家でありながら、決して驕る事なく鍛錬を続けた気持ちのよい男であった。あれこそ真の武闘家よ。まことに惜しい男を亡くした」

「ありがとうございます……そのお言葉をいただけて、うれしいです」

亡くした家族・友人・知人を思い出したのか、少年の表情にほんの少し陰りがさす。魔族に奪われた父親達の肉体の行方も気にかけ

ていることだろう。けれども、少年は、すぐにきりりと眉をひきしめた。落ち込んでいる暇などないと言うかのように。
「カルヴェル様、オレ、村での父さんしか知らないんです。よろしかったら昔のこと、教えてくださいませんか？」

「二十五年前、ペクンでの武術大会のことであった……」

「そして、二十二年前、わしが聖なる武器を探しておった時、協力してくれたのが……」

「二十年前、ユーシェン殿に長子が生まれて……」

「おい、シャオロン、そこに居るか？体術の稽古の時間なんだが……」
セレス用の部屋の扉を開くなり、アジャンは嫌そうに顔をしかめた。セレスの部屋に、あやしい老人が居たからだ。
「ジジイ……どっからわいて出やがった」
「ホホホホ、久しぶりじゃの、赤毛の傭兵」
「あ！すみません、アジャンさん！オレ、うっかり時間忘れてました！ごめんなさい！今、支度します！」
「今、シャオロンに親父殿の話をしておったのよ。わし、ユーシェン殿とは茶飲み友達だったので、の」
「親父の話……か」
赤毛の傭兵はボリボリと頭を掻いた。約束を忘れられたというのに、怒っている様子はない。
「シャオロン、今日はやめだ。隠居ジジイなんてのは、昔語りぐら

しか能がねえ。つきあってやれ」
「アジャンさん……」
「ただし、寝る前には昨日までの復習をしとけよ」
「はい！わかりました！」
赤毛の戦士の視線は、その部屋にシャオロンと共にいた女勇者に向けられた。
「……娼館に行くにもまだ早い。なんなら、剣の稽古をつけてやろうか？」
「あら、嬉しい、お願いするわ」
「外はどこも人だかりだ……室内戦を想定して、オレの部屋でやる。狭い場所でも、それなりに大剣を扱えるように、な」
セレスは師に挨拶してから、『めったに聞けない話なんだから、う～んと聞いておきなさい』とシャオロンに耳打ちする。
「次に臨時収入が入ったら、これまでの稽古料、抜かせてもらうからな」と、アジャン。
「え？稽古料？お金とる気なの？」
「当たり前だ。俺はおまえの護衛代しか貰ってない。当然、別払いだろ？」
「あなたねえ！それならそうと先に言いなさいよ！」
「後でも先でも一緒だ。このパーティの金庫番は俺だからな」
「私の分とシャオロンの分をとるの？いくらよ？」
「いや、シャオロンの分はいらん。俺は金持ちからしかふんだくらない主義なんだ。おまえさんは侯爵令嬢だから、爵位分を加算して、そうだな、通常の八倍で……」
「なんで、そうなるのよ！」
ぎゃいのぎゃいのと騒ぎつつ、廊下へ消えてゆく二人。
彼等を見送ってから、カルヴェルはホホホホと愉快そうに笑った。
「あの二人、ずいぶん仲良うなったようじゃな」
「はい！セレス様とアジャンさんは、とても息が合っているんです！」

と、少年も、にっこりと笑みを見せる。

「最後に会ったのは十七年前じゃ。ユーシェン殿が所有しておられた『龍の爪』を狙って不逞の輩が」

ノックが響き、扉が開く。

入って来た人物は、カルヴェルの姿をみとめるや、あからさまに不快を示した。

「おや、お久しゅうございます、カルヴェル様。あいかわらずお暇そうで……」

「おお、元気でおったか、ナラカの甥よ」

にこにこ笑う老人と、不愉快そうに眉をしかめる武闘僧。シャオロンは、ナーダがカルヴェルや伯父のナラカを嫌っているなど無論知らないので、二人の間の異様な雰囲気に、ただ、ただ、戸惑うばかりだ。

「あの……ナーダ様、何かご用でしょうか？」

「ああ、実はですね、シャオロン」

少年に対してはにっこりと笑みを見せ、武闘僧は持っていた本を手渡した。

「『女勇者セレス』シリーズの最新刊です。版元の方から直接いただいた、まだ発売前のものですよ」

「わ！すごい！これ読ませていただいていいんですか？」

「さしあげますよ」

「え？やった！ありがとうございます！版元の方からご本をプレゼントされるなんて、すごいです！さすが、ナーダ様！」

「おぬしの部下は、版元とは仲良しこよしだもののぅ」

武闘僧は糸目で、大魔術師を探るように見つめた。この老人は、自分の事情をどれほど知っているのだろうと。

そこへ……

「はあああああ、疲れた」

髪が乱れたセレスが戻って来る。
「アジャンさんは？」と、シャオロンが問うと、
「いつもの所に出かけたわ」
と、眉をひそめながらセレスが答える。
「ああ、そうでした、セレス、これ、どうぞ」
ナーダがセレスに手渡したものは、『簡易ジャポネ日常会話集』。
「ジャポネ語は苦手だと前におっしゃってましたよね？渡航前に勉強しておいてください。ジャポネは他国に比べ、共通語の浸透が遅れています。田舎では、ほぼジャポネ語しか通じませんから」
「ナーダ……この本を、私の為に？」
ありがとう！と、セレスは瞳をうるませたのだが。
「しょうがないでしょ」
武闘僧は溜息をついた。
「一般教養に欠ける十六歳の小娘でも、あなたは勇者、旅のリーダーです。リーダーがしゃべれない上に文盲では、従者の私まで恥をかいてしまいます。シャイナの王宮では、本当、肩身が狭かったんですよ、あなたのせいで」
「う……」
「シャイナでの轍を踏まないよう、少しは心をいれかえて、入国前にジャポネ語を勉強しておいてくださいね」
「……わかったわよ。どーもありがとう！」
「いえいえ。口先だけのお礼よりも、感謝は行動で示して欲しいものです。この本一冊暗記するぐらい、一晩もあれば軽いでしょ？」
「無茶言わないでよ！」
顔を怒りに染めるセレスと、涼しい顔のナーダ。そんな二人を見つめ、老人はホホホと愉快そうに笑った。
「ナーダの奴、ランツの孫（しかも女）のセレスを嫌っておったが、今ではすっかり仲良しだのう」
「はい！セレス様とナーダ様はいつも世界平和のために、とても難しいお話をしてらっしゃいます！」

と、少年もにっこりと笑みを見せるのだった。

「おや、しもうた」

移動魔法で自分の居城に戻ってからカルヴェルは、用事を果たさずに引き揚げてしまったことに気がついた。

シャイナで魔族や大魔王教徒をほぼ一掃した勇者一行は、大魔王の本拠地を求め（あわせて、シャオロンの武器も探しに）ジャポネに渡ろうとしていた。

ジャポネに行く前に、最近の魔族の動向を伝えようと思ったのだが。魔族はいかなる目的かは不明だが、各地で聖なる武器を探し略奪している。

所在が明らかな聖なる武器は『龍の爪』の他に、ジャポネに二つあった。三代目勇者の従者の子孫が聖なる刀『ムラクモ』を所有し、七代目勇者の従者の弓『破魔の強弓』がジンジャ（神殿）に奉納されているはず。それらが無事か確認するよう助言しようと思ったのだが……

「まあ、良いか。近いうちに、また、遊びに行けば」

カルヴェルはシャオロンを思い出した。相手の目を見て熱心に話に聞き入り、丁度良いタイミングで相槌を打ち、相手への心配りと感謝を忘れない少年。非常に聞き上手であった。語る方も気持ちが良い。

仇もちであり、ままならぬ状況に心を痛めいてるであろうに、少年は、それを表面に出していなかった。明るく前向きで、けなげだった。

あの少年が一行に加わってから、セレス達三人の仲は好転していた。『シャオロンの成長を助ける』という共通目的ができ、会話も増えたようだ。少年は、個性的な三人の緩衝材の役割を果たしている。

「子はかすがい、か。じゃが、二人ではないしのぅ、三人の仲をと

りもっておるから『かすがい』ではマズいか？」

どうでもいい事で悩み、老人はホホホと笑うのだった。

あなたがいれば　《カルヴェル》（後書き）

『あなたがいれば』　完。

次回は『旅のはじまり　＊　ジライ　＊』。
舞台はシャイナからジャポネへ。五人目登場です。

旅のはじまり　＊　ジライ　＊

「恥ずかしがらずに正直におっしゃい。今日はどういったプレイがお望みなのかしら?」

ＳＭの館『フェティシズム』。シャイナの大都市シャングハイに最近開店した、外国人ＳＭ嬢を売りにする専門店だ。金髪碧眼の美人女王様、アフリ大陸から渡ってきた黒奴隷、オープンなサービスでＳもＭもこなす陽気なエーゲラ美人などなど……。趣味人の心をくすぐる店として、今、シャングハイで密かなブームになっている。

その店におととい、フードマントで顔を隠した男がやって来た。店一番の女王様マリアに既に予約が入っていると知ると落胆し、その客は通常の三倍の金を前金として払い、今宵一晩の予約をとってその日は姿を消した。

そして、今、黒衣の女王様マリアの前には、フードマントを被った客がいた。半地下の拷問部屋に似せたプレイルームで、マリアは客と二人っきりになっていた。

こういった趣味の店で、正体を隠そうとする客は珍しくもない。醜聞をはばかる金持ちほど、ＳＭ趣味の露見を恐れるものだ。けれども、マリアは優しく、そして厳格な女王様で通っている。顔を隠そうとする客の気持ちをほぐしつつ、イニシアチブをとって、女王様と奴隷の関係を相手に刻み込むのが第一の仕事だ。

「痛くないプレイをひととおりやってあげましょうか?それとも痛い方がお好き?」

「……女王様のお心のままに」

そう言って男は、フードマントを外した。

マリアは、ハッと息をのんだ。

客の肌も髪も、異様に白かったのだ。まるで老人の髪のようだっ

たが、肌には張りがあって若々しく……そして美しかった。
やや痩せすぎではあったが、乱れた白髪で右側を隠している顔は、黒の瞳は切れ長で、鼻はすらりとし、唇は薄く、近寄りがたい品格があった。
けれども、うっとりとマリアを崇めるその瞳には、まぎれもなく奴隷の従順さがこめられていた。
「鞭の痕や蝋燭の火傷が肌に残っても構いませぬ。どうぞこの身をお好きに弄(もてあそ)んでくだされ」
「お好きに……？」
白い指が己の頬を撫で、白い顔が恍惚とした笑みを浮かべる。
「この顔と、手足さえまともに動くように残してくだされば……後は女王様のご随意に。どのような責めも甘受いたしますゆえ」
マリアはごくりと唾を飲み込んだ。これほど美しく従順そうな奴隷は初めてだった。醜い変態親父どもの相手も商売と割り切り見事にS嬢の役をこなしてきたマリアは……その日、初めて商売を忘れた。
打てば響くような最高の奴隷を手に入れたのだ。マリアは嗜虐の悦びに酔いしれ、一晩中、白い体を弄んだのだった。

「夜が明けましたな」
客がぽつりとつぶやく。
高窓から漏れ入って来る朝の光を怨めしげに睨み、マリアは客の体から離れた。あらゆる責めを駆使し、最後には騎乗位でマリアは客を自ら犯した。本来、本番抜きのSMの館で、客と寝るのはルール違反だ。プロ失格の愚行と言えたが、後悔はなかった。
四肢を拘束していた鎖と枷を外してやりながら、マリアは甘えるような声で客に尋ねた。
「ねえ、どうだった？良かった？」
「はい。素晴らしき一夜を過ごせ、幸せにございました」

「だったら、私の専属奴隷にならない？」
マリアは身を乗り出した。
「お金なんて要らないわ。毎日、毎日、かわいがってあげるわよ」
客は目を伏せ、悲しそうにかぶりを振った。
「ありがたきお言葉なれど……お受けできませぬ」
「なぜ？」
「私には年老いた父母がございます。幼き頃に病をえて、このような醜い白子（しらこ）となった私を、慈しみ育ててくれた二親です。捨てるわけにはまいりません。私は両親の待つエウロペに戻らねばならないのです」
一瞬、マリアは、この客の両親を殺してでも、この男を自分のものにしたい衝動にかられかけた。が、プロである彼女は己の欲望をかろうじて押さえこみ、営業用のスマイルを浮かべる事で己のプライドを保つ道を選んだ。
「あら、そう。とても残念だけれど、それではしょうがないわね。シャイナにいらっしゃるうちに、是非、又、お店にいらしてね。私の指輪を差し上げるわ。これをカウンターで見せてくだされば、私、その時、お客をとってもすぐに切り上げて、あなたのお相手をするから」
「かたじけのう存じます」
翡翠の指輪を恭しく受け取る男を、マリアを名残惜しげに見つめた。

「フン」
もらった翡翠の指輪を掌で弄び、男は懐にそれをしまった。
「安物だが、まあ、使い道はあるか」
フードマントを被り素顔を隠して、早朝の歓楽街を歩く男。フードの下は、マリアの前で見せていた従順な顔とはがらりと変わる、ふてぶてしい顔になっている。

「昨夜の女も悪くはなかったが……中の下といったところか。言葉責めは単調、鞭の振りも甘い、だが、なにより気品に欠けておったのがいただけぬ。しょせんは商売女か」

男はフーッと溜息をついた。

「真の女王様は、なかなかおられぬものだ」

朝の歓楽街は閑散としている。時折、路上に転がっている酔っ払いや、朝帰りの客を見かけるものの、ほとんど人影はない。

男はふと足を止め、建物と建物の間の狭い路地に横目を向けた。そこには美姫がいた。結い上げた黒髪も、赤と金糸に彩られた薄物も、白粉に薄く紅をさしただけの化粧が映える顔立ちも、まるで天女のように美しい。シャイナ風高級娼婦とわかる姿だ。

女は嫣然と微笑み、フードマントの男の元へ歩み寄った。

「探したわよ、ジライ」

「……目立ちすぎぞ、アスカ。変装の意味がない」

「いいの。あなたに見てもらいたかったの」

そう言ってアスカと呼ばれた女は、男にしなだれかかった。

「このまま歩いて，どこかの宿に入りましょ」

「一晩中、犯りまくった後なのだがなあ」

「んもう！　また女王様遊び？仕事が終わっても里に帰らないでふらふら遊び歩いて、本当にしょうのない人ね。どうせ報酬のほとんどを注ぎこんじゃったんでしょ」

「ほとんどではない。全部だ」

「全部ぅ？　馬鹿ね！あたしなら、タダで何でもしてあげるのに！」

「フン」

フードマントの男は、じろりと横目でアスカを睨む。

「おまえにはもう飽きた」

「意地悪」

冷たい扱いをされるのに慣れているのか、アスカはさほど気にした風もなく男に甘える。

「今日じゃなくてもいいわ。又、かわいがって」

「……気が向いたらな」
「あたし、性感マッサージ、上達したのよ。この前も潜入先でインポ親父をメロメロにしてやったんだから」
「おまえの技術（テク）ではたかがしれておる」
「そういう事は試してから言ってよね！」
アスカの変装に適した、西国風のそれなりに高級そうな連れ込み宿に二人で入る（宿代はアスカが払った）。
二人は世間話をしながら、寝台、机、イス、ドレッサー、壁、窓、天井をあらため、襲撃・覗き・盗聴の恐れがないのを確認してから、ようやく本題に入った。
「……次の仕事か？」
「そう、又、暗殺。今度は大物よ」
「ほう」
「今世の勇者よ。世直しの旅の最中の、ね。今はシャイナに滞在中のはずだけど、もしかしたら、もうジャポネに向かったかも」
「勇者？というと、先代勇者ランツの」
「孫だそうよ」
「孫……か」
フードマントを外し、白髪の男は笑みを浮かべた。切れ長の瞳を薄く細め、口元を歪める。不敵な笑みだ。
「それは楽しみだのう」
その白い顔を、アスカは不機嫌そうに見つめる。
「また、いやらしい事、考えてるんじゃない？」
「む？」
「……犯っちゃう気？」
「犯る？ランツの孫を、か？ふむ……それは考えなかったが、勇者ランツは歓楽街の帝王として、未だに伝説を残している男。祖父の血を正しく引いておれば、まあ、男色もそれなりにイケルかもしれんなあ」
「男色？なに言ってるのよ、ジライ」

呆れたという顔で、アスカが言う。
「当代の勇者は女よ。知らなかったの？」
「おんなぁ？」
驚きに眉をしかめた後、白い顔には明らかな落胆が浮かんだ。
「……それはつまらぬ。女か……」
「なに言ってるの、女ならチャンスでしょ？」
アスカの目がきらりと光る。
「『勇者の剣は女を嫌う』って言うじゃない？その女勇者、まともに『勇者の剣』を扱えないそうよ。あなたの敵じゃないわ」
「……ますますつまらん」
「もう！あなた、大魔王教徒のくせに勇者を殺したくないの？当代こそケルベゾールド様に真の復活をしていただいて、欺瞞に満ちた醜い世界を滅ぼしていただきましょうよ」
「……我（われ）としては」
顔の右側にかかる前髪をかきあげ、男は溜息をつく。
「名のある勇者の寝首をかき、世の者どもの希望を木端微塵にうち砕くほど、むごたらしくもみじめな形でその死骸を辱めたかったのだ。我が二つ名をより高めるためにも、の。だが、相手がおなごでは……世の期待はもとより低く、惨殺したところで絶望を覚える者も少なかろう」
つまらん、ああ、つまらん、と、男はぶつぶつと文句を言う。
「ねえ、ジライ。確かに女勇者はたいしたことないザコなんだけど……この仕事、あなたじゃないと難しいのよ。もう六人、勇者一行にやられているの」
「む？」
「強いのは勇者じゃなくて、その従者らしいの。二人いてね、一人はエーゲラ一の戦士と称えられた赤毛の傭兵、名前はアジャン。身の丈ほどもある大剣を振り回して、トライチ、カザミ、ムジナ、コロクを斬り捨てたそうよ」
「ほう」

「もう一人はインディラ教の次期大僧正候補の武闘僧、名前はナーダ。そいつは武器は一切使わないらしいんだけど、ミコシとマシラを殴り倒して、負傷した女勇者の怪我を癒してしまったんですって」
「まあ、インディラ僧が勇者の従者になるのは、昔からの伝統だ。従者にいてもおかしくない」
「そうなの？」
「うむ」
「シャイナで従者が一人増えたんだけど、それは数に入れなくていいわ。十二のやせっぽちの子供で、一応、格闘技を使えるみたいだけど、たいした事ないそうよ。名前はシャオロン。女勇者のお小姓みたいね」
「……で、従者に手こずっておるから、我に働けと頭（かしら）は？」
「そういうこと」
「ふむ。まあ……あまり気は進まぬが、仕事ならば仕方ない。エーゲラ一の戦士と次期大僧正候補とやらを辱めに行くか」
「ジライ♪」
「女勇者を守りきれねば、従者の評判も廃る。国一番の戦士にエリート僧侶……お高くとまった阿呆の顔を潰してくれるわ、女勇者を二目と見られぬ姿にして、な」
男の白い顔は酷薄な笑みに歪み、黒の瞳は無情な性をあらわすかのように妖しく輝いている。
「……素敵」
頬をポーッと赤く染め、アスカは男に抱きついた。
「抱いて、ジライ」
「おい」
「もう駄目。あたし、欲情しちゃった……抱いて」
男はいかにも面倒だという顔で嘆息し、頭を左右に振った。
「……しょうのない奴め」
そして、アスカの顎をとり、己の白い顔を近づけていくのであった。

『白き狂い獅子』の異名を持つ忍者……ジライ。
先天性白皮症、いわゆる白子だ。
性格は冷静沈着にして残忍。獲物を弄びすぎる悪い癖こそあったが、仕事をしくじったことは一度たりともなく、忍の里（しのび）一の暗殺技術を誇っていた。
忍術・忍法・邪法・諜報術・剣術・体術・盗術・房中術・暗殺術に秀でた彼は、次期忍者頭に目されていた。本来、忍の里では異形は生涯下忍なのだが、ジライは二十を少し越えたばかりの若さで中忍となっていた。他の追従を許さぬほど、その実力は抜きんでているのである。

東国ジャポネ。
大陸の東端ジャイナから船で一日の距離にある小さな島国である。
その首都オオエから馬で三日の旅籠の一室で、ジライはつなぎ役のカナメと接触していた。カナメは、勇者一行の跡を気づかれぬよう追跡し、暗殺者の為に諜報活動をしておく役の『くノ一』だった。
黒の束髪の鬘（カツラ）をつけ、染め粉でジャポネ風に肌の色を染めたジライは、衣服をジャポネの剣士（サムライ）のものに変えていた。麻の筒袖の一重に袴。旅の剣士の姿で、刀の手入れに集中する態を装っている。
「『勇者の剣』が無いだと？」
カナメは頷きを返した。部屋の隅にひざまずくカナメは、素顔を覆面で隠し黒装束を着た忍者姿だ。
「女勇者の師匠にあたる老人が現れ、女勇者の了承を得て、移動魔法でいずこかに運びました。三日ほど、老人が剣を預かるそうです」
「何ゆえ？」
「『勇者の剣』をより扱いやすくする為に、まじないをかけるとか……」

「魔法使いだな？」
「そのようにございました。直接、剣に触れず、浮遊させて運んでおりましたし」
「その者の名は？」
「わかりませぬ。女勇者は『お師匠様』、赤毛の戦士はたんに『ジジイ』と呼んでおりました。おそらくは、女勇者の神聖魔法の師、当代随一の魔術師カルヴェルかと」
「ふむ」
ジライは顎の下に手をあて、瞳を細めた。
実力不足の女勇者など、もともと敵とみなしていない。しかし、『勇者の剣』が手元に無いとなれば、当然、従者も警戒を強め、女勇者の寝所を固めるだろう。
ジライは、薄く笑った。
相手が警備を強化している今こそ、女勇者の殺し時だ。警備を固めた時期に主人が暗殺されたとあっては、従者は面目を失う。屈辱感もいやがうえにも増すだろう。
「……今夜、しかけるか」
「え！」
カナメが意外そうに尋ねる。
「相手が警備を強化している今、仕掛けるのですか？」
「そうだ」
「……ですが」
ジライは横目でジロリと部下を睨んだ。
「我（われ）のやり方に不服があるのなら申せ」
カナメはビクッと怯えた。ジライは表面は物静かだが苛烈な性格。失敗への仕置きにも容赦はない。理由なく配下をいたぶる事はなかったが、必要とあらばどこまでも残忍になれる男だ。機嫌を損なうと恐ろしい相手なのだ。
「いえ、そうではなく……今日は襲撃はないものと思い込み、私は、つい、浅慮にも、このようなものを……」

深々と頭を下げながら、カナメは跪いた姿勢のままジライの元へツツツと滑るように進み、手にした紙を頭より高く差し出した。
受け取ったジライは……
顔を朱に染め、紙を懐にささっとしまった。
「カナメ……おまえ、なかなか気のきくおなごじゃな」
「は、ありがとうございます」
「……『勇者の剣』は三日返らぬのであったな？」
「はい」
「……ならば、襲撃は明日にいたす」
「では、今宵はお渡りに？」
「うむ」
頬を更に赤く染め、ジライは刀を鞘に収めた。
「おまえの好意じゃ、今宵は遊んで参る」

カナメが渡したのは、この宿場町一の遊び女（め）、ＳＭ嬢としても名高いシラギク相手の真性Ｍコース百七十分の当日二十二時からの予約券であった。

けれども……
（またしても、ハズレか……）
翌日、襲撃を前に、昨夜の情事を思い出し、ジライは溜息をついた。
遊んでいる時は、そこそこ楽しかったのだ。しかし、あくまでもそこそこ。終わってみれば、何とも言えない空しさばかりが残っていた。
（商売女はマニュアル通りに女王様役を演じているのに過ぎぬ。しょせんは芝居……。真に気品にあふれ残忍でお美しい女王様など……この世におられぬのかもしれん）

幼い頃から性の遍歴を重ね、ジライは男女の酸いも甘いも噛み分けてきた。老若男女誰でもOK、SもMもこなせる床上手となっている。房中術を修めたくの一でさえ指一本でイかす事ができるし、（彼本人は己の容姿をうとましく思っているのだが）白い異形の美貌で多くの者を瞬く間に虜にできる。

だが、ここ数年、ジライは性交にそれほど悦びを感じなくなっていた。達すれば肉体的な快感はある。しかし、胸が熱くなるときめきがない。精神的な充足をまるで感じないのだ。

現在は、女王様遊びの時にのみ被虐の悦びに火がつけば性的興奮を覚える。けれども、その興奮も回を重ねるごとに弱まっているように思えた。いずれは女王様遊びにも無感動となりそうだ。

（とはいえ、畜生には走りたくないのう。スカ●ロも趣味に合わんし……）

二十そこそこで枯れてしまうのも空しい気がしたが、心がときめかない以上、仕方がない事なのだ。

昨日のうちにカナメを先行させ、次の宿場町近くの村の井戸に毒を撒かせた。

宿場町に着いた女勇者一行は、近くの村で医者の薬が効かず多くの村民が苦痛にのたうち回っているとの噂を耳にした。彼等の耳に入るよう、人を雇って噂を流させておいたのだ。予想通り、女勇者は武闘僧一人を村へと派遣した。村人の治療を終えて武闘僧が旅籠に戻るのは、早くて翌朝、遅ければ明日の昼過ぎとなるだろう。

赤毛の傭兵をひきつける役は、カナメにやってもらう。女好きの傭兵を、くノ一の房中術をもって誘惑し、護衛の任を忘れさせるのだ。

シャオロンという小僧などものの数ではなかったが、女勇者の隣室に一人でいる時を狙い、眠り薬を塗った吹き矢を使った。武闘家の少年はひっくり返り、すぐに寝息をたて始めた。半日は眠り続け

るので、これで騒がれる心配はない。
残るは獲物……女勇者だけだ。
着物と袴からなる黒装束に覆面、背には忍刀（しのびがたな）。
夜半、忍者姿のジライが天井裏から覗くと、女勇者は布団に入り、すやすや眠っていた。『畳やジャポネ布団に馴染めず、ここ数日、寝不足だった模様』と、カナメから報告があったが、今夜は熟睡しているようだ。
忍は常人よりも夜目がきく。ジライは覆面から覗く両の目（前髪は額当てで後ろに撫でつけている）で、女勇者をじっくりと眺めた。
枕元の行燈のそばに、弓と矢筒を固定した荷物入れ、小剣、白銀の鎧一式。他に私物はないようだ。
ジャポネ風の枕はお気に召さないようで、布団のわきによけ、畳んだ衣服を枕代わりに眠っている。長い金の髪はやわらかく布団の上に広がり、頬はふっくらとし、唇は小さく赤く、微笑んでいるかのように瞼を閉じている……可憐な少女にしか見えない。
（確か、十六の小娘であったな）
獲物があまりにも無防備に眠っているので、ジライは拍子ぬけした。殺してくれと言わんばかりだ。
（さて、どうしようか）
屋根裏から糸を使ってその口に即効性の毒薬を流しこんでもよし、毒薬を塗った吹き矢や針を使ってもよし、部屋まで下りて寝首をかっ切ってもよし。
（いっそのこと、火薬玉を投げつけ、木端微塵に砕いてやろうか……いや、どうせなら）
ジライはにやりと笑った。
（死の恐怖を刻んでやった方が面白い……起こすか）
ジライは、己の左の小指の皮膚をクナイで浅く切った。浮き上った血で右の二の指を染め、クナイの刀身にすらすらと血文字を書いてゆく。魔に染まりし者のみが知る魔族の文字……邪法を誘う為の血文字だ。

音もなく天井の板の一部を外し、ジライはクナイを投げた。クナイは女勇者の金色の髪の、その毛先へと突き刺さった。

女勇者の青い瞳がぱちりと開く。

呪によって目覚めたのだ。

しかし、起き上がれない。

邪法により、女勇者の体を縛った。意識はあるし、目も耳も口も普通に使える。けれども、まったく動けない。指一本上げることすらできないのだ。

ジライはふわりと畳の上に下り立ち、小剣を蹴って畳の上を滑らせ部屋の端に追いやった。万が一の用心だったが、邪法にかかっている敵が動けるはずはない。

「女勇者セレス殿とお見受けする」

両腕を組み、フフフと低く笑いながら、ジライは女勇者を見下ろした。

だが、身動きできない絶体絶命のピンチに、敵が現れたというのに、女勇者はまだ寝ぼけ眼だった。口もだらしなくもぐもぐ動かしている。

「……誰？」

ジライは半ば呆れ、半ば腹を立てた。死の恐怖を相手が感じてくれねば、姿を見せた意味がない。自分の姿が闇の中でも見えるよう、女勇者の枕元の行燈に火を入れた。

行燈の灯りが、忍者を闇から浮かび上がらせる。セレスは眠そうな眼で、忍者を見上げ、同じ質問を口にした。

「あなた……誰？」

「死にゆくあなたには教えてしんぜよう。我が名はジライ。あなたの魂をケルベゾールド神の元へお送りする者にござる」

「大魔王教徒……？」

「さよう」

「そう……」

女勇者はゆっくりと瞼を閉じた。

「……邪法を使ったわね。動けないわ」
「ほう。邪法とわかるのか。小娘にしてはよくわかったのう」
「わかるわよ。だって、私……」
女勇者はにっこりと笑みを浮かべ、口をもぐもぐと動かした。その途端、
「！」
呪が跳ね返ってくるのを、ジライは感じた。呪を払う神聖魔法を唱えられたのだ。
「くっ……」
女勇者が金の髪を靡かせ、布団から跳ね起きる。エウロペ人の勇者は着慣れない浴衣を、完全に着崩して着ていた。その上、腰紐が緩んでいるので、裾が乱れ、左足が露わになっている。
「私、神聖魔法だけは使えるのよ。当代随一の大魔術師カルヴェル様直伝の魔法なんだから」
ジライは意志の力で呪に抗った。手足が痺れ、まともに動かせない。しかし、相手はたかが十六の小娘。殺すだけならば、難しくはない。その死を演出できないのは残念であったが。
「チッ！」
舌打ちを漏らし、ジライは懐から煙玉を出そうとした。煙玉を床に叩きつけて相手の視覚を奪い、隙をついて喉を切ってやれば仕事は終わる。
だが……
女勇者の方が早かった。夜着の裾が乱れるのも気にせず、一気に距離を詰め……
ジライを……
その右の拳で……
殴り飛ばしたのである……
「はぅぅぅぅ！」

その瞬間……
ジライの内に稲妻が走った。

ドタン、バタン、ゴロゴロと……
東国の少年の泊まる部屋へと続く襖をぶち破り、ジライは無様に転がった。
拳自体はそれほど痛くなかったのだが……
心臓が早鐘を打ち、全身がぶるぶると震え、体が硬直していた。
（なんじゃ？何が起きた？）
足音をたてて女勇者が駆け寄って来る。ジライは立ち上がろうとしたのだが……
顎を蹴られ、再び畳の上に転がった。
それでも、この時は、まだ戦う意志があったのだ。懐から暗器を取り出そうとしたのだ。しかし……
「この薄汚い大魔王の使徒！」
と、女勇者に罵られ……
ジライは完全に戦意を無くした。
体中にえもいわれぬ歓喜が広がってゆき、完璧に理性が麻痺してしまったのだ。
金の髪を振り乱し、あどけないようなかわいらしい顔を怒りに歪ませ、女勇者は、拳を、蹴りを、繰り出してくる。腕力のない女性なので威力自体はさほどでもない。が、攻撃は素早くそして鋭い。
戦士として体術の鍛錬を積んできた者の動きだ。
「おまえなど虫ケラ以下よ！」
ズキン！とジライの胸が痛んだ。
全身は熱を帯び、息は荒くなり……
股間のものが、じんじんと疼き出した。
目は怒りの形相で浴衣前をはだけさせる女勇者に釘付け、耳は彼女の怒声に聞き入り、体は彼女がもたらしてくれる苦痛に酔いしれた。

被虐の悦びに浸り無抵抗になっている忍者を、女勇者は容赦なく殴り、蹴り飛ばしていた。
「邪法を使う魔の手先め！汚らわしい！」
（あああああああああ）
少女には凛とした気品があり、犯しがたい清楚さがあった。それでいて敵を完膚なきまでに叩きのめそうとする無慈悲さも持ち合わせている。
しかも……美しいのだ。ウェーブを描く金の長髪、サファイアのごとき瞳。眉や鼻の形も上品で、頬は子供のようにふっくらとしているのに唇は悩ましいほどに赤い。襟からのぞく胸は豊かで、腰はくびれ、尻の肉づきもよく、その上、美脚。
どれをとっても完璧だ。
（この方こそ……）
ジライは確信した。
（この方こそ、真の女王様……）
このまま女勇者に殴り殺されてもいい……
そんな気分になりかけていた。
しかし、廊下から近づいて来る気配が、ジライの内に忍の心を甦らせた。
「セレス、無事か？」
襖をがらりと開け、赤毛の傭兵が現れる。傭兵は左手だけで、後ろ手に縛った半裸のカナメを拘束していた。カナメはぐったりとしていたが、意識はあるようだ。
「チッ！」
ジライは手足を使い、瞬時に宙へと高々と跳躍した。
ほとんど動かず無抵抗だった忍者が、突然、すばやく動いたのだ。女勇者は拳を宙に切らせ、よろめいた。
天井にぴたりと張りついた姿勢でジライは、女勇者と赤毛の傭兵、拘束されたカナメ、部屋の隅で畳につっぷしている子供を見回し、瞳を細めた。邪法による痺れはまだ消えていない。この体で赤毛の

戦士と女勇者の相手をするのは、分が悪い。
「女勇者セレス殿、いずれ、又」
懐から煙玉を取り出し、畳に叩きつける。
黒煙と目潰しの粉が広がる。
咳きこむ女勇者と赤毛の戦士。
ジライは背の忍刀を抜刀し、赤毛の傭兵に斬りかかった。
右手で顔を押さえていた傭兵は、その瞬間、すばやく後方へ身をそらせた。視力を失っているのに、ジライの動きを感じ取っている。危機を察知する能力に秀でているようだ。動物的な勘と言えよう。
更に連続攻撃をしかけるジライ。
避けているうちに、赤毛の戦士は襖に足をとられ、よろけた。先ほど、女勇者にぶっ飛ばされたジライが突き破って倒した襖だ。
倒れかけた彼に、忍者の刀が迫る。
忍者めがけ赤毛の戦士は、腕の中のカナメをどんと押しつけた。捕虜を盾代わりに使って刀を避けたのだ。
ジライの判断は早かった。部下を左の小脇に抱えると、忍刀を鞘に収め、畳を蹴って跳躍したのだ。
「待ちやがれ！」
叫ぶ赤毛の傭兵の足元を狙い……
ジライは懐から出した火薬玉を投げつけた。

後方から広がる爆風と爆炎。
背後に広がるものを見もしないで、カナメを抱え、ジライは夜の闇を走った。
あの程度の攻撃で、赤毛の傭兵や女勇者を仕留められたとは思えない。火薬玉は単なる時間稼ぎ。目潰しの効果もそろそろ切れたはずだ。この混乱に乗じて逃げなければ、思うように動けない以上、命が危うい。
重い体に苛立ちながらも……

ジライは……
不思議な昂揚感を覚えていた。

長く暗い洞穴を進み続けた者が、遠方にまばゆい光を見つけた時に感じるような……
喜びと解放感が彼を包んでいた。

旅のはじまり　＊　ジライ　＊（後書き）

『旅のはじまり　＊　ジライ　＊』　完。

次回は『シャオロン奮戦す　ＶＳセレス』。舞台はジャポネ。忍者の夜襲に備え、護衛役としてセレスと同室になったシャオロンは……。

もとのワープロ文ではジライが壊れてからハート多用になってたので、どう直そうか、試行錯誤中です。『この方こそ真の女王様（ハート）』、『あああああ（ハート）』。記号で表現の手間を省いていたんだなあと実感。

シャオロン奮戦す　VSセレス　1話

「オレですか……？」
今宵の宿屋の廊下で、シャオロンは呆然と、武闘僧と赤毛の傭兵の顔を見渡した。
「オレが……オレなんかが今夜、セレス様のご寝所で一緒に寝るだなんて……そんな……」
今宵は続き部屋の三間に泊まる。セレスはもう中央の部屋でくつろいでいる。左右が護衛の部屋なのだが……ナーダもアジャンも、セレスの部屋にも護衛を置くべきだ、その役はシャオロンにしかできないと断言しているのだ。
「あなたしかいませんよ」
武闘僧ナーダは溜息をついた。
「だって、シャオロン、女と見れば見境ない品性下劣な傭兵を同室にするわけにはいかないでしょ？」
「アホぬかせ。俺は死んでも、あのくそ忌々しい女にだけは手を出さん」
赤毛の戦士アジャンは、フンと鼻を鳴らした。
「第一、俺は処女が嫌いなんだ。しち面倒くせえし、うるせえし……大金積まれたって、セレスとは犯りたかないぜ」
「と、本人は言ってますが、アジャンと同室ではセレスが絶対に承服しないでしょう」
「じゃあ、ナーダ様が同室になられれば……」
「駄目です」
きっぱりと武闘僧は言い切る。
「私は修行僧ですからね、野宿の時はともかく、妙齢の女性と一緒に眠るわけにはいかないのです」
「でも……オレじゃ……」
シャオロンはうつむいた。泣きそうな顔で。

「お役にたてないと思います……」
昨夜、セレスは忍者の襲撃を受けた。
幸いにも賊はそれほど強くなかったようで、セレスは無事だった。しかし、泊まっていた部屋は爆破され、護衛に駆けつけたアジャンは軽い火傷を負っていた。
その時、シャオロンが何をしていたかというと……熟睡していたのである。セレスに起こされてもいぎたなく眠りこけ、アジャンに担がれて火の手の回る宿から運び出されたそうなのだ。
今宵も、又、忍者の襲撃があるかもしれない。セレスの命が狙われるかもしれない。けれども……
「オレじゃ……足手まといにしかなりません」
「シャオロン、昨夜の事は気にする必要はありません。あなたは睡眠薬を盛られていたようですし」と、ナーダ。
「……」
「情けねえ顔するな、シャオロン。何もおまえ一人にセレスを守れって命じてるわけじゃねえ。部屋の周りは俺とナーダが固める。おまえは俺達が討ち損じた奴だけを相手にすればいいんだ」
「……はい」
東国の少年は意気消沈したままだ。赤毛の戦士はぼりぼりと頭を掻いてから、少年の肩を叩いた。
「なあ、シャオロン、おまえにあって俺に無いもの、何だと思う?」
「え?オレにあってアジャンさんに無いものですか?えっと……何だろう?逆ならいっぱい思い浮かぶんだけど……」
「それはな」
赤毛の戦士は、にやりと笑った。
「命に代えてもセレスを守ってやるんだって、心意気さ」
「……アジャンさん」
「セレスの護衛役は、俺やそこのマイペースなクソ坊主よりも、おまえ向きの仕事だ。俺らは勝手にそこらの敵をぶっ殺す。おまえはセレスを守れ」

「……」
ナーダも、にっこりと笑みを浮かべる。
「あなたには他にも長所がありますよ。あなたはとても素早い。強力な敵が現れたら、その動きで敵を翻弄してセレスを逃がしてもいいし、セレスと共に戦ってもいい。私達に助けを求めに走るって手もあります。ようは戦い方次第です。それと、あなたのやる気次第ですね」
少年は二人の顔を順に見つめ……ぐっと拳を握りしめてから、元気よく頭を下げた。
「わかりました！オレ、がんばります！アジャンさん、ナーダ様、ありがとうございました！」

「よろしくね、シャオロン」
東国風の寝巻……浴衣を着たセレスが、畳に敷いた布団の上でにっこりと微笑む。
「頼りにしてるわよ」
「はい！オレ、がんばります！」
セレスから一畳分離れた布団の上で、シャオロンが両の拳を握りしめる。こちらも浴衣姿で、就寝前なので黒の長髪は束ねずに解いてある。長さは女勇者と同じくらいあるが、軽いウェーブを描くセレスの金髪とは異なり、さらさらの直毛だ。
「あんまりガチガチにならなくていいのよ。一応、襲撃に備えて準備してあるし」
と、セレスは枕元に目をやった。行燈と白銀の鎧、荷物入れのそばには武器がある。『勇者の剣』はカルヴェルに預けてしまったが、『虹の小剣』に『エルフの弓』、他にもアジャンから借りたナイフ、乗馬鞭、金槌などをすぐ取れる位置に並べてあるのだ。
「さ、寝ましょ」
「はぁ」

「護衛役だからって徹夜しちゃ駄目よ。明日、お師匠様が『勇者の剣』を届けてくださったら、龍神湖を目指す旅に出るんだから」
「はい」
「龍神湖で、あなたの武器、見つかるといいわね」
「すみません。オレなんかのために、セレス様を回り道させちゃって……」
「馬鹿ねえ、まだそんな事、言ってるの？あなたの仇は魔族と大魔王教徒、私にとっても敵よ。あなたが穢れた敵に対抗できる力を得る事は、私にとっても喜びよ。気にしないで」
にっこりと微笑む、女神のように美しい女性……
シャオロンは両の拳を握りしめた。
（絶対、セレス様をお守りするんだ！暗殺者も魔族も大魔王教徒も近づけるもんか！）

行燈の灯りを消し、床（とこ）につく。
闇に眼が慣れてくるにつれ、不安が募る。シャオロンは天井を睨み、或いはキョロキョロと周囲を見渡し、何度も何度もセレスの様子をうかがった。
「ンもう！」
セレスはむっくりと起き上がり、東国の少年の布団に近づくと、少年の額を右の二の指で軽く弾いた。
「寝ないと、明日、バテちゃうわよ。寝て体を休めて、必要な時に動けるように体調を整えておくのも、武人の心得よ」
「……すみません」
「明日も明後日も襲撃に備えるのよ。こういうのは持久戦なの。最初に無理しすぎたら後がつらいわ」
「……はい」
「熱心なのがあなたのいい所だけど、何事もほどほどにね」
「……わかりました」

セレスは少年の黒髪を撫でた。
「おやすみ、シャオロン」
「おやすみなさい、セレス様」

そう挨拶したものの、緊張していて、やはりシャオロンは寝つけなかった。
間もなく、セレスがやすらかな寝息をたて始める。
シャオロンは横を向き、敬愛する女性の横顔を見つめた。
衣服を枕代わりに、すやすや眠るセレス。周囲は闇なので輪郭ぐらいしか見えないが、どんな顔をしているのかは容易に想像できた。
その横顔を見つめているうちに、息苦しいような甘酸っぱさがシャオロンの胸を支配した。セレスをずっと見ていたいような、彼女から目をそむけたいような、相反する二つの感情が彼を責めたてた。
(寝なくっちゃ……)
シャオロンは瞼を閉じた。

それからどれくらい経ったのだろうか。
シャオロンは人の気配を感じて瞼を開き……あやうく大声をあげそうになった。
すぐ目の前に顔がある……
それは……
「セレ……ス様?」
セレスはシャオロンと向かい合う形で眠っていた。
慌てて起き上がり、きょろきょろと周囲の闇を伺う。シャオロンは、自分が自分の布団に眠っているのだと確認した。
と、いうことは……
「うぅぅぅん」
セレスの体がごろごろと畳の上を転がってゆく。シャオロンとは

逆向きだ。自分の布団へ戻るのかと思われたが、コースが微妙に上向きだ。このままではセレスは、枕元の武器に突っ込んでしまう。

「あぶない！」

シャオロンは跳ね起きて、急いで両手で武器を抱えてよけ、セレスの荷物入れを蹴って動かした。何も無くなった畳の上をセレスはしばらく転がり、隣室への襖にぶつかる前に動きを止めた。

武器を同じ場所に戻し、シャオロンはセレスのそばでしゃがんだ。背を向け、丸くなって、セレスはすやすや眠っている。

「セレス様……そんな所で眠っちゃダメです。お布団に帰りましょう」

耳元で小声でささやいても、セレスは静かに寝息をたてるだけだ。仕方なく背を揺すると……

「……うぅ～ん」

白い腕が跪くシャオロンを抱え込み、押し倒したのだ。

「あ、あ、あ、あ、あ……」

シャオロンは真っ赤になった。

セレスの浴衣は完全に着崩れている。腰帯はかろうじて止まっているが、両脚は太ももから露わになり、襟は左右にはだけ豊かな胸がこぼれ出ている。

そして、セレスはぬいぐるみを抱きしめるかのように、少年をキュッと抱きしめ、やわらかな胸の中にその顔を埋めさせた。

弾力のある、豊満な胸の中に……

そのへんが、シャオロンの限界だった……

「寝ボケただと、シャオロン？」

「すみません！すみません！」

「あなたがすっとんきょうな大声をあげるから敵襲かと思ったので

すが……」
「すみません！すみません！」
シャオロンは、赤毛の傭兵と武闘僧に手厳しく叱られた。忍者の襲撃を警戒している時に大騒ぎをしてしまったのだ。駆けつけた二人に怒られてもしょうがないのだが。
「それぐらいで許してあげなさいよ、二人とも」
浴衣を着直したセレスが、シャオロンの肩に手をかけた。
「この子、夜襲に備えるの初めてでしょ？緊張しすぎて寝ボケちゃったのよ、きっと」
自分の寝相の悪さがシャオロンを動揺させたのだとは、セレスはまったく気づいていなかった……
あの時、悲鳴をあげてしまってから、シャオロンはセレスの手をふりほどき、急いで掛け布団を彼女に掛けた。それで、傭兵達が部屋の灯りを点ける前に何とかセレスの胸を隠す事だけはできたのだが。
（オレがセレス様を守らなきゃ……）
シャオロンは決意を新たにした。
（あんな姿、アジャンさん達には見せられないし……）
「さ、寝直しましょ、みんな」
そう言って微笑むセレスに、ひきつった笑みを浮かべ少年は頷きを返した。

「何でそんなに布団を離すの、シャオロン？」
「……いいんです、これで」
「それに、浴衣を着替えろですって？」
少年は力強く頷いた。
「浴衣は絶対、ダメです」
「どうして？」
「どうしてって……その、えっと……そうだ！さっきオレ、浴

衣の腰紐がほどけて踏んでコケちゃったんです。やっぱ着慣れないもの着てちゃ、いざって時に動けないし。だから、その、浴衣はダメなんです」

セレスは小首を傾げた。

「まあ、そうかもしれないわね」

異国情緒があって良かったんだけどと、未練そうに浴衣の袖を撫でながらもセレスは着替えを了解した。

少年はホッと安堵の息をついた。

「じゃ、着替えてください。オレ、廊下にいますから」

けれども……

ニョキッと白い太ももが宙に伸び、シャオロンめがけ絡みついてくる。

少年は泣きたい気分で、敬愛する女勇者を見つめた。

セレスのいつもの寝巻は白の貫頭着。寝乱れれば、貫頭着の裾が大きくめくれ、セレスの脚も、お尻も、腰も、おなかも、おへそも、そして……胸までもが出てしまうのだ。

（あああん！セレス様ぁ！）

（忍者の襲撃の方がよっぽどマシだ……）

早く忍者に襲撃してもらって……

撃退して……

もう二度と、セレスと一緒の部屋で寝ないようにしないと……

体がもたない……

すやすやごろごろ眠るセレスの横で……

少年は一晩中、女勇者に掛布団を掛け続けたのだった。

シャオロン奮戦す　VSセレス　2話

「残念ながら、そのような魔法は知りませんね……」
「……そうですか」
落胆の表情を浮かべ、少年はがっくりと頭を垂らした。
宿に落ち着き夕食を終えた後だった、思いつめた顔の少年が武闘僧の部屋を訪れたのは。少年の目の下には隈ができ、少しやつれたようにみえる。寝不足なのだろう。
「……気になって眠れないのですか？」
ナーダの問いに、少年は小さく頷きを返した。
「シャオロン、子供時分は程度の差はあれ、だいたい、皆、悪いものです。今は良くなくても、あと数年もすれば」
「数年なんて待てません！」
少年はガバッ！と顔をあげた。
「オレ、今夜もセレス様と同じ部屋で眠るんです！オレ……オレ、もうどうしたらいいのか……」
「シャオロン……」
武闘僧は少年の左肩に、そっと手を置いた。
「大丈夫です。本人が気に病み悩んでいる事も、案外、周囲は気にしていないものです。セレスだって、そんな事、気にしてないと思いますよ」
「オレが気になって気になってしょうがないんです！」
少年は今にも泣き出しそうだった。
「助けてください、ナーダ様！寝相ってどうすれば良くなるんですか？今すぐ効果がある方法、教えてください！」

ナーダは顎の下に手をそえ、うつむいた。
『寝相が良くなる魔法ってありませんか？』と、質問してきた少年

の心情は理解できた。憧れの女性と同じ部屋で眠るのだ。寝乱れたみっともない姿を見せたくないのだろう。多感な少年時代にありがちな過敏な反応といえたが、相手は真剣なのだ。真面目に対応すべきだろう。

「眠りの機能は未だ不明な点が多く、解明できていない謎も多いのですが……睡眠と肉体が密接な関係にある事はわかっています。たとえば、真夏の夜に寝苦しさから何度も寝返りをうつとか、尿意が目覚めにつながるとか、大きな音に驚いて目を覚ますなんて事もありますよね。肉体の不快が眠りを浅くし、それが寝乱れる要因となる事もあります」

「えっと……？」

「つまり、ぐっすり眠っていないから寝相が悪くなるって事です」

「え？」

少年は身をのりだした。

「じゃ、ぐっすり眠れば、暴れないってことですか？」

「一概にそうとも言い切れませんが、まあ、疲れきって泥のように眠る人間は、動かなかったりしますねえ」

「疲れきって眠ればいいんですね？」

「ええ。しかし、それだけではいけません。肉体が精神に影響するのと同様に、精神も肉体に影響を及ぼすからです。ストレスや不安を抱える者の眠りは浅くなりますし、悪夢に苛まれうなされれば寝乱れてしまいます。精神の充足も睡眠の安定には必要です」

「え？え？え？」

「……ようするに、やりたい事をやって満足して眠れば寝乱れる可能性は低くなるという事です」

「て、ことは」

少年は両の拳を握りしめた。

「大好きなことやって疲れて眠れば、寝相は良くなるってことです

よね？」
「何もしないよりは、その確率は高いかと」
「ありがとうございます！ナーダ様！」
深々と頭を下げてから、少年は立ち上がりガッツ・ポーズをとった。
「オレ、お言葉通りがんばってみます！」
勢いよく襖を開けて、廊下に出てゆく少年。
その背を見送ったナーダは、糸目を細め、首を傾げていた。
野宿での様子を思い出す限り、少年の寝相は悪くないように思える。
「まあ、環境が影響するって事もありますしねえ」
野外では緊張している為、眠りが浅くなり寝乱れずに済んでいるのか？屋内で熟睡する場合でも、畳に布団では寝台とは異なり、落下の危険がない。開放的な環境が寝相に影響する事もある……のかもしれない？
ナーダは首をひねった。自分の助言の効果の程（ほど）は容易に想像できる。明日も少年は泣きついてくるだろうから、何か助言を考えておこう……と。

少年が詳しい説明をしなかったので、武闘僧は完全に誤解していたが……
寝相が悪いのは、シャオロンの方ではなかった。

今夜こそ、セレスを寝乱れさせない！
シャオロンは策を練った。

「昨夜の続きが聞きたい……？」

シャオロンが頷きを返すと、女勇者セレスの顔はパッと華やいだ。
「いいわ！喜んで！」
その瞳は、嬉しそうにキラキラと輝いていた。

忍者の襲撃に備え、護衛役としてシャオロンがセレスと同じ部屋で眠るのは三夜目。
一畳分離して敷かれた二つの布団の上に、セレスとシャオロンは座っていた。荷物と白銀の鎧、『勇者の剣』は枕元に置かれている。
「昨日はどこまで話したんだったかしら？」
セレスの声は浮き浮きと弾んでいる。
「初代勇者ラグヴェイ様が、ケルベゾールドを倒したところまでよね？」
「はい。従者の方々のその後もうかがいました。バラシン様はインディラ教を開かれ、マジャロ様はたくさんのお弟子を持ったんですよね」
「ええ、そうよ」
セレスは、にっこりと微笑んだ。今夜も西国風のゆったりとした寝巻を着ている。
「じゃ、今夜は二代目勇者ホーラン様と従者の方々のお話にしましょう♪」
「はい！セレス様！ありがとうございます！」

昨晩、なかなか寝つけずにいたシャオロンに、セレスは寝物語を語ってくれた。初代勇者ラグヴェイの冒険だ。
七百有余年前。
シベルア国王の体に、魔界の王ケルベゾールドが降臨した。大魔王ケルベゾールドは数多くの魔族を召喚し、国内を血に染め、他国を攻め、殺戮の限りを尽くした。

ケルベゾールドは、古えより伝わる聖なる武器の攻撃すら効かない、不死身の魔王であった。魔族に蹂躙される暗黒の時代は四年続いた……

荒れた国々を憂いていたエウロペの騎士ラグヴェイ。彼は、夢で荒野を彷徨い、死の危機を乗り越え、大地につきささった両手剣の元へとたどり着く。剣を鞘からぬいた瞬間に彼は目覚めるのだが、その枕元には、夢で見た通りの一振りの両手剣があった。彼の正義を愛し邪を憎む心が奇跡を呼び、エウロペ神より『勇者の剣』が下されたのだ。大魔王を滅ぼせる唯一の武器が。

インディラ教の始祖バラシン、魔法使いの祖となったマジャロ。二人の従者の助けを得たラグヴェイは、大魔王四天王（ケルベゾールドの四人の腹心）と戦い、幾多の困難を乗り越えて、大魔王を倒して地上に平和をもたらしたのだった。

最初は寝そべって話していたセレスも、やがて上半身を起こして身振り手振りを交えつつ、時には声を荒げ、時には涙声となりながら、少年に熱く語ったのだ。

先祖の偉業を離すのが、嬉しくってたまらないというように。

勇者とケルベゾールドが十二回戦ってきたことは知ってはいたものの、シャオロンは勇者についてあまり知らなかった。シャイナ出身の従者のお伽噺ぐらいならば知ってはいたが、歴代勇者の名前も、どんな従者がいたのかも、何処でどんな敵と戦ったのかも、討伐に何年かかったのかも知らなかった。

幼い頃から『勇者の歴史』を習ってきたセレスは、学問所の先生では知らないだろう事まで、よく知っていた。

セレスの初代勇者の話はたいへん面白かったし、セレスが楽しそうだったので、シャオロンも昨晩は楽しく過ごせた。

けれども……

今夜、話の続きをねだったのは、策なのだ。

忍者の襲撃を警戒している今、疲れきって動けなくなってしまうまで運動させるわけにはいかない。

ならば……

同じ眠るにしても、限界ぎりぎりまで寝かさないようにする……

それも、セレスに大好きな先祖の話を満足がいくまで語ってもらって……

話し疲れて眠れば、ぐっすり眠るのではないか？

今夜こそ布団の中で大人しく眠ってくれるのではないか？

そう思っての作戦だった。

（ごめんなさい、セレス様……）

満面笑顔のセレス。

その上機嫌な顔を見ると、シャオロンは気がとがめた。

「初代ケルベゾールドには四人の腹心がいたでしょ？」

セレスもシャオロンも布団には入っていたが、上半身は起こして

いる。まだ行燈の灯りもついたままだ。
「はい、大魔王四天王ですよね」
「ええ。初代四天王グラウス・ディウス・ゼグス・ウインゼは、ケルベゾールドから闇の聖書を与えられていたの」
「闇の聖書……？」
「大魔王の生み出した魔法は暗黒魔法とか邪法って言われるんだけど、闇の聖書にはその全てが記されているの。とても邪悪な忌むべき本よ。四天王はその本から邪悪な力を引き出し、さんざん悪事を働いていたってわけ。ラグヴェイ様に倒されるまで、ね」
「そうだったんですか」
「四天王の死後、闇の聖書は彼等の部下から他の者へと持ち手を転々としたわ。闇の聖書に邪悪な魔法がかけられていた為にね」
「どんな魔法なんです？」
「写せないのよ。書き写す事も、魔法で写す事もダメ。それどころか暗記した事を後で書くのすらダメなのよ。闇の聖書の内容を文字にしようとしても、書いた文字が全て消えてしまうの」
「へぇぇ」
「だもんだから、暗黒魔法の奥義を求める者は、何としても闇の聖書を手に入れないといけないのよ。だった四冊しか、この世に存在しない本を。仲間の大魔王教徒と殺し合って奪ってでもね」
「なんで写せないんです？」
「ん？」
「多くの信者が強い暗黒魔法を使えた方が、魔族に有利じゃないですか？」
「そうね……魔族は自分を信奉する人間にすら苦痛を与える事を好むって言うわ。大魔王は信者同士が争うのを見たかったんじゃないかしら」
「ひどい話ですね」
「その通りね。でも、大魔王教徒達が聖書をめぐって争ってくれていたおかげで、大魔王復活まで五十年の時が置けたともいえるわ。

初代大魔王討伐から五十年後、闇の聖書を読み解いた神官が、生贄の体に大魔王を降ろす召喚魔法を完成させたの。その邪悪な魔法は、その後の大魔王復活にも使われ続けているわ」
「読み解かないと使えない魔法なんですか？」
「ええ。闇の聖書を手に入れただけじゃ駄目みたい」
「聖書研究に時間がかかるから、大魔王復活までいつも数十年間隔が開くんですね」
「そうなのよ。ユーラティアス大陸中の光の信仰神、つまりエウロペ教、ペリシャ教、インディラ教、シャイナ教、あと他にも少数部族の部族神なんかがそうなんだけど、神様達が信奉者に大魔王の復活を託宣したから、大魔王復活はすぐに周知の事実となったわ。でも、何処の誰が憑代となったかは告げられなかったそうなの。今世と同じね」
「今世もそうなんですか？」
「ええ。だから、私達、今、大魔王の憑代と本拠地を探す旅をしてるのよ……二代目勇者ホーラン様はラグヴェイ様の孫にあたられる方で、エウロペの聖騎士だったの。とても慈悲深く高潔な騎士で、今も聖騎士の鑑と称えられているわ。ホーラン様はエウロペ国王に暇乞いをして、家宝『勇者の剣』を背負って大魔王退治の旅に出ようとしたの」
「……」
「クリサニアを旅立とうとしたホーラン様の元に、二人の従者が駆けつけるの。インディラ教の僧侶マハラシ様と女魔法使いユーリア。ユーリアの移動魔法で二人はインディラから移動してきたのよ」
「へええ」
「マハラシ様はね、総本山の修行僧だったのだけれど、大魔王の復活後すぐに、山を下りられたの。それで、共に従者となる運命のユーリアを探し当てたのですって」
「え？どういうことなんですか？」
「エウロペ教風に言えば、神の啓示を受けて教え通りになすべき事

をなしたって事かしら」
「？」
「そのへんの話は、ナーダの方が詳しいと思うんだけど……ようするに何となくわかっちゃって、その通りに行動したって事よ。マハラシ様は自分が勇者の従者になる運命だってわかってて、待っていれば仲間が通りかかるってわかってたから交通の要所に三日佇んで待って、同じ運命を持つ者を一目見ただけでわかって、勇者の元へあなたの移動魔法で行きましょうって、ユーリアを誘ったんですって」
「すごいですね！なんでもわかっちゃうなんて！」
シャオロンは目を丸めた。
「インディラ僧って、みんなそうなんですか？」
「みんなじゃないけど、司祭様や祭司に神官や僧侶、巫女の中にはそういう方がいらっしゃるみたいね。神のご加護で真実を見抜く目をお持ちなのよ」
「ナーダ様もそうなんですか？」
「ナーダ？」
セレスは眉をしかめた。
「どうかしら……？わからないけど……その手の神秘とは無縁そうに見えるわよね……変に俗っぽいところあるし。でも、大僧正候補なわけだし……？」
セレスが首をひねって悩み始めたので、シャオロンは話を元に戻した。
「それでお二人はすぐに旅立たれたのですか？」
「あ？ううん、旅立ったのは、更に三日後よ。女魔法使いユーリアはね、大魔王退治の志を持っていたわけじゃないの。彼女の魔法の師オーウェンから、行方不明の彼女の兄弟子の捜索を命じられて旅をしていただけだったの。そこへ、見知らぬ僧侶から道端で『あなたと私は勇者の従者となる運命なのです、さあ、旅立ちましょう』って誘われてもねえ……信じられないわよね、普通。ユーリアは、

マハラシ様を気味悪がって逃げ出しちゃったのよ」
「ありゃ」
「でも、姿隠しをしても相手は見破る、幻術にもひっかからない、『麻痺』や『眠り』も効かない、小距離の移動魔法を使っても追いついてくる……で、最後には根負けしたのよ。マハラシ様が『あなたの求めるものも同じ道にあります』って予言なさった言葉を信じたからかもしれないけど」
「へえ」
「ホーラン様は移動魔法で現れた二人の従者を歓迎し、共に東を目指したわ。そして、シルクドの首都ガダーラで二人の従者に出会ったの」
そこで、セレスはあくびをした。
「……そろそろ寝ましょうか？」
「え！そんな！」
シャオロンは慌てた。
「二人の従者ってどなたなんです？セレス様！どんな方々なんです？」
身を乗り出す少年を見て、セレスは小さくふきだした。
「もう遅いから、灯りは消すわね。横になって体を休めましょ」
「でも！」
「はい、はい。寝ながら話すから♪」
セレスは嬉しそうだった、少年が熱心に話をねだってくれるので。
灯りが消え、部屋に闇が訪れる。
セレスは静かに語り始めた。
「ガダーラで待ってたのは、一人はペリシャ建国王の弟シャダム様。シャムシール（曲刀）の聖なる武器『銀の三日月』の使い手の聖戦士よ」
「聖戦士？」
「魔法戦士よ。神聖魔法、攻撃魔法、弱体魔法、強化魔法、回復魔法が使えたそうよ」

「へえええ」
「もう一人は、後に、北方バンキグの国王となられたゲラスゴーラグン様。戦闘用斧の聖なる武器『狂戦士の牙』の振るい手。大魔王の復活を憂いていたお二人は、ガダーラで勇者の到着を待っていたのよ」
「なんで、ガダーラで？」
「シルクドは、エウロペ、ペリシャ、シャイナ、インディラ、それにバンキグとも国境が接しているもの。昔から交通の要所だったのよ。五人はシルクドで暴れていた大魔王四天王のヘリドスを倒し」
「ヘリドス？」
シャオロンは目をぱちくりとさせた。
「あれ？さっきの名前と違うような……？」
「さっき？」
「えっと、グラウスと……あと、なんだっけ、ディ……？」
「グラウス、ディウス、ゼグス、ウインゼ？」
「そう！それです！」
「グラウス、ディウス、ゼグス、ウインゼは、初代四天王よ。ホーラン様の時代の四天王は、ガーネ、ゼグス、ワンジュ、ヘリドスよ」
「え？時代ごとに四天王って違うんですか？」
「ええ。その時、魔界で強い力を持っているものを腹心に選んでいるんじゃないかって言われているわ。初代ケルベゾールドの時代はナンバー・スリーだったゼグスは、ホーラン様の時代にはナンバー・ツーだしね」
「へー」
「ヘリドスは、女魔法使いユーリアの兄弟子の肉体を憑代にしてこの世に現れていたの。分離させる事ができなかったので、浄化するしか手はなかったんだけど」
「浄化？」
「神聖魔法や聖なる武器で、魔界との縁を断つ事よ。つまり、内なる魔族ごと、この世から消滅させてしまうって事。それが浄化よ」

「え……？」
シャオロンの声が震える。
「殺しちゃったんですか……？兄弟子を？」
「違うわ。魔族の呪縛から解放したのよ」
「でも」
「……他に方法がなかったのよ」
セレスは小さく溜息をついた。
「魔族に肉体を奪われた者は、魂を穢され続ける苦痛を味わうのよ。言語に絶する痛みだって、言われてるわ。ユーリアは兄弟子をその苦しみから解放してあげたのよ」
「……」
「兄弟子の肉体が消えた後に残った一握の塩を目にし、ユーリアは正義に目覚めるの。勇者と共に大魔王を滅ぼす事を心から誓ったのよ」
「……」
「ユーリアの悲痛な誓いに心を動かされたホーラン様と従者の方々は、そこで誓いをたて合うの。己の武器と名とそれぞれの神にかけて、仲間を信じ助け合って、地上に和をもたらそうって……」
「……」
「五人は心を一つにし、バンキグ、シベルア、シャイナ、ジャポネ、再びシャイナと旅し……二度目のシャイナで……」
「……」
「シャオロンも知ってるわよね？有名な話だもの……」
「……はい、知ってます」
「シャイナの古代遺跡でのケルベゾールドとの決戦のさなか……女魔法使いユーリアは魔に堕ちたの。勇者一行を裏切ったのよ。ケルベゾールドに挑んだホーラン様を幻影で騙し、窮地に陥っていたケルベゾールドを助け、移動魔法で共に逃げたのよ」
「……なんで魔に？」
「わからないわ……本当に何の前触れもない、突然の事だったみ

たい。もともと魔に憑依されていたのかも……。その後、ユーリアはホーラン様のお命を狙い、何度も勇者一行を襲うのよ」

「……」

「『勇者の剣は女を嫌う』って風評が生まれたのも、ユーリアのせいとも言われてるわ。本当のところはわからないけど」

「……」

「ユーリアの堕落に最も心を痛めたのは、北の戦士ゲラスゴーラグン様。旅の途中から、ゲラスゴーラグン様はユーリアの美しさに心惹かれ、熱心に求婚していたそうなの。ゲラスゴーラグン様は最愛の女性の心を取り戻そうと、命も惜しまず魔に挑み、四十八回も生死の境を彷徨ったと言われているの」

「四十八回……」

「この四十八回っていう具体的な数字は後世の脚色っぽいんだけど、何度も大怪我をされたのは事実だと思うわ。だけど、ゲラスゴーラグン様の思い空しく……ユーリアはホーラン様の命を狙い続け……仲間を斬れないホーラン様に代わって……シャダム様がユーリアを魔族の呪縛から救ってあげたの。ゲラスゴーラグン様はユーリアが消えた後に残った一握の塩を握りしめ、天を仰ぎ、血の涙を流して号泣したと伝えられているわ」

「……お気の毒ですね」

「……ええ。ユーリアが何故堕落したのか、本当のところはわからないの。兄弟子の死を目の当たりにして、正義に目覚めたはずの彼女が、何故、変心したのか……世に言う通り、心弱き女だったからなのか、不浄の身だったからなのか……」

「不浄？」

「非処女だったらしいの」

「はあ」

「ユーリアの堕落後、シャダム様がユーリアの名前を口にするのすら厭って『罪の女』としか呼ばなかったからわかった事なんだけど……ペリシャ教においては、婚前に処女を捨てる事は死に値する

罪で、その戒律を破った者は『罪の女』と呼ばれるのよ」
「……はあ」
「勇者一行の中でも、ペリシャ教徒のシャダム様は一番潔癖な方だったみたい。仲間を裏切って堕落したユーリアを生涯許さなかったの。ゲラスゴーラグン様とシャダム様は、大魔王討伐の旅の間も、それぞれの国に戻られた後も、ユーリアの堕落について激しく意見を戦わせ、死ぬまで対立したそうなの」
「勇者一行の仲間なのに？」
「誰にでも譲れない一線ってあるのよ」
セレスの声には苦いものがあった。
「ゲラスゴーラグン様はユーリアを信じていたのよ。彼女が神聖な誓いを破るはずがないって。魔に堕ちる形となったのには何らかの理由があったはずだって」
「……」
「対するシャダム様は邪を憎む清廉な方。仲間だった者が、魔の誘惑に屈した事に怒りを感じたのでしょうね」
「他のお二人は……ホーラン様とマハラシ様はどう思われたんです？」
「ホーラン様はおやさしい方だったから、ゲラスゴーラグン様のお味方をしたわ。でも、マハラシ様はどちらのお味方もしなかったの」
「え？そうなんですか？なんで？」
「どちらも正しいから、ですって」
「？」
「魔に堕した以上は払うべき不浄、しかし、人としてあった時代に仲間であった者を辱めるべきではない、ってことらしいわ」
「……よくわかりません、オレ」
「インディラ教の中庸の精神を貫き、仲間が分裂しないように本心を述べなかったんじゃないかっていうのが、私の家庭教師の見解だけど……」
「けど、マハラシ様には真実を見抜く目があったんでしょ？どちら

が正しかったのか、ご存じだったんじゃないんですか？」
「……かもしれないけど、預言や託宣って、神のお心のままに降りてくるものなの。知りたいと望んだ事の全てが『わかる』ものでもないのよ……」
「オレには……よくわかりません」
シャオロンは闇の中、天井を見つめた。
セレスも口をつぐむ。
静かな沈黙が部屋に訪れた。
息苦しさを感じ、シャオロンは上掛けを握りしめた。
（いやだ……）
共に戦い助け合った仲間が、死ぬまで敵対しわかり合えなったなんて悲しすぎる。
赤毛の戦士、武闘僧、そして敬愛する女勇者の顔が心に浮かぶ。
仇を討ちたいと願いついて来たシャオロンを、三人は守り導き助けてくれている。それどころか、シャオロンの為に、龍神湖に向かってくれているのだ。
大恩ある三人と……
敵対する未来など……
考えたくもない……
むろん、三人が敵対し合う姿も見たくない……
ずっと、皆、仲間で、笑い合っていたい……
「セレス様……」
シャオロンの声は震えていた。
「セレス様は……どう思われます？」
たまらず上半身を起こし、シャオロンは問いかけた。
「ゲラスゴーラグン様とシャダム様、どちらが正しかったのか……セレス様なら」
シャオロンの言葉は半ばまでで、口の中に消えた。
「う……」
シャオロンは、がっくりと頭を垂らした。

「しまった……」
話にのめりこんでしまって……
当初の目的をすっかり忘れてしまい……
話しかけて起こし続けるのを忘れてしまったのだ。
シャオロンの膝の上には、セレスの頭がのっかっていた。体を斜めにし、畳の上で大股をひらき、セレスはすやすやと寝息を漏らしていた。

（セレス様～～～～～～～～～）

シャオロンは涙目となった。
セレスの寝巻は、頭からすっぽり被る形の貫頭着。寝乱れた足を大きく開けば裾がめくれて太ももやお尻におなか……時には豊かな胸まで露わになってしまうのだ。

「……ダメでした、ナーダ様」
翌朝、武闘僧の部屋を訪れた少年はめっきり落ち込んでいた。
「やはり……」
「え？」
「いえいえ。この三夜、寝所では忍者の襲撃はありませんでした。あなたがセレスと共に眠っているおかげでしょう。ですから……」
「はい……今夜もセレス様と同じ部屋で休みます」
「それで、考えたのですが、一番良いのは寝具を変える事だと思うのです。畳の上というのは寝具と床（ゆか）の別がつきがたいでしょ？開放的な環境が寝相に影響する事もあるのではないか、と」
「え？」
「寝台に眠れば、寝相もさほどひどくならないのではありませんか

？」

少年の顔に光が差す。

「なるほど！さすが、ナーダ様！」

「ですが、残念ながら、ここから先、龍神湖まではたいそうな田舎街ばかりで……ジャポネの伝統建築の宿屋しか無いんです」

「う……」

少年は、がっくりと頭を垂らした。

当分、畳部屋から離れられないようだ。

武闘僧は口元をゆがめてから嘆息し、いかにも気が進まないといった口調で話を切り出した。

「……シャオロン、これから毎朝、私が起こしてあげましょうか？」

「え？」

「寝相がどれほどひどかろうが、朝、セレスの起床前に起きておけば問題ないでしょう？私は夜明け前に目を覚ませますし、あなた方の部屋にこっそり入っていって」

「ダメです！」

シャオロンは勢いよく顔をあげた。顔を真っ赤にして、少年は武闘僧に喰ってかかる。

「だって！だって！セレス様の寝室なんですよ！女の人のお部屋に！僧侶のナーダ様が！そんな！」

胸もあらわに眠っているセレスの姿を他の人に見せるわけにはいかない！

「絶対、ダメです！部屋に入るだなんて、そんな！」

「まあ、私も、女性の寝室に忍び入るような戒律に触れかねない真似したくなかったんです。だから、あなたが良いのなら、やりませんけどねえ……」

シャオロンの必死の形相におされ、武闘僧は提案を撤回してくれた。

少年はホッと安堵の息を漏らした。

しかし、だからといって……

問題が解決したわけではないのだ。

（今夜こそ話をひっぱって、セレス様を遅くまで起こしておくんだ！）

シャオロンは決意を胸に秘め、拳を握りしめた。

それと……

（今夜……お尋ねしよう、ゲラスゴーラグン様とシャダム様のこと……どちらが正しいと思ってらっしゃるのか……）

二代目勇者一行の話は、シャオロンに、忘れがたいしこりを残していた……

シャオロン奮戦す　ＶＳセレス　２話（後書き）

『シャオロン奮戦す　ＶＳセレス』　完。

次回は『龍神湖の試練』。舞台はジャポネ。
果たしてシャオロンは『龍の爪』を手に入れられるのか？
忍者の襲撃は？

龍神湖の試練　1話

「最初は寝込みを襲って……」
「次は脱衣所……」
「それから、厠で……」
「で、今度は露天風呂の女湯なんですか……？」
赤毛の戦士アジャンと武闘僧ナーダは、苦々しい表情で顔を見合わせた。
「……セレスは？」
と、ナーダが尋ねると、アジャンは溜息をついた。
「無事だ。怪我一つない。だが、シャオロンが……」
「シャオロン？負傷したのですか？」
「いや、湯あたりというか……色あたりだな。鼻血ふいてぶっ倒れた。今、セレスが介抱している」
「踏み込んだんですか、女湯に……？」
「セレスが暗殺者に襲われたんだ、護衛役として踏み込まんわけにもいかんだろう」
二人は顔をつきあわせ、大きなため息をついた。
「暗殺者、四回とも同じ奴なんでしょ？」
「らしい。毎回、仕掛ける前に名乗るらしい」
「忍者のくせに、名を名乗るなんてねえ」
「『ジライ』という名だそうだ」
「あなたは一度、その忍者と対決してるんでしょ？どんな奴なんです？」
「わからん。あっという間に逃げちまったし、俺は目潰しで目をやられてたからな。逃げっぷりは見事だったが……ただ」
「ただ？」
「『セレスより弱い』という事はないと思う」
「あなたの勘はアテになりますものねえ」

武闘僧は顎の下に手をあてて首をひねった。
「……愉快犯なのでは？」
「愉快犯？」
「つまり、本当は暗殺する気がなく、勇者一行をひっかき回して、我々が右往左往する様をほくそ笑んで眺めているのではないかと」
「何のために？」
「さあ？」
「だが、今、敵が本気ではないってのは正解だな。セレス一人っきりの時を狙えるんだ、毒でも爆薬でも何でもいいが、その場で名乗りをあげずに致死性の高い攻撃をすりゃ決着（ケリ）はつく。なんで、ちょっかい出しちゃ逃げるを繰り返してるんだろう？」
「もうすぐ人里を離れるというのに、暗殺者がついて来てるだなんて、本当、厄介ですよねえ」

勇者一行と同じ宿屋に、暗殺者は宿泊していた。
先天性白皮症、いわゆる白子として生まれ、里一の暗殺技術を誇る『白き狂い獅子』の異名を持つ忍者……ジライ。
彼は今、黒の束髪のカツラをつけ、染め粉でジャポネ人と同じ色に肌を染め、サムライ（ジャポネの剣士）に変装していた。一見、壁に向かって座禅を組んでいるようなのだが……実は内側からこみ上がってくる、えもいわれぬ歓喜に酔いしれ陶酔しているのだ。
（あああああぁ……鞭も嗜むとは……さすがは女勇者）
今までもジライが襲撃する度に、女勇者は、拳、蹴り、投げ、小剣で反撃してくれたのだが……先ほど、露天風呂でくつろいでいる所を襲った時には、近くの桶に手ぬぐい（バスタオル）をかけて隠しておいた乗馬用の鞭を武器としたのだ。処女らしい恥じらいから手ぬぐい（バスタオル）で裸体を隠し、ジライに容赦なく鞭を振るったのだった。
ＳＭの館の人間用の鞭と違って、乗馬鞭は人間の肌には過酷なものだ。皮膚が裂け、血が滲む。女勇者の鞭は痺れるほどに甘美で、

『大魔王の使徒』と侮蔑をこめて罵る声は天上の音楽のようであった。シャオロンという小僧が女湯に踏み込むまで、ジライは被虐の悦びに浸りきっていた。

（ほんに、あのお方こそ真の女王様じゃ……殺さねばならぬのが、まことに惜しい）

忍者である以上、上役の命令には逆らえない。女勇者はいずれは殺す。だが、暗殺期限ぎりぎりまでは生かしておいて、たっぷりと遊ぼう♪と、ジライは心を決めていた。わざと姿を見せ、わざと攻撃を外し、女王様（女勇者）にいたぶってもらうのだ。

「ジライ！」

襖をがらりと開けて、武家娘が入って来る。結い上げた黒髪はつややかで、茜色の小袖がよく似合う美形だ。

「その名を大声で呼ぶな、アスカ」

ジライは振り返り、横目で女を睨んだ。

しかし、女――くノ一アスカは気にした様子もなく襖を閉めると、サムライに変装している仲間を睨み返した。

「二つ話があるの」

「仕事の話を先にしろ」

アスカは、ムッと美しい顔をしかめた。

「お父様に聞いてきたわ。女勇者暗殺の期限は、来年の一月末だそうよ」

「ほほう。では、まだ三カ月もあるのか♪」

「さっさと女勇者を始末しろって、お父様、お冠だったわ」

「待たせておけ。頭には、勇者の従者に手こずっておるとでも伝えておけばよい」

「でも……」

「前にも言うたであろう、アスカ。雑魚など倒してもつまらぬだけだ。世の者どもの希望を木端微塵に打ち砕くほどむごたらしくもみじめな形でその死骸を辱めてこそ、『白き狂い獅子』の名は高まる。女勇者の評判がもう少し高まるのを待ってから、仕事にかかる」

「それまで、お父様は待ってくれないわよ」
アスカはべったりとジライに寄り添った。艶っぽい美女に甘えられても、サムライ姿の男はまったく喜ばず、むしろ不機嫌そうな顔となった。
「今日は抱かんぞ。染め粉を塗り直すのが面倒じゃ」
「んもう！意地悪！」
「まともな肌の色に生まれたおまえにはわからぬ苦労だ。我（われ）は人中に交わる時は、染め粉で肌を染め、カツラを被り続けねばならぬ。夏は蒸れて殊につらい。異形が人里に潜むは苦行ぞ」
「……その苦行、もっとひどい苦行になるわよ」
「む？」
「お父様からの伝言、『一刻も早く女勇者を討て。部下のダイダラを送る。二人にても果たせぬのなら、好きなだけ部下を呼び寄せよ』ですって」
「ダイダラじゃと！」
ジライは額に手をあて、頭を左右に振った。
「よりにもよってダイダラ……か。アレは人中では我（われ）よりも目立つ。しかも、頭は鼻たれ小僧なみ……アレを連れていては隠密活動などできぬ」
「さっさと仕事をしろって事でしょ？遊んでないで、ダイダラが着く前に仕事を終わらせればいいんだわ！ダイダラ、あさってには、あなたと合流するんですって！」
「何を怒っておる、アスカ？」
「……あたしが話したかったことの二つ目」
まなじりをつりあげ、キッ！とアスカはジライを睨んだ。
「なんで、あなたの部下の筆頭にダイダラの名前があがったわけ？」
「……」
「あなた、部下、いっぱいいるじゃない！」
「アレを我に押しつけて、仕事せざるをえぬようにしたかったのじゃろう」

「お父様の意図はそうでしょうけど……ダイダラ、昔っから、あなたに、ものすご～く懐いてるわよね？」
「まあな」
「あたしが今回の作戦の説明に行ったら、あいつ、あなたの名前を聞いただけで顔を真っ赤にしてもじもじしたんだけど？と～ても、気色悪かったんだから！」
「……」
「……寝たでしょ、あいつと？」
ジライはあさっての方向を見つめ、ぽつりとつぶやいた。
「半年以上前に、一度な」
「ジライ！」
アスカはジライの襟をつかんだ。
「馬鹿馬鹿馬鹿！何で、あんな里一番の醜いバカと！」
「そう悪しざまに言うな。あれでも、あいつ義弟（おとうと）ぞ」
「男と犯りたかったら、相手を選んでよ！あなたに言い寄っている仲間には、もっとマシな男がいるでしょうに！」
「中途半端な造作の者など興味ないわ」
ジライはフフンと笑った。
「ダイダラほど醜ければ、それは、それで、又、一興ぞ。あやつ、あのご面相に、あの図体、その上、阿呆で、口もきけぬときておる。遊郭に行っても、女に逃げられ気絶される。女をさらってきても舌を噛んで死なれる始末。我と寝るまで、あやつ、あわれにも童貞であった。尻を貸してやったら、感謝感激、涙にむせんでおった。あの顔は、なかなかかわいかったぞ。鳥肌が立つほどに、な」
声をたてて笑うジライ。睨んでいたはずのアスカから、怒気が薄れゆく。
「どうして……？どうして、そんな事を……？」
「ああいう奴こそ情にもろい。ほんの少し情けをかけてやっただけで、アレはもう我が忠実な下僕よ。アレは醜い阿呆だが、里一番の怪力。味方につけて損はないわ」

「……」
アスカの頬を、ぽろぽろと涙が伝わり落ちる。
ジライは眉をしかめた。
「どうした？何故、泣く？」
「ジライ……あたしも、なの？」
「？」
「あたしと寝てくれるのも……味方につけて損が無いから？あたしがお父様のお気に入りだから……？利用する為にあたしを……？」
「たわけ」
ジライはアスカを抱き寄せ、結い上げた緑なす黒髪に軽く口づけた。
「何度言えばわかる。おまえは他の者とは違う……我が宝じゃ」
「本当？本当ね？」
「うむ」
「だったら抱いて！ダイダラなんかと寝るぐらいなら、う～んと、あたしをかわいがってよ！」
「おい、今日は」
「嫌！あたしが宝だって言うなら、証拠を見せて！」
涙目で迫って来るアスカ。
ジライは溜息をついた。
「変装を解くと、後が面倒なのだが……」
「だったら、指でいいわ！指でイかせて！」
「まったく……しょうのない奴め」
迷惑そうにそう呟いてから、ジライはアスカの襟をはだけさせ、己の手を滑り込ませる。巧みに女体を愛撫しながら、しかし、ジライは他の事を考えていた。
（ダイダラのお守りをしながら、人里になど潜めぬ。と、なれば、気は進まんが、そろそろ女勇者を殺るか。あやつら龍神湖に向かうと言うておった……あそこなれば、人目も気にせず戦える……

ダイダラに従者どもを押さえさせ、女勇者と最後の遊びでもするか）

もったいないがのうと、ジライは残念そうに息をついた。

（隠密活動に不向きゆえ外しておったアレも持っていくか。『勇者』として葬ってやる為に、の……）

女勇者一行は馬を旅籠（宿屋）に預けて、霊山フジの麓に広がる樹海へと入って行った。案内人を雇わずに、だ。

仲間（カナメは顔が割れたので、別のくノ一キクリを呼び寄せておいた）を案内人に化けさせて、勇者一行の情勢を探らせようと思っていたジライは当てが外れた。

地元の者ですら迷い多くの遭難者・死者を出してきた樹海に案内人もつけずに足を踏み込むなど、自殺行為だ。けれども、勇者一行は最も安全な最短距離を通って、樹海の先の龍神湖を目指して進む。先頭に立つ赤毛の傭兵の行動に迷いはない。この辺に土地勘があるのだろう。

キクリを監視役につけ、ジライはダイダラとの合流地点へと急いだ。

勇者一行の先頭を行くのは、赤毛の傭兵アジャン。荷物入れとそれに固定した両手剣を背負った姿だ。

彼には常人にはない勘の良さがあった。己が進むべき正しい道を無意識のうちに知っていて、安全な道を選んで、初めての道でも迷う事なく進める。この勘のおかげで傭兵は、戦場で遅れを取る事なく、砂漠越えでも飢えや渇きに苦しむ事がなく、今まで生きてこられたのだ。

旅籠の主人からおおまかな地図をもらい、湖のほとりに龍を祭る無人の社（やしろ）があると聞いただけで、アジャンは仲間を率いて樹海へ入って行った。己が勘に絶大な信頼を寄せているからこその行動だ。

彼の勘の良さは、シャーマンであった父の才を受け継いだものだった。が、傭兵本人は、シャーマン修行をする気が全くなく、真実を見抜く目をいつも利己的に使うだけだった。

アジャンに続くのが、武闘家の少年シャオロン。少年も荷を背負っていた。

見ている周囲の者の方が気の毒でいたたまれなくなるほど、彼はずっと気を張り続けていた。父の霊が教えてくれた目的地、龍神湖までは後わずか。そこで父ユーシェンが所有していた武器の片割れ、左手用の『龍の爪』を手に入れるのだ。

父の霊は、『龍の爪』を手に入れる為に『試練を乗り越えよ』とも言っていた。その試練がどのようなものかはわからなかったし、少年は己が技量に自信を持てずにいた。それでも……逃げる気はなかった。父の右手用の爪を奪った敵は、シャオロンが対となる武器を手に入れれば向こうから姿を見せるだろう。仇を討つ為にも、絶対、爪を手に入れなければならないのだ。

緊張しているシャオロンを気遣いながらその後ろを歩くのは、白銀の鎧姿の女勇者セレスだった。背の荷物入れに『エルフの弓』と『エルフの矢筒』を固定し、腰には『虹の小剣』を差している。

シャオロンを案じながらも、セレスも自分自身に関する問題を抱えていた。

『勇者の剣』に嫌われて既に五カ月半……『勇者の剣』はナーダが持つと軽いのに（今は林檎一個分の重量だそうだ）、セレスが持つとどんどん重量が増してゆき、最近では（担いだ事はないけれど）赤毛の傭兵の体重並みの重さに感じられた。魔法の師匠、大魔術師カルヴェルが、三日かけて特殊な魔法をかけてくれたので『勇者の剣』の重さがこれ以上、増すことはないそうだ。

セレスとしては本音を言えば、今すぐにも『勇者の剣』を背負い、これからずっと背負い続けたかった。しゃべる事こそできないが、『勇者の剣』には思考能力や感情があるとの事。しかも、好き嫌いが激しい、かなりの気分屋らしい。だから、ナーダの背に『勇者の

剣』を預け、『虹の小剣』や『エルフの弓』で戦っていては駄目だ。自分で『勇者の剣』を背負い、武器として力を借り、苦難を共に乗り越えてこそ、一体感は高まる。剣に愛されねば、真の勇者にはなれない。

けれども……

忍者に狙われている今……

しかも、シャオロンの武器を得る為に道なき道を進んでいる今……

『勇者の剣』を背負いたいなどと言っては、皆に迷惑をかけてしまう。『勇者の剣』を持っても、まともに戦えないし、歩くことすらままならなくなる……

せめて樹海を離れるまで我慢しよう……セレスは涙をのんでいた。

その『勇者の剣』を背負う武闘僧ナーダは、最後尾を歩いていた。左わきに大きな荷物を抱えていたが、樹海の道など苦にせず歩いている。

彼の周囲には、よく野鳥がいる。休憩の度に鳥を呼び寄せて肩や腕にとまらせ、舌を鳴らして話しかける……ような振りをして、諜報員の部下と文を交わして情報のやりとりをしていた。アジャンの進む道が正確か否か常に確認し、龍神湖の社や敵の情報を得ているのだ。

赤毛の戦士の勘には武闘僧も信頼を置いてはいたが、その勘が狂う可能性も、赤毛の傭兵が死亡する可能性もある。楽天家のセレスとは異なり、ナーダは最悪の事態を想定し、一行が全滅しないよう部下と連絡を取り合っているのだ。

龍神湖の社（やしろ）の情報は、必要に応じて一行に伝えるつもりだった。

尾行されている事は、部下から報告があがる前からわかっていた。おそらく、アジャンも気づいているだろう。東国忍者が一人、後を追って来ている。警戒を怠るわけにはいかない。しかし、『ジライ』という忍者についての情報はとりたててなかった。

ぬかるみ湿った土に足をとられかけながら、下生えの蔓を踏み越え、絡み合った木々の間を通り抜け、一行は進んだ。

樹海の中で二日、夜を迎えた。毒虫や蛇が多く女勇者は閉口した。しかし、傭兵に『俺の選んだ野営地が不満なら、よそへ行け。だが、この辺りで、ここよりマシな場所はないぞ』と言われてしまっては文句は言えない。この手の彼の勘は外れたが事がないのだから。旅籠の主人の勧めで購入した蚊帳を張って夜を過ごした。

果てなく続くと思われた木々の天井、太陽の光を遮っていたそれらは、やがて途絶える。次第にまばらとなってゆく木々に代わり、丈の高い草が一面に生い茂る。

一面の野原。

ジャポネは気温や湿度が高いのでまだ夏のように感じられたが、暦（こよみ）の上では季節はもう秋。周囲の草々も、黄色に装いを変え始めている。

風にたなびく草の海の先……北に霊山が天へとそびえ、その山裾の東には日の光にきらめく大きな湖が見えた。

深い蒼の湖であった。

湖畔の景色を写す鏡のような水面が、遠くまで続いている。

「龍神湖です」

武闘僧は湖に対し拝礼していた。

「太古より、龍の住み処（か）と信じられてきた聖域です。神獣がすまうにふさわしい、雄大で美しい湖と思いませんか？」

「ケッ！」

先頭の赤毛の戦士が不機嫌そうに声を荒げる。

「無駄口たたく暇あったら歩け、まずは社に行くんだろ？どっちだ？」

「さあ？霊山の麓、龍神湖の近くにあるとしか伝わってませんね」

チッと舌うちを漏らし、赤毛の戦士が歩き出す。その後を東国の

少年が追いかけ、セレスが続く。
「龍が神獣ねえ……」
セレスは小首を傾げた。
「なんか変な感じ。西国じゃ龍って魔王の手下って印象（イメージ）なんだけど、ジャポネやシャイナじゃ違うのよね？」
「訂正してください。ジャポネやシャイナだけではなく、インディラでも龍は神獣です。シルクドの一部の部族も龍を崇めています。約三百年前、七代目勇者ロイド様の時代、大魔王の使徒の邪龍が暴れたせいで、西国では龍の評判はガタ落ちです。が、本来、龍は尊き生き物なのです」
「ふぅん」
「西国で暴れた邪龍は火龍でしたが、東国の龍は水龍です。水を統べ、雨をもたらす、水神なのです」
「……そういえば、ナーダ」
セレスは肩越しに振り返り、武闘僧の両腕両脚の装甲へと視線を向けた。
「あなた、その装甲、神獣の甲羅で出来てるって言ってたわよね？それ、龍の甲羅なの？」
「いいえ」
武闘僧は左手で、右腕の黒光りする滑らかな装甲を静かに撫でた。
「インディラ教の始祖バラシン様は、神より尽きる事のない浄化の泉をいただきました。その泉は、今でも、インディラ国の総本山の森に存在しています。その泉の番人、クールマから始祖バラシン様がいただいた甲羅です」
「クールマ？」
「聖なる亀ですよ」
「亀？亀が神獣なの？見たことあるの？」
「ええ。大僧正様のお供をしている時、幸運にも二度ほどお目にかかりました。とてつもなく大きく、理知的で、人語を解する、穏やかな生き物でした」

「すごい……今世でも神獣って実在しているのね」
「それは、まあ、未だに魔族が実在しているぐらいなのですから、神も実在してくださらねば困るではありませんか」
「そういう意味じゃないの。神の存在は私も信じているわ。でも、人の目に触れる所に未だに聖なる生き物がいるのって……素敵よね。穢れきった人間を見捨てずに残っていてくれただなんて」
「歴代の大僧正様の徳に因るところが大きいでしょうね」
そう言うナーダの顔は少し得意そうだった。
「昔から、この龍神湖には龍が棲むと信じられてきました。が、その姿を見た者はいないそうです。でも、ここなら居ても、当然だという気がしますね」
そこで、セレスは前を行く少年の背にぶつかった。
少年は立ち止まり、うつむいていた。
「シャオロン？」
その前の赤毛の戦士も足を止めている。悪寒をこらえるかのように両腕で、大きな己の体を抱え込んで。
「どうしたの、二人とも？」
「……寒い」
「え？」
「むちゃくちゃ寒気がする。頭も痛ぇし、ムカムカする……」
「風邪かしら？」
セレスは視線を武闘家の少年に戻した。
「シャオロン、あなたも、なの？」
「はい……背筋がぞくぞくします」
セレスは少年の額に手を当てた。平熱だった。
「風邪の引き始めかしら？ナーダ、風邪って癒せる？」
「ええ、まあ。風邪なら魔法で治せますけど……風邪じゃないと思いますよ」
武闘僧は赤毛の傭兵の顔を覗きこんだ。顔中をしかめ、眉間に皺をよせ、傭兵は苦痛と戦っていた。ガチガチと歯を鳴らしつつ。顔

色は白く、脂汗まで浮かんでいる。
「で、アジャン、社はどっちの方角なんです？」
「……わからん」
「わからない？あなたが？」
武闘僧は片眉をつりあげ、糸目を更に細めた。
「珍しいですねえ、ご自慢の勘が働かないなんて」
「……目が、どうしても湖に向いちまうんだ。他のものなんざ、まったく見えん」
「なるほど」
武闘僧は女勇者に対し笑みを見せた。
「やはり居るみたいですよ、この湖に」
「龍が？」と、セレス。
ナーダは頷きを返した。
「アジャンを生贄に湖につっこんだら、姿を見せてくださるかもしれませんね♪」
「生贄だぁ？何の話だ、クソ坊主！」
と、怒鳴ってから、アジャンは頭を抱えた。
「痛ぇ、くそぉ……頭がガンガンする……気分が悪い……吐きそうだ」
「アジャン、その頭痛、どちらの方角を向くと、ひどくなります？」
「……湖の方だ」
「東方面ですか。他も試してみてください、楽になる方角があるはずです」
のろのろと赤毛の戦士が体の向きを変える。動くのもつらそうだ。
セレスは、はらはらと見守った。
「南と……西だな。向けば、頭痛が多少、引く……」
「わかりました」
武闘僧は満面に笑みを浮かべた。
「セレス、シャオロン、アジャン、北へ向かいましょう」
何だと！と怒鳴りかけて、赤毛の傭兵は頭を押さえた。

「なんで……北なんだ？」
「あなたの体が嫌がっている方角に、多分、あるんですよ、社が」
「……何でわかる？」
「わかりますよ。あなたの意識が抵抗しているから肉体的苦痛に襲われているのです。さっさと精神を開け放って、神でも霊でもその体に降ろせば楽になるのに」
「……何の話だ？」
「あなたにはわからない『シャーマン』に関する初歩的な基礎知識です」
「くぅぅ……頭が痛ぇ……」
「……あまり気は進みませんが、抱っこして運んであげましょうか？」
いらん！と怒鳴ったものだから、アジャンは激痛のあまりその場に蹲る羽目となってしまった。
セレスは傭兵の動きを目で追いつつ、シャオロンの体を支えていた。
「顔色がどんどん悪くなってきてるわ……少し休みましょ、座って。ね？」
「すみません……セレス様、ご心配をおかけしてしまって……湖を見てたら気が遠くなっちゃって、急に寒気がしてきたんです……でも、大丈夫です。ナーダ様がおっしゃる通り、オレも北に何かあると思います。さっきから北の方が気になるんです。早く行ってみましょう」
少年は、青い顔でけなげにもそう言い、ふらふらと歩きだす。
それを上目つかいに見て、
「くそぉ……」
仕方なさそうに傭兵は立ち上がった。本当は北になど行きたくないのだが、少年が向かう以上は同行しないわけにはいかない。
「肩かせ……クソ坊主」
「はい、はい」

体重を預けてくる赤毛の戦士を支えながら、僧侶はセレスと共に頼りない足取りで進む少年を目の端で見つめた。
（アジャンがシャーマン体質なのは知っていましたが、シャオロンも霊感体質のようですねえ。そういえば、シャオロンのお父上がアジャンの体に降りたのも、シャオロンの鎮魂舞がきっかけだったわけだし……この二人、くっついていると相乗効果でスゴイ事になるんじゃ？）

セレス達に少し離れてついて来てもらうようすると、予想通りアジャンの肉体的苦痛はやわらいだ。寒気と頭痛はあいかわらずだったが貧血と吐き気はおさまり、一人でどうにか歩けるようにまでなった。
しかし……
草の海の彼方、霊山の麓の森に鳥居が見える場所まで来ると……赤毛の傭兵の様子が変わった。まず、苦痛にゆがんでいた顔から表情が抜け落ちる。続いて、緑の瞳を半ば閉じ、背筋を伸ばし、やや内股に近い優美な所作で鳥居をめざし進み行く。アジャンの歩幅はそれほど大きくないのに、駆け足でもナーダは置いていかれそうだった。
（なんか憑いたっぽいですねえ）
「待って、シャオロン！」
セレスの声に振り返ったナーダの横を、風のように少年が駆け抜ける。すれ違いざまに見えたのは、アジャン同様、夢を見るかのように半ば閉じられた瞳だった。
丈の高い草を踏み分けて女勇者と武闘僧は走り、二人の後を追った。
鳥居の前のすぐ横の木に、赤毛の戦士の両手剣と荷物がたてかけられていた。武器を手離すなど、普段の彼ならばありえない事だ。
左右を森の木々に囲まれた鳥居。その先に、木々に挟まれた、細

い石畳の道があった。真っ直ぐに参道が奥へと続いている。
不思議なことに、鳥居を境に、内側の参道に草は生えていなかった。雑草一つ、塵一つない。社は無人だと旅籠の主人は言っていたのだが？
参道の先に少し広い空間があり、小さな祠（ほこら）があった。祠を背に赤毛の傭兵はたたずみ、武闘家の少年は、まさに、その前に片膝をついて跪こうとしていた。
「ヨクゾ参ラレタ、龍ノ声ヲ聞ク者ヨ」
厳かな口調で、赤毛の傭兵が少年に語りかける。
「我ハ、遥カ昔、龍ノ試練ヲ乗リ越エ、龍ヨリソノ爪ヲ預カッタ者。コノ社ノ神主ジャ」
「え？え？え？え？」
セレスが目をぱちくりとしばたたかせる。神主の言葉は古代ジャポネ語。現在のジャポネ語すらろくに話せないセレスには、アジャンの口から出る言葉がさっぱりわからないのだ。
「アジャンに憑いているのは、この社の神主の幽霊です。大昔に龍から直接、『龍の爪』をいただいた方みたいですよ」
「あなた、わかるの？あの暗号みたいな言葉が？」
「当然です。お若いあなたには多分に欠けているでしょうが、私には知性と教養がありますからね」
と、言わなくてもいい事を言ってセレスを怒らせつつ、ナーダは通訳を務めた。
「あの神主さん、シャオロンに祠の前で座禅を組めと言ってます。龍が直接、魂に語りかけてくるので、その声を聞け、と。どうも、龍が『龍の爪』の使い方を教えてくれるみたいです。一夜明けても何も聞こえない時や、爪の使い方が理解できない時は、立ち去れ、だそうです」
「龍の声が聞こえるかどうかが試練なの？」
「さあ？」
シャオロンは背の荷物を下ろし、座禅を組み、目を閉じた。シャ

イナ人の子供が古代ジャポネ語など知っているはずはないのだが、神主の伝えた事をシャオロンは理解しているようだ。

シャオロンを見下ろし、アジャンは悠然とした笑みを浮かべていた。

あの二人の間には、霊感の無いセレスやナーダには、入っていけない世界があった。女勇者と武闘僧は顔を見合わせ、野営の準備を始める事にした。二人からあまり離れたくはなかったが、社で野営などしては不敬だ。鳥居の外の野原で適当な場所を見つけるしかあるまい。

龍神湖の試練　2話

そこは音のない世界だった……
光、届かぬ闇……
しかし、魔族がもたらす闇とは明らかに異なる。透き通るほどに美しく、厳かな聖域であった。
そこは湖の底……
冷たく、深い、水の世界……
闇の中に、大きなものが蹲っている。山ほどもある大きなものが。岩のようであり、滑らかな鋼のようであり、やわらかな雲のようでもあった。
それは、半ば眠り、半ば目覚めていた。
この世に水がある限り、それが眠る事はない。
この世に光が差す限り、それが目覚める事はない。
それが半睡し続ける限り、この国ジャポネは緑豊かな豊穣の国となる。
けれども、それが真に目覚める時、この国は水中に沈む運命にあった。
その理（ことわり）を知っていた古代人は、龍の半睡を妨げる魔族を憎んだ。
魔族は国を焼き、水を穢し、龍の怒りを呼ぶ。もしも、魔族が龍の聖域を穢せば、龍は怒りのあまり目覚め、その力を解放するだろう。
古代人は龍を守る為に、魔族と戦った。
龍は己の信奉者にその爪を譲った。爪に宿る邪を払う力で魔族を葬るべし、と。体より離れてもそれは、龍の一部であった。人がその爪を用いて邪悪を討てば、邪を払う心地よさは龍にも伝わる。龍は龍神湖で半睡しながら、人と共に邪悪を討てる事を喜んだ。それは、ケルベゾールドなる魔族がこの世に現れるよりも、西国に勇者が誕生するよりも遥か昔の事だった……
やがて、時が流れ、龍信仰は廃れ、忘れ去られてゆく。西より伝

わったインディラ教が国教となった為だ。龍神湖は聖域として守られたものの、龍を祭る部族は減り、龍神湖のほとりの社より神主は居なくなった。

約三百年前の事だ。無人の社に心正しき者達が現れた。七代目勇者ロイドとその従者だ。彼等は西国を蹂躙していた火龍を鎮める力を求め、水龍の伝説の地へとやって来たのだ。魔を憎む彼等の心は龍と通じ合い、古の神主の霊をこの世に呼び戻した。神主は右手用の『龍の爪』を、従者の一人、シャイナ国の武闘家リンチェンに譲った。この世に邪龍が現れた時、必ずやその爪をもって邪悪を葬るという約束の下に……

リンチェンもその子孫も、約束を守り、大魔王が復活していない時代であっても、魔族が邪龍を使役する折には、必ず『龍の爪』をもって邪龍と戦い滅ぼしてきたのだ。

遠方の地であろうとも人が『龍の爪』を使えば、その戦いは龍にも伝わる。この三百年、武闘家一族の働きに龍は満足していた。

けれども……

先日、『龍の爪』の振るい手は殺され、爪を奪われた。爪を通し、薄汚い魔の息吹が常に龍に伝わる。龍は不快だった。このまま爪が魔族の元にあれば……いずれ、龍は己が誇りの為、真の目覚めに至るだろう。龍を恥ずかしめる愚かな魔族を滅ぼすべく、戦へ赴く為に。

たとえ、この島国が海に沈む事となろうとも……

戦わずにはおられないのだ……

己の一部を取り返さない限り、安息はないのだから。

しかし……

人間が龍の代行をつとめ、愚かな魔族を討つというのなら、怒りを静め、半睡してもよい。

左手の爪を与えるのにふさわしい者が存在するのなら……

汝、魔を憎み、龍と共鳴し、戦えるか？
汝、我が爪を己が爪とし、魔族を切り裂けるか？

早めに夕食を終わらせたセレスとナーダは、社へと戻り、参道よりシャオロンとアジャンを見つめた。が、二人は同じ姿勢のまま、まったく動かない。シャオロンは静かに座禅を組み続け、アジャンも見守り続けている。

やがて、ナーダは荷を置き、『勇者の剣』を外して、座禅を組んで瞑想を始めた。セレスも荷物を下ろしてたたずんでいたが特にする事もないので、あくびをしないよう気をつけつつ、シャオロン達を見つめていた。

日が陰り、星が秋の夜空にきらめき始めた時……

シャオロンがすくっと立ち上がり、東の森に向かい拝礼した。森の先には……龍神湖があるのだ。

アジャンが満足そうに頷き、笑みを見せた。

「一ノ試練ハ終ワッタ。オマエノ心ニ、我ガ主ハ、オ喜ビダ。我モ、オマエガ左爪ヲ受ケ継グノニフサワシイ者デアル事ヲ期待スル。ツイテ参レ」

滑るように進むアジャン。赤毛の戦士が近づいて来たので、セレスとナーダは脇によけ道を譲った。アジャンとシャオロンは石畳の参道を通り、鳥居を抜け、草原へと向かって行った。

月と星の明りにのみ照らされる夜の草原。

湖のほとりで赤毛の戦士は足を止め、少年へと向き直った。両手を上下に構え、両足を開き、ゆるやかに腰を落とす。

対する少年も、拳を構えた。

「拳ニテ説得セヨ。オマエノ力（ちから）ヲ我ニ示セ」

「おやまあ……第二の試練は、アジャンというか古代の神主さんと格闘をして、相手をうならせる実力を見せなきゃいけないみたいですよ」

少し離れた場所から、ナーダとセレスは少年達を見つめていた。

ナーダはその背に再び『勇者の剣』を背負っている。

「シャオロンがアジャンと戦うの？」

セレスは口元を手で覆った。

「無理よ……勝てっこないわ！大剣無しでも、アジャンの方が圧倒的に強いのよ！腕力が違いすぎるもの！」

「まあ、対戦相手が私の体じゃなかっただけマシといえばマシですけど……多分、勝たなくてもいいんだと思いますよ。見たところ、あの神主さん、達人の域まで達していると思います。私でさえ勝てるかどうか。勝てなくても、拳を交わせばシャオロンの勉強になるだろうし、シャオロンの長所も相手に伝わるでしょう」

「シャオロンの長所？」

「素早さと心の正しさ、そして根性です」

シャオロンは地を蹴って、続けざまに左右の拳をアジャンへと突き出した。

赤毛の傭兵は掌で少年の拳を受け止め、回し蹴りを放たれても動じる事なく微かに身を引くだけでかわす。

少年は休む事なく、体を沈め、相手の軸足を狙い、地すれすれに低い蹴りを放つ。

けれども、それも、相手は跳躍して軽くかわしてしまう。

少年は横転して相手との距離を開き、拳を構え直した。

相手には全く隙がないし、正攻法で闇雲に攻めても技量の高い相手には通じまい。

ならば、と、シャオロンはこの二カ月の間、アジャンより教わっ

た戦闘法を思い出し、再び神主へと挑む。
矢のように素早く相手へと迫り、拳が届く距離に達するや右拳を突き出すと見せかけて、その場にしゃがむ。相手が体勢を崩したところで、顎を狙い突き上げるように左腕を上げる。それも、又、身を反らせ、相手はかわす。すかさず、シャオロンは体を回転して右の肘を突き出した。
相手の意表をつこうとする攻撃を、神主は薄く笑みを浮かべてかわしていた。
攻撃の組み立ては稚拙、拳自体に威力はない。しかし、息を切らせずに連続攻撃をしかけられる体力・敏捷性には、才の片鱗が見られた。
赤毛の傭兵の体を用い、神主は右拳を突き出した。体重ののったそれは、たったの一撃で少年を沈めかねない重い拳だった。
すんでのところで、少年は身をかわした。
この二カ月の間に武闘僧より教わった知識が役に立ったのだ。攻撃をしかける前に、人は必ず体勢を整える。拳にしろ蹴りにしろ、攻撃を放つ寸前に、筋肉が収縮する。相手の狙いを読み取り手足をどう動かすつもりなのか先読みしなければ、回避も反撃もできない。
相手の動きの流れを読むのだ。
神主が、拳を、蹴りを、繰り出してくる。ほんの少しかするだけで、皮膚が切れ、血が飛び散る。
力量差は歴然。かわすだけで精一杯だ。
このまま逃げ回っているだけでは、いずれは捕まってしまう。
しかし、反撃に移ろうにも、相手には全く隙がないのだ。
シャオロンは唇を噛みしめた。
あきらめては……駄目だ。
反撃の機会は、いずれ巡ってくる……
シャオロンはセレスを思った。かよわい女性の身でありながら、『勇者の剣』の持ち手であるセレス。正義を信じ、邪悪と戦い続ける、美しく優しい強い女性（ヒト）……

（セレス様……オレも……オレも負けません！）

アジャンの姿の神主の攻撃を、シャオロンは持ち前の素早さで必死にかわしている。

「シャオロン！」

セレスは拳を握りしめ、体を震わせた。健闘はしているものの、シャオロンの敗色は濃厚だった。

身を乗り出し、瞳を凝らし、セレスは少年の戦いに心奪われていた。

それゆえ……

殺気に気づくのが遅れた。

「セレス！」

武闘僧がセレスの背後に飛び出す。彼が両腕を交差させて神獣の甲羅の装甲で弾き飛ばしたものは……巨大な卍手裏剣だった。人の頭ほどの大きさだ。

「忍者の襲撃です！」

ちょうど夜空の月に大きな雲がかかり……

暗い夜空の下ではおぼろげにしか見えなかったが……

草原には何処から運ばれてきたのかわからなかったが、小山のように大きな岩が置かれていた。

その上に、誰かが佇んでいる。

「女勇者セレス殿……今宵こそ、あなたをケルベゾールド神の御許に送ってしんぜよう」

知った声だった。

「あなたは！」

セレスはキッ！と敵をねめつけた。

「汚らしき魔王の使徒！忍者ジライね！」

「……」

武者震いなのだろうか？岩の上の人影がぶるぶると体を揺さぶっ

ている。
「……我が名を覚えられたのか」
「覚えるに決まってるでしょ！襲撃の度に名乗ったじゃない！トイレとか女湯とか変な所ばかりで、私を襲って！あなた、変態なんじゃないの？」
「あああああああぁ～」
忍者はぶるぶると震えながら、己の胸に手を当てた。心臓の動悸を押さえるかのように。
「いかんな……つい、遊びたくなってしまう。じゃが、セレス殿、お名残惜しいが、今宵が最後ぞ。六度あなたにまみえてきたが（つまり、ダイダラが仲間に加わるとわかってから二回襲っているのだ、この男は）、七度目の今宵、あなたの命は尽きる」
フフフと低く笑ってから、忍者は首を動かした。対峙している赤毛の傭兵と東国の少年を見ているのだろう。
「仲間割れとは好都合……きさまは一人の相手をすればいい。あそこのハゲの男、あれを殺せ」
忍者は誰と話しているのだろう？セレスがそう思った時……小山が動いた。
「行け、ダイダラ！」
ジライが佇んでいる岩が、大地を踏み鳴らし近づいて来る。
ロック・ゴーレムか？と、セレスとナーダは身構えたのだが……
雲が流れ、月の光が草原に注がれる……
月の光に照らされたそれは……
肩にジライをのせた、それは……
一つ目の鬼であった。
着物と袴からなる忍者装束に、肩までの乱れ髪の大男。その額には……角が生えているのだ。
顔の真ん中にあるただ一つの大きな眼球をぎょろつかせ、それはセレスの太ももよりも太い右腕を振り回し、棍棒を振り下ろした。
狙いは武闘僧だった。

凄まじい衝撃に大地が揺れる。
武闘僧は左へ女勇者は右へと跳躍してその攻撃を避けたのだが、二人が別れる事こそ敵の狙いだったのだ。
ダイダラと呼ばれた一つ目鬼は、巨体のわりに動きは敏捷で、ナーダは敵の攻撃をかわして走るしかなかった。棍棒も人間の子供ほどある巨大なもの。いかに筋骨逞しい武闘僧でも、あの棍棒で急所を殴られれば骨砕けて絶命するだろう。
ナーダのもとへ走ろうとしたセレスの前に、ふわりと忍者ジライが降り立つ。黒装束に覆面、背には忍刀（しのびがたな）。しかし、今までとは異なり、腰にサムライのように大小の二刀を差している。ジライの手は印を結んでいた。
「忍法、火焔の術！」
中心にジライとセレスを置いて大きな円を描き、火が走る。
忍者に操られた火が、野原の草を焼いてく。
煙がのぼり、火の粉が舞う。
セレスは周囲を見渡し、自分が炎の中に閉じ込められたのだと知った。炎と煙に阻まれ、視界がきかない。そばにいた仲間の姿すら見えない。
炎は乾燥した草々を焼き、凄まじい勢いで広がってゆく。熱風に煽られ、セレスは顔をしかめた。
（シャオロン……アジャン……ナーダ……）
仲間の身を案じる女勇者を、手裏剣が襲う。
忍者は一度に数本の手裏剣を投げてくる。頭を狙う手裏剣は『虹の小剣』ではじき、可能な限り身をかわして攻撃を避けた。白銀の鎧に何度も手裏剣が命中する。頑丈な神聖防具を身につけていなければ、体中を貫かれているところだ。
迫り来る手裏剣を『虹の小剣』ではじこうとして、セレスは気づいた。細い針にも似たそれには、小さな袋が付けられており、パチパチと火がはぜているのだ。
弾いた途端、手裏剣に巻きつけられていた小袋は爆発した。

「きゃあ！」
爆発の威力は小さい。むしろ、その衝撃と音にセレスは驚いたのだ。『虹の小剣』がセレスの手より、宙に舞った。
「お覚悟！」
丸腰となったセレスに、忍刀が迫った。

走りながら印を結び、武闘僧ナーダは巨人に向かって浄化の魔法を放った。
けれども、単眼の鬼は全く動ぜず、棍棒を振り回してくる。何のダメージも受けていない。
（嘘でしょ！こいつ、魔族じゃないんですか！こんな人間離れした外見なのに！）
両手を高々と上げてた交差させ、頭を狙い振り下ろされた棍棒を腕の装甲で受け止める。しかし、我が身を支えきれず、勢いのままにナーダは後方へ弾き飛ばされてしまった。
武闘僧はよろけながらも、すばやく体勢をたて直した。止まっていては棍棒の餌食となる。
棍棒を避けながら、ナーダは『麻痺』の呪文を詠唱した。『麻痺』の魔法が完全にかかれば、敵は全く動けなくなる。魔法耐性の高い人間相手でも、手足を痺れさせ、動きを鈍らせる効果はある。
ところが……
棍棒の動きに、全く変化はなかった。
『眠り』へと誘う魔法も、『敏捷低下』も、『攻撃力低下』も、かからない。弱体魔法が全てはじかれてしまう。
神聖防具を身につけているようにも、魔法で結界を張っているようにも見えないのだが……
（こいつ……本当に人間なんですか……？）
大柄なナーダよりも一回り大きな巨体。単眼、そして、額には角……

一つ目鬼が力まかせに振り回す棍棒に、ナーダはなす術がなかった。腕や脚の神聖防具をもってすれば棍棒を受け止める事はできるのだが、体がその衝撃に耐えられないのだ。はじき飛ばされ、押しやられ、転ばされてしまう。

（この私が……）

インディラ寺院一の武闘の才を誇り、怪力を自慢していた彼が……敵に良いように翻弄されている。屈辱のあまり、武闘僧の顔は紅潮した。

（この私が負ける？冗談ではありません！）

一つ目鬼が振り下ろした棍棒が、何もない空に弾かれる。巨人は続けざまに、棍棒を振り下ろした。が、全てナーダに届かない。目に見えない壁が、二人の間にあるのだ。

ナーダが結界を張ったのだ。

重い攻撃も、魔法の障壁の前には無力。結界魔法は不得手だった（シャオロンの村の火災を消した時も、村全体を覆う結界は十分足らずしかもたなかった。範囲が広くなるほど、持続時間も短くなる）が、一時間はゆうにもつ。結界の内に籠っていれば負傷も敗北もない。

しかし……

巨人は単眼を大きく見開き、鼻の穴をひろげ、棍棒を振りかざし、振り下ろす。何度も、何度も。武闘僧に当たるまで、ひたすら同じ攻撃を続ける気なのだ。

何の工夫もない、力まかせの攻撃……武闘の素人の動きだ。

そんな人間を相手に、亀のように結界の内に籠ってやり過ごすなど……インディラ一（いち）の武闘僧のとるべき道ではない。

許されるのは勝利のみ。

己の『敏捷性』『攻撃力』『防御力』を上昇させる強化魔法を唱え終えると、武闘僧は結界を解いた。魔法で能力を向上させての格闘も本意ではなかったが、敵が物騒な獲物を持っている以上、勝つ為にはこれしかない。

素早さが増したナーダの動きに、敵の反応が遅れがちとなる。ナーダは敵の懐に飛び込む機会をうかがっていた。だが、その機会を、自分の背のモノがもたらしてくれるとは、彼も予想だにしていなかった。

凄まじい金属音が響く。

忍者ジライは後方に跳び退り、手に握っていたモノを投げ捨てた。刃が折れ、武器としての役目を果たせなくなった忍刀を。

女勇者セレスは、巨大な魔法剣『勇者の剣』を構えていた。忍刀で斬られる寸前に『勇者の剣』を呼び寄せ、大魔王さえ葬れるその凄まじい威力をもって、ジライの愛刀を折ったのだ。

忍者は瞳を細め、覆面の下に笑みを浮かべた。

「面白い……やはり、勇者はこうでなくては、な」

そして腰を低くし、右手で大刀の柄に手をかけ、左手を鯉口にそえ、立居合（たちいあい）の姿勢をとる。

セレスは『勇者の剣』を構え直した。今、大剣は空気のように軽い。持っている気すらしない。敵が素早い抜刀術で仕掛けてきても防げるだろう。

赤らかに燃える炎に照らされ、対峙する二人……

じりじりと足の裏をするように進み、忍者が距離を詰めてくる。

周囲の炎の勢いは強い。煙が流れてきて目が痛く、セレスは咳が堪えられなくなっていた。だが、忍者から目を離してはいけない。不用意に仕掛けるのも危険だ。

炎が燃え上がる。

忍者がゆっくりと距離を詰めてくる。煙にまかれても苦しくないのか、呼吸に乱れはなく、焦りもない。

焦（じ）れているのは、むしろ、セレスの方が。炎にまかれる恐怖もあるが、仲間の身が心配だった。龍の試練を受けているシャオロンと、神主に体を渡しているアジャン。戦闘中だった二人は、この襲撃と

火事でどうなっただろう？一つ目鬼に襲われていたナーダは？
ジライとの距離はまだ開いている。
先に仕掛けては分が悪いとわかっていたが、肉体的にも精神的にもセレスは限界に近づいていた。じきに呼吸ができなくなる。敵を倒し、『勇者の剣』をもって燃え盛る草を払わねば、焼死してしまう。
（勇者の剣、お願い、力を貸して。眼の前の敵を倒して、みんなを助けなきゃ！）
セレスは剣を構え、ジライの元へと走った。
敵が覆面の下でほくそ笑んでいるとも、気づかずに。
『勇者の剣』を振りおろし、敵を両断しようとした刹那、斬り裂くべき目標が消え失せる。
忍者は素早い体術で体をずらし、横に跳んで攻撃を避けると、風のように走り抜刀した。セレスの首を斬りはねるべく。
しかし、ジライの刀が女勇者に触れる前に、刃が彼の企みを阻む。
「む？」
『勇者の剣』だった。
セレスは柄を握っていない。ジライを斬りそこねた姿勢のまま、女勇者は手を下方に向け何もない空を掴んでいる。『勇者の剣』は宙に浮かんでいた。
魔法剣が自らの意志で動き、持ち手を守ったのだ。
ジライの刀と『勇者の剣』は、互いを押し合ったが、両者譲らず、距離は縮まらない。ジライの刀は刀身に、赤黒い模様がついていた。セレスには読み取れなかったが、それは魔族と契約する者のみが知る言葉……邪法を誘う血文字であった。
急ぎセレスが『勇者の剣』を握る。すると、ジライは力負けをした。忍刀の時とは異なり刀が折れる事こそなかったが、『勇者の剣』の威力に屈し後方にはじかれてしまう。
「チッ！」
倒れる前に両足をついて地をする事で勢いを殺し、忍者は踏みと

どまった。
セレスは剣を構えた。が、不用意には仕掛けられない。ためらいを見せる彼女に、忍者は覆面から侮蔑の眼差しを覗かせた。
「剣に守られ、剣ゆえに命を拾うか……しょせんは、おなごか」
「何ですって！」
「悔しいのか？なれば、同等の武器を持つ者に勝ってみせい」
忍者は右手でのみ刀を構え、左手で素早く印を切って気を高めた。忍法を放たれるのか？と、セレスは警戒した。しかし、忍者は高めた気を全て、己の刀に向けた。
「解呪」
刀身が光り輝き……
血文字が消え失せる。
曇り一つない、冴え冴えとした刀を握り、ジライが宙を一文字に切る。
セレスは我が目を疑った。忍者の刀から水が飛び散ったように見えたからだ。
「こやつ、振る度に雨が降るのよ。目障りなので邪法にて水を封じておるのだが、これは封印しておっても充分そこらのナマクラ刀よりも強い。しかし、解呪した後にこそ、真の力を発揮する……おまえに防げるか？」
迫り来る忍者。
セレスは、ジライの刃を『勇者の剣』で受け止めた。
その瞬間、ジライの刃が、岩を砕く波のような水飛沫をあげる。
『勇者の剣』はウォォォォォンと異音をあげ……
セレスの腕に重くのしかかってきた。
「え？」
『勇者の剣』の重量が男性一人分に戻ってしまったのだ。高々と持ち上げる事ができず、セレスは剣先を地面に落としてしまった。
そこへ、ジライの刃が迫る。
狙いは、鎧の無い頭部だ。

斬られる！
セレスは瞼を閉じた。
……しかし、幾ら待っても衝撃は訪れない。
目を開いたセレスの前に……
白の長髪、黒のローブの背があった。魔法で結界を張って忍者の刃を受け止めている、その魔法使いは……
「お師匠様！」
当代随一の魔法使い、大魔術師カルヴェルであった。

龍神湖の試練　3話

杖を頼りに佇む老魔術師は、にこにこ笑っていた。生死のやりとりをしているこの場にふさわしくない、楽しそうな笑みだ。

忍者は舌打ちを漏らし、刀を引いた。老魔術師の前には目に見えない結界がある。刀による物理攻撃も、刀の放つ神秘の水も、結界に阻まれてしまった。

殺気どころか敵意すら無い老人。相手を探るように見つめつつ、ジライは気を高め、忍法を放った。

「忍法、雷(いかずち)の術！」

天を裂き、老人へと、雷が落ちる。しかし、それも、目に見えぬ障壁に阻まれ、四散する。遅れて響く雷鳴が、ジライの耳にはむなしく聞こえた。

（こやつ……出来る）

「そこの忍者」

ホホホホと笑いながら、老人は杖を持たぬ左手でジライの刀を指さした。

「その刀、どこで手に入れた？」

「……」

「それは『ムラクモ』、正式名称は『アメノムラクモ』じゃ。太古のジャポネで、邪龍の尾より生まれ、英雄の手に渡り浄化された武器……つまりは、聖なる武器。この国のミカド（皇帝）より三代目勇者の従者のサムライに下賜され、代々、サムライの家に受け継がれておったはず。なにゆえ、おまえが持つ？」

「……」

「ダンマリか？無口じゃと、友達ができんぞ」

「……名を伺いたい」

「わしか？わしはカルヴェル。セレスの魔法の師じゃ」

「ほう」

忍者の黒の瞳が妖しく輝いた。
「ご高名はかねがね……勇者ランツと共に、さまざまな場所で珍しい伝説を残されたお方でしたな」
「ほほう。見たところお若そうじゃが、わしとランツの伝説を知っておるのか」
「……あなたとは、お手合わせいただきたく思っておりました。伝説は、しょせん伝説。人の言の葉ほどうつろいやすく、流されやすきものはござらぬ。誇張され膨れ上がった醜き伝説を、我が技術（テク）をもって木端微塵に打ち砕きたいと……ずっと思っており申した」
「ホホホ、気骨のある奴じゃのう。気に入ったわい、名は何と？」
「……東国忍者ジライ」
「ジライか。覚えておいてやるぞ。じゃから、今宵は、わしの顔を立てて、引いてはくれんかのう？」
にこにこにこと、老人は笑っている。
「それとも、今、わしとやり合うか？」
「……」
フンと息を吐き、忍者は刀を鞘に収めた。
「……いた仕方ござらぬ。今宵は、あなたのお顔をたててしんぜよう」
「すまぬのう」
ジライは己の実力を心得ていた。いかな彼でも、たった一人で、しかも、無策の状態では、大魔術師を敵に回して勝ち目はない。この場でジライにとどめを刺さぬ老人の意図はわからなかったが、相手が見逃すというのなら、それに乗るべきだろう。
忍者は横目で、今宵、殺すはずだった女性を見つめた。
「それでは、女勇者セレス殿……次にお会いする時は、あなたと戦いたいものですな」
ジライはまず遠方を見つめ、口笛を吹いた。それから、二人に背を向け、両手で印を結び、気を高める。
「忍法、わたつみの術！」

ジライの周囲から水が生まれて波となり、彼の前を塞ぐ火を消し去ってゆく。波は火をのみこみ、しばらくして草原より消え失せた。
尚も燃え盛る炎の向こうから、地響きを立て、大岩のような一つ目鬼が駆けて来る。巨大な棍棒を左肩にかついで。
忍者ジライは刀を素早く抜刀し、刀から飛び散る神秘の水で鬼の進むべき道を作ってやると、跳躍した。鬼の頭をまたぐ形で、その肩に飛び乗ったのだ。ジライを乗せたまま、鬼は炎広がる野原を駆け、樹海を目指し走り去って行った。

去りゆく忍者を眺めていたカルヴェルの背後より、しゅんとした声がかけられた。
「ありがとうございました……お師匠様」
カルヴェルは、やれやれと肩をすくめると、振り向きざまに杖で弟子の頭を軽く叩いた。
「セレス、おぬしは勇者じゃ。これしきの事で泣いてはいかん」
「……はい」
支えきれぬ『勇者の剣』を地面に刺して、セレスはうつむき、両手で顔を覆っていた。
「悔しいか？」
「……はい」
「ならば、精進せい」
「……はい」
しゃくりあげ、声を震わせながら、セレスは魔法の師に願いを伝えた。
「お師匠様……野原の火を……消してください……おねがいします」
「うむぅ」
カエルヴェルは首を傾げた。今、老人と女勇者は下界から遮断された結界の内にいる。この内にいる限り、炎で焼け死ぬ事も、煙に

まかれる心配もない。
「このままじゃ……火災が広がって……社も森も」
「社は燃えぬ。あそこは龍の結界に守られておるからの。まあ、これしきの火事、雨を呼べばすぐにも消せるのじゃが……しばし待て」
「……なぜ？」
「消火役をわしが奪っては、シャオロンが嘆く」
「え？」
「顔をあげて見てみよ。シャオロンの晴れ姿をのぅ」
セレスは涙で濡れた顔を急いでぬぐって、顔をあげた。
遠方に……
すばやく動く小さな体があった。
左腕につけた黒の小手から爪が伸びている。手首から手の甲を覆い更に指の先まで、細く長い爪が五本、銀色に光っている。腕の半分もあろうかという長さだ。その爪を一振りすると、水が舞う。先ほど、忍者が振るっていた『ムラクモ』のように。シャオロンが拳を振るう度、野原の炎が消えていった。
「『龍の爪』を装着し、精神を集中すれば、雨を降らせ、竜巻を呼べるはずなのじゃが、うまくいかんようじゃのう。まだまだ修行が必要じゃ。後もう少し待っても竜巻が呼べなんだら、わしが火を消そう」
「シャオロン……すごいわ……龍の試練を乗り越えたのね」
「ホホホホホ、神主の奴、大甘の採点をしておったわ。炎が広がった時、シャオロンは勝負を捨てて、社のそばの火を消しに走ったのじゃ。あそこが結界に守られておる事も、いかなる攻撃にさらされても滅びぬ事も知らずに、の。尊き龍の社を必死に守ろうとするシャオロンに、神主はいたく感激しておった」
「それで、『龍の爪』を……え？」
セレスは驚いたように、師を見つめた。
「お師匠様……なんで、そんなこと知ってるんです？」

「決まっておるわ」
老人は愉快そうに笑った。
「『勇者の剣』を返してからずっと、千里眼でおぬしらを覗いておったのよ」
「なんで……？」
「アフター・サービスじゃよ。『勇者の剣』が心を入れかえ大人しゅうなったか気になっての。で、どうじゃ、重さは？」
「……どんなに重くなっても、男の方を担いでいるくらいの重さです。それ以上には重くなりませんでした。でも……」
セレスの頬を涙が伝う。慌ててぬぐっても、後から後から、涙がこぼれ落ちる。
「『勇者の剣』が飛んで来てくれた時には、本当に軽かったんです……空気みたいに……だから、私」
「これ、これ、セレス、泣くでない」
女勇者の頭を、カルヴェルは笑いながら杖で小突いた。
セレスは涙で濡れた顔で、魔法の師匠を見つめた。
「おねがいです……お師匠様……私と一緒に来てください……私じゃ……女の私なんかじゃ、勇者は務まりません。『勇者の剣』やお師匠様が守ってくださらなければ、私……死んでました。私じゃ駄目なんです！」
感情を昂らせ、わーっと声をあげてセレスは泣いた。
悔しくて……みじめで……心細かった……
『勇者の剣』を振るえぬ勇者である事が……
不安にうちのめされた女勇者に対し、老人はのんびりと答える。
「前に言うたはずじゃ。わしを仲間にしたかったら、わしをうならせるセクシー・ポーズをせよ、とな。お色気も満足に見せられぬ嘴の黄色いひよっこでは、わしを意のままにできぬぞ」
「ふざけないでください！今は世界の危機なんですよ！大魔王が復活したんです！このままでは、人の世界は魔族に滅ぼされてしまいます！どうして……どうして、お師匠様は戦わないんです？おじ

い様と一緒に大魔王を倒した英雄なのに……どうして、私を……助けてくださらないんですか……？」

「わしは英雄などではない。わしは、今も昔も、世がどうなろうが構わぬ。わしさえ楽しければ、後はどうでもいいのじゃ」

「……嘘……」

「嘘ではない。わしはの、ランツが面白い男じゃったから、共に旅をしただけ。一緒におれば退屈しそうにないと思ってな。それで、たまたま大魔王を倒してしまっただけなのじゃ」

「嘘っ！」

「わしはな、いい加減な男なのよ。正義の為なんて志は、爪の垢ほどもないわ」

「嘘ですっ！お師匠様は……お師匠様は！」

「おまえのような堅物に、わしは合わぬぞ。おまえには、ああいう奴の方がふさわしい」

と、言って老人が指さした先には……

小さくて頼りないながらも、ふらふらと渦を巻く竜巻が動いていた。火災を消す為に動いているはずのそれが、逆に炎に煽られ進路を変えてしまう。

その竜巻を生み出した人物は……

炎のそばで、目を回し、ひっくりかえっていた。体力の限界まで戦い続け、無理な精神集中を続けた為、気を失ってしまったのだろう。

「シャオロン！」

セレスはわきめもふらずに走った。倒れている武闘家の少年のもとへと。武闘の素質が無いと言われ続け自分の非力さを嘆いていた少年は、見事『龍の爪』を手に入れ、使いこなそうと努力し……努力しすぎて気を失ったのだ。

（ごめんなさい、シャオロン……ごめんなさい）

セレスは心の中で何度も少年に詫びた。気弱になっていた自分が、とても恥ずかしく思えた。

走り去るセレスを見つめつつ、老魔術師は魔力を高め、雲を呼んだ。シャオロンの代わりに野原の火を消す為に。

雨に打たれながら、セレスはシャオロンを抱え起こした。
「大丈夫、シャオロン？」
「……はぃ」
かぼそい声の返事が返ってきた。セレスは胸が熱くなった。
「よくやったわね、シャオロン……偉いわ。本当に偉い……あなたは、立派よ」
少年は嬉しそうに、弱々しく微笑んだ。
「ほう、凄いじゃねえか、シャオロン。オレが寝てる間に『龍の爪』を手に入れたのか」
声の主はアジャンだった。神主の霊は離れたようだ。数時間の記憶のない彼は、セレスに説明を求めた。女勇者は、神主の事、龍の試練、忍者の襲撃を説明したのだが……憑依されていた間の記憶がない傭兵は、うさんくさそうな顔をするばかりだった。
「もういい。よくはわからんが、オレは風邪引いてぶっ倒れたんだろ？すげぇ悪寒と頭痛がしたのまでは覚えているぞ」
と、あくまでも古代の神官に体を明け渡していた事実を認めないのだ。
アジャンは衰弱しているシャオロンを見つめ、眉をしかめた。
「おい、ナーダはどうした？」
「ナーダ？」
セレスはハッとして口元を押さえた。武闘僧は巨大な一つ目鬼と戦っていた。先ほど、鬼は忍者と共に樹海へと走り去っていったが……
「坊主なんてのは、仲間の具合が悪い時ぐらいしか働きどころはないんだ。さっさと呼んで来い」
「ナーダ……どこに……？無事なのかしら？」

「……ここに居ますよ」
声のした方角に顔を向け、セレスとアジャンは驚いた。
武闘僧は見るも無残な姿に変わっていた。右目の辺りが紫に腫れあがり、顔は青あざだらけ、唇に血の跡が残っていた。左腕をだらりと垂らしているのは、肩の骨が外れているからだろうか。
「ナーダ……」
「どうした、おまえ、ボロボロじゃねえか！」
「あ？ああ、癒すのを忘れていただけです」
「……痛くないの、ナーダ？」
「……痛くなんかありません」
「負けたのか、おまえ？」と、アジャン。
武闘僧はカッと頬を赤く染めると、腰を落とし、怒りのままに右の拳を大地へと突き下ろした。地面は割れ、石が礫となって飛び散る。
「……負けたわけではありません」
あの時……
『勇者の剣』がナーダの背から離れ、宙を飛んだ時、一つ目鬼は驚き、体勢を崩した。その隙を狙い、棍棒をはじき飛ばしたのだが……
格闘戦になっても、優位に立てなかった。敵は力任せに拳を振るうだけなのに……勝てなかったのだ。
手首、足首、脛や関節、喉に首筋――人体の弱い箇所を攻撃しても、敵はまったく動じなかったのだ。指が折れ、右の手首がおかしな角度に曲がった後でさえ、気にせず、右手を使って力任せに殴ってきたのだ。
気をこめて重い拳を放っても、駄目だった。一つ目鬼は口から血を吐きながら、にやっと笑う始末。痛覚が無いに違いなかった。
いくら攻めても相手は痛みを感じず、ひるまないのだ。ナーダばかりがダメージをくらい、動きが鈍っていった。敵が戦いの中で、突如、耳を澄まし、走り去ってくれねば、どうなっていた事やら…

……

だが……

「誤解しないでください！私は負けたわけではありませんから！」

セレスはこくんこくんと頷いた。怒りのあまり声を荒げる武闘僧など、初めて見る。アジャンも、あっけにとられた顔をしていた。

「で？癒して欲しいのは誰ですって？シャオロンですか？今すぐ癒しましょう！」

「ちょっと待って、ナーダ！まずは、あなたよ！自分の怪我を治してちょうだい！」

雨に打たれる四人を、少し離れた所から老魔術師が見つめていた。

少しづつ成長していく彼等をほほえましく思いながら。

一方……

龍神湖からかなり離れた樹海の中で……

「泣くな、ダイダラ。我にみっともない顔を見せるな」

忍者ジライが、溜息をついていた。

武闘僧に外された関節や骨ははめてやった。だが、治療はそれで終わりではない。ダイダラの巨体に広がる打ち身に薬を塗ってやるのは、面倒な作業だった。

「後、痛いのは何処だ？指させ」

『あぁ』とも『えぇ』ともとれるはっきりしない声でうめき、ジライの義弟ダイダラは大きな指で背を指した。

「……ひどくやられたものだ。おまえがここまでやられるとは」

戦闘中、ダイダラは忍術によって、視覚・聴覚以外の感覚を鈍らせ、外界からの刺激を断っている。その間は、熱さ、冷たさ、痛さを感じない無敵の体となるわけだが、ダメージは蓄積されており、術が解けた後の痛みは凄まじいものだった。

単眼の鬼は、すがるように義兄を見つめた。
知恵おくれで、この外見。その上、上役であった上忍に舌を抜かれ口がきけなくなった巨人……里の誰もがダイダラを蔑み、からかい、いたぶった。
だが、ジライだけは違った。ずっと、昔からだ。ダイダラが子供であった時から、この義兄は何かと目をかけてくれた。頭の悪いダイダラに根気よく技を教えてくれたのも、彼だけだった。いつもなじるような冷たい言葉をかけてくるのだが、口調はやさしく、決して不当な暴力はふるわない。
「大魔術師カルヴェルが陰ながら女勇者を護衛してるとあっては、おまえと二人で戦っても勝てぬ。仲間を呼び、策を練ってから、改めてきゃつらに挑もう。ダイダラ、次もあのハゲと戦いたいか？嫌なら他の者をあてる。やりたければ、頷け」
無情な命令しか与えてくれない他の上役と、ジライは違う。こんな風に意思を尋ねてくれる者は、他にいない。
ダイダラは頷き、義兄をじっと見つめた。義兄のそばにずっと居て、義兄の期待に応えたかった。白く美しい顔に笑みを浮かべる義兄に褒めてもらいたい……
その為には、命も惜しくなかった……

龍神湖の試練　3話（後書き）

『龍神湖の試練』　完。

次回は『聖なる武器』。舞台はジャポネ。
カルヴェルの話です。

聖なる武器　1話

「当家に伝わる聖なる武器『ムラクモ』にございます」

大魔術師カルヴェルは、奥座敷の刀掛けにかけられている刀を見つめた。長い年月を経た古びこそ見えたが、木製の柄には鮫の皮をかぶせており、黒や金の漆で模様が描かれた鞘も見事な造り。所有者が、ミカド（皇帝）より下賜された刀を丁重に扱っている事が伝わる。

しかし……

眼の前の刀は贋物だった。

『ムラクモ（アメノムラクモ）』ではない。

カルヴェルは、聖なる武器に反応する魔法の鈴を持っていた。聖なる武器に近づければ、鈴は心地よい音を鳴らすはず。だが、ずっと無反応なのだ。

刀の所有者のサムライ（ジャポネの剣士）は、ひどく緊張していた。当代随一の魔術師の所望で、家宝の刀をお目に掛けているのだ。顔には誇らしさと、名刀を軽々しく扱うまいという気構えが浮かんでいた。

……贋物だと気づいていないのだ。

「眼福つかまつった。かたじけないのう」

老魔術師がそう言うと、サムライは安堵の息を漏らした。ミカドから下賜された刀をおろそかに扱えば、ミカドへの不敬に当たる。

『ムラクモ』を客人に見せるのは、とても神経を使う事なのだ。

隣室に案内され茶を出されたカルヴェルは、遠慮なくサムライに尋ねてみた。

「貴公は『ムラクモ』が抜けるのかの？」

「いえ……恥ずかしながら、それがしは『ムラクモ』に主人（あるじ）と認

められておりませぬ」
　サムライは苦笑を浮かべた。
「カルヴェル様はご存じにござろうが、『ムラクモ』は主人を選ぶ刀。資格無き者は、『ムラクモ』を鞘より抜けませぬ。それがしも、それがしの父も未熟ゆえ『ムラクモ』を抜けませなんだ。今は赤子の我が惣領が成人した折には、選ばれて欲しいと切に願っておる次第で」
（と、なると、祖父の代までは本物であったが、父の代より贋物であった可能性が高い。『ムラクモ』が主人を選ぶという伝説を逆手にとって、接着剤で鞘より抜けぬよう細工した刀と本物をすり替えたのじゃな）
　丁寧に礼を述べ、カルヴェルはサムライの家を辞去した。『ムラクモ』が贋物である事は教えずに家を出た。知れば、あのかたっ苦しい性格のサムライ、自責の念で切腹しかねないからだ。
　幸いな事に、神社に奉納されている『破魔の強弓』は無事だった。『ムラクモ』も魔族の手には渡ってはいなかった。が、使い手が大魔王教徒の忍者では、あまり良い状況とはいえない。
　ただ……あのサムライが言っていた通り、『ムラクモ』は主人を選ぶ刀だ。邪悪な者が触れても、刀は鞘から抜けないはず。
　聖なる武器は『勇者の剣』を筆頭に、結構、わがままな性格をしている。事実、カルヴェルのコレクションも、使用者に厳しい装備条件を要求している。『聖王の剣』は王たる資質を、『雷神の槍』は槍の名手である技量を、『虹の小剣』は美貌を、『エルフの弓』は心の美しさを求める。条件にかなわない者は、武器を振るえないし、『勇者の剣』のように、触れるでない！と怒って攻撃してくる武器すらある。
　先日、武闘家の少年シャオロンが手に入れた『龍の爪』は、龍と同化できる精神的資質、つまり神の憑代となれる器か否かを問う。

霊感体質のシャオロンは龍に気に入られ、見事、左手用の爪を手に入れたのだ。

『ムラクモ』は邪龍の尾より生まれ、英雄の手に渡り浄化された武器。あれが使い手に求めるのは……

（無私無欲のはず……）

カルヴェルは首をひねった。

おかしい、と、思いながら。

聖なる武器は、永遠に所有できるものではない。手に入れた時点で使用条件に適していても、持ち手が堕落すれば武器は主人を見捨てる。

けれども、『ムラクモ』は、使用者が悪行に身を染めているのに怒っていなかった。持ち手が振るえば雨を呼ぶ、その神秘の力を示していた。邪法の血文字を刀身に刻まれ、邪法によって辱められていたというのに、だ。

（何か細工があるのか……『ムラクモ』がよほど持ち手に惚れているかじゃなあ）

なんにせよ面白いと、老人はホホホと笑うのであった。

昼過ぎに、老魔術師がセレス達の宿泊先の旅籠へ顔を出すと、宿には赤毛の傭兵しか居なかった。

他の者は？と問うと、剣を研いでいた傭兵は無言で手紙を見せた。

『町を騒がせている夜盗団を退治してきます　セレス』

「夜盗退治？大魔王教徒の夜盗団なのか？」

「いや、ただの夜盗だ。最近、あの三人、妙に熱血で、な。腕試しやら、人助けやらで、やたら、いろんな事件に首を突っ込むんだ」

「で、おぬしは、おいてけぼりか？」

「遊郭（娼館）から帰って来たら、誰もいなかった。あいつら、徹夜で夜盗退治をしてやがるんだ」

「ほほう」

アジャンは、ぼりぼりと頭を掻いた。
「シャオロンはいいんだ。あいつは仇を呼び寄せる為に、『龍の爪』で派手に暴れなきゃな。セレスも、まあ、わかる。『勇者の剣』で戦う機会が少しでも欲しいんだろう」
「セレス、使えておるのか、『勇者の剣』を？」
赤毛の傭兵は肩をすくめた。
「『勇者の剣』様の気分次第だが、どうにか、な。雑魚敵ばかりだし……クソ坊主がセレスとシャオロンの側にはりついて護衛してるから二人とも大きな怪我はないみたいだが……」
赤毛の傭兵は溜息をついた。
「あのクソ坊主まで、うっとうしいほど熱血になりやがって……非常に迷惑だ」
「ほほう、ナーダが熱血？」
アジャンは頷いた。
「朝から晩まで、修行、修行、修行！でなきゃ、悪人退治だ。休む暇も惜しむように体を鍛えてやがる」
「ほう、ほう」
「俺は戦ってるところは見てねえんだが、暗殺者の忍者の手下に、あいつ、ボコボコにされたらしい。お高いプライドを傷つけられて、大僧正候補様はお冠（かんむり）なのさ」
「ホホホホホ。そうか、好敵手を得て、ナーダが熱血か。そうと知れば、大僧正も喜ぶじゃろうて。外界より目をそむけ総本山に籠るナーダを、気に掛けておったからのう」
「ジジイ、インディラの大僧正と知り合いなのか？」
「茶飲み友達じゃ。移動魔法という足があるでの、わしには世界中にお友達がおるのよ」
ふんと息を吐いてから、アジャンは顔をしかめ、視線を外し、口元を歪めた。
「じいさん……あんたに頼みがあるんだが……」
それっきり、言いにくそうに黙ってしまう。『ジジイ』ではなく

『じいさん』と呼称を改めた事といい、傲岸な彼らしくない。
「何じゃ？」
「……あんた、『虹の小剣』と『エルフの弓』以外の聖なる武器を持っているか？持ってたら、しばらく貸してほしいんだが……」
カルヴェルは、にっこりと笑みを浮かべた。
「持っておるぞ。所有しておるのは後七つじゃが、ゆえあって封印してあるモノが多くてのぅ、人に貸せるのは後二つしかない」
「貸してくれ」
睨むように、アジャンが老人を見つめる。
「俺の大剣じゃ、魔族は斬れん。神聖魔法をかけてもらえば斬れるが、すぐに効果が切れちまう。仕方ねえんで魔族相手の時は『虹の小剣』を借りたりしてるんだが、ありゃ、どうも手に馴染まなくてな、斬った気がしねえんだ」
「なるほど」
老人はにこにこ笑った。
「ちょっと野性的すぎてむさくるしいが、『虹の小剣』を使えたか」
「ん？」
「いや、いや、何でもない」
『虹の小剣』の装備条件は美貌。美形とはいえ逞しすぎるアジャンでも、『虹の小剣』的にはＯＫなのだろう。
「『エルフの弓』は試してみたか？」
『エルフの弓』は装備者に心の美しさを求める。
アジャンはかぶりを振った。
「弓は苦手だ」
「ふむぅ」
カルヴェルは長い顎鬚を撫でた。
今、人に貸す事ができる武器は二つ。片手剣の『聖王の剣』と、『雷神の槍』。しかし、聖なる武器は容易に装備できるものではない。
「今、持ってきてやる。じゃが、赤毛の傭兵、聖なる武器は持ち手

を選ぶ。武器に選ばれなんだ時は、素直に諦めるんじゃぞ」

『聖王の剣』は王たる資質を、『雷神の槍』は槍の名手である事を、装備者に求める。

移動魔法で二つの武器を運んできたカルヴェルは、アジャンを宿屋の裏に誘い、試し振りをするよう勧めた。

建物の裏手には宿泊客の為の厩と倉があり、その手前に荷車や駕籠も置ける広い空地があった。まだ昼過ぎなので宿泊客も少ないのだろう、荷車は二台しかなく、武器を振るうのに充分な広さがあった。

老人が浮遊魔法で宙に浮かばせる二つの武器、『聖王の剣』と『雷神の槍』。

赤毛の戦士は迷う事なく、片手剣を手に取った。

柄はいぶし金地に幾何学模様が施され、柄頭は豪奢な獅子頭の浮き彫り。華美な装飾に眉をひそめながら、傭兵は『聖王の剣』をすらりと鞘から抜いた。

「ほほう」

カルヴェルは感嘆の声を漏らした。

（こやつ、王たる器であったか）

傭兵は剣を右手に持ち、構え、素早く振る。ぶんと風が鳴り、空が切られる。二度、三度と空を切ってから、アジャンは刃を鞘に収めた。

「ちょっと軽すぎるが、悪かないな。借りてもいいか？」

「うむ。『聖王の剣』がおまえに所持を許した以上、とやかくは言わぬよ。好きに使うがいい」

「で、これの借り賃なんだが、何を幾ら払えばいい？」

「おまえが、それで、セレスを守ってくれればよい」

「いや、セレスの護衛料はエウロペ国王から貰っている。二重取りはできん」

「……おぬし、意外とマジメなんじゃのう」
「傭兵稼業は信用第一。明朗会計でやっている」
「ホホホ……ならば、出世払いといこう。おぬしが押しも押されぬ地位についた時、なんぞ一つ願い事をする。おぬしは、それが何であれ、わしの言う事を聞くというのでどうじゃ？」
「出世払いだ？俺ぁ、仕官なんかしねえぞ」
「仕官せずとも、星回りが良ければ、おぬし、大出世する。まあ、凶運に憑かれれば芽が出ぬまま非業の最期を迎えるであろうがの」
「なんだ、ジジイ、預言か？」
「うむ、預言じゃ。わしのものではないがの」
老人の視線は、赤毛の戦士の手の『聖王の剣』に向いていた。
赤毛の戦士は顔をしかめた。
「ありえない未来を口にされても困る……いつでもいい、願い事ができたら言え。できる事なら必ず果たし、借りは返す」
赤毛の戦士は、『聖王の剣』を腰に差した。
と、そこへ……
引き綱で馬を連れた女勇者一行が、建物の外回りより現れる。厩に馬を預けに行く途中のようだ。セレス、シャオロン、ナーダは、赤毛の傭兵と一緒にいる人物に視線を向けた。
シャオロンが、元気よく、ぺこりと頭を下げた。背に大きな革袋を背負っている。中に『龍の爪』が入っているのだろう。
ナーダも軽く会釈をした。
「お師匠様……」
『勇者の剣』を背負ったセレスが、表情を曇らせる。老人への挨拶もぎこちない。
老魔術師は鷹揚に会釈を返した。少し寂しく思いつつ。
（……嫌われたようじゃの）
『わしは、今も昔も、世がどうなろうが構わぬ。わしさえ楽しけれ

ば、後はどうでもいいのじゃ』

と、言って、先日、カルヴェルは、勇者一行に加わって欲しいと切に訴えたセレスの願いを拒絶した。

セレスは師匠に失望しているのだ。断るにしても、もう少しまともな理由を述べればよかったのかもしれない。そうすれば、セレスの純粋な敬意を失わずにすんだだろう。目をきらきらと輝かせ、セレスは心からカルヴェルを慕っていた。祖父の親友で、大魔王を倒した英雄の一人であるカルヴェルを。

しかし、今は……

「どういったご用件でしょうか？」

態度も口調も、妙によそよそしい。

カルヴェルはホホホホといつもの笑い声をあげた。

「単なる陣中見舞いじゃ。したら、そこの赤毛の傭兵が聖なる武器を欲しがっての、『聖王の剣』を貸す事になった。のう、『雷神の槍』は試してみんのか？」

「槍はいらん。不得手だ」と、アジャン。

「何じゃだらしない。『雷神の槍』は名槍じゃぞ。突くも良し、断ち切るも良し、殴打も良しの、鋭くて丈夫な槍じゃ。大岩も難なく砕け、その上、雷撃魔法まで放てる。名槍を前に無視はいかんぞ、無視は」

「その槍、私に見せていただけませんか？」

そう言って進み出たのは、武闘僧ナーダだった。目の下に隈ができ、頬はややつれていた。が、全身は気力に満ちており、糸目も鋭い。

「僧侶のくせに、光物を持つ気か？ナラカの甥よ」

『ナラカの甥』と呼ばれると伯父を嫌っているナーダは、いつもであれば、すぐに平常心を失う。けれども、感情を不必要に昂らせる事なく、ナーダは言葉を続けた。

「どうしても倒したい敵がいるのです。ですが、そいつ、非常識なほど大きくて頑丈な棍棒を持っていて素手では太刀打ちできませんでした。そいつと渡り合える獲物を、このところずっと探していたのですが、どれも二級、三級品ばかり。うんざりしていたところです。名槍とやらを、是非、見せてください」

「見せるのは構わんが……」

使えんと思うぞ、という後に続く語は口の中で消した。

（『雷神の槍』は技量の足りぬ者が持つと、怒って雷撃を放つのじゃが……ま、口で言うより身をもってわからせた方が早かろう）

カルヴェルは浮遊させていた『雷神の槍』を、ナーダの前の宙へと運んだ。

『雷神の槍』は、儀礼用の槍のように刃に雷を示す彫刻や透かし彫りが施されている。だが、刃先は鋭く、大きく、長刀としても使えそうだ。柄は黒塗りだ。

武闘僧は馬の引き綱をシャオロンに任せ、槍を右手でむんずと掴んだ。

「ほう」

槍は雷撃を放たなかった。

ナーダは槍を両手で持ち、上段、下段と構え、ぶんと振り回し、上段、中段、下段と突き分け、槍を構えつつ蹴りを放ち、最後に回転を利して一振り後方の宙を切ってから再び前方を向き中段の構えをとった。

その見事な演武に、シャオロンは目を輝かせ、セレスは意外そうに驚き、アジャンも技量を測るかのように動きを鋭く見つめていた。

（インディラ式棒術の型……しかも、早い。棒術は寺院でも教えておるが、こやつの、これ、基本的には寺に入る前に生家で身につけたものじゃな。微妙に寺院のものと違う）

武闘僧は、ハーッとため息をついた。

「……鈍（なま）ってますね、やはり」

悔しそうに眉をしかめてから、老魔術師に尋ねる。

「お借りしてもよろしいでしょうか？」
「構わんぞ。雷を放ちたい時は精神を集中し、切っ先を放つべき対象に向け、『雷よ、来たれ』と叫べばよい」
「わかりました。でも、雷撃魔法は使いません。敵と五分の条件で対戦したいので……」
そう言ってから、キッ！と赤毛の傭兵を睨む。
「少し付き合っていただけませんか？私、槍はあまり得意ではありませんので」
それだけ使えれば充分だろと言いかけた傭兵を制し、武闘僧が詰め寄る。
「あなたも慣れぬ新しい武器にとまどっておられるはず！ここは手に手を取り合って共に精進し、共に高みを目指すべきです！」
「高みなんぞ目指すか！俺は料金分の仕事しかやらん！」
「なら、稽古料、払います。それなら、いいでしょ？」
「幾ら出す？」
「言い値で結構です。次回、インディラ寺院に立ち寄った時に用立ててもらいます」
「ふん。俺は金持ちからはふんだくる主義だぞ」
「いいですよ、別に。俗世の貨幣なんて興味ありませんから。もっとも……あなたが弱すぎて、私が逆に稽古をつける事になっちゃったら払うのは嫌ですけどね」
「ほほ～う。おもしろい事、言ってくれるじゃねえか、クソ坊主」
赤毛の傭兵は『聖王の剣』を抜いた。
「ジジイ！これには追加効果があるのか？雷の魔法とか、竜巻とか、何か？」
「特にない」
きっぱりと老人は言い切った。
「じゃが、それを持っておると、徳が高くなると言われておる」
「ケッ！くそくらえ、だ！」
片手剣と槍を手に向かい合う二人。

セレスとシャオロンは真剣な表情で、二人の対決を見守っている。実戦経験豊富な傭兵と、武闘を極めてきた僧侶。二人がどのように戦うのか見学するだけで、彼等には刺激となり良い勉強となるだろう。

二人は対峙したまま動かない。獲物の長さで武闘僧に利があったが、赤毛の傭兵は異常なほど勘が良く変則的に動く。絶妙な一撃でなければ、避けられてしまうだろう。

ただならぬ雰囲気を察したのか、三頭の馬が落ち着きをなくし始めた。カツカツと前脚で地面を掘ったり、いななき、首を振ったりしている。

「わしが厩まで連れて行こう、手綱を寄越せ」

老魔術師がそう言うと、とんでもない！と少年はかぶりを振った。が、『赤毛の傭兵達の戦いを見学し、武闘の道に精進せよ』と諭すと、恐縮し何度も礼を述べながらも二頭分の手綱を渡してきた。この戦い、見学したいのだろう。

セレスも『ありがとうございます』と手綱を渡してきた。が、やはり、よそよそしい。

老人は苦笑を漏らしながら、セレス達に背を向け、三頭の馬を魔法で引いて厩を目指した。

勝敗は見なくてもわかる。赤毛の傭兵が勝つ。しかし、ナーダも善戦はするだろう。切磋琢磨し互いを高め合ってゆく若者達は、見ているだけで微笑ましい。

厩に近づくと、中から黒の束髪のサムライが現れ、すれ違った。着流し姿だ。厩に馬を預けている旅籠の宿泊客と思われたが。

リィィィーン。

老人の懐から、心地よい鈴の音が響いた。

カルヴェルは眉をしかめた。懐には、聖なる武器に反応する魔法の鈴を入れてある。鈴は聖なる武器に近づければ、心地よい音を鳴らすのだ。

カルヴェルのコレクションの九つの武器と、『勇者の剣』、『龍

の爪』には反応しないよう、既に設定してある。
それ以外の武器を……
あのサムライが持っているのだ。
サムライは腰に大小の刀を差している。
他にも武器を隠し持っているのかもしれないが、このジャポネで聖なる武器を持っている人間は限られる。
カルヴェルはカマをかけてみた。
「これ、忍者ジライ、すれ違ったのに挨拶は抜きか？」
サムライは振り返りもせずに、歩いて行く。
カルヴェルは魔法で馬を厩へ自ら歩かせ、サムライの後を追った。
サムライは悠然と、厩の裏の木立へと向かっている。散策を楽しんでいる態(てい)だ。
枯葉舞う木立。落ち葉を草履で踏みしめ歩く男。
セレス達から充分距離をとった事を確信してから、カルヴェルは恫喝の声をあげた。
「忍者ジライ！わしを無視するか？ならば、この前の夜の続き、今から、ここでやるぞ。よいな？」
相手を威圧する為に、カルヴェルは魔力を高め、自身の体にまとわせた。今世一の大魔法使いの気の凄まじさに、空はうねり、つむじ風が生まれ、木の葉が舞い上がる。
サムライは足を止め、ゆっくりと振り返った。素浪人風だが、切れ長の瞳の美形だ。
「……大魔術師カルヴェル殿、ご挨拶が遅れて申し訳ない。正体を隠すは忍の常。非礼のほど、どうかご容赦を」
サムライ姿の男は、頭を下げた。その身なりにふさわしい、武家の所作で。
カルヴェルは気を静め、いつもの漂々とした顔を見せた。宙に舞い上がっていた枯葉も地に落ちる。
「ホホホ。よいわ、許してやる」
「かたじけない」

「許す。が、代わりに、おぬし、今日はつきあえ」
「む？」
サムライ姿の男が眉をしかめる。
「どこぞで、この前の続きをいたしますか？」
「いやいや。そんな無粋な事ではない。わしは気骨ある若者が好きでの。せっかく再会できたのじゃ、今日はおぬしと親睦を深めたい」
「……」
しばらく無言で男はカルヴェルを見つめていた。その意図を測るかのように。
「嫌か？」
薄く笑い、男は頭を横に振った。
「……いえ。承知つかまつった。なれど、女勇者の傍では落ち着きませぬ。話は別所で承ろう。我（われ）は……」
と、言って、ちらりと視線を天に向ける。秋も深まってきたというのに、日差しはまだ強い。
「少々、支度がござる。半刻後、旅籠の前で」
「逃げるなよ、忍者」
「無駄な事はいたしませぬ。移動魔法の使い手相手に逃亡をくわだてるは愚か」
「ホホホ、賢いのう。では、後ほど」

頭巾を被り袴を履いて、サムライ姿の男は旅籠の前の日陰で待っていた。カルヴェルが現れると会釈をし、忍者はやおら道を歩き出した。
「どこでも構いませぬが、長くなるのなら屋根の下で話をしたいのでござるが」
「日焼けが怖いのか？妙な染め粉で肌を染めておるようじゃが」
忍者はぴたっと足を止め、頭巾よりのぞく横目でじろりと睨みつけてくる。

「よくおわかりになりましたなあ」
「化粧をしているかどうかは、一目見ればわかる。幾千幾万のおなごや男娼の肌を見てきたからの」
ホホホホと愉快そうに、老人は笑った。
「おぬし、肌が弱いのであろう？さきほども日差しを怨めしげに見つめておったし、の」
「……」
「ダンマリか。口下手では友達ができんと忠告したはずじゃが」
ぷいと顔をそむけ、忍者はゆっくりと歩き出す。腰に『ムラクモ』と脇差を差した姿で。本物の『ムラクモ』は黒塗りの地味な鞘に収まった、実用刀らしい見た目だ。
泰然と構えてはいたが、忍者は、カルヴェルの一挙一動に鋭い視線を向けている。戦闘にもちこむ為ではない。機会を見て逃げる為であろう。
警戒心を抱く相手と腹をわって話すには……
老人はポンと手を叩いた。
「そうじゃ、ジライ、これから遊郭に参らぬか？」
「は？」
「おぬし、わしとランツが各地に残した数多くの伝説を知っておるのだろ？」
「各地の……主に歓楽街に残された伝説でしたら、そうですなあ、十二ほど存じております」
「ほほう。若いのに色の道に通じておるとは頼もしい奴め。では、わしとランツが張り合ってジャポネに残した伝説は知っておるか？」
「女・男・対決の三本勝負にござりまするか？」
「それじゃ」
「決着は存じませぬが……」
「引き分けじゃ。三本目の勝負の真っ最中に大魔王教徒に襲撃されて、勝負どころではなくなったのよ。三十三時間の長丁場がパーじゃ。頭にきたので、二人で大魔王教徒どもをボコボコにしてやった

わ」
「……」
「それで、じゃ、ジライ」
カルヴェルはにやりと笑った。
「わしと、その三本勝負をやってみぬか？」
「カルヴェル殿と我(われ)が？」
「うむ」
しばし沈黙を守り、それから忍者は高らかに声をあげて笑い出した。
「お戯れを！昔ならいざ知らず……そのような醜きご老体で、この我(われ)と張り合うとおっしゃるか？」
「ま、確かに、昔に比べ、肉体は衰えた。回数勝負や耐久戦であれば、わしに勝ち目はない。が、」
カルヴェルの笑みが不敵なものと変わる。
「あの三本勝負であれば、若さだけを売り物にしておる小僧なぞ、わしの敵ではないわ」
「……」
「おぬし、わしとランツの伝説を、噂によって肥大化した偽の伝説と思っておるようじゃが……わしとランツの性豪ぶりは、そんじょそこらの色事師に真似できるものではない。わしらの技術(テク)は神をも越えた」
「……大口を叩かれましたな」
頭巾の下の黒目がきらりと妖しく輝く。
「その勝負、受けても良うございまするが……何を賭けましょうぞ？」
「負けた方が、一日、勝った方の奴隷になるで、どうじゃ？」
「ほほう、奴隷に……」
「負けた方は、いかなる命令にも従わねばならぬのじゃ」
「面白い。なれば、我(われ)が勝った暁には、あなたに死ねと命じますぞ」
「その場合、見事、死んでやろう」

「のった」
身を乗り出した忍者に、老人はホホホと楽しげな笑みを見せるのだった。

聖なる武器　2話

一の勝負は『女』。

三人の遊女に交互に相手をしてもらい、どちらのテクニックの方が良かったか甲乙つけてもらうのだ。一人の女につき制限時間は一時間、合計三時間の勝負である。

遊女は年季の入った年増、売れっ妓の美女、まだ奉公を始めて間もない少女の三人。

「変装を解かねば、おなごは抱けませぬ」

と、店に予約を入れた後、勝負に入る前にジライは一度、遊郭より消えた。

その間、カルヴェルは座敷で酒を飲んで待っていた。遊女や芸者は断っての、一人酒だ。

で、約束の刻限に、忍者は戻ってきたのだが……忍者が頭巾を外すと、さすがの老魔術師も驚きを隠せなかった。

「それが、おぬしの素顔か」

染め粉を洗い落とし、鬘（かつら）を外した忍者は……白髪、白い肌の、いわゆる白子（しらこ）であった。

（なるほど、これでは染め粉を塗らねばなるまい。目立つううんぬんの問題を除いても、じゃ。直射日光を浴び続ければ、こやつの肌、真っ赤に火ぶくれる）

忍者ジライは、右顔にかかる前髪をかきあげ、口元に微かな笑みを浮かべた。

「我（われ）があなたに素顔を見せた理由、おわかりか？」

「ん？」

「忍者にとって素顔を知られるは死に勝る恥辱。なれど、あなたは死ぬる運命……素顔は、我が前に散る古き伝説へのせめてものはなむけよ。心安らかに果てられるがいい」

「言うたな、こわっぱめが」

老人はからからと笑った。

「あっ、あっ、あっ！　あぁん……もう、駄目、もう堪忍しておくんなまし……あぁッ！　死ぬ！　死ぬぅ！」

部屋に女の甘い悲鳴が響き渡った。

忍者ジライは腕に女を抱きながら、ほくそ笑んでいた。

白い美貌と、忍の房中術をもってすれば、百戦錬磨の遊女もやすやすと堕とせる。女は既に快楽に酔いしれ、もう数え切れぬほどイきまくっている。ジライがほんの少し指を動かすだけで、ひぃひぃよがり狂うのだ。

（あの老いぼれにこの技は使えまい！）

ジライは勝利を確信していた。

が……

遊女は、三人が三人ともカルヴェルを選んだのだ。

公平を期するために、遊女一人一人に違う部屋で判定を頼んだのだが、三人は皆、同じような事を言い、ジライに頭を下げた。

「ぬしさんの技術（テク）は、それは見事にござんした。あれほどの極楽は、二度と味わえぬでござんしょう。なれど、遊郭は男女が情を通じ合い、仮の夫婦の契りを結ぶ場所にござんす。ぬしさんと寝ても、わちきは玩具にされるばかり。少しも真（まこと）を感じられませなんだ。対して、カルヴェル様は、わちきを愛おしんでくださった。かわいがってくださった。あのようなあたたかな時、親元を離れてから初めてにござんす」

女は三人とも『他の二人はジライを選ぶであろうが、自分だけは懐のお広いカルヴェル様を選ぶ』と、うっとりと老人を見つめるのであった。

「年の功という奴じゃな」
老人はホホホホと愉快そうに笑う。
「おぬしは技術に走りがちなのよ。性技はの、相手があるからこそ成り立つ技。自分の技に溺れていては自己満足の域を出ぬ。相手に真の充足感など、与えられんのじゃよ。相手が何を求めているか察し、相手の悦びの為に尽くす。さきほどのわしの技はそれだけじゃ」
「……ご忠告いたみいる」
忍者ジライは右顔にかかる白髪をかきあげた。
「次こそは、我が房中術の神髄を披露いたそう」

二の勝負は『男』。
素人、玄人、問わず。ノンケ、ホモ、問わず。
何人の男を堕とせるか、その数を競うのだ。体を与えても良し、与えずに言葉だけで誘惑しても良し。制限時間は一日。場所も相手も自由なら、時間をどう使うかも自由。翌日の指定時刻に堕とした男を引き連れ、待ち合わせ場所に現れれば良いのだ。

「八人か、すごいのぉ」
忍者がひきつれてきた男達を見て、老人はホホホと笑った。杖をついて、橋のたもとにたたずむ、白髪白髭の老人。その周辺に男の姿はない。
ジライは眉をしかめた。
「勝負を捨てられたか？」
「うむ。二の勝負は、最初から、わしに勝ち目はない。三、四人ならば頑張れば堕とせたであろうが、若く美しいおぬしに、このジジイがナンパで勝てるわけがない」
「チッ」

ジライは舌打ちを漏らした。
「この場に連れてこられたのは八人にござったが、堕としたのは全部で十三人……もう少し手を抜けば良かった。つまらん体力を使ってしまった」
「ま、いずれにせよ、これで一勝一敗、五分と五分。最後の勝負で雌雄を決しようぞ」

三の勝負は『対決』。
ようするに、一時間ごとに攻め役・受け役を交替し、先に相手をイかせた方が勝ちという趣向。持てる全ての技術を駆使しても良い事になっているので、アイテムＯＫ、魔法や忍術もＯＫだ。ルール上では先攻が有利だが……
「先攻・後攻、好きな方を選んでよいぞ」
待合茶屋（ラブ・ホテル）の離れ。ゆっくりと勝負に専念できる試合場には、ふかふかの敷布団が設置されていた。
老人は、いつものにこにこ笑顔で、長い髭を撫でている。
「なにせ、こちらは枯れたジジイじゃ。溜まりも遅い。この勝負、おぬしの方が分（ぶ）が悪い」
「忍の房中術を甘く見られては困りますな」
屏風の陰に荷と刀を置きつつ、忍者ジライがにやりと笑う。
「こちらが果てぬまま二十人のおなごをイかせた事もござる。なみの技術（テク）では我には勝てませぬぞ」
「で、どちらを選ぶ？」
「……先攻」
「ホホホ、よかろう。ではお相手してもらおうかの」
老人はさっさと黒のローブを脱ぎ捨てた。

「すまぬのう、醜いジジイが相手で」

確かに、皮膚に皺やたるみがある。だが、高齢のわりには、カルヴェルの体はひきしまっており、腹も出ていない。武術と縁のなさそうな魔術師だが、常日頃から充分な運動をしているのだろう。

忍者ジライは、持ち時間のうちの四分の三を性器以外の箇所への愛撫に費やした。相手の性感を高め、ひたすら興奮を煽ったのだ。そして残りの時間で勝負に出た。

指と口で感度の高い箇所を刺激し、プロの娼婦も顔負け技術（テク）で相手を追い込もうとした。

けれども……

「ホホホ。言うだけの事はある。おぬし上手だのう」

と、老人は余裕の顔。元気にはなったが、そこまで。そのまま時間切れとなった。

つづいては、老魔術師の攻めなのだが……

はっきり言って、ジライは拍子抜けしてしまった。

医者が患者の体を探るかのように、掌で、ただ触るだけ。触りながら世間話をして、『どうじゃ、ここは良いか？』とか『ここは感じるじゃろ？』と、にこにこ笑いながら聞いてくるばかり。

（ほんに、こやつ、性豪と名高きカルヴェルか？　年老い、惚けたのか？）

釈然としないまま、一時間が過ぎた。

ジライは攻め方を変えた。

若い頃、相手はさまざまな遊びをやり尽くしている。なみの刺激では、感覚の鈍った体は反応しまい。

テーマは、アブノーマルだ。

麻縄で相手を縛り、張り型も用いる。

けれども、二回戦で果てさせられない場合を考え、強すぎる刺激

は控えた。徐々に刺激を強めていかねば、相手は刺激に慣れすぎ、愛撫に反応しなくなる。

老人はジライの攻めを笑いながら楽しんではいたが、やはり、それだけだった。

老人は口を吸ったり、指先や掌を使ったりで、ようやく愛撫らしい愛撫を開始した。

けれども、あいかわらずのおしゃべりで、笑いながら『ここか？　ここが良いのか？』などと悪代官と村娘ごっこをしたりして遊んでいた。

本気で勝負する気はなさそうに見えた。

三回戦ともなれば、少々、本腰を入れねばなるまい。

麻縄で相手の自由を奪ってから、ジライは羞恥心を煽る激しい言葉責めをし、鞭や蝋燭などの刺激の強いアイテムを使用した。

しかし、老人は『本格的なＳＭ遊びは久しぶりじゃ』と、むしろ浮き浮きしている様子。

どうにもペースがつかめない。

麻縄を外しながら、老人はにっこり笑った。

「魔法を使っても良いかの？」

「構いませぬ。もとよりその約束にござる」

「後悔するぞ……おぬし、これで負けじゃ」

「我（われ）が負ける？　フッ！　何の魔法を使われる？」

「変化（へんげ）の魔法を一つ」

「ついに醜い姿を捨てられるのか！　じゃが、それだけで我（われ）が負けるとは……くだらぬ予想ですな」

「おぬしは堕ちる。賭けても良い。この勝負を限りに、三本勝負、終わらせても良い。おぬしが達しなければ、わしの負けにしてくれて構わん」

ジライは高らかに声をあげて笑った。

「愚かなり！　命を捨てられたか！　我（われ）は勝てばあなたの命を求めると言うたはず」

「わしは死なぬ」

老人はきっぱりと断言する。

「必ず勝つからの」

「ならば、化（ば）けてみられよ。何に化けようとも、結末は同じにござるがな」

ジライは相手を小馬鹿にするようにフフンと笑みを浮かべた。

「では、お言葉に甘えて……」

老人がほんの少し魔力を高める。ポンと音がして、老人の周囲に煙幕のように白い煙が立ち上った。

忍者ジライは口元を侮蔑の笑みに歪め、老人の周囲の煙を見つめていた。が……煙が消えるにしたがって、その顔は朱色に染まってゆき、体はわなわなと震えるのだった。

煙の中から現れ出たのは、黄金の髪、白い肌、きつい青のまなざし、煽情的な赤い唇の……女勇者セレスであった。

豊かな胸、くびれた腰、魅力的な臀部を、黒のボディスーツに包み、美脚をあらわにし、踵がものすごく高い黒のピンヒールを履いている。右手でバラ鞭を弄びながら、女勇者はにっこりと微笑んだ。

「そこのおまえ、少し、頭（ず）が高いんじゃなくて？」

「なに……？」

「女王様の前に、醜い顔を見せるんじゃないわ！　このオス豚が！」

ピシィィィ！　と鞭でぶたれた瞬間……

ジライの内に稲妻が走った。

（はぅぅぅぅ！）

「早く這いつくばりなさい！　この大魔王教徒！　うす汚い暗殺者！　おまえを見ていると吐き気がするわ！」

（あああああああああぁ）

「どうしたの？　そんな嬉しそうな顔をして？　鞭でぶたれて悦ぶだなんて、本当、おまえはいやらしいわね！　この変態！」

（あああああああああぁ）

「さあ、おっしゃい、どうして欲しいの？　鞭が欲しいの？　欲しいのなら、床に頭をこすりつけて、私の前にひざまずきなさい。犬のように、ね」

言ってはいけない……

「この愚図！　マヌケ！　いつまで、この私を待たせる気？　おまえなど生きている価値もないわ！」

言ってはいけない……と、思いつつも、内側からこみあがってく

る被虐の悦びに抗いきれず、忍者は心の声を口に出してしまった。

「申し訳ございませぬ……もっと……もっと、いたぶってくだされ。卑しきこのオス豚を、その貴き鞭で辱めていただければ望外の幸せ……あああ、女王様ぁ」

かくして、忍者ジライは堕ち……

セレスの姿のカルヴェルに命じられるままに、自らをしごいた。ねちっこい言葉責めや恥辱プレイに酔いしれ、喜んで自ら達してしまったのである。

「不覚！　不覚！　不覚！　不覚！　不覚！」

忍者は白髪を掻きむしった。

「中身は老人とわかっておったのに～！」

「うふふ、かわいいわね、ジライ」

セレスの姿のカルヴェルににっこりと微笑まれると、忍者の白い頬はポッと赤く染まってしまう。

「……カルヴェル様、その姿、やめていただけませぬか？　このままでは、まともに話ができませぬ」

「何じゃ、つまらん」

ポンと煙が上がり、老人が元の姿に戻る。

忍者はホッと胸を撫で下ろした。

「賭けはわしの勝ちじゃな」

「……ですな」

忍者は溜息をついた。

「これより一日、我（われ）はあなたの奴隷じゃ。何なりと命じられるがよい」

「ふむ」
老魔術師は長い白髭を弄びながら尋ねた。
「もしも、じゃ。わしが、もしも、おぬしに『死ね』と命じたら、おぬし死ぬか？」
「死にたくはござらぬが、いた仕方ござりませぬ。『負けた方はいかなる命令にも従う』という約束でしたからな。我が命がご所望とあらば、あなたに差し上げましょう」
忍者は平然と言い放った。その表情に、恐れも、嘆きもない。ひどく穏やかな顔をしている。
（こやつ、死を恐れておらぬ）
「この首、刎ねましょうか？」
カルヴェルは、かぶりを振った。
「おぬしの命など貰っても、楽しゅうないわ。のう、ジライ、それよりもわしの質問に答えてくれんか？」
「はあ……答えらえる事と答えられぬ事があると思いますが」
忍者は恐縮するかのように、頭に右手をやった。
「里の秘密と、任務に関しての事は教えられませぬ。どうしてもとあれば、申し訳ございませぬが、この場で舌を噛み自害いたします」
老人はホホホと愉快そうに笑った。
「まったく、これだから忍者は！　わかった。言えぬ事は『言えぬ』と言え。先走って、勝手に自害するなよ」
「かたじけない」
布団の上であぐらをかく老人に頭を下げると、忍者は畳へと移動し正座をした。奴隷にふさわしいよう、一段低い場所に移りかしこまったのだ。
「ジライ、おぬし、セレスに惚れておるのだろう？」
「と、申しますか……あのお方こそ、真の女王様。お慕い申し上げております」
「ならば、何故、命を狙う？」
「任務にございますゆえ」

ジライはふぅと息を吐いた。
「私(わたくし)めも、真の女王様であるあのお方をこの世から消し去るは誠に惜しいとは思うておりまするが……任務とあらば果たさねばなりませぬ」
「……逆らおうとは思わぬのか？」
「はて」
ジライは首を傾げた。
「そのような事、考えた事もござりませぬなあ」
「おまえ、上役に命じられれば何でもするのか？」
「はい。それが忍の道にござりますれば」
「……」
老魔術師は忍者の白い顔を見つめた。
この男には、徹底的に『執着心』が欠けているのだ。己が命を惜しまず、任務とわりきって愛しい女を手にかけようとしている。
（確かに、無私。そういう気性を『ムラクモ』は気にいったのか？）
だが、この男は大魔王教徒だ。本来、聖なる武器に惚れられるはずがない。老魔術師は質問を変えた。
「おぬし、ケルベゾールドを信仰しておるのだろ？」
「はい、幼き頃より」
「熱心な信者か？」
「さあ？　仕事前には神像に祈りを捧げ、精神集中をいたしますが……」
「精神集中の為だけにあれば、ケルベゾールドの神像でなくとも良いのではないか？」
「かもしれませんなあ」
「おぬし、人を殺すのは好きか？」
その問いに、忍者はにぃーっと薄く笑った。
「獲物を狩るのは楽しゅうござります。その死骸を辱め、二親(ふたおや)にも見せられぬ姿に堕としめるのも痛快」
話を聞けば聞くほど、大魔王教徒にふさわしい残忍な側面が窺え

た。しかし、それは……

「我が二つ名を、比類なき恐怖の名として世に広めることこそ我が望み」

「二つ名？　その名を問うてもいいか？」

「……」

「言えぬか？」

忍者は苦笑を漏らした。

「いえ。放っておいても、暗殺後に、女勇者を倒した者の二つ名は世に広まるでしょう。我が二つ名は『白き狂い獅子』にござります」

「『白き狂い獅子』？」

カルヴェルは眉をしかめた。

「その名は耳にしたことがあるぞ。昔、ランツらとジャポネを旅していた頃に。白装束の忍で、忍の里一の手練れとの噂であったが……」

「それは初代『白き狂い獅子』にござります」

「ほう」

「里一番の剣の使い手……私（わたくし）め剣の師でありました。好まれた白装束ゆえの二つ名でしたが、陽動・騒乱の時はともかくも、師匠（せんせい）とて、そうそう目立つ白い忍者服は着られなかったのですが」

「よいのか、そんな事まで話して。里の秘密に関わらんのか？」

「心配ご無用。既に鬼籍に入られたお方の話でございます」

忍者は昔を懐かしむかのように、瞳を細めた。

「『白き狂い獅子』の異名は師から頂戴した、私の宝。名を辱めぬよう、今日まで生きてまいりました」

「おぬしは二代目『白き狂い獅子』か……」

残虐な行為に走るのも、二つ名を高める為。

（亡き師への忠義か……）

「『ムラクモ』はいつ手に入れた？」

「幼き頃に。我が師はたいそう刀剣がお好きな方で、東西の名刀を収集なさっておいでした。その中のご自分では扱えぬ武器を、た

まに剣の才のある者に貸し使えるか試される事があった。幼き日、鞘に入った刀を渡され、抜けと命じられました。抜けと命じられたから抜いたまででござったが……その刀、里の誰も鞘から抜けなんだ名刀だったとかで、師匠(せんせい)は私(わたくし)を正式に内弟子として引き取って育ててくださったのです、白子の異形を……。里一の剣の使い手の弟子となって今に至っております」

（抜けと命じられたから、抜いただけ……か。まさに無欲。表面は邪悪に染まりきっておるが、こやつの真の心は何ものにも犯されていない、幼子のように清いままじゃ。暗殺者としての役割を与えられたから、その役割の中で、刹那、刹那を生きている……そんな感じじゃな）

この男が『ムラクモ』に気に入られた理由も得心がいった。恬淡で亡き師への忠義に生き、忍に徹しているがゆえだ。又、己が技量の高さに拘るのも、一流の忍として師より継いだ二つ名を高めたいが為。我欲からでは無い。

老魔術師は、うむうむと頷いた。そのまましばらく黙っていると、忍者が遠慮がちに尋ねてきた。

「カルヴェル様……少々、ご指南いただいてもよろしゅうございますか？」

「何じゃ？」

「何ゆえ、我が性癖を見抜かれました？」

「何で女王様趣味と気づいたか、か？簡単じゃ。おぬしほどの手練れが、あの晩までに六度セレスに挑み六度撃退されておったと聞けば、ピンとくる。わざと負けて、セレスにわざと殴られ蹴られておったのだと、な」

「なるほど」

「初回から変身しても良かったのじゃが、それではおまえもつまらなかろうと思い、好みを探らせてもらっていた。最初、わし、ただ撫でまわしておったろ？　あれは愛撫ではなく、肌を確かめておったのじゃ。過去どれほど鞭で打たれたか、蝋燭や針は好きか、縛り

方の好みはどうかと、肌を触って確かめておったのじゃ」
「触っただけでわかるのか！」
「おおざっぱにじゃがの」
老人はホホホと笑った。
「治癒魔法で傷自体は消せても、魔法の痕跡は残る。探ろうと思えば探れる。初回で肌の荒れ具合を調べ、二回目で愛撫を加えて反応をみたのじゃ。筋肉の収縮、緊張、汗腺の具合など、など。それだけやれば、まあ、だいたいわかる」
「……」
忍者は深々と頭を垂れ、老人に対し平身低頭した。
「参りました……この勝負、完全に私の負けにござります。色の道において、我が上に立つ者なしと豪語しておったのは、思い上がりにございました」
老人はホホホと愉快そうに笑った。
「わしとランツの伝説が虚偽とは、もう言わぬな？」
「はい」
「ならば、良い。許してやろう」
「カルヴェル様」
忍者は頭をあげた。
「赤毛の傭兵との会話、聞かせてもらっておりました。聖なる武器をコレクションなさっておられるとか……あなたが『ムラクモ』と呼ばれる我が刀も、聖なる武器だと、以前、おっしゃいましたな？」
「うむ」
「なれば……勝者の特権にございます。ご所望とあらば、我が刀、差し上げましょう」
惜しげもなく忍者は、そう言う。その裏に智謀知略もなく、ただ、淡々と。
カルヴェルは、何事にも執着しない忍者の心を哀れに思った。今ではこの男に好意すら感じている。
けれども、この男には死んでもらうのだ。セレスの成長の礎とし

て、セレスに斬られてもらわねばならない。その為に、あの晩、見逃し、こうして再び接触したのだ。

カルヴェルはいつも通りのニコニコ笑みで、忍者の申し出を断った。『ムラクモ』を持つ強敵を討ってこそ、セレスは成長する。今、貰うわけにはいかない。

「『ムラクモ』はおぬしを気に入っておる。絆を引き裂いては申し訳ない。おぬしの死後であれば遠慮なくいただくが、の」

「結構にござります。では、そのように。どうせ、私(わたくし)は長くは生きませぬ。近いうちに、我が刀、あなたのものとなりましょうぞ」

カルヴェルは眉をしかめた。厭世家の一言では済まされぬほど、妙に達観している忍者を見つめながら。

しかし、セレスの師として、この男を死へと誘う提案をしないわけにはいかなかった。

「のう、ジライ、一カ月ほど休戦してくれぬか？」

「休戦？」

「以後、一カ月、セレスを襲わないでもらいたい。セレスの暗殺を一カ月待ってくれるのならば……わしは手を引く」

「手を引く、とは？」

老人はホホホと笑った。

「セレスが危機に瀕しても、わしは助けんという事じゃ」

「……まことに？」

「うむ」

老人は頷きを返した。

「厩よりおぬしも見ていたであろう？　わしは従者どもに、聖なる武器を貸した。あやつらは強くなるぞ。セレスもシャオロンも一カ月あれば見違えるほどに成長しよう。おぬしとて、易々と殺せなくなろう」

「なれど、あなたと戦うよりは、一カ月後の勇者一行を敵にする方が遥かに楽……ほんによろしいので？」

「二言はない」

「ならば、承知。私と配下は、一月の間、勇者一行を襲いませぬ。里の他の者が、或いは女勇者の命を狙うやもしれませぬが、私は関与いたしませぬ」
「おぬしさえ攻めてこなくば、それでよい」

カルヴェルは、ジライが染め粉で顔や首、手を染める様を見学させてもらった。忍者装束の時も日中は顔と露出する指先は染め粉で染めねばならないと、忍者は苦笑を漏らした。特殊な染料なので濡れただけでは色が落ちず、専用の洗浄液で落とすのだそうだ。
ジライは変装用のサムライの着物を着て、黒の束髪のカツラをつけ、腰に『ムラクモ』と脇差を指した。
魔術師の黒のローブをまとい杖を持ったカルヴェルは、にこにこ笑いながら忍者に頼んだ。
「『ムラクモ』、抜いてみてくれんかの？」
「承知」
腰をやや低くして抜刀の姿勢となり、サムライ装束の男は鯉口を切るや刀を抜き、素早い所作で風を切り空を裂き、最後に正眼に構えた。
その冴え冴えとした美しい刀身には、赤黒い文字が刻まれていた。振れば雨が降る神秘の力を、忍者は普段、邪法で封じている。『目障りだ』と言って。邪法は魔の力。主人より魔がもたらす辱めを加えられても尚、『ムラクモ』は忍者を主人と認め力を貸している。
対する『勇者の剣』とセレスの仲は最悪。『ムラクモ』と忍者に勝つのは困難であろうが、成し遂げてこそ勇者の資格があるというものだ。
『ムラクモ』を見つめながら、カルヴェルは尋ねた。
「おぬし、その刀の名、知らぬようであったな？」
「はい。我が剣の師匠は、欲しい武器を片っ端から盗み、山のように収集なさってはその辺に適当にしまいこまれて忘れてしまう……

その、おおらかといいますか、そういう方でしたので、師匠のコレクションの大半は、名無しにございました」

「もったいないのう、『ムラクモ』も名なしにされたか」

「ですから、私はこれを得た時、自ら名をつけました」

「何と？」

「……小夜時雨」

「良い名じゃ」

褒めると、忍者ははにかんだような笑みを浮かべた。

「良い名をつけたかった。小夜時雨が私の運命を変えてくれましたゆえ。これと出会えねば、白子の私はくだらぬ者の配下に置かれ……とうに死んでおったでしょう」

忍者は愛しそうに刀を見つめた。しかし、深い愛情を抱いている刀ですら、この男、さきほど、躊躇なく譲ると言っていたのだ。

（この男、できれば殺したくないが……無理じゃな。忍以外の生き方をできんようじゃし）

通りに出た二人は、右へ左へと別れ、互いに振り返らず道を進んで行った。

次に、二人が出会うのは数カ月後の事であった……

聖なる武器　2話（後書き）

『聖なる武器』　完。

次回は『死の荒野』。

舞台はジャポネからシャイナへ。荒野での死闘です。

死の荒野　1話

「アカハナ、アオザ、キスケ、クロベエ、マツムシ、コゲラ、ジャコウに、ユリネ……八人呼ぶの？それに、あなたとダイダラを加えて十人で仕掛けるわけ？」

　くノ一アスカの問いに、忍者ジライは頷きを返した。

「アカハナ、アオザ、キスケ、クロベエの四人がかりで、赤毛の傭兵を押さえさせる。討たずともよい。連携上手のあの四人に、傭兵の足を止めさせる」

「武闘僧は？」

「ダイダラに任せる」

「ダイダラ一人に？武闘僧、最近、『雷神の槍』って名槍を装備してるみたいだけど？」

「ダイダラにも『鬼殺し』の棍棒がある。それに、あれはどうしようもない阿呆だが、里一番の怪力、問題ない」

「お小姓の少年は？」

「マツムシ、コゲラをあてる。あの二人の素早さは我（われ）に次ぐ。小僧ごとき倒せるだろう」

「でも、ジライ、あのお小姓、妙な爪を装備するようになってから、結構、腕をあげたみたいよ。瓦版、見た？」

「いや」

「んもう！ちょっとは通俗情報も集めなさいよ！あの子、お尋ね者を百人倒したんですって。瓦版が大々的に取り上げていたわ。あのなよなよした外見も受けて、オオエじゃあいつ人気者（アイドル）よ、浮世絵（ポスター）まで販売されてるんだから」

「ほう」

「『龍の爪』っていう、すっごい武器を手に入れたらしいわ。マツムシ達二人じゃキツくない？」

「その為に、ジャコウとユリネが居る。あの二人の得意技で勇者一

行を翻弄すれば、多少の戦力不足は補える」
「もうちょっと人数を増やしたら？」
「おまえの持ってきた名簿から選んだ最善の面子だ。頭数ばかり揃えれば良いというものではない。役立たずのカスなぞいらん」
アスカは嘆息し、仲間の忍者を見つめた。今、ジライは黒の束髪の鬘を被ったサムライ姿。アスカは宿の女中に変装し、ジライの部屋まで茶を運びに来た態を装っている。
アスカはジライを慕っていた。それゆえ、彼を怒らせるような事は言いたくなかった。が、忍者の里の頭直属の連絡役である以上、やはり、聞かねばならない事は聞くしかない。
「……ねえ、ジライ、本当に襲撃を一カ月も遅らせるの？お父様、怒るわよ」
「理由は言うたはずじゃ、アスカ」
忍者ジライは横目でじろりと、くの一を睨んだ。
「正しくは、後、三週間じゃが……その間、勇者一行を襲わねば、大魔術師カルヴェルが女勇者の警護より外れる。当代随一の大魔術師相手では、里の者総出でも、任務遂行は難しい。カルヴェルが消えるのを待つ方が得策であろう？暗殺の期限は一月末。三週間待ったとて、十二月初旬じゃ。期限には充分、間に合う」
「でもね、お父様……最近、すっごく怒ってるのよ。あなたが手を抜いているって」
「我が手を抜いている？頭がそう言うたのか？」
アスカは頷きを返した。
ジライは眉根をしかめ、吐き捨てるようにつぶやいた。
「くだらん！」
命令通り女勇者を殺す準備を進めているのだ。あの美しくも残忍で武器の扱いにも長けた『真の女王様』を……この世から抹殺する為に働いているというのに、里への忠節を疑われるのは我慢ならなかった。
「ともかく、我は三週間は動かぬ！頭にはしかと理由を伝えておけ

！」
「……」
「何じゃ、その顔は？まだ何ぞ、不満があるのか？」
「ううん。もう、その事はいいわ」
「ならば、行け」
「別の事で、聞きたい事があるんだけど……」
「何だ？」
「今、ダイダラとキクリはどうしてるの？」
「ダイダラは山の中だ。あやつ、里では目立つからのう、山小屋に置いてきた。あれは、我(われ)が待てと命じれば一年でも十年でも待ち続ける忠犬のような奴。時々、覗きに行っておるが、この半月、山で大人しゅうしておるわ」
「……キクリは？」
「キクリは勇者一行の監視につけてある」
「……そう、キクリは、今、ここに居ないのね」
アスカはキッ！と仲間を睨んだ。
「……あなた、キクリと寝たでしょ？」
ジライは、ぐっと喉をつまらせた。
「寝たが、それがどうした？あやつから求めてきたのだぞ」
「そうみたいね……この前、そう自慢してたわ」
「……何が言いたい、アスカ？」
ジライを睨むアスカの瞳は、半ば涙で濡れていた。
「別に何でもないわ！あなたは仲間にしたい奴とは、誰とでも寝るものね！あの醜いダイダラと寝たぐらいだもの！よぉく、わかってるわよ！」
「アスカ？」
「……あなた、あたしの事、どう思ってるの？」
「どう思う？我(われ)はおまえを我が宝と思っておるが？」
「あら、本当？だけどね……これだけははっきりさせないと気が済まないの。正直に答えてちょうだい」

「うむ」
「……今度、呼ぶ八人のうち、何人と寝た事があるの？」
ジライは口元に指を当てた。
「七人だな」
「……七人」
顔を目指し飛んできたモノを、ジライは右手で、はしっ！と受け止めた。女中姿のアスカが持っていた盆だ。
「馬鹿ぁぁぁぁぁ――――！」
わーっと泣きながら、くの一アスカは廊下へ飛び出して行った。
「どうしたのじゃ、アスカは……」
後に残されたジライは、右の二の指で頬を掻き、首を傾げるばかりだった。
「突然、怒りおって……月のものか？」

「ちょいとやりすぎじゃねえのか、これ？」
浮世絵（版画）を右手に、『龍の爪』を模した飴細工を左手に、赤毛の傭兵は溜息をついた。
ジャポネの首都オオエでは、女勇者の従者、シャイナの美少年シャオロンが大人気。シャオロンの商品（グッズ）を求めて、ナーダの部下が仕掛けた店には、連日、黒山の人だかりができていた。特に、若い娘の間で、シャオロン人気は高かった。
「やりすぎなくらいやった方がいいんですよ」
宿屋の裏庭で、武闘僧ナーダはカルヴェルから借りた『雷神の槍』を右手だけで素振りしていた。修行の最中にくだらない話を持ち込まれ、少々、不機嫌そうだ。
「仇をおびき寄せる為です。シャオロンが左手用の『龍の爪』を持っている事を大々的に宣伝しなくては」
「けどなあ……正直言って、恥ずかしいぞ、俺は」
浮世絵のシャオロンは腐女子向けに美化されすぎてしまって……

…まるで別人だった。『龍の爪』を装備しているから、かろうじてシャオロンだとわかるけれども……

「言っておきますが、シャイナでのシャオロン人気はこんなものじゃありませんよ」

「なに？」

「あそこは、もともと女勇者セレス・シリーズの発祥の地ですからね。地元シャイナから生まれた美少年従者シャオロンの人気は、今、うなぎのぼりです」

シャイナでセレス人気を盛り上げたのも、他ならぬ武闘僧（と、部下）だった。未だに女勇者の活躍情報を版元に流しているようで、ジャポネにも翻訳されたシリーズ本が並んでいたりする。

武闘僧は槍を建物の壁に立てかけ、今度は拳法の鍛錬を始めた。会話中も休む間も惜しんで稽古を続ける相手の横で、赤毛の傭兵アジャンは手にしていた物を懐にしまった。

「こんなんで乗ってくるかね、仇は」

「根気よく続ければ、そのうち現れますよ。敵は右手用の『龍の爪』を持っているんです。両方揃えたくなるに決まっています」

「……早く現れて欲しいもんだ」

「そうですね。仇の首領格の『サリエル様』とやらはシャオロンに任せるとして、周囲のザコ魔族や大魔王教徒は我々が掃除しなくてはね。とっとと叩き潰したいものです」

右拳、左拳と、正拳突きを放つ武闘僧。

その横で、アジャンはポツリと呟いた。

「……おまえが叩き潰したいのは、暗殺者の忍者一味の方だろうが」

と、言うやいなや……

ズゥゥゥゥン！と、鈍い音が響き、大地が揺れた。その衝撃に、『雷神の槍』は地面に倒れ、裏庭の松の枝までも揺れる。

武闘僧が右の拳で力のままに、大地を突いたのだ。

思わず、アジャンは逃げ腰になっていた。

「……おい、ナーダ」
「……何してるんでしょうね、あいつら」
武闘僧は声を荒げた。
「龍神湖の襲撃からもう二週間以上経つんですよ！暗殺者のくせにグズグズしすぎです！だらしない！さっさとセレスを殺しに来ればいいのに！」
「おい、おい」
「あああああ！あのウドの大木！一つ目鬼！あれで、私に勝ったなんて、まさか思い上がってないでしょうね！武術の『ぶ』の字も知らない、ただの腕力バカのくせに！」
「……みっともねえぞ、クソ坊主、取り乱しすぎだ。たかが、一回、負けたぐらいで」
武闘僧は糸目で赤毛の傭兵をねめつけた。
「負けてなんかいません！前回は勝負の途中で敵が逃げたんです！引き分けです！」
「だが、おまえ、左腕はダメになるわ、あばらイカれるわ、顔中痣だらけだわで、ボコボコにされてたじゃねえか」
「……」
武闘僧は顔を紅潮させたまま、『雷神の槍』を拾った。
「お暇そうですね、アジャン。おしゃべりしている暇があるのなら、少し付き合ってくださいませんか？」
「断る」
「いつも通り、稽古料、払いますよ」
「しばらく、おまえの相手はやらん。このところ、おまえ、無茶しすぎだ。少しは体を休めろ」
「必要ありません。私、疲れていませんから」
「嘘つけ！おまえ随分やつれたぞ。疲労が蓄積した体じゃ、いざって時に思うように動けん。休め」
「必要ありません」
「……」

赤毛の傭兵は緑の炯眼で、武闘僧を睨みつけた。
「ケッ！そうかよ！なら好きにしやがれ！馬鹿が！」
アジャンが裏庭から消えた後、ナーダは再び拳法の型を取り始めた。彼の目は、この場に居ない敵を見据えていた。その敵を倒す為だけに、ナーダはひたすら修練を続けているのだ。

鋭い五爪（そう）。
銀色に輝く鋭くも美しい爪と、腕にはめこむ為の黒の小手からなる、『龍の爪』。
シャオロンはそれを前に座禅を組むのを日課としていた。今日は夕食までの時間、宿屋の武闘僧の部屋を借りて、精神統一をするのだ。
シャオロンが持っているのは左手用だ。父が所有していた右手用の爪は、家族や村の仲間を殺した魔族に盗まれている。
仇がシャオロンの前に現れる日は、そう遠くないだろう。
必ず、敵は左手用の爪を奪いに来る。
その時こそ、仇を討つ機会なのだ。
シャオロンは、ひどく緊張していた。
けれども……
「きゃぁぁぁ、シャオロンくぅん」
「お顔を見せてぇ、シャオロン様ぁ」
宿屋の周囲から聞こえる黄色い声が、彼の気負いをぶち壊してくれるのだ。
シャオロンは目を開き、溜息をついた。
このところ、町に出れば見知らぬ女の子に追い回され、宿にいても次々に贈り物やら文が届く。武闘僧の部屋を借りたのも、御届け物の配達で、座禅の邪魔をされたくなかったからなのだ。
正直に言って、シャオロンは困っていた。何で自分だけ人気者になってしまったのだろう？

（お尋ね者を百人も倒したとか……嘘ばっかだし、瓦版。十五、六人だよな、せいぜい……。それに、セレス様が倒された敵の方が多いし、ナーダ様はもっともっと倒されてるのに……なんでオレだけ記事になるんだろ？）

女の子達の黄色い声も迷惑だし……ジャポネ様式の宿屋に泊まり続けている事も、シャオロンの深刻さをぶち壊していた。

忍者の襲撃に備え、シャオロンはセレスと同じ部屋に泊まっている。護衛の任に就いているのだ。

しかし、不思議な事に……ジャポネ式布団に寝ると、セレスは落ち着きがなくなる。一晩中ゴロゴロと部屋の中を転がりまわる。つまり、寝相が悪くなるのだ。

野宿の時は体を折り曲げて眠っているせいか、緊張しているせいか、その場に蹲って静かに眠っているのに。

だから、セレスの寝相の悪さを、アジャンもナーダも知らない。白の貫頭着の寝巻を着たセレスは、いつも畳の上で寝乱れて……お尻や胸をあらわに眠っている。そんな姿を他の者に見せるわけにはいかない。シャオロンはセレスに上掛けをかけ続けていた。どんなに疲れている時でも、日が昇る前には起き上がって。

最近は寒くなってきたので、寝相もだいぶマシになってきている。冬になれば、掛布団の中でセレスも大人しく眠ってくれるのではないか？そんな気もしたが、そうなるまで、シャオロンのあまり眠れない日々が続くのだ。

仇討ち間近だというのに、今一つシリアスになりきれないシャオロンであった。

宿屋の部屋で、セレスは『勇者の剣』を構えていた。

ジャポネ人は身長が低いので、天井も低い。大剣を振りかざす事はできないが、下段、中段、突きを放つ分には問題がない。

飽きる事なく、セレスは突きを繰り返していた。

今、『勇者の剣』の重さは、普通の大剣なみの重量に感じられた。
気が充実しているからだ。
夜盗などの小物を数多く退治しているうちに、おぼろげながら、セレスにもわかってきた。『勇者の剣』が空気のように軽く感じられる時と、大人の男の体重並と感じる時の違いが。
セレス自身が『会心の一撃』と思える一撃を放つ時は、剣は軽い。時には持っている事すら忘れてしまうほどに。
逆に下手に扱えば、剣はずしりと腕にのしかかる。
『勇者の剣』が求めるように動き、剣と心を一つにすれば……
『勇者の剣』に、振るい手となる事を許されるだろう。
セレスは目を閉じた。
もう数え切れないほど繰り返してきたイメージ・トレーニングを、今日もやるのだ。
月夜。
燃え盛る野原。
立居合の構えで、摺り足で近づいて来る忍者。
周囲の炎は強く、流れてくる煙に目は痛み、咳を堪えられなくなる。
だが……
まだ、仕掛けては駄目なのだ。
熱風……
迫り来る炎と煙……
まだ、早い……
まだ、仕掛けては駄目だ。
忍者がゆっくりと距離を詰めて来る。敵は炎に恐怖を抱いていない。呼吸に乱れはなく、焦りもない。
焦れてはいけない。一撃で倒せる間合いに敵が入って来るまで、待つのだ。
忍者との距離はまだ開いている。
熱く、苦しい。

けれども、仕掛けてはいけない。
『勇者の剣』を信頼し……ぎりぎりまで耐えるのだ。
火の手が迫る。
相手が一歩踏み出した瞬間！
セレスは体重をのせ、大剣を前方に突き出した！
敵を貫いた！
と、思ったのだが……
『勇者の剣』が、ずしりと重くなる。
セレスは瞼を開き、大きく息を吐いた。
これでも、まだ駄目か、と、思いながら。
あの時……
『勇者の剣』を振り下ろし敵を両断しようとした刹那、斬り裂くべき目標は消え失せた。忍者は素早い体術で横に跳んで攻撃を避け、風のように走り抜刀した。セレスの首を刎ねるべく。
その動きを『勇者の剣』は読んでいた。『勇者の剣』が自ら動き、忍者の刃を受け止めてくれなければ……セレスは死んでいた。
その後、忍者は刀にかけていた邪法を解き、雨を降らす不思議な刀で勝負を挑んできた。その刃を受けた途端、『勇者の剣』は異音を発し、重量を増した。セレスの武器となるのを拒むように。
神秘の刀を操る忍者の技量は見事なものだった。刀と一体になっていた。それに対し、あまりにもいたらないセレスに『勇者の剣』は失望したのであろう。
あの場は、カルヴェルに救われ命を拾う事となった。
親友の孫で魔法の弟子であるセレスを、老人は目をかけてくれている。セレスが十二の少女の頃から励まし導いてきてくれたのだ、その愛情を疑う気はない。
けれども、彼を頼ってはいけないのだ。
当代随一の大魔術師である老人は、いつも不真面目だ。冗談を言ってはセレスをからかってばかりいる。だから、本心はわからなかったが……

老人は正義の為に動く気は無いと言った。昔、大魔王を退治したのも成り行きにすぎなかったとも言ってた。
それすらも冗談かもしれなかったが……
いずれにしろ……
今、あの老人には、勇者一行に加わる意志はないのだ。それだけは確かだ。
セレスはもう一度、精神集中をした。
カルヴェルを頼っていては駄目なのだ。
その助けがなくとも戦えねば、勇者とは言えない。
それに……
忍者との決着は、自分自身の問題だ。

『女勇者セレス殿……次にお会いする時は、あなたと戦いたいものですな』

忍者の侮蔑が心の内に甦る。
(望むところよ!)
次こそは負けない!
セレスは再びイメージ・トレーニングを再開した。

女勇者一行は、ジャポネで大魔王教徒の本部を潰して、数多くの大魔王教徒を倒し、或いは更生させた。
だが、ジャポネには強力な魔族は一匹もおらず、大魔王の憑代も存在しなかった。
再びシャイナに戻り、まだ訪れていない国……インディラ・ペリシャ・トゥルク・エーゲラを目指すか、北方諸国のケルティ・バンキグ・シベルアに向かうか、思案すべき時となっていた。

めったに人が足を踏み入れない山奥に小屋があった。
狩人の為のあばら屋だったが、ここ数年、狩人達の足が遠のき、誰からも顧みられず朽ち果てつつあった。
けれども、一カ月前から、そこを使っている者が居た。額に角を生やした単眼の巨人……忍者ダイダラである。
『小屋に潜み、異形を人目に晒すな』と命じられ、ダイダラは一人で暮らしていた。寂しいという感情は無かった。里に居れば、子供にすら馬鹿にされ石を投げられる。任務につけば任されるのは陽動やシンガリで、常に命の危険に晒される。
だが、小屋には誰も来ない。彼を揶揄する者も殴る者も刃を向けてくる者も、誰もいない。時折、ジライが様子を見に来るだけだ。
この単眼の鬼は、義兄(あに)ジライが好きだった。
ダイダラにやさしい言葉をかけてくれるのも、怪我を治療してくれるのも、頭の悪い彼に根気よく技を教えてくれるのも、ジライだけなのだ。他の者は、醜い外見を蔑み、幼児並みの頭を馬鹿にし、理由もなくダイダラをなぶる。ジライとて暴力をふるう時もあったが、それはダイダラが失敗を犯した時。懲罰は当然の罰だ。
子供の頃からジライは目をかけてくれたが、上忍に舌を抜かれてしゃべれなくなった後、一層、やさしくなった。他の者に対しては無口なジライが、話せぬ巨人の代わりとばかりに会えば絶えず口を開く。
八か月ほど前には、ジライはその体すら与えてくれた。
誰からも相手にされず、さらってきた女にまで怯えられ自害され……性の昂りを押さえられず自慰に耽っていた巨人を、義兄は哀れに思ってくれたのだ。
義兄のそばにずっと居て、義兄の期待に応える事が、巨人の望みだった。白く美しい義兄に褒めてもらえれば、それだけで満足なのだ。

そのダイダラの元を、六日ぶりにジライが訪れた。
喜び駆け寄って来た一つ目鬼を、忍者装束の義兄は『うっとうしい』と睨んだが、まとわりついても怒らなかった。
「今宵、ここで仲間と合流する。おまえ、居ても構わぬが、コゲラやユリネ、それにアカハナ達も来る。あやつら、おまえをいたぶるのが好きじゃからのう。どこぞに隠れておっても良いぞ」
ダイダラはかぶりを振った。久しぶりにジライに会えたのだ。同じ小屋に居たい。
「ならば、壁に張り付いて小さくなっておれ。目立たぬように、な」

「ジライの兄貴」
短い髷を結った少年。どんぐりのような目に低い鼻、愛嬌のある顔だちだ。忍者装束に覆面のジライの周囲には……まったく同じ顔の四人の忍がいた。
「久しぶりじゃな、アカハナ、アオザ、キスケ、クロベエ。こたびは力を借りるぞ」
「何でも、命じてくれよ、兄貴」
「オレ達、兄貴の為なら、何でもするぜ」
「だからさぁ、仕事が終わってからでいいからさ」
「また、あれやろうぜ、五人でさぁ」
べたべたとジライにまとわりつく四人。くノ一アスカは不機嫌そうにツーンとそっぽを向いた。
「なぁにが、兄貴よ。あんた達、義弟（おとうと）でもないくせに」
「うるせぇな、ブス、オレ達と兄貴は心と体でしっかり結ばれてるんだよ」
あっかんべえと舌を見せる少年を、くの一はキッ！と睨みつけた。
「うるさいわよ、アカハナ！ガキのくせにナマ言ってるんじゃないわよ！」
「へへん、残念でした、オレ、アオザだよぉ」

「え？あんたがアオザ？あれ？でも？」
「これ、嘘をつくな、キスケ。アスカが混乱する」
ジライはアオザと名乗った者を横目で睨んでいる。
だが、怒られた方はむしろ嬉しそうに、鼻の下をこすっていた。
「さすが兄貴！上役の馬鹿カズサなんて、未だにオレ達の見分けがつかねえのに、兄貴は百発百中だもんな」
「おまえ達の気は顔ほど似ておらぬ。もっと互いの気を似せるよう修練に励めと言うたはず」
「すまねえ、兄貴！」
「そっちの方は、イマイチなんだけどさ」
「体術の方は進歩したぜ」
「後で見てくれよ、兄貴」
まとわりつく四人に『後でな』と答え、ジライは視線を囲炉裏の傍の異形に向けた。がりがりに痩せた長身の男がマツムシ、顔中が髭だらけなのに八歳の子供ほどの身長しかない侏儒がコゲラだ。
「元気でおったか、マツムシ、コゲラ」
マツムシは力なくただ頷き、コゲラは卑屈な笑みを受かべもみ手となった。
「へへ、ジライ様もお変わりなく。へへ、あっしらは、この通り、あいも変わらぬ醜い姿で、へへ」
アスカは眉をしかめた。喉を詰まらせるように、絶えず笑うコゲラ。アスカはコゲラが大嫌いだった。醜い外見も嫌いだったが、卑屈を装いながら仲間を馬鹿にしているプライドの高さが何より気に喰わない。
ジライはコゲラ達に明日からの移動についての指示を与え、それから小屋の入口の前の二人の元に歩み寄った。
「おまえ達の技、当てにしておるぞ、ジャコウ、ユリネ」
ジャコウと今回呼ばれた中の紅一点ユリネが恭しく頷く。二人とも、マツムシ、コゲラ同様、異形だ。
外見上、ジャコウは異形に見えない。ぶらぶらと揺れている左袖

さえ見なければ、だが。十三年前まで彼は諜報部隊に所属していたのだが、任務中に左腕を無くし、異形となったのだ。

忍者の里では、異形は全員、異形部隊の所属となり、生涯を下忍で終える。目立つ外見では潜入潜伏活動ができない為、殺人を中心とした実戦に投入されるのだ（ジライも幼少は異形部隊所属だったが、初代『白き狂い獅子』の内弟子となった為、里の上層部との縁故（コネ）ができ中忍にまで出世している）。

片腕となったジャコウに実戦は荷が重く、長いこと、彼は冷や飯を食う事となった。しかし、血のにじむような努力の末に、片腕でも可能な特殊な技を身につけ、異形部隊でも一目を置かれる存在になったのだ。

ジライを崇拝し進んで部下となる者は、そのほとんどが年少者なのだが、ジャコウはジライよりも十も年長だ。だが、ジライはジャコウの不屈の魂と頭脳を好ましく思い、ジャコウも健常者も異形も差別せずそれぞれに応じた働きの場を与えるジライに敬意を表しており、二人の関係は良好だった。ジャコウは口髭をたくわえた顔に、人のよさそうな笑みを浮かべていた。

ジャコウが跡継ぎとして育てているのがユリネだ。くノ一は体力的に男より劣るので、普通は実戦部隊に投入されない。けれども、ユリネにはジャコウ以上の天賦の才があり、しかも諜報活動に向かない外見上の欠陥がある為、特別に異形部隊に配属されているのだ。

ユリネは……無毛症であった。髪の毛はおろか、眉毛すら生えない。女らしい恥じらいから眉を描き、鬘を被る彼女を、ジャコウは哀れに思い師というよりは父か兄のように優しく接している。ひどい劣等感の塊で攻撃的な性格のユリネは、絶えず、里の者と悶着を起こしてばかりいたが、ジャコウに対しては子供のように素直だった。

仲間に一通り挨拶を終えたジライに、横からそっとアスカが声をかけた。

「じゃ、そろそろ、あたし行くわ」

「うむ。新たな任務につくのであったな。どこへ行く？」
「オオエよ。お父様との連絡役にはサヨリとヒサメが来るわ。本当は、ずっと、あなたとの連絡役をやりたかったんだけど……」
「任務では仕方あるまい」
「……そうね」
アスカはフーッと息を吐き、小屋の中を見渡した。
部屋の隅のダイダラ、その周囲で一つ目鬼の巨人をからかってはやしたてるアカハナ・アオザ・キスケ・クロベエの四つ子兄弟、囲炉裏で暖をとるマツムシとコゲラ、不機嫌そうなユリネとその耳に何かを囁いているジャコウ……九人を眺めてから、もう一度、愛しい男に視線を向ける。
「で、この中の誰と寝てないの？」
「ユリネじゃ」
「あら、ハゲ女は嫌いなの？」
「阿呆。好き嫌いではない。ユリネの精神的主人はジャコウであろうが。アレはジャコウのモノじゃ。ちょっかいを出して、絆を危うくしたくないわ」
「……手当たり次第、手を出してるわけじゃないのね」
「……何じゃ、妙にひっかかる言い方をするのう」
「別に、何でもないわ」
覆面をつけている相手の頬に、アスカは軽く口づけた。
「怪我しないでね」
「いらぬ心配をするな」
きついまなざしを向けてくるユリネ（髪が豊かな若い女性全員に敵意を抱いているのだ）の脇を通って、出口をくぐり、アスカは小屋を後にした。
女勇者一行は間もなくシャイナに移る。ジライ達もその後を追い、十二月初旬を待ってから暗殺を実行するのだ。
（無事に帰って来てね、ジライ……）
星明りの下、アスカは地を蹴り、木に登り、木々の間を渡って麓

を目指した。

アスカは山を下りた。この時が、仲間としてジライに会える最後の時だったとも知らずに……

死の荒野　2話

シャイナ南東部のシャングハイに着いた女勇者一行は、熱狂的な歓迎を避けつつ、西のインディラを目指した。

北方諸国と国交が断絶している現在、北に向かうには、北から発行される特別な通行許可書が必要だ。しかし、大魔王復活直後からエウロペ国王が協力要請の親書を送っているにも関わらず、北方側からの動きは未だになかった。ジャポネ王城の宮廷魔術師の魔法でエウロペ国王と会話し実情を確認したセレスは、インディラ行きを決めた。

普段、勇者一行の進むべき道を決めるのは、勘が鋭い赤毛の傭兵だった。砂漠越えも樹海越えも、彼の天性の勘に助けられ、一行は無事に道を進めたのだ。

しかし、インディラまでの道は武闘僧が先頭に立つ事となった。道案内を任せて欲しいと強く訴える武闘僧に、説得するのも面倒とばかりに赤毛の傭兵は簡単に折れ、羅針盤の役目を放棄した。

武闘僧は地図を広げ、野鳥を呼び寄せては情報収集をし、通りすがりのインディラ寺院には必ず立ち寄って進むべき道を決めていた。

彼が選ぶ道には、赤毛の傭兵ならば安全上の理由から決して選ばない道も数多く含まれていた。

「セレス、朗報です。あ、いや、朗報はマズいですね、不謹慎でした。まあ、つまり、ついに待ちに待った情報を掴めました」

先ほど赤毛の戦士がシャオロンを体術の稽古に連れ出したのだが、それと入れ違うように武闘僧が宿屋のセレスの部屋に入って来たのだ。赤毛の傭兵と示し合わせて、シャオロンに席を外させたようだ。

「『サリエル様』の目撃情報です」

「サリエル！シャオロンの家族や村の方を殺した仇の首謀者格の奴

ね」
「ええ。やはり、サリエルは魔族でした。それも、かなり上位の……」
「……」
「……どこで目撃されたの？」
「ここより南西のウンナン県のインディラ寺院で。五日ほど前の事です。サリエルは金髪碧眼の西国風のけっこうな美男子で、細剣を持っていたとか。サリエルとその部下の魔人、大魔王教徒は、突然、寺院の中に現れたそうです」
「突然、現れた？」
「ええ。移動魔法でしょう。インディラ寺院には何重にも魔封じや外部からの侵入を防ぐ結界が張られています。しかし、大半が事前に壊されていたそうです。内通者によってね……。その愚か者はウンナンの僧正様が既にご処分なさったとのことですが」
ナーダの顔が渋いものとなる。
「敵はやりたいことだけやって移動魔法で逃げたそうです。その襲撃で、聖なる武器の独鈷『蓮華』が盗まれ、三人死亡、八人の行方が知れなくなりました……不明八人は、おそらく魔族に肉体を運び去られたのだと思います。魔族の憑代にする為に。ここまで被害が広がったのは、敵が突如現れた為に対応が遅れたのも理由の一つですが……」
言いにくそうに武闘僧は溜息をついた。
「魔族に神聖魔法が効かなかったせいなんです」
「え？」
「神族の御力を借り穢れを浄化する神聖魔法は、本来、魔族には絶大な効果があるはずなのですが……サリエルとその部下の魔族には全く効果がなかったそうです」
「……」
「神聖魔法を無効にした奴等は、全員、武器を持っていたそうです。剣や槍、サイ、長刀、どれも切れ味抜群の名品ばかりだったとか。敵の中には、右手に爪を装備している魔人も居たそうです」

「それって！」
「その武器の特徴は、銀色に輝く五爪と、腕にはめこむ為の黒の小手からなっている事。間違いなく『龍の爪』です」
「魔人が聖なる武器を装備しているの？」
「……更に言いにくい事を言えばですね」
武闘僧はきゅっと唇を噛み、それから言葉を続けた。
「年の頃は三～四十代と見える壮健な肉体、白髪交じりの黒の束髪、額の中央に黒子、口元に髭……その魔人の外見的特徴を、武闘家連盟に照会したところ……ユーシェンだと……シャオロンのお父上に酷似しているというか、彼そのものだという回答を得たのです」
「……」
セレスは拳を握りしめた。予想していた事ではあったが……やはり憤りを押さえられない。
「シャオロンのお父様の亡骸を、魔族が悪用しているのね……」
「ええ。聖なる武器と持ち手の絆を残したまま、魔族が持ち手の肉体を手に入れたということです。神聖魔法が通じなかったのも道理です。聖なるものでは、聖なるものを破壊できませんからね。聖なるものを装備する者も、ね」
「ということは、聖なる武器が魔族を守る結界の役割をしてしまったのね？」
「そうです。前にシャオロンのお父上がおっしゃってたでしょ？敵の狙いは聖なる武器の収集で、格闘家の肉体を奪ったのはその余禄にすぎないって。つまり、聖なる武器の振るい手の亡骸を魔人にしたて、本来は魔族には致命的な神聖魔法を無効にしてしまったわけです」
「……」
「しかも、移動魔法で神出鬼没。なんか、お手上げって感じでしょ？」
「でも……」

セレスは拳をぎゅっと握りしめた。
「お手上げなんて言ってられない。魔族は浄化しなきゃ」
武闘僧は頷きを返した。
「その通りです。聖なる武器を持った魔人でも無敵ではありません。倒せます。ですから……多少、汚い手を使ってでもサリエルと魔人をおびき寄せて、退路を断って倒すべきでしょう」
「汚い手？おびき寄せて倒す？」
「ええ。ちょっと、えげつない罠を準備したんですよ。あんまり正義の味方向きの策じゃないんですが……好き嫌いも言ってられません。不承不承ですが、アジャンは策に同意してくれました。後はあなたの許可をいただくだけなのですが」
「どんな罠なの？」
「それを説明する前に、先に欠点を述べます。今、我々は魔族の他に忍者にも狙われています。魔族を退治するはずの罠に忍者がかかってしまうかもしれませんし、魔族&忍者の両方に襲撃されちゃうかもしれません。はっきり言って相当、危険ですよ」
セレスは武闘僧をジッと見つめた。
「でも、あなた、勝算があるんでしょ？」
武闘僧は胸をそらせた。
「当然です。勝てると思ったからこそ提案しているのです。私、負けるのは大嫌いですからね」
セレスはにっこりと笑みを浮かべた。
「私も負けるのは大嫌いよ。ナーダ、聞かせて、あなたの作戦を」
「ええ、それで、セレス」
「わかっているわ。あなたの作戦が納得できるものだったら……私からシャオロンに作戦の事もお父様の事も話すわ。そうして欲しいんでしょ？」

その六日後……

「夜明けと共に街道をひた走っていた女勇者一行は、さきほど地元シャイナの大魔王教徒の襲撃を受けました。荒野で戦闘を繰り広げ、これを撃退したのですが、その際に武闘僧が喉を負傷。かなりの深手のようです。勇者一行には武闘僧以外、治癒魔法の使い手がおりませんので、付近の警備兵用番小屋に駆け込み薬草にて治療しております。尚、現在は巡回時期ではないので番小屋は無人にございます」

「番小屋周辺は？」

「北と南に丘が連なる盆地にございます。街道ではありますが、樹木はなく、草もまばら、岩ばかりの荒れ地で、付近に民家も畑もございません。対して南北の丘の上は森となっており、身を潜めるのに適しております」

「ふむ」

キクリの報告に、ジライは首を傾げた。

女勇者一行とさほど距離の開かぬ街道ぞいの森に、ジライとその部下は潜んでいた。全員、黒装束に覆面の忍姿だ。この数日、つかず離れず勇者一行を追っていたのだが……県令の館、シャイナ軍駐屯城、インディラ寺院の外房など、襲撃に不適な場所にばかり女勇者は滞在していた。

ジライは横に控えていた片腕の忍者ジャコウに尋ねてみた。

「どう思う？」

「襲撃する好機かと。ただ、」

「ただ？」

「いささか出来すぎという気も。人里離れた荒野で、治癒魔法の使い手が喉を負傷というのも……」

ジライは頷きを返した。昔、諜報部隊の第一線で活躍していただけあって、ジャコウの洞察は鋭い。

「我（われ）も罠だと思う」

「では、襲撃を見合わせますか？」と、ジャコウ。
ジライは視線を、サヨリとヒサメに向けた。アスカに代わり忍の里との連絡役として送られてきた、くノ一だ。
「大魔王教徒の動き、里では何ぞつかんでおるのか？」
サヨリがかぶりを振る。
「ジライ様、ご存じのように東国の大魔王教徒本部は女勇者に滅ぼされました。教団長も捕縛され、神官達も散り散りにございます。忍の里を頼り逃げて来た者も居りましたが、大物は居りませぬ。ジャポネ、シャイナの大魔王教団は指揮系統が乱れておりまして、生き残りがそれぞれ勝手な活動をしているとしか言えませぬ」
「大魔王教徒に関しての、お頭様よりの伝言は『教団の活動の邪魔をするな』、それだけにございます」
と、ヒサメもつけ加える。忍者頭は大魔王教徒でもあったが、常に信仰よりも里の利益をとる。顧客（大魔王教団）との関係を考慮し、活動を妨害するなと指示したのだろう。
「大魔王教徒が仕掛けていない時に殺れ、という事か？」
「おそらく……」と、ヒサメ。
「キクリ、女勇者のそばに今、大魔王教徒はおるか？」
勇者一行の監視役のくノ一は、かぶりを振った。
「いいえ。今朝方の奴等は蜘蛛の子を散らすように逃げました。周囲に大魔王教徒は居りませぬ」
「女勇者一行にも動きはないな？」
少しの間をおき、キクリは頷きを返した。
「ございませぬ。番小屋に籠っております」
忍犬を使役するキクリは、己が手駒の犬と精神感応する術も心得ていた。彼女の代わりに現在、女勇者一行を監視しているのは忍犬。それが死の危険に合うか、或いは女勇者一行に動きがあれば、術師たるキクリに伝わるのだ。
「ふむ」
ジライは溜息をついた。

「いた仕方ない……やるか」
「罠かもしれぬのに？」
ジャコウが眉をしかめる。ジライは覆面の下に苦笑を浮かべた。
「罠かもしれぬし、好機かもしれぬ。いずれにしろ慎重に仕掛ける。まずは遠距離から、の。ジャコウ、もしかすると、おぬしが得意技を披露する前に決着がついてしまうやもしれぬぞ」

太陽は蒼天にあった。
単眼の鬼ダイダラは火矢をつがえ、ニメートルはある強弓を引き絞っていた。
「気持ち左、もそっと上に向けよ」
忍者ジライの指示通りに、巨人は目標を狙う。
三百メートルほど先の、荒野の南側にぽつんとある番小屋。それを南の丘の上から木々に隠れ、狙っているのだ。
並みの人間ならば引く事すらかなわない大弓である。単眼の鬼のバカ力を、侏儒のコゲラは呆れたように見つめ、痩せっぽっちのマツムシは無関心そうに眺めていた。
ユリネは番小屋を見つめていた、キツネのように細い目を大きく見開いて。番小屋が燃え、中から火だるまになった敵が転げ出てきたら……それがあの豊かな金の髪の女だったらどんなに痛快かと思い、惨劇を待っているのだ。
ジャコウはダイダラの手並みを拝見しようと、その動きを見つめていた。
全員、忍者装束だったが、ダイダラだけは覆面をしていなかった（ジャコウは左袖が無い、彼専用の黒装束を着ている）。単眼の鬼は素顔を晒してこそ相手の畏怖を誘えるので、覆面をしない事が多い。
荒野を挟んだ北の丘の森には、アカハナ達四兄弟が潜んでいる。木々の茂みにうまく隠れており、その姿はこちらから見えない。
「放て」

一つ目鬼が火矢を放つ。放物線を描いて火矢は空を飛び、番小屋の屋根を貫き、屋根に穴を開け……目標を貫いてすぐに爆発した。矢の芯に火薬がしこまれていたのだ。

番小屋に火災が広がる。

「二の矢を」

ジライの指示を受け矢を絞っていたダイダラの背後から、マツムシが矢羽に火をつける。巨人は再びジライの指示通りに火矢を放った。

矢は番小屋の屋根を貫き、爆発した。

ユリネ同様、コゲラとジャコウも、番小屋の様子を窺った。しかし、中から出て来る者がいない。

番小屋の周囲は荒野。隠れるべき樹木もない。火を恐れ出てきた瞬間、勇者一行の命運はつきる。魔法の唱え手が負傷とあっては結界も張れない。火薬入りの火矢よりも逃れたとしても、北と南の丘を押さえているのだ。その高みから忍法や攻撃の雨を降らせれば、一行の命を奪うのは易いはず。

番小屋の扉を蹴破り、中から大きなものが躍り出る。馬だ。勇者一行をその背に乗せていた馬だ。四頭の馬は火を恐れ、一目散に逃げてゆく。

「三の矢！急げ！」

ジライの命令に、単眼の鬼とマツムシが動く。

「ジャコウ、ユリネ、コゲラ、雷（いかずち）！馬を狙え！」

気を高めていた三人が、雷（いかずち）の忍法を放つ。距離が開いている上、目標が走っている馬なので狙いが定まらない。しかし、雷の光と音に驚き、馬は棹立ちとなり、或いはどうと倒れる。けれども、馬の腹部に敵はしがみついていなかった。

「三の矢、番小屋の入り口を狙え。もそっと右。そこじゃ、撃て！」

ダイダラの矢は、燃え盛る建物に止めを刺した。

ごうと音をててて燃え上がる番小屋。凄まじい炎に全てが飲み込まれてゆく。

「……」
ジライは崩れゆく建物を睨むように見つめた。
もはや脱出は不可能……
ついに、誰も、そこより飛び出さなかったのだ。
「撤収！」
「え？」
コゲラが驚き振り返る。
「死体を確かめないんで？」
「阿呆」
ジライが横目で侏儒をじろりと睨む。
「あそこは無人ぞ。勇者一行は既にどこぞに逃げておる」
「へ？でも、キクリの報告じゃ、あいつら、あそこに籠ってるって」
「キクリにも忍犬にも気づかれぬ方法で、奴等脱出したのだ。術を確かめるのは後で良い。逃げるぞ。ユリネ、アカハナ達に合図を」
くノ一は頷き、懐から出した鏡に光を集め、向かいの丘に合図を送る。
「！」
ジライは急ぎ、左に避けた。彼が居た場所の空を切り、矢が木の幹へと突き刺さる。
忍者が振り返って、少し離れた木々の向こうに見たものは……
『勇者の剣』を背負い、弓を構える女勇者。
槍を手に、彼女を守るようにたたずむ武闘僧。
その二人であった。

「偽の大魔王教徒に襲撃を演じてもらって罠を張ったのに、魔族じゃなくて忍者をひっかけちゃったわね」
「残念ですねえ。私、負傷の演技までしたのに」
そう言いながら、二人の頬は緩み、目は爛々と輝いていた。二人がそれぞれに再戦を望んでいた敵が、ほんの少し走れば手が届く距

離にいるのだ。
「似たような恰好の人が大勢いますが、獲物を間違えないでくださいよ、セレス」
「失礼ね。間違えるわけないでしょ、忍者ジライを……」
背には忍刀、腰に大小の二刀を差す忍……セレスはその男を真っ直ぐに見つめていた。
「こっちが大当たりって事は、アジャン達、ハズレを引いちゃったのね」
「さあ？あちらの丘にもそれなりの敵が居るのでは？それに忍者と戦ってたら、その機を狙って魔族が攻めて来る可能性もあります。ですから、」
「わかってるわ。まずは敵の数を減らさなきゃね……」

矢をつがえ、女勇者が弓を連射する。木々の間から。素早く正確な攻撃であった。ジライ達は弓を避け、左右に別れた。
風を切って侏儒のコゲラが跳躍し、手裏剣を投げる。だが、武闘僧が槍を旋回させ、その攻撃を難なく防いだ。
セレスの弓はジライを狙っている。狙われながらセレスとの距離を詰めるジライ。
セレスをジライとの戦いに専念させる為、武闘僧が雑魚（コゲラ達）を引き受け、道を塞ぐ。
コゲラの放つ手裏剣の雨の中、忍刀を右手で抜き背の高いマツムシが突進する。武闘僧の槍の間合いに入るや跳躍し、刀を振るとみせかけて左手で手裏剣を投げる。
武闘僧は槍と共に己が体を旋回させ、薙いだ槍で手裏剣を落としつつ、棍底でコゲラの腹部を突き、回転の勢いののった左足でマツムシの腹部を蹴り飛ばした。
「ぐぇぇぇっ！」
体を二つに折り、マツムシが蹲る。武闘僧の重い蹴りを受けたの

だ。確実にあばら骨が折れているだろう。コゲラはすぐに立ち上がったが、マツムシは動けない。

槍の穂先を向け、武闘僧は動けぬ忍に止めを刺そうとした。が、ぶぅぅぅんと激しく空気が振動する音がする。武闘僧は急ぎ身を引いた。周囲の木々の幹のそちこちが、爪でえぐられたかのように削れ、砕け散る。

「忍法、かまいたちの術！」

と、叫んだのはジャコウだった。右手のみで印を結んでいる彼は、弟子のくノ一に目配せを送った。ユリネは頷き、気を高め始める。

この隙にと、コゲラが相棒の体を引きずって連れ去り、代わりとばかりに巨大な棍棒を持つ単眼の鬼が襲いかかる。その岩をも粉々に砕く重い一撃を、武闘僧は笑みと共に槍で受け止めた。

凄まじい勢いに、火花が散る。

単眼の巨人は力を振り絞る。が、武闘僧も引かない。二人は武器を交えたまま睨み合った。

「お久し振りですね……確か、ダイダラというお名前でしたよね？」

話しかけても、荒い息を漏らし、肩までの髪を振り乱し、鬼は顔をしかめるばかり。構わず、武闘僧は言葉を続けた。

「私はインディラの武闘僧ナーダです。あなたとの再戦、楽しみにしてたんですよ」

やはり相手は何も答えない。顔を真っ赤にして単眼で睨み、棍棒に力をこめるだけだ。

「無口な方ですねえ……」

余裕を装っていたが、実はナーダの方にも余力はない。武器を持っての対決は互角であった。

「ちきしょう！」

マツムシを運び終えた侏儒のコゲラが、懐から出したモノを武闘僧と単眼の鬼めがけて投げつける。

「よせ！」

ジャコウは叫んだ。が、間に合わなかった。
「逃げろ、ダイダラ！」
コゲラが投げたモノは……火薬玉だった。

爆発。
爆炎。
爆風。
さほど威力のある火薬玉ではなかったが、直撃をくらった者の四肢を飛び散らせるほどの殺傷力はあった。
黒々とした煙が立ち込める中、侏儒は喉を詰まらせたような笑いを漏らしていた。
「へへ、ざまあみろ、へへ」
「このたわけ！」
ジャコウは怒鳴った。コゲラの退路を確保する為に武闘僧を押さえに走ったダイダラを……この男は……巻き添えにしたのだ。
「へへ、大丈夫さ、あのうすらバカは、岩みてぇに硬いから、へへ、死にゃあしねえよ」
「きさま……」
「けど、まあ、へへ、普通の人間なら死ぬよな、へへ」
笑いながら侏儒は黒煙の中を覗きこんだ。
「あの僧侶なんざ、へへ、イチコロ」
ぐっさり、と……
コゲラの胸に、鋭い刃が突き刺さる。
信じられない！と驚き、コゲラは己の胸と煙を見比べた。
「……最低ですね、あなたは」
黒煙の中から、槍を構えた武闘僧が現れる。皮膚に多少の裂傷があるものの、ほぼ無傷だ。
「仲間を巻き添えにして、そうまでして、手柄を立てたいのですか？それが忍者というものなのですか！」

がくっと頭を垂らした侏儒を、右の足の裏で武闘僧は蹴り飛ばした。侏儒の体から槍の先端が抜ける。血を撒き散らせながら、侏儒は地面に倒れた。

片腕の忍者ジャコウは、すばやく視線を走らせた。虫の息のコゲラ、うずくまっているダイダラ（その背中は焼け焦げている）、槍を構える武闘僧……。ジライはやや遠方で女勇者と刃を交わしている。ジャコウの後方には、気を練るユリネと、重傷のマツムシが居る。

（気が足りぬ。大技を二つ使った後じゃ、うてて後一つ……）

ユリネの技を効果的に用いる為には、彼自身の得意技は、今、封印すべきだ。普通の忍法と体術で時間を稼ぐしかない。敵の槍は鎖帷子を装備した忍を一撃で貫き殺すというのに、頼りない盾じゃとジャコウは覆面の下に苦笑を浮かべた。

その少し前……

セレスの方は……

弓での攻撃は長くは続かなかった。

木を渡り距離をつめた忍者は、カルヴェルが『ムラクモ』と呼んでいた神秘の刀を抜いたのだ。雨を降らせる刃が矢を斬り落とす。

セレスには次の矢をつがえる間はなかった。『ムラクモ』を構えた忍者が、木の上から飛び降りて来たのである。

初撃は身をかわして避けた。が、刃の向きを変えて放たれた二撃目はよけられない。仕方なく弓束を握り、弓の上半部で、その攻撃を受け止めた。

忍者の刃から岩を砕く波のように水飛沫が飛び散り……弓がウォォォンと異音を発した。セレスは弓束を握る右手に刺すような痛みを感じた。『エルフの弓』に触れている箇所が痛む。

（又……）

以前、忍者の刀を受け止めた時、『勇者の剣』もセレスの武器となる事を拒んだ。聖なる武器は持ち手を選ぶ。武器と一体化している忍者に対し、未熟すぎるセレスをあの時、『勇者の剣』は見放したのだ。

そして、今、『エルフの弓』も……

セレスは背の剣の鞘にかけていた弓袋に弓を戻した。

ジライは攻撃を止め、刀を正眼に構えた。そして、覆面から覗く目を細め、笑みを見せる。

「抜かれるがよい」

『勇者の剣』を抜け、と言っているのだ。

「丸腰のあなたを斬ってもつまらぬ」

「ご親切ね……でも、あなた、後悔するわよ」

セレスは『勇者の剣』を抜いた。セレスの身長ほどもある巨剣は、今……手にしている事を忘れてしまいそうなほど軽かった！

忍者は地を蹴り、空中より『ムラクモ』で斬りかかる。

『勇者の剣』は、すかさず、その刃を受け止めた。

激しく飛び散る水。

けれども、『勇者の剣』は異音を漏らさず、重量も増えない。忍者の二撃、三撃目を耐えてくれる。

後方に跳び退り、忍者はセレスとの距離を開いた。

「少しは出来るようになられたようだな」

「ありがとう。でも、まだまだ修行中よ」

そのまま隙を窺う忍者と、焦って仕掛けまいと敵の出方を見るセレスは、睨み合った。

と、そこへ……

爆音が響き、セレスの集中力は途切れてしまった。

（なに？）

ナーダが居た方だ。セレスは爆発へと顔を向けかけ、目の端に駆け寄って来るジライを捉えた。

（いけない！）

セレスは剣を突き上げ、忍者の攻撃をそらせた。

『勇者の剣』の重量が増している。辞書一冊分ほどの重さだろうか。戦場で集中力を欠いた持ち手に、怒っているのだ。けれども、ジライの刃を受けても、『勇者の剣』は異音を発しなかった。まだ、見捨てられてはいない。

（『勇者の剣』と一体となり、『勇者の剣』が望むように剣を振り……目の前の忍者を倒すのよ！）

アカハナ達四兄弟は苦戦を強いられていた。

北の丘に配置されたのは四兄弟のみなのに（番小屋が盆地の南側にあったので、主力は南に固まったのだ）、赤毛の傭兵と武闘家の少年の二人が突然、丘の上に出現したのだ。

アオザは武闘家の少年の相手をした。攻撃をしかけた後、わざと逃げて少年をその場から引き離したのだ。残り三人で木の上から投げ縄をもって赤毛の傭兵の動きを奪い手裏剣や火薬玉を投げつけて倒す算段をたてたのだが……

アオザ一人ではシャオロンを押さえられなかった。

「何だよ、こいつ！何で忍より動きが速いんだよ！」

泣き言を漏らし、アオザはできるだけ相手から離れようと木を登った。敵の武器は爪。接近戦用の格闘武器だ。離れてしまえば勝てると思ったのだが……

敵の少年は立ち止まり、左手を大きく振った。

「へ？」

少年の前の空が揺れ、風の渦巻きが現れる。木の上のアオザめざし、まっすぐに昇ってくる。

「げ！」

違う木へ、より高みへとアオザは逃げた。

「魔法使うなんて、聞いてないよ！」

やがて竜巻は宙に飲み込まれるように消えた。ホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、アオザは悲鳴をあげた。

「うあ！そんな！ちょっとタンマ！それ無し！」

慌ててアオザは木を渡った。

武闘家の少年はアオザに背を向け、もと来た道を引き返していた。赤毛の傭兵のもとに戻る気なのだ。

『ザコぐらい倒せよ』と兄弟達に武闘家の少年の相手を任されていたのに……

アオザは焦った。距離は開くばかりだ。背を狙い投げた手裏剣も、ことごとく避けられてしまうし。

一方……

アカハナ達は打つ手がなく困っていた。

赤毛の傭兵の動きがおかしいのだ。鈍重かと思えば素早く、走ったかと思うと止まり、森の中で非常識なほど大きな大剣を振り回すのだ。動きの予想がつけづらい上に、敵は三兄弟の遠隔攻撃を難なくよけ、拘束するはずだった投げ縄を全て斬ってくれたのだ。

赤毛の傭兵は周囲を見渡し狙いを定めると、木の幹に体当たりをかました。その衝撃にクロベエは体勢を崩し、真っ逆さまに木から落ちる。空中で回転し、どうにか足から着地する事はできたが、そこには……刃を構えた赤毛の傭兵が居た。

「クロベエ！」

アカハナとキスケが、傭兵の左右の木から手裏剣を放つ。

けれども、傭兵は後ろに目があるのか、それとも勘が鋭いのか、死角から放つ手裏剣すらほんの少し体を動かしただけで避けてしまう。

クロベエは、傭兵の大剣を、すばやい体術で、かろうじて避けた。左手を浅く斬られたが、首を刎ねられるよりは遥かにマシだった。

「アジャンさーん！」

遠くから駆け寄って来るシャオロンを見て、アカハナは怒った。

「アオザの馬鹿！ザコも一人じゃ殺れねえのかよ！」

つづいてキスケが懐に手を入れ、
「面倒くさい、もう殺っちゃおうぜ！」
と、火薬玉を取り出す。
「けど、外しちまったら」と、アカハナ。
「そん時はそん時だ」と、クロベエ。猿のように木を登り、赤毛の傭兵から逃げて来たのだ。
「三人同時に投げよう」
「そうだな」
「誘爆すれば」
「倒せるかもしれん」
「アオザは？」
「大丈夫。まだここまでは来ない」
「そうだな、今の内だ」
「投げるぞ」
三人は傭兵めがけ、木の上から火薬玉を投げつけた。

右手のみで印を切り、ジャコウはありったけの気をこめて、忍法を唱えた。

「忍法、かまいたちの術！」

武闘僧の前の空が乱れ、無数の鋭い刃の風と化す。風の刃は武闘僧を包み込むように、その周囲を駆け抜けた。

『かまいたち』は直撃させられれば一撃で標的を葬れる、致死性の高い忍法だった。しかし……

風が通り抜けた後、武闘僧は変わらぬ姿でたたずんでいた。槍を構え、摺り足で距離を詰めて来る。

「残念でしたね……来るとわかっている魔法でしたら、私、簡単に防げるんですよ。神獣クールマの御力でね……」

武闘僧の両腕両脚の黒い装甲が光る。邪を払い魔力を防ぐ、神聖防具だ。

「もうお終いですか？もっとも、ただの忍法では、私はびくともしませんがね……私を倒したかったら神魔をも葬れる力で挑んできなさい！」

武闘僧から凄まじい殺気が伝わる。

ジャコウは手裏剣を投げた。が、その全てをはじき、武闘僧は歩を進めて来る。怒りに形相を歪めながら。

もうさほど距離はない。ジャコウは背の忍刀を抜いた。命にかえてでも、ユリネを守る覚悟で。

だが、武闘僧は攻撃に移れなかった。背後から、ぬっと陰が差したからだ。

左へと避けた武闘僧は、地面を叩きつける棍棒を視界にとらえ、振り返った。

単眼の鬼が棍棒を振り回している……

武闘僧から急速に殺気が消えていった。

「あなた、あんな大怪我だったのに……背中がまる焦げだったのに……動けるんですか！」

棍棒を避ける顔は嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「そういえば、あなた、痛覚が無いんでしたっけ。忘れてました。でも、ともかくも、ご無事で何より」

武闘僧は棍棒を槍で受け止めた。

力勝負となった二人を見つめ、ジャコウは安堵の息をついた。命拾いをしたのだ。爆発の衝撃で気絶していたダイダラが目覚めてくれねば、自分もユリネも死んでいた事だろう。

（あの武闘僧、ダイダラとの勝負を邪魔され、怒っていたのか。それと後は義憤か……コゲラが仲間を巻き添えにした事を怒っておったのだな。さすがはインディラ僧、戦闘中に敵に同情するとは……甘い奴め）

ジャコウの覆面の下の顔には微笑が浮かんでいた。敵への侮蔑の気持ちもあったが、武闘僧の怒りはジャコウの怒りでもあった。死と隣り合わせの戦場において、仲間を大切にしない者ほど憎らしい者はいない。

「ジャコウ」

ユリネの呼び声だ。

ジャコウは肩越しに振り返り、弟子に頷いた。

相手に好意を抱いてしまったが、敵は敵。討つべき者は討たねばならない。

ジャコウは声を張り上げた。

「ダイダラ、引けぃ！」

単眼の鬼は低くうめき、武闘僧をはじき飛ばした。

ナーダは、棍棒を構えたまま距離をとった単眼の鬼と、左腕のない忍者とその背後の小柄な忍者へと順に視線を走らせた。

「武闘僧、悪いが、おまえにはここで死んでもらう」

片手の忍者の声が、木々の間に静かに響き渡る。
「おもしろい冗談ですね、あなたが私を殺すとでも言うのですか？」
「おまえは、もはや生きられぬ」
生きられぬ……
生きられぬ……
と、木霊が響く。
「なぜならば、心の臓が痛む」
「！」
ナーダは息を詰まらせた。本当に心臓が苦しくなってきたのだ。
「呼吸もままならぬ」
呼吸もままならぬ……
呼吸もままならぬ……と、木霊が聞こえる。
「腕が重い」
腕が重い……
腕が重い……
「槍などもう持てぬ」
槍などもう持てぬ……
槍などもう持てぬ……
「く……」
ナーダの手より『雷神の槍』が離れ、地面に転がった。
（これは……強力な暗示？術だとわかっているのに抗えない……）
神聖防具に助力を願っても、術の強制力が消えない。神聖防具の守護力は装備者の能力次第だ。敵の技量がナーダを遥かに上回っていれば、その魔法も防げなくなる。
（馬鹿な……カルヴェル様のような大魔術師の魔法ならともかく……相手は忍者……私が負けるはずが）
ぎりっと唇を噛み、気力でナーダは術に抗った。
この魔法を止めるには……
肺が空気を求め、悲鳴をあげる。

もう時間はない。
ナーダは地を蹴った。右の拳をふりあげ、片腕の忍者を狙う。
術師さえ倒せば、術は解ける！
だが、彼の拳が片腕の忍者に達する前に……
「止まれ！」
その背後にいた者の声で、ナーダの動きは止まってしまった。
若い女の声だ。
「ジャコウに触るな！」
ナーダの耳に、その声は雷鳴のように轟いた。
凄まじい強制力のある声……
絶対者の声だ。
（しまった……）
胸と喉を押さえ、ナーダは蹲った。
（術師は、女の方だ……女が暗示の為の場をつくっていたのか）
再び男が口を開く。
「動悸が遅い」
動悸が遅い……
動悸が遅い……
「きさまの心の臓は間もなく止まる」
（まずい……）
ナーダは懐をかきむしり、忍ばせてあったモノを地面に叩きつけた。

爆発的に黒い煙が広がる。
武闘僧が使ったモノは、煙玉だった。
「馬鹿な？」
忍者ではない者が煙玉を使うなんて、ありえない。
しかも、周囲に複数の人の気を感じるのだ。武闘僧以外に敵が三人は居る。

ユリネをかばい、ジャコウは忍刀を構えた。
だが、誰も仕掛けてこないまま煙は引いた。おろおろと周囲を見回すダイダラ、背後のユリネ、うずくまるマツムシ、地に転がるコゲラ、居るのはそれだけだ。『雷神の槍』も無い。
「こちらも逃げたか」
木の上からふわりと、忍者ジライが地面に降り立つ。
「では、女勇者も？」
ジライは頷きを返した。
「誰かが横から光玉と煙玉を投げつけてきおった。まばゆい光にほんの一瞬、目を奪われた隙に、黒煙を広げられ、逃げられた」
「一体、誰が？」
「知らん。知らんが、忍であろう」
ジライの左袖を単眼の鬼がひっぱる。しゃべる事ができない巨人は、指で荒野をさし、それからついて来てほしいとばかりにジライの袖をひっぱり続ける。
「何ぞわかったのか？」
一つ目鬼が大きく頷く。
ジライは絶命しているコゲラと、低くうめいているマツムシへと視線を向けた。
「マツムシ、コゲラの亡骸を処分し、おまえは引き揚げよ」
腹部を押さえながら、がりがりに痩せた長身の男は頷いた。
巨人は、ジライにジャコウとユリネを、ある木のそばの大岩の前まで連れてゆき、岩をひょいと持ち上げた。岩の下には穴があり、かなり長く、遠くまで続く地下道があった。所々に灯りが灯っているのが見える。ダイダラは大岩をひっくりかえして裏側をジライに見せた。ハリボテだった。
「なるほど、地下道を使って逃げたのか」
と、ジャコウ。首を傾げながら、ダイダラに尋ねる。
「何故、わかった？」
ダイダラは大きな手で自分の耳をぽんぽんと叩き、両手をそよそ

よと動かした。
「風の音でわかったそうじゃ」と、ジライ。
ダイダラは嬉しそうに、うん、うんと頷いた。
「この通路を抜ける風の音でも耳にしたんじゃろ。こやつ、今は、視覚と聴覚以外の感覚を封じておるからの、残った目と耳は獣以上に利く」
「……そうとう遠くまで続いていますな、この通路。荒野の番小屋と通じているのやも……」
「敵は地下道の存在を知っており、地下に味方を……おそらく忍を潜ませておったのだ」
「忍を……」
「引くぞ、ジャコウ」
「それが賢明かと」
「引いてはなりません、ジライ様」
木枯らしが吹き、枯葉が舞い上がる。小さなつむじ風が現れ、女の甲高い笑い声が響いた。
「女勇者をお殺しあそばしませ」
「お頭様の為に……」
「大魔王教徒として」
「その手を血に染めるのです」
ホホホホホと笑いながら、つむじ風からサヨリとヒサメが現れる。忍の里との連絡役のくノ一だ。二人とも忍者装束だが覆面はつけておらず、ざんばらに乱れた黒髪を風に舞わせていた。
「ジライ様、又、動かれぬおつもりですか？」
「あなたが動かれなかった為に」
「ジャポネの大魔王教団は滅びました」
「愚行を繰り返してはなりませんよ」
「はやく、女勇者を殺すのです」
「……」
ジライは無言のまま二人に近寄り……『ムラクモ』を抜刀した。

雨が降る……

サヨリが身二つとなり、サラサラと塩となって崩れ落ちる。傷口より一滴の血も流さずに……

残ったヒサメがジライをキッ！と睨む。

「仲間を斬られるのか！」

「外見（そとみ）はともかく、中身は違おう」

ヒサメをねめつけるジライのまなざしは冷たい。

「何時、入れかわった？何時、その体をのっとった？」

ヒサメはホホホと愉快そうに笑った。

「アスカ様の代わりにあなた様の元に参った時には、既に私は私でありましたよ！」

「……サヨリとヒサメを殺したな」

「だったら何だと言うのです！この身を魔族への贄に捧げたのは、あなたもよくご存じの方ですわ！」

「なに？」

「ジライ様、ただの人間が魔族に気に入られるにはどうすれば良いかご存じですか？」

「知らん」

「簡単な事にございます。贄を捧げれば良いのです、大魔王様の手足となって働く魔人、それに生まれ変わるのにふさわしい贄を……。若く美しく魂が柔軟なものを捧げれば、大魔王様は殊の外、喜ばれる事でしょう」

「……」

「ジライ様、あなたはお強すぎた。それに、若い者や異形どもの世話を焼かれすぎ、彼等から人望を得すぎたのです。お頭（かしら）様のお言葉を何一つ逆らわなければ良かったものを……あなたは命に抗い、女勇者の暗殺を遅滞させた……あなたはもはや危険な存在……目障りなのです」

「ふん」

ジライは顎をしゃくった。

「もはや老いぼれのきゃつより、我の方が強い。我が反逆を起こさぬかと頭は怯えておるのか」
「あなたはお頭様に絶対服従を誓っておればよかったのです。ならば、あなたは里の誰もが認める次期頭領……数十年後にはお頭様の跡を継がれたでしょう」
「老人の妄想じゃ……」
ジライはぎりりと歯を噛みしめた。
「我に逆らう意志などなかったものを……」
「もはや遅うございます。あなたとあなたに忠実な部下は、忍の里より選ばれた贄……ここより逃れても、幾千幾万の大魔王教徒があなた方の命を狙うでしょう。その運命から逃れるには……」
ヒサメはニィィッと笑った。
「より良き贄を代わりに捧げるしか道はございませぬ」
ヒサメ、いや、ヒサメの内の魔族は荒野を指した。
「女勇者とその従者を殺しなさい。あちらなら、あなた方よりも上物……大魔王様もお許しくださるでしょう」
「断る！」
「ジライ様！」
覆面から不安そうな目を覗かせる、ジャコウとユリネ。
二人の部下を目で制してから、ジライはヒサメを睨んだ。
「共倒れを狙っておるのだろ？我らと女勇者一行、どちらかの勢力が果てた後、きさまが残った方の止めを刺す……みえすいた手じゃが、効率はいい。我がきさまなら、我でもその手を使う」
ヒサメは口に手をそえて、甲高い声で笑った。
「さすがはジライ様！ほんに、あなたはおかわいらしい。殺すには惜しい……その邪悪な魂、しばらくの間、生かしておいてもよろしゅうございます。あなたが忍の里を捨てて、我が主人の直属の部下となると誓われるのなら……」
「きさまの主人？」
ヒサメは艶っぽい笑みを浮かべた。

「我が主人の御名はサリエル……今世の大魔王様の四天王が一人……」

「つまらんな」

ジライは皮肉っぽい口調で言った。

「どうせなら、ケルベゾールド神直属の部下にしてもらいたいものだ」

「それは高望みというもの！たかが人間が！」

「サリエルとやらの部下になれば良い事があるのか？」

「あなたとあなたの部下の命が助かります。それ以上の良い事がありましょうか？」

ヒサメの背後の空が揺れ、武器を手にした大魔王教徒や魔人の軍勢が現れる。移動魔法だ。その数……百や二百ではきかなかった。

ジライの背後で二人の部下が身をよせ合う。ダイダラは事情がのみこめていないようだったが、何時でも殴れるよう棍棒を構えていた。三人を見渡し、ジライは唇をかみしめ、拳を握りしめた。

ヒサメの提案に……今は、『否』とは答えられなかった。

「ジライ様、覆面をお取りください。印（しるし）をさしあげます」

ジライは言われるままに、覆面を外した。白髪、染め粉に染まった肌が露わとなる。その顔には何の表情も浮かんでいなかったが、鋭い光を放つ黒の瞳は魔族を正面から見つめていた。不遜なまでに。

「のちほど、我が主人サリエル様より、本当の印がいただけましょうが……今は形だけ……」

妖しい笑みを浮かべ、ヒサメはジライにしなだれ、頬を撫で、顔を引き寄せ、その唇に自分の唇を重ねた。

（む……）

黒く淀んだ気が流しこまれるのを感じ、ジライは眉をしかめた。口づけをされていた時はそれほど長くなかったが、離れた時、吐き気を堪えねばならなかった。

「……何をした？」
「ホホホ。何ほどの事はございませぬ。あなたがサリエル様の下僕である印をつけたまでの事。他の魔族に、あなたに手だしをされては困りますもの」
吐き気はすぐに治まった。小物魔族の気など、精神を集中すれば楽に払えるはず。
しかし、覆面をつけながら、ジライは、何か取り返しのつかない事を許してしまったかのような、漠然とした不安を感じていた。

火薬玉から広がった火災が枯葉を焼き、木を飲み込んでゆく。その様子を少し離れた木の上から、三人の忍者が眺めていた。
「ちょいとやりすぎたかも……」と、アカハナ。
キスケは周囲を見渡し、死体が転がっていないのを確認した。赤毛の傭兵も武闘家の少年も居ない。
「逃げられちゃったみたいだしなあ」
「ジライの兄貴……怒るだろうなあ」と、クロベエ。
三人は顔を見合わせ、溜息をついた。
「おおい」
木を渡り、アオザが近寄ってくる。
「来いよ、おまえら。オレ、すっげぇモノ見つけたんだぜ」

アオザは草むらの中の大岩の前まで三人を連れて行き、得意そうに岩をひょいと持ち上げた。
「うお！」
「すげえ！」
「おまえ、ダイダラかよ！」
アオザは片目をつぶってみせ、大岩をひっくり返して裏側を見せ、それがハリボテである事を兄弟に教えた。キスケが岩の下を覗きこ

む。地下道だ。遠方にポツン、ポツンと灯りがついている。相当、遠くまで続いているようだ。
「そうか」
アカハナがパチンと指を鳴らす。
「荒野の番小屋にいたはずの二人が何で北の丘に現れたのかと思ってたけど、これか！」
「そーそー」と、アオザ。
「あいつら、さっきも、コレ使って逃げたんだぜ。オレ、陰に隠れてこっそり見てたんだ」
「じゃ、これ荒野まで続いているのか」と、キスケ。
「追っかけようぜ」と、アオザ。
「え？けどさ」
左手に血どめを塗りながら、クロベエが首を傾げる。
「待ち伏せされてるんじゃ？」
「それに、さっき撤収の合図もあったし」と、アカハナ。
四人はう～んとうなった。
「でも、南でも戦闘してたよな。火薬玉や煙玉の煙が上がってたろ？」
「じゃ、撤収はなし？」
「なあ、行ってみようぜ」
と、アオザが兄弟達を見渡す。
「危なそうなら引き返せばいいじゃん」
「けど」と、アカハナがしぶる。
「それに、うまくいけば大手柄だ。敵の背後をつけるんだから」と、アオザ。
「そっか。そうすりゃ、失敗も帳消しか」
森に広がる火災を見ながら、キスケがポンと手を叩く。
「行ってみよう！罠があるかもしれないけど、ちょっとづつ進めば大丈夫さ！」

「……どこが大丈夫なんだよ」
アカハナは兄弟達を睨みつけた。
横木で補強した剥きだしの岩と土でできた狭い地下通路は、落とし穴あり、仕掛け弓あり、動く壁あり、落下天井ありの罠地帯だった。忍の体術がなければ、何度死んでいる事か。
「罠だらけじゃん！」
「けど、変だよな」
クロベエが首をひねる。
「こんな地下道とか罠が何であるんだろ？」
そう言ってクロベエはしゃがみ、壁の横木を撫でた。
「ほら、この湿気といい、古び方といい、昨日、今日できたモノじゃないだろ？地面の中だから湿度が高いんで、はっきりはわかんねえけど、ここ、できてから何年か経ってるよ。女勇者達、この地下道があるのを最初から知ってて、あの番小屋に籠ったんじゃないかな？」
「て、事は、ここは敵のアジト？」と、アオザ。
「やっぱ、敵の罠に誘い込まれた？」と、キスケ。
覆面から覗くアカベエの目が、ギンと二人を睨む。
「わかったよ、引き返そう」
「ごめん、アカベエ！」
慌てて引き返し、しばらく進んだ彼等は……
地下道を塞ぐように佇む男達に気づいた。
今まで人の気配などなかったのに……
先頭の男が右手を振るう。
あまりの素早さに、忍である四人ですらその動きを追いきれない。
それゆえ、己が身に何が起きたのかわからぬまま……キスケはその首を宙に舞わせる事となった。
「キスケ！」
首から血を噴き出し倒れる兄弟の体を目で追って、アオザも倒れ

る。胸から血を噴きながら……

アカハナとクロベエは、手裏剣を男に投げた。

しかし、男は右手で宙を切るだけで、全ての武器を弾いてしまう。

「ひ！」

アカハナが悲鳴をあげた。忍者とはいえ、まだ少年。得体のしれない敵に、本能的な恐怖を感じたのだ。

クロベエの方が、まだ少し冷静であった。手で印を結び、忍法を放つ。

「忍法、かまいたちの術！」

男の周囲の空が刃と化す。だが、その忍法ですらも、男は右手の一振りで防いでしまった。

「そんな……」

「逃げるぞ、クロベエ！」

アカハナは、たった今、引き返そうとしていた道とは反対へ……

…罠が続く荒野への地下道を走った。罠の方が、あの敵よりマシだ。

クロベエは兄弟の命を奪った敵を一睨みしてから、アカハナの後を追った。

敵は、体つきは三十代でも通るが、顔の皺からして、五十代と思われた。白髪交じりの黒の束髪、額の中央に黒子、口元には髭……

…その右腕には銀色に輝く長い爪武器がつけられていた。

忍者ジライは横にジャコウを伴い、荒野へと続く地下道を歩いていた。いや、歩かされていた。すぐ後をユリネが続き、棍棒をひきずりつつ体をかがめたダイダラが窮屈そうについてきている。

その更に後ろには……ジライ達を追い立てるように、人外の魔人や大魔王教徒が歩を進めていた。

ヒサメの肉体をのっとった魔人は、ジライ達に地下道を行くように命じ、自身は部下と共に地上から攻撃を仕掛けると笑った。

『私達の攻撃に恐れをなし、女勇者達は地下へ逃げ込むでしょう。

ジライ様、地下道を進み、退路を断ってください』
（何が退路を断てじゃ。罠とわかった道を進ませおって……このような地下道で敵を始末するには油を撒き火を走らせるのが上策……中の者をたやすく一網打尽にできる）
女勇者達が同じ策を抱いていない事を祈るしかなかった。
ジライと元諜報部員のジャコウが、注意深く罠を外してゆく。歩みが遅い為、後ろのヒサメの部下達はしびれをきらし何度となく不満を訴えた。が、先頭を代わろうとはしなかった。周囲を調べ、罠を外すなど、忍でなければ無理だ。
ジライは時々、壁を叩いてみた。横木で補強してはあるが、ほとんどが剥き出しの岩や地面である。壁に耳を当てて罠を探るふりをしながら、この地下道とその近辺を探っているのだ。
「ここは、おそらくインディラ忍者の隠れ処（アジト）にござろう」
手を休めることなく、ジャコウがポツリと呟く。
「ほう？」
「ここよりインディラとの国境はそれほど遠くなく、街道を進めばシャイナの大都市も遠くありませぬ。シャイナへと放たれた間諜（スパイ）の隠れ処（アジト）に位置的に最適かと」
「では、先ほど戦闘を邪魔をしたのは、インディラのクズ忍者か」
今から八百年前、ジャポネに忍の里が誕生した。
当時の書物には、インディラ系渡来人より諜術を学んだ男が、土着の宗教・武術を昇華させ、忍者集団を作り上げたとある。
つまり、忍者の祖はインディラにあるのだが……
ジャポネの忍は、インディラ忍者を軽んじていた。
忍の里は特定の主人に仕えず、ずっと独立を保ってきた。
対するインディラ忍者は、王侯貴族・寺院の配下として働いている。安定した生活が保障されている為か、東国忍者より技量は劣る。
インディラ忍者には本家としての誇りがあり、東国忍者には一流の忍である自負があった。もう長いこと、忍の里とインディラ忍者軍団は犬猿の仲だった。忍の里の抜け忍（にん）を、インディラ国が受け入

れ庇護している事も、対立に拍車をかけていた。
口ではインディラ忍者への侮蔑を吐きながら、ジライはジャコウに目配せを送った。
ジャコウも目で合図を返す。壁の向こうに何があるのか、ジャコウも気づいているのだ。
片腕の忍者は他にも、ジライの意を汲み取っていた。先ほどからずっと気を練っているのだ。ジライからの合図があれば、何時でも得意の幻術が使えるように。
「ユリネ」
ジライは背後のくノ一を振り返った。
「疲れたであろう？」
「は？」
「おなごの身で、戦闘をした上、こうも長く歩いては疲れたろう。ダイダラに運んでもらえ」
ユリネは首を傾げた。ジライの意図がつかめないのだ。ダイダラと行動を共にしろと命じているのはわかるが。
「わかりました……」
くノ一は単眼の鬼に寄り添った。狐のような目で、歩きづらそうな巨人を睨んで。
「抱えてもらえ」
「え？」
「抱えてもらって、肩に顎でものせておれ」
「……」
ユリネは頷いた。ジライの狙いがわかったのだ。ダイダラは左手だけでくノ一を抱く。ユリネは火傷を負ったダイダラの肩や背に何の頓着もせず、ぐいっと両手をかけ、背後の者……魔族の手下に顔を見てもらえる位置に移動する。
「おっ！これは！」
壁をさすっていたジライが声をあげる。
「新手の罠だ。ジャコウ、外せるか？」

ジライの目を見て、ジャコウを困惑した声をあげた。
「難しゅうございますな。こんな複雑な罠、見たことはございませぬ」
「複雑な罠よ」
複雑な罠よ……
複雑な罠よ……
地下道にユリネの声が響き渡る。
「外せましょうか、この罠を」と、ジャコウ。
「外せなきゃ、罠が発動するわ」と、ユリネ。
罠が発動する……
罠が発動する……
「大岩の罠だ。天井より大岩が落ちる」と、ジャコウ。
「たいへん！天井より大岩が落ちるのよ！」
天井より大岩が落ちる……
天井より大岩が落ちる……
「大岩が転がり、皆、ヒキのように潰れる」と、ジライ。
「死ぬのよ、あたい達、大岩に潰されて……ぺっちゃんこに潰されちゃう。誰も逃げられないわ」
死ぬ……
大岩に潰されて死ぬ……
誰も逃げられない……
「ほぉぉぉぉら、落ちた！」
ユリネがそう叫んだ途端！
最前列を歩いていた魔族の手下は、断末魔の悲鳴をあげて絶命し、その後方に居た者は恐怖に顔を歪めながらもと来た道を引き返そうとする。だが、仲間にぶつかって果たせず、将棋倒しとなり、悲鳴をあげて死んでゆく。上になっている者も後方から迫る目に見えない何かに怯え、死んでゆく。その死骸には魔人すら含まれていた。
形を保てず崩れ去り、塩と化す魔人……
「見事」

ジライは覆面の下に笑みを浮かべ、言霊を操って幻を生み出したユリネと、暗示にかかりやすくなる空間を練気によって作り出したジャコウに、賛辞の言葉を送った。

「魔人すらこれで果てるとはな！」

「言霊を理解できる知能がある者は、我らが幻術からは逃げられませぬ。言葉がもたらす心象に飲まれ、己が生み出した恐怖に負け、自ら息の根を止めるのです。この技が効かぬのは、人語を理解できない動物と……」

ジャコウはチラリと視線をダイダラに向けた。

「想像力の無い阿呆だけにござりまする」

そう言われても何の事かわからず、一つ目鬼はただ単眼をぱちくりとさせるだけだった。

「下ろしな、ウスノロ」

ユリネが乱暴に一つ目鬼の上から飛び降りる。このくノ一は、上役以外の誰に対しても攻撃的だったが、ダイダラを相手にする時が最も残虐だった。この巨人に己の技が通じない事、幾らなぶっても巨人が怒らない事も理由だ。が、無毛症で劣等感の強い彼女は、巨人を貶める事で上位に立ち誇り（プライド）を保っているのだ。

「ジライ様」

壁に右手をかけ、ジャコウが上司を見る。

「しばし待て」

ジライは両手で印を結び、目を閉じ、気を高めた。体内の黒の気は、ジライの気の輝きに敗れ、無と化した。

呼吸を整え、白子の忍者は瞼を開けた。

ヒサメの姿の魔族より与えられた気は、全て消し去った。残滓（ざんし）は無い……無いはずだ。

「開けろ」

ジャコウが頷き、壁を押すと……

からくり音が響き、その真横の横木がずれてゆき、じきに壁に大穴が開いた。

冷気が流れてくる……

大穴の先には洞窟が開けていた。天井からは氷柱（つらら）のごとく数多くの鍾乳石が垂れ、下には石筍（せきじゅん）が広がっていた。遠くから水の流れる音もする。

あっけにとられるユリネとダイダラを促し、全員で大穴をくぐり、洞窟（鍾乳洞）へ向かった。ジャコウが鍾乳洞の壁面を注意深く探り、再びからくりを発動させ、今度は大穴を閉じた。

「あの荒野の下に、こんな洞窟があったんだ……」

ユリネはきょろきょろと辺りを見回した。周囲は闇だったが、忍の目ならば見渡すのに不自由はない。それに、遠所には灯りが灯っている。

「先ほどまでいた通路は、侵入者をひっかける為の罠にすぎん。こちらが本当の隠れ処（アジト）だ」と、ジライ。

「何でわかったの？」

ユリネが片腕の師に尋ねる。ジャコウは師匠というよりは肉親のようにユリネに接しているので、ユリネの方も師に敬語を使わない。

「壁を叩けばその反響で、壁の向こうがわかる。壁の先にあまりにも広い空間が広がっておったので、ジライ様と、ずっと、そちらへ抜ける扉を探していたのだ」

「女勇者と坊主、それにインディラ忍者はここに潜んでおったのだろう」と、ジライ。

周囲の気を探るジライに、確認するかのようにジャコウは問いかけた。

「こうとなっては、抜け忍になるしかありませんな？」

「む？」

「お頭（かしら）が我等を魔族の贄に捧げる気とあっては、もはや従えませぬ。ケルベゾール神への信仰に偽りはござりませぬが、大魔王教の教義は『欲望に忠実にあれ』にござる。贄になぞなりとうはないし、部下を贄に差し出す男を頭（かしら）と呼ぶ気もござらぬ」

「我（われ）とて贄になりとうない。じゃが、ジャコウ、ヒサメの口から出

た言葉、全てを真実と思うは愚かぞ」
「と、申しますと？」
「頭が我等を贄に捧げたと言うたのはヒサメ……今、あの体は魔族のモノ。目的の為には平気で嘘をつくじゃろう。『里に見捨てられた以上、もはや魔族に従うしかない』と思い込ませ、女勇者と対決させようと画策したのやもしれぬ」
「なるほど！」
「ま、ヒサメの語った事が真実そのものかもしれぬが。頭は異形を好いてはおらんからの。亡き師匠のご助力もあって我は中忍に出世しておるが、本来、異形は生涯下忍……我よりももっとまともな外見の後継者が欲しくなっても不思議はない」
「ジライ様……」
「いずれにせよ、頭の本心を確かめるにしても先の話。そんな事より、今は生き延びる算段を立てるべきじゃ」
「生き延びる算段？」
「これじゃ」
そう言うや、ジライは姿を消した。高々と跳躍し、天井から垂れる鍾乳石を目指す。そこから投げつけられる手裏剣をクナイではじき、そこに潜んでいた者の首の根を押さえ、ひきずり下ろして着地した。
「動くな！」
チュニックとズボンからなる紺地の忍者装束、頭部を覆うのは兜で、口元は布で隠している。着物に袴と覆面の東国忍者とは、明らかに異なる姿だ。その者をクナイで脅しながら、ジライは天井の鍾乳石の陰に潜んでいる者達に向かって叫んだ。
「ここで我らとやるのは本意ではあるまい！我らとやれば数で勝るきさまらとて無傷ですまぬ！いざという時、主人の為に働けぬぞ！」
ジライの相手――インディラ忍者達からは答えは返らない。構わず、ジライは交渉を続けた。
「聞け！我らは、しばし女勇者と手を組む！サリエルの部下は、我

らにとっても敵！滅ぼすのに手を貸してやるわ！」

アカハナは天井から降ってきた槍に串刺しとされた。平常心があれば避けられた罠だった。しかし、背後から迫る敵に怯えて、不用意に先を急ぎすぎたのだ。

クロベエは右足を槍に貫かれていた。もう走れない。

銀の爪を装備した男が迫る。

その背後の者達が、キスケの首や胴、アオザの亡骸を運んでいた。

兄弟の遺体をどうする気なのだろう？

そう思ったクロベエに……

鋭い銀の爪が振り下ろされた……

死の荒野　4話

荒野に迫る魔族。

空から襲い来るものを、猛々しい竜巻が襲う。聖なる龍の御力を借りた竜巻は、不自然な生命を、怒りのままに千々に砕いてゆく。

地を蹴り走る魔族を、天からの雷が貫き、風のように速いエルフの弓が射殺してゆく。

けれども、魔族や大魔王教徒の数があまりにも多く、竜巻、雷、弓矢から逃れたものが、荒野の四人へと押し寄せて来た。

赤毛の傭兵は、敵の襲撃を、口元を歪めて浮かべた笑みと共に迎えた。身長ほどもある巨大な大剣を振り回したかと思うと背に戻し、腰の『聖王の剣』をもって魔族を紙切れか何かのように叩き斬ってゆく。

その横で戦っているのが、武闘家の少年であった。腕の半分はあろうかという大きな爪を左に装備している。鋭い爪で敵を裂き、爪からほとばしる聖なる水で魔族を浄化し、竜巻を操って空の敵を落としている。

赤毛の戦士は、少年から離れすぎないように心掛け、少年の背後を狙う敵を倒していた。乱戦ともなれば実戦経験に乏しい少年は隙だらけとなる。戦慣れしていない少年を守っているのだ。

広い荒野で敵に囲まれて、勇者一行は北と南に分断されていた。赤毛の傭兵と武闘家の少年は荒野の北側に居り、南側には女勇者と武闘僧が居た。

武闘僧は『雷神の槍』を振り回して敵を払い、敵の集団にその先端を向けては槍に願い、雷を落としていた。得意の神聖魔法は唱えない。長丁場になると踏んで、回復魔法の為に魔法力を温存しているのだ。

女勇者は金の髪を靡かせ、美しい青の瞳を怒りに燃やしている。敵が接近してからは『エルフの弓』はしまい、巨大な『勇者の剣』

を抜いていた。『勇者の剣』は岩をも砕く攻撃力と、凄まじい浄化の力を有している。剣の切っ先を向けるだけで、力の弱い魔族を散じさせてしまうほどに。

「殺せ！女勇者を殺せ！」

浮遊しているざんばら髪の女が叫ぶ。その体を覆うのは忍者装束だ。

「しょせんは女！『勇者の剣は女を嫌う』！剣の真の力を引き出せるものか！」

セレスは魔族の女をキッ！と睨み、

「真の力を引き出せなくても、正義を思う心に剣は応えてくれるわ！」

空中に向かい剣を振るう。『勇者の剣』そのものが持つ浄化の力が、光の奔流と化し、そこに存在する悪しきものどもを消し去ってゆく。光は魔性の女を目指していた。

「ひっ！」

くノ一姿の魔族は悲鳴をあげ、宙よりその姿を消し、セレスの背後に現れた。移動魔法だ。

「おのれ、小娘！」

息を吹きかけるために口をすぼめ、魔族の女はセレスに黒い気を浴びせようとした。

が……

次の瞬間には、首と胴体が二つに別れていた。女の首が回転しながら宙を飛び、体の方は塩となって消えた。

周囲に水飛沫が舞う。

「え？」

振り返ったセレスは驚いた。

地下道へと通じる、岩を模した蓋が開いている。秘密通路を通って現れた者に、危ないところを救われた事はわかったのだが……

助け手は……覆面姿の東国忍者だった。

「ゆえあって、しばし力を貸す」

その声は忍者ジライのものだった。暗殺者のはずの男は首の行方を追って、走り去っていった。

続いて秘密通路からナーダより一回りも体の大きい一つ目鬼が現れ、現れると同時に巨大な棍棒を振り回して大魔王教徒達を蹴散らしていた。それから、左腕の無い忍者、小柄な忍者が現れた。

「ユリネ、乱戦では我等の技は使えぬ。気は温存しておけ」

「あいよ、ジャコウ」

小柄な忍者が若い女の声で、片腕の忍者に答える。二人は、手裏剣や忍者刀で大魔王教徒と戦い始めた。

忍者達の活躍で魔族以外の敵が、セレスと武闘僧の周囲から減り始める。が……

「なっ……何がどうなってるんです！」

と、叫んだのは女勇者ではなく、武闘僧だった。秘密通路まで駆け寄り、中に潜んでいる者とボソボソと話を始める。今回の作戦の協力者。ナーダは彼等をインディラ寺院付き御庭番と、セレス達には紹介していた。偽の大魔王教徒を演じたのも、忍者の幻術の場から武闘僧を救助して術の効果範囲外に連れ出したのも、投げ縄で『雷神の槍』を運んだのも彼等だ。

セレスは会話中の武闘僧をかばい、周囲の魔族の浄化につとめた。

「何で、そんな勝手な！」

ナーダは声を荒げた。が、最後には溜息をつき、諦めの表情を浮かべた。

「セレス！魔族との戦いの間、ジャポネの忍者は味方に回るそうです！戦いの後も諸事情により、あなたの暗殺を一時延期、場合によっては暗殺役を放棄するそうです！」

「え？」

セレスは耳を疑った。

隙のできた彼女を狙って近づいた魔族は、武闘僧がやけくそのように振り回した槍によって消滅した。

「何なのよ、その諸事情って！」

「私が知るものですか！彼等のお家事情らしいですよ！あなたを殺すよりも先に確かめねばならない事ができたそうです！で、その結果によっては、あなたを殺す理由すら無くなるんで、そうなったらもう二度と命を狙わないと言っているとか！」

「……二度と命を狙わない？」

二度と戦えない？

ジライと？

まだ、借りを返していないのに……

『勇者の剣』で『ムラクモ』を敗っていないのに……

あの忍者と戦えないのなら……

この一月半以上の努力は、一体……

何の為に鍛えてきたのだろう……？

むなしい思いに囚われかけていたセレスは……

突然、両腕に重みを感じ、ハッとした。『勇者の剣』の重量が増している。怒っているのだ。

（いけない！私ったら！）

いつの間にか、目的が変わってしまったのだ。勇者にふさわしくない技量を恥じていたはずが、勝負に拘泥するあまり、忍者に勝利する事こそ真の目的のように思い込んでしまったのだ。

（……ごめんなさい）

『勇者の剣』に詫びてから、セレスはやや重くなった大剣を手に走った。

（私は勇者にふさわしい人間になりたい……私の敵はケルベゾールドとその手下の魔族だわ。だったら、）

セレスは『勇者の剣』を一振りした。片腕の忍者とくノ一の傍まで迫っていた魔族が浄化され、消え果る。

片腕の忍者がいぶかしそうに振り返る。セレスは口元に、にっこりと笑みを浮かべた。

「魔族を敵とする者は、志を同じくする者よ。あなた方の変心、歓迎するわ」

「……かたじけない」
片腕の忍者は瞳を細めた、微笑むかのように。
けれども、くノ一は、覆面の下からきつい眼差しを向けるばかり。
彼女はセレスを親の仇のように睨んでいる。
馴れ合いたくないのかもしれない、そう思い、彼女に対しては軽く会釈をしただけで、セレスは走った。聖なる武器を持たぬ彼等を守りつつ、敵と戦う為に。
「セレス……」
女勇者の声は武闘僧の耳にも届いていた。
『魔族を敵とする者は、志を同じくする者よ』
ナーダは槍を握る手に力をこめた。
敵は邪悪なる魔族……
「……そうでした」
僧侶である自分が、そんな当たり前の事すら忘れ、自分を見失っていたのだ。一カ月半以上、一人の好敵手しか見ていなかった。彼と再戦し、勝利する事しか考えていなかったのだ。
「本当に……どうかしてましたね、私」
武闘僧は口の中で低く呪文を詠唱しながら傍の敵を薙ぎ倒し、棍棒をぶんぶん振り回している単眼の鬼の背後へと走った。火傷を負った背には薬が塗られ一応の応急処置は施されているようだったが、火薬で焼かれた皮膚は黒く焦げ、爛れていた。
左手だけで槍を持つと、右手を突き出し癒しの魔法をその背にかける。ナーダから広がったあたたかな光が、焼けただれた背を癒していった。一つ目鬼には痛覚がないようだったが、生死に関わるような重傷を負っている人間を放ってはおけない。
巨人は棍棒で戦う事を止めなかった。が、ナーダの手から広がる光が背中に集まっている事、その光に包まれていると背の火傷が治っていく事は理解できたようだ。単眼を細めて、にたぁ～と口元をゆるめ、ナーダに笑みを見せる。えへらえへら笑う顔は嬉しそうだった。

「感謝の言葉ぐらい言ってもらいたいものですね」
治療が終わると同時に、ナーダは近辺の魔族の討伐に走った。非常識なほど攻撃力がある武器とはいえ、巨人の棍棒は聖なる武器ではない。人間に対しては無敵でも、魔族は殺せない。ナーダは己が手で殺そうと思っていた人物を守る為に、『雷神の槍』を振るった。

「おのれ！裏切ったな！たかが人間が！」
ヒサメの首は宙を飛び、追いかけて来る者に罵詈雑言を浴びせていた。
「愚かなる人間よ！おまえの命など、もはや風前の灯！おまえはもう間もなく人としての生を終える！」
ヒサメの首を追う者は、首がほざく事など気にせず、注意深く距離を計っていた。先程、首を刎ねた時には、相手の方が素早く自ら首と頭を切り離した為、『小夜時雨（ムラクモ）』で消し去れなかったのだ。
「おまえは体内の私の気を浄化したつもりであろうが、無駄じゃ！きさまは、もはやサリエル様のもの！」
（見えた）
ジライは跳躍し、『小夜時雨（ムラクモ）』をもってヒサメの頭部を真っ二つに両断した。
雨が降る。
消滅する寸前まで首は何かをわめいていたが、白子の忍者は気にも留めなかった。仲間の命を奪ったモノの処分を終えるや、急ぎ、元来た道を戻る。部下達の元へと……

「あ……」
シャオロンは立ち止まってしまった。
彼を目指し駆けて来る者……

末っ子のシャオロンをかわいがってくれた長兄ヤン……
父ユーシェンに見捨てられたシャオロンに、内緒で武術を教えてくれ、継続する意味を説いてくれた次兄フェイホン……
いろいろと相談にのってくれた三の兄ティエンレン……
短気で手が早かったが、年が近かったので共に学問所に通い共に遊んだ、一番仲の良かったすぐ上の兄タオ……
四人が……
大魔王教徒に交じって……
シャオロンを目指し、走って来るのだ……
「おい」
肩をぐいっと掴まれる。赤毛の傭兵アジャンだった。
「知り合いが居たのか？」
「兄さんが……四人とも、すぐ、そこに……」
「あの黒の束髪の四人か。なるほど、似てるな」
「……」
「シャオロン、わかってるな？」
赤毛の傭兵は冷たく言い放つ。
「その爪で切り裂くんだ」
「切り裂く……」
「浄化してやれ、そいつらは魔人だ」
「……」
「できんのなら、俺がやる」
少年はかぶりを振った。
「オレが……やります！」
そのつぶらな瞳から涙を流しながら。
「オレが兄さん達を送ります。父さんとの約束だから……魂に安息を与えてあげなきゃ……」
「とっとと顔をふけ。涙で間合いが狂うぞ」
「はい！すみません！」
少年は右腕で顔をぬぐい、決意を込めて前方をみすえた。

長兄ヤンが、シャオロンへと正拳を突き出してくる。それを身をかがめて避け、シャオロンは左手の『龍の爪』で長兄の腹部を貫いた。あっけなく長兄の体は、この世から消滅した。

（ヤン兄さん……）

ヤンは優しかった。武術一辺倒で常に子供に厳しく接していた父に代わり、弟達を慈しんでくれた。シャオロンは幼い頃、ヤンに肩車をされるのが大好きだった。

続いて次兄フェイホンが、拳から蹴りの連続攻撃を仕掛けてくる。それを見切り、シャオロンは相手が体勢を崩したところを狙い『龍の爪』を振るう。次兄は素早く後方に跳び退り攻撃を避けたのだが、『龍の爪』が放つ浄化の水までは避けられなかった。

次兄フェイホンが悲鳴をあげた。水を浴びた右腕が塩となって溶け始めたのだ。腕を押さえ悲痛な声をあげる次兄。シャオロンはその姿が正視できなかった。

そこへ、次兄の陰から三の兄ティエンレンが手刀を繰り出してくる。

シャオロンを打ちすえようとした三の兄ティエンレンは、目的を果たせず、後方へ吹き飛んだ。

アジャンが大剣で三の兄を叩きつけるように斬り、その勢いで体を飛ばせたのだ。アジャンによって斬られた三の兄の傷は、見る見る塞がっていく。聖なる武器で斬られるか、神聖魔法で清められない限り……兄達は死なないのだ。

「迷うな。切り裂け。できんのなら、俺がやるぞ」

「やります！」

シャオロンは『龍の爪』を構え、走った。アジャンは『聖王の剣』ではなく、聖なる武器ではない背の大剣をもって援護してくれている。兄達を送りたいと願うシャオロンの為に、敵を殺せない武器を使ってくれているのだ。その気持ちに応えないわけにはいかない。

「兄さん！」

シャオロンは素早く左手を旋回させ、その爪で次兄フェイホンと

三の兄ティエンレンを切り裂いた。
　次兄フェイホンは兄弟の中で最も武術の才があり、根気強くシャオロンに武術を教え続けてくれた。父から道場への出入りを禁じられ落ち込んでいたシャオロンを慰め、朝夕と必ず稽古をつけてくれた。
　三の兄ティエンレンは頭が良く、他武術への造詣も深かった。非力なシャオロンの為に、握力・筋力を鍛える訓練法も考えてくれた。
（フェイホン兄さん……ティエンレン兄さん……）
　次兄と三の兄の肉体が消滅する。後は……
　四の兄タオ。年も近く、一緒に遊んで育った、最も仲の良かった兄。
「オレも殺すのかよ、シャオロン？」
　魔人に生まれ変わったはずの四の兄タオが、以前と変わらない口調で話しかけてくる。
「何でおまえだけ無事なんだよ？何でおまえだけ、あの日、生き延びたんだ？この卑怯者！」
「タオ兄さん……」
「あの日……父さんも兄さんも村の弟子達も、体がまったく動かなくなっていた。オレ達は風邪かと思って寝込んでいたんだが……違ったんだよ。毒を盛られていたんだ。井戸に筋肉が弛緩し徐々に衰弱してゆく、遅効性の毒が投げ込まれていたんだ」
「……」
「魔族と大魔王教徒が攻めて来た時、オレら、みんな、まともに動けなかったんだよ。父さんでさえ、あっけなく魔族に討ち取られた。みな死んだのに……なんで、おまえだけ無事なんだ？おまえだって井戸水を飲んだはずだ。母さんが井戸水を料理に使ったんだから。なのに、何故、おまえだけ毒が効かなかったんだ？」
　シャオロンはかぶりを振った。井戸に毒が投げ込まれていたなど、今まで知らなかったのだ。何故、毒が効かなかったのかと問われても答えようがない。

「シャオロン、敵の襲撃の時、おまえだけ村に居なかったよな？何でだ？」
「薬草を摘みに山に行ってたんだ……みんな、風邪だと思ってたから、だから……」
「おまえが魔族達を村に引き入れたんじゃないか？」
「違う！」
「おまえ、魔族の仲間だったんだろ？」
「違う！違うよ！タオ兄さん、聞いて！オレは……」
「おまえはオレ達に嫉妬していた！落ちこぼれのおまえは父さんを怨み、武術の才のあるオレ達を妬んでいた……殺したいほどに」
「そんな事は思ってない！オレはみんな大好きだったんだ！母さんも兄さんも村のみんなも！父さんと話すのはいつも怖かったけど、でも、好きだった！尊敬していたんだっ！」
「おまえはオレ達を怨んでいた」
「違う！」
「だが、少なくとも……」
くっくっくっと低く笑い、目の前の者は己の胸に手を当てた。
「こいつは、死の間際に、おまえを疑ったぞ」
それは、耳まで裂けんばかりに口を広げて笑った……
「サリエル様が教えたのさ、村の誰かが毒を井戸に撒いたのだとな！」
シャオロンは呆然と相手を見つめた。
「……おまえは……誰だ？」
「この体の所有者、魔のものだ。だが、おまえの事は知っている。脳を読めば、わかる。おまえはこの体の弟だ。おまえ、こいつに、あの日の朝、山に薬草を摘みに行くと言って出掛けたろう？こいつはな、すぐには殺されなかったんだ。村中の死骸の首検分をさせたからな！村に他に男は居なかったかと聞かれても、こいつ、かたくなに居ないと言い張っていた。大魔王教徒どもが戯れに剣でなぶっても、決しておまえの名を漏らさなかったのだぞ！」

「……タオ兄さん」
「だが、殺される寸前、サリエル様より井戸の毒の事を教えられ、こいつの心は揺らいだ。疑念が芽生えたのだ。何故、シャオロンには毒が効かなかったのか？シャオロンが魔族を招き入れたのではないか？と」
「毒なんて嘘なんだろ！」
「いや、嘘ではない。撒いた。やったのは村の者ではなく、行商人を装い村に侵入した大魔王教徒だがな！あの毒は確かに強力なものだが、千人に一人の割合で薬が効かない体質の者がいるのだ。おまえは、たまたま、その幸運な千人の一人だったのだ！」
「じゃ、本当に井戸に毒が……」
「おまえ、熱の高い両親や兄達に、水を勧めたな！毒とも知らず、皆に大量に飲ませたな！おまえの父や兄達がろくに動けなかったのは、まさにおまえの手柄！おまえが我等の襲撃を助けたのだ！」
「そんな……」
「おまえが家族を死に追いやったのだ！」
兄の顔でそう責めるものに、シャオロンは何も言い返せない。ただ力なく頭を左右に振り、相手の顔を見つめるだけだ。
「この人殺し！」
そう叫んだ兄の体が……袈裟がけに斬られる。
一滴の血も流さずに四の兄タオは、斬った者を睨む。大剣を握った赤毛の戦士だった。
「こいつ、俺が斬ってもいいか？」
アジャンは不愉快そうにそう言って顔をしかめると、シャオロンの兄から大剣を抜き、近寄る大魔王教徒を薙ぎ倒した。シャオロンが兄と会話している間も、ずっと周囲を守ってくれていたのだ。
「俺が『聖王の剣』を使おうか？」
「アジャンさん……」
「嫌ならとっとやれ！魔族の言葉に揺らぐな、馬鹿！おまえの兄がどういう奴かは、おまえが一番良く知ってるだろうが！おまえの兄

はグダグダ怨み言をこぼすケチな野郎か？違うだろ！こいつはおまえの兄じゃない！」

「！」

シャオロンはつらそうに瞳を伏せ、それから前方を見据え、左手の爪を構えた。

「オレが……浄化します」

四の兄の姿の者が、怯えた顔を見せる。

「やめろよ、シャオロン、オレまで殺すのかよ……？」

「……ごめんなさい、タオ兄さん、助けてあげられなくて」

ゆっくりと呼吸を整え……

「でも、今、魔の穢れから解き放ってあげます！」

シャオロンは左手の『龍の爪』を振るい、大好きだった兄の肉体を切り裂いた。

その体が消え果てるまで、シャオロンは決して目をそらそうとはしなかった。

荒野の南では激戦が続いていた。

女勇者の命を狙う者……魔人や大魔王教徒が、果てなく現れるからだ。戦闘の素人がほとんどだったが、敵は後から後から移動魔法で現れる。長時間、人海戦術で迫られれば、誰しも疲れ、動きが鈍ってゆくものだ。

ナーダは自分やセレス、それに、東国忍者達にも、疲労回復や治癒の魔法を唱えていた。

忍者ジライは聖なる武器『ムラクモ』を持っていたし、単眼の鬼の攻撃力はゴーレム並だった。残りの二人も大魔王教徒相手ならば、遅れをとらない。

望んで仲間となったわけではないが、仲間として迎えた以上は、守り助けあうべきだ。彼等には生きていてもらわねば困る、戦力として。

少し前から、巨人と二人の忍者は大魔王教徒の担当、セレスとナーダは魔族担当と、無言のうちに役割は分かれていた。

魔にふさわしい醜い姿に変身していない限り、一見、魔人とただの人間の区別はつきがたい。しかし、気を見ればわかる。目をそむけたくなるような黒い気をまとう者こそ魔人。

ナーダはもともと魔の気に敏いし、セレスも『勇者の剣』が助力してくれているのか穢れたものを見分ける事が出来た。倒すべき敵がわかるのだ。

剣、槍、長刀等、聖なる武器を所持している魔人。その者達は、生前、その武器の持ち手であった高潔な人物のはず。死後にその肉体を聖なる武器ともども、魔に悪用されているのだ。

彼等は聖なる武器に選ばれるだけあって、皆、強敵だった。しかも、魔人と生まれ変わってからも生前の愛武器を使っているのだ。彼等に神聖魔法を唱えても、聖なる武器の清らかさに魔法が相殺されてしまうので効果がない。

彼等を倒すには……聖なる武器を用いるしかない。

聖なる武器をもって、聖なる武器に勝つ。

相手の武器を弾いた後に浄化するか、相手より優れた技量をもって隙をつきその体に一撃を加えるかしかない。

女勇者も武闘僧もなみなみならぬ覚悟で、強者（つわもの）と対戦した。

しかし……

つばぜり合いとなったり、打ち合いとなってなかなか勝負がつかなくなると……

それを待っていたかのように、忍者ジライが敵の背後から忍び寄り、『ムラクモ』で敵をあっさりと斬って浄化してしまう。敵は装備していた武器を残し、一握の塩ととなって消え果てた。

何度となく勝負をかっさらわれ、武闘僧は敵の虚をつく戦い方ばかりをする忍者を怨めしく思った。

（……卑怯な）

乱戦において勝負に拘る方が愚かなのだろうが、名勝負となると

ころを邪魔されればやはり面白くない。
少し観察すると、忍者ジライがまともに敵と戦っていない事がわかる。すばやい体術で敵の頭上、背後、側面から仕掛け、囲まれる前に逃げる。人の頭ほどもある巨大な卍手裏剣を投げて敵の数を減らしてから、攻撃。忍法で敵を攪乱してから、攻撃。そんな感じだ。
（正々堂々なんて、忍者に期待するだけ無駄なんでしょうが……）
そうかと思えば、何も考えずに敵を打ち砕くだけの一つ目鬼もいる。ナーダは時折、巨人が魔族にとり囲まれた時などに、棍棒に祝福の神聖魔法をかけてやっていた。しかし、あまり知能が高そうには見えない巨人は、ただ棍棒を振り回すだけだ。おそらく、気づいていないだろう、魔族を倒せる時と倒せない時がある理由に。
現れては消え、現れては消えてゆく敵……
移動魔法で新たに現れた者の中に……
金髪碧眼の西国風の美男子がいた。細剣を腰に差した、中肉中背の若い男。赤い色の派手な剣士の衣装を身にまとっている。
「これは……」
男から広がる黒の気は凄まじく、まるで嵐のようだ。今まで対峙してきたどの魔族よりも邪悪で、強大な気だ。
（ウンナンのインディラ寺院からの報告と人相・特徴が一致。しかも、この気！間違いない、あれがサリエル！）
ナーダは、インディラ忍者から渡されていた合図用の筒と火打石を胸元から取り出し、筒を地面に置き、着火した。数秒後、筒から噴き出た花火が天を曇らせ、派手な音を響かせた。

荒野の多くの者が、天を見上げた。
花火だ。
片腕の忍者は、それを合図用花火とみてとった。しかし、天を曇らせる黒煙は見覚えのない形をしている。東国忍者の花火ではない。
「私達の合図よ」

セレスは短く説明した。セレスは、戦いづらそうな片腕の忍者とくノ一を庇っていたので、たいてい彼等の傍にいた。

「これから罠をしかけるのよ」

「罠？」

武闘僧が喉を負傷した演技をして、荒野の番小屋に籠って、敵をおびき寄せ……

偶然、番小屋に着いたふりをしていたが、実はそこは、インディラ忍者の隠れ処で……

番小屋に居るふりをして地下の洞窟に隠れ……

奇襲をしかけ……

四人しか居ないとみせかけて忍を地下に潜ませておいて……

罠ばかりの偽の地下通路で敵を迷わせ……

これだけやってきたというのに……

「まだ罠がござるのか？」

「これが最後……この罠をしかける為に、この場所を選んだのよ」

ズゥゥゥンと地面が揺れ、耳をつんざく音が響いた。

平衡感覚が狂い、片腕の忍者は右手で額を押さえた。見れば、すぐ横で弟子のユリネが頭を抱えていた。

周囲の敵も……

のたうちまわり形を保てず散じる小物魔族を筆頭に、魔族は苦しそうにうめき、ただの人間の大魔王教徒もジャコウ達同様、頭痛を感じているようだ。

「この荒野を、聖なる結界の内に閉じ込めてもらったの」

多少、顔色の悪い女勇者が微笑を浮かべる。

「敵は移動魔法で現れては消えてしまう……だから、封印用の結界を張って、敵の大将サリエルを逃げられなくしたのよ。結界内では魔の力は半減し、あらゆる魔法が効果を失うの。移動魔法は使わせない。ここで、サリエルには消えてもらうわ」

「このような大規模な結界……一体、誰が？」

数平方キロメートルにも及ぶ広大な荒野を丸ごと結界に閉じ込め

るなど、並みの魔法使いでは無理だ。できるとしたら、有名な大魔術師カルヴェルくらいだろう。
「種明かしはサリエルを倒してからよ」
セレスは『勇者の剣』をもって魔族を倒しに行った。
「敵は移動魔法をもう使えないから、これ以上、数は増えないわ。今、居る敵さえ倒せば、戦闘は終わりよ」
「やれ、有難い」
乱戦は苦手だと、ジャコウは笑った。相手が彼やユリネの声に耳を傾けてくれねば、得意の幻術は使えないのだ。
「ジャコウ」
覆面から覗かせるキツネのような目を更に細め、ユリネが師匠を睨む。
「あの女勇者と、ずいぶん口をきくんだね」
「馬鹿者。あれしか、今、情報収集相手はおらんのだぞ。話さんでどうする」
「……そんな事はわかっている」
ぷいっとそっぽを向き、ユリネは忍刀を握りしめた。
「わかっていても、気に喰わない。ジャコウは他の女と口をきいちゃ駄目だ」
それだけ言うと、ユリネは大魔王教徒に斬りかかっていった。
ジャコウは弟子の子供っぽい嫉妬に苦笑を漏らしながらも、その後を追い、共に並んで戦うのだった。

死の荒野　5話

「あなたが女勇者か？」
金髪を靡かせ、男が薄く笑う。女性のように整った、美しい顔立ちだった。が、その体から広がる気は禍々しく、笑みも人の情を感じさせない歪んだものだった。
「あなた、サリエルね？」
『勇者の剣』を構え、白銀の鎧の女勇者は、金髪の男と対峙した。

「フフフ、だとしたら、どうします？」
「だったら、シャオロンには悪いけれど」
セレスの青の双眸が、敵をねめつける。
「あなたを倒させてもらうわ」
敵の気はあまりにも強大だ。仇を討ちたいという少年の気持ちもわかるのだが、目の前の敵は少年が敵う相手ではない。聖なる結界の内に閉じ込められ、魔力が半減しているはずなのに、その黒い気は底が知れなかった。

（サリエルじゃと？）
目の前の敵を始末しながら忍者ジライは、女勇者と睨み合っている金髪の優男を視界の端に捉えた。あの男が、ヒサメ達の体を乗っ取った魔族の親玉か、と。

「金の髪、サファイアの瞳、抜けるように白い肌、どれをとっても素敵だ。あなたは美しい……」
金髪の男は髪を掻きあげた。その所作といい、派手な赤い衣装といい、気障な男だ。

「どうせなら、鎧をとったあなたが見たいな。とても豊かな胸だと聞いています。脚もすらりと長いのでしょ？ウエストは蜂のようにくびれ、まろみを帯びたかわいらしいお尻もきっと滑らかでしょうね」

「な！」

セレスはカッと頬を赤く染めた。

「あなた、何を言っているの！」

「私は美しいものと強いものが好きなのです。あなたは、勇者を名乗るには少々、力が足りないようですが、とても美しい……おまけに処女でしょ？」

魔族はニィィィと笑い、腰の細剣を抜いた。

「是非、コレクションに加えたい。あなた、私のものになりなさい」

「気色悪い！」

叫んでしまってから、慌ててセレスは深呼吸をして気持ちを落ち着けた。感情的になりすぎてしまっては、『勇者の剣』と一体化できない。魔族に心乱されているようでは駄目なのだ。

「勇者として、あなたを浄化してあげるわ！」

「やってごらんなさい」

金髪の男は微笑みを浮かべながら、地を蹴った。

そして、あっという間に、セレスの前に現れる。

（速い！）

大剣は敵からある程度離れていなければ、思い通りには操れない。だが、敵は素早く、細い切っ先を何度も向けてくる。防戦に徹するセレスは、自分の間合いを取る事ができなかった。

「ほら、ほら、どうしました？やはり、口ほどにもない」

敵は楽しそうに細剣を振るっていた。セレスの頬に浅く傷が走る。そこより流れる赤い血を見て、敵は舌なめずりをして興奮した。

「素敵です。とても綺麗だ……あなたの全身を血で彩ったら、さぞや美しいでしょうね」

恍惚の表情を浮かべる魔族の背後に、忍者ジライが現れる。不意

をつこうとした忍者の攻撃は、魔族に読まれていた。半回転をして、己の細剣でジライの『ムラクモ』の刃を流すと跳躍し、二人の剣が届かない距離に降り立ったのだった。

「おや、あなたは……」

金髪の魔族は、黒装束に覆面の忍者を上から下まで見つめ、瞳を細めた。

「その姿ではさっぱりわかりませんが、あなた、美しいのですか？それとも強いのですか？両方だと嬉しいなあ。あなた、二番目のようだし」

「二番目？」

何の事だ問う忍者に、金髪の魔族はせせら笑いを見せるばかり。低く舌打ちし、敵をみすえたまま、ジライは女勇者に声をかけた。

「共に仕掛けようぞ」

「あなたと？」

「二人がかりでは卑怯、などと言うなよ。これは尋常の勝負にござらぬ。敵は魔族。勝負など二の次だ。この世から消し去れれば、それで良い」

「……そうね」

「それに、こやつ、ケルベゾールド神の今世の四天王じゃそうな。舐めてかかると、大怪我するぞ」

「大魔王の今世の四天王？」

ケルベゾールドは復活の度に、必ず四人の腹心を今世に伴う。敵はおもいがけぬ大物だった。これを討ち取れば、今世のケルベゾールドを弱体化できる。

（『勇者の剣』、お願い、力を貸して……）

「行くぞ！」

「御身様！」

ナーダの背後から迫っていた大魔王教徒が、チャクラムで切り裂

かれる。
　戻ってきた回転する輪は、インディラ忍者の右の二の指に納まった。紺地のチュニックとズボンからなる忍者装束、兜と口元を覆う布。東国忍者の着物と袴と覆面とは、恰好が全く異なっている。
「ガルバ？」
　ナーダは左腕で汗をぬぐい、振り返った。
「鍾乳洞から出て来たのですか？」
　忍者は頷いた。背はあまり高くない。大柄なナーダの前だと、子供ほどしかない。しかし、
「聖なる結界が発動した以上、少数を装う演技は、もう不要にございましょう」
　その口から出た声はしわがれていた。老人の声だ。
「御身様、雑魚の大魔王教徒は我等にお任せを。又、総本山の僧侶様方から聖水をわけていただき、聖水を込めた仕掛け玉を多数、用意してございます。ご入り用の時は、我等にお声をかけてください」
「まあ、人手が増えるのは大歓迎ですが……あちらには、」
　と、ナーダはダイダラ達東国忍者を顎でしゃくった。
「参戦を断っておいた方がいいですよ。敵と間違われて攻撃されかねませんから」
　特にあの一つ目鬼に、と、ナーダは口の中で小さく呟いた。
「ご心配無用！私めも、かつてはインディラ一と謡われた男！我が部下も、のろまな東国の奴等ごときに遅れをとりません！」
「……わかってるんでしょうね、ガルバ、彼等と戦うのではなく、協力し合うんですよ」
「わかっております！あやつらより、我らの方が多く大魔王教徒を殺してみせましょうぞ！」
　言いたいことだけ言って、インディラ忍者はすばやい体術で姿を消してしまった。
　ナーダはやれやれと肩をすくめ、武器を所持した魔族を倒しに走った。セレスと忍者ジライがサリエルと対戦している今、この周囲

で魔族を減らせるのは自分しか居ないと……皆の命を守る為、彼は槍を振るった。

その剣を振るえば薙いだ風さえ浄化の力を有し、岩さえも粘土のように砕く『勇者の剣』。その大剣をもって迫るセレス。

速攻を仕掛けるジライ。

二人の連携の前に、金髪の魔族は打つ手を失った。細剣を防御の為だけに使い、逃げる為に軽やかに身を翻す。しかし、窮地に追い詰められようとも、顔から不敵な笑みは消えなかった。

「二人とも、強さに及第点をあげましょう。思ったよりもあなたが強くて嬉しいですよ、女勇者セレス」

「では、その言葉を噛みしめ、この世から消えなさい！」

セレスが振り下ろした『勇者の剣』が、金髪の魔族を両断する。斬り裂かれ消滅する寸前まで……男は笑っていた。嬉しそうに笑っていたのだ。

男の姿は消滅し、後には細剣と一握の塩が残った。

シャオロンの前に、白髪交じりの黒の束髪の男が現れた。体つきは三十代で通りそうなほど逞しい。鍛え抜かれた武闘家の体だ。その右腕に銀に輝く長い爪がつけられている。

「父さん……」

左手用の爪を装備した少年は、泣くまいと顔をしかめながら、敵を見つめた。

父は死んだのだ、魔族に殺されて……

目の前にいるのは、父の体を奪った薄汚い魔族に過ぎない。

「シャオロン……わしの為に左手用の爪を手に入れてくれるとは孝行な事だ」

父の顔のものが、にぃぃーっと笑う。

「早く、よこせ。おまえは、それを装備するには、あまりにも未熟。おまえの手にあっては『龍の爪』も泣くぞ」
「その言葉、そっくり、あなたにお返しします」
シャオロンの声は震えていた。
シャオロンにとって、父は絶対的な存在だった。シャイナ一の武闘家、その名も高きユーシェン。その息子である事は、誇りであり、悲しみだった。二年前、父は『武術の才なし』とシャオロンを切り捨て、以後、二度と顧みてくれなかった。そんな父を前にシャオロンは己を恥じるばかりだった。父に逆らおうなどとは一度も思わなかった。
けれども、今は……
「あなたの手に爪があることを、龍は嘆いていました！その爪を手放すのは、あなたの方です！」

（何だ、こいつは……）
アジャンは身の毛もよだつ恐怖を感じていた。
シャオロンと対しているのは魔族だ。それはわかる。だが、気が異様なほど大きく、禍々しく、傍にいるだけで吸い込まれてしまいそうな強い牽引力を感じるのだ。
（今まで見て来たどの魔族よりも、こいつは強い）
アジャンの内の天性の勘が、強く訴えていた。
引け、と。
この場にとどまれば死の危険がある、と。
「ちっ」
アジャンは舌打ちした。
一人だったのなら、迷わず逃げている。しかし、今、自分は少年を庇護する立場にある。年少の者を見捨てて逃げるなど、絶対にできなかった。
（アジャニホルト……）

亡くなった弟の面影が脳裏をよぎった。
赤毛の傭兵は背に大剣を戻し、『聖王の剣』を抜いた。この剣の力を借りなければ……自分もシャオロンもおそらく命はあるまい。

先に仕掛けたのは少年だった。
左手で宙を切り、全てを千々に切り刻む浄化の竜巻を生み出した。しかし、ユーシェンの姿の者は、右手を軽く振っただけでシャオロンが生み出したものよりも数倍大きな竜巻を生じさせた。竜巻は、シャオロンのものを飲み込み、シャオロンをも砕こうと突進してくる。
その竜巻を、赤毛の傭兵の『聖王の剣』が一刀のもとに斬り裂いた。アジャンはシャオロンを庇う為に、その前に立ち片手剣を構えた。
「アジャンさん！待ってください！オレがやります！兄さん達と同じように父さんも送らせてください！」
「俺としてもやらせてやりたいのは、やまやまなんだが」
困ったように頭を振り、傭兵は溜息をついた。
「こいつは、おまえがどうこうできる敵じゃねえ。本当は、おまえもわかっているはずだ。まっとうにやって勝てる相手じゃないってな」
「けど……オレは……」
「なあ、おっさん」
アジャンは魔族に視線を向けた。
「おまえ、誰だ？ユーシェン、なんて答えるなよ。俺が聞きたいのは、シャオロンの親父の体を操ってる方だ。相当、上位の魔族なんだろ？」
「ほう、わかるか。良い目を持っているようだな……気に入った。外見も力も申し分なさそうだ。おまえを三番目に、いや、二番目にしてやろう」

「あん？」
「聞け、人間よ。特別に教えてやる」
魔族の目がきらりと輝く。
「我が名はサリエル。今世の大魔王様の四天王が一人」

「サリエルだと……？」

赤毛の傭兵は、相手の姿をまじまじと見つめた。
先日、武闘僧から聞いたサリエルの外見的特徴は、『中肉中背、金髪、碧眼。西国人。二十代前半。武器は細剣』のはず。
「本当にサリエルなのか？インディラ寺院を襲った時とは、随分、外見が違うんじゃねえか？」
「わしは飽きやすいのだ」
サリエルと名乗った魔人は、愉快そうに空いている左手で己の胸から首、頬を撫でてゆく。
「だから、着替えをたくさん所持しておる」
「着替えだと？」
「この人間は年老いておる。外見は好かぬ。しかし、強さの方は申し分がない。今までも、時々、これを使っていたのだが、前の奴が壊れたので、正式にこちらに乗り換えたのだ」
「服だと……人間を服だと言うのか！」
「魔族である我らがこの世で動くには、憑代が必要。ならば、美しく強いものを選びたいと思うのは当然ではないか！わしは、常に、美しいもの、強いものを、周囲に数体はべらせておる。臨時の体として、な。赤毛の男、きさまも、我が下僕としてやろう。ありがたく思え」
「ケッ！胸糞悪い野郎だぜ……」
「父さんの体から出て行け！」

目に涙をためたシャオロンがサリエルに怒鳴る。
「父さんは服なんかじゃない！」
サリエルは微笑を浮かべた。
「シャオロン、おまえは駄目だ。わしの服にはなれぬ」
そして、左手の二の指で額を叩いた。
「この男の脳が言っておる。おまえは非力で女々しく、血を恐れる臆病者。何年修行を積もうが、一生、ものにはならぬ。武闘家以外の道を歩むのが本人の為だとな」
「うっ……」
シャオロンは顔を朱色に染めた。それと同じ意味の言葉は、昔、父の口から直接、聞いていた。
けれども、ずっと父を尊敬していた。人と殴りあう格闘は性に合わなくとも、父から疎まれようとも……
父を愛していた……
父のようになりたかったのだ。
左手の『龍の爪』が、カタカタと揺れる。
怒りと嘆きと屈辱のあまり、頭に血がのぼり、めまいすらした。
「武術の才なし。おまえは武闘家以外の道を進め」
サリエルは……昔の父の言葉を再現した。シャオロンを嘲りながら。
少年の頬を涙が伝わる。
悲しいのではない。悔しいのだ。シャオロンを貶める為に、父の姿で父の言葉をなぞる敵を……
この世から消し去ってやりたかった。

汝、魔を憎み、龍と共鳴し、戦えるか？
汝、我が爪を己が爪とし、魔族を切り裂けるか？

（切り裂ける！）

シャオロンは龍に応え、怒りに身を任せた。

「ウォォォーッ！」

動物めいた叫び声をあげ、少年は跳躍し、サリエルに切りかかった。

サリエルは右爪をもって、シャオロンの左爪を受け止めた。

激しい火花が散る。

シャオロンは休む事なく『龍の爪』を振るい、聖なる水を飛び散らせ、竜巻を生み出し、サリエルを狙う。

シャオロンの父の姿の魔族は、右の爪で全てを防御した。

サリエルが放つ竜巻は、シャオロンのものよりも強力だ。シャオロンも左爪で己を守ったが、その凄まじい勢いを殺しきれず、肌に無数の裂傷が走った。

けれども、少年は……

傷つき、血を飛び散らせながら……

狂ったような絶叫をあげた。

「ウォォォー！」

「シャオロンの奴……キレちまった」

アジャンは呆然と、二人の戦いを見つめていた。

援護に入りたいのだが、入る隙が無い。

シャオロンは素早く動き回り、一か所に止まらない。その動きは変幻自在。右へ左へ上へ下へと不規則に動き、仕掛けるはずもないタイミングで爪を振るうのだ。

サリエルの爪に切られ、シャオロンの額や手足から血が流れてい

た。道着も大きく破れている。だが、少年の動きに変化はない。傷つく事を恐れず、相手を傷つける事への躊躇もなく、素早く爪を振るっている。

シャオロンの攻撃自体には、それほど威力はない。敵が人間なら、攻撃を重ねねば倒せないだろう。しかし、敵は魔族だ。聖なる武器の攻撃が当たりさえすれば、魔族は浄化できる。

と、なれば、誰よりも素早く動ける少年は……アジャンよりもずっと、魔族退治に適していたのだ。

（俺はシャオロンを見くびっていた……）

亡くなった弟を思い出させる、素直で、やさしい性格のシャオロン。彼を戦士として見ずに、いつも守護すべき弱者として見ていたのだ。

（すまん、シャオロン……今日から考えを改める。おまえの仇討ちを、俺は見守ろう）

アジャンは『聖王の剣』を手に、二人の様子を窺った。シャオロンが、真に助力を必要としている時には動けるように。

サリエルは苛立ちを覚えていた。

とるに足りぬつまらぬ小僧に、今の体が押されているのが納得いかないのだ。聖なる結界に閉じ込められている為、サリエルの力は半減し、魔法も使えない状態になっている。常であれば、素早いだけのひよわな小僧なぞ、すぐにも捻り潰せるのだが。

サリエルはシャオロンを憎々しげに睨んだ。

（いずれこいつには、我が真の力、思い知らせてくれよう！だが、それも、この場を切り抜けた後の事）

魔は、動かしている肉体の顔に笑みを刻ませた。

（こんな体、きさまにくれてやる）

サリエルには、次の体があった。彼自身が選んだものではなかったが、忠実な部下が選んだものだ。ある程度の戦闘力は期待できる

であろうし、聖なる結界から出る為にも着替えた方がい。新しい体に移って黒の気を消していれば、正体が知れる事はあるまい。

サリエルは少年の速攻についてゆけぬ振りをして、わざと体勢を崩し、無防備な喉を相手の眼の前に晒した。

すかさず、少年が爪を閃かせる。

龍の鋭い爪が首にかかった瞬間、サリエルは首と胴体を切り離した。

爪のかかった首より下は、塩だけを残し、滅びる。

だが、自ら切り離した首は意のままに操れる。サリエルは赤毛の傭兵を目指し宙を飛んだ。

片手剣を構え、赤毛の戦士が待ち構える。その剣は尋常ではない波動を発している。聖なる武器に間違いない。

サリエルはほくそ笑んだ。

赤毛の男が剣を突き出すべく、腕を引く。

(そうだ、わしを斬れ)

サリエルは黒の気を練って、口をすぼめた。

(きさまに、印(しるし)をやろう)

『聖王の剣』の切っ先が、サリエルの額を貫いた瞬間!

サリエルの口が、黒の気を噴出した!

赤毛の傭兵は口を押え、咳きこんだ。

「何だ、こいつ、タコかよ!煙を吹きやがって!」

いや、タコが吐くのは墨か、と、アジャンは心の内で自ら突っ込んだ。敵が吐いた黒い煙を吸い込んでしまったせいで、肺が痛んだ。しかし、それほど強力な毒ではなかったようで、少々、息苦しいだけで、他に異常はない。

「イタチの最後っ屁(ぺ)みたいなもんか?うぅぅ、気色悪い」

シャオロンに無事か？と問いかけて、傭兵は口を閉ざした。
武闘家の少年は、地面に座りこみ、右手用の『龍の爪』を抱いて、うつむいて……声を殺して泣いていたのだ。
そのまま何も言わず、アジャンは周囲を見渡した。
まだ大魔王教徒が残っていた。が、周囲には、もう魔族はいない。人間相手なら、インディラ忍者とやらに始末を任せて問題ない。
（敵の大将を討ち取ったんだ、ちょっとぐらい休憩したって構わんだろう）
赤毛の戦士はにやりと笑い、父の形見を抱きしめる少年を直接、見ないように気遣いつつ、その場にたたずんだ。少年を狙う敵があれば、近づく前に倒す。しかし、男なら誰しも、泣き顔を他人に見られたくないものだ。少年が父との別れを終えるまで、邪魔をしないように護衛すべきだ。
アジャンは空を見上げた。
蒼天にあったはずの太陽は傾き、西の空で茜色の光を放っている。
冬の夕暮れは早い。
荒野は夕日に赤く染まっていた。
血のごとく、赤く……

（む！）
忍者ジライは声を出そうとしたが、喉が動かなかった。
胸をかきむしりたかったが、腕が上がらない。指すら動かない。
まるで体が言うことを聞かなかった。
ジライは自分の内に……黒くおぞましいものを感じていた。禍々しくも、うとましいもの。全てを滅ぼす、強大で残忍なもの。
（誰じゃ、きさま！）
《我が名はサリエル》
（何？）
《もはや、うぬは我（われ）、我（われ）はうぬじゃ。きさまがヒサメと呼んでいた

我が部下が、印をつけたゆえ、うぬは我のものとなった。この体、しかともらい受けた》

（むぅぅ……）

体が動かないばかりではなかった。魔族は心の中までずけずけと侵入し、ジライの記憶を盗み読む。

《虚無に満ちた、なんとつまらぬ魂だ。憎悪も妄執もない……そうか、白子と生まれ疎まれて育ったが為、諦念ばかりが育ったか。きさまがあるがままを受け入れるのも、何もかも諦めきっている為。醜い白子では何一つ変えられぬと、そう思い込んでおるのか》

（消えよ、我が内から！）

《フッ、我が目障りか？じゃが、言うたであろう、うぬと我はもはや一体。離れることかなわぬ。きさまの命が果てる時には、離れてやるがの》

（きさま、先ほどのやさ男ぶりはどうした？そのしゃべり方、まるで我ではないか）

《今はおまえと脳を共有しておるからの》

しばらくの沈黙。サリエルはジライの脳から取り出した情報を吟味していた。

《東国忍者の里の次期頭領と目されておる忍……思ったよりも利用価値がありそうだな。きさまを足掛かりに忍者の里を手に入れてやろう。インディラのウズベルめ、喜ぶであろう》

（ウズベル？）

《我が仲間、四天王の一人よ。我が聖なる武器を集め、ウズベルが新たな魔人を造る。我等は大魔王様の命により動いておる》

（忍の里を狙っておるのか？）

《ウズベルが、な》

（フン！我を使うより、頭に印をつけ、下僕にしたらどうじゃ？その日から忍の里はおまえらのものぞ）

《きさまの記憶の中の、あの老人を我が体にしろと？願い下げじゃな。我は美しいものか強いものしか欲しゅうないわ。部下を使い、

頭領と次期頭領を反目させようと画策していたが、おまえが我のものとなったのだ、もっと良い手が使えそうだ》

（きさま……我をどうする気だ？）

《どうもせぬ。きさまは、この体が果てるまで死ぬ事すらかなわぬ。我が為す事をそこより見ておれ》

忍者ジライの体を使い、サリエルは大魔王教徒の男を斬って捨てた。忍者ジライとして敵を倒し、魔族の黒の気も完全に消し去り、女勇者達の目を欺いているのだ。

サリエルは慎重だった。何故ならば、今、彼の体は、この忍者と赤毛の男の二体しかないのだ。

サリエルには、常に多くの体があった。戦闘には必ず印を与えた者を同道させ、現在の肉体が危うくなれば他の者に乗り換え、生き延びてきたのだ。

しかし、今回、連れて来た体は全て討ち取られている。聖なる結界が解かれない限り、他所に置いてきた体にも着替えられない。この忍者と赤毛の戦士を失えば、四天王が一人サリエルといえども消滅の運命にあった。魔族は憑代がなければ、この世に留まれないのだ。

「女勇者セレス殿」

ジライの口を使ってサリエルは尋ねた。

「結界はいつ解ける？我は何時まで忍法が使えぬのだ？」

セレスは魔人と戦闘中だったが、『勇者の剣』で相手を叩き斬り、ジライの方へと振り返る。美しい顔は汗に濡れ、髪は湿り気を帯び、吐く息は荒い。

「結界は全ての敵を倒したら、解いてもらうわ」

「解いてもらう？」

サリエルはその言い回しを聞き洩らさなかった。

「この結界、人為的に止められるのでござるな？」
「ええ」
「どうやれば止まる？」
「それは……」
言いかけたものの、慌ててセレスはかぶりを振った。
「今は言えない。でも、敵全員を倒したら解いてもらえるわ。後、もう少しの辛抱よ」
再び魔族と戦い始めた女勇者を、サリエルは静かに横目で見つめた。
結界の術師が何処に居るのかの、おおよその検討はついている。
地下だ。
『龍の爪』の振るい手は罠用の通路にしか入れなかった。が、忍者ジライの脳を得た今、サリエルは、足元に鍾乳洞が広がっている事を知っていた。あそこに忍者以外に、魔術師でも潜んでいるのだろう。その者を殺せば、結界は解ける。
しかし……
そんな事をしなくても……
部下が全滅すれば、結界は晴れるのだ。
ならば、部下が皆殺しになるのを待っていればいい。能力を隠して忍者ジライの体に潜んでいる限り、サリエルは安泰。結界の消滅と同時に、自由になる。
サリエルは覆面の下に、魔にふさわしい笑みを刻んだ。
目の前には心躍る光景がある。
魔族を相手に大剣を振るう女勇者は――明らかに疲労している。まず、反応が鈍い。大剣を高々と振り上げる事は少なく、下段攻撃ばかりしている。呼吸は乱れ、大量に汗を流している。
つけいる隙がありそうだ。
サリエルは『ムラクモ』を手に、女勇者の背後へと走った。援護を装い接近し、己の黒の気を女勇者に浴びせてやるのだ。女勇者を下僕に堕とせば、今世の救い主は消える。ケルベゾールド神が十三

回目の降臨で、ついに暗黒の世を生み出すのだ。
女勇者の元まで後、数歩と迫ったところで……
サリエルの体に陰がかかった。
「！」
避けなければ、頭を砕かれただろう。サリエルは舌打ちした。怪我を負えば正体が割れる。血の一滴も流さず、傷ついた体が復元してしまうのだから。神聖魔法か聖なる武器でしか葬れない体だと気づかれてしまう。
体術で攻撃をかわしたサリエルを狙い、再び、重くすばやい攻撃が襲い来る。
サリエルは振り返り、相手を見た。
サリエルを狙っているのは一つ目鬼――忍者ダイダラだった。
どんなに辱められようが、どんなにいたぶられようが、決して怒らなかった巨人が……憤怒に顔を歪めていた。
棍棒を振るい、ダイダラはジライの体を叩き潰そうとしているのだ。
もの言えぬ口は叫んでいた。
出て行け！と……

ダイダラには幼児並みの知能しかなかった。それ故、彼は理屈など考えない。ただ事実を本能的に察知するだけなのだ。
義兄ジライは、今、別人だ。
誰かがジライの体を盗み、ジライの自由を奪って、勝手に使っている。
ダイダラは、そう感じ取ったのだ。
大好きな義兄の体を盗むなど許せなかった。
なぜ、ジライの体が盗まれたのか？
どうすれば、敵を追い出せるのか？
そんな事はわからないし、わからなくても構わなかった。

ジライは繰り返し教えてくれた、『敵を叩き潰せ』と。
『きさまは阿呆じゃ。幾ら頭をひねっても、ろくな考えに至らぬ。何も考えるな。我が為に敵を討て。後の始末は我(われ)がつけてやるゆえ』
。
目の前の敵を殺せば、後の事はジライがどうにかしてくれる……
『ジライを殺してジライを助ける』事に矛盾すら感じず、巨人は棍棒を振り回した。
「このうすら馬鹿！ジライ様に何するのさ！」
ダイダラは背に何かが突き刺さったのを感じた。手裏剣が命中したのだろう。だが、構わず、ジライへの攻撃を続けた。
女勇者と武闘僧は、突然、仲間割れを始めた忍者達を驚いて見つめていた。
「やめろ、ダイダラ！武器を引くのだ！」
ジャコウの声だ。ユリネと二人で、主人(ジライ)を守ろうと、ダイダラの死角から手裏剣や忍刀で攻撃をしかけてくる。
ダイダラは肘や腕で二人を払った。仲間を傷つける事も、ジライから禁じられている。彼等を棍棒で叩くわけにはいかない。
彼等に邪魔をされ、ジライに近づけない。
「突然、乱心しおって……魔族にでも憑かれたか？」
ジライの口を使って、見知らぬものが言う。
「ならば……殺して楽にしてやろう」
ジライの姿の敵が『小夜時雨（ムラクモ）』を手に駆けて来る。
『鬼殺し』の棍棒が二つに割れ……
雨と血が舞った。
ダイダラの巨体は地面に沈んだ。

「やめて！殺しては駄目よ！」
止めを刺そうとしたサリエルを阻んだのは、女勇者だった。『勇者の剣』をもって『ムラクモ』を受け止めたのだ。
「魔族に憑かれたんだとしても、仲間でしょ？殺してはいけないわ！」
「何を甘い事を」
セレスの剣を払い、サリエルは刀を構え直した。
「殺らねば、殺られる。そやつは殺す」
「その必要はありませんよ」
何時の間にやら、ダイダラの元へは武闘僧が駆け寄っていた。『雷神の槍』を地面に置いて、腹部の傷を調べ、表情を曇らせる。
「この傷じゃ、もうまともに動けません」
「だが」
「それに、本当に魔族に憑かれたのなら、さっきのあなたの一撃で、この方、昇天してますよ。聖なる武器で斬られても生きているのですから、人間です。別の理由で乱心したんじゃないんですか？」
どうあっても女勇者も武闘僧も引く気は無いようだ。
武闘僧は三人のインディラ忍者を呼び止め、怪我の治療を命じた。結界が張られている現在、内側の者は誰も魔法が使えない。治癒魔法も唱えられないのだ。
サリエルは舌打ちした。正体を気取られている以上、早くダイダラを始末したい。しかし、ここであえて知恵遅れの忍者を殺せば、その行動を不審がられてしまう。サリエルは『ムラクモ』を鞘に収めた。
「……そやつは、そちらに任せる」

女勇者はにっこりと微笑み、『勇者の剣』を下ろした。
「わかってくれて嬉しいわ」
そして、ナーダと巨人の元へ走る。周囲にはもう敵はほとんどいない。残党狩りは数多くいるインディラ忍者に任せて大丈夫そうだ。怪我はどう?と聞こうとして、セレスは驚いて後ずさった。
三人のインディラ忍者をはじき飛ばし、一つ目鬼が暴れ出したのだ。斬られた腹部は真っ赤に染まり、腹から腸がはみ出ているというのに。
ナーダがその怪力で、巨体の忍者の肩を押さえ、地面に無理矢理縛りつけた。が、尚も、巨人はじたばたと暴れる。
「痛覚がないからって、無茶しちゃいけません!あなた、内臓がはみ出ているんです!出血死しますよ!」
巨人がぱくぱくと口を大きく動かしていた。何か言いたそうなのだが、その口からはうめき声しか漏れない。
「この人、もしかして、口が……」
セレスは気がついた。相手が大口を開けた時に見えたのだ、異様に短い舌が。この男は舌を切り取られている。それに間近で見れば、額の角も人工物である事がわかる。額に縫い目があるのだ。
「何て事を……」
ナーダも同じ事に気づいたようで、怒りを堪えるかのように唇を強く噛んでいた。
巨人の単眼は生まれつきのようだ。異形に生まれた者に角をつけ、舌を抜いたのは誰だろう?その悪意の凄まじさに、セレスも激しい怒りを覚えた。
……その時、セレスの耳に、声でない声が聞こえた。
――ちがう、ジライ、ちがう――
「え?」

――ジライ、じゃない。なか、ちがう――

「ジライじゃない？中が違う？」

聞こえた声を鸚鵡返しにすると、巨人は嬉しそうに口を横に広げ、うんうんと頷いた。

――なか、くろい。でも、ジライも、いる――

「中、黒い？でも、ジライも居る？」

「セレス、あなた？」

眉をしかめる武闘僧。セレスは何と言って良いのかわからず首を傾げた。

「ダイダラって人の声が聞こえるの。その忍者ジライは別人だと言ってるみたい。本人も居るけど、今、その体を動かしている魂は違うって……邪悪だと言っているわ」

セレス、武闘僧、三人のインディラ忍者の視線が、東国忍者ジライに向けられる。ジライの背後の二人の部下も、覆面から探るような眼を覗かせている。

話題の主のジライは、取り乱しもせず、腕を組み、平然と佇んでいた。

「寝ボケておるようじゃな、その阿呆は。我（われ）がジライ以外の誰だというのだ？」

「忍者ジライでなければ、魔族でしょう」

と、静かに武闘僧が言う。

ジライの姿の者は声をたてて笑った。

「我（われ）が魔族？何ゆえ、我（われ）が魔族なのだ！」

「……そうだとは断言しません。その可能性があると言っているだけです」

脇に置いておいた槍を拾い、武闘僧が立ち上がる。

片腕の忍者ジャコウとくノ一ユリネが走り、ジライを背に庇う形で、忍刀を手に武闘僧の道を塞ぐ。

「きさま、屁理屈をこねてジライ様のお命を狙う気か！」

「通すものか！」

武闘僧は二人の忍者に対し、肩をすくめてみせた。

「命をとる気はありませんよ。人間だと証明していただければ結構です。この場で試せる方法は二通りです。一つは聖なる武器で傷を負う方法。魔族ならば些少の傷でも死に至るダメージになりますものね。ですが、まあ、怪我をしてもらうのも気がひけますから、もう一つの方法を試させてもらえませんか？」

武闘僧はインディラ忍者から、油紙で丸めた小さな球を受け取った。

「この仕掛け玉の中には、インディラ総本山にある神秘の泉の水が入っています。魔を浄化する、いわゆる聖水ですが、人体には無害、透明で喉に甘露な名水です。これをあなたにかけますから、しばらくの間、『ムラクモ』を手放し、地面に置いてください」

「……」

「これをかけられても、多少、冷たいだけ。痛くも痒くもありません。嫌とはおっしゃいませんよね、人間なら？」

ジライは溜息をついた。

「……いた仕方ないのう」

腰に差していた『ムラクモ』を鞘ごと抜き、ジライの姿の者は、それに地面に置こうと体を低くかがめ……

いきなり『ムラクモ』を抜刀した。

ジャコウとユリネの背より血と水飛沫が舞い上がる。

東国忍者は鞘を投げ捨てそのまま高々と跳躍すると、右手のみで刀を持ち、左手で二本の手裏剣を投げた。その一本をナーダは槍で防いだのだが、彼の背後に居たインディラ忍者が悲鳴をあげて地面に転がった。針状の手裏剣に目を深々と貫かれたのだ。

地に降り立つや、忍者は風のように走り、インディラ忍者を血祭

りにあげてゆく。止めに入った武闘僧を嘲笑うかのように頭上を跳び越し、次に重傷のダイダラを獲物に選ぶ。
「阿呆の分際で！よくも我が策を無駄にしてくれたな！」
ダイダラを狙った刃は、しかし、女勇者によって止められる。『勇者の剣』を握る女勇者の顔は怒りのあまり朱に染まっていた。
「……仲間を殺したわね」
「そうじゃな。確かに、この体の仲間も殺した。正体が露見してしまった以上、傍に置く意味はない。敵の数は減らさねば、な」
「あなた……誰なの？」
忍者ジライの体を操る者が、目を細め、薄く笑う。
「我が名はサリエル……」

「サリエルですって……」

セレスはいぶかしそうに相手を見つめた。
「どういう事？さっき殺したのは影武者って事？」
「さあな」
横から武闘僧の槍が迫って来たので、忍者は後方に跳び退り、二人との距離を開いた。
「セレス、二人で仕掛け、一気に勝負を決めましょう」
「駄目。ナーダ、あなたは負傷者を診て」
「セレス！」
「あなた、優秀だもの。医学の知識もあるんでしょ？治癒魔法なしでも、怪我人の治療はできるわよね？」
「ですが……」
「お願い……治療すれば助かる人も居るかもしれない」
生き残っているのはダイダラだけだ……そうとはわかっていたが、武闘僧はセレスの言葉に従う事にした。皆の生死を気にかけ過

ぎては、セレスの集中力が衰える。『勇者の剣』と心を一つにできなくなる。ダイダラ以外全員死亡の事実を確認してやった方がいい。
「わかりました、治癒できる方が残っていたら、治療します。ですが、セレス、無茶はなさらないように」

武闘僧を残し、セレスだけが走り近づいて来る。サリエルは嘲笑と共に女勇者を迎えた。
「愚かな！二人で仕掛ければ隙がつけるやもしれぬのに！」
「……聞きたい事があるの」
セレスの青い瞳が、サリエルを睨む。
「その体の中に忍者ジライも居るって、ダイダラって人が言ってたわ。どういう事？」
「ふむ……他心通？いや、共感能力だな。制御できぬ微弱な能力のようじゃが……ますます面白い」
「答えなさい！サリエル！ジライはどうなったの？殺してその体を奪ったの？」
「まだ殺してはおらぬ。時間がなかったので、な。ジライは……」
サリエルは己の胸に左手を当てた。
「ここに居る。ここで我が活躍を、ずっと見ておる。ダイダラの阿呆を斬った時には憤死せんばかりに怒っておったが、ジャコウとユリネを不意打ちにて殺してからは妙に静かじゃ。話しかけても、うんともすんとも言わぬ。絶望のあまり正気を手放したのかもしれん」
「……最低な奴ね、あなたって……」
セレスは迷っていた。
『勇者の剣』で斬れば、サリエルは倒せる。しかし、同時に宿主のジライも殺してしまう事になる。その肉体は浄化され、この世に一握の塩を残して消滅してしまう。剣の好敵手であった彼を、そんな形で失いたくない。
斬る以外に他に道は……

（『勇者の剣』……教えて、どうすればいいの？殺されて魔人にされた人間を浄化するのとは違うわ。ジライはまだ生きている。魔さえ払えれば、彼は救えるはずよ）

真摯なセレスの思いが通じたのか……

魔法剣は自らの意志で動き、セレスの腕を持ち上げる。そして、その切っ先で『ムラクモ』を指したのだった。

（『ムラクモ』？『ムラクモ』をどうすればいいの？）

それ以上の答えはない。『ムラクモ』と剣を交わせという事なのだろうか？

セレスはサリエルとの距離を詰めた。特に手立てがない以上、『勇者の剣』を信じるしかない。

ナーダは、まず部下の生死を調べた。が、やはり、インディラ忍者三人は絶命していた。

その横でダイダラが、自分の忍者装束を引き裂いて作った布で腹をぐるぐる巻いていた。内臓は無理矢理、腹の中に押し込んだようだ。痛みを感じないにしても、やる事が大雑把すぎる。

単眼の鬼は心配そうにジライとセレスを見つめ続けていた。二人は剣で戦っており、かなり離れた位置まで走って行ってしまっている。

くノ一も息絶えていた。

が、片腕の忍者は微かながら息をしていた。ナーダはうつぶせに倒れている相手の傷を確認しようと、その場にしゃがみ、背に手をかけた。しかし、怪我人本人に止められてしまう。

「触れるな……離れろ」

「ですが」

「無駄じゃ。もう死ぬ。それより……ユリネは？」

「くノ一ですか？」

「我が弟子じゃ……あれは無事か？」

くノ一の亡骸は、片腕の忍者の斜め後ろにあった。うつぶせに倒れている彼の視界には入らないのだ。

ナーダは口元に微かに笑みを作った。

「……重傷ですが、ご無事ですよ。今、私の部下が治療しています」

「さようか……かたじけない。恩に着る……あれが無事ならば未練はない。離れてくれ、この体、処分する」

「自爆する気ですか？もうすぐ結界は解けます。結界さえ無くなれば、私も治癒魔法が使えます。もう少し頑張ってみませんか？」

「……この体、さほど持たぬ。意識があるうちに処分したい。死後に魔族に体を奪われとうない」

「……固いご決意のようですね」

そこで、ぬっと陰がかかる。単眼の鬼が火薬玉を右手に現れたのだ。

「ダイダラ……か。ユリネを頼む」

片腕の忍者の消え入りそうな声に、一つ目鬼は頷きを返した。

「……二人とも離れよ」

巨人がナーダの首に左腕をがっしりとまわし、後方にひきずって行く。爆発に巻き込まれない位置まで連れて行ってくれるようだ。

単眼の鬼はユリネへと火薬玉を投げた。それと、ほぼ同時くらいに片腕の忍者の体が破裂する。くノ一の体もはじけ飛んだ。

生への執着を煽る為に、くノ一の死を偽った。騙したまま逝かせてしまったのは心苦しかったが、あの忍者が心安らかに逝けたのであればいい……ナーダは合掌した。

仲間を送る巨人の顔には何の表情もなかった。忍にとって仲間の死骸を千々に砕くのは当たり前の事なのかもしれないと、武闘僧は思った。

土を蹴って斬りかかるサリエルを『勇者の剣』で跳ね返し、右へ

左へと身をかわす敵のその獲物『ムラクモ』を狙い『勇者の剣』を振り下ろす。もう何度となく同じ事を繰り返している。だが、何も起きない。セレスの疲労がひどくなるばかりだ。

肩で息をするセレスに対し、サリエルの呼吸に乱れはない。激しく飛び回っている彼の方が息が整っている。

「セレス！」

武闘僧の声だ。視界の先に、遠くから駆け寄って来る武闘僧と一つ目鬼が映った。

同じものをサリエルも見ていた。三対一となれば、かすり傷さえ致命傷となるサリエルは不利。一気に勝負を決めようと、無理な間合いから仕掛けてくる。

その時、セレスには相手の動きが見えた。次にどう仕掛けてくるか手に取るようにわかったのだ。

相手の動きに先んじ、セレスは右下段から『勇者の剣』を跳ね上げ、『ムラクモ』を弾き飛ばした。

「む！」

宙の己が武器へと視線を向け、サリエルは、そのまま、その場を動けなくなった。

ぶるぶると体を揺らし、身を二つに折り、がっくりと膝をつく。何かの発作を堪えるかのように。

「……斬れ」

忍者の口から苦しそうな声が出る。

「はよう斬れ……今なら、こやつ、動けぬ……」

覆面から覗く目元は苦痛に歪んでいた。先程までとは、漂う雰囲気も異なっている。

「ジライ？忍者ジライね！体を取り戻せたの？」

「虚をつき、サリエルの心を縛った……刀を失った瞬間、こやつの心に隙ができたので、な。じゃが、長くはもたぬ……殺してくれ」

「でも……」

「……我は魔族の傀儡となってまで長らえとうない」
「……」
「慈悲の心を持ち合わせておるのなら……斬ってくれ」

女勇者は頬を震わせ、サファイアの瞳から一滴の涙をこぼした。
つらそうに瞳を伏せ、それから、ゆっくりと瞼を開く。
「ごめんなさい……あなたを救ってあげられなくて」
がたがたと『勇者の剣』を震わせている。今にも声を出して泣きだしそうなほど顔を歪めてから、その口元に諦念の笑みを浮かべた。
「……もう一度、あなたと剣の勝負がしたかったわ」
女勇者が『勇者の剣』を振りかざす。
死ぬのだ。
この者の手にかかって死ぬのだ……
そう思うと、ジライの心は甘美な悦びに満たされた。
忍である以上、刹那、刹那を生きていくのみ。いつ果てても良いように常日頃から死を覚悟してきた。ありとあらゆる死を想定してきたが……
これほど幸福な死はありえまい。愛しく思い、胸をときめかせていた者の手にかかるのだから……
鋭い刃が近づくのを、ジライは口づけを待つ乙女のようにうっとりと待ち構えた。
けれども……
その刃はジライには届かなかった。
横から飛び込んできた者がジライの体を突き飛ばし、代わりに刃をその身に受けたのである。

「キャァァァァ！」

セレスは悲鳴をあげ、『勇者の剣』を大地に落とした。
「いやぁ！こんな……こんな事って！」
血に染まった顔を歪ませ、セレスは斬ってしまった者の元へ駆け寄った。岩をも砕く『勇者の剣』の凄まじい威力が、その者の体を二つに分けていた。
「ナーダ！お願い！助けて！私、こんなつもりじゃ！」
懇願するセレスに、武闘僧は静かにかぶりを振った。セレスに斬られ、その者の体は腰椎（ようつい）のあたりで上下二つに分かれていた。大量の血や臓器が周囲に飛び散っている。まだ息はあったが、治療は不可能だ。
忍者ジライはゆっくりと立ち上がり、自分を突き飛ばした者に一瞥をくれ、
「まさに忠犬。身を挺し主人を庇うとはあっぱれな！」
と、高らかに声をあげて笑い始めた。その体から広がる気は禍々しいほどに黒く、情の欠片（かけら）もない。
「サリエル！」
カーッと顔を紅潮させ、武闘僧が槍を構え走る。
忍者ジライの体を盗んだ魔族は、『ムラクモ』を拾おうとした。が、その進路に仕掛け玉を投げつけられ、聖なる水の飛沫を恐れ、身を引く。武闘僧の槍を、忍者は背の忍刀を抜いて受け止めた。

《ジライ、先ほどは我をうまく出し抜いてくれたが、次は無い。おまえはこのまま内に潜んだまま死ぬのじゃ》
（死ぬ？）
《そうだ。忍の里の次期頭領を失うのは惜しいが、女勇者に正体を知られた以上、おまえはもう要らぬ。敵の数を減らし、適当なところで、新しい体（ふく）に移る》
（何？）

《きさまが死ねば、我は次の体に移る。死ぬるのはきさまだけ。我は赤毛の男の内に潜み、外界に出る》

「……ごめんなさい」

両の目から流れる涙がセレスの頬を濡らしていた。

「……あなたに、こんな事をするつもりはなかったの」

一つ目鬼ダイダラの命はもう尽きようとしていた。忍者ジライを庇い、『勇者の剣』の前に躍り出た彼は腰椎のあたりで身二つに分けられてしまった。いかに丈夫な彼でも、もはや生きられない。

セレスの心に、声ではない声が伝わる。忍者ダイダラの思念だ。ダイダラは、セレスに助けを求めている。自分の事ではない。義兄を救って欲しいと願っているのだ。

――ジライ、きるの、ダメ――

「でも……」

――きるの、くろいのだけ。ジライ、ダメ――

「黒いのだけを……斬る？」

セレスはハッと瞳を見開いた。

「そうか……そうなんだわ！わかったわ。あなたの大切な人、私が助けてあげる！」

セレスは走った。

武闘僧と戦っているサリエルの元へと。

「ナーダ、どいて！」

セレスは柄を握る形で、両手を振りかざした。

素手の女勇者が駆けて来る。
武闘僧が槍を引き、三歩後退する。
何事かとサリエルは女勇者へと視線を向けた。

セレスが両手を振り下ろす前に、その手に『勇者の剣』が現れる。
持ち手の求めに応じ、剣が自らの意志で飛んできたのだ。
セレスは『勇者の剣』を、地面まで一気に振り下ろした。忍者ジライの体を両断するように。
けれども、その刃は、紙一重のところで忍者に達さぬようにした。
刃で斬るのではなく、『勇者の剣』それ自体が持っている浄化の光を放ったのだ。
浄化の光はジライの皮膚をすりぬけ、体の中の悪しき黒いもの……
……それだけを両断した。

『勇者の剣』が重かった。もう腕が痛くて、持ち上げる事もできない。セレスは荒い息を吐きながら、忍者ジライを見つめた。
憑き物は完全に落ち、その体から黒の気は無くなっていた。しばらく、忍者は棒立ちでその場に立っていた。が、やがて己を取り戻した。
「……すまぬ」
それだけを言うと、忍刀を背にしまい、風のように走る。途中、聖なる水の溜まりを踏みつつ『ムラクモ』を拾う。聖なる水に触れても、その体は浄化されなかった。
彼が急いで向かった先には……
死にかけている仲間が待っていた。

「阿呆のおまえに命を救われるとはな……思いもかけぬ事もあるものだ、ダイダラ」
その声を聞いて、死相が色濃く現れた顔が嬉しそうに笑みを作った。
「ようやった……よくぞ、我が命を守った。おまえにしては上出来じゃ」
単眼の鬼の喉でゴボゴボと嫌な音が響き、口から大量の血がこぼれ出す。それでも、巨人はえへらえへらと笑い、義兄を見つめていた。
ジライは瞳を細め、義弟に微笑みかけた。
「褒美をやろう……受け取れ」
巨人の首に、ジライは『小夜時雨（ムラクモ）』を振り下ろした。

雨と血が舞い上がる……

ダイダラの亡骸を爆破し、一人、荒野に佇む男。その背にセレスは遠慮がちに声をかけた。
「……ごめんなさい、私……」
忍者は肩越しに振り返り、横目でセレスを見つめた。
「何を謝られる？我等は敵同士。あなたは敵の忍を一匹、斬っただけにござろう」
「もう敵じゃなかったわ！あの時、私が剣を引いていれば……こんな事には……私が未熟なばかりに……」
忍者はかぶりを振った。
「我は、我自身の不始末で、部下を三人失ったまでの事。あなたのせいではない」

「……」
「サリエルに逃げる間はなかった。アレは果てたと思う。じゃが、まだ終わりではない。サリエルと共に我をはめた者がインディラに居る」
「え？」
「サリエルが教えてくれたのじゃ。四天王の一人ウズベルがインディラに居ると」
「インディラに！」
セレスの横のナーダが驚いて身を乗り出す。
「インディラの何処です？王宮ですか？まさか寺院に？」
「そこまでは知らん。我（われ）が知っているのは、聖なる武器の収集役がサリエル、新たな魔人とやらを造っているのがウズベル、両者は大魔王の命で協力し合っていた。それだけじゃ」
ジライは、サリエルが投げ捨てた愛刀の鞘を拾い、『ムラクモ』を収めた。
「ここまで虚仮（こけ）にされては捨ててはおけぬ。ウズベルとやら、我が始末する」
そう言ってから、武闘僧にチラリと視線を向ける。
「サリエルは滅びたはずじゃが、あやつ、我の他にもう一つ、憑ける体があると言うておった。一応、そちらに移っていないか調べた方がよい」
「はあ。わかりました。で、その体というのは？」
「名は言わなんだが、赤毛の男じゃそうな」
「赤毛の男……」
ナーダとセレスから、サーッと血の気が引く。二人は顔を合わせ、同時に同じ名を叫んだ。
「アジャン？」
「……おそらくな」
武闘僧は頭を抱える。
「冗談じゃありません！シャーマン体質のアジャンに、あんなろく

でもない魔族がついてごらんなさい！乗り物が良すぎて、とことん暴走しちゃいますよ！セレス、アジャンに奴が憑いていたら、さっきの手で追い出してください！」

「あ？ええ……」

赤毛の傭兵の元へ急ごうと武闘僧に促され、セレスも、二、三歩、歩き出す。しかし、まだこの場を離れたくはなかった。

「あの、でも、今、『勇者の剣』が重くて」

「持ってあげますよ」

「ありがとう……でも、待って、少しだけ。お願い」

セレスは振り返った。

何時の間にやら忍者は歩き出しており、二人の間はかなり距離が開いていた。セレスは大きく息を吸い、口の両側に両手をそえ、声を張り上げた。

「ねえ、あなた、大丈夫？」

足を止め、忍者は振り返った。

「一人で大丈夫なの？」

忍者は無言だった。

「私達と一緒に行かない？」

「セレス！」

武闘僧が慌てふためく。

「本気ですか？彼は暗殺者です！あなたの命を狙っていたのですよ！」

「今は違うわ。それに、四天王のウズベルを倒す気みたいだし、魔族と敵対しているんなら協力し合った方が」

「無茶言わないでください！」

武闘僧と女勇者が言い争っているうちに……東国忍者の姿はその場から消えてしまっていた。

死の荒野　7話

ナーダの合図で聖なる結界が解かれた時には、空には星が瞬いていた。

結界内の魔族・大魔王教徒は全て倒し、物陰に潜む者はいないかインディラ忍者が調べ尽くした。赤毛の傭兵にも異常はなく、聖水をかけられてもケロっとしていた。

サリエルと部下の魔人・大魔王教徒は全滅したのだ。

合図の花火が夜空に轟いてからしばらくすると、そちこちで秘密通路の蓋の岩がどけられ、地下から人間が現れる。シャイナ人と、西国人、インディラ人と、人種はさまざまだったが、共通点はあった。全員、頭を丸めており、僧衣をまとっているのだ。

地下の鍾乳洞より現れた者達は、ナーダの姿を見つけるや、皆、恭しく拝礼する。それに対し、武闘僧は鷹揚に頷きを返すだけだった。

僧侶達の尊敬を集めているナーダに対し、シャオロンは、

「すごいです！さすがナーダ様！」と、右手を握りしめた（『龍の爪』は外している）。

しかし、セレス（彼女も僧侶達から挨拶されていたが、ナーダのものに比べるとおざなりだった）は、

「……大僧正候補って嘘じゃなかったのね」と、晴れ晴れとしない顔で呟く。

それでもって、赤毛の傭兵は、

「肩書さえ偉けりゃ、馬鹿でも敬意が払われるもんだ」

と、ひねくれた顔をみせていた。

赤毛の傭兵を糸目でじろりと睨んだ後、ナーダは集まった僧侶五十余人の顔を見渡し、厳かに話し始めた。

「私の呼びかけに応えてくださった皆さんに、感謝の気持ちを伝えます。あなた方が鍾乳洞から聖なる結界を張ってくださったおかげ

で、魔族サリエルを倒す事ができました。これで、サリエルに殺されたウンナンの僧侶達の冥福を心より祈れます」

まずはナーダが合掌し、それに倣うように五十数人の僧侶がインディラ式の祈りの姿勢をとる。

端で見ていたシャオロンは圧倒されて慌てて合掌し、死者を送る気持ちをこめてセレスはエウロペ式の祈りを捧げた。が、傭兵だけは知ったことかとそっぽを向いている。

ナーダはインディラ寺院の連絡網（魔法や魔法道具による遠話）を使い、この荒野でウンナン寺院の仇討ちをする事、結界を張れる能力者が必要な事、敵を欺く為にも内密に集まって欲しい（外国から来る場合は不法入国して欲しい）事を、シャイナ、インディラ国の寺院に連絡をした。その呼びかけに応えて集まったのが、この五十数人である。

シャイナ国内から参加した二十数人はともかく、次期大僧正候補の頼みとはいえ、三十人近くもインディラから不法入国してきた事に、セレスは正直に言って驚いていた。セレスにとっては慇懃無礼で徳の欠片もない僧侶だが、ナーダは思いの外、人望があるようだ。

「ご協力くださったみなさんには、感謝の気持ちを幾ら伝えても伝えきれぬほどです。しかし、残念ですが、あまり時間はありません。インディラの僧侶は早急に帰国してください。不法に国境を越えていただいた以上、発見されればあなた方はシャイナ国では犯罪者となってしまいます。忍者の護衛をつけますから、どうか無事にインディラに戻ってください」

ナーダは視線をシャイナ人の老僧に向けた。ウンナン寺院の僧正、シャイナの南の寺院を統括している高僧だ。

「この地での戦闘を容認くださったウンナン県令には、五日後にご挨拶に伺います。連絡をお願いいたします」

その後、ナーダは一同にテキパキと指示を与え、訓示のような話をし、解散とした。

インディラの僧侶達は、我先にとナーダの元に挨拶に訪れる。中

には、顔立ちから西国人とわかる、インディラで修行中の他国籍の僧侶も混じっていた。十代後半から四十代ぐらいまで。老齢者はいない。国境越えをしてきたのだから、当然かもしれないが。

アジャンは妙な違和感を感じていた。ナーダから一言でも言葉をもらおうとしている僧侶達が変なのだ。頬を染め、うっとりと野郎（ナーダ）を見つめている。まるで役者（アイドル）を取り囲む、熱心な客（ファン）のようだ。

「ナーダ様、近日中にご帰国なさいますか？」

「そうなると思います」

僧の間から歓声があがる。皆、小躍りせんばかりに喜んでいた。

「大僧正様もお喜びになられますね」

「さあ……それはどうでしょう。まだ旅の目的を果たしていませんから。それに、多分、王宮の方に先に顔を出すと思います」

「王宮にいらっしゃるのですか？」

「行かないわけにはいかないでしょう……私、女勇者様の従者ですから」

今度は、僧の間から憂いの声が漏れた。

「ああ、おいたわしい」

「ナーダ様、護衛の者を必ずおそばに」

「飲食にはお気をつけください。あちらの出すものを軽々しくお口になさらぬよう」

尚も、僧侶達はナーダに金魚のフンのようにとりすがる。彼等の護衛役となるインディラ忍者達は、脇で暇そうに欠伸をしていた。

「ナーダ様、すっごい人気ですね」

と、シャオロンは無邪気に感心している。

「そうね……本当に、意外」

セレスは釈然としない顔をしている。

赤毛の傭兵アジャンは、男同士のべたべたした関係に鳥肌を立てながらも、彼等の会話は聞いていた。インディラ王宮と寺院は不仲のようだ。他に貴重な情報はないか、と。

「御身様」

ナーダと僧侶達の間を裂くように、忍が報告に現れる。
ぼそぼそと話す二人の会話はよく聞き取れなかったが、『ジライ』という名が上がるのをセレスは聞き洩らさなかった。
大僧正候補への報告を終えそのまま下がろうとした忍者を、セレスは呼び止めた。インディラ忍者は女勇者に対し、頭を下げ、片膝をついてかしこまった。
「そんなに形式ばらなくていいのよ。ちょっと聞きたい事があって……忍者ジライがどうしたの？」
「結界消滅後、荒野を離れ、北の丘に向かったのでござる。あやつ、何やら探っておるようでしたので、監視役として若い者を二名つけました」
「仲間の安否を確認してるんだろ」と、アジャン。
「北にゃ、チビガキ忍者が四人居たからな」
「あら、そうだったの」
セレスはホッと息をついた。サリエルに体を奪われ、仲間をその手にかけてしまったジライ。彼の身を案じていたセレスには、ジライにまだ他にも仲間がいるという情報は朗報だった。
「ま、あのガキどもがまだ生きてるかどうかはわからんが。北にも魔族はかなり居たしな」
「……きっと無事よ」
セレスはそう言って、夜空の星を見上げた。

お名残惜しゅうございますと最後までナーダにベタベタに媚びながら、インディラの僧達は忍者達に護衛されつつ荒野を離れて行った。それよりずっと前に、シャイナの僧は帰途についている。
荒野に残ったのはいつもの四人と、ナーダに命じられて聖なる武器を回収している忍者達だけだった。
やっと解放されたと大きく伸びをする武闘僧に、赤毛の傭兵は歩み寄り嫌味を言った。

「お別れまで何十分かかってるんだよ、え？」
それに対し、武闘僧はにっこりと微笑み、
「移動魔法やら山越えやらで苦労して集まってくれたんです、多少は、サービスしてあげなくてはね」
「まるで男ハーレムだったな」
気持ち悪そうにそう吐き捨てた言葉に対しても、
「慕われすぎて困ってしまうほど、私には人を惹きつけてやまない徳が満ち溢れているのですよ」
と、切り返す。その顔からは、この一カ月半、こびりついていた険は消えていた。
赤毛の傭兵はにやりと笑った。
「……で、勝ったのか？」
「いえ」
武闘僧の笑みが苦笑に変わる。
「……勝ち逃げをされてしまいました。もう二度と、彼とは戦えませんから」
「の、わりにはすっきりした顔をしているな」
「ええ。ちょっと開眼したので。一つの側面から見れば憎々しげな敵としか映らなくても、別の側面から見れば私よりも遥かに重荷を背負いそれでも高潔に生きてきた人物かもしれない。狭い視野で決めつけてはいけない。人間であれば、機会さえあれば、時にはわかり合えるかもしれない。そう思ったのです」
「……よくわからんな」
「つまり、僧侶にとっての敵は魔族だと、人間ではなかったと気づいたわけです」
「当たり前じゃねえか」
「ええ。ですが、私、最近、その事、忘れてたんですよ。それに、私、もともと人間の敵が多くて……今日せっかく開眼したのですが、この気持ち、インディラでも持ち続けられますかねえ」
赤毛の傭兵は先程漏れ聞いた、王宮と寺院の不仲を思い出した。

これから行く予定のインディラは結構、剣呑な所かもしれないと、傭兵は覚悟した。
「あの……ちょっとよろしいでしょうか？」
シャオロンがためらいがちに二人に声をかける。その両手には『龍の爪』が装備されていた。
「お？付けたのか？」
「はい。ケルベゾールドを倒すまで両爪を装備しても良いと、神主さんから許可をいただいてますから。これからは、両爪で戦います。それで、あの……」
シャオロンは二人に対し、深々と頭を下げた。
「アジャンさん、ナーダ様、今まで本当にありがとうございました。オレが龍神湖で神主さんと戦えたのも、こうやって仇を討てたのも、お二人のおかげです。お二人が、武術の才のないオレを鍛えてくださったから、オレ、今までやってこれました！ありがとうございました！」
顔を上げた時、少年は清々しい笑みを浮かべていた。父親と兄弟の姿の者達と戦い、その死を乗り越えて、少年は、又、少し成長したようだ。
「ケルベゾールドを倒すまでだと？仇を討ったってのに、まだついてくる気かぁ？物好きなこった」
「え？でも、」
からかうような笑みを浮かべる赤毛の戦士に、少年は真面目に答えた。
「村のみんなをまだ救えてません。サリエルは倒せたけど、リーさんやウォンさん達がどうなったかは、さっぱり。オレの知らない所で浄化されたんならいいけど、まだその体を魔に悪用されてるかもしれません。だから、」
少年はきりりと眉をひきしめた。
「ケルベゾールドを倒すまで、みなさんとご一緒させてください。全ての穢れたものを払い、苦しんでいる魂を救える時まで……オ

レ、戦います」
赤毛の傭兵は肩をすくめた。
「ついてくるんなら、今まで以上に働いてくれよ。オレが楽できるように、な」
少年は力強く頷いた。
「はい、アジャンさん！」
「これからも、あなたと共に戦えるのは心強いです。良い武器に負けないよう精進を続け、己を鍛えてくださいね」
「はい、ナーダ様！」
二人に対し、又、深々と頭を下げると、少年は走った。一人、夜空を見つめている女勇者の元へと。

「セレス様～！」
駆け寄って来る少年は、右手をぶんぶん振り回していた。『龍の爪』を装備しているのに、まるで頓着していない。その子供っぽさが可愛らしく、セレスは微笑を浮かべた。
セレスの前まで来ると、シャオロンはしゃちほこばった顔となり、膝を折り跪いた。
「セレス様、ありがとうございました」
「シャオロン……」
「セレス様のお力添えでサリエルを討てました。父さんも兄さんも母さんも村のみんなも……これでゆっくり休めます。まだ村の誰かの肉体が魔に使われてるかもしれないけど……出会ったら救えるよう、オレ、魔族と戦い続けます」

「オレがここまでこれたのも、セレス様のおかげです。だから……
…今度はオレの番です」

「まだまだ未熟なオレだけど、千分の一でも万分の一でもご恩をお返しできるよう、頑張ります。少しでもセレス様のお力になれるように」

「セレス様はオレが守ります」

頬を赤く染め、少年は敬愛する女性を見つめた。

セレスは、その美しい顔に慈悲深い女神のような微笑みを浮かべていた。

「ありがとう、シャオロン、嬉しいわ」

「……セレス様」

身をかがめ、セレスは爪を装備する少年の手にそっと触れた。

「あなたが傍にいると、私も、もっともっと強くなれる。いつかは、勇者にふさわしい人間に成長できる気がするの。頑張っているあなたが、私に力を分けてくれるから……。シャオロン、これからもよろしくね。一緒に頑張りましょう」

シャオロンは顔を輝かせ、力強く頷いた。

「はい！セレス様！」

約束の刻限を過ぎても、落ち合い先にはキクリしか現れなかった。

襲撃に参加した部下は誰一人戻ってこなかったのである。

忍者ジライは覆面の下の顔を曇らせた。

（アカハナ達四人にマツムシ……自爆したのであれば良いのだが、魔族の手に堕ちたやもしれぬ。その場合、遺体となっていたコゲラもだな）

ジライはその場で忍者頭への書状を書き、くノ一キクリに届ける

よう命じた。

特殊な暗号文で書かれた書状には、『ウズベル』という名の大魔王四天王が忍の里を狙っている事、荒野での戦いの顛末を記しておいた。手紙が着いた時点で、頭（かしら）がまだ魔族に憑依されていなければ、保護している大魔王教徒を処分するなりして保身を計るだろう。ひいてはそれが里の安泰に繋がる。

（……里への義理は果たした）

後は私闘に走るのみ……

忍犬と共にくノ一が東へと向かった後、忍者ジライは西を目指した。女勇者暗殺の任を捨ててインディラで魔族と戦うのは、里への反逆行為に当たる。

即ち……

ジライは抜け忍となる道を選んだのであった。

死の荒野　7話（後書き）

『死の荒野』　完。

次回は『信仰と禁忌』。舞台はシャイナ。
『死の荒野』の後日談、ナーダの話です。

次回の『信仰と禁忌』をもって
第一章　剣と仲間と　は、終わります。

信仰と禁忌

サリエルとの激戦の翌朝……

戦場跡の荒野で、インディラ忍者ガルバの兜と口元を覆う布の下は、苦渋に満ちた表情になっていた。

昨夜のうちに部下に荒野に落ちていた武器を回収させたのだが、その数は五百を超え、予想以上に数が多かった。用意していた三台の荷車では全てを運びきれず、仕方なくガルバは追加の車が到着するまで荷物番に残っているのだ。

人家も畑も無いとはいえ、街道は走っている。日が高くなれば旅人も通るだろう。ただでさえ忍者装束は目立つのに、周囲には大魔王教徒の死骸があふれているのだ。役人がやって来る前に、姿を消したかった。

「ガルバ」

荒野の南側の丘で野宿していたはずの主人だ。『雷神の槍』を背負い、小荷物を片手に持っている。インディラ教大僧正候補、武闘僧ナーダ。

ガルバは、ナーダの母の実家に代々仕えている忍者一族の出身。ナーダの母と共に嫁ぎ先に移り、女主人の死後、ナーダを主人と定め、二十数年、忠実に使えている老忍者である。決して表に出られない、非公式の部下であったが。

「聖なる武器候補、まだこんなに残ってるんですか」

主人は武器の山を見上げた。

聖なる武器の中には絶えず淡い光を放つ短剣『月のしずく』のようなものもあったが、大抵は外見に特異な特徴はない。つまり、外見からでは通常武器と区別がつかないのだ。

見分けるには装備するしかない。非資格者が触れた場合、一、武器が怒って装備者を攻撃する（例、『勇者の剣』、『雷神の槍』）

二、武器として使用できない（鞘から抜けない。弓の場合、弦を引けない）
三、外見がみすぼらしく変化する（刃が曇る。錆びる）
四、装備者の心を操り武器から関心を無くさせる
の、四パターンがある。今回収集した武器には、触れただけで攻撃してくるような過激な武器はなかった。が、勇者一行全員の記憶を照らし合わせ、聖なる武器を持った敵を二十人ほど倒しているという結論に至っていた。
通常武器の中に、二十種類近い聖なる武器が混ざっているはずなのだ。
今、荒野に積み上がっている武器は、やはり刀剣類が多かった。しかし、刀剣といっても、ジャポネの片刃の刀、西国の両刃の剣、ペリシャ教圏のシャムシール（曲刀）ではまるで形が違う。それに、刀剣の種類が豊富なインディラのタルワール・ダオ・アジャカティなどもあるし、各国の伝統的な剣も混ざっている。
他にも、短剣、小剣、長刀、弓、槍、サイ、チャクラム、鉄鞭、フレイル、独鈷などもあった。気が遠くなるような数だ。
「紛失武器リストとこれを首っ引きで、地道に一つ一つ探すしかありませんねえ」
と、ナーダが荷物の中から一冊の本を取り出した。インディラ寺院総本山の書庫に秘蔵されている『聖なる武器に関する記録』の、写しである。
二代目勇者の従者マハラシが記した本に、勇者の従者となった僧侶達が己の見聞を書き足していった、門外不出の貴書、その写本だ（インディラ僧は歴代の勇者の従者となったので、他従者の装備等、聖なる武器を目にする機会が多かったのだ）。
武器の外見上の特徴、装備条件、性能、威力、追加効果、装備効果等が詳しく図説されている。現在、二百十四の武器が記されている。
ナーダはその重たげな本を忍者に手渡した。

「総本山から転送魔法で送ってもらったのです。と、いう事で、よろしくお願いしますね」
「御身様？」
「武器の番は私が代わります。私は女勇者様の従者ですからね、ここに居ても、別段、怪しくありません。あなたはその本を持って、ムジャ達と合流してください。期限は三日です。頑張って聖なる武器を探してください」
「しかし、御身様……このような秘蔵の書を私ごときに軽々しく預けてはマズいのでは？」
「問題ありません。その本は写本です。以前、私が原本を写したものですから」
「ですが……あの……」
しばらく言いよどみ、忍者は思い切って提案した。
「できますれば、聖なる武器の知識をお持ちの御身様に武器の吟味をお願いしたいのですが……私どもとしばし行動を共にしていただくわけには……」
「そういうわけにはいきません」
ナーダは願いをぴしゃりとはねのけた。
「あなた方といつまでもつるんでいたら、何かあるって匂わせるようなもの。あの鈍いセレスにも不審に思われかねません」
「女勇者様にご事情を説明なさってみては？」
「できるもんですか、あの堅物のセレスに！それに、ガルバ、あなたは、今、インディラ寺院付きお庭番という事になってるんです。いつまでも私があなた方と一緒にいては不自然です」
「……御身様が私兵を抱えておれらようがおられまいが、あの女勇者様はお気になさらないと思いまするが」
ぶつぶつと小声で文句をつぶやく部下を、ナーダは糸目で睨みつけた。
「あなた方の存在を秘密にせよと、大僧正様から命じられているのです。あなたが何と言おうが、私は、大僧正様のお言葉に逆らいま

せんからね」
　忍者はやれやれと肩をすくめ、頭を左右に振った。
「大僧正様のご命令では仕方がありませんなあ。大僧正様がおっしゃれば、御身様は黒いものでも白いと思われますからなあ」
　明らかな嫌味に、ナーダはムッと顔をしかめた。
「大僧正様があなた方の存在を秘するよう命じたのは、ゆえあっての事です。いいですか、ガルバ、私は僧侶なんですよ。俗世の垢を全て拭い、本来、身一つで信仰の道に入らねばならない僧侶なんです。それなのに、私には忍者の私兵がいて、しかも、この先何百年あなた方を養っても痛くも痒くもない莫大な隠し財産があるのです。こんな事、世にバレたら、私は破滅です。大僧正候補を降ろされ、寺を追われてしまいますよ」
「そうなられたらなられたで、いっそ還俗してしまわれて、お母上様の仇をですな」
「還俗なぞしません！もう二度と還俗の話はするなと言ったはずですよ！」
「しかし、御身様」
「いいから、その写本を持って、とっととムジャ達と合流してください！武器は私が見張ってますから！」
　語気を荒げる主人と老忍者ガルバは、しばし睨み合うように視線を合わせていた。が……
「ホホホホ、ガルバ、その写本、ちょいと、わしに見せてくれんかの？」
　と、横から声をかけられ、主従の視線がそちらへと向く。
　ナーダとガルバの他には生者はいないはずの荒野に、長い白髪、白髭の黒のローブの老人が佇んでいる。右手には魔術師用の杖が握られていた。
「……カルヴェル様」
　ナーダは眉をしかめた。移動魔法が得手なこの当代随一の魔術師は、どのへんから立ち聞きをしていたのだろう。この老人は姿隠し

も得意なはずだ。
「お久しゅうございます、カルヴェル様」
ナーダの部下のガルバが、老魔術師に対し片膝をつき、恭しく頭を下げた。
ナーダは更に眉をしかめた。ガルバのナーダへの態度は、主従という立場を越えたかなり気安いものだ。ナーダを赤子の頃から知っているガルバは、三十近いナーダを未だに子供扱いする。そんな忍者がカルヴェルに対し最上の礼を尽くしているのだ、面白いわけがない。
「カルヴェル様、お元気そうで何よりです。今日はどういったご用件でしょう？」と、ナーダ。
「おお、実はの、ナラカの甥よ」
忍者がチラッと視線を向けてくるのを、ナーダは気づいていた。『ナラカの甥』と呼ばれた事に逆上すまいかと、忍者は心配しているのだ。
ナーダは澄ました顔を崩さなかった。カルヴェルに憎んでさえいる伯父の名を出されるのは、今日が初めてではない。激昂して魔術師を喜ばせるのは癪だし、忍者に子供扱いをされてなだめられるのはもっと不愉快だ。
「はい、何でしょう、カルヴェル様」
「目の保養にきたのじゃ。ここにわんさと聖なる武器があるのじゃろ？」
主従は視線を交わし合った。女勇者とサリエルとの戦いは、県令に情報・交通規制をしてもらって、人目のつかぬ舞台で繰り広げたのだが……今世の大魔術師には秘密にできなかったようだ。
「あいかわらず、耳ざといですね」
「なぁに、くれとは言わん。鑑賞させてもらえれば、それで満足じゃ」
「はあ」
「それと、ついでに」

と、老魔術師はインディラ忍者の手の中の『聖なる武器に関する記録』の写本を杖で指した。
「それも見せてもらいたい」
「それはできません」
ナーダは忍者から写本を取り戻した。
「これは写しとはいえ、総本山の秘蔵の書が原本です。寺院と無関係の方にお見せするわけにはまいりません」
「したが、おぬし、忍者に見せる気であったろ？」
「いいんです、ガルバは。長年仕えてくれている彼は、私の一部みたいなものですから」
「御身様……」
老忍者が嬉しそうにナーダを見つめる。便利なので重宝してはいるものの、修行僧のナーダは、忍者軍団を私兵に抱えている事をずっと恥じていた。
ナーダに滅私奉公する事だけを望み、聞き届けてくれねば自害すると、ガルバが脅迫まがいに懇願しなければ……財産も部下も出家時にナーダは手離していた。今でも機会があれば惜しげもなく捨てるだろう。その事を知っているだけに、ガルバは主人の言葉を喜んだのだ。
ジーンと感動に瞳をうるませている部下は、ひとまず無視して、ナーダは言葉を続けた。
「それから、聖なる武器は、今、探索中です。お見せできる段階ではありません。日を改めて、おいでいただけますか？」
「駄目じゃ。願いを聞いてもらう」
カルヴェルは、ナーダの鼻先にぴたりと杖の頭をむけ、にぃっと笑みを浮かべた。
「おぬしは、わしに借りがある」
「借り？」
カルヴェルは、にんまりと笑った。
「『雷神の槍』の貸し出し料（レンタル）じゃ。是が非でも、その本、見せても

らうぞ」
「……」
ナーダは肩越しに、背の槍に一瞥をくれた。
「お借りする時に、借り賃が必要だとはおっしゃいませんでしたよね？」
「じゃが、赤毛の傭兵は、自分から『聖王の剣』の借り賃を払うと申し出た。あやつ、いつでも、わしの願いを一つ聞いてくれるそうじゃ。一介の傭兵が使用料を払うというに、天下の大僧正候補殿が知らぬ顔を決め込んで使用料を踏み倒すのはいかがなものかな？」
ナーダは不機嫌そうに顔をしかめた。忍者ダイダラに対抗する為に、優れた武器が必要だったのだ。とはいえ……こんなわがままな老人を頼ったのは、やはり誤りだったのだ。
「何とおっしゃられようとも、お見せしませんよ。この本をご覧になりたかったら、大僧正様からご許可をいただいて来てください」
「石頭め。おぬしの伯父は、おまえの百倍は話がわかる男じゃったぞ」
「あなたと馴れ合って、堕落したくありませんから」
と、ナーダはツーンとそっぽを向いた。
カルヴェルはポリポリと頭を掻き、それから左の指を二本立てた。
「『雷神の槍』の貸し出しに加え、サービスを二つつける。それで、その本、見せてくれんかの？」
「サービス？」
見せる気はなかったが、ナーダは、一応、サービスの内容だけは聞いておく事にした。
「まず、一つ目」
カルヴェルは積み上がった武器に目をやり、
「武器全てとおぬしらを移動魔法で運んでやろう」
「おお」
と、声をあげた忍者を、ナーダは睨んだ。
「二つ目はこれじゃ」

老魔術師は懐から銀の鈴を取り出した。
「これを貸してやる」
鈴は風もないのに揺れ動き、耳に心地よい音色をたて続ける。
「魔法道具（マジック・アイテム）ですか？」
「さよう。聖なる武器に反応する、魔法の鈴じゃ。聖なる武器に近づければ鈴は鳴り続け、離せば鳴り止む」
「おお」
と、又も忍者が声を上げる。
「反応距離は一キロから十センチまで調節可能。範囲を最小にして、この鈴を武器一本、一本に近づければ、聖なる武器か否かの選別がすぐにできるぞ」
「おおおおお」
忍者が拳を握りしめた。誰だって、五百以上の武器を、分厚い本と首っ引きで一本一本調べていくような面倒な事はしたくあるまい。しかも、期限は三日と切られている。
ナーダはしばし無言のまま、部下と積み上がった武器を眺め、やがて諦めたように額に手をやった。
「……わかりました。その鈴を拝借できるのでしたら、写本はお見せしましょう。ただし、妙な魔法で中身を写されては困りますので、私の立会いの下での読書で良ければですが……よろしいですか？」

ナーダと共に現れたカルヴェルに対し……
女勇者はよそよそしい態度で挨拶をし、東国の少年は村の仇を討てた事を誇らしげに報告し、赤毛の戦士は肩をすくめてみせただけで挨拶すらしなかった。
セレス達には、カルヴェルをウンナンの寺院まで案内するのだと偽り、半日ほどで戻ると約束して、武闘僧は勇者一行と別れた。

武闘僧は部下の忍者と共に　カルヴェルの移動魔法でウンナン近郊の廃屋に送ってもらった。その地下に、ガルバの部下が普段利用している隠れ処があるのだ。

突然、移動魔法で現れたカルヴェルを、忍者達は最初、警戒した。しかし、老魔術師が魔法で残りの武器も運んでくれたと知るや喜び、その上、聖なる武器に反応する鈴まで貸してくれるとあっては素直に感謝の気持ちを表した。

カルヴェル（と、ついでにナーダ）を一番良い部屋に案内し、クッションやら茶菓子を奮発する歓迎ぶり。

老魔術師はニコニコ笑っていた。

「なかなか家庭的な忍者軍団を作ったようじゃな」

「は。恐れ入ります」

と、恐縮したのは忍者頭のガルバだった。

ナーダの方は老人の感想は無視した。『雷神の槍』を壁に立てかけ、老人とテーブルを挟んで向かい合う形で座って、茶をすすっている。

「それでは、私めはこれにて」

カルヴェルから借りた鈴を手に、ガルバが低頭する。

「武器全てに鈴を試し、聖なる武器の選別が終わりましたら、改めて写本を借りに参ります」

「うむ。それまで、写本はわしが見せてもらおう」

ホホホホと笑う老人と、仏頂面のナーダ。部屋を後にしてから、忍者ガルバは後ろ髪ひかれる思いで、何度も振り返った。二人っきりになっても、ナーダが冷静さを失わねば何事も起きないはずだ。

カルヴェルとてナーダとの対立は望んでいないと思われたが……

「人をからかわれるのが趣味の、困った御仁じゃったからのう」

忍者ガルバは特大の溜息をつき、廊下を急いだ。なるべく早くあの部屋に戻る為に。

「で、おぬし、何をたくらんでおる？」
『聖なる武器に関する記録』の写本のページをめくりながら、カルヴェルがナーダに尋ねる。
「こたびの聖なる武器探し、セレス達には内緒にしておるのは何故じゃ？しかも、わずか三日で探せと部下に命じる急がせよう。聖なる武器を集めてどうする？」
茶器を置き、ナーダは口を開いた。
「セレス達に内緒にしているのは、単に、邪魔をして欲しくないからです。今、私がしている取引の内容を知ったら、多分、セレスはお気に召さないでしょうから」
「ほほう。どんな取引じゃ？」
写本から顔を上げもせず、老魔術師が尋ねる。
「……」
ナーダは顎の下に手を当てた。取引に関して話したくはなかったが、黙っていても老人は魔法で情報を集めてしまうだろう。ならば、調整した情報を与えた方がいい。
「五日前にウンナン県令に、荒野一帯での戦闘の許可をお願いしました。寂（さび）れてはいるものの、あそこ街道ですからね、交通規制は必要でしたし、軍隊も派遣されたくなかったので」
「ふむふむ」
「無人の荒野とはいえ自領、戦場となって喜ぶ者はいません。魔族絡みとなれば尚更です。最初、ウンナン県令は荒野の提供に消極的でした。利益（メリット）がある事しかやりたくないという、典型的な小役人タイプだったわけです。で、正攻法で頼んでも埒が明かないと思いまして、餌をちらつかせました。女勇者をつけ狙う魔族は、聖なる武器を数多く持っているぞ、と」
「ほうほう」
「各国で聖なる武器が略奪されている事件は、結構、有名ですからね。案の定、県令は話にのってきました。そこで、ガルバ達に作ら

せた紛失武器リストを見せてやりました。持ち主がはっきりしている武器は、所有者もしくは遺族に返還しなければ国際問題となります。しかし、リストに無い武器であれば県令が一時保管をする事に何の問題もありませんし、良い環境で管理する為に中央政府の高官の元へ預けても何ら問題はないと、教えてさしあげたのです」

「なるほど。賄賂を勧めたか」

「はて、何の事でしょう。ついでに、聖なる武器を所有者に返還する際の利益についてもアドバイスしました。シャイナ国の力で取りかえした事を笠に着れば、後々、国交を有利に運べますからね。中央政府高官は全ての武器を喜んで預かるだろうと、県令に教えたんです」

「県令は何と？」

「戦闘後に、敵の武器全てを譲渡するよう、要求してきましたよ。それから少し交渉しまして、インディラ寺院関係の武器以外は全て県令に譲渡する事を条件に、荒野での戦闘への協力をとりつけたのです」

「なるほどのう、おぬしの悪知恵のおかげで、その小物、出世できるやもしれぬな」

「さあ、どうでしょう？私としましても、馬鹿の私腹を際限なく肥やしてやる気はありませんので、相応の手を打ちますから。県令が心正しき人物ならば何の痛手にもならない策なんですけど、ね」

カルヴェルはホホホと笑った。ナーダは、強欲な人間にうまい話を持ちかけ、利用したあげく罠にはめて懲らしめる気なのだ。その為に策を練り、その為に嫌っているカルヴェルの魔法道具（マジック・アイテム）を借りたのだ。

写本から顔をあげ、老人は満面の笑顔を見せた。

「大僧正候補は、やはり変な奴しか居らんなあ」

「は？」

「おぬし、外見はちとゴツすぎるし、性格もクソ真面目すぎるが……内面はナラカに似ておるぞ」

ピクッ……と、ナーダの頬がひきつった。

「……そうなのですか？あいにく私は僧侶ナラカとは面識がございませんので、あなたのその発言が真実か否か判断できかねます」

「ならば、ガルバに聞けばよい。あの男は、もともとはナラカの部下。ナラカの出奔後は、おぬしの母のお庭番となったがの」

「……」

「おまえ達、底意地の悪いところなんか、そっくりじゃ」

「……」

こみかめに青筋を立て、ナーダは、ゆっくりと席を立った。

「……でも、私は彼とは違います」

そして、壁に立てかけてあった『雷神の槍』を手にし、カルヴェルを睨みつける。

「全ての責任を放棄して野に下るような卑怯な真似、私にはできません」

「同じ大僧正候補として、奴が許せぬか？」

「ええ」

「甥としても、許せぬか？」

「……」

ナーダは『雷神の槍』を握りしめ、顔を伏せた。

「過ぎた事を今更、愚痴ても仕方がない事です。ただ、母が亡くなった時には……相当、お怨み申し上げましたよ。僧侶ナラカが出奔せず大僧正候補としてインディラに居れば、あの女の一族も寺院を恐れ母に愚かな真似はできなかったでしょうし……母が亡くなる事もなかったでしょうからね」

「幼い頃の私に、ガルバは、勇者ランツ様と伯父上そしてあなたの冒険談をよく語ってくれました。あなた方がどれほど無茶をして、不可能と思われる現実を切り開いて来たか、繰り返し教えてくれたのです。常に死の危険と隣り合わせだった私にとって、ガルバの語る伯父上像は心のよりどころとなっていました。伯父上のような立派で高潔な人物になって母を守りたいと、その頃は本気でそう思ってましたよ」

「僧侶ナラカは大魔王との戦いで殉死したと信じてましたからね……母が亡くなる数日前まで、私は騙され続けていました」

「今では……世に流布している噂通り、大魔王との戦いで伯父上は亡くなったものと思い、気にも留めぬようにしてますけどね」

「信仰を捨て、たった一人の血縁、おぬしの母すら捨て、何ゆえ、奴が失踪したか聞きとうはないのか？」

ナーダは顔をあげ、冷めた笑みを口元に浮かべた。

「今更聞いてもせんない事です。母は亡くなり、母と私にただ一人忠義を尽くしてくれたガルバは家族も部下も全て失った……何を伺っても過去は変わりません」

「ふむ」

「それに、言い訳なら、あなたからではなく、ご本人から直接伺いたいものですね」

「本人からか……それは、ちと難しいのう」

「もう亡くなられたのですか？」

「いや、まだ生きておる。じゃが、そう易々と出てこられぬ場所に居ってのう」
「……別に、結構です。お会いしたいわけでもありませんし」
そう言ってから、ナーダは『雷神の槍』を持つ手の向きを変え、柄先をカルヴェルへと差し出した。
「話は変わりますが……『雷神の槍』、お返しします。すばらしい名槍でした。ありがとうございました」
「おや、もう良いのか？」
「はい。どうしても倒したい敵との勝負は終わりました。もはやお借りしている意味がありません」
「さよか？これがあった方が魔族との戦いは有利であろうに」
「そうですね。でも、本来、剣や槍など、鋭い刃を持つ殺傷力の高い武器は僧侶にとって禁忌です。理由もなく使い続けていては、大僧正様に叱られてしまいます」
「……理由があれば良いのか？」
「は？」
「禁忌を犯しても、相応の理由があれば許されると思うか？」
武闘僧ナーダは、糸目を更に細めて、老人を睨むように見つめた。武器の話題にかこつけて、ナラカの出奔について尋ねているように聞こえたからだ。
「信仰を貫き通した上で、天下にも自分にも恥じない信念があるのなら、人間界の決め事などいくら破っても構わないと思っています。むろん、善人に迷惑をかけないという条件つきで」
老人は嬉しそうにニコニコ笑っている。
「悪人には迷惑をかけても良いと？」
「場合によっては……しかし、」
そこでナーダは言葉を区切った。荒野で亡くなった人物を思い出したのだ。薄汚い暗殺者の一味と侮り、その非常識なまでの強さに嫉妬し、憎んでさえいた人物は、僧侶であるナーダよりもずっと高潔な魂の持ち主だった。

「……何をもって悪とするかは難しいところですよね」
老魔術師はホホホと笑う。
「やはり、おぬし、ナラカに似ておるのう」
「……そうですか？ですが、不愉快ですので、同じ事を繰り返して言わないでください」
「内面ばかりではない。多才なところも似ておる。この写本、おぬしが写したと言っておったな。字は達筆、図画も写実的、写字生でも絵描きでもやっていけるぞ。おぬしが総本山の学課で首席だったのは知っておったが、芸術面のセンスまであるとは思わなんだわ。武闘僧のくせに剣や槍も人並み以上に扱えるし、実に面白い奴じゃ」
「私は大僧正候補ですから。学問も魔法も武術も容姿も性格も、どれをとっても一流です。何事においても一番になりたくて、それ相応の努力を重ねてきたのですから、優秀なのは当然の事なのですよ」
カルヴェルはカラカラと笑った。プライドが雲のように高いところまでそっくりだと言って。
いつまでもカルヴェルが受け取ってくれないので、ナーダは『雷神の槍』をテーブルの上に置いて嘆息した。何を言っても老人を喜ばせるだけなので、しばらく黙っていようと思いつつ。

カルヴェルの魔法道具（マジック・アイテム）の鈴のお陰で、聖なる武器探しは一日で終了した。
聖なる武器は全部で十八あった。
老魔術師は見つかった武器と『聖なる武器に関する記録』の写本を何度も見比べた後、満足し、ナーダをセレス達の元へ送り、自身も移動魔法で姿を消したのだった。

四日後、ナーダはウンナンの県令に十五の聖なる武器を譲渡し、その日のうちにウンナンを後にした。

それから、わずか三日後……

ウンナン県を皮切りに、シャイナ各地で、同じ芝居がうたれた。

『女勇者セレス　荒野死闘編』である。

勇者一行・魔族・忍者入り乱れての大乱闘。息もつかせぬ大活劇のしめくくりは、ウンナン県令の登場である。清廉潔白な好人物である県令は、魔族の残した聖なる武器を、その名を一つ一つ口にして預かり、必ず持ち主に返すと女勇者と約束するのだった。

更に一か月後、シャイナにおける人気読本『女勇者セレス』の最新刊『荒野死闘篇』が発売された。そちらにも県令が預かった武器の名前が全て記されていた。

『荒野死闘篇』が世に広まってしまっては、県令も聖なる武器を賄賂として使う事ができなくなった。仕方なく聖なる武器の全てを国に献上し、県令は己の保身を図った。

聖なる武器はシャイナ皇帝の命によって、速やかに所有者に返還され、持ち主が不明の武器は王宮の宝物庫に納められ管理される事になったのである。

ちなみに劇団の出資者も『女勇者セレス』の版元に情報を流しているのも、同一人物である。本人は正体を伏せていたが、その代理人はインディラ人で、名はガルバと言った……

信仰と禁忌（後書き）

『信仰と禁忌』　完。
《第一章　剣と仲間と》完結です。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

次回より《第二章　勇者として》が始まります。

最初の話は『黄昏の河』、舞台はインディラ。
大魔王四天王ウズベルとの戦いです。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

第二章から『ムーンライトノベルズ』に載せる話も混じります。が、そちらを見なくても、『小説家になろう』の作品だけでストーリーがわかる作りといたしますので、どうかご容赦ください。

第一章、おつきあい、ありがとうございました。
ご感想等、いただけると嬉しいです。励みとなります。

セレスと従者達の旅は、まだまだ続きます。

カルヴェルVSジライ（いただいた画像）

谷町クダリ様から「聖なる武器」2話の二人の色の道三本勝負のイメージ・イラストをいただきました。

＞i32131―2200＜

格闘ゲーム！

にこやかなカルヴェル様と美形なジライ。ありがとうございました。

キャラのイメージは読み手の方みなさまそれぞれ違うと思います。が、こうして形にしていただいた事がとても嬉しく、キャラクターが私の手を離れたみたいでたいへん新鮮だったのでこちらに挿入させていただきました。もしもイメージと違った場合でも、こういう二人もありかも！　と、楽しんでいただければと思います。

人物紹介（第一章『剣と仲間と』を読了後にご覧ください）（前書き）

『黄昏の河』開始前までを踏まえた人物紹介です。

ネタバレありなので、『信仰と禁忌』までご覧になってからお読みください。

人物紹介（第一章『剣と仲間と』を読了後にご覧ください）

女勇者セレス
エウロペ侯爵家令嬢。十六歳。
『勇者の剣』の守り手。『虹の小剣』、『エルフの弓』の力を借りる事も。
カルヴェルより贈られた神聖防具の白銀の鎧を、常日頃、まとっている。
正義を愛する、まじめな熱血漢。育ちがいいので、ちょっと天然。おひとよし。
先祖の勇者達に憧れている。
愛らしい美少女だが、三才から男装し、騎士としての教育を受けてきた。
大魔王が復活するまで『勇者の剣』に触れる事すら許されなかった。
最近は『勇者の剣』との仲が少し良化。
でも、軽いのは戦闘中だけで、普段は成人男性並みの重量。
十二の少女の頃にカルヴェルの弟子となって神聖魔法を習得。
聖騎士の叙勲を受け、エウロペ国王に仕えていた。
西国人にしては小柄。金髪碧眼。処女。
『体の発育は抜群』で、
性格も顔もスタイルも『どれをとっても完璧』な『真の女王様』との声も。
アジャンの記憶を共有したり、忍者ダイダラの思いが読めたりと、時々、不思議な力を見せる。

赤毛の戦士アジャン
傭兵。二十六歳。

両手剣が得手。カルヴェルから借りた片手剣『聖王の剣』も使っている。
酒好きの女好き、短気で傲岸。処女嫌い。
必要とあらば相手に合わせへりくだるなど、処世術も心得ている。
しかし、セレスの前では仮面を被れず、彼女の人の好さに苛立つ毎日。
ジャポネに行く前までは、セレスの剣の師となり、彼女に戦闘のコツを教えていた。
即物的な性格だが、
父のシャーマン能力を継いでおり、進むべき道がわかるなど便利な力がある。
神魔の器となれる霊媒体質の為、魔族に狙われやすい。
七つの時、父母と姉を殺され、その後、妹と弟も失い、部族神への信仰を失う。
権力を厭い、金に執着する一方、守護を決めた人物を全力で守ろうとする誠実さも。
年少者にやさしい。
一時期、エーゲラの女王の情人だった。

武闘僧ナーダ
インディラ教次期大僧正候補。二十九歳。
素手で闘う武闘が得意だが、剣・槍などの武器も人並み以上に扱える。
両腕、両脚に、神聖防具の装甲を付けている。
神聖魔法・回復魔法・強化魔法・弱体魔法が使える。
作中、何度か結界魔法を使っているが、実は苦手。あまり長時間、使用しない。
信仰心に篤く、真面目。女嫌いの男色家。
武術・学問・魔法等、何事においても一番を目指す完璧主義者。

七つの時、母を失い、生家を追われ、総本山の修行僧となった。
先代勇者一行を嫌っており、最初、セレスにもきつく当たっていた。
今でも慇懃無礼な態度を崩さないが、
勇者たらんと努力する彼女に好感を抱いている。
インディラの大僧正に傾倒しており、部下の老忍者ガルバを大切にしている。
僧侶だが霊感はゼロで、この世の神秘を見る目も持っていない。

格闘家シャオロン
シャイナ一の武闘家の五男。十二歳。
両手に『龍の爪』を装備して戦う。
大魔王四天王の一人サリエルに家族を殺され村も滅ぼされ、
仇討ちの為、勇者一行に加わる。
真面目で素直、何事にも一生懸命な熱血漢。腕力はないが、敏捷性は高い。
策士の才もあるらしい。
学は無く、共通語もあまり得意ではない。
時々、勇者一行の会話についてゆけなくなる事も。
セレス・アジャン・ナーダから、さまざまな事を教わり、
成長を助けてもらっている。三人を尊敬している。
霊感体質で、傍にいる事でアジャンの能力を向上させる事も。
武術の才がないと父から見捨てられていたが、
父の姿のサリエルを倒し、見事、村の仇を討つ。
初恋の相手はセレス。

大魔術師カルヴェル
先代勇者ランツの従者となって、共に大魔王を倒した英雄。

年齢不詳（本人談　いい年のジジイ）。
当代随一の大魔術師（魔術師協会には所属していない）。
攻撃魔法、強化魔法、弱体魔法、神聖魔法の他、暗黒魔法（邪法）まで使える。
しかし、回復魔法だけは高位魔法を使えない。
魔力が計り知れないほど膨大。
移動魔法の連続使用、長距離移動も、呪文の詠唱抜きで可能。
人をからかって遊ぶのが何よりも好きで、
セレスにセクシー・ポーズ授業をしていた。
仲間に加わって欲しいと切に願ったセレスを拒み、彼女の敬意を失っている。
セレスの危機に駆けつけたり、ジライに暗殺の延期を頼む等、勇者一行を助けてもいる。

忍者ジライ
『白き狂い獅子』の二つ名を持つ、セレスの命を狙っていた暗殺者。
二十三歳。
『ムラクモ』の振るい手。『ムラクモ』を『小夜時雨』と呼んでいる。
白髪、白い肌の白子。美形。
いつでも死ぬ覚悟ができており、刹那、刹那を生きる彼は何事にも拘泥しない。
表面はSで、根はM。真の女王様！と慕いつつも、セレスを暗殺しようとしていた。
人を御す為の房中術として、誰とでも寝る。
忍の里で育った大魔王教徒なので、道徳観念はない。
しかし、彼なりの信念を持って忍道を貫いていた為、
体を盗み、部下を死なせたサリエルに激怒。
サリエルの協力者ウズベルを倒すべく、抜け忍となった。

忍術・忍法・邪法・諜報術・剣術・体術・盗術・房中術・暗殺術に秀でている。
異形の自分をひきとり中忍に推してくれた先代『白き狂い獅子』に恩を感じている。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

勇者ランツ
先代勇者。セレスの祖父。セレスが三才の時に病で死亡。
若い頃は、カルヴェルと共に歓楽街の帝王として名を馳せていた。

僧侶ナラカ
先代勇者ランツの従者。ナーダの伯父。
大僧正候補だったが、大魔王討伐後に出奔。その行方を、カルヴェルは知っている。

エウロペ国王
セレスの庇護者。名君と名高い。大魔王復活後、セレスの従者を探し、
北方諸国に協和を求める親書を送り続けている。

インディラの大僧正
ナーダの尊敬と愛情を一身に集める老僧。カルヴェルの茶飲み友

達の一人。
インディラの総本山にいる。

老忍者ガルバ
ナーダの忍者軍団の頭領。非公式な存在の為、表だって部下を名乗れない。
ナーダの隠し財産も管理している。僧侶ナラカ、ナーダの母にも仕えた忠義の部下。

武闘家ユーシェン
シャオロンの父。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
サリエルに殺され、その肉体を奪われていた。

武闘家ヤン・フェイホン・ティエンレン・タオ
シャオロンの兄達。シャオロンに浄化された。
すぐ上の兄タオとシャオロンは一番、仲が良かった。

くノ一アスカ
忍の里の頭領の娘。頭とジライとの連絡役だった。
ジライより『我が宝』と大事にされていたが、誰とでも寝る彼にやきもきしていた。

忍者ダイダラ
知恵遅れの一つ目鬼。その馬鹿力で、ナーダを危機に追い込んだ。
ジライを庇い『勇者の剣』で致命傷を負う。ジライの介錯で、逝

く。

忍者ジャコウ
幻術を得意とした片腕の忍者。ジライの信任も厚かった。
サリエルに憑依されたジライに斬られて致命傷を負い、自ら爆死する。

くノ一ユリネ
ジャコウの弟子。無毛症。攻撃的な性格だったが、ジャコウにだけは素直だった。
サリエルに憑依されたジライに殺される。

忍者アカハナ・アオザ・キスケ・クロベエ
一卵性四つ子。サリエルに憑依されたユーシェンによって、全員、殺される。
アカハナが長男、アオザが一番体術がうまく、
キスケはお調子者、クロベエは四人の中では知恵者。

忍者マツムシ・コゲラ
痩せ細った長身のマツムシと侏儒のコゲラは二人一組で戦う異形の忍者だった。
マツムシはナーダと戦闘後、行方不明。コゲラはナーダの槍に貫かれ死亡。

人物紹介（第一章『剣と仲間と』を読了後にご覧ください）（後書き）

次回は『黄昏の河』。舞台はインディラ。
大魔王四天王ウズベルとの対決です。

黄昏の河　1話

インディラの首都ウッダルプル。

七つの門を持つ城壁に囲まれた、広大な都市だ。

整然とした街路が縦横に走り、偉大なラジャラ王朝の力を誇示する巨大な王宮が街の東部に位置する。庭園と森（そこには十八の離宮がある）に囲まれた、一つの街ほどもある王宮だ。

西部には、王宮に劣らぬ規模のインディラ教の大寺院が河べりにあった。参詣者が後を絶たない格式ある寺院ではあったが、そこはインディラ寺院のウッダルプル支部に過ぎなかった。インディラ教の総本山は、ウッダルプルより馬で三日の南西の聖山にあった。

ウッダルプルのインディラ寺院周辺には、毎日のように華かやな市が立つ。巡礼者や観光客、ウッダルプル市民で通りは賑わっていた。

しかし、ほんの少し裏道に入ると、人通りは嘘のように減る。表通りの喧騒こそ多少は聞こえたが、辺りは静けさに満ちていた。

裏道に続く白の土壁にそって、フードマントを被った者が歩いていた。隣国ペリシャから来た砂漠の民のような身なりだったが、温暖な冬のウッダルプルに居るというのに、フードマントを目深に被り、口元は布で覆っていた。革袋を背負っており、これから砂漠越えでもするかのような恰好だ。

土壁に窓のようなぽっかりと穴が開いている箇所があった。ちょうど人の顔の高さだ。

フードマントの者は、その穴に顔を覗かせた。

「やってるか？」

中から色黒の痩せた男が顔を見せる。

「何が欲しい？」

「特別調合薬グジャラを……」

そう言って古い銅貨を取り出し、窓の男に手渡す。

「客の名はジライだ」
中の者は銅貨をためつすがめつ見て、それが裏の商売の会員証である事を確認する。そして、
「待っていろ」
と、言って姿を消した。が、じきに、土壁の先にある扉が開き、くだんの男が顎をしゃくる。
フードマントの男は頷き、周囲に人目がない事を確かめてから扉の中に入って行った。

扉を開くと、香の甘い香りが漏れた。薄暗い、赤を基調とした部屋。応接用の、エウロペ風のソファーから男が立ち上がる。
「よお、『白き狂い獅子』のお坊ちゃん、久しぶりだなあ」
そう言って、男は両手を広げた。黒髪を後ろに撫でつけた、口髭も見事な役者ばりの二枚目だ。年は三十代前半だろう。腰布をまとっただけで上半身は裸なので、黒の剛毛が密集した厚い胸が露わになっている。
抱きついてきた男を少し横に動いただけで避け、フードマントの男は目深に被っていたフードを外した。
こぼれ出たのは、老人のように白い髪だ。乱れた白髪に、顔の右半分が隠れる。鼻の下から顎までを口布で覆っている為、露わにしている箇所こそ少ないが、その肌も異様に白かった。しかし、目元の肌には張りがあり、切れ長の瞳は刃を思わせる鋭さだ。
「……支店で、おまえが本店(ここ)に居ると聞いて来た」
「へぇぇぇ、会いに来てくれたってわけ？わざわざ？そいつは嬉しいねえ」
「情報屋の元締めと直接、交渉がしたくて、な。情報を買いたいのだ、グジャラ」
グジャラと呼ばれた男はにやにや笑いながら、白髪の客を舐めるように見つめた。

「麻薬は要らないのか？」
「うむ。きさまの表の商売の品に用はない」
「媚薬も？」
「要らぬ」
「残念だな……アレに狂った時のあんたは最高だったのに……俺、今でも、時々、夢に見るんだぜ、ジライ」
そう言ってグジャラは、相手の肩を抱こうとした。が、ぴしゃりと平手で払われてしまう。
「薬の修行の時には世話になった。だが、今日はそういった用ではない。インディラにおける魔族と大魔王教徒の情報が欲しいのだ」
グジャラはチェッ！と舌をうち、ソファーに腰掛け、足を組んだ。
「俺ン所の相場は知ってるだろ？あんた、払えるのか？」
「うむ」
「本当に？ツケは嫌だぜ。特に、請求先が忍の里だったりしたら、回収できない恐れがある」
「……」
「あんた、里での評判ガタ落ちだぜ」
「ほう？」
「女勇者の暗殺に時間をかけ過ぎたせいだ。迅速・確実の『白き狂い獅子』も牙が抜けたとさ。あんたの時代は終わったらしい」
「……まあ、当然だな。我の失敗を待ってた奴も多かったし、の」
「騒いでいるのは、主にコマキの一派だ。あいつら、里で大魔王教徒とつるんで動いてる」
「壊滅したジャポネの教団の生き残りか？」
「ああ、大物幹部はいないがな、結構な数が里に身を寄せてるぜ」
「……頭（かしら）はどうしておる？」
「特に動きはない。大魔王教徒どもを迎え入れてはいるが、あのジイさんの性格からして、喜んじゃいないだろうな。金を落とさなくなった顧客なんぞ、居ても邪魔なだけだ」
「だろうな」

白髪の男は嘲笑を浮かべた。
「ま、おまえの正確な情報の通り、放っておけば、我は、じきに、次期頭領の座からひきずり降ろされる。女勇者の暗殺期限は一月末。それを過ぎれば、始末されるだろう」
「いいのか、インディラなんかで油を売ってて。女勇者は、まだシャイナだろ?それとも、暗殺の下準備の為に、先回りしたのか?」
「その件も含め……おまえに相談がある」
「何だ?」
「まずは情報料だが、物品で構わぬか?」
そう言って懐から小袋を取り出し、テーブルの上に中身をちらける。大小の宝石が転がり出る。
「まがい物はない」
「換金して来いよ。基本的に俺の店は、物品お断りだ。名のある宝石なら別だが……」
「む……名もないクズ石じゃが、珍しい指輪ならある」
白髪の男は、翡翠の指輪を手に取った。
「シャングハイで評判のSMの館『フェティシズム』を知っておるか?」
「ああ。白・黒美人を取り揃えて、東国人相手に派手な商売をしてるな。固定客がつき過ぎちまって、最近じゃ、人気SM嬢は一カ月先まで予約が一杯だそうだ」
「この指輪があれば、あの店一の女王様マリアと、その場で遊んでいただける」
「へえ」
「ただし、その魔法が効くのは一回限り。受付では、フードマントを被って素顔を隠さねば魔法は切れる。マリア女王様にお会いしたら、そうじゃのう、この指輪の持ち主の白子は病で亡くなったが、死の床で女王様を慕い涙に暮れていたとでも伝えれば良い。その者の供養に来たのだと言えば、女王様も無下にはすまい」
「……つまり、あんたが女王様から貰ったのか」

「我にはもはや不要の品ゆえ、売る」
「ま、そっちのケがある野郎は山のように知っている。他のクズ石よりは金にできそうだが……宝石の売買は専門外だ。仲買人を通すと、手間賃がかかる。たいして金にならないぞ」
「どれぐらい足りん？」
「そうだな……この三倍は欲しいな。大魔王関連の情報は高いんだ」
「ならば、情報を売ろう」
「何の？くだらない情報なら一ゴールドも払わんぞ」
「とっておきの情報じゃ」
白髪の男の目元が笑みを作る。
「『忍者ジライは抜け忍になる』」
ガタン！
派手な音を立てて、情報屋はソファーからすべり落ちた。
床の上の相手の傍に、白髪の男はしゃがんだ。
「買うか？忍の里に高く売れるぞ」
「何で？何で抜けるんだ？暗殺期限まで、まだ一カ月以上あるぜ。あんたなら、殺れるだろ？」
「情報を買ってくれるのなら、理由を教える。どうする？」
「……」
グジャラはコホンと咳払いをし、乱れた髪を後ろに撫でつけつつ、ソファーに腰を下ろした。
「買おう」
「助かる」
白髪の男は口元を覆っていた布を外し、素顔を見せた。
やや痩せすぎではあるものの、微かに微笑むその白い顔には人を惹きつける妖艶さがあった。白い手がグジャラの両頬に伸びる。互いの顔を近づけ、薄い唇を突き出し、
「これは、サービスだ」
と、言って贈られた接吻は濃厚なものだった。最初は驚いていた

グジャラも、次第に大胆となり、相手の背に両手を回し、引き寄せて更に結びつきを深いものにしようとする。
興奮し顔を上気させているグジャラに対し、白髪の男は作り物めいた妖しい笑みを浮かべるばかり。人ならざる淫魔のごとく……
「ジライ……」
グジャラは、白い頬に首にと口づけをし、舌を這わせた。
「ずっと、あんたが忘れられなかった……」
「さもあろう」
「なあ、媚薬、使ってもいいだろ？」
「駄目だ」
「軽いヤツにする。後遺症も無い。だから……」
「我はもうあの頃とは違う」
甘えるように相手に体を預けながら、白い指先がグジャラのものを愛撫する。
「媚薬なぞ無くとも、きさまを酔わせてやるわ」

睦言の代わりに、二人は互いの情報を口にする。
淫らに白い髪を乱しながら大魔王教徒の情報を求める相手に、グジャラはインディラでの教団の動きを教え、魔族の情報も伝えた。
大魔王教団幹部の中にも間諜を飼っているグジャラの情報は、他の情報屋とは比べようもないほど正確で詳細だ。
ケルベゾールド四天王『サリエル』と『ウズベル』の名が出た時、相手の黒の瞳が激しく光るのを、グジャラは見逃さなかった。

「ジライ、会員証の銅貨は捨てずに持ってろよ」
巻煙草をくゆらせながら、グジャラが言う。
「俺の店は、誰にでも情報を売る。国にも、軍隊にも、忍者にも、大魔王教徒にも、寺院にも、な。金がある奴なら誰でもいい……

むろん、抜け忍でも、な」
　吸うか？と吸い口を向けた。が、全裸でソファーの上に寝そべっていた者に、かぶりを振られ、断られてしまう。グジャラは一人、麻薬入りの煙草を吸った。
「匿ってやる気はないが、客としてなら何時でも歓迎するぜ。支店の奴等にも、話は通しておく。今まで通り、俺の店を使ってくれ」
　白い顔が会心の笑みを浮かべる。忍者の活動に、情報は必須。敵勢力の情報、潜入先の地図、軍隊の動向、流布している噂、等々。諜報術に優れた者でも、その全てを一人で調べるなど不可能。
　大陸一の情報屋グジャラに『支払い能力を失った』と縁を切られるか否かが、死活問題だったのだ。
「あんたがサービスしてくれたから、こっちもオマケをつけよう」
　そう言ってグジャラは、部屋の奥の戸棚から木箱を取り出して来た。テーブルの上に置き、蓋を開ける。
「表の商売の最近の売れ筋だ。商品名は『戦士の矛』」
　小さな三角形の紙の包みが、箱の中に整然と並んでいる。その一つを指先でつまんで、グジャラは相手に投げつけた。
「興奮剤の一種だ。飲めば、一時的に筋力が増強し、痛覚を失い、死の恐怖を忘れる」
　白髪の男は、掌のモノを冷ややかに見つめる。
「その手のモノに興味はない。一時的な能力の向上など、体を痛めつけるだけじゃ」
「その通りだ。中毒性も高い。俺は使わん。だが、大魔王教徒は、これのお得意様だ。箱買いをしていく」
「ほう」
「あいつらは未来など求めていない。今さえ良ければ満足なのさ。だから、これを使う」
「なるほど。狂信者どもが『戦士の矛』を愛飲しておるのか。戦うには、ちと面倒そうじゃな。これは有難く貰っておく。色や匂いを覚えたい」

白子は立ち上がり、革袋の口を開け、貰ったモノをしまう。その背に、グジャラは尋ねた。
「なあ、ジライ、商売半分、友情半分で聞くが……うまい事、『ウズベル』に意趣返しできたとして、その後、あんた、どうするんだ?」
「さあな」
「インディラに居りゃ、東国の忍の里の奴等も、そうそう手出しできない。ここはインディラ忍者の庭だからな。下手に動けば、全面戦争だ。ンな馬鹿な事は、あの頭はやらねえ。けど、この国を出たら追い忍がつくぜ」
「うむ」
「なあ、インディラで、王宮にでも雇ってもらったらどうだ?なんなら、紹介状、書くぜ」
「……先の事など、どうでもよい。生きて帰れるとも限らんし、な」
「まあ、そうなんだが……必要になったら言ってくれ。たいていの組織に、俺は顔がきく」
「……ずいぶん親切じゃな、グジャラ」
「俺はあんたに惚れてるからな」
そう言って近づいて来た者を、東国忍者は拒まなかった。口づけを許し、体に触れる事を許す。
「きさま、匿ってくれぬのだろ?これ以上、犯ると我を泊める事になるぞ」
「あんたの情報を売るのは明日だ。今日は客としてもてなしてやる」
「なら、食事と風呂もよこせ」
「後でな」
「麻薬も媚薬も要らぬ。食事に入れたら、殺すぞ」
「おっかねえなあ、あんたは……」

それは女勇者が、ウッダルプルを訪れる半月前の事だった。

黄昏の河　2話

赤毛の戦士アジャンは、あっけにとられていた。
女勇者の従者になってからいろいろとあっけにとられてきたが、今回のはなかなか強烈だった。
今、勇者一行は、インディラ王宮の謁見の間で国王と対面していた。国王の前に（玉座からかなり離れた位置だが）、まるで家臣のように跪いて座っているのだ。
豪奢で壮大な謁見の間。部屋の中央には赤い絨毯が走っており、左右にずらーっと貴族が並んでいるのも威圧的だ。その部屋の最奥に天蓋つきの玉座があった。周囲を近衛兵が固め、国王に風を送る側仕えが優雅に孔雀の羽の扇子を扇いでいる。
で、その玉座の国王なのだが……
ターバンまでを白で統一したチュニック姿。あまり華美な装飾は好まないようで、宝石はほとんど身につけていない。ターバンから漏れる髪と口髭は黒く、外見から察するに年齢は四十代前半ぐらいだろう。
赤毛の傭兵は上目づかいに国王を盗み見るのをやめ、自分の斜め前に座っている人物に目をやった。しかし、僧衣のその者は澄ました顔をつくっており、その表情から内面を伺う事はできなかった。
ならば、と、セレスを見てみる。白銀の鎧姿の女勇者は、国王に、この国での活動の自由を願い、魔族と大魔王教徒の情報を求めている。顔をあげているので、国王を見ているはずなのだが、まったく動揺していない。普段通りだ。
（こいつ……国王の顔を見てねえのか？お姫様は相手の顔をじろじろ見ねえってか？けど、気づくだろ、普通は。ったく、呆れるほど鈍い女だ……）
国王は女勇者に、活動の自由を保証し、情報の公開を約束した。
ウッダルプル滞在中は王宮に宿泊するよう伝え、女勇者に下がるよ

う命じる。
　謁見中、国王は、一度も自国から勇者の従者になった人物に声をかけなかった。労いの言葉もなく、挨拶すらなく、その名を呼ぶことすらしなかったのだ。

「おい、ナーダ、ちょっと待って」
　足早に廊下を歩いていた武闘僧が立ち止まり、振り返る。内面を隠そうともしない、不機嫌そうな顔で。
「何か用ですか、アジャン？」
「用もくそもねえ、おまえ、王族だったのか？」
　ナーダはアジャンの背後へと視線を向けた。セレスやシャオロンがついて来ていないか確認したのだ。
　セレスはシャオロンと共に、彼女用の豪奢な部屋で落ち着いている。アジャンとシャオロンの部屋も、護衛しやすいようにと、その続きに準備されていた。しかし、ナーダの為の部屋はなかったのだ。
『大僧正候補様は寺院にご宿泊にございましょう？ウッダルプル支部は、王宮より、歩いても一時間ほどの距離。それとも、馬車をご用意いたしましょうか？』
　と、にこやかな顔をつくりながら、侍女は嘲るように武闘僧を見つめていた。
　馬車を断り、『明日、又、来ます』と言って武闘僧はセレスと別れ、一人、猛烈な勢いで廊下を歩いていたのだ。それを、赤毛の傭兵が呼び止めたわけなのだが……
「ここで話すと、何もかも筒抜けですよ。もっとも、インディラに居る限り、私の周囲には監視役やら護衛役やらで忍者がごまんとつきますけどね」
「おまえ、国王の弟なのか？」
　アジャンの問いに、ナーダは口元を歪め、冷めた笑みをつくった。
「まあ、そう考えるのが普通でしょうね」

糸目を更に細め、皮肉な笑みを浮かべる武闘僧。その様子から、アジャンは思い違いをしていた事に気づけた。
「……国王の息子なのか？」
「顔、見ればわかるでしょ？」
ナーダは肩をすくめた。
「私は現国王が十代の頃に生まれましたのでね、兄弟でも通る年の差です」
「……瓜二つだったな。国王はおまえみたいにバカでかくないし、年くってるが、そっくりだった。おまえに髪と髭がありゃ、ますます似る。同じ糸目だし」
ナーダは溜息をついた。
「だから、王宮にはあまり来たくなかったんですよ、あなた方にうるさく騒がれるのが嫌だったんです」
「けど、セレスは気づいてないぞ」
「え？」
「多分、シャオロンも。馬鹿正直にずっと頭を下げてたから、国王の顔、まともに見てねえな、あれは」
「……そうですか。あの二人が鈍くて、たいへん嬉しく思います。私が誰に似ていようが、どうでもいい事です。世俗なぞ、私にはもはや縁のないものなのですから」
「だが、おまえ、国王の実子なんだろ？何で坊主なんてやってるんだ？」
「ありふれた理由です。説明なんかしなくても、わかるでしょ？」
「……まあ、だいたい、な」
「なら、それで充分でしょ。私は七つの時、亡き母の勧めで、王宮を捨て、清らかな信仰の道を選びました。王位継承権を放棄して、心安らかな日々を手に入れたのです。王族だった事など、もう忘れましたよ」
「ふん」
赤毛の傭兵は面白くなさそうに、顔を歪めていた。

「王子様から上級僧か……なるほど、ね。おまえが貨幣単位とか、下々の事を知らなかったのも、当然か」
「昔の事を持ち出さないでください。覚えましたよ、小銭の数え方くらいは」
「七つで王宮を追われたか……ふぅん、七つで、か」
「……アジャン、頼みますから、その話、やめてくれませんか？王宮での事は、もはや過ぎ去った過去なのですから」
「なあ」
赤毛の戦士は睨むかのように、武闘僧を見つめていた。
「おまえ、不幸に酔いしれてるだろ？」
「は？」
「世の中の不幸を全部しょいこんだような顔しやがって……気に喰わん、見てるだけでムカついてくる。実の父には無視され、召使の女にさえ馬鹿にされ、王宮中がおまえの敵。確かにおかわいそうかもしれねえが……」
「……」
「王族から上級僧だぁ？結構なご身分じゃねえか！え？」
「……」
「おまえより不幸な人間なんて掃いて捨てるほどいる！おまえ、食うものも食えず、寝る場所もなく彷徨った事ねえだろ？たった一つのパンのために殺されかけた事も、ただの風邪で死んでしまう肉親も見た事もなく、臭くて暗い貧民窟にすら居場所のないみじめさも知らねえ……」
「……」
「ピカピカの御殿から、インディラ教の頂点の総本山に移って、バカ僧侶どもにちやほやされてたんだろ？なぁにが、かわいそうな元王子様だ！アホらしい！」
武闘僧は静かな瞳で、赤毛の傭兵を見つめ返した。
「……そうですね、多分、私は不幸な子供時代を送ったわけではないのでしょうね」

「ったりまえだ」
「毎日のように暗殺者に狙われ、食事に毒を盛られ、国王の夫人や召使達の誹謗中傷の的にされていましたけれど、ね。忠義の部下が持って来てくれる飲食物以外は口にできず、痩せ衰えた私は歩く事すらままならなくなり、心労のあまり病床に就いた母は医者にも診てもらえず亡くなりました。でも、きっと、私は幸せだったんでしょう！」
「おい、ナーダ……」
「昔の話はもうしたくありません！ここにも居たくありません！しかし……戻っては来ますよ、明日には、ちゃんとセレスの元へ。寺院で情報収集をして、座禅でも組んで少し心を落ち着けてきます。私の敵は大魔王ケルベゾールドと魔族です。王宮の人間ではありません。そんな事はわかっています。でも、どうにも修行が足りなくて……」
ナーダは己の右の拳を左の拳で受け止めた。
「ここに居ると心が乱れるのですよ」
再び歩き始めたナーダ。その背に向かい、アジャンは、声をかけた。
「ナーダ」
振り返った相手に、赤毛の傭兵は彼にしては珍しく頭を下げた。
「すまん。調子に乗って言い過ぎた」
それに対し、武闘僧は、
「構いませんよ、不幸自慢なら、多分、生まれも育ちも非常に高貴な私では、七つの年から苦労なさったあなたにかなわないでしょうし」
と、いつもの通り言わなくても良い事まで言ってから、
「気にしていません。だから、あなたも忘れてください」
と、言って手を振る。
「王宮での情報収集は任せましたよ」
「ああ」

ナーダが近づくと、王宮の召使達は露骨に進路を変え彼から離れてゆく。その孤独な背を、赤毛の傭兵は見送った。

「ナーダ様！」
「おお、ナーダ様だ！」
「ナーダ様がインディラに戻られたぞ！」
ナーダがインディラ寺院ウッダルプル支部に足を踏み入れてじきに、蜂の巣をつっついたような騒ぎとなった。あらゆる建物から僧侶達が現れ、勤行や参詣者への説法を放り出し、ナーダの元へと走る。
「あちらにおられるのが、大僧正候補様じゃ」
「おお、ありがたや、ありがたや」
と、参詣者達も遠巻きにナーダに対し拝礼している。
僧侶達が後から後から押し寄せる騒ぎの中、ナーダは僧侶達に勤めに戻るよう諭し、苦笑を浮かべていた。
しかし、内心は喜んでいた。門付近の祠より奥は、異教徒や女人は立ち入りを禁じられている。僧侶はむろん、参詣者も男ばかりだ。ナーダは心洗われる思いで、周囲を見渡した。彼等の純粋な敬意（と、愛情）は王宮でささくれだった心を充分すぎるほど癒してくれる。
「ジャガナート僧正様にお会いしたいのですが」
ナーダがそう言うと、ご案内します！私が！私が！と、僧侶達は色めきだった。
「大丈夫です。ウッダプルプル寺院支部で半年、ジャガナート僧正様のお教えを学んだ事がありますから、ここの造りは知っています」
では、先触れをいたします！お部屋まで侍僧としてお供いたします！いや、私が！いやいや、私が代わりに！
と、次々に名乗り出る僧侶達をナーダはにこやかに見つめた。寺院はまさにこの世の極楽。慕ってくれる僧侶は、十代から年配者ま

で。恋の相手もよりどりみどり。アジャンは同情してくれたようだが、きらびやかな王宮に、ナーダは爪の垢ほども未練はなかった。

「ナーダ様、よくぞご無事に戻られた」

ウッダルプル支部の僧正ジャガナートは、恰幅のいい体を豪快に揺らして、地が震えるほどの大声で笑った。六十を超えた今でこそインディラ一の武闘僧の座をナーダに譲っていたが、逞しい筋肉で全身を覆う、その姿は、現役の拳闘士のようだ。

ナーダは一時期拳法の師であった僧正に、恭しく礼をとった。

「ジャガナート僧正様もお変わりなく、お元気そうで何よりでございます」

「おお、わしは病に縁のない男ですからな」

僧正は、ムキムキの筋肉を誇示するようなポーズをとった。上級僧の衣が無ければ僧侶には見えないし、老いも微塵もうかがえない。

自分の侍僧とナーダのお供を自称してついてきた僧侶達を下がらせてから、ジャガナートは上座の円座についた。次期大僧正候補ではあるものの、現在は無位でジャガナートの弟子でもあったナーダは、向かい合う形で下座に座る。

「ナーダ様、少しおやつれになったのではありませぬか？」

「そのように見えますか？」

「見えますな。女勇者にくっついての旅、さぞや難儀でありましたでしょう。女の下で……九カ月でしたかな？こきつかわれたあげく、未だに大魔王の本拠地もつかめない。その上、王宮に挨拶に参られたとあっては、さぞや欲求不満をためておられるはず。さ、さ、遠慮なさらず、早う、総本山の大僧正様の元に泣きつきに行かれるがいい」

と、ジャガナートはガハハと笑う。

他の誰かに同じ事を言われれば、ナーダはカチンときて、二倍も三倍も侮辱の仕返しをするだろう。けれども、拳法の師の性格を熟

知しているナーダは、わざと怒らせようとしている相手の手にはのらず、にっこりと笑みを浮かべた。
「滞在中、一度は、大僧正様の元へご報告に訪れようとは思っています。しかし、先に為すべき事をきちんと為しますよ。しばらくは、ウッダルプルで女勇者様の従者として働きます」
「ほうほう、大人になられましたなあ、ナーダ様」
「ありがとうございます。それで、少々、お伺いしたいのですが……『ウズベル』について何かわかりましたでしょうか？」
「ウズベル……大魔王四天王の一人との事でしたな」
緊急連絡手段（荷物に携帯している魔法道具（マジック・アイテム）の神像。それを手にして呪文を唱えると、同じ造りの神像を持つ者と心話で話せる）を用いて、ナーダは拳法の師に、シャイナの荒野での大魔王四天王サリエルとの戦闘の顛末を伝えていた。
「インディラに居ると、サリエルに憑依されていた男が言っておりましたが」
「わしも、国中の寺院と連絡をとり、忍の者を使って、あれこれ調べさせたのですが……」
ジャガナート僧正の顔がしぶいものとなる。
「正直、報告できるような事はありませんな。あまりにも動きがなさすぎて」
僧正は腕を組んだ。
「数百といたこの地に現れた穢れたものどもは、全て浄化しました。大魔王教徒どもの三回の反乱も、軍隊に制圧されましたし。神のご加護のままに、インディラは平穏そのもの。わしの目の届く限りにおいては……ですがな」
文書にしたものをナーダの部下ガルバに託した、他情報とあわせてまとめてじきに持ってくるだろうと、僧正は言う。ジャガナートはナーダの非公式な部下の存在を知る数少ない上級僧だ。
幼いナーダとその母を暗殺者から守ったのが、忍者ガルバとガルバに乞われて寺院付き忍者を貸与したジャガナートであった（当時

はウッダルプル寺院副僧正だった）。ジャガナートは、僧侶ナラカの友人で、忍者ガルバとも昔から懇意なのだ。

「それで、ですな……こちらからお尋ねしたいのですが、王宮はいかがでしたかな？」

「あいも変わらず胸くそ悪い場所でしたね」

ナーダの僧侶にあるまじき発言を、僧正は咎めず、豪快に笑って首を左右に振った。

「それはもう、よくわかっておること。そうではなく、魔族が巣食っている感じはなかったかと伺いたい」

「魔族が王宮に？」

「居てもおかしくはない。あそこと寺院は、ナーダ様のご出家以後、二十二年に渡り不仲ですからな。宗教儀式でもない限り、僧侶はほとんど出入りせん。大魔王復活直後は、王宮へも魔族を浄化をしに赴いたものだが……その後は出入り不要と門前払いされております。魔族が巣食うにはもってこいの場所でしょう」

「……」

「ずっと疑わしく思っておりましたが、わしの配下では内部を探れませんでなあ、王宮付き忍者軍団がてごわすぎて……そこへ、ナーダ様、あなたがいらっしゃった。女勇者の従者としてあそこに出入りできるあなたが現れた事こそ、神の御采配。内部を探ってはくれませぬか？」

「私に間諜をやれと？」

「ナーダ様からの報告通りウズベルとやらが『新たな魔人を造る』役目を担っておるのなら、インディラの何処かに魔人製造工房があるはず。収集した死体をしばらく保管しておく為のそれなりの設備も要る。ならば、ある程度の広さも必要。と、なると、王宮はまさにうってつけではありませぬか？僧侶の目の届かぬ、広い場所なのですからな」

ナーダは師の推理を拝聴していた。

ジャガナート僧正は腕自慢なだけでなく、（見かけによらず）知

恵者で老獪な人物なのだ。王宮の睨みが強いウッダルプルで、寺院が勢力をそがれずにすんでいるのも、彼の功績なのだ。

「上位魔族の中には黒の気を消せる者も居りますし、目くらましも使っておるでしょう。気で探るより、直接、目で探られた方がよい。森やら離宮やら後宮やら、探らねばならぬ所はごまんとありますが」

「ジャガナート様……まさか、後宮まで覗いて来いとは、そこまではおっしゃいませんよね？今の私が後宮に足を踏み入れたら、死罪ですよ」

「どこを調べるかは、ナーダ様にお任せします」

僧正はにやにや笑っている。

「大僧正候補のあなた様から見てあやしい場所を、ぜひ」

面白がって弟子をからかっているのだ。

ナーダは嘆息した。

「仕方ありません……引き受けましょう」

「おお、さすがはナーダ様」

「ですが、捕縛されたら、ジャガナート様のご命令だってバラしますからね。一緒に縄についてくださいよ」

「一蓮托生か！よいでしょう。探ってもらえるのなら、何とでも。どう考えても一番あやしいアソコを探れず、いらいらしておったのです。中で妙な事件も起きておるようですし」

「事件？」

「事件に関しての報告ならばいっぱいあがっておりましてな、お話できます。あれは、昨年の五月、ナーダ様が女勇者の従者となられてから一カ月と少し経った頃……」

セレスは手にしていた紙を素早く折り畳んで、左の掌の中に隠した。ぶつぶつと文句を言いながら、赤毛の傭兵が近づいて来たからだ。

「ったく、いけ好かねえ宮殿だぜ」

女勇者の為に準備された部屋に、セレスとシャオロンしか居ないのをすばやく見とってから、アジャンは吠えた。
「通行禁止！公開禁止！異教徒との会話は禁止！禁止！禁止！何でもかんでも禁止だ！三カ月前までの古い情報しかない報告書を貰って、どうしろって言うんだ！」
「今、最新の情報を頼んでるから、じきに」
「じきぃ？何時だ？一週間後か？一か月後か？ンなもの待ってたら、大魔王にこの大陸は乗っ取られちまうだろうよ！」
「アジャン、落ち着いて。明日にはナーダが戻って来るわ。寺院なら、この国について、もっと詳しい情報があると思うの。だから……」
「ケッ！」
「ねえ、気晴らしに娼館にでも行って来たら？」
赤毛の傭兵はぎょっと眼を開き、女勇者を見つめた。
「何だって？」
「えっと、そのぉ……ここに居て、ストレスためても、しょうがないし……街に情報収集がてら出かけるのがいいんじゃないかしら？」
セレスは、しどろもどろに焦っている。
赤毛の傭兵は顔の左半分を歪め、女勇者を括目した。
「へぇぇぇぇ。お珍しい事もあるもんだ。俺の娼館通いを煙たがっていたお姫様が、娼館に行けだと？何をたくらんでいやがる？」
「あら、いやねえ、何もたくらんでないわよ。娼館じゃなきゃ、酒場でもいいわ。ストレス発散さえしてくれれば」
「酒場だぁ？」
アジャンは大声をあげた。
「馬鹿か、おまえ！インディラにまっとうな酒場なんかあるか！」
「え？」
「インディラじゃ、おおっぴらに酒を販売してないんだよ。食いもの屋に行けばメニューにゃあるが、別室に隔離されて、野郎同士、

面(つら)をつき合わせてこそこそ隠れ飲まにゃいかん。女抜きで酒飲んで何が楽しい！」

「そうなの？」

「ああ！ちくしょう！だから、俺は今までトゥルクまでの仕事しか受けなかったんだ！ペリシャ教が国教でもトゥルクはいい加減な国柄で、旅人をあてこんだ酒場もいっぱいあるが……ペリシャでは酒は罪悪……で、インディラでは建前上は制約が無いが、実際は飲酒禁止だ！やってられっか！ったく！」

「お酒が駄目なら……やっぱり、娼館かしら」

セレスは愛想笑いを浮かべた。

「ねえ、娼館に行って来なさいよ。それがいいわよ。ね？」

赤毛の傭兵はフンと鼻で笑った。

「……わかった、そこまで言うのなら行ってやる」

「それがいいわ！」

「ただし！夕方には帰って来る」

「え？そんなに早く？」

アジャンは、じろりとセレスを睨んだ。

「今日はクソ坊主が居ないからな、シャオロンだけに護衛を押し付けるわけにはいかん」

気にしないでくださいと言う少年を手で制し、アジャンはセレスにびしっ！と指をさした。

「俺が居ないからってフラフラするなよ。この国のどっかに、大魔王四天王が居るんだろ？大人しくしてろよ、いいな？」

「て、アジャンさんが言ってたのに……いいんですかセレス様、王宮を離れちゃって」

不安そうに尋ねる少年に、セレスは微笑みを見せた。

「仕方ないわ。急用ができたんですもの」

女勇者も東国の少年も、変装用にフードマントを目深に被り、ウ

ッダルプルの街を馬で進んでいた。
セレスは王宮に『勇者の剣』を置いてきており、白銀の神聖鎧も身につけていない。シャツとズボン姿で、腰に『虹の小剣』を差し、『エルフの弓』と『エルフの矢筒』を背負っている。
シャオロンは道着姿で、『龍の爪』を革袋にしまって背負っている。装備するのに時間がかかるが、人ごみの中で長い爪を剥き出しにはできない。
セレスは街の地図を持ってきてはいたが、まったく見ていない。見る必要もないのだ。ウッダルプルの街路は整然と整備されているし、目的地の建物があまりにも巨大で街並みに埋もれないのだから、迷いようもない。
「大きいですねえ」
シャオロンが素直な感想を口にする。
インディラ寺院ウッダルプル支部。森と神殿からなるその寺院は、王宮に匹敵する広さだった。
本殿以外にも大小の建築物が塀越しに見える。そのどれにも、壁面や外装にびっしりと彫刻が彫られている。古来からこの地に伝わる神話、神々、天地創造の図、始祖バラシンの一生、聖人と称えられる僧侶の偉業など。聖なるもので聖域を隙間なく埋め尽くそうとしているかのように、どこを見ても精緻なレリーフがいっぱいだ。
寺院の正門のある通りには、かなり遠くから露天が並んでいた。花輪や香、果物、菓子などの供物や、蝋燭などの儀礼道具、魔法道具などを扱う店ばかりだ。通りを行き交うインディラ人のほとんどが参詣者で、皆、正門をくぐってゆく。
「ペクンのより大きいですよ」
すごいなあ、上には上があるんだ、と、素直に感心するシャオロン。
その目前に、白い封筒が差しだされる。
「はい」
「え？」

「これ、ナーダに届けて来て」
「え？え？え？」
シャオロンは受け取ったものと、セレスの顔を見比べた。
「今すぐ……ですか？」
「ええ。今すぐ」
「けど、ナーダ様、おっしゃってましたよ、ここ、異教徒は門の辺りまでしか入れないって」
「でも、あなたは男だし、ペクンで、ナーダのお供で寺院の中にも入ったんでしょ？私よりずっと、寺院に詳しいはずだわ。お願い」
セレスは手を合わせた。
「急用なの。これをナーダに直接、渡して欲しいのよ」
「……」
シャオロンは困ったように、セレスを見つめた。
「だけど、セレス様をお一人にするわけにはいきません。オレ、護衛役ですから」
「あら、大丈夫よ」
セレスはにっこりと笑みを浮かべた。
「私、この辺で待ってるから。寺院の門前では、暗殺者も大魔王教徒も仕掛けてこないわよ。少しでも騒ぎが起きたら、中から逞しい武闘僧がいっぱい駈けつけて来るんですもの。こんな所で、敵も戦いたくないはずだわ」
「……でも」
「大丈夫。何かあったら王宮へ戻っているわ。私の姿が見当たらなかったら、王宮に向かってね」
シャオロンが何を言おうが、セレスは聞き入れてくれない。
根負けし、東国の少年は手綱をとった。
「オレ、すぐ戻って来ますから。セレス様、絶対、ここに居てくださいね！」
寺院の正門からで馬で入る事はできないし、入った所で異教徒（シャイナ教徒）のシャオロンが行ける場所は限られている。僧侶専

用の裏門に回り、事情を説明した方が良い。シャオロンは塀沿いに正門とは反対の方角へと、馬を走らせて行った。

シャオロンの姿が小さくなってから、セレスはすまなそうにポツリと呟いた。

「ごめんなさいね、シャオロン」

そして、馬を脇道へ向け、寺院の前から走り去ってゆく。

その後を、赤髪の男が騎乗で追いかけて来ている事にも気づかずに。

黄昏の河　3話

女勇者が向かった先は、寺院の西側の河畔だった。寺院を訪れる為に沐浴する人々で賑わう河べりにそい、樹木や草の茂みが風にそよぐ涼しげな緑の中をセレスは騎乗で進む。

寺院正門に通じる道から離れるにつれ、河で身を清める参拝者は減ってゆく。河には大小の渡しの舟、漁船が見えた。

セレスはシャツのポケットより小さな紙を取り出して目を通し、河へと向かった。

赤・青・黄の旗を吊るした、渡しの小舟がゆらゆらと水面に揺れていた。営業中の看板をひっくり返し、船尾を岸に繋ぎ、漕ぎ手は舟の上で昼寝をしている。積み上げた干し草の山によりかかって、フードマントを目深に被って顔を隠して。

セレスは下馬し、その小舟に近づいて行った。

「こんにちは」

共通語で話しかけると、

「今、やってねえよ」と、現地語で返される。

セレスは、つたないインディラ語で話しかけた。

「謎、知る、したい。東、来た、男、紹介。グジャラ、行く、したい」

「誰の紹介だって？」

「ジライ」

そこで、沈黙が訪れた。

しばし経ってから、セレスの耳に忍び笑いが聞こえてきた。

「インディラ語はあまりお上手ではありませぬな。無理に話されぬ方がよい」

聞き覚えのある低い声だった。

「ジライ！忍者ジライね！」

セレスは身を乗り出し、小舟の男を覗きこんだ。しかし、フード

マントに隠れて、相手の顔は全く見えない。
女勇者の顔に笑みが浮かんだ。
「良かったわ、無事で……私、心配してたのよ」
「命を狙っていた男の心配とは……あいかわらず甘いお方だ」
相手にも見えるように、セレスは小さな紙を右手に持った。
「シャツを着替えようと思ったら、あなたからの手紙が出てきて、びっくりしたのよ、私。ねえ、いつ、手紙をくれたの？」
「昨夜の宿屋にて。王宮に入られてからでは、我といえども、あなたと連絡をとるのは難しい……あそこは王宮付き忍者が山のように居る。命が幾つあっても足りぬ」
「それで、この手紙なんだけど、どういう意味？謎って魔族の事？グジャラの店って何？」
「金は持って来られたか？」
「ええ。指示通り百万ほど」
「ならば、左手の下の赤い袋を取られるがいい」
舟の上の男は、左手の肘で赤い袋の紐を踏んでいた。しかし、引っ張ると、抵抗なく、紐は肘の下から取れた。袋を開けてみると、半欠けの古い銅貨と地図が入っていた。
「そこに大陸一（いち）の情報屋が居る。銅貨はその店の会員証。ただし、あなたにお渡ししたのは一回限りの物だ。店の入口で見せられよ。金さえ積めば、そこで、大魔王教徒についても、魔族についても教えてもらえる」
「ありがとう、ジライ。助かるわ。でも、どうして敵だった私に親切にしてくれるの？」
ジライはフフフと笑った。
「むろん、下心があるからに決まっておる」
「そうなの？」
「あなた方が大魔王教徒を相手に大立ち回りをしてくれると、都合が良いのだ」
「あ、……そうね。私達、今、共通の敵と敵対しているんですも

のね。あなた、ウズベルを倒すんでしょ？」
「機会があれば、な」
セレスは赤い袋を握りしめた。
「ねえ、ジライ……前にも言ったけど、一緒に戦わない？あなたが強いのはよく知っているけれど、相手は魔族よ。力を合わせた方がいいと思うの」
「あなたと共に戦うつもりはないが……勧誘（ナンパ）ならば足並み揃えてからなされるがよい」
「え？」
「右斜め後方……赤毛の傭兵が居る」
セレスは驚いて振り返った。
沐浴に訪れた人々。川べりの草木。その後方にインディラ寺院の回廊が見える。
「あ！」
寺院近くの樹木に馬が繋がれている。傭兵の乗馬だ。
「バレちまったんなら、隠れる意味はねえな」
セレスのすぐそばの草むらから、赤毛の傭兵が現れる。背に大剣を背負い、『聖王の剣』を佩（は）いた、いつもの姿で。
「アジャン……どうして？」
セレスの問いには答えず、赤毛の戦士は背の大剣を抜き、小舟の上の人物にその切っ先を向けた。
「アジャン！」
「どういうつもりだ、え、暗殺者！世間知らずの馬鹿女を呼び出して、じっくり料理しようってのか？あん？」
「やめて、アジャン！もう彼は敵じゃないのよ！」
「暗殺者が一度引き受けた仕事を、途中で放り出すものか！嫌になったってやめられねえのさ、金を貰っている以上な！」
アジャンが怒鳴ると、高らかな笑い声が応じた。
「その通りだ。仕事を受けた以上、女勇者を殺さねば、忍の里は面目をつぶす。暗殺実行者の我は、首を刎ねて詫びても決して許され

んであろう」
「死ぬなら、今、死ね！クソ忍者！」
小舟の上の者の頭を狙い、赤毛の傭兵が大剣を振り下ろす。刃は肉にも骨にも達さず、フードマントだけが切り裂かれる。
フードの下から現れたのは、寝ぼけ眼の、黒髪、浅黒い肌の髭もじゃのインディラ人だった。見るからに、貧しい労働者階級だ。目の焦点が合った男は、ぎょっと眼を見開き、ぶるぶると震えだした。
「お助けを……おら、金なんかねえよ」
と、現地語で命乞いをする。
「忍者ジライ、てめえ、変装か！くだらねえ芝居しやがって！」
だが、赤毛の傭兵の炯眼に、小舟の男は怯えるばかり。
再び高らかな笑い声が響いた。
「そやつを離してやれ。それは、ただの渡し守りだ」
「ジライ！何処だ！」
赤毛の傭兵と女勇者は周囲を見渡した。が、それらしい人間は見当たらない。
「女勇者セレス殿、グジャラの店へは一人で行かれた方が良いが……こうとなっては、赤毛の傭兵も引くまい。お二人とも、グジャラの店では、おとなしゅう頼むぞ。我の顔を潰さぬように、な」
そこで、ドボン！と何か重い物が水中に沈んだ音がした。赤毛の傭兵は大剣を背に戻し、小舟に足をかけ、川を覗きこんだ。しかし、泳ぐ者の姿は見当たらない。
「くそ！小舟の脇にはりついていやがったのか！」
悔しさを込め拳を叩く。
赤毛の傭兵は小舟の男をギロリと睨むと、邪魔したな、と、小銭を投げて舟より降りる。次に緑の瞳が睨みつけたのは、女勇者だった。無言のままセレスに近寄り、彼女の手より忍者からの手紙を奪う。
「『女勇者セレス殿、この国の謎が知りたくば、百万ゴールドを持って、下記の場所の赤・青・黄の旗が目印の小舟まで来られたし。

グジャラの店に案内する。×日より三日、正午より日没まで待つ。忍者ジライ』……か」

アジャンは手の中のモノをくしゃっと握り潰した。

「セレス、何で、この手紙の事を俺に言わなかった？」

「だって……」

セレスは言いよどんだ。

「……言えば、あなた、行くなって反対するでしょ？」

「ったりまえだ！」

アジャンはセレスに迫った。

「俺は傭兵だ！だから、くそ忌々しい馬鹿女のおまえを守ってやってるんじゃねえか！おまえ、俺を何だと思ってるんだ？」

「アジャン、ねえ、もう何度も言ったでしょ？忍者ジライには私を殺す気はないわ。少なくとも、今はね。ウズベルを倒すまで、彼の眼中に私なんて無いのよ」

「クソ忍者のことなんざ、どうでもいい！俺が、おまえに聞きたいのは、俺とおまえの契約についてだ！」

「契約？」

「警告だ、セレス、二度と俺に嘘をつくな。護衛対象が死地に赴くと言うのなら、俺は止める。止めてもきかなきゃ考える、そいつについて行って守ってやるか、契約を破棄して別れるか、な。俺に選択権を一切与えず、好き勝手やってるおまえを『ただ守れ』って命令するんなら……俺は降りる。女勇者護衛はここまでだ」

「アジャン……」

セレスは大柄な戦士を見上げた。激しい怒りに歪むその顔を見て……初めて気づいた、自分の軽率な行動が赤毛の傭兵の誇りを深く傷つけたのだ、と。

「ごめんなさい……もう、二度と、仲間に無断で勝手な事はしないわ。だから、許して。従者をやめるなんて言わないで、お願い……」

「もう隠し事はしないな？」

「ええ、絶対しない。誓うわ」
赤毛の傭兵はフンと鼻を鳴らした。
「わかりゃいいんだよ、お姫様。俺としても、ここでおまえと別れたくない」
「アジャン……」
「この仕事、成功報酬がほとんどだからな、今、降りたら実入りが少ない」
セレスの体から、がくっと力が抜ける。ほんの少し傭兵を見直したのに……やはり正義の志など欠片もない拝金主義者なのだ、この男は。
「で、おまえ、次に何処へ行く気なんだって？」
「ここよ」
セレスは赤い袋から出した地図を見せた。
「ここに大陸一の情報屋がいるんですって」
「情報屋グジャラか……」
「知ってるの？」
「噂で、な。敵味方の両陣営に情報を流す蝙蝠野郎だって、トゥルクの傭兵長が蛇蠍（だかつ）のごとく嫌ってたんで覚えてる」
「その情報屋の所へ行きたいんだけど……」
セレスはためらいがちに尋ねた。
「一緒に行ってくれる？」
赤毛の傭兵はぼりぼりと頭を掻き、溜息をついた。
「俺の指示に従うって約束するんならな……護衛してやってもいい」
セレスの顔がパッと輝く。
「ええ！ありがとう、アジャン！」

女勇者と赤毛の傭兵が立ち去った後、小舟の中で動きがあった。渡し守が枕代わりにしていた干し草の中から人間が出て来たのだ。

黒髪、浅黒い肌、シャツと腰布姿。現地人のようだが、顔の造りは灰汁（あく）の強いインディラ人とは一線を画していた。
その者が現れても、渡し守はただ呆としていた。
現れた者が右手を開いてみせ、
「解呪」
と、言うと、ようやく渡し守りは長い眠りから覚めたように、目をしばたたかせた。自分は何故ここに居て、何をしていたのだろう？と、問いたげな顔だ。
「渡し賃だ」
干し草の中から現れた者は小銭を投げ、舟から降りた。
それは現地人に変装した……忍者ジライだった。ずっと干し草の中に潜んでいたのだ。赤毛の傭兵が聞いた水音は石が河に沈む音……干し草で隠す形で船首に紐で縛った石を吊るしておき、その紐を切って石を水中に落としたのだ。
渡し守を傀儡の邪法で操って自分の役に仕立てた上に、その工作を見破られた場合を想定して水に潜んでいたかと思わせる偽装も準備していたのだ。
「さて、急がねば」
木の下まで走り、素早い体術で姿を消す。
女勇者にオマケがついて来る事をグジャラに知らせねば、あの二人は店には入れず、門前払いをされる。グジャラの店は会員制だ。一回限りの一人用の会員証しか無いあの二人を、門番が通すはずがない。
インディラ寺院の屋根の上を突っ切れば、馬で行くセレス達よりも早くグジャラの店に着ける。しかし、寺院付き忍者を下手に刺激するのは危険だ。多少、遠回りになっても、寺院の外を進むしかない。
（何としても、女勇者には餌にくらいついてもらわねばな……）

裏道に続く白の土壁。そこに、窓のようにぽっかりと穴が開いている。その前に立っていた男は、金を渡して中から紙の包みをもらうと、人目を避けるようにそそくさと走り去って行った。

赤毛の傭兵は、そこが何を売っている店なのかを察した。そして、侯爵令嬢をジロリと睨む。

「いいか、セレス。グジャラの店で出される飲食物は一切、口をつけるな。それから、俺が合図したら、息を止めて鼻や口を布で押さえろ」

「どうして？」

「ここが、インディラで酒場の代わりに公認されている特殊な店だから、だ」

「特殊な店？」

「魔薬屋だ。麻薬、媚薬、興奮剤、しびれ薬、眠り薬、自白剤、成長抑制剤、何でもござれのあくどい店だ。建前上、毒薬は扱ってないが、ま、建前だな、調合次第でどうとでもなる」

「麻薬だなんて……何で、そんな物が……」

「インディラじゃ、麻薬は公認されてるんだ」

「嘘！」

「嘘じゃねえよ。医療用って名目だがな。よその国でも医者が痛み止めとして麻薬を使用している。けど、インディラじゃ、医者じゃなくても買える。金さえ払えば誰でも買えるのさ、そこが他国とは違う」

「そんなお店に、情報屋がいるの？」

「居るんだろ？おまえのお友達がそう言ってるんだから」

入口で、思いの外、時間がかかった。

店の男がセレス一人しか通せないと言い張ったからだ。ジライから渡された半欠けの銅貨は店の会員証だったが、あくまで一人用。従者は中に入れないと言うのだ。

しびれを切らした傭兵が背の大剣を抜き、その強面で店の男を恫喝した。セレスは慌てて傭兵を押さえ、ジライの紹介である事を強調し、二人で通る許可を貰えないかグジャラに直接尋ねて欲しいと頼んだ。

男は店の奥へと消え、そのままかなり待たされたが、二人揃って入って良いという許可が下りた。

乗馬を店に預け、二人は魔薬屋の奥へと入って行った。

「女勇者様に、エーゲラ一の戦士殿、か。あんたらの噂は、かねがね、ほうぼうから伺ってるよ」

ソファーにふんぞりかえって座るインディラ人が、ニヤリと笑う。黒髪を後ろに撫でつけ、口髭を綺麗に整えた、気障な印象の二枚目だ。

情報屋グジャラだ。

グジャラの背後には、五人の屈強そうな男達が武器を手に佇んでいた。用心棒だ。赤毛の傭兵を伴ってきたセレスに対する威圧なのだろう（これぐらいの人数なら、アジャンは難なく倒せるだろうが）。

セレスはテーブルをはさんでグジャラの向かいに腰かけ、アジャンは女勇者の背後に立った。

「欲しいのは、魔族と大魔王教徒の情報だな？」

「ええ」

百万ゴールドと引き換えに、グジャラは分厚い書類とインディラ王宮の地図をセレスに手渡した。書類には大魔王復活後の、大魔王教徒の動向、インディラの国内事情、王宮の物品出納帳の写しなどが記されていた。

グジャラは、結構、詳しいだろ？この半月で資料はかなり充実したんだ、と、意味ありげに笑っていた。熱心に情報を売ってくれる奴が居るんでね、と。

セレスは目で資料を追い、眉をひそめる
赤毛の傭兵は、時々、資料を盗み見ていた。護衛役なので、何時でも剣を抜ける体勢をとっていたので、あまり見えなかったが。
「で、資料にある興奮剤『戦士の矛』が、これだ」
グジャラは小さな三角の紙の包みを、テーブルの上に置いた。
「飲めば、一時的に筋力が増強し、痛覚を失い、死の恐怖を忘れる。しかし、中毒性が高く、一度でもこの味を覚えると止められなくなる。たいていの奴は三カ月で廃人だな。これを大魔王教徒は愛飲しているのさ」
「……そんな物、どうして売ってるの？」
不愉快そうに三角の包みを睨みながら、女勇者が問う。
グジャラは、へらへらと笑った。
「インディラじゃ、薬は神から与えられた『幸福の泉』だ。神の愛を受けるも受けぬも、本人の心次第さ。やめたい奴はやめればいい。けど、世の中にゃ、神の恩恵を受ける為に、何もかも捨てる奇特な奴も居るんだよ」
「わからないわ。体に有益な薬だけを売ればいいのに」
「体に有益？そんな物、街の薬屋で買えばいい。俺の表の商売は魔薬屋だ。人を神にも魔にもする奇跡の薬で、俺は夢を売っているのさ」
「……わからないわ。あなたの言っている事、さっぱりわからない」
「おい、話をもとに戻せ」
と、赤毛の傭兵が女勇者に、その背後から言う。
「俺達は魔薬屋と喧嘩しに来たんじゃねえ。余計な事を言うな」
「ええ……でも、」
「『でも』じゃねえ！馬鹿女！俺の指示に従え！」
これは俺が預かると断り、アジャンは三角の包みを己の懐にしまった。
釈然とせず、まだ不快そうに眉をしかめるセレス。

情報屋の元締めは、そんな女勇者をジーッと見つめていた。軽いウェーブを描く金の髪、サファイアのごとく青くきらめく瞳、可憐な赤い唇、白い肌の彼女を。

「……あんた、綺麗だな」

「え？」

「心も体も真っ白だ。あんたみたいな女、俺、好きだぜ」

「え、えっと……」

何と答えたらよいのかわからず、セレスは戸惑った。

「どうも……ありがとう」

「これ、やるよ」

そう言ってグジャラが指で弾いたモノが、セレスの掌まで飛んでくる。古い銅貨だ。

「俺の店の会員証だ。ジライがやった奴とは違う。これは永久会員証だ。俺が取り消すと決めるまでは、な」

大陸一の情報屋は人のよさそうな笑みを浮かべている。

「又、聞きたい事ができたら、顔を見せてくれ。俺は、当分、本店に居る事にする。居ない時は呼びつけてくれてもいい。あんたからのお誘いなら、喜んで雑事を放り出すよ」

「え？」

「むろん、ただじゃ、情報は流さない。商売として、あんたと付き合いたいんだ」

「わかったわ、ありがとう」

「金が無くてもいいぜ、あんたなら他のモノで支払でもＯＫだ」

「他のモノ？」

セレスはきょとんとしたが、アジャンはピンときた。

「なあ、女勇者様、あんたの気持ち次第で、俺の店の支店の位置も教えてもいい。世界中、何処ででも、あんたは最新の情報を手に入れられるんだぜ」

グジャラは舌なめずりせんばかりにセレスを見つめている。傭兵は眉をしかめ、セレスの手から銅貨を奪った。

「じゃ、これも俺が預かっておくぜ、情報屋。何しろ、こちらはやんごとなきお姫様。下々のルールはおわかりにならないからな」

グジャラは唇をとがらせた。

「貧乏人のあんたには用はない。支払能力の無い奴には銅貨はやらねえんだよ」

「言ったろ？俺は預かるだけだ。何か聞きたい事があったら、セレスの代わりに、セレスの金を持って、俺がここまで情報を聞きに来てやるよ」

グジャラは大げさに肩をすくめ、チェッと舌うちをした。ごっつい野郎は趣味じゃねえんだがな、と。

『忍者ジライの案内で、グジャラの店という所に行きます。彼は今は敵ではないから、心配しないで。シャオロンには王宮に戻っているように伝えてください。　セレス』。

武闘僧ナーダは届けられた手紙を黙読し、額に左手をあて天を仰いだ。

「あああああ、もう！ただでさえややっこしい、この国で！しかも、グジャラですって……」

情報屋ではないかと、ナーダは糸目を細めた。

「あのぉ……何て書いてあるんですか？」

不安そうな顔で、東国の少年が尋ねる。

「すみません。セレス様に、その手紙を急いでナーダ様に直接お届けするよう頼まれてたんですけど……オレ、インディラ語、ぜんぜんダメだし、異教徒なんで、お坊様達に、うまく話が伝わらなくて、その……」

シャオロンはしょぼんとしていた。なにしろ、セレスと別れてから三時間以上が経過しているのだ。僧侶達にたらいまわしにされ、あっちこっちの建物に引き回され、ようやくこの修行房でナーダに会えたのだが……

「あなたが悪いわけではありません。気にしないでください、シャオロン」

ナーダはしみじみと東国の少年を見つめた。

腰までの黒髪を首の後ろで一つに束ね、道着をまとった姿。伸び伸びとした手足、しなやかな筋肉、幼さの残った顔、小鹿のような黒い瞳。あどけなさを漂わせる少年は……美童好みの僧侶にはたまらない存在なのだ。接待という名目でつきまとい、べたべた触りまくっていた僧侶は一人や二人ではないだろう。

その上、多分、ナーダのシンパの妨害工作も加わっていたろう。ナーダと共に旅をしている少年があまりにも美童すぎるので嫉妬して、会わせまいと邪魔をしたに違いない。

「ジャガナート僧正様、今宵はこちらに泊めていただく予定でしたが、事情が変わりました。私、この子供と出かけてきます」

ナーダがそう言うと、弟子との久方ぶりの組手を楽しんでいたジャガナート僧正が、にやにや笑いながら小声で耳打ちをしてきた。

「ナーダ様、趣旨変えをなさったのかな？可愛らしい恋人ですなあ」

それに対し、ナーダも小声で返す。

「違います、そんな仲じゃありません。ただの従者仲間です。基本的に、私、十八歳未満に興味ありませんから」

老僧がカカカと笑う。

「確かに、子供ではナーダ様のお相手は務まらんよなあ」

ナーダは頬を朱に染め、コホンと咳払いをした。

「私の部下のガルバは何処です？用を頼みたいのですが」

黄昏の河　4話

情報屋グジャラの店は会員制だ。ナーダは会員資格のある部下ガルバを店に送り、（情報屋に手数料を払って）セレスと連絡をとった。その場には何故か赤毛の傭兵も居たので、勇者一行は街の宿屋で落ち合い、互いの情報を交換し合う事となった（ナーダはガルバに、王宮に情報が漏れないよう、宿の周囲に部下達を配置するよう命じた）。

話し合いを前に、ナーダはセレスの無謀を非難した。単独で暗殺者に会いに行くなど、自殺行為だ、と。

セレスは『赤毛の傭兵に叱られて反省した、もう二度と仲間に内緒で勝手な事はしない』と誓い、東国の少年にも騙した事を謝罪した。

大魔王ケルベゾールドを滅ぼせる唯一の武器『勇者の剣』。その持ち手の勇者ほど、この世になくてはならなぬ者は居ない。大魔王が今世に存在し続ければ、数多くの魔族が絶えることなく召喚され、光の勢力は闇に屈するだろう。

人の世は滅びるのだ。

そうはならぬためにも、ケルベゾールドを倒せる唯一の人間――セレスを守らなければいけないのだが……

世の人々はセレスが女である事であなどり、セレス本人も自分の価値をわきまえずにいるように思える。

正義の為に猪突猛進してしまう彼女には、監視役として忍者を絶えずはりつけた方が良いかもしれない……ナーダは、そう思った。

ナーダは、互いに持ち寄った資料を見比べ、セレスに尋ねた。

「あなた、これに目を通しました？」

「ええ。ざっとだけど、一応」

武闘僧はセレスに、彼女が持ってきた資料を返した。
「じゃ、あなたが、アジャンとシャオロンに説明してください。説明が足りない時は私が補いますから」
「え？」
「あなたの資料の方が最新情報まであって詳しいですし、事件をきちんと理解していれば他人に説明できるはずです」
「……わかったわ」
セレスは喉を鳴らした。
普段、情報を一行にもたらすのは、武闘僧か赤毛の傭兵だ。こんな形で、仲間と対するのは初めてだ。
テーブルについた仲間――アジャン、ナーダ、シャオロンの顔を見渡し、何から話そうかしばらく迷ってから、女勇者は覚悟を決め、話し始めた。
「昨年……この国の王宮に、変な病が流行したの。王子にしかからない病」
「ほう」と、アジャン。
「インディラ王家には八人の王子がいるのだけれど、そのうち四人の王子が同じ病に倒れたの……えっと、一番最初は……昨年の五月で第二王子のドゥリヨーダナ様が病に伏して、次に八月に第三王子ドローナ様、更に、九月に第六王子ルドラカ様と第八王子チャンドル様が同じ病気になったの。頭痛・発熱等の風邪みたいな症状なのに、治癒魔法も薬も一切、効かなかったんですって。呪いの一種だろうって、侍医は診たてているわ」
「それで？」と、どもりがちになるセレスを、アジャンが促す。
「第二王子が病に伏してからじきに、宮廷の祭司がお祓いしたそうだけど、効果が無かったの。インディラ寺院にも、えっと、頼んでるわね、お祓い。そっちも駄目だったみたい」
「まあ、当然ですね。ラダム様を招聘したのではねえ……。母君のアヌラーダ様も親族を頼らず、ウッダルプル寺院のジャガナート僧正様に正式に依頼なされば良かったのに……」

「あ、えっと、そうね、ラダムってインディラ僧侶が来てるわ。ウッダルプル寺院のお坊さんね」
「初級の神聖魔法すらろくに唱えられない、出自だけで上級僧になった方です。祓いなどできるはずがありません」
「そ……そうなの？それじゃあ、無理よね」
セレスは資料に顔を落としつつ、上目づかいに武闘僧を見つめた。
「それで……謎の病の第二王子ドゥリヨーダナ様は、王宮での治療を断念して、静養の為に、別荘に移られるの。えっと、場所は」
「中央高原デカンティナ」
「そう！それね！そう書いてあるわ」
セレスは資料から顔を上げる事ができない。
赤毛の戦士は大きく息を吐いた。
「もういい、まだるっこしい。クソ坊主、おまえが説明しろ」
「私が、ですか？」
武闘僧は眉をしかめ、糸目を細めた。
「私、王宮には、私情まみれの見解しか持ってませんよ。公正な立場の発言ができません」
「ンなの、いつも、そうだろうが。おまえが思った通りの事でいいから、話してみろよ、大僧正候補様」
アジャンは、最後の『大僧正候補』の呼称を強く発音した。
武闘僧は深いため息をつき、口を切った。
「あなた方にはちょっと想像できないかもしれませんが、ウッダルプルは五月に平均気温四十度を超える盛夏となります。病身の身には熱さはつらいもの。第二王子は近衛兵と召使、護衛の忍の者を連れて、静養兼避暑の為、中央高原のデカンティナの別荘に移動しました。あそこは一年中涼しく、保養地として有名で、貴族の別荘もけっこうな数、あります。王宮所有の別荘、まあ、城って呼べる規模なんですけど、そこは、夏にはウッダルプルから避暑にやって来る貴族達の社交場になります」
「で？」と、アジャン。

「ただでさえ夏には賑わう保養地に、王子が長期滞在にやって来たんです。病気見舞いの名目で、毎日のように貴族達が第二王子の元にご挨拶に伺っていたとか。王宮の別荘には護衛やら召使やらが百人近くいました。それが、七月末……消えたのです」

「消えた？」

「ご機嫌伺いにやって来た貴族が発見したんですがね、常に門前に立っていた門番が居らずいぶかしく思って中に入れば、中は無人。王子も側仕えも近衛兵も召使もお庭番も、誰一人として居なかったのだそうですよ。デカンティナ駐屯のインディラ軍が調査・探索を行ったのですが、何一つ手がかりはありませんでした。わかった事は、前日までは中が通常通りだったという事、静養中の第二王子とその召使達が普通に過ごし、夜には別荘に灯りも灯っていたとか」

「一晩で消えたって事か……百人近くの人間がいっぺんに」と、アジャン。

「移動魔法を使ったんだと思うのですが、百人近くの人間を一晩で移動させようとしたら、宮廷魔術師クラスの魔法使いが十人は必要です。非常に非効率的です。これが、誘拐にしろ暗殺にしろ、何故、王子だけでなく召使達まで連れ去ったのか、連れ去る必要があったのか、さっぱりわかりません。王子の気まぐれによる失踪だとしても、召使を百人も連れてけば目立ってしょうがありません、あの才気活発とはお世辞にも言えないお方でも、そこまでは馬鹿な真似はなさらないでしょう」

そこで、ナーダはチラリとセレスを見た。

「あなたは、この消失事件、どう見てるんですか？」

「私？……そうね、魔族の仕業だと思うわ」

「何故？」

「お師匠様なら百人でも二百人でも運べるでしょうけど、魔力消耗の激しい移動魔法は、人間がやすやすと使えるものじゃないわ。でも、魔族は違う。シャイナの荒野で、サリエル達が呼び寄せた大魔王教徒は四百人以上、それに魔族も加わっての人数が移動魔法で運

ばれたんですもの。殊、移動魔法に関しては魔族は優秀だと思うの。何の目的でかはわからないけど、第二王子達を誘拐したのは魔族じゃないかしら？」

「魔族が王子の誘拐ねえ……」

どうもピンとこないなあ、と、傭兵。

「現在は、第二王子が世継ぎの王子です。政変に関わる陰謀が絡んでいる可能性もありますよ」

「あら、そうなの？」

セレスが資料をバラバラとめくりなおす。

「普通、長男が世継ぎじゃない？第一王子じゃなくて第二王子が王国の跡取りなの？」

アジャンは『よけいな事、言いやがって馬鹿女』と思いつつ、横目で武闘僧を見つめた。

その表情から内面を測ることはできなかったが、少なくとも、表面上は穏やかに僧侶は女勇者の疑問に答えを与えていた。

「第一王子は、もはや、今世に存在していません。あなた、さっき王子は八人いるっておっしゃったでしょ？それは、第二王子から第九王子の事です」

「え？ああ、そうね、八人なのに、第九王子までいるものね……第一王子は亡くなってるのね」

ナーダはセレスの勘違いを訂正しなかった。

「ついでに言っておきますと、第二・第四王子の母君が第二夫人アヌラーダ様、第三・第六・第八王子の母君は第三夫人サラス様です」

「えっと……」

シャオロンが額に指を当てて、首を傾げる。聞きなれぬ異国風の名前が次から次に出てくるので、頭の中で整理しきれないのだろう。

「第一夫人サティー様がみまかられてから二十二年となりますが、サティー様生存中から、第二夫人と第三夫人は後宮の覇権を争って対立してました。インディラ王家は長子相続型ですが、世継ぎの王子が王位に不適格とみなされれば、次兄に、三男へと王位継承権は

移ります。と、まあ、そんなわけで、それぞれの息子の第二王子と第三王子が月違いで生まれてきた事もあって、第二夫人と第三夫人はたいそう麗しい関係にあるのですよ」

「……えっと、それって」

セレスはためらいがちに尋ねた。

「政変に関わる陰謀って言ったわね？第三夫人サラス様が第二夫人アヌラーダ様の息子の世継ぎの王子を誘拐したって……あなた、そう思ってるってこと？」

ナーダが糸目で女勇者を睨みつける。

「そんな事は一言も言ってません。よく資料を見てください」

ナーダがセレスが持つ資料を、指さす。

「謎の病にかかったのは第二王子のドゥリヨーダナ、第三王子ドローナ、第六王子ルドラカ、第八王子チャンドルです」

「え？」

「つまり、第二夫人の長男と、第三夫人の息子全員なんですよ」

「あ」

指摘されて初めて気づいたという風に、セレスは口元に手をあてた。

「混乱させるだけだと思ったので、あえて言いませんでしたが、残りの王子のうち、第二夫人の次男の第四王子と、第六夫人ヘンディラ様の息子の五王子、第八夫人ラター様の息子の第七王子、第十夫人ジュヒー様の息子の第九王子は健在です。病にもかからず王宮に居ます」

「妃は何人いるんだ？」と、アジャン。

「生存している方は九人。第十夫人までです」

それが何か？という顔の武闘僧に、アジャンは肩をすくめてみせ、わざといつもの軽口をたたいた。

「思ったより、少ないな。あの城の規模からすると、女を百人は囲ってると思ったんだが」

と、いうアジャンの軽口を、武闘僧は無視した。

「世継ぎの王子が失踪して得をするのは、普通に考えれば、第三王子のドローナです。義兄の第二王子がいなければ、王位継承権が転がりこむんですからね。しかし、ドローナも、同じ病にかかったのです。第二王子失踪後、一月も経たないうちに。それで、現在、中央高原デカンティナを避け、北部山岳地帯の別荘で静養中です。今の所、誘拐も暗殺もされていないようです。九月から同じ病にかかった第六王子ルドラカと第八王子チャンドルも、現在、兄と同じ別荘で療養しています」

「世継ぎが王位に不適格とみなされれば、次兄に、三男へと王位継承権が移るって言ったな？」

アジャンは顎の下に手をあてた。

「て、ことは、第二王子が失踪から戻らず、第三王子が世継ぎとなっても、病を理由に第四王子に王位継承権を奪われる可能性もあるって事だな？」

「ええ。その可能性は高いです。その場合、得をするのは第四王子カウラヴァです、第二夫人アヌラーダ様の次男の、ね」

「誘拐された王子の実弟か……」

アジャンは、ナーダが、国王の妃達には敬称をつけるのに、王子達には敬称を抜いている事に気づいていた。義弟を敬称付けで呼びたくないのか、生家での風習の名残で敬称を抜いてしまうのか、どちらだろう？

「それから気になるのは……暗殺ではなく、失踪である事。第三王子にしろ第四王子にしろ、王位継承権を得たいのなら、第二王子ドゥリヨーダナの死を白日の下に晒すはずです。父王生存中に兄に戻られては、世継ぎの王子の位を失いますからね」

「……殺さなかったのではなく、殺せなかったんじゃないでしょうか？」

と、瞳を半ば伏せながら、シャオロンが言う。

「魔族に魅入られ、体をのっとられたのが第四王子様だったのなら……王位継承権は欲しいけど、お兄さんを殺せず、それで幽閉し

たって事も……」
「そうね。その線はありえるわね」
と、セレスが言った途端、ナーダは小さく吹き出した。
「ああ、失敬。しかし、その線はありえませんよ。第二夫人アヌラーダ様のご子息方は、母方の血を色濃く引いていて、肉親の情とは無縁な方ばかりなのだそうです。ま、噂でしか知りませんけどね、正確な噂だと思いますよ。母親があの方ですからね。強欲でプライドばかりが高く無能なくせに、陰謀をはりめぐらせる余計な知恵だけはお持ちで。同じ無能でも、お知恵の無いサラス様のご子息方のがマシです。アヌラーダ様の血筋ならば、王位継承権の為に父王すら殺しかねませんよ」
武闘僧の皮肉はいつもの事だったが、今日は何時にも増して辛辣だ。セレスとシャオロンは顔を見合わせ、アジャンは溜息をついた。
「王宮に残っているのは、第四、第五、第七、第九王子です。第二王子は失踪中、第三、第六、第八王子は北部山岳地帯で静養中。王宮の庭の森には十八の離宮があり、成人した王子達にはそれぞれ離宮が与えられているのですが……」
ナーダはセレスの手から資料を奪い、物品出納帳の写しの頁を赤毛の傭兵達に見せた。
「第三、第六、第八王子の離宮です。八・九月以前と以後で物品出納帳の食糧・水の搬入・排泄物の処理などの記録にさほど大きな違いがないのです。王子が離宮を離れる際、ほとんどの家来を伴っていったというのに変でしょ？」
赤毛の傭兵が写しを見つめる。資料自体は共通語なのだが、この頁はインディラ語で書かれたものに、共通語の解説が入っている。
「更に、ここ。剣、槍、火薬の買い付け料が増えています。十月からずっとね」
「つまり、空き離宮を勝手に使っている奴がいるってことか？」と、アジャン。
「そうです」

「数は、よくわからんが……三カ所あわせて、二百はいそうだな」
「ええ。この工作には、財務大臣や宰相、侍従長、それに王宮付き忍者軍団も、一枚、噛んでると思います。彼等に気づかれず、離宮を使用するなど不可能ですから」
「大魔王教徒が離宮を隠れ処にしてるんだと思うわ」と、セレス。
唐突に出てきた『大魔王教徒』という単語に、赤毛の戦士が質問する。
「なんで、そう思う？」
「離宮があやしいからよ。ウッダルプルでの大魔王教徒の活動は昨年の九月をもって沈静化したけど、幹部を捕縛したわけでも倒したわけでもないの。ただ、活動を止めただけらしいの」
「王宮内の離宮という絶好の隠れ処を得た為、表だった活動を止めて、力を蓄えている……と、セレスが推測したのももっともなんですよ。根拠がありましてね」
ナーダは資料をめくった。
「第三・第六・第八王子達の離宮……かなり臭いのだそうですよ、比喩表現ではなく、悪臭が漂うという意味でね。物品出納帳にもありますが、大量の香が購入され、絶えず焚かれているらしいんです。でも、出入りの商人の証言によると、離宮周囲は、香では隠しきれないほどの匂いが漂っているそうです。屠殺場付近のような匂いだとか」
「血と肉の匂いか……」と、アジャン。
「離宮に魔人製造工房があるんだと思うわ。大魔王教徒に魔人を造らせてるのよ」と、セレス。
「ただの魔人を造ってるのではないでしょう。僧侶の神聖魔法の前には、魔人はもろい存在です。ウッダルプルでそんなものを大量生産したところで、意味がありません」
「じゃ、私達がシャイナで戦った型の魔人？聖なる武器の持ち手を魔人に生まれ変わらせて、神聖魔法を無効化する魔人を造りあげていたわよね？」

「それも造っているとは思いますが、聖なる武器もその持ち手も有限です。大量生産できませんし……。私が魔族の親分なら、違う型の魔人も開発するよう命じるでしょうね。大量の肉と血は実験の廃棄物かもしれません」

「問題は誰がウズベルか、だな」

アジャンは首をひねった。

「第三王子か第四王子か？宰相？財務大臣？侍従長？王宮付きの忍者軍団の頭？国王本人の線もあるか」

「国王や要人はウズベルではないでしょう。ここはインディラです。王宮と寺院の関係は現在あまり良好ではありませんが、それでも、身分の高い者ほど聖職者と接する機会は増えます。黒の気をうまく隠せるのだとしても、僧侶と接する機会はあまり多くない方が嬉しいでしょう。国王達は暗示をかけられ操られている可能性は高いですが、魔族ではないでしょう」

「じゃあ、やっぱり、王子に憑いているのかしら？」

「でなければ、後宮の妃か、忍者頭でしょうね。王宮付き忍者頭はカバーリと言います。アレは表に出ませんからね」

「その全員、って事もありえますよね」

シャオロンが表情を強張らせて言う。

「魔族にとって人間は服と一緒なんでしょ？サリエルは替えの人間を抱えていました。ウズベルも同じかもしれません」

父親の亡骸をサリエルに利用されていた少年は、不愉快そうに表情を硬くしている。

「ウズベルを逃さない為には、聖なる結界が必要ですが」

ナーダは顔の前で両手を組んだ。

「ウズベルが誰かわからなければ、結界は張りようがないんです。それと、最初にお断りしておきますが、私が一人で張れる聖なる結界は、十メートル四方程度ならば、持続時間は三十分弱。範囲を狭めれば時間は多少長くなり、広めればもっと短くなります。しかも、敵の移動魔法ぐらいは防げますが、悪くするとそれ以外は野放しに

なるかも。私、結界魔法は苦手ですので」
「あら？そうだったの？」と、セレス。武闘僧の結界には旅の途中、何度か助けられていたのだが……
「ええ。一日中、インディラ国中を覆う形で聖なる結界を張り続けられた方もいらっしゃったみたいですがね、昔は。ですが、あいにく、私はそうじゃないので……ぎりぎりまで結界は張りませんし、張ったら最後、結界維持に専念します。戦闘はみなさんにお任せしますね」
「ふん」
赤毛の傭兵がにやりと笑う。
「意外と役立たずだったんだな、おまえ」
と、の揶揄に、『なら、あなたが結界、張ってみなさいよ』と武闘僧が睨んで応える。
「魔族達が何で王子達に呪いをかけてるのか、何で第二王子とその家来を誘拐したのか、ウズベルが誰なのか、どんな魔人を造ってるのか、わからない事はいっぱいあるけれど」
セレスはキッ！と天を仰いだ。
「少なくとも、第三・第六・第八王子達の離宮があやしいのは確かよ！王宮に戻ったらすぐに乗り込んで調べたいところだけれど！」
「理由もなく王宮で暴れたら、私達、犯罪者として逮捕されちゃいますよ」と、ナーダ。
「わかってるわよ！」
「それに、そこが本拠地なら、行き着く前に忍者軍団に邪魔されるでしょうね。あちらに正義があるように見える正当な理由をふりかざし、我々を襲ってくるでしょう」
「大義名分さえあればいいんだろ？」
赤毛の戦士が一同を見渡す。
「俺達は勇者ご一行様だぜ。魔族や大魔王教徒相手ならば、堂々と戦える。要は、敵に離宮から出てこさせりゃいいんだ」
「どうやって？」と、セレス。

「これを使う」
そう言って彼が懐から取り出したのは、小さな三角の包み――――
興奮剤『戦士の矛』だった

「さっそく来たぜ、情報屋」
赤毛の戦士アジャンは口元を歪め、笑みを作った。なかなかの美丈夫であるが、どこか崩れた感じのあるこの男には野卑な表情がよく似合う。
情報屋の元締めグジャラは面白くなさそうな顔をした。女勇者抜きで、傭兵にだけ来られても、楽しくない。応対は部下に任せるつもりだったのだが、大将相手に話があると赤毛の傭兵が強硬に主張したので、やむなく姿を見せたのだ。
ソファーにふんぞりかえって座るインディラ人は、ジーッと赤毛の傭兵を見つめていた。何かを見通すかのように、しみじみと。
「で、俺に何の話があるんだ？」
「実はな……」
赤毛の傭兵はにやにや笑っていた。
「魔薬屋を一軒、ぶっ潰したいんだ。それなりに大手で『戦士の矛』を大魔王教徒に大量に売りつけている店だ。おまえが目障りだと思っている競合店でいい。適当な店を教えてくれ」

客を装って魔薬屋に乗り込んだアジャンは、短時間で、その店の主人と用心棒をたたきのめし、必要な情報を吐かせた後、気絶させた。
全員を縛り上げてから、アジャンが招き入れたのは、ナーダがかから借りた寺院付きの忍者（本当はナーダの個人的な部下なのだが、正体を秘している）だった。

それと、ほぼ同時に、ナーダも動き出していた。移動許可が下りている王宮内をくまなく歩き回り、祭壇や神像、供物などを細かくチェックし、担当者を呼んではそのいたらなさを説教したのだ。

王宮内の人間は、大僧正候補に含むところがある者が多かった。国王の第二夫人アヌラーダが、二十年以上前からナーダとその母を敵視している為だ。彼女の親族の国務大臣・大将軍等、国家の要職に就く者も彼女に同調している為、王宮内でナーダの扱いはひどいものだ。

けれども、インディラ人は皆、敬虔なインディラ教徒なので、こと宗教に関わる事となると接し方が変わってくる。宮廷の祭司達は、（ほとんど言いがかりに近い）ナーダの指摘を素直に聞いた

ナーダは今までの不敬を詫びる儀式をしなければ、神の怒りに触れるなどと彼等を脅かし、王宮に続く不運（王子の疾病など）を祓う儀式を執り行いたいと望み、巧みな話術で、最後にはその儀式を行わねば災いが確実なものになると信じ込ませる事に成功した。

ナーダの希望は、彼等の上役から上役へと伝えられてゆき、わずか半日で、祭司長にまで伝わった。

面談を求めてきた祭司長に、ナーダは、得意の弁舌で、儀式の為に十人の僧侶を王宮に招く必要があるのだと説得し、その許可を得たのだった。

その頃、セレスは……

シャオロン一人を供に連れ、ウッダルプル郊外の岩山へと向かっていた。

黄昏の河　5話

ウッダルプル郊外の岩山の山頂には、要塞城跡がある。
三百年ほど前の勇者ロイドの時代、大魔王討伐が遅れ、ユーラティアス大陸は魔に席巻された。インディラも例外ではなく、首都ウッダルプルは焦土と化し、国の中枢は壊れた。
燃え盛る王宮から逃れ落ち延びた第六王子が、国王軍やインディラ僧侶達と共にたてこもったのが、この山の要塞だった。
最後まで抵抗を続けたその第六王子が、ロイドの大魔王討伐後、国を取り戻し、ラジャラ王朝国王となるのだが……
三百年前に魔族と戦い抜いた強者（つわもの）どもの要塞も、今は使用する者もなく、朽ち果てていた。
過去の歴史を語るだけの、遺跡となっていた。
――その無人の遺跡を利用する者達がいた。
大魔王教徒だった。
昨年の大魔王復活の託宣から、九月までの間、大魔王教徒は、度々、この地で集会をしていたようだ。十月より大魔王教徒はなりを潜めているので、あやしげな集会も無くなってはいたが。
王宮から提出された資料にはそう記されていたし、グジャラの情報から裏は取れている。今更行ったところで手がかりがあるように思えなかったものの、他に手がかりが無い状態ならば一度は訪れようと思うはず。王宮から提出された資料で、大魔王教徒関連で具体的な地名まで記されていたのはここだけなのだから。
その上、現在、城塞跡には人気（ひとけ）が無い。
あの資料を作った者は、この地に女勇者を招きたかったに違いない。
襲撃に最適な場所の為……
『勇者の剣』を背負った白銀の鎧姿の女勇者セレスと、東国の武闘家の少年シャオロン。二人は山頂への坂道を騎乗で進んでいた。

シャオロンはがちがちに硬くなっていた。無理もない。何時、敵の襲撃があってもおかしくない状態なのだ。命に代えてもセレス様を守る！と、覚悟を決めているのだ。

表情に出さないように気を付けてはいたが、セレスも、又、かなり緊張していた。赤毛の傭兵も武闘僧も、今は居ない。二人が二人とも故意に護衛から離れるのは初めてではないか？それに、今はシャオロンが一緒なのだ。セレスは少年の保護者を自負していた。彼の命を守らなくては……

山頂に登り、眼下を見下ろすと、ウッダルプルの街が一望できた。巨大な王宮と巨大な寺院、街の西を流れる河、整然とした街並み。河の周囲は、王宮や寺院同様、緑に包まれていた。しかし、豊かに流れる河も街より先は荒野へと繋がっている。

崩れた城壁の境目から中に入る。

左右には、廃墟となった堅固な建物が並んでいた。昔は、兵士の宿舎や倉庫だったのだろう。

建物の間を抜け、軍隊の閲兵式ができそうな広さの広場に足を踏み入れる。

見るとはなく、そこから廃墟を眺めていると……

空が揺れた。

（来た……）

セレスは拳を握りしめた。

シャオロンが戦闘準備を始める。背の革袋から、爪を取り出し装備したのだ。

移動魔法で現れたのは――忍者だった。

東国の忍者とも寺院付きの忍者とも装束は異なっており、威圧的な黒い兜で素顔を隠し、黒のチュニックにズボン、その上に肩・胸・腕・脚に黒い装甲をつけている。腕と脚の装甲の側面には、トゲのような装飾がついていた。

忍者は両腕を組み、馬上のセレスを見上げた。

「そのような子供一人を供につけ、かような地までいらっしゃると

は……命がいらないものと見受けられる」
「あなた、王宮付き忍者ね？忍者頭のカバーリなの？名乗りなさい」
忍者は声をたてて笑った。
「死にゆくあなたに名乗る必要があろうか？」
忍者が右手をあげると……
その背後から、人間が湧いてくる。剣や槍、弓などの武器を装備した、屈強そうな男達。全員、目を爛々と輝かせて、異常なほど興奮していた。口からだらしなくよだれを垂らしている者、ハアハアと息を乱している者もいる。
（薬物中毒？）
セレスは魔薬屋でもあるグジャラから聞いた『戦士の矛』の事を思い出した。
『飲めば、一時的に筋力が増強し、痛覚を失い、死の恐怖を忘れる。しかし、中毒性が高く、一度でもこの味を覚えると止められなくなる。たいていの奴は三カ月で廃人だな』。
忍者が右手を振り下ろす。
それを合図に、忍者の背後の者達が襲いかかってきた。
シャオロンが『龍の爪』を顔の前で交差させ、それから前方に突き出した。
両爪の前の空気が揺らぎ、竜巻が生まれる。竜巻は近づきつつあった者達を後方へはじき飛ばした。しかし、忍者は微動だにしない。
馬上から飛び降り、シャオロンが爪を閃かせる。
黒兜の忍者を狙って。
けれども、その攻撃は、忍者の背後から飛び出して来た者に阻まれた。
着物と袴からなる黒装束に覆面、東国の忍者だ。シャオロンとさほど変わらない背の忍者が、忍刀で爪を弾いたのだ。続いて、同じ背丈の三人の忍者がシャオロンに襲いかかる。順番に攻撃しては退き、退いては、又、攻撃をしかける。四人の連携攻撃に、素早さで勝るシャオロンが押されてゆく。

「シャオロン！」
下馬したセレスが『勇者の剣』を振るう。
四人の忍者は、サッと身をかわして引いた。跳躍して、後方に移動したのだ。
代わりに押し寄せて来た大魔王教徒を、セレスは大剣で薙ぎ払った。
血が舞いあがる。
だが、傷を負っても、敵は前進を止めようとしない。腕を斬られようが、肩を砕かれようが、腹を斬られようが、立ち上がり迫って来る。
痛覚が無いのだ。
セレスは『勇者の剣』の切っ先を下に向けて、敵の足を狙った。
岩をも砕く聖なる武器は、邪教徒達の足を断ち切っていった。
血と肉が舞い散る中で……
斬られた瞬間に、塩となって消える敵が居る事に。セレスは気づいた。魔人が中に交じっている。
「シャオロン、魔人も居るわ！」
少年が爪を振るい、再び竜巻を生み出す。
竜巻に巻き込まれ吹き飛ばされる敵の中に、浄化されてゆく者も居た。又、遠方より放たれる弓矢やクナイ、手裏剣も竜巻が吹き飛ばしてゆく。
しかし、竜巻の影響を受けない者も居た。黒兜の忍者と、東国の四人の忍者だ。吹き荒ぶ風の中、黒兜の忍者は両腕を組んだまま佇み、その左右の四人の東国忍者は忍刀を手にたたずんでいる。竜巻に煽られる事なく真っ直ぐに立って。
（結界？）
竜巻が止むのを待たず、セレスは『勇者の剣』を構え、忍者達に向かって行った。うなる風の中では、敵もクナイや手裏剣を使えない。
黒兜の忍者を狙って振り下ろした大剣は……

左右から飛び出して来た二人の忍の、忍刀に防がれる。
「！」
岩をも砕く『勇者の剣』と刃を交えても忍刀は折れなかった。
聖なる武器か、魔法の祝福が与えられた武器でなければ、『勇者の剣』の凄まじい攻撃に耐えられるはずはないのだが。
東国忍者は二人がかりとはいえ、大剣を受け止めている。
そして、無防備となったセレスの両脇から、残りの二人の忍が襲いかかる。忍刀を手にした彼等の狙いは、鎧の無い頭部だった。
セレスは素早く後方に倒れるように身を引いて、左右からの急襲を避けた。しかし、無理に退いた為、よろめき、ふらついてしまう。その隙を東国忍者四人がつかないはずはない。
体勢を崩したセレスを、四人が代わる代わる襲う。猿のような身軽な動きで、攻撃を仕掛けては退く。セレスからの反撃は必ず二人で受け止め、残りの二人が死角をつくように襲い来るのだ。
「セレス様！」
シャオロンが援護に走ろうとすると、大魔王教徒が壁をつくり、進路を塞いだ。
「どけ！」
爪を振るい、敵を蹴散らすシャオロンの前に……
ふいに、黒兜の忍者が現れた。
龍の鋭い爪で、シャオロンは敵の胸部から腹部を切り裂こうとした。が、敵に触れる寸前、爪が火花を散らし弾かれてしまう。目には見えないが、障壁がそこにはあるのだ。
「結界！」
黒兜から覗く双眸が、血のごとく赤くきらめく。
その不気味な眼に、シャオロンはゾッとした。何かとてつもなくいびつな、触れてはいけない黒く醜いものに触れてしまったような……そんな恐れを抱いたのだ。
だが、それも一瞬のこと。次の瞬間には、凄まじい風圧で、シャオロンは後方に吹き飛ばされていた。

セレスは四人の連続攻撃を避け、徐々に後退していた。
その真横に、黒兜の忍者が現れる。小距離の移動魔法だ。黒兜の忍者のカタール（刺し刀、短剣の一種）がセレスに迫る。
かろうじてカタールは避けられたのだが、体勢を崩し、両足がもつれ、セレスは背から地面に倒れた。
そこへ、四つの忍刀が襲い来る。
『勇者の剣』を手放さないまま、セレスは地を転がり、次々と突いてくる彼等の攻撃を避けた。
空がうなり、セレスの上を竜巻が駆けぬける。
シャオロンだった。
地面に片膝をついた姿勢で、両爪の『龍の爪』を振るい、続けざまに竜巻を生み出していた。東国の忍者は全員、その場で刀を正眼に構えていた。竜巻は彼等を切り裂く事かなわず、左右に割れ、他の敵へと向かってゆく。右手にカタールをつけた黒兜の忍者も、動かず、その場に佇んでいる。
黒兜の忍者も東国忍者も、強力な結界が張れるのだ。その結界は『龍の爪』が生み出す浄化の竜巻も、聖なる武器すらも弾くのだ。
だが、シャオロンが浄化の竜巻を放ち続ける限り、敵は結界を張り続けるしかない。セレスを攻撃できないのだ。
セレスは身を低くして地面を転がって竜巻を避けきると、素早く体を起こして、背に『勇者の剣』を収め、シャオロンの横を通り過ぎ、愛馬達の元に急ぐ。
シャオロンの馬の手綱をひいて馬首を城壁の割れ目へと向かせると、セレスは馬の尻を思いっきり叩いた。馬は驚き、真っ直ぐに走りゆく。続いてセレスは愛馬にまたがり、少年の元へと向かった。
「シャオロン！」
少年は振り返り、最後の竜巻を放つと、セレスの乗馬の上に飛び乗った。そして、長い爪でセレスや馬を傷つけぬように気を配りながら、白銀の鎧をまとうセレスに背後からしがみつく。
セレスは馬を返し、城壁の割れ目へと急いだ。

だが、間もなく……

「逃げるのかよ、女勇者様！」

宙から四人の忍者が襲い来る。移動魔法で運ばれてきたのだ。彼等の忍刀の攻撃を、（左手で手綱を握りつつ）セレスは腰の『虹の小剣』を抜いて防ぎ、シャオロンも左手で竜巻を生んで応戦した。忍者達は馬とほぼ同じ速さで移動できるようだったが、シャオロンの竜巻が牽制となり、徐々に距離は開いていった。

四人の東国忍者が、大魔王教徒達が、セレスの後を追い、走る。

今世の光を消すべく。

セレスを殺そうと、群がり、奇声をあげ、走る。

セレス達の馬は左右に廃墟が並ぶ通路を通りぬけ、尚、走る。

城壁の割れ目に向かう彼女の背後で、バサッ！と大きな布のようなモノが落ちる音が響いた。

セレスは馬の速度をゆるめ、手綱をひいて、馬を返した。

口元に笑みを浮かべながら。

見上げれば、廃墟や城壁に複数の人の姿があった。兜にチュニック、ズボン姿のインディラ忍者――寺院付き忍者だ。セレスに協力するようナーダに命じられた彼等は、ずっと廃墟や城壁に身を潜めて待っていたのだ。囮役となって敵をひきつれた女勇者が、廃墟の傍を通り、そして、通りすぎるのを。

セレス達が避難した後、左右の廃墟、そして城壁から、忍者は魚の投網のようなモノを次々に敵に投げたのだ。

今、網の下となった敵は、死骸のように動きを止めている。通りを埋め尽くすほどに広がっている網は、『麻痺』、『眠り』、『魔法結界』、『浄化』の呪文を唱えつつ、インディラ僧侶が長い年月をかけて編み上げた特殊な魔法道具（マジック・アイテム）なのだ。

網に囚われた敵は、人間であれば麻痺・眠りの状態となり、魔人であれば浄化される。又、魔法結界の機能もあるので、魔法生物であっても内に囚われれば命の源（魔法）を失って消滅する運命にあった。

セレスとシャオロンは……

敵を投網の下に誘いこむ為の囮役だったのだ。逃げるとみせかけて、敵を見事、罠にはめたのだ。

ナーダの今回の作戦は――

一、敵の数を減らす。

二、『戦士の矛』を消耗させる。

三、敵として現れた場合は『新たな魔人』と呼ばれるモノの型を調査する。

四、ウズベルの正体を探る。

であった。黒兜の忍者が全く会話にのってこなかったので、ウズベルの正体は探れなかった。が、それ以外は良好な結果といえそうだ。

セレスとシャオロンは互いに笑顔を見せあい、下馬した。

「セレス様、さっきの東国忍者達、オレ、シャイナで一度、戦っています」

「あら、そうなの？」

「多分、あの動きはそうだ思います。セレス様のお命を狙っていた忍者の手下ですよ」

「ジライの……」

寺院付き忍者達が建物からわらわらと現れ、網の下に捕らえた者達を改めてゆく。

セレス達も中を覗き込んだ。

網の下に東国の忍者装束があった。が、中身が無い。寺院付きの忍者がそれを網の上からつかむと、中から砂のようなものがこぼれてきた。

「あの四人の東国忍者……魔法生物だったんだわ」

「魔法生物？」

シャオロンは首をかしげ、セレスから寝物語に聞いた歴代勇者の冒険談を思い出した。物語の中に、魔法で生み出した巨大鳥に乗る魔術師や、人語を話す邪悪な植物を操る呪術師が出てきたりした。

「魔法で造られたモノが、魔法生物ですよね？」
「ええ。邪法によって、生み出されるもののうち人型のものが魔人。魔力によって造られるのが魔法生物よ」
「えっと……どう、違うんでしょう？」
「どちらも偽りの生命体という点では同じ。不老不死の体。でも、魔法生物は神より与えられた魔法体系に則って造られるものだから聖なる武器や神聖魔法では滅ぼせないのよ、そこが魔人と違うの」
「滅ぼせない？」
「魔人は魔界のものが憑依しているものだから、器と魔の魂の絆を浄化してしまえば滅ぼせるの。でも、普通の人間相手に浄化魔法を唱えても、効果が無いでしょ？それと同じよ。魔法生物を殺すには、命の源である魔法を奪うしかないの」
「じゃあ……さっきの東国忍者は魔人じゃなくて、魔法生物だったんですね？魔族に憑かれていたわけじゃないんだ」
「……多分、そうだと思うけど、まだ何とも言えないわ。ナーダに調べてもらいましょう」
「はい、セレス様」
「女勇者様」
寺院付き忍者の首領の呼びかけだ。頭部を兜で覆い、鼻から下、顎までを口布で覆っている。それ故、どんな人物かはわからなかったが、落ち着きのある物腰や声からして年配者のようだ。確か、シャイナで、前に会っている。ナーダはこの者を、ガルバと呼んでいた。
「カバーリめの遺体がございませぬ」
カバーリというのは王宮付き忍者軍団の忍者頭の名だ。王宮付き忍者のうち、カバーリだけが腕と脚にトゲのついた特殊な装甲を装備している。忍者頭のシンボルでもある。あの襲撃者はカバーリか、或いは王宮付き忍者の頭目を装う別人。その正体を確かめるには、黒兜を剥ぐしかないのだが、遺体が無ければ改めようがない。
「カバーリの正体が魔人だったから、網に囚われて浄化されたか…

……移動魔法で逃げたか、ね」

「女勇者様、東国忍者の数も足りませぬ」

セレスの傍で、東国忍者の装束を調べていた忍者が声をかけてくる。こちらも紺色の兜と口元の布で素顔を隠している。忍者装束も紺色のチュニックにズボンで、東国忍者の着物・袴とはデザインが全く異なる。

「忍装束が二人分しかございませぬ」

「じゃあ、残りの二人は逃げたのかしら？」

セレスがきょろきょろと周囲を見渡していると、

「女勇者様、この場の調べは我等にお任せください」

忍者頭がセレスの前で跪いていた。

「調べがつきました事は、後ほど、寺院にて御身様にご報告いたしますゆえ」

「そう？じゃあ、お願いするわ」

「アッチャ、ガナル、城まで護衛をつとめよ」

「かしこまりました」

セレスの横に、二人の忍者がフッと現れる。移動魔法ではなく体術だが、唐突さが心臓に悪いのは同じだ。その二人も同じ紺色の忍者装束だし素顔を隠しているので、誰が誰だかセレスには全くわからなかった。

忍者達は、逃がしてしまったシャオロンの馬も連れ戻してくれた。東国の少年は、背の革袋に爪を戻し、自分の馬に跨った。

女勇者と従者は、馬で岩山の坂道を下って行った。

護衛役の忍者の姿が周囲に見当たらなかったが、隠れてついてきているのだろう。

山を六合目まで下った時だった。

背後からくぐもった悲鳴が二つあがった。断末魔の声に思えた。

護衛役が殺されたのか？

しかし、振り返り、確かめる間もなく、視界が煙に覆われてしまった。煙玉を使われてしまったのだ。

忍者の襲撃だ。

セレスは、驚いて闇雲に走り出した馬の手綱を引いた。煙で方向感覚が狂っている。下手に進めば、坂道から転げ落ちてしまうだろう。

煙の中から、シャオロンの馬のいななきも聞こえた。

目が痛かった。涙がぽろぽろとこぼれる。息苦しくて咳も止まらない。

「もらった！」

殺気が斜め右から近づいて来る。腰の『虹の小剣』を抜いた。が、目が痛くて、敵の姿が捉えられない。

しかし、その殺気は……

セレスの真横をすりぬけ、更に遠くへと通り過ぎてしまった。いぶかしく思っていると、

「かまいたち！」

「雷（いかずち）！」

忍術の応酬があり、悲鳴が響いた。

煙がだいぶ薄れ、視界が効くようになる。涙を流しつつ、見れば……

馬の首は斜面へと向いていた。慌てて、向きを変える。

すると、坂道に東国忍者が転がっているのが見えた。巨大な卍手裏剣で腹部を貫かれ、地面に縫い付けられているのだ。人の頭ほどもある巨大な手裏剣で腹を突き破られているというのに、血は全く流れていない。もはや、人ではなく、偽りの生命体――魔法生物となった証（あかし）だ。

「魔法生物を倒す手立ては二つござる」

ジャポネ風の刀を右手に、紺色の忍者が山道に佇んでいた。その背後には、命尽きた二つの死骸（護衛役の忍者の変わり果てた姿）と、中身を失った東国忍者の装束が落ちていた。

紺色の忍者はシャオロンの馬の横を通り、ゆっくりと近づいて来る。
「一つは、あなたがおっしゃられた通り、命の源である魔法を奪う方法。そして、後、一つは……」
その声は先程、城塞跡で東国忍者の死骸を改めていた忍者の声だった。だが、あの巨大な卍手裏剣、右手のあの冴え冴えとした美しい刃は……
「ジライの兄貴！」
卍手裏剣で地面に縛りつけられている忍者が、必死に顔をあげる。声からすると、まだ少年のようだ。
「ひどいぜ、兄貴！何でアオザを殺したんだ！」
「何を言う、アカハナ」
紺色の忍者の声が、忍者ジライのものに変わる。
「きさまも、アオザもキスケもクロベエも、皆、シャイナで死んでおるのだ。死骸を斬っても、殺人とは言わぬ」
「ジライの兄貴……オレも殺すのかよ？」
「殺すのではない」
ジライが愛刀を構える。
「解放してやるのだ」
嫌だ！助けて！死にたくない！と、叫ぶ部下であったものを……
ジライは斬り捨てた。
その刃から聖なる水を散らせながら。
『ムラクモ』に両断された忍者は、斬られた忍者装束を残し、砂と変わり果てた。
ジライは『ムラクモ』を鞘に収め、巨大な卍手裏剣を拾うと、振り返り馬上の女勇者を見上げた。
「魔法生物を倒す手立ての二つ目は、魔法生命の核となっている呪具を壊す事。呪具は、胸部、腹部、頭部などの失いづらい箇所に、たいてい埋め込まれている」
「ジライ……」

「それから、これ……」
アカハナと呼んでいた忍者のものと思われる忍刀を拾い、ジライはセレスに手渡した。
「柄をよくご覧あれ。複雑な模様が施されておるだろ？」
「ええ」
「この模様が、物理・魔法障壁を必要に応じて生み出していたのだろう。どのような魔法体系のものかは知らぬ。そちらで研究されるがよい」
「刀が結界を張っていたの？」
セレスの問いに、インディラ忍者姿のジライが頷く。
「生前のこやつらの忍刀に、こんな模様など無かった。又、アカハナ達四兄弟が好んで使っていたは手裏剣・クナイ・火薬玉なでの遠距離攻撃武器、忍刀に執着する奴等ではなかったし、忍法もさほど得意ではなかった。『勇者の剣』や竜巻をはじく結界など、こやつらに張れるはずもない。そう思い、気づいた」
「ジライ……」
「次からは、敵に怪しげな武器は持たせぬことだ。真っ先に、敵から武器を弾けば、こたびの我のように楽に勝てますぞ」
「……あなた、部下の亡骸まで魔族に盗られていたのね」
「……」
ジライはふいに横を向いた。
「……あなたには、かかわりの無き事じゃ」
そう言うや斜面を飛び下り、姿を消してしまう。
「待って、ジライ！何で私を助けてくれたの？」

今、あなたに死なれては困る……

何処からともなく、そう、声は聞こえた。

黄昏の河　6話

三日後……

第三王子ドローナの離宮で火災が発生した。内部からの出火が原因だった。

第三王子は北部別荘で静養中で、離宮にはごく一部の召使しか残っていないはずだった。しかし、中から、何故か多くの悲鳴が聞こえたのだ。

幸いなことに、その時、大僧正候補のナーダが、宗教儀式の為に、たまたま、十人の僧侶を王宮に招いていた。僧侶達は離宮を覆う巨大な結界を張り、内部を真空状態にして短時間で火災を鎮火した。建物の被害が軽微で済んだのも、彼等のおかげだ。

火災を起こしたのは、大魔王教徒であった。

女勇者セレス、武闘僧ナーダ、赤毛の戦士アジャン、東国の武闘家の少年シャオロンは、王宮の森を散策中に、たまたま、離宮の隠し通路の出口にあたる場所に行きつき、雨後の筍のごとく秘密通路より現れる怪しげな一団を発見した。大魔王教徒とわかり、できうる限り捕え、抵抗する者は斬った。捕縛した者は八十を超え、斬り捨てた者（王宮付き忍者も含まれていた）の数はそれを上回っていた。

王宮の近衛兵立ち合いの下、女勇者一行は鎮火後、第三王子ドローナの離宮を調べた。

第三王子の離宮は、大魔王教徒の巣窟と化していた。おぞましい人体実験の工房が何部屋にも渡ってあり、地下には氷詰めの死体が所狭しと並べられていた。又、大量の魔薬が発見され、大魔王教徒が『戦士の矛』を常用している事も判明した。

ドローナの実弟、第六王子ルドラカと第八王子チャンドルの離宮からも、同じような工房が発見された。

こととここに至っては、悪事はもはや明らかであった。
大魔王教徒を匿い保護していた罪で、宰相・財務大臣・侍従長が逮捕された。王宮付き忍者軍団も隠ぺいに協力していた嫌疑があった。が、忍者頭のカバーリが三日前から行方不明の為、副頭領と数人の上忍を逮捕するだけに処置はとどめおかれた。
捕縛され、観念したのか、大臣や大魔王教徒達は、第三王子を祭り上げ王位簒奪を企てたのだと自供した。
陰謀の首謀者は第三夫人サラス。
第二夫人アヌラーダの栄華を妬んでいた彼女は、王位継承権を持つ第二王子ドゥリヨーダナの抹殺を魔族に依頼し、代償としてその城に居た家臣達の命をも捧げ、歪んだ願望を叶えたのだ。息子の第三王子達に呪いをかけたのは自分達一族も陰謀の被害者だと装う策だった。息子達を呪いの病で伏せさせている間に、数多くの魔人を生み出し、国王を亡き者として実権を得る計画だったのだ。
陰謀に加担した貴族達の多くが、サラスの親族であった事も、その証言に真実味を与えた。
ただちにサラスの元へ近衛兵が向かったが、彼女の姿は後宮から消えていた。
北部別荘の彼女の息子達も同様だった。別荘は無人となっていた。第三・第六・第八王子達と家臣達は、第二王子が失踪した時同様、一晩のうちに忽然と姿を消していたのである。百二十人にも及ぶ人間が一晩で消えたのである。
国王は謀反を未然に防いだ女勇者に感謝した。
しかし、女勇者は、世継ぎの第二王子殺害の確たる証拠がない事、黒幕とされる第三夫人サラスと第三・第六・第八王子が行方が知れない事を理由に、今しばらく騒動が続くと忠告。現在、王位に最も近い第四王子カウラヴァが次の標的とされる可能性を示唆し、彼の護衛を務めたいと申し出た。

国王は最初、難色を示した。女勇者一行の全員が王子の護衛にあたる事を快く思わなかったのだろう。その中に次期大僧正候補が含まれていた為に。

だが、火事から四日目、女勇者の願いを聞き入れ、四人をカウラヴァの離宮へと向かわせたのだった。

第三王子ドローナの離宮の火災の出火原因は不明だった。出火場所は、火の気のない魔薬倉庫。大魔王教徒の煙草の不始末と、思われた。

火災は、魔薬――麻薬・興奮剤・眠り薬・痺れ薬・毒薬を焼いた。人の中枢神経を狂わせる煙が大量に外に漏れる危険があったが、十人の僧侶が建物の周囲に結界を張った為、大事には至らなかった。

濃度の濃すぎる魔薬の煙は危険だ。ほんの少し吸っただけで、呼吸困難・意識障害の重体に陥る例もある。僧侶達が建物の周囲に結界を張ってくれねば、大惨事となっていた事だろう。

第三王子の離宮に火を招いたのは、赤毛の傭兵アジャンだった。『戦士の矛』をはじめとする魔薬は消耗品。大量に使用すれば補充の必要がでる。その読み通り、岩山の要塞城跡の戦闘より二日後、アジャンがのっとった魔薬屋に『戦士の矛』を十箱、買い求める客が現れた。

その店の従業員に扮したインディラ忍者（ナーダの部下）は、特殊な揮発性の油と火薬を底に仕込んだ木箱を中に混ぜ、客――大魔王教徒に『戦士の矛』を販売した。揮発性の油には、一定時間、乾燥した場所に置いておくと発火する性質があった。長年、傭兵と暮らしてきたアジャンは、トゥルクの工作部隊より教わったその油に詳しく、翌日発火するよう分量を計算し、販売直前に油を仕込むよう忍者達に渡していたのだ。

魔薬から火を広げると聞いて、武闘僧ナーダは結界魔法が得意な十人の僧侶を王宮に呼び寄せ、三王子の離宮そばに数人づつ待機させていた。どの離宮で火災となっても対応できるように。年々広がる魔薬の被害を憂いている武闘僧は、魔薬の煙がもたらす惨事を憂慮したのである。

第三王子の離宮にあった魔人製造工房の破壊に成功した、女勇者一行。

後は、ウズベルのあぶり出しだけだ。

赤毛の傭兵アジャンは、椅子の上のぶくぶくに太ったなまっちろい男をじろじろと見つめた。大きな耳輪、大粒の真珠の首飾り、金銀無垢の腕輪、全ての指を飾る大きな宝石の指輪……国王よりも装飾品が多い。

目の前の人物こそが、ラジャラ王朝第四王子カウラヴァ（第二王子の実弟）だ。カウラヴァは、女勇者が警備上の注意点を説明するのを、椅子の上にふんぞりかえって座って聞いている。あの姿勢が威厳ある態度という事なのだろうか？

カウラヴァの視線は何度となく女勇者を飛び越え、その斜め後ろに控えている者に向いていた。侮蔑と不安をこめた視線を、義兄に向けているのだ。

「で、何か気づきました？」

カウラヴァの傍にはセレスとシャオロンを残し、控えの間に下がってから武闘僧は赤毛の傭兵に尋ねたのだが。

「おまえとあの王子、全然、似てないな」

「……いえ、そういう事ではなく」

「あいつ、二十そこそこなんだろ？そのわりに老けた顔をしている。髭のせいというより、覇気がなさすぎるからだな。おまえより年上に見える」
「……だから、そういう話ではなく」
ナーダは声を落とし、アジャンに耳打ちした。
「嫌な感じはしましたか？魔族の傍にいる時のような」
赤毛の傭兵は眉をしかめ、首を傾げた。
「いや」
「そうですか」
「周囲に魔族の気配が漂ってるが、あのボンクラ王子からは危険な感じがしない。あくまで俺の勘だが」
「いいんです。私はあなたの危機察知能力を信頼してますから」
「俺の勘じゃ、あのボンクラ王子、クロだ。ただの人間にしちゃ、妙に魔の気配が濃すぎる……だが、そうだとしても、小物だな。ウズベルじゃない。魔族の駒ってとこか」
「……人気（ひとけ）のない所に連れ出して、締め上げましょうか？王族の血の上にあぐらをかいてるだけの根性なしですから、すぐに白状するでしょう」
「おい、おい」
「幸いなことに、王宮付き忍者軍団は、今、上層部を失って半壊滅状態ですからね。護衛役の忍者をまくのは、それほど大変じゃないと思いますよ」
「……おまえ、目的の為には手段を選ばない性格に、最近、磨きがかかってないか？」
「気のせいでしょう」
武闘僧がツーンとそっぽを向いた時……
「暗殺者だ！」
「カウラヴァ様のお命が狙われたぞ！」
近衛兵達の叫びを聞き、二人は控えの間を飛び出した。

それから三日の間に、カウラヴァ第四王子は五度の襲撃を受けた。いずれも、女勇者一行の活躍で、第四王子に怪我ひとつ負わせる事なく、暗殺者を倒せたが。

王子は最初は余裕を見せていた。離宮で血を汚すな！とか、暗殺者を皆殺しにしてしまっては依頼した犯人がわからないではないか！（生かしておいても暗殺者は自害してしまうのだが）とか、主にナーダに向け『無能者めが！』とか怒鳴っていた王子も、三度目の襲撃の後からは気弱になった。

顔色も悪く、絶えず不安そうに周囲を見渡し、どこへ行くにも必ずセレス達を伴うようになった。食事前には小姓に毒見をさせ、トイレや風呂にまで勇者一行を連れて行こうとする始末。

「精神が不安定になっている今こそ、白状させ時（どき）です」

とのナーダの言葉を受け、脅し役アジャンと聞き手セレスが王子を尋問する事となった。

まず、アジャンがカウラヴァ第四王子に『何か隠し事をしているだろう？』と詰問。

おそろしげな大男に迫られろたえる王子を、白銀の鎧姿の美少女勇者がかばう。

「カウラヴァ様にも深いご事情がおありとは存じますが、私達に隠し事はおやめください。護衛しきれなくなります。襲撃者にお心当たりがおありなら、どうかお教えください」

ナーダの指示にのっとって『にこやかに、愛想よく、目をぱちぱちとしばたたかせ、女らしい仕草をまじえつつ、かわいらしく』セレスは王子を説得してみたのだが、効果はなかった。王子は怯えながらも口を割ろうとしない。

赤毛の傭兵が目で合図を送って来る。

セレスは頷き、口調を変えた。
作戦は第二段階へ。
セレスは悲しそうに王子を見つめ、それから片膝をついて座り、王子に対し深々と頭を下げた。
「お心を開いていただけなくて、残念です。こうとなっては、私達がお傍にいる意味はありません。今日中に離宮をお暇(いとま)いたしましょう」
暗殺者を退けてきた女勇者一行に見捨てられては命に係わる。第四王子は王族の誇りをかなぐり捨ててセレスに媚び、助けてほしいと哀願した。
そこで、ほろっと、セレスがほだされそうになるのを……
赤毛の傭兵が小突いたり、耳元で恫喝したり、足を踏みつけたりしてどうにか止め、隠し事を包み隠さず全て話してもらう事を条件に、護衛役を再び引き受ける事とした。
「正直に言う。だから、怒らないで聞いてくれ」
王子はおどおどとセレスを見つめた。
「あなた方が僕の護衛についてすぐの襲撃は……最初と二度目は……僕の放った刺客なのだ。暗殺者に僕の命を狙う振りをさせて、女勇者のあなたを殺すよう依頼したのだ」
「まあ」
セレスは、『何を聞かされても怒らないように。愛想よく、かわいらしく、まるで第四王子に気があるみたいに振る舞うように』と、指示されているので、うるうると瞳をうるませつつ、王子に尋ねた。
「どうして、私の命を狙われたんですか?」
悲しいですわと、小声でつぶやき、そっと顔を伏せる。
アジャンは……この大根が!と、内心、セレスの演技に腹を立てていた。台詞に、まるで心がこもってない。慣れぬ媚態もわざとらし過ぎる。
しかし、世慣れぬ王子にはその演技でも充分すぎたようで、セレスの手を取り、顔をあげた彼女のその愛らしい顔をジッと見つめた。

「すまない。悪かった、許してくれ。僕が間違っていた」
「はい。何かご事情がおありだったのでしょ？」
「うん……カバーリが……」
「カバーリ？王宮付き忍者の忍者頭ですね？」
「カバーリがあなたを殺せと言ったのだ。僕は、あいつに逆らえないんだ」
「どうして、王宮の忍者軍団の頭が私の命を狙ったんです？」
「それは……」
カウラヴァは泣きそうな顔となった。
「本当に……何を言っても怒らないと……約束してくれるか？」
「もちろんですわ！私、カウラヴァ様の真心を信じますもの！」
内心『男のくせに、いつまでもグダグダグダグダ！みっともない！』と、思いつつ、セレスは笑みを浮かべていた。カウラヴァ王子以外には通用しなかろう、ひきつった笑みだった。
「僕はずっと……カバーリに逆らえなかったのだ。兄上の誘拐に加担してから……」
「誘拐？」
「うん……」
そのまま黙ってしまった王子を促す為、セレスは質問した。
「第二王子ドゥリヨーダナ様は、ご生存なのですね？」
「うん……」
「それは何よりです！ご無事と伺って安堵しました」
「うん……」
「カウラヴァ様に手伝わせて、兄上様を誘拐したのが、忍者頭のカバーリなんですね？」
「うん……」
「ご家来の方々をさらったのも、カバーリですか？」
「うん……あいつは、僕に王位をくれると言った。兄上を消し、第三王子のドローナに不治の病をかける。だから……代わりに、神像を幾つか壊して欲しいと、奴はそう言ったのだ。昨年の五月の

ことだ……」
「神像？」
「この王宮の東西南北あちこちにあった神像だ。それを十二体、壊せと奴は言った。壊すのなど、無理だと思った。祭司が毎日のように祈りを捧げている神像なのだから。そしたら、盗むのでもいいと言ったので、だから、僕は……同じような神像を石工に造らせ、買収した祭司にすり替えさせた。十二体も造らせたので思ったより時間がかかってしまって、全部、終わった時には七月になっていた。その頃には、もう兄上は別荘に移られていて……そしたら、カバーリは」
「カバーリは？」
「今度は別荘の神像を壊せと言った。三つでよいから、と。王宮と違ってあそこは祭司がいないから、贋物を造らせるのも面倒だし、あちらのは兄上付きの近衛兵を買収して壊させた。そしたら……三日後に、」
カウラヴァは言いにくそうに話を続ける。
「あの消失事件だ。兄上もその家来も、一夜で、別荘から消えた。カバーリは約束を果たしたと、僕に笑った。だが、正直、ぼくは……あいつが何を考えてるのか、何をしたいのか、さっぱりわからない。なぜ、兄上だけでなく召使まで連れ去ったのか、なぜ僕に神像を壊せと言ったのか、どうやって兄上たちに病をかけたのか、何一つわからない」
「兄上様は今どこに？」
第四王子はかぶりを振った。
「カバーリしか知らない。異空間に幽閉しているらしい」
「異空間？」
「よくわからないが……兄上を生かしたまま、時空の間（はざま）に閉じ込めたのだそうだ」
「時空の間に？忍者が王子を？」
セレスは目の端でアジャンと視線を交わした。傭兵も頷きを返す。

「忍者にそんな魔法が使えるのでしょうか？」
「使えると奴は言っていた……だから、ぼくは、あいつの言う事をずっと聞いてきたんだ。カバーリが兄上をこの世に戻したら……僕は逮捕される。あいつ、兄上に、僕が誘拐を依頼したんだって教えたと言っていた。だから、ぼくは、今までやむなくカバーリの言いなりになってきたんだ。七月からずっと……」
「カバーリは今、どこに？」
「知らない。一週間前の火事の時はここに居たのだが、ずっと戻らない」
「カバーリは火事の前からずっと行方知れずでしたが、生きていたんですね」
「生きているとも。カバーリは、ドローナ達を誘拐したり、大臣達の元へ行ったり、何かいろいろやってるらしい。僕の離宮には奴の部下だけが残って、好き勝手をやっている。あいつら、何かと言うと『カバーリ様に逆らえばお命にかかわりますよ』と脅してくるんだ。だから、奴らがサラス様を誘拐してきた時も嫌だったが、逆らえなかった。第三夫人はこの離宮の地下に、幽閉しておいたのだが」
第四王子カウラヴァは大きな溜息をついた。
「五日前にいなくなってしまった」
「カバーリが移送したんですか？」
「違う。賊が侵入し、監視役のカバーリの部下を殺し、第三夫人サラス様をさらったんだ。いや……賊ではなく、第三夫人の配下の忍者かもしれない。いずれにしろ、ここにはもう第三夫人はいない」
セレスとアジャンは顔を見合わせた。第三夫人を発見・拘束したという話は聞いていない。救出者は王宮関係者でも寺院の者でもないようだ。
「カバーリは怒って、ぼくを殺すと言ったのだそうだ。奴の部下がそう言っていた、殺されたくなかったら女勇者を殺せと……だから、僕は父上と母上に頼んで、あなた方を護衛役にしてもらったんだ。でも、あなた方は、とても用心深く、この王宮に着いてからず

っと、ナーダ殿の部下が運ぶ物しか口にされないと聞いて……それで、毒殺ではなく、暗殺者を雇って殺そうと、そう思って……」

「最初と二度目の襲撃はカウラヴァ様の雇った刺客だとおっしゃいましたが、三度目からはどなたが？」

「多分、カバーリだ。ちっともあなた方を殺せぬ僕に業を煮やしたんだろう。あなた方と一緒に、きっと、僕も殺す気なのだ……僕の護衛役の忍者は、皆、あいつの部下だ……昨日まで僕を警護してくれた部下が、今日は刃を向けてくるかもしれない！怖くて怖くて気が狂いそうだ！女勇者殿、お願いだ！僕を助けておくれ」

そうすがりついてくる肥満体を、セレスは困ったように見つめた。

「このお話、国王陛下にお伝えください」

「そんな！こんな話をしたら、僕は犯罪者だ！死罪になってしまう！」

「ですが……でも、えっと、このままじゃ……」

困惑するセレスに代わり、赤毛の傭兵が進み出る。普段とまるで異なる真面目な顔をつくり、カウラヴァに対し臣下のように礼を取って跪く。

「女勇者様もカウラヴァ様と共に、国王陛下の御前に参ります。国王陛下は慈悲深いお方、事情をお話しになれば、厳しい処分をなさるはずがありません」

「……そうであろうか」

「むろん、多少の処罰はありますでしょう。そのお覚悟は必要です。しかし、カバーリは、おそらくは、大魔王四天王の一人ウズベルです。強力な魔族です。あなた様は強い術をかけられ、心を操られていたに過ぎません。国王陛下も、寛大なご処分を下されるはずです」

「……そうだとよいが」

「国王陛下が厳罰を下されるようでしたら、我が主人、女勇者様が黙ってはおられません。勇者の名にかけて、必ずやカウラヴァ様を弁護し、お救いくださるでしょう」

「まことか、女勇者？」

「え？ええ。もちろんです」
アジャンに小突かれ、セレスはにっこりと笑みを浮かべた。そして、目で赤毛の傭兵に感謝の気持ちを伝える。筋書きと違ってきてしまって混乱したセレスに代わり、話をまとめてくれたのは、彼だ。
「落ち着いていけ、女勇者様。交渉事は、状況に応じて臨機応変に」
と、小声でボソッと囁かれ、セレスは頷きを返した。
「しかし、カバーリが魔族であったとは……意外ではあるが、妙に納得もゆく」
カウラヴァは顎の下に手を当て、太い体を揺すった。
「兄上やドローナ達に謎の病をかけたり、召使ごと誘拐したり……忍者にしては力がありすぎるとは思っていた。それに、あいつは女勇者殿の暗殺に妙にこだわっていた」
「そうなのですか？」
「うん。あなたがエウロペを旅立たれてじきに、あいつ、僕に陰謀をもちかけたのだが、同時にあなたにも刺客を放つと言っていた。あなたの護衛役の大僧正候補ナーダ殿の権威を失墜させる為に、と。勇者が死ねば、従者は面目を失う。ナーダ殿は大僧正候補で国民の人気も高い、今のうちに民の支持を失わせてしまおうっと」
「はあ……変な理由ですね」
「僕も、そう思った。僧侶の権威など、しょせん、信仰上のこと。実権があるわけではない。国王にはかなわぬ。だから、やってもよいが、あまり部下をさくなと答えた。カバーリは何度かあなたに刺客を送っていたが、それだけではなくジャポネの忍者の里にあなたの暗殺も依頼していたようだ」
「え？」
セレスは口元を手で覆った。
では、ジライの依頼主は……
インディラ王宮付き忍者のカバーリ？
「それは、又、妙な話ですな」
相手の口をより軽くさせる為に、アジャンが口をはさむ。

「インディラ忍者と東国忍者は犬猿の仲のはず。暗殺者を雇うにしても、東国の忍者を利用するとは……」
「インディラ忍者からの依頼ならば東国忍者も面子をかけて女勇者を確実に殺すだろうと、カバーリは考えたようだ」
カウラヴァは、チラリとセレスを見た。
「結果として……奴の読みは外れたが」

その日の夜、第四王子カウラヴァは父王に己の罪を告白した。セレス達勇者一行――セレス・ナーダ・アジャン・シャオロンにつきそわれた第三王子は、国王に媚び、多少、都合の良いように話をつくりかえていたが、セレス達に語った通りの事実を父王に伝えた。
父王が息子の話に驚いている様子を見つつ、大僧正候補のナーダは、王宮付き忍者頭の正体はおそらく大魔王四天王ウズベルである事を教え、第三夫人および第二・第三・第六・第八王子救出に寺院も協力したいと申し出た。
インディラ国中を覆う黒雲を祓う為に私情を捨てていただきたいと願うナーダを、国王を複雑な表情で見つめていた。何かを伝えたそうな様子もあった。
だが、特に私的な言葉をかける事はなく、国王はナーダの説得を容れ、『ウッダルプル寺院支部のジャガナート僧正を王宮に招き今後を話し合う、その為の準備を頼む』と、だけ大僧正候補に伝え、後は彼を無視し女勇者とのみ話をした。

翌日……

「寺院と王宮って、本当、仲が悪いのね。国王陛下、ナーダの顔を、まともに見ようともしなかったもの」

第四王子カウラヴァには寺院付き忍者が警護についている。
勇者一行は会見が予定されている会議室――孔雀の間を見回っていた。ナーダはジャガナート僧正を迎えにウッダルプル寺院に向かったので、セレス、アジャン、シャオロンの三人だ。
会議室にはもったいない贅沢な造りの部屋だ。広間のように広い部屋は職人芸術の粋を極めた壁面装飾に覆われており、ペリシャ風の美術品が並べられ、宝石とガラスと鏡をふんだんに使った（実物大の）孔雀が何羽も羽根を広げている。
『龍の爪』入り革袋を背負ったシャオロンは、たいへん高価そうな家具や芸術品を、おっかなびっくり見て回っていた。ほんの少しの邪悪の気配も見逃すまい！と、きょろきょろと周囲を見渡している。
部屋の中央には、エウロペから取り寄せたのだろう巨大な卓が縦に並び、数多くの椅子があった。五十人は席につけるだろうそれらを眺めながら、『勇者の剣』を背負う女勇者はポツリと呟いた。
「インディラでは大僧正が国王以上に民から慕われているって言うものね。国王と大僧正で権威争いでもしてるのかしら？」
赤毛の傭兵アジャンの頬がひきつる。
「……セレス、おまえ、国王の顔、見たのか？」
「見たわよ」
それがなあに？という顔で、セレスが首をかしげる。
まだ気づかないのか……アジャンは頭痛を覚えた。あの二人が仲が悪い理由は顔を見れば一発でわかりそうなものだが。
「王宮と寺院の対立は、おそらく、二十二年前からだ。世継ぎ問題が仲がこじれた原因だろう」
王宮を離れ、情報屋グジャラの元を訪れた時、或いは魔薬屋を乗っ取った時、アジャンは用事を済ませた後、街の老爺達を探し、それとなく王宮と寺院の噂話を聞いてきていた。
信心深いインディラ人達は、次期大僧正候補の話をする時には、必ず合掌をしていた。
『今世の大僧正候補様は、ありがたくも先代勇者の従者ナラカ様の

甥御様で、国王陛下のご長男。本来は国を継ぐべきお方なのじゃが、あまりにも尊きお力を持ってお生まれになったので、寺院より大僧正候補に望まれて俗世を離れられたのじゃ』

皆、口々に、ナーダの出家を寺院からの願いだと言っていた。が、こんな気になる話をした老人もいた。

『大僧正候補様のご出家よりも前に、国中に噂が流れてましてな。第一王子様は重い病にかかられ、足は萎え、頭も熱でおかしくなられたとか……。廃嫡される日も近かろう……と。不敬極まりない噂じゃったが、その頃、第一王子様はずっと後宮にこもられておったしのう。最後にお姿を拝したのは……確か王子様の五歳の生誕祝いのお祭りの時。お姿をお見せくださらないから、そんな噂が立ったんじゃな』

別の老爺はこうも言っていた。

『第一王子様が、今の尊いお方となりえたのは、ひとえに大僧正様のお力。神の奇跡で、大僧正候補様は病が癒えられたのじゃ』。

――つまり、こういう事かと、アジャンは推測した。

正当な王位継承権を持っていた幼いナーダは、病に仕立てあげられて公式の場から遠ざけられ、第二夫人達国王夫人やその親族に命を狙われ、暗殺されるか廃嫡されるかの瀬戸際にあった。

その哀れな王子を、『大僧正候補として迎え入れる』という名目をもって、インディラ寺院が保護したのだろう。

何故、ナーダが武闘僧となったのか……アジャンにはわかる気がした。

負けず嫌いでプライドの高いあの男は、事実無根の噂を流された事を屈辱に思ったのだろう。自分の心身が健康であると広くしらしめたかったに違いない。インディラ一の武闘僧のみが、神獣クールマの神聖防具をまとう事を許される。誰の目から見てもわかる、優秀である証だ。それを欲したのだろう。

又、お飾りの『大僧正候補』でいる事にも耐えられず、信仰、学問、武術、魔法、あらゆる事を学び、『大僧正候補』と称えられる

のにふさわしい人物になろうと……何事においても一番になろうと……そう努力してきたのだろう。

「世継ぎ問題？第二王子ドゥリヨーダナ様と第三王子ドローナ様の？」

きょとんとした顔でセレスが尋ねる。

「……」

赤毛の傭兵はぼりぼりと頭を掻いた。もう二度と……この鈍い馬鹿女とまともな会話なんかしようとするものか！と、思いつつ。

「無駄口叩く暇あったら、働け！変な仕掛けがないか調べるんだ！会議の護衛は俺達の仕事だ！」

怒鳴る傭兵に、セレスはムッと顔をしかめた。話を途中で打ち切られたのが不満なのだ。

「セレス、一つ、忠告しておく。王宮と寺院の仲違いの理由、ナーダには聞くなよ。あいつ、最近、過激だからな、すぐぶち切れるぞ」

「いくら、私でもそこまで無神経な事はしないわ」

「どうだか」

「しないわよ！だって、ナーダがつらそうなのは、知ってるもの！」

「つらそう？」

「インディラ国に入る前からずっとピリピリしてて……ずっと不機嫌だったでしょ？国に何か嫌な事があるんだなあって思ってたけど、でも、何っていうか、泣きそうな……すごく悲しそうな……そんな気持ちがそばにいると伝わってくるの」

「……どういうことだ？」

「わからないわ。わからないけど、そう感じたの。ナーダが王宮と寺院の対立で、心を痛めている……ううん、何か、それもちょっと違う気がするけど、王宮と寺院のことで問題を抱えているのよ」

「……」

「一人で解決しようとしているみたいだし……時がくればきっと私達にも話をしてくれると思ったから……何も聞かないようにしてきたの。でも、ナーダなら大丈夫。何だって乗り越えられる。信

頼できるわ、仲間ですもの」
「セレス、おまえ……」
赤毛の傭兵が次の言葉を続けようとした時、会議室の扉が開き、近衛兵が現れる。
「女勇者様、至急、後宮においでください。第三夫人サラス様がお戻りになられました」
反乱の嫌疑をかけられたまま誘拐され、カウラヴァの地下牢から六日前に姿を消した第三夫人が？
どうやって戻られたのか？と尋ねると、近衛兵は答えに詰まってしまった。
「それが……サラス様も、気づいたら、後宮のご自分のお部屋に戻られていたと……。侍医によると、どうも、ここ数日のご記憶を無くされておられるようで……」
「じゃあ、誰に助けられたのかも、どうやってここ数日を過ごされたのかもわからないのね？」
「はい。ですが、至急、国王陛下や女勇者様のお耳に入れたい事がおありとの事。女勇者様、後宮までご足労いただけませんか？」
「いいわ」
第三夫人サラスが魔族に憑かれていないか、妖しげな術をかけられていないか、直接会って確かめるべきだろう。
赤毛の傭兵は、東国の少年を呼び寄せた。
「場所が後宮じゃ、俺ぁ、無理だろうが、こいつなら同行させてもよかろう？」
近衛兵は少年を上から下まで見つめた。シャオロンもじきに十三になるが、東国の人間は年齢より若く見られがちだ。
「まあ、子供なら……」
子供と決めつけられ、ム～と顔をしかめるシャオロン。アジャンは少年にそっと耳打ちした。
「しっかり、セレスを守れ。おまえの目から見て、第三夫人が変だと思ったら切れ」

「アジャンさん……」
「おまえなら、魔族かそうじゃないか、一発でわかるはずだ。後宮の女だろうが構う事はない。俺達は勇者一行だ、女勇者の安全を第一に考えろ」
少年は真面目な顔となり、頷きを返した。

黄昏の河　7話

「ナーダ様、ようするに、わしに餌になれとおっしゃってるのですな？」

「その通りです。私、ジャガナート様のお願いを聞いて王宮でスパイごっこをしたのですから、今度はジャガナート様の番です。私のお願いを聞いて、ウズベルを呼び出す餌になってください」

ウッダルプル寺院、僧正の修行房。

ジャガナート僧正は六十過ぎとは思えない逞しい体を揺らし、豪快に笑った。

「国王、ウッダルプル支部僧正、大僧正候補、それに女勇者！その内の誰か一人でも殺されれば混乱は必至。ウズベルめ、わしかナーダ様が死ねば寺院が国王に挙兵するよう仕向け、国王が死ねば寺院側の犯行と偽装し寺院に軍隊を派遣しましょう。又、女勇者殿が亡くなれば、この世は終わり。魔族の未来が来る……。どう転んでも、優位に運べる。相当、本腰を入れてせめてくるのではありませんか？」

「更に条件の悪いことに、舞台は王宮なのですよ」

ナーダはにっこりと笑みを浮かべた。

「戦争をしに行くわけではありませんから、ジャガナート様が伴なえる侍僧は……三人ってところですね。この寺院で最も優秀な武闘僧達をお選びください」

「それは無理じゃな」

ジャガナートは、からからと笑った。

「この寺院一の武闘僧は未だにこのわしですのでな！弟子どもの中から、適当なのを選ぶといたそう」

「結界魔法が得意な方はいらっしゃいますか？」

「結界魔法……ですかな？」

とたんに、ジャガナートの顔が渋くなる。老武闘僧は格闘技は神

業、知略にも富んでいる。しかし、魔法はあまり得意ではない。初級の回復魔法と浄化魔法しか使えないのだ。その弟子も、師を押して知るべしだ。

「いえ、やはり、浄化魔法と格闘が得意な方にしてください。生き延びねば意味がありませんからね」

「ならば、良い弟子がおる」

と、僧正の顔がにこやかになる。

「……結界は私が張りましょう」

ナーダは溜息をついた。

「結界魔法は、あまり得意ではありませんが……」

ナーダの魔法では、十メートル四方程度の結界でも、三十分ほどしか維持できない。宮廷魔術師に助力を頼むとしても、ウズベルを結界内にとどめおける時間は短いだろう。

「そうじゃ。王宮には、まだ、結界魔法が得手な僧侶が十人とどまっておる。その者らに結界を任せてはいかがかな？」

「無理です。彼等は他の仕事をしていますから」

「ほう」

「スパイをやっててわかったのですが、王宮中の防御魔法陣・厄除けアイテムが全て破壊尽くされていたんです。神像、浮彫、聖石などが、形だけが似ている神聖さの欠片も無い贋物とすり替えられていました。ここ数日で可能な限り、新たなものを設置したりして術をかけ直したんですが、まだまだ、あそこ不安定な場で……百万の魔族が忽然と現れても不思議はありません」

「それは物騒な」

「十人の僧侶達には、大口の侵入口を塞いでもらっています。彼等が頑張ってくれていますから、魔族が侵入できるとしても、百か、まあ、いっても二百ですね。その程度の数なら、ジャガナート様の敵じゃありませんよね？」

「ですな！後日、正式に王宮の防御魔法陣を張り直させましょう」

「防御魔法陣や厄除けアイテムを破壊したのは、アヌラーダ様の愚

かな次男と、買収された王宮の祭司達です。王宮のミスなんですから、めいっぱい恩を売ってください。祭司長達の首をすげかえるよう陛下にご助言もお願いします。賄賂に動かされなかった者にしても、聖なるものがすり替えられているのに気付きもせず、毎日、儀式を執り行ってたんです。役立たず度は一緒。全員、首でもいいと思います」

「王宮の人間が聖なる結界を壊したか……やれやれ。どこも、愚かな内通者が出るものだ。まあ、それだけ、魔族が人につけいるのがうまいという事でしょうなあ」

「……欲深いから惑わされるのです。王宮は魔族に侵入されないよう、されたとしてもその能力を著しく狭めるよう、聖なるものによって守られていたのに……魔族が自由に動ける場所を人間がつくりあげてしまうなんて……どこまで愚かなのでしょうね」

口元を歪めて笑う、ナーダ。ジャガナートは複雑な生い立ちの弟子に対し、あくまで明るく、大きな声でこう言った。

「いろいろと話し合わねばいけませんな！せっかく国王が寺院と同じ席に着く気になってくださったのだ、生き延びて、あれこれやらねばなりませんな、ナーダ様！」

その日の午後遅く、大僧正候補ナーダの案内でウッダルプル支部僧正ジャガナートが三人の供を連れて王宮を訪れた。

僧正級の上級僧が国王との会見の為に王宮を訪れるなど、実に二十二年ぶりの事であった。この二十二年、国王は寺院と疎遠であった。定期的な宗教儀式・冠婚葬祭以外は僧侶の王宮立ち入りを禁じ、（国王の特権である）大僧正との接見ですら拒み続けていたのだ。

王宮は、いつにない緊張に包まれていた。王宮の警備にあたる近衛兵の数も常を上回っている。

孔雀の間――絢爛たる会議室で国王とジャガナート僧正の会談は始まった。武器と盾を手に、部屋の壁の前にずらりと並ぶ三十人

の近衛兵に警護されながら。
王宮側の出席者は国王と国務大臣他三人の大臣と大将軍の六名、寺院側はジャガナート僧正と大僧正候補ナーダと三人の侍僧の五名。警護役と女勇者一行（セレス・アジャン・シャオロン）だった。
シャオロンと共にセレスが後宮から戻ったのは、会議開始直前だった。時間がなかったので、赤毛の傭兵に対しては『第三夫人は大丈夫だったわ』としか伝える間はなかった。
セレスは国王の後ろに回り、その耳元に小声で何かを囁く。国王は安堵の表情を受べ、セレスに対し何かを囁き返していた。第三夫人の帰還でも報告したのだろうか？
そのままセレスとシャオロンは国王側の警護陣に加わり、アジャンは反対の寺院側に入った。

異変に最初に気づいたのは、やはり、赤毛の傭兵であった。
異空間に封じられた人間の救出方法を、ジャガナート僧正が説明している時だった。術師を殺せば（たいていの場合）囚われていた人間は元の世界に戻る。囚われ人の縁者が呼び役を務めれば、帰還の可能性はより高まる。
そう説明するジャガナートの背後まで歩み寄ると、赤毛の戦士は腰の『聖王の剣』をやおら抜刀したのである。
殺気に敏感に応え、避けるジャガナート。
腰を浮かす武闘僧達。
満座の注目を浴びる中、アジャンは『聖王の剣』を振りおろし、中央の卓を真っ二つに叩き割ったのだった。
その瞬間……
血とも泥ともつかに赤黒い粘り気のある液体が、ごぼごぼと断面から吹き上がった。
赤毛の傭兵は何もない空を『聖王の剣』で斬り、武闘僧ナーダをじろりと睨んだ。

「来るぞ……魔族だ。部屋中から来る」
続いて動いたのは東方の少年だった。セレスと共に国王の斜め後ろに控えていた少年も、何もない宙を切り、両爪から聖なる水を散らした。
人間には冷たく心地よい清らかな水だが……
魔族にとっては猛毒も同然だった。椅子や床からシュウシュウと音を立て煙があがる。小動物の鳴き声のような、キーキーと耳障りな甲高い音も響く。
武闘僧の中で一番、見鬼の才がある者が立ち上がった。
「ジャガナート様、この部屋に無数の次元通路がございます」
「許す、壊せ」
「は」
武闘僧は神聖魔法をこめた拳を振るい、壁を叩いた。常人の目には魔の姿は見えなかったが、ぶる～んとゼリーのように壁が動いたのだ。何か異常が起きている事はわかった。
「国王陛下をお守りせよ」
大将軍の命令に近衛兵が動く。
「扉を開けよ、陛下を別室にお移しするのだ」
「駄目だ！開けるな！」
と、赤毛の傭兵は叫んだのだが……
扉前の近衛兵は、大将軍の命令のままに扉を開けてしまった。
扉を半ばまで開けたところで……
飛び出してきた巨大なものに近衛兵は飲み込まれた。
「チッ！」
『聖王の剣』を抜いたまま、アジャンが走る。
ピンク色のぬらぬらと蠢く巨大なものが、扉の中から部屋になだれこんでくる。粘膜とも生き物の内臓とも見える、それが、ぬちゃぬちゃと脈打ちながら、その場に居た者、あった物全てを飲み込み、壁を、床を、天井を這って爆発的に広がってゆく。
悲鳴を上げ部屋の奥へと逃げゆく者達とは逆に、扉へと走る勇者

一行。
『聖王の剣』が、『勇者の剣』が、『龍の爪』が、ナーダの拳が、聖なる力をもってその異常を清めた。
間もなく、ぬちゃぬちゃと蠢く不気味な物は、形を失い、跡形もなく消滅した。
しかし……
開いた扉の先には……
何もなかった。
扉の先には廊下はなく……
ただ、真の闇が広がっているばかりであった。
「移動魔法で部屋ごと別次元に運ばれたようですね」
と、ナーダが呟くと、
《その通り》
と、声ではない声が全員の頭の中に響いた。
《きさまらは、今、光も闇も時も命も存在しない虚無空間に居る。虚しき世界で朽ち果てるがよい》
「あなた、カバーリね？」
『勇者の剣』を背負う女勇者の問いに、答えが返る。
《確かに、今は、その肉体に宿っている》
「言い直すわ。あなた、ウズベルね？大魔王四天王の一人。大魔王から魔人の開発を命じられた魔族なのでしょう？」
《だとしたらどうする、女勇者？》
「あなたと決着をつけたいわ。姿を見せて」
セレスがそう言うと、部屋が揺れ動いた。ウズベルが笑っているのだ。
《愚かな！何ゆえ、俺が、きさまごときの前に姿を見せねばならないのだ！放っておいても、きさまは、そこで朽ち果てる！そこには水も食い物も空気すらないのだ！俺が結界を解いたら、きさまらは瞬く間に死に絶える》
「私は死なないわ、ウズベル」

白銀の鎧、金色の髪の少女が、凛と頭を上げ、天井を見上げた。
「あなた、言ったじゃない、ここは光も闇も時も命も存在しない虚無空間だって。時が流れない以上、私は死なない。『勇者の剣』が私を生かし続けるわ」
《なに？》
「知らないの？『勇者の剣』は魔法剣よ。持ち手が老いさばらえて死ぬか、未熟な技量ゆえに敵に討たれるかしない限り、持ち手を守護し続けるわ。こんな異空間に閉じ込めたぐらいで悦にいるなんて、あなた、馬鹿じゃないの？私は剣ゆえに、元の世界にじきに戻るわ。私を殺したいのなら、私が帰還の手立てを見つける前に、あなたが手を下すべきね」
少女の青い瞳が激しくきらめく。魔族と対等に渡り合う少女には、犯しがたい気品があった。
その美しさに、一同は見惚れていた。
赤毛の傭兵ですら、セレスに心奪われていた。
人間相手の交渉は、セレスは、決してうまくない。心優しい彼女は、他人に感情移入しすぎて、すぐに情にほだされてしまう。冷静にも冷酷にもなれない、ただ、流されるだけだ。
だが、真の敵――魔族と対峙する時、彼女から迷いは無くなる。女神のごとく厳かで、容赦なく魔を滅ぼそうとする強い意志に満ちている。
「ウズベル、私と戦いなさい。それとも、私が、怖い？たかが人間の、しかも、女を……あなたは恐れているのかしら？」
《きさまなど、俺の敵ではない》
「じゃあ、みっともない真似はやめることね。人間相手に隠れるなどやめなさい。人質も要らないはずよ。あなたが捕まえているこの国の王子達を帰しなさい。それとも、無理？やっぱり人質が居なければ、怖くて私と戦えないかしら？」
《人質などいらぬ》
扉の傍の空が揺らぐ。何もない空から現れたものが、音をたてて、

床に倒れゆく。重なり合って倒れているのは王子達だ。四人居る。
皆、眠っている。
《まだ殺してはいない。ずっと、この空間にとじこめておいたのだ》
「いざという時、あなたの服にする為ね？」
《さよう。だが、きさまを殺せば、もはや必要はない。この王国を操らずとも、近い将来、人間界は滅ぶ》
「家臣達は？王子と一緒にさらった家臣達はどうしたの？彼等も帰しなさい！」
《帰して欲しいのか？》
再び部屋が揺れ動く。魔族は愉快そうに笑っていた。
《人体実験で壊してしまった者はもはやこの世におらぬが……よかろう、残りは全部、帰してやろう》
ざわっと全身の気が総毛だつような不快感が、人間たちを襲った。異次元の通路が開いたのだ。
会議室のいたる所から、目を血走らせた者達が現れる。近衛兵、側仕え、召使……老若男女さまざまだったが、皆、武器を手にしていた。『戦士の矛』を服用しているのだろう、目は濁り、息は荒く、口より涎を垂らしている。現れるなり、彼等は襲いかかってきた。
完全に理性を失っている。魔薬で洗脳され、闘争本能のみで動いているのだ。
《まずは座興じゃ、楽しまれよ》
「卑怯者！」
セレスの声は、狂人達の奇声にかき消された。
「陛下と殿下達をお守りせよ！」
大将軍が大声を張り上げる。
武闘僧ナーダが巨大な卓を蹴り飛ばしてぶつけ、向かってくる敵を部屋の端に追いやった。が、敵は後から後からわいてくる。『戦士の矛』に酔う大魔王教徒達も、現れた。
乱戦となった。

女勇者セレス、武闘僧ナーダ、ジャガナート僧正、その侍僧二人、大将軍、近衛兵が、次々に部屋にわいて出る敵を倒していった。セレスと僧侶達は相手を殺さないよう足を狙うなどして動きを奪うだけに攻撃をとどめようとした。が、それも敵の数が増えるにつれ難しくなっていった。

赤毛の戦士アジャン、東国の少年シャオロン、それに神秘を見通す目を持つ一人の武闘僧は、異次元通路の破壊を優先した。聖なる武器、或いは浄化魔法で、現世と異次元との繋がりを断つ。

しかし……

国王、四人の王子（しかも、眠っている）、四人の大臣と、非戦闘員が多すぎる。

敵は戦士としての技量の低い者が多いのだが、魔薬に狂って理性を失っていた。命知らずな敵を相手に、近衛兵達は果敢に戦っていたが、一人、二人と倒れてゆく。

武闘僧ナーダは決断した。敵を殴り飛ばしながら、眠っている義弟達の元へと走る。

「ジャガナート様、国王陛下や文官達をこちらへ」

「心得た！」

老武闘僧の拳は、ナーダのものよりも重かった。彼の突きを受けた敵は、凄まじい勢いで後方に吹き飛び、周囲の敵を巻き添えに倒れてゆく。

ジャガナートに伴われて、国王、大臣、近衛兵が、ナーダの居る扉前に集まる。

「結界を張ります。国王陛下、大臣のお歴々はこちら、殿下達のそばへ」

表には出すまいとしていたが、ナーダは無念を感じていた。結界魔法の為の魔力を、国王達の守護に使ってしまっては、ウズベルが姿を現した時に聖なる結界を張れない事となる。

移動魔法で逃がさぬ為に、結界内に閉じ込めたかったのだが……仕方がない。

後生大事に魔力を温存していたら、国王、四人の王子、四人の大臣の命を見捨てる事になる。父も義弟も、大臣達（第二妃アヌラーダの伯父や兄、いとこにあたる）も、個人的には助けたくもない連中だが。

しかし、僧侶たる者、私情で動いてはいけない。この窮地を乗り越えウズベルを倒すためにも、役立たず達を引き受ける人間が必要だ。国王達の心配をしなくてすめば、他の者は自由に動ける。

国王達に座るよう指示してから、ナーダは武闘の師に真剣な表情を見せた。

「小さな防御結界を張ります。多分、二時間は保つと思いますが、それから先の保証はありません。短期決戦でカタをつけてくれなきゃ、私、確実に死にます。そう、セレスを脅しておいてください」

ジャガナートは頷きを返した。ナーダの言葉は冗談ではなかった。ナーダの魔力と体力が尽きた時、結界は消滅する。もはや、指一本動かせぬほど疲労しきった僧侶など……魔族の恰好の餌食でしかない。

ナーダは座禅を組み、目を閉じ、呪文を詠唱した。

国王、四人の王子、四人の大臣、そしてナーダを包み込む形で目に見えない結界が生まれる。

外からのいかなる攻撃も、いかなる魔法も弾く、強力な防御結界。これで、国王達の無事は保障された。少なくとも、二時間は。

その結界の前に近衛兵が立つ。結界がある間は、彼等がそこにいる意味は無いのだが。よくいえば護衛役として職務に忠実、悪く言えば臨機応変さがないのだろう。

ジャガナートは身の丈ほどもある大剣を振り回す女勇者に、ナーダが国王達と共に結界に籠った事を知らせた。

「二時間以内に決着をつけられますかな？」

「ウズベル次第ね」

女勇者は小柄な体をふらつかせる事なく、巨大な大剣を振り回す。大魔王教徒達の足を狙い、その動きを奪っている。無駄のない攻撃

だ。敵の血に穢されても、臆する事なく戦い続けている。
次第に……
セレスの周囲に近衛兵達が集まって来た。美しくも果敢な戦の女神を守るかのように、インディラの近衛兵達は彼女の背後を狙う大魔王教徒達を倒していった。
「えぇい、くそぉ……キリがねえ！」
赤毛の戦士が獣のように吠える。
塞ぐそばから、新たな通路を開かれてしまうのだ。数こそ減らしているものの、敵の侵入口を塞ぎきれない。
セレスは天井に向かって叫んだ。
「ウズベル！いい加減に姿を見せたらどう？大魔王教徒なんかじゃ、私を倒せないわ！」
《では、これではいかがかな？》
セレス斜め後方の空が揺らぐ。
続いて……
「ぎゃあ」
「ぐぉっ！」
セレスは、背後からの悲鳴に驚き、振り返る。セレスを守っていた近衛兵達が、床にばったりと倒れてゆく姿が見えた。
ひょろっと背の高い忍者がいた。覆面に黒装束、東国の忍者だ。忍刀を手に飛ぶように駆けてくる。
『勇者の剣』をもって相手の刀を受けようとし時……忍者の背中がぼこっと盛り上がった。
（え？）
侏儒だ。長身の忍者は、背中に同じ装束の小人を背負っていたのだ。侏儒が左右の手で投げる四本の手裏剣、長身の忍者の忍刀……
その全てをよけきるのは不可能だった。
女勇者の左手から、影が走る。
カン、カン、カン、カン……と、金属音を響かせた後、耳障りな派手な音を響かせて円盤状の盾が床に転がり、手裏剣が床に散乱

した。
激突の瞬間、左から飛来した盾を避け、剣を引いたセレス。長身と侏儒の忍者も動きを止めている。全員の視線が、セレスの左へと向く。
そこには、一人の近衛兵が居た。タルワール（曲刀）を手にした、口髭をたくわえ、頭にターバンを巻いた色黒の男。男はにやりと笑みを浮かべた。
「素早さと一度きりしかきかぬ奇襲……やはり、それしか売りはないか、マツムシ、コゲラ」
顎をしゃくり、侮蔑の言葉を吐くその男は……近衛兵ではない。
「ジライ様か」
口を開いたのは、ひょろながの忍者の背にしがみつく侏儒の方であった。
「へへ、お久し振りでございます。へへ、よくぞ、人間の身でこれまで生きてこられましたな」
「きさまこそ死んだくせに、元気そうだな、コゲラ」
「へへ、ウズベル様から新たな命をいただきましたから。へへ、ジライ様、あなたも、ウズベル様の軍門に降られるが賢明です。不死身の体がいただけますぜ」
「不死身ではない」
近衛兵はタルワールを構えた。
「一度死んだ者は、二度とは死ねぬ。偽りの肉体に縛られ、現世に惑うだけじゃ」
「負け惜しみを！」
背の高い東国忍者が床を蹴った。狙いは近衛兵姿のジライだ。
「やめて！」
セレスは走った。
二人の東国忍者は、この前の四人の少年忍者同様、ジライの部下だったのだ。命を落とし魔に操られている仲間と、戦わせたくなどない。

父や兄の亡骸と戦ったシャオロンは……愛する者を手にかけてしまった後悔に苛まれている。時折、少年は夜中にうなされる。父や兄に詫び、眠りながら涙を流す少年を……セレスは何度か目にしていた。

魔の呪縛から解放する為には戦い浄化するしかなかった。その選択に間違いはない。しかし……感情的には受け入れられなかったのだろう、父や兄との戦いは少年の心の傷となっていた。

ジライに仲間を斬らせたくなかった。

横から仕掛けてきた女勇者に、侏儒が手裏剣を放つ。

その攻撃を『勇者の剣』ではじき、セレスは一気に長身の忍者達との距離を詰めた。

「あなた達の相手はこの私よ！」

『勇者の剣』を振るったのだが……刃は届かなかった。ジライの部下の前に、目に見えぬ障壁がある。防御結界だ。背の高い忍者が忍刀で張っているのか？

ひょろながの忍者が後方に飛び退り、女勇者と近衛兵から充分な距離を開く。その背の侏儒が懐に手を入れる。再び、遠隔攻撃をする気なのだろう。

侏儒が二人めがけ手裏剣を放とうとした、その瞬間、天井から影が落ちてきた。

雨が降り……

忍刀とそれを握る両手が床に落ちた。

それを草履でぐしゃっと踏みつぶしたのは……覆面に黒装束の、東国忍者であった。

「ジライ様！」

両手を無くした長身の忍者が、目の前の忍者とジライと思われた近衛兵を見比べた。手首から先を無くしても痛みはないのか（一滴の血も流れていない）、ただ茫然としている。

「阿呆。あれは傀儡よ」

ジライは目にも留まらぬ早技で『ムラクモ』を振るい、長身の部

下を斬り刻んでゆく。
魔法生物と化した部下を解放する為に、魔法生命体の核となっている呪具を壊そうとしているのだ。呪具は、胸部・腹部・頭部など失いづらい箇所に、たいてい、埋め込まれているのだ。
「ひぃ！」
侏儒が悲鳴を上げ、相棒から離れる。その体を『勇者の剣』が両断した。
二人の忍者は、ほぼ同時に、魔法で与えられた肉体を失い、身につけていた物を残し砂となって崩れ落ちた。
「解呪」
ジライは左の掌を、近衛兵に向けた。
タルワールを手にした近衛兵は、ハッと目を見開き、きょろきょろと周囲を見渡した。ジライに肉体を操られていた間の記憶がないので、何故、ここにいるのかわからないのだ。だが、戸惑う間はろくになく、大魔王教徒に襲いかかられ、とっさに反撃する。戦士としてしみついた習性が、彼を戦いへと導いていったのだ。
忍者ジライが覆面の下の目で、女勇者を見つめる。
「部屋の隅に潜んでおったのだ。ぎりぎりまで隠れていたかったが、そうも言っておられぬ状況でしたので、な」
近寄ってきた大魔王教徒を斬り捨てながら、ジライは話を続けた。
「女勇者殿、話は伝わっていると思う。奴が現れたら」
「……ちょっと待って、ジライ」
セレスは眉をしかめ、青の瞳で忍者をねめつけた。
「……あなた、傀儡の術を使ったわね？」
真っ直ぐに見つめてくる澄んだ瞳……
忍者ジライは、敵に囲まれている状況も忘れ、その美しさに息をのんだ。
「傀儡の術って、確か、邪法よね？」
「……さようだが」
セレスはキッ！とまなじりをつりあげた。

「忠告するわ！魔族との戦いで、二度と邪法を使わないようにしなさい！邪法は魔族が人間に与えた邪悪な魔法よ。魔族は、その力を暴走させる事も、無効果する事もできるはずよ。危険すぎるわ！」
「……魔族を標的に邪法を使う気はないが」
「いいから聞きなさい！これぐらいは大丈夫って、小出しにしてても、何時か足元をすくわれるかもしれないわ！便利だからって、邪法を使っては駄目！私、あなたが、邪法なんかで滅びる姿は見たくないわ！」
「……」
ジライはごくっと唾を飲み込んだ。セレスに睨まれ、叱られると……異様に心臓が高鳴り、体温が上昇し、喉が渇くのだ。
「……こっ、心得た……」
セレスはにっこりと華やかな笑みを浮かべた。
「わかってくれて嬉しいわ！」
忍者ジライはセレスから顔をそむけた。彼女を見つめていると、心が揺らいでしまうのだ。これからウズベルとの大一番だというのに平常心を保てねば話にならない。
「……カバーリは我が斬る」
「ええ、わかったわ」
セレスの返事を待たず、忍者は敵へと向かっていった。
その背を見送り、セレスも、又、敵を斬るべく走った。懐の、ジライからもたらされた手紙と、全てが終わったら渡そうと忍び持ってきたジライへの手紙を意識しながら。
第三夫人サラスを、カウラヴァの地下牢から救い出したのは忍者ジライだった。火事の後、王宮付き忍者組織は、上層部を失い、事実上、崩壊した。残った者達が警備の役についてはいたものの、その穴だらけのお粗末な防衛機構など、忍の里一の忍には無いも同然。一週間前から、ジライは積極的に王宮に忍び込み、情報収集をしていたのだ。
サラスを救出したのも、情報収集が目的だった。（ウズベル本人

かその手下と思われた）カウラヴァ王子が、いわくありげな女性を捕らえていたので、事情を探るべくさらったのだ。催眠術と幻術でサラスから話を聞き出した後、邪法で記憶を消して眠らせ、頃合いをみはからって後宮に戻したのだ。

ジライは、サラスに軽い暗示をかけておいた。セレスに会わなければいけないという強迫観念を与えた上で、セレスの顔を見た途端に発動する暗示をかけたのだ。

後宮を訪れた女勇者を見るなり、サラスは侍女にペンと紙を持って来させ、暗示通りに共通語でこう記した。

『黄昏の荒野　再び
刃を捨て
命を斬らず
闇を斬る』

この言葉が頭に残っているのだと、サラスはセレスに紙を渡した。その文面から、セレスは第三夫人を救出したのがジライであると気づいた。ジライが何を求めているのかも、見当がついた。

はたして、それがうまくいくのかどうかはわからなかったが。

サラスは続けて国王宛に、カバーリの息のかかっている大臣・軍人・忍者のリストを書き上げ、それもセレスに渡した。ジライが自ら得た情報を、サラスに暗示で覚えさせたのだろう。裏付けはまったく取れない事だったが、それが偽情報とは思わなかった。忍者ジライは、今、四天王ウズベルを狙っている。セレスを利用しようとするのも、ウズベルの今世の体のカバーリを弱体化する為。偽りなど言うはずがない。

（『無条件に信じるな、この世間知らずの馬鹿が！』と、後でアジャンに怒鳴られるであろう事を承知した上で）セレスは忍者ジライを信頼し、会議前に国王に、サラスが戻った事、信頼のおける忍者が彼女を救出していた事、カバーリの部下のリストができた事を伝えたのだった。

赤毛の戦士は、にやりと口元を緩めた。
「見つけたぜ、このカメ野郎！」
アジャンの目には、孔雀の間の壁に重なるように、淡く光る霧のような霞んだものと、その内に潜む黒く澱んだモノが映っていた。
アジャンは淡く光る靄の中に右腕を突っ込み……
その手に掴んだものを……
中からひきずり出したのだった。
《馬鹿な！》
現れたのは、黒兜、黒の装甲を身につけたインディラ忍者だった。
腕と脚の装甲の側面に、トゲのような装飾がついているのが特徴的だ。
その肉体は王宮付き忍者の頭領カバーリ……
その肉体を操っているのは、大魔王四天王ウズベルだった。
襟をつかまれているカバーリは、右手に装備していたカタール（刺し刀）を傭兵に向けた。
貫かれる前に傭兵はカバーリを床に叩きつけ、自身は後方に飛び退った。
《何故だ？》
カバーリの兜の下の目が、不気味に赤く輝く。
《何故、異次元通路にいた俺が見えたのだ？何故、たかが人間がこの世に俺を召喚できたのだ？》
「知らねえよ」
アジャンは面倒くさそうに、顔をしかめる。
「見えたから、ひっぱり出した……それだけだ」
カバーリは立ち上がり、注意深く傭兵との距離をとった。
《きさま、シャーマンだな？》
アジャンは不愉快そうに眉をしかめ、『聖王の剣』を構え直した。

「ただの傭兵だ」
《……シャーマンか》
「こら！人の話を聞け、クソ魔族！」
《……素晴らしい器だ。これほどの器が人の世に埋もれていようとは……》
「前に似たようなセリフをほざいた魔族が居たが……そいつは、消滅したぜ。おまえも消してやろう」
《その体もらうぞ。ケルベゾール様に献上する》

凄まじい気と気がぶつかり合う。
赤毛の戦士アジャンがインディラ忍者と対戦している。『聖王の剣』と忍者のカタールが激しく火花を散らし、ぶつかり合っている。
「アジャン！」
セレスは目の前の敵を薙ぎ殺し、傭兵の元へと急いだ。まだウズベルを倒してはいけない。まだ距離が開き過ぎている。気はせいたが、大魔王教徒の壁が厚く、なかなか距離が縮まらなかった。
セレスよりも早く二人の元に行き着いたのは、東国忍者だった。跳躍力と壁や天井を走れる忍の技で、望みの場所に現れたジライ。宙より二人めがけて手裏剣を放つ。
アジャンは素早く引いてかわし、カバーリは結界を張って手裏剣をはじき飛ばした。
「きさまがウズベルなのだな？」
ふわりと床に降り、刀を正眼に構える忍者。
赤毛の戦士は、自分の傍に降り立った東国忍者を目の端で睨んだ。手裏剣はアジャンをも狙っていた。カバーリさえ倒せれば、周囲をどうまきこもうが構わず、傭兵の生死など問題ではないのだろう。
《きさまは？》
「東国忍者ジライ」
《ほう、きさまが？きさまが女勇者暗殺をしくじり続けているマヌ

ケか》

「ウズベル、きさま、憑く相手を間違えたな。インディラ忍者になぞ憑くから、要らぬ野望を抱くのだ。里の上忍を抱き込みあれこれと画策しておるようじゃが、忍の里はきさまの軍門には降らぬ」

《それはどうかのう》

「頭を甘く見ぬ方がいい。あれは一筋縄ではいかぬ狸ジジイ。きさまの部下では役不足じゃ、きさまの野望はついえる」

「ンな話はどうでもいい！」

赤毛の傭兵が、がなりたてる。

「勝負の邪魔をするな、クソ忍者！」

忍者は横目で傭兵を盗み見るように見て、瞳を細める。

「……餌はおぬしか」

「何？」

「我が餌となろうと思うたのだが、そちらの方が上物のようだ。おまえのようなむくつけき男の何処が良いのかさっぱりわからぬが、魔族には美味なのであろうな」

「何が言いたいんだ、きさま」

「……独り言だ」

そう言うや、忍者は床を蹴って、カバーリへと『ムラクモ』で斬りかかってゆく。

「てめえ！そいつは俺の獲物だ！」

赤毛の戦士もカバーリを狙う。

聖なる武器を所持する、東国忍者と赤毛の傭兵。二人の猛攻に押され、カバーリには反撃の余地はなかった。結界を張り続け、内に籠るしかない。現在の肉体は、戦士としての技量が足りないことを、認めざるを得なかった。

更に……

間もなく、女勇者がこの戦いに加わる。『勇者の剣』を手に走り来る白銀の鎧が見える。

この肉体は捨て時だ。

ウズベルは目の前の男を見つめた。赤毛の傭兵は、高次元の精神とも同期できる魂の持ち主。この男を器にすれば、今まで人の世では使用できなかった強力な魔の力も使えるだろう。

上位魔族はその力が膨大ゆえに、人の世に現れるのには、自らの力の大半を封印しなければいけなかった。無理に力を行使しようとすれば器が壊れ、人の世との縁が切れ、魔界に強制的に帰還させられてしまうからだ。

だが、この男の肉体に宿れば……

カバーリは懐から煙玉を取り出し、床に投げつけ黒煙を立ち上らせた。

と、同時に結界を解き、魔族の力を解放する。

赤毛の傭兵に、自らの黒の気を染み込ませ、所有物である印をつけるのだ。

けれども……

常人であれば目も開けられぬ黒煙の中で……

東国忍者は目をカッと見開き、カバーリを狙い、刃を振り下ろしたのだった。

聖なる水の、雨が降る……

ジライの刃に両断されたカバーリは滅びた。魔法生物と化した肉体の一部、おそらく核に憑依していたのだろう。カバーリの肉体は浄化をまぬがれて砂となり、装束とカタールが床に転がる。

その消滅を見届けてから、東国忍者は練っていた気を放った。

「忍法、かまいたちの術！」

風の忍法が、黒煙を吹き飛ばす。

黒煙は薄れ……

そこから現れ出でたのは……

『聖王の剣』を手にした赤毛の傭兵だった。

その瞳は、血の色に輝いていた……

「セレス殿！」

ジライの叫びに頷き、女勇者は赤毛の傭兵の元へと走った。『勇

者の剣』を上段に構えて。
赤毛の傭兵が、嘲るようにセレスを見つめた。
音を立て、セレスの周囲の大理石の床が崩れゆく。彼女の足元には奈落の闇が広がっていた。
落ちゆく彼女を腕に抱き、落下しつつある床を足場に、その場から跳躍して逃れたのは忍者ジライだった。
忍者はすばやい体術で次々に開く次元の扉を回避し、腕の中の女勇者を守った。
赤毛の傭兵は哄笑し、魔力を弄んでいた。
「最高だ！最高の気分だぜ！」
複数の力を操っても、尚、力があり余っている。この肉体ならば、魔界での本来の力も使えるだろう。
この世界においてならば……
或いは……
大魔王ケルベゾールドすら凌駕できるのでは……
未熟な器に宿るケルベゾールドが相手ならば……
勝てる。
この男の肉体があれば……
この男に憑くと共に、ウズベルはケルベゾールドへの畏怖を失っていた。
絶対者への恐れは消え、己が力のみを信じる意志にあふれていた。
この男の脳を共有したからだ。
ケルベゾールドへの忠誠心など、もはやかけらもなかった。
げらげらと笑い、ウズベルは、女勇者を見つめた。
この男の憎悪に彩られた心は心地良く、女勇者への愛憎をないまぜた複雑な感情も美味であった。全てを憎む荒んだ心も、魔族に通じるものだ。
何と素晴らしい器であることか！
「遊びは終わりだ」
口元を歪め、ウズベルは叫んだ。

「あの世にいきな、お姫様」
アジャンの口を使い、アジャンの口調を真似て、ウズベルが嘲笑う。
セレスはカーッと頬を赤く染め、ジライの手を振り払い、飛び下りた。
仲間の体を弄ぶ魔族を斬るべく。
「セレス殿！」
ジライは叫んだ。が、間に合わない。
ウズベルが新たな異次元通路を開いたのだ。灼熱の炎渦巻く、火山。その火口へと通じる穴が、セレスの足元に開く。
しかし……
セレスはその上を、まるで、ただの床の上であるかのように、まっすぐと進み、ウズベルとの距離を詰める。
「何だと？」
ウズベルは、セレスを飲み込ませるべく、次々に異次元への扉を開いた。
けれども、その全ての通路を素通りし、女勇者は真っ直ぐにウズベルを目指すのだった。
仲間を辱められ、義憤にかられたセレス。
魔族を憎む魔法剣『勇者の剣』。
持ち手と心を一つにした時、『勇者の剣』は、持ち手の為に、無限の守護の力を示すのだ。
「ウズベル！」
上段に構えた『勇者の剣』を、セレスは赤毛の傭兵めがけ、一気に振り下ろした。
赤毛の傭兵の体を両断するかのように。
しかし、刃は紙一重のところで、傭兵に到達していない。ぎりぎりの間合いで刃を振り、刃で斬るのではなく、『勇者の剣』が持つ浄化の力で内に宿る魔族だけを斬り裂いたのである。
赤毛の傭兵の手から、『聖王の剣』が離れ、床へと落ちゆく。

何もない宙を呆然と見つめ、戦士は棒立ちとなっていた。
ゆっくりと……
赤毛の傭兵が眉をしかめる。
眼が、徐々に、赤から緑へと変わりゆく。
「アジャン！」
嬉しそうに顔をあげたセレス。
だが、そこで……
ズゥゥゥン！と、部屋がきしみ、揺れ動いた。
「キャッ！」
激しく揺れる床。
近衛兵や大魔王教徒が床へと倒れる。
セレスもこらえきれずよろめいたのだが、体勢を崩した彼女を逞しい腕が抱き、支えた。
……赤毛の傭兵だった。
左手で額をおさえながら、右手だけで小柄な少女を支えている。
部屋が揺れ動いたのは、ほんの数秒。やがて、揺れは収まった。
「ウズベルの結界が消えたな……あのクソ魔族、今世から、きれいさっぱり消え失せたようだ……」
「アジャン！」
セレスの顔に笑みが浮かぶ。
「大丈夫なのね！あなたなのね！」
「……きゃんきゃんわめくな、バカ女……頭が痛ぇんだ」
「良かった……アジャン……良かったわ」
セレスの青の瞳から涙があふれる。
喜びのままに、女勇者は、『勇者の剣』を手放し、仲間へと抱きついた。
赤毛の傭兵の頬が、微かにだが、赤く染まる。
「バッ！馬鹿っ！まだ敵が居るんだぞ、離れろ！」
頭を激しく振り、泣きじゃくりながら、セレスがアジャンにしがみつく。

赤毛の傭兵の顔は、みるみる赤くなっていった。
「……ったく、馬鹿が……」

「廊下だ！廊下が見えるぞ！」
扉から先には、御影石と大理石でできた壮大な宮殿の廊下が続いていた。近衛兵は生き残っている仲間らと抱き合い、歓声をあげた。
「術が解けた！我等は元の世界に戻れたのだ！」
全ての次元通路も閉じていた。後は部屋に残っている大魔王教徒達を捕縛するだけだ。
「……セレス殿」
忍者ジライの声に、セレスはアジャンの胸から顔をあげ、指で涙をぬぐった。『ムラクモ』を腰に差した忍者が、傍に佇んでいる。
「助力感謝する」
「こちらこそ……それで、あなた、これから、私を殺すの？」
「殺さぬ」
ジライは溜息を洩らした。
「もはや、あなたを殺す意味がない」
「そうなの？」
「……カバーリがあなたの暗殺の依頼者。我は依頼主を殺してしまったのだ」
「……あなた、大丈夫なの？これから、どうするの？」
「さあな」
忍者は淡々と答える。
「どこぞで死ぬまでは生きる」
「忍の里には戻らないの？」
ジライはフッと鼻で笑った。
「そこまで愚かな真似はせん。戻れば、処刑される」
「え？」
忍者は覆面の下の目を細めた。微笑みを浮かべるかのように。

「セレス殿……もう二度とお会いする事もなかろうが、お元気で」
「待って、ジライ！」
セレスは白銀の鎧の下に手を入れ、胸元にしまっておいて封筒を取り出し、忍者の手に強引に持たせた。
「読んで」
「……」
「お願い！絶対、読んでね！」
忍者は無言のまま、すばやい体術で姿を消した。ウズベルと戦っている限りいずれ会えるだろうと、ここ数日、持ち歩いていた手紙を渡せて、セレスはホッと安堵の息を漏らした。
が……
「セレス……今の手紙は何だ？」
地を這うように低く、魔獣のうなり声のように恐ろしげな声が頭上からする。
セレスは振り返り、ひきつった笑顔を傭兵に見せた。
「……デートの誘い」
「何ぃ！」
「保護者同伴で構わないの。もう一回、彼に会いたいのよ。ね、アジャン、あなたの護衛つきでいいから……それなら、会ってもいいでしょ？ね？ね？」
媚びる青い瞳が、逆に、傭兵の怒りを煽った。
「この馬鹿！どこまで馬鹿なんだ！仕事でなきゃ、おまえみたいな世間知らずの大甘の、マヌケ、とっくに見捨てているぞ！」

それとほぼ同じころ……
武闘僧ナーダは結界を解いていた。
まだ大魔王教徒は十数人残っていたが、もはや異次元ではない。危険ならば、別室に避難できる。
だが、別室にお渡りをと促す大将軍や近衛兵を手で制し、インデ

ィラ国王は孔雀の間に残った。四人の王子だけが近衛兵に運ばれ、部屋を出て行った。

「ナーダ」

名を呼ばれ、武闘僧は振り返り、忠告した。

「ここは危険です。せめて廊下にお下がりください」

「おまえが共に来るのであれば、下がろう」

そう望まれれば従う他はない。

国王は廊下をしばらく進むと立ち止まり、大臣達には部屋で控えよと命じた。国王の傍にはナーダと二人の近衛兵のみが残り、後の者は全て廊下より消える。

ナーダは国王に対し膝をついた。相手の顔を見たくも無かったので、頭を深く垂れながら。

「よくぞ、余と王子達の命を守ってくれた。感謝する」

「ありがたきお言葉」

と、武闘僧は心にもない事を口にした。

「何か望みはないか？何なりと申してみよ」

何なりと？ナーダは眉をしかめた。幼い頃は、母を見捨てた父を怨み、第二夫人アヌラーダとその一族を怨み……その死すら願ったものだが……

「……私の望みはインディラ国が一つとなる事。王宮と寺院が反目し合っていては、国の繁栄の妨げとなります。魔族が世にはびこっている今だけでも、寺院へのわだかまりを捨てていただきとう存じます」

「……それだけか？」

「はい。私は大僧正候補。いずれは寺院の頂点に立つ者。王宮と親しくつきあってゆく事が私の望みです」

「……そうか、大僧正となるか」

国王は声を落とした。

「ずっと、おまえと話す機会を探していた。だが、余には、常に、さまざまな目がついていた。護衛役の忍、貴族達の放つスパイ、王

宮付き忍者……誰かが常に余と共にあった。インディラ国王たる者の宿命ではあるが……できれば、おまえとは余人を交えず、話をしたかったのだ」

「……」

「今更言ってもせんない事だが……おまえに謝りたかったのだ。おまえの母の事だ」

「……」

「幼くして王となった余は、愚かであった。前宰相の決めた第一夫人をうとんじ、自ら選んだ第二夫人アヌラーダばかりを偏愛していた。おまえの母は勇者の従者の妹、国民にも人気があり、寺院との縁も深かった。美しく聡明で、まさに出来過ぎた妃であった。だが、余には煩わしい存在であった。七つ年上の彼女は、妃というよりも教師のように余と接していた。今にして思えば、国政を疎かにし大臣達の言いなりになっていた余を王位にふさわしき者に導こうとしてくれていたのだとわかるが、当時はわからなかったのだ」

「……」

「おまえが生まれてすぐに、余は第一夫人の室に渡らなくなった。それ故、アヌラーダとその一族、更にはサラス達他の夫人や後宮の者達が、おまえ達親子に何をしたのかは知らぬ。しかし、おおよそ察しがつく。余は夫として、アヌラーダの暴走を止めるべきであった。国王として、第一夫人に礼節を尽くし仕えるよう、後宮の者達を叱るべきであった。だが、そんな事すら、当時の余はわかっていなかったのだ。ナーダ……許せ」

武闘僧はゆっくりと顔を上げ、国王を見つめた。滑稽なほど、自分によく似た顔。年をふり、老いという落ち着きを得たせいか、国王の顔は幼い頃、恐れ憎んでいた人間とは別人に見えた。

「おまえの母が亡くなった時だ、当時、ウッダルプル寺院副僧正であったジャガナートに余は叱られたのだ」

「え？」

「副僧正は一年以上前から余に面会を求めていたが、すべて、余の

周囲に握りつぶされていたらしい。サティーが亡くなって、ようやく、葬儀で陛下にお会いできたと……無念そうに、そう言っていた」

「……」

「ジャガナートは言った、余が盲目であったばかりに、後宮がどうなったか、目を見開いてみよ、とな……余は侍従長からの報告を疑いもせず信じ、ずっとおまえ達は病に伏せている、それ故、公式の場に出て来ないのだと思っていた。まさか世継ぎの王子がろくに食事も与えられず、痩せ衰え、日々、暗殺の危機にあったなどと、夢にも思わなかったのだ」

「……」

「おまえを出家させたいと望むジャガナートを、余は拒んだ……愚かな余が招いてしまった事態であれば、余が責任をもって正すべきだ……そう思ったのだが」

国王の顔に自嘲の笑みが浮かぶ。

「余の周囲の者は、皆、第一王子が大僧正候補として後宮を去る事を喜び、誰一人、己が罪を認めず、第一王子の出家を促すばかりだった。愚かな国王の周囲には、それにふさわしい家臣しか居なかったのだ……おまえの出家を認めぬわけにはいかなかった、王宮におまえを残せばアヌラーダ達は何としてもおまえを取り除こうとするであろうしな」

「……」

「あれから二十二年……有力貴族であるアヌラーダの親族を退ける事は不可能であったが、政道とは何かを心得る家臣達をとりたててきた。今ならば、余にも、多少の力がある。有力貴族達との政争は避けられぬが、国を動かすだけの事もできよう」

国王はまっすぐに息子を見つめた。

「今日まで故意に、寺院との接触を断ってきた。だが、それも今日という日を迎える為であった。ナーダよ、おまえに問う、還俗する意志はあるか？」

「……陛下」
「正統なる世継ぎとして王宮に戻り、国を正す為に、余に力を貸してはくれまいか？」
――暗く醜いしこりが溶けてゆくのを、ナーダは感じていた。
国王を怨み、王宮を厭い、母を死に追いやった全ての者を憎んでいた幼い日の自分が……
今、救われたのだ……
「ありがとうございます……陛下、心よりお礼を申し上げます。私の出家が私の命を守る為であり、成人した私を王宮に迎え入れる望みを貴族達に気取られぬよう寺院との関係を断ってこられたのだと……お話しいただけて、嬉しいです。私の心の闇は祓われました。陛下が私を救ってくださったのです」
「ナーダ……」
「ですが……それだけで、充分です。これ以上のものは望みません」
「だが」
「有力貴族の後ろ盾のない世継ぎが王宮に戻ったところで、騒乱の種となるだけです。私は世の乱れは望みません。大僧正候補として寺院に残ります」
「……そうか」
国王は深いため息をついた。
「残念だ。おまえに国を譲りたかった。おまえはサティーによく似ている、聡明で、決して周囲に流されぬ。王たる資格に満ちている」
「いえ、私ごときなど……」
「謙遜する事はない。優秀である事は知っている。大僧正が、毎年の新年の挨拶の書状におまえの近況を書き添えてくれていたのだ。どのような師に師事し、どのような学問・武術・魔法を修め、僧侶達からどれほど人望を得、大僧正候補としていかに高潔に生きてきたか、全て知っている」
「大僧正様が私の事を陛下に……」

「関心があるそぶりをみせたくなかったので、返事はしなかった。しかし、王国の世継ぎにふさわしく成長してゆくおまえを頼もしく思っていた」

「……」

「他の王子達は、おまえに比べ、あまりにも凡庸だ。若い頃に、せめて今ぐらい世を見通す目があれば……。悔やんでも悔やみきれぬ、国を継ぐべき者を出家させてしまうとは」

「人は……誰しも過ちを犯すものです。大切なのは、過ちを認め、己が罪を悔い改める事……何より肝要な事を陛下は心得ていらっしゃいます。インディラ国は、これより、一層、繁栄するでしょう」

「うむ」

国王は頷きを返した。

「寺院と和解したい。総本山まで大僧正を訪ね、己が罪を詫び、正しき王道についてのお教えを乞いたい……供を務めてはくれぬか？」

「私ごときでよろしければ……」

畏まって答えてから、ナーダは父に対し笑みを見せた。

「もっとも、女勇者様のお許しがいただけたら、ですが。私は、今、あの方の従者ですから」

「そうであったな。余も、こたびのカバーリの起こした騒動を収拾せねばならぬ。大僧正との会見はその後だ。又、連絡する」

「お待ちしております」

国王は護衛の近衛兵と共に廊下を渡ってゆく。

ナーダはその背を見送っていたのだが。

「やりましたな、ナーダ様！」

ナーダは、べしゃっと前のめりに床に倒れた。ガッハッハッハッと豪快に笑う僧正に、背中をバーンと叩かれてしまったのだ。

「ジャガナート様！少しは手加減してください！」

「すまん、すまん、いやあ、嬉しくて、つい」

僧正は弟子に手を貸し、立ち上がるのを助けた。

「国王陛下と大僧正様のご会談が決まったのは、ほんにめでたいが……せっかくの機会でありましたのに、残念に思います」
「え？」
「ご還俗なさればよろしかったのに……」
「……ジャガナート様、どこまで地獄耳なんです？よく聞こえましたね」
「いやあ、実は、気を断って、弟子に姿隠しをかけさせて、こっそり傍で聞いておったのですよ、お二人の会話が気になりましてなあ」
「それがウッダルプル寺院僧正のふるまいですか」
「ガルバは……あなたの忠義者の忍者はがっかりするでしょう。あなたこそが正当な王位継承者だと口癖のように言っておりますからなあ」
「還俗なぞ無理です」
澄ました顔でナーダが言う。
「だって、ジャガナート様、還俗して、しかも、国王なんかになったら、国王の義務を果たさなきゃならないんですよ。妃を娶り、王国の世継ぎをもうけなきゃいけなくなるんです」
大げさに、ナーダは肩をすくめた。
「私には無理ですよ。女の方を抱くなんて、あああああ、汚らわしい！」
ジャガナートは豪快に笑った。ほんに手遅れですな、国王陛下もお気の毒にと、腹を揺らして。
孔雀の間に戻ると、戦闘は終わっていた。大魔王教徒達は全て倒されるか捕縛されたようだ。
部屋の奥で、セレスとアジャンが言い争いをし、その横でシャオロンがおろおろとしていた。
「聖なる結界を張れなかったのに、よくウズベルを倒せたものです。やはり、セレスがやったのですか？」
「わかりませぬ。しかし、たいしたものですなあ」
「セレスが？」

老武闘僧はニヤッと笑った。

「ナーダ様もですぞ！」

そう言って、又、力任せに、背中をバンバン叩く。王宮と寺院との和解、そして親子の和解を、喜んでいるのだろうが、老武闘僧の感情表現は過激であった。

黄昏の河　9話

「本当に良いのですか、セレス？」
「ええ。良いに決まってるじゃない。王宮と寺院の和解に立ち合うんでしょ、しかも、仲介役で。是非、役目を果たすべきだわ」
「しかし、国王が今回の事件の事後処理を終えてからの会談ですよ。総本山まで片道三日ですし、向こうに着いてからあれこれ儀式もあります。どう少なく見積もっても、二週間はかかりますよ」
「多少、出立が遅れても構わないわ」
「それに……総本山は女人禁制の聖山です。あなたをお連れするわけにはいきません」
「わかってるわ。私、シャオロン達とウッダルプルで留守番してる。シャオロンの武術訓練とかペリシャ語の勉強とか、やっておいた方がいい事はいっぱいあるもの」
「ですが」
「ん、もう！グチャグチャうるさいわね！ナーダ、あなた、総本山に行きたいの？行きたくないの？」
「それは……」
「王宮と寺院の和解に立ち合いたいんでしょ？大僧正様にもお会いしたいはずだわ。だったら、行きなさいよ」
「セレス……」
武闘僧は女勇者に対し、頭を下げた。
「ありがとう、セレス……お言葉に甘えさせていただきます。なるべく早く戻るようにしますね」

「勇者一行の到着が遅れりゃ、それだけ人が死ぬ。魔族の支配領域も広がりかねん。とっとと旅に出た方が良いに決まってる。あの馬鹿女、一時の気分でおまえの遠出を許可しやがって、後で被害者の

山を見てわんわん泣くんだろうさ」
　赤毛の傭兵は、うんざりだ！と言わんばかりに、両手を広げた。
王宮の彼の為の部屋で武闘僧と二人っきりなので、口の悪さに容赦がない。
「私も早く旅立った方がいいと思うのですが」
　ナーダは苦笑を浮かべた。
「……この和解、できれば見届けたいのですよ。自分の心の闇を葬りきる為にも」
「ふん？」
「もしも、寺院に預けられる事なく、大僧正様にお会いする事もなく、王宮で私が育っていたら……ウズベルは忍者頭のカバーリではなく、私に憑いたでしょう。はっきりいいまして、私は心が狭く、底意地が悪く、プライドばかりがバカ高い浅慮な人間です」
「それは知っている」
「……それはどうも」
「だが、きさまは良い意味で見栄っ張りに育った。僧侶となった以上、人徳あふれる僧侶を演じたいんだろ？」
「ええ。大僧正様に褒めていただきたいので。でも、それは、大僧正様がいらっしゃらなかったら、相当、あくどい人間になっていたという事です。父や王宮への憎悪を、これを機会に完全に葬ろうと思います」
「……好きにしろ」
「ええ。そういうわけで、あなた、留守番お願いしますね」
「ケッ！酒場もねえクソ面白くもねえ街で、馬鹿女のお守りかよ」
「……馬鹿女ねえ」
　武闘僧は顎の下に手をあてた。
「セレス、だいぶ勇者らしくなってきたと思うのですが、まだ馬鹿女なんですか？」
「あれは何処をどうみても、救いがたい馬鹿だ！あいつ、毎日、毎日、夕方に、何処に行ってると思う？」

「さあ？私、最近忙しくって、護衛役をお任せしっぱなしだったので、出かけているのすら知りませんでした」
「寺院の傍の河畔だ！アホ面さげて、来るわけもない忍者を待ちぼうけてるんだ！」
「忍者？」
「暗殺者の忍者ジライだ。あの女、自分の命を狙っている忍者に、妙に肩入れしやがって……死にたいとしか思えん」
「忍者ジライに会いに？何で、河畔へ？」
「ウズベルを倒した後、セレスが奴に手紙を渡したんだ。『夕方に、以前、会った河畔へ行く。ウッダルプル滞在中は可能な限り毎日、行く。会って話がしたい。都合がよい時に顔を見せて欲しい』ってな手紙らしい」
「それで、日参してるんですか？」
「ああ！今日の夕方で三日目だったんだが、今日こそ来てるかもしれないって、毎日、毎日、いそいそ出かけやがるんだ、あの馬鹿！来るわきゃねえのに！」
「で、あなたは、それに付き合っている、と？」
「護衛役だからな」
「シャオロンに任せればいいのに」
「馬鹿言え！相手は忍者なんだぞ！シャオロンと、ついでにセレスの身に何かあったらどうする？」
「……セレスの方がついでなんですか……？」
「くそ！女勇者の従者になんざなるんじゃなかった！エーゲラに居りゃ良かった！何で俺はくそ忌々しい女の従者になりに、エウロペに行っちまったんだ！くそ！」
「ご自慢の危機回避能力は働かなかったんですか？」
赤毛の傭兵が、ジロリと武闘僧を睨む。
「……あの時、俺は北に……エウロペに幸運が転がっているように思えたのさ。とんだ大外れだったがな。勘が外れたのは、生まれて初めてだ」

「では、今、あなたの勘は、セレスに関して何と告げているのです？」

「とっととケルベゾールドを倒して、あの馬鹿と縁を切れ！大声でそう叫んでいるぜ！」

ああああ、むしゃくしゃする！と、赤毛の傭兵は赤い髪をかきむしった。

武闘僧は首を傾げた。

ナーダはアジャンの勘に信頼を置いていた。

魔に敏感で、危機察知に優れ、己の進むべき道を無意識に知ってる彼の能力は非凡だ……正式な修行を積めば、未来を見通せる預言者となりうるほどだ。

だが、どうも……セレスが絡むとアジャンは平常心を失って、その能力を自ら曇らせているように見受けられた。

セレスへの激しい感情……

それが、いずれ、傭兵にとって命取りとなるかもしれない……

ナーダは漠然とそう思った。

河畔に通い始めて十四日目……

岸辺に座り、夕日に照らされ、黄金色に輝く河をセレスは、ぼんやりと見つめていた。

目立つ『勇者の剣』と白銀の鎧は王宮に置いて来ている。フードマント姿だったが、河べりではフードは被らず、外から金の髪とその顔を見てもらえるようにしていた。何時、待ち人が通りかかってもいいように。

――その耳に、聞き覚えのある声が届いた。

セレスは立ち上がり、周囲を見渡した。空耳ではない。聞こえたのだ、『女勇者セレス殿』と呼びかける声が。

「ジライ！何処なの？姿を見せて！」

斜め後方の木の幹に寄りかかっているアジャンを除けば、行きか

う舟が見えるだけだ。周囲に人影はない。
何ゆえ、ここで待っておられたのだ?と、問う声が聞こえた……
…ような気がした。セレスは叫んだ。
「だって、私、手紙で約束したもの!ウッダルプル滞在中は、来られる時には必ずここに来るって!」
日参しておられたのか?との問いには、セレスはかぶりを振った。
「一度、近くの村まで魔族退治に行ったの。三日ほど、ここに来なかったわ。でも、それ以外の日は必ず来たわ。いつ、あなたが来てもいいように!」
何故、我にこだわる?そうジライは尋ねた。
「あなたと話がしたいのよ!出て来て、ジライ!お願いだから!」
ゴォォォーッと音を立てて、突風が吹いた。時ならぬ風に目を細め、セレスは顔に張り付く金の髪を払った。埃を避ける為に目の上に手を当てて、セレスは前方を見た。
人が居る。風をまといつかせるように、強い風の中、微動だにせず佇む者が。覆面に黒装束。背には忍刀、腰に大小の二刀を帯刀している。
「ジライ」
セレスは笑顔を浮かべた。
東国の忍者は横目で、セレスの斜め後方の樹木の下の男を見つめていた。セレスはちらりと背後に目をやった。
「護衛の為についてきてくれたの。気にしないで」
「……」
アジャンに視線を向けたまま、忍者は口を開いた。
「まだウッダルプルに居られるとは思わなんだ。とうにペリシャに旅立たれたものとばかり……」
「ナーダの、あ!えっと、仲間の都合よ。でも、こうして、あなたと会えたのですもの。良かったわ」
「……来る気はなかったのだが」
ジライは溜息をついた。

「グジャラが行けとうるさいので、な」
忍者は懐から取り出した物を左の指に挟み、セレスに見せた。それは、セレスが情報屋グジャラに預けたジライへの手紙だ（グジャラの元へ手紙を届けたのはアジャンで、情報屋に預かり料も取られている）。
「情報屋に伝言を頼むとは常識外れの方だ」
「だって、あなたの知り合い、あの人しか知らなかったんですもの。十日前に預けたのよ、あなたとすれ違いになってしまった時の用心に」
「……中身、読まれましたぞ」
「別に構わないわ。読まれて困る事、書いてないもの」
「これは……」
と、ジライは手紙を軽く振った。
「……本気なのか？」
「ええ」
力強く頷くセレスを、覆面の下の黒の瞳が不思議そうに見つめる。
「我はあなたの命を狙っていたのだぞ」
「仕事で、でしょ？」
「しかも、大魔王教徒じゃ」
「もと、でしょ？四天王も斬っちゃったし、今では大魔王教団は敵のはずよ」
「……」
ジライは口をつぐみ、眉をしかめ、瞳を伏せる。
セレスは忍者の顔を見上げた。覆面をしてるので目元ぐらいしか見えなかったが。東国人にしては、ジライは背が高い。小柄なセレスは彼の肩ほどの身長しかなかった。
「気が進まないのなら、いいのよ。他にやりたい事があるのなら……」
「何も……」
忍者はゆっくりと瞼を開いた。

「……やりたい事など、何もないわ」
セレスは違和感を覚えた。
何かが違う。何がどう違うのかはっきりとはわからないけれども、ジライから受ける印象が以前とは異なっている。
「ジライ、あなた、今日まで何をしていたの？」
「……仕事を」
「仕事？」
「少々、値のはる情報を買いたかったのでな、斡旋屋に適当な仕事を紹介してもらい小金を稼いでいた」
「どんな仕事？」
「……あなたにはお教えできない類（たぐい）の仕事だ」
「犯罪なの？」
「忍者の仕事は本来、そういったものだ」
セレスはジライの黒の瞳をジッと見つめた。
刃のように鋭く、冷徹な光をたたえていた瞳は……そこには無かった。
「あなた、これからどうするの？」
「……どうとは？」
「したい事がないんでしょ？何処でどうやって暮らすの？忍の里には戻らないと言ってたわよね？」
「うむ。戻れば死なねばならん。我は掟を破った……任務を捨てて私闘に走り、あげく依頼主を殺してしまった。死をもって償っても許されぬ」
「でも、魔族の方からあなたにちょっかい出してきたんじゃない！あなたは体を盗まれ、部下を殺されたんですもの、反撃して当然だわ！」
「我は里の名を穢したのじゃ、里の忍者であり続けるのなら自害せねばならぬ」
「ジライ！」
「だが、死にとうはなかった。だから、戻らなかった。里を抜け、

抜け忍となったのだが……」
　ジライの目元が歪んだ笑みに崩れる。
「何をすれば良いのか、さっぱりわからぬのだ。サリエルもウズベルも消えた。我を辱めた魔族はもはや居らず、インディラに居る限り追い忍すらかからぬ。戦うべき敵はなく、任務もなく、里の拘束もなく、庇護すべき部下もなく、誇りであった二つ名も失った。我は生まれて初めて自由というものを味わっている。しかし、それが……これほど虚しきものとは思わなんだわ」
「ジライ……」
「我は常に誰かに支配されてきた。他者の支配をうとましく思い、はね除けんが為に、己を鍛え、手駒を増やし、里の上層部と繋がり、次期頭領にまで上りつめた。だが、それも、里の枠があっての事。指令を与えてくれる者も部下も居ない今、何をすべきかわからぬ。我は何一つできぬ。やりたい事など何もないのだ」
　セレスは気づいた。ジライの目には精彩が駆けているのだ。今のジライの瞳は、ただ物を映すだけの鏡のようだった。
「やりたい事がないなんて、あなたの勘違いよ」
　セレスはぐっと身を乗り出した。
「だって、あなた『値のはる情報を買いたかった』って言ってたじゃない？知識欲があるって事は」
「里の情報が買いたかっただけだ」
「え？」
「里が魔族の支配下にあるのならば、魔族どもを討ちに戻ろうと思ってな。だが、頭領は、里に居ついておった大魔王教徒どもを一掃しておった。ついでに反乱分子どもも処分し、己が支配を盤石なものとしたらしい。我の出る幕などないわ」
「でも……でも、絶対、何かあるはずだわ！捨て鉢になっちゃ駄目よ！よく考えて、絶対、何かやりたい事があるはずだわ！」
「……」
「ああ、そうね。大げさに考えないで、趣味とかでもいいと思うの。

何かやりたいと思う事はない？」
「……新盆はやりたい」
「にいぼん？」
「ジャポネでは、夏に死者の霊を祭る行事をする。それを盆と言う。死後、初めての盆を新盆と言う。この世に未練を残す霊を招き、心残りを無くしてやるのが生者の務めじゃ。魔族との一件では我は不手際で部下を殺し過ぎた。新盆だけはやっておかずばなるまい」
「……そう」
死者を悼む気持ちが支えとなり、生きる気力に繋がればよいと、セレスは思ったのだが。
「それ故、夏までは生きる」
「え？夏まで？」
「大魔王教徒の新盆は、邪法を用いて彷徨う霊と対話し、心残りを聞き出す儀式。今年は霊どもの願いを何でも叶えてやろうかと思う」
「霊の願いって？」
「さまざまじゃ。恋しいおなごに恋文を届けて欲しい者も居れば、憎い相手を殺してくれと願う輩も居り……死後の世界が暗くて寂しいから共に来てほしいと望む者もいる」
「共にって……あなた、死ぬ気なの？」
「死ぬ気はない」
否定されたので、セレスはホッと息をついたのだが。
「だが、生き続ける気力もない。我が死を望む者が居れば、聞き届けてやるつもりだ」
セレスは……
怒りのあまり顔を紅潮させ、体を小刻みに震わせた。
そして、右手を振り上げると……
その平手で……
忍者ジライを……
思いっきり張り飛ばしたのだった……

「はぅぅぅ！」

きりきりと宙を舞い、ドタン、バタン、ゴロゴロと、忍者ジライの体は河畔を転がっていった。

あまりの出来事に、赤毛の傭兵も驚き、身を乗り出していた。

「きゃあああ！ごめんなさい！そんなに強くやったつもりなかったんだけど！」

セレスは慌ててジライの元へ駆け寄った。

殴られた左頬を押さえながら、忍者ジライはぶるぶると震えながら蹲っていた。

「痛かった？ごめんなさい！あなたが、あんまり情けない事を言うから、つい手がでちゃったの」

「……情けない？」

「だって、死者に連れて行かれても構わないんだなんて……あなた、馬鹿よ！」

「うっ！」

ジライは己の心臓を右手で押さえた。

「あなたが死んじゃったら、シャイナで、あなたを庇って亡くなった部下が無駄死にになってしまうわ。あなたは生きなきゃ、駄目よ。生きて生きて生き抜いて、あなたが幸せになる事が部下への恩返しじゃなくって？それがわからないなんて、今のあなたは、大ボケの、大まぬけ、いじけて腐る虫けら以下の人間よ！」

「あああああああぁっ」

ジライは己が心臓の動悸を抑えるように、胸を押さえている。

「どうしたの、急に？何処か具合でも？」

「セっ……セレ、ス殿……」

ハアハアと荒い息を吐きながら、よろよろと忍者が上半身を起こす。

「あなたに殴られた瞬間、閃くものがござった……い、今、一度お……今度は右を……右頬を叩いてはいただけまいか？」
「え？いいの？」
「是非！」
「それじゃあ……」
セレスは右手をひねり、スナップをきかせた手でジライの右頬にびんだを喰らわせたのだった。

「はぅぅぅぅ！」

やはり、きりきりと宙を舞い、ドタン、バタン、ゴロゴロと、河畔を転がっていく忍者ジライ。
「そんなに強くやってないわよ！あなた、大袈裟すぎない？」
セレスが駆け寄ると……
忍者ジライはガバッ！と体を起こしたのだった。
「目が覚めました」
「え？」
目をぱちくりとさせるセレス。
忍者ジライはきらきらと目を輝かせ、その黒の瞳に女勇者の美貌を映した。
「やりたき事が見つかりました」
「え？本当に？」
「はい。セレス殿……いえ、セレス様のおかげにござりまする」
「そう？何だかよくわからないけど、良かったわ、あなたが元気になって」
「かたじけのうございます」
ジライは片膝をつき、セレスに対し深々と頭を下げた。
「改めてご挨拶に参りますが、今日はこれにて。所用がありますゆ

え」
「わかったわ。元気でね」
忍者の姿がフッと消える。すばやい体術で身を隠してしまったのだろう。
「何なんだ、あの忍者は？ぶん殴られた途端、元気になりやがって」
呆れ顔のアジャンに、セレスは微笑みかけた。
「アジャン、今日まで付き合ってくれてありがとう。あなたのおかげでジライに会えたわ。本当にありがとう」
「ケッ！」
「彼が元気になって……良かったわ」

その四日後に、ナーダが王宮に戻った。国王と寺院の和解会談終了後、一人、早馬で戻って来たのだ（国王の王宮への帰還は五日後なので、これ以上、出立を遅らせては心苦しいと急いで戻って来たのだ）。
一行は旅の支度を整え（ナーダはジャガナート僧正の元に挨拶にも伺っていた）、二日後にインディラの首都を後にし、西のペリシャをめざした。

「はぁぁぁ」
ナーダが馬上で溜息をつく。
「これで、四十三回目ですよ、ナーダ様」
その前を進んでいたシャオロンの指摘に、武闘僧は弱々しい笑みを見せた。
「もうそんなになりました？私も溜息をつくまいとはしているんですけれど、どうにも止まらないんですよ」
そして、四十四回目の溜息をつく。
「放っておきなさいな、シャオロン」

少年の隣に馬を寄せながら、セレスが言う。
「ナーダは、今、重症のホーム・シックなのよ。この分だと、後、二、三日は使いものにならないわね」
ああああああ、大僧正様……と、遥か彼方の聖山の方角を見つめ、糸目をうるませる武闘僧。この世で最も尊敬し慕っている人物と別れてきたせいで、すっかりへこんでいるのだ。
「……早く大魔王を倒しましょうね、セレス」
ナーダの顔には『大魔王を倒して、晴れて大僧正様の下に帰りたい！』と、書いてあるようだった。
「セレス！」
先頭を進むアジャンが不機嫌そうに声を張り上げる。無駄口はやめろという事だろうか？
「なぁに、アジャン？」
「……おまえに客だ」
セレスは手を額にかざした。
街道の先に誰かが居る。馬に乗っている。黒く見えるあれは……
「！」
セレスは鞭を使い、馬を飛ばした。背後でアジャンが怒鳴っていたが、構わなかった。しゃにむに馬を走らせた。
馬上の人物はセレスが近づくと、ひらりと馬から降りて膝をついた。黒装束に覆面。背には忍刀、腰には『ムラクモ』と小刀……忍者ジライだ。
セレスは手綱を引いて、愛馬を止めた。背後から響くアジャン達の馬の蹄を耳にしながら、セレスはにっこりと微笑んでいた。
「お誘い、お受けいたします」
ジライの左手には、グジャラを通して渡した手紙があった。『あなたが魔族と戦い続けるのなら、共に戦いましょう』と書いた手紙だ。
「一緒に戦ってくれるのね？」
ジライは頷きを返した。

「このジライ、卑しき忍なれど、セレス様の尊きお心に触れ、あなた様こそ主人と確信いたしました」
「え？」
「セレス様、どうぞ私(わたくし)めをあなた様の従者の列にお加えください。私は生まれてこのかた、強者の支配を受け入れて生きて参りました。私には主人が必要です。主人なしでは己を保てず、生きてゆけませぬ。なれど……どうせ支配されるのであれば、あなた様のようなお心美しき女人に従いとう存じます」
「ジライ……」
「路銀は整えて参りました。あなた様から報酬をいただく意思はございませぬ。ただ、お側に侍る事をお許しください。以後、陰ながらセレス様につき従い、セレス様をお守りする事をお許しくだされ」
セレスは下馬し、ジライの前に立った。
「従者に迎えるのには条件が二つあるわ。一つはケルベゾールド信仰を捨てる事」
「もはや捨てました」
「もう一つは、邪法を封じる事。できる？」
「……ご命令とあらば」
セレスは大輪の華のような艶やかな笑みを浮かべ、ジライの手を取り、立ち上がらせた。
「なら、今日から、あなたは私達の仲間よ」
「セレス！」
赤毛の傭兵が吠えるように叫んだ。が、女勇者も負けじと声を張り上げる。
「魔族を敵とする者は味方よ！私達の敵はケルベゾールドとその部下の魔族よ！人間じゃないわ！」
「ま、確かに、その通りですねえ」
と、のんびりとした口調でナーダが言う。
「人間は誰しも過ちを犯すもの。無垢な人間なんて居ませんよ。改心したって言うのなら良いんじゃないんですか、元暗殺者でも仲間

に加えても」
「ありがとう！ナーダ！」と、セレス。
「ナーダ、てめえ！」
睨みつける傭兵を、武闘僧は無視した。シャイナで逝った好敵手との出会い、そして、インディラでの父との和解が、武闘僧を変えていた。セレスほど楽天的にはなれないが、頭から他人を悪と決めつける事はもうすまい、そう思うようになったのだ。
セレスは上機嫌になった。
「じゃあ、多数決でいきましょう！ねえ、シャオロン、あなたはどう思う？ジライを仲間に加えてもいいかしら？」
「え？」
アジャン、セレスと順に見つめてから、少年は忍者に視線を止めた。何度となくセレスの命を狙ったこの男には、敵意しか感じない。ジャポネから、ずっと、この忍者の死を望んできたのだ。
しかし……
「セレス様がそうしたいのなら……オレは、セレス様のお言葉に従います」
「ありがとう！シャオロン！」
「馬鹿野郎！シャオロン！自分の意志を持て！」
セレスはベーッと舌を見せた。
「三対一。あなたの負けよ。今日からはジライは私たちの仲間よ、いいわね？」
ぎりぎりと歯を噛みしめ、赤毛の傭兵はそっぽを向いた。
「好きにしろ！おまえがその忍者に暗殺されても、俺は知らんからな！」
「ん、もう！もう暗殺なんかしないわよ！ね、ジライ？」
「はい。もう二度とお命は狙いませぬ」
「聞いた、アジャン？」
「ああん？聞こえねえな。馬鹿どものたわごとなんざ、何も聞こえねえよ！」

「あなたねえ！何よ、その態度は！誰かれ構わず誰にでも馬鹿、馬鹿、言うあなたって……」

大魔術師カルヴェルは千里眼の水晶珠から顔を上げ、ホホホと愉快そうに笑った。

女勇者セレス、赤毛の傭兵アジャン、武闘僧ナーダ、格闘家の少年シャオロン、そして忍者ジライ。

五人となった勇者一行は、カルヴェルの目から見て、まだまだ頼りなかった。が、それでも、明るい未来を予想させてくれるしなやかさがあった。

「そのうち、又、遊びに行くかの」

カルヴェルは、五人を愛しく思い、その白髭を揺らし、ホホホホと笑うのであった。

黄昏の河　9話（後書き）

『黄昏の河』　完。

次回は『師と弟子』。舞台はペリシャ。
カルヴェルとセレスの話です。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

おまけ

――AちゃんとKさんと私（だいたい実話）――

私「Aちゃん、ありがとう。キミの助言通り『逆ハー』のキーワードいれたら、検索増えたよ（第二章開始前、ちょっとだけ書き換えました）」

A「でしょー？（ちょっと得意そう）」

私「あんま逆ハーな感じしないんだけどね。セレスちゃん、最初、いじめられまくってたから」

A「美形、美少年、ホモ、異形、女王様、年の差、身分違い、主人公モテモテに、もと王子様まで加わって、本当なら、萌え要素もりもりのはずなんだけど……もと王子様、ハゲだしな。キーワードに使えないね」

私「禿頭って萌えじゃない？」

A「ごく一部の世界なら、萌えかもね」

私「私的には『忍者』とか『武闘僧』がツボなんですが……」

A「……もうちょっと世の中の流行をリサーチしてから書きなよ」

K「だいたいタイトルが地味なんだよ、『女勇者』じゃ、弱い。見てもらおうと思うのなら、インパクトのあるタイトルでなきゃ」

私「たとえば、どんな？」

K「『姫勇者セレス』！」

私「……」

K「『何だ、これ?』って最初のつかみはＯＫだ」

いやいやいやいやいや、それ看板に偽りありだから！

姫じゃないしｗ

てなわけで、たまにキーワードとか変えるかもです。

本文もたまに手を入れてますが、誤字脱字の修正、わかりづらい文章を直したりぐらいで、大きな変更はありません。

師と弟子

忍者ジライが仲間に加わってから、勇者一行の戦闘スタイルは変わった。

ジライが忍法を使える為だ。

武闘僧ナーダは神聖魔法・回復魔法・強化魔法・弱体魔法を使えるものの攻撃魔法だけは使えず、セレスは神聖魔法しか使えない。

赤毛の傭兵アジャンは魔法とは全く縁がなく、東国の少年シャオロンも同様だ（シャオロンは『龍の爪』を装備すれば、聖水を降らせたり、竜巻を起こす事ができたが）。

これまでは、離れた敵とは『エルフの弓』か『龍の爪』の竜巻をもって戦うしかなかった。それが、火焔・わたつみ・大なまず・かまいたち・氷柱・雷の、火水土風氷雷の忍法を用いても良し、手裏剣・クナイで攻撃しても良しとなったのだ（しかも、ジライは複数の人間を一度に倒せる巨大な卍手裏剣『大風車』を持っていた）。

地中深くに埋められていた呪具を浄化する為に、掘削魔法のない一行はひどい苦労を強いられた事があった。が、これからは同じ状況となっても、ジライの『大なまず』と『雷』の忍法があるので地中のモノを掘り出したり、壊したりする事は困難ではなくなった。

ジライは敵を弱体化する忍法――影縫い・眠り・麻痺・幻術や、隠身のような役に立つ忍法も使えた。

しかし……

忍法は、持って生まれた魔力を源とする魔法とは異なり、気を練って初めて使用が可能となり、大技になればなるほど長時間、気を練る必要があった。忍法は突発的な事態の対処には、あまり向いていないとジライは説明した（ジライは戦闘前に常に気を練っているとの事だが、五つの大技を使うのが限度だと言っていた）。

忍法は連発できない性質のものなのだ。

だが、そもそも……

女勇者一行は、魔法をあまり使わない。
武闘僧は、魔族の数が多い時には強力な浄化魔法を使用する事もあった。が、いざという時の治癒魔法の為に、たいてい、魔力は温存していた。彼が常日頃使う魔法は、セレスへの疲労回復魔法ぐらいだ（成人男性並みの重量の『勇者の剣』を背負う彼女は、二～三時間も歩くとへばってしまうのだ）。
セレスにしても、唱えられる神聖魔法は初級レベル。魔法を唱えるよりも、聖なる武器を振るう方が遥かに強いので、ほとんど魔法は使わない。
忍者ジライが加わって多少は改善されたものの……
やはり、勇者一行は魔法が不得手であった。
一行に魔法使いが加わらない限り、その状況に変わりは無いだろう。

「きゃあああああ！」
振り向きざまに、セレスは、遠心力を生かして、左腕で背後に居た者を吹き飛ばしていた。
ドタン、バタン、ゴロゴロと……部屋の中を転がってゆく者を睨みつつ、セレスは大声をあげた。
「あなたねえ……いい加減、やめてちょうだい！気配を殺して背後に立つのも！耳元でぼそぼそ呟くのも！鳥肌が立っちゃったじゃない！」
おぞおぞ～とする全身を抑えるように、セレスは両腕を組んだ。
いつも、こうなのだ。宿屋の部屋で一人でくつろいでいたり、廊下を歩いていたりすると……忍者ジライがすばやい体術で何処からともなく現れ、背後を取って、耳に息をふきかけるようにボソボソと話しかけてくるのだ。
何しろ、ジライは元暗殺者。何度も命を狙われたセレスは、危険を感じると過敏に反応してしまう。あ、マズい、止めようと思う前

に、手足が勝手に動いて……ジライを殴り飛ばしたり、蹴り飛ばしたりしてしまうのだ。

ジライが背後に立つ→セレスが殴る（蹴る）が、日課になりつつあった。そんなセレスに、シャオロンは怯え、アジャンとナーダは呆れている。

セレスとしてはこの日課を止めたいので、何度も、ジライに背後に立たないよう注意した。

だが、ジライは毎回『心しておきまする』とか何とか殊勝な事を口にするくせに、翌日、又、同じように背後を取るのだ。『申し訳ございません、セレス様、私は忍にござりますれば、人の背後をとるのは癖のようなものでして』と、忍者はニコニコ笑うばかり。ちっとも背後に立つのを止めてくれない。

「で、何の用なの、ジライ？」

不機嫌な為、つい喧嘩腰になってしまう。

忍者は左の脇腹の辺りを押さえて、ぶるぶると震えていた。そんなに痛がるのなら、殴られかねない登場の仕方を改めればいいのに！と、セレスは忍者を睨んだ。

「実は……」

「え？何？よく聞こえないんだけど？」

「ですから……」

「え？だから、何？」

「つまり……」

ぼそぼそっと呟く忍者の小声がよく聞こえない。覆面をしているせいで、声が籠っているのだ。

「もう！あなたねえ！はっきりとしゃべれないのなら、その覆面、取りなさいよ！」

忍者は脇腹を押さえるのを止め、セレスに対し片膝をついてかしこまった。

「申し訳ございません、セレス様、そればかりはご容赦を。忍にとって素顔を見られるのは死に勝る恥辱。お仕えする主君であっても、

素顔をお見せするわけにはいきませぬ」
「だったら、もっと、しゃきしゃき喋ってよ！男のくせに、ぼそぼそぼそぼそ！蚊の鳴くような声なんて、みっともない！聞いてるだけでイライラしてくるわ！」
「あああぁぁ」
忍者は胸を押さえ、頭を下げた。
時々、ジライは胸の動悸を抑えるかのように胸元に手を当てる。結構、頻繁に手を当てるので、胸に持病が？と一時、セレスも心配したのだが、単なる癖らしい。
「覆面を外したくなかったら、もっと聞き取れる声でしゃべってちょうだい。それで、何ですって？」
「……先ほど、武闘僧より伝言を頼まれました。東国の小僧を伴って、当地のインディラ寺院を訪れるゆえ、しばし宿屋を空けると」
「ナーダがシャオロンを連れてインディラ寺院に行ったのね」
セレスはフーッとため息をついた。
ジライが仲間に加わってから、間もなく一週間。しかし、忍者は他の仲間に全く馴染んでいないのだ。
忍者は常に覆面をして素顔を見せず、人前では飲食をせず、同じ宿屋にすら泊まらずに夜は何処かに行ってしまう。日中も居たり居なかったり。居る時は常にセレスの側。話しかけるのも常にセレスに対してだけ。これでは仲間と親しくなるわけがない（アジャンはあからさまな敵意を忍者に示しているので、二人の仲が好転しなくても仕方がないのだが）。
「武闘僧は夕方には戻るとの事。宿屋にはセレス様と私（わたくし）めの他には、赤毛の傭兵が残っています」
「ねえ、ジライ。その武闘僧とか赤毛の傭兵って呼び方、やめて」
「む？」
「あなた、仲間になったのよ。親しみをこめて名前を呼ぶ方がいいわ。ちゃんと、ナーダとかアジャンとかシャオロンとか……」
「ご命令とあらば、改めまする」

「ご命令って……そういうわけじゃないんだけど」
「シッ！」
ジライの雰囲気が瞬時に変わる。覆面の下の目が冷徹な忍のものに変わったのだ。胸元からクナイを取り出し、セレスを背後に庇うように立ち、腰を低くする。忍者は何もない宙をにらみ、クナイを投げつけた。
空を切り、一直線に進んだクナイが、カーンと音を響かせ、宙で向きを変える。まるで壁で弾かれたかのように。
「物理障壁？結界魔法ね！」
セレスも壁にたてかけてあった『勇者の剣』へと手を伸ばす。腰の『ムラクモ』を抜刀しようとするジライ。
だが、そこで、ホホホホと笑うのどかな声が部屋に響き渡った。二人の前に、長い白髪、長い白髭の、黒のローブの老人が現れる。右手に握っているのは、魔法使いの杖だ。移動魔法でこの部屋を訪れ、おそらく姿隠しの魔法で室内を伺っていたのだろう。
「お師匠様！」
「おお、カルヴェル様！」
セレスは、え？と驚いた顔をジライに向けた。
『カルヴェル様』？
この老人と忍者ジライには面識があった。ジャポネの龍神湖で二人は出会っている。しかし、その時、二人は、セレスの師と暗殺者という立場で対立していた。命のやり取りをしていたのだ。
それなのに、どうしたわけで……『カルヴェル様』と呼ぶなんて？
「久しぶりじゃのう、セレス。シャイナの荒野でちょいと顔を合わせて以来じゃな。そして、ジライ、おぬしがセレスの味方となってくれて嬉しく思うぞ」
東国忍者は片膝をつき、恭しくカルヴェルに頭を下げている。まるで臣下のように。
「お師匠様、いつ、ジライと親しくなったんです？」

老人はホホホホと愉快そうに笑った。
「龍神湖の後、ジャポネの街でばったり会っての、意気投合したのよ」
「敵同士だったのに？」
「それは違うぞ、セレス」
老人はニコニコニコ笑っている。
「おぬしとジライは敵同士であったが、わしとジライは敵でも何でもなかった。わしは勇者一行の一員ではないからの」

カルヴェルは楽しくてたまらなかった。
素直な性格のセレスは、内面の感情がすぐに表に出る。
カルヴェルに改めて『勇者一行の一員ではない』と言われ、龍神湖でのカルヴェルの発言を思い出したのだろう。顔を真っ赤にして、口をへの字にし、かわいらしい眉をしかめて、ふるふると震えている。
『わしは、今も昔も、世がどうなろうが構わぬ。わしさえ楽しければ、後はどうでもいいのじゃ』
世の惨状を気にも留めず、己が楽しみに耽り、のうのうと生きている老人。正義を愛するセレスが、その生き方を認められるはずがない。しかし、祖父ランツの親友であり英雄の一人、魔法の師である老人を、軽蔑しきる事もできないのだ。何か理由があって悪役を演じているのだ、そうあって欲しいと願っているのだ。
「それで、お師匠様、今日はどういったご用件で？」
よそよそしい口調で尋ねてくるセレス。
本当に、セレスの反応はわかりやすい。
「なぁに、野暮用よ。それと、ジライに会いたくての」
老人は視線を忍者へと向けた。
「で、どうじゃ、勇者一行に加わっての感想は？」
「は。至福……の一言につきますな」

忍者は頭をあげた。
「セレス様の御為に働き、セレス様の盾となって戦う……私は生きる道を見つけました」
老人は忍者の目を見つめた。ジライは穏やかに笑みを浮かべている。
上忍に刃向う意志すら持てず、理不尽な支配を受け入れ、命じられた暗殺者を演じて、刹那、刹那を生きていた男……己が命にすら執着を持てなかった男は、セレスという主人を得て、初めて生きる喜びを見つけたようだ。
セレスにちょっかいを出しては怒られ、殴られ、蹴られ、罵倒される日々は……女王様趣味の忍者にとって被虐の悦びに酔いしれられる薔薇色の日々なのだろう。
ジライは恋い慕うセレスの為ならば、己が命をためらわずに差し出すだろう。忍の里一の忍者が、セレスの護衛に全身全霊を捧げているのだ。セレスはこれ以上望むべくもない優秀な盾を手に入れたといえよう。
「何ぞ、お飲物でもお持ちいたしましょう」
「あ、いや、いや、接待は無用じゃ。ちと話をしたら帰るでの」
「さようにござりまするか。ならば、御用の際にはお声をおかけくだされ。では御免」
と、言うや、忍者はすばやい体術で姿を消してしまった。師弟水入らずの邪魔はすまいという心配りなのだろうが……
「居てもいいのに……」
セレスが小さく呟いた。その顔は、カルヴェルと二人っきりになりたくなんかないと言ってた。
老魔術師はニコニコと笑いながら、弟子を見つめた。
「その後はどうじゃ、『勇者の剣』は？仲良くなれたかの？」
「ええ、だいぶ。未熟な私を見捨てずに、力を貸してくれています」
「今、重量は？」
「戦闘時には、時には持っているのを忘れてしまうほど軽いです。

どんなに重い時でも、辞書並の重さです」
「平時は？」
「……あいかわらずです、男の方を背負ってるぐらいでしょうか」
「戦士としてのおぬしは認めても、おなごに背負われるのは断固拒否か……若い男が好きじゃからのう、その剣は。のう、セレス、平時は前のようにナーダに背負ってもらってはどうじゃ？」
「嫌です」
きっぱりとセレスは言った。
「『勇者の剣』の振るい手は私です。常に傍にいて、剣と苦楽を共にしたいんです」
だが、重くのしかかる剣を背負っていては疲労も激しい。すぐに疲れるセレスの為に、勇者一行はよく小休止をとるし、武闘僧も一日に数回、疲労回復の呪文を唱えたりする。セレスが『勇者の剣』を背負い続ければ、デメリットが大きいのだ。
しかし、勇者一行の誰一人、セレスを責めない。あの口うるさい赤毛の傭兵ですら、背負うな！と言わないのだ。皆、セレスと『勇者の剣』が結びついた時の強さを認めているのだろう。
「ならば、その事はもう言うまい。セレスよ、これをちと預かってはくれまいか？」
何もない宙から、老人は銀細工の細い腕輪を取り出した。
「これをナーダに渡してくれ」
「ナーダに？」
腕輪を手にし、セレスは瞳を細めた。腕輪から、あたたかな光が広がっているように見えたからだ。
「魔法道具（マジック・アイテム）ですか？」
「うむ。結界魔法を増幅させる腕輪じゃ」
「……」
「あやつ、ナラカの甥のくせに、結界魔法が苦手とは情けない。ナラカはその気になれば、インディラ国中を覆う巨大な結界を張れたものを」

「……」

「その腕輪を装備しておれば、今まで通りの魔力で結界の範囲・持続時間が百倍となる。腕輪が結界を維持するので、結界維持を腕輪に任せて戦う事も可能じゃ」

「……やっぱり、ご覧になっていたんですね」

「うん？」

「私達の戦いを千里眼でご覧になっていたんですね？」

腕輪を握りしめ、セレスは顔をしかめた。

「私達の戦いを覗いておられるほどお暇でしたら……他にやるべき事があるんじゃないんですか？」

悔しくて、悲しくて、セレスの青の瞳は涙に潤んだ。

カルヴェルが仲間にいてくれたら……

どれほど多くの命が救えただろう？

シャオロンの家族、村の人間、ジライの部下……

シルクド・シャイナ・ジャポネ・インディラで、魔族や大魔王教徒に殺された人々……

セレスはいたらぬ勇者である事を死者達に詫び、同じ悲劇を繰り返すまいと、勇者になろうと努めてきた。だが、未だに未熟。数多くの犠牲を目にしている。

それなのに、この老人は……

何百の魔族を瞬時に倒せるほどの力を有するこの老人は……

安全な場所から、ただ、傍観しているだけなのだ、魔族と人間達の戦いを……

「のう、セレスよ、おぬし、まだ、わしに勇者一行に加わって欲しいと願っているのか？」

セレスはカッと頬を染めた。

「思ってません！お師匠様は正義の為に戦うのはお嫌なのでしょ！だから、もう……馬鹿なお願いはいたしません！」

（ふむ。意気地を持つのは良いが、少々、悪い方向に精神が向かっておるようじゃな。わしへの不信感を魔族に煽られ、邪心を育てられては面倒じゃ）

ならば、そんな不信感など気にならなくなるような精神状態にしてしまえばいいと、カルヴェルは思った。

老人は、のんびりとした口調で言った。

「セレス、このところ、ずっと気になっていたのだが」

「……何です？」

「……最近、シャオロンが元気がないように思わんか？」

「え？」

スーッと、セレスの顔から険が消えてゆく。

「シャオロンが元気がない……？」

「うむ」

カルヴェルは力強く頷いた。

「あの元気いっぱいだったシャオロンが、最近、暗い。非常に暗い。笑いもしない。深い悩みを抱えておる様子。おぬし、心当たりは？」

「と、言われましても……」

セレスは首を傾げた。

「わしの見た所……ジライが仲間に加わってからじゃな、シャオロンが落ち込んだのは」

「え？」

「更に言うと」

コホンとカルヴェルは咳払いをした。

「赤毛の傭兵は、最近、怒りっぽい。非常に怒りやすい。気がかりな事がある様子。おぬし、何ぞ心当たりはないか？」

「……アジャンが怒りっぽいのは何時もの事でしょ？」

「じゃがな、セレス、気づいとるか？あやつ、最近、夜、宿をあけてはおるが、まったく娼館に行っておらん。あの女好きの男が、夜、

何やら調べ回っておる。わしの見た所……ジライが仲間に加わってから、ずっとじゃな」
「……」
「ナーダは、まあ、今の所、とりたてて変わったところはないが、心の中まではわからんぞ。新しい仲間への不信感を募らせておるやもしれぬ」
「……」
「セレス、ジライを仲間に加えたのはおぬしじゃ。おぬしは、ジライにも今までの仲間にも、その点において責任がある。ジライは、まあ、はっきり言ってしまえば、生き方の下手な男じゃ。忍の里の枠しか知らぬな。放っておけば、あやつ、シャオロン達を無視し続けるぞ」
「無視し続けますか？」
「うむ。あやつは、おまえの部下になったのであって、勇者一行の仲間になったのではない。シャオロン達など眼中にないじゃろう」
「う」
「赤毛の傭兵はジライが未だにおまえの命を狙っておるのではないかと、疑っておるのだ。あやつ、見かけによらず真面目な男じゃからのう、護衛役を真剣にこなしておるのだ」
「はあ」
「シャオロンは……精神葛藤中じゃ。おぬしの命を狙っていた忍者は許せない、しかし、おぬしは仲間と認めている、認めねばと頑張る、だが、やはり許せない、と、堂々巡り。ついでに言うと、ジライがあまりにも優秀におぬしの護衛役を務め、瞬く間に襲撃者を倒してしまうので、よけい、落ち込んでいるのじゃ。ジライさえ居れば、自分は要らないのではないか、と」
「！」
「セレス……広き世界を守護する事もむろん大事じゃが、まず周囲を見よ。勇者にとって何よりも大切なのは、共に戦ってくれる仲間なのじゃからな」

「……はい」
セレスはその青の瞳に、老魔術師を映した。
遊び好きで、いつも不真面目で、冗談ばかりを言って……でも、老人は真に大切な事は忘れない人だった。
勇者一行に加わらない事には、きっと理由がある。今は、その理由が明かせないので、ふざけて『世の中がどうなろうが構わない』と、言っているのだ。
そう信じよう……セレスは腕輪を握りしめた。
「さて、そろそろ行くかの」
「え？もう戻られるんですか？」
「うむ。今日はナーダにその腕輪を、赤毛の傭兵に首飾りを渡しに来ただけじゃ。赤毛の傭兵は隣室じゃな？ちょいと行って、首飾りの説明をしたら帰るわ」
「ちょっと待ってください、お師匠様……せっかくいらしてくださったんですし、あともう少しお話を伺いたいのですが……」
「話？したが、用事は終わったが？」
「今日の天気でも、最近の話でも、魔族の事でも何でもいいです。もうしばらく……ここに居てください」

「……セレス」
老人は苦笑を浮かべた。
祖父にも等しい老人に対し、女勇者は……甘えているのだ。嫌悪や不信感では打ち消すことができないほど、強い敬慕の念をセレスは老人に抱いているのだ。
「……赤毛の傭兵をここに呼び、おぬしの前で話すか」
老人は声を張り上げた。
「ジライ、傭兵を呼んでまいれ」

「承知」
姿はなくとも、返事は返る。東国忍者は身を潜めて護衛役を務めながら、二人の会話を聞いていたのだろう。
間もなく、赤毛の傭兵がやって来た。むっつりとした不機嫌そうな顔で。
「で、俺に何の用だって？」
「これをやろうと思っての」
老魔術師は、空から銀の首飾りを取り出した。ペンダント・トップには、傭兵の瞳と同じ色の大粒の翡翠が輝いている。
「魔除けじゃ、おぬし、魔族に好かれやすい体質のようじゃからの」
「ふん」
赤毛の戦士は、ジロジロと老人と首飾りを見つめた。
「そいつは、どの程度、ご利益があるんだ？」
「これをつければ、おぬしの第三の目は閉じる」
「あん？」
「ようするに、勘が働かなくなる。普通の人間と同じになるのじゃ」
「ケッ！なら、要らん！俺は、自分の勘を頼りに生きてきたんだ。勘を鈍らせたくない」
「……おぬし、又、魔族に体を奪われたいのか？」
その質問に、赤毛の戦士はぐっと喉を詰まらせる。
「魔族とて、本来は、そうホイホイと人に憑けるものではない。好きに出来るのは、契約を結んだ体か、もしくは自我を失い抜け殻となった体、或いは憎悪に憑かれ理性を失った者ぐらいなのじゃ、本来は。光の庇護下にある者に、無理に憑こうとすれば魔族側にもデメリットがある。能力の制限・減退、最悪、器ごと消滅する危機がある。じゃから、本来は、無理に憑こうとはしないのだが、」
『本来は』と何度も強調して言う、老魔術師。アジャンの顔が渋いものとなる。
「無理を承知でも欲しくなる器というものもある……それが、おぬしじゃ」

「……」
「しかも！おぬしは神魔の器となれる才がありながら、その精神に全く垣根を張り巡らしておらん。いつでも何に対しても精神を開け放ち、優秀な器である事をおおっぴらにしておる。道端で、素っ裸で寝っころがって大股を開いておるおなごも同然。さあ、どうぞ襲ってください、とばかりに、な」
「……」
「小物魔族であれば目をつけられてもいい。『聖王の剣』とおぬしの気力で、邪悪は退けられるじゃろう。じゃが、四天王級の上位魔族が相手となれば話は別。人が気力だけで抗える相手ではないのだ」
「……」
「目をつけられたら最後……と、思うべきじゃな。今のおぬしの場合」
「フン」
「どこぞの神殿で修行を積んで精神防壁の張り方を習得し、防衛できるようになればよいのじゃが、四、五年はかかるじゃろう。大魔王退治の旅の最中では無理というもの。そこでじゃ」
老人は、魔力で首飾りの周囲を輝かせた。
「この首飾りの出番！おぬし、これを寝る時と戦闘時につけるがよい。魔は人の夢も利用する。無防備度合が半端ない睡眠中と、魔族と顔をつきあわせる戦闘時に、霊媒能力の高さを匂わせてはいかん。能力を封印して、一般人の振りをしておけ」
「……寝る時と、魔族と戦う時だけでいいのか？それをつけるのは？」
「うむ」
「なら、まあ、付けてもいいが……」
アジャンは、首飾りへと手を伸ばしかけた。
「待て。渡す前に術をかける。おぬしの名を教えよ」
「名前？ンなの知ってるだろうが」
「真の名(まこと)を教えよ」

「……」
アジャンは眉をしかめた。
セレスは気遣わしげに、傭兵を見つめている。
赤毛の傭兵の『アジャン』という名は、本名ではない。彼の亡くなった弟『アジャニホルト』の偽名が『アジャン』だったのだ。弟の死後、赤毛の傭兵は弟と名前を取り換え、弟の名前を名乗っているのだ。
「真の名なんかねえよ、俺はアジャンだ」
「真の名、本当に忘れたのか？」
「ああ」
「過去見の魔法で、過去を振り返る事もできるが？」
「いらん」
「過ぎ去りし日々、おまえが生まれた家、両親、家族、本来のおまえであった時代の記憶が克明に甦る。何もかも思い出せるぞ」
「いらんと言ってる！」
「何故、拒む？真の名を取り戻し、おまえがおまえに戻るだけの事。おまえが本来の生に戻るだけじゃ」
「冗談じゃねえ！」
赤毛の戦士は声を荒げた。
「お断りだ！俺はアジャンだ！その名が駄目だってんなら、魔除けなんざいらん！」
赤毛の傭兵は、老魔術師を激しく睨みつけていた。相手を目で睨み殺しかねない、鋭いまなざしで。
しかし、その顔は青い。体も震えている。
怯えているのだ……危ういな……己の過去に……
（この男……いずれ魔に捕まる）
老魔術師はチラリと視線を女勇者に向けた。
（セレスの手には余るやもしれぬ）
だが、そんな思いは顔には出さず、老人はニコニコ笑みを顔に刻み、

「しょうがないのう。偽名では効力半減なんじゃが、無いよりはマシか。これ、傭兵、わしがタダで物をくれてやるのは珍しいのじゃぞ。首飾り、疎かにしたら、化けて出てやるぞ」
と、おちゃらけるのであった。

「カルヴェル様が結界魔法を増幅させる腕輪を私に？」
インディラ寺院から戻った武闘僧は、セレスから銀の腕輪を迷惑そうに受け取った。
「非常にありがたいアイテムですが……あの方から物をお借りすると、後で無理難題をふっかけられるんですよね。セレス、カルヴェル様は、これの貸し賃について何かおっしゃってました？」
女勇者はかぶりを振った。
「特に何も。アジャンには首飾りをあげると言っていたけど、腕輪に関しては何も言っていなかったわ。聞いておけばよかったわね、ごめんなさい」
武闘僧は溜息をつき、室内を見渡した。ナーダ達と入れ違いぐらいに、老魔術師は移動魔法で帰ってしまった。今、居るのは、セレスと不貞腐れて窓から外を見ているアジャンと、壁に張り付くように静かに佇んでいるジライと、ナーダとシャオロン。勇者一行だけなのだ。
「おい、小僧」
忍者の声だ。ナーダの斜め後ろに立っているシャオロンは、ムッと眉をしかめ、忍者を睨んだ。忍者に侮辱される覚えはない。確かに、実力は及ばないけれども。
「何か、ご用ですか？」
「うむ」
忍者は両腕を組み、頷きを返した。
「今日から、おまえを『シャオロン』と呼んで構わぬか？」

「……」

「はい？」

「嫌か？嫌なら呼ばぬが」

「いえ、別に……『シャオロン』で構いませんけど」

「そうか」

忍者はスッと目を細めた。微笑むかのように。

「ならば、シャオロンと呼ぼう。おい、武闘僧、きさまを」

「ええ……『ナーダ』で結構ですよ」

半ば驚きながら、武闘僧は相手の先を読み、答えた。

「うむ。では、次だ。おい、赤毛の傭兵」

「うるせえ！好きに呼べ！」

アジャンは外を睨み続けている。よほど気に入らない事を大魔術師に言われたのだろう、不機嫌なままだ。

「ジライ……」

きょとんとした顔のセレスに、忍者は頭を下げた。

「セレス様の為、努めて騒動を起こさぬようにいたします」

そう畏まる忍者を見ているうちに……セレスは小さく吹き出していた。

「だからって、あなた変よ、一々、断るなんて」

「さようにござりまするか？」

忍者は首を傾げた。

「しかし、親しくもない相手から呼び捨てにされては、不愉快かと思いまして」

「馬鹿ねえ！『小僧』とか『武闘僧』とか呼ぶ方が無礼よ！あなた、やっぱり、ちょっと抜けてるわね」

「はあ……面目次第もござりませぬ」

ぽりぽりと、覆面の上から頬を掻くジライ。

明るく笑い声をあげるセレス。
その笑いは……シャオロンにも伝わった。ジライが仲間に加わってから、自分の存在意義に悩んでいた少年も、セレスの笑みにつられ、久しぶりに明るい表情を浮かべた。
シャオロンの笑みは、武闘僧の心も和ませ、笑顔を誘った。
一人、アジャンだけが意固地に外を見ていたので、その輪に加わらなかったが。

千里眼の水晶珠から顔を上げ、老魔術師カルヴェルはにっこりと微笑んだ。まだまだ問題は山積みだが、勇者一行は絆を深め合い、徐々に結束してゆくだろう。
（しかし、このままではマズい。セレスの次の相手は、魔法に長けた魔族、大魔王四天王イグアス。ジライの忍法やナーダの魔法では話にならぬ。イグアスは倒せぬ）
むろん、カルヴェルが手を貸せば、イグアスなど敵ではない。だが、カルヴェルが戦ってしまっては、全てが台無しとなってしまうのだ。
（イグアスとの対決の舞台はトゥルク。と、なれば、アレの力を借りられるやもしれぬ。ふむ……暦を読んで、敵の数を調整して、セレス達がちょうどよい頃、王宮に着くようにしてやるか）
大魔術師カルヴェルは、移動魔法で己を運んだ。
女勇者セレスを正しい道へ導く為に、カルヴェルは誰にも知られぬよう、ひっそりと戦い続けているのだ。

師と弟子（後書き）

『師と弟子』　完。

次回は『暁のくノ一』。舞台はペリシャ。
ジライを慕っていたあのくノ一再登場です。

暁のくノ一

暗殺者であった東国忍者が女勇者一行に加わった。

『このジライ、卑しき忍なれど、セレス様の尊きお心に触れ、あなた様こそ主人と確信いたしました。あなた様から報酬をいただく意思はございませぬ。ただ、お側に侍る事をお許しください。以後、陰ながらセレス様につき従い、セレス様をお守りする事をお許しくだされ』

そう忠誠を誓い跪く忍者の手を取ってセレスが立ち上がらせたのは、まあ、いつもの事。セレスは世間知らずのおひとよしのお姫様。その脳天気さにはうんざりしていたが、文句を言ったところで、一向に改まらない。

シャオロンが、尊敬する女勇者に絶対服従をしてしまうのも、いつもの事。

だが……

「何で、おまえまでのほほんとしてやがるんだ、ナーダ？」

宿屋の一室で、赤毛の傭兵アジャンは緑の鋭い眼差しで、威嚇するように武闘僧を睨んだ。

「暗殺者が寝返るなんざ芝居に決まっている。しかも、野郎、無報酬で働くとほざいて、金品はおろか、宿もいらん、食事も食わんときてる。タダで命懸けで働くなんざありえん」

「……ご自分の物差しで何事も判断しようとするのは、あなたの悪い癖ですよ、アジャン」

語気を強めている戦士に対し、武闘僧はのんびりと諌めるように話す。

「確かに、報酬を拒んでいるのは問題だと思いますがね。彼が生活費や武器、火薬などの消耗品をいかなる方法で手に入れているのか……ためこんだ貯金を崩しているのならいいのですが、非合法な手段でお金をつくってる可能性もありますよね、強盗とか窃盗とか詐欺とか。なにしろ、元大魔王教徒だし、裏で何やってるか」

「ンな事はどうでもいい！」

「よくないですよ、従者が犯罪なんかしてたら大事です。バレたら、せっかく『女勇者セレス』で盛り上がった勇者の評判が地を這う事になります。せめて、生活費だけでも受け取るよう、セレスから説得してもらいますかね」

「ナーダ！　何故、おまえは奴を仲間と認める？　あれは暗殺者だぞ！　何で奴をセレスと二人っきりにしたりしやがる！」

武闘僧はフーッとため息をついた。

「安全だと思うからですよ、アジャン」

「……きさまにまで、セレスの脳天気さが移ったのか？」

「彼は安全です、それがわからないなんて、あなた、今、ご自慢の勘が鈍ってるでしょ？」

「なに？」

「冷静になってよく見てください。抜け忍となった彼には、セレスを暗殺する必要はないんです」

「だが、それこそが芝居かもしれん」

「依頼主を殺してしまったのに？　あなたが彼を気に喰わないのは、疑わしいからじゃなくて、他の理由じゃないんですか？」

「他の理由？　何だ？」

ご自分の胸に手を当てて考えてくださいと言ってから、武闘僧はにやりと笑った。

「猪突猛進型正義の味方のセレスには監視役をつけようかと思ってましたので、彼が傍にはりついてくれるのなら好都合です。セレス

への忠義心も、私やあなたと違って満ち溢れてますしね、シャオロンと同じぐらいあるでしょう」

「……」

「私の調べたところ……まあ、あなたも調べていたようですが、彼は夜になるとセレスの寝所のそばに潜み、一晩中、セレスを護衛しています。セレスにも私達にも内緒で、ね。その行動が怪しいといえば怪しいですが、殺す気ならもうとっくに殺していますよ。彼は、単に、セレスを守りたいだけです」

「無報酬で、か？」

「報酬なら貰ってるはずですよ、愛しい女を守る生きがい……それが彼の報酬です」

「……」

「不服そうな顔ですね。『愛』のみで生きる人間を信用できませんか？」

「できん」

やれやれとナーダが肩をすくめる。

「世界中の娼館で愛をふりまいている癖に、愛を信じられないなんて、かわいそうな方ですね、あなたも」

「うるせえぞ、クソ坊主」

ナーダはにっこりと微笑んだ。

「ま、何にせよ、私やあなたよりも、彼の方が護衛役に適しています。もと暗殺者ですから、賊の手口もお見通しでしょ？　この際、任せちゃっていいんじゃないんですか？　その方が楽ですし」

「ケッ！」

これ以上は話すだけ無駄。ナーダは仲間にひきこむのは無理だ。赤毛の傭兵は、一人で忍者の尻尾を捕まえる覚悟を決めた。

忍者ジライは、常に一行と行動を共にしているわけではない。昼の移動中は姿を見せたり見せなかったり。物陰に潜みついて来てい

る事もあれば、周囲にまったく気配が無い事もある。それでいて、宿に着くと必ず屋根裏などに居たりするのだ（セレスが呼ぶと姿を見せるし、時々、セレスの背後をとって驚かせているようだ）。

忍の里の者と接触している可能性が高いのは、昼と思われた。

砂漠の国と謡われるペリシャも、北部山岳地帯は高所にあり、緑も多い。季節が過ごしやすい春である事も、旅を楽にしていた。

首都イスファンを目指し、勇者一行は緑輝く森の街道を進んでいた。

赤毛の傭兵アジャンは、ふいに、それまで木に登りついて来ていた者の気配が消えている事に気づいた。

東国の少年シャオロンに、『後から追いつく。先に行け』とのみ伝えて、アジャンはぎりぎりまでジライの気配を感じていた辺りまで馬を返し、周囲を探った。

アジャンには動物的な勘があった。理屈抜きで真実に近づける、全てを見通す目といおうか。

木の幹に馬を繋ぐと、アジャンはやぶ草だらけの、森の中へ入って行った。なるべく音を立てないよう気を付けても、足場が悪すぎ、こすれる度に草をざわめかせてしまう。忍者に気づかれぬよう近づくのは不可能だった。

と、そこへ……

黒い影が現れた。

全身を黒装束で覆った覆面の忍者だ。しかし、その体は小柄だ。ジライではない。

「きぇぇぇぇい！」

甲高い声で気合を入れると、忍者は背の忍刀を抜き、アジャンへと斬りかかってきた。

女の声だった。

アジャンは刀を身をかわして避け、相手の動きを見た。素早い動

きで、女忍者はアジャンの急所を突こうとする。
しかし……
「あああっ！」
相手の右腕をむずっと掴み、アジャンは忍刀を奪った。それならばと女は懐に手を入れようとしたが、中から何かを取り出させる前に、左手もつかんでその動きを奪う。
「女、おまえ、ジライの仲間だな？」
覆面から覗く瞳が、キッ！とアジャンを睨む。睫毛の長い、艶っぽい瞳だったが、黒目が大きくまだ何処か幼い印象を漂わせている。その瞳が……涙に濡れていたのだ。
「抜け忍など、もはや仲間ではないわ！」
激昂し、女は、わっと泣き出した。
「殺せ！　今すぐ、あたしを殺せ！」
ポロポロと涙を流す女。忍とは思えない、その感情の激しさに、アジャンはひどく驚いた。
「その者を放せ、アジャン」
赤毛の傭兵は眉をしかめた。ジライに……何時の間にやら背後をとられていた。背後から回された手が、喉にぴったりとクナイの切っ先を押し当てている。
「放さねば、殺す」
「ほほう。勇者の従者仲間を殺すってのか？」
「きさまなぞ仲間ではない」
冷然とジライが言い放つ。
「我（われ）が忠誠を誓ったのは、セレス様、ただお一人。セレス様の為だけに我はある。セレス様の周りに居るだけの者など、もとより眼中にないわ」
「セレス！　セレス！　セレス！　セレス！　セレス！」
アジャンの腕の中の女忍者が、狂ったように女勇者の名前を呼んだ。
「どこがいいのよ、あんなトウモロコシ頭の女！　ジライを顎で使

う、お高くとまった嫌な女じゃない！　あんな奴より、あたしの方が、百倍も千倍もあなたを愛しているわ！」
「……セレス様の悪口を言うな」
「馬鹿ぁ！」
女忍者がめちゃくちゃに、アジャンの腕の中で暴れる。
「……おい、クソ忍者、痴話喧嘩なのか？」
と、アジャンが半ば呆れて尋ねると、
「痴話喧嘩などではない」
忍者はフンと鼻を鳴らした。
「とうの昔にこやつは捨てたのだ。男女の仲ではないわ」
「ジライ……」
女忍者の声がせつなげなものに変わる。そこで、忍者ジライは非情にもこう言ったのだった。
「何度言えばわかるのだ、アスカ。我は、おまえにはもう飽きたのだ。おまえとの遊びは終わったのだ」
「……」
ぶるぶると震え、女忍者は嗚咽を漏らした。
「わかったわ……わかったわよ。あなたは、あたしより、あの女がいいんでしょ、わかったわよ」
「里へ帰れ、アスカ。いつまでも我につきまとっておれば、おまえまで抜けたかと里に疑われる」
「帰るわよ！　帰ればいいんでしょ！」
深く息を吐き、ジライはクナイの切っ先に少々力をこめ、赤毛の戦士を脅した。
「その女を放せ」
赤毛の傭兵は舌打ちを漏らし、女忍者の両手を放してやった。やっぱり痴話喧嘩じゃないかとぶつぶつ文句を言いながら。
女忍者は、掴まれていた両腕をさすりながら、少しづつ後ずさってゆく。
ジライはアジャンの首に、まだクナイを向けていた。女忍者が完

全に立ち去るまで、傭兵の動きを止めておく気なのだ。このアスカという名の女忍者をジライが大切にしている事は、アジャンにも伝わった。憎まれ口をたたいているのも、女忍者を里に帰らせる為なのだろう。

「最初は……連れ戻そうと思った。でも、あなた、依頼主まで殺しただなんて……そこまでやっちゃったら、お父様、決して、あなたを許さない……里に戻れば処刑、逃げても死ぬまで追い忍がつく……だから、」

アスカは目元を歪ませた。

「あなたを殺してあたしも死のうと思ったのに……それが無理なら、あなたに殺してもらおうと思ったのに……あなたが惨殺されるところなんか見たくないから……なのに、どうして」

涙に濡れた瞳が、まっすぐに愛しい男を見つめる。

「どうして、殺してくれないの？」

「おまえは殺さぬ」

ジライは女と視線を合わせようともしない。

「他の誰が刺客で現れようとも、我はためらわぬ。しかし……おまえだけは殺しとうない」

「……意地悪」

アスカは跳躍し、木の枝に飛びついた。

「いいわ。あなたが好きに生きるのなら、あたしも好きにする！あなたの一番大切なものを、あたしがメチャクチャにしてやるわ！」

「アスカ？」

「……女勇者を殺してあげるわ」

そのまま木を渡り、アスカは森を走った。その目指す先には、セレス達が居るはずだ。

「よせ、アスカ！　おまえではセレス様にかなわぬ！」

クナイをしまい、ジライも、又、忍の身軽さで木を駆けのぼり、女忍者の後を追った。

一人残された赤毛の傭兵は、二人の消えた方角を見つめ、溜息を

ついた。追うのも馬鹿らしかったが、女忍者がセレスを殺すと息巻いていた以上、護衛役として無視するわけにもいかなかった。馬が待つところまで取って返し、急ぎ街道を走った。

かなり離れた位置からでもセレス一行に女忍者が戦いを仕掛けた事はわかった。が、どんな様子なのかはさっぱりわからなかった。煙玉の黒煙がもくもくと広がる中、馬のいななき、剣戟の音、セレスやシャオロンのものと思われる声が響く。

「女勇者セレス！　お覚悟！」

女忍者アスカの悲痛な声の後……

悲鳴が響き……

黒煙の中から飛び出て来たアスカの体が、地面に転がった。おそらくジライに弾かれたのだろう。

同じく黒煙の中から現れた忍者装束に覆面の男が、女忍者を冷たく見下ろす。

「去ね」

「……」

煙はだいぶ薄れ、咳きこむシャオロンや、顔を押さえるセレスやナーダが馬を落ち着かせている姿が見え隠れする。

アジャンは馬を止めた。睨み合うジライと女忍者のすぐそばで。

女忍者は、おもむろに顔をアジャンへと向けた。覆面の下の瞳は未だに涙に濡れている……

「あたしは、あなたの言いなりになんかならないわ、ジライ！」

言うが早いか……

女忍者は覆面を外したのだった。

豊かな黒髪が宙を舞う。

涙に濡れた艶やかな美貌が、そこにはあった。

切れ長の瞳を細め、アスカは、アジャンへと微笑みかけたのだった。美しくも、哀しげに。

その瞬間……

ジライから殺気が広がった。

赤毛の傭兵は下馬し、背の大剣を抜いた。アスカを狙う『ムラクモ』を、すんでのところで受け、女忍者の命を守る為に。

「退け、アジャン」

先ほどまでとはうってかわり、ジライの瞳は冷酷な色に染まっていた。

「素顔を見られては、忍は忍として生きられぬ。掟に従い、そやつは殺す」

「掟？　どこの掟だ？　抜け忍のおまえが、抜けた里の掟とやらを守るのか？」

「それが……忍たるものの道なのだ」

「馬鹿野郎！　抜けたって言うんなら、何もかも捨てろ！　里の掟なんざ持ち出すんじゃねえ！」

「……」

「第一、俺が素顔を見たせいで女が死ぬんじゃ、寝覚めが悪い……俺は、女子供が死ぬのは好かん」

アジャンは、アスカの小柄な体をひょいと抱き上げ、その顔を胸に埋めさせた。目の端で見ると、セレス達はまだ目がよく見えていないようで、ぽろぽろと涙を流しながら顔を押さえている。

「この女は俺が預かる」

アスカを抱いたまま馬に乗り、アジャンは目指していた方角と反対へと街道を走って行った。

「どうして邪魔したのよ、この朴念仁！」

アジャンの腕の中で、アスカは泣きわめいていた。

「ジライに殺してもらおうと思ったのに！」

「ほっとけ、あんな薄情な奴」

「薄情？」

「おまえを殺そうとした。つまらん掟の為に、な」
「違うわ……彼は情けをかけてくれたのよ」
「情けだと？」
「ええ。忍にとって、正体を知られるのは死に勝る恥辱なのよ。あなたに顔を見られている今、おぞましくって、恥ずかしくって……気が狂いそうだわ」
「忍者は素顔を人に見せないものなのか？」
「そうよ。忍者である限り、ね。任務をおびて潜入する場合は他人になりきるわ。この顔を人前で晒しても、それは演じた役の仮面に過ぎない。でも、今は……あなたは、あたしをくノ一だって知っている。くノ一の顔を見られているのよ。舌を噛んで死んでしまいたい……」
「俺にはよくわからん考え方だが……」
赤毛の傭兵はぼりぼりと頭を掻いた。
「おまえのような美人が、ジライの馬鹿のせいで死んでしまうのは許せないな」
「馬鹿？　馬鹿ですって！　ジライの悪口を言うなんて許せないわ！」
「あいつは、馬鹿だ」
きっぱりと、赤毛の傭兵は言い切った。
「おまえを捨ててセレスに走るなんざ、馬鹿も馬鹿！　大馬鹿だ！」
「え？」
「ジライは馬鹿以外のなにものでもない。俺なら間違いなく、おまえを選ぶ」
眼をきょとんとしばたたかせた後、アスカの顔がくしゃっと歪む。
「おまえの方が良い女だ」
「うっ……」
アジャンの腕の中で、女はワーッと大声を上げ、わんわん泣き出した。まるで子供のように。
「あんな世間知らずの胸糞悪い女より、おまえの方がいい。美人だ。

それに、かわいい。男の為に全てを捨てる潔さもグッとくる。おまえの方が、絶対、いい女だ」

泣きじゃくる女忍者に、優しくアジャンは語りかけた。

「あんな見る目のない男、おまえから捨てちまえ。おまえには、もっといい男がふさわしい」

安宿の一室で、アジャンはアスカの細い体を抱いた。

東国の女は腰のくびれが少なく、胸が小さい。子供のような体型だったが、アスカのベッド・テクニックは手慣れたもので、そこらの娼婦よりもずっと巧みだった。

「ジライはね……あたしの初めての男なの」

抱かれながら、アスカはポツポツと身の上を語った。話してすっきりしたいのだろう。

「いつも冷たくて、意地悪で、そっけないんだけど……あたしだけが特別だった。どんなわがままでも聞いてくれたの。……時々、本当、めったにない事なんだけど、あたしと二人っきりの時にだけ、嬉しそうに笑う事もあったわ。あたしの黒髪にキスしてくれて……氷みたいな冷たい顔が、春の陽だまりみたいに優しくなるの……あの顔、大好きだった」

「ジライの素顔って、どんなんだ？　おまえがそれほどイカれるぐらいなんだから、結構、いい男なんだろ？」

アスカは静かにかぶりを振った。

「……言えないわ」

「ほう。やはり、おまえ、いい女だな。振られても、昔の男に義理を尽くすなんざ泣かせるじゃないか」

「違うわ……そうじゃなくて……余計な事、あたしが言うと、あなたの命が危うくなるから」

「何？」

「あなたがジライの人相を知ってしまったら、彼、間違いなく、あ

なたを殺すもの」
「ケッ！　無茶苦茶な男だ」
「その残忍なところが、又、いいのよ」
ほうとため息をついてから、過去のいろいろな事を思い出したのか、アスカの瞳にじわぁと涙が浮かぶ。
「だから、あたし……彼にもっともっと気に入られたくて何でもしたわ。剃毛に、金環、割礼でしょ、性感マッサージに女装レズプレイ、３Ｐ、４Ｐ、乱交に、それからＳもＭもやったげたし、彼がスカ●ロに興味を持った時には嫌だったけど協力したわ……なのに……なのに……」
泣きながら、アスカはアジャンの胸に抱きついた。
「そこまでしてあげたのに、あたしを捨てるだなんて！」
アジャンは……
（あのクソ忍者……むちゃくちゃ変態だったのか）
と、思いつつも顔には出さず、女忍者の髪をやさしく撫でてやり、気持ちが落ち着くのを待った。
「おまえ、幾つだ？」
「十八」
「何だ、そんなに若かったのか。俺は二十六だ」
「オジサンね」
「まあな。長く生きてる分、おまえよりは、多少、人生経験が豊富だ。だから、一言言わせてもらうが……」
アジャンは緑の目を細め、何もない宙を見つめた。
「俺は目の前の敵はぶっ潰して生きてきた……だが、勝負を捨てた時もある。この世の中には、決して曲がらないものがある。幾ら抗っても、幾ら工夫をこらしても、人の力じゃどうしようもないものが、この世には存在する。そういうものに出会った時は……」
「出会った時は？」
「そんなもの最初からなかったんだと……すっぱりと、忘れちまうんだ」

「……」

「拘れば拘るほど未練が残り……自分がみじめになるだけだ……」

アジャンの脳裏に雪景色が甦った。

降りしきる雪と……

腕の中の冷たい弟……

遥か昔に捨てた故郷……

思い出すまいと心を縛っていたものを、魔族に術をかけられ、克明に思い出してしまったあの日……

最愛の弟アジャニホルトを死に追いやってしまったのは……

赤毛の傭兵の顔に自嘲が浮かぶ。

これ以上、思い出すものか。父が、母が、姉が、妹が……何故、死んだのかは覚えている。だが、その日の感情は、捨てた。忘れるよう、心を縛った。

思い出したところで……もはや、誰もいないのだから。

「忘れる……」

アスカは激しくかぶりを振った。

「忘れるのなんか無理よ、ジライは、あたしの全てだったんだもの」

「なら、手っ取り早く、身近な快楽に走るんだな」

「身近な快楽？」

「うまいもんたらふく食って、いい男と寝て、着飾って遊びまくって……何でもいいから気持ちのいい事をしまくるんだ。そのうち、マシな何かが見つかるだろうよ」

「あなたにはあるの、そのマシな何かが？」

アジャンは瞼を閉じた。

心の中の吹き荒ぶ雪を憎みながら。

ゆっくりと緑の瞳を開け、赤毛の戦士は口元に笑みを浮かべた。

「さあな。あるような……無いような……。だが、こうやって、いい女と寝ると、生きているのが楽しくなる。おまえの、本当、最高だぜ」

「……あなたのも逞しくて素敵よ」

アスカはクスッと小さく笑った。
「ジライのよりも逞しいわ」
「だろ？」
「でも、性交（セックス）は彼の方が上手ね」
「なに？」
赤毛の傭兵はムッとして、女忍者に挑みかかった。
「俺が下手かどうか、その体で確かめてみろ」
「下手とは言ってないわ、あなたもいい線いってるわよ。でも、ジライの方が」
「うるさい」
アジャンは女忍者の唇を唇で塞ぎ、その子供のような胸を乱暴に鷲掴みにするのだった。

暁に染まった街道で、二人は別れた。
国に帰ると言う女忍者に、赤毛の傭兵は、
「ジライがくたばったら、奴の首を土産に忍の里に遊びに行く」と、言って、彼女を笑わせた。
アスカは昇りゆく太陽に向かって街道を駆けて行った。
しばらくその背を見送った後、アジャンは次の街をめざし、馬を走らせて行った。

その日の夕方、赤毛の傭兵はセレスらに追いついた。勇者一行は次の街の宿屋に逗留し、アジャンの到着を待っていたのだ。
宿屋のカウンターで宿泊名簿を確かめている時、アジャンの背後に音もなく忍者ジライが現れた。忍者は覆面の下の瞳を細め、探るように赤毛の戦士を見つめていた。
宿帳を宿屋の親父に返し、アジャンはゆっくりと女勇者の部屋を目指し、その後を忍者がついていく。

「……女は故郷へ帰った」
独り言のようにぽつりとアジャンがつぶやくと、ジライも、又、抑揚のない声で呟いた。
「さようか」
「昨夜はとびっきりの東国美女とよろしくやった。すんげえ別嬪だったんだが、どうも、俺は人の顔を覚えるのが苦手でなあ……どんな顔だったかは忘れちまった。まったく思い出せん。あ～あ、もったいねえ」
「……一応、礼を言うべきなのであろうな」
「礼？誰が誰に？気色悪いことをぬかすな、裏切者」
アジャンは振り返り、右の人差し指をジライへと指した。
「はっきり言っておく。俺はおまえを信頼せん。女勇者の暗殺は、確かに止めたのかもしれん。だがな、おまえを味方とは思わない」
「……」
「組織を裏切った奴は、二度三度と裏切りを繰り返すもんだ。俺はそういうクズをさんざん見て来た。俺はおまえが何時、裏切ってもいいように、ずっと刃を構えているぞ」
「……好きにすればよい。我はきさまの信頼などいらぬ。セレス様にさえ信じていただければ満足ゆえ」
「ケッ！」
アジャンは、このかわいげのない変態忍者と『股兄弟』になってしまったのかと思うと不快だった。
そんな話をしている間に、アジャンはセレスの宿泊部屋まで着いてしまった。
「アジャン、お帰りなさい♪」
迎え入れてくれたセレスは、何時になく機嫌が良かった。アジャンに椅子を勧め、シャオロンに水差しを運ばせる。
「どうぞ」と、シャオロン。
「すまんな」
喉が渇いていた赤毛の傭兵は、杯を受け取り、ごくごくと水を喉

に流し込んでいった。
「でも、驚いたわ、アジャン、あなたが敵の命を助けるだなんて…」
セレスがにこにこ笑っている理由がわかり、アジャンは顔をしかめた。戦いの場において、敵の身の上を知るや同情し、見逃すのはもっぱらセレス。赤毛の戦士は、何時も、セレスのその詰めの甘さを非難し、セレスの非常識さを蔑む発言を繰り返していたのだ。
「たとえ命を狙ってきた人でも、事情を話せばわかりあえるものよね。大魔王教徒だって人間なんだし」
「アジャンがあのくノ一を助けたのは、美人だったからじゃないんですか？」
窓辺の武闘僧は腕を組み、一人、納得するかのように頷いていた。
「目潰しのせいで私にはまったく見えませんでしたが、美人だったに決まっています」
「むちゃくちゃ良い女だったぜ、セレスの百万倍は良い女だったぞ」
ジライへの嫌味のつもりでそう言い、アジャンは水の入った杯を煽った。
「ふ～ん、美人なの？」
おとしめられた事など全然、気にせずに、セレスはにっこりと微笑んだ。
「私も会いたかったわ、ジライの妹さんに」

（……）

ブ―ーッッ！　と口の中の水を、アジャンは吹き出してしまった。
「キヤっ！　いや！　汚いわね！」
正面に座っていた為、水をかけられたセレスが不快そうに怒る。
シャオロンは慌ててタオルを取りに行き、ナーダは我関せずと窓の

外を眺めていた。
「いっ、……いもうとぉ？」
アジャンは震えながら、セレスに手ぬぐいを渡している忍者を指さした。
「妹っていっても……義理かなんかだろ？　親の再婚相手の連れ子とか……」
「いや」
ジライがけろりと言う。
「アスカは父母を同じくする我が妹。競走馬でいうところの、全兄弟でござる」
「……」
バタンと机の上につっぷすアジャン。
「アジャンさん、どうしたんですか？」
横からシャオロンが心配そうに声をかけた。が、濡れた顔をぬぐいつつ、セレスは、
「疲れがでたんでしょ、ほっときなさいな、シャオロン」
と、赤毛の戦士を無視して、忍者に話しかけた。
「あなたに妹さんが居たなんて知らなかったわ」
「はあ。私の父はたいへん好色で里中に異母兄弟が居るのですが、父母を同じくする者はアスカただ一人……他の者はともかく、あれは我が宝……目に入れても痛くないと思っております」
「お兄さんを連れ戻しに来たのよね、アスカさん。兄妹の絆っていいわねえ」

（違う……あの女は恋人を取り戻しに来たんだ）
アジャンは頭を抱えていた。
今まで世をすねていろいろとあくどい事もやってきたものの、自分など、あの変態忍者に比べれば、ずっとまともなのかもしれない……そう思いながら。

暁のくノ一（後書き）

『暁のくノ一』　完。

次回は『英雄の墓――ペリシャ編』、舞台はペリシャ。
シャオロンの話です。

英雄の墓――ペリシャ編　1話

「どうゆう事かしら、ジライ……今日という今日は、きっちり申し開きをしてもらうわよ」

今宵の宿屋の部屋で、女勇者セレスはポキポキと指を鳴らしていた。

少し前に仲間になったばかりのもと暗殺者――忍者ジライは、これまでも、やたら背後をとってくれたり、耳に息を吹きかけてくれたりと、いろいろといやぁな事をしてくれたのだが……

今日ばかりはやすやすと許す気は無かった。

なにせ、忍者は……

セレスが寝室の屋根裏に潜んでいたのだ。

天井に気配を感じ、『勇者の剣』を振るってその剣圧で天井を壊したところ……天井から忍者が落っこちてきたというわけなのだ。

忍者は片膝をつき、床に跪いた。

「誤解なきよう先に申しあげておきまするが、お命を狙い潜んでいたわけではござりませぬ」

「あ～ら、そう。そうと知って、嬉しいわ……でも、じゃあ、ど～して、屋根裏に潜んでいたのかしら？」

ジロッ！と睨む女勇者に対し、忍者の覆面の下の目元がへら～と笑みをつくる。

「屋根裏掃除などを」

「嘘つきなさい、この変態！」

セレスは、おもいっきり忍者の顎を蹴とばした。

「H！H！H！H！見たわね、ジライ！あなた、私の着替え、覗いたでしょ！」

ドスドスと忍者を踏みつけるセレスは顔中を真っ赤にして、目に涙を浮かべている。寝巻きの貫頭着に着替えるところを覗かれてしまったのだ。恥ずかしくって、顔から火が出そうだった。

一方、踏みつけられている忍者は……

「あああああ」

うっとりと被虐の悦びに酔いしれていた。床に転がって踏みつけられると、貫頭着のおかげで、セレスの美脚は丸見え。太ももまで見えるし、時には下着までチラチラと♪

「……」

扉の前で硬直していた武闘僧ナーダと東国の少年シャオロンは顔を見合わせ、セレスの部屋の扉を閉めた。セレスの部屋から轟音が響き、敵襲か？と焦り駆けつけてみたのだが……

「……馬鹿らしい」

ナーダは嘆息し、遠巻きに見ている宿屋の者達の元へと向かった。

『大魔王教徒の襲撃ですが、間もなく撃退できます』と適当な嘘をついて、忠義の部下から渡されていた金袋の中身を有効利用する。宿屋の主人には後ほど修繕費を全額支払う約束をした上で、金の魔力を使って野次馬ともども下がらせる。周囲に人影が無くなってから、ナーダはシャオロンに笑みを見せた。

「とても付き合ってられませんね、私達はさっさと寝て旅の疲れを癒しましょう、シャオロン」

「……そうですね」

シャオロンの表情は暗く、顔は強張っている。

ナーダは微かに眉をしかめた。

忍者ジライが仲間に加わってから、すがすがしいほどに元気だったシャオロンが沈みがちになっている。暗殺者であったジライを受けいれられないまま、セレスの側仕えの役を奪われ、襲撃者を瞬く間に撃退する忍者の有能な護衛ぶりを見せつけられているからだ。

シャオロンはセレスの役にたてぬまま、日々、鬱々と暮らしてい

るのだ。
（そういえば、明日は……）
僧侶はにっこりと笑みを浮かべた。
「シャオロン、私達は、この宿に明日も泊まります。明日、私はが当地のインディラ寺院を訪れますので」
「あ、はい、お供しましょうか？」
「いえいえ、大丈夫です。あなたは、あなたの予定があるでしょ？」
「え？」
ナーダは懐から先ほどの金袋を取り出した。多少、使ってしまったが、まだ充分な重みがある。それを少年に手渡した。
「使ってください」
「え？でも、何で、そんな……？」
ナーダは微笑んだままだ。
「ここペリシャではお酒は販売されてませんからねえ、そのお金で何か良い供物を買ってらっしゃい」
「あ……」
少年が大きく瞳を見開く。
明日は、父母、兄達、村人達の月命日なのだ。毎月、シャオロンは月命日に、部屋に仮の祭壇をつくり、香を焚き、酒と供物を捧げ、死者に祈っているのだ。
「あの……ナーダ様」
おずおずと、少年は金袋をささげ持った。
「お気持ちだけで充分です。オレ、お金なら、けっこう持ってるんです。アジャンさんが、その、正当な護衛料金だって言って、お金を渡してくださるんで……」
「ほう」
パーティの金庫番のアジャンが、シャオロンに報酬を渡しているなど初耳だった。
「いくら貰ってるのです？」
「最近は月に三万ゴールド。大きな戦闘をこなす度に、成功報酬と

して五万ゴールドいただいています。ちょっともらい過ぎだと思うんですけど、これぐらいが相場だって、アジャンさんが……」
「とんでもない。あなたの働きからすれば安すぎるぐらいですよ。衣食住の面倒をみてあげている分を差し引いたとしても、ね」
とはいえ、あの傲岸な性格の赤毛の傭兵が、セレスから預かっているお金をやりくりして、シャオロンの報酬分をねん出しているのかと思うと、ほほえましかった。
「まあ、お金はいくらあっても困るものではなし。それは、あなたが使ってください」
「でも」
「では、こう思ってください。そのお金は、ご家族と村の方々への私の気持ちだと。月命日って三年、続けるのでしょ？お香や供物、酒代だけでも、結構な額になります。弔われている方々にしても、自分達の為に、あなたが貧窮にあえぐのは望まないはず。アジャンから貰う報酬は貯蓄に回し、そのお金は今後の供物代にしてください」
「ナーダ様……」
「インディラ教とシャイナ教。信心する神は異なれど、死者を敬う気持ちは同じです。月命日を続けているあなたに、私は敬意を表しているのですよ」
「そんな……オレなんか」
「あなたは立派です。戦士としても、人間としても。その事を、私はよく知っていますよ」
合掌して軽く頭を下げてから、ナーダは少年に背を向け、自分の部屋へ戻って行った。

シャオロンは宿屋の窓から、外を眺めていた。
街の彼方から朝日が昇っている……
ペリシャの首都イスファン。砂漠の中に浮かぶオアシスの街。窓

から外を見渡すと、整然と建物が遠くまで並び、街の中心を流れる河ぞいには一際大きな豪奢な建物ーーー王宮があった。北部山岳地帯から流れる河の恵みが、この街を造ったのだ。イスファンより南に下ると、河は次第に細くなり、やがて砂漠に消える。

インディラやシルクドとの国境の山岳地帯には緑があるものの、ペリシャの国土の七割が砂漠・乾燥地帯なのだ。ペリシャ教という厳しい戒律のある信仰を貫く砂の国……シャオロンにとって、ここはまったくの異郷だ。今までは、インディラ教を国教としているシャイナと同じ宗教圏――ジャポネとインディラに居た。異国とはいえ、人々の気質には自分に通じるものがあったが、ペリシャに来てからは、妙に落ち着かない。心が休まらないのだ。

ノックが響いた。

こんなに朝早くに誰だろう?と、扉を開くと、廊下に赤毛の戦士が佇んでいた。

「アジャンさん……?」

「入るぞ」

ズカズカと部屋に入って扉を閉めると、赤毛の傭兵はフードマントを脱いだ。砂埃が部屋に舞い、シャオロンは咳きこんだ。砂漠越えでもしてきたような汚れ方だ。

「悪い」

謝ってからフードマントの下に隠していた物を取り出し、ぽんと部屋のテーブルの上に置く。

「やる」

水筒だった。

何なんです?と、尋ねても、赤毛の傭兵は肩をすくめるばかり。シャオロンはアジャンに頭を下げて、断ってから水筒の蓋を開け、ハッと驚いた。

「アジャンさん、これって!」

「シッ」

傭兵は周囲の気配を伺ってから小声で囁いた。

「隠しておけ。外国人でも、そいつを持ってるのがバレたら鞭打ち刑だ」
「でも、これを、一体、どこで？」
赤毛の戦士はあくびをした。
「蛇の道は蛇ってね。何処の世界にも、俺みたいなはみだし者はいる。やばい事やってでも稼ぎたいって奴も、な」
『使わないんなら、寝台、貸してくれ』と言う傭兵に、少年は頷きを返した。
魔除けのペンダントをしてすぐにいびきをかいて眠りに堕ちたアジャンを、シャオロンは涙目となりながら見つめていた。感謝の気持ちで胸を熱くしながら。
禁酒を戒律とするこの国で、アジャンはシャオロンの為に、酒を探してくれたのだ。今日がシャオロンの家族や縁者の月命日だと覚えていてくれて、砂埃にまみれ（おそらく遠所まで行って）高価なヤミ酒を購って来てくれたのだ。
（アジャンさん……ナーダ様……）
自分は、今、幸福なのだと……皆に伝えようとシャオロンは思った。護衛役としてろくな働きのできない自分を、見捨てずに大切にしてくれる人間が居るのだ。鍛錬を続け、戦士としての技量を高める事が、二人への恩返しだ……
（いつかは、あの忍者よりもオレは強くならなくっちゃ！）

朝食の後、シャオロンは置手紙を残し、バザール（市場）に馬で出かけた。
アーチのかかった通りの両側には、似たような大きさの店がずらっと並んでいる。品物の種類ごと職業の種類ごとに店が固まっているので、まずは香を扱う区画に向かい、東国風の線香を買い求めた。
次に向かったのは、食料品と日用品が揃ったバザールだ。そこで新鮮な果物か菓子を買おうと思ったのだが……

「！」
シャオロンは周囲をキョロキョロと見渡した。
行き交うのは、頭にターバンを巻いたペリシャ人。肌の色が違う、黒人、白人奴隷達。ほとんどが男性で、頭からベールを被り網のマスクで目や顔を隠した女性が、ほんの少し人ごみに混じっている。
「！」
もう一度、シャオロンは周囲を見回した。
確かに、聞こえたのだ。
《勇者の従者よ……》と、呼びかける声が……
だが、遠い。声は遠くから響いているようだ。
シャオロンは馬に跨り、声が聞こえてくる方角を目指した。

イスファンの街を離れ、シャオロンは郊外の荒れ地にやって来ていた。
土饅頭が盛り上がった土砂の小山が、不規則に並び、幾つも幾つも、何百何千と何処までも続いている。
「ここは……」
シャオロンはハッ！とした。先日、武闘僧ナーダから聞いた話を思い出したからだ。
『ペリシャ教では神以外のものに祈る事は固く禁じられていますので、葬儀も一周忌などの死者への儀礼も、たいへん質素です。墓参りもほとんどしません。死は神が定めた運命であり、一時的な眠りにすぎないと信じているからです。ペリシャ教にとって、死体は単なる抜け殻、穢れにすぎないのです。ですから、墓所はたいてい郊外にあり、墓も簡単な盛り土だけです』
「ここって……」
墓所に間違いない。
シャオロンは慌てて馬を返した。知らぬ事とはいえ、異教徒の自分が墓所に侵入してしまったのだ。ペリシャ教の信者の眠りを妨げ

る非礼を犯してはいけない。
けれども……
《勇者の従者よ……》
呼びかけは、墓所から響いているのだ。
「……」
シャオロンは馬を止めた。
「どなたです？オレに何のご用ですか？」
《勇者の従者よ……俺の話を聞いて欲しい……そして、かなうなら、俺の言葉を友に伝えてほしい》
「お友達に？」
《俺はとりかえしのつかない過ちを犯した。我が友ホーランとゲラスゴーラグンの為に、俺が犯した罪を、我が友ゲラスゴーラグンに心より詫びたい……俺の墓所まで来てくれぬか、勇者の従者よ……》
「……わかりました」
ホーラン？
ゲラスゴーラグン？
シャオロンは首を傾げた。どこかで聞いたような名前だったが、どこで聞いたのか思い出せない。ペリシャ風の名前でないのは確かだが……
シャオロンは下馬し、引き綱で馬を連れ、墓地を歩いた。馬の蹄で盛り土を壊さないよう、細心の注意を払いながら。
足を止めるべき場所は、シャオロンにはわかった。
だが、そこには何もなかった。盛り土すらも。ただ荒れ地が広がっているばかりで、その周囲にも墓は無い。墓所から出てしまったのだろうか？
けれども、そこは呼び手の墓であった。
シャオロンの前に、立派な口髭のペリシャ人が佇んでいた。シャムシール（曲刀）を左手に持った、鷹のように鋭い眼の武人だ。その姿は、よく見れば、所々が半透明だ。生者ではない。

《俺の名はシャダム。ペリシャ王の弟にあたる》
「え？王族の方なんですか？でも、じゃ、どうして、こんなさびしい墓所に……」
《寂しい墓所？外国の者はおかしな事を言う。朽ち果てた後の肉体やその周囲をいかに飾ろうと、何も変わらぬ。亡骸は抜け殻だ。イスファンで亡くなった者は、国王といえども、死後はここに葬られる》
「……そうなんですか」
盛り土だけの墓に身内を葬り、墓参りすらしないなんて、シャオロンには馴染めない考え方だ。しかし、それは、あくまでシャイナ教徒の考え方なのだ。
《勇者の従者よ……俺の眠りを覚ましたのは、今世の勇者だ。女勇者ゆえに、俺の呪は解け、俺は真実を語る事を許された。聞いてほしい。そして、伝えてほしい。我が友ゲラスゴーラグンに、俺が詫びていた、と》

現実に重なるように幻が見えた。

焚き火を囲み……
シャダムと名乗ったペリシャ人が、両腕を組んで不機嫌そうに座っている。
その横に座り、温和な笑みを浮かべているのは、頭を丸め、髭を剃った、インディラ僧だ。ナーダが身につけている武闘僧用のものとは異なり、僧衣の裾は踝にまで達している。
その隣には、豪快に笑う赤毛赤髭の小柄な男が居た。背こそ低いが、がっしりとした横幅があり、両腕も太く逞しい。背に大きな戦斧を背負い、腰には投斧を下げている。
更にその隣には……魔術師用のローブをまとった美しい女性が

居た。ローブから流れ出るのは月のごとく輝く白銀の髪、さらさらと河のように流れている。勝気そうな眉、不可思議な紫の瞳、よく動く愛らしい赤い唇。

女性の隣には、金髪碧眼の大柄な騎士がいた。軽口をたたく赤毛の男と女魔法使いの話に、一々相槌をうつかのように、ふむふむと頷いている。彼の背後の木には……人の身長ほどもある巨大な大剣『勇者の剣』がたてかけられていた。

「！」

シャオロンは愕然とした。

これは……

過去の勇者一行なのだ。

従者の中に女魔法使いがいるという事は……

（二代目勇者ホーラン様とその従者の方々なのだ）

歴代勇者の話は、セレスから寝物語としていろいろ聞いていた。先祖に憧れているセレスが、目を輝かせ、嬉しそうに語ってくれるのだ。シャオロンは頬を染め、いつも話に聞き入っていた。

二代目勇者ホーランには、ペリシャ建国王の弟で『銀の三日月』の振るい手の聖戦士シャダム、後にバンキグ国王に即位する『狂戦士の牙』の振るい手のゲラスゴーラグン、インディラ僧侶のマハラシ、女魔法使いユーリアが従っていた。

『シャイナの古代遺跡でのケルベゾールドとの決戦のさなか……女魔法使いユーリアは魔に堕ちたの。勇者一行を裏切ったのよ。ケルベゾールドに挑んだホーラン様を幻影で騙し、窮地に陥っていたケルベゾールドを助け、移動魔法で共に逃げたのよ。ユーリアの堕落に最も心を痛めたのは、北の戦士ゲラスゴーラグン様。旅の途中から、ゲラスゴーラグン様はユーリアの美しさに心惹かれ、熱心に

求婚していたそうなの。ゲラスゴーラグン様は最愛の女性の心を取り戻そうと、命も惜しまず魔に挑み、四十八回も生死の境を彷徨ったと言われているの。この四十八回っていう具体的な数字は後世の脚色っぽいんだけど、何度も大怪我をされたのは事実だと思うわ。だけど、ゲラスゴーラグン様の思い空しく……ユーリアはホーラン様の命を狙い……仲間を斬れないホーラン様に代わって……シャダム様がユーリアを魔族の呪縛から救ってあげたの。ゲラスゴーラグン様はユーリアが消えた後に残った一握の塩を握りしめ、天を仰ぎ、血の涙を流して号泣したと伝えられているわ』

女魔法使いユーリア以後、勇者一行に女は加わっていない。心弱き女では魔を払えないと信じられ、『勇者の剣は女を嫌う』という風評が世に広まったからだ。

なごやかに火を囲む二代目勇者一行。

彼等の姿は遠のいてゆき……

シャイナの古代遺跡が見えた。

そこに……ソレは居た。

シャオロンは悲鳴をあげそうになった。

暗い……

あまりにも黒く暗いものが……

そこに居たのだ……

光を穢すおぞましいもの……

触れてはいけない醜いもの……

どこまでも深い闇……

人の形を捨てた、瘴気のごとき闇……、

大魔王ケルベゾールドがそこに居たのだ……

英雄の墓――ペリシャ編　2話

闇が蠢く……
巨大な闇が……
底知れぬ無限の闇が……

『ケルベゾールド！覚悟！』
ホーランの『勇者の剣』が闇を斬り裂く。
闇と化していたケルベゾールドの憑代は、一握の塩を残し、消滅した。
勇者ホーラン、僧侶マハラシ、戦士ゲラスゴーラグンの顔に笑みが浮かぶ。
けれども……
『キャァァァァァ！』
女魔法使いユーリアの悲鳴が響き渡った。
身を二つに折り、跪くユーリア。彼女の元に最初に駆けつけたのは、聖戦士シャダムであった。
『闇が……私の中に……』
ユーリアは魔法で周囲の時を止め、駆け寄ろうとしていた仲間達の動きを止める。最後の願いをシャダムに伝える為、やさしすぎる仲間達の介入を拒んだのだ。
『憑かれたわ……ケルベゾールドに……』
『気をしっかりもて！浄化魔法をかける』
『無駄よ……私に悪心があったのね……こうも簡単に憑依されるなんて……従者失格だわ』
『あきらめるな！必ず助ける！』
『殺して、シャダム……』
『ユーリア！』

『今ならまだ、完全にとりこまれていない……あなたの剣でも、私を浄化できるはずだわ』
『何を馬鹿な……』
『早く……このままでは私を器にして大魔王が復活してしまう……殺して』
シャムシール『銀の三日月』の使い手は、かぶりを振った。
『嫌だ』
『もう時間がないわ……早く、殺して』
『……できない』
『シャダム』
『愛する女を……この手にかけられようか』
ユーリアは瞳を見開いた。
『シャダム……あなた……』
『ずっと君を愛していた』
『そんな……私、あなたに嫌われているものとばかり』
『ペリシャ教の戒律が捨てられず、己を偽ってきたんだ……だが、本当は……ずっと君に惹かれていた。愛している……君を失いたくない』
『シャダム……』
苦しそうに顔を歪ませていた女魔法使いが微笑む。嬉しそうに、目の前の聖戦士を見つめて。
『駄目よ、シャダム……あなたの教えでは、私は罪の女。穢れた存在よ。私のような女を愛したら、地獄に堕ちてしまうわ……忘れなさい、シャダム、何もかも。女魔法使いユーリアは魔の誘惑に負けて、魔に堕ちるのよ。そんな女を、誇り高いペリシャの聖戦士は憎まなければいけないわ』
『よせ、ユーリア！呪をかけるな！』
『軽蔑し、憎みなさい。そして、あなたが私を殺すのよ』
『やめてくれ、ユーリア！言霊で俺を操るな！』
『殺して、シャダム……あなたの手にかかって死にたい』

『嫌だ！』
聖戦士の右手がゆっくりと上がる。呪に抗おうと聖戦士は魔力を必死に高めたが、彼の意志に逆らい、聖なる武器が女魔法使いを狙う。
『無駄よ、シャダム。私の方が圧倒的に魔力が強い』
『ならば……こうする』
シャダムは愛剣の切っ先を自らの喉に向けた。
『シャダム！』
『愛している、ユーリア……君を殺す事などできない。君が罪の女であろうとも、魔となろうとも、俺にとって、君はただ一人の女だ……』
『そんな事を言っては駄目……シャダム』
『君を殺したら、待っているのは絶望だけだ。俺は俺を憎む！全てを憎むだろう……君の体から離れたケルベゾールドは俺の醜い心に惹かれ、俺に憑くに決まっている』
『シャダム……』
『……君を殺す事などできない』
『……馬鹿な人』
女魔法使いの紫の瞳から、涙が一筋こぼれ落ちた。
黒い気が女魔法使いの体に徐々に染み込んでゆく。
嫣然と微笑み、女魔法使いが呪文を唱え始める。
神聖魔法の一種と思われたが、シャダムには聞き覚えのない呪文だった。
長い詠唱だった。
その間、二人は瞳に互いの姿を映し、闇に囚われる苦痛と戦いながら女魔法使いは愛しい男に微笑みかけていた。
全ての詠唱を終えた女魔法使いは、己の胸に聖なる力をこめた右手をあてがった。その瞬間、清らかな白い光が華々しく輝き、瞬く間に収縮した。
光の消滅と共に、黒の気が急速に彼女の中にとりこまれていく。

ケルベゾールドの魂が、ユーリアの内に……
『ユーリア！』
呼びかけに応えるかのように、女魔法使いは微笑んだ。彼女のものとは思えぬ妖艶な笑みを作って。
『……ケルベゾールドと強い絆を結び合ったのよ』
『なに？』
『魔族はね、この世に存在する為には、力の大半を封印しなければいけないの。無理に力を行使すれば器が壊れ、人の世との縁が切れて魔界に戻ってしまうから。でも、さっきの呪文で、私は神の祝福を棄てたから……魔にふさわしい器に自分を造り変えたから……光の世界の制約を受けずに、ケルベゾールドは力を行使できるようになったのよ』
『ユーリア？』
『私達は完全に融合したのよ。ケルベゾールドは私、私はケルベゾールド……もう離れられないわ』
『なぜ、そんな？』
『私達はもう固く結びついているから……私が死ねばケルベゾールドも死ぬ。次の憑代には移れないわ……ホーランにも、マハラシにも、ゲラスゴーラグンにも、そして、あなたにも……そういう形でケルベゾールドを呪縛したの。さよなら……シャダム』
『ユーリア！』
『ケルベゾールドがここから離れたいと望んでいるの。逆らえないわ』
『行くな！』
『なにもかも忘れて、シャダム。私はじきにこの姿を捨てるわ。私が大魔王では、おひとよしのホーランは斬れないもの。影を送るわ……私の姿の影を……あなたが斬るのよ。この世界から裏切者の女魔法使いを殺すのよ』
『頼む！やめてくれ！呪をかけないでくれ！』
『あなたが斬って……ホーランとゲラスゴーラグンの為に。私を

愛してくれた優しい北の国の戦士に、私を斬らせないで……』
『ユーリア……』
『生きて、シャダム……あなたは光の戦士のままで。私への愛など忘れて、輝かしく生きるのよ』
『忘れない！忘れるものか！君が呪で俺の思いまで消すというのなら、俺は、今、ここで死ぬ！』
『シャダム……』
『愛している、ユーリア……この思いを失わせないでくれ』
『……どうしようもない人ね、あなたって……』
ユーリアは微笑んだ。その気を黒く染めながら。
『あなたの私への思いは消さないわ。でも、今は忘れて、ホーランとゲラスゴーラグンの為に……』
『ホーランとゲラスゴーラグンの為……？』
『あの二人には、私は魔に堕ちたと信じさせて。私が心を保っていると知ったら、あの二人はケルベゾールドと戦えなくなるわ。二人の為に……今は愛を忘れて……私を憎むのよ』
『今だけだな？』
『ええ』
『俺は思い出せるのだな？』
『時が来れば、あなたは思い出す……でも、それまでは忘れるのよ、シャダム。何もかも……』

幻は消えた。
シャオロンは、冷めた笑みを浮かべる英雄の霊と、荒れ地にたたずんでいた。
《ユーリアは、俺のユーリアへの思い、大魔王に憑依された後の彼女との会話、それらの記憶を忘れさせた上で呪をかけた。勇者一行に女が加わった時に記憶が戻るという妙な呪を。更に、彼女は俺に別の呪もかけた。女魔法使いの堕落を世に広め、心弱き女を二度と

従者に加えぬよう強く世に訴えよ、とな》
「それじゃあ……」
《俺はユーリアの術に完全にはまった。『勇者の剣は女を嫌う』というざれごとを世に広めたのも俺だ。俺やホーラン、ゲラスゴーラグンの心の安息を願い、ユーリアは俺達が死ぬまで悪を演じたのだ。あれは愚かしいほどに優しい女だった……》
「それでは、ユーリア様は……」
《ユーリアは影を俺に斬らせた後、その美しい姿を捨てた。以後、ずっとおぞましき大魔王の姿をとり続け、己が正体を隠したままホーランの刃にかかり、この世から消滅した》
「……ご立派な方だったんですね」
《そうだ。英雄の名は、俺よりも彼女にふさわしかった……今世の勇者の従者よ、今日、見た真実を、今世の勇者に伝えてくれ。そして、いつか、我が友ゲラスゴーラグンにこの真実を伝えて欲しい》
「ゲラスゴーラグン様に？でも……」
ホーランの時代から六百年以上の時が流れているのだ。バンキグ国王に即位したゲラスゴーラグンも遥か昔に亡くなっている。
《あの男の魂はまだこの地上に居る》
「え？」
《あれは得心がゆくまで、一歩たりとも前に進まぬ頑固な男。ユーリアの無実を主張し続けていたあの男が、彼女の汚名がすすがれぬまま、今世を去るはずがない》
「それでは、ゲラスゴーラグン様の魂は今世にとどまっておられるのですか……お墓はバンキグですね？」
《俺の方が先に逝ったので、あれが何処に葬られたのかは知らぬ。だが、おそらくバンキグだろう》
「……北方なんですね」
シャオロンは悲しくなった。北方諸国のケルティ・バンキグ・シベルアとは国交が断絶している。もう百年近く北方とは国レベルでも民間レベルでも交流が無いのだ。バンキグの墓所を訪れるなど不

可能だ。
　けれども、シャダムの願いをかなえたかった。何としても。
「セレス様は……今世の女勇者様は北方に向かわれないかもしれません。今、北方に行くのは難しいんです。でも、オレ……何とかします！オレ、頭、良くないし、てんで子供ですけど……セレス様の側にはオレなんか足元にも及ばない凄い方達がいます！」
　シャオロンは拳を握りしめた。
「武闘僧ナーダ様はすっごくものしりで、各国の王様とも対等に渡り合っていて、えっと、セイジテキカケヒキも上手な方です！きっと、何か打開策を見つけてくださいます！それにアジャンさんはエーゲラ一の戦士で、むちゃくちゃ強いのに、とてもやさしい方です！女の方をとても大事にするし……きっとユーリア様の為に働いてくれます！それに、セレス様のお師匠様は今世一の大魔術師カルヴェル様なんです！先代勇者様と一緒に大魔王を倒した、もの凄い魔法使いなんです！きっとどうにかしてくれます！だから……」
　顔を真っ赤にした少年。その頬を熱いものが伝わってゆく。ポロポロと涙がこぼれてゆく……
「ごめんなさい。オレじゃ、シャダム様のお力にはなれないと思います……でも、何とかします……いつか、きっと、必ず……ユーリア様のことをゲラスゴーラグン様にお伝えします」
《今世でなくとも良いのだ》
　シャダムが口元に笑みを刻む。
《勇者一族さえ真実を知っていてくれれば……いつかはホーランの子孫が、ゲラスゴーラグンの子孫にまみえる事もあるだろう。その時、真実と共に謝罪を伝えてもらえればよい。俺が間違っていたと……謝罪の気持ちを北方の戦士に伝えて欲しい》
「間違っていた？」
《俺は生涯、ゲラスゴーラグンを侮辱し続けた。ユーリアが神聖な誓いを破って堕落するはずがないと、仲間を信じたあの男を嘲笑ったのだ。女の外見の美しさに惑わされ真実を見失った愚か者と……

…ののしったのだ》

「でも、シャダム様はユーリア様の魔法に操られて、ユーリア様を非難しちゃったんでしょ？仕方がなかったのでは？」

《いや。同じ魔法をかけられたのだとしても、ゲラスゴーラグンならば魔法に踊らされなかった。あれは信念をもって仲間を信じていた。ホーランを、マハラシを、ユーリアを、そして俺を……あれは信じきっていた。魔族を憎み地上の和を求め集った我等は、己の武器と名とそれぞれの神にかけて、仲間を信じ助け合う事を誓っていた。ゲラスゴーラグンは、その神聖な誓いを最後まで守りとおしたのだ。しかし、恥ずかしい事に俺は……心の奥底では異教徒である仲間を信じていなかった。それ故、ユーリアの術に簡単にはまり、最愛の人の名を辱め、仲間の誇りを傷つけ続けたのだ》

「シャダム様……」

《勇者の従者よ……そなたの心には迷いがある。勇者と仲間への不信がある。だが、それは愚かしい感情だ。俺のようにはなるな。信じるのだ。戦士としての技量、魔力、知謀など、勇者の従者にとって、それほど重要ではない。共に戦う仲間を信じよ。友が闇に堕ちたように目に映ったとしても、信じ続けるのだ》

「……」

《ゲラスゴーラグンに伝えてくれ……友を信じなかった愚か者が詫びていたと……》

気がつけば、シャオロンは一人、墓所に佇んでいた。日は傾き、何処かで鳥が鳴いていた。

シャダムの霊は再び眠りに就いたのだ……

もはや墓の形すらない遥か昔に造られた英雄の安息の場所に、東国の少年は深々と頭を下げた。そして馬を引いて、もと来た道を戻って行った。

イスファンの街に着いた時には、日はすっかり暮れ、空には星が瞬いていた。もうバザールは終わっている。家族や村のみんなの為の供物を買い損ねてしまったのだ。けれども、この地に眠る英雄の為に動いたシャオロンを、村の誰も責めないだろう。

急ぎ宿屋に帰り、自分にあてがわれた部屋の扉を開くと……

熱い抱擁に迎えられた。

「良かった、シャオロン！無事だったのね！」

「……セレス様？」

抱きついて来たのは……女勇者セレスだった。白銀の鎧はまとっていない。そのやわらかであたたかな感触に、少年はどぎまぎした。

「心配したのよ、本当に良かったわ、無事で」

顔を離し、セレスは眉をしかめ、口をすぼめ、少し怒った顔をつくった。

「朝食の後に、『ちょっとバザールに行って来ます』って置手紙だけ残して居なくなっちゃって！今、何時だと思ってるの？どこがちょっとよ！」

「あ……すみません」

シャオロンは慌てて頭を下げた。

「セレス様、それでは行って参ります」

と、横から声をかけてきた忍者に、女勇者は頷きを返した。

「よろしくね」

「承知」

ふっと忍者の姿が消える。

「アジャンとナーダを迎えに行ってもらったの。あの二人、あなたが何かトラブルに巻き込まれたんじゃないかって心配して、街まで探しに行ってるのよ」

「え！そんな！すみません！オレも、ひとっぱしり街まで戻って、アジャンさん達を探しに」

「駄目よ、シャオロン」
セレスは静かにかぶりを振る。
「そんな事してたら今日が終わってしまうわ。月命日、今日なんでしょ？まずは死者の方々への祈りをすませなさいな。その後は……わかってると思うけど、お小言よ。アジャン、すっごく心配してたのよ、帰ってきたら確実に雷を落とすわね。ナーダもここぞとばかりお説教してくるだろうし。ちなみに、私も……かなり怒ってるんだから」
セレスは少年の小柄な体をぎゅっと抱きしめた。
「あなたに何かあったら、私、自分が許せないわ」
「セレス様……」
「……あなたをケルベゾールドとの戦いに巻き込んだのは、私だもの」
「そんな！セレス様は、オレのわがままを聞いてくださっただけです！村の仇のサリエルをオレが討ちたいって、無理にお願いして、それで」
セレスはかぶりを振った。
「あなたを従者に迎えた以上、あなたの命を守るのが私の義務よ。あなた達、いつも命がけで私を守ってくれるでしょ？だから、私もあなた達を守るわ……誰一人、欠けて欲しくないもの」
「セレス様……」
ふと見れば……
テーブルの上には、花瓶があり、小さな白い花が、数本、生けられていたいた。可憐な花だ。
死者を慰める為に、この砂漠の国で花を探して来てくれたのは、おそらく……
目の前の……
シャオロンは体の震えを押さえられなくなった。
「ごめんなさい……セレス様」
「あら？」

「オレが馬鹿でした。オレ……」

セレス様のお気持ちを疑ってました。
オレなど、もう不要だと思ってました。
何のお役にも立てないオレみたいな従者、もう要らないと思ってました……

「ごめ、ん、なさい……セレス様」
言葉を詰まらせ嗚咽する少年を、女勇者は慰めた。
「もう怒ってないわ、シャオロン。もう一人で街に出て居なくなったりしないでしょ？泣かないで。あなた、ペリシャ語、全然、話せないから心配だったのよ。シャオロン、お願い、泣かないで……」
「セレス様、オレ、何もできないけど……信じます。セレス様やみなさんを……」
「シャオロン？」
「信じ続けます……何があっても……」
「……」
「聞いてください……オレ、今日……昔の」
「話は後よ。まずは涙をふいて」
「……はい」
「そして、深呼吸。気持ちを落ち着けて」
「……はい」
「落ち着いたら、まずは月命日よ。ご家族の方々、あなたの祈りを待ってるわよ」
「……はい」
「私はここに居るから……ずっと居るから。後で、ね」

シャオロンは頷いた。
月命日の祈りを終えたら、英雄シャダムの願いをセレス達に伝え、皆の知恵を借りて考えるのだ。英雄ゲラスゴーラグンに真実を伝える手立てを。
だが、今は……
まだ涙が乾きそうもなかった……

英雄の墓――ペリシャ編　3話

宿屋のシャオロンの部屋で、女勇者一行は聖戦士シャダムの願いを伝え聞いた。

普段は幽霊の存在を否定する赤毛の戦士（降霊の為の魔法や儀式無しには幽霊と対話できないと言い切っているのだ）も、シャオロンが真剣な表情の為か茶々をいれず、真面目に聞き、話を受けいれた。

考えなければいけないのは、バンキグのゲラスゴーラグン本人（もしくは子孫）に真実を伝える手立てと、女魔法使いユーリアの名誉回復の術（すべ）。

過去の英雄達や東国の少年の為に、良いアイデアを出したいころのなのだが……

「日記にこの事を書くわ」

女勇者セレスは両手を握りしめた。

「それから、お父様とお姉様にもお手紙を出すわ。次代勇者の甥っ子のグスタフにもこの事を知っておいてもらわないとね。それから、エウロペの国王陛下にも」

「それは、ちょっと待ってください、セレス」

糸目を細めつつ、武闘僧ナーダが言う。

「シャダム様の語られた真実は、ペリシャ教の聖人であるあの方を辱める内容です。シャダム様が教えを捨て、ユーリア様への愛を選ぼうとしていただなんて、あなたが世に広めたら大変な事になります」

「たいへんな事？」

ナーダは肩をすくめた。

「良くて、女勇者一行の処刑。悪くすれば、ペリシャ・エウロペ宗

教戦争です。己の教義の聖人を辱められれば、敬虔な信徒ほど怒り狂うものです。真実を流布する事には賛同しかねます」

「だけど！」

「俺もナーダに賛成だ」

ぼりぼりと赤毛を掻きながら、アジャンが言う。

「ユーリアって女魔法使いは、真実を世に広めて欲しかったわけじゃないんだろ？愛する男の経歴を穢すのを恐れる……そんな女だったんだろ？俺達が真実を広めたら、逆に怨まれるんじゃないか？」

「……でも」

「おまえが日記に書き残す分には構わないし、勇者一族が口承として伝えてもいい。だが、おせっかいはやめろ。女魔法使いの名誉回復なんざ必要ない。シャダムって奴の願いは、ゲラスゴーラグンって友人に真実を伝えてほしいってだけだったんだろ、シャオロン？」

「あ、はい、そうでした」と、シャオロン。

「なら、その方法だけ考えればいい」

「……そうかもしれないけど」

うなだれる女勇者を気遣い、忍者が声をかける。

「セレス様、私めも、バンキグの英雄に真実を伝える策を探すのが先決かと心得ます。ゲラスゴーラグンとやらの幽霊に出会い、意志を尋ねてみてはいかがでしょう？」

「え？」

「女魔法使いの名誉回復を望むか否かにござる。真実を世に広めて欲しいのか、仲間だけがその真実を知っていればよいのか。故人の意志を尊重すべきかと……」

「……」

女勇者は溜息をつき、東国の少年を見つめた。

「それでいい、シャオロン？」

「……はい。ユーリア様が悪人のように言われ続けるのは悲しいですけど……今、オレ達が勝手に本当の事を話して回っちゃいけないんだって、わかりました」

少年は一度、頭を垂れ、それから元気よく顔をあげた。
「納得しました！今はユーリア様の事は誰にも話しません！」
「じゃあ、後はどうやってゲラスゴーラグン様か、その子孫に真実を伝えるかだけど……う～ん、バンキグ王家にお手紙を出すとか」
「あ、それは無駄です」
武闘僧がさらっと言う。
「ゲラスゴーラグン様の王家は三代で絶え、今の王家はまったくの別家系ですから。ま、庶子や兄弟の分家は残ってるかもしれませんが、百年前まで表だって活躍した記録はありませんでしたからねえ、望み薄かと」
「あら、そうなの？」
「そうですよ」
「よく知ってるわね、北方の歴史なんて」
「これぐらい常識です。正確な年月日まで暗記しろとは言いませんが、勇者ならば世界史ぐらい頭に入れておきなさい。でないと、恥をかきますよ」
セレスは不満そうに、唇をとがらせた。
「それじゃあ、ゲラスゴーラグン様のお墓が何処にあるのかもご存じよね？大僧正候補様は、と～ても博識ですもの」
と、セレスは嫌味のつもりで言ったのだが。
「確か……バンキグの旧都の北東部の山中に慰霊塚があるはずです。四百七十年ほど前にマハラシ様の血族の子孫の方が訪れた記録がありますから。寺院の書庫で見た事があります。国交が断絶しているこの百年の間に何事も無ければ、まだそこに慰霊塚があるでしょう」
「……あなた、そんな事まで暗記してるの？」
どういう頭してるのよ！と睨むセレスに、あなたとは構造自体が違うんです！と冷たく答えるナーダ。
二人を無視して、アジャンはシャオロンに話しかけた。
「ジジイに移動魔法で運んでもらったらどうだ？」

「カルヴェル様にですか？」
　確かに、老魔術師に運んでもらえば、国境もものともせずゲラスゴーラグンの墓所に直接行けるが。
「だけど、誰にも知られずこっそり墓所に行ったんじゃ、オレがユーリア様の真実を伝えに来たって事、誰も見てくれないわけで……ゲラスゴーラグン様がユーリア様の名誉回復を望まれても、子孫の方にすらその真実を告げられません。そこに居るはずもない人間なんて幽霊や夢も同然です。オレが何を言ったって、真実と受けとめてもらえないかも」
「……ふむ」
　赤毛の傭兵は腕を組み直した。素直すぎる性格なので普段埋もれがちだが、シャオロンは結構鋭い人間観察眼を持っている。ナーダに言わせると、『策士の才もある』そうだ。
「おまえの言い分もわかるが、まともな手段じゃ、北には行けないぞ。北方側から発行される特別な通行許可書がなきゃ国境は越えられんのだが、この百年、数えるほどしか許可書は発行されてない。ゲラスゴーラグンの墓参りを願ったところで、許可書はおりまい」
「……そうですね」
「俺達は勇者一行だからな、ケルベゾールドがバンキグに居るのなら踏み込めるかもしれないが……居るんだとしても許可書は出ねえような気もするが、まあ確たる証拠がありゃ、大義名分をもって国境を越えられるかもしれん」
「はい」
「だが、ペリシャ、トゥルク、エーゲラのどっかで退治してしまうかもしれない。そうなっちまったら、勇者一行は解散。むろん、北方に行けるわけもない」
「……わかってます」
　東国の少年は力強く頷いた。
「これからも勇者の従者として働き続け、バンキグを訪れる機会を待ちます。でも、北方三国に着く前にケルベゾールドを倒しちゃう

んなら、それはそれでいいと思います。だって、大魔王がいなくなれば、それだけ平和が早くくるんですから」

「だが、それでは」

少年は、にっこりと微笑んだ。

「大丈夫です！オレ、必ずバンキグに行きます！シャダム様は急がなくてもいいとおっしゃっていました。だから、何年、何十年かかってもいいから……正式に国境を越えて、シャダム様が見せてくださった真実をゲラスゴーラグン様に伝えに行きます」

「そんな事、あなた一人にさせられないわ！」

セレスはしっかりと少年の右手を握った。

「シャダム様はホーラン様の末裔にその役目を託したいって願っていたのでしょ？私に任せなさい、シャオロン！あなたにはお父様の跡を継ぐ夢や、村のみなさんをきちんと葬りたいって願いもあるでしょ！」

「でも、セレス様では……失礼ですけど……」

少年は言いにくそうに言った。

「ゲラスゴーラグン様にお会いできないと思います」

「え？」

「そーですね、あなた、私同様、霊感ゼロですものね。眼の前にゲラスゴーラグン様の幽霊が立っててても、気づきもしないでしょうね」

と、横から武闘僧の冷たい突っ込みが。

ぐっと喉を詰まらせた後、セレスは身を乗り出した。

「じゃ、一緒に行くわ！あなたの望みを叶える為、私も努力するから！」

「え、でも、そんな……」

「やるったら、やるわ！私達、勇者と従者でしょ！仲間を信じ、助け合わなきゃ！ケルベゾールドを倒す前も倒した後も、私達の絆は変わらないわ！あなたは私のケルベゾールド退治に付き合ってくれてるんだから、その後は私の番よ！あなたの願いの成就の為に、私が協力するわ！」

「セレス様！」

ひしっと抱き合うセレスとシャオロン。

その横の忍者は『セレス様がいらっしゃるのなら、北方だろうが魔界であろうがお供いたします』と、言い、『いざとなったら通行許可書を偽造いたしますゆえ、ご入り用の時はご指示を』とか言って、二人の感動の抱擁に水を差していた。

「ケッ！馬鹿らしい！」

赤毛の傭兵はボリボリと頭を掻いた。

「あいつらの頭の中には、旅の途中で命を落とすとか、大魔王に敗れるとか、ねえんだよな。大魔王戦後も生き延びてるのを前提に話をしてやがる」

「悲観主義者の私やあなたでは、ああはいきませんよね」

抱き合っている二人を少し羨ましそうに見つめながら、武闘僧は言葉を続ける。

「ユーリア様の事、大僧正様に書面でお知らせしておきます。私達が大魔王と相討ちとなって全滅しても、勇者一族とインディラ寺院さえ真実を知っていれば、いつかは必ず、ユーリア様の真実をバンキグにもたらせるでしょう」

「ふん」

傭兵は顔を歪めた。

「……死なくても五体満足じゃなくなるかもしれん。俺の昔の仲間には、両足を失った奴もいる。失明した奴も、な。けど……」

「けど？」

「馬鹿女もシャオロンも、生きてる限り、どんな体になっても、バンキグを目指すんだろうな。嫌になるぐらい馬鹿な奴等だからな……ま、北方なんざ行けるわけがない。許可書なんか絶対、出るもんか。夢見たけりゃ、夢みてりゃいい」

夢なんか見るのも御免だとばかりに頭を振って、アジャンは部屋

から出て行った。

「やれやれ、素直じゃありませんねえ、まったく」

ナーダは溜息をついた。

口では二人をなじっていた。が、傭兵は二人と一緒に行くつもりだ。もったいつけて、さんざん文句を言いつつも、行くとなったら二人を守る為に、きっと……

武闘僧は両腕を組んだ。ナーダが俗世に交われるのは、大魔王を倒すまでだ。大魔王討伐後は、総本山に戻り、修行を再開しなければいけない。

けれども……

（大魔王討伐後にバンキグを目指す事になったら、仕方ありません、同道しましょう。インディラ教を邪教扱いする北方には正直行きたくありませんが、私の優れた頭脳と交渉術それに魔法が無ければ女勇者一行は全滅してしまうだろうし。過去の勇者の従者の為の旅なのです、大僧正様もお許しくださるはず）

抱き合う女勇者と従者の少年。

二人は信頼という絆で結ばれていた。

英雄の墓――ペリシャ編　3話（後書き）

『英雄の墓――ペリシャ編』　完。

次回は……

＊　十八歳以上で男性の同性愛話でもＯＫという方　＊、ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』をご覧ください。

『三度の夢』。舞台はトゥルク。ジライの話です。

＊　十八歳未満の方、男の同性愛ものはパスという方　＊このまま、『小説家になろう』で。

『彷徨う光』。舞台はトゥルク。

スルタンの王宮を訪れた勇者一行の話です。

彷徨う光　1話

「……ここ、何処？」

女勇者セレスは呆然と周囲を見渡した。

王宮で、スルタン（トゥルク国王）と対面していたはずだ。
『勇者の剣』を背負い、白銀の鎧をまとった勇者の正装で。東国の少年シャオロンと忍者ジライと共に、国王の前に跪いて。
謁見の間は、大理石の柱廊がめぐる建物――――謁見の館にあった。宝石や寄木細工がはめこまれ金で覆われたアラベスク模様の美しい壁の前には、近衛兵がずらりと並んでいた。部屋の奥には天蓋つき玉座があり、そこに座るスルタンと会話をしていた。
そう、話しているさなかだったのだ。
なのに……何故？
何時の間に、こんな所に……？
薄暗い照明の、何処かの廊下のようだった。青いタイルや宝石がふんだんに埋め込まれた壁が、遠くまで続いている。
幾何学的な装飾は、トゥルク風だ。ここも王宮なのだろうか？
左右は壁と扉。窓が無いせいで薄暗いのか、それとも知らぬうちに時間も流れて夕方になってしまったのか？
漏れ聞こえてくる音楽。
はなやかな笑い声。
明らかに……女性の声だ。
「ハーレムですな、おそらく、ここは」
忍者ジライが忍の目で周囲に視線を走らせ、セレスとシャオロンを壁際へと誘った。

「シッ」
覆面の忍者は、口元に右の人差し指を当てる。
「忍法、隠身の術」
忍者が気を高めて間もなく、カツカツと靴音が響いて来た。
先の曲がり角から、二人のハーレム衛兵が現れる。アフリ大陸からつれて来られた真っ黒な肌の衛兵は、腰にジャンピーヤ（曲刃の短剣）を差していた。
三人の横を、衛兵が通り過ぎる。真っ直ぐに正面を見つめたまま。女勇者達が見えていないのだ。
二人の衛兵が反対の角を曲がって姿を消してから、忍者は安堵の息を漏らした。隠身の効果時間はあまり長くない。術が切れる前に行き過ぎてくれて良かった。発見されれば大事となる。
「移動魔法で運ばれたのでしょうなあ。我等は今、ハーレムに居ります。速やかに脱出しましょう」
「あの……ハーレムって？」
『龍の爪』入り革袋を背負った、道着姿の少年が問う。セレスは困ったように少年を見つめる。
「スルタンの母や妻や側室が暮らす屋敷よ。スルタンと王子以外、男子禁制の場所なの」
「え？でも、さっきの衛兵は？」
どう見ても男だったが？
「あれは宦官じゃ」と、ジライ。
「……宦官」と、頬を染めるシャオロン。
「シャイナの王宮にも居るじゃろ？ナニをちょん切って、男を捨てた男よ。おなごを孕ませる能力がないゆえ、後宮では宦官が重宝される。ここには、大臣・召使・衛兵の宦官と、数百の女奴隷が居るはず」
「早く脱出しなきゃ」
母方の祖母――勇者ランツの妻がトゥルク人だったので、セレスはトゥルクの慣習には詳しかった。

「何をどう言い訳してもダメなの。自分の意志で入ったのじゃなくても、誰かの策略で移動魔法で飛ばされてしまったんだとしても……理由はどうであれ、ハーレムに足を踏み入れた男は死罪なのよ」
「え？」
「誰かに見つかったら、私はともかく……シャオロン、あなたとジライは処刑されるわ」
「え――――っ！」
「罪一等を減じられたとしても、ナニを切られ、男ではなくなるな」と、ジライ。
「え――――っ！」
己に関わる事なのにけろりとしているジライ、とりみだすシャオロン。
二人の仲間を見ながら、セレスは溜息をついた。
頭が痛かった。
考えれば考えるほど、頭が痛くなってきた。
どうして、こんな事になってしまったのだろう？

勇者ランツと大恋愛の末に結ばれたセレスの祖母エリス（改名前の名はエリューズ）は、トゥルクの姫君だった。現トゥルク国王（スルタン）の大叔母にあたる。
セレスはスルタンと血縁関係にあった。が、王宮には入れないと思いこんでいた。
同じペリシャ教圏のペリシャでは、異教徒でしかも女のセレスは王宮への立ち入りを禁じられた。ペリシャでは（セレスの宿泊先に現れた）国王の使者より国内での魔族討伐の許可をもらったぐらいで、王宮とはほとんど関わりがなかったのだ。
トゥルクでも同じような待遇になるのだと思っていたのだが……
トゥルクのスルタンは違った。女勇者の宿屋までわざわざ迎えを送ってくれたのだ。セレスには青天の霹靂だった。首都タブールに

着いてから王宮に書簡を送っていたとはいえ、まさか迎えが来るとは！朝も早い時間、宿屋の前には馬に乗った高官と近衛兵一個小隊がずらりと並んだ。

だが……

スルタンがわざわざ迎えを寄越してくれたというのに、宿屋には何故か赤毛の傭兵アジャンも、武闘僧ナーダも居なかった。

アジャンが朝に宿に居ないのは、まあ、いつもの事。娼館に泊まっているのだろう。しかし、ナーダが無断で宿を空けたのは初めてだった。

二人ともいないなんて、何か事件？魔族と戦っているのかも？と、心配するセレスに、何処から情報を仕入れてきたのか忍者が教えてくれた。

アジャンは歓楽街に外泊中、ナーダは寺院関係の者と内密に接触する為に別所に宿をとって移ったのだ、と。二人とももう間もなく戻るだろうとも忍者は言ったが、迎えを待たせるわけにもいかなかった。

セレスは王宮へ向かう事とした。

血族とはいえセレスは異教徒。それほど歓迎されるはずはない。ご挨拶を済ませたら、また、街に戻る事になるだろう。何かあったら王宮から使いを送るから宿で待っていてと、二人には手紙を残し、宿の主人に託した。

高官と近衛兵に導かれ、セレス、シャオロン、ジライは、王都タブールの東――海の近くの小高い丘に立つ宮殿へと着いた。政府や軍隊の施設、スルタンの邸宅。絢爛豪華な数多くの建物が、三つの中庭を囲むように立っていた。

セレス達は、最も奥の中庭の第三庭園にある謁見の館まで案内された。この先にあるのはハーレムやスルタンの邸宅のみ。謁見の館まで通されたという事は、大使待遇で歓迎されている事を意味した。

スルタンは謁見の館の広間――謁見の間で、女勇者を待っていた。天蓋つき玉座に座るのは、白のターバンを巻き、金銀刺繍の豪

華なカフタンをまとった、スルタン。顎髭も不似合いな、年若い青年王だった。十五の年に即位して、まだ二年。即位後一年も経たないうちに大魔王が復活し、若いながらも家臣達の助けを借り、その国難を乗り越えて来たのだ。

青年王は、今世の勇者が血縁である事を誇りに思っていると笑みを見せ、大魔王教徒を取り締まりきれない現状を嘆き、女勇者に助力を求めた。

スルタンの歓迎ぶりに、いたく感激していたセレスは、

『私にできる事でしたら、どのような協力もいたします』

と、二つ返事で答え、スルタンからトゥルクの現状などを聞いていたはずなのだが……

ふと気がつくと……

見知らぬ場所――ハーレムの廊下に居たのだ。

シャオロンとジライと共に。

ジライの先導で、セレスとシャオロンは無人の部屋に行き着いた。スルタンの夫人の部屋と思われたが、女主人も奴隷もいなかった。サロンに行ったのか、別室の夫人を訪ねているのか。色鮮やかなトゥルク絨毯（床と部屋の三方の大きな腰掛けに敷かれている）には、人がほんの少し前まで居たようなぬくもりが残っていた。

部屋の奥の格子窓の先は、テラスと中庭だった。中庭は後宮の女性が陽の光を浴びる事ができる数少ない場所、美しい池と緑豊かな庭園が窓越しに見える。忍者は窓までふわりと移動し、はめ殺しの分厚いガラス窓を探った。窓の中に、テラスへと通じる開閉式の窓が混ざっている。

それを開けようと、ジライが窓に手をかけた瞬間！

バチバチバチ！と、稲妻が走り、忍者の体を貫いた。

「ぐっ！」

「ジライ！」

「ジライさん！」
窓から手を離すと、雷撃魔法は止んだ。
忍者はその場に片膝をついて、しゃがんだ。
「大丈夫、ジライ？」
「大事ありませぬ、セレス様。少々、痺れただけで」
ジライはチッと舌うちを漏らした。窓に逃亡防止用の魔法が仕掛けられていたのだ。
「ハーレムのおなごを魔法で閉じ込め囲うとは……あの王、意外と趣味が悪いのかもしれませんな」
「え？」
「本来、後宮のおなごは、奴隷であっても逃げませぬ。王に見初められ子を成し、それが運よく世継ぎとならば、栄耀栄華は思いのまま。おなごの最たる出世といえましょう。後宮は王の愛を得ようと、おなごが華を競う場所。おなごは喜んで後宮に住むのです……本来であれば」
「さっきの雷撃魔法、ハーレムの女性を保護する為の魔法なんじゃないの？」
「ならば、外に仕掛けましょう」
「あ！そうね、たしかに」
「魔法でおなごを閉じ込めているとは、国王の趣味は相当ですな。おなごに嫌がられ逃げられるほどひどいとなると……快楽よりも暴力を好む残虐なS趣味か、魔薬中毒か、糞尿愛好家か、獣姦マニアか……」
「え？」
「え？」
セレスとシャオロンが目をぱちくりさせる。二人ともジライが使用した単語が理解できないのだ。
「……何でもございませぬ。独り言にござりますれば」
忍者は室内に視線を走らせてから、女主人の前に跪く。
「セレス様、ここで少々、お待ちくだされ。周囲を探ってまいりま

す」
「わかったわ、気をつけてね」
「シャオロン、これを持っておれ」
ジライは少年に、掌に載る黒い玉と、茶色の小袋を少年に手渡した。
「火薬玉と眠り薬じゃ。いざとなったら火薬玉でその窓を吹き飛ばして逃げよ。呪模様さえ壊せば、封印魔法も解ける」
「はあ」
「眠り薬は使いどころを考えるのじゃぞ。投げる時は、自分やセレス様にかからぬよう、気をつけよ」
「はい……」
忍者の姿がフッと消える。すばやい体術で別所に移ってしまったのだ。
手渡されたモノを握りしめ、少年は溜息を洩らした。
「どうしたの、シャオロン？」
「いいえ……何でもありません」
少年は強がり、嘘を吐いた。
本当は……自分がなさけなくって恥ずかしくって、頭に血がのぼってめまいすら感じているのだ。
額がズキズキと痛む。
体もだるい。
シャオロンはそのやさしい顔立ちを曇らせた。
セレスが何者かの策略で、妖しい場所に飛ばされてしまったというのに……自分はどうして何もできないのだろう？ただボーッとしているだけなんて……
どうして、自分はジライのようにセレスの為に働けないのだろう？
（オレは、ナーダ様みたいにみんなの為に魔法を使うなんてできないし、アジャンさんみたいに凄い力でみんなを守る事もできない。『龍の爪』を両爪使えるようになったって、全然、だめだ。何も変わってない。お荷物のまんまだ……）

しょぼんと頭を垂れている少年……
セレスはそんな少年の背を、革袋におさめた『龍の爪』ごと背後から抱きしめた。
「！」
「あなたが居てくれてよかったわ……」
「え？」
背後を振り返った少年と、セレスの目が合う。女勇者はにっこりと微笑んだ。
「だって、こんな所に一人で残されてたら、不安で不安でしょうがなかったと思うの。あなたが一緒にいてくれて心強いわ」
「そんなオレなんか……何のお役にも」
セレスはかぶりを振った。
「前にも言ったでしょ？頑張っているあなたが、私に力を分けてくれるって。あなたが傍にいてくれると、私、頑張れるの。あなたに負けないように、もっともっと頑張らなきゃって思うから」
「……」
「それに、さっきから、なんか頭が痛いのよ。ここに来てからずっとなんだけど、だんだん、ひどくなってきてて」
「え？」
頭痛ならば、シャオロンも感じていた。
「セレス様もですか？実はオレも、さっきから頭が……」
「あなたもなの？そう。お互い、一人じゃなくてよかったわね。シャオロン、もうしばらく、このままでいていい？」
「セ、セレス様が、なさりたいように……すれば……いいかと」
東国の少年が、どきまぎと答える。甘い香りを少年は感じていた。セレスの匂いだ。
「シャオロン、頑張りましょう、絶対、三人とも無事にハーレムから脱出するのよ」
「あ、はい！」
「今までは敵を叩きのめす！で、きたけど、今回は人間相手にかく

れんぼだから、ちょっと大変よね」
「はい」
「でも、大丈夫。みんなで力を合わせればどうにかなるわ。絶対、大丈夫。だから、元気をだしていきましょうね」
「セレス様……」
シャオロンは白銀の神聖防具に包まれたセレスの指に、そっと触れた。
セレスは慰めてくれているのだ。ジライに嫉妬して能力不足を嘆いていた事までは気づいていないようだが、落ち込んでいるシャオロンをみかね、励ましてくれたのだ。
「すみません、セレス様、オレ……」
「いい、シャオロン？あきらめちゃ駄目よ。絶対、助かる！そう信じましょ！」
「はい！セレス様！」
と、その時……
建物をずしん！と揺らす振動が走った。
何処かで火薬が爆発したような衝撃だった。
廊下を急ぎ足で複数の靴音が通り過ぎる。宦官衛兵達が爆発の起きた場所に向かっているのだ。
「……ジライさんでしょうか？」
「……そうかも」
二人は声を潜め、廊下を伺った。

忍者ジライは天井に張りついて気配を殺し、宦官警備兵たちの会話を盗み聞いていた。
この建物は異常だ。
全ての出入り口や窓に、逃亡防止用の魔法が仕込まれているだけではない。
壁も異様に硬い。タイルの隙間にすらクナイが刺さらないのだ。

触れてみれば、見た目と触感が違うのがわかる。壁の手前に目に見えぬ障壁がある。結界魔法の障壁が張られているのだ。館中、全てに。

結界で建物中を覆うなど、魔力の浪費といえた。宮廷魔術師が二十人態勢で三交代制で働けば結界維持も可能かもしれないが……何故、そんなことをする必要がある？

虜囚を牢に閉じ込め牢にのみ結界を張る……それが、普通の人間の術師のやり方だ。効率もいい。

建物全てを己が影響下に置きたがるなど、人間の発想ではない。そう思い、腰の『小夜時雨（ムラクモ）』を抜刀し、壁を斬ってはみた。しかし、聖なる武器の刃も、目に見えない障壁に弾かれた。魔族が絡んでいるのだとしても、魔法で障壁を張られていてはその先を斬れない。浄化できないのだ。

次に火薬玉を用いたのだが、目的は破壊ではない。情報収取の為だった。爆発は、壁を破壊するどころか、表面を焦がす事すらできなかった。予想通りであった。

火薬の音を聞きつけ集まって来た黒人達が、しばらく周囲を探り、あれこれと話し出した。

賊か？誰か見かけたか？居ない？まあ、いい、ほっとけ、じきに仲間になる。どっかの馬鹿が、また、迷い込んで、出口を作ろうとして火薬を使ったんだろう。ここに、入口はあっても出口はない。出口など出来ないのに、な。

（出口がない？）

彼等の口ぶりからすると、女勇者がここに居る事は全く知らないようだった。しかし……

（ほっとけ？じきに仲間になる？）

嫌な予感がした。

それに、爆発騒動を起こしたのに、集まって来たのは、黒人衛兵ばかり。女奴隷が一人も来ない。遠巻きに眺める姿も事ない。物見高い性の女性が誰一人現れないのはおかしい。

サロンからはずっと音楽が流れてきている。女たちは歌舞に興じているようだ。

ジライは天井をつたい、サロンへと移動した。

だが、そこには……気弱な者ならば正視できない、現実があった。忍者ジライは眉根を寄せた。

（これならば、スルタンが鬼畜変態だった方が遥かにマシだったな）

絨毯を染めるおびただしい血。

所々に、積み上がった死体……ざっと見ただけでも、死骸は三十近くありそうだ。下となっているものは、明らかに腐敗している。その上、遺体は食いちぎられている。手足、指が周囲に散らばっているのだ。

獣のような声をあげ、欲望のまま猛る黒人達。

優美に笑う女主人達。

腐敗臭を消す為に、むせるほど強く焚かれた香。

楽を奏で、楽しそうに舞い踊る女奴隷達……

（……狂っておる）

殺される瞬間まで、女奴隷は踊っていた。切り刻まれ、息絶えた後も、死に顔は笑みを浮かべていた。

その血だらけの遺体に黒人達が群がり、元からあった穴にも新しくあけた穴にも、欲望をつきたててゆく。

仲間から飛び散った血を浴びながら、踊り子達は何事もなかったかのように踊り続ける。女主人達も上品に笑い続けている。死骸をむさぼる黒人達には目もくれずに。

遺体も殺戮者も凌辱者も、見えていないのだ。

そして、遊び終えた黒人も夫人や女奴隷達も、何事もなかったかのように、サロンを後にする。狂気など微塵も感じさせぬ日常の姿をとって。

ジライは目の奥が痛むのを感じた。忍として、今まで惨たらしい場面には何度も出くわしている。その自分が吐き気すらもよおしているのだ。頭も鈍く痛んでいる。

（この建物……精神系の魔法が働いておるな。おそらくは、洗脳魔法。女達の心を縛り、現実から目をそむけさせておる術。そして、黒人どもを狂わておる術……欲望に惑い、欠けたるモノを欲した時、堕ちるのか？）

ほっとけ、じきに仲間になる……

黒人警備兵の声が耳に甦る。

（時をかければ……我もああなると？）

醜く猛る黒人どもに、ジライは冷たい視線を向けた。

（どこの阿呆の魔法かは知らぬが……させぬ。セレス様に、あやつらを指一本近づけるものか）

ジライはセレスの待つ部屋へと向かった。もう少し情報も欲しかったが、時間をかけすぎては、セレスもシャオロンも自分も正気を失うかもしれない。

脱出の手立ては一つ。それが有効かどうかは不明だったが、他にできる事がない以上、セレスの許可をとって実行するだけだ。

複数の足音が近づいて来る。

セレスはシャオロンを背後に庇い、扉の陰になる位置にしゃがみ息を潜めた。

足音が行き過ぎてくれる事を祈ったのだが……

扉が開いてしまう。

入って来たのは、この部屋の女主人と三人の少女奴隷だった。

女主人は、黒髪、浅黒い肌のトゥルク人。少女奴隷達は白人だった。エウロペかエーゲラから金で買われてきたのだろう。

全員半ば夢を見るような、とろんとした顔をしていた。彼女らの衣服には、赤黒い染みが所々についていたが、まるで頓着していない。

「セレス様」

ジライの声だ。

扉の陰に隠れながら、セレスは周囲を伺った。
女達にはジライの声は聞こえていないようだ。女主人は腰掛けに優美に座り、少女奴隷達は菓子やチャイを運び女主人に仕えている。
「セレス様、隠れる必要はございませぬ。おなご達に我らの姿は見えておりませぬゆえ」
そう言って扉を閉めた者は……
薄手のベールを縫い付けたトクルク帽を被り、ショール状の腰布を巻きつけたドレスを身につけ、その下からトゥルク風のゆったりしたズボン、ストッキング、短靴を覗かせている……黒の長髪、浅黒い肌の、女官だ。妖艶と言えるほど美しい。
「……」
「……」
セレスとシャオロンは、目の前の人物をまじまじと見つめた。
薄手のベールで顔を隠しているのではっきりとは見えないし、口紅、頬紅、目の縁にも染料を塗って濃い化粧をしているので雰囲気がまるで違うのだが……見覚えのある、切れ長のその瞳は……
「……ジライ？」
女勇者の問いに、目の前の美女は頷いた。
「え――っ！」
セレスとシャオロンの驚きの声が重なった。
二人は慌てて口を閉ざし、部屋の中を伺った。しかし、部屋の住人は予想に反し、セレス達を見てもいない。お茶を楽しんでいる。
「セレス様、この後宮、妖しき術の下にあります」
「え？」
「我等は魔族の結界の内に閉じ込められたのかと」
「どういう事？」
美女の姿の忍者ジライは、外に通じる箇所には全て脱出防止の封印魔法がかけられている事、建物全体が結界に覆われている事を説明した。
「魔族は、このハーレムのおなごどもを餌に選んで囲っておるので

しょうな。いつでも喰えるように」
ジライは胸元から取り出したものを、この部屋の女主人めがけ投げる。クナイだった。
「きゃっ！」
セレスは悲鳴をあげた。
クナイが女主人の右頬をかすめた。壁にぶつかるや、忍者の武器は不自然な音を響かせ、床に落ちた。結界に弾かれたのだ。
女主人はホホホと口元に手を添え、朗らかに笑った。鋭い刃が頬をかすったのに、気づいていない。少女奴隷達も同様だ。
「おなご達は心縛られ、偽りの世界に生きております。現実が見えておらぬのです。殺されようが、犯されようがわからぬのです」
「え？殺す？犯す？」
「サロンでは、今、魔族の宴が繰り広げられております。黒人宦官どもが、おなごを犯し、殺し、死体をむさぼり喰っております」
「え？え？ちょっと、待って……宦官が？」
「さようにござります、セレス様」
忍者は神妙にかしこまった。
「おかしゅうございましょ？去勢されたはずの宦官どもに、男性器があるのです。アフリ大陸からさらわれ或いは購われて宦官となった奴等には、やはり憎悪の念があったのでしょう。そこを魔に憑につかれ、魔族の下僕に堕とされたのです。偽の一物を持っておる者らは、全て魔に憑依されている者かと」
「一物……？」と、セレス。
「一物とは男性器のこと。あやつらのアレ、人間のモノではござりません。黒人とはいえ、太く長すぎます。赤子ほどの大きさと言ってはさすがに過言ですが、あれでは巨根のナーダよりも幅が……」
そこまで言いかけて、ジライは口を押えた。
「ナーダ？」
セレスが小首をかしげる。
「ナーダがどうかしたの？」

「……何でもございませぬ」
ジライはコホンと咳ばらいをした。
「……ともかくも、宦官どもは魔族に堕ちております。ぶった斬っても問題はございませぬ。どころか、ハーレムにあやしげな洗脳魔法をかけておる者も、宦官どもの中に混じっているやもしれません。きゃつらがなにゆえ、ハーレムにこもっておるのか、どんな企みをもって魔族が宦官どもを利用しておるのかはさっぱりわかりませんが、もたもたしていては我等も術をかけられてしまいます。宦官どもを殲滅いたしましょう」
「……急いで敵を倒せって事ね」
「あの……」
少年がためらいがちに、忍者に尋ねる。
「さっきオレ達の前を通った警備兵も……魔族だったんでしょうか？」
美女は眉をしかめた。
「ハーレムに長く居ると、女は偽りの夢の世界に生きるようになり、男は魔に堕ちるらしい。さっきの黒人警備兵も魔族であろう」
「……」
少年は納得できないようだった。
「何か気になる事でも？」
「気が……」
「む？」
「魔族の気が全然しないんです……さっきすれちがった警備兵もそうですけど……サロンで魔族がハーレムの女性にひどい事をしているのなら、建物中が、それこそ吹き荒れるような魔の気に満ちていてもおかしくないのに」
少年はうつむいた。その顔色は白い。
「何も感じないんです……オレ」
修行不足であろうとあっさりと切り捨てようとした忍者に代わり、セレスが少年の懸念の答えを探す。少年はセレスよりもずっと魔の

気に敏い、この世の神秘を見通す目を持っているのだ。その少年が魔の気を感じ取れないのは、敵が上位魔族で魔の気配を絶っているからなのか、或いは……

「……洗脳魔法自体に魔の気を隠す付加効果があるかもしれないわ。中に、聖職者がいても大丈夫なようにね。誰にも気づかれずに、みんなを思い通りにしようとしてるんじゃないかしら？」

それはありそうな事だと、自分で言いながらセレスは思った。

「それに……」

セレスは少年の肩にソッと触れた。

「大丈夫、シャオロン？」

少年がゆっくりと顔をあげる。

「頭痛はどう？我慢できる？」

後、考えられる可能性は、体調不良による能力の低下だ。少年は口元に微かに笑みを浮かべた。女勇者に心配してもらって申し訳ないと言うかのような表情だ。

「大丈夫です、セレス様、オレ、平気です」

セレスも頭痛が少しづつ重くなってきていた。本当に時間が無いのかもしれない……急がなくてはと、セレスは拳を握った。

「ジライ、何か作戦ある？」

「ハーレムに居る奴等は全て血祭り、で、術師ももれなく殺し、後腐れがなきようおなご達まで皆殺しにして、とっととこの建物を離れるのが上策かと」

「……絶対、ダメ」

セレスはぷるぷるとかぶりを振った。勇者の従者になったとはいえ、さすが元大魔王教徒。ジライはめっきり暗黒系の考え方をする。

「宦官達が魔族なら、もちろん倒すわよ。でもね、ハーレムの女性は被害者なのよ？殺すだなんて、とんでもない。魔族を倒して、一人でも多くの方をお助けするのよ！」

「……そうおっしゃるだろうと思ってました」

ジライはフーッとため息をついた。

「今のうちに殺してさしあげるのが情けかと、私は思いまするが……セレス様のご意思に従います」
「？」
「その策でいくのならば……セレス様、お召し替えを」
「え？」
「後宮美女となるのです。シャオロン、おまえもじゃ。おなごになれ」
「は？」
美女の姿の忍者は、二人を見渡した。
「ハーレムのおなご達の安全を優先するのにござりましょ？勇者一行が暴れておると知れば、宦官ども女を盾に我が身を守るに決まっております。きゃつらに正体をけどられぬよう、一人づつ倒していくべきかと。と、なれば、目立つ姿で人目を引くは、禁物。この場所にふさわしい変装をしなければなりません」
「そうね……」
セレスはジーッと忍者を見つめた。女装したのは、敵の油断を誘う策だったのだ。
「でも、武器はどうするの？」
身長ほどもある巨大な『勇者の剣』を持っていたら、すぐに勇者とバレてしまう。隠し持つのも、『勇者の剣』の大きさでは不可能だ。
「『勇者の剣』は、この部屋に置いてゆかれては？セレス様が危機とあらば、その魔法剣、勝手にお手元にまいるでしょう」
「でも……」
『虹の小剣』も『エルフの弓』も宿屋に置いてきてしまった。丸腰ではこころもとない。
ジライはドレスの裾をめくり、隠し持っていた忍刀をセレスに手渡した。
「申し訳ございませぬが、これで身をお守りください」
「あなたは？」

「私には『小夜時雨（さよしぐれ）』が……あ、いや、『ムラクモ』がございます」

忍者はドレスの下に聖なる武器も隠していた。

「じゃ、借りておくわ」

セレスは忍刀を抜いた。ジャポネの刀にしては刀身が短い、軽量な片刃の剣だ。セレスは刃を鞘に収めた。

「シャオロンの爪武器は革袋に入ってるから、大丈夫よね？」

「さようにござりまするなあ」

忍者は顎の下に手をそえ、首を傾げた。

「しかし、いずれ装備するのですし、ならばいっそ、最初から装備していてもあやしまれぬ恰好をすべきかと」

「あやしまれない恰好？」

「踊り子にございます」

「踊り子……」

呆然とするセレスとシャオロン。ジライはうきうきと声を弾ませた。

「セレス様も踊り子にいたしましょう！踊り子ならば、一人より二人！二人で歩いている方が自然ですから！実はさきほどの探索で、よさげな衣装も見つけてあるのです！すぐにも！すぐにも踊り子となれます！洗脳魔法が働いている今、魔族との戦いは時間との勝負！変装に迷い、時間を潰してはいけません！」

「そうね……」

妙な熱意をもってそう力説する忍者に、セレスは反論できなかった。

「任せるわ、変装の衣装を持って来て」

「承知！」

ジライは、うっとりと虚空を見つめた。

「あああああぁぁぁ、踊り子！セレス様の踊り子姿！何とも……心躍るぅ……」

「は？」

「しかし、惜しい！このジライ、後、十、若ければ、ご一緒に踊り子に変装できたものを……この年になりますと、いかんせん体型が……」

「いいわよ、別に同じ変装しなくても」

セレスは首を左右にひねった。踊り子ってどんな格好だったかしら？と。

「どうぞ、セレス様、大船に乗ったつもりで、このジライにお任せを。とびっきり美しい踊り子にしてさしあげますゆえ♪」

彷徨う光　2話

ジライが持ってきた衣装に着替えたものの、セレスは恥ずかしくって胸元を両手で覆ってしまった。こんなに露出の激しい衣装だったなんて……

「できましたぞ」

「こっちも着替え終わったわ」

セレスが続き部屋から戻ってみると……

そこには、ジライによってつくりあげられた、かわいらしい東国の少女が居た。

癖のない長い黒髪を背に垂らし、腰から下だけの黒のドレスを着て、金の紐帯を結び、微かにふくらむ（そのように見える）胸元を金の胸当てで隠し、その上から薄手の黒のベールをまとっている。二の腕から手首までを覆う衣装と同じ黒と金のつけ袖も、似合っている。ふっくらとした頬に紅を差し、大人びた化粧をしているのに幼さが目立つ顔が愛らしい。思わず、抱きしめてしまいたくなるほどだ。

「いやぁん、シャオロン、かわいいわ」

「あ……セレス様も、あの、その……素敵です」

美少女にしか見えない少年が、顔を真っ赤にする。

シャオロンとは対照的に、セレスは白い衣装を着ていた。宝石やピーズを埋め込んだキラキラ光る胸当てと、腰までのスリットが入ったドレス。その上から半透明な白のベールをまとっている。セレスの豊満な胸は胸当てにおさまりきれず、こぼれそうなばかり。蜂のようにくびれたウエストや、スリットからチラチラ見える色白の太腿もなまめかしい。

「御免」

そう断ってから、ジライがちょいちょいとセレスの顔に化粧をほどこしてゆく。

口紅やアイシャドーが濃いので、ちょっとキツめの顔立ちとなった。軽いウェーブを描く金の髪、白い肌、挑発的なその顔は、見る者を釘付けにする魔性の美。

「あああああぁぁぁぁ」

忍者もポッと頬を赤く染める。

「普段の清楚なお美しさも魅力的にございますが……お化粧をなさると、一層、セレス様の高貴さがひきたちます」

ジライの目は、もはやハートになっていた。この男は、派手な化粧の方が踊り子らしゅうございますとか何とか言って、セレスを自分好みに化粧してしまったのだ。威圧的な、威厳あふれる、その顔立ちは、踊り子というよりは……女王様。

「それでは、三人で魔族退治に参りましょう。女王……いえ、セレス様♪」

「行くのはいいけど……」

セレスは忍刀を後ろ手に持つようにして、ジライとシャオロンを見つめた。

「あなた達、外見は完璧だけど、しゃべらないでね。声を出したら、一発で男ってバレるわよ」

低音の男性声の美女と、声変わり前の少年の声の美少女。シャオロンの方は、まだゴマかせるかもしれないが。

「ああ」

美女が口元ににっこりと笑みを浮かべる。

「ご心配無用ですわ、セレス様。必要とあらば、変装にふさわしいように改められますもの」

セレスの全身に鳥肌が立った。

美女がその顔にふさわしい、ハスキーな、なまめかしい声を出したのだ。声質も口調も全く変わっている。

シャオロンも驚いて身をのけぞらせている。

「私、変装術、得意ですのよ。完璧に女でございましょ？」

「そ、そうね」

美女が腰をくねらせ、しなをくる。
セクシー・ポーズをとる美女にしか見えない！見えないのだけれども……
「やめて！ジライ！中身があなただと思うと、気持ち悪くて吐きそうだわ！普通にしゃべって！」
「気持ち悪くて……吐きそう？」
いつもの低い声でそう呟くと、ジライはうつむき、ぶるぶると体を震わせた。右手を己の心臓に当てながら。
「あ、ごめんなさい、言い過ぎたわ」
セレスは慌てて謝った。
しかし……
ジライは落ち込んでいるのでも、怒っているのでもなかった。セレスの言葉の暴力にうっとりとし、被虐の悦びに浸っているのだ。
「気持ち悪くて、吐きそうとは……ああ、そこまで嫌われてしまうなど、そんなぁ……」
「だから、ごめんなさいってば！」
「そうですよ！ジライさん！すばらしい技です！」
セレスの横のシャオロンは両の拳を握りしめていた。
「すごい技です！初めて、見ました！じゃない、聞きました！」
「む？」
「変装術ってすごいんですね！姿かたちだけじゃなくて、声まで変えるなんて！お見事です！」
「うむ」
「どうしたら、そんな事ができるんですか？修行を積んだらオレにもできるんでしょうか？」
「ふむ」
美女の姿の忍者は、顎の下に手をそえ首を傾げた。
「……一度、喉を潰す覚悟があるのなら」
「大丈夫です！オレ、どんな修行にも耐えます！」
「駄目～～～～！」

二人の間に、セレスが割って入る。
「シャオロン、あなたは武闘家になるのよ！変装術なんか必要ないわ！あなたは、あなたにしかできない事をすればいいの！隣の芝生がどんなに青くても、必要のない憧れなんか抱いちゃ駄目よ！わかったわね！」
「は、はい」
「ジライ！この子がどんなにお願いしても、変装術は教えないでちょうだい！わかったわね！」
「はあ、心得ました」
セレスは、ハアハアと肩で息をした。怒鳴ったせいで、頭痛がひどくなってしまった。
「……じゃ、行きましょか」
変装に予想以上に時間がかかってしまった。が、本当はのんびりしている暇はないのだ。精神系の魔法の影響がいつ表われてくるかわからないのだ。宦官達を倒してハーレムの女性達を助け、早く建物から出なくては。
敵の狙いは何なのだろう？
結界を張っている者、洗脳魔法をかけている者、セレス達をハーレムに移動魔法で送った者は、同一人物なのだろうか？この妖しい魔法でセレス達も操ろうとしているのだろうか？

音も無く敵の背後に忍び寄り『ムラクモ』を振るう美女。
竜巻や鋭い爪で、敵を浄化する美少女。
部屋を出てからサロンに向かうまでの間、二人は目にした宦官警備兵達を次々に葬っていった。魔と契りを結んだ彼等は、一握の塩を残して消滅してゆく。
セレスはもっぱら二人の戦いぶりを見るだけだった。神聖魔法の祝福をかければ忍刀でも魔族と戦えるものの、セレスの魔法ではその効果は三分ともたない。危機（ピンチ）となったら加勢しようと、いざとい

う時の為に魔力を温存しているのだが……二人はまったく危なくならないのだ。
セレスは姫君のように二人の従者に守られ、通るべき道を切り開いてもらって進んでいった。

サロンの入口の扉は開いていた。
漂う血と肉の腐敗臭、そして濃い香の匂い。
扉の陰に隠れながら、中を覗き、セレスが口元を覆う。
扉の先では魔族の宴が繰り広げられている。
欲望のままに猛り容赦なく女を貫く者、複数で女を嬲る者達、死姦する者、サロンに積み上がった全裸の女性の死骸を菓子か何かのように貪りながら踊り子の舞を見る者達……十四人の宦官がいた。
性欲と食欲の権化のようだった。
その凄惨で淫靡な宴を、処女の女勇者が直視できるのか？ジライは女主人を気遣ったのだが……
杞憂であった。
女勇者は……怒っていた。
激しく怒っていた、人の尊厳をふみにじる魔族に……
女をなぶる黒人達に対してだけ怒っているわけではない。
宦官達の押し殺していた憎悪・欲望を解きはなち、彼等を人外の歪んだ姿に堕とした魔に対しても……怒っていたのだ。
サファイアの瞳は、目をそらさず、まっすぐに前を見つめていた。
忍刀を持たぬ方の手――右手が宙に上がる。何かをつかむように、右の指を折り曲げる。
自分の持つべき武器が、そこに来たるように。
そして、そのまま、サロンに飛び込もうとする。『勇者の剣』の飛来すら待たずに。
怒りに我を忘れているのだ。
「お待ちを、セレス様」

忍者ジライは背後から彼女の肩をつかんだ。
「おなご達が死にますぞ」
ビクッ！と女勇者の体が強張る。
「十四人を一度に浄化できるのですか？」
「あ」
肩越しにセレスが振り返り、忍者を見上げる、困惑した表情で。
「一人でも残せば、きゃつら、おなごを人質にするでしょう。それで、よろしいのですか？」
「私……」
セレスはつらそうに瞳を伏せ、右手を力なく落とした。
「ごめんなさい……そうだったわね、その為に変装までしたのよね……ありがとう、ジライ、止めてくれて」
「いえ」
ハーレムの女性の生死など、ジライは気にもかけていなかった。
しかし、女勇者の行動によって、ハーレムの女性が殺害されるのはまずい。セレスが自分を責めすぎて、不眠症となって美しい顔に隈をつくられては大変だし、心労のあまり胃でも痛められては大事だ……そう思って止めたのだ。
「私が天井をつたい、反対へ行きます」
宦官達の居る位置から、忍者が瞬時に戦術を立てた。
「十秒以内に、五人、殺れます。側のもう一人を加えた六人を、私めが始末します。あちらの死体喰いの四人にはシャオロンが竜巻を。左右の手で二つ放ったら、すぐさま斜め向こうの輪姦中の三人へ、竜巻を。セレス様はあそこの、一人離れておなごを抱いておる、あやつ、アレを斬ってください。神聖魔法の祝福をかけた忍刀で。浄化魔法でもよろしゅうございますが」
「あの男ね……」
「我が向こうまで辿りついたらすぐさま竜巻じゃ、シャオロン。おまえの竜巻を合図に、我とセレス様は標的へと走る」
忍者は、女勇者や自分よりも後方に控えている少年へと視線を向

けた。
しかし……
少年はサロンの中を見ていなかった。『龍の爪』を装備した両手をだらりと垂らし、廊下の彼方を見つめていた。半ば夢見るような瞳で。
「シャオロン？」
「光……」
少年がポツリと呟いた。
「白い光と……黒い渦」
ふらりと、少年が歩き出す。
「彷徨う……光」
セレスが手を伸ばした時には……
少女の姿をした少年は走り出していた。風のような速さで。
「シャオロン！」
慌ててセレスが後を追う。
しかし、少年の速さについてゆけない。距離が開くばかりだ。
「……あやつ、首根っこをおさえましょうか？」
セレスの横に追いついたジライが問う。走りながらセレスはかぶりを振った。
「駄目。ああなった時のシャオロンには何かが来てるのよ」
「何かが来てる？」
「霊的なもの」
「ほう」
「私には何にも見えないけど、絶対、そうなのよ。しばらく様子を見て」
「承知」
青いタイルや宝石をふんだんに埋め込んだ廊下を、シャオロンは走っていた。
だが、その姿が、フッとセレスの視界から消える。
跡形もなく。

急に。
「シャオロン！」
「おさがりください、セレス様！」
ジライは周囲を注意深く見回し、少年が消えた辺りの床を狙いクナイを投げた。クナイも、又、宙でその姿を消した。
次にジライは『ムラクモ』を抜刀し、宙を一文字に斬った。聖なる武器はジライの正面ではその刀身の切っ先から半ばまでを消したのだが、右手を伸ばし刀を水平に構えた時には何事もなかったように冴え冴えとした美しいもとの姿に戻っていた。
消えているのではなさそうだ。その場所に入ったモノが、人の目から見えなくなるだけのようだ。
ジライは最初は左の指先を、つづいて手を、足を、半身を、と、次々に体をその場所へと伸ばし、半ば消えている自分の体をいぶかしそうに見つめた。
「平気？痛くないの、ジライ？」
「つゆほども痛みはありませぬ。セレス様、この場所に立つと扉が見えます」
ジライが指したのは壁だ。壁が続いているように見える、少なくともセレスが立っている位置からでは。
「シャオロンの姿は見当たりませぬ。扉の内に入ったのやも」
先に入って様子を窺って来るという忍者に、セレスはかぶりを振った。
「いいえ。一緒に行きましょう。多分、白い光と黒い渦というのが、その先にあるのよ」
少し進むと、セレスの目にも、朱塗りの木製の観音扉が見えた。
扉を開くと、地下へと続く螺旋階段が目に入った。薄暗かったが、ぼんやりとした淡い光が階段の下にあるのが見えた。
そこに――人影がある。
「セレス様」
「行くわ」

止めようとするジライの手を払い、セレスは階段へと足を向けた。忍刀を握りしめて。

ほんの一段、踏み降りると、

「おや、又、お客様ですか」

ゆったりと落ち着いた声が、底から響いてきた。

目についたのは、床に届きそうなほど長い黒髪だった。まるで夜の河のように暗く、流れるような髪だ。

身にまとっているのは魔術師の黒のローブ。右手が抱いているのは、木製の魔法使い専用の杖。精神力を高め、時には魔法の媒介にも使う神秘の道具だ。

肌の色は白く、目は青い。穏やかな、女性的な顔をしている。美しい男だ。

その人物が自らを淡く白く輝かせながら、螺旋階段の下の地下室の中央に佇んでいるのだ。やさしそうに微笑みながら。

「ようこそ、お嬢さん方」

よく通る、耳に心地よい声だった。

「女性とお会いするのは、久しぶりです。こんな飢えた状態では、どんな一風変わったお顔の方でも愛らしくみえるところなのですが」

階段の上のセレス、ジライを見てから、男は視線を下げ、自分の側を見る。シャオロンが男のそばにたたずんでいる。

「二つとない素晴らしい花束に出会えるとは嬉しい限りです。長生きはするものですね」

「あなた……誰？」

男とシャオロンを見つめながら、セレスは階段を下る。忍刀を握ったままで。

（この人……誰かに似ているわ）

初対面だと思う。相手の顔に覚えはない。けれども、その声を耳にした時から、何かを思い出しかけているのだ。

「あなたこそ、どなたなのです？私と出会えたということは、強力な光の加護を受けた方なのでしょ？」
「え？」
「踊り子の衣装に身をやつしておられますが、王族の方ですね？」
男は問うというよりは、単に確認する為に尋ねたような口調だ。
「私……王族じゃないわ」
「おや？そうなのですか？そっくりなのに？」
「そっくり？」
「髪の色をのぞけば、瓜二つではありませんか、あの方に」
セレスは螺旋階段の手すりから、身を乗り出した。昔からよく言われてきたのだ、自分の顔がある人に似ていると。
「あなた、エリスおばあ様をご存じなの？」
「エリスおばあ様？」
相手は口元に手をそえ、微かに首を傾げる。
「ああ、そうでした、エリス様……改名なさったのでしたっけ。エリス様のお孫様というと……あなたは、セレス様、今世の女勇者様？」
「ええ」
「なるほど」
得心がいったという顔で、男は微笑んだ。
「ならば、ここに来られてもおかしくはないです。あなたとあなたの従者に対してならば、私の結界は開かれているはずですから」
「結界？」
セレスはドキッとした。
この男が……結界の術師……？
そうなのだろうか？
更に階段を下ろうとするのを、肩をつかまれ止められる。振り返れば、ジライが無言のまま首を左右に振っていた。
「でも」
ジライがそっと耳打ちしてくる。

「あの男の足元をよくご覧ください。あやつ、邪法の魔法陣の上に立っております」
「え？」
よく見れば、男の足元に小さな円があり、その内に複雑な模様がある。神聖魔法以外の魔法はよく知らないセレスでも、それが何らかの魔法の魔法陣である事だけはわかった。
「邪法の魔法陣……？」
「見た事なき型にございますが、あれに刻まれた文字は幾つか読み取れます。『封印』、『時』、『死』……あれに近づいてはなりません」
魔法使いの杖を手に、魔法陣の中央に佇む男。その顔から全く邪気は感じられなかったが、先ほどから男はその場に佇んで見上げてくるばかり。全く歩こうとしないのも、確かに変だ。
「でも、シャオロンが……」
「私めにお任せを。セレス様はここでお待ちください」
そういうやジライは……
手すりを飛び越えた。左手でトゥルク帽と鬘をおさえ、ベールとドレスの裾を宙に舞いあがらせて。
「おや」
魔法陣の男が楽しそうに笑みを浮かべる。
ふわりと、体重を感じさせぬ軽やかさで床に着地し、ジライはシャオロンと男の間に入った。右手にクナイを握って。
「セレス様の元へ戻りなさい、早く」
変装にふさわしい女性の声で、ジライは鋭く命じた。しかし、少年からは反応が返らない。
ジライは目の端で、シャオロンを見た。魔法陣の男を見上げる少年は、まるで、彫刻のようだった。両手は力なく垂らしたまま。その顔からは一切の感情が抜け、半ば閉じられた目も、何も見ていない。
完全に正気を失っている。

「シャオロンにかけた術を解きなさい」
クナイを構え、恫喝する美女。
魔法陣の男は肩をすくめた。
「私がかけたわけではありませんよ」
「嘘をつきなさい！」
「本当です。その子……敏感すぎるみたいですね。魔族の術にほぼかかってます」
「なんですって？」
「正気を失いそうになったので、それで、逃げて来たのですよ。私の側ならば光の加護が強いので、術のかかりが遅くなります。何で私に気づけたのかはそこはちょっとわかりませんが、無意識なのか父祖の霊の助言か……ともかくも、ここなら安全だと察してやってきたのですよ。上にいたら、もう魔族の駒となっていましたね」
「……でたらめを」
「そんな怖い顔をしないでくださいな、忍者ジライ」
「！」
ジライは魔法使いの姿の者を睨んだ。何故、忍者ジライの名を？それに、何故、この変装が見破られるのだ。女性の声音でしゃべっているというのに。
「私が何を言っても、あなた、口先だけの言葉としか思ってくれないでしょう？証拠を見せます。その子を洗脳しようとしている魔法、まあ、それはあなた方の頭痛の素なんですがね、それを綺麗さっぱりなくしてあげます」
と、言った後、黒髪の魔法使いは天井を見上げた。
「むろん、ついでに魔族も始末します。腹立たしいほど下品な魔法を使ってますよね、この術師。何なんですか、あの宦官達の姿。ハーレムを蹂躙するにしても、もう少し、綺麗にやればよいものを……」
左頬に手をそえ、溜息をつく。
「美的センスがなさすぎます。許せませんね」

相手の視線は、サロンがあった方角に向いている。千里眼の魔法で、後宮の女性を辱める黒人宦官が見えているのだろう。

魔法使いは呪文を低く詠唱し、手で複雑な印を次々に結んでゆく。あやしげな魔法を使われてはたまらないと、ジライはクナイを投げようとした。

しかし、螺旋階段からセレスの制止の声がかかる。

「邪魔しちゃ駄目！浄化魔法よ！」

しかも、高位の浄化魔法だ。

魔法使いの体から、まばゆい、あたたかな光が広がる。爆発的に広がる光の渦は、シャオロンを、ジライを、セレスを飲み込み、壁や天井をつきぬけて広がってゆく。

清きものを守護し、邪悪を討つ、神の御力。

欠けたるものが満たされてゆくような充足感。

神を身近に感じる至福。

セレスは安らぎを感じていた。肉体的苦痛――頭痛も消えている。と、同時に、光が建物中に広がってゆくのを感じ取っていた。

サロンの様子が見えた。

黒人宦官達は、皆、光を浴びて、消滅した。人の心を取り戻し人ならざる身に堕ちた己を恥じた彼等は、自らを神に捧げ、自らの命を絶つ事で内なる魔を滅ぼしたのだ。

心を縛られていた女性達からも、呪縛が消える。理性を取り戻した彼女達は、血みどろの死体あふれるサロンの恐ろしい現実に悲鳴をあげ、両手で顔を覆い嗚咽する。いっそ、魔族に殺されていればよかったと嘆きながら。皆、スルタン以外の男性と情を通じてしまったのだ。妃達は死罪、女奴隷達も良くて家臣に払い下げ、悪くすれば処刑だ。

魔法使いは次の呪文を詠唱した。

女達が泣くのをやめ、動き出す。

衣服を着ていた者は皆、着衣を脱ぎ、裸体となった。そして、裸のまま、サロンを離れ、廊下へと出てゆく。

彼女らの衣服は発火し灰となって消え失せ、衣服だけを焼いた後、炎も又、消え失せる。

（え？）

戸惑うセレスに、魔法使いが答えを与える。

「血や精液のついた衣服を脱ぎ捨て、体を清めてもらった後、自室に籠り内側からバリケートを築いてもらいます」

「え？」

サロンの映像が消え、現実だけが見えるようになる。

黒髪の魔法使いはやさしく微笑んでいる。

「ハーレムで生き残っている女性達は、皆、宦官が魔に憑かれた時、たまたま自室に居たので難を逃れられたのですよ。そう思い込み、その状況にふさわしい状態を自分達で造り出せるよう幻術をかけました」

「……」

「むろん、今、自分達がやっている事もじきに忘れます。彼女らは、スルタンの為に操（みさお）を守り抜いた自らを誇りに思うでしょう」

「……ありがとうございます」

「ああ、それから、妊娠の心配もありません。さきほど、皆、浄化の光を浴びましたからね、種がついてしまったのだとしても、魔の穢れと共に浄化されました。魔の赤子はもはやいません」

「本当に……なにもかも、ありがとうございます」

セレスは螺旋階段を下り始めた。

「セレス様！」

叫ぶジライに、セレスはかぶりを振った。

「大丈夫よ、ジライ。浄化魔法を使える方だもの、魔族でも大魔王教徒でもないわ。この方は、私などよりよっぽどうまく、ハーレムの騒動を鎮めてくださったわ」

セレスは地下へと降り立ち、ゆっくりと歩を進めた。

あれ？ここ何処？と、いった感じに、きょろきょろと辺りを見回すシャオロン。

渋い顔で、クナイを掌で弄んでいるジライ。
二人の横を通り過ぎ、セレスは魔法陣の前に跪いた。
セレスが魔法使いの前に跪いたので、慌ててシャオロンがそれに倣う。忍者も膝を折ったが、クナイを左手に持ったままだった。
「お力添え、感謝いたします。お察しの通り、私は勇者ラグヴェイの末裔、勇者ランツの孫、今世の勇者セレスにございます。スルタンとの謁見中、何ものかの術によって供の者と一緒にハーレムに飛ばされ、異常に気付き、魔を狩っていた次第にございます」
「……従者の数が足りませんね。赤毛の傭兵と武闘僧はどうしたのです？」
「私の従者をご存じなのですか？」
「カルヴェルに教えてもらいましたから」
魔法陣の男がパチンと指を鳴らす。
すると、セレスの前に『勇者の剣』が現れた。背に固定するバンドごと、物質転送されてきたのだ。移動魔法同様、空間を渡る魔法の為、物質転送魔法も魔力の消耗が激しい。無詠唱で難なくやってのける魔法使いなど、そうそう居ない。こんな事ができるのは超一流の魔法使いだけだ。
「お師匠様のお知り合いなのですか？」
「ええ、まあ」
その者はその場で一回転してみせ、魔術師のローブと床まで届きそうな黒髪を翻した。
「この姿を見れば、だいたいわかるでしょ？」
「……そうですね、お二人とも大魔法使いなのですね」
黒髪の男はニコニコとカルヴェルのように笑っている。
「……それで、赤毛の傭兵と武闘僧は何処です？二人ともとても大柄なのでしょ？女装したのですか？」
「いいえ。アジャンとナーダは王宮には来ていません。今は、多分、タブールの宿に戻っていると思います。王宮にはシャオロンとジライとだけ参りました」

「何だ、そうなのですか」
魔法使いは微かに表情を曇らせた。
「残念です。二人の女装も見たかった……」
「……見ない方がいいと思いますよ」
アジャンとナーダの女装姿を想像し……
セレスはうっぷと口元を覆った。
「それで、あの、魔法使い様、ご尊名を伺ってもよろしいでしょうか？」
「私の名前……ですか？」
魔法使いは青の瞳を細め、口元に手をそえ、微笑を浮かべる。
「私の名前を聞いたら、あなた方、びっくりすると思いますよ」
「え？そうなのですか？でも、よろしかったら、お教えいただけませんか？」
黒髪の男はにっこりと微笑んだ。しかし、その青の瞳が、悪戯好きの子供のようにキラッと輝くのを、忍者ジライは見逃さなかった。
「……私、ナーダと言います。偶然にも、あなた方の仲間の武闘僧と同じ名前なのでよ」

彷徨う光　3話

一方……

その頃、セレスの従者――大僧正候補のナーダは……

赤毛の傭兵アジャンに宿屋で怒鳴りつけられていた。

「遅いぞ、クソ坊主！」

セレスとシャオロンが宿泊している続き部屋の扉を開けるなり、そうののしられたのだ。ナーダはムッと顔をしかめた。

ナーダがこの宿に顔を出すのは、今日、これで二度目であった。最初、昼前に戻った時は、アジャンはシャオロンの部屋でいびきをかいて寝こけていた。無理矢理起こすと不機嫌そうな顔で、セレスはシャオロンとジライを連れて王宮に挨拶に向かったと教えてくれた。まだ眠そうだったので傭兵は放っておいて、インディラ寺院に挨拶に行って帰って来たわけなのだが。

「とっとと支度をしろ。王宮へ行く」

アジャンは『エルフの弓』、『エルフの矢筒』、『虹の小剣』を投げるようにしてナーダに押し付けた。

「持ってけ」

アジャンは研ぎ石で背の大剣の刃を整えていたようだ。机の上にちらけていた道具類を乱暴に片付けている。

「王宮で何かあったのですか？」

「セレス達が行方不明になったのよ」

しわがれた老人の声……

武闘僧ナーダのすぐ横に、ニコニコ笑っている老人が居た。大柄なナーダと顔の高さがほとんど一緒だ。空中浮遊の魔法で宙を漂っているのは……当代随一の大魔術師カルヴェルだった。気が向いた時にだけ勇者一行にかかわるこの老魔術師は、ナーダがインディラ寺院に行っている間に、移動魔法で宿までやって来ていたようだ。

「セレス達が行方不明？」

「うむ。実はの、ナラカの甥よ」
老魔術師は長い顎鬚を弄びながら言葉を続ける。
「スルタンとの会談中にセレス達が消えたと、今、王宮は大騒ぎよ。何処をどう探そうがセレス達は見つからぬ。三人の気は、王宮付きの魔術師が探知の魔法で探しても、王宮はおろか、タブールの街中にもない。だもんで、今、王宮はパニックじゃ。王宮内で勇者が消えては暗殺の嫌疑がトゥルクにかかる。諸外国に攻め込まれる正当な理由を提供するようなモノ。トゥルクとしては大迷惑なのじゃ」
「……セレスが亡くなれば、『勇者の剣』の振るい手がいなくなります。大魔王の野望を阻止できる者がいなくなるのです。戦争どころの問題ではありません。この世が滅びるのです」
「ホホホホ。何を熱くなっておる？世の国王どもは、そのほとんどが、女勇者などアテにしておらぬ。自国の守りは軍隊と宗教団体、魔術師でまかなえると思っておるからの」
「……愚かな」
「無駄話は後にしろ」
支度を終えた赤毛の傭兵がナーダの前に立っていた。
「王宮に行くぞ、ついて来い」
背には大剣、腰には『聖王の剣』。それから腰のベルトには見慣れない革の小袋が三つ釣り下がっていた。カルヴェルに何かアイテムを借りたのだろうか？
「王宮にセレス達が居るのですか？」
「居る」
絶対の自信をもって、アジャンは答えた。
「魔族の結界の中に居る」
シャーマンであった父から継いだ『真実を見抜く目』が教えているのだ。求めるもの――セレスが何処に居るのかを。
そこでカルヴェルがホホホホと笑った。
「赤毛の傭兵、首飾りをつけるのじゃぞ」
「……」

「王宮に巣食っておるのは高位魔族じゃ。忘れるな。おぬしは魔に好かれやすい体質をしておる。魔除けの首飾りをつけねば、目をつけられる。その体、奪われるやもしれぬぞ」
赤毛の傭兵はボリボリと頭を掻き、面倒くさそうに溜息をついた。それだけで、老人に答えを返さない。
そして、武闘僧の肩を軽く叩く。
「行くぞ」
「ですが……」
ナーダはカルヴェルを糸目で睨んだ。
「移動魔法で送ってくださらないのですか？今、セレス達は魔族に捕まっているのでしょ？一刻を争うはずです」
「ん？送って欲しいのか？」
ニコニコニコニコ、老人は笑う。
「何をもってわしに助力を頼む？『聖なる武器に関する記録』の写本を譲ってくれるのなら、王宮まで運んでやっても良いがの」
ナーダはカッと怒りに頬を染めた。
「結構です！あなたに助力を願った私が馬鹿でした！」
「ナーダ」
赤毛の傭兵がもう一度、武闘僧の肩を叩く。
「大丈夫だ、間に合う」
「え？」
「セレス達は、今は、それほど危険じゃない。さっきまでは少しヤバかったんだが、今、あいつら、白い光の側にいる。のんびりしているわけにもいかんが、俺達の力が必要になるのはもう少し先だ。馬で行っても充分間に合う」
「……そんな事までわかるんですか？」
「ああ。何となく、な。白く大きな光が何なのかはよくわからんが、禍々しくないから魔族じゃない。その光の中にいる限りは安全なんだが、外には出られん。俺達が出口をつくるんだ」
武闘僧はまじまじと赤毛の戦士を見つめた。

正式な修行を積んでないのでアジャンの能力は不安定で、殊にセレスに関わる予感はアテにならない。セレスが傍にいるだけで赤毛の戦士は心を乱し、己が目を曇らせてしまうようなのだ。

しかし……セレスと離れ、セレス達の無事を案じている今、アジャン未来を見通す目は、異様に研ぎ澄まされているようだ。

「じゃあな、ジジイ」

「王宮につく前に、首飾りをつけるのじゃぞ」

「……気が向いたらな」

カルヴェルに対し、アジャンは軽く手を振って歩き出す。老魔術師を快く思っていない武闘僧も、それでも一応、軽く会釈をし、赤毛の傭兵の後を追った。

「きさまが昨晩と今朝、何処で何をしていたのかは知らんが」

歩きながら、赤毛の傭兵はギロリと武闘僧を睨んだ。

「寝不足だからって手は抜くなよ。いいな、クソ坊主」

それだけ言って、ズンズン進んで行ってしまう。

武闘僧ナーダは苦笑を浮かべた。目の下には隈があるし、瞼も腫れぼったい。この顔では、ほとんど寝てないと宣伝しているようなものだ。

（ジライは大丈夫なんですかねえ……）

ナーダは、それでも四時間も眠っているのだ。明け方まで消耗する事をやってしまったのでそれだけの休憩では不充分ではあるものの、結構、寝ているのだ。

対して……ジライは完徹のはずだ。一晩中、犯りまくった後、すぐにセレスの元へ帰ったのだから。

昨夜、ジライの素顔を知ってしまったナーダは、遊び半分にジライを恐喝し、無理矢理関係を持った。ジライを抱いたのだが……めっきり暗黒系の性格の忍者がおとなしく抱かれるはずもなく、どちらかというと弄ばれたのはナーダの方だった。

そして……

武闘僧の頬が朱に染まった。ふとした拍子に思い出してしまうの

だ、昨夜のジライを。妖しく美しい白い顔、きつい眼差し、ひきしまった魅力的な体、快楽に抗いきれずせつなげにあげる嬌声……

思い出す度に、胸がときめく。

大僧正候補のくせに、ナーダは……

もと大魔王教徒で未だに闇の教えに忠実なジライに惚れてしまったのだ。

しかも、相手はセレスにホの字。ジライが女王様趣味なのも昨夜、わかった。ジライはセレス女王様に夢中なのだ……

望みゼロの片思いであった……

(早く忘れなくては!ジライとは昨晩限りの約束なのだし……)

勇者の従者として働くのだ!恋心は捨てよう!と、武闘僧は自己暗示をかけた。

アジャンは、今、セレス達は安全だと言っていた。しかし、舞台は王宮。部下の老忍者ガルバからの報告によれば、最近のトゥルク王宮は物騒な場所なのだ。

三か月前に皇太后が狂死してから、スルタンの王子が次々に変死。更にここ一カ月では、法務長官、軍務長官他、国王の側近、親衛隊などあわせて(少なく見積もっても)四十名が失踪している。王宮に出仕していた彼等は、それぞれの持ち場から忽然と消えたのだ。ほんの数分前まで国王と会話を交わしていた者でさえ跡形もなく消えていた。

セレス達の無事を祈り、武闘僧ナーダは赤毛の傭兵の後を追った。

「ナーダ?」

セレスはきょとんとした顔をした後、華やかな笑みを浮かべ、パンと手を叩いた。

「そうだわ、ナーダよ。ナーダに似てるんだわ」

「どうしました、女勇者セレス様?」

やさしい笑みを浮かべる黒髪の魔法使いに、セレスは急ぎ頭を下

げた。
「すみません、魔法使いナーダ様。先程から気になっていた謎がようやく解けたので……」
「何です？」
「あなた様と話していると、何か妙に落ち着かなくて……誰かに似てる、でも、誰だったかしら？と、ずっと気になっていたのです。やっと、わかりました。ナーダ様のお話の仕方、私の仲間の武闘僧ナーダとそっくりなんです。ね、シャオロン、そうでしょ？」
同意を求められた少年が、下げていた頭をおそるおそる上げる。
「そうですね……そう言われてみれば、そうかも」
「そうですか」
黒髪の男が嬉しそうに笑みを浮かべた。
「話し方が似てますか……」
「声もよく似ています、顔は、全然、似ていませんけど」
「あの子は父親似らしいですからね」
「あの子？」
もうすぐ三十になるナーダをつかまえて、『あの子』？黒髪の魔法使いは、フフフと楽しそうに笑った。
「私から見れば、あのぐらいの年齢ではまだ子供です。私、外見はこの通り若く美しいのですが、カルヴェルとそう変わらない年なのですよ」
「……不老の魔法？」
「ええ、まあ。そういった類のものがかかっています」
セレスは眉をひそめた。
不老不死の魔法は自然の摂理に反する不自然な魔法――――邪法だ。
魔法使いは肩をすくめ、杖底でコツコツと床を叩いた。
「この魔法陣のせいなのですよ。数十年前、ちょっとドジを踏んで、魔法陣に封じられてしまったのです。その時から、外見は変わっていません」

セレスは床に刻まれた魔法陣を見つめた。見た事もない模様、邪法を誘う文字が刻まれている。円陣の端に手をかざすと、バチッ！と稲妻が走った。魔法陣に近づく事かなわず、中の者が外に出る事もできないのだ。

「何十年も封印されているのですか？ずっと、この王宮に？」

「……私、ここに居るわけではないのですよ。この王宮にも、たまに接点が繋がりますが、体はここではなく別次元にあるのです」

「え？」

「数十年前、私は魔族のしかけたこの魔法陣につかまり、異次元に封じられて、そこで死んだのです」

「死んだ？」

「はい。時が流れない異次元では、存在していても死んでいるも同然ですから。しかし、私が封じられてから十何年か後に、カルヴェルが私の影をこの世界に呼び戻してくれたのです」

「影……ですか？」

「ええ。魂と魔法で写された肉体。本当の肉体は異次元に封じられたままですが、おかげで魔法力でこの世界を覗き、干渉する事ができるようになったのです。ただ、今の私は、非常に不安定な存在なので、どの場所にどれぐらい留まれるかわからないのです」

「と、いうと？」

「私の影は今はこのハーレムの地下にありますが、明日、明後日も、ここに居るかどうかはわかりません。今すぐ、シャイナの竹林に飛ばされるかもしれない、シルクドの砂漠に行くかもしれない、人里離れた山の中に出現してしまうかもしれない……。私、魔法陣ごと世界中を飛ばされているのですよ」

「世界中を……」

「世界中の……魔のものが開いた次元通路。そこにしか私の影は存在できないのです。どこにどれぐらい居られるのかは、カルヴェルは、ある程度、予測できるようなのですが、私にはさっぱりわからないのです。トゥルクに居られるのも数時間なのか、数日なのか

……彼に聞かないとわかりません」
　魔法使いの体は淡く白く光っている。それは魔法で作られた偽りの体だったからなのだ。
「ハーレムにやって来て、まだ一時間ぐらいでしょうか。ここに来るのは久しぶりです。五年ぶりぐらいですね。のどかで、艶やかで、覗くには楽しい場所だったんですけどねえ、ここ。それを荒らしてしまうだなんて……まったく、魔族は無粋で困ります」
「何十年も世界中を彷徨っておられるのですか……？」
「ええ、まあ」
　シャオロンが感じた黒い渦と白い光とは、この事だったのかとセレスは思った。魔族の魔法陣（黒い渦）に囚われた魔法使い（白い光）。強力な高位の浄化魔法を使える人間が……神の祝福を受けている人物が、何十年も結界と囚われているとは……
「……その魔法、お師匠様にも解けないのですか？」
「カルヴェルでも無理です。人間には解けない呪なのです」
「そんな……」
　セレスが青ざめ、口元を覆う。
「ああ、でも、大丈夫」
　黒髪の魔法使いは、にっこりと笑みを浮かべた。
「この魔法、時がくれば効力が無くなるのですよ。多分、もう間もなく解けるはずです」
「本当ですか？」
「はい。条件さえ整えば、明日にでも……私の体は異次元からこの世に戻されます」
「その条件って何なのですか？」
　自分にできる事ならば協力します！と、ぐっと身をのりだすセレス。
　そんな女勇者を、シャオロンは『さすが、セレス様！』と目を輝かせて見つめ、忍者は心配そうに見つめている。
　黒髪の男は、優美に頭を横に振った。

「お気持ちだけ、ありがたくいただいておきます」
「でも……」
「あなたは、女勇者の務めを全うすべきでしょう。私の救出はカルヴェルに任せておきなさい」
「お師匠様に……？そうですね……お師匠様が動いていらっしゃるのなら、確かに、私が下手に手出しをしない方がいいかも」
「セレス様」
セレスは背後を振り返り、女性に扮した忍者ジライを見つめた。
「我等が今なすべき事は、我等をこの建物に閉じ込めた敵を倒す事、そして、ここより脱出する事にございます」
「そうね」
「魔法使いのナーダ殿」
忍者は魔法陣の中の男に、深々と頭を下げた。
「貴殿が本当にカルヴェル様の知己なれば、セレス様の危機を見過ごされるお方ではありますまい。お力をお貸し頂けまいか？」
「いいですよ、私にできる事でしたら」
「かたじけない」
そう答えながらも、忍者の眼は射抜くように鋭く魔法使いを見つめている。相手を信用していないのだ。
「まずは、この館の結界。我等を内に閉じ込めておる結界、あなたに解けましょうか？」
魔法使いは瞼を閉じ、魔力を高めた。心の眼で、建物とそれを覆う魔法を調べているのだ。しばらく調べた後、嘆息し、青の瞳を開く。
「……無理ですね。結界魔法は外からかけられています。内側から外へ向けたあらゆる攻撃・あらゆる魔法は結界に弾かれてしまいます」
「では、術師も外に？」
「ええ。中には居ませんね。でも、」
「でも？」

「……覗いてはいるようです。いやらしい、ねちっこい視線を上に感じます。あなた方が見つからず、焦れてるみたいですね」
「む？」
「あなた方が何処に居るのか、魔の者には見えないのですよ。あなた方、今、私の結界の中にいますから」
「魔法使いナーダ殿の結界？」
「私の周囲には、絶えず、結界が張られています。カルヴェルの魔法です。私にかかわりない者が傍にこないよう、街なかに出現してしまっても周囲に迷惑をかけないように、姿隠しつきでね。この地下室の扉、見えなかったのではありませんか？」
「はい、そうでした」と、セレス。
「私やカルヴェルと縁のある者は結界内に入りさえすれば真実が見えるようになるのですが……他の者はそうはいきません。カルヴェルの許しのないものは、肉眼でも魔法の眼でもこの魔法陣の周囲が見えず、私へと通じる道を歩けません。カルヴェルよりも強い魔力を有する者ならば、彼の結界を無効化できますが……この地上にそんな存在はありえませんから」
「確かに」と、セレス。
「あなた方をここに閉じ込めた魔族、焦りまくってますよ。あなた方の姿は消える、浄化魔法で魔人化した宦官達は全滅、女達は正気に戻って自室に籠る、『勇者の剣』も物質転送魔法で消えたとあっては、何がどうなってるのか探りたいと思うのも自然の流れ。放っておいても、敵は何らかの手を打ってきますよ。そこをすかさず叩いて、馬鹿魔族の鼻をあかしてやりましょう」
黒髪の魔法使いには、にっこりと微笑んだ。
セレスは、妙な既視感を感じていた。話し方といい、声といい、その会話の内容といい……仲間の武闘僧ナーダと話しているような錯覚を覚えるのだ。

「あっちだ」
王宮の正門をくぐってすぐに、赤毛の傭兵アジャンは北西を指さした。
武闘僧ナーダは糸目をすがめ、遠方を見やった。
今、居る第一庭園は、武器庫やさまざまな役所の建物、造幣局、病院などが立ち並ぶ、民間人にも立ち入りが許されている場所なのだ。
この広い第一庭園の北の奥に、第二庭園へと通じる門があり、広大な第二庭園の先に第三庭園に通じる幸福の門がある。身分の高い高官達は第二庭園までの入場が許可されているが、三番目の門の向こうはスルタンの住まいだ。謁見の館を除けば、スルタンとその家族と宦官しか入る事はできない。
「北西には……監視塔がありましたよね、第二庭園に」
「塔……？いや、塔じゃない」
「じゃあ、その横の会議用の建物……ですか？」
そうであって欲しいという顔で尋ねるナーダに、アジャンは無情にもかぶりを振る。
「もっと先だ」
「て、ことは第三庭園内……」
武闘僧は額に手をあてた。第三庭園のアジャンの指さす方角にある建物といえば……
「ハーレム……？ですよね、あっちにあるのは……。セレス達は後宮に居るのですか？」
「よくわからんが、あっちだ」
そのままズンズン馬を進めて行こうとする傭兵を、武闘僧は慌てて止めた。
「男の私達がハーレムに近づいたら、問答無用で殺されちゃいますよ。まずはスルタンに事情を話して、協力を仰ぎましょう」
武闘僧はためいきをついた。何かもっともらしい嘘を考える必要がある。ナーダはアジャンの勘に信頼を置いていたが、アジャンは

『真実を見抜く眼』で結論・結果だけを知って行動する。何故、その事実を知りえたのか、他人に納得してもらえる、『過程』をでっちあげねば。

「あ、そうでした、アジャン。セレス達の居場所もわかった事ですし、魔除けの首飾り、つけた方がいいんじゃないんですか？」

「……ああ」

傭兵は馬を止め、空を見上げた。

時刻は夕方だが、空はまだ明るく、青い。

武闘僧は自分の考えに浸り、ぶつぶつと小声で何かを呟いている。

それ故、気づかなかった。アジャンの顔に、苦い笑みが浮かんでいる事に。

アジャンには、空に浮かぶ禍々しい巨大な両眼が見えていた。ナーダや庭園に居る他の者には見えないようだが、それは宙に浮かんでいた。

ぞっとするほど冷たい、貪欲な眼……獲物を求める飢えた眼は、一点を見つめていた。騎乗の赤毛の戦士を……

（見つかっちまったか）

赤毛の戦士は腰の革の小袋に入っている首飾りを意識した。

（今更つけても遅い）

ならば、つける必要はない。と、傭兵は馬を走らせた。第二庭園を目指して。

ナーダと名乗った魔法使いは、階上の映像を宙に映しだし、セレス達三人に見せた。

人よりも獣に近い姿の魔人が、階上を跋扈（ばっこ）していた。蜥蜴やなめくじのような形態のものもいる。人の目を意識しないですむ、密閉された空間に居るので好きな姿をとっているのだろう。

魔人達はハーレムの女達の部屋の周囲をうろついていた。中に入りたいのだが、女達の部屋の周囲には魔法使いのナーダが結界を張

ったので、入れないのだ。それでも未練がましく、側を歩き回っているのだ。

魔法使いがパチンと指を鳴らすと、映像が切り替わった。後宮で最も広く豪奢な装飾が施された空間が映る。スルタンの広間だ。天蓋つきのスルタンの玉座があり、その横には母や妻、女達の為の席が並んでいる。スルタンが家族や側近の為に宴を催すその部屋に、魔族を生み出している穴があった。

床からボコッボコッと音を立てて泡が立ち、それが破裂する度に、次々と魔族が生まれでているのだ。

「あれは、入口専用の次元通路です。一方通行なので残念ながら、あそこから外には出られません。が、放っておくと、上階、魔族だらけになってしまうので掃除した方がいいですね」

魔法使いはにっこりと微笑んだ。

「女勇者様、あの入口を『勇者の剣』で壊してきてくれませんか？」

「え？ええ、わかりました」

「別に、シャオロン君の爪でも、忍者ジライの刀でも、聖なる武器であれば何でもいいんですがね、やはり、ここは、女勇者様が活躍して、女勇者の健在ぶりを覗き魔にアピールすべきかと。あの侵入口を女勇者様が壊せば、敵ももうちょっと本気になって、真面目に攻撃してくると思います。女勇者を殺そうとして、ね。敵が焦って動いてくれる方が、つけいる隙もできます」

「セレス様が戦われるのなら、オレも行きます！」

と、シャオロンが力強く声を上げる。

「私めも」と、忍者。

「なら、あなた方三人をスルタンの広間に移動魔法でお送りします。次元通路を壊したら、階上の魔族を派手に斬りまくって浄化してください。私はここを動けないので、補助に徹します。そのうち敵があらたな動きを見せたら、心話でお知らせしますね」

「わかりました」と、セレス。踊り子の衣装の上にバンドをひっかけ、鞘におさまった『勇者の剣』を背負う。

「ご武運をお祈りいたします」
魔法使いが低く呪文を詠唱し始める。
セレスは魔法陣の中の人物に会釈をし、シャオロンもそれに倣う。
忍者ジライも魔法使いに頭を下げていた。が、覆面から覗く忍の目は、冷徹に魔法使いを窺っていた。
（セレス様はこやつを全面的に信頼なさっておいでだが、名乗った通りの者かどうかわかったものではない）
この男は何か隠し事をしている……
忍者経験で培った人間観察眼から、ジライは真実を見抜いていた。今の所、危険はなさそうだったが、何時、相手が豹変するかわからない。準備だけは怠ってはいけない。
魔法使いが呪文の詠唱を終えると同時に、三人の姿は地下室から消えていた。

敵の侵入口を壊した後、セレスは『勇者の剣』を振り回し、周囲の魔族を葬っていった。
踊り子の衣装を着ているせいで、戦いづらかった。肩にまとっていたベールは早々に脱ぎ捨てたものの、それでも戦いづらかった。腰までスリットが入っているので足を大きく開く事はできるのだが、ふわふふわと裾が広がるドレスはともすれば踏んづけてしまいそうだった。
シャオロンも戦いづらそうだったが、彼の方が裾が短いのでまだ動きやすそうだった。
ジライは、二人の守りに徹した。特にセレスは、今、白銀の神聖防具を身につけていない。彼女のやわらかな肌を守るものはほとんどないのだ。飛び道具をくらっては傷を負ってしまう。
スルタンの広間の敵を全滅させたところで、
「セレス様、少々、お待ちを」
と、言って、忍者はドレスの裾を翻し、すばやい体術で姿を消した

敵の様子でも探りにいったのかしら?と、セレスは背を見送り、額の汗をぬぐう。
シャオロンも腕で額の汗を拭いていた。
慣れない恰好をしているせいで、二人とも、妙に緊張し、疲れていた。
二人が体を休める間もなく、ジライは戻った。
しかし……戻った彼を見た途端、セレス達は非難の声をあげた。
「あ――っ!」
「ずるいですよ、ジライさん!」
「そうよ、ずるいわよ、ジライ!何で、あなただけドレスを脱ぐのよ!」
忍者は、トゥルク帽、鬘、ドレス、トゥルク風ズボン、短靴を脱いで……いつもの覆面に黒装束の忍者の姿に戻っていた。
「私も着替えるわ!」
「オレも!」
いきりたつ二人に、忍者はチッ、チッ、チッと指を振ってみせた。
「それは不可能にござりまする、セレス様」
「何でよ!」
「セレス様のご衣裳や鎧を置いて来た部屋には、今、あの魔法使いナーダとやらの、魔族よけの結界が張られております。出入口が封じられておるのです。今は何人たりとも中に入れません」
「ぐ!」
「残念にござりまするなあ、私めの衣装は倉庫に隠しておきましたゆえ、着替えは可能でしたが」
覆面の下の忍者の目元が笑みを作る(化粧を落としていないので、目元が妙に色っぽい)。
「ご安心くだされ、セレス様。この通り、このジライめが着替えましたから。先程までは三人とも動きが悪すぎましたが、私はもういつも通りに動けます。雑魚の始末はお任せくださいませ」
「……ずるいわ」

「一人ぐらいは、まともに動けねば困ります」
ジライは口に出さなかったが、魔法使いナーダへの不信もあって着替えたのだ。
「……それに」
「それに？」
にっこりと忍者は笑った。
「せっかくお似合いなのですから、今しばらくはそのまま。特におみ足がお美しゅうございますよ。ぷるんぷるんと揺れるお胸も溜息ものでござりまするが」
プッツン、と。
セレスの中で何かが切れた。
「このド助平！」
セレスは一瞬腰をかがめ、それから白いドレスを割るように左足を高々と突き上げ、忍者ジライを蹴とばした。
そして、宙を舞う忍者に背を向け、肩を怒らせて怒鳴る。
「行くわよ！シャオロン！」
「……はい、セレス様」
廊下へと向かうセレス。
後を追うシャオロン。
「あああぁぁ」
被虐の悦びに酔いしれつつもどうにか体を起こし、二人に続くジライ。
三人は紙くずか何かのように、廊下の魔人を葬っていった。
特にご機嫌斜めの女勇者の活躍には凄まじいものがあり、小物魔族など瞬く間に斬り捨てられていた。

彷徨う光　4話

武闘僧ナーダは己が目を疑った。
国王への取り次ぎを引き受けてくれた宦官警備兵を、赤毛の傭兵アジャンが『聖王の剣』で斬り捨てたのだ。
宦官は驚きの表情に固まったまま、塩となって消え果た。魔族だったのだ。しかし……
今、二人が居るのは、王宮の第二庭園奥の幸福の門の前（馬は第一庭園で預けて来たので徒歩だ）。門の先にはスルタンの居住区と謁見の館しかない。アジャンが宦官を斬る様を、近衛兵や門そばの宦官警備兵は目撃してい。武器を手にした王宮の者達が駆け寄って来る。
「アジャン、無茶苦茶です！魔族を斬るにしても、もっと穏便に」
「ナーダ、浄化魔法だ」
「は？」
「ここには魔族しか居ない。どいつもこいつも黒の気はないが、魔族だ」
赤毛の傭兵は不愉快そうに、武器を手にざわめく兵士達を見回していた。緑の瞳には嫌悪の情すら浮かんでいる。
「あっ！あなた、魔除けのペンダントつけてないでしょ！あれ、つけてたら、そんなもの見えるはずが」
「浄化魔法だ、この門ごと魔法をかけろ」
武闘僧はムッと顔をしかめ、それから手で印を次々に結び呪文の詠唱を始める。
浄化魔法を唱えているナーダの元に、させじと兵士達が走る。
アジャンは『聖王の剣』をもって二人に近づく敵を斬り伏せていった。
やがて、ナーダから光の渦が広がる。
高位の浄化魔法だ。

その光に触れた魔は全て、人の形を保てず、塩となって崩れ落ちる。

浄化の光に触れた途端、スルタンの居住区に繋がる門（幸福の門）が、ぐにゃりと曲がるのを、武闘僧は目にしていた。苦痛にあえぐかのように、うねうねと形をくねらせ、それから門は元に戻った。ただの建築物へと。

ナーダの浄化の光が消えると、周囲には塩の山が築かれていた。門の周囲の衛兵の詰所も、無人となったようだ。人の気配も物音もない。

赤毛の傭兵は周囲を一瞥すると、ジロリと武闘僧を睨んだ。

「建物に入る前には必ず浄化魔法を唱えろ。でなきゃ、魔族の胃袋にまっしぐらだ」

「え？」

「建物と魔族が繋がっている。相当、力が強いヤツだ。知らずに建物の中に入ると、そいつの支配下に置かれる。セレス達のように、な。洗脳され、魔族の意のままに動く駒にされてしまうんだ」

「アジャン……」

赤毛の傭兵は、空を睨みあげた。ナーダには何も見えないが、そこに何かがあるのだろう。

「こいつら、まったく魔の気がなかったんですが……上位魔族なのですか？黒の気を消していたのでしょうか？」

「違う」

空を見たまま、赤毛の戦士が言葉を続ける。

「あいつ、結界を張るのが好きなようだ……何重にも結界を張ってやがる」

「え？」

「一番デカいのが、王宮全体を覆う結界……自分の配下の黒の気を隠す為のものだ。探知や千里眼に対しても、偽の映像を見せるつくりのようだ。第二庭園から先が魔の巣だって事を、タブールの聖職者から隠してるんだ」

「……」

「それから建物ごとの結界。自分の娯楽施設、人体実験研究所、部下どもの住み処……中の状況が外に漏れないよう、或いは、中に迷い込んだものを支配下に置く為に、結界を張っているんだ。この王宮の建物は、どれもこれもあいつに繋がってる」

『あいつ』とは、空に浮かぶ、常人には見えない存在――魔族の事だ。その魔のかけた目くらましの魔法をものともせず、アジャンは、今、真実を見抜いているのだ。アジャンの『シャーマン』能力は飛躍的に向上している。神の覚えめでたき、高位の神官に匹敵するほどだ。

しかし、ナーダには断言できた。アジャンは、今、セレスの身を案じるあまり無意識に才能を開花させた……一時的な熱狂状態（フィーバー）にあるに過ぎないのだ、と。

又、現在の彼の便利な状態を維持する為には、絶対、『セレスへの思いゆえ』うんぬんは口にしてはいけない。指摘されれば赤毛の戦士は取り乱し、そんな事あるものか！と必死に否定して、平常心を失って能力を曇らせるに決まっている。

第三庭園への門をくぐると……

ナーダの背筋にぞくっ！と寒いものが走った。

濃い魔族の気を感じた。空気さえ、ねっとりとしている。黒く深い闇が第三庭園にいる。黒の気を隠そうともしていない。

「これは……かなりの大物ですね」

「ああ。ウズベル以上だな」

「こんな奴の影響下に置かれているのでは……無事な人間はもう居ないんじゃないんですか？心弱き者は魔にあてられて己を失うでしょうし、野心を抱く者は無限に欲望をふくらませて魔に堕ちてしまいます」

「……いや、あっちこっちの建物の中に人間が残っている。正しくは、飼われてるんだが。正気を奪われ、閉じ込められている。実験素材兼魔人の餌として、な」

「セレス達は？」
「言っただろう？今は無事だ。あいつらの周囲には強い光がある。それに、これしきの魔の気、あいつらなら跳ね返す」
と、言ってから、はたと気づき、不機嫌そうに顔をしかめる。
「シャオロンなら、な。ま、セレスも多分、大丈夫だろう。忍者はどうだか知らんが、な」
幸福の門の正面に、謁見の間がある。スルタンが外国の大使や、（宦官ではない）政府高官と謁見する場所だ。
そこから、一人の若者が現れる。
白いターバンを巻いた、トゥルク人だ。年若い顔に不似合いな顎鬚をたくわえている。付け髭かもしれない。金糸銀糸を使った豪奢な衣装を身にまとっている。
外見からするとこの国のスルタンと思われたが、間違いなく魔族だ。その体の器ではおさまりきらぬのか、その者の周囲には大量の黒の気がこぼれ、霞のごとく立ち上っていた。
「……おでましか」
アジャンは『聖王の剣』を腰におさめると、背の大剣を抜いた。それは傭兵の愛剣ではあったが、聖なる武器ではない。魔を斬れぬ、ただの刃だ。
腰の革の小袋から小瓶を取り出し、蓋をあけ、アジャンは乱暴にその中身を大剣にふきかけた。白い霧がさあぁぁぁと広がり、視覚化した呪言葉が宙を舞い、剣へと吸い込まれてゆく。
「何なのです、それは？」
「ジジイから買った魔法だ。きさまのヘボ魔法よりも役に立つぞ」
「へ、……ヘボ魔法？」
「見てな」
傭兵はにやりと笑い、大剣を手に走った。
黒の気の塊と化した男に向かって。
黒の気が、傭兵めがけ、濁流のように押し寄せる。
それを……

大剣は斬り裂いた。
聖なる武器ではない、ただの武器が……
魔族の気を切り裂いたのだ。
（祝福の魔法？）
神聖魔法には、ただの武器に魔族を倒す力を与える『祝福』もある。しかし、刃に浄化の力を宿らせておける時間は短い。ナーダがかけてもその効果は五分、セレスがかけた場合は三分ともたない。短期決戦とわかっている時以外、あまり実戦むきではないのだ。『聖王の剣』をしまって、その魔法を使う意味があるのだろうか？
魔族を狙い、走る傭兵。
若者は顎鬚を撫で、面白そうにアジャンを見ている。
アジャンが薙ぐように大剣を振り回した瞬間！
若者の全身から黒の気が吹き出し、大剣ごと傭兵を包み込んだのだ。アジャンの全身がねっとりとした闇に包まれる。
取り込まれたのか？と、ナーダは急ぎ浄化魔法を唱えようとした。が……
アジャンの周囲を覆っていた闇が、徐々に溶けゆき、消えていく。
見れば……
赤毛の傭兵の全身は、きらきらとまばゆく輝いていた。大剣から広がる浄化の光に包まれているのだ。
「攻防一体の魔法か！面白い！」
魔族の若者は声を弾ませた。
「その魔法、何処で手に入れた赤毛の傭兵？」
「ふん」
アジャンは鼻を鳴らした。
「聞いてどうする？」
「むろん、手に入れる。全ての魔法を余の掌中におさめるのだ」
「……おまえ、イグアスって奴か？ケルベゾールド四天王の一人の……」
「ほう。人間、よくぞ我が名を知っていたな！」

「親切なジジイが教えてくれたのさ、次の相手は魔法が得意な大物だってな。で、さっきの魔法を売ってくれたのさ。この魔法がかかっている限り、おまえは俺を殺せん。この体も奪えん。歪んだ魔族がもたらす力は、全て魔法が弾いてくれる」

「なるほど……では、これはどうかな？」

呪文の詠唱も無く、魔族は雷の魔法を放った。雷は自然界の力を借りた魔法。魔族の邪悪な魔法とは別種の力だ。

雷は傭兵を貫いたかに見えたが……

アジャンは平然とした顔で、その場にたたずんでいた。

「この手の魔法に、魔法障壁の能力がないわけなかろう？俺に向けて放たれる悪意ある魔法は、皆、弾かれるのさ」

魔族の若者は感嘆の声をあげた。

「素晴らしい！その魔法、ぜひ、余のものとしたい」

「神聖魔法の一種らしいぜ、おまえには使えんだろう」

「使えずとも、原理さえわかればいい」

「ケッ！コレクターかよ」

これ以上、馬鹿げた会話につきあっていられないと、傭兵が更に相手との距離をつめようとすると……

周囲に人間が、ぼこぼこ現れる。近衛兵に宦官警備兵、一目で魔人とわかる異形。次々とわいてくる。

赤毛の傭兵は敵を倒しつつ、何もない宙――――異次元通路を大剣で破壊していった。だが、それでも、後から後から敵が現れる。複数の異次元通路があるのだ。魔人に、洗脳され正気を失っている人間達。餌として囲っていた人間達まで戦力に投入してきたのだ。

「ナーダ！」

浄化の力をこめた拳で魔人を殴って葬っていた武闘僧は、その呼びかけに振り返った。

赤毛の戦士は忌々しげに上空を見つめている。

「上だ！」

傭兵の視界の先には、夕方のように明るい空があるだけだった。

けれども、妙な歪みがあるように武闘僧にも感じられた。五メートルぐらいの高みが、魔族が出現する度に、揺れ動いている……ように感じられた。

神に助力を願い、浄化の光を放つ。しかし、蜃気楼のようなゆらぎが起こるばかりで、異次元通路は閉じない。魔法結界が張られているようだ。

「弓を使え！」

「弓って……『エルフの弓』ですか？」

ナーダの顔がひきつった。確かに、背にはセレスに届ける為の『エルフの弓』と『エルフの矢筒』があり、腰には虹の小剣がある。けれども……

「『エルフの弓』以外、聖なる武器の弓はねえだろうが！早くしろ！」

「うぅ～」

近づく敵を殴り倒し、蹴り、突き飛ばして、周囲の敵を払ってから、一応、ナーダは試してみた。弓を左手に持ち、右手で矢筒から矢を抜こうとしたのだが……矢筒から矢が取れない。

「……やっぱり」

ナーダは溜息をついた。右手で弓の弦も引いてみた。予想通り、びくともしない。

「あああ……」

聖なる武器『エルフの弓』の装備条件は『心の美しさ』だ。インディラ僧侶とはいえ……大僧正候補とはいえ……自覚はあるのだ。自分が、結構、汚れた性格である事は……

腹立ちまぎれに周囲の敵を吹き飛ばしながら、武闘僧は叫んだ。

「アジャン！私じゃ、無理です！セレスかシャオロンじゃなきゃ、この弓は使えません！」

「おまえ、弓は使えんのか？」

「弓も人並み以上の腕前ですよ！私はたいていの武器を使えます！でも、この弓は駄目なんです！」

「役立たずめ」
カチンときて、ナーダは更に声を荒げた。
「なら、あなたが使ってみなさいよ！品性下劣で傲慢なあなたじゃ、絶対、この弓、引けるものですか！」
「試す気はない」
傭兵はきっぱりと言った。
「弓は不得手だ」
「あなただって役立たずじゃないですか！」
と、しばらくは、ぎゃいのぎゃいのと言い争う余裕があったのだが……
地上から手が届かない距離にある異次元通路を閉じられない為、敵が無尽蔵にわいてくるのだ。
さすがに、多勢に無勢、二人は追い込まれていった。
敵はアジャンの大剣にかかっている魔法が解けるのを待っているのだ。その効果時間（アジャン本人は知っているのだろうが）を知らないナーダは、たまらなく不安だった。
霊媒能力の素質あふれるアジャンは、魔族にとって理想的な器らしい。アジャンは、もう何度も、その体を魔族に盗まれかけている。カルヴェルから買った魔法の効果が無くなれば、おそらく、大魔王四天王イグアスも、アジャンを欲するだろう。
イグアスは微笑を浮かべ、謁見の館の前にたたずんでいる。持久戦の末に手に入る獲物――珍奇な魔法と極上の器を、楽しみに待っているのだろう。
「このままじゃ、ラチがあかん。セレスを連れて来い」
「それって……ハーレムへ行けって事ですか？」
「浄化魔法を唱えて建物の結界を壊せ。出口ができりゃ、奴等も勝手に出てくるだろう。俺はイグアスをひきつけて、適当にここで暴れてる。行って来い」
「……お一人で大丈夫ですか？」
「大丈夫だ」

赤毛の傭兵はにやにや笑っている。
「大剣（あいぼう）が一緒だからな」
アジャンは大剣を嬉々として振り回していた。自分の身長ほどもある大剣を軽々と扱い、多くの敵を一度に薙ぎ払い、間合いの内に入って来る敵は体術（蹴り・肘打ち）で牽制してから距離をとりなおし、大剣で葬っていた。
片手剣『聖王の剣』を装備したアジャンも一流の戦士ではあったが……大剣を装備したアジャンはまさに水を得た魚、一騎当千の戦士だ。
ナーダは戦いながら呪文を詠唱した。少しでも敵を減らしておけばアジャンの負担が軽くなるし、芋洗いのごとく敵がいては、ハーレムへの道が開けない。
武闘僧は手で印を結び、自らの体を中心に、高位の浄化魔法を放った。周囲の魔は一掃された……が、イグアスだけは別だった。薄く笑いながら佇んでいる。人間ごときの浄化魔法など痛くもないのか……結界にこもっているのか……
ともかくも、これでアジャンの周囲は人間だけとなった。しばらくの間は。じきに魔族も召喚されるだろうが。
「すぐに戻りますから、魔に捕まらないでくださいよ」
「ほざけ！」
ナーダは額の汗をぬぐって、走り出した。
高位の浄化魔法を使用するのは、今日、これで二度目。最近、精神力が強くなってきたとはいえ、寝不足の体には少々、負担がかかってきている。
（そろそろ魔法は温存した方がよさそうですね）
魔族の手下になっている人間達を、拳と蹴りで倒し、道を急ぐ。
前方に、獣人のごとき毛むくじゃらな者達がいた。魔人の一団だ。
（えっと……）
ナーダは腰の『虹の小剣』を意識した。
（抜ける……絶対、抜ける！抜けなければ、おかしい！）

己を奮い立たせ、聖なる武器を鞘から抜く。すれ違いざまにナーダが振るった『虹の小剣』に刻まれ、魔族は消滅した。

（良かった……）

武闘僧は魔族を倒した事よりも、むしろ『虹の小剣』に使用を許可された事を喜んでいた。さきほど『エルフの弓』にすげなくされただけに、喜びはひとしおだった。

『虹の小剣』の装備条件は『美貌』。容姿には自信があった。しかし、世の中には、隆々たる筋肉を野暮ったく感じ、綺麗に剃りあげた頭を笑いものにするような、そんな歪んだ審美感の者もいる。インディラ寺院における美が、『エルフの弓』に受け入れられた事がナーダには嬉しかった。

（魔族退治にはできるだけ『虹の小剣』でやりましょう。魔法は必要最低限に）

ナーダは、ハーレムの建物の脇で足を止め、呪文を詠唱した。

彼を追って来た敵は、ナーダに刃を向け、襲いかかろうとした。が、届かない。武闘僧と魔人達の間には、目に見えない障壁があった。結界魔法だ。カルヴェルからもらった（貸し付けられた？）腕輪を、左腕の神聖防具の装甲の先――左手首に装備している今、結界維持能力が高まり、わずかな魔力で結界が張れるのだ。

邪魔者が来られないようにしてから、ナーダは次の呪文を唱えた。浄化魔法でハーレムを覆っている結界を払うのだ。

その少し前……

ハーレムの中では……

敵が新たに開いた異次元通路からは、魔法生物が送り込まれるようになっていた。魔法生物には、聖なる武器も、浄化魔法も効果がない。体のどこかに埋め込まれた魔法の核である呪具を破壊するより他には、セレス達には、敵を倒す手立てはなかった。

人型の魔法生物であれば呪具は失いづらい箇所……頭部・腹部

に埋め込まれている可能性が高いのだが……

今回の相手は、液体状の生物、木人、岩石人間などだ。外見からでは何処に呪具が入っているのか、さっぱりわからない。体を切り刻んで、体ごと呪具を破壊するしかない。

東国の少年シャオロンは、三人の中で最も敏捷性が高いのだが……慣れぬドレスのせいで、せっかくの持ち味を活かしきれないでいた。裾を踏みそうになってつんのめったり、広がるドレスのせいで間合いを勘違いしてしまったりしている。

素早さという利点が無くなると、少年は非力さばかりが目立つようになる。

又、周囲を囲まれた乱戦となると、竜巻も放てなくなる。精神集中の間がとれないからだ。

岩石人間の突進を身をかわして避け、木人の枝を長く鋭い爪で払う。

そこへ、岩の塊が迫る。避けきれず、爪をもってその突撃を受け止めた。

弾かれこそしなかったが、押し返せない。シャオロンの両腕がぶるぶると震える。靴の裏が床を擦り、体がズルズルと後退していく。

シャオロンは歯を食いしばり、敵を睨んだ。このまま負けてなるまい！気力だけは負けていなかった。が、敵の力を前になすすべもない。

横から別の岩石人間が、木人が迫って来る。

逃げようがなかった。

と、その時……

人の頭ほどもある巨大な卍手裏剣が飛来する。横あいの敵を吹き飛ばし、卍手裏剣は岩石人間の頭部と思われる箇所に突き刺さった。魔法生物である敵は痛みを感じはしないが、その衝撃によろめき、シャオロンより離れる。

シャオロンの体がふわりと浮く。背から抱きかかえられて宙を飛んでいるのだと気づき、少年は驚いた。

「阿呆！力勝負など百年早いわ！」
忍者ジライだ。ジライに抱えられ、運ばれているのだ。忍者はセレスの背後を守っていたはずなのに、いつの間に？
「敵と距離をとれ。乱戦こそ竜巻が有効。背後は守ってやるゆえ、うちまくれ」
『勇者の剣』を振るう、踊り子姿のセレス。その背を狙う魔法生物めがけ、忍者はシャオロンを抱えたまま忍術を放った。
「忍法、かまいたちの術！」
風の魔法で切り刻まれた敵が、呪具を失って消滅する。
「時間を稼ぐ。竜巻を」
セレスのそばにシャオロンを下ろすと、忍者は手で印を結び、気を高めた。
「忍法、火焔の術！」
忍者ジライの周囲から炎が広がり、津波のごとく敵に襲いかかる。火に包まれ、木人達が滅びゆく。液体状の魔法生物も、体内の水を失い、消滅する。けれども、猛き炎は魔を葬るだけでは飽き足らず、壁を、床を、天井を飲み込み、業火で鮮やかに彩ろうとする。
「シャオロン！」
「あ！はい！」
忍者の求めに応え、少年は『龍の爪』より竜巻と聖なる水を生み出した。水を撒き散らす竜巻が、炎を鎮め、岩石人間達の体を崩していく。
「竜巻を放ち続けよ」
そう言うや、忍者は跳躍していた。天井からとびかかって来た敵を『ムラクモ』で斬り裂いたのだ。着地と同時に、懐から取り出した球形の金属の塊のからくりを外し、人の頭ほどもある巨大な卍手裏剣を作り出していた。それをセレスの横から迫っていた敵に投げつけ吹き飛ばしていた。とどまる事を知らず、セレスとシャオロンの周囲を守っている。
シャオロンは……

純粋に感動した。
アジャンやナーダとは全く違うタイプだが……
忍者ジライも、又、超一流の戦士なのだ。
（すごいです、ジライさん！）
少年の胸が熱くなった。忍者への憎悪・嫉妬・反発心が、瞬く間に消えていく。代わって芽生えた感情は、セレス、アジャン、ナーダに対して抱いているものと同じ――――敬意だった。
（オレもがんばります！）
シャオロンは『龍の爪』を振るった。不思議な事に、武器が軽く感じられた。今まで以上に、武器が手に馴染んでいるのだ。
劣等感の塊となって、己の感情に溺れすぎていた。自己嫌悪も忍者への憎悪や嫉妬も、不要な感情だったのだ。
『敵は魔族』。
龍と心を一つにし、魔を切り裂く為に、爪を借りているのだ。
穢れたものを切り裂く事こそ、龍の望み。
戦場においては、その思いに応える事……それだけを心掛ければいいのだ。

《女勇者様、結界が解けましたよ》
声ならざる声が届いた。
セレスは魔法生物を葬る手を止めずに、心の中に響く魔法使いナーダの心話に耳を傾けた。
《そこから東にまっすぐ。二番目の通路を曲がった先が出口です。その先に、あなた達のお仲間の武闘僧が居ます。彼が結界を解いてくれたのですね》
「ナーダが？」
《急いだ方がいいですよ。結界を修復しようとしている魔力も感じます。お仲間は対抗して浄化魔法を唱えていますけれどね。時間がかかるほど、お仲間の負担が大きくなります。彼の魔力がつきる前

に、駆けつけてあげなさい》

「わかりました！」

二人の会話は聞こえていたようで、振り返るとシャオロンとジライが頷きを返す。

通路を埋め尽くす魔法生物めがけ、ジライは忍法を放とうと印を結んだ。

が……

それよりも早く、周囲に、火焔、雷、氷、水の魔法が荒れ狂う。

それは正確に魔法生物だけを攻撃し、敵の消滅と共に効力を失う。

神秘の力は周囲に被害を及ぼす前に、敵の消滅と同時に全て消え失せる。

魔法使いナーダの攻撃だ。セレス達の行く手を塞ぐ敵を、一瞬で、片付けてくれたのだ。

セレスは地下室の方角に頭を下げ、通路を走った。

シャオロンも元気よく（目に見えぬ）魔法使いにお辞儀をし、セレスを追いかける。

ジライはチッと舌うちを漏らした。魔法使いの技量が高すぎる。カルヴェル級だ。相手が敵に回らなかったのは幸運ではあったが、得体のしれない者の助力ほど気味の悪いものはない。

（あの男……もしや……）

ある考えがジライの内に生まれた。

（伝説となっているお二人と共にあった、もう一人か？あの風体（ふうてい）はナニだが、そうとしか考えられぬ。いや、そう考えたい。カルヴェル様に匹敵する輩がゴロゴロしておるとは思いたくないしのう）

ジライは己の考えを口にはせず、ただ二人の仲間の後を追った。

光が見える……

通路の先に、外界へと通じる穴が開いている。

セレスの顔に笑みが浮かんだ。

（助けに来てくれたのね、ナーダ……それに、アジャン。アジャンも居るわ）

大魔王討伐に旅立った時から、従者としてついて来てくれた二人。

何度となく喧嘩し、何度となく口論し、何度となく侮辱し合い……

……

それでも、少しづつ認め合い、互いの距離を縮めてきた仲間。

（ありがとう……）

セレスの目に、現実に重なるように二人が見えた。

しかめっつらで呪文を詠唱しているナーダ。

その緑の瞳を輝かせ、遊びに興じる子供のように大剣を振り回すアジャン。彼の大剣に触れると、魔族があえなく消滅してゆく。大剣に祝福の魔法がかかっているのだ。

生き生きと大剣を振るうアジャンのそばに……

底のない沼のような……

どこまでも黒く暗い者が居た……

『サリエル』、『ウズベル』によく似ていたが、それらよりももっと深い闇、果てしなく黒い、醜く歪んだもの……

小物魔族ではない。

大魔王四天王の一人だ。

それがアジャンを見ている。

舌なめずりするかのように……

「駄目！」

そう叫んだ瞬間！

『勇者の剣』がまばゆく輝き、瞬く間にセレスの姿は廊下から消えていた。

「セレス様！」

二人の従者は必死に周囲を見渡した。が、何処にも女勇者の姿が見当たらない。その気配すらない。

《彼女は外ですよ》
魔法使いナーダの思念が届く。
《『勇者の剣』の移動魔法で、赤毛の傭兵のそばに送られてしまいました》
「え？」
「何じゃと？」
《女勇者様が共感能力者（エンパシー）のせいですよ》
「あの、共感能力者（エンパシー）って？」
《他人の強い感情、思いに触れた事がきっかけで、その者の心を我がことのように感じる能力です。記憶や人格さえ共有する事もあります。彼女は精神が高揚した時に、ふとしたはずみにその能力を発動させてしまうようですね。多分、仲間と共感しかけて、そのそばの大魔王四天王イグアスの心に触れてしまったんだと思います。魔族の精神のあまりのおぞましさに嫌悪した女勇者様の気持ちに応え、『勇者の剣』が討つべき敵の所に彼女を送ったのではないかと》
「大魔王四天王じゃと？」
忍者ジライは拳をぎゅっと握りしめた。
「急ぐぞ、シャオロン！セレス様をお助けするのだ！」
「はい、ジライさん！」
二人の従者は、廊下をひた走った。

彷徨う光　5話

「うぉ！」
赤毛の傭兵は目を丸くした。
突如、宙からセレスが現れたのにも驚いた。が、何といっても驚いたのはその恰好だ。
金の髪を振り乱す彼女は、白い胸当てと腰から下だけの白のドレスを着ていた。踊り子の衣装だ。右手の『勇者の剣』と背の鞘が不似合いな、色っぽい姿だ。胸当ては少々小さすぎて彼女の豊満な胸を隠しきれず、腰までスリットの入ったドレスは太ももさえ露わにしている。きゅっとしまったウエスト、かわいらしいおへそもセクシーだ。ビーズや宝石を埋め込んだ衣装が夕日を浴びてきらきらと煌めくのもなまめかしい。
「色っぽいじゃねえか、お姫様」
にやにやと笑いながら、傭兵は周囲の敵を薙ぎ払った。
「クソ生意気な女も、そういう女っぽい恰好をするとかわいく見えるよな、いつもそれでいろよ」
「馬鹿言わないでよ！」
セレスも、又、『勇者の剣』を振るって近くの敵を葬ってゆく。
「その恰好でお願いするんなら、仕方ねえ。面倒だが、処女のおまえさんでも抱いてやってもいいぜ」
「冗談！」
「ま、冗談だが」
そこで、アジャンは顔をひきしめた。
「無事か？」
「ええ」
「シャオロン達は？」
「無事よ。二人とも、まだハーレムだと思う。私だけ、何でかわからないけど、魔法で飛ばされちゃったみたい」

「来たんなら、働け」
と、言ってアジャンは顎をしゃくり、謁見の館の前の人物を指した。
「あれを殺れば終わる。あいつは、大魔王四天王の一人イグアスだ。得手は魔法らしい。気をつけろ」
「スルタンが？」
セレスはジッと、謁見の館前の人物を見つめた。その者は、この国の若き国王、セレスの血族に間違いは無かった。

ハーレムの建物から第三庭園に飛び出した忍者ジライ。その背に武闘僧が鋭く尋ねる。
「セレスとシャオロンは？」
「シャオロンは後に続いておる。セレス様は『勇者の剣』の移動魔法にて、アジャンの元へ飛ばされた」
そう言い捨て、ジライは走り去ろうとした。周囲に敵が迫っている。『ムラクモ』を抜き、ジライは敵に向かった。が、進めない。目に見えない障壁にぶつかり、背から勢いよく地面に倒れる。
「大丈夫ですか、ジライさん！」
後宮から飛び出して来た少女が、慌ててジライの元へ駆け寄る。腰までの長い黒髪を背に垂らし、少女らしいほのかに膨らんだ（ように見える）胸を金の胸当てで隠し、腰から下は黒と金のドレスに包んでいる。けれども、そんな愛らしい姿だというのに……その両腕は長く鋭い爪武器を装備しているのだ。
「大事ないが、結界がある。前に進めん」と、ジライ。
「結界ですか？　ナーダ様、オレ達の前に結界があるみたいなんですけど……ナーダ様？」
武闘僧ナーダは……
顔を青ざめ……
ぶるぶると震える指で、少女にしか見えない人物を指さしていた。

「シャオロン……？」
「はい？」
不思議そうに少女が首を傾げる。白粉をつけ、つぶらな瞳をアイシャドーで飾り、口には紅すら差している。
武闘僧ナーダは吐き気を堪え、口元に手を当てて、シャオロンから視線をそらした。女性が苦手なせいで、甘ったるい化粧の匂いも嫌いなのだ。涙目となりながらも、どうにか仲間に答える。
「……目の前の結界は私が張ったものです」
「何？　すぐに解け。我はセレス様の元へ向かう」
「……ちょっと待ってください」
なるべくシャオロンを見ないようにして、武闘僧は『エルフの弓』と『エルフの矢筒』を少年に手渡した。
「あそこ……見えます？」
武闘僧が指さした上空を、二人の仲間が見つめる。ジライには夕闇が見えるばかりだった。が、シャオロンの目には、ゆらゆらと揺れ動く、異次元に通じる道が見えた。
「あの次元通路ですか？」
「む？」
「あ。ほら、ジライさん、時々、あの辺、ゆらゆらと空気が揺れてるでしょ？わかりますか？」
「むむ……言われてみれば、時折」
「あそこに異次元通路があるんです。通路を通って敵が、この世に出現する時、空気が揺らぐんですよ」
「ほう」
「……つまり、アレを壊せないせいで、この周辺に敵があふれているのですよ」と、ナーダ。
三人の眼の前に魔人が迫る。しかし、ナーダの結界に阻まれ、三人を攻撃できない。悔しそうに暴れる魔人が、庭園を埋め尽くすように数多くいる。
「まずは……あの通路を壊さない事には……セレスやアジャンに近

づけません。結界の上部を解きますから、『エルフの弓』であれを……」

「ナーダ様？お加減が？」

武闘僧の身を案じ、少女の姿のシャオロンが近寄ってくる。化粧の匂いをプンプンさせて。

「だ～～！大丈夫です！それよりも、シャオロン、早く、あれを壊してください！」

「え、でも……」

少年は困ったように『エルフの弓』の弦に触れる。ナーダの時とは異なり、弦がたわむ。『エルフの弓』の装備条件は『心の美しさ』。純粋な性格のシャオロンは『エルフの弓』に使用を許されたのだ。けれども……

「すみません！　オレ、弓、使った事ないんです！」

「は？」

「ごめんなさい！」

深々とシャオロンが頭を下げる。

ナーダはめまいを感じた。幾ら心が美しくても、弓が使えないのでは話にならない。こうなったら、結界を解いて、力押しでセレスの元へ辿り着くしかない。セレスに『エルフの弓』を届け、次元通路を封じてもらうのだ。

武闘僧がそう思った時、黒装束に覆面の忍者がシャオロンから弓と矢筒を取り上げていた。

「貸せ。我が撃つ」

「ジライ！　無理ですよ、あなたじゃ！」

と、ナーダに言われ、忍者はムッと眉をしかめた。

「弓ぐらい嗜む」

「そうではなく！この弓の装備条件が……あ？」

武闘僧の目の前で……

忍者は矢筒から矢を抜き、弓につがえ、弦の強さを確かめるべく試し引きをし始めたのだ。

「あれ？」
武闘僧の顔からサーッと血の気が引く。
ジライは、もと大魔王教徒で、セレスの命を狙っていたもと暗殺者だ。仲間となった後も、セレス以外の人間に対しては非常に尊大で、情の欠片も示さず……昨夜などは、己の正体を隠す為に、躊躇なくナーダを殺そうとしたのだ。
なのに……
何で、『エルフの弓』が使えるのだ！
「結界を解け」
「……嘘でしょ」
「ナーダ」
「何で善の僧侶の私が駄目で、暗黒の教えに忠実なあなたがぁぁぁ！　絶対、おかしいですっ！　間違ってますっ！」
「やかましいわ！　結界を解け！」
ジライと睨み合うこと数秒……
武闘僧の行き場のない怒りは、吐き気の前に敗北した。
「……ジライ、あなた、お化粧してますね？」
「先ほどまで女装していた、ハーレムに居たので、な」
それがどうした？　という態度の忍者に、武闘僧はかぶりを振った。
「……上空だけ結界を解きます。次元通路の消滅後に、下部の結界も解きますから、シャオロン、竜巻で雑魚達の始末をお願いします」
「わかりました！」
元気よく答える少女の姿の少年。
きりきろと弓を引き絞っているジライ。
二人を溜息まじりに見つめた後、武闘僧は結界の一部を解き、忍者に合図を送った。
狙いあやまたずに、聖なる矢が異次元通路を射抜いた。

上空を見つめ、赤毛の戦士がにやりと笑う。
「次元通路が消えた。シャオロンがやってくれたんだな」
金の髪とドレスを翻し、セレスも笑みを見せる。
「じゃあ、これ以上、敵は増えないのね」
浄化しても浄化しても、次々に現れる敵にセレスも辟易としていた。早くスルタンの体を盗んだ魔族を倒したいのに、近寄る事すらできないのだ。
「あいつが、次の次元通路を開いたら、又、敵が増えるだろうが……」
アジャンが口元をにやりと歪める。
「今、それどころじゃないみたいだ、あいつ」
「え？」
スルタンの表情は氷のごとく凍てついている。黒の気を炎のごとく立ち上らせながら、アジャンやセレスを睨んでいるのだ。
時々、その周囲に、バチバチッ！　と雷が走る。スルタンは微動だにせず、しかし、不快そうに佇んでいた。
その様子を目の端で見つめていたセレスは、西から迫る突風を感じた。
魔を切り裂く、浄化の竜巻。
それが無数に迫って来る。
赤毛の傭兵がセレスを背後に庇い、大剣を構えた。竜巻は刃に分断され、形を保てず、消滅する。
アジャンが大剣で竜巻を斬っているのだ。強い気をぶつける事で、竜巻すら退けてしまうとは……その非常識さに半ば呆れながら、セレスは相手の技量に見惚れてしまった。
そこへ……
「セレス様――！」
「セレス様」
「セレス、アジャン、無事ですか？」

仲間が現れる。
セレスは仲間達と共に周囲の敵を一掃し、イグアスに笑みを見せた。
「おまえの運命はここまでよ」
威厳あふれる女勇者の顔だ。
「トゥルク王宮をのっとり、数多くの魔人を飼い、おまえは何をたくらんでいたの？」
「実権回復……の、ようだ」
イグアスが低く、くっくっくっと笑う。
「この体は若くして王となったが、名ばかりの王だった。実権はハーレムの生母が握っていた。宦官どもを従え、皇太后は国を好きなように動かしていた。この体は、高官どもにいいように操られる無力なスルタン……何一つ思い通りにはできず、生母のご機嫌を伺うだけの毎日だった」
歪んだ魔族の顔が、気弱な若者の顔となる。
「余は恐ろしかったのだ。母上を怒らせれば、余は暗殺される。後宮には余の息子が四人居る。スルタンは余でなくとも良いのだ。母の言いなりになる、人形であれば誰でも……。だから……」
再びスルタンの顔が歪む。
「魔族の申し出を受けたのだ！　三か月前の事だ！　魔の能力を得た余には誰も逆らえぬ。母上は狂い死にさせた。息子達も殺した。うるさい高官どもは魔族の餌とした。余を馬鹿にしていたハーレムの女達は黒人宦官どもに凌辱させた。もはや我が王国に、余に逆らう者はいない。余は王となったのだ。この世にただ一人のトゥルクの王に！」
そこで、また、スルタンは己に自信を持てない若者の顔となった。
「だから……余は……恩に報いねばならぬ。余を真のトゥルク王にしてくだすった、ケルベゾールド様の為に……トゥルクを魔王の都にせねば……ケルベゾールド様をお迎えするのだ……王宮中を血と恐怖で彩り、女勇者を殺して、その屍を大魔王の玉座のマットとす

るのだ！」
　スルタンが、ゲラゲラと甲高い声で笑う。イグアスに体を奪われ、若きスルタンは発狂していたのだ。
　血族の哀れな姿に胸を痛め、セレスはその体を操る者を睨んだ。
「それで、あなたの狙いは何なの、イグアス！」
「余の願いは大魔王様の御力を世界に広める事……。そして、サリエルやウズベルを倒したあなたを殺す事。あなたを殺せば、ゼグノスではなく、余が大魔王様の一の家来となる。この地の王を誘惑し、罠をはりめぐらし、あなたの到来を余は待ち構えていた」
「イグアス！」
　大魔王四天王の周囲に雷が走る。悔しそうに唇を噛みしめ、魔の者はセレスを睨んだ。
「だが、あなたの方が策士だった……なにゆえ、余の計画に気づいた？」
「え？」
「我が結界に出口はないが、入口はある……あなたは、その事を知っていたのだな？この体との会見の途中、あなたは移動魔法で自ら、ハーレムに渡った。我が支配領域に」
「！」
　ハーレムの結界の内に、セレスが自ら移動魔法で移動した？
　セレスは眉をしかめた。イグアスがそう思い込んでいるのだとしたら……イグアスではない誰が？　何の為に女勇者一行をハーレムに送ったのだろう？
「ハーレム内には強い洗脳魔法をかけてあった。あそこに居れば、誰も絶え間ない頭痛に苛まれ、半日も経ずして正気を失う。女は夢の中を彷徨い、男はふとしたきっかけで欲望の虜となる。計画とは異なってしまったが、黒人や従者どもにきさまを犯させ、『勇者の剣』との絆を断ちきるのも面白い。そう思ったのだが……」
　イグアスの両眼が赤く輝く。
「……六人目が居るとはな」

「……」

「きさま、何時の間に、魔法使いを仲間に加えた？ハーレムできさまを洗脳から守り、今も絶え間なく余に魔法攻撃をしかけて余の邪魔をしているのは誰だ？」

（魔法使いナーダ様だ……）

魔法使いはハーレムでセレスを助けだだけではなく、ハーレムの結界を閉じさせないよう穴を維持しつつ、イグアスに魔法攻撃を仕掛けて魔族の能力を狭めてくれているのだ。そうでなければ……イグアスは次々に異次元通路を開いて配下の者を呼び寄せるなり、攻撃魔法を連発するなりして、セレス達を苦しめていただろう。

（感謝します、魔法使いナーダ様）

セレスはキッ！と魔族を睨んだ。

「六人目が誰であろうと、関係ないわ！　あなたはここで消滅するのだから！」

そう叫んでから、セレスは仲間へと顔を向けた。

「ナーダ、聖なる結界を！」

「……もう張ってるんですがね」

武闘僧は渋い顔をしていた。

「この魔族の魔力は途方もなく大きく、私ごときの結界では魔法を完全に封じられません。移動系の魔法だけは意地でも封じますが……それ以外は野放しになりそうです」

「逃げられなければ、それでいいわ」

本来、聖なる結界の内では、誰も魔法を使えないはずなのだ。ナーダの結界がどれほどの距離のものかはセレスにはわからなかった。が、明らかにその内にいるはずのイグアスは魔法使いナーダの攻撃魔法に魔法で対抗している。魔力許容量が桁外れに大きいのだろう。

「覚悟なさい！」

セレスは『勇者の剣』を構え、イグアス目指して走った。その体を両断すべく。魔族に体を奪われたスルタンを殺して……その魂を解放してやるのだ。

イグアスがニィィっと薄く笑う。
セレスの振り下ろした刃は、イグアスを真っ二つに斬り裂いた。
斬り裂いたのだが……
身二つに分けられたイグアスが何人も何人も現れる。切り裂かれた断面を見せながら、魔族が歪んだ笑みを見せる。
驚いて、セレスは辺りを見回した。
「分身魔法？」
「違います、幻術です！　セレス、惑わされないで！」
そう武闘僧は叫んだ。しかし、セレスにはどれが本体だかわからなかった。
赤毛の傭兵が大剣で、東国の少年が爪で、忍者が刀で、イグアスの幻を斬り捨てる。しかし、斬るそばから、新たな幻が生まれ、一行に襲いかかってくる。
イグアスは、その右手より、炎、氷、雷を放つ。
シャオロンとジライが聖なる武器がもたらす聖水で炎を鎮めた。しかし、氷や雷に対処する術はない。素早い身のこなしで避けるしかなかった。
激しい魔法攻撃の中、アジャンのみが自由に動けた。大剣にかけたカルヴェルから与えられた魔法には、魔法障壁の機能もある。イグアスの攻撃は、彼に触れる事かなわず四散していく。アジャンは緑の炯眼で、周囲を見渡した。最も邪悪なものを見つけ出し、とどめを刺すべく。
武闘僧はセレスの側に居た。両腕、両脚の神聖防具に助力を乞い、盾となって魔法より女勇者を守る。敵の魔力が強大すぎて完全には防ぎきれなかったものの、神獣の装甲のおかげで、武闘僧が浅い裂傷、軽い火傷を負う程度ですんでいる。女勇者は傷一つついていない。
「見えた！」
イグアスの分身の中から最も闇の気が濃いものを見つけ出し、アジャンが大剣を振るった。剣はイグアスを両断したかに見えた。が

……真っ直ぐに振り下ろした大剣が大きく左にそれる。イグアスをかする事さえできなかった。

「何？」

赤毛の戦士は、もう一度、大剣を振るった。しかし、イグアスに触れる寸前、刃の向きが変わってしまう。大剣は、むなしく宙だけを斬った。

「何だ、これは！」

「空間歪曲の魔法です。自分の周囲の空間を歪め、刃が届かないようにしているのです」と、ナーダ。

「じゃ、とどめがさせねえじゃねえか！」

「刺させてあげますよ。その代り、機会（チャンス）は一回限りですからね！」

武闘僧は手で何種も印を結び、長い呪文を詠唱し始める。

アジャンはナーダの前へと走り、彼を狙う魔法を全て大剣で受け止める。

セレスが、シャオロンが、ジライが、イグアス本体に攻撃をしかける。注意を武闘僧から少しでもそらす為に。聖なる武器、竜巻、忍法で、大魔王四天王に挑む。

ナーダの顔は蝋のように白くなり、眉間には深い皺が寄る。相当、肉体的負担がかかっているようだ。呪文を詠唱する声にも張りがない。けれども、武闘僧は気力をふりしぼり、聖なる結界の上に更なる結界を張った。

雷のごとく天を突き破り、四つの光の柱が地面を貫く。イグアスの周囲を四つの光の柱が囲った。柱は神々しい神の御力に満ちていた。柱に挟まれた魔は、神族の影響下に置かれる。その動きを奪われ、その能力を著しく制限されるのだ。

結界魔法が不得手なナーダには使えないはずの、高位の結界魔法だ。魔法道具（マジック・アイテム）の腕輪の能力に頼り、無理な魔法を放ったのだ。

数多くいたイグアスの分身が消えうせる。分身を保つ能力さえ、魔族にはもはやないのだ。

アジャンとセレスが、ほぼ同時にイグアスめがけ大剣を振るった。

アジャンの大剣に身を切り裂かれ、『勇者の剣』にその魂を砕かれ……

大魔王四天王イグアスは消滅した。

一握の塩を残して……

彷徨う光　6話

「大丈夫、ナーダ？」
貧血を起こして蹲っていた武闘僧は、微かに顔をあげた。
セレスとシャオロンが心配して駆け寄って来ている。気持ちは嬉しかったが、二人とも目に悪い踊り子姿だ。意図的に二人から顔をそむけ、ナーダは立ち上がろうとした。
「……大丈夫です」
「けど、ナーダ様、真っ青ですよ」
シャオロンの手を拒み、武闘僧がよろよろと立ち上がる。
「全然、平気です。でも……魔法は開店休業しますね。ご用の方は、二、三日後にお申し付けください」
「そういうふざけた口がたたけるのなら、大丈夫だな」
アジャンが意地の悪い笑みを浮かべ、近寄って来る。
「クソ坊主、肩ぐらい貸してやろうか？」
「……遠慮させていただきます」
どうせならジライの肩を借りたい、と、思ったモノの、忍者の姿は見当たらない。
「おや、ジライは？」
「ジライさん、情報収集に行きました。ハーレム以外の建物の中を調べてくるそうです」と、シャオロン。
「あ！そうだわ！」
そこで、セレスがポンと手を叩く。
「ナーダ、歩ける？歩けるようなら、みんなでハーレムに行きましょう」
「げっ」
武闘僧と赤毛の傭兵の顔が青ざめる。
「この馬鹿女！男の俺達がハーレムなんぞに行けるわきゃねえだろうが！」と、アジャン。

「大丈夫よ、今は。宦官警備兵は全員浄化しちゃたし、女性達はお部屋に籠られているもの。ね、行きましょ、地下室にお師匠様のお知り合いの、すごい魔法使い様がいらっしゃるの。その方が、私達をイグアスから守ってくださったのよ。ねえ、ナーダ、聞いて。その方ね、あなたと同じ名前なのよ。しかも、話し方までよく似ていて、声までちょっと似ているの。それで……」

一行がハーレムの地下室の扉を開いた時……

地上に太陽が落ちたかのような、光の洪水が扉の内より迸った。

眩しさに目を細めつつ、セレスとシャオロンが急ぎ地下室へと飛び込む。その後を武闘僧と赤毛の戦士が続いた。

螺旋階段から地下を見下ろすと……

魔法陣からまばゆい光があふれているのが見えた。その中央に居る者の、床まで届きそうな黒の長髪、黒の魔法使いのローブが共に揺れ動いている。

やがて、光が陰り出す。

又、眩しさに慣れてきた事もあって、目を開く事ができた。

「！」

武闘僧は愕然とし、手すりから身を乗り出して、魔法陣の人物を見つめた。その者の顔は……彼がこの世で唯一慕っていた女性に、あまりにも酷似していたのだ。

（母上！）

ほんの一瞬だけ……魔法陣の者とナーダの視線が合う。魔法使いは涼しげな笑みを浮かべた。その表情は……二十数年前に亡くなった母が、幼い自分によく見せてくれた顔……

光が消える。

魔法陣と、そこにたたずんでいた人物を連れて。

後には、ただ……

岩で造られた堅固な地下室が残る。

そして、螺旋階段の下には、長い白髪白髭の黒のローブの魔術師がたたずんでいた。
「お師匠様！」
セレスが螺旋階段を駆け下りる。
「お師匠様、どうして、ここに？」
「おお、セレスよ、なかなかそそる恰好をしておるのう」
老魔術師は、いつものニコニコ顔だ。
「その踊り子スタイルでセクシー・ポーズをとると得点が高いぞ。どうじゃ、試してみんか？」
「ふざけないでください！お師匠様、魔法使いのナーダ様は一体、どうされたのですか？」
「あやつか？あやつは……」
カルヴェルは首を傾け、背後を見やった。そこに、ほんの少し前まで魔法陣があったのだ。
「次の場所に行った。おそらくは、シルクドの砂漠のド真ん中じゃ。わしの計算が正しければ、そこに三日ほど居るはず」
「……旅立たれてしまったのですか」
セレスはがっくりと肩を落とした。
「まだ何もお伝えしていないのに……感謝の気持ちも何も……イグアスを倒せたのは、あのお方のご助力があったからなのに」
「礼の言葉なら、わしから伝えておこう」
手にしていた杖に体重を預け、魔術師は明るく笑った。
「あやつも、若い者達と話せて楽しかったと言うておったわ。ここ数年、話相手はわししか居らんかったからのう、わしもあやつも、お互い、顔も見飽きとる」
ホホホホホと笑ってから、老魔術師は視線を螺旋階段の武闘僧に向けた。睨むようにカルヴェルを見つめるその顔は、物問いたげだった。
「ナーダよ、こっちに来い。無茶な魔法を使って、魔力が枯渇しておるのだろ？元気の出る薬をやるから、ちょいと話し相手になれ」

糸目を細め、武闘僧が階段を下りてゆく。
「セレスよ。間もなく、ハーレムのおなご達も日常に戻る。ここは再び、男子禁制の館になるのじゃ。騒ぎが起きる前に、赤毛の傭兵達をここより連れ出せ」
「あ、はい」
「ナーダはわしが後で移動魔法で送ってやるわ。ついでにおぬしとシャオロンの服と鎧も、の。わしは、まだ、ここで、ちとやる事があるでの。わしらに構わず、はよ出て行け」
「はあ」
「何、ふぬけた顔をしておる？はっきり言って、これからが大変なのじゃぞ。スルタンや大臣達を失ったこの国を、女勇者たるおまえが導いてやらねばならぬ。生き残りの官僚を集め、スルタンの血筋の者を探させ、国を建てなおす手助けをするのじゃ」
「う！……頑張ります」
「ま、そういう七面倒くさい事は、武闘僧が得意じゃ。後でいっぱい知恵をつけてもらえ。今はジライと合流し、王宮の現状を把握しておくべきじゃな」
「わかりました、それでは、お師匠様……又」
ぺこりと頭を下げ、女勇者は東国の少年と赤毛の傭兵を伴って地下室を後にしようとした。
「おお、そうじゃ、赤毛の傭兵」
声をかけられた男が肩越しに振り返る。
「今日は、たまたまうまくいった。魔法使いナーダ殿の助けもあったからの。じゃが、次も、うまくいくとは限らぬ。忘れるな、おぬしは魔に好かれやすい。魔除けのペンダント、つけるべき時につけねば、魔に捕まるぞ」
赤毛の傭兵は肩をすくめ、薄く笑う。
「つける時ぁ、つけるさ」
それだけ言って、セレス達が廊下に出てから、赤毛の傭兵は扉を閉ざした。

地下室には、武闘僧ナーダと大魔術師カルヴェルだけが残った。
二人っきりになってから、ようやく、ナーダは口を開いた。
「……どういう事なのですか？」
「どうとは？」と、カルヴェル。
「魔法使いの装束でしたが、先程の方は伯父上でしょ？伯父上は魔法陣に封印されているのですか？私の部下のガルバは、大魔王との戦いの後、伯父上はインディラ寺院での生活を厭い出奔したのだと……そう信じているようですが？」
「伯父上？僧侶ナラカか？ナラカが何処に居る？」
魔術師はおどけて、肩をすくめた。
「ここに先程まで居ったのは『魔法使いナーダ』殿じゃ。本人がそう名乗っておったからの」
「カルヴェル様！」
「何ゆえ、昔、あやつが姿を消したのか知りたくば、本人に問え」
にんまりと老魔術師が笑う。
「おぬしとて、前に言うていたではないか、『出奔についての弁解は本人から聞きたい』と」
「しかし……」
武闘僧は視線を床に落とした。
「伯父上が魔族の罠に囚われ、戻りたくても戻れない状態にあったのなら……私の憎悪はお門違いもはなはだしいです。ずっと母の死の遠因は伯父上にあるとお怨みしていた私は……」
次期大僧正候補の地位を捨て、たった一人の身内である妹も忠義の部下のガルバも捨てて、出奔した僧侶ナラカ。
大魔王との戦いで殉死したと世に信じられていた伯父が生きていると知った時……ナーダは伯父を憎んだのだった。ナラカが大僧正候補として寺院で確たる地位に就いていてくれれば、父も母を軽んじる事はできなかったであろうし、第二夫人アヌラーダやその一族が母や自分の命を狙う愚挙に出なかったろう。
そう思い続けていたのだが……

カルヴェルはホホホと愉快そうに笑った。
「あやつは不良坊主じゃったからなあ。『大魔王を倒したら、自由を求め、出奔します』が口癖であったし。あやつが行方不明となれば、皆、逃げたなと思うのも道理」
「……カルヴェル様」
「言っておくが、あの長髪も魔術師のローブも変装ではない。坊主のくせに、髪は伸ばすわ、僧衣は着ないわ、攻撃魔法は覚えるわ、酒は飲むわ、女は抱くわ、博打好きだわの、見事なまでの破戒坊主じゃった。色の道ではわしやランツと違って一般人じゃったが……あれは、わしとランツのかわいい義弟じゃ。今も、その気持ちに変わりはない」
「……何があったのです？大魔王を倒した時に、何かあったのでしょう？」
カルヴェルはゆっくりとかぶりを振った。
「直接、本人に聞け。もう間もなく、あやつの封印は解ける」
「何時です？」
「セレスがケルベゾールドを倒した時に」
ナーダは息をのんだ。
「……そういう封印なのですか」
「うむ」
老人は遠方をみやるように顔を上げた。
「三十五年待った。もう間もなくじゃ。あやつが解放されるのは……」
せつなそうな表情は、すぐに消えてしまう。いつものニコニコ笑いとなり、カルヴェルは右の二の指を口の前に立てた。
「良いか、ナーダ。ナラカが封印されておる事は、ガルバには内緒じゃぞ。知ればあの忠義者、まったく関係ないというのに、お守りできなかったのは自分の咎（とが）とか何とかわめいて自害しようとするに決まっておる。わしはナラカから真実をガルバには教えるなと頼まれていてな、それで、ナラカは自由を求め出奔したのだとガルバに

嘘を教えたのだ」
「……」
「あの頃、ガルバには、インディラに愛妻と三つになる息子がいた。それゆえ、出奔するのなら何処までもついてゆくと言うていたガルバを置いて、ナラカは一人で出奔したのだと……もっともらしい理由まで添えてあやつを騙したのだ」
「……」
「つまり、おぬしが、ナラカに不当な憎悪を抱いたのは、わしのせいなのじゃ。ま、その事で幾らわしを責めてもかまわぬ。しかし、ガルバには」
「カルヴェル様」
武闘僧は左手をスッとあげて、神獣の装甲と手首の間につけた腕輪を老人に見せた。
「……この腕輪、とても役に立ちました。結界魔法が不得手な私が、神の御力に満ちた高位の結界が張れたのですから」
右の指先で腕輪を弾き、ナーダはにっこりと笑う。
「口止め料として、これ、貰っておきますね」
「……」
しばしの無言の後、カルヴェルは体を揺すってホホホと愉快そうに笑った。
「さすがナラカの甥じゃ！性格の悪いところが、ほんにそっくりじゃ。おぬし、見た目はムサイがの」
「ほっといてください」
「よい、よい。それはやる。ナラカの甥ならば、義兄のわしの甥でもある。かわゆい甥にプレゼントする」
「気持ち悪い事を言わないでください。あなたが伯父だなんて、まっぴらです」
「ホホホ。おぬし、だいぶ元気になったようじゃの？そろそろセレスの元へ戻るか？」
「あ、戻る前に二つ質問があります」

「何じゃ？ナラカのことはもう教えぬぞ」
「いえ、その事ではありません。一つ目は、アジャンにカルヴェル様が与えた祝福の魔法についてです。アレ、どれぐらい効果がもつものなのですか？」
「半日じゃ。その魔法を十回分、あやつにやった」
「半日ですか……たいしたものですね。私の魔法では五分ぐらいしかもたないのに」
「わしは大魔法使いじゃからの」
えっへんと、老人が胸をそらせる。
「ついでに教えてください。アジャン、その魔法を、何を代償にして買ったのですか？」
「『聖王の剣』を貸した時と同じよ。わしが願った時、あやつはわしの願いを何でも聞く。そう約束した。これで二度、わしは好きな時にあやつを思うままに使える」
カルヴェルとそんな約束をするなんて、アジャンも命知らずな……と、ナーダは思った。
次に、武闘僧は、二の指と三の指を立てて、真剣な表情となってカルヴェルに顔を近づけた。
「お尋ねしたいことの二つ目は……非常に重要な事です。おちゃらけないで正直にお答えください」
「わかった」
「カルヴェル様、ご所有の聖なる武器……『エルフの弓』をご使用になれますか？」
老人はあっ軽く、ニカッと笑った。
「使えるわけなかろうが、このわしが！あの弓の装備条件は『心の美しさ』じゃぞ」
ナーダの顔がパッと明るくなる。
「そ――ですよね、カルヴェル様は、かなり邪(よこしま)な性格なさってますものねえ」
「おぬしには負けるがの」

「いえいえ、私ごとき若輩、カルヴェル様の足元にも及びません」
あ～良かったと、胸を撫で下ろす武闘僧。ほんの少し、カルヴェルの事が好きになりそうな気分だった。
「聖なる武器の持ち手選びの基準は、人間の基準からかけ離れることがままある。ジライは、まあ、表面こそ邪悪じゃが、その実、中身はからっぽ。それ故、『エルフの弓』に嫌われずにすんだのじゃ」
「カルヴェル様……」
「『エルフの弓』が厭うのは、他を押し退けて己の利を求める心よ。競争心、羨望、憎悪、支配欲、など。他人を陥れる陰謀が大好きなわしやおぬしでは、とてもあの弓、持てんな」
武闘僧はジロッと魔術師を睨んだ。
「私が『エルフの弓』を使うジライにショックを受けたのをご存じって事は……覗いてましたね？私達の戦いを、千里眼で見てたんでしょ？」
「覗くも何も」
カルヴェルはホホホと笑う。
「今回の戦い、お膳立てしたのはわしじゃ」
「は？」
「セレスをシャオロンやジライと共にハーレムに送り込んだのはわしなのよ」
「何ですって？」
「今日の昼間、ナラカ……おっと、そうではない、魔法使いナーダ殿がハーレムに現れる事はわかっておった。セレス達をハーレムに送り込んで、魔法使いナーダ殿と合流させておけば、セレスを救出する為、おぬしがハーレムのイグアスの結界を壊すであろうと読んでな」
「……」
「外から結界を壊してもらえれば、ハーレムより魔法使いナーダ殿も外に向けて魔法が放てるようになる。セレスに加勢ができる。そう思っての策じゃ」

「……」

「魔法使いナーダ殿が居らねば、今日、おぬし達は負けていた。イグアスの魔力は……このわしには及ばぬが、この世界の基準でいけば最高位じゃ。魔法使いナーダ殿がイグアスの内面に魔法攻撃を仕掛け続けて助力せねば、強力な魔法を連発され、おぬし達は全滅しておった。仲良くあの世に逝っていたであろうよ」

ホホホと笑う老人を、武闘僧が糸目で睨む。

「……魔法使いナーダ殿の役目を、カルヴェル様がなさっても良かったのではありませんか？」

「わしは駄目じゃ」

チッ、チッ、チッと、老人は指を振る。

「今のわしは隠居の身。面倒な戦闘など、馬鹿らしくやっておれんわい」

声を上げて笑う老人を見つめ、ナーダは溜息をついた。

不真面目で、物事をおもしろおかしくしようとする老人。その本心が何処にあるのか探るのは、砂地に水を流すような……むなしい行動のように思われた。

王宮中に死骸があふれていた。

国の要であった大臣はほぼ全員、高官達も半数近く殺され、魔に堕ちていた宦官達は全員死亡。ハーレムには国を継ぐべき王子も居ない。散々たる有様だった。

セレス達は国内から人材を探し、隣国の同じ宗教圏ペリシャと宮廷魔術師の心話を通じて密に連絡を取り合った。慣れぬ習慣、慣れぬ宗教にとまどいながらも、セレスは祖母の国の為に懸命に働き、従者達も協力した。あの赤毛の傭兵ですら既知の傭兵長を通じて軍隊の建て直しの指揮にあたったのだ（それ以外は手伝おうともしなかったが）。

一ヶ月半後、先々代のスルタンの血を引く王子をペリシャより迎

え、（後宮で生き残っていた）トゥルクの姫と娶わせる事で、国の体裁を整える手筈は整った。後は仮即位式（本当の即位式はスルタンの喪の明けた一年後に行われる）を見届けるだけとなった。

「このペリシャ語の式辞を暗記しろって言うの？」

セレスは真っ青になった。

「共通語じゃだめ？じゃなかったら、トゥルク語。トゥルク語なら、どうにか……」

「いけません」

武闘僧はにべもない。

「本来、ペリシャ教圏で女性が人前に立つ事はないのです。その禁忌をあえて犯し、新政府は国を救った女勇者を式典に招いてくださるんですよ。トゥルクでは公式の場ではペリシャ語が公用語なのですから、しっかり覚えてください」

「無理よ～」

ナーダの渡した紙には、びっしりとペリシャ語が書かれていた。千文字はありそうだ。

「ならば、セレス様、私めが代わりに述べましょう」

いつものように背後から忍者が話しかけてくる。しかし、今日ばかりは殴る気になれない。忍者の声がコロッと女性のものに変わったからだ。

「頑張って練習してみたの。ちょっと聞き苦しいけど、どうかしら、シャオロン？」

「わ！すごいです、ジライさん！セレス様の声に聞こえます！風邪気味っぽいけど！」と、シャオロン。

「ね、セレス様、私が隠れてこれを読むわ。私、忍者ですもの、ペリシャ語もペラペラよ。セレス様は式典でしゃべるフリだけしてくださればいいわ」

「あああ、ありがとう……ジライ。今日は、あなたの背中に天

使の羽が見えるわ……」
セレスは目をきらきらと輝かせ、しっかりと忍者の両手を握り締めた。
しかし……
「駄目に決まってるでしょ！ズルはいけません、セレス！勇者のくせに、そんな不誠実な態度が許されるとでも思ってるのですか！」
「ナーダの意地悪！」
「そうよ、そうよ、横暴だわ、ナーダ！」
「気持ち悪いから、セレスの声真似はやめてください、ジライ！式典まで後二日！セレス、しっかりペリシャ語のお勉強をしましょうね！私が見てあげます！」

泣き言を漏らすセレス。
怒鳴るナーダ。
茶々を入れて勉強を妨げるジライ。
何でも感心するシャオロン。
彼等から離れ、赤毛の傭兵は昼寝をしていた。大剣をすぐそばの壁にたてかけ、魔除けのペンダントをつけて眠る彼は穏やかな顔をしていた。その腰には、魔法を封じた小瓶入りの袋がぶら下がっていた。

彷徨う光　6話（後書き）

『彷徨う光』　完。

次回は『新盆』。舞台はトゥルク。
邪法を用いる新盆をしたいと願うジライ。セレスは彼の為にナーダに……

新盆

「ナーダ、『にいぼん』って知ってる？」

宿屋の部屋を訪ねて来たセレスがそう質問した時、武闘僧は女勇者が何を聞きたいのかわからなかった。

「『にいぼん』……ですか？」

「ジャポネの宗教儀式なんですって。ジャポネには死者の霊を祭る盆という祭が夏にあって、亡くなって一年経っていない霊にとっての最初の『ぼん』を『にいぼん』って言うんでしょ？」

「ああ」

ようやくナーダは合点がいった。

「新盆ですね」

「知ってるのね？」

「ええ。ジャポネのインディラ教独特の宗教儀式です。盆も新盆も、ジャポネの風習にインディラ教が結びついて生まれた儀式ですが、それが何か？」

「実はね……」

セレスは口元に手をあてて、言いにくそうに言った。

「ジライが『にいぼん』をしたいって言ってきてね……」

「ジライが？」

武闘僧は眉をしかめた。もと大魔王教徒で未だに暗黒系の性格の彼がそんな殊勝なことを願うとは意外だったが……

「別に構わないのではありませんか。昨年末、彼の周囲ではかなりの部下が亡くなったようですし、死者を祭りたいという気持ちは大切にしてあげねば」

「でもね、『にいぼん』の為には……」

セレスはため息をついた。

「生贄の供物が必要だし、邪法を使わなければいけないらしいのよ。それも、相当、危険な邪法を。しくじると、ジライの命が無いんですって」
「……」
武闘僧は目を点にした。
「ジライ、何をしたいんですって？」
「だから、『にいぼん』よ」
「……私が知ってる新盆とはかなり違うようですが」
「でも、忍の里の『にいぼん』は昔からそうみたいよ。幽霊を体に招いて対話して心残りを無くしてあげるらしいんだけど、その時、生者側の精神力が弱いと、幽霊に体を乗っ取られたり、あの世に連れて行かれたりするんですって」
「はあ」
「私としては、ジライには、もう二度と邪法を使ってもらいたくないんだけど……インディラでも、彼、夏に『にいぼん』をしたいって言ってたの。亡くなった部下達に何かしてあげたいって気持ちを無下にしたくないわ」
「セレス……」
女勇者は遠い目をしていた。ジライの部下の一人を、セレスはその手にかけていた。未熟な腕は大剣を止める事ができず……ジライを庇い、身を投げ出した彼を……殺す事になってしまったのだ。
「だから、私の目の届く所でならやってもいいって許可したの。そしたら、この宿屋で、早速、準備始めちゃって……駄目とは言えないんだけど……やっぱり不安なの。ナーダ、悪いんだけど、力を貸してくれないかしら？」

「おまえが立ち会うだと？」
セレスから与えられた部屋から覗かせたのは、いつもの黒装束に覆面姿だった。

ジライは眉をしかめ、廊下にたたずむ大男をねめつけた。
「きさまが居ては、霊は安らまぬ。邪魔じゃ」
その声には内心の思いが率直に表れていた。迷惑だ、とっとと帰れ、と。
武闘僧ナーダは肩をすくめた。
「ご不快でしょうが、聞き入れていただきます。セレスの命令ですから」
「セレス様の？」
「あなたの用いる術が暴走したり、あなたに危険が及びそうになったら、私に止めて欲しいとの事でした。私、浄化魔法は得意ですから」
「そんな事はありえぬ」
ジライは語気を強めた。
「確かに、しくじれば術師の命が危うくなる魔法じゃとはお教えした。だが、我は、毎年、一人で新盆をしておる。一度も危うくなったことなどないわ。この程度の術に飲まれる我ではない。失敗などありえぬ」
「あなたが自信をもってそう言い切るのなら、失敗は万に一つもありえないのでしょう。でも、それでも、セレスは心配なのですよ。万分の一でもあなたが危険に陥るかもしれない状況が嫌なのですよ」
「……」
「大切な仲間を失いたくない、失う危険があるのに見過ごしておけない……何もしなければ、仲間に何かあった時、絶対、後悔する……そう思ってるんですよ、セレスは」
「……」
「あなたは、セレスにとって大事な仲間なのです。部屋の隅に、私、置いてくださいませんか？」
「仲間……か」
ジライはため息をついた。
「セレス様のご命令では仕方が無い……入れ」

室内に入ると、むっとする熱気に体は包まれた。
窓を締め切り、香を焚き、祭壇を設けた部屋の北側に蝋燭を何十本も立っているのだ。蝋燭の炎がチラチラと揺れている。蝋燭の周囲に飛び散っている赤い染みは、多分、生贄の獣の血だろう。部屋の隅に引き裂かれた鶏の肉があった。
扉に鍵をかけてから、ジライは覆面を外した。白髪、白い肌の、整った顔が現れる。
武闘僧はドキッとした。
二ヶ月近く前に、武闘僧は忍者ジライと肌を重ねていた。ナーダが恐喝して関係を強要したのだ。セレスにさえ内緒にしている素顔を見てしまった事をゆすりのネタに、沈黙を守る代償としてその体を求めたのだが……
単なる遊びのつもりだった。ジライの見目が非常に好みだったので、ちょっとつまみぐいをしようとしただけだったのだ。
しかし……
一度抱いただけで、ナーダは本気になっていた。セレス至上主義で他の者など視界に入れようともしない忍者を……愛してしまったのである。
鋭い目がジロリと睨むように、ナーダを見つめてくる。
「スケベ心を起こすでないぞ」
「は？」
心を見透かされたかと一瞬うろたえた。が、何故、そんな事をジライが言い出したのかはすぐにわかった。
額当て、手甲、脚甲を取り、ジライは帯を外し、忍者装束を脱ぎ始めたのである。胴衣まで脱ぎ始めた時、ナーダは慌てて視線を外した。
しかし、目の端には、白い素肌がチラチラ見える。雪のように白いはずの肌に、何か赤黒いものが付着している事も気になった。
ナーダは口元に手をあて、朱色になった顔を隠しながら、ジライに視線を向けた。

ジライの体は血文字で彩られていた。胸と腹、左腕に、魔族の言葉が記されている。ナーダの来訪前に既に裸となって血文字を書いていたのだろう。

「……『贄』に『憑代』？それに、『犠牲』、『対話』……？」

「おまえ、読めるのか？」

「ええ、まあ。邪法を誘う魔の文字に関しては、昔、勉強しました。魔族の文字が読めなければ効果的な浄化魔法を選べませんから」

「書けるか？」

「書いた事はありません。忌むべき文字なので形にしてはならぬと教えられましたので」

ジライはフンと鼻を鳴らした。

「……ならば、いた仕方ない。我が書いてやる。脱げ」

「は？」

「服を脱げ」

「し、しかし……」

ジライが上目遣いに睨みつけてくる。長い前髪に顔の右半分が隠れているので、見えるのは左目だけだが。

「さっさとしろ。蝋燭の炎が消えてしまう」

「はあ、でも」

「下帯を残し、後は全て脱ぐのじゃ」

下着はつけていて良いと言われ、ナーダはホッと安堵の息を漏らした。全てを脱いでしまっては、己の欲望を抑えきれなくなりそうだったからだ。既にジライは袴も足袋も外し、股間をジャポネ風の下帯で隠しているだけだ。その細い体、ひきしまった腹筋、形のよい臀部が視界に入るだけでむらむらしてくるのだ。

ナーダが僧衣を脱ぐと、ジライはクナイで己の左手の甲を浅く切って、じんわりとにじみ出た血で右の二の指をぬらし、ナーダの胸から腹部にかけて大きく文字を書いた。

「『無縁』……『禁止』？」

「新盆には無縁な人間ゆえ、手出しするなと書いた。良いか、きさ

まは部屋の端に座り、決して口を開くな。我(われ)が良いと言うまで、立つ事、話す事を、禁じる。下手に動くと、きさま、その身、八つ裂きにされるぞ。今日、招く者の中にはコゲラも居る」

「コゲラ？」

「きさまがシャイナで殺した侏儒じゃ」

「侏儒？　ああ、あの……」

武闘僧は不快そうに顔をしかめた。

「私を殺そうとして、仲間を巻き添えにした卑劣な奴ですね」

「声を出すなよ。出せば、きさま、コゲラの霊に殺される。それに、多分、マツムシも、きさまを怨んでいる。きさまに半殺しにされねば、あやつ、魔に捕まることもなかったであろうしな」

「はあ。黙っているようにします。ですが、ジライ、あなたの様子が明らかにおかしくなったら、私、浄化魔法で霊を祓ってしまいますからね」

「蝋燭が消えるまでは何もするな。蝋燭が全て消えた後、我が我でなければ好きにしてよいが、それまでは黙ってみておれ」

そこで言葉を区切り、ジライはキッ！と武闘僧を睨んだ。

「邪魔は許さぬ。新盆は、死者となった者と対話して心残りを尋ねる儀式。生者が霊の執着を解いてやらねば、霊は地上に縛られたままだ。輪廻の輪にも入れず、何時までも地上を彷徨わねばならぬ」

「ジライ……」

武闘僧は胸を熱くした。勇者の従者となった今も暗黒系な性格ではあったが、彼は彼なりに部下を大切に思っていたのだ。部下の魂の安らぎを願っているのだ、と。

しかし……

「霊など、とっとと祓うに限る。死んだ者どもに、いつまでも、ぞろぞろ、ぞろぞろ、つきまわとわれるなぞ、うっとうしい事、この上ないからな」

と、ジライはジライらしい身勝手な発言をして、祭壇の前で座禅を組んだ。

ナーダはむなしい幻影を抱いた自分をなじる思いで、額に手をあて、床の上にあぐらをかいた。

ジライは、ぶつぶつと小声で何かをつぶやき続けていた。

それは、時には呪文、時には支離滅裂な言葉、時には目に見えぬ誰かとの会話だった。

「駄目じゃ……それは聞けぬ。他の願いは？……良かろう。いや、それは、ならぬ。ああ、ジャコウ？　ジャコウならば、おまえのそばに居るはず。手を伸ばせ。共に輪廻の輪に入れ……。待て、アカハナ。くだらぬ事を申すな。何？そんな事で良いのか？……ふざけるな。我はまだそちらへ行く気はない」

時々、ジライの周辺が白く発光したり、蝋燭が一本だけ風も無いのに消えたり、ガタガタと扉が揺れたりした。

口にしている名から察するに、ジライが招いている霊の数は二十を超えているようだ。つまり、ジライの周囲は幽霊だらけなのだ。

シャーマン体質のアジャンや霊感体質のシャオロンがこの場に居たら、楽しくないものが見えすぎて背筋が凍る思いをすることだろう。

だが、ナーダは（僧侶のくせに）霊視能力はなかったので、ただ、ジライの横顔だけを見つめていた。

ジライは瞳を半ば閉じ、頭を垂れ、床を見つめ続けていた。ほぼ無表情だった。が、時々、苦笑を浮かべたり、恫喝するように顔をしかめたりする。

「ガンケイ……あいかわらず面白い男じゃの。良かろう、届けてやる……。願いはないのか、チドリ？　ならば、何故、惑う？……さようか？……承知した」

ジライが口にする名に、ナーダは耳を傾けていた。ナーダにとって好敵手であった人物の名前があがるのを待っていたのだ。縁のあったあの巨人がジライの元を訪れたら、手ぐらい合わせようと思っ

ていた。
けれども、ジライは最後までその名を口にしなかった。
気を高めて宙で印を切り、ジライは立ち上がって、残っていた蝋燭を一本、一本、吹き消していった。
全ての蝋燭を消し終えた後、
「解呪」
と、言って、まず己の体に右手をあてて気の力で血文字を消し去る。同じ事をナーダに対してもやってから、口元に微かに笑みを刻んだ。
「もうしゃべってもよいぞ」
「新盆の儀式は終わったのですか？」
「霊との対話は終わった。後は、霊の心残りをかなえてやって、新盆は成る。三日のうちに、おなごを八人抱き、男三人と寝て、手紙を五通書き、シャイナ式とエウロペ式のディナー・フルコースを食さねばならぬ」
「ディナーですか？妙な心残りですねえ」
「殺人やらの物騒な願いを退けていったら、こうなった。あまり気は進まぬが、いた仕方ない」
ああああああ、面倒だ、面倒だと、ぶつぶつ文句を言いつつ、ジライは部屋の隅に置いてあった革袋を手に取り変装用の衣装を選び始めた。
「……ジライ、ちょっとお尋ねしたいのですが」
「何じゃ？」
「さっき、ダイダラという方は来なかったのですか？」
「うむ」
「何故です？」
「新盆に生者の元を訪れるのは、死んでも死にきれず迷っている者だけだ。ダイダラは心残りなく死んだのであろう」
「……心残りなく、ですか」
「あれは我に仕えるのを無上の喜びとしておった。己が命を犠牲に

して我を守って死んだのじゃ。大往生に決まっておる。あの阿呆にしては上出来な死に方だ」

と、言ってジライが高らかに笑いだした時には、ジライに熱をあげているナーダもさすがにムッとした。

「死者を冒涜する発言は慎みなさい」

「む？」

「あなたの発言は、恩人に対して、あまりにも不敬です。あの方は立派な方でした。私などよりもよほど徳が高く、強く、純粋で、心の美しい方でした」

「ほう」

ジライは口元に歪んだ笑みを浮かべていた。

「知らなんだわ。忍の里一番の阿呆で、一番の醜男を、大僧正候補様はえらく高く買ってくださっておったのか。里の子供にすら石もて追われていた、あの阿呆をなあ」

ジライが声をあげて笑う。

武闘僧の顔は怒りに赤く染まった。

「……あなた、人間を何だと思ってるのですか？　知恵遅れの方を嘲笑して楽しいのですか？」

「嘲笑しようがしまいが、我の勝手じゃ」

「あなたという方は……」

ナーダは拳を握り締めた。

「今だから言いますけど……私、あの方のことで、腸（はらわた）が煮えくり返る思いというものを体験しました」

「ふん？」

「角（つの）と舌です！あの方の額には外科手術の痕がありました。何で角なんか付けたのです？　それに何故、舌を抜いたのですか？」

「……」

「異形と生まれただけで、それだけで重荷を背負っているであろうに……それを更に貶めるような……あんな非道なことを！許せません！悪意の所業に、私は嫌悪しました！」

「……」
「ジライ、あなたがやったのですか？」
「なに？」
「あんなにあなたを慕っていた部下に、あなたが、あの非道な手術をしたのですか？　だとしたら、私は」
「ふざけるな！」
ジライの語気は、いつになく荒い。ナーダの声を掻き消すほどに。
「我がやっただと？」
ナーダを見つめるジライの顔が、ひどく歪む。顔にも血がのぼっている。
「我には醜きものを、より醜くする趣味などないわ！」
そう叫んでから、わなわなと唇を震わせる、ジライ……
怒りを隠そうともしていない……
これほど感情を露にしている彼を見るのは初めてだった。
「ジライ……」
巨人のあの姿に、ジライも、又、憤りを感じていたのだ。
同じ里に暮らし、上役として目をかけていた相手のことだ。おそらく、ナーダよりも、ずっと……あの外科手術に対して怒りを感じていたのだろう。
「すみません……」
ナーダは深々と頭を下げた。
「……あなたが、あんな事をするはずありませんでした。あなたが部下に対して非道だったのなら、命懸けであなたを守ろうとする部下も居なかったでしょうし……少し、考えればわかることでした。失礼な事を言ってしまいました。本当に、申し訳ありません」
「……」
ジライはぷいと顔をそむけた。
「許してください。浅慮でした」
「……角をつけたのは頭（かしら）の弟。単眼の異形をより強そうにし、よりおぞましく見せる為に、手術を行った上で邪法にて角を定着させて

いた」
「そんな理由で……？」
「顔を見せるだけで畏怖を誘えるのだ。武器といえば武器」
「……本人、納得の上での手術なのですか？」
「阿呆。上忍が下忍の許可などとるものか」
「そんな非道な！」
「非道？　仁愛あふれるお方にはさぞ気に入らぬ事であろうが、下忍とはそういうものなのだ」
　ジライの口には歪んだ笑みが浮かんでいた。ナーダへの嘲笑というよりも、それは、諦念からくる笑みに思われた。
「……では、舌は？」
「別の上忍が抜かせた。ダイダラは、あの顔や体格に似合わぬ甲高い声をしておっての、耳障りじゃと言われてやられた」
「……」
「それに、ダイダラは撤収の時、シンガリを任される事が多かった。敵に捕らわれたときに余計な事をしゃべらせぬ為もあって舌を抜いたのだろう」
「……」
「必要ないのに、な。あの阿呆の頭は鼻たれ小僧なみじゃった。戦えと言われて戦うだけ。作戦内容など理解できぬ馬鹿じゃった。敵に情報を漏らしたくても漏らせなかったろうに……」
　ナーダは気づいた。
　ダイダラの話をする時、ジライの声は感情的になる。上忍の非道に憤り、阿呆と罵りながら思い出を語る時、やさしい声となっている。
　ジライは……やはり、ジライなりに部下に情をかけていたのだ。新盆をしたいと願ったのも、部下の魂を救いたかったからなのだ。面倒くさがったり、霊にまとわりつかれるのは迷惑と言っているのは、彼なりの照れ隠しなのだろう。
「ダイダラはもはや輪廻の輪に入っておると思うが、まあ、せっか

くだ。おまえがあの阿呆を気に入ったのなら、新盆のこの時期、あやつの供養はおまえがやれ」
「え？」
「我はこれより三日忙しくなる。アレの為に何かしてやる暇も、その気もない」
「ジライ……」
「里の者は誰一人、あやつの為に、花すら捧げぬだろう。おまえがやりたくば、おまえの教えに従って、アレを供養してもいい」
「あ……」
ナーダはジライを見つめた。常と変わらぬ冷たい顔をしていたが……非情な瞳はそこにはなかった。
「ありがとうございます……大切なあなたの部下のご供養を任せていただけるなんて嬉しいです」
「ふん」
「私、ダイダラという方を尊敬しているんです。人の為に己を犠牲としながら、心に一点の曇りもなく亡くなるなんて、普通の人間にはできません。あの方に出会い、ほんの少しですが、私、人間的に成長できました。あの方と出会えて、本当に良かったと思っています」
「あの阿呆が良いとは……大僧正候補様はゲテモノ趣味じゃな」
言い回しは最悪で言葉だけだと侮辱のようにしか思えないところだったが、ジライの口元は綻んでいたのだ。嬉しそうに。
ジライにとっても、あの単眼の鬼は特別な存在だったのだろう。
「皆が皆、ダイダラのように大人しゅう我から離れてくれればよいのじゃが」
ジライは西国風衣装を選び、それに袖を通しつつ文句を言う。
「……健啖家の部下なぞ持つものではないな。フル・コースなぞ食ったら吐くに決まっておる」
「……あなた、食が細そうですものね」
ジライはジロッと横目で武闘僧を睨んだ。

「我はこれから花街へ行って、今日中に、三、四人、女を抱いてくる。その後はエウロペ風の豪勢な夕食でもとるつもりだ。おまえ、どうする？」
「え？」
「監視役として娼舘まで共に来るか？」
「う！」
ナーダは顔をひきつらせた。
「娼館はちょっと……マズいかと。ご存知でしょうが、僧侶には女犯（にょぼん）というものがありましてね、疑わしい行動をとっただけで、かなりマズいことに」
「ふん」
ジライは鼻で笑った。
「この三日の間に、霊の願いを全て聞き届けられねば、我は霊に八つ裂きにされるであろうなあ。そうなっても良いのだな、監視役？」
「う……」
苦虫を噛み潰したような顔で、しばし沈黙を守ってから、武闘僧は拳を握りしめ、一歩、前へと踏み出した。
「わかりました！同道します！たとえどんな破廉恥な地であろうとも、共にゆきます。我が信心をもって、試練を乗り越えてみせましょう！」
「……阿呆」
思いつめた顔で迫ってくる大男に、ジライは冷たく言った。
「からかっただけじゃ。本気にするな、うっとうしい」
「え？」
「きさまのようなむくつけき大男がそばにおったら、犯るものも犯れぬわ。絶対、ついて来るなよ」
「からかった……ですって？」
ジライはフフンと笑う。
「我は三日、この町に滞在する。三日のうちに、豪勢な食事を二度とり、手紙を五通書き、おなごを八人抱き、男三人と寝る。セレス

様には、我に構わず先に進まれるよう、お伝えしてくれ」
　娼館に行った事実がナーダの敵対者の耳に入ったら、ろくでもない噂を散々流されるだろう。僧籍を廃される危機に陥るかもしれない。それを踏まえた上で、仲間として共に行くと言ったのに……からかっただけ？
　不満そうに顔をしかめた大男を見つめ……ジライは笑った。
　皮肉な笑みでもなく、先ほどのやさしそうな笑みとも違う……なまめかしい笑みだった。
　その肉感的な笑みを目にしたナーダは、ぞくっとした。
　微笑んだまま彼の方からナーダに近づき、長身の相手の頬に両手をそえる。
「聞こえなかったか？我は男三人と寝ると言ったのだ」
「え？」
　そのままぐいっとひっぱり、長身の相手の上体を曲げさせ、互いの顔を近づける。
　ナーダのすぐそばに白く妖しい顔があった。
「誰と寝てもよいのだ」
「え？」
「アオザが、我（われ）が熱く喘ぐ顔を見たいそうじゃ……」
「ジライ……」
「この体を男に預けねばならないな……」
　ナーダは自分の顔がどんどん真っ赤になっていくのを感じていた。
　胸が高鳴り、息が苦しくなる。
　ジライが顔を近づけてくる……
　もはや、唇と唇が重なりそうなほど近い……
　息が触れ合っている……
「私と……寝てくださるんですか？」
　ジライは微笑んだ、淫靡に……
　見るものを蕩けさせるような妖しい笑みだった……
　しかし……

頬をおさえていた手を離し、ジライはふいっと離れてしまう。
「おまえとは寝ない」
「え？」
そう言ってから、クククと低く笑い始める。武闘僧をその目に映しつつ。
「何で……？」
「深い理由はない。じゃが、寝る理由もなかろう？」
ジライは口元をおさえ、声をあげて笑い出した。
楽しそうに……
体まで揺すって……
（完全に遊ばれてる……）
ナーダの気持ちを知った上で、からかったのだ……
ナーダはがっくりと肩を落とした。セレス至上主義で女王様趣味のジライと共寝する機会など……やはり、もう二度とないのか、と。
もともとあの夜、一晩限りの約束だったし……
ひとしきり笑った後も、ジライは無言のままナーダを見つめていた。意味ありげに、口元を微かに歪ませたまま。
「ジライ……どうかしました？」
「どうとは？」
「何かおっしゃりたそうな顔をしてますが？」
「気のせいであろう……それよりも、きさま、いつまで裸でおる気じゃ？ここを片付けたら、我は出かけるぞ。服を着ろ」

祭壇が無くなり、蝋燭や香炉が片付けられ、床も拭かれると、そこで大魔王教の儀式が行われていた痕跡は全て無くなった。
ただの部屋に戻ったそこには、香の甘い香りだけが漂っていた。

新盆（後書き）

『新盆』　完。

次回は『シャオロン奮戦す　ＶＳジライ』。
舞台はエーゲラ。この二人、少し仲良くなったみたいです。

シャオロン奮戦す　ＶＳジライ

「シャオロン、おまえを見込んで頼みがある。しばらくの間、我が荷物、預かってもらえまいか？」
「いいですよ」
東国の少年シャオロンは、忍者ジライの頼みごとを二つ返事で引き受けた。
このところ街に泊まる度に、シャオロンは赤毛の傭兵アジャンの荷物を預かっていた。アジャンは夜になると、『いろいろ忙しくてな』と、にやにや笑いながら出かけてしまう。宿に泊まらない傭兵の荷物をずっと預かってきたのだ。それにジライの分が加わったとしても困りはしない。
それに……
シャオロンは、セレスも、アジャンも、ナーダも、カルヴェルも尊敬していた。が、最近、ジライをも尊敬し、好意を抱くようになっていた。
ジライが仲間に加わった当初は、さすがに（セレスがいくら許そうが）警戒心は消えなかった。セレスの命を狙っていたジライを許せない気持ちも強かった。
しかし、トゥルクの王宮で、ジライに命を救われ、彼のすごい忍の技を見せられてから、シャオロンは考えを改めた。
忍者を仲間と認め、自分より戦士としての力量が高い彼を、尊敬に値する人物として認識するようになったのだ。
「荷を増やさないようにはしていたのだが……」
覆面に黒装束の男は背の革袋を下ろし、シャオロンが今宵泊まる部屋の隅の壁にたてかけた。
「いろいろと入用のものがあっての……捨てるわけにもいかぬし」
「部屋の隅に置いておけばいいんでしょ？」
「うむ」

「そのまま置いて行っちゃっていいですよ」
「すまんな」
「いいえ」
シャオロンはにっこりと微笑んだ。
「又、情報収集に行かれるんですか？」
「うむ。諜報活動が忍の本分ゆえ。この国の水面下で、敵が、少々、気になる動きをしておる。長くかかるやもしれぬ。出立の時までに我(われ)が戻らぬ時には、その荷物をおまえの馬で運んで欲しいのだが」
「わかりました」
「くれぐれも袋の口を開けぬように」
「開けませんよ、やだなあ、オレ、そんな事」
「無理に開けると、爆発するゆえ」
「……ばくはつぅ？」
「うむ」
シャオロンは硬直し、忍者を見つめた。覆面から覗く目はいたって真面目で、冗談を言っているようには見えない。
「絶対、火のそばには置くな。多少の衝撃であれば問題ないが、袋が破けぬように注意せよ」
「破けると……爆発するんですか？」
「そういう事もある」
「……」
忍者はジーッとシャオロンの顔を見つめ、ポツリと呟いた。
「めんどうなら、捨てて行って良いぞ」
「いえ、そんな！」
シャオロンはグッと拳を握り締めた。
「人からお預かりしたものを捨てるだなんて！ありえません！そんな失礼なことは、ぜったいにしませんよ！」
「……処分に困ったときは水の中に捨てよ。ただし、飲用水系は避けるように。毒が流れ出るゆえ」
「だから、捨てませんって！」

ジライの目がスッと細くなる。まるで微笑むかのように。
「おまえがそれを捨てても怨まぬ。気楽に預かってくれ」
そう言い残し、忍者の姿が部屋から消えてしまう。
シャオロンは周囲を見渡し……部屋の隅の革袋に目を留めた。
多少埃をかぶった、ごく普通の荷物入れにしか見えないが……あれは爆発危険物なのだ。

荷物が爆発しないかと冷や冷やしながら一晩を過ごし……ろくに眠れぬままシャオロンは朝を迎えた。

「今日中に、アフロディまで移動しましょう」
食堂で、セレスがエーゲラの首都までの移動を提案すると、すぐに武闘僧が頷きを返した。
「そうですね。エーゲラの治安はたいへんよく、大規模な魔族戦もないような状態ではありますが、裏で魔や大魔王教徒が暗躍してる可能性も否定できません。アフロディには王宮もインディラ寺院支部もありますしね、情報収集の為にも早く移動した方がいいでしょう」
「俺も移動に賛成だ」
と、あくびまじりに言ったのは、赤毛の傭兵だった。
「首都に近すぎる娼館は駄目だ。外れが多すぎる。ババアばっかで、昨日はさんざんだった。しかも、ガバガバ、ユルユル、ダレダレのオマ●コばっかり。で、ちゃっかり、金はとるんだから、恐れ入る。エーゲラ人の、投げやりな商売と、面(つら)の皮の厚さは、大陸一だぜ」
「下品ね！」
「アジャン、怒って暴れてないでしょうね？　勇者の従者の評判を堕とす真似だけは、絶対にやめてくださいよ」
と、セレスもナーダも不機嫌そうだったが……

全員の意見は今日中に出立でまとまっている。
今日中に出立？
シャオロンは慌てた。
「でも、セレス様、ジライさんが情報収集に出かけたまま戻ってきてません！」
「ジライ？　ジライなら大丈夫。先に行っても、後から追いついてくるわよ」
「いえ、そうじゃなくって」
シャオロンはごくっと唾を飲み込んだ。
「実は、オレ、ジライさんの荷物を……」

「で、これがその爆発危険物なのか？」
シャオロンの部屋にあるジライの荷物を、アジャン、セレス、ナーダが遠巻きに見つめた。
「ただの荷物入れにしか見えないわねえ」
「あ、でも、これ、確かにジライの革袋です。見た事あります」
「あら、そう？」
「その時は放り投げたりして、結構、ぞんざいに扱ってましたけど、本当に爆発するんですかねえ？」
「野郎のハッタリじゃないのか？　見られたくないモノが入ってるんで、嘘ついて、シャオロンを脅したんだぜ、きっと」
「でも、それなら水の中に捨てろとは言わないと思うわ」
一同は、しばらく無言で革袋を見つめ続けた。
「……捨てちまえ」
忌々しそうに、アジャンが吼える。
「ンな面倒なモノ押し付けた奴が悪い。シャオロン、構う事ぁない、風呂桶に水張ってその中にコレを突っ込め」
「え！でも、そんな！」と、シャオロン。
「駄目よ、そんなの！」と、セレスも反対する。

「中に大事なものが入ってるかもしれないじゃない！ジライが戻るまで出発を遅らせるわ！それなら荷物も無事だし、爆発もしないし」
「ですが、何時、戻るんですかねえ」と、ナーダ。
「この街に一週間も二週間も滞在するのは、嫌ですよ。お忘れかもしれませんが、私達、女勇者一行なんですよ？　世直しの旅をしてるんですよ？　観光でも避暑でも静養でもありません。先を急ぐべきです」
「ここは、娼館も最低だしな。留まる理由はない」と、アジャン。
又も、一同に沈黙が訪れた。
「セレス様……お先に出立してください」
声を震わせながら、東国の少年は言う。
「オレ、ここでしばらくジライさんが戻るのを待ちます」
「シャオロン、でも、ジライはすぐに戻らないかもしれないんでしょ？」
「五日ほど待ってジライさんが戻られなかったら……オレ、これしょってセレス様の後を追いかけます」

アジャンは『馬鹿か、死ぬ気か？』と怒り、セレスは『無茶しちゃ駄目よ』とたしなめ、ナーダは『宿に荷物を預けて、あなたも出立すればよいのでは？』と助言した。
彼等に対して、シャオロンは……
「ご心配をおかけしてすみません！でも、これはオレがお預かりしたものなんだから、オレが責任もってジライさんにお返しするのがスジです！セレス様、オレ、大丈夫ですから、先、行ってください！わがまま言って、しばらく勝手します、すみません！」
と、元気よく頭を下げるのだった。
少年のあまりの潔さに言葉を失う三人。
と、そこへ……

「義理堅い奴じゃのう。さすが我(われ)が見込んだだけのことある」
シャオロンの背後には……何時の間に現れたのか、忍者が佇んでいた。
「ジライ！」噛み付くように叫ぶ三人。
そして、シャオロンは……
「良かったぁ、ジライさん、戻って来てくれたんですね」
と、心から嬉しそうな顔をした。
「お荷物をお返しします」
「うむ。助かった」
と、会話を交わす二人の間にセレスが割り込む。
「ジライ！あなた、何で、シャオロンに危ないもの押し付けたのよ！」
「危ないものとは……私(わたくし)めの荷物の事にございますか？」
「そうよ！爆発物なんでしょ！」
「ですが、セレス様、取り扱いさえ間違えねば爆発の危険はございませぬ。火薬玉よりむしろ安全な」
「馬鹿！ぜんぜん、安全じゃないわよ！あなたの安全基準は、はっきり言って、世間からズレてるわ！あなたの荷物は爆発危険物なの！誰がどう見ても危ないものよ！」
「む」
「もう二度と、変なものシャオロンに預けないでちょうだい！いいわね！」
「待ってください！セレス様！」
すごい剣幕で忍者に食ってかかっていたセレスを、シャオロンが止める。
「確かに、オレ、爆発するんじゃないかって怖かったんですけど……荷物を預けてもらえたことは嬉しかったんです」
「え？嬉しい？」
「だって、ジライさんはオレに大切な荷物を預けてくださったんです。オレのこと、信頼してくれたわけでしょ？勇者の従者としては

まだまだ半人前のオレを……認めてくれたってわけで……本当、嬉しいです」

シャオロンは、ジライに対しお日様みたいに明るい笑みを浮かべた。

「これからも、オレができそうな事でしたら、どんどん申しつけてください！オレ、頑張りますから！」

シャオロンがあまりにもニコニコ笑っているので……セレスは怒る気も失せてしまった。『あんま無茶な物この子に預けたら、許さないわよ』と、たしなめる程度で忍者を解放してしまうほどに。

しかし、その後、ジライはどんどんエスカレートしていってしまった。

「引火の危険があるゆえ、日陰に置くように」

「虫がたかるやもしれぬが、気にするな」

「夜中に、ガリガリ音が聞こえるやもしれぬが、案ずるな。中身が袋を食い破って外に出る事はありえぬ」

などと言って、シャオロンの部屋に荷物を置いてゆくのだ。どうもそれは忍者の基準でいえば『無茶な物』ではないらしい。

その度にひきつった笑顔を見せながらも、シャオロンは喜んでいた。

他の誰でもない自分を、ジライが頼りにしてくれている事が嬉しかった。

シャオロン奮戦す　ＶＳジライ（後書き）

『シャオロン奮戦す　ＶＳジライ』完。

次回は、『シャオロン奮戦す　ＶＳアジャン』。
舞台はエーゲラ。エーゲラの女王陛下ついに登場です。

シャオロン奮戦す　VSアジャン

「エーゲラによくぞ参られた、女勇者セレス様、そして、従者の方々。心より歓迎いたしますぞ」

臈たけた女性が玉座から一同を見渡す。艶やかな女性だ。大地母神を思わせる豊満な体がまとうのは、体にぴったりとした軽い布地のドレス。ドレスの胸の下には細いベルトがついているので、大きな胸が一層強調され、胸元からこぼれそうなばかりだ。結い上げられた白金髪を飾るのは、大粒の真珠のティアラ……この国の女王の証だ。

エーゲラ女王と対面した時……

女勇者セレスは緊張していた。

（この方が、アジャンを私の従者に推挙してくださったオクタヴィア女王様……小国とはいえ、王亡き後、このエーゲラを十五年も治めておられるのよね。確か四十を超えてらっしゃるはずだけど……お若く見えるわ）

失礼があってはいけない！　と、セレスは気を張った。

武闘僧ナーダは青ざめ、うつむいていた。

（うわ、もう、最悪。化粧濃すぎ。しかも、若くもないのに、あの露出した品のない服……ああ、いやだ、香水もキツい。気持ち悪い。このままでは……吐くかも。しかし、アジャン、こんなバケモノみ

たいな方の愛人を、よくやってましたねえ……守備範囲が広いというか何というか……非処女なら誰でもいいんですかねえ）

ともかく相手をまともに見るまいと、ナーダは床に目を落としていた。

忍者ジライは冷ややかな眼で、女王を見つめていた。

（太りすぎじゃ……せっかくの生（き）の女王様じゃというのに、三段腹のデブではときめかぬ。多少容色は衰えておられるものの、最高権力者として男どもを見下す眼差しは魅力的じゃ。さすが、本物。しかし、いかんせんお体が……。肥満を高貴の証と尊んだ末のお体は我が美学とは相容れぬ。やはり、女王様はセレス様のように美脚でなければ……）

己が女主人の美しさを再認識し、ジライはうっとりとした。

赤毛の傭兵アジャンは、平然とした顔をしていた。

女王は利口な女だ。今更よりを戻そうとはすまい。

だが、女王の周囲に侍る大臣達は不快を隠そうともせずアジャンを睨んでいた。女王の情人は一夜限りの相手も含め数多くいたが……アジャンが寵愛を得ていた時期は一年半と長く、その間、女王の私兵として、さまざまな事に首をつっこんでしまったので……エーゲラ貴族達からは毛虫のように嫌われているのだ。

面倒ごとは御免だ、とっとと王宮を出ようと、アジャンは思った。

そして、東国の少年シャオロンは……

毎度の事ながら、玉座に座っている者を見ていなかった。

身分の低い自分が高貴な方を見つめては失礼だ！と、ひたすら恐縮し、頭を下げていたからだ。

それ故、シャオロンは気づかなかった。
勇者一行の中で女王が最も注目していた人物が、自分である事に……

王宮への滞在が許可され、女勇者一行は、それぞれに用意された部屋に分かれ、夕方まで休憩をとる事になった。今宵は女王主催の晩餐会に全員で出席するよう招待されたのだが……
「セレス……私、晩餐会は欠席（パス）します」
セレスの部屋に現れた武闘僧は、真っ青な顔で口元を覆っていた。見るからに具合が悪そうだった。
「どうしたの、ナーダ？　風邪？　暑気あたり？」
「ええ、まあ、似たようなものです……あああああ、セレス、そばに来ないでください。今日は化粧っ気のないあなたでも、そばに来て欲しくありません……」
「どうゆう意味よ！」
「大声、やめてくれません？……吐きそうなんです」
「ごめんなさい……治癒魔法使ったら？」
「理由（ゆえ）なく自分を癒すのは禁じられているのです。私が自分を癒してもよいのは、緊急時や、務めや使命の妨げとなる場合、或いは生命の危機に関わる場合のみなんです。私、今日は部屋で寝てますね、おあとよろしく……」
ふらふらと廊下へ消えた武闘僧と入れ違いに、忍者ジライがセレスの部屋を訪れた。
が……
「え～、あなたも欠席なの！」
驚くセレスに、忍者は恐縮し、頭を低く下げた。
「申し訳ございませぬ。私めは忍にござりますれば、人前では覆面

を外せませぬ。とはいえ、つけたままでは飲食は不可能。晩餐会に招かれながら、一切、飲食を拒むのも無礼かと……」

「ま、それは、そうかも……」

「女王陛下には情報収集に行ったとでもお伝えくだされ。では、御免」

と、ジライが消えると、今度は東国の少年シャオロンがおそるおそる現れたのだった。

「オレ……晩餐会、欠席してもいいでしょうか？」

「え～！シャオロン、あなたまで、どうしたの？」

「だって……」

シャオロンは困ったように、うつむいた。

「オレなんかが同席したら、セレス様に恥をかかせてしまいますから……」

「え？」

「西国風のテーブル・マナーなんて、ぜんぜん、知らないんです。ナイフもフォークもうまく使えないし、絶対、マヌケな事しちゃいます。だから……」

「まあ、シャオロン」

セレスは少年の手をがっしりと握り締めた。

「そんなこと、全然、気にしなくていいのよ！　あなたは東国人なんだから、遠慮なく箸を要求すればいいのよ！」

「え、でも」

「それに、晩餐会にはアジャンも出るのよ！　あの品性を疑っちゃうほどテーブル・マナーが悪くて、お酒ばっかりがぶ飲みしているアジャンもよ！」

マナーが必要な場ならきちんと食ってる！　と、本人が居たら怒って反論するだろう事を言ってから、セレスはにっこりと微笑んだ。

「大丈夫！　先に西国風のテーブル、マナーは知らないんだって宣言しちゃえば、多少、失敗をしても目立たないわよ！　なにしろ、あのアジャンも出席するんだから！」

と、赤毛の傭兵がそばに居ないのを良いことに、セレスはシャオロンを説得した。五人中二人の欠席が確定しているのだ。この上、シャオロンにまで逃げられてはマズい。

「はあ」

結局、シャオロンはセレスの畳みかけるような説得に負け、晩餐会への出席を無理やり約束されられてしまったのだった。

自分用の部屋に戻ったシャオロンは、寝台に座り頭を抱えていた。セレスは励ましてくれたが、やはり不安なのだ。

ため息をついていると、扉がノックされた。

「もっと、こっちへ参れ、アジャン。妾（わらわ）とそなたは知らぬ仲でもあるまいに」

女王の寝室に呼び出された赤毛の傭兵は、不機嫌そうな顔をしていた。エーゲラを旅立ったとき、女王との関係は清算している。今更、昔の女と寝る気はなかった。

が、赤毛の傭兵は女王の贅をこらした部屋を見渡してから、わざと好色そうな顔をつくり、寝台の上の女王を値踏みするかのように眺め始めた。

「俺が居なくて、体が夜泣きしていたのかい、女王様？」

「ホホホホホ。夜の相手ならば腐るほどおるわ。そなたよりも逞しい男も、見目麗しい男子も、数え切れぬほど居る。しかし……」

女王は艶っぽい笑みを浮かべた。

「そなたほど役立つ男は一人も居らぬ。腕が立ち、頭が良く、めはしがきき、美男で、性技も巧み……ほんに惜しい。そなたと後五年早く出会っておったら、イレーネの夫にそなたを選んだものを……」

「フン。また、そのよた話か」

「よたではない。アウグストのまぬけよりも、そなたの方が妾の娘

の夫にふさわしい。そなたにならば、王位を譲っても構わなかった」
「それこそ、よた話だな」
アジャンは寝台に近寄った。女王は豊満な胸を誇示するかのように、両手で丸みを帯びた大きな胸をもちあげていた。胸の谷間にあるものに気づき、アジャンは胸を愛撫する振りをして、それを抜き取り懐にしまった。折りたたまれた小さな紙だった。
「あんたは、人の下に立つのが嫌いな女だ。生涯、女王に君臨したいんだろ？　御しやすいアウグストならば、自分の傀儡にできる。だから、娘婿にしたんだろ？　俺みたいな物騒な男は、あんたの手下向きじゃねえ」
「オホホホホ。猛獣を飼うのも、王侯貴族の遊びじゃ。知らぬのかえ？」
女王は乱れた髪を整えるかのように、右手で髪を撫でつけた。白金の豊かな髪は彼女の魅力の一つでもあった。アジャンはその髪に口づけ愛しそうに撫でる振りをしながら、右耳の上にあった紙を抜き取り、それも懐にしまった。
「そういやあ、まだ伝えてなかったな。おめでとう、女王様。東国に居る時、噂で聞いたぜ。イレーネ様が男子をお産みあそばしたそうで……待ちに待った世継ぎの誕生だな」
女王の眼が、きらりと輝く。
「そなた、勇者の従者の務めを終えたら、この国に戻って参れ。世継ぎの家老にしてやるゆえ」
「あん？」
「ボンクラな侍従どもに囲まれては、世継ぎが愚かに育つ。野性味あふれるそなたのような、危機に屈せぬ男に育てたい」
「高く買ってくださるのは有難いが……宮仕えする気はさらさら無いんでね、世継ぎ様のおばあ様」
ニヤニヤ笑いながら、赤毛の傭兵は女王の体の上に覆いかぶさり、その右頬に口付た。
女王は口をほとんど動かさず、アジャンにしか聞こえない小声で

言った。
「良いから、妾の芝居にあわせろ」
「誰が覗いてるんだ？」と、小声でアジャン。
「アウグストの手の者じゃ。あの馬鹿、王位を狙い、大魔王教徒とつるんだ」
なるほど、先ほどの二通の手紙はその陰謀を記したものかと、一応の得心はいった。
監視者がいるのを意識した上で、アジャンは下種（げす）な顔をつくった。卑しい傭兵にふさわしい顔だ。
「まあ、金次第じゃ、のってやってもいいぜ、女王様。たんまりもらえるんだろ？」
「位もやろう」
「当然だな。ただの家老じゃ俺を縛りつけておけないぜ」
「手始めに右将軍にしてやろう。その後の出世は、おまえ次第じゃ」
現在、右将軍の位に居る者がアウグストの手下の一人かと、赤毛の傭兵は察した。女勇者とアジャンの来訪をきっかけに、女王は娘婿の陰謀を叩き潰す腹のようだ。
と、なれば仕方がない。昔の女とよりを戻すのは面倒だったが、アウグストを焦らせる為にも、女王の愛人に返り咲いた方が芝居しやすい。
（手を出すか……この女、名器だし、犯りゃあ犯ったで楽しめる。ま、いいか）
と、アジャンが心を決めた時だった。
ノックが響いた。
「お連れしました」
「お通し」
続き部屋から近習が現れる。その者が伴って来た者の姿を認めるや、赤毛の傭兵は慌てて上半身を起こし、女王から離れた。
「シャオロン！」
「アジャンさん？　あ、えっと、すみません！」

東国の少年は慌てて、女王に対し頭を下げた。一国の君主に対し、顔をあげて接するなんて恐れおおいと言いたそうに。

女王はにっこりと笑みを浮かべ、共通語で少年に話しかけた。

「よくぞ参られたな、勇者の従者殿。さ、さ、もっとお楽に」

近習に隣室にお茶の準備を命じ、女王は優美な仕草で寝台から離れ、赤毛の傭兵に笑みを見せた。

「妾は用事ができました。そなた、もう帰ってよいぞ。又、夜にでも参れ」

赤毛の傭兵に対しては、女王はエーゲラ語を使った。

「おい……」

アジャンはギン！　と女王を睨む。

「シャオロンをどうする気だ？」

「ホホホホ。お茶の相手には、そなたのようなむさくるしい男より、かわいい子供の方が心が和む。それだけじゃ」

「本当ぉだな？　手を出すなよ、こいつは、まだ童貞だ」

「童貞？　それは、又、魅力的な響きだこと」

高らかに声をあげて笑う女王に、赤毛の戦士は尚も詰め寄った。が、軽くいなされてしまう。

「今のところ、かわゆい子供をどうこうする気はないが……明日や明後日にはどうなるや知れぬぞ。なにしろ、妾は男好きの好色女だからの」

「……」

大事な弟分に手を出されたくなかったら、とっととアウグストの陰謀を潰して来いと言っているのだ……

赤毛の傭兵は、がくっと肩を落とした。二年前、女王の従兄弟の反乱を未然に防いだ時も、この女にいいように使われていたのだ。

（……人使いの荒い女だぜ）

アジャンはすれ違いざまに、シャオロンの肩をポンと叩いて『気楽にやれ』と、だけ言って、部屋を後にした。

女王とアジャンの会話は早口のエーゲラ語だったので、シャオロンには二人が何と言っているのかわからなかった。
それで、お茶を勧められ、女王と同じテーブルにつく事に非情に恐縮しながらも、シャオロンは意を決して尋ねてみようとした。
「女王陛下さま（共通語もあまり得意ではないので、尊称が二つ重なっている事に気づいていない）、アジャンさんと、どんな事をお話しだったんですか？」
「気になるのかえ？」
「……アジャンさん、怒ってたみたいなので」
「オホホホホ。仕官せぬかと尋ねてみただけじゃ。少々、折り合わなくての、それで不機嫌に……ん？　どうした？　そのような悲しそうな顔をして？」
「あ！　いえ、あの……すみません」
「よい、よい。あの男が仕官し、おまえの側を離れるかと思うと寂しいのだな」
「はい……」
「……あの男、おまえから見てどんな男じゃ？」
「アジャンさんは超一流の戦士です。とっても強くて、やさしいです」
「ふむ」
「セレス様の危機を何度も助けてらっしゃいます。オレにも体術とか旅のコツとか、いっぱい教えてくれて……本当に親切な方です」
「旅の仲間とは馴染んでおるのか？」
「それは……えっと、ジライさんとは、その……。でも、ナーダ様とは」
「ホホホホ。焦らずともよい。あの男が仲間と手を取り合って仲良くしておるはずはない。あれは腕の中の女にすら本心を明かさぬ孤高の男……」
女王は瞳を細め、愛しそうとも、せつなそうともとれる眼差しで

東国の少年を見つめた。
「あれが少しでも情を見せるのは……そなたのような、真っ直ぐな気性の子供に対してだけ。エーゲラでも、そうであった。アジャンは、妾の小姓の一人に目をかけ、いたく可愛がっていた。あまりにも親密で目にあまるゆえ、あの男、男色の気があるのかと疑ったが……そうではなかった。あれは弟の代わりとして、妾の小姓を愛しんでおったのだ」
「弟さん……」
女王は嫣然と微笑んだ。
「あの男が妾の話にのるのだとしても、大魔王を倒すまでは、あの男、女勇者様の元に居る。のう、少年、あの男の側に居てやっておくれ。アレが人の情を失わぬように、な」
シャオロンは、ふくよかで美しい女性を静かに見つめた。今、目の前にいる女性は、威厳あふれる女王ではなかった。母を思わせる慈愛あふれる笑みに満ちた方だ。
（ああ……この方は、アジャンさんが好きなんだ）
そう思うと、自然と笑みがこぼれた。
少年は力強く頷きを返した。
「わかりました！　女王陛下さま！」

「……なんで、アジャンまで晩餐会に欠席なのよ」
セレスは泣きたい気分だった。五人中の三人も欠席なのだ、女王陛下が気分を害されるのでは？　と、心配になった。
が、まったくの杞憂だった。
女王は、つたなくナイフとフォークを使って懸命に肉と格闘する少年を楽しそうに見つめ、にこにこと上機嫌で二人に話しかける。
晩餐会が険悪にならなかったのは、シャオロンの人徳のおかげだわ！　と、女勇者は少年に感謝した。

五日後……

女王の娘婿と右将軍他数十人の家臣が、何者かの手にかかり亡くなった。犯人はわからなかったが、被害者達の屋敷には魔族の痕跡があり、王宮の女王の娘婿の部屋からは被害者達全員の連名の魔族との契約書すら見つかった。

女王はエーゲラ国の名誉の為、被害者全員を病死扱いにすると決め、議会もそれを承認した。

女勇者一行は、その翌日、王宮を離れ、野に散った魔族・大魔王教徒の討伐へと旅立ったのだった。

シャオロン奮戦す　ＶＳアジャン（後書き）

『シャオロン奮戦す　ＶＳアジャン』　完。

次回は『シャオロン奮戦す　ＶＳナーダ』。舞台はエーゲラ。ナーダが、たまにインディラ寺院にシャオロンをお供に連れて行くのは何故か？　と、いう話です。

シャオロン奮戦す　VSナーダ

武闘僧ナーダは、公式的には無役の一介の修行僧に過ぎなかった。しかし、大僧正候補である彼は、教団内においては大僧正の次に敬意を払われる立場にあった。他の僧侶から、嫉妬や羨望の的とされ続けているのだ。

ナーダには、護衛役兼諜報員の部下達がいた。大僧正候補の彼の為に、手足となって働く忍である。彼らはナーダが女勇者の従者となって旅に出た後も、ずっと、ナーダの為に働き、陰ながらセレスの旅を支えているのだ。

そんな部下から鳥を介して届いた報告書に目を通してから、大柄な武闘僧は糸目を一層、細め、溜息をついた。

「仕方ありませんねえ……又、あの手でいきますか」

「明日、シャオロンを連れてアフロディのインディラ寺院支部を訪れようと思うのですが」

ナーダがそう言うと、セレスは意外そうに首をかしげた。

「あら、まだ行ってなかったの？」

セレスがそう思うのも当然で、ナーダはシルクドからトゥルクまでの旅の間、首都を訪れた時には当日か翌日にインディラ寺院支部に挨拶に行っていたのだ。

「王宮にお世話になって、今日で三日目でしょ？ずいぶん遅いわねえ」

「……仕方ないでしょ、今日まで寝込んでたんですから」

ナーダは溜息をついた。オクタヴィア女王の毒気にあてられ、断っても断っても次々にやって来るサービス過剰な凹凸の激しい体格の女官達に辟易とし、薔薇と香水の香りに満ちた部屋にめまいを感じで……なかなか体力が回復しなかったのだ。

「まあ、行ったところでたいした情報もないってわかってるんですがね……行かないとカドがたつし……」
「？」
「それで、明日、シャオロンを供に連れて行きたいのですが」
「え、また？」
「ええ。アジャンはずっと外泊中ですが、ジライが居るし、構いませんよね？」
「そりゃあ、構わないけど……あなた、シャオロンに、何させてるの？　シャオロン、お寺の中の事は外では話せないって、いつも何も話してくれないけど……」
　悪い事させてるんじゃないでしょうね？と、セレスが睨みつけてくる。
　ナーダは肩をすくめてみせた。
「格式にうるさい方とお会いする時は、供の一人も連れて行かないと困るのです。格好がつかないし、大僧正候補たる者が一人で行動するなどけしからんと延々とお説教されてしまうので」
「あら、そうなの？」
「そうなんですよ」
「あなた、もしかして、意外と苦労してるの？」
「インディラ寺院も、残念なことに、他の組織と同じで、一枚岩じゃないんですよ。私のような信仰心も学問も武術も魔法も超一流な逸材に、ケチをつけたがる愚かな身の程知らずも少なくありません」
　それはあなたの性格に問題があるからじゃないかしら？　と、言いたかったが、言ったら、『私の完璧な性格のどこに問題があるのです？　具体例を挙げてその根拠もそえて説明してください』とか何とか前言を撤回するまでつきまとわれそうな気がしたのでセレスは言わなかった。
「でも、お供なら、誰でもいいんでしょ？シャオロンじゃなくてもいいのよね？」
「セレス……あなた」

武闘僧は憐れむかのように女勇者を見つめた。
「こんな自明の事がわからないなんて、そこまで愚かだったとは…」
「なっ？なに、それ！」
「……アジャンに、私のお供役が務まるとでも思ってるのですか？」
「うっ！」
セレスの顔はひきつった。女好きで下品でふてぶてしくって偉そうな態度の赤毛の傭兵が、僧侶の後ろについて寺院にお供に行く？ありえなさすぎる。
「それとも、ジライなら出来ると？　そう思ってるのですか？」
「うっ！」
セレスの顔はひきつった。もと大魔王教徒で、未だにめっきり暗黒系の性格の忍者が、僧侶の後ろについて寺院にお供に行く？ありえなさすぎる。
ナーダはにっこりと笑みを浮かべた。
「納得いただけました？」
「……納得したわよ。明日は、シャオロンと寺院に行くのね、気をつけて行ってらっしゃい」

シャオロンはナーダのお供という立場なので、ナーダから少しはなれてちょこまかと後ろをついて行った。東国人であるシャオロンには、インディラ寺院は馴染みのある場所だった。冬の間、村の他の子供と一緒に、インディラ寺院外房に下宿させてもらって学問所にも通っていたぐらいだ。
一般参詣者とは違うコースで、ナーダは寺院の奥へと進んで行く。美しい庭園を通り、荘厳な建物をいくつも抜け、寺院にふさわしくない華美な装飾がほどこされた建物の前でナーダは足を止めた。僧房というより、貴族の別荘のようだ。
「やれやれ、悪趣味ですねえ」

建物の景観を眺めてから溜息をつき、ナーダはシャオロンを振り返り、こっそりと囁いた。
「いいですか、シャオロン、最初は私一人で入りますから、いつもの通りにお願いしますよ」
「はい！ナーダ様！」
と、東国の少年は元気に答えるのであった。

「これはこれは大僧正候補のナーダ様、遠路はるばる、よくぞ拙僧の房までいらっしゃった。アフロディにご到着なさってから、実に四日もかけて。王宮から寺院までの道は、いやはや遠い。いやいや、王宮の中が険しすぎたのですかな？美女に金銀財宝、あなた様のお目を惑わすものもさぞや多かった事でしょう」
ナーダは目を覆いたかったのを、かろうじて堪え、挨拶を返した。相手を視界に入れたくないので、深々と頭を下げて。
「ご挨拶が遅れ、申し訳ございません。この地を訪れた日に病を得まして、昨日まで伏せておりました。この地の水は、どうも、私の性に合わないようで……美と快楽の都とも称えられるアフロディで、堅固な信仰を貫いていらっしゃる僧正様の徳にあやかりたく存じます」
脂ぎった肉饅頭がピカピカの僧衣を着て、フカフカのトゥルク製の赤と金の絨毯の上に座っている……
品が無さ過ぎる……目が腐りそうだった。
（さすが……あのお方の一族ですね）
相手のへの軽蔑は内に秘めて、表面上はにこやかにナーダは談話を続けた。
この寺院の僧正は、ナーダとは不仲のインディラ国王第二夫人アヌラーダの親族。本当なら顔も合わせたくない相手だったが、各地の僧正の元へ挨拶に伺うのも大僧正候補の義務の一つだった。時間の無駄とわかっていてもサボるわけにはいかなかった。

僧正は親しげな態度をとりながらも、ナーダの話の揚げ足をとり、ネチネチと嫌味を言ってくる。

大魔王軍の進行を嘆くような口ぶりで、大魔王を倒せない女勇者の実力を疑い、それにつき従う僧侶の能力に問題があるのではないかと……どうも話をそっちへもっていきたいような感じだった。

「やはり、勇者が女というのが問題なのでしょうなあ」

僧正が手を叩いた。茶を催促したのだ。

奥からしずしずと、まるで侍女のように、年少僧が二つの茶碗を載せた盆を捧げ持って現れる。ほっそりとした、女顔の年少僧だ。

僧正自慢の美童なのだろう。

「いや、いや、しかし、お役目とはいえ、ナーダ様は本当にお気の毒な……女と共に旅をしなくてはならぬとはまことにお気の毒」

茶の給仕を終えてから、媚びるような笑みを浮かべて年少僧が僧正の斜め後ろに控える。

僧正は脂ぎった顔を歪ませ、口元に笑みを刻んだ。

「もう一年以上、旅をなさっておいでなのでしたなあ。女と共に一年も。しかも、その女勇者は十代の若さの美少女とか。いやいや、疑うわけではありませんが、若い僧侶は、とかく女に惑い、還俗せねばならぬハメに陥りやすいもの。女の魔力に逆らえぬのでしょうなあ。ほんに若い者は堪え性がありませんから。一年以上、女と寝起きを共にしておれば、自然と……」

そこで、ノックが響いた。

不快そうに、僧正は声を荒げた。

「誰じゃ？」

「失礼いたします！」

と、元気良く入って来たのは……

長い黒髪を首の後ろで一つに束ねた、小柄な少年だった。

体つきは細いのだが、きびきびとした足取りで、道着から出ている手足にも若々しい筋肉がついている。

幼さのめだつ面差しだったが、つぶらな黒い瞳には光があふれ、

眉は細く、鼻も口元もかわいらしく、溌剌とした健康的な美しさに満ちていた。

「もうしわけございませんが、ナーダ様に、かきゅうのようがあると、しのびのものがもうしております。おひとばらいをしたおへやをおかしいただけませんか？」

難しい言葉使いは苦手だとばかりに、たどたどしく言うところが、又、かわいい。

僧正は黒髪の少年に心を奪われた。

「よろしゅうございますか、そうじょう様？」

と、少年に尋ねられ、僧正はハッと正気を取り戻す。

「うむ。用意させよう」

「ありがとうございます！」

にっこりと笑う顔が、すごく愛らしい。

僧正は低くうなり、斜め後ろに控えている年少僧を目の端で睨みつけた。この黒髪の少年に比べると、美童と目をかけていた年少僧は脆弱すぎる。青瓢箪のようだ。

「一の客間に、ナーダ様をお通しいたせ」

年少僧が慌てて復唱し、廊下へと急ぐ。

「……こちらへ」

と、ナーダに一礼してから、年少僧は悔しそうに黒髪の少年を一睨みし、それから廊下へと消えた。睨まれた当人は、ぽかーんとするばかりである。

「それでは、失礼いたします」

ナーダは僧正に会釈をし、廊下へと向かおうとした。

「待たれよ」

僧正の声に、ナーダは足を止め振り返った。

僧正は顔を朱に染め、黒髪の少年を見つめていた。

「その子供は、ナーダ様の従者にございますか？」

「ええ、まあ、それに近いですね」

にっこりと、ナーダが余裕の笑みを見せる。

「なにゆえ、剃髪をしておらぬのです？」
「剃髪はしません。この子は、東国の格闘家の家を再興する夢を持っています。武闘僧の私の、いわば弟子となって一緒に旅をしているのですよ」
「一緒に……旅を？」
僧正は蛸のように赤くなって、口をぱくぱくさせている。息もかなりあがっている。
ナーダはフフフと意味ありげに笑った。
「そうですよね、シャオロン？」
「はい！ナーダ様には、いつもてとりあしとり、いろんなことをおしえていただいています！オレ、ナーダ様の『ねんてい』になれて、ほんと、しあわせです！」
「念弟……」
僧正は悔しそうに、くぅぅ～と声を漏らし、手の中の茶碗を握りつぶした。
ナーダはこの上ないほど意地の悪い顔を僧正に向け、それから少年に対しにっこりと微笑むのだった。
「それでは、共に行きましょうか、シャオロン」
「はい！ナーダ様！」

「ナーダ様、いつも何でこんなお芝居するんです？」
客間で二人っきりになってから、シャオロンがこっそりと耳打ちしてきた。
「忍の者なんて居ないのに」
「いいんです。インディラ寺院で部下と会う約束してますから、待ってればそのうち現れますよ」
「お話、途中になっちゃったけど、いいんですか？」
「ええ。あんなくだらない嫌味、聞くに値しないです。さっさと終わらせるに限ります」

「……あんなんで、オレ、お役に立ってるんでしょうか？」
「ええ、もう、大助かりですよ。シャオロン、あなたにはいくら感謝してもし足りないくらいです。お礼に帰ったら新しい技を教えてあげますよ」
「本当ですか、ありがとうございます！」
部下からの報告書に『アフロディの僧正は美童狂い』とあったので、いつもの手を使ったのだ。僧侶には美童趣味の輩が多い。嫌な相手の時には、シャオロンの美をもって、その口を黙らせるに限る。
「あ、でも、シャオロン、くれぐれも寺院での事を外でしゃべってはいけませんよ。寺院には寺院にしか通じない専門用語がありましてね、それを外で使うと意味が違うので誤解を招く恐れがありますから」
「わかってます！たとえば『ねんてい』って、寺院じゃ『内弟子』の事だけど、よそじゃ違うんですよね？」
「その通りです。よく覚えていましたね。本当、あなたは素直でかわいいですよ」
武闘僧はにこやかに微笑んだ。

シャオロン奮戦す　ＶＳナーダ（後書き）

『シャオロン奮戦す　ＶＳナーダ』　完。

次回は……

＊　十八歳以上で男性の同性愛話でもＯＫという方　＊

ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』をご覧ください。

『夢のつづき』。舞台はエーゲラ。ナーダとジライの話です。

＊　十八歳未満の方、男性の同性愛ものはパスという方　＊

このまま『小説家になろう』で。

『悩ましの君』。舞台はエウロペ。

大魔王の本拠地を見つけられないまま、振り出しに戻った女勇者一行。困った時に頼るのなら、あの方しか居ません。

悩ましの君

「お留守みたいですね」
シャオロンが残念そうにセレスに話しかける。
「カルヴェル様，何処に行かれたんでしょうね？」
女勇者一行は、大魔術師カルヴェルの居城のすぐ近くまで来ていた。しかし、そこからでは城の内部はまったくうかがい知れなかった。見えるのはどこまでも続く白い壁だけ。山の頂にあるカルヴェルの城は、四方を天に向かって聳える白い壁に囲れている。壁の上部は雲に埋もれており、途方も無く高い。乗り越えられるものではない。城に近づくには門を開けてもらうしかないのだ。
セレスは息を吸い込んだ。後、もう一度だけ、師匠に呼びかけるべく。
「お師匠様ーっ！」
城の周囲の岩場からセレスが、波紋のような模様が施された部分に向かって叫ぶ。壁の中の模様のある箇所が、魔法で開く『門』なのだ。
「セレスです！今後の事で、ご相談したい事があるのです！門を開けてください！」
セレスは必死だった。
今、頼れる相手はカルヴェルしかいないのだ。
エウロペから始まった大魔王討伐の旅も、シルクド、シャイナ、ジャポネ、再びシャイナ、インディラ、ペリシャ、トゥルク、エーゲラときて、又、エウロペに戻ってきてしまった。各地で魔人や大魔王教徒を退治し、大魔王四天王サリエル・ウズベル・イグアスを倒して、今世の大魔王の力の弱体化してきている。けれども、大魔王の本拠地は未だにつかめず、大魔王の憑代となっている人物もわからないままだ。
来訪した国で、国主や政府機関、各宗教団体に、大魔王に関する

情報調査は依頼してきている。何らかの有力な情報があれば、エウロペ国王宛か、インディラ寺院総本山に連絡を入れてもらうよう頼んであるのだが、ケルベゾールドに関する情報は旅の開始からずっと、皆無であった。

大魔王は何処に潜んでいるのか？

国交のない北方三国か、ユーラティアス大陸より南のアフリ大陸（十一代目勇者の時代、四天王の一人がアフリ大陸北部を支配し、エーゲラに戦争を挑んできた。当時、大魔王本人はアフリ大陸にはいなかったのだが、今世もいないとは言い切れない）か、世直しの旅をしてきた国々で見逃してしまったのか……

北方にしろアフリ大陸にしろ向うには、特別な通行許可書が必要だ。エウロペ国王、海運国エーゲラ、アフリ大陸と縁深いトゥルク、魔術師協会、北方やアフリ大陸の事情に精通している学者等々、さまざまな国々、関係者・組織、機関と連絡を取り合わなければいけないだろう。

今後の方針を決める為にも、世界情勢に明るいカルヴェルに会いたかったのだが……

セレスの呼びかけに返事は返らず、『門』のはずの壁は閉じられたままだった。

勇者一行は困ったように、顔を見合わせた。

「前もこうでしたよね」

両腕を組んだ武闘僧ナーダが溜息をつく。

「前にここを訪ねてから、一年ともうすぐ四ヶ月です。『勇者の剣』に嫌われて困っていたセレスは、カルヴェル様を頼って山を登ったというのに……」

「ジジイ、居留守を使ってたな」

と、赤毛の傭兵はおっくうそうにボリボリと頭を掻いた。

「セレス、この前のアレやって、ジジイを呼び出せ」

「え？」

女勇者がビクッと身構える。

「この前の……アレ？」
「おまえ、鎧脱いでやってたろう、馬鹿みてぇな声だして、こう胸と腰を」
「キャァァァァ！」
駆け寄って、セレスは慌てて赤毛の傭兵の口を塞いだ。顔中を赤く染め、わなわなと震えながら。
「覗いたのね……あれほど見るなって頼んだのに！」
女勇者の手をはがし、赤毛の傭兵はにやにやと笑う。
「アレやってジジイが出てくりゃ居留守、出てこなきゃ本当に出かけてるんだろ。やってみろよ」
「軽々しく言わないで！お師匠様をうならせるようなアレでなきゃいけないのよ！」
「やりゃいいだろ」
「できないわよ！そう簡単にはいかないんだから！」
セレスは怒りと羞恥に真っ赤となりながら、傭兵を睨み続けた。
アジャンは品性に欠ける笑みを刻みつつ、女勇者を見下ろしていた。
やれやれと肩をすくめ、ナーダが二人の間に入り、セレスへと視線を向けた。
「落ち着いてください、セレス。あなたがここで何をやっていたかは、アジャンから聞いたので私も知っています」
「何ですって！ナーダまで知ってるだなんて、そんな……」
女勇者はキッ！と、赤毛の男を睨んだ。
「アジャン、あなた、私が、アレをやってた事、吹聴して歩いてるんじゃないでしょうね！」
「馬鹿言え、ンな考え無しな真似はしない」
赤毛の戦士はにやりと笑った。
「ゆすりたかりってのはな、相手が秘密を抱えてるからできるんだぜ。おまえのアレが世に知れ渡っちまったら、その気になった時に、金をせびれねえ。だ・か・ら、胸の内にずっと秘めてきてやったよ。

安心しな、お姫様、俺はもう誰にもしゃべらない。おまえさんがきっとたっぷりと、俺の喜ぶものをくれるだろうからな」

「アジャン……」

怒鳴りたいのを必死に堪え、涙目となりながら女勇者は赤毛の傭兵を睨んだ。

「まあ、ともかく」

ナーダがコホンと咳払いをした。

「その手の専門知識なら、アジャンとジライが豊富に持っているはずです。二人に助手になってもらえばいいじゃないですか」

話題にあげられた忍者ジライが岩場の陰から姿を見せる。しかし、無言。

「助手ぅ？」と、セレス。

「そう。助手というか、あなたの先生ですね。セレス、しっかり彼らの言う事を聞いて、カルヴェル様をおびき出してください」

武闘僧は東国の少年に声をかけた。

「護衛も二人に任せれば充分です。シャオロン、私達は来た道を引き返しましょう」

「え、でも……」

「カルヴェル様を呼び出すのには精神集中が必要なのです。あなたや私が居るとセレスの気が散ってしまいますからね、道を引き返して麓の村で待っていましょう。カルヴェル様がご在宅なら、移動魔法で私達もすぐに拾ってもらえますから、離れていても大丈夫ですよ」

「はあ」

東国の少年はしょんぼりとした。

「セレス様、オレ、お側にいない方がいいですか？」

「そうね……」

セレスの顔はひきつっていた。

「ごめんなさい、今だけは……私の側から離れていて。お師匠様を呼び出したら、すぐに迎えに行くわ」

「はい」
シャオロンは自らを納得させるかのように頷いてから、拳をぎゅっと握り締めた。
「がんばってください、セレス様！よくわかんないけど、セレス様なら、きっとアレというのが出来ると思います！オレ、応援してます！」
「あ、ありがとう」
泣きたい気持ちをどうにか堪え、セレスは山を下りていく二人を、手を振って見送ったのだった。

「で、私（わたくし）めは、何をすればよろしいのでしょうか、セレス様」
事情が飲み込めていない忍者に、アジャンが簡潔に説明する。
「ストリップの指導だ」
「ちが～～～う！セクシー・ポーズの指導よ！」
「せくしーぽーず？」
「男の人がぐっとくるような、Hっぽくて、いやらしくって、お色気たっぷりで、思わずうなっちゃうような……そういうポーズを私がしなきゃいけないの！」
「何ゆえ？」
「……お師匠様のご機嫌をとる為よ」
セレスはがっくりと肩を落とした。
「お師匠様に何か頼みごとがある時には、お師匠様をうならせるセクシー・ポーズをしなきゃいけないの。昔、ここで神聖魔法の勉強をした時から、そういうルールになってるのよ」
「ほう。さすがカルヴェル様、乙な趣味ですなあ」
「オツなんかじゃないわよ！」
女勇者は忍者をねめつけた。
「私、この手のこと、すっごく苦手なんだから」
「てなわけで、スケベな俺とおまえが助手なんだとさ」

アジャンは面白そうににやにや笑っている。
「で、どうする？　おまえが先に助手になるか？それとも、俺か？二人いっぺんってのは意見が合わんだろうし」
「ふむ」
忍者ジライは覆面の下の横目でアジャンを見つめた。
「我からやろう」
「よし、いいぜ。俺は見学させてもらう」
アジャンは岩の上にどっかりと腰を下ろし、左腿の上に肩肘をついて顎を載せる。
怯えた顔のセレスに、忍者は笑みを見せた。もっとも覆面に覆われているので、見えるのは目元だけだったが。
「ご心配なさりますな、セレス様。このジライ、カルヴェル様のご趣味も心得ております。大船に乗ったつもりで、この私めにお任せくださいい」

『勇者の剣』を外し、白銀の神聖防具を取り、セレスはシャツとズボン姿になった。恥ずかしくって落ち着かない彼女に、忍者がずけずけと注文をつける。
「セレス様、ズボンを脱いでください」
「え――っ！」
「素肌に大き目の男物のシャツ、こぼれる太腿……このへんもカルヴェル様のツボのはず」
「嫌よ！絶対に嫌！」
セレスは噛み付かんばかりに、忍者を怒鳴りつけた。
「私が教えて欲しいのは、セクシー・ポーズよ！いい？　ポーズなの！何でズボンを脱がなきゃいけないのよ！」
「しかし、セレス様、同じポーズでも、素肌が見えるのと見えないのでは、もたらす効果が違います」
「衣服をきちんと着てても、それでもお師匠様をうならせられるポ

ーズを考えてちょうだい！」
「しかし」
「命令よ！」
「むむ」
忍者は両腕を組み、しばしうつむいていた。
「……いた仕方がござりませぬなあ」
忍者は小声でぶつぶつと呟いてから、懐から取り出したものを素早く地面に放り投げた。
クナイだった。
それは、セレスの影の胸を貫き、大地に突き刺さった。
途端、セレスは動けなくなった。
「忍法、影縫いの術」
「ジライ、あなた、影を縛ったわね！」
「続きまして」
再び懐からクナイを取り出し、自分の左の小指を浅く切って、滲み出た血で右の二の指をぬらし、クナイの刀身にすらすらと血文字を書いてゆく。そのクナイも、又、セレスの影に突き刺さる。
「邪法、傀儡（くぐつ）の術」
「ジライ……」
セレスは自由に動く目で、黒装束の忍者を睨みつけた。
「邪法は封じるって私に誓ったでしょ！」
「申し訳ございません、セレス様、緊急事態にござりますれば」
「どこが緊急事態よ！」
「なにせ、私めは若輩」
フーッと忍者は溜息をついた。
「色の道の達人カルヴェル様をうならせるポーズなど、おいそれとは思い浮かぶはずもござりません。やはり、何事も形から入りませんと」
と、そこで忍者ははたと気づいた風に女勇者を正面から見つめた。
「セレス様、神聖魔法の使用は禁止します」

「う」
邪法の呪を返そうと半ばまで小声で唱えていた神聖魔法の呪文が、セレスの口の中に消える。傀儡の術の強制力によって、神聖魔法を唱えようとすると舌が動かなくなるのだ。
「わ、私の命令に逆らう気？　邪法と忍法を、早く解きなさい！ジライ、命令よ！」
忍者は不敵に笑った。
「フフフ、セレス様、ズボンをお脱ぎください」
ジライがそう口にした瞬間……
セレスの両の手が勝手に動き出して、着替えをするかのように自然にズボンを脱ぎだしたのだ。
「キャーッ！キャーッ！キャーッ！キャーッ！」
ズボンはストーンとセレスの足元に落ちてしまった。
大き目のシャツに守られて下着こそ見えないが、半ば露になった太腿や、すらりとした長い脚が色っぽい。
「ほほう、こりゃ、すげえ」
アジャンが身を乗りだし、忍者に話しかける。
「上もひっぺがしちまったらどうだ？」
「阿呆。全て脱がしてしまっては、カルヴェル様の歓心は買えぬ。カルヴェル様は殊の外、チラリズムがお好きなお方。見えそで見えぬ。これが良いのだ」
「ふ～ん。俺ぁ、半裸より素っ裸の方が好きだがな」
横目で赤毛の戦士を睨み、相手に聞こえぬほどの小声で忍者はポツリと呟きを漏らした。
「……二流」
それから、にっこりと笑みを浮かべ（やはり、目元しか見えないのだが）、セレスへと指示を与えるのだった。
「セレス様、襟を緩めてくだされ。上から三つ目のボタンまで外していただきとうございます」
言われた通りに、セレスの両手がボタンを外してゆく。豊かな胸

と下着が、乱れた胸元からチラリと見える。
「ジライ～～～～」
セレスは涙目で忍者を睨み続けていた。
「覚えてらっしゃい！動けるようになったら、ギッタンギッタンのバコンバコンに叩きのめしてあげるわ！」
「ギッタンギッタンのバコンバコン……」
忍者は覆面の下の顔をポッと赤く染め、右手でときめく己の心臓を押さえたのだった。
「……それは楽しみな」
「何？　何か言った？」
「いえいえ、何も。それではポーズといきましょう。セレス様、腰を後ろに突き出し、上体をかがめ、左腕を力なく股間の間に垂らし、右手を後方に、はい、そこで、右手でシャツの尻の辺りの布をつかみ、ほんの少しだけチラリとめくる」
「うひぃぃぃぃぃ！」と、悲鳴をあげたのはセレス。
「うむ、まずまず」
「そっか？　刺激に欠けると思うが」と、アジャン。
そのまましばらく待ったが、『門』が開く気配はない。
「それでは次と参りましょう。今度は両手でシャツの尻の部分をまくりあげ、悩ましげに後方を振り返り、あっは～んと喘ぐ感じに首を傾げるのです」
「ジライ～～～～」
「セレス様、そんな親の仇を睨むような顔をしていては、せっかくのセクシー・ポーズが台無しにござりまする」
「馬鹿！馬鹿！馬鹿！あなたなんか死んじゃえばいいのよ！この変態！ド助平！あなたなんて虫けら以下よ！生きている価値もないわ！もう顔も見たくない！どっか行っちゃって！」
泣きながら女勇者が、そうののしると、
「あああぁぁぁぁ」
忍者ジライは、力なく、その場にへたりとしゃがみこんだ。

「顔も見たくないだなんて……あぁ、そんな……」
忍者は顔を伏せ、蹲っている。早鐘のごとく打ち鳴る心臓を押さえ、被虐の悦びに我を忘れて酔いしれているのだ。
しかし、傍目から見れば、その姿はセレスに容赦なく責められて、落ち込んでいるように映る。
赤毛の傭兵アジャンは大きく息を吐いた。
「うるせえぞ、わめくな、馬鹿女。女らしい所作がまったくできねえ、おまえが悪いんだろ。こっちは協力してやってんだ、有難く従え」
「嘘よ！協力なんて嘘！面白がってるくせに！あなた達なんか、大嫌い！」
「あああ」
と、罵倒にはしっかりと反応する忍者。
「黙れ、馬鹿」
「何よ！馬鹿はあなたよ！アジャンの馬鹿！こっちは、もう恥ずかしくって顔から火を噴きそうなのに、いやらしい顔してニヤニヤ笑って！下劣だわ！そんなに私の不幸が楽しい？」
アジャンはムッと顔をしかめた。
「ああ、楽しいぜ。お高くとまったお姫様のあられもない姿を見られるなんざ、最高に楽しいねえ。酒を片手に見物したいくらいだ」
「何ですって、この色情狂！体が自由になったら、あなたもジライも叩き殺してあげるわ！」
「あぁぁぁぁ」
と、低くうめく忍者の横で、赤毛の傭兵のご機嫌は完全に斜めになっていた。
「……やってみせろよ」
言うが早いか背の大剣を抜き、やや後方に飛び退りながら、セレスへと刃を閃かせる。
凄まじい剣圧と共に……
セレスのシャツの前ボタンが全て宙に舞い、大きな胸が激しく揺

れ動く。
「あきゃ！きゃ！きゃ～ん！」
セレスはわけのわからない悲鳴を上げた。ボタンが全部弾け飛び、前がはだけたのだ。清楚な白い下着もおへそも、そこから覗いてしまっている。
「きゃぁ、いやぁ、やぁん！」
セレスは真っ赤になって悲鳴をあげ続けた。隠したいのに、隠せない。両手がまったく動かないのだ。
「どけ、クソ忍者！セクシー・ポーズとやらを俺がつけてやる！」
「しかし、傀儡の術の術師は我のみ。おまえが命じても、セレス様は動かれぬぞ」と、ジライ。
「触りゃ、木偶（でく）なみには動くだろ？」
「うむ、まあ」
「じゃ、問題ねえ」
「ちょっと待って……いやん！触らないで、アジャン！H！H！H！H！」

それから一時間近く、アジャンとジライは、ああだ、こうだ、と、セレスの体を動かし、悩ましいポーズをとらせ続けたのだが……
『門』は一向に開かなかった。
二人は『門』を睨みつけた。
「居ねえんじゃねえのか、あのジジイ」
ジライと激しく意見を戦わせすぎて、アジャンは少々、息切れぎみだった。
「ここまでやって欲情しねえんなら、男じゃねえ」
「うむ。いかなカルヴェル様でも、全てがお気に召さなかったなどありえぬ。やはり、お留守なのでは……」
「そうよね……だいぶ前から、私も、そう思っていたわ」
二人の前から凄まじい殺気が伝わる。

女勇者セレスが、スッと右手をあげる。
その手に『勇者の剣』が握られる。
持ち手の求めに応じ、剣が移動魔法で現れたのだ。
「む？」
忍者は後ずさりながら、セレスとその影に視線を走らせた。
「しまった！時間をかけすぎた！日が傾き、影が動き、呪具のクナイからセレス様の影が離れてしまったのだ！」
セレスはかわいらしい眉をしかめ、そのサファイアの瞳で、二人を睨みつけていた。『勇者の剣』を鞘から抜く彼女は、かろうじてシャツが体にとまっているだけで、ほとんど下着姿だ。
「……忍法も邪法も解けたわ」
大剣を構え、セレスは低い声で二人を恫喝した。
「覚悟はいいわね、二人とも……」
「おい、おい、本気か？本気で俺達を殺す気か？」
「私といたしましては殴り殺していただく方が……」
「問答無用！」
セレスは『勇者の剣』を振り回した。岩が粘土のように砕け、礫が舞う。
赤毛の傭兵と忍者は、追いかけて来るセレスから必死に逃げ回った。
「たまんねえなあ……女勇者のヒステリーは。物騒な武器を持ってるだけに始末が悪い」
「しばし逃げ回っていれば、そのうちお気持ちも静まるとは思うが」
多少、後ろめたいところがあったので、二人は反撃せず、セレスが怒りを吐き出す間、逃げに徹していた。
日が完全に傾き、あまりの寒さに女勇者がくしゃみをするまで、追いかけっこは続いたのである。
セレス達は、翌日も、カルヴェルの城の前で待った。が、主人が

戻って来る事はなく……
『門』は堅く閉ざされたままだった。

悩ましの君（後書き）

『悩ましの君』　完。

次回は『勇者の家』。舞台はエウロペ。
従者達は、セレスの生家――侯爵家を訪れます。

勇者の家　1話

「お父様！」

「セレス！」

ひしっ！と力強く抱き合う父と娘。二人の顔は、再会の感動にきらきらと輝いていた。

「あああああ、セレス！元気そうでなによりだ。おまえの身を案じない日は一日たりともなかったよ」

「私も！毎日、お父様のご活躍をお祈りしていました」

「ありがとう、セレス。おまえの活躍は全て国王陛下から伺っている。よく頑張ったね。天国のランツ様もサリアも、きっとおまえを誇りに思っているだろう」

「しかし、ケルベゾールドを倒す使命は未だに果たしておりません」

「わかっているよ。でも、全ての道は、たゆまぬ努力と信仰と決して諦めない強い精神によって切り開かれるもの。日々精進！おまえが明日を信じ前向きに突き進んでゆくのなら、必ずや大願を成し遂げられるだろう」

「はい！お父様！」

（……）

「……何か、妙に納得がいきました」と、ナーダ。

「……何がだ、クソ坊主？」と、アジャン。

「ふしだらで不道徳、勇者史上最強にして最低のモラルの勇者とか、不良勇者と謡われたランツ様。その孫のセレスがどうしてランツ様に似ていないのかずっと疑問だったのですが……今日、初めてわかりました。セレス、お父様似だったんですね」

「ケッ！」

世間知らずの馬鹿が二人かよ、と、赤毛の傭兵は小声でつぶやいた。

一年と四ヶ月ほど前、勇者の従者候補としてエウロペを訪れた時は、ナーダもアジャンも国賓扱いで王宮に滞在していた。セレスの館には招かれなかったので、彼女の父、現侯爵ヤンセンと顔をあわせるのは今日が初めてなのだ。

セレスの生家――侯爵家は首都クリサニアの内側、第一隔壁と第二隔壁の間の貴族街にあった。森のように広い庭園の中の優美な装飾の館は、決して華美ではないのだが趣があり、伝統ある勇者一族の屋敷にふさわしかった。

その館の主人ヤンセンは、知らせをもらってからずっと勇者一行の到着を心待ちにして扉の前で待機していたのだろう、勇者一行が到着するなり、豪奢な玄関ホールで愛娘をひしっと抱きしめたのだった。

父は娘の目を見て熱く語りかけ、娘は師を前にした弟子のようにかしこまり一々、父親の言う事に頷いている。でもって、周囲にかしずく召使達までも、そんな二人を見つめてうるうると瞳をうるませている。そっと涙をぬぐっている者すらいる。この家は家来まで熱血感動体質のようだ。

（ついていけねえ……胸糞悪い家）

と、いうのが、アジャンの第一印象だった。

だが、東国の少年シャオロンは、周囲の空気に完全に染まりきっていた。二人の交わすエウロペ語の会話はまったくわからないのだが、親子の再会の抱擁シーンに感動し、

「さすがセレス様のお父様！ご立派な方ですね！」

と、両手を強く握り締めていた。
「うむ。そのようだな」
と、シャオロンの言葉を受けたのは、忍者ジライだった。
セレスだけを見つめ続けている忍者は、セレスがヤンセンに対し最上の敬意を払っているようなので、セレスの機嫌を損ねないよう、あの貧相な男にも礼節を尽くしておこうと、打算的な事を考えていた。
ヤンセンは背が低く、西国人にしては小柄な十七歳のセレスよりも尚、低い。肩幅も狭く、頬はこけ、顔色もあまり良くない。口髭をたくわえた顔は端正なのだが、強烈な個性に欠け、整いすぎていて逆にめだたない。武に縁のない、ひよわそうな、地味な男なのだ。
だが、目だけは違う。しっかりと前をみすえる瞳からは意志の強さが感じられた。
セレスの両肩をポンポンと叩いてから、ヤンセンはようやくセレス以外の者に顔を向けた。
「勇者の従者の方々、心より歓迎いたします。我が家へようこそ。娘があなた方から受けた恩を万分の一でもお返しできるよう、滞在中は心をこめてお世話させましょう。ご自宅と思って、どうぞおくつろぎください」
侯爵の共通語での挨拶に対し、ナーダはインディラ式の礼をとり、シャオロンは素直に頭を下げた。ジライは片膝をついて頭を低くする。赤毛の傭兵も内心の不快は全く表に出さず、侯爵に対しそつなく挨拶をしたのだった。

「右から初代勇者ラグヴェイ様、その隣が二代目勇者ホーラン様、その隣が三代目勇者……」
セレスは満面に笑みを浮かべながら、屋敷の広間に飾られている肖像画を掌で指していった。
「うわぁ」

シャオロンは広間を見渡し、目を輝かせた。
ヤンセンがセレスの従者それぞれに案内の者と当面の世話役をひきあわせた（セレスと手紙を交わしている現当主は、僧侶のナーダにはちゃんと男性の召使を準備していた）後、夕食まで数時間、おのおの休憩をとることとなった。
シャオロンが部屋に荷物を置くのを待ってから、セレスは彼をこの部屋に誘った。歴代勇者の話を熱心に聴いてくれた少年に、女勇者は自分の聖域を見せているのだ。
広間の肖像画は全部で十二。広い間隔をあけて飾られているから、後、二十人ぐらい勇者が増えても楽に飾れそうだと少年は思った。
初代勇者ラグヴェイから順に、その肖像画を眺めてゆく。
逞しい外見の者、女性のように美しい顔立ちの者、文官めいた姿の者。勇者もさまざまだったが、皆、背に『勇者の剣』を背負って描かれているところは同じだった。
大魔王討伐の暁には、この部屋にセレスの肖像画も飾られるのか……そう思うと、少年の胸は一層、熱くなった。
そんな少年をセレスは微笑んで見守っている。いつもの白銀の神聖鎧姿だ。平時はひたすら重い『勇者の剣』は、屋敷に戻るなり、祖父ランツの部屋のもとあった場所に置いた。ランツと仲の良かった『勇者の剣』に、里帰りをさせてあげようという彼女なりの心遣いだった。
七代目勇者ロイドまで順に追ったところで、少年は一度、ぐるりと部屋の中を見渡した。肖像画の男性には、『勇者の剣』以外にも共通点がある。
「勇者様って、みなさん、金髪碧眼なんですね」
「あ？　ええ、たぶん、そう」
「え？　実際は違うんですか？」
「七代目勇者ロイド様から後の肖像画は正確なんだけど……」
セレスは部屋の右手に飾られた初代勇者から七代目勇者までの肖像画を掌で示した。

「初代様から七代目勇者ロイド様までの肖像画を見て、何か気づかない？」
「え？　えっと……」
シャオロンは七枚の肖像画を何度も見直した。
「あれ？　絵の感じが似てますね。全部、筆使いが同じなような……？」
セレスはパンと手を叩いた。
「その通りよ！さすがね、シャオロン！」
セレスはにっこりと微笑んだ。
「この七枚は全部、七代目勇者ロイド様が描かれたのよ」
「へー、ロイド様が！そういえば、ロイド様って文武両道の方でしたよね」
「そうなのよ！七代目勇者ロイド様の事を大魔王討伐に十三年も費やした無能者とそしる心無い人もいるけれど、ロイド様ってすごい方なのよ。戦争に明け暮れる各国からほとんど援助を受けられないまま大魔王討伐の旅を成し遂げた不屈の方、西国で暴れていた邪龍を倒した『龍殺し』、自伝から軍記物に法律の本それに絵本まで書いた文筆家、作曲家、その上、絵画や彫刻まで残されてるんだから」
「すごいですねえ。この絵もプロの絵描きさんが描いたみたいです。とっても、お上手です」
「実はね、邪龍がエウロペで暴れた時、侯爵家も燃えてしまったの。倉庫に所蔵してあった歴代勇者の肖像画も全部燃えて無くなってしまったので、大魔王討伐を終えられた後、ロイド様が初代様から六代目様までを描き、最後にご自分の肖像画を描かれたのよ」
「へえ」
「と、言っても、ロイド様はご先祖様の肖像画を直に見た事がなかったので、伝説とか謡、過去の文献を調べられた上で、想像して描かれた……と、いうか、イメージに合う絵を創造なさったの。六代目様のご容貌は、六代目様を知っていた方がまだご存命中だったのでその方の記憶を元に描いたからわりと正確みたい。初代様と五代

様が金髪碧眼だったのは文字として残ってるから合ってると思うの。でも、後は……」

「ああ、そういう事なんですか」

シャオロンの目は、二代目勇者ホーランの絵に留まっていた。

「だから、あまり似てないんですね、ホーラン様の肖像画」

「え？」

セレスはきょとんとしてから、ハッと目を見開いた。

「そうだったわね！あなた、英雄シャダム様の霊と交信した時、二代目勇者一行を心の眼で見ていたのよね！ねえ、シャオロン、ホーラン様ってどんな方だったの？」

「どんなって……」

シャオロンは小首を傾げた。

「とても大柄で真面目そうな方でした。この絵の通り金髪碧眼でしたが、顔はもっと面長で、目は優しそうでもっと細くて、唇ももっと厚かったです。体格の良い方だったから肩幅ももっとあったし……」

「まあ、そうだったの」

セレスはにっこりと微笑んだ。

「ねえ、シャオロン、ホーラン様の絵、描いてみない？」

「え？」

「必要な画材は揃えてあげる。東国風の筆と硯と墨が良ければ、お父様が持ってるから借りてあげるわ」

「え？　え？　え？」

「ホーラン様の本当のお顔を知ってるの、あなただけなんですもの。お願い！ちょっと描いてみてくれない？」

「え、でも、そんな……」

少年はうろたえた。

「無理です、オレ、絵なんて習ったことないんですよ」

「いいのよ。うまく描けなくても、だいたいこんな感じだってわかれば」

「そんな……」
満面の笑顔で迫ってくるセレス。少年はたじたじと後ずさり、キョロキョロと周囲を見渡した。絵の勉強などした事はないのだ。自分の下手くそな絵を見たら、セレスはきっとがっかりするだろう。
どうしよう……？何とかセレスの気を他のものにそらせないものか……と、焦っていた少年は部屋の端にある絵に目をとめ、大袈裟に声をあげた。
「セレス様、あれ！あれ！」
「ん？」
「あの絵！あちらの壁の一番はじっこの絵って、ランツ様ですよね？　セレス様のおじい様の！カルヴェル様とご一緒にケルベゾールドを倒された、先代勇者様ですよね？」
セレスは少年が指している絵に視線を向けた。
「ええ、そうよ。ランツおじい様の肖像画よ」
たてがみのような金の髪、鼻から右頬にかけて走る刀傷、不敵に構えた顔。美丈夫だが野性的な雰囲気の漂う勇者ランツの絵には、黒髪の女性が共に描かれていた。
「ねえ、セレス様！他の方はお一人の肖像画なのに、ランツ様の絵はとっても綺麗なご婦人とご一緒の絵なんですね！どうしてなんですか！って……あっ！」
少年の目は、ランツと共に描かれている女性の顔に釘付けとなった。
エウロペ風の紫の衣装をまとい、エウロペ風に黒髪を結い上げ、微笑を浮かべている貴婦人。美しく艶やかなその女性は……セレスによく似ていた。髪の色を除けば、瓜二つと言っても良い。
「エリスおばあ様よ」
「セレス様にそっくりですね……」
「ええ、そうね。よくそう言われるわ。おじい様はおばあ様をとても愛してらしたのよ。だから、この部屋に飾る絵を、これに決めたみたい。お二人は大恋愛の末に結ばれて、トゥルクの姫君だったお

ばあ様をおじい様がさらうようにエウロペに連れて来てご結婚なさったんですって」

「トゥルクのお姫様だったんですか……」

「でも、おばあ様、お母様を産んでじきに亡くなられたの。もともと、お体があまりご丈夫じゃなかったのよ」

「お綺麗な方なのに……お気の毒ですね」

「ええ……」

そのまま二人は、ランツとエリスの絵を見つめ続けた。

だいぶ時が経ってから、少年がポツリと尋ねた。

「勇者ランツ様って、どんな方だったんです？」

「え？」

「ランツ様の冒険譚は寝る前のお話でいっぱい伺いました。でも、セレス様にとっては、どんなおじい様だったんです？」

「……そうねえ」

セレスは顎の下に手をそえて、首を傾げた。

「あまり覚えていないのよね、私が三つの時に、おじい様が亡くなったから……。覚えているのは……」

「これは……凄いですねえ」

武闘僧ナーダは感嘆の声をあげた。二人の老人を護衛兵として伴って現れた当主に、書庫に案内されたのだ。護衛兵を廊下に残し、侯爵と二人で入ったその部屋は……埃と黴のすえた匂いが漂い、天井まで埋め尽くさんばかりに書棚に古書がひしめいていた。

「ほとんどが七代目勇者ロイド様の蔵書です。たいそうな読書家で、活字であれば辞書であろうが律法書であろうが料理の本であろうが何でも集められたようです」

「ご当主様は、ここの蔵書をご覧になったのですか？」

武闘僧の問いに、セレスの父は穏やかに微笑んだ。

「律法書と裁判記録のみ、若い頃に拝見いたしました」

セレスも利用しているのですか?と、聞こうかと思い、思っただけでナーダは口を開かなかった。知性と教養に欠けるあのお嬢様勇者が、古書に興味を持つはずがない。

「娘からの手紙で、あなた様もたいそうな読書家と伺っておりましたので、こちらにご案内したのです。いかがでしょう?ご興味をひかれる本はございますか?」

「はい。ざっと背表紙を見ただけでも、書名すら知らない本がとても多いです。拝見できれば、望外の幸せです」

「では、ご自由にこの部屋をご利用ください。鍵をお渡しいたします」

「感謝いたします、ご当主様」

「いいえ」

ヤンセン侯爵はにっこりと笑みを浮かべた。物腰といい雰囲気といい、貴族というよりは、本好きの人の良い司書のようだ。

「私も折を見て足を運んでいるのですが、あいにく仕事が忙しく、今は思うように本に触れる時間がとれません。年老い第一線から退いた後は、ここで読書三昧の日々を送りたいものだと思っておりますが」

「ご当主様、ご職業を伺ってもよろしいですか?」

歴代勇者を生み出してきた侯爵家の者には、軍人が多い。しかし、現当主は、どう見ても、武官とは思われない。

「巡回裁判官です」

「巡回裁判官……ですか?」

領主の専横を防止する為、エウロペでは領主の司法権を制限している。巡回裁判官が諸領を巡回し、領主の立会いの下、各地の訴訟を裁いているのだ。

しかし、巡回裁判官は非常に過酷な仕事なのだ。各領の領主と馴れ合わないよう短期間に各地を転々とし、公明正大であらん為に常に税務官の監視下に置かれる。その上、薄給。労多くして、本人の実利が少ない仕事なのだ。本来、勇者を輩出し続けている名門侯爵

家の現当主がすべき仕事ではない。
「人が定めたものの宿命ではありますが、法というものは公正ではありません」
ヤンセンは静かに笑みを浮かべている。
「エウロペの法は、支配者階級、つまり王侯貴族・聖職者の利益保護を目的とする法律です。国を支える大多数の国民は搾取されるばかりで、法律の庇護下から外れがちです。私は現行法下で可能な限り、法的弱者である国民の権利を守れるよう、年甲斐も無く巡回裁判官を勤めさせていただいているのです」
ナーダはあらためて、セレスの父親を見つめた。勇者一族の当主とは思えないひよわな外見だが、ヤンセンは尊敬に値する人物のようだ。
「ご立派なお志ですね、ご当主様」
「いやいや、とんでもない」
ヤンセンは慌てて茶色の頭を描いた。
「私など、志のありようが間違っている小物ですよ。ランツ様にもよく叱られました。現行法を本気で憂いているなら、法律を根本から変えてみやがれと」
ヤンセンの笑みが苦笑に変わる。
「でけぇことに挑む前から逃げているカスが国士を気取るんじゃねえとも怒られましたっけ。本当に、私にそれだけの器量があれば良かったのですが……政治は苦手で」
笑みは苦いものだったが、過去を懐かしむ顔は嬉しそうにも見える。
「……ランツ様を尊敬なさってるのですね」
ヤンセンは背筋を正した。
「ええ。ご立派な方でしたから」
「……でも、お若い頃は、ご当主様もご苦労なさったのではありませんか？」
「は？」

「侯爵家に婿養子に入られたのですから、相当な事がおありだったでしょう？　私の伯父は、勇者ランツ様の従者、僧侶ナラカです。ですから、まあ、その……伯父を含め勇者一行のあまり褒められたものではない素行とか、ろくでもない伝説とか、かなり知っているのですが」

「ははは」

ヤンセンは楽しそうに笑い、頭を掻いた。

「確かに、ランツ様は、世にいう『勇者』に当てはまらないところがありました。しかし、それはランツ様の器が大きすぎて他の者には理解できなかった、それだけの事です、あの方は真の勇者であり、人格者でした」

「人格者……」

異を唱えたそうな武闘僧に、侯爵はフフと笑った。

「あの方の噂をよくご存知ならば信じがたいでしょうが、そうだったのです。あの方は文官への敬意も心得ておられました。ご自分には無い才能だから、と。私はこの通り根っからの文官ですが、あの方は私を勇者一族の婿に迎えてくださいました。剣すらまともに握れない私をですよ。あの方は……とてもお心が広く、子供のように純粋な方でした」

「おじい様はね、お酒が大好きだったの。お水の代わりにお酒をガブガブ飲んでたわ。おそばによると、すっごくお酒臭かったから、私もお姉さまも遊び半分でキャーキャー喜んでおじい様から逃げ回っていたわ」

幼い頃のセレスを想像し、少年は笑顔を浮かべた。金の髪の小さな愛らしいセレスが、肖像画の男性（セレスと共に過ごした頃のランツはもっと年をとっているはずだが、シャオロンの想像の中ではこの絵のままだった）と一緒に遊んでいる姿を思い浮かべた。

「おじい様、酔っててもとっても足が速かったから、ドレスの私達

じゃ、すぐ追いつかれちゃったわ」
「ドレス……」
そうか、と、シャオロンは気づいた。セレスが男装をしだしたのは、ランツの死後なのだ。ランツに次代勇者に指名された、その後からなのだ……
シャオロンの想像ではドレスの形状は曖昧だったけれども、それでも……幼い日のセレスを心に思い浮かべ、少年の胸は痛んだ。ふわふわのドレスを着たかわいらしいセレスが、ランツの死後、いなくなってしまうのだ。
セレスは少年の顔に暗い表情が浮かんだのにも気づかず、話を続けた。
「おじい様に捕まると、お髭でジョリジョリ頬ずりされちゃうの。痛くて、くすぐったいのよ。その後はキスの嵐になっちゃうし。すっごくしつこいの。嫌んて暴れても、なかなか離してくださらないんだもの」
セレスはニコニコ笑っている。
楽しそうに祖父との思い出を語る彼女に、少年は少し救われたような気持ちとなった。
「私、『愛しいサファイア』とか『子猫ちゃん』って呼ばれてたみたい。私は覚えてないんだけど、お姉さまがそう教えてくれたの。お姉さまはいつもお名前で呼ばれてたから、一度、『セレスばかり愛称でズルいって！』おじい様に怒ったらしいの。そしたら、おじい様、『おまえだって愛しているよ、愛しいガミガミちゃん』って言って、お姉さまが元通り名前で呼んでって怒るまで、『ガミガミちゃん』って呼び続けたんですって」
「……面白い方だったんですね」
「陽気で明るくてパワフルな方だったわ。お声もとても大きかった。二部屋ぐらい離れてても、おじい様の声、よく聞こえたもの。何事にもおおざっぱで、召使が何かしくじっても、その場では文句を言っても、それでスッキリして後はケロっと忘れちゃう。そんな方だ

ったみたい。だからかしら、侍女達からは好かれてたわ。大きくなってから、ランツ様はご立派な方でしたって繰り返し言われたもの。みんな、おじい様のファンみたいなの、おじい様のお話する時、うっとりと頬を染めるし」

「へええ」

「ただ、おじい様、お母様に対しては、すっごく気をつかってたそうよ。私、小さかったからよく覚えてないんだけど、お姉さまのお話によると、お母様をいつもハラハラ見守ってらしたんですって。何事においても先回りをして、お母様の代わりに何でもやってあげようとして……腫れ物を扱う感じ？そんな感じだったみたい」

「なぜ？」

「お母様ね、生まれつき心臓の病を抱えてらっしゃったの。二十まで生きられない、子供も産めないと、お医者様に宣告されていたんですって。でも、お父様と出会って、お姉様と私を産んで二十二まで生きたの。おじい様が亡くなってから二年後にお母様も亡くなったんだけど……本当、よかったわ。亡くなったのがおじい様の死後だった事は。おばあ様だけじゃなくてお母様まで看取ってたら、おじい様の心は砕けたかもしれないって、お父様が……。お母様のご葬儀の前に、お父様が私達に『サリアは偉い。本当によく頑張った。おまえ達も母を誇りに思いなさい』っておっしゃったんですって。小さかった私は泣いてばかりで、その話を聞いた事すら覚えていないのだけれど、大きくなってからお姉様が教えてくれたの」

「よい……ご家族ですね」

セレスはにっこりと微笑んだ。

「ええ。亡くなったおじい様もお母様も、お父様も、お姉様も、お義兄様も、甥っ子のグスタフも、皆、私の誇りよ」

「最初……セレス様のお父様にお会いした時、あれ？　っと思ったんですけど」

「ん？」

「侯爵家に年頃の男性がいないからセレス様が『勇者の剣』の守り

手になったってうかがってたから、お父様がいらっしゃるのならお父様が守り手になればいいのに、って思っちゃって」
「ああ、それは無理よ」
セレスはかぶりを振った。
「お父様、婿養子だもの。初代勇者ラグヴェイの血筋ではないから、『勇者の剣』に触れたら雷を落とされてしまうわ」
「ええ。お話をうかがってるうちに、ランツ様のお子様はセレス様のお母様の方だってわかりました」
「お父様もお義兄様も婿養子よ。勇者の家系を絶やすわけにはいかないから、お母様もお姉様もお婿を取ったのよ」
「セレス様のお父様とランツ様って、どんな感じでした？仲良しでした？」
武官めいたところのないヤンセンと先代勇者の関係はどんなだったのだろう？　素朴な疑問だった。
それに対し、セレスはけろりと答えた。
「おじい様はお父様を、いつも殴って蹴っ飛ばしてたわ」
「え――？」
面食らって、少年はセレスの言葉を繰り返した。
「いつも殴って蹴っ飛ばしてた？」
「ええ」
セレスは平然としている。
「喧嘩……してたんですか？」
「ううん。ふざけてたんだと思う。お父様、いつもニコニコ笑いながら、蹴られたり殴られたりしてたから」
「ああ……そう、ですよね、きっと、そうなんだ、うん」
「全然、抵抗しなかったもの、お父様。スキンシップの一種だったのよ、きっと」
「ですよね」
「だけど、私、調子に乗って、おじい様と一緒にお父様をポカポカ殴ったり蹴ったりしてたのよね、何となく覚えてる」

「……セレス様」

勇者の家　2話

ヤバい奴等に捕まっちまった……アジャンは溜息をついた。
あてがわれた豪奢な部屋に馴染めず、ぶらぶらと庭を歩いていたが為に、馬小屋の前でサイコロ賭博をしていた四人の老人に遭ってしまったのだ。
その時、そのまま行過ぎれば良かったのだが……つい、何となく当たりの目を口にしてしまったせいで、『セレス嬢様の従者にしちゃ面白味のある男じゃねえか、遊んで行きな』と、強引に賭博&酒宴に誘われたのだ。
サイコロ賭博など十のうち九は正解できるのだが、勝ち過ぎると後で絶対に面倒になるので、アジャンは負けすぎない程度に当たり目を言うようにした。
昼間っから酒や賭博に興じている老人達は、ヤクザ者独特の雰囲気を漂わせていた。若い頃は相当ヤバい事をして遊んでいたと思われる。しかし、不思議なことに、老人達はこの屋敷の使用人なのだ。玄関ホールにいっぱい居た熱血感動体質の召使達とはあまりに異種であったが。
それに、馬小屋の傍にはいるが、馬丁にしては身なりが良すぎる。とはいえ、護衛兵にしては所持している武器（えもの）が変だ。鞭にナイフに杖（たぶん、仕込み杖だ）ときては。
「なあ、ジイさん。あんたら、セレスの親父さんの私兵か何かか？」
そう尋ねると、老人達はゲラゲラと笑った。
「冗談じゃねえや。俺達ぁ、うすのろヤンセンなんざに仕えちゃいねえよ」
「まあ、面倒をみちゃいるがな」
「あいつは、まあ、俺達の舎弟ってとこだな」
「ちがいねえ。俺達のご主人様は、後にも先にもランツ様、ただお一人！俺達はランツ様のご遺言を守って、ヤンセンの馬鹿を護衛し

てやってるのさ」
「ああ、なるほど」
赤毛の戦士は頷いた。
「あんたらはセレスのジイ様の家来なんで、屋敷の召使達とは毛色が違うのか」
老人達は再び愉快そうに笑って、アジャンに酒を勧めた。
「あんたも、びっくりしたろ？屋敷の若い奴らはイカレてるからなあ」
「ヤンセンの馬鹿を崇めてるんだぜ、馬鹿も馬鹿、大馬鹿だぜ」
「若い使用人は、みんなヤンセンの法のお裁きで、家族親類縁者や本人が救われた身なんだ。で、感謝感激雨霰ってなもんで、この屋敷の押しかけ召使をやってるのさ」
「アホで助平なヤンセンを尊敬しているだけで、あいつら、もう詰んじまってるぜ」
「なあ、あんた、ヤンセンをどう思う？」
「……あれこれ思えるほど、知らん」と、アジャン。
「じゃあ、あいつの悪党ぶりも知らんのだな？」
「悪党なのか？」
「そうだ！」
四人は声を同じくして叫んだ。その中でも一番年長そうな老人（名乗ってくれないので、老人Ａとしておこうとアジャンは思った）が、詰め寄ってくる。
「ヤンセンはな……ランツ様のお留守を狙ってこの屋敷に入り込んで、ランツ様の一粒種のサリア様を……」
老人Ａはそこで、ぐっと喉を詰まらせた。
「サリア様を……」
老人Ａの目に涙がきらめく。酒の助けもあるのだろうが、相当、自分に酔っているようだ。
「サリア様を手籠めにしやがったんだ！」
「ちきしょう！あの助平め！」

「思い出す度に腸が煮えくり返るぜ！」
「ランツ様も、さぞご無念であったろう。サリア様は、それはおかわいらしく、やさしく、天使のようなお方だったのに……あんな馬鹿の毒牙にかかってしまわれて……」
と、口々に叫ぶ老人達。この際、老人B、老人C、老人Dにしておこうとアジャンは勝手に決めた。
「おい！あの忌まわしい事件は、てめえらのせいだからな！てめえらが一ヶ月もランツ様を連れまわさなきゃ、悲劇はまぬがれた！」
と、老人A。
「何だとぉ！悪いのは、留守居のおまえらだろうが！ランツ様からサリア様の護衛を頼まれてた、おまえらが悪い！」と、老人B。
「てめえらが、貧乏男爵家の三男坊を屋敷に招き入れなきゃよかったんだ！」と、老人C。
「しょうがねえだろ！サリア様が『あの方をお招きして』っておっしゃったんだぜ？　ヤンセンの馬鹿が一週間も門の前に立ってやがったんだ！サリア様の目にも留まるわ！」と、老人D。
「何で、サリア様のお目に留まる前に、あの馬鹿、シメてどっか遠くに捨てて来なかったんだ！」と、老人B。
「法律の勉強がしたいだの、ロイド様の蔵書が拝見したいだの、まともなゴタク並べてやがったんだ、あいつ。わしらの一存じゃ、半殺しまではできんわ」と、老人A。
「やっときゃよかった……」と、老人D。
「うまい事言って屋敷にあがりこんで、女を襲うとは、最低野郎め！」と、老人B。
「下級貴族の三男坊のくせに、名門侯爵家令嬢をかっさらいやがって！」と、老人C。
「あの馬鹿が屋敷に乗り込んできた時、すぐにランツ様と連絡がつけば、悲劇は防げたものを……」と、老人D。
「仕方ねえよ、あの時、ランツ様は前人未到の記録に挑戦なさっておいでだったんだぜ」と、老人C。

「そうじゃ、エーゲラの国中の歓楽街の全ての店の全ての娼婦と男娼をモノになさっておられたのだ。ランツ様といえども、一ヶ月はかかるわ」と、老人B。

「移動時間が結構かかるからのう」と、老人C。

「コマすだけなら、あの方のムスコにかかれば、あっという間なのだが」と、老人B。

「ランツ様が記録に挑まれてお忙しかったのならば、お側に仕える者が気をきかすのがスジじゃろうが！テメエらが連絡先を知らせなかったのが悪い！留守居のわしらはランツ様がエーゲラにいらっしゃるのすら知らなかったんじゃぞ！」と、老人A。

「エーゲラで娼館制覇中などと連絡できるか～！わしらの文がサリア様の目にとまったら、わしらの命は無いんじゃぞ」と、老人B。

「なにせ、ランツ様はサリア様を無垢に育てておられたからのう。色町めぐり中など伝えられんわい」と、老人C。

「そう、サリア様は穢れなき少女だった。じゃから、あのヤンセンの毒牙にやすやすと……」と、老人D。

「く」と、老人B。

「くそぉ、ヤンセンめ」と、老人A。

「我らはあの馬鹿を決して許さぬぞ」と、老人C。

肩を抱き合っておいおいと泣く老人達を見つめ、アジャンは大きく溜息をついた。やっかいなジジイどもに捕まった身の不運を嘆きつつ……

「お父様ってね、スキンシップにはおおらかなのよ。おじい様に対してだけじゃなく、誰に対してもね。護衛役のボッチェおじいさん達、昔から何かというとお父様を小突いたり蹴ったりするんだけど、いつも笑って許してらっしゃるの」

「護衛役のボッチェおじいさん？」

「ああ……お父様にはね、常に護衛役がついているの。お父様は公

正な裁判をなさるから、貴族や聖職者や富豪の権利を損なう判決を下される事もままあるのよ。だから、今まで、逆怨みした馬鹿な人達に数え切れぬほどお命を狙われているのよ」

「……そうなんですか」

「ボッチェおじいさん達、六人のおじいさんが交替で、必ず二人はいつもお父様を護衛しているの。この屋敷の中でも誰か二人はお父様につきそっているはずよ。お父様、武術はてんで駄目だから」

セレスはフフフと笑った。

「ボッチェおじいさん達はね、昔、町の『ふだつきの不良』だったんですって」

「『ふだつきのふりょう』ってどういう意味ですか？」

「ん～、よくわからないけど、町で軽犯罪を犯していたみたい。それで、ランツおじい様がボッチェおじいさん達を『シメた』んですって」

「『シメた』って何ですか？」

「ん～、お説教したって事だと思う。その日からずっと、ボッチェおじいさん達はランツおじい様の家来になったのよ。おじい様の死後もおじい様だけを主人と決めて、おじい様の遺言通りに、お父様の護衛を続けてくれているの。ボッチェおじいさん達が居なかったら、お父様、もう百回ぐらい暗殺されてるんじゃないかしら」

「忠義の部下なんですね」

「おじい様の忠義の部下ね。お父様のことは……嫌ってはいないみたいなんだけど、すぐボカスカ殴るのよね。私やお姉様やグスタフにはすごく礼儀正しくて優しいのに、何故かしら？」

「そういえば、セレス様、セレス様のお姉様や旦那様、甥御様って、確か、ご一緒に暮らしてらっしゃるんですよね？先ほどは、玄関ホールにいらっしゃらなかったみたいだけれど」

「みんな、今、王宮よ」

「え？」

「ケルベゾールドが復活した後、お姉様達は王宮に移られたの。魔

術師協会の精鋭達が張る結界の中、次代勇者のグスタフは聖騎士訓練を受けているのよ」

「へええ」

「私の旅が失敗に終わったら、跡を継ぐのはグスタフしかいないもの。まだ四つだけど、エウロペでは王族に次ぐ重要人物として扱われているわ。勇者の血を残せるお姉様が、その次の重要人物ね」

シャオロンは知らない事だが、セレスの従者をエウロペ国王が募った時、魔術師協会はセレスの従者を出す事を拒否していた。次代勇者グスタフの保護に魔術師協会は全力をもってあたりたいという理由をもって。

しかし、実際のところは、セレスが魔術師協会未所属の大魔術師カルヴェルの弟子である事への反発と、海のものとも山のものともつかぬ女勇者になど人を割くのも惜しいという侮りからの拒絶だという事は、父から教えられてセレスも理解していた。

旅立ちの前は、魔術師協会を含むさまざまな組織、国家、宗教団体から、軽んじられている事が悲しく、大魔王討伐に期待されていない事をつらく思えたものだが……

セレスは目の前の少年を静かに見つめた。

エーゲラ一(いち)の戦士アジャンとインディラ教次期大僧正候補のナーダの二人だけを伴って始めた旅も、東国の武闘家の少年シャオロンと、東国忍者ジライが加わって、従者は四人となっている。セレスは四人を歴代勇者の従者にも劣らぬ超一流の戦士だと思っている。

従者達の助けを借りて、大魔王四天王のうち三人を倒し、シャイナ・インディラ・トゥルクにおける大魔王の企みは阻止した。後は四天王の最後の一人を倒し、ケルベゾールドを滅ぼすのみ。その為にも、明日からの大魔王の本拠地探しを頑張らねば！と、セレスは決意を新たにした。

「シャオロン、明日は王宮に行くわよ」

「はい、セレス様」

「お姉様達にもお会いしたいけど、まずは勇者として働かなきゃ！

国王陛下に拝謁して、大臣のお歴々や学者さん達にも大勢会って、今後について話し合うのよ。大魔王の本拠地探しの旅をどういう形で進めるか、これから先は、私の独断だけじゃ無理だから。北方やアフリ大陸に向うのなら許可書が必要だし、どちらもおいそれとは出ないものなのよ。特に北方はねえ……。行けるものなら、バンキグに行きたいのだけれど」

「セレス様……」

「ともかく、明日から忙しくなるわ！魔術師協会にも顔を出さなきゃ！絶対、怒らない！絶対、冷静に！何、言われても、勇者らしく！笑顔で！私も頑張るわ！シャオロン、あなた、私の供をしてね！」

「はい、セレス様！」

「だからね、シャオロン」

セレスはにっこりと微笑んだ。

「ホーラン様のお顔、今日中に描いてもらえるかしら？」

「う」

まだ覚えてらっしゃったのか……シャオロンはがくっと頭を垂らした。

屋根裏や建物の陰など賊が侵入しやすい箇所に罠を仕掛け、屋敷中をざっと探索し敵の気配が無い事を確認し終えた忍者ジライは……趣味に走る事にした。

なにしろ、この屋敷はセレスの生家。彼女にまつわるお宝の宝庫なのだ。最高の宝島『セレスの自室』は最後の楽しみにとっておいて、まずは外堀から攻めようと、ジライはヤンセンの自室に向った。

娘を持つ両親はえてして親バカとなりやすいもの。しかも、セレスは絶世の美少女なのだ。その親ともなれば、デレデレの甘々となり、娘からの贈り物や娘との思い出の品を後生大事に抱えている可能性は非常に高い。

仕事関係の法律の本と書類に埋もれたヤンセンの部屋。

しかし、ジライは、クローゼットの奥、ベッドの下、本棚の上、続き部屋の衣装部屋の奥から次々とお宝を発見していった。ヤンセンは几帳面といおうか、分類バカといおうか、収納袋や箱それぞれに二人の娘や妻の名前を書いていたので、どの中身がセレスのものかはすぐにわかった。

セレスの幼少のみぎりの絵と木彫りの彫刻は、ダイナミック（大雑把）で、その稚拙さ加減がかわいらしくってたまらなかった。セレスからの贈り物と思われる、押し花やらドライフラワーもあった。落書きだらけの綴り方の本、折れた練習用の剣、壊れた乗馬鞭……。

お宝を眺め、ジライはほぉっと溜息をついた。

次にジライは巨大なクローゼットの奥の奥にあった大きな箱を開けてみた。中身は薄汚れた大きな茶色の熊のぬいぐるみ。幼児並みの大きさがある。セレスの昔のお気に入りなのだろう。

「む！」

近づいてくる二つの足音に気づき、忍者はすばやく姿を消した。天井裏に潜み、息を殺し、気配を絶つ。

足音は徐々に大きくなり、そして、ヤンセンの部屋の扉の前で止まった。ノックの音が響く。

「お父様、いらっしゃいます？硯と筆と墨をお借りしたいのですが」

（やはり、セレス様か。もう一人はシャオロンだな）

覆面の下のジライの顔が渋いものになる。つい調子に乗って漁りすぎてしまった。ヤンセンの部屋の中には、箱やら袋があちらこちらで開けられ、邪魔でどけたヤンセンの服やら書類も散乱している。もとどおりに片付けるのには数秒では無理だ。

入室は断固阻止すべきだ。

廊下に回って天井から飛び下り、いつもの要領でジライはセレスの背後をとり、その耳に息を吹きかける。

「セレス様、お父様はお部屋には居られませんぞ」

「うっ！きゃあぁぁぁぁぁ！」

セレスにぶん殴られ、ジライが廊下をゴロゴロと転がってゆく。

唖然と忍者を見送るシャオロン。潔癖な性格の女勇者は鳥肌を立てながら、涙目で仲間に怒鳴りつけた。

「私の背後に立たないでっていつも言ってるでしょ！いい加減にしてよ、もう！」

ロイドの蔵書の山を見渡すヤンセンの顔には微笑が浮かんでいた。この部屋はセレスの母――サリアとの思い出の部屋なのだと、当主は語った。

「サリアは心臓に疾患があり、あまり丈夫な体ではありませんでした。屋敷からほとんど出る事なく、ロイド様の蔵書を友に暮らしていたのです。出会った時、彼女はまだ十三歳でしたが、とても聡明で、法にも詳しく、古文にも精通していました。駆け出し裁判官だった私はエウロペ建国以前の律法書すらあると評判のロイド様の蔵書がどうしても見たくてこの屋敷を訪れ……サリアと出会ったのです。真面目だけが取り柄の私に何故かサリアは好意を抱いてくれ、私達は共に古書を読み、意見を戦わせ、理想の法について語り合いました。時には喧嘩もしましたが……じきに互いになくてはならない存在となりました。出会ってから数日で、二人は恋に堕ちたのです」

「ランツ様は何と？」と、ナーダ。

「それは、もちろんお怒りになられましたよ。烈火のごとく。それから、まあ、いろいろありましたが……最後にはサリアとの仲を認めてくださいました」

ナーダは人のよさそうなセレスの父を見つめた。

勇者ランツには怒りにまかせて盗賊を百人斬っただの、ある少女を下世話な手段で辱め自殺に追い込んだ貴族をなぶり殺しにしただの、暴力的で物騒な噂話が多い。ヤンセンは語ろうとはしないが、ランツから愛娘を盗(と)っと以上、相当、怖い目にあっているはず。

だが、見るからに非力そうなこの男は、勇者に対し一歩も引かな

かったのだろう。どんなに脅されようとも、愛を貫く為に戦ったに違いない。だからこそ、勇者一族の家に婿として迎え入れられたのだ。

「なあ、ジイ様方、そんなにセレスの親父が憎いのなら護衛するのやめちまったらどうだ？」

と、アジャンが尋ねると、老人Ａ（本名はボッチェ）はむっとした顔で怒鳴った。

「わしらはヤンセンを護衛してるんじゃねえ！ランツ様が死の床で『サリアを寡婦にするなよ』っておっしゃったからよぉ、仕方なくあの馬鹿を守ってやってるんだ！」

「じゃ、今は何で守ってるんだ？確かセレスの母親はずいぶん前に亡くなってるよな」

「ぐっ」

老人Ａ（本名はボッチェ）は顔を赤く染めた。

「今は嬢様方の為だ！サリア様の忘れ形見の嬢様方を父無し子にできるかっ！」

と、言ってもセレスももう十七。その三つ上の姉は二十歳のはず（しかも、婿も取っている）。父親が亡くなって困る年齢ではない。何のかんの言ってこの老人達は、セレスの父親を気に入っているのだろう。だから、護衛を続けているのだ。

なら、酒飲んで絡んでくるな……アジャンは溜息をついた。

勇者の家　3話

「巡回裁判官をお幾つまで続けられるのですか？」
ナーダの問いに、ヤンセンは少し間をおいてから答えた。
「少なくとも、後十年は……」
「ご立派ですね」
「とんでもない。孫のグスタフが育つまで、セレスは嫁ぐ事すらできません。『勇者の剣』を振るえるただ一人の人間ですから。あの子の旅が無事に終わる事を私は信じて疑っていませんが……帰国後もあの子は勇者であり続けねばならないのです。娘が女の幸せを全て捨てて、今世の勇者として頑張っているのです。私も正義の為に働き続けねば、あの子に申し訳ない」
「ご当主様……」
「あの子が良縁に恵まれどこぞに嫁いだ後に、進退を考えようかと思っています。私の考えに賛同してくれる若手裁判官も増えてきています。後進がきちんと育っていれば引退し、読書三昧の老後を送ろうかと」
「ご勇退後、ロイド様の蔵書を心ゆくまでご覧になられたら、是非、インディラにおいでください」
ナーダは僧侶にふさわしい品のある微笑を浮かべた。
「総本山の書庫も、ここ同様、貴書の宝庫です」
「それは素敵だ」
「私の名で紹介状を書いておきますね」
「ありがとうございます。では、その手紙、書けましたらセレスにお渡しください」
ヤンセンは頭を掻いた。
「明日から、私、ウエスコ地方の巡回に向いますので」
そうと聞き、ナーダは頭を下げた。
「お忙しいところ、私の為に、すっかりお時間をとらせてしまいま

したね。すみませんでした、どうぞ、セレスのもとへ」
「いや、まあ」
困ったようにヤンセンは頭を掻いた。
「時間があっても、あの子とはそう話さないと思います」
「え？」
「何と言いますか、あの年頃の娘とは、その、何を話してよいものやら……子供の頃はもう少し私的な会話もできたのですが、このごろは、まったく……。決して仲が悪いわけではないのですが、会えば二人とも妙に構えてしまって」
「……そうですね」
玄関ホールでの二人のやり取りを思い出し、ナーダは頷いた。ヤンセンとセレスは熱血師弟のようだった。とても、久しぶりに会った父と娘には見えなかった。
「昔から私はあまり屋敷に居りませんでした。セレスは私の仕事に敬意を表してくれていますが、父親としての私はあの子から遠い存在でした。剣の修行に明け暮れ泥まみれになっているあの子に、私は何もしてやれなかった。助ける事も慰める事も、何も……」
そこで、ヤンセンは苦い笑みを浮かべ、言葉を続けた。
「他人行儀となってしまっても仕方ありません。ほとんど交流が無かったのですから。あの子はいつも、私の前ではお行儀の良い勇者として振舞います。会う度に、かわいそうなほど気を張っているのです」
「それは、自分をよく見せたいからでしょう」
「え？」
ナーダはにっこりと笑みを浮かべた。
「ご先祖様の勇者様達と同じくらい、ご当主様を尊敬しているから、あのように緊張してしまうのでしょう。めったにお会いできない相手だからこそ、良いところを見てもらいたいのですね」
「いや、それは……」
「お気づきになられません？、正義の為に邁進するセレスはあなた

様にそっくりです。あなた様を慕い、心から愛しているのですよ」
ヤンセンは息を呑み、武闘僧を見つめた。しばらくしてから弱々しく笑い、そうだと良いのですが、と、又、頭を掻いた。
と、そこへ、ノックが響く。
「ヤンセン、セレス嬢様だ、開けていいか？」
護衛役の老人からの問いだ。主人に対して、ずいぶん横柄な口をきくと、ナーダはいぶかしく思った。
「ああ、通してくれ」
シャオロンとジライを従えて女勇者が、書庫へと現れる。
「お父様、やっぱり、このお部屋でしたのね……て、あら？ナーダ、あなたもいたの？意外ね。こんな所で何してるの？」
どうしてこうセレスは、言葉の選び方に無頓着なのだろう。ナーダは眉をひそめた。悪意がまったく無いのはわかるのだが。
「ここで拳法の練習でもしているように見えます？」
「見えないけど……」
喧嘩を売ってもしょうがない。ナーダはわかりやすく女勇者に説明した。
「私が読書好きだとご当主様に手紙で知らせてくださったそうですね、ありがとう、セレス。この部屋の鍵もお借りできる事になりました。滞在中は、ここを利用させていただきますね」
セレスの顔がパッと輝いた。
「そう！よかったわ！インディラの総本山の書庫の本を暗記しちゃうような、あなただもの！絶対、この部屋、気に入ると思ったの！あなたの役に立てたのなら嬉しいわ！」
無邪気に喜ぶセレス。何の裏表もなく善意のみでつき進む彼女はナーダにとって……女性ではあったが、不快な存在ではなくなっていた。愚かだと思い、呆れる事は未だに多々あったが。
ナーダに対してニコニコと笑みをみせてから、セレスは父親に顔を向けた。
「お父様、東国の墨と硯と筆を貸してくださいませんか？」

「墨と硯と筆……？　おや、何処にしまったかな。最近、使ってなくてねえ」
「……机の引き出しの上から三段目」
と、ぼそっと呟いたのはジライだった。忍者はハッとして覆面の下の口を押さえた。が、時、既に遅かった。
「え？　何でジライがそんな事を知っているの？」と、セレス。
「……」
忍者は四方を見渡し、前方の書棚を指さした。
「セレス様、あそこを！」
「え？」
全員の視線が一斉に書棚へと向く。
しかし、埃をかぶった本が並んでいるだけで書棚に異常はない。
「なによ、ジライ、どうしたの？……あっ！」
セレスが振り返った時には、背後に居たはずの忍者ジライの姿は忽然と消えていた。

「なによ、これ！」
荒らされたヤンセンの部屋を見渡し、セレスは怒りの声をあげた。
全ての引き出し、全てのクローゼットの扉が開き、ヤンセンの服やら収納箱やら袋やら本や書類やら、床の上にいろんな物が散乱している。泥棒が入った後のようだ。
「ジライの仕業ね！まったく、もう！」
「ジライさん、きっと情報収集をしてたんですよ、情報収集が忍の本分ですから」と、シャオロン。
いや、違う……ヤンセン所蔵のセレス所縁（ゆかり）の品を漁って悦にいっていたに違いない……武闘僧は気づいていた。が、敢えて口を閉ざす事にした。
「お父様、ごめんなさい！」
セレスは父親に頭を下げた。

「私の従者がご無礼を働いてしまい、すみませんでした。お部屋をよく調べて。何か無くなっているものがあったら、私が責任をもってジライから」
「いや、大丈夫だろう」
「え？」
「おまえの従者が盗みを働くはずがない。何か理由があってこの部屋を調べていただけだろう」
「でも……」
「セレス、もっと自分の従者を信じなさい」
「はい……ごめんなさい、お父様」
荒れた部屋を見渡していたセレスの目が、クローゼットの前に止まる。
「あ！」
蓋のあいた、大きな箱が床の上に転がり……
大きな熊のぬいぐるみがある。クローゼットの扉の陰に隠れるように、床の上に座っている……
「パティ！」
走り寄り、セレスは熊のぬいぐるみを抱きしめた。
「パティ……」
五才ぐらいの子供の大きさの熊を、セレスは愛しそうに抱きしめた。
シャオロンとナーダが顔を合わせる。あのぬいぐるみは、セレスにとってとても大事な物のようだ。
「……パティ、お父様が取っておいてくださったの？」
「ああ……うむ」
真っ赤な顔でヤンセンがひっきりなしに頭を掻く。
「その、おまえの部屋に最後まで残っていた人形だったから、捨てるに忍びず……」
「……捨てなきゃいけないと思ってたの、正式に聖騎士修行を始めた時に……。十才にもなってパティが居なきゃ眠れないなんて、格

好悪すぎるから……大好きなお友達だったけれど、大人になるにはぬいぐるみを捨てなきゃと思い込んで、それで……。後でとても後悔したわ。大切なお友達をゴミにしてしまっただなんて……最低だって。ずっと悔やんでいたの」

セレスは父親に抱きついた。

「ありがとう！お父様！」

「セレス……」

「大好きよ、お父様！」

「……」

ヤンセンは自分よりも背の高い娘を、そっと抱きしめた。

「私もだよ、セレス……おまえを愛しているよ」

慣れない西洋式画材を使うよりはマシだと墨と筆と硯を借りたものの、やはり、うまく描けない。広間に机を運び込み、ロイド作の二代目勇者の肖像画を何度も何度も眺めつつ、シャオロンはホーランの似顔絵を描こうと頑張ったのだが……どう見ても幼児の落書きレベルだ。

両手を組み合わせ、わくわくと待っているセレス。

侯爵家の先祖の絵をセレスの従者が描くと聞いて、興味津々といった顔でたちあっているヤンセン。

二人の期待がシャオロンに重圧としてのしかかっていた。

腕で囲いをして隠れながら絵を描く少年は、泣きそうな顔をしていた。武闘僧ナーダはやれやれと溜息をついた。

「本物のホーラン様は、あの肖像画より、肩幅はもっと広く、面長、唇は厚く、目は細いのですね、シャオロン？」

「あ、ええ、そうです」

ナーダは机の上の羽ペンを手にし、積みあがった紙の束から一枚をとって、インク瓶を開けると、さらさらとペンを走らせた。

「……こんな感じですかね？」

ナーダは描きあがった絵をシャオロンに見せた。
「うわっ！」
少年は目を見開いた。ナーダの描いたペン画は、肖像画よりもずっとホーランに似ていた。
背後から覗きこんだセレスとヤンセンも感嘆の声をあげた。線こそ少なかったが、実に的確に形をとらえた絵なのだ。、
「すごいです！ナーダ様！この絵、ほとんどホーラン様にそっくりです！」
「どこが違います？」
「えっと……本物のホーラン様はもうちょっと目尻が下がっていて……」
「少々、垂れ目、ね」
「それと……そうだ！顎がもう少し角ばってました！」
「じゃあ、こうですね」
ナーダは一分もかけずに、二枚目の絵を描き上げシャオロンに手渡した。シャオロンが破顔した。
「そっくりです！ホーラン様そのものです！さすが、ナーダ様！」
「それは良かった」
武闘僧もにっこりとシャオロンに微笑みを返す。
セレスは頬をゆるませ、シャオロンの手の中の絵を食い入るように見つめていた。ご先祖様に憧れているセレスにしてみれば、その絵は、金銀財宝よりも遥かに価値のあるものだった。絵から目をそらせないまま、セレスは、
「意外ね～ナーダ、あなたに絵の才能があったなんて」
と、又、武闘僧のご機嫌を損ねるような言い回しを使ってしまう。
「訂正してください。私には絵の才もあるんです」
「……そうだったわ。ごめんなさい。あなた、大僧正様に気に入られる為に、学問も魔法も武術も懸命に学んで何事にも超一流の実力を身につけたのよね。絵の才なんて、あなたの特技の一つにしか過ぎないのよね」

「その通りです」
何かを描きながら偉そうに答える武闘僧。
ちょっぴりムっとしていたセレスに、ナーダは描き上がった三枚目を手渡した。
「はい」
「え？て！えぇぇっ！これって！」
セレスは口元を左手で覆った。
「これ……貰ってもいいの？」
「私の事、ご当主様に知らせてくださった事へのお礼です。あなたが気に入るかと思って描いたのですが……」
武闘僧は肩をすくめた。
「要らなきゃ捨てちゃってください」
「要るわ！要るわよ！」
セレスは絵を見つめ、とろけるような笑みを浮かべた。
「……ありがとう、ナーダ、嬉しいわ」
東国の少年と女勇者の父も絵を覗き込み、溜息を漏らした。
羨ましそうに絵を見つめる少年に、武闘僧は同じ絵をあっという間に描き上げて渡し、少年を喜ばせた。
「ご当主様にはよろしければ、こちらを……」
絵を受け取ったヤンセンは、思わず頬を緩めてしまった。
絵には……ヤンセンとその隣に共に立つセレスが描かれていた。
セレスは愛らしく微笑んでいる……
明日からの巡回の旅に、この絵を忍ばせて持っていこうとヤンセンは決めた。

その夜、寝る前に、セレスはベッドの横の椅子にパティを座らせた。本当は昔のように抱いて寝たかったのだが、長い間洗っていないので、召使に止められたのだ。
パティの後ろのサイドテーブルの上には、今日、ナーダから貰っ

たペン画を額縁に入れて飾っている。
その絵の中で……鎧姿のセレスは、アジャン、ナーダ、シャオロン、ジライの四人に囲まれて幸せそうに笑っていた。
セレスにとってその絵は、広間のご先祖様の肖像画と同じくらい大事な絵となっていた。
絵とパティ。
愛するものに囲まれ、幸せな気分に浸ったまま、セレスは瞼を閉じた。

その頃……
「もう一軒！もう一軒いくぞ、若いの！」
「次の店は、ウハウハのこれもんの別嬪さんが居るんじゃ！」
「エウロペ一の名店だ！奢ってやるからついて来い！」
「夜はまだまだ明けねえぞ！」
夕方、老人Cと老人Dは仕事の時間だといなくなったのだが、代わりに老人Eと老人Fがジジイ集団に加わり、『セレス嬢様の従者を、クリサニアの名娼館に案内してやろう！』と、勝手に盛り上がり、あっちだこっちだとアジャンをひきずりまわしているのだ（当然、アジャンはヤンセンとの食事の会に出席し損ねている。堅苦しそうな会なので出なくて済んで、かえって助かったのだが）。
花街めぐりに案内など必要なかったのだが、何となく憎めないジイさん達に負け、アジャンは彼にしては珍しく根気よく老人達につきあっていた。

翌日、早朝……
セレスの父ヤンセンはウエスコ地方の巡回裁判の旅に出かけて行った。そのままアズーリ地方にも回るので、屋敷に戻るのは三ヶ月後になる。

「次におまえに会う時は、おまえはケルベゾールドを倒して真の勇者になっているだろうね」
頑張るのだよと励ます父に、セレスは拳を握り締め、
「勇者一族の名に恥じない戦いをいたします！」
と、勇ましく答えたのだった。
ヤンセンの旅には、秘書や召使、護衛兵などのお行儀の良い若者達の他に、ヤクザにしか見えない凶悪な面構えの老人六人とその舎弟の柄の悪そうな男達が同行する。
眠そうな顔の老人達はセレスに対しては笑顔を見せ、大きく手を振って別れを告げた。しばらく見ていると、老人達は前後左右にバラけ、ヤンセンの馬車の側に二人がぴったりと馬を寄り添わせていた。
一行の姿が見えなくなるまで、セレスは玄関の前に佇んでいた。
「さて、と」
セレスは振り返り、共に父を見送ってくれた仲間に笑顔をみせた。シャオロンとナーダだ（ほんの少し前に屋敷に帰って来たアジャンはいびきをかいて眠っている。ジライは昨日からずっと行方不明だ）。
「今日は十時から王宮に行って、国王陛下にお会いするのよ！大魔王の本拠地探し、頑張りましょうね！」
「はい！セレス様！」
「北方諸国に行くことになるんでしょうかねえ。それとも、アフリ大陸でしょうか？」
女勇者は仲間の肩を叩き、屋敷の中へと戻って行った。

勇者の家　3話（後書き）

『勇者の家』　完。

次回は『勇者の家　後日談』。
もう少しだけ、今回の話が続きます。

勇者の家　後日談　ナーダ&シャオロン

「シャオロンの話を聞いて、ゲラスゴーラグン様の似顔絵を描けですって？」

武闘僧ナーダは糸目で女勇者セレスをジロリと睨んだ。

「嫌です、私、絵描きじゃありませんから」

「そんな事言わないで、お願い、ナーダ」

セレスは両手を合わせた。

「だって、北方に行く事になったら、もしかしらバンキグに行けるかもしれないのよ」

「そうですね」

「バンキグに行けたら、ぜひ、シャダム様の願いを叶えたいわ。何としても、ゲラスゴーラグン様にお会いしなきゃ！でも、お顔がわからなかったら、偶然お会いできてもゲラスゴーラグン様かどうかわからないでしょ？だから」

「そんな心配、するだけ無駄です」

武闘僧は冷たく答えた。

「あなた、私、同様、霊感ゼロですから。ゲラスゴーラグン様の幽霊に出会えたとしても見えませんよ」

「でも、アジャンが会うかもしれないじゃない！」

セレスは拳を握り締め、身を乗り出した。

「もしも、の、可能性を無視しちゃいけないわ。怠りない準備があってこそ、事は成し遂げられるのよ！その為にも、せっかくシャオロンがゲラスゴーラグン様のお顔を知ってるんだから、ぜひ、絵にすべきだと思うの！そう思わない？」

「セレス……」

女勇者を見つめる武闘僧の目は冷たい。

「あなたの神にかけて誓えます？興味本位じゃないって？」

「え？」

「……この前のホーラン様の感動をもう一度、とか思ってません？」
「う」
「単に、あなたが過去の英雄の顔を知りたいだけなんじゃないんですか？」
「その願望がある事は否定しないわ！」
セレスは正直に答えた。
「勇者の従者の絵姿やら肖像画って少ないのよ。特に六代目様までの、は。エウロペのものは、ロイド様の時代にほとんど燃えちゃってるから。ゲラスゴーラグン様のお顔、すっごく、知りたいわ、私！でも、それだけじゃない！シャオロンの為なのよ！」
「シャオロンの？」
「シャオロンは、今は、ちゃんと二代目勇者一行のお顔を覚えているけれど、記憶は日々衰えてゆくのよ。今回、バンキグに行けなかったら、あの子、シャダム様との約束を果たす為に、五年後、ううん、十年後かもっと先にバンキグに行く事になるかもしれない！お願い、シャオロンの為よ！ゲラスゴーラグン様の似顔絵を描いて！」

「で、引き受けちゃうんだから、私も人が良いですよね」
シャオロンの部屋で、ナーダはふぅと溜息をついた。
「すみません、ナーダ様」
恐縮している少年に、武闘僧は軽くかぶりを振った。
「いいえ。過去の英雄の願いをかなえる為ですものね。及ばずながら力を貸しますよ」
ナーダは少年に、ロイドの書庫にあった壮年男性の人物素描画集を見せ、ゲラスゴーラグンと顔の部位が似ている絵を探させた。
「目はこれがよく似ています。鼻はこの頁の人が似てるけど、もうちょっと高いです。眉毛はすっごく太くて、この絵の人よりもっと太くて、先っぽが二つに割れてます」

「眉尻で上下に分かれてるんですね」
「はい。髭は鼻の下はこっちの人に似てます。でも、顎髭は長いんです。髪の毛に紛れちゃうくらい。あ、すみません、髪の毛は肩を過ぎるぐらいの長さです。アジャンさんみたいな、見事な赤い髪で髭も同じ色でした」
「色は塗らないから、言わなくていいです」
「あ、そうでした、すみません」
ナーダは描き上がった絵を見せた。が、少年は首を傾げ、納得がいかないという顔をした。
「全体的に、顔のつくりがもっと真ん中に集まった感じでした。目ももっと迫力があったし」
「四ヶ月ぐらい前のことなのに、よく覚えてますね」
「きっと、シャダム様のご助力ですよ」
シャオロンはにっこりと笑った。
「オレ、人の顔と名前覚えるの、どちらかというと苦手なんです。けど、焚き火を囲むホーラン様達のお姿とか、不思議なほどちゃんと覚えてるんです。心の眼で見れば、すぐに見えるんです。ホーラン様、シャダム様、ゲラスゴーラグン様、ユーリア様、マハラシ様が、今、目の前にいらっしゃるみたいに、はっきりと」
「……」
武闘僧ナーダは、ペンを動かす手を止めた。
「ナーダ様？」
「……シャオロン、そのぉ」
ナーダは周囲を見渡し、セレスの姿がない事を確認してから、声をひそめて少年に提案した。
「……どうせなら、二代目勇者一行全員の似顔絵を仕上げませんか？」
「え？いいんですか？」
「ええ。水彩画でよければ、色もつけましょう」
「えっ！色まで！嬉しいです！あっ！でも、それじゃ、ナーダ様が

たいへんなんじゃ？」
「大丈夫です。私、筆は早いですから。総本山で一時、写本を作る役職の方に師事していましたので」
「写本？」
「原本、つまり、もともとあった本を、字も絵もそっくりに手で写して作る複製本です。印刷技術が発達した今日でも、寺院秘蔵の書は手書きでしか複製は許されていません」
「へぇ、手書きで」
「実は私……マハラシ様のご本を写した事がありまして……『聖なる武器に関する記録』というご本なのですが……マハラシ様はそれはすごく達筆で、著書も多く、名文も数多く残された方で……正直なところ」
ナーダはこほんと咳払いをした。
「……憧れていました。どのようなお方だったのか、私、非常に興味があるのです」
あああああ、これでは勇者おたくのセレスと同レベルですね、と頭を抱える武闘僧。
珍しく取り乱している僧侶。自分の前でそんな動揺をみせてくれたことを、少年は嬉しく思った。
「オレがナーダ様に描いてくださいってねだったって事にしましょう。セレス様にはそう伝えます」
「すみませんね、シャオロン……」
と、少年の手を取る武闘僧。
シャオロンは、ニコニコと笑みで応えた。

「ゲラスゴーラグン様の他に、シャダム様、ユーリア様、マハラシ様まで描いてもらったの？しかも、色つきで！わっ！ホーラン様の水彩画まであるの！きゃぁ、色がつくと一層、素敵！すごいわ！さすが、シャオロンね！私が頼んでも、ナーダ、絶対に、こんなに描

いてくれないわ！」

お抱えの絵師に写させるから絵を貸して～と、頼むセレスに少年は笑みで応じた。

二代目勇者一行の似顔絵を手にしたセレスは、上機嫌だった。このうえないほど、の笑顔だ。

同じようにマハラシの似顔絵を手にしたナーダも上機嫌だった。セレスに渡したのと同じ絵を二代目勇者一行全員分しあげた彼は『物質転送魔法で大僧正様にお送りしましょう』と浮き浮きと自室に戻っている。

今日はいい日だなあ、と、セレスの手の中にあるゲラスゴーラグンの似顔絵を見ながら、シャオロンは思った。

勇者の家　後日談　セレス&ジライ

ヤンセンがウエスコ地方巡回裁判の旅に出発してから三日後……
セレスは忍者ジライの捕獲に成功した。
忍者は大胆にも、セレスの寝室に潜んでいたのだ。
逃げられぬよう、忍者を麻縄でぐるぐる巻きに縛りあげ、床の上に正座させる。
その前にたたずみ、セレスは、氷のごとく凍てついた表情で忍者を見下ろした。
「ジライ……正直におっしゃい。正直に答えたら許してあげるから。あなた、何でお父様のお部屋をめちゃくちゃに荒らしたの？」
その問いに対し、覆面から覗く眼がへらぁ～と笑う。
「実は、セレス様の為にパティを探しておりました」

ぷっつんと、セレスの内側で何かが切れた。

「嘘つき！」
セレスはジライの顎を蹴り飛ばした。で、相手が床に転がったところを、すかさず踏みつける。
「しかも、あなた、やっぱり覗いていたのね！あんな騒動を起こした後も、しょうこりもなく私につきまとってたんでしょ！恥を知りなさい！この変態！」
「あああああああ」
セレスは忍者の胸倉をつかみ、上半身を起こさせた。
「もう一回だけチャンスをあげる。良いわね、ジライ、ふざけないでちゃんと答えるのよ。あなた、何でお父様のお部屋を荒らしたの？」

「実は……」
「実は？」
覆面から覗く眼がへらぁ～と笑う。
「セレス様所縁（ゆかり）の品物（グッズ）が無いものかと、セレス様のお父上様のお部屋を漁りに行きました。セレス様がどのような童女だったのか興味がございましたのでぇ」

ぷっつんと、再び、セレスの内側で何かが切れた。

「どーして、そーいう見え透いた嘘ばっかつくのよ！」
ドカスカバキと殴られ蹴られまくるジライ。
正直に答えたのに暴力を振るわれているわけだが、文句はなかった。女王様趣味の忍者にしてみれば、今回のお仕置きはふってわいたような幸運なのだ。

セレスが疲れるまでいたぶってもらってから、ジライは用意しておいたもっともらしい嘘をついた。
「お父様が担当した裁判に、大魔王教徒が絡んでると思われる事件があった？え？それって本当？」
「は。半年前に一件、あやしき事件がござりまする。まだ裏が取れていないのでお話できる段階ではございませぬ故、秘密にしていたのですが」
「そうだったの……ごめんなさい、ジライ。あなた、私の為に調査してくれていたのに、私ったら」
「いいえ。私もやり過ぎましたので、セレス様のお怒りもごもっともです。裁判記録を求めて部屋に忍び込んだところ、セレス様の御名が記された箱などがございましたので、何が入っているのかつい

好奇心に負け……」
「もういいわ」
セレスはフーッと息を吐いた。
「あなたのおかげで、パティと再会できたのですものね。でも、ちゃんと、お父様にお詫びの手紙を書いてよ」
「は。心得ました」
セレスは忍者の体中に巻きつけた縄を解いてやろうとした。が、絡まっていてなかなか外れない。セレスが縄と悪戦苦闘している間、ジライの顔はセレスの寝台の傍のサイドテーブルに向いていた。その上に飾られているペン画を見ているのだ、女勇者一行の絵を。
「アレ、ナーダが描いてくれたのよ」
「存じております。あやつが描いている所は、屋根裏より覗いておりましたから」
「ん、もう！あなたって、そればっかりなんだから！」
ジライはずっと女勇者一行の絵を見続けている。
「気に入ったのなら、ナーダに頼んで同じものを描いてもらうといいわ。すぐに描いてくれるわよ」
「いえ。要りませぬ」
ジライがあまりにもきっぱりと答えるので、不思議に思って、セレスは忍者の顔を覗き込んだ。
「どうして？あの絵、好きじゃないの？」
「……私めは忍にござりますれば」
ジライはにっこりと微笑んだ。
「無くしたくない物は持たぬようにしておるのです。大切な物を失うと、平常心を損ねますゆえ」
「……ジライ」
覆面から見える目元は非常ににこやかなのだが、セレスにはそれがとても悲しそうに見えた。セレスの目の前で、ジライは大切な仲間を何人も失っている……
セレスは力強く言った。

「……わかったわ！ナーダに、これと同じ絵、あなた用にも描いてもらう！」
「は？」
「だけど、あなたは忍。お仕事に熱中するあまり、絵をなくすかも知れない。だから……」
セレスはジライの両肩を掴んだ。
「あなたの絵、私が預かっておいてあげる！」
「……セレス様」
「この額縁にあなた用の絵も重ねて一緒に入れておくわ。私、コレ、旅先にも持って行くから、見たくなったらいつでも言って。あなたの絵をすぐに見せてあげる！」
「……」
しばらくセレスの顔を見つめてから、忍者はかたじけのうございます、と、深々と頭を下げた。
その声は、とても嬉しそうだった……

「それはそうとセレス様、縄はまだ解けませんか？」
セレスは麻縄と格闘し続けていた。絡まって、あっちこっちにたくさんコマができている。
ナイフで切った方が早そうだった……

勇者の家　後日談　セレス&アジャン

王宮に通い始めて五日。
ついに、女勇者の堪忍袋の緒は切れた。
供のシャオロンもジライも置いて単身、赤毛の戦士の部屋に乗り込んだ彼女は、ベッドの上に昼間から寝っ転がっている仲間に向って叫んだ。
「起きて！アジャン！」
「ん？」
「今すぐ起きなさい！」
「っせぇな……」
顔の上に開いた本をのせて昼寝していた男が、のっそりと体を起こす。彼の顔から落ちたのは、『アフリ大陸主要部族口語集』。
「何か用か……馬鹿女？」
ボリボリと頭を掻く男に、女勇者は噛み付くように怒鳴った。
「何か用か、じゃないわよ！アジャン！毎日、毎日、ゴロゴロして！しかも、うちのメイドさんとHしたんですって？」
「あ？あぁ」
眠そうにアジャンはあくびをした。
「向こうから誘ってきたんだぜ、寂しい後家さんの相手をしてやっただけじゃねえか」
「三人もいっぺんに？」
「バーカ、４Pなんかするかよ、違う日にそれぞれ相手したんだよ」
「あの三人、今、あっちで喧嘩してるのよ！あなたのせいよ！何で三人とHしたの？不誠実だわ！」
「遊びだぜ、遊び。向こうも承知の上だ」
「あなたが甘いこと言うから、みんな騙されて本気になっちゃうのよ！いい？もう、うちのメイドさん達に手を出さないでちょうだい！」

「ケッ！」
「Hしてる暇があるんなら、あなた、働きなさいよ！大魔王の本拠地探しが、一向に進んでないのは知ってるでしょ？」
「情報収集は契約外だ。俺の仕事はおまえの護衛と魔族及びに大魔王教徒の討伐だぜ」
「その護衛すら、最近、全然してないじゃない！」
「外出時にゃ、必ずシャオロンかクソ忍者がくっついてってるんだろ？魔族のマの字もない、永遠の平和の都クリサニアに居るんだ。俺の護衛なんか必要ねえ」
「面会、面会、面会で、私、毎日、すっごく忙しいのよ！食事だって不規則だし、睡眠時間もほとんどないし、偉い方にばかりお会いするから気づかれしちゃうし」
「頼る相手を間違ってるぜ。話し合いが難航してるんなら、クソ坊主に助けを求めろ」
「私が問題にしてるのは、あなたの態度よ！聞こえなかったの、私、超忙しいのよ！あなた、日がな一日ゴロゴロしてるんなら、ちょっとは助けてあげようって気にならない？」
「ならねえな」
「何でよ！」
「お偉いさんとのお話し合いは、旅のリーダーの勇者様のお仕事だろうが。うまくいかねえからって、俺に八つ当たりするな。七つまで寝ションベンたれてやがったくせに」
「……え？」
セレスはカーッと頬を赤く染めた。
「い、今、何って言ったの？アジャン……？」
「七つまで寝ションベンたれてやがったくせに」
更に赤くなったセレスに、アジャンはにやりと笑った。
「あのジジイどもの話、どうやら本当らしいな」
「ジジイども……？あ、まさか、ボッチェおじいさん達？」
「名前は知らん。おまえの親父の護衛役のジイさん達だ」

「じゃあ、やっぱり、ボッチェおじいさん達ね……」
「十三代目勇者ともなろうお方が……七つまで寝ションベンねえ」
「違うわ！」
セレスは声を荒げた。
「あの日はね、寝る前に、ボッチェおじいさん達が、旧クリサニアの亡霊の話をしたのよ！夜ごと夜ごと邪龍の炎に焦がされる痛みを訴えながら亡霊が街の中を彷徨うんだって……そういう話をしたのよ、七つの子供に！しかも、うちの庭園の噴水の石は旧クリサニアから運ばれた物だって教えたのよ！ひどいと思わない？私の部屋、噴水の前なのに！」
「『セレス嬢様、夜、聞いたことありませんかい？水をくれ……と、いう消え入りそうな声を……。お水をちょうだい……って泣く子供の声を……。哀れな声に心痛めても、決して、その姿を見ちゃいけませんよ。近寄っちゃいけません。炎にまかれていない人間を見たら亡霊は……抱きついてくるんですよ！共に同じ地獄に堕ちようってね！』」
「そうよ！そう言って脅したのよ！」
「で、夜中にトイレに行けずにやっちまったわけか」
赤毛の戦士が、ゲラゲラと笑う。
「他にもいろいろ聞いたぜ。蜂に刺されて左頬を腫らしたとか、馬に噛み付いたとか、ジイさん達が教えたカンカンダンスをバスタオルを巻いてやったとか」
「……アジャン」
「けど、きわめつけは九つまでオムツをしていた事だな」
「違～う！九才の時に、ひどい熱病にかかって、ものすごい下痢になったの！それでお医者様が付けなさいって……」
「九つまでオムツ」
「アジャン～」
「この話、ナーダにしてやろうか？」
「う」

「それとも、シャオロンのがいいか？」
「……わかったわよ。あなたが屋敷でゴロゴロしてても文句は言わない。合意ならメイドさん達とHしてもいいわよ。その代わり、ボッチェおじいさん達から聞いた話は誰にも話さないでちょうだい！絶対よ！」
「……それだけじゃ、黙っていてやれるのは、寝ションベンの件ぐらいだな」
「何ですって！」
「あのジジイどもから聞いた話、全部、胸に秘めといて欲しいんなら、それ相応の報酬を俺に払わなきゃな」
嫌らしい笑みを浮かべる赤毛の戦士。
セレスは顔中を真っ赤にして、ぷるぷると震えていた。
「……何かというとお金、お金……あなたねえ、何でそんなにお金が欲しいの？何か欲しいものでもあるの？」
「欲しい物なんざ無い。俺が欲しいのは金そのものだ」
「あなた、相当、貯めこんでるんじゃない？それでも、まだお金が欲しいの？」
「ああ、欲しいね。金はいくらあっても困らない。いざって時、頼りになるのは金だけだ」
「……いざって時、頼りになるのは、友や家族じゃないかしら？」
赤毛の傭兵は女勇者を嘲るように、フンと鼻で笑った。
他人の考えを頭から拒絶している態度だ。
思わずセレスはつぶやいてしまった。
「お金しか頼るものが無いなんて……さびしい人ね、あなたって……」
口にしてから、セレス自身、失言だと気づいた。

慌てて口を閉ざし、両手で口元を覆った。
だが、時、既に遅かった。
「さて、と……」
赤毛の傭兵は、ベッドから体を起こした。
「……ナーダの部屋にでも行くかな」
「待って！」
セレスは真っ青になって、相手の腕を掴んだ。
「ごめんなさい！今のは失言よ！無礼すぎたわ！私が悪かった！許して！ごめんなさい！」
「許すぅ？」
不機嫌そうな顔のまま、赤毛の傭兵がセレスを睨む。
「謝罪の意志があるんなら、それ相応のものは準備できるんだろうな？」

アジャンはもともと拝金主義者だったものの、このところ輪をかけてひどくなってる気がする……
セレスは相手の要求を呑みながら、誓った。
いつか、きっと……
アジャンの子供時代の恥ずかしい話を掴んで、逆の立場になってやる！……と。

勇者の家　後日談　セレス&アジャン（後書き）

『勇者の家　後日談』　完。

次回は……

＊　十八歳以上で男性の同性愛話でもＯＫという方　＊

ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』をご覧ください。

『夢と現実（うつつ）』。舞台はエウロペ。ナーダとジライの話です。

＊　十八歳未満の方、男性の同性愛ものはパスという方　＊

このまま『小説家になろう』で。

『シャオロン奮戦す　ＶＳカルヴェル』。舞台はエウロペ。

大魔王の本拠地探しに難航していたセレスに、大魔術師が救いの手を差し伸べます。

『シャオロン奮戦す　ＶＳカルヴェル』をもって

第二章　勇者として　は、終わります。

シャオロン奮戦す　VSカルヴェル

「ホホホホホ。なにせ、わしは高名な大魔術師。北方にもちょっとしたコネがある。これ、この通り、通行許可書を貰って来てやったぞ。これさえあれば、ケルティ・バンキグ・シベルアの三国の行き来は自由じゃ。セレスよ、ありがたく受け取るがよい」

食堂で朝食をとっていた五人（忍者は食事をとらず、セレス専用給仕に徹していたが）の前に、老人が移動魔法で突然現れ、そう言って五つの巻物を女勇者に手渡したのだった。

女勇者一行は、既に、エウロペ、シルクド、シャイナ、ジャポネ、インディラ、ペリシャ、トゥルク、エーゲラを回り、数多くの魔族や大魔王教徒を退治していた。

しかし、未だに大魔王の今世の憑代の正体がつかめず、大魔王の本拠地もわからなかった。

セレスはこれからどうするか悩んでいた。

見落としはないか、もう一度シルクドから諸国を巡るか……或いは、北方に向うか、隣接する大陸――アフリ大陸へ向うか……北方にしろアフリ大陸にしろ向うには通行許可書が必要だった。

エウロペ国王の働きかけをもってしても許可書はなかなか発行されず、セレスは三週間近くを自宅で無為に過ごしていた。

エウロペは、北方とは国交が断絶しており、アフリ大陸諸国とは国交を結んですらいない（しかも、アフリ大陸の中央より南はユーラティアス大陸のものには未開の土地でもあった）。許可書発行まで、数ヶ月から数年待たされそうな雰囲気が漂っていた。

だが、その待ちに待っていた通行許可書を老人が貰って来てくれたのだ。

これで、大魔王退治の旅を再開できる！

女勇者は目をきらきらと輝かせた。
「あああああ、お師匠様、ありがとうございます！」
セレスはカルヴェルから受け取った巻物の一つを開き……
思わず、うめいてしまった。
「……読めない」
模様のように綺麗な文字が紙の上をのたうちまわっている……ようにしかセレスには見えなかった。
「シベルア語じゃないですか」
背後から覗き込んできた武闘僧ナーダが、冷たい視線をセレスに送る。
「北方三国では共通語が通じません。国境を閉鎖した百年ほど前から共通語を捨て、シベルア語を代わりに共通語として用いているのです。つまり、シベルア語ができなきゃ、会話も読み書きもできないんですよ」
「う」
「あなた十七歳の小娘とはいえ勇者、旅のリーダーです。各国の国王や政府との交渉ごとは、あなたがやらなきゃいけないんですよ。わかってるんですか？」
「……わかってるわよ」
「では、何で今までシベルア語を学ばなかったのです？　この三週間、みっちり勉強していれば、のみこみの悪いあなたでも人並みにしゃべれるようになったでしょうに」
「しょうがないでしょ！　私、王宮に行ったり、あれやこれやで忙しかったんだから！」
武闘僧が糸目をきりりとひきしめた。
「セレス、特訓です。今日から寝る暇がないと思いなさい」
「え～！」
「一週間でシベルア語をマスターしましょう」
「一週間……それで、覚えられるの？」
「『覚えられる？』ではなく、『覚える』のです。何事も真剣に取

り組めば道は切り開けるものです」
「いやよ、あなた、鬼教師なんだもの！　トゥルクでは、ひどい目にあったわ！」
「血のにじむような努力なくして、成功はありません」
「努力はするわよ！　でも、血がにじむのはいやぁ！」
と、わめく女勇者の背後を忍者がとる。
「ご安心なさって、セレス様。いざとなったら、このジライがセレス様のお声の影武者になりますわ」
忍者の声に、一同が身をのけぞらせた。カルヴェルですらほんのちょっと驚いていた。
忍者は……セレス本人がしゃべっているとしか思えない声で話しかけてきたのだ。忍の変装術の変声術だ。前よりも、セレスの真似がうまくなっている。
「私、忍者ですもの。シベルア語もケルティ語もペラペラよ。セレス様は日常会話程度の言葉を覚えてくだされればいいわ。難しい話は、ぜ～んぶ、私がひきうけるから」
「あああ……ジライ、ありがとう」
セレスはハシッ！と力強く忍者の手を握ったのだが。
「駄目です！」
武闘僧は顔を真っ赤にして怒っていた。
「ジライ、セレスを甘やかしてはいけません！　シベルア語ができなくて困るのは、セレス本人なのですから！」
そこで、呼吸を整え、武闘僧は言葉を続ける。
「今まで国王との交渉の場には、必要に応じて可能な限り私がつきそってあげましたが……北方諸国ではそうはいきません。あちらでは、インディラ教は邪教扱いなのです。私は迫害こそすれ、尊敬の対象となりえません。ようするに、あちらでは、王侯貴族と直接話せる身分なのは、セレス、あなただけなのですよ」
「……」
旅の仲間を見渡せば……

アジャン……エーゲラ一の戦士だが、仕官しておらず、爵位はなし。
シャオロン……シャイナ一の武闘家の息子だが、子供。
ジライ……忍の里一の忍者だったが、現在は抜け忍。そのうえ、忍者は賤業。
で、ナーダの大僧正候補の肩書きが効力を無くすとなれば……やはり……
「……私が全部やらなきゃいけないのぉ、そんなぁぁ」
ズズゥ～ンと暗くなったセレス。
やっとわかったかという顔のナーダ。彼は赤毛の戦士へと視線を向けた。アジャンはテーブルに座ったまま、睨むように目の前の皿を見つめている。老人が現れてからずっと、食事の手も止まっているようだ。
「アジャン、あなた、シベルア語は？」
「あ？」
手に持ったままだったパンを皿に落とし、アジャンはナーダを見つめた。
「……呼んだか？」
武闘僧は片眉をしかめた。
「シベルア語を話せるかお尋ねしたのです」
「……話せる」
アジャンは表情を曇らせていた。
「ケルティに行くのか？」
「そのようですね」
ナーダはセレスの手から巻物を奪い、目を通した。
「指定された日時に指定された航路を通って、ケルティの港ハーグナに向うようにと記されています。そこで入国審査に通って初めて、この通行許可書が有効になるみたいです。指定日まで、まだ一カ月近くありますねえ。当分、エウロペに足止めですね、これは」
そうと聞いて、セレスの表情が明るくなる。

「一ヶ月あるの？　よかった！なら、一週間でシベルア語マスターしなくても大丈夫じゃない。余裕があるわ！」
武闘僧が冷たい視線を女勇者に送る。
「あなたが、北方三国の宗教、政治事情、風習、マナー、歴史などをご存じでしたら、時間に余裕があるでしょうね！　事前学習が言語だけになりますからね！」
「う」
「あなたの学習スケジュールは私がたてます。異存はありませんね？」
「……ないわ」
「私、セレスの勉強をみますので、アジャン、あなたは、自分の分とシャオロンの雪国での装備を準備しておいてください。パーティで必要なものは後日、まとめて準備しますので、個人的なものだけでいいですから」
「シャオロンの分を準備するのは構わんが……」
赤毛の戦士は眉間にしわをよせていた。その顔から血の気が引いている事に、隣に座る東国の少年は気づいていた。少年は赤毛の戦士をジッと見つめていた。
「……これから冬になるっていうのに」
「は？」
「今から北方に行くなんざ、馬鹿だな。吹き荒ぶ雪嵐にのまれ、凍死するのがオチだ」
「でも、春までここで待っているわけにもいかないでしょ？　大魔王を倒さねば、地上に真の平和は訪れないのです。エウロペでこれから更に一月近くも足止めされるのが忌々しいぐらいです」
「……まさか」
「ん？」
「まさか北方行きの許可書が発行されるとはな……天地がひっくりかえってもそれだけはありえんと思っていた」
「大魔術師様のご威光に感謝しなくてはですね」

ナーダがそう言うと、老人が耳にうるさいほどの声でホホホホホと得意そうに笑う。武闘僧は小さくつけくわえた、その点においてだけはと。

赤毛の戦士が大儀そうに頭を振る。

「正直、面くらっている……ありえんと思っていた事態になったので、な。だが、まあ……そうなっちまったんなら仕方ねえ」

歪んだ笑みを口に浮かべアジャンは、落ち込んでる女勇者へと声をかけた。

「セレス、北方行きが決まった事を王宮に報告に行くんだろ?」

「ええ」

「俺も同行する」

「あなたも?」

珍しいこともあるものだという顔のセレスに、アジャンは肩をすくめてみせた。

「契約上の問題だ。俺はエウロペ・エーゲラ・ペリシャ・トゥルク・インディラ・シルクド・シャイナ・ジャポネにおけるおまえさんの護衛と魔族及び大魔王教徒の討伐を引き受けた。北方は契約に入っていない」

「あら、じゃあ、契約しなおさないとね」

「待て、待て。今日のところは待て」

ニコニコニコと笑いながら、老人が瞬間移動で赤毛の戦士のすぐ横の宙に現れる。

「赤毛の傭兵、わしは、おぬしに貸しがある」

「あん?」

「『聖王の剣』の貸し賃と、くれてやった魔法の分。わしはいつでも好きな時に二回、おぬしを使える事になっておったであろう?」

「ああ」

「今日これから果たしてもらいたい。それほど時間はかからぬ、おぬしの部屋でちょちょいですむことであるが……今日のところは王宮に行くのはナシじゃ。セレス、おぬしは行って来い。国王陛下に

よろしく、の」

その日の午後、三週間前にナーダから貰った『シベルア語　日常会話集』、『シベルア語　綴り方』、『シベルア語　辞典』を片手に、東国の少年は廊下を走っていた。

北方諸国やアフリ大陸の代表的な言語を覚えておきなさいとナーダが準備してくれた十冊以上の本を、少年は、暇を見つけては目を通し勉強していた。セレスの重荷にはなるまい！と、彼なりに真剣に。けれども、あまり身についていない。

シベルア語にアフリ大陸の言語が三、それらをいっぺんに習得しようとするのには無理があったし（ナーダは自分が本を読むだけで何でも暗記できるので、凡人の学習速度が理解できていないようなのだ）、そもそもあまり学習時間がなかったのだ。

シャオロンはアジャンの部屋で立ち止まると、まず深呼吸。気持ちを落ち着けてから、ノックをしようとした。

その時だった……

扉がびりびりと震えたのは……

アジャンの怒声だ。

その振動で揺れているのだ……

赤毛の戦士が誰かと言い争っている……

まだカルヴェルの用事がすんでいなかったのだろうか……？

シャオロンはためらい……

右手を下ろした。

（帰ろう）

そのまま背を向け、自分の為に用意してもらっている部屋に戻ろうとした。

そこへ、背後から声がかけられる。

「これ、シャオロン、赤毛の傭兵に用ではなかったのか？」

振り返ると、空中浮遊の魔法で大魔術師カルヴェルが宙に浮かん

でいるのが見えた。長い白髪白髭、黒の魔術師のローブがゆらゆらと宙に揺れている。
「カルヴェル様……あれ？　カルヴェル様、中じゃなかったのか」
「ん？」
「あ、いえ、あの、アジャンさん、今、お部屋でお取り込み中みたいなので」
「案ずる必要はない。取り込みのもとは無くなった」
「はい？」
カルヴェルはホホホホホと笑った。
「あやつ、わしに怒鳴っておったのよ。このように、わしが、あやつの前から消えたから、もはや、あの部屋の中、取り込んではおらぬわ」
「……アジャンさんと、どんな話をされたのです？」
「うむ。まあ、あやつにとっておもしろくない話を、の。こちらも怒られるのは承知の上で話したのじゃが、まこと、あやつ、豪快に怒鳴りおる」
「……」
「すまぬ、シャオロン。おぬしといえども、何を話したかは言えぬ。赤毛の傭兵の個人的な事情に関わる話なので、わしの口からは言えないのだ」
「……わかりました」
少年はうつむき加減だった顔をあげた。
「アジャンさん、今、怒ってらっしゃるだけですか？」
「ん？」
「カルヴェル様のご用事をまだやってらっしゃるんですか？」
「ああ、いやいや、それはとうに終わっておる。何もしておらんとは思うぞ、今は」
カルヴェルはにやりと笑った。
「派手に怒っておったからの、床を蹴って怒りを発散しておるぐらいじゃろ、やってる事は」

シャオロンはにっこりと笑みを浮かべ、深々とカルヴェルに頭を下げた。
「じゃ、オレ、行きます。失礼します」
元気よくそう言うと、少年はアジャンの部屋をノックした。
だが、返事がない。
もう一度、ノックすると……
「うるせえ！　聞こえてる！」
と、乱暴に扉が開けられた。
「あ……」
少年に気づき、赤毛の傭兵は少々罰の悪そうな顔をし、視線をそらした。
「……何の用だ、シャオロン？」
「すみません、アジャンさん、シベルア語、教えてください」
「シベルア語……？」
「はい。三週間前に、ナーダ様から勉強用の本はいただきました。書く方は辞書があれば何とかなりそうなんですが……しゃべる方がさっぱり。発音とかわけわかんなくて。お願いです、アジャンさん、オレ、セレス様の足手まといになりたくないんです。シベルア語、教えてください！」
「……」
アジャンは緑の瞳を細め、その髪を乱暴に掻いた。
「ナーダか忍者に習え。俺のは俗語だ」
「でも……ナーダ様はセレス様のお勉強にかかりっきりだし……ジライさんは、たぶん、お部屋に居ませんよ。情報収集に行ってると思います」
「じゃ、ジジイに習え。その辺にまだ居るだろう」
「カルヴェル様？」
きょとんとして、シャオロンは背後を振り返った。そこには、ニマニマ笑っている老魔術師が居る。扉から顔を覗かせているアジャンだとて、位置的に見えないはずがない。しかし、目に入っていな

いようなのだ。
（姿隠しの魔法って、特定の人間からだけ自分が見られなくなるようにもできるんだ）
素直に感心したシャオロンに、カルヴェルは口元に二の指をあててウインクを送った。黙っていてくれという事だ。
「カルヴェル様は……その、何処にいらっしゃるかわからないし……」
少年は真っ直ぐな瞳で、赤毛の傭兵を見上げた。
「オレ、アジャンさんに教わりたいんです！駄目でしょうか！」
「……」
アジャンは眉をしかめ、迷惑そうに少年を見つめていたが……
その口元が緩み、笑みが刻まれる。
「……俺から教わると、『シベルア語を教えろよ、ケチケチすんな、このボケ』みたいになるぞ」
「大丈夫ですよ」
にっこりと、シャオロンが微笑む。
「絶対、大丈夫です」
少年は絶対の信頼を赤毛の傭兵に寄せていた。根拠は、全くなさそうなのに。
その純粋な敬意に多少鼻白みながらも、アジャンは凍てついていた表情を捨て、いつもシャオロンに見せている年長者の顔となった。
「……シベルア語とケルティ語を教えてやろう」
「ケルティ語も？　でも、オレ、物覚え、悪いですよ」
「大丈夫だ。北方の言葉はどれも根が同じだ。どれか覚えれば、あとは何となくわかるようになる」
「そうなんですか……なら、頑張ってみます！　アジャンさん、ありがとうございます！」
赤毛の戦士はにやにや笑っている。
「クソ坊主じゃ、絶対、教えてくれないような単語や言い回しも教えてやる。とびっきり下品なヤツを、な」

「あはははは」
「どうせ、当分、暇だ。王宮には、焦って行く必要がなくなった。俺の契約に関してはおせっかいなあの女が今日、国王に話してるだろうし……今度、セレスが王宮に用がある時にでも、くっついて行って済ませりゃいい。しばらくは、おまえにつきあおう」
「やったー！　ありがとうございます！買出しの時にはオレ、アジャンさんの分も荷物、持ちますね」
「買出し……ああ、旅の装備か……シャオロン、おまえ、雪は見たことあるのか？」
「ありますよ。けっこう積もるんですよ、オレん家の方は」
「そうか……冬は、シャングハイから南に下ってインディラだったからなあ、女勇者一行は。雪とは無縁だったよな」
「でしたね。お山の上の雪ならいっぱい見ましたけど」

扉が閉ざされ、二人が部屋に消える。
カルヴェルは笑みを浮かべたまま、扉を見つめていた。
赤毛の戦士の心を闇より遠ざけられる人間は……シャオロンと、セレスだ。
アジャンにとって、シャオロンの真っ直ぐな気性は光であり……癒し――救いなのだ。
そして、セレス。
二人がどう動くかによって、アジャンの運命は変わる。
闇に堕ちるか、光の使徒としてとどまるか……
ケルティは、アジャンにとって忌むべき土地なのだ。
彼は憎んでいる。
ケルティにある全てのものを……
そして、自分自身を……
その凄まじい憎悪を、魔族が見逃すはずがない。大魔王四天王最後の魔――ゼグノスがケルティで待ち構えている以上……

（堕ちるなよ、赤毛の傭兵）
打てるだけの手は打った。魔除けのペンダントも祝福の魔法も、多少は、魔を防いでくれるだろう。しかし、本人が光であり続ける事を望まなければ、何の効力もないアイテムになる。
全ては、アジャン本人とシャオロンとセレス次第なのだ。
だが、アジャンのセレスへの思いは屈折している。あの鈍いセレスに思いが通じるかどうか……
（やはり、頼りはシャオロンじゃな）
アジャンの亡くなった弟によく似ている、素直な性格のシャオロン。カルヴェルが百万の策を弄するよりも、シャオロンの笑顔がアジャンの救いとなるだろう。
（わしのような邪な人間では、人を真に救う事はできぬ。頼んだぞ、シャオロン……）

「何か知らんが、クソ坊主、急用なんだと。で、今日一日、おまえの勉強もみてほしいと頼まれた」
シベルア語の勉強を始めてから四日目……
武闘僧ナーダは寺院の使いの者に呼ばれて出かけていった。
やった――！　休める――！　と、セレスが喜んだのも束の間、赤毛の傭兵がシャオロンを伴って教師として現れたのだ。
予想通り……赤毛の傭兵は武闘僧以上の暴力教師だった。
「『私は勇者ラグヴェイの末裔、セレスと申します。偉大なる国王陛下におめもじかないまして、恐悦至極にございます』って言ってみろ」
「『ワタクシハ……ウシャ』」
「違う！　『ウシャ』じゃねえ！　『勇者』だ！」
「痛ぁい！　ぽんぽん叩かないでよ！」
「殴られたくなきゃ覚えろ、もう一回！」
「『ワタクシハ……ウシャ』」

「違うって言ってるだろうが、馬鹿女！」
「痛い！　いやぁ！　もう、いやぁ！　臨時の先生ならジライにして！　暴力教師はもう嫌よ！」
「ジライさんはお部屋にいませんよ」
と、シャオロン。赤毛の傭兵から命じられて、動詞の活用形の語尾変化をせっせとノートに書いている。
「情報収集に行ったんじゃないんですか？」
「そんな……」
「ナーダからおまえを甘やかすなと言われているんだ」
アジャンはにやりと笑った。
「さあ、百っぺん言ってみろ！　『勇者』ってな！」

ケルティに旅立つ前……
いたって平和な女勇者とその仲間達だった……

シャオロン奮戦す　ＶＳカルヴェル（後書き）

『シャオロン奮戦す　ＶＳカルヴェル』　完。

《第二章　勇者として》完結です。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は……

＊　十八歳以上で男性の同性愛話でもＯＫという方　＊
ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』をご覧ください。
『夢の絆』。舞台はエウロペ。ナーダとジライの話です。

＊　十八歳未満の方、男性の同性愛ものはパスという方　＊
このまま『小説家になろう』で。
次回より《第三章　ケルティの闇と光》が始まります。

最初の話は『極光の剣』。舞台はエウロペからケルティへ。
過去を思い出すまいと心を縛っていた赤毛の戦士アジャン。昔以上に黒く醜く歪んだ国を見て彼は……

＋　＋　＋　＋　＋

第二章、おつきあいありがとうございました。
ご感想等、いただけると嬉しいです。励みとなります。

ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』の話が

続いてすみません。あちらも、『夢の絆』でひとくぎりがつきます。

人物紹介（第二章『勇者として』を読了後にご覧ください）（前書き）

『極光の剣』開始前までを踏まえた人物紹介です。

ネタバレありなので、『シャオロン奮戦す　ＶＳカルヴェル』までご覧になってからお読みください。

人物紹介（第二章『勇者として』を読了後にご覧ください）

女勇者セレス

エウロペ侯爵家令嬢。十七歳。

『勇者の剣』の守り手。戦闘時には持っている事を忘れるぐらい軽くなるものの、

平時はまだまだ重たい剣を背負っているせいで歩くだけて疲れてしまう。

しかし、剣と心を一つにした時の彼女は凄まじく強く、

大魔王四天王のサリエル、ウズベル、イグアスを滅ぼしている。

『虹の小剣』、『エルフの弓』の力を借りる事も。

カルヴェルより贈られた神聖防具の白銀の鎧を、常日頃、まとっている。

正義を愛する、まじめな熱血漢。育ちがいいので、ちょっと天然。

おひとよし。

先祖の勇者達に憧れている。

愛らしい美少女だが、三才から男装し、騎士としての教育を受けてきた。

十二の少女の頃にカルヴェルの弟子となって神聖魔法を習得。

聖騎士の叙勲を受け、エウロペ国王に仕えていた。

西国人にしては小柄。金髪碧眼。処女。

『体の発育は抜群』で、

性格も顔もスタイルも『どれをとっても完璧』な『真の女王様』との声も。

強い感情や思いに触れた事がきっかけで、その者の心を我が事のように感じる、

共感能力者（エンパシー）だが、制御できない微弱な力で本人にその能力の自覚はない。

赤毛の戦士アジャン
傭兵。二十六歳。
両手剣が得手。カルヴェルから借りた片手剣『聖王の剣』も使っている。
酒好きの女好き、短気で傲岸。処女嫌い。
必要とあらば相手に合わせへりくだるなど、処世術も心得ている。
しかし、セレスの前では仮面を被れず、彼女の人の好さに苛立つ毎日。
ジャポネに行く前までは、セレスの剣の師となり、彼女に戦闘のコツを教えていた。
即物的な性格だが、
父のシャーマン能力を継いでおり、進むべき道がわかるなど便利な力がある。
神魔の器となれる霊媒体質の為、魔族に狙われやすい。
カルヴェルより魔除けのペンダントと祝福の魔法を渡されている。
七つの時、父母と姉を殺され、その後、妹と弟も失い、部族神への信仰を失う。
権力を厭い、金に執着する一方、守護を決めた人物を全力で守ろうとする誠実さも。
年少者にやさしい。
一時期、エーゲラのオクタヴィア女王の情人だった。

武闘僧ナーダ
インディラ教次期大僧正候補。三十歳。
素手で闘う武闘が得意だが、剣・槍などの武器も人並み以上に扱える。
両腕、両脚に、神聖防具の装甲を付けている。
神聖魔法・回復魔法・強化魔法・弱体魔法が使える。

カルヴェルから結界魔法の効果を増幅させる腕輪を巻き上げた為、苦手だった結界魔法をバンバン使えるようになっている。
信仰心に篤く、真面目。女嫌いの男色家。
武術・学問・魔法等、何事においても一番を目指す完璧主義者。
インディラ国王の長子だが、第二夫人アヌラーダの一族に命を狙われ、
母の死後、闘争を避けるために出家し、総本山の修行僧となった。
母の死の遠因は伯父ナラカにあると思いこみ先代勇者一行を嫌っていたが、
ナラカと邂逅し過ちに気づく。
インディラの大僧正に傾倒しており、部下の老忍者ガルバを大切にしている。
僧侶だが霊感はゼロで、この世の神秘を見る目も持っていない。
忍者ジライに熱烈な片思いをしている。

格闘家シャオロン
シャイナ一の武闘家の五男。十三歳。
両手に『龍の爪』を装備して戦う。
大魔王四天王の一人サリエルに家族を殺され村も滅ぼされ、
仇討ちの為、勇者一行に加わる。
武術の才がないと父から見捨てられていたが、
父の姿のサリエルを倒し、見事、仇を討つ。
真面目で素直、何事にも一生懸命な熱血漢。腕力はないが、敏捷性は高い。
鋭い人間観察眼があり、策士の才もあるらしい。
学は無く、共通語もあまり得意ではない。
霊感体質で、傍にいる事で時にアジャンの能力を向上させる。
ペリシャで過去の英雄シャダムの霊と出会い、
バンキグの英雄ゲラスゴーラグンに謝罪を伝える事を約束してい

る。
セレス、アジャン、ナーダ、ジライ、カルヴェルを尊敬している。
初恋の相手はセレス。
セレスの次にアジャンを慕っており、亡くなった弟の代わりとして
自分がかわいがられているのだと承知している。

忍者ジライ
セレスの命を狙っていたもと暗殺者。二十四歳。
『ムラクモ』の振るい手。『ムラクモ』を『小夜時雨（さよしぐれ）』と呼んでいる。
忍の里の頭領の数多くいる息子の一人で、
忍術・忍法・邪法・諜報術・剣術・体術・盗術・房中術・暗殺術に秀でた彼は、
次期頭領に目されていた。『白き狂い獅子』の異名を剣の師から継いでいた。
自分を中忍に推してくれた先代『白き狂い獅子』に恩を感じている。
白髪、白い肌の白子。美形。忍としていつでも死ぬ覚悟ができており、
刹那、刹那を生きる彼は、何事にも拘泥しない。
表面はSで、根はM。セレスを真の女王様と慕い、仕えている。
人を御す為の房中術として、誰とでも寝る。
忍の里で育ったもと大魔王教徒なので、勇者の従者となった今も
道徳観念がない。
ナーダの気持ちをわかっており、役立つ駒となりうる彼を
いつでも利用できるよう房中術で操っている。

大魔術師カルヴェル

先代勇者ランツの従者となって、共に大魔王を倒した英雄。
年齢不詳（本人談　いい年のジジイ）。
当代随一の大魔術師（魔術師協会には所属していない）。
攻撃魔法、強化魔法、弱体魔法、神聖魔法の他、暗黒魔法（邪法）まで使える。
しかし、回復魔法だけは高位魔法を使えない。
魔力が計り知れないほど膨大。
移動魔法の連続使用、長距離移動も、呪文の詠唱抜きで可能。
人をからかって遊ぶのが何よりも好きで、
セレスにセクシー・ポーズ授業をしていた。
勇者一行に加わる事は拒んでいるが、
セレスの危機に駆けつけたり、勇者一行に聖なる武器や魔法道具（マジック・アイテム）を売ったり貸したりして、その旅を助けてもいる。
北方にもその名は轟いているようで、北方諸国から勇者一行の通行許可書を
もらってきている。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

勇者ランツ
先代勇者。セレスの祖父。セレスが三才の時に病で死亡。
カルヴェルやナラカと義兄弟の契りを結んでいた。
豪胆放埒な勇者らしからぬ男だったが、『勇者の剣』から最も愛された、
勇者史上最強の勇者と謡われている。
若い頃は、カルヴェルと共に歓楽街の帝王として名を馳せていた。
大魔王討伐後、トゥルクの姫君エリューズ（エリス）と結婚している。

僧侶ナラカ
　先代勇者ランツの従者。ナーダの伯父。もと大僧正候補。
僧侶でありながら有髪で、飲む打つ買うを好んだ不良坊主。
大魔王討伐後に、邪法の魔法陣に囚われ異界に閉じ込められる。
影だけ今世に戻って来ており、魔族の開いた次元通路の上を彷徨っている。
　トゥルクでは『魔法使いナーダ』と名を偽ってセレスを助けた。
カルヴェルに頼み、呪に囚われている事実を隠してもらっている。

エウロペ国王
　セレスの庇護者。名君と名高い。

次代勇者グスタフ
　セレスの姉の子供。次代勇者として期待され、王宮で保護されている。四歳。

ヤンセン侯爵
　セレスの父。婿養子。巡回裁判官。正義を愛する熱血漢。

インディラの大僧正
　ナーダが尊敬して慕っている老僧。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
　インディラの総本山にいる。

ジャガナート僧正
ウッダルプル支部僧正。ナラカの友。ナーダの武闘の師。
インディラ一(いち)の武闘僧だったが、その称号はナーダに譲った。

老忍者ガルバ
ナーダの忍者軍団の頭領。非公式な存在の為、表だって部下を名乗れない。
ナーダの隠し財産も管理している。僧侶ナラカ、ナーダの母にも仕えた忠義の部下。
ナラカは寺院の生活を厭い出奔したと思っており、家族を持ち身重となっていた
為に供に選ばれなかったのだと、当時の自分を悔いている。
だが、ナーダとその母を守る為に、その家族をも犠牲にしている。
ナーダを還俗させ、インディラ国王に即位させる野望を抱いている。

武闘家ユーシェン
シャオロンの父。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
サリエルに殺され、その肉体を奪われていた。

情報屋グジャラ
西はエウロペ東はジャポネまでの情報を掌握する情報屋の元締め。
表の商売は魔薬屋。忍の里とも懇意。
刹那的快楽主義者。ジライの知己。

くノ一アスカ
忍の里の頭領の娘。ジライの実妹。
ジライより『我が宝』と大事にされていたが、誰とでも寝る彼にやきもきしていた。

忍者ダイダラ
知恵遅れの一つ目鬼。その馬鹿力で、ナーダを危機に追い込んだ。
ジライを庇い『勇者の剣』で致命傷を負う。ジライの介錯で、逝く。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

勇者ホーラン
二代目勇者。現在も騎士の鑑と称えられている慈悲深く高潔な聖騎士。
真面目で不器用な性格を勇者一行全員から愛されていた。

女魔法使いユーリア
ケルベゾールドに寝返った稀代の悪女とされている、もと従者。
しかし、事実は、ケルベゾールドを自分の内に封印し、
勇者仲間を守った心優しい女性であった。
ケルベゾールドに憑依された彼女は、自らの正体を隠し、
大魔王としてホーランに討たれ消滅している。

聖戦士シャダム

ペリシャ建国王の弟で、ホーランの従者、ペリシャ教の聖人。
シャムシール『銀の三日月』の使い手。
ユーリアへの愛ゆえに、大魔王に憑依された彼女を殺せなかった。
ユーリアの呪によって真実を忘れた彼は、彼女を生涯非難し、
ゲラスゴーラグンと対立した。
セレスの存在によって真実を思い出した彼は、
ゲラスゴーラグンへの謝罪をシャオロンに託す。

北の戦士ゲラスゴーラグン
後にバンキグ国王に即位した、ホーランの従者。
戦斧『狂戦士の牙』の使い手。
己の武器と名とそれぞれの神にかけて地上に和をもたらそうと誓
い合った仲間を
生涯信じ続け、ユーリアの堕落を否定した。
ユーリアに求愛していた。

僧侶マハラシ
ホーランの従者。インディラ僧侶。
インディラ神より、真実を見抜く目を与えられていた。
『聖なる武器に関する記録』他、数多くの著書を残している。

人物紹介（第二章『勇者として』を読了後にご覧ください）（後書き）

次回は『極光の剣』。舞台はエウロペからケルティへ。

過去を思い出すまいと心を縛っていた赤毛の戦士アジャン。昔以上に黒く醜く歪んだ国を見て彼は……

極光の剣　序

北方諸国に向う事が決まってから……

仲間が変わりつつある事を、セレスは感じていた。

まず、ナーダ。

一行の知恵袋兼軍師のような役割を果たしてきた武闘僧は日頃からよくしゃべるのだが、人を喰ったようなところがあり、大僧正への深い尊敬と愛情を陶然と語る以外は己の感情や事情を吐露する事もなかった。仲間に対し壁を造り続け、一歩引いた態度を貫いていたのだ。

それが……

北方諸国へ旅立つ準備の最中、セレス、アジャン、シャオロン、ジライに頭を下げ、自分の秘密を告白したのだ。

「あなた方を信頼のおける仲間と見込んで頼みがあります。北方諸国から発行された通行許可書には、私達それぞれに二名の家来を伴う権利を認めると記されています。その権利を、譲っていただけないでしょうか？　部下を同道させたいのです」

「部下？」

と、小首を傾げるセレス。

「寺院関係の方？」

「いいえ」

ナーダは微笑を浮かべた。

「私の個人的な部下、インディラ忍者です。以前、私が寺院付き忍者だと偽ってあなた方に紹介したガルバと他九名を北方まで連れてゆきたいのです」

「え？　え？　え？」
セレスは目をぱちくりとさせた。シャオロンもきょとんとした顔をしている。アジャンは眉をしかめて睨むように武闘僧を見つめ、忍者は普段通り無言で佇んでいる。
「ガルバさんって、シャイナの荒野で一緒に戦ってくれた方よね？　インディラの城砦跡にカバーリをおびきだす時にも協力してくれたし……寺院付き忍者の遊撃部隊の頭目って聞いてたけど……違うの？　あなたの部下なの？」
「はい。インディラ寺院は数多くの忍者を抱えていますが、ガルバ達は寺院に所属していません。彼らの主人は、私一人です」
「じゃ、どーして、その時に、部下だって紹介しなかったの？」
「それは……申し訳ありませんが、あなた方を信頼してなかったからですよ」
「え？」
「僧侶は俗世の垢を拭い、本来、身一つで信仰の道に入るものなのです。ところが、私は出家時に捨てるべきものを捨てなかったのですよ。私的な忍者軍団を抱えていますし、忠義の部下のガルバが私の為に莫大な隠し財産を管理してくれています。こんな事、公になったら身の破滅です。大僧正候補の位を追われるのは当然として、僧籍すら廃されかねません。ですから、部下の事も財産の事も他言してはならぬと、大僧正様からきつく申し付けられていたのです」
「え？　あ、ちょっと待って。頭の中を整理するから……。ようするに、大僧正様は、あなたの事情をご存じで、部下も財産も黙認してらっしゃるのね？」
「ええ」
「じゃあ、インディラ教団的には問題ないのね。で、あなたは、今まで大僧正様の言いつけを守って、自分の事情を話さなかった。それなのに、今日、その秘密を告白しちゃったのよね？」
「ええ」
「それって、私達を信用してって事なのよね？」

「はい。私を窮地に陥れるような事を、あなた方は絶対にしない……今ではそう確信しています。だから、告白したのですよ」
セレスは顔を輝かせた。
「もちろんよ！共に戦う仲間だもの！」
セレスはナーダの右手をハシッ！と握った。
武闘僧は、うっ！と顔を歪め、嫌そうな顔こそしたものの、セレスの手を払おうとはしなかった。
「私は全然、構わないわ！あなたの部下を私の家来として同道させてちょうだい！その為に必要な細工は、あなた、自分でやるんでしょ？」
「ええ、まあ。その手の小細工は得意ですし……」
「シャオロン、あなたも協力してあげるわよね？」
「はい。ナーダ様、お好きになさってください」
「すみませんねえ、シャオロン」と、ナーダ。
「あ！そうだったわ！ジライ……悪いけど、インディラ忍者の方々を同道させるわ。ごめんなさい、あなたの意見も聞かずに決めてしまって」
セレスはためらった。東国忍者とインディラ忍者は犬猿の仲だ。当然、ジライは反発すると思ったのだが。
「構いませぬ」
と、あっさりと忍者は答えた。
「北方では、ナーダの部下と共に情報収集をする運びとなっておりますゆえ」
「え？」
セレスは、武闘僧と忍者の顔（と、言ってもジライは覆面をしてるので目元ぐらしか見えないのだが）を見比べた。この二人、何時の間に仲良くなったのだろう？　仲間に加わってすぐの頃は、ジライはセレスにしか話しかけず、彼が仲間に馴染めないのではないかと気をもんだものだが……
ナーダと内緒話をするほど、仲良くなっていたなんて！そう言え

ば、このごろ、シャオロンともそこそこ会話をしている。アジャンとの仲はあいかわらずだけれども。

セレスは、もはや満面の笑顔だった。

「そうよね！忍者同士ですものね！力をあわせれば百人力よね！」

セレスがそう言うと、そうですねえと感情のこもらない声でナーダは同意し、尚も握っていたそうなセレスの手を無理やり押し戻し、手を神経質そうに擦り合わせ始めた。掌が痒くなったのだろうか？

女勇者は視線を、ずっと沈黙を守っている男へと向けた。

「ナーダの部下を、あなたの家来って事で同道させてもいいわよね、アジャン？」

「……」

「アジャン？」

緑の炯眼がジロリと女勇者を睨む。

「好きにしろ」

答えるのも面倒だと言わんばかりだ。

セレスは赤毛の戦士をけげんに見つめた。

このところ、アジャンがおかしい。ぶっきらぼうなのは何時もの事だが、心ここにあらずといった感じで、よくぼんやりとしている。話しかければ、大儀そうに答えてくれるのだが、現実にあまり関心がなさそうなのだ。

セレス護衛の再契約の時もそうだった。セレスの供として王宮に向った彼は、国王が提示した金額をそのまま受け入れ、何の交渉もしないまま契約書にサインしたのだ。北方におけるセレス護衛の契約書に。

大魔王討伐こそ成し遂げていないものの、女勇者の世直しの旅を助け、無事な姿で彼女をエウロペに戻したのだ。傭兵として契約内の仕事は完璧にこなしている。

アジャンは、自分の優秀さを強調し、料金の上乗せ交渉を延々とするはずだ……そう思っていたセレスは、ひどく意外に思った。

理由を尋ねても、アジャンは肩をすくめたり、睨むばかりで何も

言わない。
　明らかに何かがおかしい……だが、何故、そうなったのか、セレスにはわからなかった。
「ありがとうございます。私の事情を考慮して、快く提案を受け入れてくださった事を感謝します」
　武闘僧がにっこりと微笑む。
「舌先三寸で適当な嘘をついて、ガルバ達を同道させても良かったのですが……これ以上、嘘を積み重ねるのが嫌になったのです。あなた方は私を仲間として遇し、大切に思ってくれています。そんな方々に対しては誠実でありたいと、そう思うようになったのです」
「ナーダ？」
　セレスは首を傾げた。ナーダも、どこか変わったようだ。しかし、それは歓迎すべき変化と言えた。彼が自分の殻を破り、進み出てくれたのだから。
　武闘僧は右の二の指を立てて口元に当てた。
「では、私の部下と隠し財産の件は、他言無用という事で」
　セレス達は武闘僧に頷きを返した。

「申し訳ございませぬ。ナーダの部下達と北方における活動の打ち合わせがございまして……」
　などと断ってジライが外出する事も多くなった。
　女主人の元を私用で離れる事をジライは恐縮していたが、その姿がセレスの目には好ましく映った。忍者達と交わるジライは生き生きとしている。忍の里一の忍者だったジライは、ナーダの部下達を指導し、あれこれ助言しているようなのだ。
　シャイナで失ったものを、万分の一でも彼が取り戻せるといい……セレスはそう思った。

気がかりなのは、やはり、アジャンだった。
アジャンはよくぼんやりとしている。顔を強張らせ、睨むように床に目を落としている時もある。
何か問題を抱えているようだ。
しかし、セレスは鬼教師ナーダにシベルア語を叩き込まれている身の上だった。一週間でシベルア語をマスターなど出来るはずもなく、新たに加わった北方の歴史や風俗などの勉強に加え、日に何時間も言語の勉強に時間をさかねばならなかった。王宮にも通わねばならなかったし、北方の衣装を整えるなどの雑務もあった。
自由時間などほとんどなく、アジャンと話せる時間はいつもたいへん短かった。
たまにセレスが暇な時があっても、アジャンの方に用事があったりした。赤毛の傭兵は、シャオロンにシベルア語とケルティ語を教え、雪の中での戦闘方法や雪越えの秘訣なども教えていた。
物思いに沈みがちなアジャンも、シャオロンに対してだけは常と同じだった。何事にも一生懸命に取り組む素直な少年に、笑みを見せ続けていた。
その様子を遠くから見つめていたセレスは、その笑顔に安心し、積極的にアジャンの悩みを聞こうとはしなかった。

ろくにアジャンと話せぬまま、セレスはケルティに向かい……
後になって、ひどく後悔した。
闇に堕ちかけていた仲間……
その苦悩や迷いを見過ごした自分を、責めずにはいられなかった……

極光の剣　1話

女勇者一行はエウロペ国王が準備してくれた中型軍用船に乗船し、通行許可書に指定された日時に指定された航路を通って、ケルティに入国した。

エウロペとケルティを隔てている山脈に白いものが積もっていたので、セレスはケルティには雪景色が広がっているものと思い込んでいた。けれども、暖流の影響で、ケルティ西南沿岸は北方にしては温暖で、国境を越えても、陸にはエウロペ同様に枯葉色の景色が広がっているだけだった。

国境を越えた辺りから海上に細長い船が増え、間もなく、セレス達の乗船をドラゴン船が取り囲んだ。船首がドラゴンとなっている、細長い三十人乗りの、北方諸国の軍用船だ。屋根もない軽量な船だったが、一（いち）メートルの浅瀬まで入ってゆける機動性がある上に、大洋を横断できる航行能力も備えている。エウロペやシャイナ北部に、時折、この型のドラゴン船が現れる。暗礁や砂浜をものともせず海岸沿いの街や村を襲い、警備兵が到着する前に略奪を終え逃げ去ってゆくのだ。

ドラゴン船の上から、弓や槍を手にした屈強そうな男達がセレス達の乗船を睨みつけていた。セレスの乗船も中型軍用船だった。しかし、ドラゴン船に比べると遥かに大きく、動きも鈍重だ。

ドラゴン船の髭もじゃの男達のほとんどが、皮の帽子と皮の胴衣を着ていた。『神のシャツ』と呼ばれる鎖帷子や『戦争の猪』と呼ばれる角のない兜などの、音に聞く北方戦士のいでたちのものはいない。

セレスはナーダから聞いた、北方における戦闘についての授業を思い出した。

『海上戦では彼等は、普通、鎧をまといません。機動性を重視しているからです。船が重すぎては思うように舵が取れませんし、海に落ちた場合、重い防具が仇となるからです。海上戦で鎧姿の者を見かけたら、それは一軍の将以上の身分の者、王の可能性もあります』

『王様自らが戦闘に出てくるの？』

『ええ。ですが、王と言っても国王ではありません、部族王です。ケルティは遥か遠い昔から、国を統べる王を戴いてこなかったのです。さまざまな部族が国を分割して統べ、それぞれ部族王を立ててきたのです』

『国王がいなくて国って成り立つものなの？』

『成り立ちますよ。ただ周辺諸国に比べ、国力は弱い。現在、ケルティはシベルアの属国となり、シベルア王家の血筋の者が国王に即位してケルティ新王朝なるものをたてています。シベルアからの移民が国王となり大臣となり国を統べているわけですが、部族王制度自体はまだ残ってるみたいです。ケルティ新王朝下で、村々や地域を統括する長として働いているようです』

『部族王……』

『部族王は最も勇敢な戦士であり祭祀を司る、部族の要です。戦にも率先して参戦します』

『戦？』

『今は戦自体あまり無いんじゃないかと思いますが、百年前、国境が閉じる前のケルティでは十六の部族が、領土争いや水争いで部族間闘争に明け暮れていたそうです。シベルアの属国となって三十年ぐらいでしたかねえ、北の正確な情報って伝わってこないんで現状はわからないんですが、百年前とケルティはだいぶ違うと思いますよ』

ドラゴン船の数は八。セレス達の船首に近づいて来た一艘に、布のマントをまとった三人の男が立っていた。

「南の女勇者セレスとその一行とお見受けする。王命により、その方らが喜ばしき地に入るにふさわしき人間か否か調べさせていただく」

入国審査をしたいと男は、シベルア語で要求してきた。北方における『南』とは、シベルア・バンキグ・ケルティ以外の国々の総称だ。甲板からセレスも、シベルア語で承諾の意を伝えた。

すると、左右のドラゴン船からバラバラと鉤が投げ込まれた。鉤を船にひっかけ太いロープを渡り、海賊さながら北の国の戦士達が船上に現れる。

シャオロンとジライがセレスの盾となるべく、彼女の前に進み出て、彼女の左と背後はナーダとアジャンが固めた。命の危険が迫るまでは武器は使わないと打ち合わせをしてあるので、武器はぬかなかった。シャオロンは爪を装備すらしていない。しかし、いざとなった時、戦えるよう、皆、四方に気を配っていた。

操船していた軍人達は武装解除し、両手をあげている。召使役として同道しているナーダの部下の忍者達は、皆、船室に籠もっている。北国の戦士達は抜け目無く、軍人達を一箇所に集めて監視し、船底への扉の前には監視役となる男達を配置していた。

入国審査官は、さきほどのマントの三人だった。周囲のケルティ戦士達は若くて三十代後半、ほとんどが四、五十代の古兵ばかりだったが、この三人は若かった。二十代前半ぐらいだろう。ケルティ新王朝の役人のようだ。

セレスは三人に会釈すると、シャオロンとジライに手で合図をして下がらせ、騎士にふさわしい所作で膝をついた。

「北の偉大な戦士をお迎えできて光栄に存じます」

一つ一つの発音に細心の注意を払いながら、セレスはシベルア語で三人に語りかけた。

「私達は大魔王ケルベゾールドを滅ぼすべく旅をしております。大魔王の本拠地を求め流離う私どもに、どうぞお力ぞえをお願いいたします」

周囲の男達がどっとわく。セレスの上手とはお世辞にも言えないシベルア語を嘲笑うかのように。ケルティ語で冗談を飛ばし合っているのだ。

セレスがただの騎士であれば、これほど彼らも興奮しなかったであろうが……類い稀な美少女――透けるように白い肌、サファイアの瞳、形の良い唇、愛らしい頬――が、毛皮の長衣の下に白銀の鎧をまとい、美しい金の髪をうなじで一つに束ね、身長ほどもある大剣を背負っているのだ。『勇者』として。美しい女勇者に、男達は興奮していた。

セレスが何か言う度に、周囲がざわめく。入国審査官も止める気はなさそうで、部下達がセレスをからかうに任せている。歓迎の志は欠片もなさそうだ。

通行許可書を見せ、シベルア語で大魔王討伐の為の入国許可を求めるセレスを……

その背後からナーダは、苦々しい顔で見つめていた。武闘僧は羊毛の帽子で禿頭を隠し、僧衣ではなくエウロペ風のシャツとズボンを着て、毛織のケープを羽織っていた。いつも通り神獣のこうらの装甲を両腕両脚に、カルヴェルから貰った結界魔法増幅の腕輪を左手首に装備しているものの、北方ではインディラ教は邪教扱いなので、騒動を避ける為、変装しているのだ。

入国審査官達は勇者一行を侮辱し、怒らせ、騒動を起こさせる気なのだ。表立っては入国を拒めないので、こちらの不手際で入国が不可能となる状況を作らせようとしているのだ。

それなのに……この場でまともに発言権があるのは、政治的駆け引きとは縁遠い直情型正義感の塊――セレスだけなのだ。ナーダは、もどかしくてたまらなかった。こうなっては彼に期待するしかない！と、ナーダは横に佇んでいる者にチラリと目をやった。

セレスの右手背後には、ジライが居た。忍者は賤業だと自らを卑下する彼は、一行の最も後ろに自らを置くのを常としていた。しかし、今日は、彼はセレスの側にいなければいけない理由があった。

入国審査官達は不明瞭な発音の早口で、セレスにさまざまな質問を浴びせていた。ＹＥＳ、ＮＯをはっきりと答えなければいけない時に、わざとわかりにくい言い回しを使う。女勇者に恥をかかせ、可能ならば入国を拒む理由たりえる大失態を犯させようとしているのだ。

けれども、ジライがセレスにしか聞き取れない小声で通訳をつとめてくれるので、セレスが混乱する事はなかった。又、答えに窮するような複雑な問いに対しては、合図を送ればジライが代わりに答えてくれる。ジライは、忍の変装術（変声術）も得意で、セレスそっくりな声を出せるのだ。

ジライは背に忍刀、腰に『ムラクモ』と小刀を帯び、忍装束に覆面をつけている。いつもと同じような恰好だが、着物は単から袷に変わっており、毛皮の胴着を身に着けていた。

シャオロンはナーダの背後にいた。東国の少年は唇を噛み締め、きょろきょろと落ち着きの無い目で周囲を見渡していた。屈強そうな北の戦士達に囲まれ多少萎縮していたが、彼らが変な動きを見せたら、命に代えてでもセレスを守るんだ！と、覚悟を決めているのだ。

赤毛の傭兵からケルティ語も習っていたので、周囲のざわめきもある程度、シャオロンは聞き取れていた。彼等はセレスを侮辱する下品な冗談に交え、勇者一行を値踏みし合っていた。北方では戦士が最も尊ばれる。アジャンとナーダには比較的好意的だったが、妙な恰好で顔を隠しているジライと子供のシャオロンへの評価はひどいものだった。

確かに、毛織のズボン・上着・ケープをまとった体は小柄だ。首の後ろで一つに束ねた腰までの黒髪も、この国の基準からすると女っぽいのかもしれない。それに拳闘士のようなナーダや筋骨逞しいアジャンに比べて、自分の体格は細すぎて見劣りするのもわかる。しかし、今は背の革袋にしまっている『龍の爪』さえ装備すれば魔族とも戦える。自分は戦士の端くれなのだ。小姓じゃない！と、シ

ャオロンは怒っていた。
　シャオロンの隣に、赤毛の戦士アジャンは居た。感情を殺した、鉄の面のような顔を北の戦士達に向けて。その威圧的な顔のせいで、ケルティの男達がのまれる事もあった。下品な冗談を飛ばし合っていたところで、アジャンにジロリと睨まれ、口をつぐんだ者も少なくなかった。
　アジャンの見事なまでの赤毛は、額に無造作にまかれたバンダナのせいで、勝手気ままに好きな方向に向いている。さながら赤いたてがみの獅子のように。筋骨逞しい体を革の衣とズボンで覆い、肩当と胸当てだけの鎧をつけ、毛皮をまとっている。手首の金属の腕輪も防具代わりのようだ。『勇者の剣』よりも巨大な大剣を背負い、『聖王の剣』を佩き、カルヴェルから買った魔法や魔法道具を収めた袋を腰から下げていた。その服装や雰囲気は、北方の戦士達に通じるものがあり、彼らの中にアジャンが混じっても違和感はなさそうだった。
　入国審査官達は顔を見合わせた。女勇者はひっかけの問いにも正確な答えを返す。話すのは下手だが、シベルア語は堪能なのだと、彼等は誤解した。
　ならばと、質問をケルティ語に切り替えた。答えを窮すると思ったのだが、その問いにすら間髪をおかずに女勇者はシベルア語で答えを返してきた（彼等は気づかなかったが、答えたのは女勇者の背後の忍者だった）。
　このままでは、入国を許可せざるをえなくなる。入国させるにしても、勇者一行の失言・失態を記録するよう、上役から命じられているというのに。
　入国審査官達は、最後の手を打つことにした。

「××××××、××××××××××××。××××××××××××××？」

「××××××××××××××××、××××××××××××××？」
「××？　××××××？　××××××××××××××××××××××？」

セレスの顔はひきつった。入国審査官達はちんぷんかんぷんの早口言葉をまくしたてている。
（頼んだわよ、ジライ）
背後の忍者に全て任せるしかない。セレスはジライからの合図を待った。
待ち続けた……
が、忍者は低くうめくばかりだった。
「どうしたの、ジライ？」
セレスが小声で尋ねると、
「……申し訳ございませぬ、セレス様……さっぱりわかりませぬ……」
と、いう情けない声が返ってきた。
「え――！」
叫んでから慌てて口を押さえ、セレスはシベルア語で、
「申し訳ございません。少々、お時間をいただけますか？　仲間に確認したい事がございますので」
と、入国審査官に断ってから、仲間と円陣を組んだ。
「ジライ、何でわからないの？　あなた、シベルア語もケルティ語もペラペラなんでしょ？」
セレスに責められて、忍者は恐縮して頭を下げる。
「は。面目次第もござりませぬ……」
「セレス、さっきのアレ、ケルティの古語ですよ。八百年以上前の言語です」と、武闘僧。
「ナーダ、あなた、アレわかったの？　すごいわ、さすがね！」
「褒めても無駄ですよ、私も単語を幾つか拾えた程度です。アレ、

文献のものと似て非なるものでした。まっとうなケルティ古語じゃありません。方言と思われます」
「え――！あなたでもわからないの！じゃ、どーするのよ、質問に答えられないじゃない！」
「あの……シベルア語で質問してくださいって頼んでみては……？」
ためらいつつ、尋ねるシャオロン。
「そうしてもらえれば楽なんだけれど……無理よ。私を失敗させたいのだもの、彼等」
セレスはハーッと溜息をついた。相手はこちらを陥れるのが目的なのだ、シベルア語に切り替えてはくれまい。
「この質問、従者に代わりに答えさせると言え」
不機嫌そうな顔の赤毛の傭兵が、ぽつりと呟く。
「……俺が答える」
一同は驚いて赤毛の戦士を見つめた。
「あなた、わかるの、アレ？」
「……さっきのアレは部族方言、北のアジやハリ族の言葉だ。昔っから一族に口承でのみ伝えた言語で、文字も地面に書いて教えるんで、書物に残されていない。まあ、もっとも、シベルア新王朝様が誕生してからは、使用する者も減って、廃れたらしいがな」
セレスはポカーンと口を開き、武闘僧はけげんそうに眉をしかめ、赤毛の傭兵を見つめた。
傭兵は二人をジロリと睨むと、早くしろとセレスを促した。

アジャンが口にしたのは、勇者一行の誰一人理解できない摩訶不思議な響きの言葉だったが……周囲の男達が歓声をあげ、入国審査官が悔しそうに眉をしかめた事から察するに、相手の質問に正しく答えたようだ。
周囲の戦士達の目ががらりと変わった。同胞に向ける気安さといおうか……アジャンに対し、先ほどのわけのわからない言葉で話し

かけてくる者も少なくなかった。
それに対し、アジャンはぶっきらぼうに短い答えを返していた。が、何と答えているのか、世界中の言語に堪能な武闘僧さえ、さっぱりわからないのだ。
けれども、入国審査官は、逆に、アジャンに対し、警戒とも侮蔑ともとれる目を向けるようになった。シベルア語で『忘れられた言葉』を話すな！と、周囲の戦士達を怒鳴ってもいた。
「おまえ、何故、ハリとアジの部族語が話せるのだ？」
入国審査官の問いに、アジャンは自分の通行許可書の巻物を開いて見せた。アジャン自身が記入した戸籍、本人と父母の名が記されている箇所だ。
「父より教わりました。私の父方の曽祖父はアジクレボスという名のアジ族の戦士でした。国境閉鎖前にエウロペにおける略奪の咎で獄に繋がれた曽祖父は、牢獄で足が萎えた為、帰国を諦め、現地の女と婚姻してエウロペの戸籍を得ました。しかし、曽祖父の魂は生涯アジと共にあり、子孫にアジの魂を伝えたのです」
アジャンの曽祖父がケルティ出身？　初耳だった。セレスは赤毛の戦士を見つめたが、彼は女勇者の方を見ようともしなかった。
その後は、船中で身体検査が行われる事となった。個別に一人一人調べるというのだ。
セレスだけを船室に入れると、三人の入国審査官は全てを脱げと命じてきた。女性のセレスに、全裸になれと命じたのだ。嫌らしい顔つきで。
だが……間もなく彼等は昏倒した。部屋に潜んでいたナーダの部下の老忍者ガルバが、忍法で彼等を眠らせたのだ。
すぐに、その場に、忍者ジライも現れた。セレスの柔肌、ナーダのインディラ僧の証である禿頭、自分の素顔を隠す為に、入国審査官に幻術をかけて記憶を操ると言うジライ。

セレスは無論、止めなかった。品性下劣な入国審査官など、同情に値しない。

目覚めた時、偽の記憶を植えつけられた入国審査官は、五人の身体検査は終了したものと思い込んでいた。

彼らは女勇者一行の入国を許可した。

港町ハーグナには、武装した軍隊が待ち構えていた。

ホルム警護師団所属第三騎兵中隊。八十の騎兵を伴った指揮官は五十がらみの太った男で、ゲオルグ男爵大尉と名乗り、セレスに対し敬礼をした。王命によりケルティの首都ホルムまで護衛すると、うむをいわさぬ態度であった。

屋根も幌もない馬車に乗せられ、軍隊に連行され、女勇者一行はホルムへと向う事になった。荷物も全て荷車に積まれ、召使身分で同行しているナーダの部下達は監視役の軍人達と共にもっと粗末な馬車に乗せられているのが遠くから見えた。

ハーグナを離れ、海岸沿いの道を進んでいると、歌が聞こえてきた。

海上のドラゴン船の戦士達が歌っているのだ。

それに対し、馬車に同乗している軍人が黙らせろと声を荒げ、騎兵からも怒りの声があがった。

けれども、ドラゴン船は、すいすいと沖に逃げてゆき、軍隊をからかうように歌い続けていた。

あの不思議な響きの言葉の歌だ。

セレスがふと見ると、赤毛の傭兵は口元を微かにほころばせ、海上をみやっていた。

彼にしては珍しい、ひどく優しい眼差しで……

極光の剣　2話

赤い髪のおさげの少女がたたずんでいた。
十三歳ぐらいだろうか？　幼さの残る顔には、きりりとした気品があった。長いアンダードレスは血と泥に汚れており、少女の右手には鉄製の片手剣があった。

少女が何かを叫んでいた。
凛とした美しい顔を悲痛なまでに歪めて。
しかし、セレスには彼女が何と叫んでいるのか、さっぱりわからなかった。

「××！××××××××、××××××××、アジャニホルト××××××××××！××××××××××！××××××××××！××××××！」

少女はまっすぐにこちらを見つめたまま緑の瞳を細め、左手を払った。
早く立ち去れ！と、叫ぶかのように。

「××××××××××××××××××、××××××××××。××××××……」

その頬を涙が伝う。悲しそうな顔で少女が微笑む。

彼女はセレスには理解できない異国の言葉をしゃべっているのだが、不思議な事に、最後に彼女が何と言ったのかはわかった。

「あんた達は生き延びるのよ……。愛しているわ、常に神のご加護があんた達と共にあらん事を！」

体を揺さぶられている……

重い瞼を開くと……覆面の忍者が見えた。まだ薄暗い……夜明け前なのだろうか？

「シッ……」

忍者は口のある位置に右の二の指を立てている。何をしているのだろう？　ぼんやりとした顔で忍者を見つめているうちに、視界に信じられないものが映った。

「！」

忍者の左手が口をぎゅっと押さえてくれたので、大声をあげずにすんだ。

顔を真っ赤にしつつ、覆面から覗く忍者の眼に頷きを返し、周囲を見渡した。ここは、ケルティの宿屋の一室だ。寝台の側においてある荷物からして、間違いなく、自分一人にあてがわれた部屋だ。

それなのに、何故……

寝台の中にセレスが居るのだ～！

忍者の手振りの指示にあわせ、そっと寝台から抜け出す。渡されたガウンをまとい足早に、しかし、足音をたてないように部屋を後にした。廊下に出て、扉を閉めると、大きな溜息が漏れた。

「何で、セレス様がオレのベッドに……」

「寝ボケられたのだ」

一緒に廊下に出た忍者が簡潔に答える。

「小用から戻られたセレス様は、真っ直ぐにおまえの部屋に向われ、おまえのベッドに滑り込まれたのじゃ」
「何で？」
「さあ？　おまえの眠っているベッドならばぬくいとでも思われたのやもしれぬ。北国の夜は冷えるゆえ。まあ、半分寝ている人間のやられた事、たいした理由などないのやもしれぬ」
「……ジライさん、又、一晩中、セレス様を覗いてらっしゃったんですか？」
「人聞きの悪い事を言うでない。一晩中、屋根裏より護衛していただけの事よ。夜中過ぎであったな、セレス様がおまえの寝床に入られたのは……」
「見てたんなら、すぐに起こしてくださいよ！」
「阿呆。あのような中途半端な時間に騒ぎを起こせるか」
「え？」
「セレス様が起きてしまわれたら、どうする？　セレス様のすこやかな眠りをお守りするのも我が務めよ」
「……で、でも」
「おまえ、眠りは深い方ゆえ、セレス様がいらっしゃったの、気づかなかったであろう？」
「う」
「それ故、男女の間違いなど起きぬとみて、放っておいた。セレス様の爽やかな目覚めを妨げぬよう、おまえが先に起き、この後、我（われ）がもとのご寝所までお運びすれば何の問題も無い。わかったか、シャオロン？」
セレスに寝床を奪われた――東国の少年シャオロンは唇をとがらせ、うつむいた。
動悸が早い。顔中も熱い。目の前にセレスが眠っていたのだ。ぬいぐるみを抱くかのように、やわらかな体に抱きしめられていたのかもしれない……
顔がますます赤くなってゆく。

シャオロンは自分の中の甘酸っぱい感情に溺れ、思いに沈んでいた。その為、気づかなかった。忍者が無言でジーっと見つめている事に……

セレス達の馬車は、二日目から屋根付きのシベルア風馬車に変わっていた。

寒い！風邪を引いてしまう！と、監視役の軍人ゲオルグ男爵に訴えたところ、近隣の貴族の館から貴婦人用の馬車を徴集してきたのだ。

とはいえ、六人がけの馬車に、大柄なナーダとアジャン、それにビール樽のような体型のゲオルグを加えた六人で座るのだ。馬車の中は非常に狭苦しかった。多少でも広くする為に、『勇者の剣』とアジャンの大剣は荷車に移した。セレスは『虹の小剣』、アジャンは『聖王の剣』のみの武装に減らしたのだが、それでもまだ狭かった。

一席にゲオルグ・シャオロン・アジャンが座り、向かいにジライ・セレス・ナーダが腰かけていた。

ナーダは口元をハンカチで覆い、セレスから顔をそむけ、扉窓につけられたカーテンをめくって外を見ていた。

顔色が良くないので車酔いかとセレスが尋ねたところ、そうではなく馬車の中の匂いが耐えられないのだという答えが返った。香水の匂いがキツいとナーダは言う、前の持ち主の香りが馬車に染み付いているのだと。言われて見れば、ほのかに香るような気もした。が、その程度だ。臭いと言うほどではないと、セレスは首を傾げた。

そんな二人の会話を聞いていた赤毛の傭兵が、武闘僧に席を替わろうか？　と尋ねた。

「お姫様のお守りは任せな。具合の悪い奴は寝てろ」

ナーダはちらっと視線をゲオルグに向けた。シベルア貴族の出を自慢しているこのデブな五十がらみの軍人は、共通語とエウロペ語

が話せるそうで、馬車の中ではシベルア語まじりのあやしげな共通語でセレスに話しかけている。ゲオルグの共通語はいわば百年前の古語なのだが、こちらがしゃべる言葉をほぼ理解できているとみていい。

今までセレスが不用意な発言をしそうになる度に、武闘僧は彼女を軽く小突いたりして、合図を送って制してきた。しかし、香水臭い狭い馬車の中でセレスと密着しているのもそろそろ限界だった。鳥肌が引かないし、吐き気も耐えられないところまできている。いつ戻してしまうことか。

「アジャン……今日のところはお言葉に甘えさせていただきます。後はお任せしますね……」

席を替わると、武闘僧は帽子を被り直し、目を閉じた。顔はあいかわらず、扉窓の方に向いたままだ。

セレスは監視役の軍人に、にこやかに語りかけた。そうしろとナーダに指示されているのだ。

国境が封鎖されていた為、この百年の北方の歴史はつまびらかになっていない。

セレスがナーダから習って知っている事といえば、微妙なバランスの上に成り立っていた三国の同盟がこの百年で形ばかりになった事、五十年前からシベルア・バンキグの連合軍がケルティ侵略を始め、約三十年前にシベルアの王子がケルティの王を名乗りケルティ新王朝を立てた事、バンキグもシベルアの属国扱いをされている事、シベルア語が三国の共通語として用いられている事ぐらいだ。

「偉大なるケルティの国王陛下は、シベルア王家の出身の方と伺っております。私のような南の女にはよくわからないのですが、ケルティとシベルアではお国柄がかなり異なるのではないのですか？」

「さよう。女勇者様はご存じなかろうが、ケルティは、文明の開けぬ、国と呼べぬ土地でした。古来より、国を統べる王が存在しなかったのです」

「国王が居なかったのですか？」

「はい。ケルティは十六の部族がそれぞれ勝手に王を名乗り、内戦と他国への略奪を繰り返しておりました。我が母国シベルアが、この地を統治してやらねば、馬鹿どもは未だに戦に明け暮れていたでしょう」

「はあ」

「百年前にはそれでも各部族がもう少し団結しており、『上皇』なる国王に近い存在もありもうした。上皇は部族王の中の部族王で、各部族の自治を認めた上で全部族を統括する存在でした。百年前、我が母国の皇帝陛下とバンキグ国王そしてケルティの上皇が同盟を結び、南とのくだらぬ関係を絶ちました。上皇制度がその後も続けば良かったのですが、三十年ほどで崩壊し、以後、ケルティに上皇は存在しておりません」

「何故です？」

「おや、おわかりになりませぬか？　野蛮だからです。あやつらは身の程知らずの欲深い存在なのですよ」

「……そうなのですか？」

「ええ。水争いだ、土地争いだ、仇討ちだで、部族抗争が絶えず、全ての審議を公平に扱えなかった上皇は権威を失墜しました。馬鹿どもは上皇を殺し、欲望のままに内戦を始めました。七十年前のことです」

「大規模な内戦だったのですか？」

「いやいや」

軍人は侮蔑の笑みを浮かべた。

「我が母国における村同士の小競り合いのレベル。しみったれた争いにございます。ただ、部族が十六もあった事が問題で……同盟だ、戦争だ、裏切りだ、で、国が一向に落ち着きませんでした。それで、やむなく我が母国の皇帝陛下はイヴァン王子をこの国の王にすえ、馬鹿どもを教え導く事にしたんですよ」

「それって、しんりゃ……！」

『侵略』と言いかけたが、言えなかった。アジャンに足を踏まれ、

止められたからだ。事実は紛れも無く『侵略』だが、支配者側に『シベルアがケルティを侵略したんですね？』と、言っても相手を怒らせるだけだ。

「えっと……どうして、シベルア皇帝は、ケルティの内戦を放っておけなかったのですか？」

「……ケルティの隣国がエウロペにござりますれば」

女勇者は眉をひそめた。

つまり、ケルティの内戦につけこんで、エウロペが北方諸国に進軍してくる事態をシベルアは憂慮したのだ。ケルティとエウロペの国境を自軍で固めるべく、シベルアはケルティを侵略したのだ。

「しかし、国家統一は思いの外、難しきものにございました。何しろ、馬鹿どもはてんでバラバラに暮らしておりましたからな。十六の部族をそれぞれ制圧していかねばなりませんでしたし、都市も建設せねばなりませんでした。シベルア王家の王子がこの国の統治に乗り出されたのは約五十年前……それから国の体裁を整えるまで二十年かかったのです。今からあなた方をお連れする首都ホルムは、最初にこの地に築かれた都市でもあります」

セレスの横のジライは、うとうとと首を上下に動かし、うつむいていた。昼寝をしているような態度を装いつつ、忍者は軍人のシベルア語まじりの古い共通語を、セレスにしか聞き取れぬ小声で共通語に言い直したり特殊な単語を解説したりして通訳につとめているのだ。

「ケルティでは部族王といえども、みすぼらしい木造の建物に住んでおりましてな、宮殿と呼ぶにふさわしい建築物など皆無でした。偉大なる我が王ゴドゥノフ陛下の父君初代ケルティ国王イヴァン陛下は母国シベルアより、文化人や学者、職人を呼び寄せ、愚かなるケルティ人を教え導き、文明を教えたのです。首都ホルムは生まれて三十年の歴史の浅い街ですが、シベルア文化の粋を尽くしたそれは美しき都ですぞ」

「それは楽しみですね」

セレスは薔薇のように艶やかな笑みを浮かべながら、尋ねた。
「ホルムには後どれぐらいで着きますか？」
「このまま順天に恵まれれば、一週間ほどでございましょう」
「私の母国よりも寒さは厳しいですが、雪はまだあまり見られませんね。私、北方はもっと雪が多いものだと思い込んでいました」
「ここはケルティの南部にございますからな」
ゲオルグは嫌らしい眼で、美貌の女勇者を見つめていた。
「ですが、北部は半年も雪に埋もれます。冬の間は海も凍りつき、ドラゴン船を出せず、陸に閉じ込められるのです。なのに、馬鹿どもは、北部が好きでしてなあ、南部に住みたがらないのです。重税を科しても土地にしがみつきおり、強制連行せねば人手が足りず、いやはや、昔は苦労をしもうした」
強制連行？
セレスは顔をしかめた。
この軍人の話を聞くにつけ、ケルティのひどい現状がわかってくる。ケルティはシベルアに侵略され、ケルティ人はシベルアからの移民に不当に差別され、虐げられているようだ。
「馬鹿どもをシベルア教に改宗させるのも、なみなみならぬ苦労がございました。あやつら、生贄を求める邪教を信じておりましてな、かたくなに偉大なる教えを拒んだのです。わしは司祭様のお供でよく十六の部族の部落を訪れました。邪教の寺院を焼き払い、偶像を壊すぐらいでは、馬鹿どもは従いません。改宗を拒む者を教え導くには、やはり拷問に限ります」
「！」
セレスはぎゅっと拳を握り締めた。女勇者が不快を表情に表している事に、しかし、シベルア出身の軍人は気づかず、得意そうに己の過去を語り続けた。
「一人一人、鞭打ち、財産を奪ってやった事もありますが、部族王を殺す方が効率が良かったです。馬鹿どもの王はシャーマン王、宗教の要ですからな。できるだけむごたらしく殺すに限ります。部族

王に反乱の意志ありとの密告があれば、すぐにも乗り込み、ケルティ新王朝とシベルア教の名の下に処刑を行いました。よくやったのは処刑を一日待つ方法です。部族王を牢屋に入れ、わざと一日の猶予を与えて信仰する神に救いを求めよと命じました。が、無論、奇跡など起きませぬ。翌日、大衆の前で部族王を神像と共に縛り上げ火あぶりにしてやったものです」

セレスのサファイアの瞳が、怒りにきらめく。

武闘僧は目の端で向かいの席の女勇者を見つめた。顔中を真っ赤にしているセレス。赤毛の傭兵はまだセレスを止めないのだろうか？　このままでは彼女、ゲオルグを張り倒しかねないぞ、と、いぶかしく思いながら。

「処刑方法も火あぶりばかりではあきるので、司祭様といろいろ考えもうした。その中でも、蛇を使った処刑、アレはおもしろかった。まずは中が空洞の杖を用意いたします。その中に蛇を入れ、穴の開いた杖底を部族王の口の中に押し込んでやるのです。胃の中に落ちた蛇は暴れ、胃から脇腹までを食い破り、外へと逃れます。苦しみのたうちまわりながら、シャーマン王がゆっくりと惨めに死んでゆくのです。馬鹿どもも、己が宗教のむなしさを実感し、進んで改宗に応じましたよ。一番最初に蛇の処刑を試したのは、アジ族の」

ガタン！と、音を立て、軍人の向かいの席に座っていた者が立ち上がった。

けれども、それは女勇者ではなかった。

ぶるぶると体を震わせ、蒼白な顔でゲオルグを睨みつけているのは……赤毛の傭兵アジャンだった。狭っ苦しい馬車の中なので、身を折ってはいた。が、緑の瞳は怒りに燃え、今にも腰の剣を抜きそうな形相だった。

「な！何だ、きさま！何を！」

軍人はうろたえ、ぶざまに尻で後ずさった。とはいえ、馬車の中にいるのだ。さがっても背もたれにぶつかるばかりだ。

馬車の中に緊迫した空気が満ち始めた時……

ゲオルグの横の少年が、すっとんきょうな叫び声をあげた。
「あああああ！」
東国の少年は立ち上がり、隣に座るゲオルグにぺこりと頭を下げた。
「すみません！アジャンさんが、ご無礼を働いて！でも、悪気があったわけじゃないんです！アジャンさん、蛇恐怖症なんです！」
「へ？」
シャオロンの思いがけない言葉に、馬車の中の一同の目が点になる。アジャンですら目を丸めていた。
「蛇恐怖症なんです！だから、さっきのお話でびっくりしちゃったんです！そーですよね、ナーダ様？」
「あ？　ああ！」
武闘僧は頷きを返した。少年の意図がわかったのだ。
「実はそうなのですよ。この者の身内に毒蛇に噛まれて亡くなった者がおりまして……このように逞しい外見のくせに、蛇となると小蛇まで怖がる、蛇のへの字も駄目な蛇恐怖症なのです。どうかお許しください」
ナーダも立ち上がり、アジャンの頭をぐいっと下げさせた。シャオロンの機転で怒気を抜かれたのか、アジャンはされるがままに軍人に頭を下げた。
むちゃくちゃな言い訳だったが、面子を守られて満足したのか、ゲオルグは芝居がかった寛大な態度で赤毛の傭兵を許していた。

「すまなかった……」
野原に馬車を止めての小休止の時、ゲオルグが馬車を離れた後、赤毛の傭兵は勇者一行に苦渋に満ちた顔を見せた。
「怒りに我を忘れるところだった……助かった、シャオロン、おまえが止めてくれなきゃ、あのデブ、叩き斬っていた……後先考えずにな……」

アジャンは重苦しい溜息をつくと、セレスに頭を下げた。
「……今日の俺は護衛の仕事を果たすどころか、護衛対象を窮地に追いやる行動をとろうとした。すまない。今日の分の護衛料は精算時に引かせてもらう。あと、違約賠償として成功報酬の三十分の一を放棄する旨を文書にして」
「そんな事、どーでもいいわよ！」
セレスは赤毛の傭兵を正面から見つめた。
「教えて、アジャン、あなた、何を苦しんでるの？」
「……」
「ケルティに来る前から、あなた、ずっと変よ。この地に何か、あなたの心を暗くさせるものがあるのでしょ？　教えて」
「……セレス様」
ぼそっと呟いたのは、ジライだった。馬車の扉を指差している。この会話、外にいるケルティ軍の者に盗聴されていると合図を送っているのだ。
「……国交断絶直前に、俺のひい祖父さんのアジクレボスはエウロペにやって来た。帰るに帰れなくなったひい祖父さんはエウロペで家族を持ち、死んだ。しかし、その魂はケルティにあり、部族の教えを子供達に伝えていったのさ……つまり」
アジャンは顔を歪めた。
「ケルティは俺の血の故郷……だから、柄にもなく熱くなった。それだけだ」
セレスは瞳を細めた。
それは真実？
それとも、ケルティ軍から真実を隠すための嘘？
アジャンの顔をどれほど見つめても、セレスにはわからなかった。
……
セレス達は民との接触を禁じられていた。南の悪しき思想を伝え

られては困るとの理由で。
しかし、セレスは世直しの旅に来ているのだ。通行許可書を見せ、そこに記された『魔族討伐権の保障』を強調し、魔族の進行状況を自分の眼や耳で確かめたいと主張した。
ゲオルグは軍人を伴っての情報収集であればと不承不承セレスの要求を容れ、村に着く度に数時間の自由時間を認めた。
けれども、ゲオルグが一行に同行させた兵士達は柄の悪いチンピラのような外見と品性の者ばかりだった。住民を脅しては、勝手に家の者を盗むような。
粗末な村の痩せた住人達は、軍隊と女勇者を恐れへつらうばかり。ケルティ新王朝とシベルア教を讃える言葉以外は、口が重く、魔族など見た事も無いと言うだけだった。
ケルティは、偉大なるゴドゥノフ国王陛下とシベルア教の威光に満ちあふれ、邪な魔族など入りこむ隙間などない、と。

旅を始めて三日目の夕方、宿泊宿から、セレスは街道を行く、檻でできた馬車を見かけた。檻の中にはみすぼらしい服装の男達がひしめくように佇んでいた。
翌日、見たものの事を口にすると、ゲオルグは、港町ハーグナ近辺の湾岸工事に向う囚人護送車だろうと答えた。
昔と違って、今は良い時代になったと軍人は言った。抵抗運動者（レジスタンス）、税金滞納者、邪教信徒（この場合の邪教は部族信仰を指す）、ケルティ新王朝への不敬者……監獄には常にケルティ人が集められている。
昔のように国中に散らばっているケルティ人を駆り集めずとも、囚人で人手は足りる。荒地開拓や坑道採掘、道路整備、灌漑工事等の重労働の働き手には困らないと。

極光の剣　3話

ケルティの地を踏んでから五日目、勇者一行とケルティ軍が川沿いの町トスベルに宿泊した夜の事だった。

宿屋の部屋で寝台に寝転がり睨むように天井を見つめていた赤毛の戦士の元に、突然、来訪者が現れた。扉を使わずに、部屋の中に侵入してきたのだ。

「アジャン」

「……」

赤毛の戦士は大儀そうに上体を起こし、寝台の前に佇むあやしげな恰好の人物を睨みつけた。

「クソ坊主、何の仮装だ、そりゃ？」

「何って……」

来訪者――ナーダは己の恰好に目をやった。革の胴衣にズボン、腰に片手剣を佩いている。

「当地の戦士の恰好ですけど？　どこか変ですか？」

「ああ。その頭と顎がな」

そう言われ、武闘僧はにっこりと笑みを浮かべた。

「なかなか似合うでしょ？　ジライから借りたのです」

「ケッ！」

アジャンはそっぽを向いた。ナーダは肩を過ぎるほどの黒の癖毛のカツラを被り、同じ色と癖の付け髭を顎につけているのだ。

「そんなイカれた恰好をしてどうした？　軍隊にでも雇ってもらうのか？」

「いいえ」

ナーダは肩をすくめた。

「この地で北方諸国一の情報屋の元締めに会う約束をしていましてね、その為の変装です」

「……おい」

アジャンは声を潜め、仲間を睨みつけた。勇者一行には、始終、監視がつけられている。覗き穴、屋根裏、床の下、何処に監視役が隠れているかわからない。千里眼の魔法で覗かれている恐れもある。不用意な発言をしたナーダに黙れと、アジャンは目配せを送った。が、

「今は何を話しても大丈夫ですよ。私とあなたの監視役は、先ほど、ジライが忍法で眠らせてくれました。部屋の周囲は部下達が固めていますし、幻術効果つきの結界も張りました。千里眼の魔法で覗かれても、この部屋に、あなたが一人で寝ているだけの映像しか見えません」

「ほう」

「情報屋の元締めとの約束の刻限まで、まだ少し余裕があります。ですから、宿を抜け出す前に、ずっと気になっていた事をこの機会に聞いてしまおうと思いましてね……アジャン、少々、私の話につきあってくださいませんか？」

赤毛の戦士は不快そうに眉をしかめた。何を尋ねられるかおおよそ察しがつくからだ。

しかし、武闘僧は思いもかけぬ言葉を口にし、話を切り出してきたのだ。

「エウロペで初めてお会いした時から、ずっと思っていました……あなたは私の嫌いなタイプだと」

「ん？」

「あなたは、下品で女好きでがさつ、お金にうるさく、自分の外見や剣の腕前を鼻にかける傲慢な性格です。攻撃的で常に敵をつくりたがる生き方も嫌いです。聖職者や死者に対して全く敬意を払わないところなど、最悪ですね。本来なら側に近寄りたくも無いタイプです」

「ケッ！　言ってくれるぜ！」

「けれども、アジャン……一年半以上共に旅をしてあなたが不快なだけの人間でない事はわかりました。年少者に示す優しさ、命がけ

で仲間を守ろうとする気骨、自分と雇い主に忠実であろうとする傭兵魂など、好ましく思えるとこもあります。ですから、正直に言いまして……」

武闘僧は、一呼吸を置いてから言葉を続けた。

「あなたを失いたくない」

「……」

「私にはわかります。このまま心を閉ざし続けていたら、あなた、闇に堕ちますよ。心の隙間を魔族につかれてしまいます」

赤毛の戦士はフッと鼻で笑った。

「……かもな」

「アジャン！」

「ちょっと背中を押せば、今の俺は魔に堕ちる。この地に戻った以上、俺は復讐を果たさなければならない。捨てたつもりでいても血の絆は未だに俺を縛っていた……殺したくて、殺したくって、たまらねえんだ。支配者面をしているシベルア人どもや家族の仇を……皆殺しにしたい」

顔を歪め空を睨むアジャンには、他を拒む狂気があった。触れるもの全てを焼き滅ぼす業火のごとく……

「……やはり」

ナーダは眉をよせ、唇を噛み締めた。

「あなた、越境者だったのですね。エウロペに不法入国したケルティ人なのでしょ？」

「ああ、十三の時に国境を越え、故郷を捨てた」

「アジクレボスの曾孫というのは？」

「むろん、詐称だ。不法入国後しばらく世話になった強欲ババアから買った戸籍だ。アジクレボスという、エウロペで死亡したケルティ人は実在している。ちょっと調べたぐらいじゃ、この詐称はバレねえ」

「……苦労なさったんですね。あなたのお父様はシャーマン王でしょ？　アジ族の王ですね？」

「何だ、そこまでバレちまったのか」
アジャンは低く笑った。
「まあ、馬車の中であれほどのバカやっちまったんだ、バレてもしょうがねえか」
「もっと以前から、そうではないかと思ってましたよ。シルクドでストーン・ゴーレムを操る魔族と戦った時からです。あの時、弟さんの名前は『アジャニホルト』で、あなたの能力はお父様からの遺伝だっておっしゃったでしょ？　名前の最初に部族名を付けるのが北方古来の風習ですし、アジ族はケルティ最古の部族の一つだと本で読んだ事がありました。それに、ケルティで優秀なシャーマンとなれば真っ先に浮かぶのは部族王ですから」
「アジャニホルトの名前を俺が口にした時から側に居ただぁ？　おまえ、いつから話を盗み聞きしてたんだ！」
「背中の『勇者の剣』が宙を飛んでったんです。何事かと思って駆けつけるに決まってるじゃないですか、気配を殺して話を伺ってたんです」
「……油断のならん野郎だ」
「あなたも本名はアジ何とかなのでしょ？」
「……そうだ」
「本名を忘れたというのは嘘ですね？」
「いや、忘れていた。というか……思い出せぬよう、自ら心を縛っていた。自分の名前と、家族の死に立ち会った時の感情を、な」
「心を縛る？」
「記憶はあるが、再生できない状態だ」
「はあ。器用ですね、意志の力で、特定の事だけ忘れるんですか……シャーマンの血筋だからこそできる精神操作ですかね」
「ケルティ人は血と名にかけて一族の誇りを守る。一族を殺害された者は、必ず仇を討つ。その義務を怠る者や敵に背を向ける者は、人間の屑とされる。だが、俺は……仇など討ちたくなかったんだ。守るべき者は誰一人居ないし、部族神への信仰心ももはや欠片もな

い。俺は浮き草だ。アジャニホルトを失った時、俺はアジを捨てた。だから、心を縛ったんだ。なのに……」

アジャンは拳を握り締めた。その手は血の気を失い、白くなっていた。

「ジジイが俺に過去見の魔法を使いやがったんだ」

「え？　カルヴェル様が？」

女勇者セレスの魔法の師カルヴェル。当代随一の大魔術師であり先代勇者ランツと共に大魔王ケルベゾールドを倒した英雄……と、讃えられているわりに、人格に問題のある老人だ。いくら乞われても女勇者一行には加わらないし、ニコニコ笑うばかりで決して本心を明かしてくれない。旅先に出没し気分次第で手を貸してくれる事もあるものの、あてにならない存在なのだ。

「何時、カルヴェル様が過去見の魔法を？」

「……あのジジイが通行許可書を持って現れた日だ。『聖王の剣』の貸しだし料金代わりに魔法をかけさせろと言ってな」

「……どうして、そんな……」

「知るか！ジジイは俺に……あの日を思い出させやがったんだ」

「あの日……？」

「父が処刑され、母と姉が陵辱の末に殺されたあの日……七つだった俺が、幼い弟と妹を連れて村から逃げた日だ」

「……」

「おかげさまで、俺の中の戦士の血が疼き出した。家族の仇やシベルア人どもをぶっ殺したくって堪らなくなったんだ。だが、俺が復讐に走れば、勇者一行は窮地に陥る。それに多分、俺は……俺でなくなる。ケルティに足を踏み入れるべきじゃない。自明の理だ。なのに、あの、くそジジイ……」

アジャンが忌々しそうに、息を吐き捨てる。

「祝福の魔法の代金代わりだって、命令しやがった。セレスと共にケルティに入国し、なすべき事をなせと、さ！　契約切れを理由に、俺は勇者一行を離れるつもりだったのに！　再契約しろと、あのジ

ジイが！　絶対、後悔するぞ、あいつ！　俺が女勇者一行を破滅に追いやるだろうに！」

「アジャン！」

武闘僧は血の気が引いたアジャンの手を握り締めた。

「あなたの心の内に、絶望と深い憎悪がある事はわかっています。ですが……勇者の従者として、私達の元に留まってくださいませんか？」

「……」

「あなたの狂気は魔を呼びます。魔は器としてのあなたを欲し、あなたの心は大国に対抗する強大な力を欲しています。魔に堕ちないでください……あなたを……殺したくない。ケルベゾールドを滅ぼすまで、一族再興は待ってください」

「……一族再興だぁ？」

赤毛の戦士は武闘僧の手をふりほどき、ゲラゲラと下卑た笑い声をあげた。しかし、その目は笑みに崩れる事無く、冷めた光を放っていた。

「アジ族の残党など、くそくらえだ！　シベルア人どもに皆殺しにされればいい！　誇り高いアジは父アジクラボルトと共に滅んだ。今、生き残っているのは、薄汚い卑怯者だけだ……俺を含めて、な」

「アジャン……」

「部族王の父を蛇の腹裂き刑で処刑したのは、ケルティ新王朝の軍隊とシベルア司教だが……母と姉をなぶり殺しにしたのは身内だ。アジの男どもだ」

「！」

「シャーマン王の家族を殺し、偽王に恭順を示したかったのさ！　アジは堕落し、地に堕ちた！　救う価値などない！」

「……」

「俺には未来の展望などない。ただ、戦いたいだけだ。一人でも多くの馬鹿どもを道連れにしてくたばれれば、それでいい」

狂戦士（ベルセルク）……

北方の神話に時折現れる、狂乱状態となって敵を打ち殺す戦士だ。野獣のような獰猛さを発揮し、死を恐れず忘我の境地で戦う彼等は……その多くが悲惨な最期を迎える……

ナーダは、赤毛の戦士を静かに見つめた。

「……弟さんと妹さんはどうして亡くなったのです？」

「妹は風邪をこじらせて死んだ。弟は凍死だ。俺達兄弟はシベルア軍や身内の追手を恐れ、数年、ホルムの貧民街に潜んでいた。アジ王の子だとバレないように、偽名を名乗ってな。二人を食わせる為に、かっぱらいやら、強盗の手伝いやら、できる事は何でもやった。しかし、貧民街の路地で妹は病死し……弟も……」

「……」

「俺がドジを踏んでしまったせいだ……軍隊の浮浪者狩りに捕まっちまったんだ……弟は帰らぬ俺を待ち続け、凍え死んだ。俺は間に合わなかった……いつもそうなのだ、俺は間に合わない。薬を手に入れた時には妹にモノを飲み込む力すらなくなっていたように……俺が駆けつけた時には弟は凍えた亡骸となっていた。命を惜しみ、逃げるのが遅れたんだ……帰るのが遅すぎた」

「……」

「アジャニホルトが……弟が死んだ時、思った。神など要らん、と。俺の家は神の憑代を代々輩出してきた、神に最も近しい血だ。けれども、我が一族の神は俺の家族が一人、又、一人と死んでゆく時、何の救いの手も差し伸べてくれなかったのだ」

「……」

「俺が七つの時、神は俺の家族を見捨てた。父は蛇に腹を食い破られて死に、母と姉は身内に犯されて殺された。姉はまだ十三だった。来春にはハリ族に嫁ぐはずだった。男勝りで勝気な姉は、俺達を逃す時間を稼ぐ為、そして病に伏していた母を守る為に家に残り……殺された」

「……」

「弟と妹を森に隠してから、俺は姉の言いつけにそむいて家に帰っ

た。姉を守りたかったのだ。だが、俺は間に合わなかった。姉は死んでいた。衣服を剥かれ、縛られ、蹂躙された後……喉や体をズタズタに切られ、殺されたのだ。俺が駆けつけた時、命つきたその体は、尚も男達に犯されていた。母の遺骸もひどいものだった。縛られたまま、細かく切り刻まれていた。怒りに身を任せ……俺はその場に残っていたクズどもに復讐を果たし、家に火をつけた」

「復讐を果たしたって……殺したのですか？　大人を？　七つだったのでしょ、あなた？」

「アジの男は子供でも戦場に立つ。あの時、俺が切り捨てたのはたったの三人だ。しかも、素っ裸の丸腰。その死姦が趣味のくされ外道どもは、俺の従兄弟達だった」

「……」

「神もアジ族も、もはやどうでもいい。父を失った後、アジがどうなったかなど、俺にはわからなかったし、今も興味はない。滅びるのなら滅びちまえばいい。しかし……」

「皆の死に顔が脳裏を離れない。俺の体の中の血が『戦え』と叫んでいる……血の掟が俺を駆り立てる。何もかも捨てて復讐に走りたい」

「だが、俺は傭兵だ。契約は守る。セレスがケルベゾールドを倒すまで、俺はあの女の傍らに立って共に戦うと誓った。あの女がどう思っているか知らんが、俺にとって誓いは絶対だ。おまえ流に言えば『神聖なもの』といったところか。誓いが生きている限り、俺は私闘には走らん。それに、今、俺が復讐に走れば、おまえらまで偽王の軍隊に追われる事になる。馬鹿女やクソ忍者やおまえが殺されても罪悪感はないかもしれんが……シャオロンまで巻き込みたくない。あいつは無事、シャイナに帰してやらねば」

「時々、頭にカーッと血が上ってしくじるかもしれんが……復讐心は殺しておく」

「このところ、朝から晩まで魔除けのペンダントを付けたまんまなんだ。おまえの言うとおり、油断すると、今の俺は容易に魔に堕ちる。そうはならんよう、俺だとて考えてはいるんだ」

「しばらくは、勇者の従者として働くさ」

「安心しました……」

武闘僧は仲間に笑みを見せた。

「あなたは、このパーティには無くてはならない存在です。私達の元にとどまってくれて、本当に嬉しいです」

「気色悪い！　やけに持ち上げるじゃねえか、クソ坊主」

「そりゃあ、そうですよ」

ナーダの笑みが悪戯っ子を思い出させるものに変わる。

「あなた、このパーティの表の資金の金庫番ですもの。居なくなられたら、困りますよ」

「……金勘定なら誰がやったって同じだろ？　忍者でもシャオロンでも……」

「馬鹿言わないでください。セレス至上主義のあの二人に財布を渡せますか。あの二人じゃ、セレスが望めば幾らでもお金を渡しちゃいます。セレスがあっちこっちに寄付しまくって、くだらない物を買いまくって、あっという間にパーティはスッテンテンですよ」

「なら、おまえがやれ。貨幣単位は覚えたんだろ、もと王子様？」

「とんでもない！　世俗のお金なんか、セコセコ数えたくありませんよ。手が穢れます」
「……てめえ、隠し財産、ごまんと持ってる奴の台詞か、それ」
「私の隠し財産は、部下のガルバが管理しています。国を動かせるほどの莫大な金額らしいのですが、どれほどあるのか正確な金額は私は知りません」
「ケッ！　羨ましいこって！」
「ガルバ達の活動資金にもなってるので放棄してませんが、私自身、執着はないんですよ。本当に、俗世の貨幣に興味が無いんです。ですから、大魔王を倒した後、半分ぐらいあなたに譲ってもいいかな？　と、いう気分になってます」
「へ？」
「本当は全部あげてもいいんですが、全財産譲るって言ったらガルバが怒りまくるでしょうし、アレが生きるの死ぬの言い出すと面倒なので……半分か、もしかするともっと少なくなってしまうかもしれませんが、あなたに譲りましょう」
「何だと……」
「あなたが、ケルティの上皇に就いてくださるのなら、ね」
「なっ？」
「あなたは最古の部族の、正当な王の長子です。上皇となる資格はあります。まあ、各部族から承認をもらわなきゃいけませんけどね、そこはそれ私の財力と、あなたのシャーマン戦士としての高い技量をもってすれば不可能じゃないと思うのですよ」
「……」
「国はその国の人間が統べるからこそ成り立つもの……ケルティはあなた方ケルティ人のものです。国王に匹敵する上皇を誕生させ、シベルアの専横から国を取り戻しませんか？」
「おまえ、何を……」
「あなたが上皇になってくださるのなら、大僧正候補としてもあなたを援助します。大僧正様も私に賛同してくださるはずです。布教

活動一切抜きで、インディラ寺院はケルティ上皇擁立の為に尽力します。世界各国に寺院支部のあるインディラ教団が本気で動き出したら、その影響力も戦力もちょっと見ものですよ」

「ナーダ……」

「エウロペ国王とインディラ国王を動かす自信はあります。うまく立ち回ればシベルアの隣国シャイナも味方につけられるでしょう。国家間戦争勃発は回避したいところですが、エウロペ・インディラ・シャイナとの緊張状態が高まればそれだけで牽制になります。シベルアはケルティどころではなくなる……勝てますよ」

「……何故だ？」

あっけにとられ、赤毛の戦士は武闘僧を見つめた。

「何故、おまえはそんな事を……？」

「それが正義だと思うからですよ。それに、」

「それに？」

ナーダは照れたように笑った。

「セレス流に言いますと、私達は『仲間』です。友の窮地を救いたいのですよ」

「は……？」

赤毛の戦士は顔を歪め、腹を抱えて大声で笑い出した。先ほどの苦しげな笑いと異なり、本当に笑っているようだ。笑いすぎて目に涙すら浮かんでいる。

「アジャン……そんなにおかしいですか？」

「おまえ、変わったな！　俺達は『大魔王を倒すという共通の目的の為に集まっただけの間柄』だろ！　『仲良しこよしにはなれないし、なりたくもない』んじゃなかったのか？」

「この旅でいろんな経験を積んで、私も成長したんですよ」

フンと荒々しく息を吐いてから、ナーダは視線を扉に向けた。

「ガルバが待ちくたびれているようです。そろそろ行かなくては……」

「ああ、どこへなりとも行って来い」

「せっかく情報屋に会うのです。ついでに、アジの現状とアジクラボルト王処刑時のアジ族の動きの情報も買ってきますよ」
「ケッ！　余計なお世話だ！」
「あなたの為だけではありません。私自身、興味があるのです。アジは地に堕ちたとあなたはおっしゃいましたが、お父様達が亡くなった時、あなたは七つだったのでしょ？　一族の大人達全員の思惑をご存じだったとは到底思えません。裏切りはごく一部の軽薄な者の仕業で、一族の多くはシャーマン王アジクラボルトの死を悼み密かに部族の神を祭り続けていらっしゃるかもしれません」
「……ありえん」
「ともかぎりませんよ。調べてみなければわかりません」
「俺はアジの王にならんぞ。ましてや、上皇なんぞなりたくもねえ」
「それなら、それで……上皇にふさわしいケルティ人を探しますよ。私としては、できれば、あなたを援助したいのですがね」」
「ふん」
「それでは……」
右手を軽くあげたナーダの姿が、フッと消える。
あの男、姿隠しの魔法も使えたのかと、赤毛の戦士は眉を寄せた。もう一度、寝台に倒れ、瞼を閉じる。
母や姉、弟と妹の死に顔が見える……
だが、父だけは生前の姿で心に訪れる。その死骸を目にしていないせいだ。
父が村の中でシベルア兵に拘束される様を遠目に見ながら、姉に手を引かれ家へと走った。気丈な姉は一度も背後の父を振り返らなかった。
一日の猶予もとられなかった。
その日のうちに父は処刑され……
姉も母も……。

父が来ている。
心の眼で見れば、目の前に父がたたずんでいるのが見える。
魔除けのペンダントなど、たいした効果がない。ケルティに着いたその日から、第三の眼を完全に閉じる事ができない。
真っ直ぐにアジャンを見つめ、父が重々しく口を開く。
声は聞こえなかったが、何を言っているのかはわかっていた。
けれども……
今はその言葉に従うわけにはいかなかった。

「××××××。××××××××××××××。××××××××××××××。××××××××××××××。××××××××××××××」

たてがみのような赤い髪、長い赤髭の男が、真っ直ぐにこちらを見つめている……
目は鷹のように鋭く、縁飾りのついたマントの下には鍛え上げられた逞しい体があった。名のある戦士に違いない。
その者が口にする言葉は、セレスには意味をなさない異国の言葉のはずだったが、不思議なことに何と言っているのかわかるのだ。

「北に疾く戻れ。我らは常に神と共にあらねばならぬ。古えからの契約を破ってはくれるな。わし亡き後を、継ぐのはおまえだ。契約の証がおまえを待っている。ハリと共に光を導け」

暗い……
洞窟の中に……

それはあった……
鞘ごと大岩に刺さっている……巨大な剣。
『勇者の剣』を越える大きさだ。銀と真鋳で幾何学模様が施された柄、きのこ型の柄頭。鞘は青銅製で、真鍮の金具がついている。見事な細工だ。

「北に疾く戻れ。戻らねば、おまえの命運は尽きる」

翌日の明け方、廊下にシャオロンの姿があった。宿屋の自分用の部屋の扉を背にし、少年は頭を抱え蹲っていた。
その横にたたずむ忍者ジライを怨めしそうに見つめ、少年は震える口を開いたのだった。
「すぐに起こしてくださいって頼んでおいたのに……オレ、又、明け方までセレス様と、いっ、いっ、一緒の、べ、ベッ、ベッドで～！」
泣きたい気分だった。寝ボケたセレスがベッドに入って来たというのに、又しても、全然気づかずにグースカ寝ていたのだ。一晩中、屋根裏からセレスの護衛をしていたジライは一部始終を覗いていたであろうに……
「側によって、小声だが、一応、声はかけた」
しれっと、ジライが答える。
「だが、きさま、起きなかったのだ」
「ぶん殴ってでも起こしてくださいよ！」
「それはできぬ。横でそのような騒動を起こせば、セレス様の安眠を妨げてしまう」
「うわ～ん！」
「それに……」

忍者は顎の下に手をそえ、首をひねった。
「睡眠中、おまえとセレス様、妙なのだ」
「え？」
「しばらく放っておくと、同調（シンクロ）する」
「同調（シンクロ）？」
忍者は頷きを返した。
「寝息、寝言、寝返り、寝相……眠っている時のあらゆる所作がまったく同期する。同じ動きをするのだ」
「え？　え？　え？」
「初めは何らかの術が働いておるのやもしれぬと思ったのだが、いくら調べてもそのような気配は無い。シャオロン、トゥルクで会った魔法使いナーダを覚えておるか？」
「あ？　はい、覚えています」
「あやつ、言うていたであろう、セレス様は共感能力者（エンパシー）じゃと」
「ああ、ええ、確かに」
「あれから、我は共感能力者（エンパシー）とはどのような者か調べてみた。確かに、あの妖しげな魔法使いの言うとおりの者はこの世に居る。他人の痛み、悲しみを我がことのように感じる『泣き女』が、それじゃ。聖王や聖者にも、大衆の感情を感じ取れる者がおったそうな。セレス様は、おそらく寝ながらにして、おまえと同期し、おまえと共感しておるのだろう」
「……そうなんですか？」
「『そうなんですか』ではない。おまえ、寝ている間に、何か感じなかったのか？」
「えっと……」
少年は両手を組み、昨夜の事を懸命に思い出そうとした。しかし、
「特にこれといって、心当たりは……ありません」
「夢は？」
「……何も見ていません」
忍者はフンと息を吐き、ジロリと横目で少年を睨んだ。

「では、何か悩み事はないか？　おまえの心の迷いを、セレス様は感じ取っているのやもしれん」
「悩み……」少年は瞳を細めた。
「悩みというほど、はっきりしたものではありませんが、オレ……アジャンさんを……」
「アジャンを？」
「……」
「む？」
「うまく言えません。よくわかんないんですけど、アジャンさんを見てると不安になるんです。アジャンさん、何かに苦しんでいます。だけど、オレみたいなガキじゃ、何の助けにもなれない……。オレにできる事といったら、ただ信じる事だけ。何があっても、オレ、みなさんを信じます。どんなに闇が満ちても、共に戦う仲間を信じ続けます。それが、一番大切なことだから……」

セレスは悩んでいた。
昨夜と先日の夢が気になってしょうがないのだ。
赤髪の戦士もおさげ髪の少女も、どことなくアジャンに似ていた。髪や目の色だけではなく、顔のつくりとか雰囲気とか……
それに、少女は夢の中で『アジャニホルト』と、アジャンの弟の名前を呼んでいた。
二人とも、アジャンの家族のように思えた。
昨夜の赤髪の戦士の言葉が、何度も何度も心に甦った。

「北に疾く戻れ。戻らねば、おまえの命運は尽きる」

間違いなく、警告だ。

夢の中の事を、アジャンに教えるべきかもしれない。
けれども、ただの夢かもしれないし、ケルティ新王朝の軍隊に監視されている今、夢の事を口にしてはいけないような気がするのだ。

洞窟の中に眠る大剣……
大剣は北にあるのだろうか……？

翌朝、食堂で、セレスは赤毛の戦士の前に座った。
「毒見済みにございます」
と、いつも通り食事を運んできてくれたジライから朝食を受け取り、セレスは赤毛の戦士を見つめた。朝食にしては分量の多い食事を平らげている彼を。
夢の事を言うべきか迷っていると、アジャンの隣に座っているナーダがアジャンに何かを耳打ちしていた。
その瞬間、アジャンの顔が強張った。
だが、ナーダは何事もなかったかのようにそのまま食事を続け、アジャンもいつも通りの品性を疑うテーブル・マナーでガツガツと朝食を平らげる作業を再開した。
けれども、その瞳の色は暗かった。
全てを拒む、孤高の光があった。

結局、赤毛の傭兵に声をかけられぬまま、セレスは食堂を後にした。

極光の剣　4話

二日後、女勇者一行とその護衛の軍隊はケルティの首都ホルムに入った。

馬車の窓から眺めると、次々に絢爛なシベルア建築が見えた。

一行の監視役のゲオルグ男爵は、胸をそらせてホルムの素晴らしさを説いた。これほど広大できちんと整備された都市は、他にはないと。

森を切り開いて築かれた王宮から放物線状に二十の大通りが伸び、環状に四本の運河が走り、街並みは区画ごとに建物の高さまで統一して建てられている。豪奢で優美、そして機能性にあふれた都市だとゲオルグは言う。

しかし、橋の下や路地には、粗末な掘っ立て小屋がひしめいていた。

それについてセレスが尋ねると、軍人は不愉快そうに、ケルティ人達の不法建築物だと答えた。土地や職を無くし食い詰めたケルティ人達が都会に流れてきて建てるのだ、迷惑だ、定期的に撤去しているのだが、すぐに又、景観を損ねる物を建てる。もっと頻繁に浮浪者狩りをして、街の美化につとめるべきだとブツブツと文句を言う。

セレスの右横には、赤毛の傭兵がいた。蛇騒動の後、彼はゲオルグから最も離れた席に着くのを常としていた。扉窓のカーテンをめくり、傭兵は街並みをじっと眺めていた。

セレスの左横には狸寝入りをしつつ通訳を務めるジライがおり、セレスの正面のシャオロンはエウロペでナーダから貰ったシベルア語の本を読み返していた。

今日はゲオルグとの会話はナーダが担当していた。ゲオルグが、ここは商業区だ、宗教区は三つ北の通りだ、軍隊の詰め所はどこだと説明するのを、ナーダが鷹揚に聞いている。セレスは二人の会話

に時々参加し、にこやかな笑みを場にそえる役割を果たしていた。
しかし、変なのだ。
昨日までゲオルグは、セレス以外の人間を相手にしていなかった。会話すべき相手ではないと、故意に無視している向きもあった。それなのに、今日は気味が悪いほどナーダにへりくだり、お愛想まで言っている。
「ゲオルグ殿、お願いがあるのですが」
「は。何でございましょう、ナーダ様」
『ナーダ様』？
セレスは目を丸めた。昨日の日中まではゲオルグはナーダを呼び捨てにしていた。という事は、昨晩、ナーダが何かしたのだろうが、一体、どんな魔法を使ったのだろう。
いぶかしく思っていたセレスは、ナーダの次の言葉に思わず『はひっ？』と驚きの声をあげてしまった。
「昨晩の娼館も悪くはありませんでしたが、ホルムは何事においてもケルティ一(いち)の街なのでしょう？　さぞ花街も素晴らしいのでしょうね。案内してくれませんか？」
ゲオルグはオッホンと咳払いをした。顔をひきつらせているセレスを女性ゆえの恥じらいから花街の話題を嫌がっているのだと思い、ごまかそうとしたのだ。
「娼館って……ナーダ、あなた」
セレスの足をボカッとアジャンが蹴る。騒ぐな、という注意だ。女勇者はグッと喉をつまらせ、口をつぐんだ。何か策があってこんな話をしているのだろうけれど……僧侶のナーダが娼館に行ったなんて。
「私もアジャンも並みの遊びでは満足できないのですよ。南には無い北独特の変わった趣味のお店とか、美姫の集う快楽の館なんていいですね。ご存じありませんか？」
「ウオッホン！」
ケルティ軍人は、更に大きな咳払いをした。セレスが口をぱくぱ

くさせているので、気まずくて照れているのだ。
「残念ながら、わしの護衛任務は王宮までです。今後のあなた方の護衛は宮廷の近衛兵が担当します。ですから、たいへん申し訳ありませぬが、今日でお暇を」
「おや、そんなつれない事おっしゃらないでください。インディラを遥かに離れた異国で、せっかく心安い方と知り合えたのです。宮廷には南への敵愾心にあふれたお方しか居られないかもしれない……。しかし、あなたは違う。軍人としての職務に忠実でありながら、柔軟に物事に対応できる方です。私もできうる限りの誠意をお見せしますから、私を助けてくださいませんか？」
ゲオルグが狡猾そうに笑う。
「ナーダ様がそうおっしゃるのなら……」
「昨晩、王宮にも顔が利くとおっしゃってましたね？　あなたのご友人で頭が固くない、黄金の魅力をよくご存じの方をご紹介くださいませんか？　その方を通じてあなたとも連絡をとりますから、夜のホルム観光に連れてってくださいな」
セレスは、ぶるぶると体を震わせていた。
会話からすると……
昨晩、ナーダはアジャンと共にゲオルグの案内で破廉恥な店へ行き……
後日、もっと破廉恥な店に行きたいので……
賄賂を渡すから宮廷内で便宜をはかってくれる者を紹介しろ……
王宮を抜け出して破廉恥な店に行く手筈も整えてくれと……
そう言っているのだ、僧侶のナーダが！
怒りのあまりセレスはめまいを感じた。卒倒しそうなほど頭に血が上っている。
「これは何らかの作戦に決まっております、セレス様」
セレスにしか聞こえない小声が耳に届いた。ジライだった。
「ナーダめが女戒を破るはずがございませぬ。騒いではなりませぬ。お怒りをお静め下され」

セレスは唇を噛み、忍者に視線を向けた。首を上下に動かしている忍者は眠っているようにしか見えなかったが……彼の言う通りなのだろう。

セレスは背もたれに身を預け、溜息をついた。

セレスの正面のシャオロンは、軍人とナーダに囲まれているので、ただ呆然となりゆきを見守っている。

そして、アジャンは……ひたすら窓の外を眺めていた。睨むような眼つきで……

森を切り開いて造られた壮大な庭園を抜け、一行は壮麗な宮殿に辿り着いた。一階に二百以上の窓が並ぶ長方形の、三階建ての白い宮殿だ。全ての窓に細かい装飾が施された豪奢な王宮だ。

噴水の大滝の前で、セレス警護の任は、ゲオルグ達ホルム警護師団所属第三騎兵中隊から近衛小隊へと受け渡された。新たな案内役となったのは、まだ年若い少尉だった。やや鷲鼻ぎみだったが、金の髪、鋭い緑の瞳の、逞しい美丈夫だった。

アレクセイと名乗った青年将校は古臭い共通語で、勇者一行に挨拶をした。語学に堪能な為、警護責任者となったのだろう。

セレスも青年に挨拶を返し、荷車から『勇者の剣』を降ろし、その背に負った。勇者として、王宮に入る為に。

アレクセイと小隊に導かれ、セレスと従者達は見上げるほど巨大な扉を通って王宮の中へと入って行った。

内装は溜息が出るほど豪華だった。廊下は十人ぐらい並んで歩けそうなほど広く、エーゲラ風の大理石の円柱が豊富に使われ、琥珀や金箔が壁を飾っていた。床も鏡のようにピカピカに磨かれている。

しばらく進んでから、召使役の忍者達がいない事に気づいた。彼等は荷車と共に裏口に回っているのだろう。

幾つもの回廊や、屋根と壁のついた渡り廊下を通り、セレス達は宿泊先の離宮へと向った。回廊の窓からは常緑樹茂る庭園やさまざ

まなシベルア建築が見えた。アレクセイは王宮には数多くの離宮、シベルア教会、美術館、劇場、軍隊の詰め所、裁判所、造幣所、倉庫などがあり、その多くが回廊や廊下で繋がっているのだと説明した。真冬の雪に埋もれる時期の移動の簡便化の為だ。

五人には、一人一人に、居間・寝室・二人の召使用の部屋からなる三間続きの広い客間（ゲストルーム）が用意されていた。アレクセイはセレス用の部屋で一同に部屋の造りを説明してから、こう伝えた。

「現在、ゴトゥノフ陛下は観劇中につき、面談はかないませぬ。二時間後、会見の席をもうけますゆえ、それまでに旅の穢れを払い、身なりを整えていただきとう存じます」

「わかりました」と、セレス。

「間もなく、お荷物とご家来衆も着くでしょう。我々近衛は廊下にて待機しております。お困りの事がございましたら、ご遠慮なくどうぞ。又、何かご入用のものがございましたら準備いたしますので、お気軽にお声をおかけくださいませ」

青年将校は物腰がやわらかく、南への敵愾心があるのかもしれないが外には出していない。偉ぶるところもなく、礼儀正しく勇者一行と接している。

自然、セレスの口調も好意的なものとなる。

「お心遣い、ありがとうございます、アレクセイ様」

そう言うと、セレスはにっこりと微笑んだ。

大輪の薔薇もかくやと思わせる艶やかさと、白百合のような清楚さ。相反する二つの美が、その笑顔にはあった。サファイアの瞳は泉のごとく澄み渡り、赤い唇はどこまでもなやましげで……

「高潔な近衛の方々とお近づきになれて、光栄ですわ。王宮滞在中の護衛、よろしくお願いいたします」

近衛将校の精悍な顔。その尖った鼻が朱色に染まった。

「りょっ、了解、で、あります！　そ、それでは、わ、私は、これ、に、に、これにて！」

逃げるように廊下に向うアレクセイに、セレスが声をかける。

「お待ちになって、アレクセイ様。準備が整った後、少し歓談したいので、私の部屋に皆を集めても構わないでしょうか？」

「じ、じ、時間に、よ、よゆうがございましたら、かまい、ませぬ。お好きにお過ごし、くだ、さ、っさ、さい。謁見予定時間十五分前に、セ、セ、セレ、ス様のお部屋にお迎えにあがります！それで、は！」

アレクセイは真っ赤になった顔を伏せ、廊下へと走って行った。

取り乱す近衛仕官を見て、セレスはきょとんとしていた。己の美貌に頓着していない彼女は、自分の笑顔の影響力がわかっていないのだ。

忍者ジライはふんと鼻で笑い、扉の向こうに消えた近衛少尉に対し未熟者めがと小声で呟いていた。

美しすぎる、南から来た女勇者……

やっかい事が起きなければいいが……セレスの背後で、ナーダは糸目を更に細めていた。

老忍者ガルバはナーダの執事役で勇者一行に同道していた。

白髪の皺だらけの小柄な老人だ。一見、人の良さそうな老爺だが、彼はかつて僧侶ナラカの部下として大魔王退治を助け、大陸中に武勇を馳せた超一流の忍者なのだ。

ガルバはナラカの失踪後、ナラカの妹――ナーダの母に仕え、不遇のうちに彼女が亡くなってからはナーダを主人と定め誠心誠意仕えている。

武闘僧と忍者の関係は、主従を越えた、親しいものだった。

老忍者は、赤ん坊の頃から見守ってきたナーダに、深い愛情を抱いていた。

ナーダの方も老人をただの家来とは思っていなかった。周囲は全て敵だった王宮で、ガルバだけがナーダとその母の味方となり数多くの暗殺者を退けてくれたのだ……家族と部下全てを犠牲にして仕

えてくれたのだ。
出家するにあたり、七つであったナーダは全ての私物を捨てると決めた。それには、母の遺品も財産も部下も全て含まれていた。
しかし、結局、ナーダはガルバとの関係を断てなかった。忍者が泣きながら懇願したからだ、死ぬまでナーダに仕えたい、もうこれ以上、新たな主人を持ちたくないと。『かなわぬのなら自害して、お守りしきれなかった罪をお母上様に詫びて参ります』と、わめく忍者を見捨てられるはずもなかった。
ガルバには母の遺産の管理を頼み、有事にはナーダの手足となって働く忍者軍団を作るよう命じて、ナーダは総本山での修行に入り……そして今に至っているのだ。
とはいえ、第一王子だったナーダを僧籍に入れた現国王と第二夫人とその一族を怨んでいる老人は、うっとうしい存在でもあった。正当な王位継承者を名乗り戦を起こしましょうとか、奸婦一族を葬る策がございますゆえ還俗いたしましょうとか、ろくでもない望みを口にするからだ。
今、その忠義者の老忍者は……
うるうると瞳をうるませ、主人の着替えを手伝っていた。肌着から順に、主人が望むものを手渡しているのだ。
「次」
「はい！　御身様！」
涙を堪え、鼻をすすり、主人の姿を老忍者は嬉しそうに見つめている。
対するナーダは不機嫌そうに眉をぴくぴくと動かしながら、姿見の鏡に映る自分を見つめていた。衣服に袖を通し、末端に縁飾りのついた絹の腰帯を巻いた後、ナーダは首を傾げた。
「……意外と薄手ですね、これ、本当に北部の冬用の衣装なんですか？」
「は。……間違いは……ございませぬ」
ずず～っと鼻をすりあげ、老人は薄く細長い絹の布を恭しく捧げ

持った。
「……お手伝いいたしましょうか？」
「必要ありません」
ナーダは布を手に取るや、まず布端を前額に当て布を一巻きして固定した。その後も、すばやく布を前に巻きつけてゆき、最後に宝石の留め金で布を固定した。
「おおおおおお！」
老人はへたりとその場に座りこみ、目から滝のように涙を流し始めた。食い入るようにナーダを見つめながら。
「御身様……ほんにご立派になられて……嬉しゅうございます。今まで生きてきた甲斐がございました」
「……ガルバ」
頭痛を覚え、ナーダは額に手を当てた。
「何度も説明したはずです……これは変装なのですよ」
「わかっております。わかっておりますが……」
老人は右腕でぐいっと涙をぬぐった。しかし、後から後からダダーッと涙がこぼれてくる。
「そのお姿……亡きお母上様にもお見せしたかった」
おいおいと泣き濡れる忍者に対し、ナーダは溜息をついた。今は何を言っても無駄なようだと、思いつつ。

「……ナーダ？」
セレスは仲間から目をそらせなかった。
謁見前に準備が整い次第、セレスの部屋に集まる事になっていたのだ。
セレスの支度は早かった。白銀の神聖防具の鎧に『勇者の剣』が勇者の正装だからだ。召使役の二人の女忍者――中年のおっとりとしたマリーと明るい少女のローラ（彼女らのエウロペ風の名前は偽名と思われたが）に、鎧を磨いてもらい、髪を梳いてもらうとやる

事はなくなった。
　最初に部屋に現れたのは忍者ジライで、着替えたとは言っていたが、いつもと同じ忍装束だった。次はセレスから貰った貴族の少年の宮廷着を苦しそうに着こんだシャオロンがやって来て、シャオロン同様セレスからのお仕着せのエウロペ風騎士の衣装を着たアジャンがその後に続いた。
　武闘僧ナーダが、一番、遅かったのだ。
　ナーダは、インディラの王侯貴族のごとき姿をしていた。逞しい体を金刺繍を施した白のチュニックで覆い、白のズボンを履き、爪先が尖った変わった形の白い靴を履いて、と、全身を白で統一していた。頭もそうだ。その禿頭を、羽飾りと宝石がついた白絹のターバンで隠しているのだ。
　衣服の上から両腕・両脚に黒の神聖防具をつけている点は異なるが、その姿は、まるで……
「ナーダ……インディラの国王陛下みたい」
　セレスのその言葉に、部屋の隅のアジャンが盛大にこけていた。
『ったく、馬鹿女が！』と、体を起こしながら呟いてもいた。
「似てて当然です。親子なんですから」
「え？」
　ナーダは口元に微かに笑みを浮かべた。
「私の通行許可書、あなたも見たのに。私が父親の名前を記した欄、きちんと見てなかったでしょ？」
「え？　え？　え？」
　セレスは唖然とした。
「あなた、インディラの国王陛下の息子なの？」
「はい。長子です」
「しかも、長子？　嘘ぉ！あ、でも、そうか、あなた三十ですものね、第二王子様より年上だわ。え？　でも？　え～～～？」
　顔見比べればすぐにわかるだろうと、アジャンは呆れ顔だった。
が、シャオロンもセレス同様気づいていなかったらしく、びっくり

と両目を見開いていた。
「何で今まで黙っていたのよ！」
「必要なかったからです。生家がどこであれ、私という人間の価値に変わりはないでしょ？」
「……それは、そうだけど」
「しかし、北方では、私の現在の肩書きよりも、出自の方が価値があります。ですから、国王の長子であることを、今後、公にしたいと思います」
「……どうして？」
ナーダの糸目がキッ！とセレスを睨む。
「『どうして？』ですって？　まったく、あなたは、なんで、そう、嫌になるくらい鈍いんでしょうねえ。あなたのせいに決まってるじゃないですか」
「私の？」
表面は物静かだったが、ナーダの声には冷たい響きがあった。
「勇者であるあなたが、きちんと王侯貴族相手に交渉ができるのなら、私がしゃしゃり出る必要はありません。あなたに交渉の全てを任せ、私は裏方に徹したかったのに……」
ナーダが、わざとらしく大きな溜息をつく。
「あなた、未だにシベルア語すら満足に話せないのだもの。私が表に出るしかないでしょ？」
「それは……あなたに交渉ごとを任せた方が万事うまくいくわよね……私も楽だし」
「……とりあえず貸しにしておきますね」
「え？」
「あなたのせいで、私、こんな不本意な恰好をしなきゃいけないんだし、服装にあわせ髪も伸ばすんです。それ相応のお返しをいただかなきゃ、割りに合いません」
「えっと……」
「それとも、余計なおせっかいでした？　私、王族の衣装、脱ぎま

しょうか？　となると、王侯貴族との駆け引きは、私、できないんですよねえ、無位だから。女勇者様お一人にお任せしちゃいましょうかねえ」

「う」

セレスは喉の奥でくぐもった声を出した。

「……お返しって何をあげればいいの？」

セレスは警戒した。アジャンのようにお金を要求してくる事はないだろうけれども。

ナーダはにっこりと笑った。どことなくセレスの魔法の師カルヴェルを連想させる、悪戯者の笑みだ。

「実はお願い事があるんです。今すぐじゃないんですが、多分、もうちょっとしたら、どうしてもあなたに叶えてもらいたい事がありまして、ね」

「私にできること？」

「あなたにしかできない事です」

「どんな事？」

「今はまだ話せません。その時がくるまで、内緒です」

「……Hな事じゃないでしょうね？」

ナーダの頬が、ひくっとひきつった。

「……今のは冗談と思って聞き流してあげましょう。で、どうします？　私の願い事を叶えるって約束してくれますか？　それとも、私の助け無しでお一人でケルティ新王朝と交渉する道を選びます？」

一行が案内されたのは、『謁見の間』だった。

四十四の窓と窓の間に鏡が埋め込まれ八十を越える燭台の光に照らされているのだ、部屋の中は、まばゆいばかりに金色にきらめていた。

貴族達が居並ぶ広間の、最奥の玉座にケルティ新王朝二代目国王ゴドゥノフが座っていた。シベルア皇帝風の金刺繍が施されたロー

ブをまとい、真珠や宝石をちりばめた黄金の冠を被っている。たいへん豪奢な衣装だったが、ゴドゥノフ本人は茶髪茶髭の痩せた神経質そうな中年男性で、王錫を手に玉座にふんぞり返って座っていた。

国王の前に進み出たのは、女勇者セレスとインディラ国王の長子ナーダだった。二人の後ろに、東国の武闘家の少年シャオロン、忍者ジライ（セレスの真後ろに居る）、エーゲラ一の戦士アジャンが控え、国王に対し片膝をついて跪いていた。

セレスは、つたないシベルア語で話す非礼を先に詫びておいてから、入国許可を感謝し、護衛をつけてくれた好意に礼を述べ、ケルティとゴドゥノフへの賛辞を口にして、極上の笑みを浮かべた。

セレスを南の女と侮ってた貴族達も、その華やかな笑みに心動かされ溜息を漏らした。『勇者の剣』を背負い白銀の鎧をまとう男装の麗人には、凛とした気品があり、男心を刺激する清楚な色気が漂っていた。

つづいて、インディラ国王の息子ナーダが口を開いた。流暢なシベルア語で、国王のみならず居並ぶ大臣・貴族・軍人達までにも敬意を表し、威厳を漂わせながらも礼にかなった挨拶した。

ナーダは広間中の耳目が自分に集まっているのを確認してから、

「女勇者様からの心づくしです」

と、手にしていた目録を読み上げた。宝玉・宝石などの高価な品々と、象牙・香辛料・香油などの北方では貴重な品を数十点、献上すると申し出たのだ。

贈り物など、セレスにしてみれば全くあずかり知らない物だった。ナーダがそんな物を持ち込んでるのすら知らなかった。が、国王が女勇者に対し礼を述べる時に、笑顔で対応するぐらいの処世術は今では彼女も身に着けていた。

国王の頬がゆるんだのを見て、ナーダは北方における女勇者の魔族退治の旅について話したいと希望を伝えた。

けれども、ゴドゥノフ国王は、

「ボルコフに話せ。摂政がよきにはからう」

と、相手にもしない。
国王がナーダに求めたのは、インディラを舞台とした有名な歌劇の名台詞をインディラ語で言ってみて欲しいだの、翻訳して欲しいだの、インディラ料理ができるコックは伴っていないか？　だの、たわいもない話ばかりだった。
又、セレスの美貌を讃え、今宵の晩餐会には是非、出席して欲しいと好色そうな顔で笑ってもいた。
外見は脆弱、国政に関心もない。
ゴドゥノフが玉座についている理由は『シベルア王家の血筋』…
…ただ、それだけのように思われた。

謁見終了後、別室でナーダは摂政ボルコフと、北方における女勇者の活動権限についての話し合いを始めた。
今までの旅では勇者一行は、各国から庇護され資金的援助も受けてきた。しかし、北方で援助は望むべくもなく、常に監視され、行動も制限される。魔族退治の為の移動すら、どこまで許されることか。
自分の事情と隠し財産を告白した武闘僧は、もうすっかり開き直っていた。賄賂や情報収集に湯水のごとく金を使う気になっていた。摂政ボルコフの情報も、既に当地の情報屋から買っていた。欲深い男が気に入りそうな贈り物も用意済みだ。
女勇者一行に有利な状況をつくる為には、なりふりなど構っていられない。いずれはアジャンか或いは上皇となるべきケルティ人に叩き潰してもらう予定の相手と、ナーダはにこやかに交渉を続けた。

「開けて、アジャン。話があるの」
シャオロンとジライを伴い、セレスは赤毛の戦士の部屋を訪れた。
謁見の間から下がる時の、アジャンの表情が気になったからだ。

感情を捨て去った、面のごとき顔。一年半近く共に旅をしてきたセレスにはわかっていた。怒りを胸に秘め居ている時、アジャンはあの顔となる。シルクド国王の前で大失態を犯したセレスを庇っている時も、あの表情だった。あれは怒鳴りたいが、人目があるので堪えている時の顔なのだ。

しかし、扉を開けてくれたアジャンの家来役の忍者ムジャは、謁見から戻ってすぐにアジャンは寝室に籠もってしまった、誰にも会いたくないと言っていると、セレスの入室を拒んだのだった。

（あれが王か……）

寝台にうつぶせに倒れ、アジャンはシーツを握り締めていた。

（あんな剣すらろくに持てなかろう、国を統べる力もない無能な男が、ケルティの王か……）

忘れようとしていた憎悪が、再び、荒れ狂う。

あの偽王を叩き斬れたら、さぞ痛快だろう……

ケルティを食い物にする、シベルア司教、王侯貴族、軍人どもも、皆殺しにしたい……

シベルアかぶれのこの城を燃やせたら、どれほど溜飲が下がることか……

だが、そんな事をしても無駄なのだ。何も変わらない。

大国シベルアが存在する限り、ケルティの隷属は続くのだ。

父が来ている……

目を閉じると、父の顔が見えた。

『北に疾く戻れ』と、その唇は言葉を形作っていた。

ケルティに足を踏み入れてから、魔除けの首飾りは、日に日に効

力を失っていった。
アジャンのシャーマン能力が飛躍的に向上しているので、魔法道具（マジック・アイテム）では封印しきれなくなっているのだ。
ホルムの街も、壮麗な宮殿も、回廊から見えた荘厳なシベルア教会も、アジャンには黒く醜く歪んで見えた。
魔除けのペンダントをしているのに、だ。
この土地には、かなり強力な魔族が居るように思われた。

極光の剣　４話（後書き）

私事で恐縮ですが、操作を誤ってこの４話のテキスト・ファイル消去しちゃいまして、全文入力し直しました……。文章を書き直して入力して推敲しての四時間が全て無駄に……。ちょっと落ち込みました。バック・アップとらないと駄目ですね。

極光の剣　5話

一週間が過ぎた。

その間、セレスはあまりナーダを見なかった。日中は摂政ボルコフや貴族達と会談したりつきあいの場に出席したりと忙しく、夜は夜でゲオルグやその友人達とホルムの街へ夜遊びに出かけてしまうからだ。夜遊びの際には、アジャンと二人の忍者――自分の召使役のヤルーとアジャンの召使役のクルグを必ず伴ってもいるようだった。

セレスも忙しかった。国王や有力貴族から、ティーパーティ、観劇、演奏会、晩餐会、舞踏会の誘いがひっきりなしに届き、それにできうる限り応えているせいだ。

先日、摂政ボルコフから、大魔王復活後の国情・魔族の出没状況などの報告書が届いた。

しかし、その時、珍しく顔をあわせたナーダから、魔族討伐にあたったシベルア教司教や軍人との直接面談の希望は通らず、シベルア教の大司教との接見も病を理由に断られ、現地調査可能地域も道路の不備を口実にホルム近郊だけ（しかも護衛の軍隊もつけるというのだ）にされたと聞いてセレスは溜息をついた。予想以上にケルティ新王朝は、女勇者に非協力的だ。

このままではまともな魔族討伐などできない！摂政ボルコフとの交渉はナーダに任せていた。が、少しでも状況が良くなればと、セレスは進んで国王や有力貴族の誘いにのっていた。彼らと懇意になって、世直しの旅への理解も深めてもらう為だ。彼等からの口ぞえがもらえれば活動可能地域は広がるかもしれないし、うまくいけば情報収集もできるかもしれない。

そう考えての事だった。武術一辺倒できたセレスには、社交界は

苦手な場所ではあったが……

しかし、社交界に不慣れな女勇者は、逆にその不慣れさゆえに、ケルティ新王朝の人々の心をつかんだ。

華やかな美貌を飾ることなく、どんな集まりにも『勇者の剣』を背負った白銀の鎧姿で現れ、常に部下の忍者とお小姓（シャオロン）を連れていて一人にならないセレス。

その禁欲さが受けていた。

なにしろ、国王や伊達男達が甘い誘いをかけても、まったく通じないのだ。美貌を讃えても、無邪気に喜ぶだけ。口説いても、きょとんとするばかり。

女勇者であるセレスが処女を守らねば、大魔王討伐の旅は失敗に終わるかもしれないのだが……ケルティ新王朝の人間はそんな事、まったく気にかけていなかった。国境封鎖より後、南と接触を断ってきた彼等には、大魔王への恐れが欠けているのだ。

彼等にとってセレスは、恋の駆け引きを知らない初心（うぶ）な美女にすぎなかった。宮廷では新鮮な存在と、喜ばれるだけの。彼女を堕とそうと、男達はやっきになって彼女を誘惑した。

歌を捧げたり手紙や贈り物を送ると、翌日、女勇者から、丁寧なお礼状が届いた。だが、男の下心など夢想だにしないような、あどけない内容なのだ。幼子からの手紙のように。

ならばと、露骨な求愛の手紙を送った者もいた。が、それに対しては『ご好意は嬉しく思います。しかし、私には勇者の使命がございますので、お心にお応えできません』と、生真面目な断りの手紙が送られただけだった。

貴族の中には、セレス恋しさのあまり、暴走する者もいた。が、彼らの劣情はことごとく失敗した。

セレスを物陰に連れ込んで数人がかりで暴行しようとした若者達は、逆にセレスにあっさりと叩き伏せられた。その上でセレスは忍

者とお小姓に周囲を固めさせて男達の逃亡を封じてから、延々とお説教をしたのだ。『紳士としてあるべき姿』と『女性の操の大切さ』について。彼等が改心したと平謝りに謝るまで解放しないで。

この事件以後、力づくで彼女をモノにしようとうする不埒者は居なくなった。

ある中年貴族がセレスを屋敷に招き、睡眠薬入りのワインを飲ませようとした事件もあった。動けなければ悪戯し放題だ。評判の女勇者の処女をいただいてしまおうと思っていた下種な男は……何時の間にかグラスを入れ替えられ、自分が居眠りするハメとなっていた。

女神のように美しく、少女のように純粋で、戦神のように強く、修道女のように貞操堅固……

鉄壁の処女セレスは、宮廷の人気者（アイドル）になっていた。

むろん、セレスにも欠点はあった。鞭を厭うのだ。召使を処罰する場に居合わせると、必ずといっていいほど召使を庇う。卑しいケルティ人には鞭が必要だと諭しても、彼女は納得せず、子供っぽい同情を示すばかり。支配者階級にふさわしくないその気質だけが、彼女の欠点だった。

しかし、そんな欠点など些細なものだ。そこだけ目をつぶれば、彼女は完璧だ。彼女ほど魅力的な女性は、宮廷に他にはいないのだから。

ケルティ新王朝の貴族達は、まったく知らなかったが……

セレス人気を支えているのは、三分の一ぐらい忍者ジライであった。

宮廷貴族達のシベルア語をジライに翻訳してもらわねば、セレスは彼等の会話の半分もわからないのだ。早口のシベルア語なんか聞き取れもしない。

セレスのみに聞こえる小声で彼等の言葉をエウロペ語に直しながら、ジライはセレスに情報を与え、時には助言をし、激しやすい彼女が怒りに我を忘れないですむよう誘導してもいた。ジライが止めていなければ、ケルティ人への迫害・暴行の場面に何度も出くわしているセレスは、とっくの昔にぶち切れ、貴族達を張り飛ばしていた事だろう。

手紙もジライの担当だった。セレスは貴族からの招待状や手紙を読み上げてもらい、返事もジライに代筆してもらっていた。内容も任せていた。どの招待に応じるか決めているのもジライで、セレスは彼が必要と判断した事だけを報告してもらっていた。監視者の眼を意識してセレスも手紙を書いてる振りをしているので、今のところ代筆はバレていない。

ジライは、ナーダの部下の忍者達にも、セレス警護の指示を与えていた。暗殺防止の為だが、そのおかげでセレスに愚かな欲望を抱く男達をこらしめる事もできた（睡眠薬入りワインを入れ替えたのもジライだ）。

ジライにも始終、ケルティ新王朝の監視者がついていた。が、忍の目から見ればお粗末すぎる技量であったので、彼等をだしぬくのは簡単だった。幻術で惑わすもよし、忍法で眠らせるもよし、催眠術で記憶を操るもよし。素顔や白子である事を隠す事、食事をとる事、セレスの為に暗躍する事に何の障害にもならなかった。

東国の忍の里一の忍者は、セレスの為に、嬉々として働いていた。

シャオロンもできるだけセレスの側に居るようにしていた。

セレスよりはシベルア語がわかるし、ケルティ語も多少知っていたので、忍者ジライが席を外した時は少年が通訳を務めたりもした。

むろん、護衛の任務が主だが。

シャオロンは、ケルティ新王朝に不快を感じ、王宮に居心地の悪さを感じていた。

ケルティに着いてからずっと気分が悪かったのだが、ホルムの街に到着してから、それが一層、ひどくなっているのだ。

ホルムにある物、居る者全てに、黒い靄がかかっている。

黒の気だ。

ホルム中に魔の気が満ちている。

黒の気をまとう貴族達は残虐で、虐げられているケルティ人も黒の気をゆらめかせながら憎悪の瞳を主人に向けている。

彼等は魔族ではない。人間だ。見ればわかる。しかし、皆、黒く醜く歪んでいるのだ。黒の気に、残虐性や傲慢さを煽られ、或いは憎悪や殺意を高められているのだ。

この都市のどこかに魔族が居るのだ。

人間を踊らせている魔が。だが、何処に居るのかまではわからない。魔族は自身の黒の気を消しているのだろう。強力な魔族に違いなかった。

セレスもジライも、目に見えるものしか見えない。彼らも黒の気を漠然と感じ取りこの王宮に不快を覚えてはいるようだが、シャオロンとは異なり黒の気の動きを目では追えないのだ。

魔が牙を剥いてきた時、最初に気づけるのはシャオロンだ。その時には、自分の身を挺してでも、セレスを守る覚悟はできている。

ただ、共にアジャンが居てくれないことが不安だった。シャオロンが尊敬している赤毛の戦士は、シャオロン以上に魔の気に聡い。アジャンならば、セレスを完璧に守れるだろう。

しかし、赤毛の戦士は、セレス護衛をほとんどせず、日中は部屋に籠もっている。夜、ナーダが出かける時は、必ずついて行っているようなのだが。

セレス護衛に忙しく、シャオロンはこの一週間、アジャンの部屋にほとんど行っていない。時間を見つけて訪ねれば会ってはくれる

のだが……目はシャオロンを見ていない。いつも何処か遠くを見つめている。

魔族の事も心配だったが、アジャンが何を思い悩んでいるのかも気になった。だが、どうすれば良いのか、シャオロンにはわからなかった。困った時に今まで相談にのってくれたナーダは非常に急がしそうで、話しかけづらい。忍者ジライは赤毛の戦士とは不仲だ。

と、なると……

相談できるのは……

寝台の上に寝転がり、アジャンは天井を睨んでいた。

そろそろ心を決めねばならない……

今夜辺りが潮時だ……

魔除けのペンダントを握り締め、そんな事をぼんやりと考えていた時、寝室の扉がノックされた。召使役の忍者ムジャかクルグだろうと思い、アジャンは『入れ』と答えた。

しかし、入室してきたのは忍者ではなかった。

驚いてアジャンは体を起こした。

そこには……

金の髪を美しく結い上げ、淡い若草色のドレスに身を包んだ、妖精のごとき乙女がいた。髪飾りも首飾りも花を模した、可憐な細工だ。彼女の頬はほのかに赤く、青の瞳は恥らうように半ば閉じられていた。

アジャンの視線は彼女に釘付けとなっていた。

目をそらせないのだ。

胸は激しくときめき、体温が上昇する。

「セレス……」

どうにか搾り出した声は、かすれていた。

「何だ、その恰好は……？」

「やっぱり、変……？」

「あ？　ああ……」
綺麗だ……
夢のように美しい……
「……がさつなおまえさんには、そんな澄ました恰好は似合わねえよ」
「……そうよね」
セレスは苦笑を浮かべた。衣装に合わせうっすらと化粧を施された為か、ひどく女らしい表情を浮かべる。
「このドレスと宝石一式は、国王陛下からの贈り物なのよ。今夜の舞踏会に合わせて見立てたと手紙を添えられたら、着ないわけにもいかないでしょ？」
「で、丸腰で人前に行く気か？」
「まさか！」
セレスは左手で隠し持っていたモノを、アジャンに見せた。宝石飾りのついた革製のベルトだ。『虹の小剣』が留められている。
「ドレスの上から、これを付けていくわ。私、女勇者ですもの、武器はアクセサリーよ」
「ケッ！」
アジャンはセレスの背後を見つめて。シャオロンやジライの姿を求めて。けれども、女勇者は後ろ手で扉を閉めてしまった。お供の二人を入室させる気はないようだ。
「おいおい、お姫様」
アジャンは野卑な笑みを口に刻んだ。
「男の寝室にお一人でお乗り込みあそばして、どういうつもりだぁ？　ついに処女を散らせる気になったのか？」
「……馬鹿」
「馬鹿？　馬鹿はおまえだ。俺の寝室にちゃらちゃらした恰好で、お食べになってぇと一人で来やがったんだからな。けどな、何度も言ってるが、俺は処女は嫌いなんだ。めんどーだし、ギャーギャーうるせえし、暴れるからな。その上、俺は、おまえが嫌いだ。おま

えみたいな世間知らずの馬鹿女には虫唾が走る。おまえさんに手を出すぐらいなら、六十過ぎの枯れたババアを抱いた方が遥かにマシだぜ。とっとと帰れ」

「嫌よ。あなたに話があるんだもの」

「話す事なんざ、何もない。帰れ」

アジャンの右の親指が、ぐいっと壁を指す。女勇者一行には絶えず監視がついている。不用意な会話はしたくない。アジャンは女勇者を睨みつけた。

しかし、セレスも負けていなかった。

「あなた、私の護衛役でしょ？　四六時中一緒にいろとは言わないけど、一日、数時間は働きなさいよ！」

「シャオロンと忍者がいりゃあ、充分だろ？　俺みたいなごっつい男がしかめっつらで側に居たら、お上品なお貴族様達はおまえの前から逃げ出すぜ」

「でも、あなたは私のそばに居ないと駄目よ。でないと、シャオロンが心配するわ」

「シャオロンが？」

「私もよ。私も、このままじゃ、不安だわ。あなたが、何処か遠くへ行ってしまいそうで……」

「俺が？　何処へ行くと言うのだ？」

「北へ……」

セレスは瞳を伏せた。

「聞いて、アジャン……私、ホルムに来るまで何度か不思議な夢を見たの」

「夢……？」

「ええ。ホルムに着いてからは、ぱったり見なくなっていたんだけど、昨晩、又、見たの。アジャン、あなたのご家族に、赤いおさげ髪の女の子いなかった？　片手剣が使える、勝ち気そうだけど、優しそうな……お姉さんじゃないかと思うんだけど」

「！」

赤毛の戦士は寝台から飛び降り、扉の前の女勇者の前に詰め寄った。その顔を険しく歪めながら。

「……夢だと？」

セレスは頷きを返し、瞳を開いた。

「『苦しみの時代にこの世が闇に覆われたとしても、いずれ光が世界を照らすわ。負けないで……。あんた達は生き延びるのよ……。愛しているわ。常に神のご加護があんた達と共にあらん事を！』」

「！」

アジャンは愕然として女勇者を見つめた。

セレスは、話せないはずのケルティ語――アジ族の部族方言を口にしたのだ。

しかも、それは……二十年近く前に聞いた言葉だ。死を覚悟して家に残ると決めた姉が、弟達を勇気づけようとして送った言葉……生前の彼女から聞いた最後の言葉だ。

「……アジンエリシフ」

セレスの目に……

現実に重なるように幻が見えた……

血だ……

猿轡を噛まされ、白目をむいている少女はその白い裸体を血で染めていた。彼女のおさげ髪のごとく赤い血に……

えぐられた喉……

縄で縛られた手首……

切り取られた乳房……

無残に散らされた処女の証……

『アジンエリシフ……』

息絶えている少女を抱きしめ、幼いアジャンが慟哭する。すぐ近くには、もとの形もわからぬほど切り刻まれた女性の肉体があった。母親だ……

アジャンの周囲には、三体の男の死体が転がっていた。アジャンが殺したのだ。姉と母を辱めた男達を殺し、仇を討ったのだ。

血に染まった鉄剣が床に落ちている……

けれども、仇を討ったとて……

死者は甦らない……

間に合わなかった……

救えなかったのだ……

母もアジンエリシフも死んだのだ。

父も母もアジンエリシフも信仰を貫いたが為に殺されたのだ……

そして、幼い弟と妹も……

アジャンが間に合わなかった為に……

「やめろ！」

その絶叫に、幻は消える。

何かが砕けた音がした。

アジャンの首を飾っていた銀の首飾り、そのペンダントトップの翡翠が粉々に砕けている。傭兵の瞳と同じ色の宝石は、もはや跡形もなかった。

青ざめた赤毛の戦士が、セレスを睨み、声を荒げた。その顔を恐

怖と憎悪に固めながら。
「俺の心を覗くな！　出て行け！」
セレスは力なく頭を左右に振った。何が起こったのかはわからなかったが……赤毛の戦士の過去を覗いてしまった事はわかった。身内を無残に殺され、幼いアジャンは悲痛な声で泣いていた。
「アジャン……私……」
「何も言うな！　出て行け！　でなきゃ、殺す！　俺が、きさまを叩き斬る！」

東国の少年は驚き、敬愛する女性の元へと走った。
「どうしたんです、セレス様！」
「……何でもないわ」
「何でもないって……泣いてらっしゃるんじゃ……」
アジャンの寝室から現れたセレスは、体を震わせ、うつむいて顔を隠している。おろおろとセレスを見つめるシャオロンの横に、忍者ジライも現れる。
「アジャンめが、何ぞご無礼でも？」
「違うわ！　そうじゃない！　私が悪いの！　私が……アジャンを傷つけてしまったの……」
セレスは両手で顔を覆った。が、あふれる涙を抑える事はできなかった。そんな女勇者を、東国の少年と忍者は見守るしかなかった。

ジライに化粧を直してもらってからセレスは広間に向かい、国王に謝罪した。舞踏会を欠席したい、と。青ざめた顔の彼女は病人にしか見えなかったので、女勇者とのダンスを楽しみにしていた国王も諦め、病をおして淑女の装いを披露しに来てくれた彼女をねぎらい、部屋に戻るようにと許した。
自分用の客室（ゲスト・ルーム）に戻ると、すぐにマリーに手伝ってもらって慣れな

いドレスは脱いだ。女好きの傭兵に喜んでもらえるかもしれない……そう思って、生まれて初めて舞踏会のドレスを着た。その姿で沈んでいる彼を元気づけられたらと思ったのだ。

だが、元気づけるどころか……

「お願い、一人にして……誰も通さないで」

セレスは寝室の扉を閉めると、寝台に倒れこみ、枕を抱え、声を殺して泣いた。

今夜初めて……セレスはアジャンという人間が理解できたように思えた。

権力を嫌い、いつも皮肉な笑みを浮かべ、他人との輪に加わろうとしないアジャン。彼の乾ききった心は……あの瞬間から生まれたのだ。姉や母の無残な骸を目にした瞬間から……

「……ごめんなさい、アジャン」

心を覗くつもりなどなかった。それどころか、どうして、アジャンの過去を見てしまったのかすらわからない。けれども、触れるべきでないものに触れてしまった事は、痛いほどわかった。

アジャンを深く傷つけてしまったのだ……

「……ごめんなさい」

届くはずのない謝罪の言葉を、セレスはずっと口にし続けた……

極光の剣　6話

その夜、ホルムはこの冬一番の冷え込みとなった。
ケルティ南部のホルムとて、十一月も下旬ともなれば雪が舞い始める。静かに天から降る雪が、街並みを、庭園を、王宮を白く飾っていった。
その雪の中から……
刺客は現れた。

凄まじい轟音に驚き、セレスは寝台から上体を起こした。
周囲は闇だ。
しかし、庭園に面した壁が壊れているのはわかった。窓硝子は砕け、寒風と雪が部屋に吹き込んでいる。
何が起きたのだろう？
殺気を感じ、身構える前に……
セレスのすぐ目の前で、剣戟の火花が咲き、水飛沫が飛び散った。
セレスめがけて振り下ろされた刃を、何処からともなく現れた忍者が『ムラクモ』で受け止めたのだ。
「セレス様、お下がりください！」
闇が濃くてよく見えない。
ジライは相手の剣を『ムラクモ』で押し返そうとしていた。だが、敵の剣は巨大で、びくとも動かない。
「あ……」
目を凝らし、セレスは刺客をよく見ようとした。だが、見えるのは闇ばかりだ。
敵は殺気を隠そうともしていない。叫ぶかのように、凄まじい気を撒き散らしている。
よく知った男の放つ気だ……

「……違うわ」
セレスはぶりを振った。
これは夢だ……
夢に違いない。
闇の中の暗殺者は……見知らぬ男だ。そう思いたかった。
けれども、セレスよりもずっと夜目の利く忍者は、無情にもこう叫んだのだ。

「セレス様のお命を狙うとは……乱心しおったな、アジャン！」

アジャンの大剣を受け止めてはいたが、足場が柔らかな寝台の上の為、踏ん張りがきかない。長くはもたないと判断し、ジライは忍法を放った。夜の警護の時には、毎回、必ず気を練っている。大技も五回までなら使える。
「忍法かまいたちの術！」
凄まじい風の嵐が、傭兵の周囲を切り裂き、吹き抜ける。風の忍法は直撃した。しかし……傭兵は変わらぬ力で大剣を押してくる。
ジライは舌打ちを漏らした。カルヴェルより買った、祝福の魔法をアジャンは刃にかけているのだろう。今、アジャンに魔法は通じない。祝福の魔法は、魔族の力のみならず、あらゆる魔法を無効化にしてしまうのだ。
忍であるジライには見えた。
赤毛の戦士の表情は、嬉々としていた。剣を振るうのが楽しくてたまらないという顔だ。傭兵は、更に刃に力をこめてくる。
押し返された『小夜時雨（ムラクモ）』が、ジライの額にぶつかりそうだった。
ジライの腕がぶるぶると震えた。
引くわけにはいかない。

彼の背後には女勇者がいるのだ。あまりの出来事に驚き、寝台の上に固まって動けずにいるセレスが……。

ジライが引けば、刃は彼女を斬り裂くだろう。

「忍法かまいたちの術！」

ジライは効かぬはずの忍法を放った。だが、それは傭兵を狙ったものではなかった。

アジャンが体勢を崩し、よろめく。風の忍術は、傭兵が佇んでいた床を粉々に砕いたのだ。

後方に飛び退りながら、愛刀を右手に、セレスを左の小脇に抱え、ジライは走った。

寝台を踏み越え、赤毛の傭兵が迫って来る。

「セレス様！　お気を確かに！」

セレスを抱えて走り、素早い体術で攻撃を避けながら、ジライが叫ぶ。

「アレは敵です！　斬らずば殺られます！」

「敵……」

呆然とセレスがつぶやく。

「私の……敵？」

目を大きく開き、力なく頭を左右に振っている。

「違うわ……彼は……」

目の前の現実が信じられないのだ。

心が折れている……ジライは覆面の下の顔を歪めた。

土台、無理な話なのだ。戦えるはずもない。暗殺者であったジライにすら情をかけた心優しい彼女なのだ、味方に刃を向けられるはずがない。

突然、アジャンはぶんと大剣を後方に振り回した。

悲鳴が響く。

マリーだ。セレスの召使役の中年のくノ一。背後からアジャンに襲いかかろうとして、斬り捨てられたのだ。

「マリー……？　今の悲鳴……マリーよね？」
「斬られました」
ジライが事実のみを伝える。
セレスは震えた。
アジャンは本気なのだ。
本気でセレスを殺す気なのだ。
セレスを斬る為に……女忍者を倒したのだ。
「ジライ……ごめんなさい、もう、大丈夫」
セレスは眉をしかめた。
自分が戸惑っていたせいで、マリーを犠牲にしてしまったのだ。
勇者である自分が……戦いを忘れたせいで……
「下ろして、私も戦う……」
「『勇者の剣』をお呼びください」
「ええ」
セレスを床に下ろし、即座にジライは床を蹴った。
「アレは私めが始末をつけます。どうぞお身をお守りくだされ」
「ジライ？」
周囲は闇だ。二人が何処にいるのか、セレスにはわからなかった。
「待って、ジライ、私が戦うわ！」
敵に操られているにせよ、憎しみからの襲撃にしろ……
狙われたのは女勇者たる自分なのだ。
アジャンの心を受け止めないまま、守られていていいはずがない。
『勇者の剣』を呼び寄せ、鞘から抜く。
剣戟の音が聞こえる。
二人が戦っているのだ。
だが、音はすぐに場所を変えてしまう。激しく動いているのだ。
何処にいるのかがわからない。
「やめて、ジライ！　殺さないで！　お願い！　絶対、アジャンを殺さないで！」

剣を交わせば、『小夜時雨（ムラクモ）』より聖なる水が飛沫となって散る。

アジャンは、水は避けようとはせず、その身に浴びていた。浄化の水を恐れていないという事は、少なくとも魔に憑依されているわけではないようだ……少なくとも、今は。

ジライは、上段・下段と変化をつけて仕掛けた。が、全て防がれる。右手の『小夜時雨（ムラクモ）』で斬りかかるにあわせ、左手でクナイを投げても、アジャンは難なくよける。

距離をとっての遠隔攻撃でも同じだ。同時に投げた三本のクナイも、頭上よりのつるべ落とし或いは大小の弧を描き背後等死角をつく手裏剣すらも、全て弾かれる。

赤毛の戦士の勘のよさは異常だ。

夜目のきかぬ常人であろうに、まるで見えているかのように動く。

アジャンは、今、女勇者ではなく、ジライを狙っていた。

好敵手を前に爛々と目を輝かせ、笑いながら両手剣を振るう。

アジャンが走り寄って来る。わざとその場に止まりその刃を待っていた忍者は、距離を測ってから、懐から煙玉を取り出し、床に投げつけた。

ボン！　と広がる黒煙と目潰し。

慌ててアジャンは身を引き、目を閉じた。黒煙と目潰しの粉を浴びれば、涙も咳も止まらなくなる。目鼻が全くきかなくなってしまうのだ。

「セレス様！」

居間からシャオロンの声がする。隣の客室（ゲスト・ルーム）に居た少年が駆けつけてきたのだ。

「女勇者セレス様、ご無事にござりますか？」

居間から近衛仕官アレクセイの声もする。気配は複数だ。アレクセイがセレスの客室（ゲスト・ルーム）の鍵を開け、シャオロンや警備の兵士を伴って来たのだ。

アジャンは笑った。

遊び足りなかったが、仕方がない。

引き時だ。

煙幕をつっきり、窓へと走る。

四方から飛来する手裏剣やクナイ。

黒煙に乗じて忍者が襲いかかってきているのだ。

だが、その攻撃も防ぐのは難しくない。

敵意は光として感じる。アジャンは己を狙う攻撃の全て、その軌跡がわかるのだ。

日の光の下でも闇の中でも同じだ。

目を使わなくても、全てが見える。

黒煙は薄れつつあったが、目潰しの効果はまだあった。まだ刺激臭が強い。

しかし、出口も近い。雪と風が吹き込む窓の残骸まで、もはや遠くない。

「待って、お願い、行かないで！」

左の真横から女勇者の声がした……

泣きそうな声だ。情にもろい女勇者は、仲間の変心に心を痛め、それでも仲間を信じようと走り寄って来たのだろう。

アジャンはにやりと笑い、一歩前に踏み出し、横薙ぎに大剣を振り回した。声の主を斬り裂くべく。

女勇者は殺さなければいけない……

殺してやらなければ……

しかし……

手ごたえがない。

宙を切っただけだ。

足元から敵意を感じる。

罠にはまった。
先ほどの声の主は、女勇者ではなかった。
忍者ジライの声だったのだ。

覆面の下に会心の笑みを浮かべ、ジライは『小夜時雨（ムラクモ）』を振るった。
狙いは傭兵の脛だった。
勘の鋭いこの男を仕留めるには虚をつくしかない。セレスの声真似で相手の足を止めさせた後、ジライは床すれすれに身を低くし、奇襲に出たのだ。
『小夜時雨（ムラクモ）』の刀身から、雨が降る……
周囲の床に、聖なる水が飛び散った。
しかし、『小夜時雨（ムラクモ）』は何も斬れなかった。ただ、むなしく宙を薙いだだけだった。
アジャンの足があるべき位置に何もない。
消えている。
脛から腿へと、徐々に消えていっている。
「む？」
殺気を感じ、ジライは床を蹴って後方に飛び退った。
腹まで消えた赤毛の傭兵が、両手剣を振り下ろしたのだ。
距離を開き、その刃を避けきったのだが……
「くっ！」
ジライは顔を歪め、膝を折った。右胸から左腹にかけて斜めに傷が走っている。大剣はよけたのだが、剣圧――アジャンの気で鎖帷子ごと斬られたのだ。懐から金属が転がり出る。拳ほどの大きさに丸めていた大風車が、からくりが半ば解けた中途半端な形のまま床に落ち金属音を響かせる。大風車が二つも真っ二つに割れていた。
手裏剣が身代わりとなってくれねば心臓まで斬られていただろう。
だが、傷は浅くはない。鮮血が忍装束を染めてゆく。

ジライはすばやく周囲を見渡したが、赤毛の戦士の姿は何処にもない。消えたのだ。おそらく移動魔法で……

「ジライ！」

「ジライさん！」

黒煙も晴れ、近衛兵達の燭台の明かりに、寝室が照らされた。

駆け寄って来る女勇者と東国の少年を横目で見つめ、ジライは身を小さく折り傷を左腕で覆った。深手である事を隠し、割けた服から見える白い肌を隠す為に。

「賊には逃げられました……周囲を探ってまいります」

「なっ！なに言ってるの！あなた、怪我してるじゃない！」

ジライの左腕は血に染まっていた。傷口をおさえているのだ。血の量からいって、軽傷ではない。すぐにも治療が必要な事は、セレスにもわかった。しかし、

「シャオロン……我はしばらく戻れぬ。セレス様の護衛、任せた。お側を離れるでないぞ」

との言葉を残し、忍者ジライはすばやい体術で姿を消してしまった。

あの怪我で動けるなんて……

あの怪我で、アジャンを追いかける……？

セレスの顔から血の気が引いた。ジライが死んでしまう……この上、ジライまで失いたくない。だが、セレスの足では忍者に追いつけない。彼を捕まえられるのは同じ職業の者だけだ。

セレスは周囲を見渡した。騒ぎを聞きつけて現れた近衛兵や女官に混じり、くノ一のローラとシャオロンの召使役の忍が二人いた。胸の前で両手を組み合わせ、セレスは三人にすがった。

「ジライを止めて……お願い、治療が先よ……」

三人のナーダの部下達は目を交し合い、静かに後退していった。人目のない所まで下がってから、忍の技を使う気なのだろう。

「女勇者セレス様、お怪我はございませぬか？」
二枚目の近衛少尉アレクセイが背後から、自分が着ていたコートをセレスの肩に羽織らせた。その親切に接して初めて、セレスは寝巻きの貫頭着姿で、『勇者の剣』を握り締めて佇んでいたのだと気づいた。乙女らしい恥じらいから、セレスの頬が朱に染まった。
「ありがとうございます、アレクセイ様」
「セレス様、あなたの侍女は重傷なれど、命に別状はございませぬ。使用人部屋で治療しております」
マリーが無事と聞いて、セレスは微かに笑みを浮かべた。けれども、
「魔族の襲撃でもあったのでござりましょうか？　ご説明いただけませぬか？」
アレクセイの問いに、セレスの胸は泣きたいほど痛んだ。女勇者はきゅっと拳を握り、うつむいた。
「私の命を狙い、賊が侵入したのです。ですが……敵が誰かはわかりませんでした……」

アレクセイはセレスの為に、別の客室（ゲスト・ルーム）を急ぎ準備した。
その部屋で、襲撃について改めて質問されたが、セレスは何もわからないの一点張りで通した。暗闇での襲撃だった為、アレクセイは何の不審も抱かず、セレスの説明を受け入れた。護衛の人数を増やす事、ホルムの街にいるナーダやアジャンに使いを送る事を約束し、人の良い近衛仕官は廊下へと下がっていった。
「セレス様……？」
二人っきりになると、シャオロンはつぶらな瞳で真っ直ぐにセレスを見つめた。
セレスは涙をこらえ、少年に抱きついた。
女勇者一行は、この王宮では常に監視されている。
先程の襲撃も覗かれていた可能性が高い。襲撃者を自分やジライ

が『アジャン』と呼んでいた事も、ケルティ新王朝には筒抜けかもしれない。
けれども……
それでも、今は……
襲撃者がアジャンであった事を、この少年に話すわけにはいかなかった。
「大丈夫ですよ、セレス様、絶対、大丈夫です」
少年が女勇者を励ます。
「ジライさんは一流の忍です。無茶はしませんよ。必ずセレス様の元に戻って来ます」
セレスは少年を抱きしめた。何も言わず、ただ抱きしめた……

寝台のそばの灯りが、サイドテーブルの上の額縁の中の絵を照らす。
私物としてエウロペからセレスが持って来た絵――ナーダがセレスの為に描いてくれたものだ。
絵の中でセレスは……シャオロン、ジライ、ナーダ、そしてアジャンに囲まれ幸せそうに笑っていた。
絵を眺めているうちに……セレスの頬を一筋の涙が伝わった。

まんじりともしないまま、夜は明けた。
寝不足で体がだるいのだが、眠れないのだ。セレスは布団の中で溜息ばかりをついていた。
「……すっかり呆けてますねえ、セレス」
唐突に、寝台のそばから声をかけられた。
驚いて上半身を起こすセレス。すぐ近くのソファーで横になっていたシャオロンも、ガバッと体を起こしていた。
「ナーダ！」

扉の開閉はなかった。どうやって部屋に入って来たのかさっぱりわからなかったが……そこには、ターバンを頭に巻き、毛織のコートを身に着けた武闘僧ナーダがいた。その背後には、いつもと同じ忍者装束の忍者ジライが佇んでいる。

「ジライ！　良かった、無事だったのね！」

「申し訳ございませぬ、セレス様、賊めは逃がしました」

「馬鹿！　そんな事、いいわよ！　あなた、怪我は？」

「どうという事はございませぬ。かすり傷にござりますれば」

「嘘！　怪我を見せなさい！」

セレスは寝台から飛び降り、ナーダの横をすりぬけ、ジライに飛びかかり襟に手をかけた。脱がす気なのだ。これには、さすがの忍者も慌てて抵抗する。

「おやめください、セレス様！　お気を静めくだされ！」

「重傷のはずよ！　怪我を見せなさい！」

ジライの襟を握り締めたまま……セレスはポロポロと大粒の涙をこぼし始めた。

「……怖かったの。あなたまで失ってしまいそうで、本当、怖かったんだから……」

「……セレス様」

「もっと自分を大切にして……」

「……」

「返事は？　これは命令よ！」

キッ！と睨む女勇者に対し忍者は覆面の下の瞳を細めた、微笑むかのように。

「は！　心得ました！」

「セレス、ジライの怪我は本当にもう大丈夫です。私が治癒しましたから。あなたがおっしゃる通り軽傷ではありませんでしたが、傷口を塞ぎ、折れた骨も繋ぎ、疲労回復の魔法もかけました。まあ、もっとも、血肉と骨がなじむまで二、三日はかかるので安静にしててくれなきゃ困るんですがね」

後半は忍者に聞かせる為の台詞だったが、セレスに捕まっている忍者はあさっての方向を見つめて武闘僧を無視している。

ナーダは溜息をついた。

「だから、痴女じゃあるまいし、殿方の衣服を脱がそうとするのはやめなさいな。はしたない」

「ぐ」

セレスは顔を赤く染め、ジライの襟から手を離して、急いで顔をぬぐった。涙まで挪揄されないように。

「ああ、そうそう。マリーの怪我も癒しておきました。彼女も、もう、日常生活を送る分には問題ありません」

ふと見ると、シャオロンがガウンを手にそばに立っていた。礼を言って受け取り、セレスは寝巻きの上からガウンを羽織った。

「ジライにも手伝ってもらってこの部屋の周囲に結界を張り、幻術をかけています。監視役の目に、偽りの現実が見えるよう細工したんですよ。監視者は眠っているセレスとシャオロンの幻を見ています。千里眼の魔法で覗いても幻が見えるだけです。だから、今なら遠慮なく何でも話せますよ……アジャンの事も、ね」

ナーダはセレスとシャオロンの顔を順に見つめ、もう一度溜息をついた。

「アジャンは……出奔しました。行き先は、遥か北のアジ族の聖地の森と思われますが、足取りはつかめていません。確かな事実はアジャンは出奔した……それだけです。しかし、状況から見ると……行きがけの駄賃に、ゲオルグを殺害し、セレスの命を狙ったように見えるのです」

「え？」

勇者一行をホルムまで案内する役目を負い、十日ほど同じ馬車に同乗していた、あの太った軍人を……アジャンが殺害？

「ゲオルグさんを殺した？　アジャンが？　どうして？」

「アジャンがやったとは断定しませんが、動機は充分すぎるほどあるんですよ。あなた方には内緒にしていましたが、あの軍人、アジ

ャンの父親の仇の一人なのです」
「……」
「覚えていますか、アジャンが馬車の中で激情に駆られゲオルグを斬ろうとした日の事を？　あの時、品性下劣なゲオルグは部族王を蛇で処刑した話を楽しそうに話していたでしょ？」
「ええ」
覚えていた。あれは、セレスにとっても、非常に不快な話だった。
「ゲオルグが最初に蛇の処刑で殺したのはアジ族の王アジクラボルト……アジャンの父親です。アジクレボスの曾孫うんぬんは詐称で、アジャンは本当は、ケルティ生まれで、アジ族の総領なのです」
「そう……」
セレスは驚かなかった。むしろ、そうと聞いて納得した。アジャンはケルティ人だったのだ。故国への拘りがあるからこそ……この国に行くと決まってから、あれほど暗い顔をしていたのだろう。
「アジャンの父、シャーマン王アジクラボルトは、『謀反の疑いあり』との噂だけで処刑されたました。当時、国民のシベルア教への改宗を進めていたケルティ新王朝とシベルア教会は、ささいな理由で、簡単に部族王を処刑していたのだそうです。宗教の要であるシャーマン王の権威を地に落とす形で、むごたらしく処刑していたのですよ」
「……」
「アジクラボルト王の蛇の腹裂き刑執行には、ゲオルグも関わっていました。アジャンに怨まれて当然です」
「お父様が亡くなって……それで、お母様とお姉様も殺されるのね？」
ナーダが微かに眉をしかめる。
「そうです」
セレスがアジャンの母と姉の死を知っていた事をいぶかしく思ったのだろう、ナーダは糸目でジッとセレスを見たまま、話を続けた。
「アジはケルティ新王朝に恭順していると……その姿勢を示したか

った一部のアジ族が暴走したのです。シャーマン王の家族を皆殺しにしようとね。アジャンは幼い弟と妹を連れて故郷の村から逃げおおせましたが、母親と姉は幼い子供達の逃亡の時間を作る為に家に残り殺されたようです。母親は病気だったらしいんですがね……最後まで片手剣を離さなかったそうです。姉も病の母を庇い勇敢に戦ったそうです、十三才だったとか」

セレスの胸が痛む。

それで、あの映像となるのだ。

弟達を守る為に戦ったけなげな少女は、辱められ、殺されたのだ……

「親の庇護も家も財もなく……村から逃げた時、アジャン、七つだったそうです。本人だってまだ子供だったのに、弟達を守護しようと戦い続け……できる事は何でもやったそうですが……妹さんは風邪で亡くなり、弟さんも凍死したそうです」

「弟さん……」

と、つぶやいたのはシャオロンだった。東国の少年は複雑そうな顔をしていた。

「でも、アジャンは今更、家族の仇をとる気はないと言っていました。仇を討ったところで、もう誰もいないのだから、と。私もその言葉を信じていましたが……昨晩、娼館で発見されたゲオルグの遺体は……大量の蛇を飲み込んでいたのです」

「！」

「娼館に入ってすぐの事でした。相方の娼婦が小用でほんの少し部屋を離れた間に、つまり、二、三分の間に、ゲオルグは殺されたのです。娼婦の悲鳴を聞きつけて部屋に入った私は……彼の遺骸を目にした時、およそ場違いな事を考えてしまいました。この季節に、これほど大量の蛇を何処から運んできたのだろう、ってね。口や食い破られた腹や胸から、蛇が次々に這い出てきていました。二十匹はいましたね」

「……」

「だけど、おかしいんです。この処刑では、受刑者はなかなか死ねないはずです。みせしめの為、受刑者を苦しみのたうち回らせる為の処刑方法ですから。蛇が胃から脇腹を食い破ってでてくるまでには数時間かかります。娼婦が小用で部屋を離れただけの短い時間じゃ、蛇を一匹飲み込ませるのが関の山。犯行は不可能です。大量の蛇を飲み込ませるだけで相当時間がかかりますし、蛇を物質転送魔法で一度に胃に送ったのだとしても二、三分じゃ蛇は人体を食い破れません。時間を操る魔法を嗜む、魔族か超一流の魔術師でなきゃあの犯行は不可能です」

「魔法？」

セレスの顔が少し明るくなる。

「じゃあ、アジャンは関係ないわ。魔法なんか全然、使えないもの」

「いいえ、セレス様」

と、ジライがかぶりを振る。

「先程の襲撃の折、引き際にアジャンめは移動魔法で消えております」

「え？」

口元を押さえるセレス。

武闘僧も言葉を添えた。

「ええ、セレス。今、アジャンの周囲には魔法の力があります。そばに魔法を使える協力者がいるのだと思うのですがね、まだ確認がとれてません。ともかくも、彼の行動に魔法が関わっています。昨晩、彼は窓のない娼館から姿を消しました。彼の部屋はゲオルグの隣室で、三階建ての建物の三階でした。移動魔法を使わなきゃ、姿を消せませんよ」

極光の剣　6話（後書き）

自分で書いておきながらなにですが、アジャンが斬ったのが大風車で本当に良かったと思います。火薬玉なんかを斬ってたら……ジライの死なばもろともの自爆で、アジャンも死亡してたなあと……。忍者の懐にはクナイやら手裏剣やら火薬玉やら煙玉やら暗器やらがいっぱいです。

極光の剣　7話

「セレス、情報屋グジャラを覚えていますか？」
唐突に話題が変わった事に戸惑いながらも、女勇者は頷きを返した。
「覚えてるわ。インディラで会ったもの。西はエウロペから東はジャポネまでの情報を知っている、この大陸一の情報屋でしょ？　ジライのお友達の」
「お友達……」
ジライは顎の下に手を当て、首を傾げた。
「まあ……似たようなものかもしれませんなあ」
そんな忍者を糸目で睨みながら、武闘僧は女勇者への説明を続けた。
「そのジライの知り合いの情報屋から、私、エウロペで手紙を預かったんです。グジャラからの手紙であることは秘密にして人づてに頼まれたって形で、北方一の情報屋に渡して欲しいって、ね」
「あら、あなたもグジャラさんのお友達だったの？」
セレスの問いを、ナーダは怒りを露に否定した。グジャラの表の商売は魔薬屋。魔薬全般を嫌悪し寺院内の麻薬排斥運動を進めているナーダにしてみれば、グジャラは、事情さえ許せばすぐにも排除したい、憎むべき敵なのだ。
「違います！　北方諸国の情報屋を紹介してもらう代わりに、配達屋を引き受けただけです！　魔薬関係でも犯罪がらみでもないってあの男が保証したので、手紙を預かりました。私も内容は知らなかったのですが……私が届けた手紙は『アジャンに関する調査報告書』だったのです」
「え？　なに、それ？」
ナーダは肩をすくめた。
「そのへんの事情は、ジライに説明してもらいます」

指名された忍者は、静かに一歩進み出た。
「セレス様、私めがグジャラから聞いた話によりますと、あやつ、一時、ケルティからの亡命者を部下として使っておったそうなのです。もう十年以上前の事ですが、その亡命者はアジ族の戦士。情報屋グジャラの元に身を寄せたのは、主人となるべき子供を捜す方便だったようで」
「アジャンを探して……？」
「はい。シャーマン王アジクラボルトの長男、次男、次女。生死の知れぬ三人を求めアジの戦士達は、ある者は北方諸国を彷徨い、ある者は北方の情報組織の一員となり、ある者は越境し南で王の子らを探していたのです」
「王の子……」
「燃え盛る炎のごとく見事な赤髪の子供……成長すれば父王のごとく勇猛果敢な戦士となるであろうシャーマンをアジ族は探しておりました。王の子さえアジに戻れば、ケルティ新王朝を転覆できる……そう信じておったのです」
「まあ、アジ族全体が王の遺児を探していたわけではありませんがね。アジクラボルト王の死後、アジ族の三分の二はアジャンの叔父にあたるアジカラボスを部族王に祭り上げ、ケルティ新王朝に恭順しました。残り三分の一は恭順の演技をしつつ反逆の機会を待つ、秘密組織を作ったそうです。グジャラの部下となった戦士は、後者の一員だったとか」と、ナーダ。
再びジライが説明を続ける。
「詳しい事は聞けませなんだが、そのアジの戦士、どうもグジャラの身代わりとなって命果てたようにござりまする。死に際に己が使命を告白したのやもしれませぬ。グジャラは損得勘定に忠実な男。刹那主義、享楽主義でもあります。普通であれば、あやつは何の得にもならぬ事はしません。死者への義理を果たす為に、十年以上もアジの王の子を探していたなど、正直、驚きました」
「何にせよグジャラは、エーゲラ一（いち）の戦士アジャンに目をつけ、勇

者の従者として活躍する以前・以後の情報を集め、アジクラボルト王の遺児である可能性が高いと考えたわけです。でも、情報屋の元締めがタダで情報を流しては示しがつかないでしょ？　かといって、この件を商売にしたくない。それで、アジャンの仲間の私に配達屋を頼んだのですよ。人づてに頼まれたって事にして、調査報告書を渡してくれってね。で、トスベルの街で、私、北方の情報屋の元締めに会いましてね、その手紙を渡したんですよ……そしたら」

ナーダがフーッと溜息をつく。

「アジャンに会わせてくれ！　って、元締めが目の色を変えてわめいたんですよ。当地の情報屋の現在の元締めはアジソールズといいましてね……ようするにアジの男だったのです」

「まあ」

「アジソールズはアジクラボルト王の角笛を預かっていた、王の腹心の一人だったそうです。王の死後、王の遺児の情報を求めて情報屋組織に潜り込んだ彼は、とんとん拍子で出生して、二十年足らずでその世界の頂点に上り詰めていたのです。それで、翌朝、食堂でアジャンに『アジソールズがあなたに会いたいと言っています。王の遺児を二十年探していたとか』と、耳打ちで伝えました。その名前に覚えがあったのでしょうねえ、アジャン、びっくりしてました」

「あ」

セレスは思い出した。そういえば、そんな事があった。朝食の時、食堂でナーダに何事か耳打ちされた後、アジャンはひどく暗い目をしていた。何を思い悩んでいるのか、気になっていたのだ。

「ホルム入都前に、再び情報屋の元締めに会う事になったので、監視役のゲオルグを利用して外出の機会をつくりました。私がインディラ王家の出だとバラして金品をちらつかせると、あの俗物、めいっぱい媚びてきましたからねえ。アジャンと私を夜遊びに連れて行けって頼んだら二つ返事で了解しましたよ。その時、召使役のヤルーとクルグも同行させました。娼館で入れ替わってもらう為です」

「入れ替わる？」

「ええ。鈍いあなたは、多分、気づいていないでしょうが、あなた方の召使役の忍者のうち必ず一人は、主人と似た背格好をしています。顔もわりと似ています。影武者たりうるように、ね。むろん、そっくりではありませんから、親しい者までは騙せません。しかし、薄暗い娼館で入れ替わる分には問題はありませんでした。私とアジャンは影武者を娼館に残し、情報屋アジソールズを訪ねました」

「……」

「情報屋の元締めアジソールズは、臣下の礼をとって跪いてアジャンを迎えました。アジャンの生存を喜び、神に感謝の言葉を捧げ、男泣きに泣いてもいました。しかし、対するアジャンの態度は冷淡なものでした。アジ族も部族神も捨てた、アジに戻る気はないって、ね」

「どうして？」

「いろいろ理由はあるのですが……アジャンは自分が復讐鬼になれば、勇者一行を破滅に追いやってしまうと考えていました。勇者の従者がケルティ新王朝に弓を引けば、大魔王討伐どころではなくなります、北方三国全てで我々はお尋ね者にされ命を狙われるでしょうから。それに、アジャンは魔に好かれやすい体質です。強国シベルアに対抗する力を欲するあまり、魔の誘惑に負け、魔に堕ちかねない……だから、セレス、あなたがケルベゾールドを倒すまでは、アジャンは復讐に走るまいと思っていたのです」

「……」

「アジソールズは、勇者の従者であるアジャンの立場を理解してくれました。王となりケルティ新王朝を討つのは大魔王討伐後で構わない、それまでは、アジ族戦士一同、アジャンの部下となり戦力となって大魔王討伐の旅を助けるとまで言い出しました。むろん、アジャンは部下なんぞいらんと怒鳴ってましたけどね。一方は部族王になる気はないの一点張り、もう一方はもうアジャンを新たな部族王と決めつけ崇めるばかり。話し合いがまとまるはずもありません」

やれやれというように、ナーダは首を左右に振った。

「その日は話に何も進展がなかったんで、後日、又、話し合いの場をもうけることとなりました。なにせ、相手は当地の情報屋の元締め。すげなくして、ご機嫌を損ねるわけにはいきませんし。で、ホルムに着いた後、アジャンを情報屋の元締めの元に連れて行くために、王宮を抜け出しての夜遊び三昧の芝居となったわけです」

「あ？　あれって、そういう目的だったの？　やっぱり、お芝居だったのね？」

セレスがそう言うと、武闘僧はじろりと彼女を睨んだ。

「当たり前でしょ。僧侶のこの私が、理由もなく娼館に行くものですか！　汚らわしい！　白粉べたべた香水プンプンの娼婦達に囲まれて、もう、むちゃくちゃ大変だったんですよ！　吐き気とめまいで、何度、死ぬかと思った事か！」

娼婦達に囲まれたせいで、吐き気とめまいで死ぬ？　意味がよくわからなかったものの、相手の剣幕に押され、セレスはひきつった笑みを浮かべた。

「ご苦労様。アジャンの為に、たいへんだったのね」

「そうなんですよ！　アジャンの為に、私、頑張ったのですよ！　娼館に影武者忍者を残し、姿隠しと結界魔法を駆使してアジソールズのもとにアジャンを連れてってたんですよ！　なのに！　アジャンったら、全然、話をまとめる気がなかったんです！　嘘でもいいから一言、『大魔王討伐後にアジに戻る』と言えば話し合いは終わったのに！　確約はマズいのなら、『大魔王討伐後にケルティに戻る』でごまかしておくでもいいじゃないですかって、私、言ったのに！　俺は王にならんとしか言わないんですから！　話し合いがズルズル続いて、娼館通いも続いて！　毎日、毎日、娼婦と顔をつきあわせてたんですよ！　私、アジャンに殺されると思いましたよ！」

「わかったわ、僧侶のあなたがものすごい苦労をしたのはよくわかったわ」

本当はわけがわからなかったが、セレスはナーダを宥めた。言うだけ言ってナーダも気が済んだのか、閑話休題となった。

「アジソールズはアジャンの翻意を促そうと、必死でした。仲間のアジ族の男や、共通の部族語を持つ近しい一族ハリの男を集め、数をもってアジャンを説得する策に出ました。アジの困窮を訴えたり、昔の栄光を語ったり、アジクラボルト王の偉業を語ったりしてね。アジャンはいつも仏頂面でしたが、ご家族の死に関する話には聞き入っていました。アジクラボルト王がどういった経緯で捕縛されたのか、その時、どのような扱いを受けたのか、王を助けるどころか石を投げ罵倒を浴びせたのはアジ族の誰だとか、どれほどの時間苦しんで死に至ったのかとか……。処刑に関わった司教や軍人全ての名前も、アジャンは知りました」

「……」

「家が襲われた時の詳しい話も聞いていました。アジャンが斬り捨てた三人の他にも、襲撃者はいたのです。しかも、十五人も。アジャンの叔父で、現在アジ族の部族王を名乗っているアジカラボスもその一人でした」

「……」

「彼等と過ごした一週間でアジャンが変心したとは思いたくないのですが……おととい、アジャン、ポツリと呟いたのです。一度、北に戻るべきなのかもしれん、って」

「北へ……？」

セレスの胸がドキッと鳴った。

「……何をしに？」

「北にある深い森に、聖なる武器『極光の剣』があるようなのです。部族神とアジとの契約の証、王たる者しか振るえない両手剣なのだとか。シャーマン王アジクラボルトは、多分、身の危険をそれとなく感じていたのでしょうね、生前に、部族に伝わる聖なる武器を何処かに隠して封印してしまったのだそうです」

「武器を……封印？」

「ええ。アジ族には聖域とされる場所が幾つかあります。その中の一つに、次代の王たる者が部族神と契約を結ぶ森があり、その森の

何処かに剣を隠したのではないかと思われます。現在のアジ王アジカラボスは即位後すぐに、『極光の剣』を求めてその森に向ったのですが、森の中に足を踏み入れられませんでした。強力な結界が張られていたんです。森に住む獣や鳥はもちろん、人に飼われている馬や犬も楽々と森と外を行き来できるのですが、人は進めないのです。目に見えぬ壁に阻まれ、森の中に入れないのだとか。魔法で中を窺おうとしても結界に阻まれるそうです。アジクラボルト王の死後、もうすぐ二十年だそうですが結界は未だに生きています。おそらく……次代の王たるアジャンが行くまで解けないのでしょうね」

「森の何処に……剣はあるの？」

「森にあるとはっきりしてるわけじゃないんです。多分、そこだろうってだけで。それに、誰も森の中に入れないんです。あるか無いか確かめる事すらできないのですよ」

「剣は洞窟の中にあるのよ。暗い洞窟の大岩に、鞘ごと突き刺さっているんだわ」

「……確かに、その森には洞窟があります。次代シャーマン王の修行場だそうで。シャーマンは、そこに籠もって神の試練を残り越えてはじめて、他者の魂を救える真のシャーマンになれるのだそうです。剣があるとしたらその洞窟なのではないかと、アジソールズも言っていました」

「『極光の剣』って、『勇者の剣』よりもを大きくて、柄は銀と真鋳で柄頭はキノコ型、鞘は青銅製で真鍮の金具がついているのよね？」

ナーダが糸目を見開き、女勇者を見つめる。

「その通りです。何故、あなたが『極光の剣』の形状をご存知なんですか？」

「夢で見たの……ホルムに来る前と、おとといの夜から昨日の明け方にかけて。アジャンのお姉さんのアジンエリシフさんと、アジャンのお父様と思われる赤髪の戦士が夢に出てきたわ。『北に疾く戻れ、戻らねば、おまえの命運は尽きる』って赤髪の戦士がおっしゃ

ってたのがすごく気になって」
「え？　何ですって？」
「『北に疾く戻れ、戻らねば、おまえの命運は尽きる』よ」
「え？」
ナーダがけげんそうに眉をしかめる。セレスは気づいた。今、自分が口にしたのはアジ族の部族言葉なのだ。夢の中では不思議と意味がわかったし、その言葉を覚醒している今でもなぞる事はできる。しかし、本来、セレスの知らない言葉なのだ。むろん、ナーダも。セレスは夢の中の言葉を共通語で仲間に伝えた。
「夢の最後には洞窟が見えたわ。洞窟の中に眠る巨大な大剣、あれを手に入れろと、アジャンのお父様はおっしゃってたわ。神との契約の証だから、って」
「セレス、あなた……」
呆然と、ナーダは女勇者を見つめた。
「あなた、霊感ゼロのくせに、どうしてそんな夢を見たのです？」
「知らないわ。でも、見たんだもの」
「他に何かわかりませんか？　アジャンは『極光の剣』を求め、出奔したのだろうとは思うのです。その為に、アジソールズ達の願いを容れて彼等の協力を得て、アジの魔法使いに移動魔法などを使わせているのではないかと。しかし、剣が本当に聖域の森にあるのかどうかはわからないのです、私達には」
そこで、ナーダは一呼吸置いてから言葉を続けた。
「ですが、アジャンには『わかる』と思うのです。求めるものがどの方角にあるのか、真実を見抜く目が彼に進むべき道を教えるでしょうから」
「……そうね」
「アジャンが移動魔法の使い手と移動してるとあっては、忍では行方を追いきれません。夢でわかるのなら教えてください。『極光の剣』は遥か北のシャーマン修行の森にあるのでしょうか？　それとも別の場所に？」

「そんな事を聞かれても……」
「アジャンは、彼の性格からいって、絶対に、『極光の剣』にいきつくはずです。アレにはケルティ新王朝を転覆させる力があるそうなので」
「え？　剣なんでしょ？　聖なる武器の？　それに、新王朝を転覆させる力がある？」
「アジソールズがそう言っていました。部外者の私が同席していたせいか詳しい話はしませんでしたけどね、アジの王が『極光の剣』を手に入れれば勝てると……アジャンを説得していた男達は皆、そう信じていました」
「武器は武器だと思うわ……」
セレスは納得がいかず、顔をしかめた。
「夢なんだけど、あなたに話した以上の事はわからないわ。洞窟の中しか見てないの。そこが何処にあるのかなんてわからないわ……それに、夢も、毎日、見てるわけじゃないのよ。前はよく見たけど、ホルムに来てからはさっぱりだし。おとといの夜だって、本当に久しぶりにあの夢を見たんだから」
「おとといの夜……」
声を漏らしたのはジライだった。忍者は視線を東国の少年に向けている。シャオロンも困ったような顔で、忍者を見つめ返している。
「セレス様がかような夢を見た理由、私めにはわかりもうした」と、忍者。
「え、本当？」セレスの問いに、忍者は頷いた。
「でも、ジライさん！」東国の少年は不満そうだった。
「黙れ、シャオロン。間違いはございませぬ。セレス様はシャオロンと共寝した時のみ、アジャンに関わる夢をご覧になっていたのでしょう」
「へ？」
女勇者と武闘僧の目が点になる。
忍者ジライは、時々、セレスが寝ボケてシャオロンの寝台に潜り

込んでいた事、眠っているセレスとシャオロンが同調（シンクロ）していた事、おとといの夜、ホルムに来てから初めてセレスがシャオロンの寝台へ入り込んだ事を教えた。おとといの夜など、わざわざ廊下に出て隣の客室（ゲスト・ルーム）の扉をノックして召使役の忍に扉を開けさせ、真っ直ぐにシャオロンの寝台に向ったのだと忍者は言う。

「あやつら、セレス様とシャオロンはそういう仲かと勘違いして、見て見ぬ振りをしておりました」

「そういう仲ってどういう仲よ！　何で起こしてくれなかったのよ！」

「セレス様の安眠を守るのも私の務めですから」と、にこやかな顔で忍者はほざき、

「お目覚めになる前に私が腕に抱きセレス様をお部屋のお布団まで運んでさし上げておりますゆえ、何の問題もございませぬ。ケルティに着いてからご心労が続き、セレス様のお肌と内臓に少々、疲れが表れております。眠れる時には少しでも多くお眠りいただいてセレス様の玉のお肌を守らねばと、共寝は放っておきました」

セレスは怒りの張り手を忍者に食らわせてやった。本当なら蹴り飛ばしたいところなのだが、相手は大怪我をした後なので、多少は、手加減をしたのだ。

それは、ともかく……

セレスはシャオロンをジーッと見つめ、その右手をとった。

「シャオロン、これから一緒に寝ましょう」

「え――っ！」

少年は逃げ腰になるが、セレスは逃がさなかった。

「霊感が強いあなたが、アジャンのお父様とお姉さんの霊を呼んだに決まってるわ！　あの夢を見させてくれたのは、あなただったのよ！」

「いえ、正確には、シャオロンの霊感とセレス様の能力が重なった結果でしょう」と、忍者。

ジライは、カルヴェルの知り合いの魔法使いナーダから聞いた話

なのだがと断ってから、
「あの男、セレス様は共感能力者（エンパシー）で、他人の強い感情や思いに触れると、その者の心を我が事のように感じ、時には記憶や人格さえ共有するのだと言うておりました。シャオロンが霊を呼び寄せ、その霊の思いにセレス様が共感なさっておいでなのでは？」と、推測を伝えた。
セレスは口元を覆った。そんな能力が自分にあるなんて、信じがたい。しかし、昨晩、アジャンの記憶を読んでしまったのも、もしかしたら、その能力のせいかもしれない。
ナーダが両腕を組み、首を傾げる。
「そういえば、セレス、あなた、シャイナの荒野でダイダラという方の心を読んでいましたよね？」
「ええ……」
一つ目鬼の巨人ダイダラ。ジライの異形の部下だった。
「……そうね。あの時は、あの人が何を考えているのか、何故だかわかったわ。ジライの体をサリエルがのっとっている、でも、ジライもまだ居る、ジライを殺しては駄目だって……あの人、必死に物言えぬ口で訴えていたわ……あの人を刃にかけた私に」
「セレス様は、お優しゅうございますから……」
覆面の下のジライの目が細くなる。笑みをつくったのだ。
「アレの憐れな外見に心を痛め、それゆえ、アレと共感なさったのでしょう。セレス様が居らねば、私めはサリエルに体を奪われ、ダイダラは乱心の汚名を着せられたまま犬死にしておりました。ほんに……いくら礼を述べても、足りぬぐらいにございます」
「感謝なんか、やめて……私の腕が未熟なせいで、あの人を殺してしまったのですもの」
「いいえ。アレは満ち足りて逝きました。何の未練もなく往生したのです。セレス様がアレの心を読んでくだすったからにございます。セレス様のお力は、人を救済できる尊き力にございます」
「……」

ためらいつつも、セレスは疑問を口にした。
「私……本当に共感能力者（エンパシー）なのかしら？」
「おそらく。精神が高揚した時などに、ふとしたはずみで発揮されるお力だそうです。こたびは、安定した霊感のあるシャオロンが、セレス様のお力を発揮しやすい場を作っているのやもしれませぬな」
「……」
「セレス様、正直に申し上げれば、私めは、アジャンがどうなろうが関心はございませぬ。あやつが魔に堕ちセレス様のお命を狙うとあらば、斬るまでの事。ですが、セレス様があやつを助けたいとお望みである以上、このジライ、力の限りお助けいたします」
目元の笑みを消す事なく、ジライはシャオロンを見つめた。
「セレス様がご所望じゃ、シャオロン、共寝を務めよ」
「え――っ！　でっ、でも！」
今までは眠っている間にセレスがベッドに入り込んできたのだ。知らない間、同じ布団に入っていただけだ。けれども、セレスやジライの望んでいる通りにするという事は……寝巻き姿のセレスと同じベッドに入るわけで……当然、自分は、最初、起きているのだ。
「できません！　無理ですよ！　オレ、男なんですよ！　そんな事、できるわけないじゃないですか！」
「まあ、シャオロン、あなた、アジャンの行方を知りたくないの？　幽霊にお尋ねすればわかるのかもしれないのよ」
「アジャンさんの行方は知りたいです！　でも、それとこれとは別問題なんです！」
「どうして？」
「どうしてって……だって、オレ……」
顔中を赤く染めながら、少年はセレスに告白した。
「オレ、セレス様が好きなんです！　愛する方と同じベッドで眠れるほど、オレ、人間できてません！」
「シャオロン……」
セレスは真っ赤になった少年を見つめ、握っていた少年の右手に

そっと優しく包み込むようかのようにもう片方の手をそえた。
「私もあなたが好きよ」
「え？」
セレスはにっこりと微笑んだ。
「私も、あなたを愛しているわ」
「え？」
少年は自分の耳を疑った。しかし、セレスは確かにそう言ったのだ。
ドキドキと大きく鳴る心臓。その音をセレスに聞かれてしまうのではないか？　少年は震えながら、愛する女性に問い返した。
「オレを愛しているって……本当ですか？」
「ええ、本当よ」
セレスは、大輪のバラのような艶やかな笑みを浮かべている。
「だから、心配しなくていいのよ。あなたが寝相が悪かろうが、歯ぎしりをしようが、いびきをかこうが全然、気にしないわ。だって、シャオロン、あなた、仲間だもの。家族と同じよ。弟のように愛しているわ」

「……弟」

シャオロンはがくっと頭を垂れた。ぬか喜びをしてしまっただけに、ショックは大きかった。だが、敬愛する女性から弟のように可愛がられているのだ、悲しむほどの事ではない！と、自らを元気づけようとしている少年の肩がポンと叩かれる。ジライだった。まだ覆面からにこやかな笑みを見せている。
「案じずともよい、シャオロン」
「ジライさん？」
忍者はとても優しそうに微笑んでいた。が、

「何事もおきぬよう、我がしっかりと見守ってやるゆえ」
その右手には……クナイがあった。
「きさまが獣欲に負けたときは、全力で止めてやるぞ」
クナイをチラつかせ、ジライは笑みを浮かべていた。その目は冗談を言っている目ではなかった。
「さあ、シャオロン、寝ましょう！」
「シャオロン、はようせい。セレス様をお待たせするな」
やるき満々のセレス。
無慈悲な忍者。
少年は大きな溜息をつき、諦めて頷いた。
「でも、オレ……たぶん、眠れないと思います」
興奮しちゃうだろうからとは、さすがに口にしなかったが。
「ならば、我が忍法で眠らせてやろう」と、ジライ。
「……そうですか。じゃあ、もう、何でもいいです……」
ハハハと力なく笑う少年。
ナーダは同情の眼差しで少年を見つめていた。一世一代の告白は、鈍い女勇者には通じなかった。無垢すぎる罪な女性と、とことん身勝手な忍者に振り回されるシャオロンは、非常に気の毒に思えた。
しかし、アジャンの行方がわからない以上、シャオロンの霊感とセレスの共感能力に頼るしかない。アジャンを運んでいる移動魔法がカルヴェル級のものであれば、もう目的地まで到達してる可能性すらある。となれば手遅れは確実だが、そうでなければこちらが急げばどうにかできるかもしれないのだ。
「このまま幻術と結界を張り続けますから、頑張って夢を見てください」
と、言い残し、ナーダは移動した。姿隠しの魔法を使って。アジャン失踪を隠す工作、部下への指示、新王朝から移動許可がもらえてないケルティ北部への移動の算段、監視役となる軍隊の目をくらます方法……やらねばならない事、考えねばならない事は山積みだ。

極光の剣　8話

眠れそうもないと言っていたわりには、シャオロンはすぐに眠りに就いた。昨晩の襲撃騒動の後、気を張ってセレスの護衛の役を果たしていた為、ほとんど寝てなかったのだ。

少し遅れてセレスも寝息をたて始める。

忍者ジライが寝台の横の椅子から見守る中、じきに二人の動きは同調（シンクロ）する。同じタイミングで、寝息をもらし、寝返りをうったり、手足を動かしたりするのだ。

セレスはあの夢を見た。

夢の中に、アジエリシフが居た。

けれども……

「××××××××！××××××××××××！××××××××××××××××！」

暗闇の中で、おさげの少女が必死に叫んでいる。

目に涙をためたその顔は、悲しそうで、辛そうだった。

しかし、セレスには彼女が何を伝えたいのか、わからなかった。彼女の叫ぶ部族語が、今日は、全然、理解できないのだ。

少女にセレスは話しかけてみた。ケルティ人の彼女が共通語など知っているはずはないのだが、これは夢なのだから、もしかしたら通じるかもしれないと思って。

しかし、少女は涙を堪えながら、前方を見つめるばかりだ。彼女

にはセレスの姿が見えていないし、声も聞こえていないようだ。彼女の視線の先が知りたかったが、夢なので、セレスは思うように視線を動かせなかった。

少女は鉄剣を握っていないし、アンダードレスも血と泥に汚れていない。亡くなる直前の彼女ではないのだ。周囲も闇が広がるばかり。過去の再現ではなさそうだ。

「××××××

その文字が、この森を守護しているのだ。
森に入るべきではない者を拒む為の、呪言葉なのだ。
セレスが同化している風が行き着いた先には……
洞窟があった。その入口は大岩によって封じられている。大岩にも、光輝く文字が刻まれていた。

眠っていたのは、ほんの二時間足らずだった。
目覚めてすぐにセレスは、ジライに持ってきてもらった紙に夢で見た文字を見た通りに記した。
「……読めませぬなあ」
紙に目を落とし、忍者は溜息をついた。
「ケルティ語ではございませぬ。アジの部族語ではありませぬか？」
「そうね……そうだと思うわ」
セレスは、まだ眠っているシャオロンを見つめてから、忍者に命じた。
「ナーダを呼んできて。私、アジャンの後を追うわ。その相談がしたいの」
「セレス様、御自ら？しかし、先程の夢ではアジャンの足取りはわからなかったのでありましょう？」
「ええ。でも、アジャンは『極光の剣』を求めているのですもの、あの洞窟に辿り着くわ……アジ族のシャーマン修行の洞窟が、あそこなんだわ、絶対」
「はあ」
呪言葉に守られ侵入者を拒む森というのは、確かにアジの聖域の森と特徴は一致している。断定するには情報不足ではあったが。
「アジの聖域の森に向われるのですね？」
「ええ。アジャンが何処で今、何をしているのかは、さっぱりわからなかったけど、アジ族の聖域の森へ向えば会えるわ。森の位置は

ナーダなら知ってるだろうし。毎日シャオロンと寝ていれば、夢でアジャンのお父様やお姉さんからいろいろ情報ももらえるでしょ？

森に着くまでに、アジャンの居場所とかもそうだけど、何で私を襲ったのかとか、アジャンの今の気持ちとかもわかるかもしれないわ」

「……まあ、そうやもしれませぬが」

「それでね、ジライ、悪いんだけど……」

寝台のセレスはうつむき、横に跪いている忍者を上目遣いに見つめた。

「……あなた、ナーダと一緒に王宮で留守番してくれない？」

「は？」

覆面からのぞく、忍者の目元が強張る。

「……留守番？」

セレスは申し訳なさそうに頷いた。

「仲間の行方を追いたい！　って、馬鹿正直にゴドゥノフ陛下に頼めないでしょ？　アジャンがアジの跡取りなのは内緒なんだし。それに、私達が移動を許されてるのってホルム近郊ぐらいでしょ？　ケルティ北部行きなんか、絶対、認められないわ。だから、こっそりお城を抜け出すしかないと思うんだけど……許可なく王宮を離れてケルティ国内をうろついてるのがバレたら、相当マズイ事になるわ。北方諸国から追い出されるとか、お尋ね者にされるとか、投獄されちゃうとか、処刑されちゃうとかね。アジャンを迎えに行くのは、隠密でなきゃいけないのよ」

「……で？」

ぶるぶると忍者は震えていた。

セレスは顔をひきつらせた。ジライは仲間になってからずっと、『セレス様の盾となれれば本望』と、戦闘中も普段もストーカーまがいにセレスにつきまとっている。セレスの護衛を生きがいにしているのだ。そんなジライに、こんな事を頼んだら嫌がられるのはわかっている。わかっているけれども……他に手はないのだ。

セレスは顔をあげ、無理ににっこりと笑みをつくった。
「ねえ、ジライ。あなた、私が居ない間、私の影武者をやってくれないかしら？」
「……」
忍者は無言だった。が、構わず、セレスは言葉を続けた。
「ナーダが用意した私の影武者用くノ一ってローラだと思うんだけど、長い間、彼女に私の代理をさせるのは無理だと思うの。でも、その点、あなたなら、私そっくりな声が出せるし、私の性格もよく知ってるし、旅の間の出来事もわかってるし、手紙の代筆もしてたからこの王宮の人間関係にも詳しいでしょ？　それに女装も上手だもの。私の影武者、あなたにしかできないわ」
「……できませぬ」
震えながら忍者が言う。
「セレス様と私では背格好が違いすぎます。私のほうが上背があり、肩幅も広うございます。ごまかせませぬ」
「じゃあ、急病になればいいわ！」
「は？」
「すんごい重い病にかかったって事にして、ずっとベッドで寝てなさい！　それなら、身長とかゴマかせるわ！」
「……ですが」
「いい、ジライ？　宗教上の理由って事にして、診察は一切、断るのよ。ナーダは医学も修得してるからお医者様役もやってもらえるしね。ナーダの治療以外受けないって事にして、お見舞いもできるだけお断りするのよ。部屋に籠もってベッドに寝てれば、きっとバレないわ！」
「……セレス様」
覆面から覗く忍者の眼は、非常に情けない目をしていた。今にも泣き出しそうな、捨てられた子犬のような憐れな目だ。
セレスの胸がきゅんと痛んだ。でも、同情するわけにはいかないのだ。心を鬼にして、わざと声を荒げた。

「ジライ、これは命令よ！　私の影武者をやりなさい！　それとも、あなた、私の命令に逆らう気？」
「ぐっ」
忍者は喉をつまらせ、肩よりも低く頭を垂らした。
「……承知。影武者を務め、留守居をいたします」
今にもシクシク泣き出しそうな、弱々しい声だ。
セレスがホロリと情にほだされそうになった時、突然、部屋の入口から声がかかった。
「それで、あなた、私にはお医者役以外、何をやらせる気なのです？」
寝室の扉の前には、インディラの王族の衣装をまとったナーダが居た。今まで姿隠しでも使っていたのだろうか？　カルヴェルのような唐突な現れ方だ。
「あなた、何時から、そこに？」
「たった今です。でも、結界内の出来事は、術師の私には伝わります。あなた方の会話は聞かせてもらっていました」
ナーダはゆっくりと歩み寄ってくる。
セレスは口の達者な武闘僧に負けないよう、気を張って相手を見つめた。
「今まで通り、ケルティ新王朝との交渉はあなたに任せるわ。あと、シベルア大司教との会談の場がもうけられた時には、しっかり話を聞いてきてね。この国の中枢で、まだ対面がかなってないのは大司教だけだもの。大司教が魔族と関わってないかよく調べてね。それと、私は『勇者の剣』は置いて行くわ、可能な限り、剣のご機嫌をとってあげて」
「セレス？」
「女勇者セレスがこの王宮に居る振りをするんですもの。『勇者の剣』を持っては行けないわ。私以外に『勇者の剣』に触れられるのは、あなただけだもの。鞘からは抜けないでしょうけど、手入れ、よろしくね」

「武器はどうするのです？」
「『虹の小剣』と『エルフの弓』があるわ。それにシャオロンと二人だもの。『龍の爪』もあるし、大丈夫よ」
「あなた、シャオロンと二人でアジャンを追う気ですか？」
「ええ」
「本気で？」
「そうよ」
ナーダはやれやれと頭を振った。
「かたことのシベルア語しか話せないあなたと、日常会話程度のシベルア語とケルティ語がようやく話せるシャオロンが？　二人で？　ケルティ北部まで？　はっきり言って、あの辺はシベルア語、あまり通じませんよ」
「え――っ？　そうなの？」
「そうですよ。二人で出かけたら、間違いなく遭難するでしょうね」
「でも、ジライには私の影武者をお願いしたいし、あなたには新王朝との交渉を続けてもらいたいの。どうしよう……」
「……仕方ありませんねえ」
ナーダがパチンと右手の指を鳴らすと、ふっと人影が現れた。老忍者ガルバだ。ナーダの執事役の変装をしている。
「何ぞ、御用でしょうか、御身様？」
「ガルバ、あなた、セレスとシャオロンと一緒に、ケルティ北部までアジャンを迎えに行ってください」
「へ？」
老人は目をぱちくりとさせた。
「しかし、私めには御身様をお守りするという使命が……」
「私の護衛なら大丈夫です。ムジャ達もいますし、ジライも一緒ですから」
「御身様！　私を追い払って、又も、悪い遊びをなさるおつもりですか？」
「違います！　できるものですか、この王宮で！　そうではなく、

ガルバ、あなたを見込んで頼んでいるのです。あなた以外に、セレスとシャオロンを託せる者はいません」
「御身様……」
「あなたしかいません」
「……」
「日のあるうちに、セレス達とあなたの旅立ちの準備を整えてください。北部への旅に必要な書類も偽造して揃えておいてくださいね」
「……」
「この国の言葉をろくにしゃべれない上に雪国に不慣れな二人を導くのはたいへんでしょうが、あなたならできます。頼みましたよ、ガルバ。部下を二、三人連れてってもいいですから」
「……」
「ガルバ、返事は？」
「……は。承りました、女勇者様の護衛をいたします……」
老忍者ガルバは、がっくりと頭を垂らした。その姿は、セレスに留守居を命じられて落ち込んでいるジライとよく似ていた。
「ナーダ、それじゃ、行ってもいいのね？」
セレスの問いに、武闘僧は頷きを返した。
「アジャンをこのままにはしておけませんものね。放っておいたら、彼を憑代にして強力な魔族が今世に現れかねませんから。昨晩は、聖水を浴びても平気だったそうですが、何時まで、彼が魔に抗えるか……。既にもう体をのっとられている恐れもあります。でも、最悪の事態になっていたとしても、セレス、あなたとシャオロンなら、彼を救えるでしょう……私はそう信じています」

極光の剣　9話

「あああああ、セレス様、どうぞご無事で……雪国は冷えます故、汗をおかきになったらすぐにおぬぐいくださいませ。放っておいては凍傷となります。手足の指、鼻、耳は凍傷になりやすうございます。特にご注意を。それと、コレを……忍者の携帯用カイロにございます。これを私（わたくし）と思い、肌身離さずお持ちくだされ」

「あ、ありがと……」

アジャンの襲撃の翌日、日中のうちに支度を整えたセレス達は、闇夜に紛れて王宮より旅立つ事となった。セレス用の客室（ゲスト・ルーム）の居間に集まって打ち合わせを終えたら、出発だ。

しかし、セレスは別離を惜しむ忍者ジライにめいっぱい捕まっていた。セレスは毛皮の帽子に毛織のケープ、長い上着にズボン姿。青年商人の変装だ。腰に『虹の小剣』、背に『エルフの弓』と『エルフの矢筒』を装備している。対するジライは、いつもの覆面に忍者装束だ。

一方……

「あああああ、御身様、どうぞご無事で……食事には必ず毒味役をお忘れなきよう。それと、御身様、ここは異国にございます。お一人で行動してはなりませぬぞ。必ず部下をお連れください。それから」

「はい、はい、はい、はい」

すがりつく老忍者（こちらも商人風の恰好）を、ナーダはおざなりに相手をしていた。老忍者の過保護が恥ずかしいのだ。三十歳を越えたナーダを、老人は未だに子供扱いする。

ジライは、セレスの右手に恭しく頬擦りをしていた。いつものセレスであれば、こんな事されたら、すぐにでもジライを蹴り飛ばすのだが、今夜でしばらくお別れとなるので、鳥肌を立てながら我慢しているのだ。

横目でジライは、東国の少年を見つめた。少年もセレスと同じような恰好で、『龍の爪』入り革袋を背負っている。

「良いか、シャオロン、一命を賭してでもセレス様をお守りするのだぞ」

「はい！　ジライさん！」

「セレス様は、少々、お腹がお弱い。お食事はできるだけ温かく。それから先程渡した、傷薬、血止め、鎮痛解熱剤、整腸剤、眠り薬、痺れ薬は有効に使え」

「はい！」

「セレス様はおなご故、冷えは大敵じゃ。月のものの時の雪中行軍は控えよ。殊に二日目と三日目は、な」

「……はい？」

「忘れるでないぞ、セレス様の次の月のものの予定日は」

「何で、あなたがそんな事を知ってるのよ！」

ボカン！　ドカン！　ゲシッ！　と……結局、セレスに殴られ蹴り飛ばされるジライであった。

倒れたままぶるぶると震えていたジライに……東国忍者を嫌っていたインディラ忍者ガルバが手を差し出した。

「きさまの大切な女勇者は、このわしが守る。老いたりとはいえ、かつてはインディラ一と謡われたわしじゃ。そこらのへなちょこ忍者よりは、よほど役に立つわ」

「……ご老体」

ジライはハシッ！　と、ガルバの手を握った。

ガルバは、うむと頷いてみせる。

「その代わり、よいな？　きさまは御身様をお守りせよ。御身様はいずれはインディラ国王となられる貴いお体！　魔など近づけるでないぞ！」

忍者達は互いの手と手を結び合った。主人を交換警護と、利害が一致した為、仲良くなりかける二人。その二人の間に、ターバンを巻いた武闘僧が割って入る。

「ガルバ！　私は国王になんかなりません！　何度言ったらわかるんですか！　あああああ、もう、うっとーしい！　あなた方は寝室の方に移動してください！　あっちも結界が張ってありますから！　私はセレスと話があるんです！」

「ですが、御身様」

「行ってください！ついでに、ジライ、あなた、そろそろ影武者用変装をしたらどうです？　セレスがいるうちに変装の微調整をした方がいいでしょ？」

「……うむ」

「あの……ナーダ様、オレは？」

「ああ、シャオロン、あなたはここに居てください。ジライとガルバは寝室へ。早く」

　不承不承、二人が隣室に移ってから、ナーダは大きく息を吐いた。二人の忍者の愛情は暑苦しすぎる。三人は視線を交わし、苦笑を見せ合った。

「セレス、シャオロン、こちらの心配はしないでください。国境を不法に越えて、ガルバの部下の忍達がぞくぞくとやって来て、ホルムの街で待機してますから。アジャンやシャオロン、それにジライの影武者は部下達にやらせます。あなた方が戻って来たら、すんなりと入れ替われるようにね」

「アジャンの失踪の件、新王朝にバレてないの？」

　セレスの問いに、ナーダは肩をすくめた。

「表向きは、ね。でも、知ってると思いますよ。間諜が昨晩の襲撃を上役に伝えているはずですから。でも、こちらがアジャンの影武者を用意して、知らんふりを決め込んでいる以上、向こうも強くは追求できません。やると、私達を覗いている事実を認める事になりますので。それとなく探りをいれてくるでしょうから、のらりくらりとかわしておきますよ」

「……あなたに任せておけば大丈夫ね」

　セレスは首をかしげ、今のうちに聞いておくべき事を全て聞いて

おこうとした。
「ねえ、情報屋組織とは連絡ついた？」
「組織とは連絡できてますよ、アジ族関係の方と会えないってだけで。アジソールズはホルムに居るみたいなんですがねえ。他のアジ族の方は、アジャンと共に北を目指してるんじゃないでしょうか」
「ゲオルグさんの殺人事件の方はどうなってるの？」
「どうもこうもないですよ。『事故死』扱いで、あっさり終わりました。『殺人』などなかった事になっています。事件を担当した警吏、無能で事なかれ主義の方だったんで、状況的にかなり異常な現場で面倒な捜査をしたくなかったんですよ。ゲオルグは人望のない方ですし、真相を探ろうとする動きも起きないんじゃないでしょうか」
「じゃあ、アジャンが殺人犯として手配される事はないのね」
セレスが安堵の息を漏らすと、
「その事なんですけど……ゲオルグさん殺害と、アジャンさん、無関係だと思います」
と、東国の少年がはっきりと言う。
「だって、アジャンさんなら、敵は剣で叩き斬るはずです。蛇を口に入れて殺すなんて……しかも、二十匹も入れるなんて、アジャンさんがやるわけありません。そんなまわりくどい殺人、アジャンさん、絶対、嫌いですから」
「……そうね」
セレスの口元に笑みが浮かんだ。
「そうよね、あなたの言うとおりだわ。アジャン、短気だもの。まだるっこしいの、大嫌いだったわ」
「セレス様、オレ、信じてます。アジャンさんは、絶対、魔に堕ちてません。セレス様のお命を狙ったのも、ジライさんやナーダ様の部下のくノ一を斬ったのも、何か理由があるんです。その理由は、今はわかんないけど、わかんなくても信じる事はできます。オレ、アジャンさんを信じ続けます」

そう言う少年の顔には、清々しい笑みが浮かんでいた。
セレスは、何の迷いもなくアジャンを信じるシャオロンに激しく胸を揺さぶられ、同時に信じきれずにいる自分を情けなく思った。
「何か……伝えたかった事、シャオロンに言われちゃいましたね」
ナーダがクスッと小さく笑った。
「セレス、覚えてますか？　この王宮についた時、王侯貴族との交渉ごとを引き受けてあげる代わりに、後であなたにお願い事をしたいって条件出したの」
「ええ……覚えてるわ」
「私、こうお願いするつもりだったんです。『アジャンが魔に堕ちたように見えても、ぎりぎりまで彼を信じて光に導いてください。けれども、セレス、あなたの命を犠牲にして彼を救っても、それは真の救いではありません。あなたか彼、いずれかが死ななければならない時は、尊厳を持ってアジャンを殺してあげてくだい』ってね」
「ナーダ……」
「ナーダ様……」
ナーダの笑みが苦いものとなる。
「アジャンが失踪するんじゃないかって随分前から、私、予想していたんですよ。けれども、止められませんでした。私じゃ、駄目なんです。私もアジャンも悲観主義者ですからね、二人で居ると陰々滅々、とことん暗い考えになっちゃいます。あなたかシャオロンでなければ、彼は救えません。出会った時から、アジャンは闇ばかりを見つめていました。彼は仲間の中で最も魔に近しかった。魔に堕ちやすかったんです」
「アジャンさんが魔に近しい？」
不思議そうにシャオロンが尋ねる。
「ジライさんじゃなくてって？」
「ジライは大魔王教徒でしたし邪法も使えますが、彼の行動基準は善悪を超越しています。己を捨て去る忍ですしね、めったな事じゃ魔に誘惑されませんよ。心が清いあなた方も、ね。仲間のうちで最

も危なかったのがアジャン、次が私ですよ」
「あなたが？」
唖然として、セレスが尋ねる。
「僧侶なのに？」
「僧侶となって大僧正様のお教えを受けたおかげで、魔に堕ちずに済んでいるのです。でなきゃ、母を死に追いやった第二夫人とその一族を憎み、母を見捨てた父を怨んでいた私は、醜い憎悪の塊となって魔にふさわしい姿に堕ちていたでしょう」
「ナーダ……」
「もっとも」
武闘僧の笑みが晴れやかなものに変わる。
「あなた方と旅をして、いろんな体験をして、私も変わりました。今は心から善でありたいと思っています。善でいなければいけない理由もできましたし、ね」
「理由？　どんな？」と、セレス。
ナーダの頬がポッと赤くなる。
「プライベートな事なので、内緒です」
「あら」
「まあ、ともかく……セレス、あなたが死んでしまったら、大魔王を倒せる人間がいなくなります。何があっても、あなたは死んではいけません。でも、アジャンを簡単に切り捨てたりもして欲しくない。闇を見つめながら生きてこなければいけなかった彼を、あなたなら理解できるはずです」

「入ってもいいですか？」
ナーダは寝室の扉をノックした。
ナーダが善でいなければいけない理由は、ナーダが心より愛を捧げている相手――忍者ジライにあった。その傍らに立って共に戦う為にも、不幸な生い立ちであった彼の魂を癒す為にも、ナーダは常

に光と共にありたいと思うようになっていた。
　老忍者ガルバが扉を開けてくれる。まだジライは変装中との事なので、セレスとシャオロンを居間に残し、ナーダだけが寝室へと入った。ジライは、主人のセレスにも素顔を秘している。影武者たるべく変装している途中ならば、セレス達を入れるわけにはいかないのだ。
　中に入ったナーダは、ぎくりとした。手鏡を持った、腰まであるウェーブのかかった金の髪、青い瞳、赤い唇の麗人が、寝台にあぐらをかいて座っている。寝台の上には化粧道具、大小の手箱、ブラシなども散らかっている。襟の立ったゆったりとしたレースのネグリジェが、筋肉質の手足や喉仏を隠しているので、どこをどう見ても女性にしか見えなかったが……そこに居るのは間違いなく……
「ジライ……？」
　震える指で、寝台の人物を指差すナーダ。そんな主人に、老忍者は意地の悪い笑みを浮かべてみせた。
「いやあ、こやつ、若いわりに、変装術も見事。思わずしゃぶりつきたくなるような美女にございましょう？」
「……ガルバ」
「おお！　しかし、御身様には女嫌いの病がございましたなあ。残念至極にござりますな。男狂いの病も、あの美女相手では眠りにつきましょうし」
　ハッハッハッ！　と、明るく笑う老人を、ナーダは糸目でじろりと睨みつけた。老人はおどけて肩をすくめてみせた。
「女勇者様を入室させてよくなりましたら、合図をお送りください。それでは」
　鼻歌まじりに出て行く部下。ナーダはムッとした表情でその背を見送っていた。が、
「あああああ、似ておらぬ！」
　寝台の人物が特大の溜息をついた。手鏡を見る美女は、非常に不満そうな顔をしていた。

「セレス様の愛らしい美しさを再現できぬ！　あの澄んだ瞳、ふっくらとした頬、可愛らしく挑発的な赤い唇は、我（われ）には無理じゃ！」
「……でも、どう見ても女性ですよね」
　ナーダの頬はひくひくひきつっていた。目の前に居る人物は愛する男なのだが……鳥肌が立ちかけているのだ。大嫌いな化粧の匂いも漂っているし。
「目も……青いですね」
「ん？　薄いガラスを入れておる。だが、目は塞いだ方がよいな。ナーダ、包帯を出せ。目の病という事にしよう。さすれば、包帯に顔が半ば隠れ、ごまかしやすくなる」
　武闘僧が包帯を用意している間に、美女の姿の忍者は眼から膜のように薄い青いガラスを取り出していた。
「でも、ジライ、目が見えないんじゃ、何かとご不便なのでは？」
「我は忍じゃ。日常生活を送る分には支障はない」
「そうですか？」
「魔族との戦闘ともなれば、見えねば困るだろうが……平時であれば、盲目でもきさまを守ってやれるぞ」
　包帯を渡そうとベッドに膝をついたナーダは、どきりと胸をときめかせた。美女の顔をつくってはいても、常と変わらずジライの黒の瞳は刃のように鋭く美しかった。その上、ジライに『守ってやる』などと言われては……
「ん？　どうした？」
「いえ」
　武闘僧は、はにかむように微笑んだ。
「しばらく……私達、二人っきりですね、ジライ」
　ズベシャアァァ！と、次の瞬間、ナーダを床の上に蹴り落とされていた。
「阿呆！　気色悪い顔で、気色悪い台詞をぬかすな！」
「いえ、あの、ここで、あなたをどうこうするつもりはないんですが……二人っきりって、何かときめく言葉だと思いません？　まあ、

部下達もいますけど。ドキドキしちゃいます」
「やかましいわ！　こっちは不幸じゃ！　留守居役を命じられたのだ！　当分、セレス様のお側に侍れぬ！　あのお美しさを目にする事も、殴っていただく事も、罵倒していただく事もかなわぬのだ！」
「二人で頑張りましょうね、ジライ♪」
「寄るな！　スケベ坊主！　殺すぞ！」
その後しばらく、ナーダは愛する男の八つ当たりで、さんざん殴られ蹴られまくったのだった。

ジライが目の周囲に包帯を巻き終えてから、ナーダはセレス達を部屋に招き入れた。
「すごいです、ジライさん！　セレス様みたいです！」
シャオロンは褒め称え、セレスは感嘆して、布団をかけベッドの上で上半身を起こしている人物を見つめた。
セレス本人と並べば、確かに、さまざまな違いが目につく。頬はセレスよりやつれており、顔の輪郭も違う。けれども、実物がそばにいなければ、誰の目にも寝台の上の人物こそ『女勇者セレス』と映るだろう。
「すごいわ！　ジライ、さすがね！」
セレスの賛辞に、ジライは口元をにこっと綻ばせ、
「ありがとうございます、セレス様、うれしいですわ」
と、セレスの声で返事を返す。
ジライの変装は完璧だ。
心置きなくこれで北へ向かえる。
そう思うセレスに、普段通りの低い声で、忍者はこう助言した。
「二つ、お伝えしたい事がございます。一つは、アジャンの剣圧。あやつは武器に気を込め放つ事がございます。直進しかしてきませぬが、あれの剣の前に立つのは危険です。何時、気を放たれるかわからぬのですから、警戒を怠りなく」

「わかったわ」
「いま一つは、アジャンの勘の鋭さ。アジャンめと斬り合う事となりましたら、セレス様、まともに剣を交わしませぬように」
「まともに剣をかわしては駄目……？」
「はい。アジャンの勘のよさは異常です。あれは、敵の太刀筋が読めるのです。いえ、全ての攻撃が見えると言うた方が正しゅうございますな。まともに仕掛けても、無駄。あれは全てよけます」
「……じゃあ、どうすれば」
「虚をつくしかありませぬ。アジャン本人ではなく、その足元や周囲を攻撃するが良いかと。足場を奪い、落石や倒木等であやつの動きを封じるのです。罠をしかけておくのも有効かもしれませぬ。ともかくも、まともに剣を交わさぬ事。お気をつけくださいい」

ナーダは、セレスが所持する『虹の小剣』を中心に結界を張った。姿隠しと消音効果のある結界だ。半日は保つ。結界に守られて、セレス、シャオロン、ガルバ、ガルバの部下のダンルとバイトゥーキは、王宮を離れ、夜の闇へと消えて行った。

翌朝、セレス達はホルムの魔術師協会を訪れ、ケルティ北部の宿場町フィオニスまで移動魔法で運ばれた。
何故、フィオニスに来たのかと尋ねるセレスに、老忍者が説明した。ホルムからの急ぎの旅では、北へ向う場合はフィオニス、西ならばトスベル、東はタジスティンまで跳ぶのが普通なのだそうだ。ホルムからフィオニスまで順天であれば馬で三日の距離。移動魔法は決して安いものではないが、雪が増える時期は利用者も多い。国内通行許可書等必要な書類さえあれば（むろん、セレス達のものは偽造したものだが）、目立たず、あやしまれず移動できるのだそうだ。

フィオニスで橇の準備をすると言う老人に、更にセレスは尋ねた。何故、目的地まで跳ばないのか、と。それに対し、老忍者はそんな常識的な事も知らないのかと呆れたような顔で、こう説明した。

「そんな長距離移動をすればいらぬ注目を浴びましょうし、第一、それほどの距離を跳べる者が協会に居ますかどうか。移動魔法は魔力消耗が激しく、使える者が少ないのです。跳べる距離も、並みの魔法使いでは一つの街を越えるぐらいが限界。我々をフィオニスまで運んでくれた先程の魔術師も、言っておりましたぞ、魔力が枯渇したからこれから三日フィオニスで休暇だと。移動魔法は、ほんに選ればれた者にのみ許されたこの世の恩恵。荒使いしておるのは、魔力が膨大なカルヴェル様ぐらいです」

魔法ではなく普通に進みましょう、と、老人はダンルのみを残し、バイトゥーキと共に姿を消した。これより北は雪が深くなってゆくので、多頭びきのトナカイ橇（そり）で進むのだそうだ。

ガルバは琥珀商人、セレスはその息子、シャオロンは側仕えの少年。ダンルとバイトゥーキは下男役だった。が、ガルバの部下の二人は必ず一緒にいるわけではなく、情報収集の為に、よく姿を消していた。

人の良い気さくな商人を装うガルバが、現地人との交渉を一切引き受けてくれたので、言葉が不自由なセレスが苦労する事はなかった。セレスがしゃべれない理由を、喉の病だとか、母を亡くした心因性の病だとか、頭を打って記憶喪失になってるのだとか、その場その場で適当な嘘をついているようだった。

一刻も早くアジャンに追いつきたいとセレスは焦っていた。が、あまり速くは進めなかった。冬の雪国の旅は天候に左右される。雪や風が強い日は橇を走らせられないのだ。その上、一行が人里を離れると、それを待っていたかのように魔族の襲撃があるのだ。『虹の小剣』や『エルフの弓』、『龍の爪』をもってすれば何なく倒せ

る小物ばかりだったが、毎回、数が多く、倒すのに時間がかかった。魔族に足止めされているのではないか？　そんな気すらした。

北へ進むほど、人々の生活は貧しくなっていった。立派なのは領主の居城、シベルア教会ばかりで、街道で軍隊を目にする事も多くなっていった。

何度か村で、はりつけ刑にされ野晒しとされた死骸を目にした。雪に半ば以上埋もれた死骸は、肌着しかつけていなかった。死因は凍死。『謀反を企てた咎で処罰する』と、立て札が立てられていた。

「宿屋の女将の話によりますと、処刑される者の大半は抵抗運動者ではなく、たんなる税金滞納者らしゅうございます。他の滞納者への見せしめの為、役人に袖の下を渡せないほど貧しい者が野晒しの刑にされるようです。まあ、もっとも、処刑をまぬがれた者も、追徴金を含めた税金を最終期限までに払えねば、監獄に送られて重労働につかされ処刑されるよりもひどい地獄に堕ちるとか。エウロペの国境付近にはドラゴン船がよう出没すると聞いておりましたが、納得いきましたわ。略奪でもせねば、貧しい村々は税金を払えぬでしょうからな」

ガルバの説明に、セレスはただただ怒るばかりだった。アジャンの故国は、何と無残に蹂躙されているのだろう。きらびやかだった王宮に比べ、北は困窮に喘いでいる。

旅の間、東国の少年は随分と無口であった。が、ある日、宿屋でセレスと二人っきりになった時、窓の外の雪舞う荒野を見つめながら、こう言ったのだった。

「セレス様……この国、おかしいです」

この国の惨状を目にしてきたセレスは、すぐに頷きを返した。

「私もそう思うわ」

「何か……どこも、黒いんです。暗い靄がかかってるみたいに」

「え？　それ、どういう事？」

悪政を非難しているわけではなさそうだ。
「オレ、ホルムに着いてからずっと、あそこに大物の魔族が居るんだと思ってたんです。あそこ、すごく歪んでいたんで」
「歪んでいた？」
「えっと……うまく言えませんが、オレの目にはすごく汚く見えたって事です。汚泥の上にベタベタに生クリームを塗りたくって作ったケーキみたいな……そんな感じにホルムの街も王宮も見えたんです」
「そう。何となく、あなたの言いたいこと、わかるわ」
「ほんとうですか」
説明が通じたので、少年はホッとしていた。
「力の強い魔族が居るんだと思って探したんですけど、オレの力じゃわかりませんでした。それで、アジャンさんに相談したんです。あ、だから、アジャンさんの失踪前の話なんです。アジャンさん、こう言ってました。この国は、今、悪意に踊らされているんだって。昔はここまでは、歪んでなかったって」
「ここまで歪んでなかった？」
「えっと、つまり、昔も、シベルアから来た移民の人がひどい事してたらしいんですけど、大魔王の復活のせいで、よけいひどくなったんじゃないかって。そのぉ」
「大魔王復活後に、新王朝のケルティ人への迫害が輪をかけてひどくなったのね？」
「はい。そうみたいです。あの時、アジャンさん、ナーダ様みたいに難しい話をいっぱいしてくださったんだけど、難しすぎて……。チューショー的に言うと、この国は、今、魔族に飲みこまれているのだそうです」
「チューショー的？　ああ、抽象的に、ね」
セレスは首を傾げた。
「魔族に飲み込まれてるだなんて、そんな表現を使うぐらいだから、相当ひどい状態って事よね。大魔王復活後にケルティ人への迫害が

ひどくなったんなら、妖しいのはシベルアからの移民、殊に国王陛下や摂政、有力貴族達って事になるけど……あなた、前に言ってたわよね、彼らは人間だって」

「はい。あの王宮で会った方々は、皆、黒く歪んでましたが、魔に堕ちてはいません。人間でした」

「黒く歪んでるって、魔族の影響を受けてるって事？」

「……たぶん」

「この国の中枢に位置する者で会ってないのは、シベルア大司教ぐらいよね。大司教が大物魔族なのかしら」

「その可能性もあるって、アジャンさんはナーダ様に伝えていました。でも……違うような気もします」

「え？」

「ホルムが妖しいって感じたのは、あそこが魔の気がやたら濃かったからです。でも、今、こうやって北に向っているのに……気配が変わらないんです。ずっと、ねっとりと濃い黒の気が周囲に満ちています」

「……なぜ？」

「わかりません。ホルムだけが黒の気が濃かったんじゃなくて、あの日を境にケルティ中の黒の気が強まったんじゃないかって、そんな気もしてます。女勇者のセレス様がこの国の中枢に着いたから魔族が本気になって動き出したのかも……。この国は魔族に飲み込まれて、腹の中におさまっちゃってるから、だから何処でも同じなのかもしれません。どこにいっても黒の気だらけだから、ケルティにいる全ての人が悪影響を受けてひどい事をいっぱいしてるのかも」

極光の剣　１０話

毎晩、セレスはシャオロンと一緒に眠った。『東国のこわっぱとの約束にございますゆえ』と、何故だかガルバが二人が寝入るまでそばに控えているので、気になって眠りにつくまで多少、時間がかかったが。

あの夢ではない、普通の夢を見ることもあった。
それは、大抵、悪夢だった。
笑いながら、アジャンが両手剣を振るう。
その目を血のごとく赤く輝かせながら。
彼の体からは黒い魔の気が煙のごとくゆらめきのぼり、全てのものを黒く染めてゆく。
違う夢では、アジャンと剣を交わしていた。彼の巧みな剣技の前になすすべなく、セレスの体は両断される。
アジャンから一方的に責められている夢もあった。シルクドの王宮で『おまえの事が虫唾が走るほど嫌いだからさ』と、感情をぶつけられた時のように。だが、彼が何と言っているのか聞こえないのだ。何を怒っているのかがわからず、謝る事すらできない。
夜中にふと目覚め、涙を流す日もあった。
アジャンの苦悩を何故、自分は見過ごしたのか……
彼が自分の前から居なくなる前に、何故、彼の心のうちを聞かなかったのか……
自分を責めずにはいられなかった。
けれども……
これ以上は、もう見過ごさない。
彼を一人にはしない。
彼を魔には堕とさない。

仲間として、彼を迎えに行くのだ……

夢の中に、アジャンの姉のアジンエリシフと父親と思われる戦士が現れる。

アジンエリシフは、堪えられなくなったのか、涙を流すようになっていた。泣きながら怒鳴っていた。

赤髪の戦士も深刻な顔で何事かを言っていた。

けれども、残念な事に、彼等の言葉がセレスにはわからないのだ。

セレスの声も相手に届かない。

彼らはセレスではない、誰かを見つめて、その誰かに何かを訴えているのだ。

何となくだったが、アジンエリシフは『行ってはいけない』と引き止めているように、セレスには思えた。

『北に疾く戻れ』と、以前、夢で語りかけてきた戦士は、引き止めている感じではない。が、非難するかのように、容赦のない目を前方に向けている。

アジャンは、今、北へ向ってはいけないのだろうか？

彼らの言葉が理解できない自分が、歯がゆかった。

夢の最後は、決まって森の景色だ。

セレスは風となり、森の中を走る。トウヒやアカマツなどの常緑樹の森だ。寒冷地になると森が無くなって寒さに強い潅木や草ばかりが生え、最北の地にはコケ類しか生えないと、老忍者ガルバが教えてくれた。『極光の剣』が眠る森は、セレスの予想よりは南寄りにあるようだ。だが、雪の積もった白い樹木が何処までも続く景色は、美しいが寒々しいものだった。

森の奥には洞窟がある。

大岩によって、入口が封じられた洞窟だ。大岩には不思議な文字が刻まれていた。アジに伝わる古い言葉――魔法の文字なのだ。

ある夜……
いつも通り宿屋のベッドで夢を見ていたセレスは、悲鳴をあげ覚醒した。
「どうなさった、女勇者様?」
隣のベッドで眠っていた老忍者がすばやく起き上がって、サイドテーブルの灯りをつける。
「……セレス様?」
目を細め、むっくりと少年も体を起こす。
「あ……」
セレスは寝台に座って、口元を押さえ、ぶるぶると震えていた。
「急がなきゃ……」
そして、まなじりを決し、老忍者に尋ねる。
「目指す森まで、後、どれくらいなの?」
老人は首をひねった。
「天気に恵まれれば、後五日ほどかと」
「五日? それじゃ駄目だわ! 遅すぎる! 今すぐ行かなきゃ!」
セレスが苛立たしげに首を左右に振る。
「どうしたんですか、セレス様?」と、シャオロン。
「森の奥の洞窟の大岩に……手が触れたの」
「夢で?」
「ええ。手首に金属の腕輪をした、大きな手だったわ。アジャンの手よ。あの不思議な文字が刻まれた大岩を、探るように触れていたわ。アジャンは、もうあの洞窟まで行っているのよ。でも、今のままでは駄目なの。今のアジャンがあの大剣に触れたら……死ぬわ」
「セレス様?」
「アジャンは死ぬわ! だから、アジンエリシフさんは止めていたのよ! 『アジの神を信じぬ者に、神の祝福は訪れない』、お父様はそう言っていたわ! ようやく……あの二人が何を伝えようとしていたのかわかったのに……こんな事って……」

セレスは真剣な表情で、老忍者を見つめた。
「五日もかかったら手遅れになるわ。何か手はない？」
老忍者は、ごくっと唾を飲み込んだ。女勇者は夢に踊らされている。夢の中で目的地に赤毛の傭兵が居たからといって、それが事実かどうか定かではない。それに、その夢の映像とは、いつのものなのだ？　たった今、アジャンが大岩を触ったとでも言うのか？　夜中に、森を移動して洞窟まで辿り着いたとでも？
しかし、彼女は何の疑念もなく、夢を真実だと思い込んでいるのだ。
「女勇者様、橇での移動時間は増やせませぬ。雪を甘く見ては死にますぞ」
「でも、私はあそこへ早く行かなきゃいけないのよ！　お願い、考えて！　何か方法があるはずよ！」
女勇者の青の瞳が射るように、老忍者を見つめる。その激しい瞳に、老人はたじろいだ。それは、うむを言わせぬ、絶対者の瞳だった。
「いかような手段を用いようと、我々の足では目的地まで五日はかかります。時間を縮める事はできませぬ。ですが……」
「ですが？」
「魔法ならば……」
「あ」
セレスとシャオロンが顔を合わせた。
「移動魔法！」
移動魔法が得手のカルヴェルは、昨日はインディラ、今日はエーゲラと、間の二つの国を飛び越えて魔法で移動している事すらあった。
「そうね！　移動魔法なら、すぐにも森へ行けるわ！」
「でも、誰が移動魔法を使うんです？」
「カルヴェル様がいてくだされば、すぐに移動できるでしょうが……今、エウロペでしょ？　カルヴェル様と連絡をとる方法ってある

んですか？」
「……ないわ」
セレスは視線を、老忍者に向けた。
「ねえ、ガルバさん、あなた、移動魔法を……使えるわけ……ないわよねえ？」
「はい。私めは忍にござりますれば、そのような高等な魔法とは縁がございませぬ」
「そうよね……だったら、この辺に魔術師協会はない？」
「ありませぬ。都会でなければ、魔術師協会支部は無いのです。村々に呪い師ならばおるかもしれませぬが、あれはピンキリですから、全く魔法を使えぬ者の場合もあります」
「ううう」
「ですから……ここは魔術師や呪い師を頼るよりもむしろ……シャーマン王にすがるべきではないかと」
「シャーマン王？」
セレスは目をぱちくりとしばたたかせた。
「この辺に、シャーマン王がいるの？」
「はい。この辺は、昔よりアジとハリの領域。ケルティ新王朝に恭順を示したハリの部族王ハリビヤルニは、この宿の近くの村より部族を統括しております。シャーマン王の下であれば、それなりの魔法使いが居るでしょう」
「ハリ族……」
「現存する十二の部族の中では中堅ですな。部族の歴史は古いのですが、人口が少ないようで。アジと祖先を同じくする一族だとか」
「あっ！」
シャオロンが声をあげた。
「ドラゴン船に囲まれた時、そういえば、アジャンさん、言ってましたよね、アジャンさんのあの言葉は、アジとハリの部族方言だって。親戚筋の方なら、事情を話せば助けてもらえるかもしれませんね？」

「……そうね」
「いや、事情は話してはなりませぬ」
老人が口をはさむ。
「アジクラボルト王の長子の生存も、それがアジャンである事も、『極光の剣』を手に入れようとしている事も、決して口になさらぬように。ハリの部族王は、今はケルティ新王朝の小役人も同然の身分。下手な事を話しては、女勇者様が王宮を抜け出した事がバレてしまうやもしれませぬ。交渉は私にお任せを」
セレスは瞳を細めた。
ガルバの言うとおりなのかもしれない。
しかし……
赤髪の戦士は前に夢で、こうも言っていたはずだ。
『ハリと共に光を導け』と。
ハリ族の元へ向うのは……運命だったのだ。
「行きましょう、ハリ族の元へ」

翌日の昼前には、ハリの村の前に、セレス、シャオロン、ガルバは着いていた。
雪深い森に囲まれた静かな地に村はあった。が、周囲が高い木の塀に囲まれているので中の様子を窺う事はできなかった。
一行が門に近寄ると、物見櫓（ものみやぐら）の上から、門番の白髪の男が何用かと大声で尋ねてきた。
「アジ族の事で火急の用がある。魔族の魔手から、ケルティを守るためにご助力いただきたい」
と、ガルバはケルティ語で叫び返した。
さほど待たされることもなく、堅固な木の扉が開かれた。その内側に、ハリの村があるのだ。
門番を背後に従えて内より現れたのは、左目に黒い眼帯をした茶髪の壮年の男だった。毛皮の衣服ごしからもわかる逞しい体つきだ。

網目模様の柄、青銅の鞘の片手剣を腰に佩いている。ハリ族の戦士なのだ。戦士は、トナカイ橇の行商人風の一行の前まで進み、背後の村を庇うかのように橇の前に立ちはだかった。

「俺の名はハリハールブダン。ハリの戦士長だ。旅人よ、名を伺おう」

男がケルティ語でそう尋ねると、老忍者ガルバが口を開くよりも早く、セレスがシベルア語で答えを返していた。

「私は今世の女勇者、勇者ラグヴェイの末裔、セレスと申します。同道しているのは私の従者シャオロンと協力者のガルバです。アジの血筋を守る為、ケルティ新王朝の王宮を抜け出して来ました。私達には、偉大なるハリ族の助けが必要です。どうか、移動魔法の使い手をご紹介ください」

トナカイの手綱を持っていた老人が、ぎょっとして女勇者を振り返った。現在、ケルティ新王朝に恭順している相手に、何故、そんな馬鹿正直な名乗りをあげるのか？　愚の骨頂だ。新王朝に罪人として引き渡される可能性もあるのに。

門番はいぶかしそうにセレスを見た。シベルア語がわからないようだ。しかし、ハリの戦士長は、セレスのたどたどしい発音のシベルア語を理解し、彼女に合わせ言葉をシベルア語に切り替えた。

「おまえが女勇者だと？　嘘をつくな」

「今は『勇者の剣』を人に預け、商人に変装していますが、私は勇者一族のセレスです。大魔王ケルベゾールドを討つべく、エウロペより参りました。ハリの戦士様、どうぞ、王にお取次ぎを……。私の従者にアジの者が居ります。彼を救う為に、移動魔法の使い手の助力がいるのです。どうかお願いいたします」

ハリ族の戦士長――ハリハールブダンは隻眼を細め、フンと鼻を鳴らした。

「お断りだ」

「え？」

「知らんようだから、教えてやる。ハリはアジと訣別した。この二

十年、誇り高きハリは薄汚いアジとはつきあっておらん。アジの為などに、我らは小指一本動かさん。パンの一欠けらを恵むのすら御免だ。お引取り願おう」

相手のシベルア語が不思議とセレスには、よくわかった。聞き取れる。この国の誰のシベルア語よりも耳に馴染む。

そのまま立ち去ろうとする相手の背に、慌ててセレスは尋ねた。

「何故です？　ハリとアジは同じ部族言葉を話す近しい一族じゃないんですか？」

ハリハールブダンは足を止め、振り返り侮辱の表情を見せた。

「近しかったさ、先王アジクラボルト様の時代までは、な」

「え？」

「異国の女。従者に尋ねてみろ。アジが先王アジクラボルト様とそのご家族に何をしたのか。私欲の為に同族を殺す卑怯者など、この国の男ではない。俺がアジならば、恥ずかしくて自ら命を絶っている。アジカラボスなど潜王だ、俺は王とは認めん」

「先王アジクラボルト！」

セレスは身を乗り出した。

「赤髪の戦士の方ですよね？　アジャンのお父様だわ！　あ！　アジャンというのは偽名で、えっと、アジンエリシフさんの弟で、アジャニホルトさんの兄が、私の従者なんですけど……」

「なに……？」

ハリ族の戦士長は、不思議なものを見るかのようにセレスを見つめた。

「おまえ、今、何と言った？」

「え？」

「……アジンエリシフだと？」

「ええ。私の従者はアジンエリシフさんの弟です。今は本名を伏せ、アジャンと名乗ってます。エーゲラ国の一番の傭兵でした。燃えるような赤い髪の、とても逞しい男です。身長ほどもある大剣をとても巧みに扱います」

「待て、女」
「え？」
「おまえの心を見せろ。俺は微弱ながら神より力を賜っている。人の心を読む力もある。触れればわかる。おまえの語る言葉が真実か否か」
「……あなたは、シャーマンなんですか？」
「シャーマン戦士だ。祭りごとより剣の方が得意な、二流のシャーマン戦士だがな。女、おまえの言葉が真実なら、助力しよう。だが、偽りであったのなら、アジンエリシフの名を口にした罰でその舌、切り落とさせてもらう」
「あなたは……アジンエリシフさんの……？」
「許婚だった。二十年前の話になるがな」
セレスは目の前の戦士を改めて見つめた。三十代後半ぐらいの、逞しい隻眼の男。この男が、アジャンの姉のおさげの少女の許婚だったとは……
（この方にお会いできたのは……アジンエリシフさんのお導きに違いないわ。ううん、それだけじゃない。この方の言葉がわかるのも、きっとアジャンのお姉さんが助けてくれているのね）
セレスは右手をハリ族の戦士へと差し出した。
目を半ば閉じ、口で何かを詠唱してから、ハリ族の戦士はセレスの右手を掴んだ。むずかゆいような、あたたかなような感触にセレスはとまどった。が、ハリハールブダンはすぐにセレスの手を離し、破顔した。
「女……いや、女勇者セレスよ、おまえの言葉を疑った非礼を許せ。神よ、偉大なる御心に感謝します！　アジクラボルト様の息子が生き延びておったとは！　その者こそアジの正統な後継者！　『極光の剣』を継ぐ者だ！」
「『極光の剣』……」
「部族神よりアジが賜った、アジと神との契約の証だ」
「あ」

セレスの脳裏に、洞窟に眠る大剣が甦る。
「お願いです！　私達を『極光の剣』が眠る洞窟まで移動魔法で送ってください！　今、アジャンはあの大剣に触れてはいけないんです！　彼を止めなくては！」

ハリ族の村には木製の建物が五十ほどあったものの、どれもあまり大きくなく、二階建てなのは家畜小屋や倉庫ぐらいだった。村の中心にある建物が部族王の館だが、ホルムの王宮でセレスが使っていた三間続きの客室（ゲスト・ルーム）と同程度の広さしかなかった。その横の唯一の石造り建物シベルア教会の方が、むしろ大きいぐらいだ。
セレスは一行を窺う視線を意識した。往年は武器を取って活躍したであろう老人、かくしゃくとした老婆、働き者の中年女……仕事の手を休める事なく、彼等は闖入者たちをじろじろと眺めていた。
ハリハールブダンは、セレス達を部族王の館に案内した。館に入る前にハリの戦士は、
「王には俺が話す。お前達は口をきくな。王の側には、ケルティ新王朝のスパイやらシベルア司教が居る。部族神に関わる話をするわけにはいかん。俺に任せてくれ」
と、自嘲的に笑った。ハリ族はシベルア教に改宗し、ケルティ新王朝に恭順し納税の義務も負っている。しかし、この隻眼の戦士のアイデンティティーは部族に帰属し、部族神を信仰しているようだ。
シャーマン王の館は、中央に大きな炉のある一間の館だった。埃っぽくて換気が悪い。炉にともった揺らめく炎の明かりが、部屋を支える二本の柱、炉の側のベンチ、壁に吊るされた武器や毛皮、壁に立てかけられている移動式の家具を照らしていた。所々に間仕切りの板があった。王の館というよりは集会所のようだった。
館の北側に置かれたシベルア風の布張りの椅子が、玉座のようだ。間仕切りの裏から現れた白髪の老人が、大股でその椅子に座る。ハリビヤルニ王だ。近習とシベルア司教が、その横に並んだ。

炉を挟んだ王の向かいのベンチに座るよう言い残し、ハリハールブダンが王の元へと進み行く。

ハリハールブダンが王と話す間、セレス達の前には移動式の細長いテーブルが組み立てられ、パンと醸造ビールがふるまわれた。昼食には少し早い時間ではあったが、セレスもシャオロンもありがたくパンをいただいた。しかし、ビールを口にするのにはためらいがあった。飲んだ事がないのだ。断っては非礼だとガルバに耳打ちされ、セレスは頑張って苦い酒を飲み、シャオロンもビールを嘗めた。酒が体に回ると、雪で冷え切っていた体がポカポカとあたたまった。

「そういえば、ダンルとバイトゥーキはどうしたの？」

セレスの問いに、老忍者が答える。

「あやつらは他部族の村に向わせております。ハリとの交渉がうまくいかなかった場合の用心に移動魔法の使い手を探させております。ま、こちらの話がまとまりましたら、鳥を使って連絡をとって引き上げさせますが」

「そう。ありがとう、ガルバさん。本当、さすが、忍ね、頼りになるわ」

恐縮し頭を下げながらも、『さすが』なのは女勇者様の方ではないかと老人は思っていた。

バカ正直すぎる彼女の無茶な行動は、さまざまな偶然が重なった為、ハリからの協力が得られる方向へと事態を向かわせている。

ハリの戦士長であるハリハールブダンがあの場に現れねば……彼が話を聞く気になってくれねば……側にシベルア教会の者がいたならば……事態は最悪の方向へ向っていたかもしれないのだ。

『心のおもむくままになした事が全てうまくいく時ってあるじゃないですか、そういう時、人は神の愛を受けているのですよ』

昔、主人から聞いた言葉を思い出した。

『それは、無意識に神の声を聞いて動いているようなもの。託宣を受けているも同然です。残念ながら私にはそんな時は訪れた事ありませんけれどね……でも、誰かがそうなっている時、どうすればよ

いのかはわかります。決して邪魔をしない事。その人の前に障害があるようなら取り払ってやって、進むべき道を進ませてあげる事……それが天より才を与えられなかった人間がなすべき義務なのですよ』

非凡な存在でありながら、自分を凡人と言い切っていた主人。あの時、主人は、自由に生きながら天意にかなう道を進める者を羨んでいた。自由奔放に生きる嵐のような勇者が傍らに居たからこそ……

思い出に浸っていた老人は、ハリハールブダンの接近に気づき、正気へと戻った。

「おまえ達、王の許可は下りた。北の集落に案内する」

「北の集落は俺の農場だ。冬は閉鎖しているが、そこで越冬する長老と息子達がいる。シャーマンとシャーマン修行中の子供だ。そこに居るハリレーレク叔父上が移動魔法を使える」

セレス達のトナカイ橇での移動となり、案内役としてハリハールブダンが手綱を取った。彼にセレスは尋ねた。

「シャーマンは村を離れて修行するものなのですか？」

「いや、ここ数十年のことだ。王の側には常にケルティ新王朝の者がいる。部族神への義務を果たす者は、王の側を離れて神を祭るしかない。神への奉仕は王族の義務だ。時代が変わろうとも怠るわけにはいかん」

「え？」

神への奉仕が王族の義務？　叔父や息子に祭りごとを任せているという事は、ハリハールブダンは……

「ハリハールブダン様は王族なのですか？」

「ハリビヤルニ王の長子だ」

「長子！　では、次代の王ですね」

「違う」

右手で橇の手綱を握ったまま、ハリ族の戦士は左手で己の左目を

指した。黒い眼帯で覆われた左目を。
「我々の掟では『欠けたる者』は王になれぬ。神に仕える資格が無いからだ。片目の俺は生涯、王に仕える戦士長、気ままな身分だ。新王朝の監視も俺にはつかん。俺は王にはなれない体だからな」
ハリハールブダンは快活に笑った。
「新王朝庇護下の王！　傀儡の王！　なりたくもないがな！」
「今、アジャンと行動を共にしているアジの戦士達は、『極光の剣』をアジャンが手に入れればケルティ新王朝を転覆できると信じているようなのですが……」
セレスはためらいがちに尋ねた。
「そんな事、可能なのでしょうか？　『極光の剣』が凄まじい破壊力のある聖なる武器なのだとしても……大剣は大剣です。アジャン一人では一国の軍隊に勝てません」
「『極光の剣』を武器として使うのなら、むろん、そうだ。だが、祭器として使えば話は別だ」
「え？」
「ハリとアジの祖は兄弟だった。ハリとアジは同一の神を頂く一族。古の時代、この地を統べていたのは我らだ。我ら二部族はケルティで最も古い一族。神より、ハリは知恵を賜り、アジは武力を賜った。ハリとアジが心を一つにし、各々の一族に伝わる祭器をもって願えば、神が再臨し、邪悪を討つ……そんな口承が伝わっている。単なる言い伝えかもしれぬ。だが、アジクラボルト様の長子はそれに賭ける気なのだろうな」

「アジャンがそんな事を考えているのだとしても……それにはハリの協力が必須なのですよね」
セレスはぎゅっと拳を握り締めた。
「ハリの意志はどうなのです……？　あ、いえ、ハリハールブダン様自身はどう、思われます？」

トナカイ橇を操るハリ族の戦士の背に向かい、女勇者は尋ねた。
「アジとハリの祭器を揃えたいとお思いですか？　部族神を召喚し、ケルティ新王朝を滅ぼしたいと……そう願われますか？」
「フッ、くだらぬ！」
隻眼のハリ族の戦士は、軽く頭を振った。
「既に五十年前に、その話の決着はついているのだ。当時のハリとアジのシャーマン王が決めたのだ。地上の争いは人間の責において行われるもの。神にすがるべきものではない。シベルアからの侵略者には、戦士の誇りをもって人間が己が力で戦うべきだと」
「……そうだったのですか」
「あの時、ハリとアジは滅びの道を選んでしまったのだ。今更、祭器を揃え神を召喚したとて、手遅れなのだ。ハリとアジ両部族はそう遠くない未来に消える」
「え？」
「セレス殿……先ほど、村をご覧になって気づかれなかったか？　若者や子供がほとんど居ない事に」
「あ？」
セレスは口元を覆った。見かけたのは老人と老婆に、中年女性だけだったが……
「子供は八つになると、新王朝の役人に強制的に近隣の街に集められ、シベルア式学問所の寮に入れられる。義務教育とやらは十二の年に終わるのだが……シベルア式教育に染まった子供は村に戻ってこない。ハリを捨て、ケルティ新王朝の民となり街で生きる道を選んでしまう。学問所で斡旋されるままに、街で仕事に就いてしまうのだ。ハリの誇りよりも、便利で小綺麗な街の生活の方が子供達には魅力的なようだ」
「……」
「いずれハリの血は絶える。いや、ハリだけではない。今、残っている十二の部族、その全てが滅びるのだ。継ぐべき子らを失って、な」

「……」

「『欠けたる者』は学問所に行く義務を免除されるので、身障者を装う若者や子供がわずかながら村に残っている。だが、軍隊と渡りあえる数ではない。神降ろしをしケルテイ新王朝を倒せたとしても、ハリに統べるべき民はいない。未来はない。ハリの栄光は、もはや過去のもの。我らはもう昔日には戻れぬのだ」

「……新王朝に迎合しろとは言いませんが」

ハリ族の戦士の背を見ながら、セレスは思いついた事を口にのぼらせていた。

「シベルア式文明を受け入れつつ、ハリの精神を貫く事はできないのですか？」

「どうやって？」

ハリハールブダンは鼻で笑った。

「新王朝は我らの文化を蔑視している。我らの神を否定し、自然と共にある我らの暮らしを貧しいと嘲笑う。俺に言わせれば、奴らは恐れを知らなさ過ぎる。満ち足りる事を知らず、自分たちの都合のいいように森を切り開き、自然を支配しようとしている。我らとは異質すぎる」

「でも、ハリ族から新王朝の民となった者には、表面はどうであれ、ハリの魂が受け継がれていると思います。ハリの子供達は、ハリと新王朝、両方に帰属しているのではありませんか？」

「……さて、どうか」

「いいえ、きっとそうです。古えにはもう戻れないのだとしても、新たなハリならばつくれます。ハリ族の前には滅び以外の未来もあります。未来は一つではないのです。状況さえ変われば、あなた方と新王朝が歩み寄る事だって可能ではありませんか？」

「状況が変わる？　どんな風に？」

「新王朝があなた方の自治を完全な形で認め、信教の自由を保障すれば……」

「……」

しばしの沈黙の後、ハリの戦士は声をたてて笑った。
「ありえぬ話だ」
「いいえ！　ハリハールブダン様！　この国は生まれ変わらなければいけません！　神の手によってではなく、人の手によって！　その為に微力ながら、私もお手伝いいたします！」
あまりにもセレスが決然と言い切るので、ハリ族の戦士は肩越しに頭だけ振り返り……そして、目にした、煌くような青の瞳を……何ものも恐れない勇者の顔を……
「この国では、今、魔族が暗躍しています。魔が人の悪感情を煽り、目を曇らせているのです！　魔を滅ぼし、人々の心に希望と善の意識を取り戻させましょう！」
しばらく、その美貌はまぶしげに見つめていたが、ハリハールブダンは右目を細め、顔を前方に戻した。
セレスの言葉など、この国の現状を知らない異国人のたわごとに過ぎない。
けれども……彼女の純粋な正義感は不愉快ではなかった。
森を抜けると、視界が開けた。
雪野原の先に、木造立ての建物が固まっているのが見えた。ハリ族の北の集落だ。ハリハールブダンの農場で、彼の息子や親戚筋のシャーマンの才がある者が固まって暮らしている。
「……おかしい」
目を細めて農場を見て、ハリハールブダンはトナカイに鞭をくれ、先を急がせた。
「何がおかしいのです？」
「煙が無い。この季節、暖炉の火を絶やすはずはないのだが」
セレスも身を乗り出し、遠方をみやった。
その横で、老忍者ガルバの目配せに頷き、東国の少年シャオロンは背の革袋より『龍の爪』を取り出し装備した。
もう間もなく、橇は北の集落に着く……

極光の剣　１１話

一方、ホルムの王宮では……

「まあ、これからシベルア教大司教様とお会いするの？　良かったわね、ナーダ、待った甲斐があったわね。大魔王が復活した時の事や、その時、大司教様達尊き方々がどうやって魔を撃退したか、う～んと、お話を伺って来てね」

「はあ」

「心配しなくても、私なら大丈夫よ。シャオロンもジライも側にいてくれるし、アレクセイ様達近衛の方々が護衛してくださっているから」

顎の下で両手を組み、首をやや傾げ、口元ににっこりと笑みを浮かべたのは……襟の高いネグリジェを着た金髪の美少女……目の病の為に巻かれた包帯も痛々しい、女勇者セレスだ。病で伏せている為に髪は束ねず、肩より腰へと流れている。寝台の背もたれに体を預けて座る姿も頼りない。

「セレス様は私どもにお任せください」

そう言って胸を張ったのは、近衛少尉アレクセイ。やや鷲鼻ぎみだが整った顔立ちの、金髪の青年将校だ。

セレスに淡い恋心を抱くこの近衛仕官は、彼女が目の病に伏してから過剰なほど騎士道精神を発揮している。静かに休みたいと望む女勇者の為に、できうる限り見舞い客を断ってくれる有難い面もあったが……用が無くなっても部屋に居座る彼は、はっきり言ってナーダには邪魔だった。寝台の上の愛しい人と二人っきりになれないし、秘密の打ち合わせができないからだ。

「それよりも、ナーダ、あなたの方こそ粗相をしないように気をつけてね。大司教様に失礼があってはいけないわ。ガルバさんが心配

するようなことは絶対にしないでね」
護衛役を連れて行けと言っているのだ。ナーダは溜息を漏らした。
「わかりました、セレス、お行儀の良い召使を連れてゆきますよ。ムジャとヤルーにします」
「その二人なら安心だわ、気をつけて行って来てね」
セレスの姿でセレスの声で媚を売るように微笑む相手を、ナーダは複雑な思いで見つめた。この十日ほどの間に化粧の匂いが苦手なことも知られてしまったし、相手はナーダが女嫌いだともともと知っている。
なのに、事あるごとに、セレスの姿で愛想を振りまくのだ。ナーダが鳥肌立てて嫌がっているのをわかった上で、めいっぱい女らしくふるまってからかっているわけだ。
（M趣味のくせにSなんだから……）
惚れた相手への文句を飲み込み、武闘僧はセレスの寝室を後にした。

「セレス様、今日こそ温室かサロンにいらっしゃいませんか？　お目がご不自由でお辛いでござりましょうが、ベッドにばかりおられてはお体に障ります」
古語交じりの共通語で話しかけてくるアレクセイに、セレス役を演じている者も共通語で返した。
「すみません、アレクセイ様……めまいがするんです。休んでもよろしいかしら？」
「ああ！　ええ、どうぞお楽に」
寝台に寝そべる者に、アレクセイは尋ねた。
「セレス様、昨日の話、考えていただけましたか？」
「昨日のお話？　何だったかしら？」
「ケルティ一の名医の診察を受けていただけませんか？　間もなく十日です。ナーダ様の医師としての腕を疑うわけではありませんが、

一度、専門医に診ていただいた方が」
「アレクセイ様、そのお話でしたら、昨日、お断りしたはずですわ」
「ですが」
「アレクセイ様、私の失明は、ただの病ではありません。魔族との戦いでの負傷が原因、つまり呪いの一種なのです。お医者様では治せません。私が私の信心をもって祈りを捧げ、奇跡を待たなければいけないのです。未だに治らないのは、私の信心が至らないからでしょう」
「そんな！」
「アレクセイ様……神に祈りを捧げたいのです。席を外していただけませんか？」
女勇者の願いに、近衛少尉は従った。シベルア教徒の自分が側に居ては、祈りに集中できまいと思って。
「又、参ります……」
扉が閉まり、靴音が遠ざかっていくのを確認してから、寝台の者は上体を起こし、両手を組み合わせエウロペ式の祈りの型をとった。
その姿勢で、周囲の気配を読む。隣の居間にはジライ役とシャオロン役の忍者、召使用の部屋にくノ一が二人、この寝室を覗き穴から覗く監視者が二人、いつも通りだ。妖しいところはない。
（シベルア教大司教……ついに動いたか。ホルムの宗教区画には強力な結界があって中が覗けぬとムジャ達が言っていたな……あそこそが大物魔族の隠れ処やもしれぬ。大司教も果たして人かどうか……ナーダと忍二人では危険かのう？）

ターバンまで白で統一した姿に、両手両脚の神獣の装甲。王族の装いでナーダは、二人の忍者を伴って王宮内にあるシベルア教会に向った。
そこで十一半時から三十分ほど、大司教と面談の約束をしているのだ。

病に伏せているとの理由で女勇者一行との面談を拒否し続けていた大司教も、今日は王宮に来ている。本日一時より大聖堂で行われる特別ミサの為だ。聖誕祭準備の為に毎年この時期に行われる儀式で、そこで大司教が神の国の話をするのが恒例となっているのだ。

普段はホルム北部の宗教区画――大聖堂・鐘楼・大修道院、神学校が並ぶ区画で神事に身を捧げている大司教に、ナーダは毎日のように見舞いの手紙を送り続けていた。見舞いにかこつけた面談の催促ではあったが、多少の効果はあったようで、昨日、返事がきたのだ。ミサの準備があるので長時間は無理だが、お話を伺いましょう、と。意外なほど、あっさりと面談の約束はなった。

王宮の敷地は半ば以上常緑樹の森で、そこに、離宮、教会のほかに劇場や美術館、軍隊の詰め所、裁判所、造幣所、倉庫などの巨大な建物が建物があり、そのほとんどの回廊や渡り廊下で繋がっていた。

非常に複雑な造りなのだが、シベルア教会が他に埋もれることはない。教会の屋根が『ねぎ坊主』と呼ばれる火焔を象った独特の形をしているからだ。雪の重みで屋根が壊れないよう、雪が落ちやすい形に設計されているのだ。その個性的な屋根のおかげで、かなり遠所からでも教会の位置はわかった。

ナーダは屋根つきの渡り廊下の窓から、教会の白壁と赤い『ねぎ坊主』の屋根を見つめた。外観の美しい、厳かな雰囲気の教会だ。大聖堂には三百人を収容できるそうだ。

しかし……眺めているうちに、ナーダはぞくっと背筋が寒くなった。ナーダは僧侶ではあるが霊感はなく、神秘を見通す眼も持っていない。しかし、職業柄、黒の気には敏感なのだ。

「居ますね……これは」

主人のつぶやきに、その背後を行くムジャが神妙な顔となった。ムジャは中肉中背、黒髪黒目、美醜とは縁のない平凡な顔立ちをしている。だが、忍である以上、他に埋もれてしまう目立たぬ顔はむしろ美点であった。忍者としての技量もガルバに次いでおり、ナー

ダの部下のナンバー・ツーだった。それゆえ、ナーダは彼をアジャンの召使役にあてていた。アジャンを監視する為だったが、監視対象が出奔している今、その任務からムジャは離れている。

もう一人の部下のヤルーは大柄な男あった。茶色いカツラや付け髭、化粧で違う顔をつくってはいたが、顔立ちも体格もナーダに良く似ている。ナーダの為の影武者用忍者なのだ。

二人は、ガルバより主人を守るようきつく命じられていた。彼等インディラ忍者は主人の影、いざという時には己の命を盾として、主人を守る覚悟をもって生きているのだ。

大聖堂に足を踏み入れた途端、ナーダの全身の気が総毛立った。小さな明りとりから差し込む雪明りと、所々に置かれた燭台の蝋燭の炎が、薄闇を照らしている。

大聖堂の中に人影はない。大司教達がミサの準備をしているはずなのだが……

身廊天井が高い為か、建物はがらんとしている。ナーダは視線を正面入口の聖像画が描かれた壁へと向けた。信者達の会衆席と祭壇のある深奥部の至聖所を隔てている壁だ。

大聖堂は何処も魔の気に満ちていた。特に最奥部が最も邪悪な気が濃い。正体を隠す気がないのか、隠しきれぬほど敵が強大すぎるのかはわからなかったが、これほどねっとりと濃い黒の気に包まれているのだ、建物の中に人と呼べる者は残って居まい。

「ムジャ、ヤルー、私の側を離れてはいけませんよ」

ナーダが浄化魔法を唱え始めると、塩が引くようにさぁぁぁっと黒の気が至聖所を目指し逃げ行く。浄化の光を恐れているのだ。唱え終えた聖なる力を右の拳に宿らせ、ナーダは左手の指輪を頼りに自身と部下を包み込む形で結界を張り、声を張り上げた。

「私をこんな所に招いて、罠を張ったつもりなのですか？　ですが、この程度の黒の気ではインディラ教次期大僧正候補を殺せませんよ」

大聖堂にナーダの声が響き渡る。
人の居ない寒々とした空間を睨み、ナーダは叫んだ。
「あなた、相当、高位の魔族でしょう？　ゼグノスとかいう奴ですか？　四天王最後の？　イグアスはあなたが大魔王一の家来と言っていましたが、疑わしものですね。あなた、サリエル、ウズベル、イグアスより弱いんじゃないんですか？　奥に隠れて縮こまっているなんて、みっともないですよ」
至聖所の前の壁へと目を留め、ナーダは敵を挑発する言葉を選んだ。魔族は今世では何かに憑依して具現化している精神的な存在の為か、言葉による敵意や侮辱に過敏に反応する。おびき出すには、相手のプライドを刺激する言葉ほど効果がある。
「まあ、もっとも、私、強すぎますものね。異国の地であっても、我が神は我が信仰と共にこの地におわします。下級魔族に毛が生えた程度のあなたに、私を恐れるなと言っても無理でしょうね。あなたなど、しょせん、雑魚ですから」
唐突に……ナーダの目の前に黒の気の塊が現れた。移動魔法で現れたのだ。豪奢なシベルア司教のローブをまとった、それは、人の形をした、黒い煙の集合体だった。血も肉もない、黒の気のみの存在……
これが大司教なのだろうか……？　魔に憑依されて人の心を失った聖職者のなれの果てなのか？
《我が名はゼグノス》
ゆらゆらと司教の服が揺れ動く。
黒の気を撒き散らしながら、人の形をとっているものが思念を伝えてくる。
《口ばかり達者な僧侶よ……古えの時代より我らと争い続けたモノを神と信じ仕える愚かな盲目者よ、きさまを選んでやろう》
「選ぶ？」
《間もなく宴が始まる……この国を血で彩る宴が、な。インディラ僧……きさまに見届けさせてやる、この国が滅びゆくさまを……女

勇者の死を……深き絶望を味わいながら見届けるがいい》
「何をたくらんでらっしゃるのかは知りませんが」
背筋を伸ばしたまま、ナーダは両膝を曲げて腰を落とし、拳を構えた。
「我が信心をもって、あなたの野望を阻止します」
まずは逃がさぬよう敵の周囲に聖なる結界を張って、動きを縛る。と、同時に床を蹴り、聖なる光が宿る右手をもってナーダは魔族の体を貫いた。
一握の塩を残し、人を象っていたものが消える。
けれども……
《人間ごときに、何ができる?》
大聖堂に魔族の哄笑が響き渡った。
《我が名はゼグノス。ケルベゾールド様に最も近しい魔。人では我が力、浄化しきれぬ。人が人である限りな》
ナーダは眉をしかめた。
異次元の存在である魔族は、この世々に存在する為に何かを寄り憑代にして姿を現す。人、動物、草木、岩石、水……。その憑依物を失えば、魔族は現世との接点を失い、魔界に強制的に戻されるはずなのだが……憑依物を浄化したのに、ゼグノスは消滅しなかったのだ。サリエルのように、緊急時にのり移れる体を別所に所持しているのだろうか?
《我が宴を楽しまれよ》
浮遊感覚。
ナーダは、急ぎ、部下をも包み込む形の結界に物理防壁も付加する。
落下してゆく感覚。
足元の床が無くなったのだ。
何処までも果てしなく続く闇の中に、ナーダは落ちていった。
《宴の見届け役は誰でも良かった。きさまを選んだ事に理由はない。しいて言えば、きさまが憎々しい僧侶である事が理由か。その目で

見届けよ……愛しい者が死にゆくさまを……きさまを愛し仕えた者の末路を……庇護すべき者のみじめな最期を……新たな生を得て黒き殺戮者となる友を……人間どもの希望がぶざまに散りゆくさまを……。そして、絶望と恐怖の中、息絶えるがいい。我が名はゼグノス。大魔王四天王が一人……》

「シャオロン、ジライ」

セレスの声色で呼んでも答えはなく、居間に居るはずの二人の忍者が気配が感じられない。

「マリー、ローラ」

召使部屋にいるはずのくノ一も同様だ。忽然と姿を消してしまった。移動魔法で運ばれてしまったかのように。

そして、周囲は……

殺気に満ちていた。

一人二人のものではない。数知れぬ敵が武器を片手に、この部屋を目指している。

「！」

忍者ジライはすばやく体を起こし、掛け布団を高々とはねあげた。

ズブッ！　ズブッ！　ズブッ！　と、四方から迫る刃が布団を貫く。その内のものを貫かんと。

剣を手にした者は四人。四人の暗殺者は、しかし、次々に悲鳴をあげて倒れていった。跳躍して刃を避けた者が、布団の下に隠し持っていた『小夜時雨（ムラクモ）』を抜き、風のように彼等の間を駆け抜けていったのである。

部屋に血と水飛沫が舞い、暗殺者達は絶命した。

だが、間髪を置かず、周囲から刃が迫る。又、暗殺者が現れたのだ。

（チッ！　移動魔法か！）

敵は移動魔法で暗殺者を送ってきているのだ。

（十……いや、十一か、くっ、数が多すぎる……）

常であれば十一人に囲まれても切り抜ける自信はあった。だが、ジライは、今はセレスの変装をし、両目を包帯で覆っているのだ。状況がはっきりするまでは、セレス役を演じ続ける義務がある。当然、忍法は使えないし、包帯を取るわけにもいかない。

（こやつら気が黒い……だが、瘴気が薄いな。魔に堕したのではなく、魔に操られておるのか？　いずれにしろ、黒の気が相手ならば……）

ジライの愛刀『小夜時雨（ムラクモ）』。振る度に浄化の水を散らす聖なる武器だ。ジライはいつもより『小夜時雨（ムラクモ）』を大振りし、わざと浄化の水を周囲に撒き散らした。

「う！」

「ぐぉ！」

「ひぃ！」

斬るまでもない。浄化の水を浴びせれば、殺気は消えてゆく。魔族に呪縛され、操られていた者は自由になったのだ。ある者はその場に倒れ、ある者は塩となって崩れ落ちているようだった。

「セレス様ぁぁぁぁぁ」

背後から鋭い突きが迫る。その剣をジライは跳躍して逃れたのだが、敵は上段・中段・下段と攻撃を切り替えて巧みに連続攻撃をしかけてきた。

「セレス様……おっ、お逃げ、ください。体が……勝手に……」

襲撃者は苦しい声を絞り出した。その声は近衛将校アレクセイのものだった。

（セレス様に不埒な欲望を抱く身の程知らずの阿呆と見下しておったが……こやつ、思ったより出来る）

ジライは『小夜時雨（ムラクモ）』で宙を切り、浄化の水をアレクセイにかけて黒の気を祓うと、彼が倒れる前にネグリジェから取り出したものを床に投げつけた。

ボン！と、広がる黒い煙幕。

もくもくと上がった黒煙が室内を充満する。誰彼の区別がつかなくなった黒煙の中、襲撃者達は咳き込み、涙を流す。

その黒煙が引いた時には……

寝室に女勇者の姿はなかった。

「ハリレーレク叔父上！　ハリハラルド！　ハリグレチル！　ハリコルベイン！」

ハリハールブダンの声が、建物の間に響き渡った。家畜小屋から牛や馬のいななきは聞こえる。だが、誰一人、ハリの戦士長に答えを返さないのだ。農場には、彼の親族達と息子ハリハラルドが居るはずなのだが。

櫓から飛び降りたハリハールブダンの後を、セレスとシャオロンが追う。老忍者は周囲の気配を読み、彼等と違う方向にすばやい体術で移動して行った。

炉のある館、炊事小屋、納屋、穀物倉……どこも普段通りだ。家畜の数にも変化は無い。何気なく何処からか人が現れそうな雰囲気はあるのだが、何処にも人の姿がない……

「ここには何人いたんですか？」と、セレス。

「奴隷を含め二十人だ。先週、様子を見に来た時は、何事もなかったのだが……」

ハリの戦士は必死の形相だった。この農場には、王に代わって部族神を祭るシャーマンとシャーマン候補の子供達がいた。彼の惣領ハリハラルドも居た。ハリの心臓部が消え失せてしまったのだ。

全ての建物を回った後、ハリハールブダンは炉のある館の広間へと戻った。火の絶えた炉の側を通って、北側の主人の席へと急ぐ。

席の背後には、彫刻つきの高い柱が聳えていた。彫刻の模様を器用になぞりながら、隻眼のハリの戦士は呪文を唱えた。柱の一部が抜けた。からくり式の引き出しのようだ。柱の引き出しの中を覗き込み……ハリハールブダンは低いうめきを漏らした。

「無い」
「どうなさったのです？」
問いかける女勇者に、ハリハールブダンは絶望に染まった顔を見せた。
「ハリ族の祭器が無い……部族神より賜った『知恵の指輪』が無いのだ……父ハリビヤルニがここに隠していたのだが……」
「え？」
「我らは神との契約の証を失った……」
体を小刻みに揺らし、ハリの戦士は頭を抱えた。
「誰だ？　誰が盗んだ……？」
その顔は蒼白になっていた。
「……新王朝か？　偽王の軍隊が我が一族の祭器を奪ったのだろうか？」
「違いますよ」
そう言ったのは、『龍の爪』を装備した少年だった。ハリの戦士と女勇者の注目を浴び、少年は少しうろたえた。が、それでもどうにか自分の考えを述べることができた。
「だって……この農場のハリ族の方達って、部族神を心から信仰しているんでしょ？　新王朝の軍隊が攻めて来たって、一族の祭器を簡単に渡さないと思います。でも、この農場、何処にも争ったような形跡はありませんでした。だから、新王朝の軍隊は来てないと思います」
「そうだ……その通りだ。ここを束ねていたハリレーレク叔父上は、誇り高いシャーマン戦士だ。己が体を切り刻まれようが、一族の者を人質にとられ脅されようが、新王朝に屈するはずがない」
「と、いう事は」
セレスは口元に手をそえ、首をかしげた。
「一族の方々は、ご自身の意志で集落を離れられたのかも……」
「何処へ……」
と、言いかけて、ハリハールブダンはハッ！と息を呑み女勇者と

目を合わせた。
ハリ族の祭器を持ってハリのシャーマンが失踪したのならば……
今、赴く先は一つしかない。
もう一つの祭器が眠る場所だ。
『極光の剣』を受け継ぐ新たなアジの王と共に……
ケルティ新王朝を滅ぼすべく……
この地上に部族神を降臨させる気なのだ。
「馬鹿な……」
ハリハールブダンは憤りを壁にぶつけた。
「時代はもはやハリに味方しておらん！　今更、神を降ろしたとて手遅れなのだ！　ハリには率いるべき民など、ほとんど居ないのだ！　叔父上の目は、現実が目に見えぬほど、憎悪に曇っておられるのか！」
「思い出しました……私の仲間が言っていました、アジャンに一族の元へ戻るよう説得していた者の中にはアジの戦士の他に、共通の部族語を持つ近しい一族ハリの者もいたって……。ハリの一部の方は、アジャンに『極光の剣』を継がせたかったんですね」
女勇者が思いつめたような顔で、顔の前で両手を組み合わせ、願いを口にする。
「ハリハールブダン様、アジャンを止めたいんです。私は『極光の剣』が眠る洞窟まで行かなければいけません。今すぐそこに行く方法はありませんか？」
床に目を落とし、ハリの戦士はかぶりを振った。
「ハリレーレク叔父上以外に、ハリに移動魔法の使い手は居らん。ここからアジの聖域の森まで、どんなに急いでも四日かかる」
「それでは、間に合いません」
セレスは頭を垂れた。
「アジャンが死んでしまいます。彼は部族神への信仰を失っています。『極光の剣』に触れれば神の怒りを買うわ」
「失踪している間に、再び信仰に目覚めたかもしれない」

「……それはないわ」
「そうか？　だとしても死ぬ事はあるまい。ハリとアジの人間、二つの祭器が揃わなければ神は召喚できぬのだ。ハリレーレク叔父上が何としてもアジの惣領を守るであろう」
「人間が？　人間が神の怒りを防げるとでも？」
「今の叔父上ならば、おそらく、できる。叔父上は父ハリビヤルニに次ぐハリのシャーマンだった。神をその身に降ろすことも、精霊の声に耳を傾けることも、あらゆる魔法を使うことも、叔父上ならばできた。その上に、今、『知恵の指輪』を持っておられる。その魔力は人の器を越えているはず」
「では、ハリの祭器の指輪は……」
ハリハールブダンは頷いた。
「魔力を増幅させる魔法道具（マジック・アイテム）だ。装備者の魔力が高いほど、その効力も大きくなる。今、この地上のどんな魔法使いよりも……叔父上はお強いだろう」
「でも……大剣に触れてもアジャンが無事なのだとしても……私、行かなきゃいけないんです！　夢の中でアジンエリシフさんが必死に叫んでいたんです！　行ってはいけないって！　私が彼を止めなきゃ！」
「しかし……」
術（すべ）はない……後に続く言葉をハリの戦士が言いかけた時、外から火薬が破裂する音が響いた。
「ガルバさん？」
真っ先に外に飛び出したのは、東国の少年シャオロンだった。ナーダの部下の老忍者は周囲を探っていたはずなのだが……
シャオロンの視界は雪に覆われた。この集落に来るまでは晴天だったのに、雪嵐が吹き荒れている。風が肌に突き刺さる。冷たくて痛い。
開ききれぬ眼で周囲を見渡すと……建物と建物の間の雪道にガルバが倒れているのが見えた。老忍者は両手両足を奇妙な角度に曲げ、

雪の上を赤く染めていた。
「ガルバさん！」
走り寄ろうとしたシャオロンを……
風の魔法が切り裂いた。
全身から血飛沫を舞わせ、東国の少年も、力なく雪の上に崩れ落ちた。
「シャオロン！」
仲間の元へ駆け寄ろうとする女勇者を、ハリの戦士が背後から抱き止める。
「外に出るな！」
「でも、シャオロンとガルバさんが！」
「外に出れば、おまえも餌食だ！　だが、この内にいる限り、魔法は届かぬ。この集落の建物には部族神のご加護がある。部族神より賜った魔力では傷一つつけられぬ。シャーマンゆえに身につけられた攻撃魔法も、無効となるのだ」
「え？」
ハリの戦士は扉まで進み、外に吹き荒れる雪嵐を睨みつつ声を張り上げた。
「ハリレーレク叔父上！　お名乗りくださらなくとも、魔力でわかります！　その雪嵐も風も、叔父上の気に満ちています！　姿を見せてください！　何故、我々を襲うのです？」
《その女を『極光の剣』に近づけてはならぬ》
セレスとハリハールブダンの頭に、声ではない声が届いた。思念波だ。
《その女は神の降臨を阻む存在……偽王に愛されておる邪悪な女だ……殺さねばならぬ……魔族を操り、何度となくその女を襲わせたが……思いの外、しぶとくてな……殺せなかった……だが、もう時はない……森の結界が解けたのだ……わしの魔力とアジの新王の力に、結界の魔力がついに屈したのだ……後は、アジの新王を剣の元へ導くだけ……もう時間がないのだ。その女を外に出せ……わしが

殺す。一族の栄光を取り戻す為に》

「叔父上！　我が息子ハリハラルドは何処です？　従兄弟のハリコルベインは？　甥達は一体、何処へ？」

《皆、わしに共感し賛同してくれた……ハリの戦士として、戦いに身を投じたのだ》

「何？」

《ハリハールブダン……その女、おまえが殺してもよいぞ……その女を殺し、おまえも共に来い……その偽りの眼帯を外して、ハリの真の王となれ。おまえは臆病な我が兄ハリビヤルニとは違う……シベルアを恐れ、新王朝に屈している兄とは違う……偽王に従う事を厭い、おまえは左眼を潰す演技をして傀儡の王位継承権を捨てた……わしと共に来い……ハリとアジが再びこの地を統べるのだ……》

「この地を統べる？　民の存在しない土地を統べろと言うのか？　叔父上！　ハリの子供の多くは一族の復興など望んでいない！　都会に住み着いたあの子らに、ハリの生き方など、もうできぬ！　時代は流れてしまったのだ！　ハリは古えの栄光には、二度と戻れぬのだ！」

《ハリハールブダン……それがおまえの本心か？》

「そうだ！　俺はハリの誇りを貫く。だが、新しい時代の子等に、ハリの生き方を強要する気はない！　違う道を行く者に、これが正義だと己の道を押し付けるものか！　すれば、新王朝の者どもと同じ恥知らずに堕ちてしまう！」

雪嵐の中に、稲妻が走った。悪天候を呼んでいるシャーマンの怒りが形となって現れたのだ。

《失望したぞ、ハリハールブダン……しょせん、きさまは、ハリビヤルニの息子に過ぎなかったのだな……》

稲妻が大地を貫き、えぐる。

セレスは悲鳴をあげた。落雷の衝撃に、シャオロンの体が舞い上がったからだ。少年の体は二度バウンドし、雪を散らせながら、地面の上を転がった。

「ぐっ！」
ハリハールブダンは身を二つに折り、低いうめきを漏らした。腕の中に守ってやっていた女勇者に、鳩尾（みぞおち）に肘打ちを食らわされたのだ。
「シャオロン！」
女勇者は雪の中に身を躍らせた。
「待て！　死ぬぞ！」
何とか彼女を捕まえようと、ハリの戦士は手を伸ばし……彼自身も、又、軒下から飛び出してしまった。

《さらばだ、我が甥よ》

天をも黄金に染める雷の魔法が……
豪雨のごとく……
わずかの隙間もなく……
地上に降り注がれた……

ナーダは両腕を組み、背後に二人の忍者を従え、闇の中に浮かぶ映像を見つめていた。
空も地面もない、闇ばかりが広がる異空間。その闇の中の所々に、人間界で起きている出来事が切り取られて映っていた。ナーダをこの空間に封じたものが見せつけているのだ。
王宮中の人間に追われるジライ。
虫の息だったガルバとシャオロン。彼等を救うべく外に飛び出したセレスとハリの戦士は、ガルバやシャオロンと共に雷の魔法に飲まれていた。
そして、暗い洞窟の中のアジャン。彼の隣には、白髪の老人がい

た。片手剣を佩いた戦士の出でたちだが、その左手にはきらめく黄金の指輪があった。魔法の波動を放つあの指輪が『知恵の指輪』なのだろう。老人――ハリレーレクは、目の前の鞘ごと岩に突き刺さった巨大な両手剣を探るように見つめていた。

「これが……あなたの宴なのですか？」

感情を殺し、ナーダは平坦な声を出した。

「意外とくだらない見世物ですねえ。言っておきますが、セレスは無事ですよ。あの程度の攻撃で死ぬようなヤワな勇者なら……とっくのとうに死んでいます。彼女は無事ですよ……」

根拠などない。だが、そう信じるべきだ。シャオロンも言っていたではないか、わからなくても信じる事はできると……

彼等の無事を信じるのだ……

《これからだ……これから、もっと面白い事が起こる……あの『極光の剣』が抜かれた瞬間に、宴が始まる。愚かな人間どもは宴に酔い、舞い狂うのだ……》

極光の剣　12話

目を開くと……

シャオロンの寝顔が見えた。少年は両の瞼を閉じ、やすらかな顔で、仰向けに眠っている。

シャオロンの向こうには、ガルバが居た。眠っているようだが、老忍者はいつも息を潜めているので判別がつきがたい。微かに寝息を立てているような感じはするのだが、いびきがうるさくて寝息が聞こえない。

いびき……？

誰の……？

「私……生きてるの……？」

醒めきれない頭で、いぶかしく思う。雷の魔法に襲われたはずだ。それに、シャオロンとガルバはひどい怪我をしていたはずなのに、穏やかな顔で眠っている。掛け布団をかけて。

「……布団？」

「お目覚めですか？　二人とも無事ですから、ご心配なく。あなたが眠っている間に癒しておきました」

ナーダの声だわ……

ナーダが助けてくれたのね……

そう思い、体を起こしたセレスは、まず自分が居る場所に驚いた。彼女もシャオロンもガルバも、湿っぽい地面の上に敷かれたジャポネ風の布団に眠っていたのだ。その上、天を隠すように周囲に聳えているのは竹なのだ。竹林の中に居るのだ。ケルティに竹林？　しかも、辺りには雪がない。

セレスの右側には、ハリ族の戦士ハリハールブダンがいびきをかいて眠っていた。

そして……

今まで足を向けて眠っていた方向には……

判読不可能な魔の文字で彩られた魔法陣があり……
魔法陣の中央には……
地面に届きそうなほど長い、夜の河のような黒髪の人物が居た。
右手に魔術師の杖を大事そうに抱え、黒のローブをまとい、女性のように美しい顔に微笑をたたえて。
「あなた様は！」
セレスの顔に笑みが浮かんだ。
「魔法使いのナーダ様！」
「お久しぶりですね、女勇者セレス様」
魔法陣の人物は、トゥルクでセレスの窮地を救ってくれた魔法使い、カルヴェルの知己だ。魔法使い本人が語った身の上話によると、魔法使いの体は何十年も前に魔族の魔法陣に囚われ異次元に封印されてしまったのだそうだ。カルヴェルの術によって影（精神？）だけこの世に呼び戻されているものの、不安定な存在の為、魔法陣ごと世界中を彷徨っているのだとか。
奇しくもセレスの仲間の武闘僧と同じ名前で、不思議な事に話し方や物の考え方まで武闘僧に似ており、声まで似ているのだ。だから、先ほどはナーダに話しかけられているのだと勘違いしてしまったのだ。
「あなた様が私達を救ってくださったんですか？」
「それは違います」
魔法陣の人物は、杖の頭をセレスの頭の先に向けた。
セレスは肩越しに振り返り、視線をそちらへと向け……驚いて背後へと向き直った。
セレスが眠っていた布団の先の地面には……『勇者の剣』が静かに横たわっていた。ホルムの王宮に置いてきたはずの『勇者の剣』が！　背負う為のバンドも鞘も共にそこにあった。
「女勇者様の危機を救ったのは、そこな魔法剣です。私は、ただ、癒しただけです。『勇者の剣』の移動魔法であなたと共に運ばれてきた怪我人を、ね。ああ、ついでに布団も物質転送魔法で運びまし

た、みなさん、気を失っていたので」
「『勇者の剣』が……」
移動魔法でセレスの元へ駆けつけ、防御結界で雷魔法を防いでくれ、そしてその場に居た者全てを移動魔法で魔法使いナーダの元へ送ってくれたのだ。怪我人を案じていたセレスの為に……
――『勇者の剣』は、持ち手が呼べば遠方より飛来し、持ち手が危機とあらば自ら魔法さえ使う、魔法剣じゃ。
カルヴェルの言葉が心に甦る。
助けてくれたのだ……『勇者の剣』が……
持ち手である自分を……
セレスの胸は熱くなった。
(ありがとう……)
セレスは感謝の気持ちをこめて鞘に収まった愛剣を胸に抱こうとして、かなわずその場にへたりと倒れてしまった。
(おっ、重い……)
『勇者の剣』の重量は最大となっていた。成人男性の中でもかなり体格のよい人間の重さ……カルヴェルにかけられた重量抑制の魔法の中でとれる最大級の重さなのだ。これほどとことん重たくなったのは久しぶりだった。
『勇者の剣』は話す事こそできないものの、思考能力や感情がある。しかも、好き嫌いが激しいかなりの気分屋らしい。今、『勇者の剣』は怒っているのだろう。
(ごめんなさい、『勇者の剣』……不用意に敵の罠にはまって……わざわざ雷魔法が届く場所に移動したんですものね、私。あなたが救ってくれなかったら、死んでたわ。考えなしの馬鹿でごめんなさい)
セレスは心からの謝罪を思いにこめ、地面から持ち上がりたがらない『勇者の剣』の鞘に額をつけた。しかし、剣の重量は変わらない。相当、怒っているのだろう。
「女勇者様、謝る理由が間違ってますよ」

明るい楽しそうな口調だ。振り返ると、魔法使いナーダが微笑んでいた。

「あ、すみません、ついつい、あなた方の心を他心通（テレパシー）で読んでしまったので」

「あなた方？」

「あなたと『勇者の剣』です。魔法剣の心は人間とは異質なのでちょっと読みづらいんですが、何となくわかります。その剣はですね……あなたに王宮に置いていかれた事を、ずっとず～と拗ねていたんですよ」

その刹那！

天より雷が落ちる。

雷が幾筋も走り、周囲の竹を次々に貫き、真っ二つに裂いていった。

セレス達の周囲には結界が張られているようで、竹の破片も火も飛んではこなかった。だが、まばゆい光は防げない。セレスは顔を伏せ、両目を閉じた。

遅れて、雷鳴と竹がはぜる音が響き渡る。

セレスは顔をあげ、眠っていた三人も音に驚きガバッと体を起こした。が、魔法使いがパチンと指を鳴らすと、三人はパタンと布団に倒れてしまった。眠りの魔法をかけられたのだ。

魔法使いは嘆息し、ほんの少し魔力を高めた。すると、周囲の火はたちどころに消えてしまった。

「顔があったら、あなた、今、真っ赤でしょうね。照れ隠しに雷魔法を連発するなんて、子供っぽいんだから」

魔法使いの視線は『勇者の剣』に向いていた。セレスの腕の中の魔法剣は、小刻みに振動していた。わなわなと震えている人間のように。

「素直におなりなさいな。女勇者様が愛しいのでしょ？　あなたが愛したラグヴェイの末裔……その血だけでも愛しいでしょうに、けなげで真面目で純粋で……女勇者様って可愛いですものね。あなた、

女は大嫌いだったけれども、もうセレス様が女でも構わないのでしょ？　ランツを失った後、あなたは十数年、孤独だった。誰のものにもなれず、主人の居なくなった部屋で過去を振り返り、思い出に浸るしかなかった……。でも、今は違う。女勇者様の物になれて嬉しいはずです。その気持ちを正直に表さないと、持ち手に伝わりませんよ」

セレスの腕の中で魔法剣はしばらく振動を続け、やがてぴたりと止まった。辞書一冊分の重量となって。

「女勇者様、あなたはその剣に愛されています。あなたが心から望めば、その魔法剣、あなたを何処へなりとも運んでくれますよ。仲間も一緒に連れて行きたいと願えば、その通りにしてくれます。今、居るのはシャイナの竹林ですが、瞬く間にエウロペだろうが、ケルティだろうが好きな所に跳べますよ」

「好きな所へ……？　じゃあ、アジャンの所へでも？」

「あなたが真剣に願い、仲間の居る場所を具体的にイメージできるのなら……」

セレスの脳裏に、夢で見た光景が甦った。夢の中でセレスは風となり、深い雪の森の中を走っていた。森の奥には洞窟があった。入口が不思議な文字が刻まれた大岩に塞がれている洞窟。アジャンはあの洞窟のそばにいる。鞘ごと岩に刺さっている大剣『極光の剣』を手に入れるべく。

「……できます」

「では、すぐに目的地へ行けますよ。女勇者様、あなたの剣は類い稀なる魔法剣なのです。その事を忘れてはいけません。敵を浄化する以外にも、もっと剣を使ってあげなさいな。求められれば、その剣、喜びますよ」

「剣が喜ぶ？」

「ええ。『勇者の剣』は勇者の為に存在しているのです。今はあなたの為に働くのが、剣の生きがいなのですよ。あなたが剣と心を一つにすれば、剣はあなたに応えるべく無限の力を発揮します。剣は

移動魔法を使えますし、防御結界も張れます。攻撃魔法も放てます。敵を弱体化する事と持ち手を癒す事やその能力を向上させる事はできませんが、それ以外の魔法は全て使えると考えて差し支えないです。勇者は地上最強の存在です。『勇者の剣』と心を一つにした時のランツは、それはもう、バカみたいに強かったですから。私とカルヴェルが二人がかりでも敵わないほどに、ね」

「え？」

「この地上の誰も、勇者と『勇者の剣』のコンピには敵いません。大魔王ですら、お二人の前では雑魚に過ぎないでしょう。剣を信じ、剣を愛しなさい。その愛に剣は応えます。道は開けますよ」

セレスはポカーンと口を開き、ニコニコとカルヴェルのように笑っている人物を見つめた。

「……ありがとうございます、魔法使いナーダ様」

「いえいえ。ただ、旅立ちの前に、一つだけお願いがあるのですが……」

「何でしょう？」

魔法使いは、セレスでも『勇者の剣』でもないものに、チラリと視線を走らせる。

「今日、私に会った事を内緒にして欲しいのです。あなた方のピンチを救った『勇者の剣』が、そこの重傷の二人も助けたって事にしてほしいのです。『勇者の剣』には治癒能力はないから……そうですね、『勇者の剣』がインディラ寺院に一同を運んでくれて、そこの僧侶に癒してもらったという事にしておいてくれませんか？」

「え？　どうしてです？」

魔法使いは、困ったように笑みを浮かべた。

「私にもちょっと複雑な事情がありましてね……あまり今世に介入すべきじゃないんですよ」

「はあ」

セレスは頷いた。

「わかりました、『勇者の剣』が全て助けてくれたんだって、シャ

オロン達には話します」
「すみませんね」
「いいえ、こちらこそご助力、ご助言、感謝いたします」
「シャオロン君達は移動魔法で運ばれれば、じきに目を覚まします。そういう風に、眠りの魔法をかけてありますから」
「はい」
「女勇者様、迷わず勇者としての道をお進みなさい。剣があなたを光へと導きます」
「はい！　魔法使いナーダ様もお元気で……」
セレスは腕の中の『勇者の剣』に、まず、もう二度と置いて行かないと詫びた。勇者として生きる自分は常に剣と共にあり、剣に恥じぬ生き方を選ぶよう心がける。
だから……
力を貸して欲しいと願った。
シャオロン達と一緒に、『極光の剣』が眠る洞窟に送ってもらいたい……
仲間（アジャン）を救う為に……共に戦って欲しい……
剣に、切にそう願った。
『勇者の剣』が魔法の波動を発する。
剣の発する魔法の力が、セレスや今は眠っている男達を、包み込んでゆく。
移動魔法で運ばれる前に、セレスの視界の端に寂しそうに微笑む魔法使いナーダが映った。魔法使いはセレスの左側で眠っている者――シャオロンかガルバを見ていた。
そういえば、何故、『勇者の剣』は魔法使いナーダの元へ一同を送ったのだろう？　魔法使いの口ぶりからすると、魔法使いは祖父ランツの事も『勇者の剣』の事も、よく知っているようだが……？
（まさか……）
ある疑念が生まれた。しかし、それを口にする間はなかった。すぐに、セレス達は魔法剣の力によって竹林から別の場所へと跳んで

しまった。

「アレクセイ様……」

声が聞こえる……

「アレクセイ様……お目覚めになって」

耳に心地よい可憐な声が聞こえる……

「教えてください、何があったのです？　どうして、私を襲ったのですか？」

近衛少尉アレクセイは、重たい瞼を開いた。

「セレス様……」

周囲は闇だったが、すぐそばに金の髪の乙女がいた。この十日、彼女の眼を覆っていた包帯が解かれている。美しいサファイアの瞳が、悲しそうにこちらを見ている。

「セレス様、お目が？」

「そんな事よりも教えて、アレクセイ様、一体何があったの？　何故、私の命を狙われたのです？」

「すみません、セレス様、私にも何が何やらわからぬのでござりまするが」

古語まじりの共通語で、近衛士官は答えた。

「突如、頭の中に声が聞こえたのでございます」

「声が？」

「『女勇者とその仲間を殺せ！』と、それだけが繰り返し……。最初は小声だったのですが、だんだん大きくなり、最後には耳元で怒鳴られているかのような大声となり、その言葉しか聞こえなくなったのです。『殺せ！』、『殺せ！』、『殺せ！』と。そんな命令に従うわけにはまいりません。頭を抱えて声に抗っていたですが、そのうち体が勝手に動き出して……ああなってしまった次第で」

「あなただけではなく、王宮中の人間が狂っていたわ。皆、武器を手に私を殺しに来てたの。料理人や女官までもよ。どうしてなのか

しら？」
「わかりませぬ。が、多分、皆、あの声に踊らされたのでしょう」
「アレクセイ様、その声が聞こえた時、何をなさってたの？　私の警護？」
「いいえ、その時間は私は休憩時間でしたので、王宮内の大聖堂に居りました。特別ミサの時間でしたし……大司教様は残念ながら病とのことでご欠席でしたが、聖誕祭の恒例のミサでございましたから、王宮中の多くの者が出席しておりました」
「ミサ……」
「司教様のお話を伺っていました」

それやもしれぬな……

「え？　セレス様、今、何かおっしゃいました？」
「いいえ。でも、アレクセイ様、ミサに参加できる方って、ご身分の高い方々だけでしょ？」
「ええ、当然です。王宮内の教会ですから」
「料理人や女官とか……召使のケルティ人のシベルア教徒はミサの時間、どうしていたのでしょう？」
「むろん、仕事をしていたでしょう」
「彼等には大聖堂内の司教様のありがたいお話を耳にする機会すらなかったというわけですね？」
「はい。しかし、本日のミサは聖誕祭前の特別ミサです。神の恵みと祈りがこの王宮中に満ちるよう、司祭様方のお心づかいで、鐘や鈴が鳴らされました。その神の国の音色を聞けば、ミサに参加できなかった者も、祈りに参加した事と同じになりますゆえ」
「鐘の音……？　教会の鐘楼の？」
「ええ」

「鳴ったのですか？　今日？」
「はい。聞こえませんでしたか？　五分ぐらい続けて鳴っておりましたが？」
「聞こえなかったわ」
「さようにござりまするか？　では、眠っておられたのですね。セレス様のご寝室からならば、とてもはっきり聞こえたはずですから。王宮中が鐘の音に包まれておりました。鐘の音が届かぬ離れの建物内でも、司祭様達がその時刻に鈴を鳴らしてくださったはずです。皆が共に天の国の音楽を聞けるように」

忍者ジライは眉をしかめ、半睡している近衛少尉を睨みつけた。幻術にかかっている士官は、ジライではなく、幻のセレスを見つめていた。幸せそうに微笑んでもいる。

煙幕をはって暗殺者達から逃げる時、ジライはこの近衛少尉も共に運んでいた。情報収集の為だ。

アレクセイと共に屋根裏に移動してから、ジライは包帯を捨て、隠しておいた忍装束に着替えた。気絶していたアレクセイをその場に残し、忍の技で身を潜めつつ王宮中を渡り歩いたのだが……

王宮中の人間が狂っていた。

武器を手に練り歩く彼等は、甲高い声でヒステリックに笑ったり、挨拶するかのようにそこかしこで殺し合いを始めたりしていた。貴族対召使の対戦が多かったが、必ずしもそうではなく、貴族同士で互いを刺し合っている組み合わせもあった。

血みどろの争いは、どちらかが絶命すれば終わる。しかし、中にはどんなに斬られても血の一滴も流さない者もいた。残虐な衝動のまま対戦相手を切り刻むその者らは、もはや人ではなかった。黒の気の誘惑に己の心を明け渡したもの……魔人となり果てていた。

そして、嫌な予感は的中していた。扉や窓など外界と建物の境には、逃亡防止用の攻撃魔法が仕掛けられており、壁や床や天井には

結界が張られていた。トゥルクでハーレムに閉じ込められた時と同じだ。内側から外へ向けたあらゆる攻撃・魔法は全て結界にはじかれてしまう。

ナーダの部下のうち、ジライ役とシャオロン役の二人の忍の死は確認した。女勇者を狙い現れた暗殺者達に、殺されたのだろう。残りの忍は襲撃を受けた時に変装して難を逃れたのか……さもなくば王宮の他ののの人間同様、心の声に踊らされ、殺戮の輪に加わったのだろう。

逃亡の術（すべ）はなく、ナーダの部下達の行方はわからない。

ジライは来た道を戻り、ちょうど覚醒しかけていたアレクセイに幻術をかけた。セレスの幻を見せ、セレスの声で質問したのだ。セレスに好意を抱いている近衛将校の口は軽く、知っている限りの情報を教えてくれたのだが……

（鐘の音など、我には聞こえなかった……妙だな、我は眠ってはいなかったのだが）

ジライは何気なく体をかがめ……すばやく腰の『小夜時雨（ムラクモ）』を抜刀し、背後の空を斬った。刀身から雨が降る……

「きゃあ！」

神秘の水を浴びた者が、ばったりとその場に倒れた。くノ一のローラだ。その体に巣くわせていた黒の気を浄化された衝撃は激しく、ナーダの部下は意識を失っていた。

続いてジライは、その場で『小夜時雨（ムラクモ）』を振るい、四方より飛来する手裏剣を弾いた。

周囲に忍が潜んでいる。

ナーダの部下は全部で十二人、王宮に居た。死亡した二人、倒したローラを除いて、後九人。九人全員が敵に回っている可能性がある。ナーダと共にいるムジャとヤルーは乱心した場合、まずはナーダを狙うだろう。その二人をとりあえず除いて考えても、忍者は後七人。現在、ジライを取り巻いている殺気は四つ……

（殺すのなら易いのだが……）

北方諸国に居る間は、ナーダの忍を部下として使える。今後も手足として使える彼等を、殺したくはない。

と、なれば、手は一つだ。接近戦をしかけ、『小夜時雨（ムラクモ）』の浄化の水を浴びせて、魔族の呪縛から解放してやるのだ。

（真に魔に憑依され体を奪われたのならば、一握の塩を残し消滅する。だが、魔の瘴気にあてられ、操られているだけなのであれば……）

『小夜時雨（ムラクモ）』を右手に、ジライは狭い屋根裏を風のように駆け、己の命を狙っているインディラ忍者に刃を向けた。

極光の剣　１３話

移動魔法で運ばれた先は、雪に埋もれた森だった。
目の前に洞窟があった。が、その入口を塞いでいた大岩はない。
大小の岩の破片が周囲に散らばっているだけだ。武器で叩き割られたのではなく、魔法の衝撃波で砕かれた感じた。
暗い洞窟の先を見やっていた時……背後から殺気が迫った。
振り向きざまに、『勇者の剣』を振り下ろしていた。セレスの背を狙っていた矢が叩き落とされる。
しかし……
矢は次々に飛来する。
セレスと、倒れているシャオロン、ガルバ、ハリハールブダンを狙って。
剣技では、全員を守りきれない……
そう思った瞬間、結界が生まれていた。
皆を守りたいと願うセレスに『勇者の剣』が応えてくれたのだ。
目に見えぬ壁に阻まれ、矢は全て不自然な角度に折れ、威力を失い地に落ち行く。
セレスの横を突風が駆け抜ける。シャオロンだ。『龍の爪』から、竜巻を生み出しているのだ。衣服は所々が破け血に染まっていたが、怪我が癒えたその体の動きに衰えは無い。
「殺しては駄目よ、シャオロン！」
「はい、セレス様！」
竜巻が木々の陰に潜んでいた者を、飲み込み吹き飛ばしてゆく。
ハリ族の隻眼の戦士も剣を抜き、左右を見渡していた。飛来する弓矢が宙で折れる様を見つめ、周囲の雪景色に眉をしかめる。
老忍者ガルバは、なかなか体を起こそうとしなかった。眠そうな顔で蹲るように雪の上に座っている。彼の服も血に染まっていたが、もうその傷は治っているはず。老人は半ば閉じられた眼で周囲を見

渡し……ふっと消えた。すばやい体術で移動してしまったのだ。
「うっ！」
「ぐっ！」
木々の間から次々に悲鳴が響き……
やがて、悲鳴は途絶え、弓攻撃は止まった。
辺りもシーンと静まり返る。
「……ガルバさん？」
セレスの声に応えるように、顎の下をさすりながら老忍者が雪の森の中から現れた。
「襲撃者は全部で八。軽傷三、無傷五。全員、即効性の眠り薬で眠らせました。縛って連れて参ります」
老人の姿が、又、フッと消える。
全ての襲撃者を眠らせた？　あんな短時間で？　敵の目がセレス達に集まっていたとはいえ、虚をつけたからとはいえ、鮮やかな手腕だ。
「女勇者殿……ここは何処だ？」
ハリの戦士が問う。雪の上に散乱している矢を拾い、矢羽を調べながら。
「移動魔法だな？　誰が俺達をここに運んだ？」
「ここはアジ族の聖域の森の、『極光の剣』が眠る洞窟です。実は……」
セレスは『勇者の剣』の魔法に窮地を救われ、この洞窟に送られたのだと手短に説明した。
「矢羽からすると、襲撃者はアジ族のようだが……」
老忍者が、全身を毛皮で覆った老齢の戦士を連れて来る。気絶している。ハリハールブダンはその襲撃者の顔を見て、眉をしかめた。
「運ぶのを手伝う、他の者は何処だ？」
「あ、オレも手伝います」と、シャオロン。
老忍者の指示で襲撃者全員が洞窟前まで運ばれる。全員の顔を改め、ハリハールブダンは安堵とも不満ともとれぬあやふやな息を漏

らした。
「俺の身内はいない。皆、アジの戦士のようだ」
「アジの……」
「おそらく、こやつらは、王の試練を誰にも妨げさせまいと、ここを警護していたのだろう」
「王の試練？」
「シャーマンは地下に眠る部族神と対話し、試練を乗り越えて初めて王となる。アジ族の試練がどんなものか俺は知らんが……ここがその修行場の洞窟なのだろう？　ならば、ここに入れるのは次代の王たる者だけと決まっている。アジの戦士達は自ら外に残ったのだ。今世の王候補は神との対話なしに、『極光の剣』のみを手に入れようとしているのかもしれんが……それでも、分をわきまえ、王の為の聖域に足を踏み入れなかったのだ。ケルティ人として正しい選択だ」
　ハリハールブダンは溜息をついた。
「アジの聖域を、部外者が穢すべきでない事はよくわかっている」
　そう言ってから、ハリの隻眼の戦士は正面からセレスを見つめた。
「だが、俺は進みたい。女勇者殿、アジクラボルト様の息子の救出に、俺も参加させてはくれまいか？　叔父上はアジの次代の王と共にある。ハリの部族王ハリビヤルニの長子として、叔父上の企みを阻止したい」

　洞窟の中の風のこない場所に、眠っている男達を軽く縛って置いていった。眠り薬の効果は体質によって異なるが、三十分から二時間は目覚めない。王の試練の洞窟に運びこまれるのは彼等にとって不本意であろうが、外で寝かせていては凍死しかねない。
　老忍者ガルバは己の体を掌で何度もさすり、セレスに事情説明を求めた。『勇者の剣』がインディラ寺院に一同を運んでくれたので

そこの僧侶に治癒を頼んだのだとセレスが説明すると、何処の寺院です?と、質問をしてきた。『寺院の名前は忘れてしまったわ、どこだったかしら?』と、慌ててゴマかす彼女をジーッと見つめてはいたが、忍者はそれ以上は追求してこなかった。

洞窟の中は暗かったが、セレスが光を望むと『勇者の剣』が淡く発光し自らを明かりとした。魔法使いナーダの言葉の通りだ。セレスが望めば、剣は何でも応えてくれる。

――『勇者の剣』は勇者の為に存在しているのです。今はあなたの為に働くのが、剣の生きがいなのですよ。あなたが剣と心を一つにすれば、剣はあなたに応えるべく無限の力を発揮します。

どういう風に剣を扱えばよいのかまだわからなかったが、光となってくれた事に対してどうすればよいのかはわかった。セレスは心の中で剣に感謝を伝え、アジャンを取り戻す為に共に戦って欲しいと望んだ。

辞書一冊分の重量だった剣が軽くなる。空気のように。持っている事も忘れてしまうほどに。セレスは微笑みを浮かべた。

『勇者の剣』を抜いたまま下方に構え、鞘のみを背負い、セレスは洞窟の中を歩いて行った。ガルバが先行して様子を探り、次にセレスが、その後をシャオロンが続き、ハリ族の戦士が最後尾を務めた。

雪に埋もれた外とは異なり、洞窟の中はとてもあたたかかった。が、奥に進むにつれ、横幅は狭くなり、ハリハールブダンなどは身をかがませなければならないほど頭上の岩も迫ってきた。産道を思わせる細く長く暗い道は、一本道で、やや下降していた。一行はゆるやかな斜面を下り、洞窟の奥へ奥へと進んで行った。

洞穴の先に光が見えた時、最初、外に通じる出口に着いたのかとセレスは思った。

しかし、空気は濁っているし、外界の風も吹き込んできていない。それに、ずっと地下へと下りていたのだ、出口とも思えない。

ガルバは岩に張りつくように横歩きをし、洞穴の先を伺った。

「居りました……」

光を消すよう『勇者の剣』に願ってから、セレスも老忍者に倣って横歩きをし、そっと洞穴の先を見つめた。

そこはドーム状の広い空洞だった。かなり大きい。五階建ての建物が十軒ぐらい入りそうだ。

空洞を煌々と照らしているのは、宙に浮かぶ光の魔法球だった。魔法球の下に、横顔を見せる老戦士とセレス達に背を向ける赤毛の男がいた。とても大柄だ……その背に身長ほどもある大剣を背負っている。

（アジャン……）

走り寄りたい気持ちを、セレスは必死に抑えた。老戦士とアジャンは、アジャンの前にあるモノを見ているようだ。

「……叔父上だ」

何時の間にかハリハールブダンもシャオロンもセレスの隣まで来ていた。皆の視線が、空洞の光の下の二人へと向けられる。

ハリレーレクは、老齢のわりに鍛え抜かれた逞しい体つきをしており、剣を佩いていた。肩を過ぎる白髪と白髭、深い皺の刻まれた横顔、意志の強そうな茶の瞳……日の光のようにまばゆい魔法球を生み出したのは、ハリ族のシャーマン戦士のあの老人なのだろう。

「だが、ここに居るのは二人だ。我が息子ハリハラルドが居ない。従兄弟のハリコルベインや甥達も……」

ハリレーレクはシャーマンの才のある者を伴って村から消えている。この場にいないのなら、今、どこに？

「アジャンさん……」

シャオロンは食い入るように、赤毛の戦士を見つめていた。見えるのはその大きな背といつも背負っている大剣ばかりだったが。

《薄汚きネズミめが》

心話が聞こえると同時に、周囲に雷が走った。けれども、セレス達には傷一つつかなかった。『勇者の剣』が結界を張り、持ち手と仲間を攻撃魔法から守ったのだ。

光の下で老人が明らかに動揺していた。雷魔法の威力を高めても、結界が揺るがない。知恵を司る指輪を得て魔力を高めた彼に、女勇者一行は対抗したのだ。シャーマンの老人は甲高い叫び声をあげた。

「斬れ！　あやつらの狙いは『極光の剣』！　盗まれるな！」

その命令に従い……

背の大剣をすらりと抜いて振り返ったのは……

酷薄な笑みを刻み、口元を歪ませた……

赤毛の傭兵アジャンだった。

緑のはずの彼の瞳は、禍々しいほどに赤く染まっていた……

「アジャン……」

赤毛の戦士は、やはり魔族に憑かれていたのだ……

息を呑むセレスの横を……一陣の風のように少年が駆け抜けた。

『龍の爪』を装備した少年と、ゆっくりと歩み寄る赤毛の戦士は互いに距離を詰め、やがて立ち止まり対峙した。

「どけ、シャオロン」

常と変わらぬ口調で赤毛の戦士が、言葉短く言う。

「どきません」

東国の少年はにっこりと笑みを浮かべ、真っ直ぐに尊敬する戦士を見つめた。

「オレ、セレス様の護衛ですから。セレス様をお守りします」

「そうか……」

赤毛の戦士は剣を持たぬ左手でぼりぼりと頭を掻き、大儀そうに溜息をついた。

「なら……死ね」

己の身長ほどもある大剣を、アジャンは右手だけで振り回した。

けれども、刃が迫るよりも早く、シャオロンは高々と跳躍していた。大柄なアジャンの頭を飛び越え、空中で素早く爪を振るった。

爪から浄化の水が迸る。アジャンを目指して。

だが、振り向きざまに剣を振るう傭兵は、剣圧だけで聖なる水を斬っていた。

着地したシャオロンはすかさず爪より竜巻を生み出し、後方に飛び退った。しかし、竜巻すらも……傭兵は刃で切り裂き、少年へと迫る。

横転し、少年はその場から逃れようとした。だが、アジャンの方が早かった。少年の体を貫くべく、鋭い突きを放つ。

その攻撃を……

横から飛び出してきた大剣が阻んだ。

「！」

アジャンは後方に飛び、舌打ちと共に愛剣を投げ捨てた。彼の背ほどもある大剣は、刀身が折れ、使い物にならなくなってしまったのだ。

シャオロンを庇い、アジャンの攻撃を止めたのは『勇者の剣』を構えたセレスだった。岩をも粘土のように砕く『勇者の剣』が、アジャンの大剣を砕き折ったのだ。

「シャオロン、下がって……」

「いいえ、下がりません」

少年はかぶりを振って、セレスの横に立った。

「セレス様は『極光の剣』の元へ……」

「え？」

「あのシャーマンの側に、剣はあります。まだ大岩に刺さっています。オレには見えます、強力な封印が剣を守っているのが……。セレス様は『知恵の指輪』を持つ者を止めてください。封印を解かせてはいけません。アジャンさんは、まだあの剣に触れてはいけないんだ」

「シャオロン……」

少年が清々しい笑みを見せる。
「セレス様……何があってもアジャンさんを信じてください。アジャンさんはオレ達と共に魔と戦ってきた仲間です。闇に堕ちてなんかいません……絶対に」
地を蹴り、少年は赤毛の戦士へと爪をきらめかせた。
だが、届かない。赤毛の傭兵は腰の『聖王の剣』を抜いていた。
剣に弾かれ、少年の体が岩の上を転がる。
「おまえじゃ役不足だ、シャオロン」
顎をしゃくりあげ、傭兵は挑発的な笑みを浮かべた。
「おまえは非力すぎる。俺を殺れねえよ」
少年は素早く起き上がり、キッ！とセレスを睨んだ。
「セレス様！　早く！」
「……」
シャオロンとアジャンに視線を走らせ、セレスは戸惑いながらも頷きを返した。しかし、
「セレス」
赤毛の戦士が笑いながら、前に進もうとする彼女の心を砕く言葉を口にする。
「いいのか、シャオロンが死ぬぞ？」
「オレは死にません！」
素早く風のように少年が、爪を振るう。攻撃を上方、下方にわけて、連続して爪を振るう。
だが、爪は赤毛の戦士を捉えられない。
ほんの少し体を動かしただけで、アジャンはシャオロンの攻撃を全てよけてしまう。次にどんな攻撃がくるのか……全て読んでいるのだ。
「いいんだぜ、俺は、二人がかりでも……おまえら全員いっぺんでも……」
ニヤッと笑い、赤毛の傭兵が『聖王の剣』をもって『龍の爪』の攻撃を受け止め、そのまま少年を蹴り飛ばす。

「くっ！」
「シャオロン！」
身を二つに折って痛みを堪える少年に、赤毛の戦士の刃が迫る。
慌てて走り寄ろうとするセレス。だが、それよりも早く、老忍者の手裏剣とチャクラムが、傭兵を少年から切り離した。遠隔攻撃を避ける傭兵に、ハリ族の戦士が片手剣をもって攻撃を仕掛ける。
「目を覚ませ、アジの惣領！」
ハリハールブダンの右眼には、静かなる怒りがあった。
「魔に操られるがままに『極光の剣』を手に入れるというのか？神との契約の証を穢す気か？」
「神なんぞくそくらえだ！」
ゲラゲラと笑いながら、赤毛の傭兵はハリの戦士と剣を交わす。
「部族神もアジも俺は捨てたのだ！　俺は俺の為に剣を手に入れる！」
「きさま、それでもケルティの男か！」
「俺にはもはや故郷など無い！」
剣の技量に差がありすぎる。ハリハールブダンとてハリの戦士長を預かる身だったが、天賦の剣の才のある男を前に、ただ翻弄されるばかりだった。
ハリの戦士の敗色が濃いとみて、シャオロンも同時に仕掛ける。老忍者もすばやい体術で、アジャンの虚をつこうと攻撃する。
赤毛の戦士は楽しそうに笑った。
「同時に来い。でなければ、欠伸がでちまう……」
しばらくは彼等にアジャンを任せておける……彼らの為にも早くハリレークと決着をつけ、戻らねば。
ハリレークはセレスに、炎、水、氷、風の攻撃魔法を仕掛けた。だが、その全てを『勇者の剣』が防ぐ。女勇者は毛ほども傷ついていない。
「おのれ……おのれ……来るな！　邪悪な魔女め！　後もう一歩なのだ！　後もう少しでハリの光がこの世に満ちる！　邪魔はさせん

！」

「ハリのシャーマン……南から来た私にも、この国の歪みは悲惨なものとわかりました。シベルアの支配に屈してきたあなた方の無念も、わかります。でも、部族神を頼るあなたのやり方には賛同できません！　地上の争いは人の手で解決すべきです！」

「きさまに何がわかる！」

ハリレーレクの顔が怒りに歪む。

「このままではハリは滅びる！　いや、もう半ば滅びているも同然なのだ！　ハリの血を絶やさぬ為ならば……わしは何でもする……ハリを守る為ならば……何を犠牲にしてでも」

「犠牲ですって！　あなた、目的の為なら手段を選ばないのね！　私の仲間を……アジの王たる者に魔を憑かせ、魔力で操って、そうまでして天下が欲しいの？」

「ケルティはハリとアジが神より継いだ土地。薄汚いシベルア人どもを殺す宴を開き、国中を浄化するのだ。アジの男なら、喜んで贄となるだろう」

「勝手な事を！　力で他人を支配するなんて、あなたのやり方は、ケルティ新王朝と同じよ！　同じぐらい悪逆無道だわ！」

「違う！」

「いいえ、同じよ！　自分が正しい道にあると思うのなら、魔を使って洗脳したりするものですか！　言葉をもってアジャンを説得すればよかったのよ！」

「黙れ、魔女！　黙れ！　きさまが悪いのだ！」

「私が？」

「女勇者の従者として生きると……きさまゆえに、アジクラボルト殿の息子は神降ろしを拒んだのだ！　きさまゆえに！」

「だから……アジャンを操って私を襲わせたり、魔族を襲撃させたというの？」

「きさまのせいで……きさまへの思いゆえに……何度術をかけようとも正気を取り戻す……わしとて、魔を憑依させるまではしたくな

かった。だが、仕方なきことだ。アジの新王を復讐の道に進ませねばケルティは救われんのだ！」

「その為に、汚らわしい魔をアジャンに使ったというの？　共に戦うべきアジの王を傀儡にするだなんて……やはり、あなたは卑劣よ。他人を思いやる心がない。新王朝の非道と何ら変わりは無いわ！」

「断じて違う！　わしはハリの為に生きているのだ！」

「あなたに正義など無い！」

「違う！」

ハリレーレクの左の薬指には、金細工の指輪が神々しく輝いている。あれが『知恵の指輪』なのだろう。

けれども、輝かしい指輪に反し、老戦士の体は次第に輪郭が黒くぼやけ、肌もどす黒く染まっていった……

「ハリの為にわしは殺すのだ！　偽王を！　新王朝に与する者は一人残らず！……ケルティ人の裏切り者どもとて容赦なく殺し……そうだ、シベルア司教も皆殺しにしなければ。我が神の像をうち砕き、我が神を穢した罪人どもに死を……」

目も鼻も口も髪も髭も、手足も、全てが黒い煙に包まれてゆく。人の形を保ったまま、ハリレーレクは黒煙の集合体となった。

セレスは目の前で魔族と化した相手を、唖然と見つめた。人が魔に憑かれる瞬間を初めて見たのだが……あまりにもあっけなさすぎる。人間には魔の支配に抗う理性があるはずなのに。何の抵抗もなく黒く染まっていくなんて……

「邪魔はさせぬ……ようやく、アジの王の血を手に入れたのだ……ハリビヤルニめ……よくも、我が記憶を縛りおって……ああ、だが、ようやくアジクラボルト殿の子を……これで、ようやく、わしは……」

目があったところから、二筋の涙が落ちた。それは、錯乱しとりとめもない事をつぶやく魔族にわずかに残された人の感情なのだろうか？

「神の降臨は我が償い……ハリの為に……我が部族神の為に……死

ぬがいい、女勇者……」
「死ぬのはあなたよ……死して安らぎを得なさい」
セレスはハリレーレクであったもののめがけ、『勇者の剣』を振るった。浄化し、魔の呪縛から解き放つべく。けれども、ハリのシャーマンは自らの周囲に空間歪曲の魔法をかけていた。セレスの刃はむなしく宙を切っただけだった。
その時……
背後から悲鳴が聞こえた。
振り返ったセレスは……シャオロンが膝を突き、力なく倒れていく姿を目にした。
シャオロンの前には、ぞっとするほど冷たい笑みを口に刻んだ赤毛の戦士が佇んでいた。
その右手に『聖王の剣』を握って。
彼の周囲には……ハリハールブダンとガルバが倒れていた。
誰一人……ぴくりとも動かない。
動けないのだ……
「シャオロン……？」
殺された……？
シャオロンが……？
アジャンに……？
アジャンは自分を信頼し慕ってくれていた少年を……本当に、その手にかけたのだろうか……？
何があってもアジャンを信じてくれと訴えていた、あの少年を……？
「……弱すぎる」
「アジャン……」
「おまえは……少しは俺を楽しませてくれよ」
そう言って斬りかかってきた男の剣を、セレスは『勇者の剣』で受け止めた。

極光の剣　１４話

異空間に閉じ込められている武闘僧ナーダは、眉をしかめ、魔族ゼグノスが映す現実の窓の一つを見つめていた。

岩の上に倒れ、動かなくなった三人。シャオロン、ガルバ、ハリの戦士。彼等を倒したアジャンが、セレスへと斬りかかってゆく。

ハリのシャーマンは、岩に鞘ごと刺さった形で封印されている巨大な両手剣を前に、誰に聞かせるでもなく思いを口にしていた。

『殺せ！　殺せ！　殺せ！　邪魔はさせぬ……神を降臨するのだ。アジクラボルト殿……ああ、やっと……わしは……償える……あなたを殺す気などなかったのだ……アジの部族王に謀反の動きがあると噂を流したのは……あなたを殺す為ではない……あなたの翻意を促したかっただけ……新王朝から謀反の嫌疑がかけられれば、あなたも戦わざるをえなくなる。わしに神を降ろして欲しかったのだ……だが、新王朝は裁判もせず、拘束した当日にあなたを殺した……わしはアジの部族王の死など望んでいなかった……ハリとアジが揃わねば神は降臨せん。わしは神を呼ぶ術を失った……自ら未来を閉ざしたのだ』

黒い気の塊が涙を流す。

『許してくだされ……アジクラボルト殿……だが、わしは、ついに、あなたの世継ぎを見つけた……ああ、二十年……二十年もあなたをお待たせしてしまった……臆病な兄ハリビヤルニがわしの記憶を縛ったが為に……わしはアジの遺児を探す事をずっと忘れていた……シベルアを恐れるあの名ばかりの王がわしに術さえかけねば……二十年前に遺児と共に神を降ろせたものを……』

黒の気の涙は、悔恨の涙だった。

『いたずらに年ばかりを重ねてきたが……わしは何をすべきか思い出せたのだ……あなたの子息がこの地に戻った時に……わしはハリビヤルニの呪縛に打ち勝ったのだ！　今度こそ、わしは神を降ろす

！　この地より汚らしきシベルアの犬どもを抹殺する！　血の宴を開くのだ！』

戦い始めたセレスとアジャンの横で、ハリレーレクが感情を爆発させて笑う。ハリのシャーマンは、おそらくセレスのケルティ入国と時を同じくして魔に誘惑され、ハリの部族王によって封じられていた記憶を甦らせたに違いない。そのまま、ケルティ新王朝への憎悪の感情を煽られ、アジの部族王の死に加担してしまった罪悪感に苛まれ、魔へと堕ちていったのだろう。

ハリレーレクはもはや人ではなかった。体内から爆発的に広がった黒の瘴気が血肉を飲み込み、彼を瘴気の塊としてしまったのだ。だが、本人は変化した事に気づいていないようだ。黒の瘴気はハリレーレクの体格を保ったまま衣服をまとい、頭と手足を服から出している。左手の薬指があった場所には、黄金の指輪も輝いている。

ひとしきり笑った後、ハリレーレクは封印解呪の呪文を唱え始めた。黒の気を更に闇の色に染めながら……

《人が人である限り、我が宴からは逃れられぬ》

愉快そうに、ゼグノスが笑う。

《まもなく、国中が狂う……この国は大魔王様にふさわしい、血に彩られた地獄と化すのだ》

その少し前……

「セレス！」

吠えるように叫び、赤毛の戦士が駆けて来た。女勇者を目指して……

アジャンの鋭く重い一撃を、セレスは『勇者の剣』で受け止めた。赤毛の戦士は愉快そうに笑いながら、右へ左へと不規則に動き、『聖王の剣』を振り回す。赤く染まった目は、殺戮の喜びに満ちてい

る。女勇者だけを見つめている……
「ずっと……おまえを殺したかった」
「アジャン……？」
「出会った時から……ずっとだ」
剣と剣を交し合ったまま、二人は睨み合った。
「おまえを殺し……おまえの血を浴びて……俺は解放されたかった」
「どうして……？」
セレスは、顔をくしゃっと歪め、泣きそうになるのをかろうじて堪えた。動揺して反応が鈍くなれば、殺される。アジャンの手にかかって死ぬ事になる。死んではいけないのだ……大魔王を討つ為に。そして、今は倒れている仲間達を救う為に……シャオロン達はまだ生きているかもしれないのだ……彼等を助けねば……
「……俺はおまえが……大嫌いだったんだよ！　世間知らずのお姫様！　おまえを見ているとむしゃくしゃする！　何の穢れも知らず、のうのうと生きてきたおまえには……虫唾が走る……」
激しい感情のままに、アジャンが剣を振るう。セレスは相手の剣を払い、避けながら、背筋に冷たいものを感じていた。
アジャンは……
今まで対戦してきた誰よりも……強い。
変幻自在の攻撃を仕掛けてくる事も怖いが、こちらからの攻撃が全て先読みで防がれてしまうのが辛い。全てを見通す『シャーマンの眼』は、セレスの動きを完璧に見切っていた。
「アジャン……」
腕力も剣術のセンスもかなわない上に、動きを読まれているのだ。かろうじて利している身軽さすら生かしきれていない。
セレスは焦りを感じていた。
アジャンに憑いている魔が小物である事は、黒の気があまり強くない事からわかる。ハリレーレクは『アジの王』を必要としていた。だから、アジャンを精神的に殺す事のないよう、絶えず悪感情を煽らせ復讐心を植えつける術の為だけに魔を利用しているのだろう。

アジャンはまだ完全には魔に堕していない。体を奪われていない。魔さえ祓えれば彼は己を取り戻せるはずだ。

シャイナでジライを、インディラでアジャンを斬ったように、肉体は傷つけずに、『勇者の剣』の浄化の光をもって内なる魔族のみを斬ればよいのだが……

肉体を斬らずに浄化の光だけを当てる間合いをとれずにいるのだ。剣で打ち勝ち自分の間合いをとらねば、アジャンの洗脳は解けない。

しかし……

アジャンに剣で勝つなど……

不可能だった。

シルクドからシャイナを旅している間、アジャンはセレスの剣の師であった。重すぎてろくに持ち上げられない『勇者の剣』に翻弄されていたセレスに下段の構えからの剣技、変則的な戦闘方法、体術を叩き込んでくれたのだ。

『技量の勝る相手とは、まともに戦うな。正面からぶつかりゃ、おまえが負ける。おまえさんは女だ。腕力も体力もねえ。長期戦となれば、ますます勝ち目は無くなる。勝負は短期、相手の虚をつけ。で、失敗したらケツまくって逃げろ。後の始末は俺かクソ坊主がつけてやる。大切なのは勝負に勝つ事じゃねえ。生き残る事だ。お嫌でございましょうが、どんなキタナイ手を使ってでも逃げ延びてみせな。大魔王と戦う前にクタバっちまったら、マヌケすぎるぜ、女勇者様』

（相手の虚をつく……）

しかし、隙だらけに見えるアジャンには、実はまったく隙が無い。何処を狙っても、刃を返されてしまう。

ジライも言っていた。
『アジャンめと斬り合う事となりましたら、セレス様、まともに剣を交わしませぬように。あれは、敵の太刀筋が読めるのです。いえ、全ての攻撃が見えると言うた方が正しゅうございますな。まともに仕掛けても、無駄。あれは全てよけます。虚をつくしかありませぬ』
セレスは周囲に視線を走らせた。
『アジャン本人ではなく、その足元や周囲を攻撃するが良いかと。足場を奪い、落石や倒木等であやつの動きを封じるのです』
足元はともかく、天井の岩などを利用したら倒れている三人の体を潰しかねない。
（ならば……）
セレスは『勇者の剣』を握り締めた。

突進してきた女勇者を、赤毛の戦士は余裕の笑みで迎えた。
敵意は光となって見える。
『勇者の剣』が攻撃へと移る前に、その攻撃の軌跡が見えるのだ。
地上最強の武器だとて、当たらなければどうという事はない。
『勇者の剣』を簡単に払い、右手のみで『聖王の剣』を持って大剣を振るえぬ間合いに飛び込み、左の拳で彼女の顔面を殴り飛ばそうとする。
けれども……
拳は何ものをも捉えられなかった。
そこに居るはずの女勇者の姿が、消えている。
空にかき消えるように、消えてしまったのだ。
「アジャン！」
背後からの声。
振り向いた戦士を……
『勇者の剣』が両断した。

セレスはアジャンを見つめた。
『聖王の剣』を手にしたまま、赤毛の戦士はその場に立ち尽くし、うつむいている。
『勇者の剣』に願い、アジャンの背後へ移動魔法で渡った後、セレスは上段から剣を一気に振り下ろした。ぎりぎり刃がアジャンに達さぬ間合いで。刃で斬るのではなく、『勇者の剣』が持っている浄化の光で内面を斬ったのだ。浄化の光はアジャンの皮膚をすりぬけ、体の中の邪悪なもの――黒の気のみを斬った。魔族だけを浄化したのだ。
「アジャン……大丈夫？」
長身の男の顔を覗き込もうと近づいて、セレスはとっさに身を引いた。
避けていなければ、下段から突き上げられた『聖王の剣』に貫かれていただろう。顔をあげた傭兵の眼は緑だったが……それが徐々に赤く染まってゆく。再び黒の気が彼に集い始める。
（どうして……？）
『勇者の剣』は彼の内の穢れを全て祓ったはずだ。なのにアジャンは正気に戻らず、再び魔に憑依されてしまったのだ。
『知恵の指輪』の所有者ハリレークはアジャンに何重にも精神系の魔法をかけて心を縛り、体内の魔が尽きても次の魔が憑くよう細工をほどこしていたのだろうか……
セレスが魔を祓っただけでは……この洗脳、解けないのだ……
アジャン本人が呪に逆らい、勝たねば……
正気に戻らないのだ……
「もう終わりか……？　おまえの力も……その程度なのか？」
血の色に眼を輝かせ、アジャンが笑う。禍々しい黒い気に包まれながら、セレスへと刃をきらめかせる。

「本気でこいよ。さあ、殺せ！　俺を殺してみろ！　女勇者様！　おまえはこの地上最強の剣士なのだろう！」

アジャンは何をもって心を操られているのか……？

笑いながらアジャンは剣を振るう。命のやりとりをするのが、楽しくてたまらないといった顔だ。

剣への渇望……？
最強の戦士となる事を望んで……？

違う、とセレスは思った。
アジャンは戦場においてよく笑みを浮かべる。剣技を楽しむところは確かにある。
だが、それだけで彼は理性を失う事はない。
彼の剣は、傭兵魂をもって、仲間を守る為にあるのだ。

「どうした？　逃げてばっかじゃ、俺は殺せないぜ、セレス！　移動魔法を使えよ！　攻撃魔法も！　俺を斬れ！　でなきゃ、おまえが死ぬぜ！」

「うっ……」
セレスは眉をしかめ、アジャンの剣を受け止めた。
仲間（アジャン）を殺すなど……できない……

死への渇望……？

姉と母の骸を目にし、幼いアジャンは慟哭していた。家族を全て失い、守るものを無くした彼は……世に絶望した。

違う……それでも、ない。そんなはずはない。

彼はシャオロンを可愛がっていた。庇護すべき者を守り、導く事を続けていた。

彼は世に、まだ、絶望しきっていない。

しかし……

そのシャオロンを……

アジャンは殺したのではないか……？

アジャンは死を望んでいるのだろうか……？

セレスに斬られ果てる事を……？

「殺してやるよ……セレス……おまえが穢れる前に……無垢なうちに……」

『勇者の剣』に願い衝撃波をもって、アジャンを遠くに弾き飛ばす。

「今度こそ……俺は間に合う……女勇者は殺す……殺してやらねばならない」

魔にふさわしい笑みを浮かべた男が、『聖王の剣』を構え走る。
セレスは『勇者の剣』を握り締めた。

殺すしかないのだろうか……？
『勇者の剣』の魔法にすがり、移動魔法を駆使すれば、斬る事はできるかもしれない。魔に憑かれている今、聖なる武器の攻撃はアジャンには致命傷となる。かすり傷だけで、内なる魔族ともども今世から消滅する。一握の塩だけを残して……
殺して魔の呪縛から解放してあげる事しか……自分にはできないのだろうか？

黒の気をたなびかせ、禍々しく笑う男に……
黒髪の小柄な少年が重なって見えた……

『セレス様……何があってもアジャンさんを信じてください。アジャンさんはオレ達と共に魔と戦ってきた仲間です。闇に堕ちてなんかいません……絶対に』

（シャオロン……）
走っているはずのアジャンの動きが、止まって見える。彼の毛皮の服も、『聖王の剣』もよく見える。

（あっ！）
セレスは急ぎ、シャオロンやガルバ達に視線を走らせた。予想通りだ。セレスの口に笑みが戻った。
（わかったわ、シャオロン！　あなたの言う通りだわ！　間違いない！　アジャンは闇に堕ちていない！）

『勇者の剣』を手放し……
セレスは己の命を狙う者の元へと走った。

「来るな！」
『聖王の剣』を握ったまま、アジャンが立ち止まる。
「死ぬぞ……セレス……俺はおまえを殺す」
「いいえ、アジャン、あなたはそんな事はしない」
「俺は……女勇者を殺さねばならない」
「なぜ？」
「殺してやらなければいけない……でなければ、また、俺は……」
アジャンの顔より笑みが消える。
「骸を目にしてしまう。おまえは、蹂躙され、穢され、苦しみぬいた末にみじめな最期を迎える……俺が間に合わないせいで、又……」
「『間に合わなかった』悔恨……その心の傷をもって、あなたは呪縛されていたのね……」
金の髪の少女が、赤毛の戦士の胸に飛び込む。
赤毛の戦士は顔を蒼白にし、ぶるぶると震えていた。その右手の剣をカタカタと揺らしながら。
「アジンエリシフ……母さん……アジフラウ……アジャニホルト……。いつも、そうだ、俺は間に合わない……間に合わんのだ……俺が遅れたために……皆。……俺は誰も救えない……皆を骸にしたのは……俺だ。俺が、みんな……死なせた。敵に無残に殺され、その

死骸まで辱められるぐらいなら……いっそ、俺が……この手で……
穢れる前に……無垢なうちに殺してやらねば」
「アジャン！　しっかりして、闇の声に負けないで！」
「血が見える……真っ赤だ……何もかも……」
刃があがる……
その切っ先は、セレスの脇腹を狙っていた……
「皆の死に顔が見える……俺は復讐を果たさねばならない……シベルア人どもを皆殺しにし、家族の仇を討たねば……」
「やりたきゃ、やりなさい！　止めないわよ！」
セレスは赤毛の男を睨んだ。
「ただし、あなたの意志でね！　魔に操られるのではなく、あなたが自らその道を選びなさい！」
「俺は……」
「行って欲しくないけど……それがあなたの意志なら止めない！　アジャン！　私を見て！　セレスよ！　あなたが大嫌いな馬鹿女よ！　世間知らずの大甘のマヌケって、私を罵ってよ！　怒ってよ！　ずっと、ずっと……あなたには側にいてもらいたかった……」
「血が……」
「血なんて何処にもないわよ！　よく見て！　あなたは誰も斬っていないわ！」
「斬ってない……？」
『聖王の剣』は、その動きを止めた。
「『聖王の剣』が血に濡れている？　あなた、返り血を浴びている？」
アジャンの視線がのろのろと動く。己の剣や、体へと。
真っ赤に彩られているはずの剣や体は……何ともなっていなかった。
「俺は……シャオロンを殺した……」
「いいえ！　あなたは殺せなかったのよ、シャオロンを……シャオロンを庇って戦った二人を……。殴って動きを止めただけよ」

「そう……なのか？」
「あなたがシャオロンを殺せるはずがないわ！　ううん、シャオロンだけじゃない。アジンエリシフさんやお母さん、アジャニホルトさんも、それから、えっと……妹さんも、誰もあなたは殺していない！　あなたは愛する者を守って戦ってきただけ！　愛する者を刃にかけた事は一度もないわ！　あなたの剣は弱者を守る為の剣よ！　現実を見て！　あなた自身で、ハリレーレクの呪縛を断ち切って！」

アジャンの胸元が……
まばゆい輝きを放った……
それは……
砕け散ったはずの首飾りの形を象っていた……

「ぐっ」
胸元から広がるまばゆい光に目をくらませ、赤毛の戦士は顔を歪ませた。
「俺は……」
右手より『聖王の剣』が離れ、足元の岩の上に落ちる。
「娼館に居たはず……そうだ、ハリレーレクが移動魔法で部屋にやって来たんだ。『極光の剣』を手に入れれば、ケルティを救える、宴を開くのだとか何とか……。復讐……旅立ちの前に復讐をするとも言っていたな。寝室にゲオルグが居るから……蛇がどうのと」
アジャンの瞳が……
徐々に緑色に戻る……
セレスは震えながら、赤毛の戦士を見つめた。もう止まらない。
ポロポロと涙が頬を伝わっていった。
「良かった、アジャン……」

「……セレス？」
まだぼんやりとしている相手に、セレスは感情のままにぎゅっと抱きついた。
「……馬鹿女って言って、アジャン」
「……？」
「ずっと側に居て……ずっと、馬鹿な私を怒ってちょうだい……もう何処へも行かないで」
「ん……？」
アジャンの視線が腕の中の少女に向う。
腕の中にはセレスが居る……
精神が覚醒するにつれ、戦士の顔は次第に赤く染まっていった。
「どわっ！」
アジャンは、抱きついていたセレスを乱暴に突き飛ばした。
「なっ！　何だ、これは！」
そして、顔を赤くしながら、周囲をきょろきょろと見渡した。
「ここは……」
父が夢で教えてくれた試練の洞窟……のようだ。ここに『極光の剣』が眠っているはず。
「そうだ……俺は」
傀儡の魔法をかけられていた間の事を、ぼんやりと思い出す。ハリのシャーマン、ハリレーレクに操られ踊らされて、ここまで来てしまったのだ。
『聖王の剣』を拾い赤毛の傭兵は、禍々しい黒の気を目指した。人の形を保った黒い魔の気の集合体を斬るべく。セレスも涙をぬぐい、遅れて後に続く。
けれども、間に合わなかった。
アジャンの目の前で、『極光の剣』の封印は解かれてしまった。
ハリレーレクの指にあたる部分にある『知恵の指輪』の力によって。

しかし、その瞬間……

空が揺れ、輝かしい光が広がり始めたのだった……

武闘僧ナーダの口元が笑みに綻んだ。

『極光の剣』の封印が解けた、その瞬間だった、異空間に映し出されていたアジャン達の映像が途絶えたのは。

ホルムの王宮での凄惨な殺し合い、各地に散ったハリのシャーマン達の映像は変わりなく映っている。つまり、ゼグノスは『極光の剣』より広がった聖なる力に敗れ、あの洞窟の内を覗く千里眼の魔法を失ったのだ。一時的な事かもしれないが、大魔王四天王ゼグノスの力を退けたのだ。『極光の剣』の浄化の力は想像以上だ。

「……大魔王四天王ゼグノスも、たいした事ありませんね。威張っていても、しょせんは魔族……聖なる光の前には無力です」

ナーダは相手をわざと侮辱し、挑発的に微笑んだ。

最も最悪と想定していた事態――アジャンの肉体がケルベゾールドの器となっている事はなかった。

ゼグノスはアジャンを高位魔族の器として使う事よりも、『極光の剣』の封印を解く事を優先した。それほど魔をひきつける何かがあの剣にあるのだろうか？

「あなた、アジとハリの人間を操って祭器を使わせて、何がしたかったのです？　本気で彼らの部族神を降ろす気だったのですか？　ですが、魔族の下僕となったアジャンやハリレーレクが願ったとて、神はお怒りになるだけ、降臨などしないはずです」

《そう……人間の望む通りになど神は降臨せぬ。だが、己の祭具を穢されれば、神族は怒る。己の清浄を保つ為に、人に報復する。ケルティ中に雷が走り、雪嵐が吹き荒れ、津波、山崩れ、噴火、地震が大地を痛めつけ、人間どもは飲み込まれる……神の力によって今世は地獄となるはずだった……その中で、我が下僕と化した者どもに殺し合いをさせたかったのだが……絵を変えよう》

異空間が振動する。ケルティ中を映す映像が、どれも黒く染まってゆく。

《人が人である限り……他を妬み、憎む心がある限り、人は我が支配から逃れる事はかなわぬ。ケルティに居る全ての者が我が下僕……我が分身……ホルムの王宮で繰り広げられている宴を……全土に広げよう……己が心の声に従い……殺戮の果てに魔へと堕ちる……人間は死に絶えるのだ》

極光の剣　１５話

心話による合図が届いた。
ケルティ全土に散っていたハリのシャーマン達は、各地で行動を開始した。それぞれに課せられた使命を果たすべく。
シベルア軍隊の武器庫爆破、要人暗殺、放火……
ゼグノスの分身であったハリレーレクに支配の魔法をかけられ傀儡となった彼等には、死への恐怖はなかった。ハリの輝かしい未来を信じ、その礎となるべく、年若いハリのシャーマン達は次々に己が命を捧げていった……

ほぼ同時刻、ケルティ全土のシベルア教会で鐘が高らかに鳴らされ、その音がケルティ中に響き渡った。
ケルティ新王朝の宗教政策によって、街のみならず、小さな村にもシベルア教会は建築されている。司教も司祭も聖職者が在住しない田舎の教会であっても、聖堂や鐘楼など教会としての設備は一通り揃っているのだ。
鐘は人が住む場所、全てで鳴り響いた。
鐘は邪を祓う尊き音、天上の神の世界の音楽なのだが……数日前からゼグノスの分身である司教・司祭達によって、細工が施されていた。人間の本能を揺さぶり、憎悪・羨望・嫉妬・殺意・残虐性を煽る、精神系の魔法の発信源に変えられてしまったのだ。
それは、強力な術だった。鐘を耳にした者は、シベルア教徒・ケルティ人の別はなく、誰しも悪感情を昂ぶらせる。不平不満を知らない人間などいない。ほとんどの者があっけなく己が善の感情を凌駕する悪しき思いに憑かれてしまう。衝動のままに、破壊・殺戮を繰り返し、血に酔いしれ、ゆるやかに魔に堕してゆくのだ。
各地で軍隊と民がぶつかり合い、貴族の館では召使が主人を血祭

りにあげた。小さな村の中でも、父がシベルア教育に染まった息子を殺し、主婦が日頃不仲だった隣人をためらいもなく殺していた。

魔の気に聡いシャーマンや司教の中には、易々と魔の誘惑に屈しない者もいた。彼等は己の保身の為、或いは信者や一族を守護する為に、神にすがり聖なる結界を張って庇護者達と共にその内に籠もった。結界の内ならば、鐘の音は聞こえない。正気を保てるのだ。

しかし、魔になりきれぬ心優しい者達は、殺戮の宴の標的とされた。数多くの魔人や狂人に襲われ……結界を破られ、家族・友・隣人・敵勢力に殺され宴の生贄とされる者も少なくなかった。

忍者ジライは、ホルムの王宮を駆けていた。

最初は、セレスの教えに従い、無駄な殺生はしないよう心がけたのだが……とうに教えは守れなくなっていた。敵は無尽蔵にわき続け、魔へと堕ち或いは魔に操られ牙を剥いて来る。忍術・忍法・薬品・『小夜時雨（ムラクモ）』を駆使して戦い続け、何百という敵を倒しているのにキリがない。忍者装束は既に返り血に染まりきっていた。

一時はナーダの部下八人を、魔の呪縛から解放したのだが、彼らは数十分前に耳を両手で押さえて突然苦しみ出し、再び黒の気をまとい始めたのだ。『鐘の音が聞こえる……』と、訴える彼等を気絶させて縛ってその場に転がし、ジライは王宮内のシベルア教会へと走った。

（又しても、鐘の音か……）

ジライは舌打ちを漏らし、己の行く手を塞ぐ者達を切り捨てていった。浄化の水で内なる魔を祓っても、皆、すぐに黒の気に囚われる。『鐘の音が聞こえる……』と、言いながら。

眠り粉としびれ粉は尽きてしまった。気の練りも不充分の為、忍法も後一回使えるかどうかだ。邪魔者は、魔族であれば浄化する、人間であれば殺すか深手を負わせて止めるしかない。王宮内の邪法

を解くのが早いか、体力の限界がくるのが早いか……

回廊から王宮内のシベルア教会を目指す。雪の積もった中庭を突っ切った方が早いのだが、結界に閉じ込められているので外へは出られない。回廊や渡り廊下を通らねば、建物の移動ができないのだ。身を隠す場所のない回廊には、進むべき方向からも通り過ぎた方向からも、敵が押し寄せて来る。

ジライは覆面の下に苦笑を浮かべた。

（セレス様がこの場に居られなくて、ほんに良かった）

東国忍者は懐から取り出した油紙で包んだ二つの球を、前方と後方に投げつけ、その場に伏せた。

球は人波に飲まれ……破裂した。

爆風。

爆炎。

爆煙。

火薬玉だったのだ。威力はさほど大きくないが、一つにつき、五、六人は殺せたはずだ。周囲の者も火傷を負い、見る見る広がる火災に巻き込まれてゆく。しかし、物理結界の張られている回廊自体は微塵も傷ついていない。

ジライは伏せている間に、胸元から金属を取り出して、そのからくりを外していた。人の頭ほどもあるそれを左手に、右手に『小夜時雨（ムラクモ）』を持ち、右往左往する宮廷人の間を風のように駆け抜け、爆炎の彼方からやって来る新手に向かい左手の武器を投げつける。

巨大な卍手裏剣『大風車』。ジライ最強の遠距離武器は、押し寄せる敵を次々に血祭りにあげた後、主人の左手へと戻って来た。

たった一人で宮廷内の人間全てを敵に回している東国忍者は、さながら鬼神だった。群がる敵を容赦なく葬り、その身を血に染めている。

けれども、殺戮の宴で最も華やかに立ち回っているこの男は……宴を奏でる楽の音を聞けずにいた。王宮中を狂わせている鐘や鈴の

音が聞こえないのである。
　回廊から見える中庭の先に、シベルア教会独特の屋根――ねぎ坊主が見える。大聖堂そばの鐘楼で鐘が鳴らされているのならこの距離で耳に届かないはずはないのに、まったく聞こえないのだ。
　耳に異常は無い。敵の奇声、足音、剣戟、爆音などは普通に聞こえている。鐘の音だけ聞こえないのだ。
（術に踊らされずにすんでいるのは有難いが……何故、我にだけ聞こえない……？　気に喰わんな）
　何の気負いもためらいもなくジライは迫り来る敵を片付け、走った。シベルア教会を目指して……

　女勇者セレスと赤毛の戦士アジャンは、驚きと共に目の前の人物を見つめた。
『極光の剣』を背にする形で移動魔法で突然現れた人物。その者が現れるやいなや放った浄化魔法を浴びて、ハリレーレクは消滅した。魔と化した体は浄化の光の前にあえなく無に帰し、一握の塩を残して消滅したのだ。
　ハリのシャーマンがまとっていた衣服も剣も同様に消えうせた。が、祭器である金の指輪だけが残り、甲高い金属音を立てて岩の上に落ちた。
「わしがアジクラボルト殿と共に幾重にもかけた封印をよくぞ解いた。森、洞窟、剣。その全てを解くに十日かからなかったのは、まあ、褒めてやるが、詰めが甘かったの、ハリのシャーマンよ。きさまでは、最後の封印は解けぬ。このわしが最後の封印……この剣を所有するにふさわしき者にしか、この剣は譲らぬ」
　厳かな口調でそう言ったのは、黒のローブの魔法使い。右手に魔術師の杖を持つ、長い白髪白髭の、やさしそうな顔だちの老人だ。
　ハリレーレクの死と共に消えかけた洞窟の明かりを代わりに維持し、にっこりと笑みを浮かべる。

「お師匠様！」
　呆然とするセレスに対し、老人は笑みで応えた。
「久しぶりじゃの、セレス。白銀の鎧姿以外の男装も、新鮮でいいのぅ。商人にしては、少々、凛々しすぎるがなかなか悪くない。それに、赤毛の傭兵、元気そうで何よりじゃ」
　のほほんと挨拶をするセレスの魔法の師――大魔術師カルヴェルを赤毛の戦士は睨みつけた。老人の背後の剣も同時に睨みつつ。
「……どういうこった、ジジイ……？　何故、ここに来たとか、まあ、いろいろ聞きたい事はあるが……あんたの口ぶりからすると、『極光の剣』はあんたの所有物って聞こえたんだが……俺の勘違いが？」
「いいや」
　えっへんと老魔術師が胸をそらせる。
「『極光の剣』の現在の所有者は、正真正銘、このわしよ」
「嘘をつけ！」
「嘘ではない。赤毛の傭兵、以前、わし、ジャポネで言うたであろう？　わしは『虹の小剣』と『エルフの弓』以外に七つの聖なる武器を所有しておるが、そのうちの五つはゆえあって封印してあるとな。『極光の剣』はそのいわくつきの武器の一つよ。約二十年前にわしはアジクラボルト殿の願いを聞き入れ、共に魔法をかけ、剣を封印し、預かったのよ。アジの次代の王が現れるまでという約束で、の」
「何……？」
「あの当時、ケルティ新王朝のアジへの締めつけがやけに厳しくなっておった上に、ハリやアジの一部がやけにキナ臭くての。アジクラボルト殿はアジの行く末を案じていた。優れたシャーマンであるあの方は、己の未来を見てしまった。神との契約の証を息子に託す前に命を落とすという未来をの」
「……」
「何度未来を見ても、どう行動を変えても、予知は変わらなかった

そうじゃ。どうあってもアジクラボルト殿は死の運命から逃れられず、多くの未来で一家は全滅し『極光の剣』は持つべき資格のない者の元の手へと渡っていた。それ故、アジクラボルト殿は剣を封印し、あの日あの場所で逃げずに捕まり、司祭を侮辱してその日のうちに処刑される道を選ばれた。数ある未来の中から家族にとって最も最良の未来を選ばれたのだ」

「最良の未来……」

赤毛の戦士が怒りと不信をこめた瞳で、老人を睨みつける。

「ふざけるな！　最良だと？　俺の通ってきた道が最良だと言うのか？　母とアジンエリシフが陵辱の果てに殺され、アジャニホルトとアジフラウが貧しさの中で亡くなるのが最良だったと？」

「だが、おぬし、生き延びておるではないか」

老魔術師の声は、相手をいたわるかのように優しい。

「ほとんどの未来で、おぬし、死んでおったそうだ、成人になる前に、な」

「……」

「アジクラボルト殿自身は、神を召喚してケルティ新王朝を葬るなどというくだらぬ計画に乗る気はもうとうなかったのだ。しかし、幼くして王となる息子には、王たる心構えはない。幼いおぬしが王となれば、ハリやアジの好戦派に踊らされ、求められるままに神降ろしを行ったであろう。家族の仇をとる為に、な。多くの未来ではそうなっていたのだ」

「……」

「じゃが、王たる資格のない者に降臨を望まれても、神は怒り、拒むだけ。召喚者に神罰を下し、その者の命を奪うだけじゃ。アジクラボルト殿はおぬしを救う道を選ばれたのだ」

「つまり、こういうことか……」

赤毛の戦士が冷めた声で言う。

「親父は、俺だけの命を救える未来を選び、他の家族は犠牲にした……と」

「違う。アジクラボルト殿は、おぬしを『ほぼ救えるであろう未来』を選ばれただけ。他の家族がどうなるかは、その後の運命の流れ次第じゃった」

「同じだ……俺は」

赤毛の傭兵は皮肉な笑みを浮かべた。

「一人だけ生き延びたくなどなかった……」

「おぬしが成人し、この剣の持ち手となる事が、アジクラボルト殿やおぬしの母上、そして姉上の願いでもあった。アジの血が絶えず、アジの契約の証が正しき者に受け継がれる事こそ故人の願いじゃった……弟妹の事は気の毒に思う。じゃが、おぬしが今日、ここに現れた事を、皆、喜んでおるじゃろう」

「……」

そのままアジャンは口を閉ざし、押し黙る。

代わりに口を開いたのは、不機嫌そうに眉をしかめているセレスだった。

「お師匠様は、アジャンがアジの次代の王だとご存じだったのですか？」

「うむ、まあ、初めて会った時からの。そうやもしれぬと思ってはおった。アジクラボルト殿は世界中に居るわしの茶飲み友達の一人じゃった。赤毛の傭兵は、どことなくアジクラボルト殿に似ておるし、酒好きの女好き、腕っぷしが強いところ、魔に敏感なところもそっくりじゃ。じゃが、二人が親子と確信したのは、つい先日の事よ。こやつに過去見の魔法をかけ、過去を覗かせてもらったゆえ、『極光の剣』の後継者が現れたとわかったのじゃ。コレクションが一つ減るのは惜しいが……」

赤毛の戦士を見つめ、老人はニコニコと笑った。

「約束は約束じゃ。今日を限りで、わしは『極光の剣』の所有権をおぬしに譲る」

「……」

赤毛の戦士は眉をしかめ、老魔術師を睨んでいた。

その横でセレスは小刻みに体を揺らしていた。怒りを堪えて……
「お師匠様は……全てをご覧になっていたのですね？」
「ん？」
「全てをご覧になっていたのでしょ？　何故……？　どうして、いつも……お師匠様は見ているだけ……何故、見ておられるだけなのです？」
拳を握り締めるセレス。その青の瞳には、うっすらと涙が浮かんでいた。
「当代随一の大魔術師なのに、どうして何もなさらないんです？　二十年前にはアジャンのお父様とはお知り合いだったのでしょ？　お師匠様のお力なら、アジャンのお父様だって救えたはずです！」
「いや、アジクラボルト殿は救えなかった」
「嘘です！　お師匠様なら救えたはずです！　お師匠様の魔力をもってすれば！」
セレスの頬を悔し涙が伝わった。
「シベルア人の専横を見て、何とも思われなかったのですか？　悪政を見逃し何もせず、死の運命に囚われた友人を救う為にすら動かない。どうしてなんです？　どうして……」
「わしに何ができたと言うのだ、セレス」
老人は静かに微笑んでいた。
「あの時、アジクラボルト殿とご家族の命を救うだけならば、確かにできた。ご家族を移動魔法で他所の国に運べば、皆、死なずに済んだであろう。じゃが……アジの王たる一族に国を棄てさせるのか？　望まぬ者を無理やり国外に連れ去るのが正義か？」
「なら……共に戦えば良かったではありませんか！　お師匠様の魔力をもってすれば、シベルアの軍隊だって追い払えたはずです！　その時点で、ケルティ人は自国を取り戻していました！　お師匠様にはそれだけの力があります！」
「……だからこそじゃ、セレス」
怒りを露にする女勇者に対し、老魔術師は穏やかな笑みを見せた。

「……わしが味方すれば必ず勝つ。だからこそ、わしは動かぬのじゃ」
「え？」
「人間が百人居れば、百通りの正義があり、百通りの真実がある。そのうちの一人にわしが加担し、わしの力で勝たせても意味は無い。世界の均衡を崩し、救うはずであった者を破滅に追いやるだけじゃ」
「そんな事ありません！」
「確かに、わしがアジクラボルト殿に協力しておれば、二十年前、シベルアの軍隊は追い払えたであろう。じゃが、その後、どうなる？　魔術師の力を借りて平和を築いた王などに……己が武力以外のものにすがった王などに、誇り高きケルティの戦士達が従うと思うのか？」
「！」
「わしが居る間はわしを恐れ、恭順してくれるやもしれぬ。じゃが、誰一人アジクラボルト殿を真の王と認めぬであろう。又、大国シベルアの狙いはこの国に軍事拠点を置く事。わしがこの地を去れば、或いはわしが死ねば、シベルアは再び侵略を始めようし、その時、迎え撃つアジクラボルト殿には味方が一人もいない事となる」
「……」
「わしが戦の中心になっては全てが台無しとなる。ケルティはケルティ人によって解放されねばならぬのじゃ」
「……その通りだな」
赤毛の傭兵が重い口を開く。
「……親父は死ぬまでアジの戦士だった。老魔術師様のお助けなんざ、話をもちかけられたって要らんって断っていたろう」
「アジャン……」と、セレス。
「だが、俺が親父の立場にあったのなら……部族なんざ捨てて、家族を取ったろう。俺は親父とは違う。卑しい傭兵さ」
暗く思いつめていた表情を捨て、アジャンはふてぶてしい顔となる。

「だから、使えるものは何でも使う。なあ、ジイさん、あんた、俺にその剣、譲ってくれるって言ったよな？　なら、ついでに力を貸してくれねえか？　俺はこの国に……」
　そこで言葉を区切り、アジャンはニヤリと笑った。
「神を降ろす」
「ほほう」
「！」
　セレスは青ざめ、傭兵の左袖を握った。
「駄目よ！　馬鹿な事を言わないで！　あなたアジの部族神への信仰心なんてないくせに！」
「ああ、ねえな」
「死ぬわよ！」
「死なねえよ」
「嘘！　『アジの神を信じぬ者に、神の祝福は訪れない』んでしょ？　アジンエリシフさんが泣きながら心配してたわ！　あなたが神の怒りに触れて命を落としてしまうって！　だから、私、急いでここまで来たのよ！　アジャン、死なないで……あなたを失いたくないから……私」
「セレス？」
「やめてよ！　神なんて降ろさないで！　シベルアの支配からこの国を救う方法なら、他にもあるわ、絶対！　だから、やめて！　死なないで、アジャン……お願い」
「……」
　赤毛の傭兵は眉をしかめた。すがるように自分を見つめる女勇者を不思議に思いながら。
「……シベルア人どもなんか、どうでもいい」
「え？」
「今は、な」
「……どういう事？」
「俺ぁ、この国の闇を祓いたい。その為に、のうのうと昼寝してい

る奴を叩き起こすだけだ」
「え？　え？　え？」
「ケルティ新王朝の転覆を願っていたのは、ハリレークとアジのじいさん達だ。俺じゃない。あいつらを騙して、俺ぁ、自分の目的を果たすつもりだったのさ。相棒（パートナー）を騙くらかしてたって点じゃ、ハリレークとどっこいだな。大魔術師様がハリレークをぶっ殺してしまったが……」
　アジャンの視線が、まずカルヴェルの側に落ちている金の指輪に、それからシャオロンやガルバと共に倒れている人物へと向けられる。
「おまえさんがハリ族を連れて来てくれたから、問題は無い。あいつ、王族なんだろ？」
「ええ。叔父のハリレークを止めたいって一緒に来てくれたの。ハリビヤルニ王の長子よ」
「長子！　ますます好都合。シャーマンだな？」
「シャーマン戦士よ。接触他心通（テレパス）で私の心を読んだわ」
「上等だ。アジとハリの王族二人に二つの祭器さえありゃ、すぐにも神降ろしができる」
　アジャンは再び、カルヴェルを見つめた。
「で、ジイさん、返事は？　俺に力を貸してくれるのか？」
　老人はいつものようにニコニコと笑っている。
「条件次第じゃ。大魔術師のわしに、しかるべき報酬を払えるのなら、報酬分は働いてやろう」
「よし」
　アジャンは口の端に狡猾そうな笑みを浮かべた。
「じゃ、あんたを雇う」
　老人はあくまでニコニコ笑っている。
「わしに何をさせたい？　それによって報酬が変わるぞ」
　アジャンは老人の背後の『極光の剣』を見つめた。
「報酬は神降ろし、そのものだ。何百年も誰もやらなかった魔法と神秘に満ちた神降ろしを見られるんだぜ、道楽者のあんたにゃたま

らねえショーだろ？」
「うむ。まあ、確かに」
「あんたにやってもらいたいのは、ショーの制御だ。神降ろしに伴って発生する天変地異をできるだけ抑えてくれ」
「ほほう」
「この役、本当はハリレーレクがやるはずだったんだ。あんたがあいつを殺しちまったんだから、その仕事、代行してくれ。むろん……できるよな？　『知恵の指輪』つきとはいえシャーマン戦士ができるって言ったことだ、当代随一の大魔術師様にできねえはずはない。名前負けじゃない実力を俺に見せてくれ」
「言うたな、こわっぱめが」
老人はホホホと愉快そうに笑った。
「その意気に応え、働いてやるわ」
「……有りがたい」
「『極光の剣』を手に取り、アジの王たる務めを果たすがいい。赤毛の傭兵……いや、アジクラボルト殿の長子、アジスタスフニルよ……彼の剣は汝の物ぞ」
老魔術師が赤毛の戦士の為に道を開けた。
それまで老人が背にしていた物が現れる。
アジ族と神との契約の証――『極光の剣』は鞘ごと岩に刺さった状態で、主人の到着を待っている。自分を呪縛から解き放つ、新たなる振るい手を待っているのだ。
「アジャン……」
泣きそうな顔で自分を見つめる女勇者。アジャンは、彼女を揶揄する時に浮かべていた表情をつくり、不安に押し潰されそうな彼女にはっきり言い切った。
「俺は死なん」
「……」
「アジの部族神は自分の真の信奉者が滅びていくのを、何もせず見過ごした。信奉者がいなくなったのは、部族神自身の責任だ。俺じ

やご不満ってんなら、親父やアジャニホルトを生き返らせればいい」
「アジャン……」
「部族神（あいつ）に俺を殺す権利はない。部族神（あいつ）に俺が殺せるものか……俺はこの土地を神から預かった親父の代わりに、親父ならばやる仕事を代行するだけだ」

極光の剣　16話

異空間に閉じ込められながら、武闘僧ナーダはケルティ中の地獄絵を見せつけられていた。闇の中に、数百の現実が切り取られ、映っている。その全てで殺戮が行われていた。

とりわけ、シベルア移民の支配に辛酸を嘗めさせられてきたケルティ人の蛮行は凄まじかった。鬱屈した怒りを剣にこめ、容赦なくシベルア移民を、新王朝の協力者を殺してゆく。女子供も見逃さない。

残虐行為を繰り返し……

そして……

彼等は、少しづつ人間でないモノに変化してゆくのだ。

無慈悲な行為をなす者にふさわしいモノ――魔族に……

「あなたの正体……ようやくわかりましたよ」

姿は見えないが、魔族は近くにいる。武闘僧は言葉を続けた。

「大魔王四天王最後の魔、ゼグノス……あなたは、サリエル、ウズベル、イグアスとは全く違う形で今世に現れている。サリエルは着替えと称し、幾体もの憑依可能な人間を抱えていましたが、一度に動かせる体は一つだけでした。けれども、あなたは違う。あなたは、今、何千、何万という人間に分散して同時に憑いている」

ナーダは苦笑を浮かべた。

「たとえて言うなら、あなたは風邪です。流行り病も同じです。己が魂を幾千幾万にも分け、幾千幾万の人間の体内に入りこみ、同時に人間を病に染めています。黒の気という病に、ね。幾千幾万にも分断されている為、その一つ一つのあなたは、あまりにも微々たる存在、最弱な小物魔族ほどの力もありません。だから、皆、あなたの存在に気づけなかった。祓うべき敵とすらみなされなかった為、聖職者の内にすら入り込めた。あなたはケルティ中の人間の中にこっそりと入り込み、待てばよかった。人が悪感情を抱き、闇へと進

んでゆくのをね」

武闘僧は、ケルティ中で繰り広げられている死の宴を眉をひそめて見つめている。

「今、ケルティ中で鳴り響いている鐘が、人々の内のあなたに活力を与えている……殺意、憎悪、嫉妬、羨望……他を退け、貶め、辱める事を望めば望むほど宿主とあなたの結びつきが強まり、宿主の心も体も黒の気に染まってゆき、魔人に堕ち、そして、最後にはあなたそのものになる……違いますか？」

《人間風情にしては鋭いな》

「そうでもないですよ、見ればわかる事です。ケルティ中に満ちている黒の気……どれも一緒です。あなたそのものです。さっき私が倒した大司教は、数多くあるあなたの分身の一体に過ぎなかった……それで、あなたは滅びなかったのでしょう？　あなたの体は同時に幾千幾万も存在しているから、その全てを同時に滅ぼさない限り、あなたはこの世界に存在し続けてしまう」

《そうだ。人が人である限り……人が欲望を捨てきれぬ限り、我が気を宿す肉体が幾千幾万も存在し、我が分身は無限に生まれゆく……我が魂を滅ぼしたくば、この国に存在する人間全てを殺すしかない。だが、それは不可能だ。我が気は全てのものに取り込まれている》

空間が振動する。ゼグノスが、人間を嘲笑っているのだ。

《おまえも、だ。おまえの内にも我が気は入り込んでいる。この国に入った時点で、女勇者一行は我が手に堕ちたのだ。我が気は、我が気を宿した者と接触しただけで伝染る。直接触れなくても、息がかかっただけで黒の気は伝染る。おまえは今、神族の力を借りた結界に籠もっておるゆえ聞こえぬようだが、その結界が解けた時、鐘の音が聞こえよう。人間の本能を目覚めさせる鐘の音が、な。おまえの内の我が魂の一部がおまえの邪悪な感情を増幅し、鐘がおまえを狂気へと走らせる。人が人である限り……欲望を捨てきれぬ人間は魔に堕ちてゆき、我が分身となる運命なのだ》

「……あなたの思い通りにはなりませんよ、ゼグノス」
《おまえ達に大魔王四天王ゼグノスは滅ぼせぬ。『勇者の剣』の振るい手といえども、我が魂を宿している。いずれは女勇者もその従者も、数に勝る魔に倒されるか、魔そのものに進化する。この国は、間もなく、魔族の国となる。我が分身しか生き残れぬ運命なのだ。インディラ僧よ、古くからケルベゾールド様に盾突いてきた愚かな神の下僕よ、きさまらに勝利は無い。深き絶望の中で死ぬがいい》

「起きろ、ハリレーレクの甥」
ハリハールブダンは目を開け、自分を揺さぶる大柄な赤毛の男を見つめ……慌てて身構えた。巧みに剣を操るこの男に遅れをとり、殴られた事を思い出したのだ。
だが、今、この男から敵意は感じられなかった。邪気が消えれば、その顔にはアジの先王の面影がある。緑の瞳もアジンエリシフを思い出させる……
「セレスから聞いたぜ、あんた、シャーマン戦士なんだってな。王族でシャーマン、これで五体満足なら問題ないんだが……」
赤毛の戦士は、ハリハールブダンの黒の眼帯で覆われた左目を指した。
「その怪我はどの程度のものなんだ？　片目じゃ悪いが、あんたじゃ役不足だ。『欠けたる者』に神降ろしの資格はねえからな。ジジイに適当なハリの王族を探させる」
「神降ろし？」
ハリの戦士は周囲を見渡した。不安そうな女勇者、見知らぬ老魔術師がたたずんでいる。先ほど共に戦った少年と老忍者は、近くの岩の上に倒れ気絶していた。
『極光の剣』は、まだ鞘ごと大岩に突き刺さったままだ。
「おまえ、この地に神を降ろす気なのか？」

「まあな」
赤毛の戦士は肩をすくめた。
「あの剣がお許しくだされればだが、な。実は、さっき、あれに触れようとしたんだが……雷を落とされて拒まれた。ジジイが魔法防御結界を張ってくれなきゃ、あの世に逝ってたな」
「は？」
赤毛の男はニヤリと笑み、顔を崩した。その表情は実に……アジの先王に似ていた。許婚の父であった先王とはよく共に狩をし、武術の鍛錬につきあってもらったのだ……
「『極光の剣』は、信心に欠ける男はお嫌いだそうだ。けど、まあ、俺しか居ないんだ。言う事を聞いてもらうしかない」
「……」
「俺は魔族を祓いたい」
「……」
「この国は魔族の黒の気で覆われている。何処もかしこも、真っ黒だ。親父やお袋、アジンエリシフにアジャニホルト、アジフラウ……家族の眠るこの地が穢されているのは許せねえ。俺はこの国に巣くう魔族を全て浄化したい」
「魔族を祓う為……その為だけに神を呼ぶのか？」
「ああ」
「この地上の人間の争いに、神を巻き込むつもりはないのだな？」
「ああ」
ハリハールブダンは、静かに目の前の男を見つめた。
数多くの戦場を乗り越えてきたと思われる逞しい体、先王を思いださせる困難に屈せぬ気性、意志の強い緑の瞳……間違いなく、この者はアジの新王だった。
「あんた、他人の考えが読めるんだってな。なんなら、俺の心を読んでもいいぜ、ハリレーレクの甥っ子」
「ハリハールブダンだ」
名を名乗り、ハリの戦士は眼帯を外し、左眼を開いた。普段、眼

帯の下に隠しているので、視力は多少衰えていた。が、左眼自体に欠陥はない。『欠けたる者』には王位継承権がない。ケルティ新王朝の監視を厭って左眼を潰す演技をし、片目を装っていただけなのだ。

「ハリハールブダン……そうか、あんたが」

赤毛の戦士は昔を懐かしむように瞳を細めた。

「会うのは初めてだが……俺はあんたの名前を知っている。ガキの頃、俺は、あんたの悪口を言っては、アジンエリシフに張り飛ばされていた。俺のアジンエリシフ盗むハリの馬鹿惣領……俺はあんたをぶん殴りたくてしょうがなかったんだ」

「では、さきほど、宿願はかなったな」

ハリの戦士は快活に笑った。

「アジンエリシフは美しく勇敢な少女だった。俺も今では妻も妾（めかけ）も居るが、アジンエリシフに勝る女には出会えなかった」

「ったりめえだ」

「残念だな……運命の歯車が狂わなければ、おまえは俺の義弟になっていたのだ。アジクラボルト様の子息よ」

「アジスタスフニルだ」

赤毛の戦士はニヤリと笑った。

「力を貸してくれ。うまくすりゃあ、ハリレーレクに操られていたハリのシャーマン達も助けられる」

「わかった」

「あんたが『知恵の指輪』と共に神に願ってくれりゃ、俺も『極光の剣』に触れられるかもしれん」

あたたかな気を感じ、シャオロンは重い瞼を開いた。

大魔術師カルヴェルの笑顔が目に入った。自分（シャオロン）を抱きかかえて老人は、ニコニコといつも通りに笑っている。

『聖王の剣』を手にしたアジャンの前に身を投げ出し、そして、意

識を失ったのだが……

生きている……

死ななかったのだ……

信じた通りだ……敵の呪に囚われていても、アジャンは一流の戦士だ。敵の呪に屈し、仲間(シャオロン)を殺すはずがない。

『共に戦う仲間を信じよ。友が闇に堕ちたように目に映ったとしても、信じ続けるのだ』

英雄(シャダム)の教えが心に甦った。

信じ続けて良かった……

シャオロンの頬を熱いものが伝わった。

当代随一の大魔術師は移動魔法で、教え子(セレス)の危機に駆けつけてくれたのだろう。カルヴェルが来てくれたのなら、もう大丈夫だ。もう全て解決したはずだ。

「ほれ、シャオロン、見えるのか?」

カルヴェルが体を支えて起こしてくれた。シャオロンの横では、老忍者ガルバが不貞腐れた態度であぐらをかいていた。アジャンとの勝負に敗れ、気絶させられたのが悔しいのだろう。

セレスとアジャンとハリ族の戦士ハリハールブダンが、立っているのが見えた。

セレスは両手を顔の前に組み合わせ、祈るように赤毛の戦士を見つめていた。

赤毛の戦士は緑の鋭い眼差しで、岩に鞘ごと突き刺さっている剣を見つめていた。黒の気は完全に消えており、いつものはすに構えた顔を見せている。

ハリハールブダンは眼帯を外していた。左目が不自由な為、部族王を継ぐ資格が無いのだと言っていたが、それは芝居だったようだ。左の茶の瞳には何の異常も見られない。ハリ族の戦士は金の指輪を、左の二の指にはめようとしているようだった。

「これから、ショーが始まる」

老人も三人を見ていた。

「ショー？」
「わしが生きているうちには、おそらく二度とお目にかかれぬであろう、凄まじく素晴らしいショーじゃ。じゃが、派手すぎて、かなり危険な見世物でもある。入口におったアジの戦士達も故郷の村に送っておいた。死なぬように、な」
「え？」
「シャオロン……おぬしの眼を貸してくれ」
「オレの眼を？」
「セレスの眼は、この世の神秘が全く見えぬ。わしも、魔法道具（マジック・アイテム）がなければ、さほど見えぬ性質（たち）だ。じゃが、わしの魔法道具（マジック・アイテム）では役不足じゃ、無理に見ようとすれば壊れるに決まっておる。おまえの眼を、わしとセレスに貸してくれ」
「オレの眼でお役に立てるのなら……」
シャオロンは小さく頷きを返した。周囲の気が異様なほど緊張している。これから何かとてつもない事が起こるのはシャオロンにもわかった。
「すまぬな、シャオロン、このショー無事に終わらせてみせる……わしとセレスの力で、な」
老魔術師が呪文の詠唱を始める……
シャオロンは意識が遠のいていくのを感じた。

「いくぜ！」
赤毛の傭兵が気合をこめ、封印された剣――『極光の剣』の柄を握った。

鐘の音が最も厳かに聞こえる場所……
金箔の張られた輝く教会の最奥――聖障の先の司教の祭壇に、ゼグノスの分身が二体いた。

二人とも黒の気の塊と化していた。
が、身につけている物から、本来の正体はわかる。
一人はその体を、王冠や宝石、ローブで飾り立てている。この国の名目上の支配者、ゴドゥノフ国王。その成れの果てだ。
もう一人も、国王に劣らぬ豪奢なローブをまとっている。黒の気の塊となる前は、この国の実質的な支配者として権力をほしいままにしていた男、摂政ボルコフの変わり果てた姿だ。
傀儡の王である事に不満を抱いていたゴドゥノフ王や権力志向の強いボルコフは、以前から、魔の気の影響を強く受け、ゼグノスの操り人形となって動いていた。シベルア移民を厚遇しつつケルティ人迫害の政策を強化し、両者の格差を広げたのはこの二人だった。
鐘の音が聞こえた時、ミサに参加していた二人は人の姿をあっさりと捨て、教会に籠もった。術に囚われ衝動のままに殺戮に向った者達が去った後、二人っきりになった教会から千里眼の魔法で全てを見ていたのだ。
王宮内で繰り広げられる殺人の宴を……歓談し、鑑賞していたのだ。
ところが……
鐘の音、響く教会に……
侵入者が現れた。
二人は同調（シンクロ）した動きで同時に首を動かし、珍奇なものを見るかのように侵入者を見つめた。
扉を蹴り破って入って来た者は、右手に刀を持ち、肩で息をしていた。東国風の黒の着物に袴に覆面。その体は血に染まりきっていた。
殺人の宴で勝ち残った殺戮者だ。数え切れぬほどの人間を手にかけ、生き延びた者ならば、黒の気に染まり魔に堕している筈。人の殻を捨て、黒い気の塊となっておかしくない。
「きさまらが術師か？」
けれども、その頭部を覆う覆面から覗く黒の瞳は……正気を保っ

ていた。不思議な事に、国中に満ちているゼグノスの気に全く染まっていないのだ。人が人である限り、必ずゼグノスの影響下に入るはずなのだが……

「鐘の周囲に結界を張って接近者を拒み……一定間隔で勝手に鳴るよう鐘に魔法をかけているのはきさまらか？」

《おまえは何だ？》

二人は同時に思念を発した。

《人間か？》

「きさまらを殺せば……終わりそうだな」

苦しい息を吐いていた男が、突然、素早く動く。右手の刀を構え、二人の魔族を狙う。

ゼグノスの分身達は、侵入者を狙い、気弾を発した。だが、侵入者は高々と跳躍してその全てを避けきると、その刃を魔族へと振るった。

「滅びよ！」

その者の振るった刀がボルコフであったものを、両断する。遅れて刀身より飛び散る、聖なる水。

返す刀が、ゴドゥノフ王のなれの果ても狙う。急ぎ小距離の移動魔法で逃げたゴドゥノフ。ボルコフは一握の塩となって消え果てた。が、ゴドゥノフは無傷だ。

「ちっ！」

舌打ちを漏らし、刀を構えなおし、侵入者が振り返る。ぜいぜいと吐く息は苦しげに乱れていたが、その黒の瞳は射るように鋭くゴドゥノフをねめつけていた。

移動魔法で距離を開いたゴドゥノフは、恐れを込めて男を見つめた。

《きさま、何故、正気なのだ？》

血染めの忍者装束の者が摺り足で距離を縮めて来る。

《あの鐘の音が聞こえないのか？》

侵入者は不愉快そうに目を細めた。

「……鐘の音など聞こえんわ」
そう言うや、忍者ジライはゴドゥノフに斬りかかって行った。

赤毛の戦士はためらう事なく、目の前の大岩に鞘ごと刺さっている『極光の剣』の柄を握った。
バチバチ！　と、柄より火花が散り、肉の焼ける匂いがした。掌が焦げたのだ。だが、赤毛の戦士は口元に歪んだ笑みを浮かべながら、一層、力強く柄を握り、一気に大剣を鞘から抜いたのだった。

両刃の幅広の大剣――『極光の剣』。アジ族と部族神との契約の証の聖なる武器。
緻密な細工の施された黄金の指輪――『知恵の指輪』。ハリ族と部族神との契約の証の魔法道具（マジック・アイテム）。
『極光の剣』と『知恵の指輪』……二つの祭器より光が広がっていった……

遥か彼方の地の底から、魔獣のうなり声のような低音が響いてくる。
それは徐々に近づいて来る。
徐々に大きくなってくる。
セレスは唾を飲み込み、喉を鳴らした。
何かとてつもなく大きなモノが地中で蠢き、近寄って来ているのだ……

「俺は、アジ族の最後の王アジクラボルトの長男アジスタスフニルだ！　血の契約に基づき、汝を呼ぶ！　長きに渡りアジとハリは汝

を信仰した！　汝の子らの求めに応じよ！　汝の子らの大地は汝の大地！　穢れし大地を浄化せよ！」

「俺は、ハリ族の現王ハリビヤルニの長子ハリハールブダンだ！　ハリとアジの神よ……我らに栄光を授けし神よ、汝の子らを救い給え！　美しき大地を穢す穢れし魔族をこの地より祓い給え！　まばゆき光にてこの世を照らし給え！」

『極光の剣』の柄を右手に握ったアジャン。
『知恵の指輪』を左の二の指にはめたハリハールブダン。
アジとハリのシャーマンの呼びかけに……
地中より何かが応えた……

地鳴りに、洞窟が揺れる。
セレス達はカルヴェルの結界に守られているので振動を全く感じないのだが、そうでなければまともに立っている事すらできないだろう。洞窟の天井からは岩さえ落ち始めている。
カルヴェルは魔術師の杖を右手に、左腕でシャオロンを抱きかかえる形でアジとハリのシャーマンを見つめて座っていた。その顔はいつになく真面目で、その口は絶えず呪文を紡いでいた。
大魔術師の腕の中の東国の少年は、まるで大きな人形のようだった。
その顔からは、一切の感情が抜け落ちている。
少年の硝子のような瞳は、二人のシャーマンと地中から近づきつつあるものの姿を捉えていた。
岩を擦り抜け、それは現れた。
セレスは目を見張った。

そちこちで、何かが岩を通り抜け、次々に現れ……セレスや仲間達の体を通り抜け、天井の岩へと吸い込まれてゆく。けれども、それが何なのかセレスにはわからなかった。小さい生き物が無数にいるようにも思えるし、全てが繋がっているようにな気もする。しかし、それ（それら？）は、あまりにも漠然としすぎていて、形がわからない。

ただ、嫌な感じはまったくしない。むしろ、あたたかな感じがする。欠けたるものが満たされてゆくような充足感があった。

《神獣じゃよ》

セレスの頭の中に、カルヴェルの思念が届いた。

《アジとハリが『動物達の母』と称える、鉄の羽根と鉤爪を持つ巨大な雌鷲……シャーマンと部族神との繋ぎ手……シャーマンを神の子たる王に産み直し、シャーマン王に真の王たる能力を与え、シャーマン王を守護し、神の御力を託し、その臨終と死に立ち会うものじゃ》

「雌鷲……？」

言われてみれば、巨大な羽毛のようなものが見える。羽毛一枚だけでセレスよりも大きい。だが、地中から出て洞窟の天井へと飲み込まれ行く羽毛を目で追っても、何が何だかよくわからなかった。岩を通り抜けてゆくモノがあまりにも巨大すぎて、全体像が掴めないのだ。

カルヴェルの側の老忍者は、天井ばかりを気にし、低く身をかがめていた。彼の体の中も巨大な雌鷲の一部が通り過ぎているのだが、気づいてすらいないようだ。

《ガルバの眼には現実しか映っておらぬ。わしとおぬしはシャオロンの眼を借りておるゆえ見えるが、『動物達の母』は実体を持たぬ精神的存在。人の眼には映らぬ生き物なのだ》

アジャンもハリハールブダンも両目を閉ざし、その場に佇んでいた。激しい気性のアジャンもハリの戦士も、まるで神像のようだ。厳かな静かな顔をやや傾け、口元に穏やかな不思議な笑みをたたえ

ている。

《『動物達の母』はアジとハリの部族神の御力を今世にもたらすもの、神の光をこの世に降ろす存在であり、アジとハリの祖先の魂を運ぶものじゃ。アジはその右の翼を、ハリは左の翼を担う。それゆえ、両部族のシャーマン王たる者が揃わねば、『動物達の母』は飛び立てぬのだ》

「飛び立つ……」

《昔、アジクラボルト殿が言っていた。アジの王の試練は、『動物達の母』と対話にあると。人としての生を殺してもらい、四肢を切断してもらい、新たに生み直してもらう……むろん、精神的にじゃが、相当、苦痛を伴うものらしい。その試練を乗り越えて初めて、アジの王たる資格を得るらしいが……アジスタスフニルはその試練すら必要なかった。優秀なシャーマンであるあの男、見事に右の翼を羽ばたかせておる。左は、まあ……ぶきっちょながらどうにか。『知恵の指輪』だよりの動きじゃな。祭器が逆じゃったら、『動物達の母』は飛び立てなかったやもしれぬ》

洞窟が激しく振動する。

《神の試練を乗り越えた二部族のシャーマン王が心を一つにして望めば……『動物達の母』を通し、神は無限の力を二人の王に貸し与える……神の御力がこの世に降りてくるのだ……そう口承が残っているとも、昔、アジクラボルト殿は教えてくれた。今から神の御力をこの眼にできるのだ》

カルヴェルの興奮が、セレスの心にも伝わってきた。

今、目の前に、聖なる生き物――神獣が居るのだ。人が生まれる以前の太古より神の使いとして、奇跡を起こしてきた生き物が居るのだ……

《頃合じゃ……同調（シンクロ）する。セレス、『勇者の剣』を構えよ。おまえの働くべき時は必ず来る》

カルヴェルの指示通り、『勇者の剣』を中段に構える。その途端……セレスは宙に浮いていた。

（え？）

そこは地上だった。粉雪舞う薄曇の空が間近にあり、足元には雪に埋もれた森がある。

その森から……

翼を広げた巨大な鷲が羽ばたき、天を目指し昇って来る。

その羽根が羽ばたく度、巨大な衝撃波が波紋のように広がっていくのが見えた。その衝撃波は、鷲の周囲に人が張った神秘の力――カルヴェルの結界に吸収され威力を弱められていた。が、それでも強風を起こし、周囲に雪を舞わせ、枝を折っていくほどの力があった。カルヴェルの結界が無ければ、森は根こそぎえぐられ、荒地と化した事だろう。

鷲が鳴く。

その鳴き声に、空気が振動する。

その巨大な鷲が舞い上がって来る様を見ていたはずが……気がつくと、鷲の姿は見えなくなっていた。何時の間にか、視界が変わっている。セレスは遥か彼方を見据え、闇の中を飛んでいた。

空も大地も森も人も……全ての生きとし生けるものが闇に犯されている。

醜い魔に……

神の造りし世界を……邪悪な魔が穢しているのだ。

怒りは形となった。

進むだけで……

羽ばたくだけで……

穢れし魔は光に抗えず消えてゆく……

羽ばたきが生む浄化の光が、全ての穢れを祓ってゆく。人や物に取り憑いていた魔族は己を保てなくなって消え去り、魔界へと戻ってゆく。

後には、あるべき美しい世界が甦る。雪と氷に閉ざされた静かな大地。神の子らの末裔。光あふれる世界……羽ばたきが地上に本来の姿を取り戻させてゆく。

羽ばたき……？

ようやくセレスは気づいた。自分が今、何の魂と共感しているのか……

アジ族とハリ族の部族神の使い、神獣『動物達の母』。

巨大な雌鷲と同調（シンクロ）し……

この国に巣くっている魔を浄化しているのだ。

『動物達の母』はその羽ばたきだけで、大魔王四天王ゼグノスの魂を殺していった。

ゼグノスに憑かれていた人間は、人としての心を残しているか否かによって運命が分かれた。人としての心を捨てた者はゼグノスと共に浄化されてこの地上から消滅し、そうでない者は理性を取り戻した。

天を舞う巨大な雌鷲を目にしその神々しい姿に心打たれ跪く者もいれば、屍が広がる地獄の宴の跡の凄まじさに正気を失う者もあり、人の心を取り戻しても戦いを続ける愚かな者もあった。

だが、誰の心にも等しく強烈なイメージが刻まれた。魔を浄化する神獣と、その操り手の二人の戦士……この国の救い主達の姿は聖なる気と共に人々の心に伝わっていた。魔力・霊力が無い者にも等しく、その奇跡は起こっていた。解放者――アジスタスフニルとハリハールブダン。二人のシャーマンに、人間達は感謝の念を捧げたのだった……

《おのれ……》

浄化の気を放つ神獣の出現に、魔族ゼグノスは怒りと恐怖を感じていた。神族の浄化の光に対し、魔族はあまりにももろい存在だ。神獣の翼がケルティ中を覆えば、ゼグノスの分身は全て消滅する。憑依した者達から離れ異次元に逃げ込めばその翼から逃れる事は可

能なのだが、掌中に収めかけていたケルティを失う事となる。ケルティは再び神族の支配下に置かれてしまうのだ。

《させぬわ！》

「む？」

忍者ジライは後方に飛び退り、敵の様子を窺った。

糸が切れた操り人形のようにゴドゥノフの衣装をまとった黒い塊は倒れ、その後、微動だにしない。明らかに様子がおかしい。

教会の床に倒れたモノは、やがて空に溶け込み、消えた。一握の塩すら残さずに、ケルティ新王朝ゴドゥノフ国王は消滅したのである。

いぶかしく思い周囲を探っていた東国忍者は、ハッと頭を上げ、天井を見上げた。

彼の耳に初めて聞こえたのだ。高らかに鳴り響く鐘の音が。絶え間なく響く厳かな音色。一定の間隔で鐘を鳴らすよう魔法がかけられているのだ。

しかし、それは……

どう聞いても、ただの鐘の音だった。

近衛仕官アレクセイやナーダの部下達は、鐘の音に惑い、殺戮へと走った。その狂気を誘う術は、鐘の音から消滅しているように思われた。

ゼグノスは人間達の体を捨てた。せっかく魔に堕とした人間も、ゼグノスが離れれば中身を失い形を散じてしまう。非常に残念だったが、小物魔族など造ろうと思えば幾らでも造れる。今は小さな殻に分かれて宿っている己が魂を可能な限り一箇所に集中させ、能力を取り戻すべき時だ。

最も精神力の強い憑代――とあるシベルア司教の体に、ゼグノス

は己が魂を集合させた。魂を分散していては、たいした能力は使えない。神族に対抗する為に、ゼグノスは地上で最も能力が使える姿をとる事にしたのだ。

天を舞う巨大な雌鷲『動物達の母』に、ゼグノスの集合体は向って行った。

翼の放つ浄化の光が、黒く巨大なゼグノスの気を少しづつ削いでゆく。

己が魂が消滅していく痛みの中、尚も、ゼグノスは突進を続けた。狙いは術師。巨大鷲を操る人間（シャーマン）さえ倒せばいい。二人の術師のうち一人でも消えれば、巨大鷲は地上との縁を無くし、地下に帰らざるをえなくなる。いま一人の術師も、乗り物を無くした衝撃に、おそらく魂を保てず消滅するだろう。

雪曇の空を飛ぶ鉄の翼と鉤爪を持つ巨大な鷲。その翼には、右翼にアジの、左翼にハリのシャーマンの魂が宿っている。

狙うのならば……左であろう。術師の技量が低く、神獣との同化も弱い。わずかに揺さぶるだけで、耐え切れず、ハリのシャーマンは魂を散じるだろう。

片翼さえ落とせば、勝てる。

ゼグノスが左翼のハリのシャーマンめがけ、邪悪な気を放とうとして……その時だった。

巨大な鷲に重なるように、金の髪を振り乱す乙女が現れた。澄んだ青い瞳でまっすぐにゼグノスを捉え、身の丈ほどもある巨大な大剣を振りかざす。

女勇者と『勇者の剣』！

気づいた時には、ゼグノスの魂はその刃で両断されていた。

「あら？」

セレスは目をきょとんとしばたたかせ、振り下ろしていた両手剣の切っ先を上げた。

一瞬、自分が何処にいるのかわからなかった。が、すぐに洞窟に戻ったのだと気がついた。岩が頭上から降ってきては、目に見えぬ障壁に阻まれ別所へと飛んでゆく。

セレスのすぐ側には、『極光の剣』を手にしたアジャンと『知恵の指輪』をはめたハリハールブダンがたたずみ、少し離れた所でシャオロンを抱えたカルヴェル、それにガルバが座っている。

巨大鷲を狙った魔族を倒した事で、鷲との同調（シンクロ）が解けたのだ。

極光の剣　17話

女勇者の刃と神獣の浄化の気。凄まじい光の力から逃れられたのはほんのわずかな魂だけだった。異次元空間に残しておいた憑依体に逃げ込んだゼグノスは、その能力の大半を失っていた。

それに、むろん、油断もあった。彼が恐れていたのは、『勇者の剣』と神族とその眷属のみ。人間など、憑依すべき殻。とるにたらぬ些少な存在と見下していた。

（馬鹿な……）

ゼグノスは、己の憑代の肉体を貫く掌を呆然と見つめた。掌から広がる浄化の気が、黒の気と化した体を溶かしてゆく。

「……あなたが何処に潜んでいるのかなんて、最初からわかってましたよ」

ゼグノスは我が目を疑った。異次元空間に封じていた人間に……殺されつつあるのだ。神族（インディラ神）を信仰しているだけの愚かな存在に……

「私には目に見えぬものを視る力はありません。ですが、職業柄、黒の気には敏感なのですよ。あなた、たかが人間と侮って、この空間に置く憑代の気配を消さなかったでしょ？　何処にいるのかなんて、すぐに気づきましたよ」

逃げられない……インディラ神の下僕は聖なる結界をもって憑代の肉体もゼグノスも縛っている。

「でも、この空間に居るあなたを倒しても、数多くいるあなたの分身が一つ消滅するに過ぎない。だから、待つ事にしたんですよ、あなたを倒せる機会が訪れるのを、ね」

何百何千何万にも魂を分断して、ゼグノスは、浄化の光に抗った。憑代の肉体の内で何百何千何万の魂が、徐々に光に飲まれ、消滅していく。

「あなたはあの神獣に対抗する為にケルティ中に分散させていた魂

を集合させましたが……私を逃さぬ為に、この空間に居た分身は残したでしょ？　あれが、まさに勝負の分かれ目でした。あなたはこの空間の分身を残し、残りの集められるだけの魂を一箇所に集中させた……つまり、現実世界の肉体が滅びれば、あなたをここに帰ってこざるをえなくなる。あなたの魂がここにある憑代に集中する時を、私は待てば良かったのですよ」

全てが消えてゆく……意のままに動かせる全てのものが……ゼグノスは小さくなってゆく己の行く末を自覚した。

「あなたの魂はまだ私やここに居る私の部下の中にも残っているのでしょうけれど、聖なる結界に包まれたまま私達は現実世界に戻り、そこで神獣に浄化の気を浴びせてもらいます。あなたの負けです、ゼグノス。ケルティの魔族の宴は失敗に終わったのですよ」

ふさぁ……と、何かが崩れ去る感覚だけが手に残った。武闘僧ナーダは突き出していた掌を下げた。

ナーダとその部下の二人の忍者は、もと居たシベルア教の大聖堂に戻っていた。

「ナーダ？」

『ムラクモ』を構えた血みどろのジライが、いぶかしそうに三人を見つめる。唐突に教会に現れた三人を警戒しているようだ。

ナーダは、仲間に対し笑みを見せた。

「ご無事で何よりです、ジライ。この国を狂わせていた魔族は滅びました。大魔王四天王ゼグノスは消滅したのです。セレスと、アジとハリの神獣の御力で……ね」

教会に鐘の音が響いている。鐘にかけられていた魔族の邪悪な術は、術師の死と共に解けている。鐘は心洗われる天上の音楽を奏でるばかりだった。

頭上に厳かな存在を感じ、ナーダは結界を解いた。

何かがナーダの中を通り過ぎていった。例えるのなら、それは、

降り注ぐ光の雨だった。あたたかく、やわらかで、慈悲に満ち溢れた気だ。

この地の神の気だ……

異国の神の恩恵だ……

手脚の装甲――神獣クールマの甲羅が神の気に共鳴している。神の気をこの世にもたらしている存在――『動物達の母』にクールマが心を開いているのだ。同じ聖なる生き物であるがゆえに。

聖なる気が鷲と乗り手のイメージを伝えてくる。空舞う鷲と両翼の戦士。ケルティ中に満ちる聖なる気が、誰によってもたらされたものか、光を浴びたものならば誰もがわかる事なのだ。

ナーダは顔を上げた。心の中にイメージは伝わった。だが、いくら瞳を凝らしても、見えるのは天井や燭台などの現実だけ。神獣がすぐ側に存在しているはずなのに、ナーダの目には現実しか見えないのだ。クールマとは異なり聖なる鷲には実体がない。その神々しい姿は見えない。見る事を許されていないのだ……

神秘を映せぬ瞳が、悲しく思われた。

けれども、この体はインディラ神の加護の下に生まれたのだ。神秘を見通す眼が与えられなかった事にも、何らかの理由があるはずだ。不満を抱いてはいけない。神の姿は見えずとも、インディラ神を崇め、信仰の道を貫いてきたのだ。見えずとも、異国の神に敬意を払う事はできる。そう思い自らを慰めようとしていたナーダは……

後頭部を殴られ、前のめりに倒されてしまった。

床の上から振り返り見上げると、身をすくませてなりゆきを見守る二人の部下ムジャとヤルーと、怒りを露に鞘を握り締めるジライが見えた。どうやら、ジライに鞘でぶん殴られたらしい。

「阿呆！　この事態に、何を惚けておる！」

血の雨を浴びたような姿の覆面の忍者が、怒鳴りつけてくる。

「この始末をつけるのが、きさまの仕事だろうが！　王宮中で殺し合いがあったのだ！　この国の王も摂政も魔に堕ち死んだ！　魔族は滅びたのやもしれぬが、国の中枢も、又、壊れたのだ！　これぞ

好機ではないのか？」
「好機？」
「大国シベルアとて、これほど大々的に国が壊されてはすぐには補強できまい。このどさくさに紛れうまく立ち回れば、ケルティ人の地位向上も可能なはず」
「あ！」
ナーダは立ち上がった。
「その通りです！　どうせなら、このどさくさに、ケルティ人の上皇を立てちゃうべきでしょう！」
「なら、さっさと働け。謀はきさまの得意分野であろう？」
「ジライ……」
疲れたように（いや、実際、ひどく疲れているのだろうが）瞳を伏せる忍者を、武闘僧は感動して見つめていた。慈悲の心など持ち合わせていないはずのジライが、ケルティ人の問題に関心があったとは……。表面上は決して友好的ではないけれども、心の中では仲間（ヤン）の事を案じていたのか、と。
「威張りくさっておったシベルア移民から実権を奪い、ケルティ人に与えろ。セレス様の健康の為じゃ」
「……は？」
「ケルティに来てから、食欲はなくなる、寝不足になる、長くお腹をくだされる、胃痛の自覚もあるご様子。シベルア移民どもの専横に、セレス様はお心を痛められ、ストレスばかりを溜めておられるのじゃ。さっさとストレスの素を取り除け」
「……」
又、馬鹿な感動をしてしまった……ナーダは肩を落とし、うつむいた。が、すぐに再び忍者（ジライ）に鞘で殴られ、顔を上げさせられる。部下二人が、主人（ナーダ）を殴る東国忍者を呆然と見つめているのがナーダの目の端に映った。
「さぼるな、ナーダ！　働け！　我に疲労回復の魔法をかけよ！　部下に指示を出せ！　悪知恵を働かせよ！　今がきさまの働き時で

あろうが！」
「……」
ナーダは溜息をつき、仲間を見つめた。魔に操られていた人々が各地で争いを起こし、血で血を洗う戦いを繰り広げたのだ。確かに、感傷にひたっている暇はない。現状調査、生き残った高官との交渉、ケルティ人代表の選出及び支援、生き延びた人々への救済活動……現実問題は山積みなのだ。自分がこの場に居る事自体が、神の計らいのような気もした。
「……一分ほど時間をください。その後は、あなたのご希望通り馬車馬のように働きますから……ちょっとだけ待ってください」
ナーダは天を見上げた。未だに頭上には輝かしい光を感じる……尊い神の世界とは縁遠い俗物の身を恥じながらも、武闘僧は神獣に対しインディラ式の拝礼を捧げ、心からの尊敬を示した。

眼下に純白の雪景色が広がっていた。黒の気は消滅していた。空からでは、人が流した血すら見えない。ただ白い世界が広がるばかりだ。
黒く醜いもの……薄汚れた人間も、雪に溶け込んでいる。見えるのは白い世界だけだった。
何ものにも穢されないその世界を眺めているうちに、頬を涙が伝わった。
あまりにも美しすぎて……涙は止まらなかった。

『アジスタスフニル』

アジンエリシフの声が聞こえる……声は自分の内側から響いているようであり、地上から伝わってきているようでもあり、空から広

がっているようでもあった。
何処でも同じだ。
この地上（ケルティ）の何処にも、アジの力は満ちている。アジの魂は全てのものに溶け込んでいるのだ。

『兄ちゃん』

アジャニホルトの声が聞こえる……
アジフラウの笑い声も聞こえる……
母の呼び声も……
そして……

『アジスタスフニルよ』

父アジクラボルトの呼びかけが聞こえた。

『汝、血の宿命に従い、務めを見事に果たした。後は、アジの男として、地上に囚われず、心の赴くままに生きよ。血は脈々と続く……我らが消えた後も汝は生き、汝が死すとも血は生き続ける。アジは滅びぬ。汝は光と共にあれ』

ゆっくりと瞼を開くと、顔をくしゃくしゃに歪めた女勇者が見えた。今にも泣き出しそうな顔だ。
洞窟の中は崩れ落ちた岩のせいで、形が変わっていた。が、振動

は収まっていた。巨大鷲『動物達の母』は魔族を浄化し終えると、空に溶け込むように自然に消えてしまった。何の天変地異も起こさずに、だ。地中より登場した時とは正反対の、あっけない退場だ。鷲の消滅と同時に、鷲と同化していた魂は本来の肉体に戻ったのだ。

シャオロンも居る。疲れきった顔のシャオロンを、老魔術師が支えている。目が合うと、シャオロンは弱々しくにっこりと微笑みかけてきた。その側には老忍者も居た。

隣に佇んでいるハリハールブダンは、左手の指輪に恭しく口づけを捧げていた。鷲と同化している時に、この男の記憶や思いは共有している。ハリハールブダンは空より必死に地上を眺め、地上の生存者の中に息子ハリハラルドを見つけていた。信心深いこの男は、ハリの世継ぎの無事を喜び、部族神に心からの感謝を捧げているのだ。

赤毛の戦士は、右手にある大剣を静かに見つめた。

『極光の剣』……アジ族が部族神より与えられた聖なる武器。アジの王が所有する、神との契約の証だ。

不思議なほど、今、この武器は、手に馴染んでいる。雷を落とされたり、手を焼かれたのが嘘のようだ。遥か昔からこの武器と共に合った先祖が認めてくれたのだ。この武器を振るう事を……

「……礼を言う」

アジャンの言葉に、ハリの戦士はかぶりを振った。礼を述べるのは自分の方であると。

「シャオロン……」

尊敬する男からの呼びかけに、東国の少年が表情をひきしめた。

「ハリレーレクの術に囚われている間……ずっとおまえの声が耳に聞こえた。何があっても俺を信じると、繰り返し繰り返し、おまえは言い続けていた。うるさいほどに、な」

「アジャンさん……」

「さっきの戦闘でも、おまえ、俺を殺す気なかったろう？　手ぇ抜いて、それでどうにかなる相手だと思ったのか？　まったく馬鹿な

奴だ」
「……すみません」
「バカ、謝るな。おまえがどうしようもないバカだったおかげで、俺はほんの少しだが正気を取り戻せたんだ」
「え？」
「ハリハールブダンやそこのナーダの部下を斬らずに済んだのは、おまえのおかげだ。おまえを殺したくねえと思ったから……俺は手加減したらしい」
「アジャンさん……」
「でなきゃ、王宮でセレスを襲った時みたいに斬りまくってたさ。なあ、シャオロン、クソ忍者は死んだのか？　くノ一の方はちょいと手をぬいた記憶があるんだが……」
「あ！　お二人とも無事でした。ジライさん、深手だったみたいですけど、ナーダ様がすぐに癒しましたから」
「ケッ！　何だ、殺し損ねちまったのか」
「ははは……」
シャオロンがひきつった笑顔を見せる。赤毛の戦士の言葉を性質（たち）の悪い冗談だと思っているのだ。
次に、アジャンは老魔術師を見つめた。
「ショーは堪能できたかい、大魔術師様？」
「うむ。満足した」
老人はニコニコと楽しそうに笑っている。
「天変地異を抑えるだけの働きでは申し訳ないくらい、面白い見世物であった。のう、アジスタスフニルよ、過ぎた報酬を貰ってしまったゆえ、わしは、もうちょっと、おぬし達につきあってやるぞ」
「ん？」
「おぬし達の偽の用心棒として働いてやる」
「偽の用心棒？」
「さよう」
カルヴェルはアジとハリの戦士の顔を見渡した。

「これからのおぬし達の活躍の場に、わしが居た方が話が早くなる。わしは百万の軍隊に匹敵する実力の持ち主じゃからの。わしをケルティ新王朝の牽制に使え」

赤毛の戦士はけげんそうに眉をしかめた。

「あんた……どの勢力につくのも嫌だったんじゃなかったけか？」

「わしはどの勢力にもつかん」

老人はにっこりと笑った。

「報酬分、働くだけよ。そうじゃのう……ケルティに上皇制度が復活し、その上皇がシベルアと対等な関係を築けるまで……もしくはわしが死ぬまでの間、ケルティの上皇の為の張子の虎として働いてやろう」

「張子の虎？」

「戦力として戦う気はないが、見せ武器となってやるという事じゃ。ケルティがシベルアと対等になるなど、おいそれとはいかぬ。ま、二、三十年はかかるじゃろ。その間、わしがケルティの後ろ盾となっておれば、シベルアも思い切った軍事行動はできまいよ」

ホホホホホと老人は笑った。

ハリハールブダンは、妙なものを見るように老魔術師を見ていた。こんな老人がシベルアへの牽制になるのか？　と、疑っている顔だ。大魔術師カルヴェルの威光も、ハリの戦士長には伝わっていないようだ。

赤毛の戦士はそこで溜息をつき、ちらりと視線を女勇者に走らせてから、赤毛を左手で掻きつつ嫌そうに口を開いた。

「いろいろと……世話になったな、セレス」

「アジャン……」

女勇者はハッとして、口を押さえた。

「ごめんなさい、アジャンじゃなかったわね。えっと、アジスタ……？　アジスタスフル……じゃなかった、アジスタニフル……何か違うような……あれ？」

赤毛の戦士の眉間に皺が寄った。

「アジスタスフニルだ」
「わかったわ！　覚えるわ！　アジスタスフミルね！」
「アジスタスフニルだって言ってるだろ一が！　馬鹿女！」
怒鳴ってから、赤毛の戦士はフンと鼻を鳴らした。
「……アジャンでいい。おまえは俺をアジャンと呼べ」
「え？　でも……」
「俺はその名前でエウロペ国王と契約を結び、おまえの護衛を引き受けた。だから、おまえの前では俺はアジャンだ……ただの傭兵だ」
「アジャン……」
「その……何だ」
赤毛の傭兵がボリボリと頭を掻いた。
「悪いが……少し休みをくれ」
セレスはキュッと唇を噛み、拳を握り締めた。
「やっぱり……行くのね」
「ああ。面倒だが、血の宿命ってヤツだ」
赤毛の戦士は火傷を負った右の掌で、尚も『極光の剣』を握り締めている。
「アジの生き残りを集めて束ねねばならん。俺の中の血がそうしたいって望んでいるんで、ね」
「……そうね」
セレスは微笑もうとした。しかし、
「私もそうした方がいいと思うわ……あなたは、アジの王の息子ですもの」
泣き出しそうな歪んだ顔しかつくれない。笑みを浮かべる事ができない……
「……元気でね、アジャン」
「あ？　ああ、そっちも大変だと思うが、頑張ってくれ。まあ、クソ坊主が居るからどうにかなるだろう」
「……私達の事は心配しないで大丈夫よ。あなたは自分のなすべき事をなし遂げて」

「わかった。すぐに戻る」
　嘘……セレスはグッと涙を堪えた。カルヴェルは言っていた、ケルティが真の独立を勝ち取るには二、三十年かかると。アジを率いる運命の赤毛の戦士の前には、長い困難な道程があるのだ。そんな彼を従者として連れて行くなど……できるはずがない。
「今回の失踪分を含め復帰までの日数を後で計算し、日当を報酬から差し引かないとな。それほど長くかからんとは思うが……」
「いいわよ！」
　セレスは自分でも驚くほどの大きな声を出してしまった。
「あなたはケルティの平和の為に働くんでしょ？　魔族の悪道の後始末をするんでしょ！　それだって、立派な平和活動よ！　勇者の従者にふさわしい仕事だわ！　だから……エウロペの国王陛下にはきちんと話しておくわ、あなたへの報酬をきちんと全額払ってもらえるように……」
　セレスは赤毛の戦士から顔をそむけ、魔法の師匠へと向き直った。泣く寸前の子供のような顔で。
「お師匠様……私とシャオロンとガルバさんを王宮に運んでくださいませんか？」
　この場からすぐにも居なくなりたいのに……
『勇者の剣』はまったく反応しない。
　心が乱れている為だろう。剣はセレスを無視している。
「王宮に……早く戻りたいんです」
「運んでやっても構わぬが、報酬に何を払う？」
「セクシー・ポーズでも何でも、後でいくらでもやってさしあげます！　だから！」
　セレスは目元を左手で覆った。
「すぐに運んでください……お願いします」
　アジャンとの別離が辛いから……
　このままでは彼を引き止める言葉を口にしそうだから……
　セレスが飲み込んだ言葉を、大魔術師は見抜いていた。

「……ま、よかろう」
老魔術師が呪文をすばやく詠唱すると、ポンと白い煙が老人の周囲に広がった。その煙幕のような煙がひくと、老魔術師の周りには老魔術師の分身が二体、佇んでいた。
驚く一同に対し、老人はニカッと笑った。
「一人はアジスタスフニルに同行させる為、一人は『知恵の指輪』を引き継いだハリの戦士の魔法教師役にする為に出した。本体のわしは、セクシー・ポーズを拝みに、セレスと共に王宮に行く事にするわ」
ホホホと笑う老人に、ハリの戦士が首をひねりつつ尋ねる。
「俺の魔法教師役というのは、何だ？　なんでそんな事をする？」
老人は笑うのを止め、わざとらしく厳かな顔をつくった。
「おぬしはわしの事をよう知らぬようだが、実はわしは当代随一の大魔法使いなのじゃ。わしは先代勇者ランツと共に大魔王ケルベゾールドを倒した英雄であり、今や向う所敵無しの超グレートな魔力を誇っておる」
えっへんと胸をそらせる老人を、ハリの戦士はうさんくさそうに見つめている。
「そのわしが教師役をしてやるなど、めったにない事、ありがたく思うのじゃぞ」
「……だから、何故、俺の魔法教師をするというのだ？」
カルヴェルは杖の先端で、ハリの戦士の左手を指した。
「その『知恵の指輪』に値する男にしてやる。見たところ、おぬし、初級レベルの魔法しか使えんし、超自然との感応能力もアジスタスフニルの百分の一もない。凡人に毛が生えた程度のシャーマンじゃ」
「……自覚はある。俺は剣の方が得意だ」
「じゃがな、その『知恵の指輪』を得た事で、おぬしは能力を飛躍的に向上させられる可能性を得たのじゃ。わしが教え導いてやれば、わしには及ばぬのは当然としても、この世界で三本の指に入る大魔法使いぐらいにはなれるぞ」

そう言われても、ハリハールブダンの顔に変化は無い。老人の話に興味がなさそうだった。そんな相手に、カルヴェルはニッと笑ってみせた。

「おぬしはケルティ一(いち)のシャーマン戦士となる。ケルティの全部族がおぬしを尊敬し、シベルアの軍隊もおぬしを恐れ一目を置く。おぬしが大魔法使いとなれば、シベルアと戦わずしてケルティの独立を勝ち取れよう」

「なるほど」

と、赤毛の戦士がニヤリと笑う。

「ジジイ、その話、王宮に行ったらクソ坊主にもしてやってくれ。お探しの上皇にふさわしい男が居たってな」

「ふむ。まあ、独立を勝ち取るよりも、勝ち取った後、維持し続ける事のが難しいのじゃが……」

カルヴェルはニコニコ笑う。

「何とかなるじゃろ。ハリの戦士は、アジスタスフニルとは違い、短気ではないようじゃからの」

話題にされているハリハールブダンは、怪しむように老魔術師と赤毛の戦士を見比べるばかりだった。

「お師匠様……」

セレスの呼びかけに、老魔術師は頷いた。

「では、女勇者一行を王宮に運ぶとするかの」

赤毛の戦士に対しシャオロンはペコリと頭を下げ、『がんばってくださいね、アジャンさん！』と、拳を握り締めた。

老忍者は、誰に対してともなく軽く会釈をした。

けれども、女勇者は……ハリの戦士には『お世話になりました』と言葉短く感謝の気持ちは伝えたものの、赤毛の戦士を見ようとはせず、うつむいたまま老魔術師の魔法で運ばれて行った。

洞窟には、アジとハリの戦士と老魔術師の分身二体のみが残った

のだった……

極光の剣　終　（1）

女勇者セレスは惚けていた。

王宮に戻った彼女は力なく頭をたれ、ただ床を見つめるばかり。

再会したナーダとジライに今までの経緯を説明したのは老忍者とシャオロンで、彼女はろくに口を開かない。開く気力すらなさそうなのだ。

そんなセレスの事を東国の少年は、『動物達の母』と共感した為にお疲れなのだと言って気遣っていた。カルヴェルの術に眼を使われたシャオロンの方が、むしろ、顔色は悪かったのに。

シャオロンにつきそわれ、セレスは部屋で休むこととなった。ナーダが許したのだ。勇者としての使命やケルティの前途について話しても頷くしかできず、侮辱しても何の反応も示さない今の彼女では、『役に立たない』。そう判断したのだ。

そのままセレスは、ほとんど部屋に籠もる事となった。

ナーダに命じられるままに、高官と面談したり、会合に出席したりはした。が、何をする元気もないので、ただその場に居るだけだった。変声術でセレスの声色でしゃべるジライの、腹話術の人形のようなものであった。

それとは逆に、武闘僧ナーダは不眠不休の忙しさの中にあった。

上皇擁立に動いていたからだ。

まず最初にやった事は老魔術師との交渉だった。移動魔法・物質転送魔法で力を貸して欲しいと願うナーダに、老人は『聖なる武器に関する記録』他寺院秘蔵の書の写本を報酬に要求した。それに対し、ナーダはあっさりと、大僧正から許可が下りたものであれば時間がある時に写すと要求を呑んだ。大魔術師とすっだもんだする時間すら惜しいと判断したからだ。

次に、王宮・寺院宛のケルティへの人道支援依頼の手紙を持たせたガルバを、老魔術師にインディラに送ってもらった。ケルティは、雪深くなる冬に国中が混乱状態にある。食料も衣料もさまざまな物資を必要としていた。ガルバには隠し財産をある程度処分し、物資を確保するようにも命じてあった。

同じような内容の手紙をムジャに持たせ、エウロペへと老魔術師に派遣してもらう。エウロペ国王は慈悲深く、名君と名高い。北方との国交再開の為にも積極的に動いていた。ケルティの現状を知れば、軍事行動は起こさず、支援へと動くはずだ。その支援が、いずれは国交正常化に繋がると判断して。

ジライに情報収集を依頼し部下の忍達への指示も任せてから、部下のヤルーを自分の影武者として王宮に残し、ナーダは現存している十二部族の元を順に訪れた。部族の現状・被害・必要とする援助物資を尋ねた上で、生き残っていた指導者に早急に部族会議を開きたいと伝えた。

シベルアの支配から脱する為にも、魔の宴からの解放者ハリハールブダンを上皇として十二部族は団結すべきだと訴えたのだ。『動物達の母』の浄化の光を浴びた者は、皆、翼の上の二人をイメージとして感じていた。皆、ハリハールブダンをよく知っており、恩義を感じていた。

ゼグノスの魔の宴からわずか二日で、部族会議はなった。

カルヴェルの魔法によってネスパ族の部族王の家に運ばれた部族王もしくはその代理の中には、アジャンの姿もあった。魔の宴でアジ王を名乗ってたアジカラボスも亡くなっていた。アジャンは生き残った者を村があった場所に集めているようだった。

その席に、ハリハールブダンは自らの移動魔法で現われた。二日の間に、ハリの戦士は父ハリビヤルニからハリの部族王の位を継ぎ、『知恵の指輪』を自在に使えるシャーマン戦士となっていたのだ。現実世界とは時の流れが異なる異次元空間で、実質半年相応の時間を使ってカルヴェルの分身の指導を受けた成果だった。

魔族からの救済者でありケルティ一のシャーマン戦士となったハリハールブダンを上皇と祭る事に、否を唱える者はいなかった。

その後、今後のケルティのあり方について話し合われた。新王朝ひいてはシベルアとの徹底抗戦を望む声もあったが、最後には、皆、上皇となったハリハールブダンの考えを受け容れ従った。

ケルティ十二部族はケルティ新王朝と共存する……新王朝の下僕ではなく、対等な地位の協力者である事を承認させた上で。

シベルアとの完全対立を回避する為の策であり、シベルア文明に染まったケルティ人をも受容する為の方針だった。

ナーダはハリハールブダンへの援助を約束した。

ナーダには自由となる時間はあまりなく、アジャンとはろくに会話ができないまま別れた。『こっちは順調だ。俺の事は気にせず、そっちはそっちで頑張ってくれ』と、ニヤニヤ笑う赤毛の戦士の顔は実にふてぶてしく、ケルティ入国からずっと彼と共にあった憂いは全て取り除かれているように見受けられた。

むろん、十二部族を回っている間も、部族会議の準備、出席の間にも、王宮内で動きはある。ヤルーの手にあまった時には王宮に顔を出し、ナーダは民への食料・医療・衣料の援助を差し出し、生き残った新王朝の高官達に救助活動の指示も出していた。

国の中枢を失い、軍隊にも壊滅的な被害を受けたケルティ新王朝の大臣達は、ナーダの指示に従った。

本国シベルアに援助を頼んだのだが、雪深い冬である悪条件もあって色よい返事はきていない。物質転送魔法でわずかな援助物資は届いたものの、それだけではホルムの民にすら行き渡らない微々たる量だった。

対してナーダは、インディラ及びエウロペの支援を得た上で、豊富な支援物資を所持していた。内政に干渉しないとして届けられたインディラ・エウロペの物資を拒否してしまっては、ケルティはたちゆかなくなる。

金銭的・物質的援助でさんざん恩を売ってから、ナーダは上皇ハ

リハールブダンを登場させた。新王朝への協力を申し出ている人物として。

既に大魔術師カルヴェルがケルティの部族王と親密である事は強く匂わせている。大魔術師を家来のように従えて、魔からの解放者であり、大魔法使いでもあるハリハールブダンがケルティ人代表として現われたのだ。ケルティの十二部族は新王朝に協力する事、民の救済活動援助、当面の国境警備を担う事を約束し、見返りとしてケルティ人の地位向上を要求して。

国力を失ったケルティ新王朝が、ハリハールブダンに勝てるはずは無い。

上皇制度復活が成る事を、ナーダは確信し、ケルティの為に働いた。

「こりゃ、セレス」

王宮の客室（ゲスト・ルーム）の寝室。寝巻きのまま枕を抱えてベッドの端に腰かけボーッと虚空を眺めていた女勇者、その頭を老魔術師が杖でポカリと叩く。

「起きたまま寝るでない」

「……お師匠様……」

セレスの声には、まったく張りがなかった。

移動魔法で唐突に現われた師匠に驚いている様子も無い。

ぼうっとして、宙を浮遊魔法で漂う老魔術師を見つめるだけだった。

王宮に帰ってきてから、ずっとこんな感じなのだ。何事にも無気力無感動で、ひょんなことでポロポロと涙を流したりする。そんな頼りない彼女を慰め元気づけようと、シャオロンはなるべく彼女と共に居るようにしてあれこれと話しかけ、近衛少尉のアレクセイは任務の合間に顔を出しては贈り物をしていた。二人の厚意に感謝こそ示したが、セレスに気力が戻る気配はなかった。

「何のご用でしょう……？　セクシー・ポーズですか？　お望みなら今すぐに」
「いらん、いらん」
カルヴェルは左手を払うように振った。
「気の抜けた腰振りダンスなぞ、見ても楽しゅうない。おぬしが恥ずかしがってくれれば、まだ風情があるのじゃが……感情が麻痺しておる今のおぬしにやられても、色っぽさの欠片もないわ」
「……すみません」
セレスがしょんぼりとする。
「報酬を払えなくてすみません……」
「貸しにしておく。今度、なんぞ返してくれればよいわ」
「今度？」
寝台から見上げてきた女勇者に、カルヴェルはニッと笑った見せた。
「わしはエウロペに帰る」
「じゃあ」
「うむ」
カルヴェルは力強く頷いた。
「上皇制度の復活がケルティ新王朝に承認された。王宮でのわしの役目は終わった。後はナラカの甥に任せる。ま、アジスタスフニルとハリハールブダンの所には分身は残すが、の。民への救援物資の運搬もこれからは分身にやらせるわい」
「……そうですか」
セレスの口元に微かに笑みが浮かんだ。
「良かった……本当に良かった……これからが本当に大変なんでしょうけれど……まずこの一歩から、ケルティは変わっていくんですね」
セレスは青の瞳を細め、遠方をみやった。寝室の窓から見える森林庭園……雪の積もった木々……この白い世界の何処かに居る仲間を思って……

「アジャンも……喜ぶでしょうね」
「うむ。まあ、そうであろうな」
「……アジャン、元気ですか？　分身を側に置いているんだから、お師匠様はご存じなのでしょ？」
「元気じゃよ、若いからのぅ、頑張っておる」
「……そうですか。なら、いいです」
セレスは瞳を閉じ、天を見上げるように頭を上げた。
「アジャンが頑張っているのなら……もうそれで良いです」
セレスは、きゅっと唇を噛み締めた。
アジャンが故郷に戻り、亡くなった家族を弔い、一族の者を率いていけるようになったのだ。
こんな喜ばしい事はないはずなのに……
祝福しなければいけないはずなのに……
何故……苦しいのだろう？
何故、胸が張り裂けそうなのだろう？
何故……？
目を開くと、カルヴェルがやさしく微笑んでいた。
「セレス、少し寝た方がいい。体を横にし、目を閉じてきちんと休め。おぬしが寝るまで、側に居てやるわい」
「……ありがとうございます、お師匠様」
女勇者は素直に寝台に横になった。
「ほれ」
と、差し出してきたカルヴェルの右手を、ためらいながらもぎゅっと両手で握り締め、セレスは瞼を閉じた。
「……お師匠様」
「ん？」
「内緒なんですけど……」
「ん？」
「私……この前、魔法使いのナーダ様にお会いしました」
「ほほう、何時、何処で、どうやって？」

「それは内緒なんですけど……魔法使いナーダ様は、おじい様の事も『勇者の剣』の事もよくご存じでした」
「ふむ」
「私、思うんですけど……」
「ん？」
「あの方、ランツおじい様の従者だったのではありませんか？」
カルヴェルは苦笑を浮かべた。ついにバレたか、と。そもそも『魔法使いナーダ』などと名乗る奴が悪い。『武闘僧ナーダと関係がありますよ、気づいてください』と、言っているも同然だ。
「その通りじゃ、セレス。あやつはランツの従者であった。わしと共に旅をした仲間じゃ」
「……やっぱり」
セレスは瞳を閉じたまま、にっこりと微笑んだ。
「おじい様の従者の三人目なんですね」
「……へ？」
目をぱちくりとさせるカルヴェル。
セレスはとろんとした声でしゃべり続けた。
「お師匠様と……ナーダの伯父さんの僧侶ナラカさまの他に……もう一人、魔法使いの従者がいただなんて……知りませんでした……どうして、おじい様の従者は二人だなんて事に……なってるんでしょう……？」
「……」
言いたい事だけ言って、セレスはすやすやと眠りについた。赤毛の傭兵の事で心を痛め、このところ寝不足だったせいで、すぐに寝入ってしまったのだが……
カルヴェルは声を殺し、忍び笑った。
とことん鈍い弟子をかわいく思いながら、セレスの手をそっと離し、当代随一の大魔術師は移動魔法でエウロペへと渡っていった。

「乾杯」
グラスを合わせた相手を、老忍者ガルバは見つめた。主人（ナーダ）に悪影響を与える卑しい東国忍者と嫌ってはきたが……戦闘能力も情報収集能力も、ガルバの部下達を遥かに凌駕している。この男は、一人で、部下十数人分の働きをしてしまうのだ。
東国忍者は普段は異常なほど顔を隠したがっているのだが、今日は覆面を外し、老忍者の前に白い素顔を晒していた。上皇制度は復活し、民への救済活動もつつがない。インディラとケルティを（老魔術師の魔法で）往復してのガルバの物資確保も終了した。ムジャもエウロペから戻って来ている。ようやく仕事に一段落がついたのだ、祝したいと持ちかけたガルバに応え東国忍者は覆面を取ったのだろう。
魔族の宴で、王宮の諜報組織は壊滅している。酒盛りを邪魔される、或いは覗かれる恐れは無かった。
二人はガルバ用の召使の部屋で、差し向かいで酒を酌み交わしているのだが、東国忍者は気のない顔でうまくなさそうに酒を飲むばかりだった。わざわざ調べて、当地の蒸留酒の中でも美味いと評判の銘柄を準備したというのに。
「何だ、飲めん口だったのか？」
「飲める」
水で割った強い酒を、ゴクゴクと飲み、適当にツマミをつまんでは口に放り込む。明らかに、味など愉しんでいない。
「酒が好きではないなら、先に言え」
「好きなわけあるか。酒も煙草も魔薬も感覚を鈍らせる。訓練をつみ耐性をつけてはおるが、必要がなければ口になどせん」
「なら、飲むな」
酒瓶を抱え、老人が唇を尖らせる。
「わしとて滅多に飲まぬわ。仕事がうまくいった時だけに、その土地の名酒を愉しむぐらいじゃ」
「ご老体……大僧正候補の忍のくせに、飲酒して良いのか？　表だ

って部下を名乗れぬ身であっても、部下は部下。ペリシャ教ほど厳格ではないが、インディラ教も飲酒は禁忌。東国はともかく、インディラではそのはず。部下が戒律破りをしておっては、大事な主人の評判を落としますぞ」

「たわけ。インディラ忍者は寺院付き忍者であれ、そのほとんどがインディラ教徒ではないわ」

「ほう？」

「我らが崇め奉るのは己が主人だけよ。信仰は教えゆえに信者の行動を縛る。それが正しき規範であっても、己が行動を縛るものを忍は受け容れてはならん」

「もっともだな」

「まあ、酒でも何でもよかったのだ。おぬしとサシで話がしたかっただけじゃ」

「ふん」

どうせろくな話ではなかろうと、東国忍者の口の端が歪む。

「バンキグでの諜報活動の打ち合わせちをしたい。部下ぬきの場でおぬしの率直な意見を聞きたかったから酒に誘ったのだが」

手酌をしながら、老人は言う。

「祝いたいという気持ちもあったのよ」

老人が杯を口に運ぶ。アルコール度の強い蒸留酒だというのに、水で割ってもいない。

「上皇制度が復活してよかったわ。これで間もなく御身様も……あ、いや、女勇者様もこの国ではお役御免となる。ケルティ新王朝との交渉は上皇に任せ、次の国のバンキグに向えるであろう」

「うむ」

「ま、次の国へ行けば……」

ガルバは東国忍者を見て、ニヤリと笑った。

「女勇者様のふぬけも治るであろうなあ」

東国忍者は、ピクッと頬をひきつらせた。

「セレス様はふぬけてなどおられぬ……少々、お疲れなだけじゃ」

「そうじゃのう……恋の病にお疲れなのであろう」
ガチャン！と、東国忍者の右手が音を立てた。グラスを握りつ潰したようだが、掌が傷ついている様子はない。
「セレス様はお優しいゆえ……赤毛の傭兵の行く末を案じておられるのだ。ただ、それだけ、だ」
東国忍者はぶるぶると震えながら睨みつけてくる。女勇者の赤毛の傭兵への恋心に気づいてはいるのだが、認めてはなるものかと自分を誤魔化しているのだ。このところ熱心に情報収集を手伝ってくれたのも、余計な事を考えたくなかったからだろう。
案外かわいいところのある男だ、そう思い、ガルバは話題を変えてやった。
情報屋組織から買った情報と己が部下の名簿を東国忍者に渡しつつ、あれこれと説明をする。
「部下の編成をしなおす。ダンルとバイトゥーキも、戻らぬしの。あの魔族の宴に酔い、命果てたのであろうな」
「さようか」
資料を速読しながら、東国忍者が冷たく言う。
「ご老体の部下のうち、魔族の宴で亡くなった者は四人か。ほんに未熟よの」
ガルバはムッと顔をしかめた。が、
「忍のくせに一般人に殺されるとはな、情けない。ご老体の部下は、我が里の小僧よりも技量が劣る」
「何ぃ！」
「我が縛っておいてやらねば、王宮に居た残り八人もおそらく死んでおった。インディラ忍者はほんにカスばかりじゃ」
ムカァァァ！とガルバは顔を赤く染めた。
「狂人ぞろいの里の東国忍者が偉そうに言うな！」
「む？」
「東国の忍の里はキ印の里であろうが！　親子兄弟姉妹で乳くりあって、カ●ワ者ばかり産みおってからに！」

「……」

東国忍者が不思議そうにガルバを見る。相手が悪口を言っているのはわかるのだが、何が悪口なのかがわかっていないのだ。近親相姦を禁忌（タブー）と思ってないからだ。

ガルバは白髪をかきむしった。

「ええい！　わからぬ！　わからぬわ！」

酒を煽って熱い息を吐いてから、ガルバは白子の忍者を指差した。

「何ゆえ、きさまだけが魔族の宴に踊らされなかったのか、さっぱりわからぬ」

「我もわからぬ」

「カルヴェル様に尋ねたところ、あの方は、おぬしが無欲だったゆえ、ゼグノスの誘惑の鐘そのものが聞こえなかったのだと教えてくださったが……おぬしが無欲じゃと！　御身様を誘惑し、人の良いあの方の善意につけこんで、御身様を利用しておるおぬしが！」

「……」

「おぬしの何処が『からっぽ』なのじゃ！」

「からっぽ……」

東国忍者は自嘲の笑みを浮かべた。

「そうか……そういう事か」

「何じゃ、薄気味悪い顔で笑って」

「ご老体……我にも次はない」

「ん？」

「次に魔族が同じ手を使い誘惑をしかけてくれれば、次は我もご老体の部下同様に鐘の音を聞き、魔族の宴に酔いしれて殺戮の限りを尽くし、そして、そのまま魔に堕ちるであろう」

東国忍者は腰に差しているジャポネ刀を、ガルバに見せた。『ムラクモ』だ。振れば刀身から神秘の雨を降らせる、聖なる武器だ。

今は鞘に収まっている。

「実は……抜けなくなった」

「『ムラクモ』を抜けなくなった？」

東国忍者は頷いた。
「この刀の本当の名を知ってから、すぐ、我もこれを装備する資格は何か調べた……笑ってしまった、『無私無欲』じゃそうな。大魔王教徒で暗殺者であった我が、『無私無欲』であったとは、な！忍として汚れ仕事もし、それなりに権力欲をもって里で立ち回っておったつもりだったが……本心では我は何も欲せず、何も求めず、『忍の里一の忍者』の役を演じていただけに過ぎなかったのだ」
「『無私無欲』と言うても……おぬし、女勇者様に惚れていよう？」
「いいや。心よりあの御方をお慕いしてはおるが、好いた惚れたの感情は無い。我は卑しき忍。あの御方と男女の仲になろうとは思わぬ。光輝く貴きあの御方に仕え、お役に立てれば、それで良かったのだ」
「……見返りは求めておらなかったのか」
ガルバの心に、懐かしい主人（あるじ）の面影が甦った。昔は何も求めていなかった……主人を助け、主人と共に戦い、主人のお役に立てれば満足だったのだ。ただ側で仕える事だけが望みだった。
けれども、三十数年前……自分は主人に置いてゆかれてしまったのだ。家族を持ち、身重となったが為に……。ナーダに仕えている今も、あの時に味わった絶望を忘れ去る事はできない。
東国忍者が口の端をつりあげて、笑う。
「じゃが、どうも、アジャンのせいで我はおかしくなってしまったらしい」
「……」
「あの男を……殺したい。二目と見られぬ姿に斬り刻んでやりたい……」
「……」
「主人の為でもなく、任務の為でもなく、二つ名を高める為でもなく、ただ殺したい……我は、もはや『無私無欲』ではない」
東国忍者が言葉を吐き捨てる。
嫉妬……羨望……

自分同様高貴とは決して言えない男に女勇者が恋心を抱いたが為に、この白子の忍者は平常心を失ったのだ。女勇者を女性として意識し、恋敵を憎み始めてしまったのだ。

「……それで、おぬし、どうするつもりじゃ？」

「しばらくは様子を見る。だが、この刀を抜けねば、魔族とは戦えぬ」

苦しそうに、白い顔が笑う。

「セレス様のお役に立てぬのなら、側にいる意味はない。従者の列を離れ、何処(いずこ)かに去る」

「バッ！　馬鹿者！　早まるでない！」

老忍者ガルバは強い口調で叫んだ。

「聖なる武器が無くとも、主人の役には立てる！　このわしを見ろ！　わしは御身様にお仕えし、勇者ランツ様の旅を陰ながら支えた！　わしは大魔王退治を助けたのだ！」

「……」

「戦闘能力が衰えたとしても、諜報活動でご支援すれば良い！　わしには聖なる武器も神聖魔法もなかった。一匹も魔族は倒せなんだが、わしの働きに御身様は満足してくださったぞ！」

「……ご老体」

「忍には忍の戦い方がある！　諦めるな、昔、御身様がおっしゃった事には」

「ご老体……その御身様とは、ナーダの事ではないな」

「う」

老人は慌てて口をつぐんだのだが、もはや遅かった。

「以前、仕えておられた僧侶ナラカも、ナーダ同様、『御身様』と呼んでおられたわけか」

「ぐ」

「ムジャらに何度も繰り返し言われたのだが……ナーダの前では僧侶ナラカの話はしてはならぬ、と。あの坊主、たいそう伯父に対し思うところがあるとかで、二十年以上も伯父を怨み続けているとか

なんとか……」
「むぅ」
「ご老体が二人を二人とも『御身様』と呼んでいる事……当然、ナーダは知っておるのだな？」
「む、むろん！　ご存じじゃ！」
「ほほう」
白子はにっこりと笑みを浮かべた。
「そうか……ナーダは知らんのか」
「ご存じじゃと言っておるではないか！」
「ご老体」
「何じゃ！」
「口止め料として、日に五人づつ部下を我に貸してくだされ」
「口止め料ぅ？　部下を貸せぇ？」
「さよう。このところずっと思っておったのだが……ご老体の部下はヘボすぎて部下として役に立たぬ。この王宮に居るうちに再教育をしてやりたい」
「うぬぬぬぬ」
「我が戦力ダウンした分、万分の一でもカス忍者に埋めてもらわねば、の。再教育は必須じゃ」
ガルバは東国忍者を睨んだ。同情などするのではなかった！　この男が従者をやめて女勇者の元を去れば、ナーダとの関係も終わったのに……厄介払いするまでもなく居なくなってくれたというのに……何故、この男を慰めるようなことを言って、引きとめようとしてしまったのだろう？
「お断りじゃ！　きさまに預けては部下の性格が歪む！」
「忍者であれば、気立てよりも技量が第一のはず」
「うるさい！　ムジャから聞いておるぞ！　きさま、部下達の前で御身様を刀の鞘で叩いたそうじゃな！　いずれはインディラ国王となられる貴き御身様に対し、そのような振る舞い、許されると思ってか！」

「その御身様とは……」
白子の忍者は薄く笑った。
「ナーダの事か？」
「うるさい！　うるさい！　うるさい！　やはり東国忍者は外道じゃ！　キ印じゃ！　きさまと分かり合おうなどど二度と思うものか！」

極光の剣　終　（2）

十二月下旬、勇者一行は王宮を後にし、他頭びきのトナカイ橇で東へ……バンキグへと旅立った。

近衛少尉アレクセイを始めセレスに関わりがあった宮廷人は名残を惜しみ、移動魔法で現われたハリハールブダン上皇が大魔王退治の旅の成功を祈ってくれた。

東国の少年シャオロンは、橇の上から遠ざかる王宮を見つめていた。

春になれば、シベルア国からケルティ新王朝の新国王たる王子が王宮にやって来る。だが、その権限は以前に比べると狭められており、ハリハールブダン上皇と共に国政を行う事が定められていた。ケルティ人の代表――上皇には国王に匹敵する権力が認められているのだ。

シベルア移民とケルティ人の間には深い溝があり、先日の魔の宴では殺し合いすらしていた。両者が真に許し合い理解し合うまでには、長い時間が必要だろう。

けれども、ケルティに居た者は、皆、自分達を魔の呪縛から解き放ってくれた者を知っていた。魔力が無い者も、神秘を見通す眼がない者も、誰もが心の眼で巨大な鷲を見ていた。解放者ハリハールブダンは、シベルア移民とケルティ人両者から敬意を払われている。自身が最強のシャーマン戦士である上に、政治顧問としてカルヴェル（分身）を抱えている彼は、政治的難事にも正しく対処していけよう。

ケルティの空気は冷たく凍えていたけれども……王宮もホルムも、もはや歪んでいない。魔の黒の気はケルティから完全に消えうせていた。

「セレス様、本当にアジャンさんを待たなくて良いんですか？」

シャオロンは同じ橇の女勇者を見つめた。王宮に戻ってからセレ

スはずっと元気がない。『動物達の母』と同化（シンクロ）した疲れが抜けないのだろう……シャオロンはそう理解していた。勇者の剣をそばに置き、白銀の鎧をまとう何時もの雄々しい姿だったが、くノ一のマリーにかいがいしく世話をされる彼女はどうにも頼りない。橇に乗り込む時も、『勇者の剣』が重いと辛そうだった。まだ剣を持って戦うのは難しそうだ。こんな時こそ、頼りになる赤毛の戦士に側にいて欲しいのだが……

「オレ達だけで出発しちゃって良いんですか？」

少年の問いに、セレスは弱々しい笑みで応えた。

「……良いのよ。アジャンは、今、忙しいんですもの」

「そうですか……？」

シャオロンは小首を傾げた。

「でも、アジャンさん、すぐに戻るって言ってましたよね？」

「……」

「シャオロン！」

橇を御していた東国忍者が鋭く叫ぶ。

「こちらに来い。きさまに橇の操り方を教えてやる」

「あ？　はい！　ジライさん！」

少年は素直に、忍者の元へ向った。

セレスは頬杖をつき、王宮の森林庭園の景色を眺めていた。マリーが肩掛けを渡してくれた。が、かぶりを振って断った。

セレス達の橇の後を、少し離れてナーダやガルバが乗った橇が続き、その後にナーダの部下達と荷を積んだ橇が三つ続いていた。今日は天候が良いので、ホルムの街を抜け街道にまで出るのだと出発前にナーダは言っていた。魔術師協会の移動魔法は使わず、普通に進むのだそうだ。

セレスは景色を……いや、雪を見続けていた。

真っ白な雪を見つめているうちに……

青の瞳は涙で潤んでいた。

胸がどうしようもなく苦しくなっていった……

「アジャン……」
誰の耳にも届かないように小声でその名を呟き、セレスはそっと口元を押さえた。
その時だった……
「シャオロン！　手綱は任せた！」
東国の少年に手綱を投げ渡し、忍者ジライが跳躍したのは……
「え？　え？　え？　え？」
橇に不慣れな少年から、くノ一マリーが手綱を奪い、代わって橇を御す。
「ジライ？」
セレスは忍者の動きを目で追った。
雪を蹴って走る忍者は、木々の間に佇む人物めがけて手裏剣を投げていた。
大柄な男だ……その者は荷物を投げ捨てると、背より巨大な両刃の大剣を抜き……忍者の攻撃を全て弾き、粗野な笑みを顔に刻み、咆哮と共に忍者を狙う。
離れた距離から放たれた剣圧を跳躍してかわし、忍者ジライは背の忍刀を抜刀し相手へと斬りかかっていった。赤毛を靡かせる相手へと……
「そんな……」
セレスの顔に笑みが浮かぶ。
「そんな事って……」
二人の姿が見えなくなる。
木々に阻まれ、視界がさえぎられたのだ。
橇がどんどん二人から離れてゆく……
「止めて！　橇を止めて！」
スピードが少し落ちただけで待ちきれず、セレスは橇から飛び降りた。雪の上を転がり、何度も転びながら、それでも少しづつ二人に近づいてゆく……
「『ムラクモ』を使えよ、クソ忍者！　そんなナマクラ刀じゃ、俺

は殺れねえぜ！」
「やかましいわ！　ウドの大木が！」
罵倒し合いながら剣を交わす二人。
セレスの接近に気づき、まずジライが刀を引く。覆面の下の目を辛そうに細め、セレスの為に道をあける。
「アジャン……」
女勇者セレスは赤毛の男を見つめ、微笑んだ。泣き出しそうな顔で……
「見送りに来てくれたの……？」
「あん？」
「嬉しいわ……もう一回、あなたに会えるだなんて」
「……」
赤毛の戦士は大剣――『極光の剣』を背に収め、ゆっくりと近寄って来る女勇者を待ち……
彼女が赤毛の戦士の腕の中に飛び込もうとした、まさにその時……
赤毛の戦士は自ら歩を進め……
女勇者の額を右の二の指でバチン！と弾いたのだった。

「え？」

痛烈な痛みに驚き、女勇者は後ずさった。
東国忍者は硬直し……
東国の少年は三人を目指して走り……
武闘僧は止まった櫓の上から成り行きを見守り……
赤毛の戦士は、不機嫌そうな顔で女勇者を睨んだのだった。
「置いていくたぁ、どういう了見だ？　ケルティを出立する目処（めど）がたったんなら、連絡ぐらいしろ！　ジジイの分身が俺のそばに居るからって、怠慢すぎやしねえか、女勇者様！　自力で情報を得て、

合流しろってことかよ？　移動魔法で運んでもらえなきゃ、間に合わなかったじゃねえか！」
「え？　でも……」
セレスは額を押さえながら、怒り爆発寸前の男の顔を見つめた。
「あなた……ケルティに残るんでしょ？」
「俺がケルティに残るだと？」
赤毛の男が、一層、声を荒げる。
「俺が何時、ケルティに残るって言った！」
「言ってないわ！　言ってないけど、でも……あなた、体の中の血に従うって言っていたわ。一族の生き残りも集めるって……」
「まあ、そりゃあ、言ったが」
「だから……私……あなたがアジ族の王になったんだと思ったんだけど……」
セレスは口ごもり、上目遣いに怖々とアジャンを見つめた。
「……もしかして、違うの？」
「違う！」
赤毛の戦士がギン！と睨みつけてくる。
「アジの生き残りなんてなあ、女子供を合わせても百人ちょっとしか居ないんだよ！　俺ぁ、そんなみみっちい一族の王になんざなる気はねえ！　アジ族は近いうちにハリに統合してもらう！　ハリハールブダンとは話はもうついてるんだ！」
「……そうなの？」
セレスは唖然とした顔で赤毛の戦士を見つめた。
「じゃあ、あなた……今まで何をしていたの？」
赤毛の戦士は両腕を組み、偉そうにふんぞり返った。
「子づくりだ」
「……子づくり……？」

「そうだ」
好色（スケベ）そうな顔をつくり、アジャンはセレスが嫌がる言葉を選んで説明を続けた。
「アジのジジイどもにそこら中から女をかき集めさせ、日がな一日ズコバコやり放題やりまくっていたのさ！」
「……どうして？」
「アジの王家の血を残す為だ。俺が居なくても、俺の血さえ残ってりゃ、『極光の剣』の振るい手はいずれ現われる。俺の血筋を守るってな使命を心の支えに、アジのジジイどもも、ハリの一族に混じる事に承知したんだ」
「でも、あなた、『極光の剣』を持って来ちゃってるわよねえ？」
アジャンの背を見ながら、セレスが問う。
「心配ない。ジジイに、ああ、カルヴェルじいさんの事だが、剣に呪をかけてもらった。俺が死んだら、この大剣、俺の跡継ぎの元に物質転送魔法で飛んでゆく事になっているんだ。まあ、もっとも」
アジャンはニヤリと笑った。
「何処に飛んでって良いのか、剣も困るだろう。なにしろ十五人の女を抱いて八人を孕ませたからなあ。カルヴェルじいさんの分身が教えてくれたぜ、来年の初秋には男三人に女五人が産まれるそうだ。娘のうちの一人がハリハールブダンの息子とくっついてくれりゃ、まさに万々歳だな」
「……」
セレスはぶるぶると震えていた。
つまり……カルヴェルは知っていたわけだ。
セレスの元を離れたアジャンが何をやっていたのか。
『元気じゃよ、若いからのぅ、頑張っておる』
と、カルヴェルはアジャンの事を言っていた。それは部族王として彼が活躍しているという意味ではなく、女の人とHしまくっているという意味だったなんて……

「何だ、女勇者様、真っ赤な顔をして」
ニヤニヤと笑いながら、赤毛の戦士がからかってくる。
「俺の話を聞いて興奮したのか？　ん？　けどな、いつも言ってるが、俺ぁ、処女は抱かねえ。面倒くせえし、ぎゃあぎゃあうるせえし、痛がってばっかりで面白くねえからな。おまえさんが抱いて欲しくなったんだとしても、悪いがお断りだ。おまえのキツキツのオマ●コに突っ込むぐらいなら、六十過ぎのババアの枯れたオマ●コに」

「最低――っ！」

赤毛の戦士が宙を舞った。セレスに左頬を拳骨（げんこつ）で殴り飛ばされたのだ。
「なっ！　何しやがる！　馬鹿女！」
雪を舞い散らせ体を起こした赤毛の戦士が、女勇者に喰ってかかる。
「何で俺が殴られるんだ！　逆だろーが！　俺が、俺を置いて行こうとしたおまえさんを殴るのが筋だろーが！」
「あなたみたいな品性下劣な最低男、そばに居て欲しくない！　大嫌い！　何処へなりとも行っちゃって！　女の人とHしまくって早死にすればいいんだわ！」
「何を！」
「何よ！」
「おまえみたいな世間知らずの馬鹿女、俺だってできりゃあ縁を切りたい！　切りたいが……大魔王退治の仕事は成功報酬がほとんどだ。仕方ねえから、大魔王を倒すまでは、馬鹿なおまえを守ってやるぜ！」
「あ～ら、嬉しい！　有難くって涙が出そう！」

「ケッ！　大魔王なんざとっとと倒して、てめえとはとっとと縁を切ってやる！」
「私達、ほぉ～んと気が合うわね、アジャン！　私も大魔王を倒したくって、たまらなくなっていたところよ！」
二人はしばらくそのまま睨み合い……
互いに荒い息を残し、そっぽを向き合った。
と、そこで……
「アジャンさん、おかえりなさい！」
二人の会話が終わったと判断し、東国の少年が尊敬する赤毛の戦士に飛びついてきた。
「おう、シャオロン！　元気にしてたか？」
「はい！　オレ、雪の中での体術の鍛錬、毎日、続けましたよ！　寒さにも少し強くなりました！」
「上出来だ」
赤毛の戦士は、亡くなった弟アジャニホルトに気性がよく似ている少年に笑みをみせ、その頭をくしゃくしゃに撫で回してやった。
「ん？」
背中に何かがかかったのを感じ、赤毛の戦士は振り返った。
彼の背後には、『ムラクモ』を抜いて上段に構えた東国忍者がいた。『ムラクモ』の刀身から飛び散る聖なる水が、背にかかったのだろう。
「……礼を言うぞ、アジャン」
「あん？」
忍者ジライは高らかに声をあげて笑った。
「久方ぶりに爽快な気分じゃ！　セレス様の先ほどのパンチを見て、心がすっかり洗われた！　『小夜時雨』も抜けたわ！　我は自分を取り戻せたのだ！」
「……何わけわかんねえ事、言ってやがる、クソ忍者」
「……勝負の続き、いずれしてやっても良い。この前のようにはいかぬぞ。あの時、我はセレス様のご命令で手加減してやっていたの

だ。我が本気になれば、きさまなど敵ではないわ」
「ケッ！　俺だって『極光の剣』を手に入れたんだ。おまえなんざ、ひとひねりだぜ！」
　忍者の覆面の下の目は不敵な笑みをつくっていた。が、それは、すぐに消えた。目の周囲の筋肉をへらぁ～と緩め、『ムラクモ』をしまい、鼻歌を歌いつつセレスに背後から近寄り、その耳にフッと息を吹きかける。
「馬鹿ぁ！」
　ご機嫌斜めの女勇者の右拳が、容赦の無いパンチを忍者にお見舞いする。
「それはやめなさいって、いつも言ってるでしょ！」
　雪の上を転がっていく忍者を見つめ、アジャンはポツリと呟いた。
「なにバカなことやってんだ、あいつ……」
「……その台詞、そのままあなたに言ってあげたい気分です」
　アジャンとシャオロンの側には、ターバンを頭に巻き毛織のコートを身につけた武闘僧が立っていた。呆れたと言わんばかりの顔で。
「まったく気づいていないみたいですけれど……あなた、この先、もうおそらく二度と訪れないであろう幸運を……さっきドブに捨てちゃったんですよ」
「？」
　ナーダは肩をすくめた。
「……まあ、過ぎた事を言ってもしょうがないですね。とりあえず……おかえりなさい、アジャン。待ってましたよ」
　にこやかな笑みを浮かべ、ナーダはアジャンの顔の前に金袋をぶら下げた。
「私達一行の表向きの軍資金です。返しておきますね♪」
「……又、金庫番かよ」
　不満顔で金袋を受け取り、アジャンはそれを腰のベルトにつけようとした。
「あれ？　アジャンさん、『聖王の剣』は？」と、シャオロン。

赤毛の戦士の腰に、聖なる武器が無い。カルヴェルから借りた片手剣を、いつも必ず腰に差していたのだが。
「ジジイに返した」
背の大剣に視線を向け、赤毛の戦士は満足そうに笑みを浮かべた。
「あれは、もう必要ねえ。俺には、俺の相棒ができたからな」

「橇を寄せないでちょうだい、アジャン！　あなたの嫌らしい顔を見ると鳥肌が立つわ！　もっと離れてよ！」
「ケッ！　文句なら、トナカイ橇の扱いが下手な忍者に言いな。のんびり走らせてても、トロくさい橇に追いついちまうんだよ」
「ジライ！　スピードをあげてちょうだい！」
「承知！」
「セレス様、無茶な走りをしたら、トナカイがバテちゃいますよ」
「ジライ！　トナカイをバテさせないように速く走って！」
「承知！」
「……て、できるんですか、ジライさん？」
「あああああ、もう！　途中で休憩をいれなきゃ、トナカイがもたないじゃないですか、このペースじゃ！」

大魔術師カルヴェルは千里眼の水晶珠から顔を離し、ホホホと愉快そうに笑った。
ケルティの首都ホルムを離れつつある一行。
彼らの行く手には、大魔王ケルベゾールドが待ち受けている。そう遠くない未来に、最後の決戦の時が訪れる事をカルヴェルは知っていた。
セレスは勇者として成長し、ケルティでは『勇者の剣』と心を通わせ、その能力をかなり引き出せるようになっていた。しかし、その後、アジャンを失ったと思い込んだ喪失感から、セレスは、『勇

者』ではなく、ただの『女』となってしまっていた。
アジャンを慕い涙する彼女を見て『勇者の剣』は……
さぞ怒った事だろう。誇り高い剣は、自分を振るえるのは『剣と一心となって邪悪を討つ一流の剣士』のみと決めている。恋する乙女など、剣にとって穢れにすぎないのだ。
まだケルベゾールドとの決戦は早い。
セレスは、もう一度、剣と心を通わせ合い、剣の愛を取り戻す必要がある。
剣のご機嫌さえ直れば……
セレスが、ケルベゾールドに敗北を喫する事はない。
従者達もセレスを守り、華々しく活躍するだろう。

けれども……

ケルベゾールドを倒した後に……
悲劇の幕があがるかもしれないのだ……

「……アレの好きにはさせぬ」
カルヴェルは右手の杖を握り締めた。
「ナラカよ……今度こそ、わしが勇者を守るぞ」

大魔術師カルヴェルは瞼を閉じた。
勇者ランツと僧侶ナラカ……懐かしい二人の顔が心に浮かんでいた……

極光の剣　終　（2）（後書き）

『極光の剣』　完。

次回は『極光の剣　こぼれ話』。舞台はケルティ。本編からカットしたエピソード集です。

『極光の剣　こぼれ話』をもって
第三章　ケルティの闇と光　は、終わります。
（第三章の章タイトルを《北方にて》から《ケルティの闇と光》に変更しました）。

極光の剣　こぼれ話　アジャン&ケルティ人（1話）

北の国の戦士達は驚きの声をあげた。

役人達に駆り出され、南から来た勇者一行を脅せと命じられた北国の戦士達。漁に出るはずだった者、エウロペに略奪に出かけるはずだった者、皆、今日はしぶしぶとドラゴン船を出していた。ケルティ新王朝の役人は威張りくさるくせに、金払いが悪い。一日拘束されるのに、実入りが悪いのだ。

しかし……女勇者一行の中の男が、アジ・ハリの部族言葉を使った為、そんな不満は吹き飛んだ。入国審査官のハリの小僧っ子が泡を食ったような顔をしている。シベルア教育に染まり、ケルティ新王朝の役人になったバカとどよりも、南から来た男の方が部族語が達者だ。

「おめえ、アジの生まれだか？」と、尋ねると、

「そういうおまえは、エク族だな？」と、質問が返された。

「お、わかるだか？」

「んだばよぉ、おれっちは何処のもんかわかっか？」

「ネスパ族」

おおおおお！　と、戦士達は歓声をあげた。南から来た男は、部族ごとの微妙な言葉使いや発音の違いがわかるのだ。最近のケルティの若者は、部族語を『忘れられた言葉』などと呼び、収穫祭にすら部族語を用いようとしないというのに。

「俺のひい祖父（じい）さんがアジ族だったんだ。国境閉鎖前にエウロペで獄に繋がれちまってな、赦免後にエウロペの女と結婚して南で生涯を終えたんだ」

「南で？　ほう、そりゃ、また、酔狂だで。戻りゃ、えかったのに」

「牢獄で脚が萎えちまって、ドラゴン船を操れなくなったんだ」

「そら、まあ気の毒に」

「ドジったもんだなや」

「おれっちはよぉ、まだ、エウロペにはようけ行っとる」
「んだ。エウロペの船は軍船でもトロくせえ。デカいだけで小回りがきかんで、浅瀬や川にも入れねえ。エウロペじゃ、お宝、奪い放題よ」
男達は、がっはっはと豪快に笑った。
「おっと、エウロペの女勇者様の前で略奪の話しはマズいだな」
「大丈夫だ、あの女は馬鹿だ。こっちの話はわからん」
「へえ、バカなんだか」
「あんなお綺麗なのに、頭が足りねえっか」
「んだども、他の男どもは？」
「心配ねえ。あの大男も忍者も、どうしようもねえアホの馬鹿のカスだ。何、言ったって、わからんさ」
「ほうほう」
「あの女やそばのバカどもには、何、言ってもいいぜ、『ちんちくりん』でも、『どこに目玉があるんだ、糸目』でも、『顔に自信がないから隠してるんだろ？』でも」
そのまましばらく待ったが、悪口を言われた三人は無反応だ。何の会話をしているのだろうと探るかのように、こちらを眺めるばかりだ。
北の戦士達の顔が、明るく綻んだ。
「ああ、あっちの子供には言うなよ。あの東国の子供は、家族の仇の魔族を自ら倒した『戦士』だ。今は外見は細っこいが、見所のある奴なんだ。悪口は他のバカどもに言ってくれ」

「何言ってるんだか、さっぱりわかんないんだけど……」
女勇者セレスは、アジャンとケルティ人達を見つめた。
「なんか、ムカムカするのよね」
「実は……私も」と、ナーダ。
「私めも」と、ジライ。

「そうですか？　オレは、今は別に……」と、シャオロン。

入国審査官が『くだらない話はやめろ！』、『忘れられた言葉をしゃべるな！』と、止めるまで、ケルティの戦士達はわいのわいのと明るく、誰が一番うまい侮辱が言えるか面白半分に三人を囃し立てたのだった。文字にすると伏字だらけとなってしまう、たいへん下劣な表現で……

極光の剣　こぼれ話　ナーダ&アジャン（4話と5話の間）

「きゃあん、若様、すてきぃ」
「お体は逞しいし、二枚目だし、アレも最高。好きよ、若様。今夜もいっぱいかわいがってぇ」
四人の酌婦に囲まれているのは、禿頭をカツラで隠した大男。ここ数日、この娼館の上客になっている貴族風の男だ。その向かいの席には赤毛の野性的な美男子（ハンサム）とビール樽のように太った中年男が居り、それぞれ両手に女を抱えていた。
「かわいい事、おっしゃいますねえ……みなさん、今日は何が欲しいのです？」
「ん、もう、イケズぅ。私、本気なのに。お金目当てじゃないのよ。商売抜きで若様に惚れちゃったんだから」
「おや、そうですか」
大男が懐から袋を取り出し、酌婦達に中身の一部を見せた。異国風の指輪だ。使われている石は高価なものではないが、細工の細かい凝ったデザインで、北方にはないものだ。
「今宵一の美姫に差し上げようかと思ったのですが」
そこで酌婦達を見渡し、からかうように笑う。
「持って帰っちゃいましょうか、要らないんなら」
「ああん、意地悪！」
「若様、今日はアタシよ！　アタシが一番最初よ！」
「何、言ってるの、若様のお相手をするのはこの私よ」
「うるさいわよ、あんた達、若様のお相手は、この宿一の売れっ子のあたしがするのよ。子供は下がってなさい」
「二日続けてなんてズルいわ。今日こそ、あたしよ」
「私は構いませんよ、四、五人いっぺんでも。みなさんへのプレゼントも山のようにありますしね」
「さすが若様！」

「素敵ぃ！」
きゃいのきゃいのと抱きついてくる娼婦達。その相手をしていた大男は、笑みを浮かべ、静かに頭を横に振った。
「……少々、酔ってしまったようです。夜風にあたってきますから、みなさん、良い子で待っていてくださいね」
「はぁい」
「私の連れの相手をしてくださる方にも、プレゼントはあります。ちゃんとサービスしてくださいよ」
「はぁい」
サロンに娼婦達やシベルア軍人ゲオルグとアジャンを残し、悠然と廊下に出たナーダは……しばらくすると足を速め、トイレに駆け込み、胃の中の内容物をぶちまけたのだった。
「うぅぅぅぅ」
ゲロゲロと吐き続ける主人を、ヤルーとクルグが介抱する。客を装って娼館に入り込んだナーダの部下は、主人に同情の眼差しを向けていた。
しかし、遅れてその場に現われた赤毛の傭兵は、ニヤニヤ笑うばかりだった。
「酒は飲んでるフリだけで、喉の布にこぼしてるんだろ？　女にまとわりつかれるだけで、よくも、まあ、毎回ゲーゲー吐けるもんだ。女嫌いもそこまでいくと立派なもんだぜ」
「……誰のせいだと思ってるんですか」
ナーダは口元をハンカチで覆い、便器から顔をあげた。
「あなたをアジソールズの元へ連れて行く為に、娼館通いをしてあげているんですよ！　ぶよぶよだるだるしたお肉の塊なんて、目にも入れたくないのに。しかも、臭いし！　何であんなビチョビチョに香水かけてくるんでしょ！　白粉プンプンの顔でまとわりついてくるし！　すぐに私の腕を取ろうとかするし！　太腿なでてくるし！　もぅ、嫌です！」
「おまえが上客を装うから、不必要にモテるんだ」

「……私の事を金づるだと、ゲオルグに思わせたいんです」
そこで、ナーダは溜息をついた。
「でも、正直言って、もう限界を突破してます……血は下がるし、吐き気はひどいし、めまいでクラクラです。私、このままじゃ死んじゃいますよ。昼間、目が回るほど忙しいのに、食べた物、みんな戻しちゃうんですから」
「吐くのがわかってるんなら、喰うな。もったいねえ」
ナーダはジロリと赤毛の戦士を睨んだ。
「いい加減、アジソールズと話をつけてくださいな」
「話し合うだけ無駄だって言ってるだろ？　決着なんざつくもんか」
「なに言ってるんです、彼等は大魔王退治の旅が終わるまで待つと言ってくれてるんです。あなたが『大魔王退治が終わったら、アジ族の元へ戻る』と、おっしゃってくだされば、全て解決」
「絶対に言わん」
きっぱりとアジャンは言い切った。
「俺はアジの部族王になる気はない」
「……このままでは、私、衰弱死しちゃうんですけど」
「会見の場を作ってるのは俺じゃない。おまえが勝手にやってることだ。俺の良心に訴えたところで無駄だぞ。それに」
アジャンがニヤリと笑う。
「衰弱死ぃ？　おまえが、そんなヤワな玉（タマ）かよ」
ナーダはむむむ～と眉をしかめた。
「わかりました！　通う店を変えてもらいます！」
「ん？」
ナーダは糸目を更に細めて笑った。
「男娼の店に」
「なにぃ！」
赤毛の戦士が目を剥いて怒った。
「ンな気色悪い店、お断りだ！　第一、ゲオルグが」
「あのビール樽、両刀です。そっち方面の良い店も知ってるそうで

すよ」
「俺は行かんぞ！　おまえ一人で行け！」
「馬鹿な事言わないでください、アジャン。当地の情報屋の元締めアジソールズが用があるのは、私じゃありません。あなたです。あなたが行かなきゃ、アジソールズのご機嫌が悪くなります。あなた、プロの傭兵ですもの、好き嫌いで護衛対象に不利な状況をつくったりなんかしませんよね？」
「ナーダ……」
武闘僧はツーンとそっぽを向いた。
「今日を含め三日の猶予をあげます。その間にアジソールズと話をまとめてくださいね。でなきゃ、しあさってには、夜に通う店、変えてもらいます。あなたが、とてもとても大嫌いなお店に、ね！」

二日後の夜……アジャンは失踪した。
だが、あの脅しとは関係ない。
男娼館通いが嫌で逃げたわけではない、絶対に！
とはいえ……
男娼館に通うと言って脅迫していたことはセレス達には内緒にしておこう……ナーダはそう決めた。

「ちょっと、お化粧、濃くない？」
手鏡を手に首を傾げるセレス。今宵の舞踏会の為に淡い若草色のドレスをまとった彼女に、『お化粧なさるのなら、変装術が得意な私にお任せを』と、ジライが化粧（メイク）をしてくれたのだが……濃い目のアイシャドーに真っ赤な唇……いつもより顔立ちがきつくなったような……？
セレス付きの召使役の中年くノ一のマリーがおっとりと答えた。
「さようにございますね。そのご衣裳ならば、薄化粧の方がお美しさが引き立つので……」
殺気を感じ、マリーは口を閉ざした。セレスの背後の東国忍者は覆面から笑みを覗かせてはいた。が、くノ一である彼女は、これ以上余計な事を口にしたら命が危うくなると敏感に感じ取ったのだった。
「あ、あの……でも、そのお化粧もお似合いですわ！　威厳あふれる女主人って感じで！　凛々しくて高貴で！」
「凛々しい？」
セレスはぷぅと頬を膨らませた。
「そんなの駄目よ。今夜はダンスを踊るんだから可愛らしい感じにして欲しいの。マリー、お化粧、直して」
くノ一マリーは、サーと顔を青ざめた。東国忍者が目でマリーを殺そうとするかのように、凄まじい殺気を彼女にだけ送ってきているのだ。
「あ、あの、申し訳ございません。私、少々、小用が……お化粧はジライ様にお任せくださいい」
マリーが部屋から逃げるように出て行った後、結局、忍者ジライはセレスの要求（リクエスト）に負けた。女王様メイクを落とし、淡い薄化粧を女主人に施したのだった。

「チッ。マリーめ。あやつ、後で灸を据えてやる」
「え？　なに？」
「いえいえ。何でもございませぬぅ」
そこで扉のノックが響いた。部屋に入って来たのは、東国の武闘家の少年だった。
「うわぁ！」
少年は目をぱちくりさせた。
「セレス様、すごぉ～くお綺麗です！　女勇者の鎧姿も格好良くって素敵ですけど、ドレスもすごくお似合いです！　さすがセレス様！」
少年は両の拳を握り締め、力説した。
「この王宮で一番！　いえ、旅の途中でお邪魔したどの王宮の貴婦人よりもお綺麗です！　セレス様が一番です！」
「いやだわ、シャオロン。褒めすぎよ」
と、セレスは頬を染めた。が、東国忍者は、
「当然じゃ。セレス様はこの世の誰よりも美しく貴き御方……この世に咲くただ一輪の大輪の薔薇よ」
と、完全にシャオロンに同意する。
「セレス様の美貌を一層輝かせるなんて、さすがジライさん！　忍術もすごいけど、お化粧技もお見事です！」
そう褒められれば、ジライも悪い気はしない。
実はシャオロンは、東国忍者の機嫌を損ねてしまったとマリーに泣きつかれ、この部屋にやって来たのだ。その効果はてきめんで、ジライはもうすっかり怒りを忘れ、鼻歌まで歌っている。
「でも、舞踏会なんて本当、久しぶりだわ」
支度を終えたセレスは忍者に尋ねた。
「ステップを思い出さなきゃ。ジライ、あなた、踊れる？」
「諜報術の一環として西国舞踏も習いましたゆえ、嗜み程度には……」
「なら、問題ないわね。ちょっと付き合って」

椅子やテーブルなどの邪魔なものを素早くどけて、シャオロンが広い場所をあけてくれる。ジライは覆面の下の顔を赤く染め、高鳴る心臓を押さえていた。ドレス姿の女主人と共に踊るなど恐れ多く気恥ずかしいが、でも、やはり嬉しい！

「じゃあ、やるわよ、ジライ！」

しゃんと背中を伸ばし、セレスは忍者の手を取った。

「あ？　あの……セレス様」

「なぁに？」

「手が逆にございます」

「え？」

セレスは自分の手をまじまじと見つめた。ジライの手を取って、支えてしまっている。

「あ、そうね。今日は、私、ドレスだから、女性の踊りをしなければいけないのよね」

「……女性のパートを踊ったこと、ございますか？」

「ないわ」

セレスはきっぱりと言い切った。

「あるわけないじゃない、私、男装してるのよ、いつも」

「では、練習したことも……」

「ないわ」

「……」

ジライの嫌な予感は的中した。

「セレス様、リードは男性がいたすもの。そのように勝手に動き回られては……あ、そこで、ターンにございます。男性のリードに従って体を預けるようにすれば、自然に……。あの、足取りはもう少しかろやかに……」

セレスは女性の踊りが初めてどころか、三歳以来ドレスを着衣するのも初めてなのだ。女性用の靴になじめず痛みを訴えるわりには、歩幅は大きすぎ、ドタ足だ。

人前で踊れる技量ではなかった。いや、社交場に女性として顔を

出せるだけの立ち居振る舞いすらできてない。このままでは今宵、セレスは宮廷貴族達の前で恥をかいてしまう……

「シャオロン！　マリーかローラを連れてまいれ！　すぐにじゃ！」

くノ一が来るまでの間に、ジライは歩き方・お辞儀などの所作を教えた。すぐに雄々しい歩幅をとってしまうセレスには、歩くのすら困難なようだった。

マリーが着いてからは、ダンス講座となった。ジライはマリーの手を取り手本の踊りをセレスに見せ、次にマリーに男性役をさせてセレスと踊らせてから横から細かい注意を与えた。で、仕上げにマリーとセレス、ジライとシャオロン（踊りの才のある少年は短い時間の見学で、男女両方のステップを覚えていた）の二組で踊り、他者とぶつからない練習までさせたのだった。

人前に顔を出せる技量となったかどうか微妙なところで時間切れとなった。赤毛の傭兵の部屋に寄りたいとのセレスの希望があった為、舞踏会の時間よりも少し早くセレス達は部屋を後にした。

女主人との甘い一時を過ごし損ねた忍者は、がっくりと落ち込んでいた。マリーへの仕返しなど忘れてしまうほどに。もっとも、その夜からの騒動のおかげで、それどころではなくなるのだが……

極光の剣　こぼれ話　ナーダ&ジライ（6話）

「良かった……ジライ……思ったよりも軽傷で……あなたを癒せて、本当に良かった……」

回復魔法を唱え終えるなり、抱きついてきた武闘僧。

東国忍者はおとなしく抱擁されていた。怪我を治してもらったので、多少は相手の好きにさせてやろうと思っているのだ。でなければ、うっとーしいわ！　と、怒鳴ってナーダを蹴り飛ばして退かしている。

床の上で向かい合って座っている二人。ナーダは、愛しい忍者の白い体を抱きしめていた。

右胸から左腹にかけてをアジャンに斬られジライは重傷。しかし、治療は拒んでいると、娼館で部下の報告を受けた時……ナーダの目の前は真っ白になった。体中から血の気が引き、王宮に戻りジライの姿を目にするまで生きた心地がしなかった。

部下の案内で向った先は、ナーダ用の客室（ゲスト・ルーム）の寝室だった。ここならば、主人（セレス）も探しに来ないと考え、隠れたのだろう。ナーダが駆けつけた時、ジライは明かりもつけず、部屋の隅に蹲って小さくなっていた……クナイを握って。寝室に入って来た者が誰だかわかっても、忍者は殺気を消そうともせず、武器も手放さなかった。そのぴりぴりと気を張り詰めた姿は、手負いの野生動物を思わせた。

ナーダが結界を張った後、ようやくジライは衣服や覆面を外し、怪我を見せてくれた。皮膚だけではなく肉までえぐられ、肋骨が折れ、臓器が傷ついていた。心臓や肺が無事だったのは幸いだったが、相当、出血もしたようだ。傷を自分で縫って塞ぎ、人を近づけず、武器を握り締めて痛みを堪えていたジライ。誰も信頼していないその姿は、あまりにも痛々しかった。

インディラ神に祈りを捧げ、ナーダは治癒魔法を唱えた。ジライの傷をふさぎ、折れた骨を繋ぎ、傷口を縫い合わせていた糸を抜き、

疲労回復の魔法も唱えた。
そして、今、腕の中には怪我が癒えたジライが居る。顔はまだ青白いままだし、血肉や骨がなじむまで、二、三日はかかる。まだ治ったわけではないが、安静にしていれば傷口が開く事はない。彼(ジライ)が死ぬ事はない……彼(ジライ)を失う恐れはないのだ……
内からこみあがってきた衝動のまま、ナーダは愛しい者に口づけを贈った。ジライは拒まなかったが、口の中は乾いており、舌使いもおざなりだった。
「今日は寝ないぞ」
ぼそっと呟いたジライに、ナーダは苦笑を見せた。
「安心してください。あなたを襲う暇はありませんから。これから私は超多忙になります。本当は今すぐにもセレスの所へ行って、今後の相談をして、あれこあれ手配をしなくてはいけないのですが……」
ナーダは震える手で愛しい者を抱きしめた。
「もう少しだけ……このままで居させてください」
「……」
ジライは何も言わなかった。けだるそうに溜息をついて、ナーダに身を預けるばかりだ。
「愛しています……ジライ」
「……」
「あなたを失ったら、私、もう生きていけません……」
東国忍者は不快そうに眉をしかめ、顔をそむけた。
「……もう良かろう？　放せ、セレス様の元へ行く」
「え？　動いてはいけません。ここでしばらく休んでいてください」
「もう治った」
「まだ治ったわけではありません。おとなしくしていてください。セレスには私から事情を説明します」
「放せ」
「放しません。お願いです、ジライ、ここに居てください、あなた

を失いたくない……」
ジライが不快そうに語気を荒げる。
「黙れ！　我はきさまの所有物ではない！　我のやる事に口をはさむな！」
尚も放そうとしない相手を、忍者はジロリと睨みつけた。
「放せ。この程度の怪我ならば、仕事や遊びで何度も負っている。治療してもらえばどうという事はない」
「遊び……？」
仕事はともかく……遊び？
ジライはフンと鼻で笑った。
「生死の境を彷徨った数など覚えておらぬわ。今、見た目は何ともないが、本来ならば我が体は、刀傷、鞭の痕、火傷、切り傷、焼きゴテの痕だらけじゃ」
「……ジライ」
「幼き頃より、体の表面の傷が増える度、大魔王教の神官の治療を受けてきた。あやつら、金さえ積めば、傷痕を消してくれるからな」
「幼い頃から……ですか？」
「そうだ」
「何時頃から……？」
「知るか。物心つくより前からじゃ」
フフンと小馬鹿にするように、ジライが笑う。
「おまえが有難がっているこの体は、おまえが嫌悪している大魔王教徒によって表面だけ磨かれたまがいもの……真実を隠した偽りの体だ。自然をこよなく愛するインディラ神ならば、神罰を下したくなるであろうよ！」
「……ジライ」
「とっとと放せ！　きさまの甘っちょろい言葉を聞くと、虫唾が走る！　こんな穢れきった醜い体を宝のように思うな！　阿呆め！」
ジライはぎょっと驚き、体を硬直させた。
ナーダが……ジライの右胸にそっと唇で触れ、軽く接吻してきた

からだ。恭しく……まるで聖なるものに触れるかのように。
「あなたの体……二度と、大魔王教徒には触らせません」
ナーダは胸から肩、首へと口づけを続ける。
「これからは私が癒します」
「……」
「どんな怪我でも治してさしあげます。女王様遊びでついた傷でも構いません」
「ほう？　己の享楽の為だけに、体を傷つけて悦ぶ者を癒すのか？　表面だけとりつくろう手助けをするというのか？　良いのか、それで？　歪んだ性癖の者を救っていては教えに反するぞ。大僧正候補のくせに！」
「表面の傷を癒すか癒さないかなんて……たいした問題じゃありません」
「なに？」
「……私が癒したいのは他のものですから」
ジライの顎をとり、ナーダは口づけを捧げた。長い接吻の後、ナーダは思いを口にする。
「愛しています、ジライ……」
「……」
「あなただけを愛しています」
ジライも、又、ナーダを見つめる。
その白い顔は徐々に赤く染まってゆき……
その白い体は静かに震え……
やがて、あがった右の手は……
容赦なくえぐるように、武闘僧の脇腹を突いていた。
「痛っ～！」
痛みを堪え蹲った者を、忍者は怒鳴りつけた。
「阿呆！　何度言えば覚える！　『愛』だの『愛しい』だの連呼するな！　気色悪いわ！」
そう言い捨てると、ジライは運び込んでいた自分の荷物から替え

の忍装束を取り出し、着替え始めた。
「きさまは『セレス様専用回復役』として生かしておいてやっているのだ。でなければ、我が素顔を見たきさまなど、とうに殺しておるわ。一度や二度、我を癒したぐらいで頭にのるでない」
「いえ、あの、頭にのったわけではなく……正直な気持ちを口にしただけで」
「やかましい」
床の上に座り込んだナーダの顎を蹴り飛ばし、床に転がす。
その後は、武闘僧を無視して、ジライはさっさと着替えを終えた。そして、覆面をつける前にまだ立ち上がれずにいる者の前にしゃがみ、薄く笑ってみせた。
「我はセレス様の元へ行くが、おまえはどうする？」
「……ご一緒しますよ」
ナーダは深いため息をついた。
「ですが、ジライ、くれぐれも無茶はしないように。おとなしくしてないと、傷口が開きますから。しばらくは護衛は私とシャオロンに任せてください。いいですね」
「……成り行き次第だな」
「ジライ！」
「傷口が開いたら、おまえが癒せ」
笑いながら、ジライはナーダの頬に口づけをした。
「癒させてやる」
ナーダはその白く美しい顔を見て、溜息をつくしかなかった。身勝手で無慈悲なこの男には逆らえないのだ。

極光の剣　こぼれ話　ナーダ&ジライ（6話）（後書き）

この後、マリーの治療をしてからセレスの部屋へ二人で行きます……

極光の剣　こぼれ話　シャオロン&セレス（9話）

セレスは『エルフの弓』で迫り来る魔族を射抜いた。
人の形すらしてない低級魔族だ。狼や鳥に憑いた魔族は、セレスの弓に敗れ、次々に浄化されていった。
橇とトナカイを守るのは、老忍者ガルバとその部下のダンルとバイトゥーキ。聖なる武器も神聖魔法も使えない彼等は魔族を倒せない。セレスは彼等から離れすぎないように気を配りながら、敵の間を駆け抜け爪を振るう少年を援護した。

ガルバ達が出発の準備をしている間、セレスは魔族との戦いの跡を静かに見つめていた。えぐれた地面、折れた木々、飛び散っている奇妙な粘液……セレスの横に立つ少年も、又、変貌した雪景色を眺めていた。
セレスは拳を握り締める。一刻も早くアジャンに追いつきたいのに……魔族に襲撃される度に橇は止まる。足取りは非常に遅い。果たして間に合うのだろうか？
「アジャン……」
その口から漏れた声は、東国の少年の耳にも届いていた。金の髪の美しい顔は憂いに曇っている。少年は胸の痛みを感じた。が、前向きな彼はすぐに表情を改め、笑みを浮かべる。
「セレス様、オレ、よく効くおまじないを知ってるんですよ」
「おまじない？」
「願い事が必ずかなうおまじないです」
「必ずかなうの？　すごいわね、必ずだなんて」
「はい。オレ、今もまだまだ未熟なんだけど、昔は本当に格闘が駄目で、父さんから道場の出入りも禁じられていました。腕力も闘争心もない臆病者だって言われて……『武術の才なし』って見捨てら

れたの、すっごく悲しかったんです」
「シャオロン……」
「正直言って、人と殴りあうのは嫌いでした。自分が痛いのも、誰かを傷つけるのも嫌でした。でも、オレ……父さんを尊敬してたんです。父さんの武闘の型は、本当、すっごく綺麗だったんですよ。水が流れるようでいて、それでいて素早くて鋭い。攻撃に移るのはほんの一瞬だけで、それまでは優美な舞のようにしなやかに体を動かしているんです。オレ……父さんみたいになりたかった。道場の出入りを禁じられてもあきらめられなかったんです」
「……」
「稽古がしたいって、何度、お願いしても『おまえは格闘家以外の道を進め』としか父さんは言ってくれなくて……オレ、毎日、メソメソしてたんですよ。そうしたら、母さんが、願い事が必ずかなうおまじないを教えてくれたんです」
「お母様に教えていただいたの……そう」
「オレのやる通りにセレス様もやってください」
「わかったわ」
「まず、深呼吸」
「ええ」
「次に拳を構えて、目を閉じる」
「やったわ」
「で、心の中で願い事を唱えるんです」
「……唱えたわ。次は？」
「ありません。これで終わりです」
「これで終わり？」
「はい。これだけを毎日、欠かさずやるんです。何があっても、毎日、休まずに……」
「いつまで？」
「願い事がかなうまで、です」
シャオロンは目をあけ、にっこりと微笑んだ。

「オレ、まだ、ずっと続けてるんです。オレの夢は『シャイナ一(いち)の武闘家ユーシェンのようになる』です。まだまだ夢までは遠いですけど、一歩、一歩、少しづつ近づいています……オレが一人で格闘の練習をしてたらフェイホン兄さんが、父さんに内緒で朝夕と稽古をつけてくれるようになりました。ティエンレン兄さんも、握力・筋力の鍛錬方法を考えてくれました。村があんな事になってしまった後も……ナーダ様やアジャンさんがオレを教え導いてくれています。だから、オレ……足を止めません。亀みたいな遅い歩みしかできないけど、オレ、みなさんのおかげで、ちょっとづつでも前に進めてるんです。諦めなければ、いつかは……夢に届くと、オレ、信じてます」

セレスは少年を見つめ、笑みを返した。

「そうね……あなたの言うとおりだわ。諦めたら、そこでおしまいですものね」

「はい」

「とても良いおまじないを教えてくれて、ありがとう。泣き言なんか言わずにがんばるわ、私」

老忍者ガルバが出発の準備が整ったと二人を呼ぶ。セレスと少年は笑みを交し合い、共に橇に向った。

極光の剣　こぼれ話　ナラカ&ガルバ（11話と12話の間）

やわらかな光の中で、ガルバは目覚めた。
死にかけていた体に熱が戻っている……
傷が癒されつつある……
懐かしい気を感じた。敬い慕い続けた主人の気だ。
「御身様……」
主人（あるじ）がたたずんでいる。黒い長髪、黒の魔術師のローブに魔術師の杖。僧侶にはまったく見えないその姿。主人は女性のように美しい顔に、微笑みを浮かべた。
「違いますよ、ガルバ。今のあなたの『御身様』は、私ではなく、私の甥っ子のナーダでしょ？」
「ああ……やはり、御身様……人を喰ったようなそのしゃべり方は間違いなく……」
「おや、ひどい。久しぶりに会えたというのに、嫌味ですか？　ご挨拶ですねえ、ガルバ」
主人が楽しそうに笑う。僧形を嫌い、髪を伸ばし、インディラ教の戒律はことごとく破り、それでいて神の愛は深く高位の魔法まで難なく用いていた主人。優美な外見とは結びもつかぬ破天荒な生き方に惹かれていたのだ。
生涯お仕えすると忠誠を誓ったのは……主人が七つ、自分が九つの時だった。あの頃は、まだ主人は出家していなかった。
もう五十年以上前のことだが……
五十年？
「おや、何とした事か……御身様がお若く見える。昔、お別れした時と変わらぬお姿に見えまする」
「それはそうですよ」
主人はにっこりと微笑んだ。
「あなたは、今、夢を見ているのですからね」

「夢……？」
「夢ならば、どんな姿も思いのまま。この姿は、あなたへのサービスです。醜いジイさん姿よりも、若く美しい私の方があなたも嬉しいでしょ？」
「どのような姿に変わられようと御身様は御身様にございます。どうせならば、今のお姿を拝見したかった……」
「ガルバ……」
「お別れしてよりの三十五年……まったくもって私は役立たずにございました……」
ガルバは懐かしい主人を見つめる瞳を細めた。
「御身様……申し訳ございません……実は私めはたいへんな失態を犯してしまいました。御身様より託された大事な妹姫サティー様をお守りしきれず……婚家であのお方のお立場が苦しくなっていくのを救えず、あのお方とお子様を日々暗殺の危険にさらし、病で衰えられてゆくあのお方に何一つ……」
「おやめなさい、ガルバ。何でも自分のせいにするのはあなたの悪い癖だと、私、注意したはずですよ」
「ですが、私がいたらぬばかりに」
「いいえ。あなたは、本当によくやってくれました。サティーも、あなたに心から感謝していましたよ」
「……お会いになられたのですか？」
「ええ。亡くなってからですがね」
「では、御身様も……既に鬼籍に？」
「いいえ、ガルバ。私は生きています。いつかこの身に課せられた使命を終えた後、私は帰ってきます、必ず、あなたの元へ。それまではナーダを……サティーの息子を今まで通り助けてあげてください。頼みましたよ」
良い夢を見たような気がしたが、どんな夢だったのかは思い出せ

なかった。

けれども、目覚める前に、誰といたのかはわかっている。

術をかけられ記憶を消されても、わかるのだ。

魔法を使用すれば、魔力の痕跡が残る。魔力は術師ごとに特徴が異なる。それは、それを用いた人間の気によって変化するからだ。

魔法に縁のないガルバが、見分けられる魔力は二人のものだけだ。

『御身様』と、彼が慕い、誠心誠意仕えてきた主人のものだけだ……

致命傷とも思えた傷を負った自分を癒してくれたのは、ナーダではない。誰が治療魔法を使ってくれたのかは、ガルバにはわかるのだ。

（出会った記憶を消すとは……やはり、わしにつきまとわられるのがお嫌なのか……。だが、生きていてくださった。それが、わかっただけでも）

老忍者ガルバは周囲に満ちた殺気を読み、素早い体術で雪の森に潜む襲撃者を捕らえに走った。

極光の剣　こぼれ話　ガルバ＆ムジャ（終1）

「御身様を刀の鞘で叩いた……？　あの東国忍者が？　血塗られた鞘で？　御身様を……？」

ムジャは頷きを返し、上目遣いに上司を見つめた。ナーダ至上主義の老忍者は予想通りの反応をしている。この世の終わりが来たような顔をし、全身でショックを表し、わなわなと震えている。

「叩いた回数は、後頭部を一回、背中を三回でした。まあ、暴力というよりは、活を入れたといった感じでしたが」

「ムジャ！　おそばにいながら、きさま、何をしていたのだ！　いずれはインディラ国王になられる貴きお体を、下賤な忍者が侮辱したのじゃぞ！　主人の危機に働けぬ忍など忍ではないわ！」

「いえ、あれは危機ではなかったと思うんですが」

「ムジャ！」

「頭領……実はちょっとお聞きしたい事が」

「何じゃ！」

「正直にお答えください、ナーダ様は、もしや」

ガルバの一の部下は頬を赤く染め、咳払いをした。

「俗に言う……M趣味なのでございましょうか？」

「は？」

硬直する老人の前で、ガルバ子飼いの部下は生真面目な顔で尋ねた。

「あの東国忍者、ナーダ様に命令口調で話しますので、あの二人の間に何かあるのでは？　と、前々から我らの間で話題にはなっておったのですが……叩かれた後、ナーダ様はむしろ嬉しそうで、その

後、発奮してお働きになっておりました……又、あの東国忍者に邪険にされ蹴られても、ニコニコ笑いながらまとわりついておられますし……どう見ても、あれは……」

「……」

「もちろん、ナーダ様のご趣味が多少常軌を逸しておりましても、我らの忠誠心に変わりはございませぬ。これまで通りお仕えする所存にございますが……」

ムジャは声を潜めた。

「で、本当のところは？　ナーダ様はどの程度のM趣味で？」

「馬鹿者！　御身様にそのようなイカれたご趣味はないわ！　変態はあの東国忍者じゃ！　あやつが全て悪いのじゃ！」

老忍者の叫びむなしく……その後も、殴る蹴るの暴行を繰り返すジライに愛の告白を続けるナーダが何度となく目撃され……ナーダ＝M（イコール）趣味は、ガルバの部下達の間の定説となったのだった。

極光の剣　こぼれ話　ガルバ&ジライ（終1）

インディラでの用事を終え老魔術師の移動魔法で、ホルムの王宮に戻った老忍者ガルバ。
彼はまっすぐに、東国忍者の元へ向った。

「ご老体の活躍に、道中、何度となくセレス様は救われたと、シャオロンより聞き申した。かたじけない」
「こちらこそ、部下を八人失わずに済んだ。部下達を斬らずにおいてくれた事には感謝しておる」
主人の交換警護の件の礼を言い合った後、ガルバは下げていた頭を上げ、口調を強いものに改めた。
「だが、この際、言わせてもらう。きさまの御身様への態度には目に余るものがある。即刻改めてもらいたい」
「む？」
「東国忍者と我らインディラ忍者では、生き方が違う。インディラにおいて忍者は、主人に仕える影……日の光の下で生きる主人を敬い、主人の為に陰ながら尽くすのが忍の道よ」
「……」
「きさまは東国忍者じゃが、今は、御身様の配下にあろう？　少しは分をわきまえよ。　御身様に対等以上の口をきくな！　あの方に命令するな！　皮肉な口も控えよ！　あの方はいずれインディラ国王になられる高貴な御方！　下賤な忍者とはご身分が違うのだぞ！」
東国忍者はフンと鼻で笑った。
「……我の知った事ではないわ」
「何を！」
「ご老体、勘違いなさっておられるようだが、我はナーダの配下ではない。我（われ）が仕えておる貴き御方は、セレス様、ただお一人じゃ」

「嘘をつけ！　きさま、御身様から毎月八十万で雇われておるではないか！　東国忍者は雇用主を敬う礼儀すら心得んというのか？」
「確かに金は貰っているが……部下として契約したのではない。我は愛人じゃ」
「へ？」
「愛人」
「……あいじん？」
「一月一回の性交で、八十万ゴールド貰い、ご老体方と共に諜報活動をする。愛人兼協力者という立場だ。そういう契約になっておる」
「……」
「ご存じなかったようですな」
「おぬしを傘下に加えるゆえ、忍として協力し合い、納得できる理由をもって求めがあれば部下を貸し、報酬も払うようにと……御身様はそれしかおっしゃられなかった」
インディラ忍者はぶるぶると体を震わせた。
ただでさえ、東国忍者のせいでナーダに関する悪い噂が部下達の間で広まっているというのに……
男を愛人として囲っているなどとバレては……ますますひどい事に。部下達の間で、ナーダの評判が地に落ちてしまう。
ガルバは白子の忍者をチラリと盗み見た。情に訴えても、この男には効果がない。又、東国忍者は契約を重視する。好条件で敵方に誘われても、絶対、寝返らないのだ。大金を積んでも、ナーダと別れてはくれないだろう。
となれば……
二人の異常な情事の場から部下達を遠ざけるのは当然として……
後は……

武闘僧ナーダは机の上につっぷしてうたた寝をしていた。
上皇制度の復活とケルティ復興の為、夜も昼もなく働き続けてい

るのだ。
その上、最近、部下達が報告書やら目を通して欲しい資料やらをやたらと持って来るのだ。
部下が仕事熱心なのは良い事なのだが……どう調整しても、自由時間どころか睡眠時間すらろくに取れない。
「御身様、南部の復興状況と支援物資の需用の推移、それと、次の国バンキグの国情に関する資料にございます！」
ガルバの声に、ナーダは机から顔をあげた。
目の前に顔が隠れるほどの高さの書類を抱えた部下が立っている……
疲労回復魔法をかけて、今夜もこの部屋で徹夜だろうか……
このところ仲間達の顔を見る暇もない。溜息をつきながら、ナーダはガルバが持って来た書類に目を通し始めた。

極光の剣　こぼれ話　ナーダ&カルヴェル（終1）

「おぬし、大魔術師たるこのわしをだましたわけではあるまいな？」
老魔術師カルヴェルは、不機嫌そうな顔で、ナーダの部屋の中をふわふわと漂っていた。空中浮遊の魔法だ。
「もうすぐ半月じゃぞ。いつになったら、写本を寄こす？」
「騙してなんかいませんよ」
書き物の手を止める事なく、ターバンにインディラの王族姿のナーダが答える。
「ちゃんと写してさしあげますよ、大僧正様が写しても良いとおっしゃった本でしたら」
「大僧正の許可はもらってきた」
ほれと、ナーダの目の前に書簡をぶらさげる。
ナーダは手紙を開き、口元に笑みを浮かべた。懐かしい書跡を目にし、幸せそうな顔となる。
「確かに、大僧正様のお手ですね」
手紙には、写本にして老魔術師に渡して良い原書の名が記されていた。
「ご所望は、『聖なる武器に関する記録』と、『世界宗教建築　覚え書き』、『少数民族の歌舞と楽器』に、『古代王朝　占星術』、ハワン師の『薬草学』……ですか。意外なご趣味で」
「魔族、魔法、インディラ教の経典教義関係の本は駄目じゃと言われたのでな」
「わかりました。写せましたら、連絡いたします。では、また後日に」
「……じゃから、その後日が何時になるか聞いておる」
「さあ」
ナーダはにっこりと笑みを浮かべて、
「私、お伝えしたはずですけど？　『大僧正様からご許可がいただ

けた本のみ、時間がある時に写しましょう』と」
　机の上の書類の山を掌で指した。
「私、超多忙なんです。時間がありません」
「……その書類の山が片付けば、暇になるのかの？」
「さあ、どうでしょうねえ。ケルティはもう上皇様にお任せして大丈夫そうですが、バンキグ行きの準備もありますし、魔族を討伐しなきゃいけないし、女勇者様の護衛も務めなきゃいけないし、私、いつ暇になるんでしょうねえ」
「……おぬし、最初から、わしへの支払い、する気はなかったのじゃな？」
「とんでもない！　今のケルティがあるのは大魔術師カルヴェル様のおかげ。支援物資運搬の役は、今は、カルヴェル様の分身だけではなく上皇様も引き受けてくださってますけどね。カルヴェル様のご助力がなければ、多くの人間が雪の中で亡くなっていたでしょう。その貢献に感謝して、働かせてもらいますよ、私」
　ナーダはカルヴェルのごとき意地の悪い笑みを浮かべた。
「大魔王を倒し、インディラに凱旋した後に、ね」
「むぅ、そうくるか」
「ええ。大魔術師様ご所望のご本は、皆、門外不出の寺院秘蔵の書でしょ？　物質転送でここまで運んでもらうわけにもいきません。インディラに戻らねば写せないというのに……私、超多忙な上に、今、インディラに戻れない身の上なのですよ」
「ほほう」
「大魔王を倒すまでインディラに帰らないと、大僧正様と約束してしまっているんですよ。申し訳ありません、カルヴェル様の為に働きたいのは山々なのですけれども」
「……ならば、既に写本が存在している『聖なる武器に関する記録』、とりあえずアレだけを貰っておこう。他はおぬしの帰国まで待ってやるゆえ」
「あああ、残念」

ナーダはにやりと笑った。
「アレが私物でしたら、喜んでカルヴェル様に差し上げたのに！……アレは寺院の書庫の本なのです。原書に代わる閲覧用の、ね。寺院所蔵のモノを、私の一存では好きにできません」
「……なるほど」
ふむふむと老魔術師は頷いた。
「では、『聖なる武器に関する記録』のおぬしの写本をここに運ぶゆえそれを写せと、わしが言うたらおぬし何と言う？」
「『契約と違う』と言いますね。私、『写本』をカルヴェル様に差し上げると約束したのです。『写本の写本』ではなく……ね」
老人はしばし沈黙を守り……それから、ホホホホと笑い声をあげた。
「さすが、ナラカの甥。悪知恵が働くところが、ほんにそっくりじゃ。おぬし相手に曖昧な契約を結んだわしの負けじゃな。次、何ぞ、おぬしに頼む時は、言い逃れできぬ形で頼む事にいたそう」
「……ケルティにおけるご助力、心より感謝いたしております」
ナーダは席を立ち、インディラ式拝礼を老人に対してとった。報酬に関しては半ば以上騙したも同然だが、感謝する気持ちに偽りは無かった。
「大魔王退治の旅が終われば、私は帰国します。少しでも早く写本をお手になさる為にも……これからも、是非、私達の旅を助けてくださいね、大魔王退治の旅が早く終わるように」
「気が向いたら、の」
老人の姿がパッと消える。移動魔法で別所に移ってしまったのだ。
ナーダは会心の笑みを浮かべたまま、席に座り、書類へと目を戻した。

極光の剣　こぼれ話　カルヴェル&アジャン（終2）

「あのくそ馬鹿女！」

アジの村の部族王の館で、赤毛の戦士は吠えた。移動魔法で現われた大魔術師カルヴェルの分身が、今日、セレス達がホルムを旅立つと知らせてくれたからだ。

「何で俺を待たねえんだ！　すぐに戻るって言っておいたのに！」

「まあ、セレスにもセレスなりの考えがあるのじゃろ」

大魔術師カルヴェルの分身は、楽しそうにニコニコ笑っている。分身とはいえ能力も性格もカルヴェルそのもので、分身の見聞きした事は本人に伝わる。カルヴェル本人がそばにいるのと変わりがないのだ。

アジャンは荷物をまとめ、急いで旅の支度を整えた。右肩から左の腰にかけて斜めに革のバンドをつけて、『極光の剣』を背負う。

「ジジイ、間違いなく種はついたんだな？」

「うむ。透視と未来予知の魔法で確認した。おぬしがこの三週間の間に抱いたおなご十五人のうち八人が子を宿した。順調にいけば、来秋、男三人に女四人が産まれる」

「そんだけいりゃあ、アジの王の血はこの地に残るな。もう俺はお役御免だ。心置きなく馬鹿女を殴りに帰れるぜ」

旅の支度をする赤毛の傭兵に、魔術師は尋ねた。

「アジスタスフニルよ、おぬし、本当に良いのか？」

「ん？」

「故国を捨て……二度と戻らぬつもりなのであろう？　復讐を果たさぬまま家族が眠る地を離れ、おぬしはおぬしとして生きていけるのか？」

「ケッ！　腹黒い奴はゼグノスの血の宴でくたばったんだ。アジカラボスも死んだし、仇なんざ、どうせ生きちゃいねえよ」

「シベルア移民は？　奴等は放っておくのか？」

「ああ。ハリハールブダンは、シベルア移民もシベルア文明に染まったケルティ人も、等しく民として受け入れる気だ。上皇様がシベルアへの憎悪を封じるってのに、俺が暴れられるかよ。あいつにゃ、でかい借りができちまった。アジの生き残りをあいつに託すんだ。迷惑はかけられねえ」

「おぬし、本当に良いのだな？　望めばおぬしとて上皇になれる。『極光の剣』を所有しケルティの魔を祓ったおぬしには、それだけの資格があるのだぞ」

「未練なんざかけらもない。国の頭は一つで充分。二人も上皇が居たら、騒乱の元となる。それに、上皇なんて、めんどうな役、俺にゃむかねえよ」

赤毛の戦士は背の大剣を肩越しに見つめた。

「俺ぁ、傭兵だ。自分の腕だけを頼りに、これからも生きていくさ」

「……」

カルヴェルはにっこりと笑みを浮かべた。

「おぬしが光の道を選んでくれて、ほんに嬉しく思うぞ、アジクラボルト殿の息子よ。おぬしの心には、もはや迷いはなく、大剣を通じて先祖の霊がおぬしを守護しておる。高位魔族といえども、もう二度とおぬしには手出しできまい。新たに魔除けのペンダントをくれてやろうかと思っておったが、今のおぬしには必要ないな」

老魔術師がホホホホホと笑った時だった。

館の扉が開き、毛皮をまとった戦士達と女達が飛び込んできたのは。

「アジスタスフニル様！　旅立たれるとはまことにございますか？　せめて後、三日、とどまっていただけませんか？」

「せめて年明けまで……」

「いえ、せめて雪どけまで……」

「いやいや、せめて、初子が生まれるまで……」

うんざりと顔をしかめるアジャン。その逞しい体に、女達がすがりつく。

「私達にはまだ子種がついておりませぬ」
「お慈悲でございます、私達にもお子を……」
「ねーねー、アジスタスフニル様ぁ、今日も抱いてよぉ」
アジャンにまとわりつく女達は、二十代から三十代前半まで。ぽっちゃり系もいれば痩せた女も居り、美人もいればさほどでもない顔の者も居る。アジャンは分け隔てなく彼女らを可愛がり、底なしの体力で彼女達を愉しませ、その心をつかんでいた。
しかし……彼女等は、ほとんどが未亡人かアジの戦士の妻か妾。娼婦あがりの若い娘も混じってはいるものの、アジャンが生娘（きむすめ）には手を出さなかったので、年齢が高めの女性が多かった。
本人は『後家殺し』なんだと己の技術（テク）を誇っていた。が……処女を怖がり、処女を避けているだけなのだ。
処女は血を流す。その血を目にする度に、赤毛の戦士は思い出すのだろう。無残に犯されて処女の証を散らした姉を……切り刻まれ大量の血を流して亡くなった最愛の姉を……

赤毛の傭兵は、生涯、処女を厭い続けるに違いない。

「悪いが、もう、おまえらにつきあっている暇は無い！　俺ぁ、本業に戻らせてもらう！」
老戦士と女達にそう宣言し、アジャンはカルヴェルに向って叫んだ。
「頼む、ジイさん、馬鹿女の所へ送ってくれ！」
「うむ。わかった、達者での、アジスタスフニルよ」
大魔術師がほんの少し魔力を高めただけで、赤毛の戦士の姿が消える。移動魔法で運ばれたのだ。アジャンを旅立たせ役目を終えたカルヴェルの分身も、又、間もなくその場より消滅する。
アジの戦士と女達は、アジの王が消えた宙をいつまでも見つめ、

ただ、ただ、別離を惜しむのだった。

極光の剣　こぼれ話　カルヴェル&アジャン（終2）（後書き）

『極光の剣　こぼれ話』　完。

《第三章　ケルティの闇と光》完結です。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は……

＊　十八歳以上で男性の同性愛話でもＯＫという方　＊
ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』をご覧ください。
『現実の夢』。舞台はケルティ。ナーダとジライの話です。

＊　十八歳未満の方、男性の同性愛ものはパスという方　＊
このまま『小説家になろう』で。
次回より《第四章　得るもの失うもの》が始まります。

最初の話は『たとえ死すとも』。舞台はケルティ。
ガルバの一の部下ムジャは、最近、胃痛に苦しんでいた。それというのも東国忍者が……

＋　＋　＋　＋　＋

第三章、おつきあいありがとうございました。
ご感想等、いただけると嬉しいです。励みとなります。

人物紹介（第三章『ケルティの闇と光』を読了後にご覧ください）（前書き）

『たとえ死すとも』開始前までを踏まえた人物紹介です。

ネタバレありなので、『極光の剣　こぼれ話』までご覧になってからお読みください。

人物紹介（第三章『ケルティの闇と光』を読了後にご覧ください）

女勇者セレス
　エウロペ侯爵家令嬢。十七歳。
『勇者の剣』の守り手。ケルティでは『勇者の剣』を魔法剣として使用し
華々しい活躍を見せる。が、その後、アジャンを失ったと思い込みその喪失感から勇者としての使命を忘れ、剣に怒られてしまう。
現在、平時の剣の重量は体格の良い成人男性並と、とことん重たくなっている。
大魔王四天王のサリエル、ウズベル、イグアス、ゼグノスを滅ぼし、
残るはケルベゾールドのみ。剣との関係良化が急務。
カルヴェルより贈られた神聖防具の白銀の鎧を、常日頃、まとっている。
正義を愛する、まじめな熱血漢。育ちがいいので、ちょっと天然。おひとよし。
先祖の勇者達に憧れている。北方の言葉は苦手であまりしゃべれない。
愛らしい美少女だが、三才から男装し、騎士としての教育を受けてきた。
十二の少女の頃にカルヴェルの弟子となって神聖魔法を習得。
聖騎士の叙勲を受け、エウロペ国王に仕えていた。
西国人にしては小柄。金髪碧眼。処女。
『体の発育は抜群』で、
性格も顔もスタイルも『どれをとっても完璧』な『真の女王様』との声も。
強い感情や思いに触れた事がきっかけで、その者の心を我が事のように感じる、

共感能力者（エンパシー）でもある。

赤毛の戦士アジャン
傭兵。二十七歳。本名アジスタスフニル。
アジ族に伝わる両手剣『極光の剣』を使う。
アジ族の生き残りから未だに部族王として慕われているが、
家族を全て失った時に部族神への信仰を無くした為、
王を名乗る意志はなく、大魔王討伐後に帰国する意志もない。
酒好きの女好き、短気で傲岸。
姉アジンエリシフに初恋に近い感情を抱いていた為、
姉の死を思い出させる処女を嫌っている。
必要とあらば相手に合わせへりくだるなど、処世術も心得ている。
しかし、セレスの前では仮面を被れず、彼女の人の好さに苛立つ毎日。
ジャポネに行く前までは、セレスの剣の師となり、彼女に戦闘のコツを教えていた。
即物的な性格だが、非凡なシャーマン能力があり、
進むべき道がわかるなど便利な力がある。
神魔の器となれる霊媒体質の為、魔族に狙われやすいが、
『極光の剣』を通じ先祖の加護を受けている現在、魔を退ける力を有する。
権力を厭い、金に執着する一方、守護を決めた人物を全力で守ろうとする誠実さも。
年少者にやさしい。
一時期、エーゲラのオクタヴィア女王の情人だった。

武闘僧ナーダ
インディラ教次期大僧正候補。三十歳。

インディラ国王の長子だが、国王第二夫人アヌラーダの一族に命を狙われ、
母の死後、闘争を避けるために出家し、総本山の修行僧となった。
北方ではインディラ教は邪教扱いされているので、出自を利用し、王族の衣装をまとって行動している。有髪で頭にターバンを巻いている。
素手で闘う武闘が得意だが、剣・槍などの武器も人並み以上に扱える。
両腕、両脚に、神聖防具の装甲を付けている。
神聖魔法・回復魔法・強化魔法・弱体魔法が使える。
カルヴェルから結界魔法の効果を増幅させる腕輪を巻き上げた為、苦手だった結界魔法をバンバン使えるようになっている。
信仰心に篤く、真面目。女嫌いの男色家。
武術・学問・魔法等、何事においても一番を目指す完璧主義者。
インディラの大僧正に傾倒しており、部下の老忍者ガルバを大切にしている。
僧侶だが霊感はゼロで、この世の神秘を見る目も持っていない。
忍者ジライに熱烈な片思いをしている。

格闘家シャオロン
シャイナ一の武闘家の五男。十三歳。
両手に『龍の爪』を装備して戦う。
大魔王四天王の一人サリエルに家族を殺され村も滅ぼされ、仇討ちの為、勇者一行に加わる。
武術の才がないと父から見捨てられていたが、父の姿のサリエルを倒し、見事、仇を討つ。
真面目で素直、何事にも一生懸命な熱血漢。腕力はないが、敏捷性は高い。
鋭い人間観察眼もあり、策士の才もあるらしい。

学は無いが、セレスよりはシベルア語が理解できている。
霊感体質で、傍にいる事で時にアジャンやセレスの能力を向上させる。
ペリシャで過去の英雄シャダムの霊と出会い、
バンキグの英雄ゲラスゴーラグンに謝罪を伝える事を約束し、
『友が闇に堕ちたように目に映ったとしても、信じ続ける』を信条とした。
セレス、アジャン、ナーダ、ジライ、カルヴェルを尊敬している。
初恋の相手はセレス。
セレスの次にアジャンを慕っており、亡くなった弟の代わりとして自分がかわいがられているのだと承知している。

忍者ジライ
セレスの命を狙っていたもと暗殺者。二十五歳。
『ムラクモ』の振るい手。『ムラクモ』を『小夜時雨（さよしぐれ）』と呼んでいる。
忍の里の頭領の数多くいる息子の一人で、
忍術・忍法・邪法・諜報術・剣術・体術・盗術・房中術・暗殺術に秀でた彼は、
次期頭領に目されていた。『白き狂い獅子』の異名を剣の師から継いでいた。
白髪、白い肌の白子。美形。忍としていつでも死ぬ覚悟ができており、
刹那、刹那を生きる彼は、何事にも拘泥しないで生きていた。
しかし、アジャンに恋心を抱いたセレスを見て動揺し、アジャンに嫉妬して
殺意を覚え、一時、『ムラクモ』を使えなくなっていた。
現在はセレスがアジャンを嫌いぬいているので精神的に落ち着いている。

表面はSで、根はM。セレスを真の女王様と慕い、仕えている。
人を御す為の房中術として、誰とでも寝る。
忍の里で育ったもと大魔王教徒なので、勇者の従者となった今も道徳観念がない。
ナーダの気持ちをわかっており、役立つ駒となりうる彼をいつでも利用できるよう房中術で操っている。

大魔術師カルヴェル
先代勇者ランツの従者となって、共に大魔王を倒した英雄。
年齢不詳（本人談　いい年のジジイ）。
当代随一の大魔術師（魔術師協会には所属していない）。
攻撃魔法、強化魔法、弱体魔法、神聖魔法の他、暗黒魔法（邪法）まで使える。
しかし、回復魔法だけは高位魔法を使えない。
魔力が計り知れないほど膨大。
移動魔法の連続使用、長距離移動も、呪文の詠唱抜きで可能。
人をからかって遊ぶのが何よりも好きで、
セレスにセクシー・ポーズ授業をしていた。
勇者一行に加わる事は拒んでいるが、
セレスの危機に駆けつけたり、勇者一行に聖なる武器や魔法道具（マジック・アイテム）を売ったり貸したりしてその旅を助けてもいる。
北方にもその名は轟いており、ケルティの上皇の政治的顧問となった彼を恐れ、
シベルアも軍事行動を控えている。
先代勇者一行の旅の結末に、悔いを残している。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

勇者ランツ
　先代勇者。セレスの祖父。セレスが三才の時に病で死亡。
カルヴェル、ナラカとは義兄弟の契りを結んでいた。
豪胆放埒な勇者らしからぬ男だったが、『勇者の剣』から最も愛された、
勇者史上最強の勇者と謡われている。
若い頃は、カルヴェルと共に歓楽街の帝王として名を馳せていた。
大魔王討伐後、トゥルクの姫君エリューズ（エリス）と結婚している。

僧侶ナラカ
　先代勇者ランツの従者。ナーダの伯父。もと大僧正候補。
僧侶でありながら有髪で、飲む打つ買うを好んだ不良坊主。
大魔王討伐時に、邪法の魔法陣に囚われ異界に閉じ込められる。
影だけ今世に戻って来ており、魔族の開いた次元通路の上を彷徨っている。
トゥルクでは『魔法使いナーダ』と名を偽ってセレスを助けた。
カルヴェルに頼み、呪に囚われている事を秘密にしてもらっている。

エウロペ国王
　セレスの庇護者。名君と名高い。

次代勇者グスタフ
　セレスの姉の子供。次代勇者として期待され、王宮で保護されている。五歳。

ヤンセン侯爵
セレスの父。婿養子。巡回裁判官。正義を愛する熱血漢。

アジの部族王アジクラボルト
アジャンの父。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
『極光の剣』をカルヴェルに託し、亡くなる。

ハリの部族王ハリハールブダン
ケルティの上皇。『極光の剣』と対になる『知恵の指輪』の所有者。
カルヴェル（分身）の指導を受け、
今世で三本の指に入るほどの大魔法使いとなったシャーマン戦士。
アジの生き残りも一族に受け入れている。

インディラの大僧正
ナーダが尊敬し慕っている老僧。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
インディラの総本山にいる。

ジャガナート僧正
ウッダルプル支部僧正。ナラカの友。ナーダの武闘の師。
インディラ一の武闘僧だったが、その称号はナーダに譲った。

老忍者ガルバ

ナーダの忍者軍団の頭領。非公式な存在の為、表だって部下を名乗れない。
ナーダの隠し財産も管理している。僧侶ナラカ、ナーダの母にも仕えた忠義の部下。
ナラカは寺院の生活を厭い出奔したと思っており、家族を持ち身重となっていた
為に供に選ばれなかったのだと、当時の自分を悔いている。
だが、ナーダとその母を守る為に、その家族をも犠牲にしている。
ナーダを還俗させ、インディラ国王に即位させる野望を抱いている。

忍者ムジャ
ガルバ子飼いの部下。ナーダの忍者軍団の副頭領。平凡な顔立ちの目立たない男。

武闘家ユーシェン
シャオロンの父。カルヴェルの茶飲み友達の一人。
サリエルに殺され、その肉体を奪われていた。

情報屋グジャラ
西はエウロペ東はジャポネまでの情報を掌握する情報屋の元締め。
表の商売は魔薬屋。忍の里とも懇意。
刹那的快楽主義者。ジライの知己。

くノ一アスカ
忍の里の頭領の娘。ジライの実妹。

ジライより『我が宝』と大事にされていたが、誰とでも寝る彼にやきもきしていた。

忍者ダイダラ
知恵遅れの一つ目鬼。その馬鹿力で、ナーダを危機に追い込んだ。ジライを庇い『勇者の剣』で致命傷を負う。ジライの介錯で、逝く。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

勇者ホーラン
二代目勇者。現在も騎士の鑑と称えられている慈悲深く高潔な聖騎士。
真面目で不器用な性格を勇者一行全員から愛されていた。

女魔法使いユーリア
ケルベゾールドに寝返った稀代の悪女とされている、もと従者。
しかし、事実は、ケルベゾールドを自分の内に封印し、勇者仲間を守った心優しい女性であった。
ケルベゾールドに憑依された彼女は、自らの正体を隠し、大魔王としてホーランに討たれ消滅している。

聖戦士シャダム
ペリシャ建国王の弟で、ホーランの従者、ペリシャ教の聖人。
シャムシール『銀の三日月』の使い手。

ユーリアへの愛ゆえに、大魔王に憑依された彼女を殺せなかった。
ユーリアの呪によって真実を忘れた彼は、彼女を生涯非難し、
ゲラスゴーラグンと対立した。
セレスの存在によって真実を思い出した彼は、
ゲラスゴーラグンへの謝罪をシャオロンに託す。

北の戦士ゲラスゴーラグン
後にバンキグ国王に即位した、ホーランの従者。
戦斧『狂戦士の牙』の使い手。
己の武器と名とそれぞれの神にかけて地上に和をもたらそうと誓い合った仲間を
生涯信じ続け、ユーリアの堕落を否定した。
ユーリアに求愛していた。

僧侶マハラシ
ホーランの従者。インディラ僧侶。
神の祝福によって、真実を見抜く目を持っていた。
『聖なる武器に関する記録』他、数多くの著書を残している。

人物紹介（第三章『ケルティの闇と光』を読了後にご覧ください）（後書き）

次回は『たとえ死すとも』。舞台はケルティ。

ガルバの一の部下ムジャは、最近、胃痛に苦しんでいた。それというのも東国忍者が……

たとえ死すとも

「新たな生き方を選びたければ、わしと共に来い。決して楽な道ではないが、『生きる意味』ができる。死すとも悔いのない人生を生きられよう」

目覚めてからしばらくベッドでぼんやりしていた。

昔の夢を見たのだ。

バイトゥーキやクルグと共に、ムンバディの街で浮浪児の盗賊団をしていた頃の夢だ。

それよりずっと前、俺にも家族があった。小さな村の子沢山の農家だった。おぼろげに覚えている。

しかし、物心つく頃には、軽業師の弟子となっていた。よく覚えていないが、不作の年にでも売られたのだろう。

軽業師は、買い集めた子供達を獣のように扱って調教した。ろくに食事ももらえないその檻から抜け出したのは、十になる前だった。同じ境遇の仲間と共に逃げたのだ。その時から、バイトゥーキやクルグと一緒だった。

親元に帰れない子供が子供だけで生きるには、犯罪に手を染めるしかなかった。かっぱらいや強盗。身軽な体は盗みに向いていた。

同じような浮浪児グループと手を結び、親に捨てられた子供や家出してきた奴を仲間に加え、俺達はムンバティのいっぱしの顔になっていった。俺は、街のヤクザ組織にアガリをおさめる、浮浪児盗賊団のリーダーとして生きていた。

あの日、頭領（ガルバ）に出会うまで……

あの頃、頭領は新たな忍者軍団を作ろうとしていた。部下全員を失っていたので、即戦力となる部下を欲しがっていた。

浮浪児グループを拾い上げるなど、本意ではなかったはずだ。

しかも、頭領は全員一緒でと願う子供達の気持ちを容れ、片足の子も、眼の見えぬ子も、知恵遅れの子も、共に連れ帰ってくれた。

その上で、どのような人材が欲しいのかを話し、その為にはどのような鍛錬が必要かも教え、試験期間に見込みがないと判断した者には養子先か徒弟先を斡旋すると約束した。

仲間の三分の一は脱落したが、頭領は約束通りその仲間にも新たな暮らしを与えてくれた。

頭領とその友人、頭領の出身里の老人達の指導の下、忍者修行は続いた。

指導者達と同じ家に住み、同じものを食べ、健康に留意してもらえ、病や怪我となれば手厚く看護してもらえた。大人達は、押さえつけるだけでなく話相手ともなり意見も聞いてくれ、一人一人の誕生日に贈り物をくれ、行事ごとに共に祝ってくれた。

それが東国に比べぬるいと言われるインディラ忍者の世界においてですらも、ありえないほど人道的な教育環境であったと知ったのは……かなり大きくなってからだった。

出かける度に、頭領は、人買いから買った子供や、俺達と同じような境遇の浮浪児を拾ってきたので、家は賑やかになっていった。

古株となった俺はバイトゥーキやクルグと共に、頭領の為に子供達をまとめ、時には年少者の指導も引き受けたりした。

そのまま、ずっと、頭領の下で生き、今では忍者軍団の副頭領となっている。

共に生きてきたバイトゥーキが死んだことに、いまひとつ実感がわかなかった。その死体を目にしていない為だ。だが、バイトゥーキは死んだ、ダンルと共に。ケルティの魔の宴で亡くなったのだ。

バイトゥーキは頭領に拾われた事を喜び、頭領の主人が大僧正候補でありいずれは還俗してインディラ国王に就くナーダ王子と知って仰天し、頭領とナーダ様の為に生き生きと働き、女勇者様一行の旅に加わるとなって感激していた。

親に捨てられ町のダニと蔑まれていた俺達が、この世を救う為に働けるなんて夢みたいだと言っていた。

忍となったバイトゥーキは、頭領の言うとおり『死すとも悔いのない人生』を歩めたのだろう。

仕えるに値する主人、尊敬する上役、世を救う為の任務を与えられ、喜んで働き、そして死んだのだ。

幸せだったに違いない。

同じように生き、死にたいと思っていた。

子供時分からずっと、『死すとも悔いのない人生』を送ろうと思ってきた……

しかし……

ここ数日、まともに主人（ナーダ）の顔が見られない。

頭領（ガルバ）の顔も見られない。

食欲もなく、キリキリと胃が痛む。

あの東国忍者のせいだった……

もともと、東国忍者には思うところがあった。
女勇者様の命を狙っていた暗殺者。あの男とあの男の部下だった東国忍者達は主人(あるじ)ナーダ様の敵だった。
そのうえ……ルドラカやパーンダにカイサの仇でもある。正しくは、あの男が殺したわけではないが……三人はあの男の体を乗っ取った魔族(サリエル)に殺されたのだ、シャイナの荒野で。
それだけではない。インディラの要塞城跡で、アッチャとガナルもあの男の部下だった少年忍者に殺されている。
東国忍者と、にこやかに馴れ合うなど無理だ。
しかし、敵だった者と共に行動する事になるなど、忍の世界ではよくあること。努めて気にしないようにしてきた。副頭領という立場にあるだけに、東国忍者への不信や反発心、憎悪は、決して表に出さないようにした。
エウロペで仲間として顔を合わせてからずっと、あの男は、上役の立場にある。東国の忍の里一の忍者といわれていただけあって、忍者としての技量は桁外れで、知識も豊富で指揮官・指導者としても優れていた。
頭領をたて、頭領の命令に服してはいた。が、あの男の実力は頭領をも軽く凌駕している。
その教えを乞い忍としての技量を高め、任務を完璧にこなしてゆくことが、主人への忠義に繋がるのだ……
そう思おうとはしていたが……
あの男の指導にはついてゆけなかった……

宿屋の部屋から出ると、廊下でばったりとヤルーと会った。
「おはようさん、ムジャ」
背が高く体格のよいヤルーは、ナーダ様の召使役だ。赤毛の戦士の召使役の俺とは部屋が異なる。ヤルーは俺の顔をジロジロと見てから、にやりと笑いかけてきた。

「まだ胃痛が治らねえの？　ナーダ様に治してもらった方がいいんじゃね？」

ムッとしてヤルーを見上げた。

主人（あるじ）にそんなことを頼めるはずがない、そう承知した上で言っているのだ、この大男は。

ヤルーは俺達の中では少数派の、まともな忍者組織で正規の修行をつんだ忍者だ。この大男は十年前、ウッダルプル寺院支部のジャガナート僧正の紹介で、組織に加わった。背格好がナーダ様に似ている為……ナーダ様の影武者用忍者として。それまでは仲間うちでも大柄なクルグがナーダ様の影武者だったのだが、成長期となってからの主人の著しい成長に俺達は誰も追いつけず、外部から影武者用忍者を探さねばならなくなっていたのだ。

寺院付き忍者であったヤルーは、事あるごとに、頭領は甘いと笑い、仲間達の実力不足を嘲る。俺を副頭領と認めて命令に従っていたが、それは一対一の忍術勝負でヤルーに勝ってからの事だった。それまでは俺を『坊ちゃん』と呼び、あからさまにバカにしていたのだ。浮浪児盗賊団の元ボスだった俺を掴まえて『坊ちゃん』とはふざけてる……

「俺、九時半からだって。次がローラで、あんた、その後」

「……今日もか」

胃を抑えた。

今日も外は猛吹雪。勇者一行はこの宿屋に居続けだ。吹雪の中の移動は忍とて危険だ。急務でない限り外に出る事はないし、外で諜報活動中の仲間が合流して来る事もない。

『雪で動けぬのなら、その間、その場できる、最も有益な事をするのが一流の忍』

と、東国忍者は主張し、俺達の再訓練を望んだ。

頭領は東国の忍を快く思ってはいなかったが、ホルムの王宮で指導を受けてから俺達の働きが目に見えて良くなった事実を認めてはいた。情報収集のスピードがあがっただけではない。東国忍者の助

言通りに俺達は仕事を手早くすませた上で仕事に付随して必要になるであろう情報を自分で予想し事前に調べておくようになっていた。
宿屋で居続けの間、交替で警護の任から離れ、ジライの部屋へ行くようにと頭領は指示を出した。
だが、しかし……
頭領は間違いなく……今、東国忍者が何の指導をしているか知るまい。
知っていれば、許すはずがない。あの頭領の性格からいって……
「深刻になるだけ損、損。訓練なんだし、気にする方がバカだっての」
ゲラゲラ笑いながら、ヤルーが廊下を歩いてく。
あの男の話し方にはいつも苛々する。が、『ナーダ様の影武者』であるヤルーは、普段、主人からかけ離れたしゃべり方をわざとしているのだ。あの下品な軽薄さも演技なのだ。わかってはいたが、気にくわなかった。

部屋の中には、甘い喘ぎ声があふれていた。
白子が金色の髪の少女を寝台に押し倒していた。
俺が入室して来た事に気づいてるであろうに、白子は愛撫の手を止めようとしない。
全裸の少女の息づかいは荒く、胸を、秘部を、まさぐられる度に声を漏らしている。
ほんのりと染まった頬、うるんだ瞳。普段の澄ました顔とは結びもつかない、扇情的な顔だった。
白子の忍者は少女の右の耳を舐めながら、そっと囁いていた。
「そのまま、二呼吸、締めよ。息をついだら、尻穴をすぼめるつもりで更に強く。後ろが締まれば前も締まる。そこで媚態じゃ。媚びるように、甘えるように、じれったそうに腰を使え。円を描くようにぐいぐいと……」

ローラは、はぁ、はぁと熱く息を漏らしながら、腰を使い始める。
「うまいぞ。そこで、流し目じゃ。うるんだ瞳で男の情欲を煽れを」

最初は、まともな訓練だったのだ。
洞察術、情報分析、心理学。潜入先で正体を気づかれぬよう、情報を引き出す手管。相手の心を先読みし、都合のよいように会話を誘導する話術。
忍者ジライの洗練された諜報技に感心できているうちは良かったのだが……

ここ数日……
房中術授業となってしまったのだ。

しかも、個人指導（レッスン）つきの……

つまり……

この宿に居るナーダ様の部下は……
頭領を除いて……
この東国忍者と……
致してしまったわけで……

主人（ナーダ）が愛の告白をしまくっているこの忍者と……

「くぅぅ」
胃を抑えると、東国忍者がジロリと睨みつけてきた。
「まだ胃がすぐれぬのか？　忍のくせに健康管理もできぬのか、情けない奴め」
あんのたせいだろ！　と、思った。が、言わなかった。
言っても無駄なのだ。もう数えきれぬほど、この男にはいろいろ言っているのだ。頼み、情に訴え、忍としてあるべき道を説いたのだが、全く通じないのだ。
『主人の思い人に手を出すなど言語道断！　死して詫びても許されるものではありませぬ！』
と、正道を説いても、東国忍者は、
『阿呆』
と、あっさりと切り捨て、
『どちらかが孕むわけでもあるまいし、なんでナーダを気にする？　第一、好いた惚れたではない。房中術じゃと言っておるだろう？　房中術は諜報術の一環。寝れば男も女も口が軽くなる。獲物を骨抜きにする技術を身につけよ』
と、実に……手馴れた……素晴らしい技術をもって愛撫してくれて……その気なんかなかったのに……いつのまにやら……そうなってしまったわけで……。
おかげで主人の顔も、頭領の顔も、まともに見られなくなってしまっていた。
「はようせい。我はこの後、セレス様の昼食の毒見をせねばならぬ。昨日までのさらいじゃ、とっとと我をイかせてみろ」
前髪をかきあげて不満そうに睨みつけてくる白子。女々しいところはないが、たいそう綺麗な男だ。男が男に惑っても不思議はないほどに。
頭領が子飼いの部下達に房中術をほとんど教えていないと知った時、東国忍者はひどく驚いていた。頭領は非常に潔癖な性格で、房

中術など無くても情報収集は可能だと考えている。だが、それを東国忍者は効率が悪いと決めつけ、彼としては『非常に不本意』ではあったが、『指導する以上、きさまらをとことん育てて一人前の忍にせねばならぬ』から『いた仕方なく』、素顔を晒しての房中術授業に踏み切ったのだ。

以前、東国忍者は『素顔を見た者は殺す』と言っていたそうだが、そんな脅しは一度も聞いていない。人間が丸くなったのか、同じ忍だから気兼ねしてないのか、主人（ナーダ）と縁を切る時に部下全員を始末すればよいと思っているのかは定かではないが……

東国忍者から教わった房中術の手管で、白子を腕に抱き、人体の敏感な箇所を責め立てる。

二人とも全裸で、ベッドにいる。

嫌な事はさっさと終わらせよう。

でなければ、胃がもたない。そう思ってヤケになって習った事をなぞっていると……

ノックが響いた。

外への注意が散漫となっていて、気の接近に気づかなかったようだ。

慌てて、気配を探り……

サーッと血の気が引いた。

扉の向こうにいるのは……

主人（ナーダ）だ。

「何用じゃ、あのクソ坊主」

組み敷かれている東国忍者が見上げてくる。

「我は素顔では廊下に出られぬ。おまえ、行って来い」

首がちぎれんばかりに、かぶりを振った。

冗談ではない！

東国忍者の部屋から、全裸もしくはガウンを羽織っただけの姿で廊下に出ようものなら……

間違いなく……

命がない……
慌てて服を拾い、袖を通す。
服を着ている間に主人の気配は遠のいていった。
だが、もう一分たりとも東国忍者と二人っきりでいたくない。『きさま、サボる気か！　このたわけ！』と、怒鳴りつけてくる白子を残し、東国忍者の部屋を後にした。

自分用の部屋に戻って布団を被っていたのだが、じきにノックが響いた。扉の前にヤルーが居た。
「ナーダ様がお部屋でお呼び」
ヤルーの声が、死刑宣告に聞こえた。
主人のものに手を出したのだ、ただの死刑で許されるはずもないが。

「待っていましたよ、ムジャ」
主人は穏やかに微笑んでいた。
勘づかれたわけではないのか……？
それとも、最初は笑顔で油断させそれから責め立てる気なのか……？
主人に対し片膝をついて跪いたが……本来胸にあてるべき右手は少し下がって胸の下を押さえていた。胃が痛い。いっそのこと血を吐いて倒れてしまいたかった……
「訓練の邪魔をしてしまって、すみませんでしたね」
ドキン！と心臓が鳴った。
知ってる……？
やはり、知っているのか、何をやっていたのか……？
「お許しを！」
深く、深く、頭を垂れた。謝って許されるものではなかったが、

謝らずにはいられない。
「東国忍者に求められたからとはいえ、部下としてあるまじき行為をいたしました！　死して詫びても許されるものではありません！」
「許す……？」
主人が不思議そうな声で尋ねる。
「何をです？」
「え？」
恐る恐る顔をあげると、主人は微かに眉をしかめ、テーブルの前に座ったままだった。
バレてなかった……のか？
て、ことは……
墓穴掘ったのか、俺は！
「遅参した事を詫びてるんですよ」
と、横からヤルーが言う。
「副頭領、真面目だから」
「ああ……気にしなくていいですよ、急ぐ用事ではありませんし」
ヤルーが助け船を出してくれるとは……
目で感謝を伝えた。
少し気持ちが落ち着いて……それで、ようやく気づいた。
部屋に香の香りが満ちている。
主人はテーブルの上に仮の祭壇を作り、インディラ式の香を焚いていた。
思い出した。
今日は……
頭領の息子アシダの命日だった。

頭領の息子アシダは、俺達が拾われるよりも前に亡くなっている。
主人（ナーダ）やその母君の護衛の任に加わり、暗殺者に討たれたのだ。享年十四才。

最愛の息子の死すら頭領は主人に隠し続け、護衛を続けたとも聞いている。

主人（ナーダ）は、毎年、命日にアシダの魂を弔っていたそうだ。昨年、たまたまその場にいあわせる事となった俺は、頭領の息子の為に手を合わせた。

自分達を頭領が拾ってくれたのは、アシダの死への悼みからだったのだろうか？　漠然とそう思いながら。

「ガルバに内緒で、今年も一緒に祈ってくれませんか？」

頭領は、主人の為に部下が死ぬのは正しき忍道だと祭祀を断り、インディラ教徒ではないとの理由で一度も手を合わせようともしないのだそうだ。

護衛役だったアシダと主人（ナーダ）は親しかったらしい。十四才であり、他の忍に比べ年が近かった為だろう。

主人の目の前で主人を庇い、アシダは亡くなったそうだ。頭領は幼かった主人に、重傷だが生きてはいるとアシダの死を隠していたらしい。主人が出家を決め、アシダの元へ帰るよう頭領に勧めるまで……ずっと。

命の恩人であり、頭領の息子……主人がその魂を弔いたいという気持ちもわかった。

「は。喜んで」

「ありがとう、ムジャ。それで、ですね、略式で申し訳ないのですが」

主人は香と香炉を渡してくれた。

「ケルティの魔族の宴から、ちょうと今日で一ヶ月です。今日はバイトゥーキとダンル、カヤンにコタンの月命日でもあるのです。あなたが共に祈ってくれれば、彼等も喜ぶと思うのですよ」

「……ナーダ様」

「この異国の地まで共に来てくれ、私の為に働き、命まで捧げてくれた彼等……すばらしい忍でした。あなた方の働き無くして、今の私はありません。感謝しています」

「……」

油断した。

思いもかけぬ言葉を耳にしたせいだ。

主人が気にかけているのは、勇者仲間のことであり、インディラ寺院のことであり……

部下など頭領（ガルバ）のことぐらいしか関心ないのだと思い込んでいた。

主人の口から……

バイトゥーキの死を悼む言葉が出るなど……

想像した事もなかったのだ……

まさか、この年にもなって……

主人よりも年上で……

忍である自分が……

人前で泣き出すとは……

「たまんねえよな」

涙が止まらない。『私めにお任せを、少し向こうで話して参ります』とヤルーが、彼用の部屋に連れ出してくれねばどうなっていた事か。

泣きながら、心の内をあらいざらい話してしまったかもしれない。

罪の意識に耐え切れず……

「召使役やって初めて知ったんだけど、ナーダ様、今日は誰それの

命日だ月命日だって、やたら祈るんよ。俺の知らない名前も多かったけど、ルドラカやパーンダにカイサ、アッチャやガナルの名前が出た時は……俺もジワーときたわけ」

「そうか……ルドラカ達のことも覚えていてくださったのか……アッチャやガナルのことも……そうか……」

「頭領も頭領なら、その主人も主人。下賤な忍をここまで気にかけてくれてる主人……どこを探したって他にゃあいないっしょ？」

「……うん」

「忍なんて、『死して屍拾う者なし』じゃん？　けどさ、俺、死んでも、ナーダ様さえご無事ならずっと祈ってもらえるわけよ。俺が生きていたことをナーダ様はずっと覚えてくれている……お守りしなきゃって気持ち、新たに持つのも、当然しょ？」

「ヤルー……」

そんなこと考えてたのか、こいつ。

「まあ、この十年で俺、すっかりフヌケちまってるから、もう古巣に帰ってもやってけねえとは思うけど」

ヤルーはにやっと笑った。

「帰りたくねえからいいけど」

「……そうか」

「そうだよ。ここ、待遇いいし。同僚が『坊ちゃん』育ちの甘ちゃんばっかなのさえ目ぇつぶりゃ、最高の職場じゃね？」

「……『坊ちゃん』で、甘ちゃんかよ」

「ンだから言ってるっしょ、気にするなって。房中術なんて、どこでも、普通に、忍は仕込まれてんの。恋愛の性交と房中術は別物だっての」

「……それは頭ではわかってるんだが」

溜息がもれた。

「ナーダ様のお気持ちを思うと……申し訳なくて」

「バぁカ。それが混同してるっての。ったく、クソ真面目の坊ちゃんめ。なんでも肥やしにすりゃいいのよ。今回習った事をとりいれ

て迅速な情報収集をすりゃいいわけ。これから主人の為に働けりゃいいのよ。忍は主人の為に働いてこそじゃね？」

「肥やしにして……か」

そう考えればいいのかもしれないが、気持ちの切り替えは難しい。

「まあ、とりあえず」

ヤルーは肩をすくめた。

「白子には言っとくわ、ムジャは神経細すぎっから実地訓練の相手は仲間にさせろ、って」

「ヤルー」

「胃に穴でもあけられたら困るわけよ。今、宿にいない奴らも仕込みたいってあいつが思ったら、俺らが代わりにやるってのもいいんじゃね？　俺らの実地訓練になるからとか言や、あいつも満足するっしょ？」

「ヤルー！」

思わずヤルーの手を取っていた。

「白子との房中術授業は俺等だけの秘密で、一生、胸に秘めとけばいいんじゃね？」

戻って来た俺達を主人は笑みと共に迎え、俺にいたわりの言葉をかけてくれた。

先ほどの涙を、竹馬の友バイトゥーキの死を悼んでのものと思ってくれたらしい。

その死を悼む気持ちもあった。

二度と会えぬことも悲しかった。

しかし……

羨ましくもあった。

『死すとも悔いのない人生』を送れた友が……

主人に対し口が裂けても言えない秘密ができてしまった事が、何とも苦しかった。

「ナーダ様……」

ずっと心にひっかかっていた疑問を口にした。

「頭領の息子のアシダ殿は、我らの誰かと似てましたでしょうか？」

主人（ナーダ）は首をかしげた。主人はたいへん記憶力に優れている。アシダの顔も鮮明に覚えていることだろう。

「似てる者はいませんね。母親似だそうで、ガルバともあまり似ていませんでした」

「さようですか……」

亡き息子の面影を浮浪児グループの誰かに見いだして引き取った……と、いうわけではないらしい。

手を合わせ目をつぶっていると、横のヤルーが小声で話しかけてきた。

「おまえ先に逝ったら、俺、ナーダ様と、祈ってやるわ。俺が先だったら、よろしく」と。

「おまえは死んだって死ぬもんか」

笑みが漏れた。二人とも、いつ主人の為に命を投げ出す事になるかわからない忍ではあったが、そう思った。

＊　おまけ　＊

そのまんまの流れで、俺用の部屋でムジャと酒盛りとなった。床の上にマットを敷いて座り込んで、さしむかいで飲む。

胃が痛いんならやめときゃいいのに、ムジャは頭領に似て酒にはだらしないところがある。

ムジャと二人っきりの酒は初めてだった。仲が悪かったわけじゃないが、俺はムジャ達頭領子飼いの部下達とはいつも一歩離れた所にいた。ムジャ達がまともすぎるんで、馴染めなかったんだ。忍のくせに常識的で善良で、いかにもあの頭領の部下らしい。

前の前の職場はひどかった。天下のインディラ寺院ベナレンス支部の忍者組織だってぇのに、非人道的だった。ぐんぐん背が伸びるガキの頃の俺に『これ以上大きくなられては、諜報活動に向かない』と教育担当官は食事量を減らし、サイズの合わない小さな服やら靴を使わせた。それで、迅速に動けるわきゃないってのに、手をぬいてるって懲罰しやがった。

腹を減らしていた俺は教育担当官の更に上役の坊さんに、泣きついたんだが……坊主ってのは必ずしも立派な人間ってわけでもなくて、『泣き言を言うな』と『不心得者の根性を入れ替える』と杖でさんざん殴ってくれた。

視察にいらしたジャガナート様がやたらとデカい子供だった俺に目をとめてウッダルブル支部に引き取ってくださらなければ……成人になる前に死んでいた。飢え死にか、任務中に腹減らしてふらついて事故って死亡か……

時々、その言動に苛つくこともあったが、ナーダ様の影武者忍者として頭領の配下でムジャ達と共に居るのは、居心地がいい。ここでは俺は人間扱いをしてもらえる。

「俺達は普通の房中術、習わされたけど、おまえ、特別授業だろ？ナーダ様の影武者だから」

酒がすすんできてムジャの口に遠慮がなくなる。

「ナーダ様と東国忍者の閨の再現してるって聞いたぜ。やっぱ、鞭でビシバシとかやられてるわけ？」

酔ったな、こいつ。主人のものに手を出した罪を死んで詫びるだのなんだのの思いつめた顔を、何処へやりやがった。

興味津々って顔で、尋ねてくる。

「ナーダ様のM趣味ってどの程度なの？　鞭とか蝋燭とか逆さづりとか、やっぱハード？」

「違う」

「じゃ、ソフト？」

「てか、SMじゃないし……まともじゃないけど」

「まともじゃない？」

キラッとムジャの目が輝く。こいつぅ……

「高貴な御方の閨房ってやっぱ特殊なんだ？　どんなプレイ？」

「どんなって……」

「きさまには関わりないわ」

ムジャの頭上にドカッと足がふりおろされる。

東国忍者だ。

いつもの、覆面に黒装束姿だ。

すばやい体術で何の気配もなく現われ、ムジャの背後をとり、ムジャの後頭部をぐりぐりと右の足裏で踏みつけている。

「きさま、我が指導から逃げて酒か？　いい度胸じゃな。さすがご老体の一の部下。副頭領なだけはある」

「いてぇ、て、て、て、て、て」

東国忍者はキッ！　と、俺を睨む。

「ヤルー、おまえ、ナーダの影武者のくせに酒を口にするほどの阿呆であったとは！　飲食は体臭にも影響する。おまえがバケる男は大僧正候補であろう？　あれは酒は一滴も口にせん。水を大量に飲み、運動をし、まず酒をぬけ、このたわけ！」

確かに、その通り……代役の予定はないが、いつでも入れ替われるように常に体調も万全にしておくべきだ。

「は。もうしわけありません」

「ま、おまえへの説教は後じゃ。さて……ムジャ。きさまが逃げた

ことを話したら、マリーに説教されての、我も指導を改めるべきかと考えておる」

マリー？　今はマリーと名乗っているデヴィは、俺と同じく外部からこの忍者軍団に加わった中年くノ一だ。頭領の昔の仲間の娘だそうで、よその忍者組織のくノ一だったのだ。

未熟者である俺達の意見には聞く耳を持たない東国忍者も、人生経験豊富なあのくノ一の言葉なら耳を傾けるのか。

「ご老体の育てたきさま達は、一般人に近い価値基準で動いておるゆえ、ひどく道徳的なのだそうだな？　ナーダと寝室を共にしたことのある我を、抱くのも、抱かれるのも、恐れ多いと思うのだとか」

尚もぐりぐりとムジャの頭を踏みながら、東国忍者は言葉を続ける。

「無理に我を相手に房中術授業をさせれば、きさまだけでなく、他の部下達も、良心の呵責とやらで体を壊し寝込むであろうとも言われた。きさま、我と寝るのが嫌なのだな？」

「そうだと申し上げてきたではありませぬか！　ナーダ様のものに手を出すなど、反逆も同然だと」

「わかった」

頭を踏みつけるのを止め、東国忍者は素早くまわりこみ、倒れかけたムジャの胸倉をつかみ立ち上がらせた。

「喜べ、ムジャ、きさまの希望を聞いてやる」

「え？　ま、まことに？」

「うむ」

東国忍者の覆面から覗く眼が、たいそうにこやかな笑みをつくる。

「これから、きさまに色責めをしてやるわ」

「へ？」

「きさまを縛って転がし、我が房中術をもってさまざまな手管できさまを責める。きさまの希望通り、挿入は一切無し。じゃから、決して達するな。道徳心をもって主人に対し忠義をつくしたいのなら、我慢できるであろう？」

「そんな！」
「我が手管を体で覚えよ。本来八時間はかかるフルコースを凝縮して四時間でやってやる。我慢できたら免許皆伝と認め、房中術指導をやめてやるわ」
悲鳴をあげるムジャをひきずるように、東国忍者は部屋を出て行った。
俺は……
手を合わせ、ムジャの健闘を祈るしかなかった。まあ、たぶん、無理だろうと思いつつ……
しかし……
「アレのどこがかわいいのよ……」
ナーダ様はあの東国忍者との閨房で、『愛しています』と『好きです』をやたら連呼し、あの東国忍者を『かわいい』と言うのだそうだ……
「高貴な御方のお心はわかんね」
俺は部屋の片付けをし、食堂に向った。水を大量に飲む為に。

たとえ死すとも（後書き）

『たとえ死すとも』　完。

次回は『英雄の墓――バンキグ編』。舞台はケルティからバンキグへ。

いよいよ夢にまで見た国、バンキグに向う事となったシャオロン。英雄ゲラスゴーラグンの墓所を訪れる為、ナーダはセレスの名を使ってバンキグ国王に手紙を送ります。

英雄の墓――バンキグ編　1話

女魔法使いユーリア。
二代目勇者ホーランの従者。後にバンキグ国王に即位するゲラスゴーラグンに求愛されていた彼女は……
大魔王ケルベゾールドとの戦いの最中に魔に堕落し、勇者一行を裏切った。
彼女を救おうと必死に戦ったゲラスゴーラグンの思いむなしく、ユーリアはホーランの命を狙い続け、従者仲間のシャダムによって討たれ今世より消えた。
ゲラスゴーラグンはユーリアが消えた後に残った一握の塩を握り締めて、天を仰ぎ、血の涙を流して号泣したと伝えられている。

女魔法使いユーリアは稀代の悪女とされている。
『勇者の剣は女を嫌う』という風評が広まったのも、セレスの代まで勇者一行に女性が加わらなかったのも、ユーリアの堕落に負うところが大きかった。

けれども……
シャオロンは真実を知っていた。ペリシャで英雄シャダムの霊が教えてくれたのだ。女魔法使いユーリアは仲間の為に自らを犠牲にした正義の士であったのだと。

大魔王ケルベゾールドは勇者ホーランに憑代である肉体を討たれた時、その周囲に居た者の中からユーリアを選び、憑依してその体を奪おうとした。

ユーリアは魔力をもってケルベゾールドに抗い、従者仲間のシャダムに『大魔王と共に殺して欲しい』と願ったのだ。周囲の時を止め、彼と二人っきりとなった空間で。

だが、シャダムが己の信仰を捨てる覚悟で愛を告白し、彼女の死を拒んだ為……ユーリアは己の内にケルベゾールドを封印する道を選んだ。

魔界の王であるケルベゾールドは憑代に宿らねば今世に存在できない。憑代を失えば、次の肉体へと移ろうとするだろう。

ユーリアは自分が命を絶ってもシャダムや仲間達が次の宿主に選ばれる恐れがあると気づき……魔法でケルベゾールドと自分を完全に融合させた。その結果、大魔王は彼女の肉体を媒介に多大な力を今世にもたらせるようになったのだが、次の宿主に移れなくなった。彼女の死と共に地上との縁を失う運命となったのだ。

ユーリアはシャダムの記憶を消して、心を操り、自分を憎ませた。自分の分身に勇者の命を狙わせシャダムにその分身を討たせたのも、全て仲間の為だった。

心やさしき勇者ホーランが、仲間であった人間を斬れるはずがない。ユーリアは自分の死を装った後、その美しい容姿を捨て、おぞましい魔王の姿をとり続けた。

大魔王として勇者一行を迎え、ホーランの手にかかって地上より消滅したのだ……

魔族を憎み地上の和を求め集った二代目勇者とその従者は、己の武器と名とそれぞれの神にかけて仲間を信じ助け合う事を誓っていた。

ゲラスゴーラグンはその神聖な誓いを守り、ユーリアの無実を訴えた。魔に堕ちる形となったのには何らかの理由がある、彼女が誓いを破って仲間を裏切るはずがない、と。

しかし、ユーリアの魔法で洗脳されていたシャダムは、ゲラスゴ

ーラグンの言葉を恋に惑った愚か者のたわごとと切り捨て、女魔法使いの悪名を世に広め、『勇者の剣は女を嫌う』という噂を流し続けた。

ケルティとペリシャ。大魔王を退治し、故国に戻った後も、二人は書簡にて激しく口論を続けた。シャダムはユーリアと共にゲラスゴーラグンをも侮辱し、生涯、ゲラスゴーラグンの誇りを傷つけ続けたのだった。

セレスがケルベゾールド退治に旅立った事で、シャダムにかけられていたユーリアの術は解けた。死の眠りより目覚めた英雄は、過去の己を悔い、シャオロンを墓所に招いて頼んだのだ。ゲラスゴーラグンに真実を伝え、謝罪の気持ちを伝えて欲しい、と。

友を信じなかった愚か者が詫びていたと伝えて欲しいと……

女勇者一行は、間もなくバンキグに入国する。

しかし、ホーランの時代より既に六百年以上の時が流れているのだ。バンキグ国王に即位したゲラスゴーラグンも、当然の事ながら、遥か昔に亡くなっている。

けれども、ゲラスゴーラグンの魂は天に召されていないと、シャダムの霊はシャオロンに教えてくれた。

《あれは得心がゆくまで、一歩たりとも前に進まぬ頑固な男。ユーリアの無実を主張し続けていたあの男が、彼女の汚名がすすがれぬまま、今世を去るはずがない》

以前、バンキグの旧都の北東部の山中にゲラスゴーラグンの慰霊塚があると、武闘僧ナーダが教えてくれた。

幽霊は必ずしも墓所にいるわけではない。生前の思い出深い場所に留まっているかもしれないし、子孫を守護する為に人に憑いているかもしれない。

シャオロンは、バンキグを訪れたら可能な限りゲラスゴーラグン所縁（ゆかり）の地を訪れ、ゲラスゴーラグン所縁の人間を探したく思ってい

た。

けれども、勇者一行は魔族退治の為にバンキグを訪れるのだ。従者である自分が勝手な行動をとるわけにはいかないと、シャオロンは自覚していた。

それに、北方諸国は南――ケルティ・バンキグ・シベルア以外の国を、敵視している。百年もの間、国境を閉ざし、国レベルでも民間レベルでも交流を拒否しているのだ。

ケルティでは、ケルティ新王朝が事実上崩壊するまで、女勇者一行は常に監視下に置かれ、行動を制限されてしまった。バンキグでも、同じ扱いをされるだろう。

ゲラスゴーラグンの墓所を訪れる事は可能なのだろうか？　シャオロンは不安だった。

「ゼグノスの血の宴の時に運良くと言いましょうか、悪運強くと言うべきなのでしょうか、バンキグでお仕事をしていた為に死なずにすんだ、アジャンＬＯＶＥの情報屋の元締めアジソールズから情報を買ったのですが……」

「気色悪い表現を使うな、クソ坊主！」

ケルティとバンキグの国境近くの村の宿屋で、ターバンに王族の衣装という格好の武闘僧ナーダは、勇者一行をセレスの部屋に集めて、バンキグの現状を説明し、今後についてある事を提案した。

「バンキグには、やはり、勇者一行を歓迎する意思はありません。ケルティ新王朝を通じて来訪の意志を伝え、セレスにもシベルア語でルゴラゾグス国王宛にお手紙を書いてもらいましたが、それに対するバンキグ国のお返事は国境を軍隊の精鋭で固める事でした。その数は五百だそうです。つまり、バンキグは数で我々をねじ伏せ、行動を制限しようって腹なわけです」

セレスはがっくりと肩を落とした。魔族退治の旅をしているのに、何故、今、人間から敵意を向けられねばならないのだろう？

「まあ、私達、ケルティじゃ上皇制度復活の後押しをしたりと、派手にやっちゃいましたからねえ。南からの介入を嫌っている北方人が警戒するのもわからなくはないのですが……はっきり言って、私、ケルティの二の舞は御免です。軍隊の監視下に置かれ、国のほぼ九割を立ち入り禁止区域とされては、大魔王討伐も魔族退治もできるはずがありません」

「その通りよ！」と、セレス。

「何か策があるのか？」と、アジャン。

「あります」

ナーダはにっこりと笑みを浮かべた。

「私達にとって、ものすごぉ～～～く幸運なことに、バンキグはケルティとは異なり、バンキグ人が王位に就いています。バンキグ人はケルティ人と気質が似ており、戦士を最も貴い職業と考えています」

「確かに」と、アジャン。

「そんな国の王は、当然、戦士の中の戦士です。現国王のルゴラゾグス王は怪力無双の豪傑で、その強さでカリスマ的人気を誇っています。暗愚ではないってぐらいのまあまあの政治手腕しか無いみたいですが、人を見る目が確かなのと、臣下の進言をきちんと容れる度量はあるので、大国シベルアの属国となりながらも国の対面は保てているのです」

「ふぅん」と、セレス。

「そんなルゴラゾグス王が三度の飯よりも、酒よりも女遊びよりも好きなのは……」

ナーダは一同を見渡した。

「軍事教練の名を借りた武術大会です。雪に閉ざされる冬には娯楽が少ない事も手伝って、毎月のように武術大会が開かれるそうですよ。参加者は主に王のお気に入りの戦士と、ルゴラゾグス王本人です。ルゴラゾグス王は武術は何でもこなすそうですが、戦斧が一番得意なようです」

「戦斧……」
　東国の少年シャオロンが、ハッと目を見開く。ゲラスゴーラグンは戦斧の名手だったのだ。
「シャオロン……前にも教えましたが、ゲラスゴーラグン様の家系は三代で絶えました。今の王家はゲラスゴーラグン様とはまったく関係ありません」
「はい、ナーダ様、わかっています」
「ですがね……アジソールズからの情報によると、ルゴラゾグス王はゲラスゴーラグン様をものすごぉ～く尊敬してるらしいんですよ」
「え？」
「王宮に銅像を作らせ、朝な夕な拝んでいるとか。ゲラスゴーラグン様を戦斧の神様と思っているみたいです」
「じゃあ……」
　笑みを浮かべた少年に、ナーダも笑みで応じた。
「私達ルゴラゾグス王に気に入られれば、道は開けるんです。超一流の戦士に対してならば、あの国の人間は礼節を尽くしてくれますしね。行動の自由を認めてくださるでしょうし、ゲラスゴーラグン様のお墓参りの許可もいただけるでしょう。なので……武術大会に出場し、バンキグの戦士達をあっと言わせてやりませんか？」
　ナーダの提案に対し、腕に自信のあるアジャンは嬉しそうに不敵な笑みを浮かべ、シャオロンは決意をこめて拳を握り締め、忍者ジライは軽く頷き、セレスは、
「やりましょう」と、二つ返事で答えた。
「だけど、ナーダ、武術大会ってどういう形で行われるの？　勝ち抜き戦？」
「大会ごとにルールを決めているみたいで、一定の形はありません。精鋭だけで行う事もあれば、一般から出場者を募る事もあり、刃物を禁じる事もあれば真剣勝負しか認めない事もあるといった感じで、まちまちです。とはいえ、名目は軍事教練ですから、生死をかけた戦いはそうそうないそうです」

「そうそうないって事は、たまにはあるわけね」
「おや、セレス、珍しく鋭いではありませんか」
珍しくは余計よと、ぷぅと頬を膨らませてから、女勇者は尋ねた。
「その大会、今度はいつ開催されるの？」
「予定は半月後ですが、いい加減な大会だから、開催日時などは王の裁量でどうとでもなるんです。ですから、私、セレスの名前で挑戦状を送っちゃいました」
「え？」
「王宮来訪時に、武勇の誉れの高いバンキグ王及びその家臣と武術で親交を深めたい、戦斧・大剣・格闘・弓・自由武器の五部門で勝負したいと、まあ、そういう内容の手紙を」
「んもう！　勝手に人の名前、使わないでよね！」
「まあ、それはどうでもいいが」
赤毛の傭兵はボリボリと頭を掻いた。
「誰が何に出るんだ？　俺は大剣担当か？」
「いいえ、大剣はセレスの担当です」
「私？」と、セレスが目をしばたたく。
「あなた、『勇者の剣』の持ち手なんですよ、他の武器で参加したらみっともないじゃないですか」
「でも、『勇者の剣』を使ったら、剣を交わしただけで相手の剣を折っちゃうわ。『勇者の剣』の破壊力は凄まじいのよ、岩だってサクッと斬っちゃうんだから」
「ですから、まずデモストレーションとして相手の剣を折ってやるんですよ。あなたが『勇者の剣』の真の力を引き出していると知ったら、バンキグの人達、あなたを女と侮らず、敬意を払ってくれますよ」
「……そういうものかしら？」
「そういうものです。デモストレーションの後、普通の大剣を借りて普通に勝負してください。相手の命を奪わないで勝敗を決するルールにしてもらいますから。言っておきますが、セレス、絶対、負

けないでくださいよ。勇者は地上最強の戦士なんです。負けたら恥ですよ」

「わかったわ」

「クソ坊主、セレスが大剣なら、弓は誰がやるんだ？　前にも言ったが俺は弓は不得手だぞ」と、アジャン。

「オレも……弓は使った事ありません」と、シャオロン。

「ジライにお願いします」

指名された忍者は無言のまま、武闘僧を見つめる。

「バンキグの祖先は狩猟民族でした。弓は剣や斧と並ぶ歴史ある武器なのです。これを五本勝負から外すわけにはいかないので、あなたにお願いしたいのですが……」

「よかろう」と、忍者は言葉少なく答えた。

「的に的中させる回数を競う勝負となるはずです。ライバルは一人になるのか複数になるのかは今後の話し合い次第ですが、最後まで的に的中し続けた者が勝者となるでしょう」

「それでは弓の名手とあたったら、決着がつかぬぞ」

不満そうに忍者が言う。

セレスは首を傾げた。ジライが弓を使っているところなど見た事はなかったが、東国忍者は矢を全て的中させる自信があるようだ。

「良いんですよ、勝負は引き分けでも。多少は相手に花を持たせてあげなきゃ、怨まれかねません」

「むぅぅ」

「おい、戦斧は誰がやる？　俺にやらせる気か？」

俺は勝てない勝負はしないぞという顔の赤毛の戦士に、ナーダは肩をすくめてみせた。

「私がやりますよ」

「おまえが？」

「戦斧部門の対戦相手は十中八九（じゅっちゅうはっく）、ルゴラゾグス王ですからね、無様な戦いはできません。あなたが大剣なみに斧を使えるんなら、代わってあげてもいいんですけど」

「ケッ！　斧なんざ使ったことねえよ」
「じゃあ、やはり、私がやるしかありませんね。斧は幼少の頃、学んだくらいなんですがねえ……槍と似たり寄ったりです」
「充分すぎるじゃねえか、クソ坊主！」
アジャンはナーダを睨んだ。ナーダは僧侶のくせに、あらゆる武器が扱える。以前は槍の名手しか持つ事が許されない武器『雷神の槍』を使っていたのだ。
「バンキグに着くまで毎日鍛錬すればそれなりにはなると思うのですが……どんなに頑張ってもルゴラゾグス王には勝てないと思います。国王の戦斧の腕前は神の領域まで達しているそうですから」
「良いじゃねえか、王様に花を持たせてやりゃあ！　その分、俺が勝ってやる！　俺は自由武器担当だな？」
「いいえ。あなたは格闘担当です」
「へ？」
「え？」
アジャンとシャオロンが顔を合わせる。
「俺が格闘だと？」
「そうです。アジャン、あなた、北方出身のくせに忘れちゃったのですか？北方における格闘は、組み合うのが基本のレスリングです、立ち技だけのね。非力なシャオロンじゃ、力負けしてしまいます。あなたか私でなきゃ勝負になりませんよ」
「あ」
そうだったと、赤毛の戦士が顔を歪める。
「北方では屋内の遊び（スポーツ）として、レスリングが、昔から行われてきました。戦士の鍛錬としてね。歴史ある遊び（スポーツ）なんで、これも外せないんですよ」
「レスリングねえ……ガキの頃、遊びでやったぐらいだ」
「この部門、私が出場すれば確実に優勝できると思うんですけれどね」
ナーダは赤毛の戦士に対し、皮肉な笑みをみせた。

「大剣の無いあなたは二流の戦士になっちゃいますからねえ。一分ともたず、床に転がされちゃうかも……」
「ケッ！　俺ぁ、傭兵だ。武器を奪われても、敵を仕留めてきたんだぜ。たかが遊び（スポーツ）で負けるかよ！」
「うわ、そんな大言壮語しちゃって良いんですか？　負けたら恥ずかしいですよ」
「俺が負けるか！」
と、アジャンが吠える。
ナーダはにっこりと笑った。これで、赤毛の傭兵は格闘部門の出場を拒まないだろう。
後は……
「あの、自由武器部門って事は……『龍の爪』を装備して戦っても良いって事……ですよね？」
自信なさそうにシャオロンが尋ねてくる。シャオロンは格闘以外の武術とは無縁に過ごしてきたのだ。他のものをやれといわれても、できるはずがない。
北方における武術の中には、少年でもできそうな『小剣』があった。動体視力がよく素早く動ける者ほど有利な部門なのだが、それは直径三メートル程度の狭い決闘場での小剣による斬り合いなのだ。出場者は避ける場所もない狭い空間で血だらけとなって戦う。どちらかが降参を宣言するか、足が外に出てしまうまで。そんな部門にシャオロンを出場させようものなら、無謀なところのある少年は出血多量で意識が無くなるまで闘い続けかねない。
少年が実力を発揮するには広い場所が必要だ。
自由武器部門などというわけのわからない部門をもうけたのは、シャオロンに爪を装備させて広い場所で戦わせる名目が他に思いつかなかったからだ。自由武器はシャオロンの為にもうけた部門だが、そう正直に言っては少年が『ご迷惑をおかけして、すみません』と気をつかいかねないので、ナーダはそんなことはおくびにも出さず、
「むろん、爪を装備してください。自由武器は格闘大会でいうとこ

ろの無差別級です。あなたの対戦相手は、剣の名手になるか槍の名手になるかわかりませんが、相当、腕に覚えのある一流の戦士が出場してくるはずです。なにしろ、『無差別級』ですからね。厳しい闘いとなると思いますが、『龍の爪』の所持を真龍と古の神主（かんぬし）から許されたあなたなら、相手が誰であれ良い闘いができると私は信じていますよ」

と、少年を励まし、奮い立たせるのだった。

英雄の墓――バンキグ編　2話

国境で女勇者を待ち構えていた五百の兵。その大半は国境付近に留まり、百近い戦士が女勇者を首都サヴォンオラヴィまで護送した。国境付近に軍を配備している理由は、南の影響を強く受けたケルティの上皇への警戒と思われた。

護衛の軍人達は屈強そうな戦士達ばかりだったが、装備も装束もてんでばらばらで寄せ集めの軍隊のようだった。それについてナーダは、兵士の装備を統一化しようという考え自体がバンキグの国風にないのだと説明した。剣や斧、槍など各々得意武器は違う。画一化された装備ではなく、『戦士』としてふさわしい装備を自分で選ぶ事をバンキグ人は信条とするのだそうだ。

彼らはがやがやと無駄話に興じながら、トナカイ橇で進む女勇者一行を、やはり橇で囲んでいる。監視者である事には違いなかったが、戦士達は南から来た珍奇な一行を面白がって眺めているようでもあり、街道でも宿でもあからさまな敵意を向けられる事は一度も無かった。

三日で、雪曇の空の下、女勇者一行はバンキグ首都サヴォンオラヴィに着いた。森と湖に囲まれた首都は石造りの大型の建物で埋め尽くされていた。木造建築を尊ぶケルティとは明らかに異文化だが、シベルア建築とも異なっている。華美な装飾の無い質実剛健な造りで、民家ですら厚い岩壁でできていた。

街の南西の河口を守る王宮も石造りの堅固な造りで、要塞のようだ。三本の塔を持つ巨大な王宮だ。護衛の兵達は王宮の庭に残り、国王の親衛隊の案内でセレス達は王宮へと足を踏み入れた。

勇者一行が通る通路の左右には、屈強そうな戦士達が整列していた。が、ここでも、やはり装備も装束もばらばらだった。得意武器を装備した腕自慢達が、威圧半分、興味半分でじろじろと不躾な視線を送ってくる。

殊に、白銀の鎧をまとい『勇者の剣』を背負った美貌の女勇者は、常に注目の的となっていた。

彼等に監視されながら勇者一行は王宮の奥へと向かい、召使役のナーダの部下達とも離され、五人のみで国王と対面した。戦士達が壁際に居並ぶ広間で。

バンキグ国王ルゴラゾグスは『豪傑』という呼び名がふさわしい壮年の王で、背はニメートルを越え、横幅も広く、誰より体格が良かった。毛皮と鎧、兜姿の王は赤銅色の髪と髭で、類人猿を思わせる愛嬌のある顔をしていた。

「我が王宮へようこそ、女勇者とその従者よ！　あなた方の到着を、今か今かと待っておったぞ！　今すぐこれからでもあなた方と闘いたいところだ。しかし、まあ、長旅でお疲れだろう。まずはゆるりと休まれるがいい」

大地を揺らしかねない迫力の声に、セレスは度肝を抜かれた。ルゴラゾグスの言葉はバンキグ語だったが、間を置かずジライがこっそり共通語に直して通訳してくれたので、相手の歓待の意思はわかった。

セレスは王に対し膝を折り、歓迎への謝辞をバンキグ語で述べた。この台詞だけは鬼教師ナーダの三日にわたる特訓のおかげで暗記している。言語音痴の彼女の挨拶だ、下手くそで聞き取りづらいものではあった。

けれども、その国の言葉で挨拶をしようとする姿勢自体には、国王は好感を抱いてくれたようだ。ニコニコと笑っている。特訓に耐えて良かったと、セレスは思った。

「武術大会の準備は整っておる。そちらさえよければ三日後に大会を開きたいのだが、どうか？」

先ほどの挨拶で、セレスは既にバンキグ語に不慣れな事は断ってある。シベルア語に切り替えて尋ねてきた国王に対し、セレスは大輪の薔薇のような艶やかな笑みを浮かべて答えたのだった。

「私達も、国王陛下と勇敢なバンキグの戦士達と今すぐにも闘いた

く思っております。三日も待たずとも疲れはとれます。そちらさえよければ、明日にでもいかがでしょう？」

国王と広間に集まっていた戦士達が、どっと沸く。美しく勇ましい男装の麗人に、皆、好感を抱いたのだろう。

「良かろう！　では、明日、王宮の武術会場で勝負を行う！　戦斧・大剣・格闘・弓・自由武器の五部門の勝負でよろしいのであったな？」

「はい」

「ならば、ルールなどの細かい決め事は今日中に決めよう！　こちらの代表はノリエハラス、おまえじゃ！」

「は」

王に指名されたのは、白髪のかくしゃくたる老人だった。この国の宰相と、事前情報で聞いている。それほど高位の者が大会の準備をするなど意外だったが、それがバンキグの国風であり、勇者一行への歓待を表しているのだろうとセレスは納得した。

「勇者一行の代表は、インディラ国王の長子ナーダです」

インディラの王族の衣装をまとったナーダが、王に対し深々と頭を下げた。

「よし！　めんどうごとはこやつらに任せた！　女勇者よ、我らは酒宴じゃ！　明日の戦いに備え、これから飲み、歌い、愉しもうではないか！」

王宮中が王に倣い、勇者一行を歓迎した。広間には牛の丸焼きが運ばれ、酒が樽ごと何樽も運び込まれた。

真昼間から浴びるように酒を飲み、陽気に笑う国王と家臣達。ケルティ生まれのアジャンは彼等にすぐに馴染み、酒の飲み比べなどを始めていた。

周囲はすぐに酔っ払いだらけとなった。彼等は陽気にセレス達に声をかけてきたが、残念なことにそのほとんどバンキグ語なのでセ

レスには理解できなかった。酔っ払い達は声をはりあげて歌い、浴びるように酒を飲み、肉にかぶりつく。女性のセレスや子供のシャオロンに強引に酒を勧めるような、不届き者は一人もいなかった。

酒宴の最中にセレスはルゴラゾグス国王から、従者が一人足りないようだが？　と、尋ねられた。人前では覆面を外さない主義の東国忍者は、早々に酒宴の場から逃げたに違いない。酔い冷ましに外に出たのかもしれませんね、と、セレスは適当な事を言って誤魔化しておいた。

王宮中が自分達を歓迎してくれている事を、セレスは嬉しく思った。しかし、この歓迎ムードは明日の武術大会の結果次第では消えてなくなるかもしれないのだ。バンキグ人が敬意を払うのは、自分と対等か、それ以上の力を有する戦士だけだ。

明日は、何としても『勇者』にふさわしい戦いぶりをしなくてはいけない。バンキグで魔族退治をする為にも……『勇者の剣』の為にも。

実は、ケルティの魔の宴の後、『勇者の剣』が重いのだ。心をこめて手入れをしても心の中で話しかけても、何の反応もなく、重量も変わらない。ホルムの王宮で気力を失いふぬけていた自分を怒っているのだろう。剣のご機嫌が直らず、明日、試合場で重たいままだったとしても、剣を使いこなし、持ち手にふさわしい技量を示そう……セレスは決意を新たにした。

『勇者の剣』を抱えるように椅子に座るセレスの為に食事や飲み物を運んだり、忙しく立ち働く城の女性達の手伝いをしたりして、シャオロンは酒宴を過ごしていた。

北の戦士達は豪快で底抜けに明るく、親切だった。明日の武術大会にシャオロンも出場するのだと知ると、彼等はひどく驚き、同情してくれた。子供のシャオロンは人数合わせの為に出場させられるのだと思ったようだ。彼等は出場予定者の名前をあげ、彼らの得意

技や癖を教え、危なくなったら降参するのだぞと、本気でシャオロンを心配してくれた。ケルティ新王朝の王宮とは比べようも無いほど、バンキグの王宮人は素朴で優しかった。

バンキグの戦士達は、皆、ゲラスゴーラグンに似ているように思えた。シャダムが見せてくれた過去の映像の中で、ゲラスゴーラグンは冗談を言い、豪快に笑っていた。赤毛赤髭の小柄ながら逞しい体つきをしていたゲラスゴーラグン。紅一点のユーリアを気遣う優しさもあった。

ゲラスゴーラグンの国の王宮にいるのだと思うと、感激はひとしおだった。一刻も早くシャダムの思いを伝えたかった。ゲラスゴーラグンの墓参りを許してもらう為にも、明日は頑張ろうと、シャオロンも、又、セレスの横で決意を新たにするのだった。

だが、その夜遅く……

セレスの為に用意された部屋に集まった勇者一行は、ナーダから意外な話を告げられるのだった。

「どーすんだよ、クソ坊主！」と、アジャン。

「もうどうにもなりません、こちらも出場者リストを出してしまいましたので」と、ナーダ。

「ナーダ、あなた、言ったわよね、戦斧部門の出場者は十中八九、ルゴラゾグス国王だって」と、セレス。

「……はい。本気でそう思っていたんです」

「読み違いか」と、ジライ。

「……まったくもってその通りです」

ナーダは東国の少年シャオロンに対し、頭を下げた。

「すみません、シャオロン。ノリエハラス大臣からいただいた出場者リストによりますと、自由武器部門の出場者三名の中に……ルゴ

ラゾグス国王のお名前があるのです。バンキグの国王陛下は自由武器部門にご出場するご意志のようです」

「……」

シャオロンはごくっと唾を飲み込んだ。バンキグ一の戦士と闘えると知ったせいか、体が勝手に震え始めた。

「……総当たり戦ですか？」

「いえ、勝ち抜き戦です。弓を除く四部門はまず二組に分かれて予選を行い、各勝者が決勝に進む形で行われます」

「オレ、予選で王様に当たっちゃうんでしょうか？」

「いいえ。予選では我々が本命と当たらないように配慮してくれるそうです」

「……じゃ、闘うのなら決勝戦なんですね」

少年の顔が明るく破顔する。

「よかったぁ」

ホッと胸を撫で下ろし、少年はにっこりと微笑んだ。

「神技クラスの戦斧の名手と闘うんじゃ、オレじゃ、絶対、勝てないと思いますが……闘う以上は持てる力の限りを尽くして全力で闘いたいから……王様との試合が最後で良かったです。後先考えずにぶつかってゆけますものね」

「シャオロン……」

晴れ晴れとした少年の顔を見つめるうちに、四人の仲間はそれぞれ少年の為に何かしてやりたい気分となった。

「身軽さを生かせば、道はひらけるはずよ、シャオロン！」

「いいか、シャオロン、斧と闘うときはだな、相手が大振りした時に素早く間合いを」

「斧の名手と闘う機会なんて滅多にないんですから、楽しんでいらっしゃい。怪我をしたら私が癒してあげますから、迷わずにいきなさい」

「……しびれ薬、必要ならばわけてやるぞ」

助言を与えてくれる（約一名、不正を唆す発言ではあったが）仲

間に対し、少年は極上の笑みを見せ、
「ありがとうございます！　セレス様、アジャンさん、ナーダ様、ジライさん！　オレ、正々堂々とがんばります！」
と、元気に答えるのだった。

三勝二敗が理想。二勝二敗一分けでも可。全勝や全敗は避けましょうと、ナーダは小声で仲間にもちかけた。勝ちすぎればバンキグの戦士の矜持を傷つけてしまう。かといって負けすぎればバンキグ国中からナメられてしまう。ほどよい勝利がよいのだ。
「女勇者のセレスが優勝するのは義務として……」
ナーダは、アジャン、シャオロン、ジライの顔を見渡した。
「我々のうち、二人は負けた方がいいと思います。それも、あっさりと負けちゃいけません。好勝負の末、後もうちょっとで勝てそうな時にポロっと負けるのが良いでしょう」
ノリエハラス大臣との話し合いの結果、倉庫並に広い武術会場を二面に分け、そのうちの一面で大剣・格闘・戦斧・自由武器の順に勝負を行い、もう一面でジライと三人のバンキグ戦士による弓の耐久勝負を行う事に決まった。
勝ち抜き戦の他勝負とは異なり弓勝負は、武術大会の開始から終了まで延々と続けられる。自分の前方にある的を射続けて、最も多く的中（的の中心に矢を当てる）した者が優勝するシステムだ。成績下位二名は半ばで脱落し、最後には成績上位者同士の勝負となる予定だ。しかし、全員が的中を続ければ最後まで脱落者無しに、四人で勝負が続ける事になるだろう。
老宰相ノリエハラスは、胸をそらせ、弓部門に自身が出場する事をナーダに教えた。老大臣はバンキグ一（いち）の弓の名手で、ルゴラゾグス王の弓の師なのだとか。
「勝敗の調整をしやすいのは、弓のジライと、出場順番が遅い私です。私はアジャンが勝ったら負け、負けたら勝つようにします」

「俺が負けるかよ」
と、言う赤毛の戦士は無視して、ナーダはシャオロンを見つめた。
「あなたは性格的にこの手の細工には不向きですから、手加減は無用です。全力でルゴラゾグス国王と闘って、格闘家の意地をバンキグ人に教えてあげてください」
「……わかりました」
「で、ジライ、あなたは的中の数を調節して、一矢外せば優勝を逃す状態を保ってください。最終戦でシャオロンがルゴラゾグス国王に大金星をあげた時には、悪いですけど、最後の一矢外してくださいな」
忍者は小さく舌打ちを漏らした。が、
「承知した」と、言葉少なく承諾の意思を伝えた。
「もう一回言っておきます。明日の武術大会、第一種目は『大剣』で出場者はセレス、第二種目は『格闘』で出場者はアジャン、第三種目は『戦斧』で出場者は私、第四種目は『自由武器』で出場者はシャオロンです。『弓』の出場者ジライは大会開始から終了まで弓を射続ける耐久勝負をします。『弓』以外は三人のバンキグ人との勝ち抜き戦です。『大剣』・『戦斧』・『自由武器』は、相手の武器を奪うか、かすり傷でもいいから怪我を負わせるか、『参った』を言わせれば勝ちです。『格闘』は一対戦ごとに五本勝負で、相手の上半身を床につけた数を競います。みなさん、くれぐれも予選落ちしないでくださいよ。頼みましたからね」

武術会場は天井が高く、中で軍隊の閲兵式ができそうなほど広い、石造りの建物だった。
会場に足を踏み入れた勇者一行を、割れんばかりの歓声と拍手が迎える。扉から見て正面と左右の壁の前に階段式の観客席があり、逞しい戦士達によって埋め尽くされていた。セレスは扉のちょうど正面にあたる位置の、建物最奥部の玉座の国王に対し恭しく頭を下

げた。
　中は二面に分けられており、扉から見て手前が弓競技場、奥の玉座に近い方が大剣・格闘・戦斧・自由武器の競技場だ。奥の競技場には、床の上に盛り土がされ、十五メートル四方の正方形の試合場が造られている。
　競技場や観客席の上空には、幾つかの光の玉が浮かんでいた。魔力のこめられた照明兼暖房だ。会場の最前列をローブをまとった魔法使いが占めており、交替で魔力玉を維持しているようだ。
　戦士見習いの少年の案内で、ジライだけが弓競技場に向かい、他の者は玉座の下の出場者の控え席に向かった。
「がんばってね、ジライ」
　と、去り際にセレスが手を振ると、
「はい、セレス様ぁ」
　と、忍者が幸せそうに手を振り返した。
「頑張りすぎないでくださいよ、ジライ」
　と、釘を刺してきた武闘僧に対しては、
「わかっておるわ。とっとと失せよ、目障りじゃ」
　と、忍者は毒づいて応じていた。
　弓勝負は長丁場だ。まず出場者は弓と矢を確認し、弦が切れた時用の代替弓や張り替え用の弦まで調べておくのだ。
　ジライは弓の弦の強さを慎重に確かめた。バンキグの弓は一本の棒から作られた単弓で、使い慣れたジャポネの白木弓に比べると威力・飛距離・命中が劣る。しかし、簡易さと即射性においては東国の弓より秀でており野戦向きと言えた。
　弓競技場に現われた覆面に黒装束の珍奇な服装の男に対し、観客席から野次が飛んだ。しかし、ジライはそんなものは気にもせず、自分が使用する武器を控えのものまで調べ終えた後、立ち位置から的までの距離を測った。
（二十メートル……単弓といえども、中心を射抜くぐらい楽勝じゃ。目をつぶってでも当てられる）

弓勝負は四人が一列に並んで、一斉に、それぞれの前方にある標的の板に張られた紙を射る。紙には三重円が描かれており、外側から等間隔円心状に白、赤、緑に塗られている。外側の一番大きな円の直径が約三十センチ、その内側の円が二十センチ、最内の円の直径は十センチ。最内の緑の円を射れば的中となるのだ。

ジライは玉座から見て、二人目の位置に立つ。玉座に最も近い位置には、ノリエハラス宰相が立つ。バンキグ一（いち）の弓の名手に対し、ジライの右に立つ二人の若者が最善の礼をつくしていた。二人とも老大臣の弟子か何かなのだろう。

東国忍者は目の端で、老大臣や若者の動きを追って確信した。ほぼ間違いない、敵はノリエハラス一人だ。若者達は気の充実具合から言っても、その実力はたかが知れていた。早々に脱落するだろう。

ジライは覆面の下に微笑を浮かべ、試合開始まで再び弓のためし引きを始めた。

一方、出場者席に着いた四人には、これから対戦するバンキグ戦士から陽気な歓迎を受けた。

女勇者セレスに対しては、品性下劣な冗談が飛ばされた。言葉の意味がわかれば潔癖な女勇者は間違いなく怒り狂うのだが、『ごめんなさい、バンキグ語はわかりません』と、たどたどしいバンキグ語を口にして、セレスはただにっこりと微笑むばかりだった。

周囲の下品な冗談はエスカレートしていった。が、彼等は明るく楽しそうに冗談を言う。そこには性の生々しさは無い。性的侮辱も彼等にとっては、美女への挨拶のようなものなのだろう。

セレスは背にのしかかっている『勇者の剣』のバンドを外し、席にたてかける形で置いた。武術大会出場が決まってから前にも増して心をこめて謝り続けてみたのだが……やはり、重量に変化は無かった。体格の良い成人男性並の重量なのだ。背に背負ったままでは、鞘から抜くことすらかなわいないだろう。

重すぎて思うとおりに扱えない状態である事を、絶対、周囲に気取られてはいけない。『勇者』として堂々と振舞い、バンキグ人に『勇者の剣』の偉大さを知らしめる……それ以外の道は彼女には許されないのだ。

赤毛の戦士アジャンに対しては、戦士達は非常に気安い態度をとった。昨日、共に酒を飲んだ男は、アジャンの背を叩きながら、昨日の飲み比べでは負けたが今日は勝たせてもらうぜと笑った。返り討ちにしてやると応じたアジャンは、出場者控え席に、みすぼらしい身なりのデブの大男が座っているのに気づいた。座高からして、背はアジャンどころかナーダよりも高そうだし、横幅は最初から勝負にならないほどアジャンが負けている。

「あいつは？」

と、アジャンが尋ねると、バンキグの戦士はにやりと笑い、

「アガナホーゲルだ」と、得意そうに答えた。

「昨日の酒宴には居なかったよな？　居りゃあ、あんな大男、隅っこに居たって目立つはずだ」

「ああ、あいつ、今朝、王宮に着いたんだ」

「今朝、着いた？」

「あいつは戦士じゃない。ルゴラゾグス陛下お気に入りの、農夫だ。陛下に呼び出されて、この大会の『格闘』に出場しに来たのさ」

「農夫だって？　おいおい、俺達は国王陛下とその戦士と闘う為に来たんだぜ、それなのに戦士ですらない者と対戦させようなんて」

「違う、違う。侮辱する意思はない。その反対だ。アガナホーゲルとの対戦は、最大級の歓待なのさ。なにせ、あいつは」

男は肩をすくめた。

「この国の格闘王だ。ルゴラゾグス陛下ですら、格闘では、あいつにかなわない。それほどの実力者なのだ」

アジャンはデブの大男をジッと見つめた。戦士達に囲まれ、農夫

は居心地が悪そうにデカい体を縮めている。顔も朴訥だ。多分、ひねりのない力押しの技を使うのだろう。本来なら御しやすい対戦相手なのだが……

（あの巨体を転がして、上半身を床につける……？）

体重差がありすぎる……

投げるのは不可能だ。

しかも、北方の『格闘』では、拳や蹴りは禁じ手。組み合うしかないのだが、あの巨体にふさわしい怪力の持ち主なのだとしたら、まともに組み合っては勝ち目がない。

（……どうすりゃ、勝てる？）

アジャンは低くうめいた。

『敗北』など耐えられない。相手が常識はずれなバケモノだとしても、だ。

勝つ為の策を求め、赤毛の戦士は頭を働かせた。

「陛下が『戦斧』部門に出場なさらないからって、楽勝と思ってるんなら大間違いだぜ」

と、ナーダに話しかけてきたのは、予選の対戦相手カラドミラヌだった。

陛下が出場なさらない『戦斧』部門ならば、俺の勝利は確実。今日こそは俺が頂点に立つ！　と、息巻く若者。

ナーダは微笑ましく思い、笑みで応じた。腕に覚えのある若者ほど増長しやすいもの。その高い鼻っ柱（ぱしら）は、いずれ彼の技量を上回る達人にポッキリと折られる運命にある。そう考えれば、挑発的な態度もかわいいものだ。

ニコニコと笑みを絶やさぬナーダに、若者は次第に苛立ちを覚えていった。ナーダの僧衣に両腕両脚だけの装甲も、若者の目には戦士にふさわしくないみすぼらしいものと映っていた。この男は本当に『南』の戦斧の達人なのだろうか？　疑問が頭をよぎった。

「あんたがインディラ一の戦斧の名手だとしても、南の田舎斧がバンキグで通用するものか！」

挑発する若者に、ナーダは笑みで答えた。

「私は戦斧の名手ではありません。インディラには、私よりも戦斧の技量に恵まれた者は数多くいます」

「ハン！　負けた時の用心に、言い訳を用意してあるのか！」

「言い訳ではありません。この度は『戦斧』部門に出場させていただく栄誉を頂戴いたしましたが、本来の私は素手で戦う武闘家です。神への信仰心と鍛え上げた己の肉体をもって魔族を倒してきました」

「素手で戦ってきたぁ？　あんた、武器も満足に扱えないへっぽこ戦士だったのか！」

「……」

ナーダの眉間にぴくっと青筋が立つ。しかし、ここで怒っては、あまりにも大人気ない。今日は、動きやすさを考え、久しぶりに僧衣に戻ったのだ。ターバンも取った。今は有髪がぶざまではあるが、自分は僧侶。徳を示さねば……

「インディラでは格闘を中心とする武闘も盛んなのです。インディラの武闘は組み合うのが基本の北方の『格闘』とは異なり、打撃、投げ、蹴り、関節技を用い、時には気を、ああ、つまり精神力を攻撃に込めます。聖なる魔法を拳に宿らせる事もあります。舞に通じる攻撃の型は非常に多様で洗練されており、無駄のない美しい動きを……」

ナーダの言葉を遮るように、若者は声をあげて笑った。

「楽勝じゃん。あんたが予選の相手で良かったぜ」

「……は？」

「格闘しかできないへっぽこなら、十秒で倒せるぜ」

むかぁぁぁぁ～と、ナーダは怒りの炎を燃え上がらせた。が、顔は、何とか笑みを保った。

「私も……あなたが予選の対戦相手でよかったです、確実にあなたと対戦できますものね」

場合によっては決勝戦でわざと負けようと思っていたナーダの心の内を知らないカラドミラヌは、とどめに、又、余計な事を言った。

「へっぽこのあんたは予選で消える運命だもんな。優勝候補の俺とやるには一回戦で当たるしかないよな」

カカカと笑う若者を、ナーダは糸目で睨みつけた。

（何が優勝候補ですか！　予選で私と当たるって事は、あなた、この王宮で三番目か四番目の戦斧の使い手でしょうが！　ルゴラゾグス王に次ぐ使い手は予選じゃ私と当たらないんだから！　その鼻っ柱、私が叩き折ってあげましょう！）

『自由武器』部門に出場する二人の戦士は、戸惑っていた。勇者側の出場者が子供だったからだ。しかも、十歳ぐらいにしか見えない痩せたひよわそうな子供（シャオロンは東国人なので年よりも幼く見られる）。

彼らはシャオロンにではなく、ナーダやアジャンに尋ねた。『自由武器』部門の出場者は本当にその子供なのか？　本気で闘わせる気なのか？と。

間違いないと、彼等は答えた。勇者側の出場者は、数多くの魔族を葬ってきた、十四歳となったその格闘家の少年に間違いないと言うのだ。

二人のバンキグ戦士は思った。ルゴラゾグス王が『自由武器』部門に出場なさると知って、勇者側は『自由武器』を捨てたに違いないと。勇者側のどの戦士も王にかなうわけがない。誰があたっても負けるとわかっているので、最も弱い駒を最強の王にあて、他の部門で勝ちを拾ってゆく腹積もりに違いない。

姑息な！　と、二人の戦士は怒っていた。が、捨て駒とされた少年には怒りよりも同情を感じていた。長い間、未熟な腕前を人目にさらさせるのも気の毒なので、予選でシャオロンとあたる槍使いの戦士は、すぐに少年の武器を落としてやろうと心を決めた。

そんな同情の眼差しを向けられている事など、シャオロンは気づいていなかった。会場内の雰囲気に、すっかり心を奪われていたのだ。

戦士達の高揚が、熱いほどに伝わってきた。

これから始まる戦いを、会場中が期待しているのだ。

武術を何より愛する国……

バンキグ……

ゲラスゴーラグンの国……

シャオロンは、いつになく興奮していた。

ルゴラゾグス王が大会開始を告げると、観客席の戦士達の鬨（とき）の声で会場は揺れた。

その喧騒の中、号令係が旗をあげる。

合図に合わせ、弓部門の四人の戦士が一斉に矢を放った。

四本の矢が、見事、標的面の的に的中した。

英雄の墓――バンキグ編　3話

第一部門『大剣』の目玉は、何と言っても女勇者だった。

腰までの金の髪をうなじで一つに束ね、女勇者は白銀の鎧をまとい、彼女の身長ほどもある巨大な大剣『勇者の剣』を鞘から抜いて下段に構えたまま、試合場に現われた。だが、その勇ましい男装が痛々しく見えてしまうほど、小柄で細い美女なのだ。サファイアの瞳、白い肌、赤い唇……にっこりと微笑むその顔はとても艶やかなのだが、全身からたよりなさそうな可憐な美しさを漂わせている。

会場からは、聞くに耐えない野次が飛んだ。『お嬢ちゃん、脱いでぇ』、『犯らせてぇ』、『一晩いくら?』などなど。

しかし、女勇者は魅力的な笑みを絶やす事なく、その野次を聞き流していた。単にバンキグ語がわからないだけなのだが……

これから、この美女が男勝りに闘うというのだ。セレスの対戦相手に対しては、『お綺麗な顔を傷つけたら承知しねえぞ』、『勝ったら、犯らせてもらえよ』、『色男』と羨望に似た声がかけられていた。

審判の前までセレスは進み出て、何事かを囁く。審判は頷きを返し、両腕を天に向かって高々と突き上げた。

途端、野次がぴたりと止まった。審判が両手を挙げるのは、国王に対し何ごとかを告げたいという合図なのだ。周囲がざわついていては王にその声が届かないので、戦士達は口を閉ざしたのだ。遊び気分で試合を観戦していても、彼らは国王に対しては常に礼節を尽くしているのだ。

審判が会場中に響くほどの声を張り上げる。バンキグ語だ。

「女勇者セレス様よりのご希望にございます」

「聞こう」

ルゴラゾグス王の声は審判よりも大きかった。

「申せ！」

「は！　女勇者様は鉄剣の貸与を望まれております」
「鉄剣を借りたい？　何故だ？　女勇者殿は『勇者の剣』をお持ちではないか！」
セレスが、又、審判に対し口を開く。審判は言い返し、女勇者を睨んだ。が、セレスが重ねて同じことを口にしたので、仕方なく、不満そうな顔のままで、彼女の言葉を大声で会場中に伝えた。
「相手の剣がただの鉄剣なので『勇者の剣』を使ったら、一瞬で勝負が決まってしまう。必ず自分が勝つ勝負ではつまらないので、鉄剣を拝借したい……女勇者様はそうおっしゃっておられます」
どよどよと会場がどよめいた。この美女は、バンキグ戦士に勝つ気なのだ。白銀の鎧姿であっても逞しさは微塵もない、小柄なこの美女が！
セレスの対戦相手はカーッと顔を紅潮させた。こんな痩せた女に自分が負けるはずがない！　戦士としての自負が彼に口を開かせた。
「ご自分の愛剣を使われよ！　俺は負けん！」
審判は両手をあげて会場を静めると、国王に対し二人の言い分を伝えた。
バンキグ国王は、
「一瞬で決まる勝負とやらが見たい！　女勇者殿は『勇者の剣』を使われるがよい！」
と、裁定を下した。
女勇者とバンキグ戦士は向かい合い、互いの姿を目で捉えつつ、大剣を構えた。
怒りの形相のバンキグ戦士に対し、セレスは微笑を見せ下段に剣を構えていた。勝負への気負いは微塵も伺えない。
「始め！」
審判がそう声を張り上げた途端……
凄まじい金属音が響いた。
会場中の者が身を乗り出し、目を見張った。何が起きたのかわからなかった。いや、頭が理解する事を拒んでいるのだろう。

切りかかってきたバンキグ戦士の刃を、女勇者が下段から突き上げた『勇者の剣』で受け止めたと見えた瞬間……戦士の剣が砕け折れてしまったのだ。

呆然としている戦士と審判。二人に対しセレスが申し訳なさそうに頭を下げ、シベルア語で話しかける。

審判はハッとして己を取り戻し、両腕を高々とあげた。会場に沈黙を促す合図だったが、そんな合図などしなくても観客席は静まり返っていた。戦士達は、皆、あっけにとられて、口をぽかーんと開いているだけ。頭がまったく働いていないのだ。

「女勇者様は再試合を望まれております。今の勝利は己の技量ではなく、この地上に類を見ない名剣『勇者の剣』の力。対等な条件でもう一度対戦したいと、女勇者様はおっしゃっておられます」

「いや！　今のは俺の負けだ！」

セレスの対戦相手は声をはりあげた。セレスにも通じるように、シベルア語で。

「俺はあなたに『勇者の剣』の使用を許した。あなたをたかが女と侮り、真の力を測ろうとしなかった。負けたのは当然だ。女の身でありながら、あなたは間違いなく勇者だ。この地上最強の両手剣の使い手だ」

参った！と、声をあげ、男はセレスに対し頭を下げた。すがすがしいほど気持ちの良い敗北宣言だ。

セレスはシベルア語で相手を称えた。戦士にふさわしい高潔な魂の持ち主だ、と。

男は照れて頭を掻き、国王と女勇者に対し拝礼した。

「勝者、女勇者セレス様」

しばらくの沈黙の後、会場は歓声に沸いた。セレスに対し性的侮辱を口にする者は、もはや居なかった。

国王も巨体を満足そうに揺るがして女勇者を褒め称え、出場者控え席のシャオロンは『さすが、セレス様！』と両手を組んで熱い視線を女勇者に注いでいた。

会場の空気に染まっていないのは武闘僧と赤毛の戦士ぐらいで、武闘僧の方はセレスの『勇者』っぷりを合格と評価し、赤毛の戦士の方は『誰が、この地上最強の両手剣の使い手だってぇ？』と渋い顔だった。

予選二回戦は凡戦だった。出場者は二人ともすっかりセレスに呑まれ、気がそがれてしまったのだ。

決勝戦で、セレスは国王より拝借した鉄剣を用いた。すばやい動きと見事な剣さばきで相手を翻弄して自らの剣術の技量の高さをバンキグの戦士達に披露してから、セレスは相手の剣を楽々と弾き飛ばして勝者となった。

会場は割れんばかりの拍手を、女勇者に送った。

優美なしぐさで、国王に対し礼をとるセレス。

会場の男達の視線を独占するセレス。

女勇者は、バンキグの戦士達の心を掴んだのである。

盛り土された試合場から下り、たてかけておいた『勇者の剣』を手にした時、セレスの笑みは一層、輝いた。

まだまだ重いのだが……

『勇者の剣』が少し軽くなっていた。

この会場でのセレスの勇者としてのふるまいに『勇者の剣』は機嫌を直してくれたのだ、ほんの少しではあるけれども。

剣を重たそうに持っているようには見られないように、つとめて軽やかな足取りをこころがけ、セレスは出場者控え席へと向かった。

会場の喧騒とは弓競技場は無縁だった。

出場者も審判も拍手喝采を耳にしてはいたが、ちょうど勝負の最中だったので全員が的に集中していたからだ。

弓勝負は五本を射終えると小休止となる。戦士見習いの少年達に

的を交換させる為だ。その間に戦士達は弓を交換したり、汗を拭い体をほぐして休憩を取る。

バンキグ側の出場者達は、大剣部門の勝者が女勇者と知ってひどく驚いていた。『腐っても勇者は勇者か』とほざいた若造をじろりと横目で睨みつけてから、忍者は目をハートにして玉座へと挨拶をする女勇者を見つめた。

弓部門の四人は、今のところ全員、的中を続けていた。

「よぉ。まあまあのショーだったぜ。おまえさんにしちゃあ上出来だな」

競技場から控え席に向かうセレスと逆に競技場に向かう仲間との視線が合う。

セレスは……硬直した。

「なっ、何よ、アジャン！　その格好！」

ぶるぶると震えながら、セレスはアジャンを指差した。

赤毛の戦士はにやりと笑った。処女の女勇者が自分の格好に嫌悪感を抱くのをわかった上で、わざとその感情を煽るポーズをとる。

「俺に惚れちまうかい、お姫様？」

「いやん、もう！」

セレスは真っ赤になってうつむいた。

アジャンは……ズボンだけを着ていた。足は素足で、上半身は剥き出し……力こぶをつくり、ぶ厚い男らしい筋肉をぴくぴくとこれみよがしに動かすアジャン。セレスは必死に目をそらした。

「H！　H！　H！　何で服を脱いじゃったのよ！」

「ばぁか！　これがこの国の格闘での戦士の格好さ！　いや、正式には素っ裸が正しいんだがな！　素っ裸になって互いに武器を隠し持ってない事を見せ合うんだよ！」

「いやん！　いやん！　いやん！」

「下も脱ぐか」

「いやぁぁぁぁ！　やめてぇぇ！」
出場者控え席に逃げ帰るセレス。その背をげらげら笑いながら見送った後、アジャンは表情をひきしめた。背後から来るアガナホーゲルを意識して。

出場者控え席に戻ったセレスに、バンキグの戦士達が話しかけてきた。言葉はわからなかったが、自分を称えてくれている事は雰囲気でわかった。セレスは微笑で応えたが、その笑みは少しひきつったものだった。
「うつむいては駄目ですよ」
エウロペ語で話しかけてきたのはナーダだった。競技場へと顔を向け、セレスの方を見もしないで、独り言を言っている態度を装っている。
「あなた、今、この会場の注目を集めてるんです。王の御前試合で余所見をしようものなら、せっかく手に入れた戦士達からの支持を自ら捨てる結果となります」
「……わかってるわよ」
「上半身裸の男と男がぶつかり合っては組み合い汗を飛び散らせる姿など処女のあなたには目の毒でしょうが、笑顔で観戦するように」
「うるさいわねえ！　わかってるわよ！」
「……アジャンを応援してあげてください。彼、負けるかもしれませんから」
「え？」
「決勝戦の相手が悪すぎます。体格差がありすぎるんです。たとえて言うのなら、私とシャオロンが力比べをするようなもの。アジャンには、ほぼ勝ち目がありません」
「……」
「脂肪の塊の太った方が相手でも私なら勝てるんですが、得意の大剣のないアジャンが何処までやれるのやら……」

決勝戦は、アジャンとアガナホーゲルの対戦となった。
アジャンとて五本勝ちの楽勝で予選を勝ち上がったのだが、アガナホーゲルの強さは別次元だった。
アガナホーゲルはその体格に見合う凄まじい怪力の持ち主だった。
立ち木のようにただ立っているだけの格闘王に対し、予選の対戦相手は果敢に攻めた。両腕と両肘を使って相手の腕をおさえて封じ、足技・タックルなど多彩な技をしかけたのだ。
けれども、巨体はびくともしなかった。
アガナホーゲルは楽々と腕封じを解き、ひょいと相手を持ち上げ軽く床に転ばせた。その後も、相手に攻めさせてから反撃して五本勝ちをした。農夫である彼は対戦相手の顔を立ててしばらくわざと攻撃をくらい、戦士の見せ場をつくってやっていたのだ。

「ねえ、ナーダ、格闘は相手を床に転がした方が勝ちなのよね？」
と、セレス。
「ええ。北方の格闘はエーゲラのレスリングとよく似ています。が、寝技がありません。相手の上体、つまり背中か腹を床につければ勝ちの、立ち技ばかりのレスリングです。殴る・蹴る・突く・喉を絞める・髪をひっぱる・睾丸を握る・手首や足先をひねる……ぐらいですかね、禁じ手は。ああ、後、私語も禁止です」
「拳も蹴りも駄目なの？　じゃあ、やっぱり、あの巨体を投げなきゃいけないのね」
アジャン、潰れちゃいそう……と、呟き、セレスは不安そうに試合場を見つめた。
「タイミング良く足払いをかけられれば勝てるでしょうけれど、あの巨体にのしかかられたら終わりでしょうねえ」

北方の格闘は、戦士が互いに向き合ったまま距離を開いて試合に入る。いつ組み合うか、どんな型で組むか、組み勝てる（自分の意志どおりに組む。有利になれるよう組む）かによって勝敗は左右する。

審判の合図と同時に、アジャンは奇襲に出た。

体を低くして勢いよく正面から相手にぶつかる！　と、見せかけて激突する瞬間に右へと体をずらしたのだ

アガナホーゲルは己の左側面に回った相手に警戒し、体の向きを変えようとした。

すかさずアジャンは全体重をかけて格闘王にぶつかってゆき、倒れしなに両腕で格闘王の右太腿を持ち上げ、左足で相手の左足首を払ったのだった。

ずしぃぃぃん！　と、鈍い音が試合場に響き渡った。

両者共にダウン。しかし、アジャンの上体はアガナホーゲルの腹の上に載っていたが、対する格闘王は背中が床についてる。赤毛の戦士が一本を先取したのだ。

信じられないものを見た！　観客席からアジャンの健闘に対し歓声が送られる。

だが、アジャンの表情は硬かった。まずは一本を取ったものの、後二本を取らなければいけない。しかも、地面に転がっている格闘王は、腹の上のアジャンにニカッと笑いかけてきている。『おまえの実力を認める。次は本気で行く』と、その表情は語っていた。もはや相手の虚をつく奇襲攻撃は通じないだろう。

となれば……

一か八(バチ)か、あの手でいくしかあるまい。

（ちくしょう。剣がありゃあなあ……）

立ち上がったアジャンが、アガナホーゲルから距離を開いて向き合った。が……

「はぁ？」

ナーダもルゴラゾグス王も、会場中の戦士達も首をひねる。普通、北方の格闘では、選手は体を前かがみにして両脇をしめ、両手を前方に開いて出し、両脚を肩幅よりやや広くとり、膝を前方に曲げて構える。攻撃をしかけやすい体勢だからだ。

しかし、アジャンは腰を落として両足を開いて立ち、両腕を前方に垂らしたのだ。右手がやや前、斜め上に左手。何かを握るように、掌で円をつくっている。

あれは……セレスは口元を覆った。間違いない、あの構えは……試合再開の合図と同時に、アジャンは床を蹴り、一直線に格闘王に向かう。赤毛の戦士の動きがいつ変化しても対応できるよう、格闘王は迎撃の体勢を整えている。

今度は、アジャンは正面からアガナホーゲルにぶつかり、組み合った。右の掌で相手の首筋をつかみ、肘でアガナホーゲルの胸を押した。相手の巨体はびくともしなかった。が、左腕で相手の右上腕も押さえたので、完全に組み勝つ形となった。

けれども、相手は脂肪の塊、巨漢のアガナホーゲルである。アジャンが幾ら力をこめようが、バンキグの格闘王は微動だにしない。逆にアガナホーゲルは簡単にアジャンの手をふりほどき、すばやく腰を低くし、両手でアジャンの両腿をつかみ……大柄なアジャンを楽々と肩へと持ち上げ、そのまま後方へと投げ飛ばしたのだった。

勢いよく背中から、アジャンが床に叩きつけられる。

喚声があがった。これで勝負は一対一。アガナホーゲルは首筋を左手で撫でながら、アジャンをちらりと見つめる。ぶざまに投げ飛ばされ勝負を落としたというのに、赤毛の戦士は不敵な笑みを口元に刻んでいた。

次の勝負も、赤毛の戦士は奇妙な構えをし、同じ組み方でアガナホーゲルに挑んだ。

組まれた瞬間、体勢をほんの少し崩したものの、格闘王はアジャンの腕と腰をとらえ、足をすくった。床に腰をついたアジャンは反撃の間もなく、格闘王にのしかかられ背中を床につけてしまう。

これで一対二。アジャンにはもう後がなかった。が、その表情には焦りは無かった。むしろ、落ち着き無く首を動かし、首筋を撫でる格闘王の方が余裕がなかった。恐れるように南から来た戦士を見つめている。

「アレって反則にとられないかしら？」

セレスの問いに、ナーダはかぶりを振った。

「ルールには違反していません。殴っているわけでも突いているわけでもありませんから。北方の格闘には気を利用して闘うという発想自体ありませんしね」

大剣を意のままに操る赤毛の戦士は、大剣に己の気をこめ、振るだけで刃にかけぬ敵までをも斬る事もできた。剣を振る事によって具現化する彼の気（剣圧）には、『龍の爪』が生み出す竜巻すらも斬り捨てる威力がある。

今まで大剣無しで気を攻撃に用いた経験がなかった為、先の二勝負をアジャンは練習とわりきって捨てたのだ。おかげで、剣の下段の構えから気を右手にこめるコツはだいぶ掴めたようだ。四本目の勝負から、赤毛の戦士は見事な活躍を見せるだろう。

「さすが、アジャンさん！」

シャオロンは拳を握り締めていた。

大剣の下段の構えから、三度、アジャンは同じ形でアガナホーゲルに組んでいった。工夫の無い攻めを続けるアジャンを、観客席の戦士達が罵倒する。だが、この勝負の結果をみれば、彼らの罵倒も賞賛の声に変わるだろう……アジャンはニヤリと笑った。

首を激しく振ってアガナホーゲルは首筋を掴まれまいと抵抗する。アジャンの右の掌が怖いのだ。掴まれると刃に貫かれたような衝撃が走るからだ。

だが、赤毛の戦士は格闘王を逃さず、気をこめた右の掌を相手の首筋へと押しつけたのだった。
押しつけたのだが……

「あ？」

会場は喚声に包まれた。両腕を振り回す者。拍手を送る者。勝者に惜しみない賞賛が送られた。
しかし……
やがて、会場は異常に気づいた。勝者が立ち上がろうとしないのだ。審判に幾ら声をかけられようと勝者となった男は無反応で、その体の下敷きとなっている男が悪態をつくばかりだった。
審判は試合続行不可能と判断し、他審判と四人がかかりで気絶している男をどけた。下敷きになっていた男は体を起こし、悔しそうに床を拳で叩いたのだった。

「アガナホーゲル急病により試合続行不可能。五本目の勝負は勇者の従者アジャン殿の不戦勝とする。三対二で、格闘の優勝者はアガナホーゲル！」

セレスもナーダもシャオロンも頭痛を堪えていた。
四本目の勝負でアジャンはやり過ぎたのだ。
相手の集中をそぐ程度の気を送ってよろめいたところを転ばせれば勝てたであろうに……気を送りすぎてアガナホーゲルを失神させてしまったのだ。意識を失った格闘王の巨体に押し潰され、アジャンは四本目の勝負も敗者となってしまったのだ。

「勝負に勝って、試合に負けたってところですねえ」
試合場から下がって来たアジャンに、王宮から借りた戦斧を右手に試合場へと向かうナーダが共通語で声をかけた。赤毛の戦士は不機嫌そうにジロリと仲間を睨んだ。
「アジャン、ありがとうございます」
「……なにが？」
「あなたの仇、私が取ってあげますね。あなたが負けてくれたおかげで、私、戦斧部門で優勝できますから♪」
鼻歌を歌いながらすれ違った仲間に、アジャンは『くたばれ、クソ坊主！』と、中指を立てたのだった。

弓部門では、ノリエハラスの弟子の一人が脱落した。
一射、わずかに的中を外し、赤的を射てしまったのだ。

英雄の墓――バンキグ編　4話

ナーダの初戦の相手はカラドミラヌ、血気盛んなあまりナーダに対し『素手で戦ってきたぁ？　あんた、武器も満足に扱えないへっぽこ戦士だったのか！　十秒で倒せるぜ』と、暴言を吐いた若造だ。

戦斧素人なんかさっさと倒して今大会では優勝するぞ！　と、はりきる若者に武闘僧はにっこりと微笑みかけてから、審判にバンキグ語で話しかけた。

審判が両手を高々と突き上げる。国王に何か伝えたい事があるという合図だ。戦斧部門開始を待ちわびざわめいていた観客席がぴたりと静まり返る。

「女勇者様の従者ナーダ殿よりのご希望にございます」

「聞こう！」

ルゴラゾグス国王は審判よりも大きな声を張り上げた。

「申せ」

「は。戦斧勝負前に、ナーダ殿は座興を披露したいとの事。ついては、その座興にカラドミラヌ殿にも協力いただきたいと望まれております」

「座興とな？」

玉座に対し恭しく頭を下げてから、ナーダが朗々たる声を張り上げた。バンキグ語だ。

「この度は戦斧部門に参加させていただく幸運に恵まれましたが、私はインディラでは格闘を中心とする武闘を嗜んでおりました。大会に出場した事はございませんので実績こそありませんが、私は国一番の武闘家でありました」

「ほう！」

国王が面白そうに身を乗り出す。

「武闘の才を披露してくれるのか？」

「はい。実は、先ほど、カラドミラヌ殿は私に対し武闘を軽んじる

発言をなさいました。お若いカラドミラヌ殿は、武器を扱う技術に欠けるへっぽこ戦士が武闘家になるのだと勘違いなさっておられるご様子。この場をもって、彼に武闘の奥深さをお教えしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「カラドミラヌ！　この者を侮辱したとは真実(まこと)か？」

「侮辱ではありません！」

若者も声を張り上げた。国王やナーダほどには声は通らないが。

「この者は戦斧の素人です！　だから言ってやったんです！　おまえは俺の敵じゃない！　十秒で倒してやるぜ！、と」

観客席からブーイングとカラドミラヌ支持の声があがった。武器を扱えない人間が大会に出場するなど、バンキグではありえない事だ。大会への侮辱、ひいてはバンキグ国への侮辱とも言えた。

罵声を浴びせられながら、ナーダは涼しげな顔で笑っていた。審判に両手を挙げてもらい会場に沈黙をもたらしてから、再び武闘僧は口を開いた。

「正式な戦斧勝負をする前に、座興としてカラドミラヌ殿の戦斧と武闘で闘いたいのです。私は丸腰で挑みますから、遠慮なく斬りかかっていただきたい。かすり傷でも私に傷を負わせたらカラドミラヌ殿の勝ち。勢い余って私を斬り殺したとしても女勇者様は気にもなさいませんので、本気でどうぞ。一分間、私は手を出しません。戦斧の名手ならば私を見事にしとめてください」

ナーダは若者に対し、挑発的な笑みを浮かべた。

「一分後に私が反撃を開始したら、あなたは十秒と戦斧を握っていられないでしょうから」

「アレ、何って言ってるの？」

セレスはアジャンに尋ねた。ナーダも対戦相手も国王もバンキグ語で叫んでいるので、何と言っているのかさっぱりわからないのだ。

上着を羽織っただけの赤毛の戦士は、このうえないほど不機嫌だ

ったので、女勇者の質問を無視してそっぽを向いた。

カラドミラヌがナーダの挑戦を受けたので、戦斧勝負前に座興が行われる事となった。

ナーダは戦斧を選手控え席から降りて来た少年に預け、丸腰となって試合場にあがり、カラドミラヌから距離をとって、拳を構え、腰を落とし、インディラ式武闘の迎撃の型を整えた。

審判の開始の合図と共に、カラドミラヌは勢い良く斬りかかって行った。戦斧の鉄製の斧頭は人間の頭より巨大で鋭い光沢を放っている。斬首斧のようだ。

南のへなちょこ戦士をこらしめてやる！　殺しても構うものか！

と、カラドミラヌは戦斧を振り回した。

だが、対戦相手は斬れそうなのに、斬れない。相手はたいして動いているようには見えないのに、刃をぎりぎりのところでかわしてしまうのだ。

カラドミラヌの振りは、次第に大振りとなっていた。

一撃でも当たれば勝てるのに、相手は戦斧を避けてしまう。余裕の笑みを消す事なく……。もともと冷静さに欠ける若者は、頭に完全に血をのぼらせてしまった。

「一分経過」

と、審判が叫んだ時、その声はカラドミラヌの耳に届いてはいなかった。ナーダへと斬りかかった若者は、相手が突然距離を詰めて来た事に驚き、反撃に驚き、相手の姿が視界から消えた事にただ、ただ驚くばかりだった。

ナーダは掌で戦斧の柄を突き上げるように弾き飛ばすと、すばやくカラドミラヌの背後に回り左腕で首を絞めるように拘束し相手の動きを奪ったのだ。そして宙を見上げ、右手を高々と差し上げる。

数秒後、その右手に、宙へと飛ばされ回転していたカラドミラヌの愛武器が落下してきてすっぽりと収まった。

しばらくの沈黙の後……会場は割れんばかりの拍手を戦斧を高々と掲げる南から来た戦士に送った。

「くそぅ、あのパフォーマンス好きめ……」

アジャンはぎりぎりと歯を噛みしめた。

しかし、武闘僧の活躍を間近で見ていた少年は、

「さすが、ナーダ様！」

と、素直に感動し、戦斧の柄を熱く握り締めたのだった。

「すみませんでした、シャオロン」

預けていた戦斧を試合場の下まで受け取りに来たナーダに、シャオロンは、

「オレ、ここでこのまま見学していてもいいでしょうか？　間近でナーダ様の闘いをもっと見学したいんです！」

と、尋ねた。これからは武闘じゃなく戦斧勝負になるんですがねえと苦笑しながらもナーダが審判と話をつけてくれたので、シャオロンは試合場のすぐ側に留まる許可をもらえた。『龍の爪』は革袋に入れて背負っているので、戦斧部門終了後に控え席に戻らずそのまま自由武器部門に出場できる。

ナーダとカラドミラヌの戦斧勝負は、あっという間に終わった。ナーダの重い一撃を受け止めきれず、カラドミラヌが愛武器を落としてしまったのだ。開始して数秒の事だった。負けん気の強い若者は、さっきの座興で勝負勘が狂ったんだ！　こんな試合、無効だ！

と、叫んだ。けれども、国王に鬼のような形相で叱られてしまい、すごすごと引き下がらざるをえなかった。

拍手喝采を浴びるナーダを、東国の少年は尊敬の眼差しで見つめていた。誰もがナーダを褒めている……周囲の熱気を少年は我が事のように喜んだ。が……

（？）

何か違和感を覚えた。会場の雰囲気に同調していない気がある。

シャオロンは周囲を見渡した。が、観客席の戦士達は興奮して勝負に酔いしれるばかり、最前列の魔法使い達も光玉を維持しながら熱い視線を試合場に送っている。

けれども……

何かが見ている……

会場中を包みこむほどに大きいような……

掌に載るほど小さいような……

とらえどころがない何かが。

人でないような気がした。

邪悪ではないので、魔族ではなさそうだが。

(何だろう?)

シャオロンがキョロキョロと当たりを見回しているうちに、予選第二試合が始まった。

国王に次ぐ戦斧の実力者二人は、南の戦士に対抗意識を抱いていた。巧みに戦斧を振るい、バンキグ戦士の実力を見せ付けようとした。

激しく火花を散らせてぶつかり合う戦斧。

その輝きを見つめていたシャオロンの耳元で、

「あれで戦士か? 話にならぬ」

と、誰かがつぶやいた。

ハッ! として振り返ったが、シャオロンの後ろには誰も居なかった。

決勝戦も、シャオロンは試合に集中できなかった。

何かが居るのだ……

それも、自分のすぐ近くに……

居るのはわかるのだが、見えない。

不安に駆られ、シャオロンは出場者控え席に振り返った。そこにいる尊敬する戦士の姿を求めて。

アジャンは仏頂面で試合を眺めていた。が、独特の勘の良さを発揮してシャオロンの視線にすぐに気づき、敏感に反応した。緑の炯

眼を細め、ジーッとシャオロンの背後を見つめる。何が居るのか、アジャンには見えているようだ。アジャンがフッと笑みを作った後、派手な喚声があがった。勝負がついたのだ。

試合場にたたずみ、観客に対し手を振って応えているのは……ナーダだ。ナーダが勝ったのだ。

「惜しいかな、未熟」

未熟……？

未熟とは、ナーダに対して言っているのだろうか？

「勇者の従者殿、見事であった！　わしも戦斧部門に出場するのであった！　そなたと闘いたかった！　王宮滞在中に、是非、一度、手合わせいただきたい！」

と、玉座から声をかけてきたルゴラゾグス王に、ナーダは恐縮して答えた。

「真に偉大な斧の名手の前では、私の腕など霞んで見えましょう。陛下の戦斧は神技の域にまで達していると伺っております。ですが、対戦できれば、私には学ぶべきものが多く良い経験となりましょう。私ごとき未熟な男ではお相手には役不足かと存じますが、喜んで……」

二人のやりとりを耳にして、シャオロンは……

（あれ？）

小首をかしげた。何で二人のやりとりがわかるのだろう？　バンキグ語など知らないのに……

「シャオロン、革袋を預かりますよ」

試合場から下りて来たナーダに声をかけられるまで、シャオロンはただボーッとその場に佇んでいた。

「ナーダ様……」

「早く『龍の爪』を装備しなさいな。あなた、予選第一試合に出場するんですよ」

言われるがままに『龍の爪』を革袋から取り出し、シャオロンはすがるように仲間を見つめた。

「ナーダ様……」
その不安そうな姿を、武闘僧はルゴラゾグス国王との対戦への恐れからくるものかと勘違いした。ナーダは静かに笑みを浮かべ、少年へと助言した。
「『龍の爪』を装備する者にふさわしい闘いをなさい。あなたはその武器の所持を、真龍と古えの神主（かんぬし）から許された一流の格闘家です。恐れる必要はありません。あなたは、あなたとして闘えばいいのですよ」
シャオロンは唾を飲み込み、頷きを返した。今、周囲で何か異常が起きているのは確かだが、自分はセレスの従者の格闘家なのだ。闘うべき時に闘えねば話になるまい。
武術大会に集中しよう……シャオロンは決意した。

「アジャン、仇をとってあげましたよ。……て、全然、悔しそうじゃありませんねえ」
食い入るようにシャオロンの背を見つめる赤毛の戦士。
その隣に、悔しがってくれなきゃつまらないですよと、武闘僧が腰かける。
「……くだらん大会だが、出て良かったな」
何の事？　と、セレスが身を乗り出す。アジャンは誰に聞かせるでもなく言葉を続けた。
「さすが、シャオロン……と、言うべきなのだろうな」

弓勝負は、バンキグ一（いち）の弓の名手ノリエハラスとジライの二人の勝負となっていた。
両者は試合開始からずっと的中を続けている。一矢も外していない。素晴らしい集中力だ。
小休止の時、弟子から渡された手ぬぐいで汗を拭いながら、宰相

は南から来た男に声をかけた。
「その息苦しそうな覆面を外されてはいかがかな?」
「……」
「それでは汗すら拭けん。ご不自由であろう?」
「……心配ご無用」
弓の弦の強度を確かめながら、南の戦士は言った。
「ジャポネの忍には、人前で素顔を秘する掟がござる。その古くからの掟は、我が宿命であり、美徳……破る気はござらぬ」
「ほう。南の方にしては古風な方だ」
老大臣はカラカラと笑った。
「この勝負、わしとその方が続ける限り、おそらく決着はつかぬ。雌雄を決する事はできそうにないが、共に弓を楽しもうぞ」
標的面の取替えが完了し、小休止は終わった。
二人は並んで佇み、矢をつがえ、弓を引き絞った。

試合場に現われたシャオロンに、観客は失望と怒りを隠さなかった。
女勇者も、その後に出場した二人の従者も、的中を続けている弓部門の選手も、観賞に値する一流の戦士であった。
しかし、自由武器部門の出場者は子供だったのだ。しかも、ひどく痩せた十歳前後の。競技場で雑用係として働いている戦士見習いの少年達の方がまだ体格が良い。
ただ、子供が両腕にはめた黒の小手から伸びる五爪（そう）の爪武器には、人々は並々ならぬ関心を示した。レスリング形式の『格闘』しか発達しなかった北方には、爪武器はないのだ。初めて目にした武器はバンキグ人には奇妙な形に映ったが、武器自体には年を経た風格があり、細く鋭い爪は猛禽類のもののようだった。名のある武器と思われたが、その使い手があの子供では……
シャオロンの予選の対戦相手は、複雑な表情を浮かべていた。槍

の名手であるその男は、自分の初戦の相手が子供と知って、分不相応の試合に出場させられる事となった子供に同情していたのだ。長く罵声の的とさせては気の毒なので、試合開始直後に武器を弾き飛ばしてやって早々に退場させてやろうと、そう思っていたのだ。

けれども、子供の爪武器は小手で腕にしっかりと固定されてしまっている。武器をはじき飛ばすのは不可能だ。となると、対戦相手を退場させるには、その体にかすり傷でもよいから傷を負わせるか、『参った』と言わせるかしかない。

子供は細い手足をむき出しにして、東国風の短衣（道着）を着ている。シャオロンの対戦相手は決めた、槍の穂先で少年の二の腕をかすろうと。

シャオロンは深呼吸をしてから腰をややかがめ、右手の爪を開いたの顔に向けて構え、左手の爪は相手の変化に対応できるよう床に向けて垂らしていた。会場からの野次など、まったく耳にいれていない。勝負に集中しているのだ。

「始め！」

審判の開始の合図と同時に、両者は動いた。

バンキグの戦士が槍を突き……

その穂先を体をずらして避けたシャオロンが、爪をきらめかせ、対戦相手の左脇を駆け抜ける。

衣服の切れ端が宙に舞う……

バンキグ戦士は驚愕の表情に固まったまま肩越しに顔だけ振り返って、背後の少年を見つめた。

すれちがいざまに左脇腹を切られたのだ。しかも、浅く。動いている人間の衣服と皮膚だけを浅く切った少年は、もう既に次の攻撃に移れる体勢を整えていた。目にもとまらぬ的確な攻撃、素晴らしい敏捷性……

勇者の従者の少年は……その役目にふさわしい一流の戦士だったのだ。

「勝者、勇者の従者シャオロン殿！」

うぉぉぉぉ！　と、観客席の戦士達が声をあげる。不思議なものを見た！　彼らは面白い闘いを見せてくれて少年に、拍手を送った。

「動きは見事。なれど、未成熟なその体では満足に斧は振るえまい」

試合場から下りながら、シャオロンは溜息をついた。耳元で聞こえる声は、今度は自分を評価してくれたようだ。

「ずいぶん、斧にこだわってらっしゃるんですね」

相手に聞こえるかどうかわからなかったが、シベルア語で話しかけてみた。だが、しばし待ってみたもの、何の反応も返らなかった。

予選第二試合は、ルゴラゾグス国王とフレイルの使い手の対戦だった。

国王の登場に、観客席の戦士達は総立ちとなり、国王の御名を声をそろえて唱え、両腕を振り回した。凄まじい熱狂ぶりだ。位への尊敬だけではない。国王は国一番の戦士であるその技量も愛されているのだ。

国王の対戦相手の武器のフレイルは、とがりのついた鉄球を鎖で結んだ棍棒だ。鉄球を振り回し距離を開こうと牽制する相手。変幻に動くそれの動きを見極め、距離を詰めねば戦斧は届かない。

相手が浅く踏み込んだ時だった。

「だぁぁぁっ！　うぉぉりゃあぁぁぁ！」

奇声と共に国王は下段から斧を斜めに突き上げた。

くるくると何かが宙を舞い、地響きを立てて床の盛り土に激突する。それは鉄球であった。鉄球と棍棒を繋いでいた鉄の鎖は半ばで切られ、対戦者の手には棍棒だけが残されていた。

戦士達は口々に王の名を称えた。叩きつけて力任せに切ったのではない。ルゴラゾグス王は力のこもらない下段からの突き上げで、正確に鎖と鎖を結ぶ細い繋ぎ目だけを断ち切ったのである。始終動きが変化するフレイルの鎖を！

「惜しいかな……未熟」

シャオロンの耳元の囁きはナーダの試合観戦後のものと変わらな

かった。が、より残念そうな響きがあった。
「戦斧の名手の才をあたら腐らせるとわ」
「……国王陛下の技量は神技じゃないんですか？」
シャオロンはシベルア語で尋ねた。が、相手にはその声が届いていないのだろう。耳元の声は質問に答える代わりに願い事を口にした。
「少年よ、次の勝負、わしに預けてはくれまいか？」
「え？」
「戦斧の技術は廃れ、見るも無残な力技しか世に伝わっておらぬ。あの王は恵まれた己が肉体と視力に頼っておるだけのこと。武器と使い手が一体となって初めて、武器が真に応えてくれる事を知らぬのだ」
「あなたは……どなたですか？」
「あの王に己が技量のいたらなさを教えてやりたい。あれが心を入れ替え己を鍛え上げれば、我が戦斧の後継者たりうるやもしれぬ。聖なる武器『狂戦士の牙』。我が慰霊塚に封印した愛武器を、わしは戦斧の名手に託したい。わしは二つの宿願を果たせぬまま命尽きた。二つの宿願を遂げねば、この地上を去れぬ。一つは『狂戦士の牙』の後継者を見出すこと。今ひとつは……我が最愛の人の無実を証明する事」
最愛の人の無実を証明する……？
愛武器は『狂戦士の牙』……？
慰霊塚……？
「あなたは、もしや」
シャオロンの声が震える。
「ゲラスゴーラグン様？」
二代目勇者の従者、戦斧の名手ゲラスゴーラグン。その魂に出会う事をシャオロンはずっと願っていたのだ。ペリシャでシャダムの魂と触れ合ってからずっと……
「おお！　少年よ！　何とした事だ！　そなたの心から懐かしき魂

を感じる！　そなた、何者だ！」
　シャオロンは名乗った。が、どうしても、自分の声は相手に届かない。姿の無い霊は戸惑っていた。
「シャダム？　シャダムだな？　ペリシャ教の英雄殿が今更わしに何の用だ？　死後も恋に惑う愚かな男よと、笑いに来たのか？　きさまとの口論はもはや厭きた。わしは我が信念をもって、ユーリアを信じたのだ。己の武器と名と信仰する神にかけて我らは魔族と戦う事を誓い合った。その誓いを彼女が破るはずはない！」
「違うんです！　シャダム様はゲラスゴーラグン様に真実をお伝えし、謝罪したいと……ユーリア様を信じなかった事とユーリア様を信じ続けたゲラスゴーラグン様を侮辱してしまった事を謝りたい一心で眠りより覚められたんです！」
　シャオロンは叫んだ。が、その叫びはゲラスゴーラグンには届かない。
「きさまの眼には淫蕩な罪深き女と映ったかもしれぬが、ユーリアは姿形ばかりではなく魂まで美しい女であった。しかし、きさまは表面しか見なかった！　確かに、幼き頃、家族を失った彼女は身を売って日々の糧を得ていた。魔法の師に出会うまで、彼女は苦界に身を置いていた。だが、売春は罪か？　身を売らねば、幼い子供は日々の食事にありつけなかったのだぞ！　王族のきさまに底辺で生きる者の苦しみがわかるものか！」
「聞いてください、ゲラスゴーラグン様！」
「きさまは彼女の過去を公とし、彼女を罪の女と嘲笑い、女魔法使いユーリアは魔に堕したと世に噂を広めた。見下げはてた男よ！　何故、友を信じぬ！　何故、誓いを信じぬ！　何がきさまの目をそれほど曇らせたのだ、シャダムよ……我らは共に戦う仲間であったはず」
　ゲラスゴーラグンは、嗚咽していた。北方の戦士はユーリアを信じ続けたのと同様に、シャダムをも友と慕い、その変心に心を痛めていたのだ。

お二人を仲直りさせたい……

そう願ったシャオロンから力が抜け落ちた。シャオロンという人格は心の奥深くに眠り……

そして……

英雄の墓――バンキグ編　5話

審判はおそるおそる、試合場の外の女勇者の従者に声をかけた。シベルア語で意味不明な言葉を叫び、虚空を見つめていた子供は、今はぱったりと動かなくなっている。うつむき、床に目を落としている。

「早く試合場へ。国王陛下がお待ちかねだ」

と、声かけると……

子供は右腕で両目を覆い、おいおいと大声をあげて泣き出したのだった。

審判は目を丸くした。この子供は、ルゴラゾグス王との対決を恐れ、恐怖のあまり精神に異常をきたしたのだろうか。

「何と……何としたことか」

子供の叫びに審判は首を傾げた。聞き違いでなければそれはバンキグ語だ。しかも、ひどく古い言葉使いの。

「ユーリアよ、やはり、そなたは心美しい女人であったのだな。そして、シャダムよ……すまなんだ。ユーリアの強力な術にかかっていただけであったのだな。おまえの口から出た侮辱の全てが術に踊らされたものであった以上……もはや我が怒りは解けた！　シャダムよ！　高潔なるペリシャの聖戦士よ！　おまえの謝罪、しかと聞き届けた！　安らかに眠るがよい、我が友よ！」

右腕と右手の小手で、ぐしっと涙をぬぐっても、後から後からこぼれてくる。おいおいと泣いている子供に、審判は声をかけた。

「試合場に上らねば棄権とみなすが、良いか？」

鼻をすすってから、子供はじろりと審判を睨みつけた。

「気の利かぬ男め！　わかった！　登ってやるわい！」

「うわぁ、何か大当たりが憑いたっぽいですねえ」

ちっとも勝負が始まらないので、観客がしびれを切らし派手なブーイングをしてる。そのせいで、出場者控え席まで声は届かないのだが、目で見るだけでも充分にシャオロンがおかしいのはわかった。突然叫んだり、泣いたり、ふてぶてしい態度をとったり……霊が憑いたのは明らかだった。シャオロンの唇の動きから幾つかの単語を拾った武闘僧は、口元に笑みを浮かべた。

「シャオロン、バンキグ語を話してますし、『ユーリア』とか『シャダム』とか言ってますよ」

「え！　それじゃあ！」

両手を組み合わせ、セレスがパッと顔を輝かせる。

「ゲラスゴーラグン様ね！　ゲラスゴーラグン様がシャオロンに憑依しているんでしょ？」

その問いは赤毛の傭兵に向けられたものだった。シャーマン体質のこの男は、シャオロン以上にこの世の神秘を見通す眼を持っていた。女勇者に対しては答えるのも面倒とばかりに肩をすくめてみせ、アジャンはシャオロンに重なっているモノを見つめながら武闘僧に話しかけた。

「おまえがシャオロンの話を聞いて描いた似顔絵（モンタージュ）、かなり似ているぞ」

「おお、そうですか、それは嬉しいです」

「予想以上に小柄だ。シャオロンよりちょっと小さい」

「へぇぇ。小柄とは伺ってましたが、それほどとは」

試合場に上がったシャオロンが、胸をそらせたまま審判に話しかける。審判は声を荒げたようなのだが、シャオロンの一喝におびえ、後ずさった。横からルゴラゾグス王が何か口ぞえをし、審判は不承不承頷き、両腕を高々と天へと向けた。

会場が水をうったように静まり返る。

「勇者の従者シャオロン殿からの願いを、国王陛下が承認された！　よって、特例ながらシャオロン殿の武器替えを認める！　シャオロン殿は国王陛下に戦斧で挑まれたいとの事！　勇者の従者ナーダ

殿！　斧を持って参られい！」
「あ？　はい」
ナーダは戦斧を右手に、『龍の爪』をしまう革袋を左手に試合場へと走った。私の斧はこの王宮からの借り物なんですがねえと、ぶつぶつ文句を言いながら。

「あの子供……陛下に戦斧勝負を挑む気じゃな」
小休止の時、ノリエハラスが話しかけてきた。老宰相は自由武器勝負が行われる反対側の試合場へと顔を向けていた。
「得意の爪武器で挑めば、万分の一でも勝ち目はあろうに。無謀な事よのぉ……」
シャオロンが戦斧を使う？　あの非力なシャオロンに戦斧を振るう体力も技量もあるとは思えなかった。が、ジライはその事は口にせず、静かに笑った。
「息が切れておられますぞ」
「……なに？」
「小休止の間は休まれるがよい。ご老体には厳しき長丁場ももう間もなく終わりまする。後十矢か、十五矢でござろう。ここまできた以上、最後まで外さずにゆきたいものですなあ」
「こんな至近距離……外す方が難しいわ」
老人は強がっていた。が、忍の眼は誤魔化せない。ジライは相手の右肩の異常を見抜いていた。右肩の周囲に疼痛と痺れがあり、熱を帯びている様子。老大臣は無理をしすぎたのだ。疲労が蓄積した右肩が、矢を射る度に激痛を訴えている事だろう。気力で後何本、的中を続けられるか。
斧勝負でシャオロンが勝てるはずはないのだが、シャオロンが勝利した場合は、不自然にならぬ形でわざと負けて、バンキグ国に勝ちを譲る事になっている。ノリエハラスの様子を見つつ、的中を調節する必要があった。

妙な子供だと、ルゴラゾグス王は赤銅色の髪を描いた。
勇者一行の中で間違いなく最年少の子供が、駆け寄ってきたインディラ人の仲間を怒鳴りつけ、召使のようにこき使っている。自分はその場に立ったまま何一つ動かず、己の爪武器を両腕から外させているのだ。
二人はバンキグ語で話していた。が、もれ聞こえる言葉からすると、インディラ人は子供に対し敬語を使っているようなのだ。
「重い！　重いぞ！　斧をこれほど重く感じるとは！　まこと未成熟な体よ！　そなたの体を用いた方がまだマシじゃ！」
「そういうわけには参りません。その子供がこの勝負の選手です。どうぞ、そのまま……」
「ええい！　今だけじゃぞ！」
何の話をしているのだろう？　国王は首を傾げた。
インディラ人を試合場から下がらせ、子供は国王と向き合いニヤリと笑った。
「そなたの母方の曾祖母は、ハンセン家の血を引く女だ」
「？」
「ハンセン家も我が家系同様、数百年前に途絶えておる。家系図も残っておらぬゆえ、そなた知らぬようだが、ハンセン家には我が娘ゲラスグレーテが嫁いでおる。喜べ、王よ。そなたの体には、我が血が流れておる。そなたは我が子孫だ」
何を言っているのだ、この子供は？　ルゴラゾグス王は対戦相手を眉をひそめつつ見つめた。子供とは思えぬほど威風堂々と歩み寄って来る相手を……
「私語は慎まれよ」
審判に注意されても、意に介した様子もなく、語り続けた。この数百年、投げ斧こそ重宝されたが、両手を使用する戦斧は好まれず片手剣を好む輩が増えるばかりで嘆かわしく思っていただの……戦

斧の使い手の国王が即位したおかげで、戦斧を見直す気風が生まれたのは喜ばしいだの……

口を閉ざさねば失格にする！　と、怒鳴った審判は、子供に一睨みされ、震え上がった。眼で人を殺しかねない、凄まじい眼力があるのだ。

「うるさきこわっぱめ！　望み通り始めてやるわ！　さあ、参れ、王よ！　最初は軽く相手をしてやる！」

小柄な子供は腰を落とし、斧頭を持ち上げ、刃を見せて構えた。

（うっ！）

国王は我が目を疑った。一見、何気なく構えているようなのだが、子供からは他を威圧する気が広がっているのだ。

「始め！」

審判の合図が聞こえてもルゴラゾグス国王は動けなかった。下手に踏み込めば切られるからだ……

悠然と斧を構えている子供は、踏み込めずにいる王に対しニカッと笑った。

「我が実力を察したようだな。嬉しいぞ、そなた、見込みがある。鍛えてやろう……」

斧を構えたまま子供は走り、高々と跳躍した。重い斧を振り上げて！

振り下ろされた刃を、ルゴラゾグスは斧で受け止めた。

稲妻のような一撃だった。ルゴラゾグスの腕にしびれが走った。が、休んではいられない。着地と同時に右へ左へと斧を振り回す子供。その刃を払い、受けねばならなかった。

子供は、上段・中段・下段と技をふりわけ、時にはバトンのように斧を回転させ柄で攻撃を仕掛けてきた。変幻自在の攻撃だ。その上、ルゴラゾグスからの反撃は軽く横に流すか、体術でかわしてしまう。

バンキグの戦士達は固唾を呑んで勝負を見守った。バンキグ一の戦斧の使い手が、子供に押され、良いようにあしらわれているのだ。

信じられなかった……

子供は余裕の笑みを浮かべていた。

「足さばきが悪く、下半身の柔軟さに欠け、技も単調。だが、良い教師のおらなんだこの時代に、独学でよくここまで己を鍛えた。褒めてやろう」

ルゴラゾグスはギリリと歯を食いしばった。己の腕ではかなわない相手である事はわかっていた。が、負けるわけにはいかなかった。国王として……国一番の戦斧の使い手として……

「王よ、褒美に我が得意技を披露してやる。乱戦向けの技だが、座興代わりじゃ。《雪嵐》という」

「《雪嵐》！」

ルゴラゾグスは声を張り上げた。

「その名だけが伝承に残っている、ゲラスゴーラグン様の秘技ではないか！　まさか、おまえは！」

「さよう！　わしはゲラスゴーラグンじゃ！」

東国の子供は……いや、東国の子供の体を回転させ、ゲラスゴーラグンは己の気を斧にこめて放った。刃からまばゆい光の気が広がり、竜巻のごとき強風が試合場に吹き荒れた。

ゲラスゴーラグンの巨体が床に叩きつけられた。だが、王にも意地がある。戦斧を手放すまいと国王は柄を握り締め、反撃に立ち上がろうとした。

けれども……

立ち上がりかけていた王の額に、ぴたりと刃が突きつけられる。ルゴラゾグスは斧の刃を向ける相手を見つめた。東国の子供の内に宿っているものは……間違いなく『戦斧の神』と敬い慕い続けた伝説の戦士――ゲラスゴーラグンなのだろう。そうでなければ納得がいかない。あの技、この風格……

「……参った……いえ、参りました！」

国王は憧憬の瞳を子供へと向けた。

「手合わせをしていただけたのは、まさに僥倖（ぎょうこう）！　このルゴラゾグ

ス、あなた様を神と崇め、戦斧に精進してまいりました！　どうか、この未熟者に戦斧をお教えください！　ゲラスゴーラグン様！」

バカでかい声の国王の降参宣言と『ゲラスゴーラグン様』と、過去の英雄の名を高らかに叫ぶのが聞こえた。

驚愕と失望の混じった喚声が場内に響き渡った。

（シャオロンが勝つとは……）

意外に思いながら、ジライは弓を引き絞った。丁度これが最後の一矢だった。シャオロンが勝った以上、これを外し負けねばならない。

ノリエハラスが気力で的中の数を伸ばしているので、ジライも彼に合わせて的中を続けていた。あまり大きく外してはわざとらしい。右手がすべったような演技をし、的中の緑円ではなくその外側の赤い円を狙った。

しかし、矢を放ってから、ジライは目を見張った。同時に放ったノリエハラスの矢が標的面から大きくそれてゆくのがわかったからだ。

射終えると同時に、ノリエハラスは右肩を押さえ蹲った。とうに右肩は限界を越えていた。気力勝負を続けていた老宰相に、国王敗北が耐えられない事実として重くのしかかったのだろう。

ジライ、赤的命中。ノリエハラス誤射。

弓審判が弓勝者の名を高らかに口にしようとした時、

「この勝負は無効じゃ！」

東国忍者が審判に詰め寄ってきた。

「最後の一射は、二人共に精神を乱し、弓の調和を乱した！　誤射にて勝者となるは耐えられぬ！」

「はぁ？」

目をぱちくりとさせる審判に、ジライは畳み掛けた。

「弓道で、真に対決すべきは他者ではなく自己！　正しき精神、正

しき呼吸をもって心身を統一し、己自身を射当てる境地に達して初めて弓は成る！　無射無心！　有射有心は小人の弓なり！」

「あの……」

「つまり、最後の一射は無効だと申しておるのだ！　それまでの的中は同数……引き分けにせよ！」

勝つわけにはいかない！　負けられないのなら、せめて引き分けにする！　東国忍者の凄まじい剣幕に押され、審判はノリエハラスに助けを求めた。

右肩を押さえたまま、老大臣はジライに話しかけた。

「その方の弓道の美学はわかった。が、勝負は勝負。いや、試合は試合と言った方がよいか。わが国のルールに則れば、その方が勝者じゃ」

「見苦しき勝利などいらぬ！」

ここぞとばかりに、ジライは怒ってみせた。

「我は棄権いたす！　勝者はそちらで勝手に決めればよかろう！　我以外にな！」

懐から取り出したものを、ジライは床にたたきつけた。

ボン！と、黒煙が広がる。

すわ、火事か！　と、観客席前列に待機していた宮廷魔術師が水の魔法を使った。が、忍者が使ったのは、ただの目くらましの煙玉だった。黒煙が晴れた時には、忍者の姿は弓競技場にはなかった。

当然のことながら、ノリエハラスも勝者となる事を拒んだ為、審判団の話し合いの結果、弓勝負は勝者無しの無効試合という事で決着がついた。

弓競技場の騒動に気づいた者は少なかった。会場に居た者ほとんどが、ルゴラゾグス王と勇者の従者の少年のやりとりに心を奪われていたからだ。

国王は少年の前に恭しく跪いている。国王はこの少年の体にバン

キグの英雄ゲラスゴーラグンの魂が降臨したのだと信じているのだ。
少年は会場中に響き渡る朗々とした声で、バンキグの戦士達に語りかけた。
六百年以上、死後に慰霊塚に納められた『狂戦士の牙』の後継者を求め、バンキグを彷徨っていた事。
死後も、勇者の従者仲間の魔法使いユーリアの無実を証明する手立てを求め、心を痛めていた事。
この肉体の所有者――東国の少年が、従者仲間のシャダムの霊と出会い、自分に真実を伝える為、シャダムの使いとしてこの国を訪れていた事。
女魔法使いユーリアが仲間を守る為に、大魔王を自分の内に封印し、悪役を演じてわざと勇者ホーランに討たれた事。
正義の為に犠牲となった彼女こそ、真の英雄である事。
大魔王討伐後に、シャダムがユーリアの悪名を広めたのは、真実を隠そうとしたユーリアの術に踊らされた為で、シャダム自身は生涯友を愛する高潔な人物であった事。
少年の口を借りてゲラスゴーラグンは語った、時には感極まって涙を流しながら。
しかし、シャダムとユーリアの間に恋愛感情が芽生えていた事実は隠した。ペリシャ教において、売春は許されざる罪。売春婦であった過去を持つ女性を愛したシャダムは、己の信仰を捨てる覚悟をしたのだが……ユーリアは彼の堕落を望まなかった。彼の自分への愛を呪で封じ、自分を憎ませる事で、シャダムの輝かしい生き方を守ろうとしたのだ。ペリシャ教聖戦士シャダムの名誉を守らねば、ユーリアの思いを踏みにじる事となる。
バンキグ国では、ペリシャの聖戦士シャダムは不実な男として軽蔑されている。生涯、ゲラスゴーラグンを侮辱する発言を続けたからだ。だが、全ては仲間を思う女魔法使いの優しさから生まれたことなのだ、この機会にバンキグにおけるシャダムの名誉回復も望みたいと、ゲラスゴーラグンは国王と戦士達を見回した。

ルゴラゾグス王は、魔法使いユーリアの真実と北方とペリシャの英雄の友情の物語を、詩歌や芝居、本にして広く国中に広める事を約束した。

戦士達も、次第に、少年の内に宿っている者に魅了されていった。王者にふさわしい威厳にあふれながら、情に厚く、涙もろい。信義を重んじ、戦斧をこよなく愛する戦士――尊敬に値する人物、王の中の王だ。

ルゴラゾグス王は頭を深く下げ、戦斧の技の伝授を強く願った。けれども、少年の顔は渋いものとなった。

「わしとしても、そなたに技を伝授し、『狂戦士の牙』を受け継ぐにふさわしき人物となってもらいたい。だが、この体では無理だ。非力すぎる。全ての技は教えられぬ」

「あ、なら、良い器があります」

と、言い出したのは、試合場の外で『龍の爪』を入れた革袋を持ったインディラ人だった。

「出場者控え席にいる赤毛の戦士。あの男でしたら、腕力も体力も抜群ですし、シャーマン体質なので憑依にも最適ですよ。自在に体を操れる事を保障します」

ゲラスゴーラグンは出場者控え席に視線を向け、推薦された男をじろりと見つめた（本人は話題にされている事に気づいていないようで、すぐそばの鎧姿の女性と話をしている）。確かに筋骨逞しい。だが、その外見よりも、むしろ、あの男の所持する聖なる武器の大剣が気になった。大剣には、あの男の先祖の霊が宿っている。邪なものがあの男に憑依しようとしても、大剣が阻み、邪気を断つだろう。けれども……

「おお！　あの男、ケルティのアジ族ではないか。アジ族ならば血縁だ。母がアジの女なのでな。アジの血を引くわしならば、あの体、借りられるであろう」

突然、フッと体から力が抜ける。倒れかけた少年の体を急いで支えたのは、試合場に駆け上ったナーダであった。

「……ナーダ様？」

焦点の定まらない瞳で自分を見つめる少年に、ナーダは微笑みかけ今までの出来事をかいつまんで説明した。ゲラスゴーラグンは国王との勝負に勝ち、シャオロンと同化して知りえた事実――女魔法使いユーリアの真実とシャダムの友情を国王や戦士達に教え、女魔法使いユーリアの名誉を回復したのだと。

「ゲラスゴーラグン様はご自分の愛武器『狂戦士の牙』をルゴラゾグス陛下に託すべく、陛下に修行をつけられるお体にお移りになられ、あなたは解放されたのです」

「陛下に修行をつけられる体……？」

まだ意識が朦朧としているシャオロンの頭を、大きな手がくしゃくしゃに撫で回した。見上げると、赤毛の戦士の笑顔が見えた。彼（アジャン）ならば絶対に浮かべないであろう、人懐っこい、何処か子供ような笑みだった。

アジャンのすぐ後ろにセレスが居た。突然、豹変してにこやかになり、わけのわからない言葉（バンキグ語）をしゃべりまくっている仲間を心配して後を追って来たようだ。

ルゴラゾグス国王や試合場まで下りて来た戦士達は、ゲラスゴーラグンが肉体を取り替えた事実をきちんと把握しているようで、赤毛の戦士に尊敬の眼差しを向けていた。

アジャンの体に宿った者は、豪快な声で笑い、何かシャオロンに話しかけてきた。だが、何と言っているのか、シャオロンにはさっぱりわからなかった。

「『礼を言うぞ、少年！　シャダムの心、しかと受け取った！』だそうですよ」

と、ナーダ。

「ゲラスゴーラグン様……」

シャオロンの頬をポロポロと涙が伝わった。

「お役に立てて……本当、嬉しいです。シャダム様も、きっと遠い地でお喜びになっていると思います」
シャオロンの言葉をナーダがバンキグ語に直す。ゲラスゴーラグンは真面目な顔で何かを言った。
「『まこと、シャダムの言う通りだ。戦士としての技量、魔法力、智謀など、勇者の従者にとって、それほど重要ではない。共に戦う仲間を信じ、友が闇に堕ちたように目に映ったとしても信じ続ける事……それが何より肝要なのだ』」
ゲラスゴーラグンはシャオロンの右手を握った。
「『そなたの旅の成功を祈る。そなたの勇者を、仲間と共にしかと守るのだぞ』」
シャオロンは力強く頷いた。
「はい！　ゲラスゴーラグン様！」

アジャンに宿ったゲラスゴーラグンはルゴラゾグス王を伴い王宮を後にした。聖なる武器『狂戦士の牙』が眠る地まで王を案内し、戦斧修行に集中する為だ。
その間、アジャンを除く勇者一行の四人は王宮に滞在した。
女勇者一行の行動の自由はノリエハラス宰相が許可してくれたので、サヴォンオラヴィ近郊の魔族退治をし、シベルア司教や宮廷魔術師達と面会し大魔王復活後のバンキグでの魔族の動きを調査した。
ノリエハラス大臣との話し合いの場には、ナーダは必ず忍者ジライを同席させた。老宰相からの強い希望（リクエスト）なのだ。大臣は古風で奥ゆかしくファンタスティックな東国の弓使いをとても気に入り、勇者一行にさまざまなサービスをしてくれた。もっとも、老大臣の過剰な好意に、ジライは辟易としているようだったが。
王宮の戦士達とも触れ合い、武を競い合った。カラドミラヌは毎日のようにナーダに戦斧勝負を挑んでは返り討ちにあっていた。ナーダは説教半分修行半分でカラドミラヌにつきあっていた。おかげ

で、若者はめきめきと実力をつけていった。
シャオロンは戦士見習いの少年達から尊敬の目で見られ、教えを乞われてびっくりした。が、東国の格闘を彼等に教える事に喜びを感じ、彼等ともっと話がしたいと思って懸命にバンキグ語を勉強した。
又、年長の戦士達は、シャオロンに短所である筋力の弱さを鍛えるのも大切ではあるが、長所である敏捷性を伸ばす修行の方がむしろ必要であると助言した。戦士達と共に武の稽古をつむ生活は、故郷の村の道場を思い出させ、少年の心を和ませた。
セレスにとっても、多少、前進はあった。毎日、武の鍛錬をつみ、魔族退治を続けたおかげで、『勇者の剣』の重量が子供の体重並まで減ったのである。あいかわらず話しかけても無反応だし、魔法を願っても黙殺されてしまうが、少しづつでも許しを乞い仲良くなっていこうとセレスは思った。
一ヵ月後、聖なる武器『狂戦士の牙』を手にした国王が帰還した。ゲラスゴーラグンが離れ、ただ人に戻った赤毛の戦士を伴って。王宮の人々は祭りのように賑わい、国王を祝福し、勇者一行に感謝を捧げた。

武術大会録をめくる赤毛の傭兵は不機嫌だった。
武術大会における勇者一行の成績は、三勝一敗、無効試合一……だが、記録上、無効試合となっている弓部門においても、本当は勇者側の勝利である事が王宮の武術大会録に記載されている。つまり、四勝一敗なのだ。
一敗……
その一敗を喫したのは……
「くそぉ！」
赤毛の傭兵は髪をかきむしった。ゲラスゴーラグンに憑かれている間に、農夫のアガナホーゲルは家に戻ってしまっている。再試合

がしたかったが、アジャンの帰還を待っていた勇者一行はそんな我がままを許してくれなかった。戻るなり明日には魔族退治の為、バンキグ北東部へ向かうと言うのだ。

武術大会録には勝者の言葉も載っている。

勇者としてたいへん立派な言葉を述べているセレス（間違いなくナーダの検閲が入っている）、バンキグ国の戦士と親交を結べた事を喜び武術大会に参加させてもらった栄誉に感謝するナーダ、『自分が戦ったのは初戦だけで、優勝はゲラスゴーラグン様の御力です。オレもゲラスゴーラグン様みたいな一流の戦士になりたいです』というけなげなシャオロン。

見るだけで、アジャンはムカッ腹が立った。東国の少年が北方で高く評価されたこと自体は嬉しいのだが……

気が紛れるのは、二点のみ。

一つは、ジライのコメントが無い事。弓は無効試合となったので、実質勝者であっても、忍者は記録上はたんなる参加者だ。あの忍者にまで『勝者の一言』を残されていたら腸が煮えくり返ったことだろう。

もう一つは、アガナホーゲルのコメントがたいへん謙虚であった事。それどころか『決勝戦四本目の試合で、対戦相手の秘術によって気絶した。あの勝負の真の勝者は対戦者だ』と、アジャンの名誉を回復する発言を残してくれている。あの男は善良で朴訥な農夫なのだ。それはよぉくわかる。わかっているのだが……

それだけではデブの下敷きとなった屈辱は忘れられない。大衆の面前でアガナホーゲルを投げ飛ばすか、大剣勝負をしてセレスさえ破り誰が真の実力者か広く知らしめねば、心は晴れそうになかった。

「ちくしょう！　大剣に出てりゃ、俺が優勝だったのに！　『勇者の剣』のないセレスなんざ、へでもない！　くそぉ！　二度とレスリングなんかするもんか！」

バンキグ北東部に向かう女勇者一行に、王宮中の人間が別れを惜しんだ。

ルゴラゾグス王は、女勇者の望みには国をあげて協力する事を固く誓い、旅の便宜をはかってくれた。

バンキグ国と女勇者の間には、深い友好関係が結ばれた。女勇者セレスは、ケルティの上皇に続き、ここバンキグでも協力な味方を得たのであった。

『この戦いが終わったら、わしの嫁になってくれぬか？』

『もう。そのお話ならお断りしたはずよ、ゲラスゴーラグン。あなたに私は似合わないわ』

『それはそうであろう、わしはこの通りチビで髭もじゃの醜い男だ。美しいおまえとは釣り合わん。それは、よくわかっている』

『馬鹿ね、あなたが醜いものですか。戦斧を持って駆け巡るあなたは、稲妻のように美しいわ。とても逞しくて素敵よ』

『惚れるであろう？』

『ふふふ、そうね。惚れちゃうわね……でも、結婚は駄目。もっと他のいい人を探してちょうだい』

『おまえより良い女が他にいるものか。おまえの気が変わるまで、わしは求婚を続ける。何百日でも何千日でも何万日でも言おう、愛している、ユーリア、わしの嫁となれ』

『もう、いやぁねえ、冗談ばっかり』

『冗談ではない！　真剣だ！　愛しておる、ユーリア。おまえの美しさも賢さも愚かさも優しさも、全て愛している。わしが喜びの野に旅立つまで、共に生きてはくれまいか？』

『……』

『心からおまえを愛している！　おまえだけを愛する！　妾（めかけ）も持たん！　約束する！　生涯、おまえ一人だけを愛し続ける！』

『ありがとう。ゲラスゴーラグン……そこまで思ってくれてるだなんて嬉しいわ。でも、ごめんなさい。結婚はお受けできないわ。この前、わかったでしょ、私が昔、どんな商売をしていたのか……』
『娼婦のことか？　恥じる必要はない。結構ではないか。経験豊富なおなごの方が抱いて楽しいぞ』
『もう……冗談はやめて』
『冗談ではない！　そんな些細な事は気にするな！　わしは全く気にせん！　わしの評判を落とすとか、要らぬ事は言うなよ？　おまえの事を悪しく言う輩はわしが一人残らず叩きのめしてくれるわ！』
『ゲラスゴーラグン……』
『わしの嫁になれ！　必ず幸せにする！』
『……』
『ユーリア、どうした？　泣くな、どうしたというのだ？』
『ごめんなさい……ゲラスゴーラグン、あなたの事は好きよ……でも、私は……』
『あの朴念仁への愛を捨てられんのか？』
『！』
『わしは、いつもおまえを見ていた。おまえの目が誰に向いているかは知っていたわ』
『……ごめんなさい』
『だが、それはかなわぬ恋だ』
『ええ……』
『あの男はペリシャ教徒だ。おまえを伴侶には選ばぬぞ』
『ええ。私、罪の女ですものね』
『大魔王を倒した後、どうするのだ？　おまえはペリシャでは暮らせん。側にいる事すらできないのだぞ』
『わかっているわ。ペリシャの聖戦士のあの人は英雄として国に帰還する……私は、この身が許される限りできるだけ近くで光輝くあの人を見守るわ。あの人に闇が近づかないように……守ってあげたいの』

『……ならば、わしは、待とう。おまえの恋が成就するか、おまえがその恋に疲れ果てるまで』

『え？』

『恋が成就すればよし。わしはシャダムを二、三発殴ってから、自棄酒をかっくらって寝る。それで全て忘れ、二人を祝福しよう。だが、おまえがズタズタボロボロになって疲れ果てたら、わしを頼って欲しい。わしの正妻はおまえ以外ありえぬ。跡取りが欲しいゆえ妾は持たねばならなくなるだろう。だが、正妻はあけておく。いつでもおまえを迎えよう』

『やめて……ゲラスゴーラグン……なんで、そんな……あなた、そこまで、私を……』

『惚れておるからに決まっている。おまえはわしにとって、ただ一人の女だ』

『……ありがとう、ゲラスゴーラグン……私、幸せだわ……今、あなたと一緒にいられて……』

『ユーリア……』

『私の過去を知っても、ホーランもマハラシも今まで通り接してくれる。シャダムも教義に触れるだろうに……私を仲間として遇し、話しかけてくれる……私、幸せよ……あなた達と出会えて……あなた達と誓い合って共に戦えて……ああ、今が……今が永遠に続けばいいのに……』

ゲラスゴーラグンの慰霊塚。雪に埋もれたそこより掘り出された『狂戦士の牙』はルゴラゾグス王の手に渡っている。

納めるべきものが無くなった空っぽの塚の前に、大魔術師カルヴェルが佇んでいた。

カルヴェルは過去を教えてもらった礼を述べ、英雄の魂を霊媒役の魔法人形から解放した。光り輝く戦乙女達が偉大な王を迎えに来ている。彼女らに囲まれてゲラスゴーラグンの魂は天を目指して昇

って行った。

「お気の毒に……ユーリア殿は愛する者や仲間と共に永遠にありたいと願う心をつかれ、大魔王の消滅を望まぬ心を……悪心を目覚めさせられ、その体をケルベゾールドに奪われたのか。大魔王は、さまざまな手で邪法を仕掛けてくる……」

自分は対応しきれるのだろうか？

いや、対応するのだ。何としても……。セレスにもその従者達にも、悲劇を味合わせてはいけない。大魔王を倒した後も、彼らに光の道を歩かせてやるのだ。

それが友との約束なのだ……

カルヴェルは魔力を高め、別所へと渡っていった。

後には、雪風と主人が消えた慰霊塚だけが残っていた……

英雄の墓――バンキグ編　5話（後書き）

『英雄の墓――バンキグ編』　完。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は……

＊　十八歳以上で男性の同性愛話でもＯＫという方　＊

ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――夢シリーズ』をご覧ください。

『夢と知りつつ……』。舞台はバンキグ。ナーダとジライの話です。夢シリーズのメイン・ストーリーは『夢と知りつつ……』で完結します。

＊　十八歳未満の方、男性の同性愛ものはパスという方　＊

このまま『小説家になろう』で。

次回は『五つの道』。舞台はバンキグ。

大魔王四天王ゼグノスはまだ滅びてはいなかった。雪の広野でセレスはゼグノスの残滓と対決する。しかし、そこでセレスは……

＋　＋　＋　＋　＋

次回の『五つの道』で『女勇者セレス』も１００話目です。セレスの旅もあともう少し。

ＰＶは１２万７０００、ユニークは１万５００を突破しました。お気に入り登録も１１５件を超えました、ありがとうございます。

夢シリーズの方もＰＶは２万４０００、ユニークは３３００を突破しています。

多くの方に見ていただいているのだと思うと、嬉しいです。元気がでます。ありがとうございます。

ご感想等、いただけると嬉しいです。励みとなります。

五つの道　序

「あるべき世界に帰りなさい、ゼグノス！」
雪を蹴って、女勇者セレスが『勇者の剣』を振り下ろす。

その一撃で……
ケルティで野望を果たし損ねても尚、今世に留まり続けていた魔族の残滓は消滅した。周囲を聖なる結界で覆われていた為、新たな憑代に移れなかったのである。
バンキグで復活をもくろんでいた大魔王四天王ゼグノスは消滅した。魂の一欠けらも残さず浄化できたか？　と、問われれば定かではないが。ゼグノスは己の魂を何万にも分断して今世に現われる。憑代に集わなかった魂が一部、今世に残っているかもしれないのだ。しかし、現在倒せるモノは倒しきった。
後はゼグノスと共に雪の広野で暴れていた下級魔族を倒すのみ。
『勇者の剣』を鞘に収め、仲間の元へ走ろうとしたセレスを……
背後から黒の気が襲った……
それは……
ゼグノスの死と共に発動する邪法……
女勇者への呪詛であった……

バンキグの首都サヴォンオラヴィでセレス達は、おととし春からこの国の北東部の数家族からなる小さな狩猟のパーティが次々に行方不明となる事件が続いている事を知った。
消えたパーティの数は二十にのぼる。数ヵ月後に発見されたパーティもあったが、生存者は一人もいなかった。移動式小屋の中で剣

を突き立て合って家族で殺し合ったり、全員で河に飛び込んだり、木から飛び下りたり……見つかるのは死骸ばかりだった。

バンキグの医師は、彼等の変死を『集団ヒステリー』と診ていた。確かに極寒の地で生きる人間には精神的緊張が強いられるものだが、破滅へと向かう精神病の発作に見舞われた以上、それなりの理由があるはず。しかも、その『集団ヒステリー』は極限状態の冬ではなく、恵みの多い春の季節から始まっていたのだ。

又、バンキグ王宮からの『大魔王復活時にバンキグ国内に現われた魔族の数は確認しているもので五十、その全てがシベルア教会司教と軍隊によって始末された。以後は、小物魔族が局地的に時折、出現するのみ』と、いう報告も、勇者一行に疑念をわかせた。他国に比べ、魔族の数があまりにも少なすぎるのだ。

人間に気づかれぬよう密やかに、魔族はバンキグで何か恐ろしい企みを進めているのかもしれない……

王宮滞在中に、武闘僧ナーダはバンキグ北東部の情報を集め、部下を現地に派遣し、何部族かの狩猟の民と接触させた。その結果、バンキグ北東部に住む者は程度に差はあるものの、皆、何度も『集団ヒステリー』にかかっている事がわかった。

突然、わけもなく踊り狂う者、笑い続ける者、叫び続ける者……『悪い魔族の呼び声が聞こえた』と、その時を振り返って、とある狩猟の民のシャーマンは語った。呼び声が聞こえる度に太鼓を叩いて歌を歌った（浄化魔法を唱えた）ので、彼の村では今のところ人死にが出ていないそうだが。

あるシャーマンが語った。

『先祖の霊が教えてくれた。悪い魔物の名はゼグノスと言うそうだ。ゼグノスはおととしの春から夏にかけてこの地で暴れ、おととしの秋に西に移ったが、昨年末、奴はこの地に戻って来た。奴は西で小さくなったので、非常に飢えている。心を正しく持ち祖先を敬い続けねば、ゼグノスの呼び声に負け、我らは滅ぶだろう』と。

「残念な事ですが、ゼグノスは未だに今世に存在しています」
　所用があって王宮を離れていた赤毛の戦士アジャンに、明日からバンキグ北東部に向かう理由をナーダが説明した。頭にターバンを巻いた、インディラの王族姿だ。
「あなたとハリハールブダン上皇、そしてセレスの活躍で、ケルティにおけるゼグノスの企みは潰えました。しかし、今世からあの魔族を浄化しきったわけではないのです」
「何故、そう言い切れる？」と、アジャン。
「ご存じの通りゼグノスは、己が魂を幾千幾万にも分け、同時に幾千幾万の人間に憑いていました。つまり、一度に、幾千幾万の憑代を持っていたのです。あなた方の活躍で、ケルティに居た人間はほぼ一遍に浄化され、ゼグノスは依るべき肉体を失い、今世から消滅した……かのように見えたのですが」
　ナーダは溜息をついた。
「あの時、ケルティに居なかった人間の内には、ゼグノスの魂は無傷で残ってしまったんですよ」
「……」
「ゼグノスの血の宴の時、たまたま国外に居た人間なんかがそうです。たとえば、あなたの恋人アジソールズ」
「てめえ！　ンな気色の悪い表現はやめろって、前、言っただろうが！」
「……未だにあなたを部族王と崇め、熱烈なＬＯＶＥコールを送り続けているアジソールズなんですが」
「クソ坊主！　喧嘩、売ってるのか！」
「いえいえ。まあ、その情報屋のアジソールズなんですがね、バンキグで再会した時、驚きましたよ。彼からゼグノスの気が感じられたからです。すぐに浄化してあげましたので、今はもう彼は大丈夫なのですが。本国に帰国したシベルア使節団・司教・司祭・行商人、ドラゴン船で遠出していた戦士などなどに、未だにゼグノスの魂は

宿っています」
「……」
「けれども、ここしばらく調査した結果、ケルティにまったく縁のない、バンキグ北東部の多くの人間の体内にも、ゼグノスの魂が潜んでいる事がわかりました」
「どういうことだ？」
おととし春から夏にかけてバンキグ北東部のャーマン達が『ゼグノスの呼び声』を聞いたと言っていること、それ以後『ゼグノスの呼び声』は途絶えていたが、昨年末から再び『ゼグノスの呼び声』が同じ地を襲っている事を、ナーダは説明した。
「推測するに、ゼグノスはおととし、バンキグで小規模な実験をしたのだと思います。人間の体内に己が分身を潜ませ、悪感情を呼び覚まし、理性を失わせ、欲望のままに暴れさせるという……ケルティの魔の宴の練習をしたのでしょう。バンキグ北東部では二十の狩猟パーティが行方不明となり、互いに殺し合ったり集団自殺をした遺骸ばかりが発見されています」
「練習かよ……胸糞悪い野郎だ」
「宮廷魔法使いを通じて、ハリハールブダン上皇には、ゼグノスの残滓の存在はお伝えしました。『動物達の母』降臨中にケルティに居なかったケルティ人の浄化は、上皇様がどうにかしてくれるはずです。任せて大丈夫でしょう。けれども、バンキグ・シベルアにおけるゼグノスの残滓の処分は我々がやるべきです」
「……けど、奴の魂はほぼ浄化されたはずだ」
アジャンは顎の下に手を当てた。
「何百万といたゼグノスは、浄化の光で消えた。今のゼグノスに本来の力はない。大魔王四天王を名乗るのも恥ずかしいほどの、下級魔族なみの能力のはず。接触するだけで次々に人間に伝染（うつ）るなんて芸当は、多分、無理だ。幾千幾万なんて数の分身は持てないだろう」
「そう願いたいですね」
「弱っちい魔族（ゼグノス）なんざ、地元のシャーマンやシベルア教の坊主ども

に任せていいんじゃねえか？」
「でも、バンキグ北東部が奴のもともとの本拠地ならば、放っておいては危険です。奴に能力を取り戻されかねません。そうなったら困るでしょ？　異国のバンキグやシベルアでは、あなた、『動物達の母』は呼び出せませんものねえ」
「だが、だからって、罠に飛び込むのか？」
アジャンはボリボリと頭を掻いた。
「今、野郎が派手に活動しているのは誘いこみだろ？」
「ええ。見え見えの罠でしょうね。正体を隠そうともせず、バンキグ北東部に限定して現われているのですから」
「女勇者をおびき寄せて倒し、ケルティでの汚名挽回を狙ってるんじゃないか？」
「でしょうね」
「……罠だとわかっているのに行くのか？」
赤毛の傭兵の問いに、武闘僧は肩をすくめてみせた。
「困っている方が大勢いらっしゃるんですよ。罠とわかっていても、あのセレスが見過ごすはずはないでしょ？」
アジャンはがっくりと頭を垂れた。
「……あの馬鹿女……」
「まあ、女勇者様が行くとおっしゃる以上、従者の我々はその言葉に従わなきゃね。それに……私としてもゼグノスにはとどめをさしたいのですよ。大魔王討伐前に、可能ならば、四天王は全員、倒しておくべきです。一体でも討ち漏らせば、勇者様一行はかなりの苦戦をしいられます」
「ほう？」
「大魔王に次ぐ実力の魔族が、大魔王と共に勇者一行を待ち構えているわけです。厳しい戦いとなるのは当然です。ちなみに、四天王一人を討ち漏らした六代目勇者アレックス様の代は、生き延びた従者はサムライのカネノブ様一人で、アレックス様は大魔王を討ち取った後に発狂したそうです」

「勇者が発狂？……四天王が残っていたせいなのか？」
「と、言われています。同じく四天王が一人残っていた、八代目勇者フィリップ様の代は勇者一行は全滅しました」
「全滅……」
「大魔王の波動が消えたというのにフィリップ様はおろかその従者すら大魔王の居城から帰還しない。様子を見に行った勇者様の甥達は、大魔王の玉座の前に血の海の跡と腐りかけた六つの死体を発見しました。勇者一行全員、全身から血を吹いて死亡していたのだそうです」
「そりゃ、また、悲惨な結末だな」
「大魔王は消滅していたので、フィリップ様が相討ちで倒してくださったんでしょうけれどもね……まあ、四天王が二人も残っていたのに全員無事に凱旋できた十代目勇者ウォルト様もいらっしゃいます。四天王を倒せなくても、或いは問題なく大魔王を討伐できるのかもしれませんが……全員が無事に生き延びられるよう、可能な限り心配ごとは減らしたいのですよ」
「なるほどな……だが」
赤毛の戦士は、遠方をすがめ見るかのように瞳を細めた。
「……行かない方がいい」
全てを見通す『シャーマンの眼』は王宮の岩壁を乗り越え、遥か彼方を見つめていた。
「俺達は東を目指すべきだ」
「それは、予知ですか？」
「ハッ！　そんなごたいそうなもんじゃねえが……俺なら、今、絶対に、北東に向かわねえ。あっちは、ひどく歪んでいる」
「歪んでいる？」
「行けば、ろくな事にならない」
「……ケルベゾールドの本拠地がそこにあるのですか？」
「いや、違う。それならそれで、もっとぞっとするはずだ。大魔王様なら俺に身の毛もよだつ恐怖とやらを味合わせてくれるだろうさ。

ただ何となく嫌な感じがする……たいして強い力ではないと思うが……」

赤毛の戦士の危機回避能力に、勇者一行は信頼を寄せていた。彼の勘のおかげで、砂漠越えも樹海越えも難なくこなせてきたのだ。アジャンは自分にとって有益な道を本能的に見抜く目を持っているのだ。

けれども、セレスは、今世の勇者としての義務感から大魔王四天王討伐の意志を翻さなかった。又、武闘僧ナーダの後顧の憂いをなくしたいという考えは、全員の納得がゆくものだった。

危険があると承知した上で、女勇者一行はバンキグ北東部を目指した。

北方の冬は長い。三月となっても、バンキグには白銀の雪世界が広がっていた。しかし、春が近づくと共に日照時間はどんどん長くなってきた。一月頃はケルティ南部ですら日照時間は六時間足らずだったのだが、今は内陸のバンキグ北東部すら十時間も日の光が差す。吹雪の頻度も下がり、日中の移動はかなり楽になっていた。

勇者一行は、凍結した河の上を三台の犬橇で進んだ。ナーダの部下達はそのほとんどが情報収集の為、バンキグ或いはシベルアに散っており、ついてきているのは老忍者ガルバを含め五名だけだった。

河は完全に凍結しており、ぶ厚い氷に覆われていた。バンキグ北東部で氷が解け始めるのは五月、氷が無くなって周囲に春が訪れるのは（それはすぐに短い夏と変わるのだが）六月になってからの事なのだ。

狩猟民族の村に泊まり、村人の体に宿るゼグノスの残滓を浄化しつつ、一行は更に北東へと進んで行った。

そして、ついに雪の積もった無人の広野にゼグノスの気を色濃く

宿す者を追い詰めた。ある村のシャーマンの体をのっとっていたゼグノスは、次から次に次元扉を開き、下級魔族を召喚した。
襲い来る下級魔族。どれも雑魚とよんでいいモノばかりだったがその数が多すぎた為、従者達は前へなかなか進めない。
その中からセレスだけが一人、ゼグノスのもとに辿り着く。
セレスは勇者として大魔王四天王と対決し、見事ゼグノスを倒したのだった。
しかし……

五つの道　1日目（1）

「セレス！」

赤毛の傭兵アジャン、武闘僧ナーダ、東国の少年シャオロン、忍者ジライの前で……

「セレス様！」

『勇者の剣』を手から落とし、白銀の鎧をまとった女勇者が背から雪積もる大地へと倒れてゆく。

すばやい体術で走り寄り、彼女の体が地面に沈みきる前に、その腕に支えたのは忍者ジライだった。

「セレス様！」

女主人を見つめ、忍者ジライの覆面の下の顔が青ざめる。腕の中の主人（あるじ）は今……

「大丈夫ですか、セレス？」

駆け寄った武闘僧は、ハッと息をのみ、事の重大さを理解した。すぐに呪文を詠唱し、右の掌を彼女の胸の上にあてる。癒しの魔法のあたたかな光が彼の右手から広がり、セレスを包み込んでゆく。

「セレス様……？」

『龍の爪』を装備した東国の少年が、茫然と女勇者を見つめた。セレスは力なく倒れている。意識がないのだ。忍者の腕に抱かれ、武闘僧に治癒されている。

閉じられた瞼。
漏れる事のない呼吸。
ぴくりとも動かない体……
白銀の鎧の下の胸は……鼓動すらしていないのだろう。
「セレス……」
赤毛の戦士は『極光の剣』を振るった。何かを斬った感触で初めて、ああ、下級魔族を斬ったのかと気づく。動かなくなった女勇者に、心も眼も奪われているというのに、体は勝手に動く。勝手に敵を斬っている。
「セレス様ぁ！」
シャオロンが嬉しそうに声をあげ、ポロポロと涙をこぼす。
雑魚魔族と戦いながら、アジャンはセレスを見つめていた。
息をしている……
瞼はまだ開かないが……
間違いなく、呼吸している……
死んではいない……
死ななかったのだ……
胸の奥からこみあがってきたあたたかな感情を抑えきれず、赤毛の戦士は口元に笑みを浮かべた。だが、それは、すぐにいつもの皮肉な笑みへと変わった。
『極光の剣』を振るい、アジャンは周囲に残っていた魔族を葬っていった。一刻も早く女勇者のもとへ駆けつける為に。

けれども……

「客観的に言います……セレスは死亡しました」
戦闘終了後の雪の広野。武闘僧ナーダは沈痛な面持ちで、忍者ジライの腕の中の女勇者を見つめ、一同にそう告げた。

「その身は、もはや抜け殻。魂の宿らぬただの肉塊です」
「で、でも、ナーダ様！　セレス様は息をしてらっしゃいますよ！　眠っているだけなんじゃ！」
泣きそうな顔の東国の少年シャオロンに、武闘僧は静かにかぶりを振った。
「自力で呼吸できない彼女の代わりに、心肺などの身体機能を魔法で維持してあげているだけです。私の魔力が続く限り、肉体を生前の状態に保つ事は可能です。しかし、このままでは、私の魔力が尽きた時に、セレスの肉体も死を迎える事となります」
「……客観的にみりゃあ、死んだってのはわかった」
常と変わらぬ不機嫌そうな顔で赤毛の戦士が尋ねる。
「だが、主観的にゃあ、まだ生きているんだろ？　『このままでは死ぬ』んなら、どうにかすりゃあ生き返るんだよな？」
「……多分」
「おい、ナーダ！」と、アジャン。
「わからないのです、私にも。ゼグノスは自分の死をきっかけに発動する邪法を憑代にかけていたのです。ゼグノスをその手にかけてしまった為に、セレスは何らかの呪いをかけられ、肉体から魂を奪われたのです」
ナーダが苛立たしそうに、左の拳を右の拳で受け止めた。聖職者として、邪法になす術（すべ）をもたない自分が悔しいのだ。
「ですが……邪法の種類がわからなければ浄化のしようがありません。彼女の魂が肉体から分離しただけならば、魂を戻せばセレスは生き返ります。しかし、魔族に魂を喰らわれてしまったのであれば、再生は不可能。セレスはもう二度と目覚めないでしょう」
「……」
忍者ジライは女勇者をぎゅっと強く抱きしめると、睨むように武闘僧を見つめた。
「……身体機能維持の魔法、どれほどもつ？」
「そうですね……めいっぱい頑張って五日ってところですかね」

「五日……」
「魔力的には八日もつと思うのですが……私、眠るわけにもいきませんから自分に疲労回復の魔法も唱えなきゃいけませんし、体力も落ちてきます。確実に彼女を生かせておけるのは、やはり、五日でしょう」
「そうか……」
「むろん、誰か治癒魔法の使い手が手伝ってくだされば、もっと長く身体機能維持の魔法をかけていられます。人数さえ足りれば、永遠にもね。しかし、この周囲の村のシャーマン達はゼグノスに殺されていました。助けはあてにできません」
「心得た、五日だな」
ドンと体をぶつけるようにして、忍者は女勇者の体を武闘僧の腕に預けた。
「ジライ？」
忍者がサラサラと何かを書き始めた。ジライの手にある物が、自分の携帯用のペンと筆記帳と気づき、ナーダは顔をしかめた。先程の接触で、掏られたようだ。
「……一瞬だったが、セレス様が斬った男の体に血文字が見えた。断片的にしかわからぬが」
ジライが筆記帳に書き留めた文字を、アジャンやシャオロンも覗き見た。しかし、それは魔に通じるものにしか読めない特殊な文字。二人には何と書いてあるのかわからなかった。浄化魔法の修行中に祓うべき邪法と血文字を学んだナーダだけが、それを読み取れた。
「『封印』、『流れ』、『眠り』、『入れ代わり』、『夢』……後は意味不明ですね」
「読み取れたのは、それだけだ」
武闘僧ナーダ、東国の少年シャオロンの顔を見渡し、最後に赤毛の傭兵を横目でジロリと忍者は睨んだ。
「セレス様の護衛はきさまらに任せた……この邪法、五日のうちに解いてみせる」

との言葉を残し、忍者の体がフッと消える。すばやい体術で何処かへ移動してしまったのだ。

「ジライさん！」

シャオロンはきょろきょろと周囲を見渡した。が、白銀の世界が広がるばかりで、少し先の森や南の河の方まで見渡しても、どこにも忍者の黒装束は見当たらない。

「ったく！　勝手な野郎だ！」

舌打ちを漏らし、赤毛の傭兵は女勇者を見つめた。深く閉ざされた瞼。口や鼻から漏れる静かな息。ただ眠っているかのような穏やかな顔をしている……

「セレス……」

緑の瞳を細め、アジャンは唇をぎりっと噛みしめた。

「……俺も行く」

「アジャンさん？」

不安そうに自分を見つめる少年。その肩をアジャンはポンと叩いた。

「二手に分かれよう。おまえとナーダはセレスの体を守って、どっか近隣の村に引き返せ。俺は西へ行く」

「西へ……？」

何をしに？　と、少年が問う前に赤毛の戦士は答えた。

「西へ行けと俺の勘が告げている。そこに何があるのかは、いつも通りさっぱりわからねえが……俺はそこへ行かねばならない」

「アジャンさん……」

「そこに行けば、多分、馬鹿女を起こせる。もしかしたら、クソ忍者と行き先は同じかもしれねえが、あのうさんくさい忍者一人に任せるわけにゃいかねえ。セレスは護衛対象だ。俺がきっちり起こす」

「はい、アジャンさん」

少年は真っ直ぐに尊敬する戦士を見つめた。

「アジャンさんなら、絶対、できます」

「叩き起こして、たんまりと礼金をもらわなきゃな」

そのまま赤毛の戦士は、南の凍った河の上に残してきた犬橇に向かおうとする。慌てて武闘僧が声をかけた。

「待ってください、アジャン！　お一人で行動するのでしたら、これを！……あっ？　あれ？」

懐に手を入れ、ナーダはせわしなく中を探った。しかし、そこに入っているはずの物が無いのだ。『何時、ご入用になるかわかりませぬ故』と、忠義の部下が持たせてくれている金袋と宝石袋が無い……

「あ」

何で無いのか思いあたり、ナーダは額を押さえた。

ジライだ。筆記用具と一緒に、金目のモノも盗られていたのだ。

「……すみません、今、あなたに渡せるお金、持ってませんでした。犬橇を守っている私の部下なら幾らか持っているはずです。彼等から」

「いや、いい。金ならある。俺は金庫番だ。勇者一行の表向きの軍資金、好きに使わせてもらうぞ」

「ええ。必要ならバンバン使っちゃってください」

「アジャンさん！」

去り行く戦士の背に向かい、東国の少年が叫ぶ。

「オレ、命に代えてもセレス様をお守りします！　ちゃんとお守りします！　だから、安心して行って下さい！　どうか、アジャンさんもご無事で！」

答える代わりに、振り返りもせず左手を軽くあげて振った。その背を……背の『極光の剣』の大剣を少年は瞳をこらして見送った。

武闘僧は糸目で、ジッと腕の中の女勇者を見つめた。

常であれば、セレスに近寄りすぎると鳥肌が立ち、接触していると掻痒感が耐え難いものとなる。けれども、今は肉体的不快はなかった。セレスの命の炎は消え入りそうなほど小さく弱い。ナーダが魔法をかけ続けねば、彼女は死んでしまうのだ。

胸が痛んだ。

この地上でただ一人、『勇者の剣』を振るえる人間……
大魔王を討伐できる勇者……
人の世になくてはならぬ存在……
女勇者セレス……
彼女を失えば、人の世は滅亡へと向かうかもしれない。
だが、その使命を彼女が負っていなかったとしても、同じだ。怒りっぽくて負けず嫌いで騙されやすくて猪突猛進型の正義感の塊の彼女を……死なせたくはなかった。
自分の魔力のつきるその時まで、全てを彼女に捧げようとナーダは決意した。
「アジャンは近隣の村へ戻れと言っていましたが……私としては、ここに仮小屋を建ててその中に五日籠もりたいと思うのですが、どうでしょうか？」
「え？」と、シャオロン。
「女勇者が無力となった以上、魔族の襲撃があると思うのです。大魔王を倒せる唯一の人間を葬ろうと、それこそ数にものをいわせて襲ってくるのではないかと」
「……そうですね」
「村人を守りつつ、セレスを護衛するなど、無理です。なにせ、私、戦闘では役立たずになっちゃいますから」
武闘僧は苦笑を浮かべた。
「私、魔力のほとんどをセレスに注ぐつもりなので浄化魔法を使う余力はありませんし、セレスからあまり離れられないのです。距離が開くほど身体機能維持の魔法がかかりづらくなるからです。セレスにべったりくっついているとなると、格闘も制限されるわけです。シャオロン……申し訳ありませんが、これから五日、ここでセレスと私を守ってくれませんか？」
「ナーダ様……」
「孤立無援の広野で次々とわいてくる魔族を倒すのです。結界魔法を張って魔族を遠ざける手は打ちますんで、全部を倒す必要はあり

ませんがね」
「結界って……ナーダ様、大丈夫なんですか？　徹夜でセレス様の体に魔法をかけ続けて、その上、結界だなんて……」
　少年は口ごもった。魔法が全く使えない自分が口惜しかった。
「大丈夫です」
　ナーダは左手を見せた。王族の衣装の上につけた黒い装甲、その先の手首には腕輪が銀色に輝いてる。
「コレがありますから、結界を張るのにさほど魔力はいりません。五日、私はセレスの体も結界も維持してみせますよ」
「はい……」
「ですが、魔が増えすぎると結界の効力が弱まります。定期的に数を減らしてもらわねば困るのです。魔族退治、頼んでもいいですか？」
「はい！」
　武闘僧は周囲を見渡し、少年も共に視線を動かした。東、北、西の広野の先には針葉樹の森があり、更にその先に山々が見える。南には凍った河があり、その先も森であり山だ。森の中に狩猟の民のパーティや村もあったが、どの方角に向かっても二日から三日かけねば街に行き着けない。周囲の助けなど、まったく期待できない場所なのだ。
　少年は拳を握り締め、元気良く言った。
「守るべき人がお二人だけの方が、オレも戦いやすいです！　ここでアジャンさん達の帰りを待ちましょう！　魔族が襲撃してきたら、オレが倒します！　オレは自由に動き回れますから！」
　誓いを立てるかのように、少年は右の『龍の爪』を顔の前にかざした。
「力の限りがんばります！　お二人に魔を近づけさせません！　何があってもお守りします！」
「ありがとう、シャオロン。頼りにしていますよ」
　キリリと顔をひきしめる少年。

シャオロンは思った。自分には、ナーダのような魔法も知恵もなく、アジャンのような仲間を守りきる強さもなく、ジライのような世慣れた経験もなく情報収集をする能力も無い。

できるのは……仲間を信じ、戦うことだけ……

アジャンやジライは、セレスを救う手立てを見つけて、帰って来る。

必ず、帰って来る。

それまで、セレスやナーダを守り戦い続けるのだ。

迷いの消えた少年の表情は、紛れもなく戦士のもの。子供らしさ、あやうさ、かよわさは微塵もなかった。

体術で仲間から距離を開いた忍者ジライは、霧氷も美しい冬の森の中で、上衣を脱ぎ、手甲や鎖帷子も外し、白い上半身を寒気に晒していた。

言いつけに背く事を心の中で何度も主人（セレス）に詫び、ジライは左手の甲を小刀で傷つけた。甲より流れ出る血で右の二の指を濡らし、己の体に血文字を書いてゆく。

邪法は魔族が人に与えた邪悪な魔法。術師を破滅に追いやる道を必ず含んでいる、邪な魔法なのだ。ジライが邪法によって滅びる様を見たくない、そう願った女勇者の為にジライは邪法を捨てた。もう二度と使わないと、セレスに誓っていた。大魔王教の神官戦士長に匹敵する才を封じ続けていたのだ。

けれども、今、セレスにかけられた邪法を解く為に、手段など選んで入られない。五日しかないのだ。呪の種類を解き明かすにしろ、必要なものを手に入れるにしろ、人の身でできる事には限界がある。魔の力を借りねば、自分ではセレスを救えない。

その結果、己の命を捨てる事となっても、セレスの怒りを買って従者の任を解かれる事となっても良かった。

セレスさえ無事ならば……

彼女が再び目覚め、生きてくれるのなら……

自分がどうなろうが構わなかった。

複雑な印を何種類も両手で結び、呪文を詠唱し、ジライは気を高めた。

ジライの目の前の空が振動する。ジライの眼には何も見えないが、この世の神秘を見通せる眼を持つ者ならば、見えた事だろう。この世と別次元を繋ぐ扉が開かれたのが……

空より流れ出る黒の気を感じながら、ジライは黒の気を召喚した術師として、挑むようにそれらに契約をもちかけた。

「我が両手、我が両足、我が体、我が両目、我が両耳、我が口を貸し与える！　黒きものよ、我に憑け！　我が生命を糧として、この世に現われよ！　期限は五日！　五日後にきさまらとの契約は切れる！　だが、その前に我が魂を喰らい尽くせば、この体、きさまらのものぞ！　今世の勇者の従者の肉体じゃ！　『ムラクモ』の使い手の体、欲しゅうはないか？」

ねっとりとした闇が、ジライの体に絡みつく。体中の気穴から、それがぬるりと入ってくるおぞましさ……全身の気が総毛立ち、ぞくぞくと悪寒が走った。

次元の扉は閉まった。現われた魔族は全て、ジライの内に入り込んだ。ジライは口の端を歪め、笑みを浮かべた。その切れ長の瞳を赤く染めながら。

ジライは満足した。大魔王四天王ほど強力なヤツは呼び出せなかったが、そこそこ能力のあるモノを召喚できたようだ。体中に力が漲っている。魔族の能力――移動魔法・攻撃魔法・暗黒魔法が使用できるようになった。体も通常の攻撃では傷一つつかない、不死身の体となっている。

しかし、内なる魔族が絶えず生命力を吸い続けているので、時が経つに従って体力は衰えてゆく。体力ばかりか気力まで衰えれば、最期だ。魔族に体を奪われ、魂を喰らわれてしまうだろう。

又、この体は浄化魔法や聖なる武器には無力。一撃でも聖なる力

を浴びれば、内なる魔族と共に果て、一握の塩だけを残しこの世から消滅する運命となった。聖職者や聖なる武器の使い手との接触は命取りとなる。

（セレス様……）

愛しい女主人の面影を心に浮かべ、忍者装束を調える。

（この命、尽きようとも、必ずやお助けいたします）

魔力を高め、ジライは移動魔法で姿を消した。

五日で全てを終わらせねばならない。まずは、西へ向かうのだ……

空を舞う乙女達が笑っている。銀の髪、人ならざる美貌、凍える息の、冬の化身。彼女等の甲高い笑い声が人の耳には風の音に聞こえるはずだ。

乙女達は、皆、西の方角を指差していた。

西に向かえと、シャーマン――アジャンに教えていた。

凍った河を離れ、犬橇を操り、西へと向かう。乙女達は風に乗って何処までもついて来る。森にさしかかると、木々の間から人とも獣とも植物ともつかぬモノが顔を覗かせ、やはり西を指差した。

自然と礼の言葉が口に上った。乙女達は狂ったように飛び交って歌うように笑い、森の生き物達が木の上を跳ね回る。こちらの言葉が通じたようだ。

これほど人ならざるものが見えるのは、アジャンには珍しかった。いつもは何かが自然と共にあるのはわかるのだ。けれども、それは漠然としすぎていて普段であればアジャンの目では見えていてもあまり形を捉えられない。

それが、はっきりと見えるのだ……

まるで親父のようだと、アジャンは口元に笑みを浮かべた。

シャーマン王アジクラボルトは、常に、人の眼には映らぬものを見て、彼等と語らっていた。それは、時には、先祖の霊であり、精霊と呼ばれるものであり、神に近い高次元な存在だったりした。

父と会話をしているうちに、何時の間にか会話が噛みあわなくなり、父が別人に変わったのだと気づく事もよくあった。何の儀式も魔法もなく、父は日常的に交霊や降霊をしていた。

それができる者こそがシャーマンであり、シャーマンならば誰しも苦もなく器になれるのだと子供の頃は思いこんでいたのだが……その後の逃亡生活でも、傭兵として戦場に身を置いた日々でも、そんな事をできる人間は一人としていなかった。

父だけが特別だったのだ。

父のみが真のシャーマンだったのだ。

そう思ってきたアジャンにとって、セレスとの旅は時に不愉快なものとなった。

何の儀式も魔法も無く、シャオロンの父や古えの神主――彼等の魂を自分が受け入れ、器となったなど……認めたくはなかった。

シャーマンの才は神からの贈り物だ。アジの神を捨てた自分にそんな高い能力があるはずはない、あってはいけない、そう思っていた。

だが、『極光の剣』を得た事で、アジャンも変わった。『極光の剣』からは、多くの偉大な魂を感じる。先祖の霊が剣を通し、自分を守護しているのだ。

心情的に納得はできなくても、父アジクラボルトのシャーマン能力は正しくアジャンにも受け継がれている。

有るものならば……利用しなければ、損だ。

セレス救出の為に、シャーマンの才を使うのだ。

精神を研ぎ澄まして。

更に西へ……アジャンは体の中から響く声に従い、冬の乙女達と共に西に向かった。

五つの道　1日目（2）

「納得できませぬ！」

広野に建てられたのは、移動式仮小屋だ。中心に炉をもうけ、細く長い枝で三本の支柱を作り、その支柱にトナカイの毛皮を貼り付けただけの簡素な造りだが、現地人が狩りの時に用いているだけあって保温性に優れている。その中で老忍者ガルバは声を荒げた。彼の背後には二人の忍ヤルーとクルグが控えていた。

「ここに小屋を張るのすら我慢できませんのに……周囲に人の目がないこの地では魔族は躊躇なく仕掛けてきます。激戦となりましょう……なのに」

紺色の兜と口布、チュニックとズボンからなら忍装束。かつてインディラ一と謳われた忍者は、責めるように主人を見つめた。

「サヴォンオラヴィへ向かえとは、あまりにも無体にございます。何ゆえ、我らをお側においてくださらぬのです？　我らでは足手纏いとお考えなのですか？」

老忍者と対する主人（ナーダ）は、女勇者が眠る簡易寝台の側に腰かけていた。その横に、口を真一文字に結んだ少年がただずんでいる。ナーダは溜息をつき、三十年もの長い間、自分を守り続けてくれている老人を見つめた。

「違います。適材適所をもっての考えです。あなた方忍には、忍にしかできない仕事をしてもらいたいのです」

「……」

「ルゴラゾグス王に救援を求めてください。身軽なあなた方なら、五日よりも前にサヴォンオラヴィに戻れるでしょう？　私の魔力は五日かそこらで尽きます。五日のうちに、アジャン達の活躍でセレスが起きてくだされればいいのですけれどね、そうでなければ魔力が尽きた私の代わりにセレスの体を維持する人間が必要です。回復・治癒魔法の使い手を派遣してもらってください」

「それぐらいでしたら、鳥にて街に居る部下達と連絡をとればすむこと。ムジャがカスベルに居ります。あの街ならば魔術師協会がございます。明日か遅くとも明後日には移動魔法にてサヴォンオラヴィに着けましょう」
「そうですか。それは嬉しい」
「王宮との連絡はムジャらに任せておけば間違いはございませぬ。我らはこのまま御身様の護衛にお残しください」
「そうはいきません。ここが魔族だらけになる前に、近隣の村々をまわって注意を促してください。ここが戦場となれば、どこまで被害が広がるかわからないのです」
「御身様！」
「それに、私達が乗ってきた犬橇、あれもここに置いておくわけにはいきません。結界は必要最小限の大きさにしたいのです。この仮小屋より大きくはしたくありません。犬橇に乗ってあなた方は移動してください」
「わかりました……村々への警告と荷物の移動はお引き受けいたします。なれど、それに全員をさく必要はございませぬな」
老忍者は背後の部下へと振り返った。
「ヤルー、わしはここに残る。後の指揮はおまえに任せた」
ナーダの影武者忍者が答えを返す前に、主人が口をはさむ。
「いいえ、ガルバ、あなたもここを立ち去ってください」
「私ごとき小柄な老人、この小屋の隅におっても邪魔ではございませんでしょう？　私だけはお側に残ります」
「いけません！　行きなさい！」
「聞けませぬ！　私は御身様をお守りする為に生きておるのです！　ただその為にこの年まで長らえてきたのです！　このような危険な地に主人を残して行けましょうか？」
「ガルバ！」
「何と言われようと、私はここに留まります」
ふぅぅと、ナーダが息を吐く。

「馬鹿ですねえ……ここにあなたが残ったとして、何の役に立つというのです？」

その冷たい物言いに驚き顔をあげた老忍者は、侮蔑の表情を浮かべる主人を目の当たりにした。

「せっかく言葉を飾ってあげたのに、仕方ありませんからはっきり言います。神聖魔法も唱えられなければ聖なる武器も使えないあなたでは、残ってもらっても魔族との戦いでは足手纏い。シャオロンの邪魔になるだけです。ここから早く居なくなってください」

「御身様……」

茫然と主人を見つめる老忍者。

シャオロンも瞳を凝らし、武闘僧を見つめた。過剰な愛情をふりまく老忍者を煙たがってはいたが、ナーダは常日頃から老人を大切にしていた。まるで実の祖父に対するかのように。それを……

「さあ。一刻も早く出かけてください。セレスが亡くなれば、この世は闇に満ちてしまいます」

「……」

「ガルバ、私達の力が及ばずセレスを救えなかった時は、部下を率いてインディラに戻ってください。私の安否確認は必要ありません。セレスが亡くなるような事態ともなれば、まず間違いなく私もこの世にいないでしょうから。大僧正様に全てをお話して、御力にすがるのですよ。良いですね？」

「……」

兜と口布の下の消沈しきっていた顔が……ニヤリと笑みに崩れる。

そういう事か、と。部下を死地から遠ざける為、主人は悪役を演じるつもりなのかと。

老人の声がふてぶてしいものと変わる。

「それは聞けませぬ。私はここに残ります故」

「ガルバ！」

「なるほど。確かに私めは魔族を斬れませぬ。なれど、戦うばかりが仕事ではございませぬでしょう。皆様方の身の回りのお世話、周

囲の監視はこの私にお任せください」
「ガルバ！」
「戦闘はシャオロン殿がなさるのでしょう？　シャオロン殿には充分な休息も必要。雑用などで煩わせては、体も休まりませぬ。又、お二人だけではシャオロン殿も気を張りすぎ、眠る事すらかなわなくなりかねません。五日間、私が不眠不休で周囲を見張り続けます。老いたりとはいえ、私の眼も耳も、お二人よりも優れております。御身様は女勇者様の治療に、シャオロン殿はいざという時の戦闘に専念なさいませ」
「いけません！　あなた」
「ナーダ様、ガルバさんには残っていただきましょう」
怒気で顔を赤く染めた武闘僧に、少年がにっこりと微笑みかける。
「ガルバさんのおっしゃるとおりです。二人っきりでセレス様の護衛を続けたら、オレ達、疲れちゃいますよ」
「ですが」
「それに……」
簡易寝台の上のまるで眠っているかのような女勇者を、シャオロンは寂しそうに見つめた。
「さっきナーダ様がおっしゃったような命令をセレス様からされたら……オレだって逆らいます。ナーダ様、お仕えしている方が死地に赴くのなら、共に赴き、その方をお守りする。それが従者じゃないんですか？」
「シャオロン……」
「シャオロン殿……」
武闘僧と老忍者の視線を痛いほど感じ、少年はうつむき、頬を赤く染めた。
「あの、その、生意気言ってすみません」
「……いいえ」
ナーダは困ったように笑みを浮かべた。
「あなたに教えられました……ありがとう、シャオロン」

そこでコホンと咳払いをしてから、
「ガルバ、私とシャオロンの援助役（サポート）としてここに残ります？」
と、老人の顔を見もしないで尋ねた。
老忍者は嬉しそうに頷いた。
「は。ありがとうございます」
「……死ぬかもしれませんよ」
「もとよりこの命、捨てております！」
「そ～じゃなくって、あなたに何かあった時の用心をしておいてくださいって事です」
「あ！　二時間、いえ、一時間ほどお時間をください。鳥にてムジャ達と連絡をとり、ヤルーに幾つか指示を残します」
老忍者はナーダに頭を下げ、シャオロンに対し小声で礼を述べてから、背後の部下達に向き直り何事かを話し始めた。
と、そこへ……
「失礼いたします」
中年くノ一マリーがローラを従え大量の布の山を抱えて現われる。
どれも、長方形に同じ長さに切りそろえられているようだ。
「頭領。準備、整いました」
「ご苦労」
老忍者はそれを受け取り、主人に対し頭を下げた。
「御身様、身体機能維持の魔法は女勇者様と接触せずとも可能でございましょうか？」
「可能ですが、あまり離れすぎると術の効果が弱まるので、くっついていた方がいいですね」
「五分ほど、仮小屋の外へ移動する事は？」
「私が仮小屋の外へ？」
「はい」
「まあ、それぐらいの距離なら離れても、魔法はかけられますが……何でです？」
「これから我らが行う事は、御身様とシャオロン殿には目の毒かと

思われますので」
「？」
老忍者ガルバの目配せで、中年くノ一マリーが畏まって説明する。
「私、女勇者様より、いざという時の用心に、お召しの神聖鎧の着脱の方法を教わっております。女勇者様の右手を人体のある箇所に当て、特定の呪文を唱えればよいのです。第三者が唱えても女勇者様が一分間、否を唱えなければ、鎧の着脱は可能なのです」
「はあ」
「この緊急事態にあたって、この呪文を頭領にのみお伝えしようかと思います」
「何の為にです？」
くノ一マリーは、淡々と答えた。
「お下のお世話の為です」
「……」
ナーダが硬直し、東国の少年がびっくりと目を見開く。クルグもきまりわるそうに、そっぽを向いている。ヤルーのみ平然としていたが。
自分の言葉が周囲にもたらす影響が多大であるとわかっているだけに、マリーはつとめて事務的に必要な事を説明した。
「今後飲食をなさらないのだとしても、今朝から昼にかけてお召し上がりになったモノが既に女勇者様の体内にございます。排泄は人体の仕組みです。止めようもございません」
「そ……その通りですね」
「最長、五日もの間、老廃物と共にあるのもお気の毒ですし、お若い女性である女勇者様のお気持ちを思えば、ナーダ様やシャオロン殿がサラシの交換をなさるのは酷かと存じます。女性の大切な場所を隠せませんから」
「まったくもってその通りです！」
ナーダは顔を真っ青にし、それとは逆にシャオロンはゆでタコのように顔を真っ赤にしていた。

老忍者が畳み掛けるように言う。
「その点、私は枯れた老人にございます。下半身が不随となった部下のくノ一の看護をした事もございますゆえ、女性の下の世話にも慣れております」
「わかりました！」
吐き気をもよおしかけていたが平静な顔をつくって、ナーダは席を立った。医療奉仕として、入滅近い老人の下の世話をした経験はあった。しかし、うら若い乙女の下半身など、絶対、目にしたくなかった。吐き気とめまいのあまり、卒倒しかねない……
「しばらく外に出ましょう、シャオロン。ヤルー、クルグあなた方もです」
「はい！」
「は」
「は」
真っ赤な顔で、少年は口から鼻にかけてを押さえていた。セレスの『女性の大切な場所』を想像したせいだ。具体的にはどんな形か知らないそこは、少年にとって神秘の場所だった。
仮小屋から去りかけた主人に、老忍者が茶目っけたっぷりに言う。
「御身様、私をここに残す事にして、正解にございましょう？」
それに対しては、キッ！と糸目で睨みつけただけで、武闘僧は外へ出て行った。

「あんた、北方に行ったんじゃなかったのか？」
西はエウロペから東はインディラまで、幅広く情報を集めているユーラティアス大陸一の情報屋グジャラは、目の前の人物を探るように見つめた。
黒の忍者装束の忍。忍の里の抜け忍（にん）ジライ。忍の里一の忍者だったジライはグジャラにとってお得意様であり、知己。魔薬指導員と

して、一時期、その白い体を自由に扱ったことすらある仲。憎からず思っている相手の突然の来訪だ。嬉しい事は嬉しいのだが……グジャラは警戒心を解かなかった。女勇者の従者として北方に居るはずのジライがここに居るのはおかしい。

ここ、南国エーゲラに……

エーゲラの自分の店の支店に麻薬中毒の女を連れ込み、グジャラは遊びに興じていた。誰にも会わない、誰も取り次ぐなと部下に命じてあったのだが……

寝室に昔馴染みの忍者が無言で現われたのだ。仕方なく情事をきりあげ、応接室に客（ジライ）を連れて行った情報屋の元締めは不機嫌だった。

「そうむくれるな。あの程度のおなご、おまえの側にはゴロゴロしておるであろう？　又、拾ってくればいい」

「あんたなあ……」

「我には時間がないのだ。働け。ただでさえ、きさまには無駄足を踏まされておる。インディラに戻っておるかと思って本店を訪ねたのじゃが、情報屋の元締め様は南国で休養中と言われたわ」

「……あんた、インディラからここに来たのか？」

インディラとエーゲラの間には、ペリシャ・トゥルクの二カ国が位置している。砂漠の覆い乾燥した土地だ。暑さが比較的穏やかな冬とはいえ、通常の交通手段では移動に一ヶ月以上かかる。移動魔法のような高等魔法を忍者が使えるはずはない。おそらく、魔術師協会の移動魔法システムを利用したのだろうが……

覆面をしていてもそこから覗く黒の鋭い瞳、低い声、高圧的な物言い、傲慢な態度は、確かにジライのもの。誰かの変装とは思われなかった。しかし……

何かがおかしかった。

「覆面、外してくれねえか？」

相手を睨みながら、グジャラは言った。

「俺から情報を買いたいんなら、覆面を外してあんたの綺麗な顔を見せてくれ」

「む？」
覆面の忍者は首を傾げた。
「言っておくが、今日は金がある。宝石を売りさばき、換金してきた。足りるはずだ。それでも足りぬのなら、大僧正候補様にツケておけ。我は忙しい。体を代価にする気はないぞ」
「寝る気はない。良いから外せよ。それとも、外せない理由でもあるのか？」
「……」
無言のまま忍者は覆面を外した。
白髪、白い肌の整った白子の顔が現われる。長い前髪は後ろに撫でつけるように額当てで止められているので、刃のように鋭い両の眼が露だ。
「う」
グジャラは喉を詰まらせ、後ずさり、壁にぶつかった。口髭も見事な二枚目の顔を恐怖に歪めながら。
「あんた……何した？」
「む？」
「何かヤバい事に手を出したんだろ？　真っ黒じぇねえか！」
「……」
ジライはまじまじと相手を見つめた。白い頬をポリポリと掻きながら。
「神官の才があったとは意外じゃな」
「来るな！　それ以上、俺に近寄るな！　ひどいぞ……あんたの顔……闇だらけだ」
「ふむ。麻薬が精神拡張に役立つという話、ホラかと思っておったが、きさまを見る限り、まんざら嘘でもなさそうじゃのう」
表の商売の品（魔薬）を溺れぬ程度にたしなんでいるグジャラには、ジライに憑いている魔族がおぼろげに見えるようだ。もっとも素顔を見なければわからないというのだから、さほど強い能力ではないが。

「実は、この体に、今、魔を憑かせておる」
気づかれたのなら、取り繕う必要はない。ジライは幻術を解き、目の色を赤に戻した。魔族に憑依されている今、この色が地色なのだ。
「情報を買いたい。大魔王教の聖書の在り処、きさまならば知ってるであろう？」
「大魔王教の聖書？　この世に三冊しか現存してねえって闇の聖書か」
ぶるぶると震えながら、グジャラは唾を飲み込んだ。
「それなら……調べなくても頭に入っている。先日、情報の仲介を頼まれたばっかなんでな」
「ほう」
「……まずは金を改めさせてもらうぜ。情報を売るかどうかは額次第だ。て、こら、近寄る！　金袋を投げて寄越せ！　あんたはそこから動くな！」
床に投げ落とされた金袋を拾い、情報屋は中を確かめ強張った顔で頷いた。
「充分だ。ツリが出るくらいだ。他に知りたい事があったら、サービスで教えてやるぜ」
「魔憑つきの男にも情報を売ってくれるのか？　助かる」
「前にも言ったろう、ジライ。俺の店は誰にでも情報を売る。忍者にも、軍隊にも、大魔王教徒にも、寺院にも、抜け忍にも、な。それに魔族が加わったって、どって事ねえさ」
にやっと不敵な笑みをみせる男に、忍者は尋ねた。
「……グジャラ、サービスとやらでカルヴェル様の居場所、教えてもらえるか？」
「カルヴェル？　大魔術師様か？　あぁ……すまん、ジライ、あの御方の現在地は世界中の情報を握る俺にもわからない。なにしろ、大魔術師だからなあ。移動魔法であっちこっち渡り歩くし、異空間に籠もる事もある。並みの人間じゃ行けない水中や空に居る事もあ

る。お手上げだ」
「……おまえの店を訪ねる前に、カルヴェル様の城を訪れたのだが、いらっしゃらなかったのだ」
ジライは溜息をついた。
千里眼の魔法でセレスの危機を見たのなら、カルヴェルはセレス救出の為に、今、動いているはずだ。しかし、カルヴェルとて万能ではないし、常に千里眼を使っているわけでもない。事件に気づいていない可能性もある。
ジライはカルヴェルの城の『門』にあたる壁の前の地面に、『セレス危機』の矢文を残して来た。他にもアテを訪ね、伝言を残してある。カルヴェルがこの世界に居るのなら、間もなく連絡がつくだろう。異空間に籠もられているのなら、お手上げだが。
「サービスについては後で考えよう。まずは大魔王の聖書の情報を聞かせてくれ」
「闇の聖書は遥か昔、初代ケルベゾールドが己の四人の従者、つまり、当時の四天王に与えた魔法の書。暗黒魔法のアンチョコだ。ケルベゾールドが生み出した暗黒魔法の全てがそれに記されているんで、昔から大魔王教徒どもはこぞってその希書を手に入れようとした。なにせ、大魔王の聖書は人の手では決して写せない魔法の書。文字にした途端、文字が具現化して逃げちまうってやっかいなシロモノだ。暗黒魔法の秘儀を手に入れたい奴は、四冊しかない貴重な本を命がけで手に入れなきゃいけねえ」
「そんな事は知っている。我が知りたいのは、その四冊の行方じゃ。現在は誰が所有しておる？」
「聖書の中身は皆、同じだそうだが、最初の所有者の四天王の格づけから、一の子分グラウスの本が一の書、二の子分ディウスのが二の書、三の子分ゼグスのが三の書、四の子分ウインゼのが四の書と呼ばれている。で、そのうちの三の書だが、約三百年前に消滅している。三の書を使って邪龍を操っていた神官ごと、七代目勇者ロイドが『勇者の剣』でぶった斬ったんだ。つまり、三の書は現存して

いない」
「残りは？」
「二の書は、三十六年前、先代勇者ランツがシャイナの大魔王教団から奪っている」
「……勇者ランツが、か」
「僧侶ナラカの手に渡ったとも、大魔術師カルヴェルが貰ったとも言われている。が、はっきりしない。まあ、インディラの総本山で浄化されたって情報もねえから、おそらく大魔術師様が所有なさってるんだろうね」
「……」
「一の書は、今世の、大魔王降臨に使われた。おととし、自分の体にケルベゾールドを降ろしたのは、シルクドの魔法使い。一流半の実力の持ち主だった男だ。大魔王降臨の儀式のアンチョコとして用いた本を、多分、ケルベゾールドをその身に降ろした今も、そのまま所有しているはずだ」
「……おまえの情報網をもってしても、ケルベゾールドの現在地はわからんのであったな？」
「ああ。大魔術師様の居場所が掴めないのと同じ理由だ。大魔王は異次元通路を使って世界中に出没している。人の身じゃ、その動きは追いきれん。それに、大魔王の現在の本拠地の情報はおおよそ掴んじゃいるが……相手が誰であろうが売る気はない」
情報屋の元締めは肩をすくめた。
「俺としても命は惜しいんで、ね。節度ある情報漏えいを心がけている」
「……サービスのネタ、それにしてもよいか？」
「ん？」
「きさまが漏らしても構わぬと思っている範囲でよい。大魔王の憑代に関する情報を教えてくれ」
「たいした事は話せんぜ」
「構わぬさ。各国・各宗教団体とて未だに憑代については何も掴め

ておらぬのだ。どこの国の人間だったのか、その名前すらも、な。さすがは大陸一の情報屋じゃな」
「おだてても、情報量は変わらないぜ」
「わかっておるわ。さて、話を戻す。一の書が手に入らぬ所にある事はわかった。残る四の書の在り処を教えてくれ」
「……それなんだがな」
グジャラはオールバックの黒髪を、気障な仕草で撫で付けた。
「四の書は、あんたの鬼門にある」
「む？」
「俺は四の書の現在の所有者の依頼で、先日、情報の仲介をした。ようするに、大魔王教徒のそれなりの実力者達に、そいつが四の書を持っているという情報をもっともらしく流してやったんだ。現在の所有者は四の書を手放したがっている。まあ、天文学的な金を積めば大魔王教団以外の奴にも売ってくれるかもしれんが……何があっても、あんたにだけは売らないだろう」
「……」
「おととしの秋まで、四の書は、とある国の大魔王教団が所有していたんだが、そこを女勇者様が壊滅させちまったんで、四の書は一神官の手に渡り、その後、持ち主を転々とし、今は、その国の闇の世界の顔役の手にある。つまり……」
「……」
ジライは赤い瞳を細め、眉をしかめ、グジャラの次の言葉を待った。聞かなくとも、答えはわかっていたが。
「四の書は、ジャポネの忍の里にある。忍者頭、ようするに、あんたの父親が現在の所有者なのさ」
「痩せたのぅ、おぬし」
「けど、ムスコはまだ精力旺盛だぜ。毎日、ビンビンしてやがる」

おじいさまの、おっきな、おこえ。
おじいさま、ゆうしゃのまに、いらっしゃった。
ゆうしゃさまのエが、いっぱいのおへや。ここか、おへやにいけば、おじいさまにあえる。
「お？　どうした、子猫ちゃん、クサイ、クサイって俺から逃げたばっかなのに、もう戻って来たのか？」
つかまっちゃった。
だっこ。
おヒゲ、じょりじょり。
くすぐったい。
おサケくさい。
キャアキャアわらった。
「エリス様の面影があるのう」
おきゃくさまの、おじいちゃん。
ニコニコわらってる。
「だろ？　将来、絶対、別嬪になるぜ。なあ、セレス、おっきくなったら、俺とデートしてくれるんだよなよ」
「はぁい。セレス、おじいさまと、オ×コしてぶっとい×××でグリグリしてもらって、×××るのぉ」
「おぬし……幼児に何を教えておるのじゃ？」
「へへへ、興奮するだろ？」
「するか！」
おじいさまのエがある。
おじいさまと、エリスおばあさま、ふたりのエ。
「毎日、頑張ったんだが……結局、あの占いババアの言う通りになりそうだ。俺の子供はサリアだけ……。俺の血を引くのは、サリアとこのセレスと、その上のアリシアだけだ。アリシアはな……何処が悪いってわけじゃないんだが、体が弱い。すぐに熱を出す。サリアの小さいころ、そっくりだ」
「……無理をさせるわけにはいかぬということか」

「ああ……その点、子猫ちゃんは元気いっぱいだ。今日も俺と木登りしたんだぜ」
おヒゲ、じょりじょり。
いやん、くすぐったい！
「……選択の余地はない。あのクソったれとも話した。女なんかに触れられたらおぞましくって雷落としそうだが、俺の顔を立てて我慢してくださるとさ」
「あやつはおまえに惚れておるからな……おまえの最期の頼みならば聞くであろう」
「ふん。まだもうちょい足掻く。クタバるまで女を抱き続けるさ」
しつこぉい！
また、じょりじょり！
「俺は……世の中なんざどうでもいいんだ。エリスの血を引くこいつらさえ幸せなら……セレスを『勇者』になんかしたくねえのに」
「『勇者』がおらねば、大魔王復活後、今世は滅びる。おまえの可愛い娘も孫も、皆、死ぬのだぞ」
「わかってる！　けどな、わかってもヤなんだよ！　大魔王が復活しちまったら、今度はセレスが……俺の可愛い愛しいサファイアが……」
「……こういう時こそ、義弟を頼れ、ランツよ」
「あん？」
「わしはおまえと約束した。次に大魔王が復活しそして今世から消え去る時まで必ず生きていると……延命の邪法を使ってでも生き延びるとな。おぬしの可愛い孫はわしが見守ろう」
「……カルヴェル」
「エリス殿の血を引く子らには光の道だけを歩ませればよい。汚い事は、皆、わしがひきうけてやるわい。そういうのも、わし、得意じゃしの」
おじいさま、へんなかお。
おかおが、ぴくぴくしてるぅ。

「わしがおるのじゃ。大魔王討伐後に『勇者』に何が起きるか、その子に、教える必要もあるまい。ヤンセンともよう話す。『勇者の悲惨な歴史』を教えず育ててやればよい。ただの守り手のまま次代に剣を渡せればよし、その子が『勇者』とならねばならなくなったら、わしが全力でその子を守ろう」

「絶対だな？」

びっくりしたぁ。

おっきな、おこえ。

「絶対、その言葉、守るな？　嘘つきやがったら、地獄からでも舞い戻って、てめえの顔、ひんまがるほどぶん殴ってやる」

「ホホホ。せめて『天国から舞い戻る』と言え、勇者殿。約束するぞ、ランツ……今度こそ、わしが『勇者』を守ろう。だから……安心してクタバってよいぞ」

五つの道　2日目

子供が胎児のように体を丸め、眠っている。水中にいるかのように癖のある長い金の髪を宙に靡かせながら。

生まれたままの姿だ。膨らみのない平坦な胸。健康そうだが細い体。たよりない手足……

あどけない、かわいらしい顔だ。ふっくらとした頬が幼さを際立たせている。

子供は眠っている。

穏やかな顔で。

子供の周囲は球形にキラキラとまばゆく輝いていた。新雪に光が当たったかのような眩しさだ。

けれども、その球の外は……

闇と瘴気に満ちていた。

空も大地も海も無い、闇だけが広がる空間。生きとし生けるものは、存在しない。そこで蠢いているのは、魔族だけなのだ。

闇と魔は判じ難い。何処からが闇で何処からが魔なのか……

黒の霧とも靄とも思える形の無い魔物達が、さながら砂糖に群がる蟻のように、光に吸い寄せられ群がってゆく。光の中の子供を喰らおうとして。

光球に触れると、魔は形を散じ、消滅する。光球が放つ光は浄化の光なのだ。

近づけば浄化されるとわかっているのかいないのか、魔族はひたすら子供を目指す。次から次へと代わる代わる子供に近寄り、消滅してゆく。

大波のごとく襲い来る黒の気……

子供を守る光球を食い破ろうと、魔族が押し寄せている……

果てる事なく……

赤毛の傭兵アジャンは瞼を開け、寝袋から体を起こした。
彼を主人と認め彼の周囲を取り囲むように丸まっていた犬達が、主人の動きに気づき頭を上げる。
手近にいた黒と白のブチ犬の頭をポンポンと軽く叩いてから、赤毛の戦士は『極光の剣』を背負い、旅立ちの準備を始めた。
三本の白樺の枝で支柱を作り、周囲にトナカイの毛皮を巻きつけただけの簡易テント。テントの中の休憩も終わりだ。もう夜明けの時間。
二日目の朝となったのだ。
再び西を目指さねば……
炉の火を消しながら、アジャンは思った。
夢は、真実を見抜くシャーマンの血が見せたものだろう。夢は教えてくれた、セレスの生存を。
光球に守られ、セレスは闇の世界を漂っていた。魂が喰らわれていない以上、復活は可能だ。彼女の魂を狙う魔族に周囲を囲まれている危険な状態ではあったが、アジャンが辿り着くまであの光球が彼女を守り続けるだろう。
あの闇の世界は……魔界なのだろうか？
闇のものはセレスを狙い、襲いかかり、光に呑まれ、消滅していた。
あの世界で浄化されると、どうなるのだろうか？
この世で浄化された場合、魔族は魔界に強制送還されるだけだ。聖なる武器や神聖魔法で浄化できるのは、魔族と憑代との縁だけなのだ。
しかし、あの世界では魔は何にも憑依していなかった。
あそこで死ねば、完全なる消滅……真の死となるような気がした。根拠はないが、そう思った。
だが、そうだとしても、魔は死を恐れていなかった。大魔王を滅ぼせる唯一の存在『勇者』を喰らうべく、突進を続けていた。光球

の威力を弱める為に……
何千何万何億の魔を浄化し続ければ、いつかは、光球も、その守護の力を失うかもしれない。
いつかは女勇者の元に、魔の手が届くかもしれない……
一刻も早く彼女の元に辿り着き、彼女を解放してやる。それが自分の役割なのだろう。
（しかし……）
夢を思い出し、赤毛の戦士は苦笑を浮かべた。
（ガキだったな……）
夢の中のセレスの魂は、子供の姿をしていた。
手足は短く、胸はぺったんこ、お腹もぽっちゃりしていた。
三～五歳といったところだろう。
（ガキみてぇに無垢ってことかよ……）
わけもわからず苛立ち、舌打ちを漏らす。
テントをめくり外を見ると、雪風となって宙を舞う銀の髪の乙女達が嬉しそうに集まって来た。冬の化身の乙女達は一斉に西を指差した。
ケルティの方角を……

「ほら、あの子供が……」

「あの細い子供が？　勇者？　本当に？」

「『勇者の剣』を背負ったら潰れてしまいそうですね」

「先代勇者ランツ様は七つからあの剣を振るえたそうですが、あの子は剣に触れる事すらできないとか」

「まあ、女ですからなあ」

「今、ケルベゾールドが復活したら、この世は終わりですね」

人前に出るのはきらい……

みんな、冷たい目で見るんだもの……

名ばかりの勇者なのは、言われなくても知ってる……

でも、しょうがないじゃない……

私しかいなかったんだから……

『勇者の剣』の守り手は、みんな、勇者。『今世の勇者』と呼ばれ、尊敬される。

けれども……

死後も勇者とされ、勇者に数えられるのはケルベゾールドを倒して、世界を救った者だけ……

ランツおじい様をふくめ、十二人しか勇者様はいない。

十二人の勇者様はすばらしい方々ばかりだった。侯爵家の歴史を家庭教師から習った。歴代勇者様のお話を聞くのは大好きだった。みなさま、すっごい冒険をして、従者仲間と助け合って、大魔王を倒したのだもの。いつも、わくわくした。

でも……

いつも、ちょっぴり悲しくもなった。

ご先祖様にあこがれて、がんばっても……

女の私は勇者になれないから……

侯爵家に男子が生まれその子が大人になるまでの間は、私は『勇者の剣』の守り手、『今世の勇者』なんだけど……

私なんか要らない気がする。

だって、『今世の勇者』なのに、一度も、『勇者の剣』に触った

事がないんだもの。
触れようとすると、みんなあわてて止める。
『勇者の剣は女を嫌う』……だから、触っては駄目なんだって……

お父様は、まずは体を鍛えなさいとおっしゃった。
「七つからあの剣を振るえたのは、ランツ様ぐらいなんだよ、セレス。あの剣は、未熟な腕の者が持つととても重たくなるそうだ。侯爵家の中には剣に認められず、生涯、『勇者の剣』を背負えなかった方もいらっしゃったとか。焦ってはいけないよ。両手剣を自在に操れるように修行を積みなさい」

お姉様は私を抱きしめておっしゃった。
「あなたが頑張ってることは私がよく知ってるわ……お願いだから、無茶して体を壊さないでちょうだい。心無い人達のそしりなんか気にしちゃいけないわ……あなたは女の子なのに……本当にとても頑張っているわ」

ボッチェおじいさん達はヤシキにいる時は、年ごろの友達のいない私とよく遊んでくれた。
「セレス嬢様、勇者ってのは、ただ腕っぷしが強けりゃいいってもんじゃありません。悪だったら、それがどんなお偉いさんだろうが叩き切る。守ると決めたらそれがどんな身分の低い女でも、娼婦だって命がけで守る。ランツ様は、そういうお方でした。まずはセレス嬢様の『正義』を見つけなせえ。その『正義』を貫く為に生きる、それが『勇者』ってもんじゃないですかぃ？」

侯爵家のみんなが、私を愛し、はげましてくれた。
でも、私はずっと私がきらいだった。
女である自分が大きらいだった。
男になりたかった……

「よくぞ、参った、女勇者セレスよ。おまえに会える日を予は心待ちにしていたのだぞ」
びっくりした。
公式な訪問じゃないけど……
信じられない。
国王へいかが玉座からおりられて、ひざまずく私の手をとってくださるなんて……
まだ八才の女の子を『勇者』と呼び、『勇者』としてもてなしてくださるなんて……
お父様といっしょにお茶の席に招かれる。
カチコチの私に、国王へいかは親しげにお声をかけてくださる。
頭がまっしろ。
何が何だか……
「そなたの祖父ランツは、予が皇太子であった頃、剣術指南の教師であった。だが、ランツは剣術ばかりでなく、もっと大切な事を予に教えてくれたのだ……王宮の中しか知らなかった予を、ランツは内緒で何度も外へ連れ出してくれた」
「外へ……」
「クリサニアのさまざまな区画に予を連れ行き、さまざまな職業の者の生活を見せてくれた。民が何を求め何を求めぬのか、民に比べ我々王侯貴族がいかに恵まれた生活をしているのか、尊敬すべき聖職者の方々の中にも残念なことに弱者に対する慈悲の心に欠ける方がいらっしゃること、市井に埋もれる才ある人間の存在、クリサニア滞在中の異国人から見たエウロペ、異国の話……王位に就く者が知らねばならない事、しかし、王宮という高みから見下ろしていては決して見えぬものをランツは予に教えてくれた」
国王陛下がやさしくほほえまれる。
「ランツが居たからこそ、今の予はある。ゆえに、今度は、予の番

じゃ。セレスよ、今世の女勇者よ、女の身で『勇者』たろうとするのは難しかろうが、そなたはこの世になくてはならぬ存在、この世の希望である。そなたの為の助力であれば、予は喜んで何でもしよう。困った時は、何なりと予に相談するがよい。そなたの成長を心待ちにしておるぞ」

涙がこぼれた。

何っておやさしい言葉……

成長を心まちにしてるだなんて……

初めて言われた……

お父様やおねえ様やヤシキのみんな以外で、私に期待をかけてくださったのは……国王へいかが初めてだった。

ハンカチで涙をぬぐう私を、国王へいかとお父様がなぐさめてくださる。

決めた。

私の『正義』が、初めて、形となった。

聖騎士になろう。

聖騎士の資格を得て近衛兵になって、国王へいかをお守りするのだ。

国王へいかは国民の声をとりあげ善政を施す名君と称えられているお方。その『正義』がランツおじい様の教えによって生まれたものならば、『正義』が悪に滅ばされぬようお守りするのが『今世の勇者』の私の役目だろう。

『勇者の剣』を持てない、ただの女だけれども……

心から強くなりたいと思った……

「……夜が明けましたね」

狭い仮小屋の中に、朝の光が漏れ入ってきている。
ナーダ、シャオロン、ガルバは大きく息をついた。今日ほど、朝日が頼もしく思えた事はない。朝の訪れと共に、闇を祓う光の力によって下級魔族の数は確実に減るはずだ。
昨日夕方から明け方にかけて、仮小屋のある広野は雲霞のごとく押し寄せる黒の気に埋め尽くされた。千とも万ともつかぬ魔族が、女勇者の肉体を狙ったのだ。
武闘僧ナーダが小屋の周囲に結界魔法を張っているので、魔が小屋の内に入り込む事はなかった。しかし、この世のものではないおぞましいもの達の声に囲まれ、迫り来る瘴気を感じながら一晩を過ごしたのだ。結界を張り続けていたナーダはもちろん、睡眠をとったはずのシャオロンでさえ疲れを感じていた。
「……行きます」
『龍の爪』を装備し、シャオロンが小屋の出入り口へと向かう。
「残ってる魔族を倒してきます。魔の数が多すぎると、結界の威力が弱まるんでしょ？　昼間のうちに数を減らして起きます」
「大丈夫ですか、シャオロン？　あなた、あまり眠れなかったのでしょう？」と、ナーダ。
「大丈夫です！　オレ、元気なのが取り柄ですから！」
疲労しているようではあったが、少年の目には力強い光があった。
「魔族はオレが倒します！　オレにできるのはそれだけだから、力いっぱい頑張ります！　ナーダ様、結界を一部解いてください！　オレ、外に出ます！」
「……可能ならば次元通路破壊を優先してください」
「はい！」
「自在に次元通路を開けられるのは高位魔族のみですし、四天王クラスでもなければ、無限に通路を開き続けるなんて真似できないはずです。通路の数が減れば、ここに現われる魔族の数自体が減ります」
「はい！　次元通路と高位魔族を狙います！」

「……ある程度の数をこなしたら、戻って来てください。いっぺんに全部やろうとはしてはいけません。通路の数も、魔族の数も多すぎます。シャオロン、冷静さを失ってはいけませんよ。疲れたらすぐに戻るのです。充分な休息をとってから、また倒しに行けばいいことですし。無謀な戦いは禁物ですよ」

「はい！　ナーダ様！」

微かに開いた結界の口から、少年は外に飛び出した。

人、動物、植物、岩、雪に憑ついた魔族達が待ち受ける外へ、と。

『龍の爪』をふるい、両手から魔を千々に砕く竜巻を生み出し、放つ。縦横無尽に魔族の間を駆け巡る竜巻の動きにあわせ、少年は雪を蹴って走った。

女勇者の肉体を狙う不埒な魔族を滅ぼす為に。

少年が外に出てすぐに老人が、主人に目配せを送ってくる。

ナーダはセレスに背を向け、目を閉ざした。沸かした湯で濡らした布を用い、老忍者がセレスを清潔にする。

まずは一日が過ぎた……後四日のうちに、全ての決着がつくことをナーダは祈った。

夜は魔の刻……

魔の能力が増幅する時間……

忍者ジライは、闇に紛れ森に潜み、眼下の盆地を見下ろしていた。

そこには原生林の暗い木々が広がっているように見える。

だが、それは幻術だ。幻の森がそこにあるべきものを覆い隠しているのだ。

盆地にあるのは、原生林ではなく、東国忍者の里なのだ。

東国忍者は、報酬次第でさまざまな仕事を世界中で請け負う。護

衛や尋ね人捜索などのまともな仕事の他に、諜報・暗殺・誘拐・騒乱・破壊活動・窃盗等さまざまな非合法活動も行う。その仕事の迅速さ正確さには定評があり、忍の里への依頼はひきをきらない。

しかし、同時に、忍の里には敵が多かった。同業者組織、聖職者、時の権力者等が、さまざまな理由で忍の里の壊滅を望み、里は数え切れぬほど襲撃されてきた。

だが、襲撃を受ける度に里の防衛機能は充実していった。物理・魔法結界が強化され、罠が見直され、警備の死角・盲点についての研究が進み、警備役の配置が吟味され、洗練された迎撃システムが整えられていった。

今では城一つ落とすよりも、忍の里を攻め滅ぼす方が難しいとさえ言われている。不用意に里に忍びこめば、死が待っているも同然だった。

忍の里の一員だったジライとて、例外ではない。侵入自体はさほど難しくないのだが、監視網からは逃れられない。里中に侵入者探知の魔法と罠が張り巡らされているというのに、里の約五分の四では魔法が使えないのだ。魔法無効の結界の下では、移動魔法・隠身・幻術は無効化されてしまう。隠密活動など不可能なのだ。

更に里には、神族・魔族の侵攻すら想定した、神封じ・魔封じの結界すら張り巡らされている。今、魔封じに捉えられれば、身動きすらかなわなくなるだろう。

その上、日々、改良されてゆく侵入者よけの罠が里の中でも周囲でも待ち受けている。

まともに侵入しては、四の書を盗むどころか、忍者頭の屋敷まで辿りつくことすらできないだろう。

ぴくりと頭を動かし、ジライはすばやい体術で木の上から姿を消した。

気配を消して近づいて来る者がいる。

覆面の下のジライの顔に笑みが浮かんだ。やって来たのは、外での仕事を終え里への帰途についている東国忍者。

獲物だ。

木々を渡って移動していた東国忍者は、何者かに背後を取られ、地に叩き伏せられた。

敵か！　と、東国忍者はクナイを抜き反撃しようとしたのだが……クナイを抜いた瞬間、自分が何故、地面に落ちているのかわからなくなっていた。立ち上がり周囲を見渡したが、敵の気配も仲間の気配も無い。足を滑らせて木から落ちたのだと合点し、更に注意深く辺りを見回した。こんな姿を仲間に見られていたらたいへんだ。どれほど馬鹿にされるか……だが、幸いな事に周囲に人の気配はなかった。安堵の息を漏らし、彼は里を目指した。

襲撃を受けた事などすっかり忘れて……

（六人目……）

忍の里周囲の森の別の場所に、ジライの姿があった。いや、正しくはジライの分身がいた。そこから北西、北東の位置にもジライの分身がいた。昨晩から、里への帰還ルートに何体もの分身を置き、里の人間を捕まえているのだ。

外からの侵入が難しい以上、内から警備システムを壊すしかない。その為の傀儡を、これで六人、手に入れたわけだ。

精神力を鍛えている忍者相手に洗脳は、ほぼきかない。やり方次第ではできない事もないのだが、時間がかかりすぎる。

そのため、ジライは洗脳以外の方法を用い、己の手足として動かせる者を増やしていた。先日、その方法は魔族から教わっている。魔を憑かせている今、その手を使わない手はない。

（後三日半……）

愛しい女勇者の面影を心に甦らせて、ジライは唇を噛み締めた。

（明日の夜には……勝負を決める）

二日目の夜も更けた。

簡易テントの中で眠りに就いた赤毛の傭兵アジャンは、又、セレスの夢を見ていた。

夢の中のセレスは成長していた。

胸はふくらみかけているものの、体つきは細く、手足もひょろひょろ。

顔もまだ幼さが残っていたが、赤い唇は愛らしく、閉じられている瞳の睫もハッとするほどに長い。女性と呼ぶには早すぎるが、子供でもない。大人への階段を昇り始めた、まほろばの時期の少女だ……

少女のセレスは、やはり胎児のような格好で光の球の中で眠っていた。

セレスの周囲には……

蠢く闇が迫っている……

昨晩よりも、闇は勢力を増しているように思われた。

お姉様が結婚し、義兄（おにい）様が家族に加わった。

義兄様は、エウロペ一の両手剣の使い手ジェイナス様の高弟で、国王陛下づきの聖騎士。騎士らしい高潔な人物だった。

私は義兄様に剣の稽古をつけてもらい、騎士の心得を教えてもらった。義兄様は国王陛下の近衛兵になりたいという私の夢にも理解を示してくださって……

義兄様が大好きで、私はよく義兄様の後をついて歩いた。あまりにも義兄様に私がベタベタしすぎるものだから、お姉様は冗談まじりに「私のお婿さんを取らないちょうだい」って笑っていたっけ……

ある日、私は……

ソファーでうたた寝をしていて、偶然、義兄様とお姉様のお話を盗み聞いてしまった。お二人の位置からでは、鉢植えの大きな観賞植物に隠れ、私は見えなかったのだ。

「かわいそうな子……」

お姉様の声は震えていた。

「お医者様は痕は残らないとおっしゃっていたけれど、でも、顔よ。顔に怪我をしたのよ、あの子……女の子なのに……あんなに綺麗な顔をしているのに……」

その前の日、私は剣の稽古の最中に負傷し、右手と額に包帯を巻いていた。しかし、剣の稽古に怪我はつきもの。私は気にしてなかった。

でも、お姉様は『セレスが顔に怪我をした』事に、ひどくこだわっていた。

「本当なら、長女の私が『勇者の剣』の守り手になるべきだったのに……私には剣の才が無いっておじい様がおっしゃって、それで、セレスが……あの子が私の代わりに」

シクシクとお姉様が泣く。

「あんなに素直で優しい子なのに……何も悪い事をしていないのに……このままじゃ、あの子、一生、何処へも嫁げないのよ。一生、男として生きていかなきゃいけないのよ。ひどすぎるわ……」

「アリシア、早く子供をつくろう。侯爵家に男子が生まれれば、セレスも剣の守り手の任から解放されるのだろう？」

「でも、その子が剣を振るえるようになるまで、セレスは守り手のままなのよ。あの子が自由になるのは十五年後？　二十年後？　そんな年齢になってしまったら、良縁は望めないわ……私のせいであの子は不幸になるのよ」

「決めつけるのはやめなさい、アリシア。セレスは美しくやさしく

けなげな子だ。人一倍努力家だし、誰からも愛される性格をしている。子をなし育てるのも女性の道の一つだが、あの子は聖騎士となり近衛兵となっても、満ち足りた幸せな人生を送れるだろう」

「やめて！　そんな事、言わないで！　近衛兵なんて夢、あの子に見させないでって、私、お願いしてるのに！」

「アリシア……」

「昨日の怪我は軽かったけれど……このままでは、いつか、セレスは顔に大怪我を負うかもしれない……もうやめて……あの子に剣の稽古なんかつけないで……あの子は女の子なのよ」

泣きじゃくるお姉様を、義兄様が慰める。

ショックだった。

勇者にふさわしい人間になろうと、ひたすら体を鍛えてきた私を……

お姉様は悲しい気持ちで見つめていたのだ。

ランツおじい様が、私を『勇者の剣』の守り手にお選びになったのには、たいした理由はないと思う。大人しくておやさしい性格のお姉様より、外遊びが好きだったお転婆な私の方が、荒っぽいことに多少は向いている……その程度だと思う。

けれども、お姉様は、ずっと私に負い目を感じていたのだ。

私が『今世の勇者』として生きねばならなくなった事に……

勇者として生きようとしても……

『勇者の剣』に触れる事すら許されず……

体を幾ら鍛えても……

ろくに筋肉のつかない女の体のまま……

戦士として生きようとすればするほど……

お姉様を傷つけてゆく……

どうすればいいのかわからなかった……

五つの道　3日目（1）

朝の訪れと共に、魔の数は減る。

女勇者の肉体を守って仮小屋に籠もっている三人――ナーダ、シャオロン、ガルバはホッと息をついた。命がある幸運に感謝しながら。

魔族の数は日を追うごとに増えている。昨日の日中に、シャオロンが次元通路の数を減らし、高位魔族を数体、討ち取ったのだ。しかし、残念な事にその程度のことでは状況は好転せず、昨晩、結界の外には蠢くように魔族がいた。

聖なる結界に守られているとはいえ、結界も万能ではない。闇の勢力が増せば、光の力は弱まる。一晩中、瘴気、魔法、邪法、物理攻撃に晒されたのだ。結界が破られる可能性もゼロではなかったのだ。

「もう少し日が高うなったら、お起こしいたす。シャオロン殿、しばし休まれよ」

老忍者に対し、東国の少年はペコリと頭を下げた。

「ありがとうございます、ガルバさん。それじゃ、少しだけお言葉に甘えさせていただきます」

シャオロンは毛布にくるまり、セレスの眠る簡易寝台の側に蹲った。ちょうどセレスの足の辺りなので、セレスの頭側に座るナーダと向かい合う形となった。

外には、まだ魔族が残っている。日の光に脅えて闇に逃げる下級魔族とは異なる、強力な魔が。シャオロンは、本当は、すぐにも外に出て魔の数を減らしたかったのだが、おとといも昨晩も二日続けてろくに眠れていないのだ。寝不足の鈍い頭と体では魔族相手に遅れをとってしまう。まずは休まなくては。

じきに少年は寝息を漏らし始めた。

老忍者は小屋の隅に座って仮小屋の出入り口に顔を向けたまま、

目の端で主人を見つめていた。主人はおとといから一睡もしていない。女勇者の肉体を魔法で維持しているからだ。主人が魔法を絶やせば、女勇者の命の灯は消えてしまうのだ。

意地っぱりな性格の主人が無理している事はわかっていた。疲労回復の魔法をかけているとはいえ、眠らずにいれば体力は低下してくる。又、結界魔法の威力を高める腕輪をつけてはいたが、主人は本当は結界魔法は苦手なのだ。大量の魔族に囲まれた状態で維持し続けるのは容易ではないはず。肉体的にも精神的にも、相当、負担がかかっていると思われた。

それなのに、主人は涼しげな顔をつくっているのだ。東国の少年や部下に心配をかけまいとして……

「このような時こそ頼っていただきたいのに……」

「何です、ガルバ？　何か言いましたか？」

女勇者の胸の上に右手をかざし、眠っている少年に顔を向けたまま、主人が尋ねる。ガルバも主人の方に向き直ったりせず、そっぽを向いたままだ。

「独り言にございます」

「独り言なら独り言らしく、誰にも聞こえないように静かに言ってください」

そう言う主人の眼の下には、隈がくっきりと浮かんでいた。それだけが、正直に疲労を訴えている。

「……ほんに、御身様は、年々かわいらしゅうなくなってゆきますな」

「私、もう三十歳なんですよ。かわいいわけないでしょ」

「王宮に居られた頃は、凛々しく、おやさしい、高貴な王子であらせられたのに……『皆が笑って暮らせるような国の王になりたい』が口癖の……。ああ、それなのに」

老人はわざとらしく大きく溜息をついた。

「大僧正様の下に行かれてから、御身様の性格は捻じ曲がってしまわれた。女嫌いの病にかかるわ、男好きになるわ、政治嫌いになる

わ、性質（たち）の悪い東国忍者に誘惑されるわ」
「……ガルバ」
「サティー様のご遺言とはいえ、総本山のような世から隔絶された世界に御身様をお預けすべきではなかった。あのかわいらしかった御身様が、今ではもう目もあてられぬほどの××に……ああ、嘆かわしい」
「ガルバ、私の事を何と言おうと大目に見てあげますけれどね、大僧正様と総本山を侮辱したら許しませんよ」
「いえ、私は、ただ……！」
そこまで言いかけて、老忍者はハッと頭をあげ、周囲の気配を探った。
「この音は……？」
「ガルバ？」
老忍者は目を閉じ、耳を澄ませた。
「地鳴り……？　いや、これは……」
すばやく出入り口へと走る老忍者に合わせ、ナーダは結界の範囲を広げ、出入り口の開閉を可能とした。老忍者は出入口にあたるトナカイの毛皮をあげ、間近に迫る魔族を通り越し、更に遠方へと目をやった。
そこには……信じられないものがあった。頂上だけ姿を見せている遥か彼方の雪山が……徐々に近づいて来ているのだ。遠方の動きなので今は緩慢に感じられたが、山の速度自体は速い。濁流か雪崩のごとく周囲の森を飲み込み、山は広野へと迫っていた。
「御身様！　山が動いております！　魔族めは山に憑き、我らを山の下敷きにする気でありましょう！　この角度からでは見えませぬが、地鳴りのごとき音は四方からしております！　山は四方から迫っております！」
「……私達を生き埋めにしようっていうのですね」
武闘僧ナーダは立ち上がった。ナーダが結界を維持している限り、物理攻撃はくらわない。山の下敷きとなっても、仮小屋が潰れるこ

とはないのだ。けれども、土砂や雪で出入口を塞がれてしまっては外に出る方法が無くなる。掘ろうにも、結界を解いた途端、土砂に潰される。又、魔法で維持したとしても、いずれ酸素が尽きる。閉じ込められれば、『死』が待っているのだ。

「セレスに鎧を着せてください、移動します」

「移動……？　しかし、四方から雪山が迫っておる今、何処へ……？」

「安全な場所へ、ですよ。アレを使います」

シャオロンの体を揺さぶる主人を、女勇者に魔法で神聖防具を装備させながら不安そうに老忍者が横目で見つめる。

「アレでございますか？　しかし、御身様のアレは可視範囲程度にしか……」

うぅぅんと頭を振り寝ぼけ眼を開く少年に、敵の襲撃を避け移動するとナーダが言葉短く告げる。少年は、しゃんと目を覚ました。

『龍の爪』を背負っているので、何時でも移動は可能だった。

「『龍の爪』、つけた方がいいですか？」

「付けてください」

少年は真剣な面持ちで頷き、『龍の爪』を両腕に装備した。

ナーダは『虹の小剣』を腰に差し、『エルフの弓』と『エルフの矢筒』は老忍者に預けた。主人同様、ガルバも『エルフの弓』は使えないので、ただ、運ぶだけだ。

ナーダは革のバンドを手にし、寝台の上の者を見つめた。

穏やかな顔のセレス。眠っているようにしか見えない。ガルバによって白銀の鎧を装着された彼女に、革のバンドを使っていつものように『勇者の剣』を背負わせる。そして、ナーダは意識のない女勇者をおぶさり、二人が離れないよう部下に手伝ってもらってバンドや紐で固定した。

「……御身様、大丈夫にございますか？」

女嫌いの主人を気遣って、老忍者がその顔を探るように見つめる。

ナーダの女嫌いは並ではない。女性が側に近づくだけで鳥肌を立て、

化粧の匂いを嗅ぐだけで吐き気をもよおすのだ。
「……今、私はセレスから離れられません。それに、三人の中で『勇者の剣』に触れられるのは私だけです。私が背負うしかないでしょ？」
と、主人は涼しい顔で答える。相当、無理をしておられると思いつつも、ガルバは言葉を飲み込み、武器や食料が入った袋を背負い、旅立ちの準備を整えた。
今や地を揺らす音はナーダやシャオロンの耳にも届いていた。間もなく大地も揺れだすだろう。
出入口のトナカイの毛皮を持ち上げ、ガルバが外を窺う。蠢く魔族達。その背後より、白い巨大なものが迫り来ている。
「ガルバ、こちらへ。私の側に」
ナーダの声に老忍者が従った時だった……
地面が悲鳴をあげ、激しく揺れ始めたのは……

犬橇を走らせ風を切りながら、赤毛の戦士アジャンは不思議な高揚感を覚えていた。失ったものが満たされてゆく充足感と言おうか……
求めているものがこの先にあるのは、間違いなかった。
と、そこで、前方の空が揺らいでいるのが見えた。アジャンにまとわりついていた冬の乙女達は、その揺らぎから生まれ出るまばゆい光を恐れ、散り散りに散って行った。光自体には攻撃の意志はないのだが、その強大なものに触れると、弱々しい存在である彼女達は個を保てなくなってしまうのだ。
犬達も異常を感じ取り、コースを変えようとする。その反抗を抑え、アジャンは橇を走らせた。移動魔法で現われた者のもとへ、と。
「話がある。アジスタスフニルよ」
アジャンの本名を口にして光をまとわりつかせている者に対し、

赤毛の戦士はニヤリと笑ってみせた。

「……驚きました」

目を見開き、少年はきょろきょろと周囲を見渡した。

「ナーダ様は、この魔法は使えないんだと思ってました」

どんな危機（ピンチ）の時にも使われた事なかったしと、つぶやく少年。周囲の雪景色を不思議そうに見つめている。

「使えませんでしたよ、旅に出るまでは。人間に手抜きをさせる為の魔法ですからね、攻撃魔法同様、本来、僧侶には禁忌魔法。ごく限られた役職の僧侶しか、使用してはいけない事になっています」

ナーダも周囲を探っていた。

「でも、目の前でカルヴェル様が何度もご使用になられたし、何度か実際に運んでもらいましたからね。何となくコツは掴めました。もともと呪文は知識として知っていましたし、物質転送魔法と原理が似ているので独学でもモノにできるかと、旅の間に内緒で練習してたんですよ。いざという時に使えるように」

「はあ」

「ケルティでも結構、使ってたんですよ。扉を開けないで部屋の中に入ったりして、ね」

「ああ……」

そういえば、そんな事が何度かあった。セレスがアジャンに襲撃された夜の翌朝もそうだった、まんじりともできなかったセレスとシャオロンのそばにナーダはジライを伴って唐突に現われたのだった。

「こうして大危機（ピンチ）を乗り越えられたのですから……苦しいながらも成功ですかね」

ナーダの顔に苦笑が浮かぶ。

「もっと遠くまで行く事ができれば良かったのですが、今の私では

この程度の距離が限界です。無茶して、魔力を枯渇させるわけにもいきませんしね」

ナーダ、シャオロン、ガルバの背後には、巨大な雪山があった。広野があった場所を埋め尽くしている雪と土砂に折れた倒木の塊……広野に居た魔族達は仮小屋と共に山の下に埋もれている。むろん、魔がその程度のことで死ぬことはなかろうが。

雪山に閉じ込められる前に、ナーダは前方から迫り来る雪山の速度を推量し、既に雪山が通り過ぎたであろう北の森のあった場所へと全員を運んだのだ。そのまま姿隠しと結界魔法を張り続けて、魔をより隠れているのだ。

この世の神秘を見通せる少年は、山に憑依している何万の魔族が見えていた。それらは蠢き、周囲を窺っている。女勇者を探しているのだ……

「シャオロン……進むべき道はあなたが決めてください」

「え？」

「魔にけどられぬよう、この場から離れたいのです。あなたの眼が頼りです」

「……わかりました」

低級魔族しか居ない場所ならば、姿隠しと聖なる結界さえあれば無事通りぬけられるだろう。

シャオロンは周囲を見渡し、辺りの魔の能力を見極めながら、慎重に進んで行った。ひっくりかえった倒木、むきだしの根、どこか遠方からひきずられて運ばれてきたであろう馬車などの残骸、何かの生き物の一部が点在する森のあった場所を通り、足場の悪い雪と土が交じり合った大地を踏みしめ歩く。

ともすると、不安に胸が押し潰されそうになるので、目の前の事にだけ集中しようと意識を向けた。

これからどうなってしまうのか……

魔の囲いを抜けた後、どこへ行けばいいのか……

仮小屋も無い状態で、雪の中を何処へ……

シャオロンは頭を振った。余計な事を考えては駄目だ。魔族の包囲網を抜けてからの心配は、今、自分がすべき事ではない。そちらはナーダと老忍者を信じて任せればよいのだ。

心の眼で周囲を探っていた少年は、ハッと顔をあげた。

魔とは異なるものが近くに居る。ここより南東の森があった場所に、唐突に現われたのだ。移動魔法だ！　と、気づいた時には、天をも震わす大声が周囲に轟いていたのだ。

「おのれ、汚らわしき魔族め！　よくも我が国を穢してくれたな！　王の怒りをその身をもって味わうがいい！」

「この声は……」

シャオロン、ナーダ、ガルバは顔を合わせた。

「ルゴラゾグス王！」

バンキグ国王その人に間違いない。三人が王の名を叫んだのと同時に、

「くらえ、『雪嵐』！」

竜巻のような光が吹き荒れ、魔族の宿っている山の成れの果てを千々に砕け浄化してゆく。過去の英雄ゲラスゴーラグン直伝の技『雪嵐』。聖なる武器『狂戦士の牙』を介して放たれたそれは、まさに嵐の牙。邪なるものを容赦なく、切り裂いてゆく。

シャオロン達は身を乗り出し、砕けゆく山を見つめていた。ナーダの結界に守られているので、砕け散り雨のように飛んでくる土砂や岩や木々がぶつかる恐れは無い。ルゴラゾグス王の攻撃の凄まじさを目の当たりにして、シャオロンは体の震えをおさえられずにいた。以前、対戦した時よりも、国王は何倍も、いや何十倍も強くなっている。

破壊の嵐は穢れた山々を木っ端微塵に砕き尽くすまで、止む事はなかった。穢れた土は大半は浄化されて今世から消滅し、残ったものもただの土となって周囲に積みあがり丘となってゆく。

「思い知ったか、魔族め！」

がっはっはと豪快に笑う声。その声は次第に小さくなってゆき…

…息づかいは荒れ……やがて、途絶えた。
「！」
周囲から、空から、遥か遠方から、さまざまなモノに宿った黒い気が東南を目指す。
山の残骸が視界を塞いでいるのでよく見えないが、魔族はルゴラゾグス国王を獲物と定めたようだ。蜂の大群のような黒い影が、一点を目指し進む。
しかし、国王からの攻撃がない。先程の大技で力を使い果たしてしまったのだろうか？　国王は今？
「シャオロン！　先に」
と、武闘僧が叫んだ時には、東国の少年は結界を越え、東南へと走っていた。ルゴラゾグス国王を救うべく。
『虹の小剣』を抜き、ナーダはチラリと部下を見た。
「私の側を離れないように。遅れたら命はありませんよ」
「御身様こそ、女勇者様を落とされませぬように」
二人は視線を交わし合い、同時に雪を蹴って走り出したのだった。

ルゴラゾグス国王は五人の部下を伴っていた。
二人は宮廷魔法使い。国王と自らを含め六名をここまで運んだのはこの者達だろう。今、そのうちの一人の小柄な方が結界を張り、気絶した国王を守っている。もう一人の年配の魔法使いは杖を手にしたたずんでいたが、攻撃にも防御にも参加せず、魔力を温存していた。多分、彼が移動魔法の使い手はなのだろう。
二人はシベルア教の司祭だった。神聖魔法・回復魔法の使い手は、結界の外で結界に背を向けて立ち神聖魔法で敵の数を減らしていた。
そして、もう一人はカラドミラヌだ。血気盛んな戦斧の使い手の若者だ。彼の武器はただの鉄斧なので、魔族退治はできない。おそらく強制的に王と共に結界の内に入れられたのだろう。不満そうな顔をしていた。が、戦斧を構えるその姿からは、結界が解けたとき

には身を挺してでも国王を守る覚悟がうかがえた。
（ムジャ達が王宮と連絡をとってくれたのですね……救援がこれほど早いとは……ありがたい）
遠方の国王達を見つめ、ナーダはホッと安堵の息を漏らした。回復魔法の使い手が来てくれたのだ。それに、移動魔法の使い手の魔法使いもいる。セレスの身体機能維持の魔法の人員は更に増やせるのだ。
何としても、彼等を救わねば。
道を塞ぐ小物魔族を『虹の小剣』で斬りながら、ナーダはシャオロンの後を追う。気を高め、小声で呪文を詠唱しつつ。

風のごとく現われた少年。鋭く美しい銀の爪で魔を切り裂き、爪より生み出す竜巻と聖水で魔を祓う。
シベルア教の二人の司祭は、少年の爪で、あっけなく魔族が滅びてゆくのにみとれた。少年は神の騎士のように勇敢で、美しかった。
少年の後に続くインディラの大男は、女勇者を背負ったまま小剣で魔と戦っていた。その男の気からは、時折、畏怖すべき大いなる存在が感じられた。あの男は、南の神の信奉者に違いなかった。
インディラ人のすぐそばを小柄な老人が走っていた。老人は、時折、魔の一団にむけ、火薬玉を投げたり、投げ武器（チャクラム）を使っていた。が、それは敵の足をわずかに遅らせる程度の牽制にしかならなかった。
少年とインディラ人は結界のすぐ側の司教の元に駆け寄ると、並んで立ち、少年は無数の竜巻を、大男は自身を中心とした高位の神聖魔法を周囲に向けて放った。二人から爆発的に広がった浄化の力に、一帯の黒きもの達があえなく消滅してゆく。
周囲から完全に黒の気が消滅したのをみてとってから、宮廷魔法使いは結界を一時解き、二人の司祭と勇者一行を内へと誘った。

「ナーダさん、そっちの人間はそれで全部か？」
と、尋ねたのはカラドミラヌだ。一方的にナーダをライバル視している、戦斧に命をかけている若者だ。
「ええ。他の者は別行動をとっています」
「んじゃ、移動だ。おい、結界内の者、全員を運べよ」
カラドミラヌが年配の魔法使いに向かって横柄に言う。戦士を最高職と考えるバンキグにおいて、宮廷魔法使いの地位は、あまり高くないのだ。魔法使いは頷き、ごにょごにょと長い呪文を詠唱し始める。
「サヴォンオラヴィからここらまで来る時は呪文の詠唱に二十四分もかかったんだぜ。遠くまで移動できるのは便利だけど、魔法って実戦向きじゃないよな」
同意を求めるかのように、カラドミラヌがナーダに笑いかける。短い呪文詠唱で高位の魔法をバンバン使う大魔術師を見た事がないのだろう。カルヴェルなど、エウロペ国内を無詠唱で連続移動していたのだが。
しかし、この魔法使いは、呪文詠唱に時間がかかりすぎるとはいえ、六人もの人間を移動魔法で運んだ上に、今度、十人を運ぼうとしているのだ。カラドミラヌは無能と馬鹿にしているが、魔力消耗の激しい移動魔法を連続使用できる者は稀。かなり優秀な魔法使いのようだ。
「何処まで移動するのですか？」
「ナヴィアスの要塞だ。サヴォンオラヴィより橇で東に一日ほどの距離の、河沿いの要塞だ。魔封じの結界もばっちりあるし、一年篭城しても困らないほど倉庫には備蓄がある。ノリエハラス様が、宮廷魔法使いにご命じになって、シベルア司教様や司祭様を数十人、既に要塞にお移ししているはずだ。陛下はそこを女勇者様の避難所に決められたのだ」
と、カラドミラヌは『狂戦士の牙』を抱きしめたまま目を回して

いる国王をチラリと見てから、ナーダに視線を戻し睨むように真っ直ぐ見つめてきた。気絶している国王に対しナーダ達に不敬な態度をとらせるものか！と、その目は強く訴えていた。

むろん、ナーダにはそんな気はなかった。バンキグ国王とカラドミラヌ、宮廷魔法使い達と司祭達に対し頭を下げ、感謝の気持ちを伝えた。

「あなた方の救援のおかげで、九死に一生を得ました。その上、避難先まで準備いただき、本当に、ありがとうございます」

シャオロンもナーダの横で深々と頭を下げ、老忍者も片膝をつき頭を深く垂れた。

「これほど、早く救援の手が差し伸べられるとは思っていませんでした。私の部下は何時ごろ、どうやって王城と連絡をとったのでしょう？」

ナーダの問いに、カラドミラヌは意外そうな顔をした。

「部下？　あれ？　ノリエハラス様お気に入りの、あの忍者、あんたの部下だったのか？」

「え？」

「えっと……ジライって名前だったけ？　いつも覆面してた変な男が、おとといの夜、ノリエハラス様の枕元に現われたんだ。女勇者様が危機（ピンチ）だって言ってな。ノリエハラス様も最初、夢かと思われたそうだが、ベッドの側の木柱に矢文が刺さってて、そちらに場所やら状況やら詳しい説明が書かれていたんだ。手紙の差出人は『ジライ』。あの忍者だった」

「……ジライが？」

ナーダはシャオロンとガルバと顔を合わせた。広野（ここ）で分かれたジライがその日のうちにサヴォンオラヴィのノリエハラス老宰相の元を訪れるなど不可能だ。通常の移動手段では……。移動魔法の使い手にでも運んでもらったのだろうか？　もしかして、カルヴェルに？

「ノリエハラス様は弓勝負以来、あの覆面男を非常に気に入っておられたので、あの男の頼みならば動かずばなるまい！　と、手紙を

もらった翌日、つまり、昨日、朝一で、陛下に事の次第を話されたのだ。手紙自体、本物かどうか怪しいものだったんで、救援隊を差し向けたいというノリエハラス様のご意見に真っ向から反対なさった大臣もいらっしゃったのだが」

カラドミラヌの視線が、倒れてる巨漢の王へと向く。

「『恩義に報いてこそ戦士』との国王陛下のお言葉であんた達への救援隊が送られる事となったんだ。魔族との戦闘を考慮し、指揮は聖なる武器の所持者の国王陛下がとることとなり、聖職者・魔法使いを中心に救援隊は組まれた。ノリエハラス様はサヴォンオラヴィに残られ、後方からの支援に回られた」

そこで少し、若者の顔にためらいが浮かぶ。自身の戦斧を握り締め、ナーダに対し複雑な表情をみせる。

「俺は……物理攻撃が通じる相手への戦闘要員であり、二手に分かれた時の別隊の指揮官を務めるべく同行している」

若者の虚勢と失望、不満が、ナーダには手にとるようにわかった。が、そのことは触れず、相手の次の言葉を待った。

「実は昨日の夕方からこっちに着いてたんだが、広野の魔族の数が多すぎて、危険すぎてあんたらの所まで行けなかったんだよ。連絡とろうにも、魔の瘴気自体が結界みたいになってて、心話さえ通じない。魔族を葬り力づくで合流するにしても、夜になったら相手の勢力が増してしまう。時間が悪すぎた。司祭様のご助言を受け容れて陛下はあんた達との接触は翌日の朝一と決められ、昨日は俺達はこの近くの狩猟の民の村に一泊したんだ。ちっちゃな村だったが、皆、陛下の来訪を喜び、貯えの酒や肉をふるまって歌や踊りで歓迎してくれた」

若者は戦斧を持つ手に更に力をこめた。

「今朝、俺達が村を離れてから三十分も経たないうちに……背後で山が動いたんだ。俺達のそばには偉大な王がいらっしゃった……王が『狂戦士の牙』で迫り来るものを切り裂き、魔法使いが俺達の周りに結界を張ってくれた。俺達はほぼ無傷だったが……俺達が通り

過ぎてきた所は全て、山に潰され、土砂に埋もれ、崩れ去っていた……戻って確かめるまでもないことだ、昨晩、泊まった村はもう跡形もないだろう」

若者の顔が興奮のあまり赤くなる。

「ここに着いて、陛下は怒りのあまり、髪を逆立てられた。魔族どもが山を動かしたせいで、山々と広野を結ぶ場所にあったものが全て踏みにじられていたんだ。あの村だけじゃない、進路にあった全ての村や森や河が……雪と土くれに埋もれてしまった。陛下は目に涙をためられ、全ての力を斧にこめ、山々と同化していた魔を滅ぼしたのだ」

カラドミラヌは悔しそうに声を荒げた。

「俺だとて、陛下と同じ気持ちだった！　俺も魔を滅ぼしたかった！　だが、俺の武器では魔は斬れん！　俺は……何もできないのだ」

無念の思いに、体を震わせる若者。

その背に、そっとナーダは手をかけた。

「今の状況が、戦士であるあなたには何重にも苦しいものであろうことは私にも察っせられます。しかし、必要のない人間などいません。人にはそれぞれ役割があり、その役割を成し遂げる事で人と繋がり合えるのです。たとえ、その役割が自分にとって不本意なものであったとしても……他者の為に、己の成せることを成すべきです」

「……」

「卑劣なる魔は必ず滅ぼしましょう。女勇者様と共に、必ず、ケルベゾールドを倒します……私達の為に魔の犠牲となった生命には謝罪と鎮魂の意を、駆けつけてくだすったあなた方には感謝を捧げます」

「……俺は何もしていない」

「いいえ。あなたは私達が危機と知って、陛下と共に動いてくださった。その気持ちがとても嬉しいです。それに、このような辛い時に、知己と出会えるのはたいへん心強い。あなたが来て下さって、嬉しいです」

「……」

カラドミラヌはうつむき、眉をしかめ、唇をきつく結んだ。涙を堪える子供のように。

「移動します」

宮廷魔法使いの合図に、全員が頷きを返す。

移動魔法に包まれ、広野に居た者達は別の地へと渡って行った。

五つの道　3日目（2）

アジャンは手綱を引き、移動魔法で現れた者の近くに犬橇を止めた。

「そっちでも何かあったみたいだな」

「うむ……実は」

移動魔法の使い手は、重々しく溜息をついた。

「カルヴェル様が消えられた。昨日、城や別荘、縁者、全ての心当たりを当たったのだが、この地上の何処にもおられぬ。探知の魔法にすら、何の反応もない」

茶の髪、茶の瞳の壮年の男。腰に戦士らしく剣を佩いてはいたが、彼はケルティ一（いち）の大魔法使い、世界でも三本の指に入るであろう実力者であった。

ハリの部族王ハリハールブダン。現存する十二部族を束ねる上皇でもある。先祖から受け継いだ魔法道具（マジック・アイテム）『知恵の指輪』と大魔法使いカルヴェルの指導によって凄まじい実力のシャーマン戦士となった彼には、大国シベルアさえ一目を置いているのだ。

「おとといの昼……俺の側にいたカルヴェル様の分身が唐突に消えたのだ。今までにも分身はちょくちょく居なくなっていたのだが、あの時、分身は妙な消え方をしたのだ。たとえるのなら、炎に焼かれる紙だ。巨大な力に飲み込まれたが為、形を散じた……そんな感じたった」

「……ジジイ、死んだのか？」

「そうやもしれぬし、この地上に関わる暇が無くなる大事に巻き込まれたのやもしれん」

「……」

「分身の消滅は気にはなったが、俺も忙しくて、な。そのうち戻られるかもしれんと思い、放っておいた。ところが、じきに来客があった。人気のない部屋に、そやつ、ふいに現われたのだ。『カルヴ

ェル様は何処だ？』と」
　ハリハールブダンはパチンと指を鳴らし、空より取り出したモノを魔法でアジャンの手元へと運んだ。折りたたまれた紙だ。
「客が持ってきた手紙だ」
「読んでもいいのか？」
「うむ」
　手紙に触れようとして、アジャンは眉をしかめた。微かではあるが、手紙から瘴気を感じたからだ。自らの気をもって邪気を圧倒し、手紙の穢れを祓う。
「ほほう」
　ハリハールブダンが意外そうにアジャンを見つめる。
「何時の間に、浄化魔法が使えるようになった？」
「浄化なんてご大層な真似はできねえよ。邪悪をその場から、どかしてるだけだ」
「魔を退ける力……なるほど。『極光の剣』の加護か」
　アジャンは紙を開いた。ケルティ語で、セレスがゼグノスの邪法に囚われ魂を奪われた事、肉体はナーダの魔法で維持している状態だが援助の手が差し伸べられなければ五日後にセレスの命が尽きると記され、勇者一行が現在居るバンキグ北東部の地図が添えられていた。手紙の差出人の名前は……
「ジライ……」
　赤毛の戦士は、『極光の剣』と対になる魔法道具（マジック・アイテム）の所有者に尋ねた。
「あの忍者、おまえの所に行ったのか？」
「器的（うつわ）にはホルムで女勇者と共にいた忍者だった」
「なに？」
「だが、中身は闇の者だった。あまりにも禍々しかったので、存在を感じた途端、つい反射的に浄化してしまった」
「……殺したのか？」
「浄化した。と、言っても分身だったがな。すぐに同じ姿の者が現

われ、『カルヴェル様に手紙を届けて欲しい』という思念と手紙を残し、移動魔法で消えた」

アジャンはホッとした。が、慌ててすぐに頭を振った。クソ忍者がどうなろうがどうでもいいじゃねえかと、低くつぶやきながら。

「あの馬鹿、セレスの事となると見境ねえなあ。魔に魂でも売ったのか……ったく、どう始末をつける気なんだ？」

俺ぁ知らんぞと、赤毛の戦士は不快そうに眉をしかめた。

「……その手紙を読んでから、どうしようか迷っている」

「ん？」

ケルティの上皇は、眉をしかめていた。

「その手紙の内容が事実である事は、千里眼で確認した。このままでは、セレス殿は亡くなってしまう。セレス殿は恩人だ。本当ならばすぐにも駆けつけ、身体機能維持の魔法も俺が引き受けたいのだが……俺はセレス殿の旅に介入できん。カルヴェル様と約束しているのだ、セレス殿が大魔王を倒すまで彼女の旅を魔力で援助しない、と」

「なんだって？」

「……セレス殿の旅に俺がかまければ、ケルティは再びシベルアの支配に屈するやもしれぬ。だから、やめろとの事だった。だが、それだけではないと思う。大魔法使いが何かすると、影響が大きすぎるのだ。特に、俺のような新米魔法使いは怖いぞ。加減を知らんからな。胡桃を割るのを手伝おうとして、その者の家どころか村ごと全てを真っ二つにしかねん。俺がセレス殿に何かすると、事態がマズイ方向に転びかねない」

「ふん？」

「俺は直接の援助はできん。ならば、せめてカルヴェル様と連絡をとろうと世界中を彷徨ったのだが、見つけられなかった。女勇者一行は、大魔術師様のご助力なしで、この危機を乗り越えねばならぬようだ」

ハリの戦士は、アジの男を正面から見つめた。

「窮地の女勇者を残し、おまえがあえて西を目指す理由を問いたい」
「ケルティに行きゃあ、あの女を起こせる」
「ほう」
「俺の勘がそう告げている。だから、西を目指している。けど、何処でどうやって起こすのかなんて聞くなよ。具体的にどうやるかなんざ、俺にだってわからんのさ」
「以前、カルヴェル様は、シャーマンとしての能力は、おまえの方が俺よりも百倍強いとおっしゃっていた。おまえの勘がそう告げているのなら、その通りなのだろう」
ハリハールブダンは左手をかざし、二の指の金の指輪をアジャンに示した。
「『知恵の指輪』と対をなす剣を持つおまえは、俺の半身も同じ。俺は『女勇者セレスは支援できぬ』立場ゆえ、俺の半身であるおまえを助ける事にする」
「俺なら助けて良いのか？　オレはセレスの従者だぜ。ジジイに後で叱られるかもしれんぞ」
「構わんさ、俺の中では理屈は通ってる」
「政務は？　ほっぽり出していいのか？」
「問題ない。分身を置いて来た」
「ケッ」
ジジイ並のバケモノになりやがってと毒づくアジャン。
それに対してハリハールブダンは、自分の魔法は『知恵の指輪』より与えられたかりそめのものに過ぎないし、どんなに指輪に頼ろうともカルヴェル様の足元にも及ばないと真面目な顔で答えたのだった。
「通行許可書があるとはいえ、入国審査と手続きに時間をわずらわされるのは嫌だろう？　ケルティまで移動魔法で運んでやる」と、ハリハールブダン。
「助かる」
「それで、アジスタスフニル、何処へ送ればいい？」

「国境ぞいなら何処でもいい。適当な所に、犬橇ごと運んでくれ。そこに行きゃあ行ったで、どっちへ行けばいいのか、多分、わかるはずだ」

ハリハールブダンは小さく吹き出した。おまえの能力は便利なのか不便なのかわからぬなと、呟きながら。

闇の中に蠢く肌には、きつく縄が絡まっていた。後ろ手に縛られ、両の乳房の上下に縄を巻きつけられた細い女体。少女のような体つきだったが、彼女が漏らす鼻にかかった甘い声には女の色気があった。

宙を見つめる黒い切れ長の瞳はとろんと濁り、形の良い唇からはだらしなく唾液が流れていた。

刺激を受ける度に、その白い裸体が身悶える。長い黒髪がばっさりと宙に舞う。縄が食い込んだ柔肌にかかる乱れ髪。ぞくぞくするような色っぽさがあった。

そんな女を、がっしりとした体格の男が見つめていた。布団の上にあぐらをかいて座っているその肉体は、鍛えられたものであったが、皮膚にはたるみがあり、薄くなった頭髪も顎鬚も体毛も白い。若かりし頃は二枚目だったのだろうその鋭い顔にも、深い皺が刻まれていた。

老人と言っていい年齢だった。しかし、その体は逞しく、好色な笑みを浮かべる顔にも生命力があふれており老いを感じさせない。

「もう降参か？」

男によって女は理性を奪われていた。きつく巻かれた縄は、彼女の内の熱い熱を煽るばかりだ。

「もう……もう、だめ……無理よぉ……もう」

せつなそうに男を見つめ、女は媚びる。

「解いて……ねえ、早く……もう許してぇ……」

「しょうのないやつめ」
言葉とは裏腹に、老人は嬉しそうな顔をしていた。
「いつまでたっても、房中術の技は半人前じゃが」
老人は背後から女の頬に口づけた。
「ほんに、おまえはかわゆいのう、アスカ」
「あぁ……お父様……」
正気を失わされているくノ一アスカは、甘い吐息を漏らし、緊縛された裸体を悩ましげに揺さぶった。
そんな彼女の体を愛しそうに腕に抱き、老人は鋭い視線を部屋の隅の闇へと向けたのだった。闇に潜むように、部下が蹲っている。
「お頭様、シャイナの新大魔王教団より心話にて連絡が入りました。例の書の価格について交渉したいと」
「ほう」
老人は手を止めることなく、闇を見つめ続けた。
「幾らと申しておる？」
「前回の申し出の価格に十億上乗せした上で、シャイナ教団の最高幹部の座を約束するとの事」
「ふん、くだらん。女勇者に潰された後にできたにわか教団の幹部なんぞになりとうはないわ」
「では断りましょうか？」
「ペリシャの大魔王教団が提示している金額を教えてやれ。三日待つ。その間に、わしを納得させられる額を示せねば、あの本はペリシャ教団のものになると脅しておけ」
「承知」
闇に潜んでいた気配が消える。
そのまま老人は腕の中の者を執拗に手や口で愛でた。焦れて身もだえ、卑猥な言葉を口にする相手の反応を楽しむかのように。
間もなく、先程消えた気配が戻って来た。
「報告いたします」
部下がそう口にした時には、老人はもう動いていた。腕の中のく

ノ一を突き放すや、枕元の刀掛けに手を伸ばし、抜いた鋭い刃で闇に潜んでいた部下の首を刎ねたのである。

血飛沫をあげて倒れゆく体を見もせず、老人は、つづいて床に向かい『氷柱』の忍法を放った。床下に潜んでいた襲撃者は、ことごとく氷の柱に閉じ込められ凍りついた。

「お見事」

頭上より声がした。老人は刀を握ったまま、天井を睨みつけた。屋根裏に複数の気配がある。闇のものの気配に混じり、忍の気があった。忍の気はよく知っている男のものだった。次期任忍者頭と目されながら里を抜けた裏切り者――白き狂い獅子ジライだ。

「やはり、お頭は一筋縄ではゆきませぬな。そこな者どもを近づけて、きゃつら同様、あなたにも術をかけて傀儡に堕としたかったのじゃが……大人しゅう諦めましょうぞ」

「ジライ……抜け忍の分際で里に戻って来るとはな。よほど命が惜しゅうないとみえる」

抜け忍は発見次第、殺す。それが里の掟だ。けれども、今、老人に戦闘の意志はなかった。一対一では勝ち目が無い。忍術・忍法・邪法・体術・剣術……全て、相手の方が勝っている。

「で、何の用じゃ？　幾重にも張られた罠をかいくぐり、監視網をだまし、ここまで来た理由は？　わしを傀儡に操り、里を乗っ取りたかったのか？」

「今更……」

クククと天井から低い笑い声がする。

「お頭、取引に応じていただけませぬか？」

「ふん？」

「わが望みはただ一つ……」

そこで一呼吸おいてから言葉を続ける。

「大魔王教の闇の聖書……四の書をしばし貸していただきたい」

理性を失っているアスカが緊縛された裸身を摺り寄せてきた。だが、老人は娘を邪険に突き飛ばし、無言のまま天井を睨み続ける。

「三日のうちに、必ずお返しする」
「必ず？」
「さよう。三日もあれば用は足りる。我としても、それ以上は希書など手にしとうはござらぬ。大魔王教徒垂涎（すいぜん）の魔法書など、いらぬ騒動を招くだけ。忍には不要の書物」
「……」
「あなたは、口約束など信じる御方ではない。血文字にて誓約書をしたためましょう。制約に背いた者には、死に勝る責め苦が無限に与えられるように」
「……」
「三日の内に我が命を堕とした場合には、即座にあなたのお手元に戻るよう物質転送の魔法もわが手のものにかけさせておきまする。四の書がお手元から離れるのは、長くて三日。シャイナやペリシャの教団との取引の邪魔はいたしませんし、四の書が里より流出したなどと外部には漏らしません。お頭の不利益となる事はせぬと約束いたします」
「きさまに四の書を渡して、わしに何の益がある？」
「多大な利益がございます」
天井から快活な声が響いた。
「私の話にのってくだされば、里が滅びずにすみますゆえ」
「なに？」
「お頭、この里の約半数の者が既にわが術中に落ちております。我が為に罠を外し、結界を解き、この屋敷への道を開いてくれたのは里の者達……我が傀儡にございます。時が経てば経つほど、我が下僕の数は増えます。いずれは里全体が我が手に落ちます。いかなお頭とはいえ、里中の者に襲われては無事にすみますまい。又、あなたが部下どもを殺せば殺すほど、里は戦力を失い、ひいては弱体化してゆくのです。忍の里の機能を保つ為にも、我が話にのるべきかと存じます」
「何の術で部下どもをたぶらかした？　傀儡の邪法でも幻術でも洗

脳でもなさそうだが？」
「それはお教えできませぬな。ですが、取引に応じてくださるのなら、里の者にかけた術を解きましょう。我が支配から解放してやります」
「その言葉を信じろと言うのか？」
「誓約書をしたためます。四の書を三日ほど貸与していただく返礼に、今、我が用いている術を禁術とする事を誓いましょう。誓いを破れば相応の罰が下ることにいたしましょう。そうですな、『この身が千々に砕け絶命する』という罰でいかがでしょう？」
「……」
忍の里の頭領は夜着を羽織り、立ち上がった。
「よかろう、話にのってやる。誓約書を書け」

血文字にて誓約書をしたためている間、天井裏からジライは下の様子を窺っていた。
しつこく身をすりよせてくるアスカを殴り、頭（かしら）は彼女の上半身を縛（いまし）めていた縄を切っただけですげなく追い払った。きさまの相手をしている暇はないと。
長時間縛られていた為、腕はろくに動かないようだったが、アスカは部屋の隅に転がり、火照った体をおさえようとしていた。
正気を奪われ、せつなげな喘ぎ声を漏らす妹。ジライは憐れに思い、眉をしかめた。彼女は『頭（かしら）のお気に入り』……頭専用の玩具なのだ。仕事が無い時は老人の気まぐれのままにいたぶられるのが日常。
その姿を目の当たりにして自分が動揺している事に、ジライは少なからず驚いていた。
欲望に忠実であれ……
弱者をいたぶるは強者の特権……
支配を厭うならば刃を持ち強者となれ……

大魔王教の教えであり、忍の里の常識であった。

弱者ゆえに強者に踏みにじられる者の姿など、里中に溢れている。弱者とはいえアスカは、里一の実力者の所有物。数多くの男の相手をしなければいけない『女』達より、遥かに恵まれた立場にある。

けれども、今、アスカの姿を目にするのがつらいのだ。不思議なほどに……。望まぬ快楽に溺らされ、せつなげに喘ぐ彼女の姿に心が痛む。

セレスの元に一年以上いて自分は少しおかしくなっているのかもしれない、ジライはそう思った。

（アスカにも憑いてやればよかった……）

ゼグノスの憑依方法を真似、ジライは里の人間を傀儡とした。体に憑いた魔族の数だけ己が魂を分断して分身をつくり、触れ合うだけの接触で魔族の能力をもってして里の人間に憑いたのである。人から人へ。ジライは憑依体の内で魂を更に分断し、里の人間の体内に次々に入り込んでいった。

厳しい掟に縛られている忍者は誰しも不満を抱いていた。自由への憧れ、上役への憎悪、不当に扱われ出世できぬ現状への怒り、常に死と隣り合わせの任務……満たされぬ思いを抱いたまま、忍は里に拘束されている。彼等の悪感情を煽るのは簡単だった。

憑依した者を操って里の防衛システム――魔封じ・結界・罠を壊させ、里への侵入に成功したのである。

この憑依方法は、魔族を体に巣くわせている今だからこそできる邪法。魔族との契約は二日日後の昼に切れるので、実は後二日半しか里の人間を支配できないのだが、ジライはそんな事はおくびにも出さず、邪法を二度と使用しないと誓う事で忍者頭から四の書を借りようとしているのだ。

書き上げたものを物質転送魔法で、忍者頭の手元へと送る。老人は血で書かれた文面を確かめてから、左手の甲を傷つけ、右の二の指につけた血で誓約書に自分の名前もしたためる。

「ねえ……お父様ぁ……お願い」

アスカが、畳の上で体を丸めたまま、忍者頭をせつなそうに見上げる。
「もう我慢できないわ……あたし……」
「こちらに来い、アスカ。働いたら望みをかなえてやる」
ふらふらと近寄って来た娘をぐいとひきよせ、その喉に老人がぴたりとクナイを押し当てる。
「！」
身を乗り出すジライ。アスカは喉に切っ先をむけられたまま、ぼんやりと空を見つめている。老人は天井を見つめニヤリと笑った。
「しばらくそこで見ておれ。手を出せば、これの命はない」
気を高め、老人は何もない空から、古びた厚い本を取り出した。獣の毛皮のようなもので覆われた表装の、黒い気を吐き続ける本――四の書だ。誰にも盗まれないよう、邪法で異空間に封印していたのであろう。
黒い瘴気を爆発的に広げる本を、老人は一糸まとわぬ娘に持たせた。自らそれに触れるのを避けているのだ。
「ジライに渡してやれ」
「……」
アスカはうつろな瞳で手の中の本を見つめた。何と言われたのかわかっていないようだった。頭によって性欲だけを高められた今の彼女には、まともな思考力がない。
「その本をジライに渡すのだ。おまえの愛しい兄に、な」
「……ジライ」
アスカの頬をポロポロと涙が伝わってゆく。
「ジライは居ないわ……抜けたもの」
「戻って来たのだ。今、そこに居る」
「ジライ……？」
「ジライ、四の書、受け取りに来い」
忍者頭が少し下がる。クナイの先端をアスカの喉より下ろしたが、仕舞う気はない。娘の背後に立ち、何時でも彼女の急所を狙えるよ

うクナイを構えている。
　老人の顔が天井に向いているのだと気づき、アスカも天井を見上げる。
「ジライ……？」
　涙を流しながら、アスカが嬉しそうに笑う。
「そこなの？　戻って来たの？　里の忍者に戻るのね？　女勇者を捨てて、あたしの所へ帰ってきてくれたのね」
　ジライは舌打ちをした。
　アスカは四の書を握り締めている。物質転送で本だけを運ぶのは不可能だ。しかも、四の書の邪悪な気を浴び続ければ精神力を弱められているアスカは容易に黒の気に染まってしまう。長く持たせては危険だ。彼女の命にかかわる。
　二人の前に姿を晒す気はなかったのだが、仕方が無かった。ジライは天井の板を外し、音も立てず、ふわりと畳の上に飛び下りた。
「ジライ！」
　覆面に黒装束だったが、素顔が見えなくても愛する男を間違うはずがない。右手に闇の聖書を握り締めたまま、アスカは愛しい兄に抱きつき、両腕を相手の背に絡ませた。
「嬉しい……もう離さない……愛しているわ、ジライ。あなたは、いつも『愛している』って言わせてくれなかったけど……ずっと、ずっと好きだったの……初めて抱いてもらった時から、ううん、初めて会ったときから、あなただけを見つめてきたの。ずっと、あなたが好きだったの」
　アスカは感情の起伏が激しく、激しやすい性格ではあった。しかし、これほど感情を露にするのは珍しい。理性のタガが外れてしまっているのだ。
「抱いて、ジライ……昔みたいに、うぅ～んと、あたしを可愛がって」
「アスカ、本を渡せ」
「いや！　抱いてくれなきゃ、絶対、いや！」

泣きそうな顔で、アスカが甘える。
「まずは本を渡せ。それは、おまえの手には余る。死ぬぞ」
「渡せばいいの？　渡せば抱いてくれるのね？」
「アスカ、何を言うても、無駄じゃ。その男、女勇者を捨てて来たわけではない」
アスカのすぐ横に、忍者頭は立っていた。にやにや笑いながら、クナイを高々とあげ、ジライに見せつけるようにアスカの背に切っ先を向けている。
「くだらぬ口は開くなよ、ジライ……聞き苦しい言葉は、欲しゅうない」
「……」
どういうつもりだ？　ジライは忍者頭を睨みつけた。
アスカの命を盾に、何を企む？
忍者頭は娘に揶揄するように言う。
「ジライは女勇者を愛している。あの女だけを愛し、愛に惑い、里を捨てたのだ。もう二度と、里には戻ってこぬわ」
「……そんなことないわよね？　あたしの所に戻ってきてくれたのよね？」
必死にすがりついてくるアスカ。
「ねえ、そうだと言って、ジライ！　あたしのために帰って来てくれたんだって！」
「たわけが」
老人がカラカラと笑う。
「おまえなど、ただの道具よ。忍者頭直属の部下、頭お気に入りのくノ一……役立つ駒ゆえ、そやつ、おまえを抱いたのだ」
「違う……あたしは特別だった……ジライは『我が宝』ってあたしを呼んでくれた……あたしだけが、ジライの特別だった」
「そう！　おまえは特別だ！　最も役立つ駒！　だから、大切にされたのだ！」
「あ」

「おまえは愛されてなどおらんのだ！　昔も今も、な！　ジライが愛しておるのは、女勇者ただ一人！　おまえは利用されただけだ！」

「！」

「ぐっ！」

ジライはよろめいた。右肩から胸にかけて激痛が走ったのだ。

「あ……」

全裸のアスカが、へたりとその場に座り込む。

ジライの胸を刃が貫いていた。毛皮の生えた奇妙な形の刃だった。

アスカがジライに憎悪を感じた瞬間だった、彼女の右手にあったものが形を変えたのは……

ジライなんか死んでしまえばいい！　と、嫉妬に狂ったアスカが願った通りに、本は刃となりジライの体を貫いたのだ。

老人は勝利を確信していた顔を歪め、けげんそうに抜け忍を見つめた。傷口から血が一滴も流れ出ない。右肩から胸にかけて、刃で貫かれているというのに……

「その体……きさま、魔族に身を売ったのか？」

「……さて、いかがでしょうなあ」

苦痛に顔を歪ませながら、ジライは右手で胸を貫く刃に触れた。

もとの姿に戻るよう、心で命じながら。ジライの体を貫いていたそれは、瞬く間に元の姿に戻り、ジライの右手に収まった。大魔王の闇の聖書は、持ち手の意のままに形を変える性質のものだったのだ。

「くぅぅ……」

傷は魔族の再生能力によって塞がった。が、憑依者の命を救った事により、魔は活性化してしまった。ジライの血肉に一層、馴染んでしまったのだ。

「さすが、我が父……まともにやり合っては勝てぬゆえ、えげつない策できましたな。何も知らぬアスカの恋心を利用して我を狙わせるとは……」

頭（ちち）を睨んだ後、泣きながら茫然と自分を見上げている妹にジライは瞳を細め覆面より笑みを覗かせた。

「泣くな。おまえになら何をされても構わぬ……この傷がモトで命を落とす事になっても悔いはないわ」
「ジライ……」
「達者での、アスカ。おまえの望みはかなえてはやれぬが、おまえはこの世にただ一人の妹……我が宝じゃ。愛しく思うておる」
愛しい……？　アスカの切れ長の瞳から涙があふれた。ジライから愛の言葉を贈られたのは初めてだった。
「……では、四の書、お借りいたす。里の者にかけた邪法は明日にも解きまする」
ジライは姿を消した。
それが体術なのか忍法なのか、魔族の力を借りた移動魔法なのか、忍者頭にはわからなかった。

「おぬしがセレスか？　ほうほう、これは、これはエリス様似の別嬪さんじゃのう。面倒くさいゆえ弟子なんぞ欲しゅうなかったが、おぬしが相手なら、ちょいとの間なら遊んでやってもよいぞ」

ランツおじい様と一緒にケルベゾールドを倒した英雄――当代随一の大魔術師カルヴェル様……俗世との関わりを厭いエウロペの山の頂上のお城で世捨て人として暮らしていらっしゃる方の元に私は弟子入りした。
神聖魔法を習う為だ。
国王陛下付きの近衛兵になるには、聖騎士の叙勲を受けなければいけない。聖騎士は騎士の中の騎士であり、神聖魔法をもって邪悪を退ける魔法騎士でもある。私が真剣に聖騎士を目指しているのだと知って、お父様がカルヴェル様にお手紙を書いてくださったのだ。
今世の女勇者に、神聖魔法の手ほどきをして欲しいと。

そうなったのは……私が他の聖騎士見習いの方々とご一緒に修行ができなかった為でもある。エウロペ教会に滞在し司祭様達からお教えを受けるなど……女の身では不可能だから。

山の頂にある不思議な城で、私は一ヶ月を過ごした。

歌を歌う植物、勝手に歩き回る家具、おしゃべり好きな蝋燭、食べても食べても減らない食堂の豪勢な食事、執事役を勤める意思を持った石像、警備役の合成獣（キメラ）、魔族なのに邪悪さは欠片も無い悪戯好きの使い魔……

カルヴェル様の魔法に支配された城は、常識では考えられない世界だった。城中の全てのものが生きていて、それぞれが好き勝手な事をしているのだ。だが、恐ろしくはなかった。魔法生物も使い魔も、皆、陽気で楽天的な性格だったからだ。彼等は私を客人としてもてなし、剣術の稽古の相手にも、話相手にもなってくれた。

魔法の師となってくれたカルヴェル様は……

お師匠様は……

とぉ～ても、変な方だった。

黒のローブが似合う白髪と白髭、深い皺の刻まれた柔和なお顔……最初はその外見通りの、人徳者かと思ったのだけれど……

お師匠様は悪戯好きで、私をからかってばかりいた。真面目な顔をして嘘をつくのだ。『魔法習得には絶対、必要！』と、言ってセクシー・ポーズを私に教え、ことあるごとに口にするのも恥ずかしい格好を私に強要したのだ。

Hな性格だったのだ。

でも、魔法教師としての技量は、すさまじく非凡だった。魔法素人が魔法を習得するには、時間がかかる。一つの呪文を覚えるだけで、半年から一年かかるのが普通だ。しかし、私は初期魔法とはい

え、たった一ヶ月六つの神聖魔法を習得できた。
全てお師匠様のおかげだった。
それに、お師匠様はいつもニコニコ笑っておちゃらけてばかりいたけれども……本当に大切な事は大事にする方だった……
女である事を恥じていた私……
勇者の剣を持てない自分を嫌っていた私……
世の人々にそしられ、お姉様にご心配をおかけしているとわかっていても、それでも、勇者になりたいとあがいていた私……
そんな私に救いの言葉を与えてくださったのだ。
「勇者なんぞ、やりたくなければやめるがいい。やめるのは簡単じゃぞ。好きな男をつくり、その男の子を孕めばよい。子をなせば、剣なんぞ振るえなくなる」
そう聞いて、私は怒った。誰かが『勇者の剣』の守り手とならなければいけないのだ。大魔王が復活した時、剣の振るい手がいなければこの世は滅びてしまう。お姉様が男子をなすまで、その子が大きくなるまで、私は勇者でいる義務があるのだ。
「ならば、おぬしの姉が男子を産めぬ時はどうする？」
勇者を続けるだけだ。お姉様が女の子をもうけてくだされば、その子が男子を産むまで……
「じゃが、セレスよ、おぬしの姉が一人の子ももうけられない未来もありうる。その場合、おぬしの死と共に勇者の血は絶える。ケルベゾールドを倒せる唯一の人間を失えば、この世は魔族のものとなるであろう」
そんな恐ろしい未来……考えたくもなかった。
「だが、そうとなったら、そうとなった時のことよ。おぬしも、おぬしの姉も気に病む必要はない。この世は神の理に支配されておる。勇者の血筋が続くか否かも、神の思し召し。今、勇者の家系に男子が居らんのも神の御意思じゃ。おぬしがおなごとして生まれてきた事には必ずや意味がある。だから、その身を恥じるでない。心のおもむくままに生きよ」

心のおもむくまま……

「世の犠牲となって勇者をやる必要はない。嫌ならやめよ。おぬしが嫌々勇者をやっても神はお喜びにならぬだろうし、そんな人間が世を救えるはずもない」

私は……

勇者になりたい！

人々を……

いいえ、愛する者達を守りたい！

愛する者たちが幸せに暮らせる世界を守りたい！

私は犠牲じゃない！

なりたいから、勇者になるのだ！

勇者であり続けるのだ！

そう叫ぶと、お師匠様はニッコリと微笑まれた。

「ならば、勇者として生きるがよい。勇者の剣を持てずとも、おぬしは勇者じゃて」

五つの道　3日目（2）（後書き）

忍の里では、ほとんどの場合、子供は親元で育てられません。ジライとアスカは別々に育っています。

五つの道　4日目（1）

「……見えなかった」

夜明け前、仮小屋で目覚めたアジャンは開口一発そう言うや舌打ちをした。同じ小屋で眠っていたハリハールブダンが寝袋から体を出し、けげんそうに尋ねる。

「何が見えなかったのだ？　夢か？」

その場合、『見えなかった』ではなく『見られなかった』という表現が正しいのだが。

アジャンは赤毛をボリボリと掻き、何でもねえと不機嫌そうに顔をそむけた。

眠る度に、アジャンはセレスの夢を見ていた。

闇の中で、光の結界に包まれ胎児のように身を丸め、全裸でセレスは眠っていた。しかし、最初、彼女は三歳ぐらいの幼児だったし、次の夜でも十歳前後。幼女趣味はないので、裸を見ても何とも思わなかった。

夢を見る度に、セレスは大きくなっていった。昨晩の彼女など、子供（ガキ）というよりは少女だった。まだまだ食指が動く年齢ではなかったが……

おとといまでは、はっきり見えていた裸身が、昨晩はよく見えなかった。光の輝きが増し、内にいるセレスの体の辺りがボヤけていたのだ。顔のあたりはおとといと同じ光度だったので、表情もわかったというのに。

（どういうこった？　女勇者様が恥ずかしがって隠してるのか？　俺が見てるって気づいて？　て、事は……あの女、意識があるのか？）

何となく……アジャンは面白くなかった。

（ケッ！　あの馬鹿女、俺の事を、裸の女と見れば見境なく襲う色魔とでも思ってやがるのか？）

大金を積まれたって、くそ忌々しい女勇者になんぞ手を出すものか！　俺は処女は嫌いなんだ！　と、ブツブツ独り言を漏らす赤毛の戦士を、ハリの戦士は眉をしかめて見つめていた。

昨日からこの男と同じ犬橇に乗ってケルティを走っているのだが、シャーマン能力の高い赤毛の戦士は直感だけで行動し、すぐに己の世界に浸ってしまう。同行者の存在を忘れてしまうのだ。

ハリハールブダンは、赤毛の戦士の邪魔をしないように静かに犬達に餌をやり、旅立ちの準備をしようと思った。今日も、又、目的地の知れぬ旅をしなければならないのだから。

ナヴィアスの要塞――河沿いの、頑健な岩作りの五階建ての建物は黒いものどもに囲まれていた。さまざまな物に憑依した千とも万ともつかぬ魔族だ。

要塞の中には魂を封印された女勇者が居り、無防備な状態で眠っている。彼女を殺さんが為、魔族達は集ったのだ。光に吸い寄せられる蛾のごとく……。

木、岩、水、雪、氷、獣、鳥、人……この世に存在する何かに宿ることで、魔族は現世に干渉する能力を得ている。

しかし、魔族の能力は、宿主の技量によって制限される。魔界で高位の力を誇っているものでも、知性が低いものに憑けばそれに見合うほど愚かとなり、木に憑けば火が弱点となり、水に憑いて干上がればこの世から消滅してしまう。

どれほど力の強い魔族であっても、この世界に出現した時点で、この世界の理の支配を受けるのだ。

要塞の側にひしめいているのは、無機物や知性の低い動物等、ろくでもない器に憑いたモノばかり。自我の強い人間に比べ憑依は難

しくないのだが、その分、それに憑いて出現してもたいした力は使えない。できるのは、瘴気を撒き散らし、人を殺し喰らうことぐらいか。魔界での能力がいくら高かろうが、そんなものに憑いた時点で『下級魔族』と断じられるほどの弱い力しかこの世にもたらせなくなるのだ。

だが、下級魔族の数は時と共に増すばかり。女勇者を殺す為に、魔界の住人も手段を選ばず、憑依しやすいものに憑いて数を頼りに攻めてきているのだろう。

彼等は、強力な結界で守られた要塞を、遠巻きに眺めていた。要塞の周囲には強力な結界が張られている。下級魔族では、それを破ることはできないどころか、結界に触れる事すらかなわない。触れただけで浄化されてしまうからだ。

要塞の中に極上の獲物が居るのに中に入る事すらかなわず、魔族は苛立ち悔しがっていた。その思いは瘴気となって広がっていった。瘴気は、要塞の周囲の常緑樹の森を枯らし、森に居た鳥や小動物の命を奪い、雪を黒く染め、徐々に強まっている。女勇者を殺すまで魔族は増え続け、飽くことなく瘴気を撒き散らし続けるのだ。

その小物魔族の群れの中に、忍者ジライは潜んでいた。

魔族の能力で女勇者の気配を探し、ジャポネから移動魔法で渡って来たのだが……

（近寄れぬ……）

魔をその身に宿しているジライは、要塞を守る光輝く結界をその目に映していた。ジライに憑いているのは、高位の魔族ばかり。あの結界に触れても、多少ダメージを喰らうだけで浄化される事はない。やりようによっては結界を強引にねじあけ中に入る事もできよう。

しかし、要塞の中には数多くの聖職者が籠もっており、要塞の常として内部には魔封じの結界が何重にも張り巡らされているはず。

下手に中に入れば、高位の神聖魔法の餌食となるか、魔封じに封印されて身動きがとれなくなるかだろう。現在のジライの性質が、魔そのものである以上。

（せっかく四の書を手に入れたというのに……）

セレスに近づけねば、邪法を祓う事はできない。

だが、黒の気を封じて幻術を用いて人の振りをしても無駄だろう。聖職者ではないグジャラにすら正体を見破られてしまったのだ。要塞の中にはバンキグ人の聖職者、神秘を見通す眼を持つアジャンやシャオロン、インディラ僧のナーダが居るのだ。全員をあざむけるとは、到底、思えなかった。

ジライは己が胸を押さえた。周囲に瘴気が満ちているせいか、体内の魔族がはしゃぎ、熱の塊のようになって激しく暴れている。ともすれば、意識を奪われそうだ。

百人の兵士と三人のシベルア司教に二十人の司祭、十人の宮廷魔法使いを、ルゴラゾグス国王はセレス護衛の為に、要塞に詰めさせていた。

シャオロンは彼等の厚意に甘え、充分な食事をとり、昨夜は眠らせてもらった。手元に『龍の爪』を置いて、セレスの寝台のすぐ側のソファーに横たわって、火急の折には戦えるよう準備を整えた上ではあったが。

四人のシベルア司祭に囲まれた寝台の上で、セレスは眠っている。いや、彼等の魔法によって生かされている。ただ眠っているだけのような穏やかな顔をしているが、魔法で身体機能を維持してもらわなければ、セレスは死んでしまうのだ。

その痛々しい姿を目にするのは辛かったが、シャオロンは自分ができるただ一つのことをひたすら続けていた。

いざという時には命に代えてもセレスを守る！　自分ができる事はそれだけだから何があってもやりぬく！　その為にお側を離れま

い！　少年は覚悟を決めていた。
「シャオロン殿……」
背後からためらうように声がかけられる。振り返ると、そこにはナーダの部下の老忍者ガルバが居た。

「どうしました、シャオロン？　何かあったのですか？」
インディラの王族姿のナーダが、糸目を驚いたように丸め、東国の少年を見つめた。片時もセレスの側を離れまいと護衛に徹していた少年がセレスの部屋を出て、三階も下の廊下の外れまでやった来たのだ。革袋に入れた『龍の爪』を背負って。何事かあったとしか思えなかった。
「……お話があります、ナーダ様」
シベルア語でそう言ってシャオロンは、ナーダと一緒に要塞を回っていた者達に会釈をした。シベルア司祭三人と魔法使い二人、それに兵士五人だ。ナーダは彼等と共に要塞内の魔封じや結界を点検し、助言を与え、結界の張り直しや魔族相手の警備についての指示を与えていた。
インディラ教の総本山で育ったナーダは魔に対抗する術を数多く知っていた。信仰する神は異なっても、邪悪を祓う方法にはさほど違いはない。司祭達はナーダの知識の深さに舌を巻き、素直にその助言に従って魔法使いと共に要塞に魔法をかけなおしていたのだ。
「少々、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」
シベルア司教達は頷きを返し、ナーダに要塞の地図を見せ、今後、点検する箇所を教えた後、立ち去って行った。
彼等が廊下を曲がり、その姿が見えなくなってから、少年はキリリと眉をひきしめて、大柄な武闘僧を見上げた。
「ナーダ様、寝てください！」
「は？」
「ガルバさんから伺いました。昨日から、ルゴラゾグス国王陛下と

難しいお話をなさったり、警備隊長に魔族との戦闘のコツを伝授したり、大僧正様宛にお手紙を書いたりで、ほとんど寝てないんだとか！　今朝も早くから警備の見直しで要塞の中を歩き回られているそうですね。駄目ですよ、休まなきゃ！　そんなんじゃ倒れてしまいます！」

「……シャオロン」

「前に、セレス様もおっしゃってました！　寝て休めて必要な時に動けるよう体調を整えておくのも武人の心得だって！」

「……」

真剣な顔の少年に対し、ナーダはにっこりと微笑んだ。

「ご心配をおかけしてしまったようですね、すみません……ですが、今は休むわけにはいかないのですよ」

「ナーダ様！」

「あなたもアジャンもジライも、セレスの為に自分ができる最善の事をしているのです。私も私ができる事をやらなくては……。バンキグの方々は魔族との戦闘経験が乏しい上、聖なる武器の振るい手はルゴラゾグス国王しかいらっしゃいません。魔族との戦闘で、聖なる力を持たない人間はどうやって己が身を守ればいいのか、神聖魔法を使う聖職者をどんな形で支援すれば良いのか、経験と知識をもってお伝えする必要がありました。それに、結界や魔封じの見直しは、この要塞の人間全員の生命に関わる大事。点検は早いほど良いのです。今は眠ってなんていられませにょ」

「だけど！」

「大丈夫ですよ、シャオロン、ちゃんと仮眠はとっています」

「でも！」

「まあ、自分でもちょっと無理をしてるかなあって自覚はあるのですが、あと二日なんですから、気力でもちますよ」

「あと二日？」

「ええ、この騒動、明後日にはカタがつくはずです」

「明後日？……どうしてですか？」

「だって」
ナーダは小さく笑った。
「アジャンとジライが何処かで何かをしているんですよ。彼等は私一人では五日しかセレスの体を維持できない事を知っています。ルゴラゾグス国王の援助がいただけたので、今は五日以上、セレスの体を生かせますが、彼等はその事を知りません。二人にとっての期限は、セレスが倒れてから丸五日後、つまり、明後日の昼までのままです。明後日の昼までにはセレスは目覚めるはずです。彼等が意地でもセレスを起こすでしょうから」
「……」
少年は口元を緩め、笑みを作った。
「そうですね……オレも、そうだって信じてます。アジャンさんとジライさんが、セレス様の為に必死で働いているんですから……明後日には、絶対、セレス様はお目覚めになっているんだ」
少年の黒いつぶらな瞳に、じんわりと涙が浮かぶ。気を張り詰めすぎ、硬くなっていた体からも少し力が抜ける。少年は右腕で急いで目の周りをぬぐった。
「明後日には決着がつくんだったら、尚更、ナーダ様はお休みになるべきです！」
「え？」
「体を休めて、体力と魔力を回復しなきゃ駄目ですよ！　明日、要塞の外の魔族をやっつけましょう！　セレス様の為に頑張ったアジャンさん達の通り道を作らなきゃ！」
「シャオロン……」
「一緒にアジャンさん達を迎えましょう。今は無茶しないで、休んでください。お願いです」
「……」
「結界と魔封じの点検が終わったら、絶対、寝てください！　絶対ですよ！」
「あ、でも……」

「何です！」
「昼食後に、ルゴラゾグス陛下の戦斧の鍛錬にお付き合いをする約束が……魔族戦を前提とした戦斧の使い方を伝授しようかと」
シャオロンは身を乗り出した。
「そんなの、オレがやります！」
「へ？」
「異種格闘戦になっちゃいますけど、『龍の爪』でオレが王様のお相手をします！　魔族との戦闘のコツをお教えして、気を放出しすぎないように注意（アドバイス）すればいいんでしょ？」
「……ええ、まあ、そうですね」
「なら、オレでもできます！　オレに任せてください！　オレはぶきっちょだし、ナーダ様みたいに何でも上手にこなすなんてできません！　でも、オレでもできることは中にはあるんです！　ナーダ様、何でもかんでもお一人で背負わないでください！　オレやガルバさんやみんなをもっと使ってください！　お願いします！」
「シャオロン……」
「そりゃあ、オレじゃあ、何やっても下手くそだと思うけど……下手くそすぎてご覧になったら、ナーダ様、イライラしちゃうかもしれないけど、ちゃんとやる事はやります！　下手なのは大目にみてください！　オレに任せて、ナーダ様、少しおやすみになってください！」
「……」
少年を静かに見つめ、武闘僧は静かに微笑んだ。
「本当に……あなたは大きくなりましたね」
「え？」
「出会った時、あなたの命は消えかけていましたし、目覚めた後、全てを失ったあなたはとても深い傷を負った……あなたは私にとって、ずっと守り導くべき存在でした。でも、今のあなたは、とても逞しい……。頼りがいのある従者仲間です」
「ナーダ様……」

ナーダはにっこりと微笑んだ。
「あなたの言うとおりにします。眠りましょう。陛下のお相手は、あなたにお願いします」
「はい！　任せてください！」
「でも、良いのですか、セレスの側を離れて？　あなた、セレスにずっと付き添っていたのでしょ？」
「……オレがいない間は、ガルバさんがセレス様の護衛をしてくださいます」
「ガルバが？」
「それに、神聖魔法の使い手が四人もセレス様のお側にいらっしゃるんです。オレなんかが、ちょっとぐらいお側を離れても、セレス様は大丈夫ですよ」
口ではそう言っていたが、少年の表情は暗く、握り締めた拳も内面の不安を表していた。仲間（ナーダ）の為に、無理をしているのだ。本当は、片時もセレスの側を離れたくないのに。
けなげな少年の肩を叩き力つけようと、ナーダが動いた時だった。ドタバタと派手な足音を立てて、カラドミラヌが廊下の角から現われたのは。
「居た！　ナーダさん！　お小姓も一緒か！」
背に戦斧をしょったバンキグの若者だ。ひどく焦っているようで、ナーダの右腕をぐいっと掴み、元来た道を引き返そうとする。
「物見櫓（やぐら）に行こう。大変なんだ」
「大変？」
「あんたの部下の忍者が、無茶苦茶やってるんだ。ともかく、見てくれ」

犬橇を操るアジャンの背、周囲に広がる雪の森、厚い雲から漏れる光を見渡し、橇にどっかりと腰を下ろしているハリハールブダン

は両腕を組んだ。
「方角からすると……ホルムに向かっているようだな」
「そうかもな」
振り返りもせず、答えるアジャン。
ハリのシャーマン戦士は溜息をついた。
「ホルムまで移動魔法で送ろうか？」
「いや、いい。ホルムが目的地かどうかまだわからん。このまま橇を走らせてりゃ、そのうち止まりたい場所に着くだろう」
何処へ向かっているのかわからないとはやっかいな勘だとこぼし、ハリハールブダンは瞼を閉じた。今はアジの戦士を手助けすべき時ではないようだ。ならば、魔力で周囲を探りつつ、カルヴェルを求め世界中に探知の魔法を飛ばそうと、彼は左手の指輪に助力を願った。

深く陥没した大地の上に、忍者ジライが佇んでいた。
凄まじい重力球を続けざまに放ち、そこに存在していた魔族ごと大地をえぐったのは他でもない、彼なのだ。ジライはさまざまな魔法を使う。魔族は、重力球に押し潰され、或いは火炎で焼かれ、或いは雷、水、風等に巻き込まれて動きを奪われたところを、聖なる武器とその武器から生まれる聖なる水によって浄化されていた。強力な魔法を使う魔族でありながら、聖なる武器を振るう忍者。彼を恐れ、潮が引くように小物魔族が周囲から離れて行った。
けれども、忍者は容赦なく逃げゆくものどもを攻撃し、『ムラクモ』で斬っていた。武器が放つ聖なる水は、振るい手にとっても脅威だったが。水が体にかかれば、ジライとて浄化されてしまう。風の魔法を駆使して、水が飛ぶ方向を調節し、ジライは『ムラクモ』を操った。
派手な動きで魔族を葬り、要塞から注目を集める為に。

「あの忍者、ノリエハラス様のお気に入りのあいつだろ？　あの格好はそうだよな？　あんたの部下だろ？」

　要塞の最上階の物見櫓に昇ったナーダとシャオロンは驚いて身を乗り出し、凍河の側の枯れた森の近くで魔族と対峙している者を見つめた。東国の忍者装束に、雨を降らす聖なる武器。あの場で戦っているのは忍者ジライに間違いなかった。しかし……

「ジライさん……一体、どうして……」

　シャオロンの顔から血の気が引いた。この世の神秘が見通せる少年の眼には見えるのだ。仲間（ジライ）の体に憑依している何百という数の魔が……

「ジライ……」

　ナーダは唇を噛み締めた。仲間（ジライ）から爆発的に広がっている黒の邪悪な気……凄まじい瘴気……。人間が放てるものではない……ジライは魔に堕ちたのだ。

「魔族を倒してくれるのはいいけど、ああ派手に地面に穴を開けられちゃあなあ。やり過ぎだろ、あれ」

　魔の気に疎いカラドミラヌがとんちんかんな事を言う。

　二人の司教を連れ、ナーダよりも体格のよいルゴラゾグス王も、物見櫓に昇って来た。

「勇者の従者殿。おまえ達の仲間にしか見えぬあの男、司教様は魔族だと断言しておられるのだが？」

　要塞中を震わせかねない大声だった。赤銅色の髪の王に対し、ナーダはかぶりを振った。

「何が起きたのかはわかりません。ただ、あの男が女勇者様を裏切り魔に走るなどという事はありえません。あの男は女勇者様に深い忠誠心を抱いていました。女勇者様を裏切るぐらいならば、死を選ぶはずです」

「ナーダ様！　あれを！」

シャオロンが指差したのは天だった。
天に紙に書かれたように巨大な黒い文字が浮かんでいる。共通語だった。
『アジャン、ナーダ、シャオロンへ。
セレス様をお救いする術(すべ)あり。
他を交えず話がしたい。
外に参れ。
この身は黒く堕したが、セレス様への思いに変わりはない。彼の方をお救いしたい。
協力を乞う。
ジライ』
ナーダとシャオロンは食い入るように天を見つめた。
「何と書いてあるのだ？」
ルゴラゾグス国王の求めに応じ、ナーダは天に浮かぶ文字をバンキグ語に訳して伝えた。が、天から顔をそむけることはできない。眉をしかめ、涙を堪えるような顔で、ひたすら天を見つめ続けていた。
「……行きましょう、ナーダ様！」
拳を握り締めたシャオロンが仲間(ナーダ)へと迫る。
「ジライさんの体には魔族がいっぱい憑いてますけど、セレス様をお救いしようと必死に頑張って、それで、きっと、ああなっちゃったんです！　何か理由があるんです！　オレはジライさんを信用します！」
「ええ……わかっています」
辛そうに瞳を伏せるナーダに、シャオロンは更に近寄った。
「シャダム様もおっしゃっていました！　『共に戦う仲間を信じよ』って！　『友が闇に堕ちたように目に映ったとしても、信じ続けるのだ』って！」
「……あなたの言うとおりです。私もジライを信じていますよ」
ナーダは左手で目元を覆った。魔族に憑かれながら自我を保ち、魔の能力すら意のままに操っているという事は……ジライと魔は融

合し、同化しているのだ。
神聖魔法では、もはや分離は不可能。神聖魔法を用いれば、ジライ本人まで浄化し、消滅させてしまう。そして、魔を体に宿していれば、いずれ……人は人でなくなる。神の庇護を失い、魔界の住人となってしまうのだ。
僧侶であるナーダには、ジライの未来が見えていた。

結界の一部を解いてもらって、ナーダとシャオロンは要塞の外に出た。ジライが近辺の小物魔族を浄化しているので、結界が解けても魔に内部まで侵入される恐れは無かった。
「セレスの側に残ってもいいのですよ、シャオロン。二人揃って危険に身を投じる必要はありません」と、ナーダ。
「危険なんかありませんよ。仲間に会いに行くだけですから」と、少年はにっこりと笑う。
「ルゴラゾグス国王様とガルバさん、それにシベルア教会の司教様や司祭様がいらっしゃるんです。オレが居なくても、セレス様は大丈夫ですよ」
二人の前に……ゆっくりと、東国忍者が近づいて来る。黒の気をたなびかせながら……
二人と向かい合う形で、ジライは足を止めた。
「アジャンはどうした?」
ジライの声は常と変わらなかった。
「アジャンは西に向かいました。西にセレスを救う術(すべ)があると言って、ね。シャーマンとしての勘のようです」
「ほう。それは頼もしいな。我が力及ばなんだ時は、あやつがセレス様を救ってくれるわけか」
覆面から覗くジライの目が笑みを形づくる。目の色は血のように赤かった……
「ジライ……あなた、何故、そんな体になったのですか? 魔族に

体を乗っ取られたのではありませんね。魔族と取引をしたのでしょ？　どんな契約をもって、その体に魔を棲まわせたのです？」

「おまえらと別れてすぐに、魔を呼び出し、たきつけた。五日のうちに我を精神的に殺してみせよと、な。内なる魔が我が精神を凌駕した瞬間、我は死に、魔族はこの体を手に入れる事になっておる」

強張っていたナーダの顔が、ほんの少しだけやわらなか表情となる。

「では……五日間……あなたが自我を保ち続ければ、魔の呪縛から逃れられるわけですね。五日後、つまり明後日の昼には契約が解け、あなたの体から魔は消えるのですね？」

「……明後日の昼まで、正気を保てるとも思えぬがな」

「ジライ！」

「我の事などどうでもいい。まずは話を聞け。呪を祓うには、呪を理解し、呪に合わせた祓いをせねばならぬ。その理屈はわかるな？

この前も言うたが、ゼグノスの憑代の体にあった血文字がよう見えなかったので、セレス様にかけられた呪の種類がわからなかったのだ。こうとなっては、通常の方法では祓いは不可能……そこで、あらゆる邪法を統べるこの世で最も邪悪な魔法道具（マジック・アイテム）を利用する事とした」

魔族の能力を使い、ジライは異次元から獣の毛皮で覆われたぶ厚い本を呼び寄せた。宙に浮かぶ本より、奔流のように瘴気が広がる。ほんの少し瘴気に触れるだけで、肌に刺すような痛みすら走った。

「ナーダ、きさまならば知っていよう。これは大魔王の闇の聖書……この世に三冊しか現存しておらぬ本。その内の一冊だ」

「これが？」

ナーダは嫌悪と共に本を見つめた。初代ケルベゾールドが四人の従者（四天王）に与えた四冊の邪法指南書。暗黒魔法とも呼ばれる邪法の全てが、記された本だ。強力な術がかけられている為その内容を文字に写す事ができず、闇の聖書を手に入れようと、大魔王の信者達は血で血を洗う戦いを繰り広げているという噂もあった。三

百年前、七代目勇者ロイドがその内の一冊を浄化したので、大魔王の聖書は三冊になったと聞いてはいたが……実物を見るのは初めてだった。

ジライは四の書を再び異空間に戻した。長く側に置いておくと、瘴気の影響を強く受けすぎる。内なる魔族に活力を与えすぎてしまうのだ。

「闇の聖書は邪法の全てを統べている。書を持つ者に、全ての邪法を司る力を与えるわけじゃ。つまり、」

ジライの目が妖しくきらめく。

「書を持つ者が望めば、既にかけられた邪法の効力を消す事もできるのだ」

「あ」

シャオロンが拳を握り締め、一歩、前へ進み出る。

「じゃ、セレス様にかけられた邪法も祓えるのですね？」

「さよう」

ジライは頷きを返した。

「書を持つ者の技量と生命力に負うところも大きいが、邪法ならば全て祓えるはずじゃ」

ナーダは眉をひそめた。

「では、セレスにかけられた呪が、邪法ではなかったら？　神より人が与えられた魔法……その系統の呪だったら、闇の聖書では呪いは」

「祓えぬな」きっぱりとジライは言い切った。

「じゃが、ゼグノスの憑代は血文字を用いていた。何らかの邪法を用いていたのは確実。それは闇の聖書にて祓える」

「しかし」

「そう、ゼグノスの呪が、邪法と魔法を掛け合わせた新しき魔法であった場合……呪は祓いきれぬ。セレス様にかけられた呪は半ば残ってしまうじゃろう。しかし、残るのは魔法なのじゃ。大魔法使いの御力にすがれば、ちゃちな呪など解けるじゃろう」

「カルヴェル様を頼れって事ですか？」と、シャオロン。
「カルヴェル様でもケルティの上皇でもいい。大魔法使いの魔力ならば、ゼグノスの呪に勝るはず。ナーダ、シャオロン、そういうわけじゃ。要塞に籠もっている連中に、事情を話し、我を内に入れるか、セレス様のお体を外に運び出すか決めて欲しい。見ての通り、我は魔を宿しており、時が経てば経つほど内なる魔を制御しきれなくなる。はようしてくれ。我はセレス様をお救いしたい。我（われ）が魔に屈する前に、全てを終わらせたい」
「……」
「ジライさん！」
唇を噛み締め、うつむくナーダ。驚くシャオロン。二人の顔を見渡してから、忍者は言葉を続けた。
「大魔王の闇の聖書を使う時には、シベルア教会の者に立ち会ってもらっても構わぬ。周囲に結界を張られてもよい。じゃが、術の邪魔だけはしてもらいとうない」
「ええ……わかっていますよ、ジライ」
ナーダは顔をあげ、穏やかな笑みを浮かべた。
「シベルア司教様達には手出しを控えていただきます。インディラ教大僧正候補である私と、神秘を見通す目を持つシャオロンの二人で、あなたを見張ります。術の邪魔はしませんが、二人の目から見てあなたが魔に屈したとわかった時には……」
ナーダは糸目を更に細め、生まれて初めて心より愛した男を……静かに見つめた。
「あなたを殺しましょう。セレスの命を守る為に、女勇者の従者として、あなたを浄化してあげます」
「そんな！　ナーダ様！」
シャオロンが責めるように、武闘僧を見上げる。
しかし、東国忍者はさも当然だと言わんばかりに武闘僧に頷きを返し、
「その時には、頼む」

と、言葉短く、己の死を辞さない覚悟を示すのだった。

五つの道　4日目（2）

要塞の表門まで女勇者の肉体は運ばれた。四人の戦士が担ぐ担架にのせられたセレスには、三人の司教と四人の司祭に六人の魔法使いが付き添っていた。ルゴラゾグス国王もセレスの危機にはすぐに動ける距離でついて行く。

黒の気をまとう忍者は、微動だにしない。敵意や警戒心を露に自分を睨みつけてくるシベルア司教達など気にもかけず、魂の抜けた女主人をひたすら見つめていた。

ジライの左右にはそれぞれ、シャオロンとナーダが立っていた。『龍の爪』を装備した少年は、泣きそうな顔をしていた。それに対し武闘僧は拳を構え、全ての感情を排除した顔で仲間（ジライ）の様子を窺っていた。仲間（ジライ）が魔の力に屈した時には、自らの拳で浄化する為に。殺さねばならないのなら自分の手で……。他の者に彼に触れさせる気はなかった。

そんな主人（あるじ）を老忍者ガルバは、要塞の二階の窓枠に座って見つめていた。バンキグ人の暴走を止めに走るか、女勇者の肉体を保護する仕事に徹するかは状況次第だ。だが、いかなる状況になろうとも、素早く動き、主人の為に働く事に変わりはなかった。

「始めます」

ジライはバンキグ語でそう断ってから、異空間から四の書を呼び寄せた。

獣の皮で覆われた禍々しい本が宙に浮かび上がる。本より瘴気があふれ出し、空気を穢してゆく。

それは……

触れてはいけないものだった。

それを目にするだけで、神に対する冒涜に思われた。この場から逃げ出したくなる本能的な恐怖を抑え、人々は四の書の動きを追った。

東国忍者は何やら呪文を唱えながら、その本を右手にとった。
その途端！
女勇者の体から黒の気が幾筋か煙のようにゆらゆらと立ち上がり、四の書へと吸い込まれ始めたのだ。本はぷるぷると生き物のように蠢き、呪を吸い込んでゆく。
ゆっくりと……
ゆっくりと……
その姿は、獲物を弄んでから味わう獣に似ていた。喰らい尽くすのを惜しむかのように、闇の聖書はなかなか呪を吸い込まない。
東国忍者の体が小刻みに震えだした。前屈みぎみになって、痛みを堪えるかのように左手を己が胸に当てている。呪を唱える声も苦しそうだ。
四の書の瘴気に肉体を冒される苦痛の中、活性化してゆく内なる魔族を抑えているのだ。肉体的・精神的苦痛に苛まれながら、何時まで正気を保てる事か……
やがて……
徐々に……
四の書は形を変えていった。忍者の右手の中で。
茨を持った蔓状の触手に変形したかと思うと、次の瞬間には剣となり、更に次の瞬間には氷柱となった。四の書はさまざまな形をとったが、いずれにしろ、その鋭利な先端を女勇者に向けていた。四の書は、女勇者の肉体を狙っていた。
大魔王の闇の聖書は、持ち手の意思に応じその形を変えるという。東国忍者の内の魔族が四の書を武器と変え、女勇者の肉体を殺そうとしているのだ。
神聖魔法を唱えようとしたシベルア司教を、ナーダとシャオロンが声で、ルゴラゾグス国王が肩をつかんで止めた。
武器と化しても四の書の先端は、女勇者に達してはいない。東国忍者が精神力で、女主人への攻撃を阻んでいるのだ。まだ東国忍者は魔族に屈していない。

緩慢に時は流れてゆく。

もはや東国忍者は立つことすらできず、膝を折ってその場に蹲っていた。武器と化した四の書を握り締め、左手で胸をかきむしり、それでも尚、うめくような声で呪文を唱え続けている。

シャオロンは鼻をすすり、必死に涙を堪えた。少年の目には仲間（ジライ）は変わり果てた闇の姿に映っていた。ジライの内の魔が嬉々として仲間（ジライ）の生命力を喰らっているのに、何もできず見ているしかないのだ。自分が情けなくて許せなかった。

何時、完全に魔に堕ちるかわからない相手への警戒心を捨てる事はできなかったが、ルゴラゾグス国王以下バンキグ人は、己が身を捨ててまで女勇者に忠義を尽くす東国忍者に感動すら覚えていた。

ナーダは微かに眉をしかめているだけで、内面を表に出さず、拳法の型を構えたまま静かに仲間（ジライ）を見つめていた。彼の抱いている激しい感情――愛する者を失いかけている絶望、嘆き、怒りを、少しでも察する事ができるのは部下である老忍者だけだった。

永遠とも思われた長い時……

それにも終わりはあった。

女勇者の体から、黒い煙状の気が漏れなくなったのだ。

全ての邪法を四の書が吸い尽くしたのだ！

すかさず、東国忍者は物質転送魔法で四の書を所有者の元へ送り返した。四の書の邪気に、これ以上、触れるのを恐れて。

しかし……

「ジライ！」

「ジライさん！」

「女勇者の従者殿！」

蹲りうめきを漏らす東国忍者から、爆発的に瘴気が広がりだした。内なる魔を制御しきれなくなったのだ。ジライの体から這い出て来た黒の気が、担架の上の女勇者を狙う。その肉体を冒し、魔に堕とす為に。

その進路を、両手を交差させた武闘僧が塞ぐ。

ナーダの両腕の装甲に触れた黒の気が四散する。彼の両手両脚にあるのは、神獣クールマの甲羅より造った装甲、魔力を防ぎ、邪を退ける神聖防具だ。力弱い魔では触れることすらかなわぬ、清らかなものだ。

ジライが苦痛のあまり、雪の上をのたうちまわる。聖なる武器ほどの浄化の力はないが、神聖防具は装備者の力量に応じて守護の力を発揮する。ナーダの腕には聖なる結界と同様の浄化の力があり、中上級魔族であっても触れればダメージとなる。宿主であるジライにしても目をえぐられたか、指を落とされたような激痛であったろう。

魔法使いが慌てて担架の周囲に結界を張った。女勇者はすやすやと眠っている。自ら呼吸できる状態に戻ったのだ。もう身体機能維持の魔法をかける必要はなくなったのだ。しかし、起き上がる気配はなかった。

ぐったりと雪の上にうつ伏せに倒れる忍者。その全身から黒の気が現われて具現化し、刃となって無力な女勇者を狙う。数百もの魔が女勇者を標的に定め、襲いかかる。結界に突き刺さっても、尚、黒の気は進む。聖なるものを突き破り、女勇者を貫く為に。

それを見て、魔と初めて対峙した若いシベルア司祭は恐慌（パニック）に陥った。禍々しい黒の気を恐れるあまり、神にすがる言葉を口にしたのだ。聖なる言葉は形となり、魔を祓う浄化魔法としてこの世に現われた。

けれども、その浄化魔法は弾かれた。

倒れた男を背後に庇い、バンキグ人達の前にたちはだかる男。その者が張った結界によって。自身を中心に、背後の者をも包む形で球形に聖なる結界を張っている。

「彼はまだ魔に堕ちていません。攻撃はおやめください」

武闘僧ナーダだ。女勇者の肉体を狙いジライの肉体から離れすぎたものは、ナーダの張った聖なる結界に拒まれ、宿主の元に戻れず四散する。堪えきれず、ついにジライが悲鳴をあげる。魔族へのダ

メージはそのまま、宿主へのダメージでもあるのだ。
ジライの内側の魔族が悔しそうに蠢く。術師を殺し結界を解かない限り、外からの攻撃を喰らわない代わりに女勇者も襲えないのだ。だが、聖なる気をまとうナーダに触れるのは、危険すぎた。攻撃する機会をうかがい、ジライの体から伸びる黒の気がナーダを取り囲んだ。
「……殺せ」
雪の大地に力なく倒れているジライが、苦しそうに言う。
「もう長くはもたぬ……じきに精神力が尽きる。この体が魔に奪われる前に、浄化してくれ……」
「嫌です」
「ナーダ……」
「あなたはまだ生きている。あなたの自我が残っている限り、私はあなたを生かし続けます」
「おまえを……殺したい……気が狂いそうだ……体の内の魔族が暴れておる……こやつらを押さえ続けるのは無理じゃ……殺してくれ……」
「そんなの駄目ですよ、ジライさん！」
目に涙をためた少年が、結界の外から仲間（ジライ）を叱咤した。
「顔を上げてみてください、セレス様を！」
「……シャオロン」
「よく見てください！　セレス様の体から邪気は無くなりました！　ジライさんのおかげです！　だけど、セレス様はまだお目覚めになっていません！　眠ったままです！　ジライさんは、呪を祓いきれなかったんですよ！」
「……さようか」
ジライは動かない。顔を上げる体力もないのだ。
「ならば、残りの呪はアジャンが祓ってくれよう……あやつ、西に向かったのであろう？　カルヴェル様かケルティの上皇を連れて戻って来るだろう……」

「後は全部、アジャンさんに押しつけちゃう気ですか？　死に逃げるんですか？　卑怯ですよ、ジライさん！」
「……卑怯？」
「ジライさんには、自分のやった事の結末を見届ける義務があります！　辛くても頑張るべきです！　本当に、今、苦しいのでしょうけど……死んじゃ、駄目です！　生きてください！」
「……我は役目を終えた……」
忍者の声は消え入りそうなほど小さい。
「……セレス様さえご無事ならば……もはや思い残すこともない……逝かせてくれ」
少年はキッ！　と、忍者を睨んだ。
「何、情けないこと言ってるんですか！　それでも、勇者の従者ですか！　そんなジライさんを見たら、セレス様、お怒りになられますよ！」
「……」
ぴくり、と……忍者の指が微かに動いた。
「男のくせにウジウジウジとみっともないって言われちゃいますよ！　目を覚ましたセレス様、めちゃくちゃ怒りますよ！　廊下の端まで届くほど、ぶん殴られちゃうんじゃないんですか！」
ぴく、ぴく、ぴく、と、忍者の指が動く。
その時、その場に居る全員の心に、声ならざる声が届いた。遠方からの心話だ。
《ナーダ、ジライ、おぬしらを二日ほど異次元に封印してやる。そこには他者は決して入れぬし、中の者も外には出られぬ。ジライが魔に堕ちたとて、殺せるのはナーダ一人よ。他には被害は及ばぬ。そこで殺し合うか治療に専念するかは、おぬしら次第じゃな》
ナーダ、シャオロン、ガルバがハッとして顔を上げる。その人を喰ったようなしゃべり方、精神波が誰のものか間違いようもない。
「カルヴェル様！」
ナーダ達が口にした名に対し、バンキグの魔法使い達が恐れとも

敵意ともつかぬ声を漏らす。当代随一の大魔術師の名はバンキグにも伝わっているようだ。

「カルヴェル様……？」

苦しい息を吐きながら、ジライが願い事を口にする。

「カルヴェル様、どうかセレス様を……」

当代随一の大魔術師カルヴェルならば、セレスを救えるはず。忍者はそう信じきっていたのだが……

《それはできぬ》

意外な答えが返された。

《おぬし、わしを買いかぶりすぎじゃ。大魔術師のわしとて、できぬ事はあるのだ。わしはセレスにかけられた呪の種類を見抜く事はできるが、セレスを救う為に必要な精神的資質に欠けておる。わしではセレスは救えん》

「そんな……」

《セレスを救う為には、セレスと同化し、セレスの精神世界に入ってゆける柔軟な魂が必要……。ジライよ、おぬしが邪法を祓ってくれたゆえ、アジスタスフニルがセレスと触れ合えるようになった。あの男が残りの呪を祓う。おぬしは二日ほど異次元に籠もってナーダの治療を受け、魔の気を抑えるがいい。そして、二日後に今世に戻り、アジスタスフニルの仕事ぶりを見よ。おぬしが身をはって解いた呪の残り、あの男に祓えぬようなら罰を与えてやれ。その為にもおぬし、死ぬわけにはいかぬぞ》

「カルヴェル様……」

《死ぬな、ジライ。わしは、おぬしを気に入っておる。おぬしが死ぬと、わしも寂しい》

「……ありがたきお言葉……嬉しゅうござる」

満足そうな精神波が伝わる。ニコニコと上機嫌に笑っている老人のイメージが全員に伝わってきた。

《と、いう事じゃ。おぬしらを封印してよいか、ナーダ？》

「ええ、お願いします」

そう言ってから、ナーダはバンキグ国王に頭を下げた。
「勝手をいたします。どうか、女勇者様を、よろしくお願いいたします」
「うむ」
赤銅色の髪の王の大声が響き渡る。
「後の事は任されよ！　そこな忠義者の命、救ってやってくれ！　わしからも頼む！」
「は。ありがとうございます」
つづいて、ナーダは少年を見つめた。
「セレスの護衛、頼みましたよ」
「はい、ナーダ様！」
少年は一歩前に進み出た。
「こっちの心配は無用です！　オレ、体を張って頑張ります！　だから……ナーダ様はジライさんの治療に専念してください！　お願いします！」
ナーダはチラリと要塞を見上げた。
二階の窓辺の老忍者が肩をすぼめ、やれやれと頭を振っている。
無茶ばかりする主人を責めるように。
ナーダはそちらには軽く手を振っただけで済ませた。ジライが魔に堕ちた時には、ナーダとて無事にすむとは限らない。二人ともその事を了解しているのに、あえて何も言わないのだ。
《では、送るぞ》
その思念と共に、ナーダとジライの姿がふっと消える。
シャオロンは二人が消えた空を見つめ、決意をこめ、顔をひきしめた。

「そこか！」と、アジャン。
「見つけた！」と、ハリハールブダン。

二人はほぼ同時に叫び、同じ方角に顔を向けた。犬橇が向かう先……春の日差しが照る雪の野原に、一人の老人が佇んでいる。長い白髪と白髭を風にたなびかせて。黒のローブをまとい、魔法使いの杖を右手に老人はニコニコと楽しそうに微笑んでいた。

当代随一の大魔術師カルヴェルだ。

犬橇を止めつつ、アジャンは老人に声をかけた。

「よぉ、ジイさん。死んでなかったようだな」

「ご無事で何より」

「いや、まあ、実は、あまり無事ではなかったのじゃが」

老人は白髭を撫でた。

「ジライのおかげで、今世に戻ってこられた」

「……どういうこった？」

「ふむ。実はの……ちょいとドジを踏んでしもうて、セレスの魂と一緒に魔界に閉じ込められておったのじゃ」

「魔界に？」と、ハリハールブダン。

「魔族の棲む闇の世界よ。天も大地も海もない闇ばかりが広がる空間に、所狭しと魔がひしめいているのじゃ。瘴気が充満していて臭かったぞ。常人ならば、あの世界に迷い込んだ瞬間、魔の気にあたって死ぬわな」

「魔の領域からよくぞご無事で……」

「わしは大魔術師じゃから、の」

えっへんと老人が胸をそらせる。

「結界にさえ籠もれば、どんな世界であろうと何万年も生きられる。じゃが、ゼグノスの奴、呪によって移動系の魔法を封印してくれおっての、移動魔法も使えんし次元通路も開けられんしで、セレスの魂と共に魔界を彷徨うしかなかったのだ。ジライがゼグノスの邪法を全て祓ってくれたゆえ、魔界に穴を開け、こうして戻ってこられたのよ」

「……て、ことは、ガキんちょセレスの周りで光っていた球があんたってわけか。あんた、結界となって、魔族からセレス守ってたろ

う？」

「ホホホホ。その通りじゃ。やはり、魔界におったわしらを覗いておったのはおぬしか。魔界まで魂を飛ばせるとは、ほんに、おぬし、優秀なシャーマンじゃの」

「別に見たくて見たわけじゃねえが、夢で見たんだ」

赤毛の戦士は鋭い眼差しで、ジロリと老人を睨んだ。

「一つ聞きたい。昨晩から光度をあげてセレスの体を隠した理由は何だ？　オレの事、ガキにも欲情する変態だと思ってるのか？」

「そうではない。夢とはいえ、男に裸を見られるなど処女（おとめ）には辛かろうと思って隠しただけじゃ」

「ケッ！」

赤毛の戦士は唾を吐き捨てた。

「馬鹿馬鹿しい！　世界中の女が死に絶えたって、あのくそ忌々しい女には手を出さん！　セレスの裸なんぞクソくらえ！　そんなモノで勃（た）つもんか！」

「ホホホホ。かわゆいのう、おぬしは」

「はあ？　何、寝ぼけてやがる。ボケ老人に付き合うほど、俺ぁ、暇じゃねえ。とっととバンキグに送ってくれ。あんたが今世に戻ったってことは、馬鹿女の魂も体に戻ったんだろ？　万事解決だろ？　俺ぁ、あの女の護衛に戻らせてもらう」

「解決なぞしとらん。これからがおぬしの働き時じゃ」

「へ？」

「ゼグノスはの、本気で女勇者を殺す気でおったのよ……三重もの呪を用意して、の。第一がセレスの肉体と魂の分離、第二が自身とセレスの入れ代わりであった」

「入れ代わり？」

「魔界の住人であるゼグノスは憑依体を失えば、魔界に戻るのが運命。その運命を女勇者に押し付けたのだ。ゼグノスに働くべき魔界への強制帰還の力はセレスに働き……セレスの魂は魔界に落ちたのよ」

「……」

「その代償として、ゼグノスは光の世界の住人であるセレスの住むべき世界に、器もない状態に自らを追いやり……消滅した。死を覚悟しての入れ代わりをさせるとは、おぬしら、相当、あの魔族に怨まれておったようじゃな。ゼグノスは完全に消滅した。魔界にも今世にも、もはや存在しておらぬ」

「……」

「そして、第三の呪いが『眠り』。ただ、魔界に飛ばされただけでは、『女勇者は死なぬかもしれない』……ゼグノスはそう考えたのよ。『勇者の剣』を手にした勇者には剣の無限の守護の力が働くからの。瘴気に満ちた世界で無力にする為、又、確実に殺す為に、ゼグノスはセレスに剣を握らせぬよう眠らせ、『夢』を見させている」

「夢？」

「セレスの魂はの、決して目覚めぬ眠りの中におる。このままの状態では体に戻したとて無駄なので、わしの結界の中で魂を保護しておるのじゃ」

「……どういうこった？」

「セレスの魂は夢の中で、自分の人生をなぞっておる。そのため、夢と現実の区別がつかず、眠りに就いているという自覚がない。眠っている事を知らねば、覚醒しようという意思も生まれぬ。夢を見ている事を教えてやらねば、セレスは自分の人生をなぞり続け……バンキグの広野でゼグノスに呪をかけられた瞬間まで人生をなぞり、その後、死ぬ」

「！」

「その後、生きた記憶が無いからじゃ。ゼグノスに呪をかけられた後、全てが無となる。セレスの魂はそれを己の死と誤解してしまうのじゃ」

「……何ってこった」

「アジスタスフニルよ、セレスの夢の中に入って、あやつを起こしてくれ。それができるのは、おぬしだけじゃ」

「……」
「そして、ハリハールブダンよ、セレスを救う為、アジスタスフニルを助けてやってくれ」
「は？」
ハリの戦士は首を傾げ、大魔術師を見つめた。
「俺とてセレス殿を助けたいが……俺に何ができるのだ？　俺の魔力などカルヴェル様には遠く及ばん」
「そうではない。それじゃ」
老人の杖の先端は、ハリの戦士の左手を指していた。
「『知恵の指輪』は『極光の剣』の対となる魔法道具（マジック・アイテム）。二つは神秘の力で繋がっておる。これよりアジスタスフニルは、わしの魔法でセレスの夢世界に赴く。そこは過去の再現であり、夢の中とはいえ肉体もあり、現実と何ら変わりの無い世界だ。じゃが、優秀なシャーマンであるアジスタスフニルとて、他人の精神世界で己を保つのは難しい。又、夢がバンキグの広野の記憶にまで至れば、夢の世界の消滅と共にアジスタスフニルも消滅する。おぬし、指輪を介して、アジスタスフニルに助言を与え励まし導いてやってくれ。アジスタスフニルがセレスの夢に飲み込まれないように、の」
「……承知した」
「俺は、まだ行くとは返事しちゃいねえんだが」
赤毛の戦士は溜息をついた。
「護衛対象の生死に関わる大事じゃ……仕方ねえ。やらなきゃならんだろうな」

十二の秋に聖騎士叙勲を得て、国王陛下付き近衛兵となった。カルヴェル様と義兄様が教え導いてくだすった、おかげだ。
神聖魔法・剣術・槍術、馬術・騎士道及び礼儀作法及び王国の歴史の筆記試験そして面接にちゃんと合格して、聖騎士叙勲を受けた

のだけれど……

世の多くの人は私が『お情けで』聖騎士になれたのだと思っていた。

聖騎士叙勲は早くて十五、だいたい十八～二十ぐらいで受けられる方が多い。

十二歳で叙勲は確かに早いけれども、過去には十歳で叙勲を受けたホーラン様のような逸材もいらっしゃったのだ。多分、問題だったのは、年齢よりも、私の性別だ。

正直に言えば……国王陛下の近衛兵になれたのは実力ではない。国王陛下のたっての望みで、私はお側においてもらえたに過ぎない。自分の側に居る事が今世の勇者たる私の勉強になる、そう国王陛下はお考えになったのだ。

その縁故人事を、同輩も先輩方も愉快に思われるはずもなく……『お飾りの勇者』『お飾りの聖騎士』『お飾りの近衛兵』と、さんざん陰口もたたかれたけれど……

私が剣を修行を続け、真剣に任務をこなしていくうちに、みなさん、わかってくださった。私が遊び半分で聖騎士になりたがったわけではない事に。

女でしかも子供の私には、体力も腕力もなかった。でも、正義を愛する心は他の方々に劣らぬよう頑張った。私の思いをみなさん、少しづつ、わかってくださった。

国王陛下を……

この国を……

この世界を……

私は守りたい……

愛する人達が住んでいるから……

尊敬する歴代勇者様達が守ってきた世界(もの)だから……

邪なるもので穢したくはなかった。

だから……

女の私が真の勇者になるなんてありえないと思っていたので、正直、びっくりした。ケルベゾールドが今世に復活した時は。

この私が勇者として『勇者の剣』を装備して大魔王退治の旅に出る事になるなんて……

五つの道　5日目（1）

大魔王四天王最後の魔ゼグノス。

アジ・ハリ族の末裔が呼び出した神獣『動物達の母』と女勇者が振るった『勇者の剣』によって、ゼグノスはその能力のほぼ全てを失った。セレスの前から逃げ延びたゼグノスの魂はほんのわずかで、その能力も小物魔族並に堕ちていた。つまり、セレスに斬られた瞬間に、大魔王四天王ゼグノスは、『死』を迎えたに等しい。

ハリの戦士ハリハールブダンは、未だに雪の残る森の中に居た。

この森の上空でゼグノスは散った、ここが自分の旅の最終の地だと、アジの男は断言し、先程、犬橇を止めた。ケルティの上皇・当代随一の大魔術師を連れての彼の旅はついに終わったのだ。

しかし、ハリハールブダンにはわからなかった。この周囲で『動物達の母』と同化してゼグノスと戦った記憶こそあるものの、『動物達の母』もゼグノスも山よりも巨大な存在だった。最後の場所と言える空間は、数平方キロメートルに及ぶはず。この森のこの場所が何故、最終の地なのか理解できなかったが、優秀なシャーマンであるあの男がそう言い切った以上、そうなのだろう。

トナカイの毛皮で仮小屋を建てる彼を、宙に浮かぶ老魔術師がニコニコ笑いながら眺めている。ほんの少し前、老人は長い呪文を唱え、アジの戦士を己の支配する領域――女勇者の魂のある次元へ肉体ごと送った。深く眠り続けている女勇者を目覚めさせる為に。

ゼグノス、女勇者、アジ・ハリの王の運命が交差した地……この場所に居てくれと、ハリハールブダンはアジの男に頼まれていた。この地の縁が自分や女勇者を本来あるべき場所である今世まで導くはず、道先案内人としてここに居てくれ、と。

身についた習慣からてきぱきと仮小屋を作るハリの戦士に、老魔術師は尋ねた。

「アジスタスフニルはどうしておる？」

左手の『知恵の指輪』を通じて『極光の剣』を背負う者と心が繋がっている上皇は、手を止めずに答えた。
「存在している。だが、何も見ていないし、何も感じていない。俺の心に何も伝わってこない。無の世界に居る」
「さようか」
老人はポリポリと頬を掻いた。
「では、セレスは、まだ旅立っておらんのじゃな」

絶対、従者となる方とは仲良くなろうと決めていた。

歴代勇者の従者はみなさん、素晴らしい英雄だった。
やはり、多いのは戦士。でも、戦士といっても、出身国も武器もバラバラなのでいろんな方がいらっしゃった。『禅』の精神をもって戦うジャポネのサムライ、さまざまな魔法を使うペリシャの聖戦士、目に見えぬものと共にある北方のシャーマン戦士……
勇者一行の旅には必ず同行してきたインディラ僧侶、いろんな宗教の神官や祭司、神秘の力を操る魔法使い、己の拳で闘う格闘家、遠方のものを貫く弓使い……
変わりどころでは、知に長けた学者、開けぬ錠前は無かった盗賊、魔獣すら操った猛獣使いもいらっしゃった。
彼等と共に困難を乗り越えたご先祖様の活躍を聞くと胸が熱くなった。従者様達の助けがあったからこそ、勇者様達は大魔王を葬ってこられたのだ。
ランツおじい様は、従者の魔法使いカルヴェル様と僧侶のナラカ様と心を通わせ合い、義兄弟の契りを結ばれたとか……
私も……

そんな風になりたかった。
女の身だし、いたらない勇者だけれど……
こんな私に仕えてもらうだなんて、本当に申し訳ないけれど……
共に戦う仲間になる従者の方々を大切にして、信頼し合いたかった。

「申し訳ありませんが、あなたと馴れ合う意思はありません。我がインディラ教団は代々勇者の従者を輩出してきた伝統がありますので、今世でも、大僧正候補の私をあなたの従者に推薦しました。しかし、率直なところ、私は女勇者の従者になんかなりたくありませんでした。女性に『勇者の剣』の真の力が引き出せるはずはありません。あなたに付き合っても、労多く、実は乏しいでしょう」

ナーダ？
ナーダの声だ。
だが、視線の先にはセレスが居る。白銀の鎧をまとい、うなじで金の髪を一つに束ねた女勇者は、あっけにとられた顔を向けている。俺にではなく、俺の隣に座っている奴に。
セレスは贅をつくした白亜の部屋の、金ピカの布張りの椅子に腰掛けている。辺りを見回そうとしたが、首が動かない。目もセレスに固定されたままだ。
俺は……過去の自分と同化しているのだろう。再現されている過去の自分の体の中にいるんだ。だから、思うように動けないのか。
ここは、エウロペの王宮だ。
国王の御前で俺とナーダは初めてセレスと引き合わされ、そのまま親睦を深めるようにと一室で三人にされたんだった。

『私の旅に、あなた方が同行してくださる事を嬉しく思います。大魔王を倒してこの世に平和をもたらす為、共にがんばりましょう。どうぞ、よろしく』

と、にっこり笑って握手を求めてきたセレスに、ナーダの野郎、さっきのキツい一発をかましたんだっけ。

ポカーンとしていたセレスの顔が、コロっと変わる。顔中が真っ赤だ。ぶるぶる震えだした。

「失礼な方ね！　嫌なら従者を引き受けてくださらなくて結構よ！　確かに私は女！　女の勇者なんて前代未聞ですものね！　世の中のほとんどの人から期待されていない事は重々承知よ！　でも、しょうがないでしょ！　ラグヴェイ様の血を引く男子は、今、三才の甥っ子しか居ないんだから！　あなた、グスタフが成長するのを待つ方が良いっていうの？　グスタフが『勇者の剣』を扱えるようになるのは何年後かしら？　十年後？　十五年後？　そんなに待ってたら、この世は大魔王に支配されちゃうわよ！」

憤慨するセレスに対し、ナーダは静かな声で答える。横目で見ると（勝手に動いたんだ。俺の意思じゃない）、野郎、ツーンと澄ました、いかにも上級僧ってな嫌な面（ツラ）をしてやがった。

「おやおや、勇者を名乗るわりには、処世術の下手な、短気な方ですねえ」

「処世術？」

「勇者には必須な世渡りの方法ですよ。各国の国王やさまざまな団体との交渉ごとは、勇者の義務です。そんなんじゃ、あなた、務まりませんよ」

「うるさいわねえ！　私がどうだろうと、あなたに関係ないでしょ！」

「関係あります。十六歳の小娘とはいえ、あなた、勇者を名乗って、大魔王討伐の旅に出る気なのでしょ？　あなたが馬鹿だと、従者の私のレベルまで疑われてしまいます。あなたのせいで、私まで低俗な人間だと周囲から誤解されかねません」

「え？」
「私、正直に従者になりたくなかったとは言いましたが、ならないとは言ってませんよ。遺憾ながら、今日から私はあなたの従者です。お若いあなたが愚かな行動に走らぬよう、これから教え導いてあげましょう」
「何ですって！」
「大魔王を倒せるのは『勇者の剣』だけです。あなたが女だろうが、馬鹿だろうが、その血ゆえに『勇者の剣』が扱える以上……誰かが貧乏くじを引いて、あなたのお守りをしなければいけません。非常に不愉快ではありますが、大僧正様が、直々に、この役目を私にとご命じになられましたのでねえ。仕方ありませんから、たかが女と侮らず、あなたを助けてあげますよ」
口元が緩んでいる。俺は……ニヤニヤ笑って成り行きを楽しんでいるようだ。止めもしないで、大僧正候補と女勇者の言い争いを眺めているのだ。
セレスの目が俺に留まる。この男は自分の事をどう思っているのだろう？　やはり、嫌われてるのだろうか？　と、不安そうな顔で。だが、すぐに、何を言われてもへこたれまいと！　と、挑むような顔つきとなった。
「あなたも……私が勇者じゃ不満かしら？」
「不満などありません」
俺の口が勝手にしゃべる。
「俺は国王陛下からあなたの護衛を命じられた、傭兵です。大魔王討伐の旅に同行し、行く先々で魔族や大魔王教徒を倒し、女勇者の生命・身体を護衛する。護衛対象が、馬鹿だろうがカスだろうが、仕事をやり通し、国王陛下から成功報酬をいただくだけです」
「それって……私が馬鹿でカスって事？」
俺は肩をすくめた。
セレスの顔が更に赤くなる。
「女だからって、みくびらないで。私、国王陛下づきの近衛兵を勤

める聖騎士なのよ。大剣はもちろん、片手剣や弓や槍も、人並みに扱えるわ。乗馬も得意よ。それに、初級だけだけど神聖魔法も使えるわ。私はカスじゃない！　勇者になる為に三才から男として生きてきたんだから！」

「これは、これは、失礼いたしました」

俺はわざとらしく胸に右手をあて、頭を下げた。

「やんごとなき侯爵令嬢に対し、失礼をばいたしました。カス呼ばわりした事をお詫びいたします。何分、こちらも、世間知らずのお姫様の護衛は初めてなもので、勝手をつかめずにおりまして」

「……あなた」

セレスがキッ！　と、俺を睨む。

「わざとらしい敬語はやめてよ！」

「そういうわけにもいきますまい。侯爵令嬢と卑しい傭兵では、身分が違います」

「普通にしゃべって！　敬意の欠片もない敬語なんて、聞いてるだけでイライラしてくるわ！」

「ご命令とあらば、改めましょう、お姫様」

セレスが悔しそうに唇を噛んで、俺達から視線をそむけ、うつむく。

泣きそうな顔だ。

そういやあ、シルクドでこいつ言ってたよな、従者となる方達とは、絶対、仲良くなろうと思っていたって。ところが、蓋を開けてみりゃあ、自分の従者は俺とナーダ。女勇者を馬鹿にしきっている二人だったわけだ。

いや、セレスがどう思ったかはともかく……この頃の俺はセレスに好意的だったんだ。セレスが美少女だったんで。さっきの発言（アレ）も挨拶程度にからかっただけだし。

けど、ナーダは本気でセレスを嫌っていたな。女嫌いだし、伯父のナラカって奴がどうのでセレスのじい様とカルヴェルじいさんに因縁があったようだしな。今でもいけ好かねえ野郎だが、この頃の

お高くとまった性格に比べれば付き合いやすくなったもんだ。
しかし……どうすりゃ、いいんだ？　セレスを起こしにきたってのに、思うように動けんし、口もきけん。過去の再現をただ眺めていたって何も変わらんだろうし、俺は

「この馬鹿女！　言っていい事と悪い事の区別もつかんのか！　いい加減にしろ、世間知らずにもほどがある！」

わからない……
わからないわ……
どうして……アジャンは……
こんなに怒るんだろう……？
私が馬鹿だから？
世間知らずだから？
後先考えずに行動するから？
何をやっても空回りで……
アジャンを苛立たせ……
そして、ついに怒らせてしまった。

「おまえが女勇者じゃなかったら、昨晩のうちにおまえの処女をいただいておいたさ！　クソ生意気な女を懲らしめる為に、な！　もっとも、おまえみたいな胸糞悪い女、抱きたかねえけどな！　おまえを見ていると吐き気がする！　傍に寄られるだけでうっとうしい！　ハン！　俺が怖いのか、処女の女勇者様？　安心しろ、おまえなんか大金積まれたって抱くものか！　俺はなあ、処女は嫌いなん

だ！　ギャーギャーわめいてうるさいし、オマ●コはキツキツすぎて突っ込むこっちも痛い！　おまえは肉体も最低なら気立ても最悪。おまえなんかより、商売女や熟れた後家を抱く方が遥かに気持ちがいい！」

やめて……

もう……聞きたくない……

びっくりした。

いきなり、場面が変わりやがった。

シルクドじゃねえか。王宮のセレス用の部屋で俺がキれた時だな、この場面は。

過去の再現ったって全部見てるんじゃない。心に強く残った場面（シーン）を飛び飛びに拾ってるだけだ。これじゃ、バンキグに行くのもそれほど先じゃねえ。ゼグノスとの戦いの場面（シーン）に追いつく前に、馬鹿女を起こさなくては。

しかし、どうすりゃいいんだ？

過去の俺がわめいている。ヤバイ、言い過ぎてるって自覚はあったんだが、口が止まらなかったんだ。

「おまえの事が虫酸が走るほど嫌いだからさ！」

セレスは息をのみ……それから、両手で顔を隠し、わ――っと声をあげて泣き始めた。

やめろ！　泣くな！　泣かしたくはなかったんだ。けど、どうにも……セレスを見ていると、苛々して、言わんでも良い事を言ってしまう。やり過ぎてしまう。

だが、何故？　セレス以上の馬鹿の護衛だって、俺はやり通して

きた。なのに、何故、セレスには

現実に重なるように幻が見えた……

吹き荒ぶ雪嵐。防寒服代わりにボロボロの布を体に巻きつけた少年が、小さな子供を抱きしめて叫んでいる。

「死ぬな、アジャン！」

けれども、腕の中の幼い子供の生命は尽きていた。

「アジャニホルト！」

幼子を抱きしめ、少年は肩を震わせた。凄まじい怒りを抑えられずに……

少年は憎んでいる……

家族を奪った敵を……

一族の窮地に救いの手を差し伸べてくれなかった祖先神を……

強者にこびへつらう弱者を……

吹き荒ぶ雪すらも憎み……

全てのものに憎悪を向けている……

あの少年が……アジャンの昔の姿なのだ……

又かよ……

又、飛んだ。

しかも、よりにもよって、嫌な場面（シーン）を見せつけやがる……

アジャニホルト……

雪の中で逝った俺の弟……

あのクソ魔族が、最後の家族を失い、全てに絶望し、アジの祖先神を捨てたあの日を俺に思い出させやがったんだ……

思い出せねえよう、記憶を縛ってあったものを……

セレスは俺の心と同調（シンクロ）し、俺の記憶を覗きやがった。

共に雪景色を見たのだ。

いや、怒るまい。あの馬鹿女が魔族に襲われていた俺を助けようとしてああなったわけだし……そもそも意地を張って、あの女から『虹の小剣』を借りなかったから、三下魔族に体を盗まれかけちまったわけだし……この件は俺が悪いのだ。

《何をぼんやりしているのだ、アジスタスフニルよ》

無遠慮に心をかき乱す思念を感じた。

この思念は……ハリハールブダンか。そうだった、俺とケルティの上皇様は『極光の剣』と『知恵の指輪』を通して繋がっていたんだっけ。って事は……俺は今、過去の自分と同化してるが、『極光の剣』を背負っているって事か？

《早く行動に移れ、セレス殿を助けられんぞ》

体が動かないんだと心の中で言い返すと、

《それは、おまえ自身が過去に囚われているからだ》

と、叱られた。

《過去の自分の行動を眺めていても仕方あるまい？　なすべき仕事をなせ》

どうやって？　と、聞くと、

《そんな事、俺にわかるわけがない。シャーマンとしての勘に従い、心の赴くままに行動しろ》

と、役にも立たない答えが返された。行動できねえから、困ってるんじゃねえか。動けないし、しゃべれないんだよ、こっちは。ったく。

三下魔族をセレスが倒す。そういや、この時、初めて『勇者の剣』が使えたんだよな。過去の俺がセレスに、弟を『アジャン』と呼ん

でいた理由を説明している。
「弟と名前を取り替えたんだ。あいつの遺髪を指輪にして持っていたんだが……いろいろあって無くしちまってな。何もかも無くしちまうのも嫌だったんで、あいつの名を貰った。『アジャン』ってのは俺が弟につけた偽名だったが……本名の『アジャニホルト』よりも、あいつに馴染みのある名前だった。だから、貰ってずっと名乗っている」
セレスがいかにも同情してますって顔で俺を見ている。
だから……そういう顔はよせ！
苛々するだろうが！

あそこに居るのはアジャンじゃない……
あの赤い目……
邪悪な気……
大魔王四天王ウズベル……
ウズベルがアジャンの体をのっとんたんだわ！
駄目！　私の大切な仲間を返して！
「あの世にいきな、お姫様」
アジャンの口を使い、アジャンの口調を真似て、ウズベルが嘲笑う。
カッ！　と、頬が熱くなった。
許さない！
許さないわ、ウズベル！
アジャンの体を、これ以上、穢させるものですか！

セレスに斬られた瞬間、正気に戻った……

刃で斬るのではなく、『勇者の剣』が持つ浄化の光で俺の内側にいたウズベルだけを斬り裂いてくれたのだ。

助かった……

場面（シーン）が変わってから、体中からふつふつとわきあがる奇妙な高揚感に酔っていた。笑い出したくなるような、暴れまわりたくなるような、攻撃的な気分だった。魔族に憑かれるってのは、麻薬みたいなものだ。心のおもむくままに全てを斬リ裂けりゃ、最高に気持ちいいだろう。信仰心を失った俺みたいな人間にゃ、魔族の破壊本能は魅力的過ぎるんだ……

俺は、今、セレスを抱いていた。倒れかけたあの女を支えてやったら、セレスの奴、『勇者の剣』を投げ捨てて、涙を流しながら俺に抱きついてきやがったんだ。

顔が熱い……過去の俺が照れているんだ。

ええい、くそ！　何で照れるんだ、俺！　鎧姿の女に抱きつかれたって、ゴツゴツしてるだけで楽しくもねえだろうが！

しかし……

変だぞ。

ここはインディラじゃねえか。

シルクドの次がインディラ？　半年ぐらい間が開いている。シャイナやジャポネはどうした？

シャイナやジャポネじゃ……

シャオロンが仲間に加わっただろ、それからクソ忍者がセレスの命を狙って、龍神湖で左手用の『龍の爪』をシャオロンが手に入れたんだ。二度目に訪れたシャイナじゃ、四天王サリエル率いる魔族軍団と戦った。そこでシャオロンは家族と村の仇のサリエルと闘って、奴がシャオロンの親父さんから奪った右手用の『龍の爪』を取り返したんだ。

何で、そうゆう重大事件を思い出さないんだ？

ジャポネじゃ、忍者（ジライ）をライバル視して、やたら燃えてやがったくせに。あの頃はナーダも、忍者（ジライ）の部下に負けたもんで、妙に熱血してたんだよな。本人は引き分けだって言い張っていたが、ズタボロのボロ負けだったなあ。

セレスとナーダは、サリエルをおびき出そうとしていたシャオロンとつるんで、修行、修行、修行、盗賊退治、大魔王教徒討伐を繰り返してたんだよなあ。阿呆らしいんで、俺はほとんど付き合わなかったんだが……

いや、待てよ……

付き合わなかった……？

そうか、そういう事か！

シャイナやジャポネじゃ俺はセレスの心に残る大事件の時、あの女の側に居なかったんだ。

死にかけていたシャオロンの元にあの女とナーダが駆けつけた時には、俺は大魔王教徒どもを蹴散らしていた。

暗殺者だったクソ忍者は、いつもセレス一人を標的にしていた。俺達がそばにいない時を狙って……七回襲撃したんだっけか？　一回だけ去り際のあいつに会っちゃいるが、火傷を負わされただけで、まともに戦っていない。龍神湖の時は、俺は意識を失っていた。

荒野でサリエルと戦った時も、俺はシャオロンと組んでいた。ナーダと組んでいたセレスとは、かなり離れた場所に居た訳だ。

シルクドからずっと、俺はセレスを避けていた。セレスに剣を教えてはいたが、あいつがしゃべるとムカつくんで必要な指示しか与えず、俺は無駄口をきかないようにしていた。そのうち、魔族がらみの話とかシャオロンの話とか、少しづつ会話をするようにはなったが……俺はできるだけ、セレスを無視しようとしていた。

だから、あいつの記憶の中に俺は居ないんだ。

過去の自分と同化してセレスの記憶に触れている立場の俺は……

俺があいつの記憶の中に出てこない場面（シーン）には立ち会えないんだ。

マズいぞ。

こっから先は、ペリシャ、トゥルク、エーゲラ、エウロペ、ケルティときて、バンキグだ。

俺はあまりセレスの側にいない。

改心したとぬかして仲間に加わってきたクソ忍者と、シャオロンが、セレスの召使兼護衛役に徹していたからだ。奴等にセレスを任せて、俺は別行動をとることが多かった。

仲間全員と行動を共にしている時も、シャオロンやナーダにばかり話かけていた。セレスとはまともな会話をしていない。たまにからかってただけだ。

俺はできるだけ、セレスを避けていた……

関わりたくなかったんだ……

あいつの顔を見るのも、あいつの脳天気な話を聞くのも嫌だったんだ。側に寄られるだけで気持ちが落ち着かなくなるから、距離をとろうとばかりしていた。

俺は……

この先……

あの女の記憶に残るような事、何かしただろうか？

早く起こさなきゃ、セレスが死んでしまうってのに、このままじゃ、あっという間に、バンキグの広野の場面（シーン）だ。

ちくしょう……

どうすりゃ、いいんだ？

体も口も自由にならない。

ろくに時間もない。

こんなんでどうやって過去に介入すればいいんだよ。

どうすれば……

五つの道　5日目（2）

よかった、ようやく会えたわ、ジライと。
河畔に通い始めて十四日目。
入れ違いになった時の用心に手紙はグジャラさんに託していたけど、直接、会って話したかった。
忍の里には戻らないって言っていたジライ。依頼主を殺してしまったし、私の暗殺も止めたと言っていたし……どうするつもりなのかしら……
でも、こうして、会えたんだから、ちゃんと話さなきゃ。

場面（シーン）が変わった。夕日を浴びて黄昏色に染まった河が見える。ああ、ここは……セレスが忍者（ジライ）を仲間に誘った場面（シーン）だ。河の側でセレスが忍者と何か話している。
だが、俺は……
奴らと距離を置いた木陰に居る。奴らの話も半分ぐらい聞き取れねえし、何かしようとしても介入しづらい距離だ。まあ、口も、体も動かないんだが……完全に脇役の位置に居るな。
クソ忍者を警戒して護衛役として同行したわりには……離れすぎだぞ、俺。
俺は……面白くなかったんだ。セレスが仲間を失った忍者（ジライ）に同情しすぎているのが。サリエルに体を奪われたあいつは、仲間を三人斬り、三人とも死なせてしまったと聞いている。気の毒といやあ、気の毒だが……気に喰わんものは、気に喰わんのだ。
《何故、気に入らなかった？》
ハリハールブダンの思念だ。

あの女の甘ちゃんぶりが嫌だったんだ。暗殺者があっさり寝返るもんか。嫌になったって金を貰っている以上、仕事を止められるもんか。何で暗殺者に同情するんだ！　何でもかんでも信じるな！
世間知らずの馬鹿女め！
《おまえ……本気でそう思っているのか？》
そうだ！　俺はセレスのガキっぽいところが不愉快だったんだ！
それだけだ！

知らなかったわ……大僧正様がご病気で、ずっと床に就いていらっしゃるだなんて……
だから、ナーダ、変だったのね。戦闘中にボーッとしたり、今も夕食をとらないで部屋に籠もってるし。
心配で心配で、しょうがないのね。無理ないわ。ナーダにとって大僧正さまは、お師匠様であり、父親のような存在……この世で最も尊敬している方だもの。
ここエーゲラからインディラは遠いわ……
一刻も早く帰してあげなきゃ！　ナーダの顔を見れば、大僧正様もお元気になられるかもしれないし……最悪の場合でも、最期のお別れに間に合わせてあげなきゃ！
なのに、アジャンったら、どういうつもり？　ナーダは放っておけですって？　余計な事は言うなですって？　確かに、今日、私は死にかけたわ。ナーダの回復魔法がなければ死んでいたかもしれない。でも、この世に僧侶は彼一人ではないわ。ナーダに誰か代わりの僧侶を紹介してもらえば、いい事じゃない。
「おまえ、ナーダの顔を潰すつもりか？」
え？
「勇者の従者となるのは、インディラ僧侶の由緒正しい伝統とか何

とか、前に言ってたよな、あいつ。最も力のある修行僧にのみ許される名誉だとも言ってたはずだ。次期大僧正候補のあいつに、その役を降りろと……役不足だからやめろというのか？」

そんな……私、そんなつもりじゃ……

「名誉よりも育ての親の死に目が大事と思えば、あいつの方から帰ると言い出すだろう。横からごちゃごちゃ口を出すような問題じゃない。あいつの気持ちが固まるまで、ほっとけ」

正論だ……

アジャンが正しい。

私は感情論に走っただけ。状況をちゃんと見てなかった。又、やっちゃったわ……勇者失格ね……

て！　ジライ！　どさくさに紛れて何するのよ！　背後から耳に息をふきかけるなって、いつも言ってるでしょうが！

ぶん殴ってやったのに、ジライはすぐにむくっと起き上がり、片膝をついて跪いた。

「セレス様、さしでがましい事を申し上げますが、今日はもうお休みになられた方がよろしゅうございます。普段の五分の一も拳に威力がありませぬぞ」

馬鹿……こんな状況で眠れるわけないじゃない。今、私がナーダにしてあげられる事、何かないかしら？

そんな事を考えていたら、いきなりアジャンに抱きかかえられてしまった。

「キャッ！何するのよ！」

「部屋に放り込む。シャオロン、一応、医者よんどけ。ふぬけたクソ坊主の治癒魔法だけじゃ心もとねえ」

「わかりました！」

素直な性格のシャオロンが、セレスの身を案じて走り出す。街医者を呼びに行ったんだ。

「放してよ、アジャン！」

「うるせえなあ。いつも言ってるだろ、俺は処女は嫌いだって。ベッドまで行ったって、おまえなんざ、とって食いやしねえよ」

「放して！　自分で歩くわ！」

「耳元でキャンキャン吠えるな、馬鹿」

セレスを抱えたまま、過去の俺が二階に向かう。クソ忍者はついて来ない。俺にセレスを任せる気のようだ。

《好機（チャンス）だ、他の者はいない。襲ってしまえ》

はあ？

何、言ってやがるんだ、ケルティの上皇様は。

《この時に殺した願望を成就するのだ》

くだらねえ事、言うな。この時だって俺は、セレスを襲う気なんてなかった。

《果たして、そうかな？　鎧をまとわぬセレス殿の体はやわらかくって抱きごこちが良いだろう？　胸も豊かだし、尻も肉づきがいい。腕に抱えているうちに、抱きたくなったはずだ》

バ……馬鹿野郎！　ンなわけあるか！　セレスは女勇者だ！　こいつに手を出したら、『勇者の剣』が怒る。非処女になったら、剣に触れられなくなるかもしれねえ。ケルベゾールドを殺せる唯一の人間が居なくなっちまうんだ！　手なんか出せるか！

《愚か者。今、おまえが居るのは夢の中だ。何をしても現実が変わるものか！》

！

《今、おまえは話せんし、体も動かん。だが、過去の自分の心に働きかける事はできるかもしれん。過去のおまえがセレス殿を襲えば、夢が現実から乖離する。夢と現実の食い違いに気づけば、セレス殿は自分が夢の中に居るのだとわかるだろう》

なるほど……

そういう手もあるか……さすが、俺より年長のすけべ親父だな。

目の付けどころが違う。

《女が欲しければ抱く。名誉が欲しければ戦う。金が欲しくば南から略奪する。それがケルティの戦士だろうが》

確かに……

ケルティの戦士の行動は、『欲望に忠実であれ』の大魔王教徒によく似ている。だが、己の享楽の果てにこの地上の破滅を望む大魔王教徒とは異なり、ケルティ人は現世での欲望の達成を栄光と考える。欲望を叶える為に戦士として精進するわけで、欲望は道徳的に肯定されている。

《ためらう必要はない。欲望のままに行動しろ。過去の自分を操り、欲しい女を抱け》

ふむ。

セレスの胸……

セレスの尻……

そのへんを意識しまくってみる……

確かに、よさげな体だ。でっかい胸はパイ●りしたら気持ち良さそうだ……むちむちの尻もいい……くびれたウエストも胸や尻を強調している……太腿もしゃぶりつきたくなるようなむっちりさだ……

お？

脈拍があがった。

興奮してきたのか、過去の俺？

部屋に着いたぞ、ベッドは目の前だ。

ここで犯らねば、何処で犯る！

よし！

セレスのヌードだ！　ヌードを意識しよう！

尻と胸がデカいくせに、セレスは小柄だ。大柄の女も悪かないが、腕の中にすっぽり入る方が好みだ。

俺の腕の中でセレスが乱れるのか……

潔癖だから、泣いて抵抗するだろうな……
嫌がる女と犯るのは趣味じゃねえんだが……
しかも、こいつは、処女だ……
絶対、痛がるよな……
俺のを挿れたら……
血が……
赤い……血が……
血が流れてしまう……
《おい……おまえがその気を無くしてどうする?》
!
《……セレス殿を起こすのではなかったのか?》
そうだった……
ええい!
気にするな、俺!
一回、快楽を教えてやったら、堅物だった奴ほど性交(セックス)に溺れるもんだ。俺は後家殺しのあだ名もあるテクニシャン。セレスなんざ、犯りゃあ、イチコロだ!
ともかく、襲え!
最初は痛がっても、絶対、後で悦ぶ! 俺ならできる! 痛み以外のものも、たっぷり与えてやるんだ!
血は……見なきゃいい!
布団をかけてやりゃあ……見えねえ、多分……いや、見えん!
大丈夫だ!
ためらうな、過去の俺! 襲ってやれ!
「何よ、アジャン、赤くなって、ぶるぶる震えて……風邪?」
腕に抱かれたままのセレスが、けげんそうに俺の顔を覗き込む。
邪気が全くない子供か動物のような澄んだ青い瞳で、まっすぐに俺を見つめている……
その途端、顔を更に赤く染め、過去の俺は勃起してしまった。
行け! 行け! 行け!

と、思った時には……

過去の俺は、セレスの体をベッドの上に放り捨て、足早にドアへと向かっていた。真っ赤な顔で……

「今、シャオロンが医者を呼んでいる！　良いか、おとなしく寝てろよ！　わかったな！」

俺は扉を閉め……

セレスの視界から消えてしまったのだ……

「アジスタスフニルは童貞の少年のようだ。つき合わされているこちらの方が赤面してしまう」

ハリハールブダンは溜息をつき、炉に枝をくべた。アジャンと精神感応はしていても、ハリの戦士の体は現実にあり、五感も現実に向けられているのだ。

狭い仮小屋の中で向かい合っている老人が、愉快そうにホホホと笑う。

「あやつ、セレスに心底惚れておるからのう。すれっからしを装っておるが、これが初恋なのよ。初めて心から好きになった人間をどう扱ってよいのかわからぬなんて、本当、かわゆい奴じゃ」

「……」

「何じゃ？　不満そうな顔をしておるのう」

「……セレス殿の命が失われつつあるというのに、他人の恋路の後押ししかできぬとは……」

「拍子抜けか？」

「と、いうより、自分が情けなくなる」

「起こさねばならぬのじゃ、仕方あるまい」

老人が愉快そうに笑う。

「働けるだけ、おぬしはマシよ。おぬしが二人の恋を成就させてや

れれば、現実との隔たり(ギャップ)に気づき、セレスは目覚める。おぬしの縁結びが無ければ、この世は滅びるのじゃて、恥じる必要はない」
「しかし、さっきはエーゲラの映像が見えたが、今は無(む)だ。セレス殿はアジスタスフニルの立ち会っていない記憶を甦らせている。じきに、バンキグまで行ってしまう」
「ま、ケルティでは、アジスタスフニルはセレスとよう絡んでおった。多分、ケルティで何とかなるじゃろう」
「……」
ハリハールブダンは炉に枝をくべ、灰を掻き回した。
「カルヴェル様、一つ伺いたい」
「何じゃ？」
「……何を隠しておられる？」
「ん？」
「何もかも話してもらおうとは思わぬが、生命に関わる大事を隠されているのは気分が悪い。あなたは、セレス殿と共に魔界を彷徨っていたとは教えてはくれたが、何ゆえそうなったかの説明をしていない」
「ホホホ。バレたか」
「俺やアジスタスフニルには話せぬ理由(わけ)があるのか？」
「うぅむ……。まあ、今後の事を考えれば、おぬしには教えた方が良いかもしれぬなあ。アジスタスフニル達には内緒にしてくれるのなら、話してやろう」
「約束する」
「ならば、話そう」
老人はニコニコ笑っている。
「わしは、おぬしらケルティ人がシベルアから完全独立を果たすまで、もしくはわしが死ぬまで、シベルアへの牽制役をやってやると約束していたが……その約束、守れぬかもしれぬ」
「と、いうと？」
「わし、今世から消滅してしまうかもしれんのじゃ」

「！」
「わしは、自分の体に形代（かたしろ）の邪法をかけている」
「形代（かたしろ）の邪法？」
「ホホホホ。おぬしには邪法は教えなかったゆえ、知らぬじゃろ？　ま、簡単に言えば、他人の呪いを肩代わりしてやる魔法じゃ」
「他人の呪いを肩代わり？」
ハリの戦士は瞳を細めた。老人が誰の呪いを引き受けるつもりなのかは、聞くまでもなくわかる。
「歴代勇者とその従者が口を閉ざしているので、侯爵家の当主とインディラ教のごく一部の高僧しか知らぬ事なのだが……大魔王ケルベゾールドは己の憑代に、毎回、嫌らしい罠をしかけてきた。自分の憑代が命果てた時に発動する邪法を仕込んでいるのだ。あやつの憑代を斬れるのは勇者だけ。つまりは、毎回、勇者に呪いをかけているのよ」
「死と共に発動する呪い……今回、ゼグノスが用いたものと同じだな」
「うむ。ゼグノスはケルベゾールドのやり方を真似たのじゃ。もっとも四天王であるあやつの呪は、大魔王のものほどは強制力がない。それゆえ、破りやすいのだが……大魔王の呪はそうはいかぬ」
カルヴェルは真面目な顔となった。
「何時から、大魔王が邪法を仕掛けてきたのかはわからぬ。大魔王の死と共に発動する邪法の存在に気づいたのは、三代目勇者クラウド殿じゃ。初代に呪がかけられたかは不明であるが、二代目勇者以降、勇者の数だけ呪いはあった。僧侶と魔法使いがうまく邪法を防いだ代もあったが、七回はあやつに好きにやられておる。二代目は従者との殺し合いをやらされるところだったのだ。女魔法使いユーリア殿がケルベゾールドを己の内に封印せねば、最後の一人となるまで従者に転移を続け、二代目に仲間を殺させ続ける気だったのだ」
「……」
「三代目は種無しの邪法をかけられた。子供をなせなくなったのじ

ゃが、三代目には弟がおったので勇者の家系は絶えずにすんだ。四代目は回避。五代目も回避、六代目は発狂、七代目は回避。八代目はそばに居た従者ともども全身から血を噴いて死亡したが、既に跡取りをもうけていたので勇者の家系は守られた。九代目は回避。十代目は短命の邪法をかけられ、翌年死亡。十一代目は失明。十二代目は……先代ランツは邪法をくらわずに済んだのじゃが、邪法自体は発動してしまった」

「何故、勇者ランツは無事だったのだ？」

「……仲間のわしらに内緒で、形代（かたしろ）の邪法を己が身にかけていた僧侶が居たからじゃ」

老魔術師の顔に、ほんの少し暗いものが差す。

「ほんに馬鹿な奴じゃ。あやつに二の書などやるのではなかった」

「その者は亡くなったのか？」

「生きてはおる。が、今は死んでいるも同じ。ケルベゾールドが次の邪法をしかけてくるまで、邪法は解けぬ。あやつの肉体は、異界に封印されたままなのじゃ」

「形代（かたしろ）の邪法とは危険なものなのだな」

「安全な邪法などない」

「その邪法で、今回、カルヴェル様はゼグノスの呪を女勇者様から肩代わりしたのか？」

「そうではない。そうなら、今、わしが眠っておるはず。わしはケルベゾールド戦に備えて己が身に形代（かたしろ）をかけた。ケルベゾールドから確実に呪をかけられるとわかっておるのに、たかが四天王でこの邪法を使い果たすわけにはいかぬ」

「……」

「邪法が発動しかけた時、強制的に形代（かたしろ）を封じたんじゃが、ちと間に合わなかった。それで、セレスと共に魔界に封じられてしまったわけよ。まこと、しくじったわ。ジライには悪い事をした。あの男、ゼグノスの邪法を祓ったが為に命を落としかけている。運良く生き延びたとしても、命が削られたのだ。確実に、寿命を数年縮めたで

あろう」
「……」
「形代を封じるべきではなかったのやもしれぬ。じゃが、今更言ってもせんない。ジライの事はナーダに任せた。セレスの肉体はシャオロンが守っておる。後はアジスタスフニルがセレスを目覚めさせてくれるのを待つだけじゃ」
「……この危機を乗り越えても、大魔王の呪が待ち構えているのはわかった。あなたがセレス殿の為にご自分を犠牲にするお覚悟なのもわかった。それがあなたの志ならば、口ははさまん」
「うむ。助かる」
「だが、形代の邪法なぞ使わんでも、大魔王の呪を祓う術はあるのではないか？」
「術は他にもある」
「ならば」
「他にもあるが、面倒なんじゃ。むろん、防呪結界も張る。それで弾ければ、何の問題も無い。じゃが、呪をかけられたら、祓わねばならぬ。呪を無効にするには、呪の種類を知り、呪を壊す必要がある。時間もかかる。又、大魔王本人の呪にはジライが使った手、闇の聖書による呪の吸収も効かぬ……」
老人は溜息をついた。
「なぜならば、大魔王が勇者に仕掛ける邪法は、闇の聖書に載ってはいない……闇の聖書が統べていない新たに作りだされる邪法だからじゃ」
「新たな邪法……」
「先代にかけられた邪法がいかなるものかつきとめるだけで、十三年かかった」
「十三年も、か……」
「呪いを肩代わりした者がこの世に居らぬからの、しんどかったわ。大魔王の憑代であった肉体の人生をなぞり、思考パターンを研究し、残した書を漁り、推測の上に推測を重ね、呪の検討をつけるまで十

三年、その呪の一部を破るまで更に四年かかった。時間がかかりすぎじゃ」

「……」

「だが、今回は、ケルベゾールドがどのような呪をかけてくるか、ある程度は予測がついている。憑代の情報（データ）を可能な限り集め、魔法の癖もつかんでおる。わしの魔術師としての能力も三十六年前より向上しているし、呪の一部を祓うのに十七年もかからんで済むとは思うが……セレスを呪の餌食にはしとうない」

「……ケルベゾールドの憑代の正体をご存じなのか？」

「うむ。知っている……セレスが勇者としてエウロペを旅立つ前からの……何処に居るのかも、何処へ移動して、どんな企みをし、四天王をどう使っていたのか、全て知っていた……」

「ゼグノスがケルティで目論んだ血の宴も、ご存じだったのか？」

「具体的な計画は知らなんだが、ある程度は予想がついていた。あやつが魂を分断し、ケルティ人に憑依していくのを見ていたからの」

ケルティの上皇ハリハールブダンは、真っ直ぐに大魔術師を見つめた。

「知っていながら、動かれなかったのだな？」

「うむ」

老人は静かに微笑んだ。

「ゼグノスのせいで、多くの血がケルティで流れるであろうことは知っていた。だが、わしはその計画を阻止しなかった。しようと思えばできたのだが、動かず、奴の計画の進行を眺めていた」

「……」

黒のローブをまとう白髪、白髭の老人は口元を吊り上げて笑った。

「わしが許せぬか、ハリハールブダンよ？」

「……」

「わしが動けば、ハリレーレクは魔に堕ちず、そなたのいとこのハリコルベインやハリグレチル、数多くのハリ族の者が未だにおぬしと共にいたであろう」

「そうだな」
　ハリの戦士は瞳を細めた。ケルティの魔の宴で失った同胞を思い出しているのだろう。
「……あなたが動けば、多くの人間が死なずに済んだ。昔の俺ならば、あなたを悪魔呼ばわりして、実力差も顧みず斬りかかったろう」
　一度、瞼を閉じてから、ハリハールブダンは瞳を開き、大魔術師をその眼に映した。
「だが、あなたのお教えを受けた今ならばわかる。『大魔法使いが何かをすると、周囲にもたらす影響が大きすぎる』。あなたがケルティを救う為に動けば、血の宴よりももっとひどい事態がケルティに、いや、世界にもたらされたのだろう。だから、動かれなかったのだろう？　何もできず静観するしかなかったあなたの心中をお察しする」
「ふふふ」
　老人は杖持たぬ左手で己の髭を撫でた。
「やさしいことを言うてくれる……」
「あなたはセレス殿を救う為に、己が身を犠牲にしようとしている。あなたが悪であるはずがない」
「甘いな。その程度のことで、『悪』ではないと言い切るのは早い」
「だが、少なくとも、俺にとってあなたは『悪』ではない。あなたは、セレス殿の助け手、セレス殿を光へと導く者だ」
　ハリの戦士は枝を折り、炉へとくべた。
「どうあっても、形代を使われるのだな？」
「形代は呪をセレスから余所に移すだけ。形代をきちんとかけておけば、呪の種類が何であれ呪は瞬く間にわしに流れてくる。この手ならばセレスも従者も誰一人傷つかずにすむ。この手が最良。わしは形代を解かぬ」
「カルヴェル様……」
「今世の女勇者も従者のインディラ僧も、大魔王が呪をもって待ち構えている事を知らぬ。二人に教えぬよう、わしが頼んでおいたか

らの。じゃから、形代(かたしろ)で、わしが消えても、何も変わらぬ。世界中で好き勝手な事をしておるジジイが姿を見せんようになっても、誰もあやしまんじゃろう」
「……俺が探す」
「ん？」
「セレス殿が大魔王を討伐した後、あなたの無事を確認する。もしも探知の魔法であなたが見つからなかったら、このハリハールブダン命に代えても」
「こりゃ」
老人は杖の先端で、ハリの戦士の頭をポカリと叩いた。
「そんな事をしてくれと頼んではおらぬわ。おぬしには、ケルティの上皇としてなすべき仕事があるじゃろうが。形代(かたしろ)のことを教えたのは、わしが消えた後のケルティの混乱を防ぐ為。ただ、それだけの為じゃ」
「しかし」
「なぁに、そう易々とはやられぬ。ランツがケルベゾールドを討ってより三十六年……わしも、ただ生きてきたわけではない。世界中の魔法及び邪法を研究し、聖なる武器や魔法道具(マジック・アイテム)を収集し、邪に対抗する準備を進めてきた。ケルベゾールドに負ける気はない。セレスから呪を引き離した後、わしがその呪を封じる。いや、封じてみせる。時間はかかるやもしれぬが、必ず成し遂げる。わしが消えても案ずるな。わしを信じて今世で待っておれ」

五つの道　5日目（2）（後書き）

エーゲラでの出来事は、夢シリーズの『夢のつづき』の話です。
大僧正が病と聞いてナーダが動揺しますが、大事とならず、旅はこれまで通り続くという話でした。

五つの道　5日目（3）

ナヴィアス要塞の一室でセレスは静かに眠っていた。

交替で二人のシベルア司祭が彼女に付き添ってはいたが、魔法で身体機能維持はしてもらってはいない。今のセレスは自力で呼吸ができる。忍者ジライが邪法を祓ってくれたので……そして、その為に死にかけているジライを僧侶のナーダが異次元に籠もって治療している。赤毛の戦士アジャンも、セレスを救うべく旅に出てしまった。従者の中でセレスの側についているのはシャオロンだけなのだ。

寝台のすぐ側の椅子に腰かけ、シャオロンは尊敬する女性を見つめていた。この要塞に着いてからずっと、用がない限り、何時も少年はそこに座っている。口をぎゅっとひきしめて。革袋に入れた『龍の爪』を背負い続けているのも、何時でも戦う覚悟を表していた。

そんな少年を護衛として同じ部屋に詰めるバンキグの戦士達やシベルア司祭は、温かな目で見守っていた。女勇者への忠義あふれるけなげな少年に、心打たれぬ者はいなかった。

老忍者は部屋にいないかと思うと、何時の間にか戻っていたりする。何をしているのか、その行動は謎に包まれていた。しかし、一つだけはっきりしていた。少年が仮眠をとる時ややむにやまれぬ事情で部屋を離れる時には、老人が必ず少年の代わりに女勇者を護衛するのだ。

二人は、時折、南の言葉で会話していた。北方の言葉があまり得意ではない少年は、南の言葉でなければ思いをうまく伝えられないようなのだ。

「……すみませんでした」と、シャオロン。

「ん？　何がじゃ、シャオロン殿？」と、ガルバ。

二人は女勇者のすぐそばの椅子に並んで腰かけていた。

「結局、オレ、お役に立てませんでしたよね。ナーダ様、寝不足のまま異界に向かわれてしまったし」
「まあ、あの状況ではいた仕方ござらぬ。常からお体をいたわらぬ御身様が悪いのじゃ」
「ナーダ様が、絶対、ジライさんを助けてくださるってオレ信じてます。信じてるんだけど……ほんのちょっとだけ不安なんです。ナーダ様、体力も魔力も回復しきってませんでしたから。無茶なさっておられなければいいけど……」
「いや、御身様のことじゃ、痩せ我慢しまくって、無茶しておられるに決まっている。だが、命に別状はあるまい。明日には御身様も東国忍者も今世に戻って来よう」
「……そうですよね」
「そうに決まっておる。カルヴェル様が御身様らの身柄を預かられたのじゃ。あの御方は表面こそちゃらんぽらんじゃが、仲間を愛し信義を重んじる方。信頼に足る魔法戦士じゃ。あの御方が側についておられる限り、誰一人死ぬはずが無い」
「……ガルバさん」
「ん？」
「あの、もしかし、ガルバさんとカルヴェル様ってお知り合いなんですか？　そんな風に聞こえるんですけど」
少年の問いに、老人は目をぱちくりとさせる。
「知り合いも何も……ご存じじゃろ？　御身様の伯父御は、先代勇者ランツ様の従者、僧侶ナラカ様じゃ」
「あ、はい、知ってます」
「ナラカ様はわしの最初の主人（あるじ）。九つの年よりずっと、ナラカ様が大魔王討伐の旅で消えられる時まで、わしはナラカ様にお仕えしていた」
「え！　て、事は！」
少年は目をきらきらと輝かせ、老人を見つめた。
「ガルバさん、先代勇者一行の旅に同行なさったんですね？」

「主人（あるじ）に影ながら付き従うのが、インディラ忍者。ランツ様がわしの同道をお許しくださったので、情報収集などで勇者一行の旅を助けたが……？」

それが何か？　と、いう老人に、少年はにっこりと笑みをみせた。

「セレス様がお目覚めになったら、その頃の事、是非、お話してください！　セレス様、勇者様や従者様達のお話が大好きですなんです！　おじい様とナラカ様達のお話なら大喜び、間違いないです！　ぜひ、お願いします！」

「ああ……まあ」

老人は腕を組んだ。

「魔族退治の話なら、まあ、幾つか語れるかな」

「それもいいですけど、普通、よそじゃ聞けないようなお話がいいんじゃないかと」

「と、いうと？」

少年はにっこりと微笑んだ。

「ガルバさんから見た勇者一行のお話をお願いします。普段、皆さん、どんな会話してたとか、宿屋でどんな事してたとか、そういう日常的な事って、他では聞けませんから」

「う」

老人は喉を詰まらせた。

あの真面目で融通のきかない女勇者に、先代勇者一行の日常を話す？　素行が悪いわ、いらぬ騒動を起こしまくるわ、道徳も最低だわの一行のことを？

子供時代のナーダに語ったような冒険話ならいいのだが……それ以外の事を話すのは避けた方が賢明だ。美談をつくっても、多分、ボロが出る。

「すまぬが、暇はないと思う。わしは御身様にお仕えする忍。御身様が戻られたら、主人のご用を果たさねば」

「あ、じゃあ、昔の話、今、教えてください。ガルバさんがもうすぐお忙しくなられるのなら、オレが今、聞いておいて、オレからセ

レス様にお話しますよ」

「……」

ニコニコ笑う少年。

墓穴を掘ってしまった……老忍者はすばやく頭を回転させた。

話しても問題ない、無難な話があっただろうか？　急用を装って姿をくらますべきか？　しかし、仲間と離れ不安になっている少年を見捨てて姿をくらますのも気がひけた。

どうすべきか……老人は真剣に思い悩んだ。

アジャンに笑われたら、どうしよう？

歩きづらいし、足元が見えないし、お化粧した顔が妙にむず痒いし……ああん、もう、顔をゴシゴシこすりたい！　化粧慣れしてないせいね、痒いわ。

着慣れないモノを着るのって、妙に緊張する……恥ずかしい。

でも、この格好なら、もしかすると、アジャン、喜んでくれるかもしれない。前に、女は装うと美しさが際立つとか言ってたものね。まあ、あの時は、どんな格好よりも裸の女が一番だとか、Hな一言もつけ加えていたけど。

このところ、アジャンはずっと暗い目をしている。何かを思い悩んでいるのに、胸中を誰にも話してくれない。シャオロンが不安になるのもよくわかるわ。

私じゃ役不足なのはわかってる。でも、ナーダは超多忙だし、ジライはアジャンと仲悪いし……

私しかいない！　私がアジャンの相談にのる！　嫌がられるだろうけど、絶対、引かないわ！

寝台の上に寝転がっていた過去の俺が、ガバッと体を起こした。
寝室に入って来た人物に、度肝をぬかれたのだ。
扉の前には……
金の髪を美しく結い上げ、淡い若草色のドレスに身を包んだセレスが居た。髪飾りも首飾りも花を模した細工だ。頬を微かに赤く染め、青の瞳は恥ずかしそうに半ば閉じているのが……何とも……妙にそそった。
ここは……ケルティの王宮だ。ついに、ケルティまで来てしまったわけだ。ケルティの次がバンキグ。早くセレスを起こさねば！
起こさねば……
ああ、しかし……
過去の俺がセレスを見つめている。
目がそらせないのだ。
胸は激しくときめき、体温は上昇していた。
口の中が乾いている……
クラクラする……
めまいがしそうだ……
何故……？
「セレス……」
過去の俺の声は、かすれていた。
「何だ、その恰好は……？」
「やっぱり、変……？」
青の瞳が不安そうに俺を見つめる。
「あ？　ああ……」
綺麗だ……
夢のように美しい……
喉まで言葉が出かかるのだが……詰まってしまう。
《褒めろ！》

頭の中に、ハリハールブダンの思念が大声のように響く。
《照れるな！　褒めちぎれ！》
できるか！
《相手がセレス殿だから、意識しすぎて硬くなっているのだ。目の前にいるのは、美女だ。セレス殿ではない、ただの美女だ。そう思いこみ、過去の自分の興奮を煽れ！》
無茶言うな！
俺とハリハールブダンがもめている間に、過去の俺はドレスなんか似合わないと答えていた。そんな事、微塵も思っちゃいないのに。
セレスは後ろ手で寝室の扉を閉めてしまった。常に連れているお供の二人――シャオロンとクソ忍者を入室させまいとして。俺と内緒話がしたいのだ。
「おいおい、お姫様、男の寝室にお一人でお乗り込みあそばして、どういうつもりだぁ？　ついに処女を散らせる気になったのか？」
過去の俺が軽口をたたく。王宮では勇者一行には常に監視がついていた。俺の部屋もどっかから覗かれてるのはわかってたんで、不用意な話はしたくなかったんだ。だから、セレスの訪問を下卑た冗談でちゃかし、怒らせて退出させようとしているのだ。
《襲え》
上皇様がけしかけてくる。
《美女が寝室に押しかけて来てくれたのだぞ。手を出さない方が非礼だ。おまえとて、そう思うだろう？》
……相手がセレスじゃなきゃ、そうするさ。ったく、気がのらねえ。けど、ま、馬鹿女を起こす為だ。過去の俺をその気にさせて、手を出させるか。
「どうしたの、アジャン？」
セレスがきょとんと小首を傾げる。男の劣情など、夢想だにしないという顔つきで。

過去の俺は、俺がイメージしたあられもない姿のセレスに興奮し、ドレス姿のセレスに欲情していた。息は荒くなり、体温は上昇した。

過去の俺が近づいて来るのを、セレスは不思議そうに見つめている。

「ねえ、私の話、聞いてる？　あなた、私の護衛なのよ。部屋に籠もってばっかりいないで、働いて。毎日、ちゃんと姿を見せてよ。でないと、シャオロンが心配するわ」

「……シャオロンが？」

「……私もよ。私もこのままじゃ、不安だわ。あなたが……何処か遠くへ行ってしまいそうで……」

「……俺が側に居ないと、寂しいのか？」

「え？」

「俺に惚れたのか？」

セレスの顔が朱に染まる。

「バ、バカじゃないの！　そんなんじゃないわ。私は、仲間として、あなたを心配してるだけよ」

「仲間として？」

「そうよ！」

「違うだろ？　俺が好きなんだろ、お姫様？」

セレスの顔が更に紅潮する。うろたえる表情は、すごく子供っぽい。

「そんなわけないでしょ！　あなたみたいな下品な男、大嫌いよ！　女と見れば見境なく口説くし……うちのメイドさん、九人とHしたのよね、あなた……私のそばで……。街に着く度に、私を置いて娼館に行っちゃうし……」

「セレス？」

「女の人なら誰でもいいんでしょ！　Hすぎるわ！　お金に汚いし……意地悪だし……それに、それに……あなたは、いつも、私にだけ……」

セレスはうつむいて、震えだした。感情が昂ぶっているのだ。

抱きしめようと近づいた俺を、顔をあげたセレスがキッ！　と、睨みつける。

「あなたみたいな品性下劣な最低男、そばに居て欲しくない！　大嫌い！　何処へなりとも行っちゃって！　女の人とHしまくって早死にすればいいんだわ！」

え？

突然、場面（シーン）が変わった。一瞬にして、周囲は雪景色に変わり、セレスの格好も変化してしまった。

セレスはもうドレス姿じゃない。白銀の鎧の上に毛皮の長衣をまとっている。北方の旅のスタイルだ。

雪の森……

いや、雪に埋もれた庭園だ。ケルティの首都ホルムの王宮を旅立つ時の景色……だよな。ゼグノスをぶっ倒した後じゃねえか。何でここまですっ飛んだんだ？

「大嫌い……？」

過去の俺がセレスを見つめる。こいつも、戸惑っている。ドレス姿のかわいかったセレスが、瞬く間にいつもの格好に戻っちまったんだ。何が起きたのかわからず、こいつも混乱している。

今、セレスは半べそをかいて、過去の俺を睨んでいる。ぷるぷると震えている。

「何で……俺が嫌いなんだ？」

「何でですって！　わからないの？　私、もう呆れ果てたのよ！　私の側を離れて、あなた、女の人とHしまくってたんでしょ！　最低よ！　あなたがアジ族の王として頑張ってると思ったから……だから、私……くても我慢しようと思ったのに」

「ん？　よく聞こえん？　何で我慢しようと思ったって？」

「……くても我慢しようと思ったって言ったの！」

「聞こえん」

「だから、……くても我慢しようって！」

「何だって？」

セレスの青い瞳が俺を見つめる……
悲しそうに、つらそうに、真っ直ぐに俺を見つめる……
「あなたなんて大嫌い！　あなたが側にいなくても、私、全然、平気よ！　寂しくなんかない！」

パリィィィィン……と、音を立てて硝子が砕けるように……周囲の景色が砕け始めた……

「嫌い！　嫌い！　大嫌い！　側に来ないで！」

「セレス」

「馬鹿ぁ！　何も言わないで！　何も聞きたくない！」

「セレス」

「触んないでよ！　変態！　H！　あなた、私が嫌いなんでしょ！　世間知らずの馬鹿女には虫唾が走るんでしょ？　なら、ほっといてよ！　悪口なんか聞きたくない！」

「セレス」

「わかってるわ……あなた、皮肉な事ばかり言うけど、大切な場面では、いつも正しい事を言っている……あなたが悪いんじゃない。私が世間知らずの馬鹿すぎて、あなたを苛立たせてしまうから、いけないのよね。だけど、もう、嫌なの……あなたにけなされると、悲しくなるの……これ以上、あなたに嫌われたくない……」

「セレス……それは違う」

「え？」

「嫌いってなどいない……俺はずっと、おまえを……」

過去の俺が、セレスを強く抱きしめる。
愛しい女をその手に抱くように……
過去の俺が何かをセレスに告げた瞬間……

全てが砕け散った……
周囲も……
セレスも……
そして、俺までもが……
粉々になって砕け散っていったのだ……

「セレス様！」

目を開くと、シャオロンの顔が見えた……
ポロポロと涙をこぼしながら、シャオロンが私を見つめている。
泣きながら嬉しそうに笑っている……

「良かった、セレス様！」

シャオロンが掛け布団を握り締めて、うつむく。肩を震わせて、
涙が止まる気配はない……

周囲が騒がしい……
歓声が聞こえる……
私が眠っていた寝台のそばにいた方々が、聞き取れない言葉で祝
福するように私に笑いかけ、急ぎ廊下へと消えて行く。建物中から、
明るい声が次々にあがる……

私……
死にかけて、意識を失っていたのかしら……？
長い夢を見ていたような気がする。
不思議な気持ち……
悲しいような……寂しいような……
だけど、心があたたかい……
どんな夢を見ていたのかは思い出せないけれど……
あたたかな光を常に感じていた。

眠っている間、私は一人ではなかった。誰かが側に居てくれるのを感じていた。

シャオロン、ナーダ、ジライ、アジャン……それに、お師匠様だ……

眠りながら、五人の気を感じていた。

五つの光……

光を浴びて、私は目覚めたのだ。

五つの道　6日目

「セレス様！」

「ジライ！　ナーダ！　お師匠様！」

昼過ぎ、ナヴィアスの要塞前。
魔族の瘴気で草木が全て枯れてしまった森であった場所に、老魔術師の移動魔法で東国忍者と武闘僧が現われたのだ。バンキグ国王や戦士達、魔法使い、シベルア司教・司祭達が見守る中、女勇者は雪を蹴って仲間の元へと走った。その後を、東国の格闘家の少年が続く。
「ジライ！　良かったわ！　助かったのね！」
セレスは東国忍者に、飛びつくように抱きついた。
その衝撃に、忍者がふらっとよろける。すかさず、武闘僧がセレスに抱きつかれている忍者の体を支えた。
今の忍者には、セレスの体重を支えるだけの体力が無いのだ。
慌ててセレスは忍者に体を預けるのはやめた。
「ごめんなさい、ジライ、大丈夫？」
「はい」
ジライは素顔を覆面で隠しているので、表情はよくわからない。だが、覆面から覗く切れ長の黒の瞳は涙にうるみ、にこやかに微笑んでいた。
「セレス様こそ……お目覚めになられて、ほんに、よろしゅうございました」
ジライを見つめる、セレスの顔がくしゃりと歪む。泣き出しそうな顔となる。

「もっと自分を大切にしてって、私、命令したのに……」
「セレス様……」
「聞いたわよ、あなた、私を助ける為に、無茶したんですって？邪法を使って、そのせいで死にかけたって……」
「もはや大事ありませぬ。魔は体より離れました」
「本当に、もう大丈夫なの？」
「は。すっかり体は衰えてしまいましたが、充分な休息をとれば数日でもとに戻りましょう。ナーダの治療のおかげにございいります。セレス様のご無事なお姿を拝見し、手厚く迎えていただき、感激の至り。気力も満ちました」
「良かったわ……」
女勇者の視線が、忍者の背後へと向く。
「ナーダ……ありがとう」
セレスの感激の抱擁が自分にもきそうだと察し、武闘僧はそっぽを向きながら後ずさりを始めた。
「礼ないどいりません。僧侶として、当然の役目をなしただけですから」
ナーダの顔色は土気色だった。魔法の使いすぎで消耗しきっているのだろうが、それでも弱っているところを見せまいと平静を装っているのだ。プライドの高いナーダらしい。セレスの口元に笑みが浮かんだ。
「私はルゴラゾグス国王とお話をしてきます。あなたはジライをいたわってあげてください」と、ナーダ。
「では、わしもついて行こう」と、老魔術師。
「あ！　お師匠様、この度はありがとうございました」
師に挨拶をしてない事に気づき、セレスは急いで頭を下げた。
黒のローブの魔術師は、鷹揚にかぶりを振った。
「わしはたいした働きはしておらぬ。礼はそこな忍者と。アシスタスフニル、ナーダとシャオロンに言うがよい」
「ええ、それは、もう……。でも、お師匠様、アジャンは何処に？

ご一緒じゃなかったんですか？」
「うむ」
ニコニコ笑いながら、老人が顎鬚を撫でた。
「あやつは、今は、休養中よ。二、三日で戻るじゃろ」
「え？……まさか、アジャンも私のせいで危ない目にあったのですか？」
「そうではない。精神感応のしすぎで疲れて寝ておるだけじゃ。寝て、心身をリフレッシュしておるのよ」
「はあ……そうなのですか」
「ん？　これ、待て、ナラカの甥よ」
『おかえりなさい！』と、元気に挨拶をしたシャオロンに軽く会釈をして応えた後、ナーダはすたすたと歩き出していた。共に国王の元へ行くと言った老人を無視している。老人は短距離の移動魔法で、武闘僧の進行方向に移動した。
「何を怒っておる？」
「……別に怒ってなどおりません」
宙に浮かぶ老人から、ナーダがツーンと顔をそむけ続ける。速度を緩める気もないようだ。
「嘘つけ。不機嫌そのものではないか。まあ、二日に渡る愛欲の日々が終わりを告げ、恋人がセレスの元へ走ってしまっては面白くないのも道理じゃが」
小声だったので、その声は距離が開いたセレス達に聞こえるはずがない。だが、ナーダの耳には届いた。ナーダは足を止め、糸目でジロリと老魔術師を睨んだ。
「カルヴェル様、不愉快ですので、その手の冗談はやめていただけませんか？」
「ホホホホ。照れるな。おぬしとジライが深い仲なのは知っておる。じゃから、この二日、あやつをおぬしに任せたのよ。おぬしの愛の力が、あやつの体を癒し、あやつの魔への堕落を防いだのであろう？」

ナーダの瞳が一層、険しくなる。
「この二日、私がどうやってジライの正気を保っていたかご存じなのでしょ？　カルヴェル様が私達を異界に閉じ込めてくださったんですから。結界の術師であるカルヴェル様には、結界の中は丸見えだったはずです」
「馬鹿を言うな。わしには、他人の情事を覗き見する趣味なぞないぞ」
老人は肩をすくめた。
「露出プレイ好きのカップルに付き合ってやった事もあるが、おぬしは性交を秘め事と思う性質じゃろ？　そういう輩の情事には関わらん事にしておる。覗きで怨みを買うのも、阿呆らしい」
「……」
「性交で心を繋きとめたのではないのか？」
「……そんな美味しい役回りじゃありませんでしたよ」
「では、どうやって？」
「……そんなの決まってるじゃないですか」
ナーダは面白くなさそうに、溜息をついた。
「……餌をちらつかせたのです」

『ジライ！　気をしっかりもって！　邪法を使って魔を召喚して、自分に憑かせたんでしょ？　目的の為に手段を選ばず悪どい事をして、セレスの言いつけに背きまくったんでしょ？　良かったですねえ！　やったじゃないですか！　お仕置きしてもらう、又とない機会ですよ！　ああああ、そんなんじゃ生ぬるいですね！　鞭に縛りに蝋燭！　ゴージャスなお仕置きだって、今回はありえますよ！　なにしろ、あなた、魔に堕ちかけてるんです！　人間として最低の過ちを犯しているわけです！　セレス、むちゃくちゃ、怒るでしょうねえ。でも、このまま魔族に体を明け渡しちゃ、せっかくのお仕置きを、あ

なた味わえなくなっちゃいますよ。死ねば丸損！　生き抜けばセレス女王様とのめくるめく官能の世界！　お仕置きが待ってますよ！』

「……と、魔の活性化を抑える呪文の合間に、乏しいＳＭ知識を総動員してセレス女王様のお仕置きシーンを予想しジライの心をくすぐる責め言葉なぞを延々と言い続けて、生への執着心を煽っていたわけですよ、二日間も」

「……それは、しんどかったのう」

「まあ、終わり良ければ全て良し、です。ジライは死なずにすんだし……セレスも目覚めてくれましたから。セレスさえ無事ならば、この世の滅びる可能性はぐっと低くなりますしね」

苦笑を浮かべるナーダ。セレスを話題としながらも女嫌いの彼にしては珍しく、険のない穏やかな表情をしていた。女勇者の回復を心より喜んでいるのだろう。

と、そこで……

彼等の背後から、気持ちいいほどこきみのよい音が響いてきた。振り返った二人の目に、びたん！　と、地面に叩きつけられ雪を舞わせる忍者が見えた。セレスに殴られたのだ。

あまりの異常事態に、要塞から外を伺っていたバンキグ人も何事？　と、凍りついていた。

周囲の注目を浴びながら、忍者はフラフラと立ち上がり、女勇者の足にすがりついた。

「セレス様、是非、もう一発ぅ……」

女勇者の顔はひきつっていた。

「もうやめましょ、あなた、病み上がりなのに……」

「いいえ！　こんな時こそ、けじめをつけねば！」

忍者の瞳は燃えていた。

「私はセレス様のお言いつけに背いて、邪法を使いました！　もう二度と使わぬと誓いましたのに！　不埒者には罰を与えねばいけま

せぬ！」

「でも、あなた、私の為に誓いを破ったんだし……」

「セレス様！　一度、たがが外れると、人間はズルズルと堕落してゆくものでござる！　下僕が道を誤る前に、性根を叩き直すのがご主人様の務め！　さあ、さあ、是非、是非！　セレス様の正しき心の籠もった拳で、あ、蹴りでも構いませぬが、このジライの卑しい心を正してくださいませ！」

「さすがです、ジライさん！」

セレスの横のシャオロンは、ジライの言葉を言葉通りに受け止め、感動していた。

「セレス様、オレからもお願いします！　ジライさんに、入魂してあげてください！」

熱い涙を流す少年にまで詰め寄られ、セレスには逃げ場が無くなってしまった。

「……わかったわ。殴るわよ」

「このジライを思ってくださるのなら、本気でお願いいたしますぅ。気のぬけたパンチでは、性根を正せませぬゆえ、セレス様の全力でぇ」

希望通り（リクエスト）の拳を頂戴し、忍者の体はゴロゴロと雪の上を転がっていった。

ナーダは糸目で要塞を見上げた。

窓辺にいる人々はあっけにとられて、忠義の部下であり恩人でもある忍者をぶん殴る女勇者を見つめていた。皆、何が起きているのか、さっぱりわからないという顔で、成り行きを見守っているのだ。

「あああああ、もう！　急ぎます。バンキグの方々に、あの二人のスキンシップについて説明しなくては」

要塞へと駆けて行くナーダ。

老魔術師は、ドタンバタンゴロゴロと転がってゆく忍者、大丈夫かしら？　と心配顔のセレス、拳を熱く握りしめて感動している少年を、しばし楽しそうに眺め、それから移動魔法で体を運んだ。

バンキグ国王に挨拶をした後は、エウロペの自分の城へと戻る。
そこに、眠り続けているアジの戦士と、彼に付き添うハリの戦士が居るのだ。

五つの道　8日目

赤毛の戦士は、老魔術師の移動魔法によって昼前に要塞前の凍河に現われた。旅をしてきた犬橇と共に。

「アジャン！」

「アジャンさん！」

駆け寄るセレスとシャオロン。ナーダは部下の老忍者と共に要塞の入口に佇み、セレス達が傭兵の前で足を止めると女勇者の背後にフッと東国忍者が現われた。

ニコニコと笑う老人と一緒に居ると、赤毛の戦士の仏頂面は一際目立つ。アジャンは鋭い緑の両の眼で、セレスを睨むように見つめた。金の髪をうなじで一つに束ねた女勇者は多少やつれてはいたが、ふっくらとした頬の健康的な美しさを保っていた。

「元気そうだな」

「ええ。あなた達のおかげよ。本当に、ありがとう、アジャン。あなた達が居なかったら、私、死んでたわ」

赤毛の傭兵は、ボリボリと頭を掻いた。

「なら、二度とドジを踏むな。おまえさんのケツを拭うのは、もうこりごりだぜ」

例えのあまりの下品さに、セレスが硬直する。

「ケ……そ、そうね。その通りね。二度と迷惑をかけないように気をつけるわ」

「その言葉、忘れるなよ」

アジャンは懐から折りたたまれた紙を出し、セレスへと渡す。

中を開いてみると……

大きく数字が書かれ、エウロペ語の文章が記されていた。要約すると、自分の働き無しには女勇者の生存確率はゼロに近かったという内容だ。

「これって……」

「特別手当の請求書」
「……」
「これぐらい安いもんだろ？」
請求書から顔を上げて、セレスは溜息をついた。お礼もまともに言わせてくれないのねと、残念そうに。
「おかえりなさい、アジャンさん」
と、にっこりと笑う少年に、赤毛の戦士は笑みで応じ、その頭をポンポンと叩いてやった。少年に和やかな笑みを見せていた戦士は、いかにも言い忘れていたといった風にセレスへと顔を向けた。
「ああ、そうだ。ハリハールブダンから伝言。全てが終わったらケルティに顔を出してもらえると嬉しいだとさ」
「え？　ハリハールブダン様？　お会いしたの？」
「なに寝ぼけてんだ、馬鹿。今回のおまえさんの魂救出に、あいつも協力してくれただろうが」
「え？　ハリハールブダン様が！」
女勇者は驚き、魔法の師匠に尋ねた。
「そうなのですか、お師匠様？」
「うむ。あやつの協力なくば、こたびはアジスタスフニルといえども充分な働きができなかったであろうなあ」
「そんな！」
そういう事は早く教えてください！　たいへんだわ、すぐにお礼のお手紙を書かなくっちゃ！　と、あたふたとうろたえ始めた女勇者は、首をかしげて仲間に尋ねた。
「ハリハールブダン様は、私の為に何をしてくださったの？」
「何って……」
赤毛の戦士は女勇者を見つめた。穢れのない子供のような瞳で、真っ直ぐに自分を見つめる女勇者を。
「……まあ、いろいろだ」
「具体的に教えてよ！」
「……そんなの、おまえさんが知る必要はない」

「何で？」
「何でって……」
アジャンは困ったように眉をしかめた。
「あいつは高潔な上皇様だ。恩を売りつける為に、おまえの救出に協力したわけじゃない。自分の手柄を宣伝する気も、してもらう気もないはずだ」
「アジの先代王の息子とは、大違いじゃな」
と、ぼそっとつぶやいたのは、セレスの背後のジライ。アジャンは『魔は祓えたのか。又、命拾いしやがって』と、忍者をジロッと睨んだ後、セレスへの言葉を続けた。
「だから、ありがとうございましたと、礼状にはそれだけ書いておけば良いんだよ。それで礼儀にはかなう」
フンとアジャンがそっぽを向いてしまう。魔法の師匠はニコニコ笑うばかりで何も教えてくれない。
変なのと思いつつも、セレスは、それ以上は追求しなかった。

ケルティの上皇は、エウロペのカルヴェルの居城に三日間滞在していた。カルヴェル所有の魔法道具（マジック・アイテム）を拝借し、大魔王について調べているのだ。憑代の正体、復活から今日までの動き等々。
カルヴェルは、ハリハールブダンに全面的に協力していた。大魔法使いである自分が動きすぎるとセレスの成長を妨げてしまうと、普段、老人は自らの行動を制限している。しかし、積極的に魔と戦う意志を持つ者への助力は惜しまないのだ。
「魔は何かに憑依してこの世に現われる。憑依物を何にするかでその能力も大きく変わる。木に憑けば火に弱くなり、水に憑けば枯れる事もあり、火に憑けば水に弱くなる。それは、人に憑いた場合も同じ。優秀な器に宿れれば魔は己が本来持っている能力を最大限にまで引き出せる。が、同時に憑依した者が知的であればあるほど、

影響を受けてしまう。つまり、性格・思考等、その人間のアイデンティティーに基づいた行動をとる事になる」

カルヴェルは記憶を記録した魔法球も、次々にケルティの上皇に渡していった。

「今世に大魔王を召喚したのは、シルクドの一流半の実力の魔術師。己の才のなさを、大魔王への信仰で埋めようとした、憐れな男よ。劣等感の塊であったあの男は、生まれながらにして『最強』となる資格を得る勇者一族を妬んでいた。セレスへの呪は、セレスを辱め奴の虚栄心を満足させるモノであろうな」

ケルティの上皇が眉をしかめる。大魔王の消滅後に、老人の身に起こる事を想像したのであろう。

「シケタ面をするでない、上皇殿。おぬしには、この城を開放してやる。大魔王と共にわしが消えても消えずとも、この城にある魔法書、魔法道具（マジック・アイテム）、魔法生物を好きに使わせてやる。これからも、ケルティの為、そして人の住む世界の為、その能力を使ってくれ」

「……」

「おぬしは上皇という一国の最高権威にありながら権力欲も物欲もなく、大魔法使いとなりながら傲慢さはなくさほど知識欲もない。己が欲望に溺れておらぬゆえ、常に公平。おぬしの庇護下にあれば、世界も安泰じゃ。この世界の為とあらば、遠慮はいらぬ。この城のモノ、好きに使ってよいぞ」

「……まるで遺言のようだ」

老人はホホホホと笑った。

「言うたであろう、わしは死なぬ。死ぬものか。余計な事は気にせんでよい」

「……」

「どうせ気にするのなら、おまえの半身の未来でも気にしてやれ」

「半身？」

ハリハールブダンが不快そうに顔をしかめた。

「アジスタスフニルの事か」

「さよう」
老人がニヤリと笑う。
「夢であれほど後押ししてやったのじゃ。現実でも、アジスタスフニルのかわいらしい初恋の手助けをしてやったらどうじゃ？」
「とんでもない」
ハリの戦士は、こりごりだと言わんばかりに頭を振った。
「あんな気恥ずかしい恋とは、もう関わりあいたくない。それに、あの男、告白まで漕ぎつけたというのに、二日眠り続けただけで、皆、忘れてしまった。夢で何があったのか自分がどんなことをしたのか全く覚えていないと言っていた。後押しのしがいもない」
「仕方あるまい、あやつはシャーマンじゃ」
老人は愉快そうに笑っている。
「神をその身に宿す時、シャーマンは己を捨て去り器となりきるが、それは保身の為よ。大いなる存在の前では人間ごとき矮小な存在は塵芥（ちりあくた）も同然。下手に自我など持っていようものなら、神の存在に圧倒され、跡形もなく吹き飛んでしまう。そうゆう性質ゆえ、シャーマンは己の理解を超えた現実に直面した時、受け入れられぬ事実（もの）を頭からしめだして己の精神の平常を保つ癖を、無意識に身につけてしまうのじゃ」
「ほう」
「セレスと両思いとなるなぞ、あやつにとって、ありえぬ事（こと）実だ。それゆえ、頭が理解を拒否し、それまでの経緯を含め一切の記憶を排除したのじゃ。あやつにセレスの夢の世界に入ってから先の記憶が無いのは、そのせいよ。夢の中の出来事であったが為、精神の及ぶ影響が大きすぎたのも、記憶喪失を助長する原因じゃな。ま、現実世界での告白ならば、忘れんじゃろ」
「難儀な男だ……」
「だからこそ、面白いのよ」
老人の茶の瞳が、やさしい笑みをつくる。
「ケルベゾールドが今世から消えたら、勇者も従者もその使命から

解放される。わしは、その後、彼等が心のおもむくままに生きてくれる事を期待しておる。それがどんな未来になろうとも……彼等が自らの意志で切り開く未来を見届けたい。そう願っておる」

「……それゆえ、死なぬと？」

「うむ」

老人の笑みが悪戯っ子のモノに変わる。

「面白い見世物が始まるのじゃ、見ないで死ねるものか」

「何時から秘密主義に転向したんです？　私にぐらい、ケルティの上皇様のご活躍を含め、あなたが西で何を果たしてきたのか教えてくださっても良いと思うのですが……」

寝台の上のアジャンは、王族姿のナーダを無視し、寝たふりをしていた。要塞の中にルゴラゾグス国王が用意してくれた部屋でくつろいでいたところを、無粋な男に邪魔されたのだ。起き上がって相手をしてやる義理もない。

「カルヴェル様にお尋ねしても答えをはぐらかされるばかりだし……セレスが目覚めたのはあなたのおかげなのでしょ？」

そうらしいが、アジャンは自分が何をしたのかわからなかった。犬橇の旅をし、ハリハールブダンやカルヴェルに出会った事までは覚えていた。が、その先の記憶がないのだ。思い出そうとすると、頭が痛くなるので、思い出す努力すらもうやめている。

「まあ……言いたくないのなら、良いですけどね」

ナーダは皮肉たっぷりに言葉を続ける。

「世の中には人に知られたくない事実ってありますものねえ」

その挑発に、アジャンはのらなかった。もっとも、のったところで話せる事などないのだが。

武闘僧は大きく溜息をついた。

「あさって、ここを出発して、東へ向かいます。魔族を掃討しつつ、

シベルアを目指すのです。シベルアにケルベゾールドが居る事を祈りましょう。北方も外れだったら、アフリ大陸を目指すか、ユーラティアス大陸巡回の旅のやり直しになりますものねえ。いい加減、ここらで決着をつけたいものです」

女勇者セレスは窓辺に腰かけ、鞘に収まった『勇者の剣』を抱えるように抱き、雪景色を眺めていた。

従者のアジャン、ナーダ、シャオロン、ジライ、魔法の師のカルヴェル、ナーダの部下の忍者達、ルゴラゾグス国王とバンキグ人、ハリハールブダン……さまざまな人達に助けられ、死の縁から戻って来られた幸運を思うと胸が熱くなった。自分を愛し、支えてくれた人たち……

一層、思いは強くなった。

勇者となりたい……

愛すべき人達のいるこの世界を守りたい……

ケルベゾールドを倒し、この世に平和をもたらすのだ。

腕の中の『勇者の剣』が、あたたかい波動を放つ。

セレスの思いに共感しているのだ。

最初、セレスにもわからなかった。

死の縁から舞い戻り目覚めた彼女を要塞中の者が祝福してくれた。

シャオロンに、ルゴラゾグス国王を初めとするバンキグ人達、セレスのもとにやって来る人々は、セレスの無事を心より喜び、祝ってくれた。

けれども……

誰かが泣いていた。

セレスの生還を喜んで涙を流すシャオロンよりももっと大きな声で、周囲の目も気にせず部屋中に嬉し泣きの声を響かせて泣いてい

た。
誰が激しく泣いているのだろう？
声こそ大きいのだけれども、その姿は見えず、セレスは周囲を見渡し……
しばらくしてから、その部屋の壁の前に目をやって、ようやく気づけたのだ。
セレスの死に絶望し、何もできぬ自分を責め、従者達がセレスの魂を取り戻す事をひたすら願い続けていたもの……
そのものの思いに、自分は共感しているのだと……
それは、長い孤独の末に出会えた者を愛しく思い、共に戦えることを喜んでいた。
だからこそ、『剣士』である事をやめた時、怒ったのだ。
『女』に戻り、『戦い』を捨てるのか、と。
自分を捨てて、ただの『女』に戻るのか、と……
しかし、拗ねてはいたが、見捨てたわけではない。『剣士』に戻って欲しかっただけだ。
失う事など、耐えられない……
誰のものにもなれなかった日々には戻りたくない……
又、会えて嬉しい……
生き返ってくれて嬉しい……
とりとめもない、けれども、とても強く激しい感情が、セレスへと押し寄せてくる。
セレスはシャオロンの手を借りて寝台から体を起こし、壁に立てかけられているものの元へと向かった。
その顔に微笑を浮かべながら。
「心配かけて、ごめんなさい。ただいま……」
『勇者の剣』を、セレスはそっと抱きしめた。
「私も、又、あなたに会えて嬉しいわ……一緒に、大魔王を倒しましょうね……」

セレスの手の中の『勇者の剣』は、持っている事を忘れてしまうほど軽かった……

「セレス様」

振り向けば、そこには、明るい笑みを見せる少年と、影のように自分につき従ってくれる忍者がいた。

彼等ににっこりと微笑んでから、セレスは窓を閉じ、愛剣を手に立ち上がった。

長い夢を見た後に感じた寂しさは、セレスの心から消え去っていた。

仲間達と共にある喜びだけを感じていた……

五つの道　8日目（後書き）

『五つの道』　完。

次回は『旅のはじまり＊　カルヴェル　＊』。舞台はシベルアへ。大魔王との最終決戦を前に、カルヴェルはナラカと語らい、過去を振り返ります。

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　1話

天に架かる青い月を眺めながら、麗人は一人佇んでいた。夜の河のように黒く長い髪、神像のごとき犯しがたい気品にあふれる美貌、長身で細い体を覆う黒のローブ、右手に握るのは魔術師の杖。

その者が佇む場所に、視界を遮るものは何もなかった。何処までも何処までも風渡る夜の草原が続き、空には満天の星が輝いていた。誰もいない夜の草原。そこに佇む者の足元には、不可思議な模様の円陣が刻まれていた。いや、模様ではない。模様と見えるのは、魔に近しい者しか知らぬ邪法を誘う文字。しかも、秘文字だ。

月を眺めていた麗人が、柔和な笑みを浮かべ、視線を落とす。

青の瞳が向いた先には……

白髪、白髭の、老人が宙に浮かんでいた。ニコニコと楽しそうに笑う老人は、麗人同様、黒のローブをまとい、魔術師の杖を右手に握り締めていた。

「久しぶりじゃの、ナラカ。元気にしておったか？」

老人の問いに、麗人は小さく笑った。

「皮肉ですか？　元気に決まってるのに。私は現実世界に肉体を置いてませんからね。病にかかれないし、老いとも無縁です。おかげで、ほら、この通り、三十六年前と変わらずうっとりするぐらい美しいでしょ？」

「ホホホホ。あいかわらず口の減らん義弟よの」

「それにひきかえ……かわいそうに、あなたは会う度に醜く老けてゆきますねえ、カルヴェル」

「言い過ぎじゃ、このボケ義弟。最後に会うたのは一ヶ月前じゃろうが。一ヶ月で容貌が変わるかい」

老人はホホホホホと愉快そうに笑い、どっこらしょと草原に腰を下ろし、あぐらをかいた。杖は左肩にたてかけ、足の間に立たせて。

それを見守る麗人は動かない。正しくは動けないのだ。魔法陣に

囚われているため、直系五十センチほどの狭い円の中でしか動けないのだ。どうにか体の向きは変えられるが、座るなど不可能なのだ。
老人は大魔術師カルヴェル。比類なき魔力を誇る、当代随一の大魔術師。
対する麗人は、有髪、黒のローブ姿はどう見ても魔法使いにしか見えなかったが……三十六年前の大魔王との戦いで殉死したはずの、僧侶ナラカであった。

「セレス達は、明日、大魔王の居城に乗り込むようじゃ」
「ほう。ついに」
「うむ。ようやく最終決戦（ファイナル・ステージ）じゃ」
カルヴェルもナラカもニコニコ笑っている。明日の天気を話題にするかのような、のどかさだ。
「女勇者様の二年に渡る冒険も、ついに終わりですか」
「『勇者の剣』とセレスの仲も、今やラヴラヴ状態。セレスの為とあらば、あのスケベ剣、無限の能力を発揮し、ケルベゾールドを葬るじゃろう。勇者一行の勝利は確実となった」
「しかし、逃げられるのでは？」
ナラカは顎の下に左手をあて、首をひねった。
「大魔王とて馬鹿ではありません。『勇者の剣』に愛されている勇者と、まともに戦うものですか。勝てない勝負を捨て、ケルベゾールドは次元通路を使って逃げるのではありませんか？」
「なぁに、その心配はいらぬ」
老人はホホホと笑った。
「一週間前から、大魔王の居城に結界を張り、この土地に縛った。わしを殺さぬ限り、あやつ、余所へは行けぬわ」
「さすが、カルヴェル」
ナラカはパチパチと拍手を送った。
「大魔王を手玉に取るとは、さすが当代随一の大魔術師様ですねえ。

尊敬しちゃいます」
「ホホホ。心にもないことを言うて、おだてるな。尻がむずかゆいわ。まあ、いかな大魔王とて今世に現われる以上、憑代の技量によって能力は制限される。今世の憑代はシルクドの一流半の実力じゃった魔法使い。その程度の小物に宿っていては、当代随一のグレイトなわしの魔力にかなうわけもない。神族のお力さえ拝借できれば、奴をシベルアに縛るなど造作もない。もっとも……」
カルヴェルの笑みが苦いものに変わる。
「わしの魔力がいかに素晴らしくとも、わしでは憑代を殺せぬ。憑代を殺し、ケルベゾールドと地上との縁を断てるのは、勇者の振るう『勇者の剣』のみ。全てはセレスにかかっておる」
老人の茶の瞳は、ただひたすら、かつて共に旅をした男を見つめていた。
「おぬしを魔界から救えるか否かも、の」
「……カルヴェル」
「明日という日を迎える為に、わしは、人としてあるまじき道を進んできた。魔の侵攻を許し、救えるべき命を見捨て、魔へ堕ちゆく者も放っておいた。だが、後悔はない。他に道はなかったゆえ、な」
「……そんな事、気にしてたのですか？　馬鹿ですねえ、カルヴェル。弱者が死ぬのは、死ぬべき運命にあったからです。あなたのせいではありません、天命です。自分が動けば助けられたであろうなんて上から目線、聞いている方が不愉快です。あなたが全力で頑張ったって、一人残らず助けるだなんて不可能でしたよ。何千何万もの命を一人で背負えるもんですか。良心の呵責を覚える事こそ傲慢です」
「ホホホ。大魔王との戦いで殉死した、いと気高き、大僧正候補様のお言葉か、それが」
老人は楽しそうに笑う。
「わしは、ただ……セレス達を守りたいだけじゃ。あやつらは正義の為に邁進し、今世を守っておる。大魔王の憑代が死と共に発動す

る邪法を勇者に仕掛けているとも知らずに、の。わしは、ランツの孫のセレスも、おぬしの甥っ子も、アジクラボルト殿の長男も、ユーシェン殿の末子も、忍者ジライも、皆、愛しく思っておる……彼等をおまえのようにはしとぅない」

「……」

「ナラカよ、今度こそ、わしが勇者を守るぞ」

「最近、よく夢を見ます」

「ほう、立ったまま寝ておるのか。さすが、もと大僧正候補、器用じゃのう」

「グーグー寝てるわけないでしょ、私の魂は魔法陣ごと世界中を彷徨っているとはいえ、体は現実世界でいうところの時が存在しない魔界に封じられてるんですから。そうではなく、白昼夢を見るのですよ」

「おお！　ついにボケたか。体は若くとも、心は六十代。白昼夢に心奪われるとは老人性痴呆の始まり……」

ナラカはニッコリと微笑んだ。気品あふれる柔和な笑みだったが、目に容赦はなかった。

「うるさいですよ、カルヴェル。話、聞きたくないのなら、帰ってくださいます？」

「ホホホ。すまぬ、すまぬ。で、どんな夢を見る？」

「……昔の夢です」

ナラカは天を見上げた。空には数え切れないほどの星が瞬いている。

「父母との思い出、ガルバとの出会い、出家、総本山での修行とハメはずし、サティーの誕生、そして、ランツの従者となり、旅の途中であなたと出会った……」

「懐かしいのう」

カルヴェルはニコニコ笑った。

「シルクドで出会った時、ランツの従者はおぬし一人だけじゃったもののう。アジスタスフニルとナーダの二人しか居なかったセレスの時よりひどい」
「ランツは好き嫌いが激しいくせに、好き嫌いでしか行動しませんでしたからね」
ナラカもニコニコ笑う。
「従者候補は女勇者様の時と違って、三十人以上いたそうですよ。でも、顔を合わせただけで、ほとんど追い返しちゃったみたいです。『おまえら、好かん』って言って」
「ホホホ、各国の歴戦の猛者やら魔法使い、各宗教団体の精鋭を、理由も告げず、追い払ったのか」
「ランツのことですから、面倒くさかったんじゃないんですか、『理由』を説明するのも。彼が気に入ったのは、ただ一人。私の名代としてエウロペの王宮を訪れていたジャガナートだけでした。彼の旅立ちに立ち会ったのは、実は、ジャガナートだけなのですよ」
「ジャガナート？　ウッダルプル寺院支部の僧正、切れ者の武闘僧じゃな。ナーダの武闘の師の」
「ええ。当時は教団一の武闘僧でした。豪快な性格の気持ちのいい男でしたよ、多分、今も、そうでしょうね」
「何故、名代を王宮へ遣った？」
「だって」
ナラカは優美な仕草で、左手で長髪を掻き上げた。地面についてしまいそうなほど、黒髪は長い。
「私、あの当時から有髪（これ）でしたから。ローブではなく、僧衣を着てましたけれどね。私がこれでも、大僧正様はお気になさらなかったのですが、他の高級僧の方々が嫌がりましてねえ。インディラ教団の恥だとおっしゃって。彼等は私以外の者を従者に推薦したかったのですが、大僧正様が直々に私を従者にと決められましたので、その決定に逆らえなかったのです。なのに……小物って嫌ですね、大僧正様に逆らう勇気もないくせに、彼等、腹立ち紛れに私に無理難

題を押し付けてきたのです。有髪ではエウロペ国王の前に出るな、出たら大僧正様が何っとおっしゃろうと総本山で千日行をさせるって」

「ホホホ。無理難題のう」

「だから、後輩のジャガナートに王宮に行ってもらったんです。エウロペ国王の前に出られない以上、名代を立てるしかないでしょ？　身を清める行の最中で私は総本山に籠もっているという事にして」

「なるほど」

「で、ランツが王宮から出発するまで、私は仕方なくクリサニアの安宿に泊まってました。賭場と花街を転々として時間を潰し、ジャガナートがランツを連れて来てくれるのをおとなしく色町で待っていたのですよ」

「何がおとなしくじゃ、不良坊主め」

カルヴェルが愉快そうに笑う。

「ド助平でキれやすい乱暴者の勇者と、呑む（酒）、打つ（賭博）、買う（女）し放題の有髪の大僧正候補。二人の出会いは、どんなんだったんじゃ？」

「そんなの言わなくても、わかるでしょ」

フフンと笑って、ナラカが黒髪を掻き上げる。

「私はこの通りの美形ですから」

「押し倒されたか？」

「ええ、出会ったその日に、安宿で。ジャガナートの目も気にせず、私の顔と破戒僧ぶりがそそると言って強引に」

「まあ、そういう男じゃ。あやつ、日に十発以上抜かないと体調が悪くなると言っとったしのう。気に入った奴を抱くのも、あやつには挨拶代わりよ。おぬし、あやつに滅茶苦茶気に入られたのであろう」

「ええ。私もランツが気に入りました。己を飾ろうともせず、欲望に忠実。本能の赴くままに生き、つまらない社会通念や常識は徹底的に無視する……まさに自然児。彼が勇者ではなかったとしても、

私は彼の友となり、共に旅をしたでしょう」
「うむ。わしもじゃ」
カルヴェルは静かに瞼を閉じた。
「わしも、あやつが面白そうな男ゆえ、旅立つ気になった。ランツと出会えて、ほんに良かったわ。ちょうど、光の道を貫くか、黒に染まるか迷っておった時期じゃった。暗黒道に転んでも、わしの事じゃ。大魔法使いになるに決まっておるからの」
「と、なったら、暗黒道を極めてましたね？」
「うむ。大魔王をこの身に降ろして融合し、魔王の能力を我が物としたであろう」
「そうなったら、この世は終わっていましたね。憑代の能力が高ければ高いほど、大魔王の今世での能力が増えちゃいますから。女勇者様の技量では、失礼ですが、大魔王が憑依したカルヴェルには勝てないでしょうし」
「ランツに出会えて、ほんに良かった」
カルヴェルは同じ言葉を繰り返した。
「あの男は、わしにとって光そのものじゃった」

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　2話

白魔法とは、即ち、神が人に与えた魔法。

白魔法＝神聖魔法（イコール）・回復魔法と思われがちじゃが、正しくは神の定めた規律（ルール）に則った魔法は全て白魔法となる。戦う為の攻撃魔法も、神の創造物の性質を一時的に変える補助魔法も、空間を操作する移動・結界魔法も、白魔法。それどころか、法律・道徳など人の世の決め事に抵触する為、邪法と勘違いされる類いもある。他人を餌にして大いなる存在を呼び出す召喚魔法、性技を基本とする練気（れんき）、意志の力で寿命すら操る長寿法……あやしげな魔法は、各地の部族魔法に多い。

わしは若いうちに、白魔法をほぼ会得してしまった。魔法理論の理解が異常に早く、生まれつき無限に近い魔力を身につけている為じゃ。何十人も魔法の師を変え、数多くの魔法書に目を通した。わしは天才だったので、本を読むだけで、その書に記された魔法の仕組みがわかってしまう。たいした努力も鍛錬も無しに、わしは次々に新たな魔法を身につけていった。

しかし、慈しみの心から生まれた魔法――回復魔法だけは中級魔法までしか覚えられなかった。他者への関心が薄いせいじゃろう。他人を観察したりおちょくる事こそ好きじゃが、わしは他人と共感し理解を深め合った事などなかった。他人など……ただの人間など、ちょっと観察すればわかる。どれほどの能力があり、鍛錬次第ではどれぐらい成長し、将来どうなるのか、だいたいわかってしまう。先が見えてしまっては何事もつまらぬ。人間に関心を抱けぬ者が、他者を救う為の魔法――回復魔法を覚えられんのも道理じゃった。

又、部族魔法もあまり会得できなかった。魔法習得の基本条件が部族の血筋か否かというモノが多かったからだ。基本的に、部族魔法は部外者お断りなのだ。

三十ちょいで可能な限りの白魔法を極めてしまったわしは、学ぶ

べきものが無くなった魔術師協会からさっさと脱会し、世界を彷徨っていた。

正直、迷い始めていた。

白魔法に限界を感じていたのだ。

聖職者の道を選べば、更に魔法道が開ける。高位の回復魔法が使えるようになるであろうし、一宗教を極める事によって初めて会得できる神聖魔法の奥義も知る事ができる。

しかし、一宗教に走りその神だけを信心し教えを守るなど、無理だった。わしは、ちょとい学べばたいていの魔法はパパッと使えるようになる魔法の申し子だった。が、それ故に、堪え性も根気もなかった。一つのものにのめりこめぬ、飽きっぽい性格なのだ。聖職者になれるはずもない。

移動魔法で世界を転々とし、各地の部族魔法を研究したりもした。が、研究すればするほど、部外者（アウトサイダー）である自分が学べるものはほとんどないと実感するばかりだった。

魔法と魔法を掛け合わせて新たな魔法を作ったり、伝承にしか残っていない古代魔法を研究・再現したり、体を鍛えて剣術を学び魔法戦士の真似事をしてみたり……いろいろやった。が、小器用なわしは何をやってもすぐに形（さま）になってしまうので、あまり暇は潰せなかった。

白魔法から学ぶべきものも、新たに作り出すものも無くなってしまっては……

別系統の魔法に走るしかないように思えた。

暗黒魔法、或いは邪法……ようするに、魔族が人間に与えた魔法。暗黒魔法にも、あからさまに邪悪そうな呪詛だけではなく、さまざまな魔法があった。攻撃魔法・回復魔法・補助魔法・移動魔法・結界魔法・召喚魔法・憑依魔法……

殊に、呪詛と召喚・憑依魔法がわしの興味を引いた。

わしは客分としてシルクドの大魔王教団に身を寄せ、暗黒魔法を学び始めた。大魔法使いの資質あふれるわしを、教団は諸手を挙げ

て歓迎してくれた。暗黒道に誘う為じゃ。破壊思想に染まったイってしまっている神官達はうっと～しかったが、暗黒魔法はわくわくするほど面白かった。

しかし、そこも、半年足らずで学ぶべきものが無くなってしまった。部外者のわしは、中級魔法までしか伝授してもらえんかったのだ。

入信し大魔王教の神官となれば、上級・高位魔法、秘術、奥義までも学べる。

しかも、エウロペ教・インディラ教・ペリシャ教・シャイナ教……他のどの教団よりも、大魔王教団の教義『欲望に忠実であれ』は納得がいった。綺麗事で現実を飾らないところが実にいい。

しかし、生を謳歌したい性質のわしは、教団の真の目的――ケルベゾールド神を完全復活させ世界に破滅をもたらす――を受け入れられんかった。死んでしまっては魔法で遊べなくなる。遊べぬのはつまらぬ。根本的にわしは、大魔王教むけの性格ではかったわけじゃ。

迷っているうちに、どこぞの国で大魔王が復活したという情報が流れてきた。何処の国の誰に憑依したかなど、最高機密。高位の神官しか知らぬゆえ、部外者のわしは教えてもらえんかった。

で、欲が生まれた。

勇者に十一回も敗れている大魔王ケルベゾールド。情けないやられ役に加担し……地上最強と謳われる勇者と戦って腕試しをしたいと。

わしの決意を、シルクドの神官どもは喜んだ。実戦で役立つ上級暗黒魔法を幾つか教えてくれ、勇者情報を集めてはわしに流してくれた。

今世の勇者の名はランツと言った。七つより『勇者の剣』を自在に扱えた超一流の剣士じゃ。しかし、凄まじい剣技を持ちながら、騎士にも剣士にもならず三十にもなろうというのに一度も職に就いた事もなく、貴族社会を嫌い、下町をふらふらしておった変り種。

酒と女をこよなく愛する暴れ者。一族の鼻つまみ者だったそうだ。

たった一人の女（しかも、娼婦）の為に街中で大立ち回りをしたり、国王の面前で犬猿の仲の侯爵の子息に酒をぶっかけたり、イカサマ賭博師の指を落とした……と、その過去を知れば知るほど、ランツという男の無謀さや凶暴さが知れた。勇者というよりは、大魔王教徒のような素行だ。

半年前より侯爵家の当主である彼の兄が不治の病に伏しておらねば、ランツが『勇者』となる事はなかったろう。人格者であった彼の兄を除けば、『勇者の剣』を振るう資格のある者はランツしか居なかったのだ。

大僧正候補のインディラ僧のナラカを従者に伴って旅を始めたランツを、わしはシルクドの首都ガダーラで待つ事にした。正面から仕掛けるか、奇襲にて勝負を決めるかは、ランツという男に会ってから決めたかった。ガダーラの色町に居れば、好色な今世の勇者は必ずや現われるはず。そう読んで、わしは、色町に長逗留をした。

魔法によって肉体を活性化していたわしは、性技の達人でもあった。射精回数に限度がなく、宿中のおなご二十人ほどと一晩で寝る事もあった。

わがままではあったが、金離れはよく（金塊も宝石も、魔法で幾らでも造られたゆえ、わしの懐はいつもあたたかかった）、冗談好きの話上手で聞き上手、最下級の娼婦にまで愛想をふりまき、しかも性技も巧みで外見もまずまず。わしはガダーラの色町の人気者となった。大もての上客だった。わしと犯れるのなら、金などいらないと言うかわゆき娼婦も多かった。

わしの噂を何処で聞いたのか……

ランツはガダーラに到着したその日に王宮にも行かず、娼館でおなご達と戯れていたわしの前に現われた。

勝負だ！　と、目をきらめかせて。

シルクドの大魔王教団が勇者のガダーラに到着を知らせて来る前に、本人が目の前に現われたのじゃ。正直、わしは驚いた。

ランツはたてがみの様な金の髪、鷲のように鋭い眼、生命力に満ち溢れた逞しい体つきの、豪奢な美形だった。しかし、鼻から右頬にかけて走る刀傷と、不敵に構えた顔によって、その美は崩されていた。持って生まれた美しさを、性格と品性で貶めているといったところか。兄が亡くなれば爵位も継ぐはずのお貴族様のくせに、どう見ても町のゴロつきのような風貌だ。その背に巨大な大剣『勇者の剣』が無ければ、目の前の男が勇者とは到底思えなかったろう。

ランツは、わしに性技勝負をしようと持ちかけた。技を競い、回数を競い、堕とす女の数を競おうと。

そんなランツを、絶世の美女が厭きれたように見つめていた。娼館に不釣合いな、気品あふれる黒髪の美女だ。フードマントで体を隠した貴族の女だとわしは思ったのだが……そのランツの連れは、よく通る声楽師のような声――間違いなく男性の声でこう言ったのだ。

「とてもじゃありませんが、そんな馬鹿げた勝負には付き合いかねます。私は精力絶倫のあなたと違って一般人なんですから。貴重な精液はそれにふさわしい美女に使わせていただきますね」

娼館を巡って今宵の美姫を探して来ますと言って、その者は優美な仕草を印象づけつつ立ち去って行った。その美女とみまごう男が、インディラ教の大僧正候補ナラカだと知ったのは、三日に渡るランツとの助平勝負が引き分けに終わった後の事だった。

「飲めよ、カルヴェル」

ランツはわしを安酒場にひっぱって行った。こいつが、本当に残虐と評判の勇者だろうか？　と、疑いたくなるほどの、満面の笑顔で。奥のテーブルに次々と料理と酒を運ばせ、ランツは豪快に飲み食いをした。遊びの後は腹が減るよなとニコニコ笑いながら。

「俺の遊びに最後まで付き合えた男はおまえが初めてだぜ、カルヴェル」

わしが杯を空けると、すかさずランツが酒を注いでくれる。
「今までも性豪と名高き助平どもと一緒に遊んだんだが、どいつもこいつも二日ももたず玉切れしやがった。ったく、色事師なら、三日で百人ぐらい抱いてみやがれってんだ」
わしの場合、絶倫魔法で性欲を高めての三日に渡る乱交じゃった。絶倫魔法は、性交中も理性を失うわけにはいかんので、制御が難しく、肉体に負荷がかかりすぎる為、使用できる者が少ない。が、わしは若く魔力も膨大なので苦も無くこの魔法が使える。
けれども、ランツは魔法はむろん、薬の助けも借りずに三日間不眠不休で二十人のおなごを抱き続け（女たちは交替で休んでいた）、百回戦はやっておった。まさに底なし。絶倫の呪いをかけられているのか、性機能に障害があるのか……いずれにしろ、性のバケモノであった。
「メシ喰って腹が膨れたら、まずは一眠りだ。で、その後だが」
ランツはニヤリと笑った。大型肉食獣のごとき笑みだ。
「俺と犯らねえか？」
わしは、眉をひそめた。
男遊びをした事がないでもなかった。が、やっていたのは十代まで。平坦胸の男を抱くより抱かれるより、やわらかなおなごを抱いて悦ばせる方が百倍も楽しい。
そう答えると、ランツはゲラゲラと笑った。
「俺だって女の方が好きだ。けど、男も良いもんだぜ。体のつくりが同じだから互いの快楽が手に取るようにわかるし、妙に通じ合うし、多少乱暴に扱っても壊れない。ベタベタの恋愛感情が絡む事が少ないから、気軽に遊べる。それに……そうだ、妊娠の心配がないのもいいんじゃないか？　俺は男遊びも好きだ。なあ、カルヴェル、いっぺん、俺ととことん寝てみないか？　体力が尽きるまで、互いに互いの体を貪り合うんだ。口じゃ言い表せない快楽が味わえるぜ」
誰とでもいいから一度やってみたかったんだと、ランツは明るく笑った。

「その計画には賛成しかねます。あなたのガダーラ到着は、もう噂になっています。言っても無駄でしょうから『やってはいけません』とは言いませんけれどね、一休みしたらまずは王宮に伺い、この国での魔族退治の許可を国王陛下よりいただくのが先ですよ」

突然の、わしの背後からの声。

振り返ると、三日前に会った黒髪美女にしか見えん男が立っていた。三日前と同じく、フードマントで顔以外を隠している。

「よぉ、ナラカ。よく居場所がわかったな」と、ランツの従者？　わしは背後の人物をまじまじと見つめた。フードマントから黒髪が漏れているし、三日前には娼婦を抱くと宣言しておった、この男が？

「私には優秀な眼がありますからね」

ナラカと呼ばれた男は、ランツの横に腰かけた。

「あなたの現在地なんて、すぐにわかるのですよ」

「なんだ、又、あの忍者を使ったのか。便利なもんだ、俺もお抱えの忍者が欲しいぜ」

「あなたみたいな短気な方が忍者を使いこなせるものですか」

ナラカは相手（ランツ）を馬鹿にするように鼻で笑った。

「四六時中、アレの最中だろうが、トイレだろうが、物陰からジーッと見守られるんですよ。あなたでは、うっとーしいわと忍者を斬り捨ててしまうに決まっています」

「ちがいない」

ランツはゲラゲラと笑って、ナラカの肩を抱いて引き寄せた。恋人を抱くように。

「こいつは、俺のダチのナラカだ。嫌味な野郎だが、顔と超ひねくれた性格が気に入っている。寺院で男修行を積んだだけあって、アレの方もなかなかだ。けど、いかんせん、体力が無い。いつも五、六発犯ったらヘバっちまうんだ。俺より若いのにだらしねえ」

「私は一般人なんです。性欲魔人のあなたと比較しないで下さい」

ツーンとそっぽを向いた相手の顎をとり、ランツは強引に顔の向

きを変えさせ、唇を奪った。ナラカは抗議の意思なのか軽くランツの胸を叩いたが、それ以上は抵抗らしい抵抗もせず、勇者にやりたいようにやらせていた。

しばらく接吻を続けてから従者から顔を離し、ランツはわしに向かってニカッと笑った。

「な？　生意気だが、思わずむしゃぶりつきたくなるような、かわいい奴だろ？」

ナラカは軽く溜息をつき、勇者の耳元に顔を寄せた。愛撫するかのような仕草じゃったが、何かを囁いているようにも見えた。

それに対しランツは、関心なさそうにふぅ～んと呟いただけだったが。

「なあ、カルヴェル、さっきの話、考えといてくれ。俺としちゃあ、寝て起きたらすぐにもおまえと犯りたいんだが」

ランツは肩をすくめて、ナラカを見た。

「このこうるさい男が許してくれそうにねえ。いっぺん用事をすませてから、又、来るわ。おまえ、まだ、この街に居るか？」

居ると答えると、ランツは嬉しそうに笑った。子供のような邪気のない笑みじゃった。

「近いうちに、又、来る。待っていてくれ。ま、無理強いはしねえ。おまえにその気がないのなら寝るのはやめる。けど、何でもいいや、他の事して色町で遊ぼうぜ」

俺の奢りだと言って金袋をテーブルに置き、ランツはナラカと共に安酒場を後にした。その背を見送っていたわしに、最後に肩越しにふりかえってウィンクして。

その夜、わしが泊まっている安宿に、大魔王教団の使いが現われた。陰気な神官だった。そやつは一秒とりとも口を休めずに、勇者と三日も女遊びに興じていたわしを非難し続けた。要約すると『教団の庇護を受けて暗黒魔法を学んだ身の上のくせに戦わないなど不

義理だ』と、言いたいようじゃった。
しかし、『勇者に恐れをなして逃げるおつもりか？　しょせん、あなた程度の魔法使いでは勇者には歯が立たないとお思いなのだな？』と、ののしられては聞き捨てておけなかった。
魔法でそやつの顎を外し、尚もフガフガとうるさい奴を移動魔法で教団に送り返してやった。『わしは大魔王教徒ではない。何時、どのような形で勇者と戦おうが自由なはず。口出し無用。わしを操ろうなどと思うな。過ぎた行いには、相応の報いがあるぞ』と、心話のメッセージをそえて。

翌々日の昼前に、ランツはナラカを連れてわしの宿に現われた。
ナラカは澄ました顔をつくっていたが、わしを見る眼に容赦は無かった。大魔王教団との繋がりがバレているなと、わしは思った。
しかし、ランツの方は変わりがないどころか、前より愛想がよく、ニコニコ笑ってわしとの再会を喜んだ。笑うとヤクザ者っぽい顔が、とてもかわいく見えた。
国王への挨拶はどうした？　と、問うと、もう済ませたとあっさりとランツは答えた。
ナラカはわざとらしく溜息をつき、小声で『あれが挨拶なものですか』と、こぼした。王宮で何やって来たのだ、この勇者は。
「で、カルヴェル、どうする？　俺と寝てくれるのか？」
とがめるような視線を送るナラカを無視して、ランツは満面の笑顔をわしに向ける。
この男は……知らぬのか？　わしの正体を？　暗黒魔法を学んだ邪悪な男……勇者の命を狙う黒き存在だと。
寝る気はないと答えると、ランツは残念そうに肩をすくめた。が、すぐに又、笑みを作り、
「じゃ、いいや、又、女遊びしようぜ。今度はナラカも入れて、三人でパーッと騒がないか？」

と、誘ってきた。
キラキラと眼を輝かせて……
まっすぐに、わしを見て……
その純粋な思いに触れると、柄にもなく胸が痛んだ。子供を騙している気分になった。
だから、言った。女遊びもする気はない。やりたい事は唯一つ。おぬしと命のやりとりをする事……おぬしを殺したい、と。
ランツはしばしジーッとわしを見てから、チェッと舌打ちをし、金色の髪を無造作に掻き上げた。その横のナラカが意外そうにわしを見ていた。わしが正体をバラしたからじゃ。わしを正体を秘してランツに接近してきた暗殺者とでも思っていたのだろう。
ランツは嫌そうに聞いてきた。
「どうしてもやるのか？」
やると答えると、又、嫌々、聞いてきた。
「何で、俺を殺したいんだ？　おまえ、大魔王教団に身を寄せちゃいるが信者じゃないんだろ？　俺を殺して世界を破滅させたいわけでもあるまいに」
やはり、わしの正体を知っていたか。しかし、そうと知っていて、何故、ランツはまだわしを慕っているのだろう？
「一宿一飯の恩義か？」
まさか！　大魔王教団がわしに世話をやいてくれたのは、わしが優秀な魔法使いゆえ。わしが一般人なら、あやつらは便宜をはからぬ。暗黒魔法を学びたいわしと、わしを教団にひきこみたい奴らは、この半年、互いに利己的に動いていたまでのこと。恩義など感じていない。
「じゃ、殺りあう理由はねえ」
いや、ある。
わしは生まれながら魔力が膨大な、魔法の申し子。白魔法を極め、黒魔法も多少、学んだ。おそらく、この世に、わしにかなう魔法使いはおるまい。わしは魔術の世界で最強となった。

だが、現在の境遇では学ぶべきものは何も無い。何もできぬ。白か黒どちらかの神官になるか、これ以上の成長は諦めて隠居となるしかない。しかし、いずれの道も選びたくない。堅苦しい神官職も隠居も御免じゃ。わしはまだ三十三。自分の人生を捨てたくない。好き勝手やって、おもしろおかしく生きたい。わくわくし続けたい。

それゆえ……地上最上と謳われる勇者と闘いたいのだ。

強い者と戦い、己の魔法を試したい。誰の為でもない、己の為に。己が満足する為に、勇者と戦いたいのだ。

話の途中から、ランツの顔つきが変わった。青の瞳に燃えるような炎を宿し、不敵な笑みに口元をゆるませ、わしを見る。

ナラカも微笑を浮かべてわしを見ていた。その瞳からは、わしへの侮蔑や敵意は消えていた。

勇者とその従者は、わしからの挑戦を快く受けてくれた。

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　3話

一昼夜、シルクドの砂漠で、わしはランツと戦った。
わしは知る限りの白魔法、黒魔法、古代魔法、複数の魔法を掛け合わせたオリジナルの魔法を放ち、魔法剣や魔法道具（マジック・アイテム）を駆使してランツに襲いかかった。
『勇者の剣』でランツはその全てをはね除けた。『勇者の剣』の無限の守護の力が、ランツを守り通したのだ。ランツにではなく、周囲に仕掛けた攻撃の余波をで多少の傷こそ負わせたものの、わしの攻撃は通じない。
ランツは自分からは仕掛けてこなかった。ニヤニヤと笑いながらわしの攻撃を防ぐばかりだった。
ナラカはわしらの周囲数十キロ四方に結界を張り、二人の戦いが他に及ばぬようにしていた。たった一人で、十数時間も、だ。結界魔法に関しては負けるかもしれぬと、わしは女顔の僧侶を見直した。
夜が明け、昼となり、再び太陽が沈みかける頃には打つ手が無くなった。まだ尽きぬ泉のごとく魔力は体に満ちていた。だが、戦法を失っては戦えぬ。同じ攻撃を仕掛ける愚は犯したくなかった。
わしは敗北を宣言した。わしの魔法剣をその刃で受け止めこそしたものの、ランツは『勇者の剣』を攻撃に使おうとしなかった。振るえばわしを殺せたであろうに。
敗者をどう扱おうが勝者の自由。煮るなり焼くなり好きにせよと言うと、
「じゃあ、俺と寝ようぜ」
と、満面笑顔でランツは、膝を折ったわしを立たせ口づけをしてきたのだ。
こいつ……色情狂か？　犯る事しか頭に無いのか？　と、反発する気持ちもないでもなかったが……
ランツがあまりにも嬉しそうなので……

真夏の太陽みたいな眩しい顔で笑うので……

何か、もう、どうでもいいような気になってしまった。

「あんま男遊びには慣れちゃいないんだよな？　最初は無茶しねえよ。色々と教えてやる。砂漠じゃナニだし、どっか宿に泊まろうぜ」

ガダーラに運ぼうか？　と聞くと、ランツは頼むと答えた。全面的にわしを信じているのだ。移動魔法で別所に運ばれるなど、信頼できぬ人間には任せられん。

「おい、ナラカ。そんな所にボサーッと立ってないで、おまえも来い。おまえも一緒に宿に行くんだ。カルヴェルにおまえの性技（テク）を教えてやれ」

「３Ｐですか？」

ナラカがやれやれと頭を振る。

「私、体力バカの性欲魔人と違って一般人なんですよ。一晩じゃ、三回戦ぐらいしか付き合えませんからね。後はあなた方二人で勝手にやってください」

ナラカはランツに、そして、わしに微笑みかけた、とても親しげに。

ランツもナラカも衆道の達人だったので、わしは素直に二人の教えを受けた。まあ、男でも女でも犯る事はそれほど大きくは違わぬ。肉体の限度と快楽のツボの違いを心得ておけば問題ない。要は男相手でも楽しめるかどうかが問題なのだ。

絶倫だが一人で暴走する事なく、常に相手を楽しませようとするランツ。手馴れた性技と媚態で相手を酔わせるナラカ。二人と体を求め合うのは楽しかった。

気がつくと、よくナラカは居なかった。寝台の端でぐったりしているかと思えば、ソファーで布団をかけてスヤスヤ眠っている時も

あり、部下の忍者に軽食を運ばせてパクパク食べている時もあった。
紺色の兜と口布で顔を隠した小柄な忍者に対し、一度、ランツは、
「ガルバ、おまえも入れよ」
と、遊びに誘ったのだが、ナラカにジロリと睨まれ肩をすくめて引き下がっていた（後になって知ったのだが、ガルバという男は自分の女房しか抱かない、実に忍者らしくない貞操観念の持ち主じゃった）。
わしとランツは休む間もなく睦み合っていた。絶倫の魔法で体力と性欲を維持しているわしはともかく……ランツはほんにバケモノじゃった。

「のう、ランツ、おぬし、わしが大魔王教団に身を寄せていると知っても態度を変えなかったが、何故だ？」
抱かれながら、わしは尋ねた。
「何故、斬ろうとしなかった？」
酒瓶を片手にわしと繋がっているランツが、ニヤニヤしながら言った。
「俺ぁ、ダチになれそうな奴は斬らねえんだよ」
「じゃが、魔族絡みの者を退治するのが勇者の役目であろうが」
「勇者の役目なんざ、知った事か」
ゲラゲラと酔っ払い勇者が笑う。
「俺は俺のやりたい事だけをやる。魔族も大魔王教徒も関係ねえ。気に入らねえ奴はぶっ倒し、気に入った奴とは遊ぶ、それだけだ」
そこで、ソファーで休憩中のナラカが口をはさむ。
「まあ、たいていの魔族や大魔王教徒はあなたにとって不愉快な存在ですから、あなたが勝手をやっているうちに、自然と勇者の役目も果たせてしまうでしょうよ」
ナラカもシルクド特産の果汁酒を飲んでいた。僧侶のくせに、有髪だわ、おなごも抱くわ、酒は飲むわ、破戒僧じゃな。

「おまえが大魔王教団に世話になってる事は、この前、安酒場でナラカから聞いた」
ああ……あの、耳元で囁いた内緒話か。
「けど、ふーんってなもんさ。そんなの、どーでも良かった。そん時にはおまえを気に入ってたからな」
「わしの何処が気に入った？　おぬしとタメをはれる絶倫さか？」
酒臭い息を吐きながら、ランツが笑う。
「おまえが、性交（セックス）に弱くても殺さなかった。俺ぁ、おまえが良い奴だから気に入ったのさ」
「良い奴？　わしが、か？」
「ああ。一目見りゃあ、わかるからな。おまえは良い奴だ」
良い奴……？
そんな事を言われたのは初めてだった。
魔法の申し子、魔術の天才、バケモノじみた魔力の持ち主、魔法にしか興味のない偏執狂、利己的な理由で魔術師協会を脱会した裏切り者……魔法使い達は羨望と嫉妬のこもった眼でわしを見て、次元が違う相容れぬ者としてわしを遠ざける。
そして、わし自身、周囲にほんに関心がなかった。人間嫌いというわけではない。こまごまとあくせく生きる人々を眺めるのは好きだった。言葉遊びとして人をおちょくる事も好んだ。互いの性欲を満足させる為におなごともよく交じり合った。
けれども、わしは……他人と共感し、理解を深め合おうと思った事がない。
「わしが『いい奴』なら世界中の人間が善人じゃな。わしは、大魔法使いとして、高みから他人を見下し生きてきた。下等な生き物を眺めるかのようにの……」
我ながら、実に、嫌な男だ。
「くだらねえ事言うなよ。おまえは他人を見下しちゃいねえよ、今まで馬が合う奴と出会えなかっただけだ」
「いや、しかし……」

「他人なんざどーでもいいって奴なら、女を抱くにしても自分の性欲を満足させる事しか考えねえ。けど、おまえ、勝負ってなっても、魅了の魔法で女を操らなかったし、数を稼ぐ為の無茶もしなかった。女をモノ扱いしたりもしなかった。相手に合わせて愛撫を変え、やさしい言葉をかけてやってた。わざとらしい表面的なおべっかじゃねえ、さりげないんだが相手の心にグッとくる言葉を。娼婦全員にああいうのが出来るって事は、おまえが愛情をもって人間をよく観察してるってこった。女遊びをしても、おまえは娼婦を買ってるんじゃない、女と一緒に楽しい時を過ごそうとしているんだ。だから、気に入ったのさ」

そんな事を褒められるとは……思ってもみなかった。

「おまえは、良い奴だぜ、カルヴェル」

同じ言葉を繰り返し、ランツは言う。

酒臭い口に唇を奪われ、わしは瞼を閉じた。

胸が熱かった。白魔法を極めても、黒魔法を学び始めても、わしはいつも満足できなかった。いつも、飢えていた。何を求めているのかわからぬまま、ずっと何かを探していた。

しかし……

欠けていた何かが埋まった気がした。

勇者ランツとの出会いによって……

従者となって共に旅をしたいと言うと、二人は喜んだ。

ランツはこれで売春宿がない所でセン●リかかんですむと喜び、ナラカは売春宿がない所で性欲魔人に襲われる数が減りますと喜んでいた。

二人とも、自分のことしか考えていない。その自分勝手さが……実に好感が持てた。

それからは、冒険だった。

怒り始めると手がつけられない乱暴者を、ナラカと二人で御して。

怒りっぽくて、非常識で、性欲の塊。ランツは自分に正直だった。

しかも、直感で生きていた。一目見ただけで好悪を決めていた。気に喰わん奴とは口もきかんし、そういった人間が彼の怒りに触れた日には……確実に血を見た。『ランツが嫌いな相手』は魔族や大魔王教徒の他に、困った事に王侯貴族や聖職者に多かった。だが、それ以外の者には非常に優しく、弱者への面倒見もよかった。

有髪の僧侶ナラカは女性と見まごう美形のくせに、キツい性格をしていた。口調こそ丁寧なのだが、口も悪い。たいした理由もなく、しょっちゅう、わしやランツをけちょんけちょんにけなしていた。しかし、それはナラカの屈折した愛情表現であった。嫌いな奴にほど、ナラカは無駄口を叩かず、礼節を尽くすのだ。

三人の旅には、時折、ナラカの部下のガルバが加わった。インディラ忍者のガルバは忍者としての技量に申し分はなく、情報収集の為によく働いてくれた。けれども、素朴な性格で忍者にしては人が良すぎた。ナラカは『御身様』と彼を呼んで慕うガルバの人柄と純粋な忠義心を愛し、部下というよりは友として遇していた。

ほどなく、わしとランツとナラカは義兄弟の契りを結んだ。

わしが一番年上だったが、勇者のランツを長男とすべきだというナラカの主張を容れ、ランツが長兄、後は年齢順に次兄がわし、ナラカが弟となった。

わしらは共にバカ騒ぎをし、行く先々で気に喰わんもの（主に魔族）を蹴散らしていった。

『勇者の剣』を振るうランツは、ほぼ無敵だった。この『ほぼ』という副詞が重要で、『勇者の剣』の攻撃力にはバラつきがあった。

剣先を向けるだけで岩を粉々に砕く威力があるかと思えば、小枝一本切れない時もある。人の身長ほどもある巨大な『勇者の剣』を軽々と左手だけで振り回す事があると思えば、両手で握ってふんばっても地面から持ち上げることすらできない事もある。

「こいつはな、ひでぇ気分屋なのよ」

ニヤニヤ笑いながら、ランツは教えてくれた。

「ご機嫌な時には持ってるのを忘れるぐらい軽いのに、ふてくされると大岩みてぇに重たい。切れ味もコロコロ変わる。名剣になるもナマクラになるも『勇者の剣』様のお気持ち次第なのさ」

「あなたが日頃からきちんと手入れをして剣を用途通りに使用していれば、その剣は毎日、ご機嫌のはずです」

毎日ちゃんと研ぎ石で研いでください、髭剃り代わりにするのもやめるべきですと、ナラカが溜息をつく。

「あなたは品性こそ最低で、頭がものすごく悪いですが、金の髪の豪奢な美形。鼻から右頬の傷だって、見ようによってはアクセントです。外見上は申し分なし。しかも、あなた、相手の気分が読めるんです。悪さをやめれば、勇者史上最強の勇者となれるはずですよ」

？

話が見えていないわしに、ランツが悪戯っ子のような笑みを見せた。

「『勇者の剣』はな、若く逞しい男が好きなんだ。本当だぜ。持ち手が美形で筋骨逞しいほど手助けしてくれ、攻撃力もぐんと増す。スケベ剣なのさ」

本当であろうか？　わしをかついでいるのでは？

わしの心を見抜いたナラカが、心話で『勇者の剣』の心に触れてみたらどうです？　と、澄ました顔で言ってきた。それとも、あなたの心話は人専用ですか？　魔法道具（マジック・アイテム）には使えませんか？　と、わしの自尊心を煽りおった。

馬鹿にするな、無機物でも思念があれば読めるわ！　と、わしは目を閉じ、己の魂を『勇者の剣』に向け、交わり、語りかけ……そ

して、硬直してしまった。
ランツがゲラゲラと笑い、ナラカも口元を押さえククと低く笑っていた。
人間とは異なるモノなので読みづらかった。が、何とかその思考は読めた。
『勇者の剣』は……非常に多感でヒステリック、理性よりも感情に走るタイプなのだが、その根っこは正義を愛する熱血漢でものすごく野太くいかつい感じ……
つまり、人間にたとえると……筋肉ムキムキで毛深くてごっついくせに、心は女性でむちゃくちゃ厚化粧をして女装している……オカマのようなのだ。
まあ……
『勇者の剣』がオカマだろうが男好きだろうが何だろうが、最強の剣には変わりない。それに、背負うのはわしではないし……わしが愛されているわけでもない。ま、いいかと思った。

「今日も、綺麗だぜ、マリアンヌ」
剣を研ぎながら、ランツが『勇者の剣』に話しかける。愛称は日によって『キャンディー』、『デイジー』、『リリィ』、『ナタリー』、『ランファン』、『サムソン』、『アラン』、『さぶ』などなど、ころころ変わっている。剣を握った時にピーンとひらめいた名前で呼んでいるらしい。
「おまえの×××は、本当、最高だぜ。さ、どうだ？　ん？　ここがいいのか？　気持ちいいなら、もっと声出せよ。マリアンヌ、俺に任せて、×××していいんだぜ」
はたから聞いていると誤解を招きそうだが……ランツは『勇者の剣』を研ぎ石で研いでいるだけじゃ。
「初代勇者ラグヴェイを除けば、ランツが『勇者の剣』に最も愛さ

れているのではないかと思います」
　同じ部屋でさしむかいで酒を飲んでいたわしとナラカ。ナラカは水のように酒を飲みながら、卑猥な台詞を口にしつつ剣の手入れをする勇者を見つめていた。
「外見が美丈夫な上に、ランツは剣を『ダチ』だと思って可愛がってますからね。自分の気持ちを感じ取り、仲間として話しかけてくれるランツを、剣が愛さないわけありません」
　剣の気持ちを感じ取る？　したが、ランツは魔法は使えん。
「ええ。ランツには魔力はありません。当然、心話など使えません。でも、彼は『勇者の剣』が何を感じ、何を思っているのか常に直感的にわかるのです」
　そこで杯を空けてから、ナラカは言葉を続けた。
「彼は共感能力者（エンパシー）なので」
　共感能力？
「他人の感情を我が事のように感じとる能力です。しかも、ランツの能力はかなり強い。だからこそ、人ならざる聖なる武器の感情まで正確に読めるわけですが」
　共感能力者か。大昔の聖人とか聖王にそのような者がいたと伝承にはある。民衆の心が手に取るようにわかるゆえ楽に人を統べられたとか。じゃが、四六時中大勢の感情が頭の中に流れ入る煩わしさから発狂した王もいたはず。
「ランツの能力は、聖王に準じるレベルです。対面するだけで、目の前の人物の心の中が透けて見え、どんな人間かおおよそわかってしまうみたいですよ」
　それはかなりな力じゃな。
「ランツの好き嫌いがはっきりしているのも、そのせいです。彼の前では、悪人が善人を演じても無駄。対面しただけで相手の、品性下劣さ、残忍さ、腹黒さ、嫉妬深さ、それに敵意や殺意も、彼は感じ取ってしまいますから。初対面からあなたを気に入ったのも、あなたの心が美しかったからです」

……わしは、相当、腹黒い邪悪な性格をしておると思うが。

「『心が美しい』って言っても、ランツの基準の『美しい』ですからね。世間からはズレてるでしょう。ランツに言わせると、あなたも私も『勇者の剣』も、『ダチ』にしたくなるぐらい心が美しいのだそうですよ」

和やかだった剣と勇者のスキンシップは、何時の間にか険悪なものになっていた。ランツの雑な研ぎ方を気に入らないと、剣が思ったようだ。酒瓶をそばにおいて、ぐびぐび呑みながらやってるしのう……

「うるせえんだよ！　このクソったれ！　てめえのみっともねえ××をこちとら×××してやってんだから、とっとイきやがれ！　それとも、そのお粗末な×××を塩水に浸してやろうかぁ？　あぁぁん？」

わしはナラカに黒のローブをプレゼントし、ついでにわしの念のこもった魔法使いの杖もプレゼントした。

ナラカはいつも、宿屋の中以外はフードマントを被っていた。とことん長い黒髪と僧衣を隠しておるのじゃ。普段後ろで三つ編みにしている黒髪は、解くと足首までの長さ（八つの年に出家してからずっと切ってないそうだ。天邪鬼め）。ちょいと伸びてしまったでゴマかせる長さではない。

魔法使いの格好の方が行動しやすかろうと思っての贈り物だった。が、ナラカは意外なほどわしからの贈り物を喜んだ。何時も魔術師のローブをまとい、よほどの事がない限り僧衣を着ようともしなくなった。

おぬし、何ゆえに有髪なのか？　と、尋ねると、

「もともと生えている髪を剃るのって、不自然だと思いませんか？」

と、逆に聞かれた。

出家にあたって、八つであったナラカ少年は、インディラ教の教

義『自然であれ』を盾に、髪を剃らせなかったらしい。髪を剃るのは不自然、人間が本来持っている欲望――食欲・物理欲・性欲などを否定するのも不自然、人間が生み出した娯楽――飲酒・喫煙・賭博を『悪』と決めつけ非難しかしないのも不自然と主張して。

その主張を大僧正が面白がったせいで事態はややこしくなったようだ。大僧正は頭の固い高僧達を黙らせ、ナラカに難題を与えた。それをこなせたら、一ヶ月、ナラカの主張を全面的に認めてやると約束して。プライドの高い天才肌のナラカは、本来、子供には不可能なはずの高度な課題を期限内に見事にこなした。

では、次の一ヶ月、有髪でいたければ次はこの課題をやり遂げよと、大僧正は又、課題を与え、ナラカはそれをクリアーし……と、いった具合に有髪のまま神への信心がなければ成し遂げられない修行をし続け、ナラカはめきめきと力をつけていった。

宗教学、白魔法、問答、説法、歴史、魔族研究、写字学、奉納舞、棍術で非常に優秀な成績を修め、いつの間にやら教団一の修行僧となり大僧正候補になってしまったのだとか。大僧正がナラカを全面的に認めているので、誰も有髪も酒も女遊びも賭博も止められないのだそうだ。

インディラ教のトップがそんなに話せるおもしろい男ならば、入信しても良いかもしれない。聖職者となれば、高位の神聖魔法を学べるし、上級以上の回復魔法も使えるようになるやもしれない。

わしは、そう思ったのだが……

ナラカは憐れむようにわしを見て、頭を左右に振った。信仰心の欠片もない人間は、入信しても無駄だ。高位の魔法は覚えられないと。

「私は『自然であれ』という教義に則って好き勝手に生きていますが、その根には神への畏怖と愛があります。一般には堕落とみなされる行為に走っても信仰心を失っていないから、神のご加護を受け続けられるのです。でも、あなたは、神を大いなる存在と恐れ敬ってはいますが、『神』を愛してはいません。信仰心の無い者に神は

何もお与えにはなりませんよ」
　納得のいく答えだったので、わしは聖職者となるのは止める事にした。
「それが賢明です。あなた、ランツ以外の人間なんてジャガイモかニンジンみたいにしか思ってないけど、それ以上に神そのものに興味がないでしょ？　魔法的存在としての神しか求めないなんて、不敬すぎます。どの宗教であれ、聖職者になろうとしたら、罰が下りますね」
　そんな事は無いと、わしは反論した。
「おや？　信仰心もあったのですか？　意外ですねえ。どの宗教を信仰してるんです？　やはり大魔王教ですか？」
　違う、そっちじゃない。『ランツ以外の人間なんてジャガイモかニンジンみたいにしか思ってない』の方じゃ。
「え？」
　わしはおまえも特別だと思っている。
　そう言うと、ナラカは意外そうにわしを見て、クスリと笑った。
「嘘つき」と。
　おまえも特別じゃ、ランツがメインディッシュの肉ならば、ナラカはワインかパン。肉だけでも美味いが、ワインやパンがあれば肉は一層、美味くなる。おまえはなくてはならぬ存在、大切な義弟じゃと言っておいた。
「ほぉら。やはり、私、おまけじゃないですか」
　と、ナラカは愉快そうに笑った。
　戒律なんぞを意にもかけないナラカは、わしに攻撃魔法を教えろとねだった。せっかく魔法使いの格好（ナリ）をしているのだから、それらしくしたいと。僧侶にとって攻撃魔法は禁忌のはずじゃが、ナラカはあっという間に上級の攻撃魔法まで習得し、戦闘で実地訓練もしていた。
　ほんに僧侶らしゅうない男で……
「大僧正様はご立派なお方なのですが、教団の高僧のほとんどがク

ズです。誘惑に弱い人間が、信仰を貫く為に自らを戒律で縛る。それって、本人が好きでやってる事でしょ？　なのに、心強い私にまで戒律を強要するんですもの。総本山ってすっごく居心地が悪いんですよ。だから、私、大魔王戦が終わったら、殉死したって事にして出奔しようかと思っているんです。市井に埋もれただ人として生きるんです。ああ、憧れです。その時には口裏あわせ、よろしくお願いします」

のような事をしょっちゅう言っておった。

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　4話

「おまえが女なら、絶対、俺の嫁にするんだがなあ」
と、ことあるごとに、ランツはわしに言った。あまりにも頻繁に言うので、ある時、理由を問うてみた。ランツは溜息をついて語り始めた。
「俺な、星の数ほど女を抱いちゃあいるが、孕ませた事、一度もないんだ。ここぞと時期を狙って犯っても駄目、数を撃っても駄目。だから、種無しなんじゃねえかと思ってたんだが、五年前、クリサニアの下町で占いババアに言われたんだ。俺のは種が無いんじゃなくって、薄すぎるんだと。つまりな、一晩で、何十発も出すもんだから、子種が一回ごとにほんのちょびっとしか入っていないんだそうだ。俺がこの世で孕ませられる女は一人しか居ないんだと。俺は、いずれ俺のセックスにとことん付き合える美女に出会う運命にあるのだとも言われた。その女を逃せば、子供は作れず、勇者の家系は絶えるんだとさ。あ～あ、おまえがその運命の女なら良かったのに」
無茶苦茶言いおる。
「お兄様にはお子様がいらっしゃらないのでしたよね。庶子も居ないのですか？」
と、横で聞いていたナラカが尋ねる。するとランツはフンと鼻で笑った。
「居ねえよ。ご立派な兄貴様は妻以外の女に手をつけなかったからな」
ランツは兄と不仲と聞いている。高潔で品行方正、国王に忠節を尽くし、友を大切にし、妻に貞節を誓う、実に騎士らしい人物と、ランツの兄の世間での評判はすこぶる良い。
しかし、ランツは、幼い頃から、兄が大嫌いだった。兄の全て虚飾だからだ。
世間の目を気にし、気の小ささや強欲さをひた隠し、ランツの兄

は『今世の勇者』にふさわしい高潔な人物を演じ続けたのだそうだ。
　たった七つで『勇者の剣』を扱えた弟への嫉妬と憎悪、やくざ者のような弟への侮蔑、弟の欠点を探し優越感に浸ろうとする心の卑しさ、『今世の勇者』であろうとする虚栄心……その全てが共感能力者であるランツには伝わってしまうのだ。
　醜い心を抱えながら弟思いの寛大な人物を演じる兄を、ランツは心底嫌いぬいていた。鼻から右頬にかけて傷を負ったのも、兄とのいさかいの末らしい。
　だが、ナラカはランツが兄の話題を嫌っているのを承知で、ずけずけと質問を続けた。
「病床のあなたのお兄様、回復の見込みはないんでしたよね？」
「ああ。聖職者様の治癒魔法でも治らない不治の病さ。俺がエウロペを離れた時には体中が麻痺してたぜ。もうクタバったんじゃねえか？」
「と、なると、あなたの旅行中に甥か姪が生まれる事もなさそうですね」
「ねえな」
「おやおや、たいへんですねえ」
　ナラカがニコニコ笑う。
「残る勇者一族はジジババばかり。あなたがその底なしに淫乱な女性と出会えないと、勇者の家系が絶えてしまうじゃないですか」
「別にいいじゃねえか」
　ランツがゲラゲラと笑う。
「俺の死後、世界がどうなろうが知ったこっちゃねえ」
「それも、そうですねえ」
　と、ナラカもフフフと笑う。
　こいつら……ほんに自分勝手じゃ。
「ですが、ランツ、あなた、私より先に死にそうですね。世界中、敵だらけだし」
「憎まれっ子のおまえは長生きしそうだよな、ナラカ」

「ランツが死ぬと魔族の天下になっちゃうんですよね、勇者がいないから。その前に出奔できてればいいけれども、し損ねてたら、大僧正候補の私、インディラ国中を覆う規模の魔族よけの結界を張らされる事になるかも。結界を張り続けると疲れるし……う～ん、勇者の家系が絶えると仕事が増えそうで嫌ですねえ」

にっこりと笑って、ナラカはわしの両肩をがっしりと掴んだ。

「というわけで……世界平和の為です。犠牲になってくれませんか、カルヴェル」

へ？

「あなたが変身魔法で女になってランツと結婚すれば万事解決するのですよ」

はあ？

お！　いいねえ！　と、ランツが身を乗り出す。

頑張ってランツの子供を生んでくださいねと笑うナラカ。

ぉい……

変身魔法で変化したとて、妊娠できるか。

「でも、カルヴェル、変身魔法で鳥になれば空が飛べますし、魚になれば海深くに潜れるではありませんか。女になれば子づくりも可能なのではありませんか？」

理論上、肉体的には可能だ。じゃが、別の生命を腹に抱えたら、その形態から変化できなくなる。たえず女の体でいられるよう、魔法をかけ続けねばならない。

「大丈夫、あなたの魔力は底なしですから。十月十日ぐらい女性でいても枯れやしませんよ」

と、ニコニコ笑顔のナラカ。

ランツはわしへと突進してきた。

「よぉぉし、やろうぜ、カルヴェル！　女になれ！」

ちょっと待て、勇者！　大魔王退治の旅はどうした！

「ンなの、後回しだ！　俺ぁ、ずっと子供がほしかったんだ！」

たわけ！

よく考えろ！

侯爵家の者が『勇者の剣』を振るえるのは、エウロペ神のご加護があるからじゃろうが！　魔法で性別を変えた者に子供を生ませるなど、神の定めた摂理への背信行為！　誕生した子供に神の祝福があろうはずがない！　『勇者の剣』を振るえぬ子供ができたとて意味ないではないか！

「そんなの、やってみなけりゃわからねえよ！　とにかく犯ろうぜ！」

マズいことにランツはかなりその気になってしまった。

女性化しての妊娠が禁忌だと知っている僧侶は、いっそのこと成長促進魔法で妊娠期間も短くしたらどうですか？　と、更なる禁忌をそそのかして事態を見守るばかり。

腕っぷしほど頭脳が優れていないランツは『犯ろう、犯ろう』と、それればかりを口にして片時も離れようとはしない。

だから、言ってやった。十年待て、と。十年経っても、ランツが運命の女性と出会えなければ相手をしてやる。それまでは、わしを放っておいてくれ、と。

結局、期限の十年はしつこく食い下がるランツに、三年に縮められた。三年後までに、大魔王討伐を終えており、且つ、ランツが運命の女性に出会えていなければ……一年ほどランツに付き合う。そういう約束をした。その一年の間に、ランツの念願が叶ったのなら、二つ身になるまでは更に付き合うとの約束も付加して。

ランツはわしを連れて各地の歓楽街で、さまざまな遊びをした。

一晩で何人の女を抱けるか競い、達さぬまま何人の女を抱けるか競い（この勝負はわしの楽勝じゃった。日に十発ぬいてる奴が我慢できるものか、馬鹿め）、時間無制限で睦み合ったり、アレの相撲大会に出たり、尻の鍛錬をしたり……二人で競い合ったせいか、互いの性技は熟練していった（この手の遊びにはナラカはまったく参

加しなかった。付き合いの悪い男め）。
　比類なき遊び人となったわしらは、各地で常識はずれな遊びをし、各地に性の武勇伝を残していった。

　ナラカは時折、懐から手紙を取り出し、同じ手紙を繰り返し読んでいた。共に旅をして一年経ってから、わしに心を許したのか、その手紙を見せてくれた。
　たどたどしい文字……子供からの手紙だ。お会いできて嬉しかった、元気が出ました、お兄様、大好き……そんな内容だった。
「妹のサティーからの手紙です。もう八年も前のものですがね、お気に入りなので何時も持っているんです。僧侶は本当は私物は一切持ってはいけないのですが、ガルバが内緒で届けてくれたのですよ」
「おぬし、妹がいたのか」
「ええ。八年前に両親が事故で他界しましたので、たった一人の身内です。十三歳も年の離れた可愛い妹です」
「十三？　そりゃまた、ずいぶん離れておるの……では、今、十五か？　花の盛りじゃな」
「ええ、それはもう」
　ナラカはニコニコ笑っている。
「心も顔も綺麗な子なんですよ、私にそっくりで」
　ナラカに似ては、顔はともかく心は綺麗かわからんが。
「三弦琴と舞踏が大好きな、賢く慎み深くやさしい子だそうですよ」
「『だそうです』？」
　ナラカの笑みが苦笑と変わる。
「二度しか会った事がないのです。八年前と、一年少し前に。それも遠くから顔を合わせただけです。直接、会話はしていません」
「……戒律のせいか？」
「ええ」
「破戒僧のくせに、その戒律は守っているのか？」

ナラカの笑みが一層、苦いものに変わった。
「私、一人の問題ではありませんから」
それ以上は、聞かずともわかる。ナラカは自分が戒律を破る事で妹に災いが及ぶ事を恐れているのだ。この身勝手な男が己が欲望に従わないのは、非常に珍しい。それほど妹を愛しているのだろう。
「実は私、非常に高貴な生まれなのです」
「ほう？」
「私の母は古えの時代にインディラを統べていたさる王朝の末流で、父は傍流とはいえラジャラ王朝に王位継承権を持つ身の上でした。その上、私はこのように賢く美しく才にあふれて生まれついてしまったのです。私、国一番の神童と呼ばれていたんですよ。で、私が優秀すぎたのがいけないといえばいけないのですが……私の存在を国王陛下もその取り巻きも快く思わなかったのですよ。適当な理由をつけて、人の良い両親から財産を没収したり、父の官位を奪ったり、おとなげない事してましたねえ。母の一族には莫大な隠し財産があるとも噂されてましたし、謀反を恐れたのでしょう。で、まあ……いろいろありましてね、私、八才で出家したんですよ。謀反の意志が無いのを示す為に、ね」
「おぬし、よくおとなしく出家したのう」
「……私一人の問題じゃありませんから」
先程と同じ事を言ってから、ナラカは口を閉ざした。この男は、妹同様、父母も愛していたのだろう。父母の為に俗世を捨てたわけか……たった八才で親を守る生き方を選ぶとは、怜悧な頭脳も考え物じゃな。
「俗世に未練が無かったといえば嘘になりますが、でも、いいんです。私があそこで我を通さなかったおかげで、うちの家はお取り潰しをまぬがれたわけですし、おかげでかわいいサティーが生まれたんですからね」
蕩けるようにナラカが笑う。ほんに妹が好きなんじゃな……
「それに、出家した私にガルバもついて来てくれましたし……総本

山での生活も悪くは無かったですよ。戒律が大好きな高僧のお歴々さえいなきゃ、確実に八割り増しでもっと住み易くなりますけどね」

八割増しで良くなるって……今、ほぼ最低状態という事ではないか。

「ガルバは実家からおぬしについて来たのか？」

「ええ。ガルバは代々母の家系に仕えてきた忍者一族の出身で、私が七才の時、私の影となったのです」

「影？」

「インディラでは王侯貴族は忍者を使います、護衛や情報収集の為にね。『影』は忍者の中でも特別な存在で、主人に常につきしたがい、主人の危機には盾となって主人を守ります」

そこで、ナラカは天井を見上げ、にっこりと微笑んだ。

「とはいえ、それは俗世での話。ガルバと出会ってから一年後に、私は出家してしまいましたからね。僧侶に影は不要。私はガルバに家に残り、父母を守ってくれるように頼んだのですが」

ナラカは微笑んでいる。いつもの冷笑とは違う、あたたかな笑みだ。

「ガルバは聞き入れなかったのです。主人が死なない限り、一度、決めた主人の元を離れない。それが忍者の生きる道だと言って、ね。まったく、困ったものです。僧侶は個人財産を持ってはいけないというのに。私の破戒の初めは、ガルバという部下を捨てられなかった事なのですよ。ね、あなたもそう思うでしょ？」

天井裏に潜んでいる、ナラカの言う『あなた』からは返事がない。

「無視ですか。私が破戒僧になっちゃったのは、ぜぇんぶ、ガルバのせいなのに。薄情ですねえ。ああ、そうそう、薄情といえば、カルヴェル、天井裏の男なんですがね、常に私につき従うフリをしてたくせに、私に内緒でやる事やってたんですよ。二年前に、おさなじみと結婚してたんです。私に内緒で！　しかも、もうすぐ三才になる男の子まで作っちゃってるんですから！　ああ、でも、変ですねえ。結婚して、まだ二年なのに、子供はどうして三才になっち

ゃうんでしょうか、計算が合わないような……」
天井裏からわざとらしい咳払いが聞こえた。そこに潜んでいる忍者が、照れているのだ。
ナラカの顔は、妹を思う時と同じだ。幸福そうに微笑んでいる。
「ようわかったわ……妹御とガルバがおぬしの聖域なのじゃ、と」
ナラカの口元がニィッと笑う。
「それに、ランツとあなた。四人とも、私にとって、この世で最も愛しい者達です」
「ふん」
ムカついたんで、以前、ナラカに言われた言葉を返してやった。
「『嘘つき』め」
ナラカにとって、わしとランツは義兄弟。義理の兄として慕い敬ってくれてはいる。
じゃが、妹やガルバに対する思いは、別種のものじゃ。神への信仰にも通じる、清らかな無私の思い……
『大魔王を倒したら出奔する』がナラカの口癖じゃが、本気ではない。妹御がインディラに居る限り、ガルバがインディラに残してきている妻子を大切にしている限り、ナラカは出奔などせぬ。いざという時に、愛する二人を守れるよう、総本山にとどまり続けるだろう。

わしにとっての聖域は……ランツ。
それと、まあ、ついでにナラカ。ついでなんて言おうものなら、あのうるさい口が皮肉を歌うように連ねるだろう。じゃが、やはり、同列ではないのだ。
ランツに出会えたからこそ、わしは真の生を得られたのじゃ。ランツと共に旅をし、共に戦い、共に語らい、共にバカ騒ぎをし、助平で乱暴なあの男の為に働いてやるのが、何と楽しい事か。
旅を始めて一年も経った頃には……

嫁なんぞになりたくもないし、変化魔法で女となって子を成すマズさも重々承知していた。

しかし……

共にずっと生きられるのなら……

生涯、あの男の側に居られるのならば……

あの男がわしと共にある人生を喜んでくれるのなら……

女体化して、そのままバケ続けてやってもいいような……そんな気になっていた。

大魔王との戦いへの恐れはなかった。

しょっちゅうくだらぬ事で喧嘩をしていたが、『勇者の剣』はランツにベタ惚れ。大魔王戦ともなれば、愛しい男に無限の力を貸す事はわかりきっていた。

勇者史上最強の勇者ランツ、この世の誰よりも魔道を極めたわし、神聖魔法と結界魔法の達人のナラカ。三人にかかれば、大魔王など雑魚同然となるはず。

わしは旅が終わった後、ランツとついでにナラカと、どう付き合っていこうか、そんな事ばかりを考えていた。

じゃが、わしらの旅は悲劇に終わった……

それを防ぐ手立てもあったろう。なのに、わしは、脳天気に旅を続け、その時まで何も気づけなかったのだ。

闇の聖書……初代ケルベゾールドが四天王に与えた暗黒魔法（邪法）指南書。この世に三冊しか現存しておらぬ闇の書は、もとの持ち主の位から、一の書、二の書、四の書と呼ばれている。

シャイナの大魔王教団から二の書を奪った時、ナラカはその本をわしに渡すまいとした。

「黒魔法に興味津々のあなたは、二の書なんか持ったら、絶対、読

みたくなるに決まってます。読んだら、絶対、実践したくなるでしょ？　あなたみたいな自信過剰な天才は、慢心のあまり禁忌に手を出し、抜き差しならぬ状況に陥って魔に堕落しやすいんです。この邪悪な本は、あなたにだけはあげません。総本山に転送魔法で送って、大僧正様に清めていただきます」

喉から手が出るほど欲しい本を、ナラカは余所へやってしまった。わしは不満たらたらじゃったが、相手に理があったので渋々引き下がった。

ランツはもとより、魔法書などに興味がない。

誰もナラカを止めなかった……

ナラカは二の書を総本山には送らず、普段は異次元に封印しておいて、毎日、密かに読み進めて邪法を研究してゆき、そして……

大魔王との決戦の前に、形代（かたしろ）の邪法を己が身にかけたのじゃ。わしやナラカの準備した防呪結界がものの役に立たなかった時に、大魔王がランツにかける呪いを己が代わって受ける為に。

ランツもわしもナラカも、大魔王が代々の勇者に呪いをかけてきた事は知っていた。憑代が『勇者の剣』で斬られた瞬間に、大魔王の呪いは発動する。大魔王を斬ったものが呪われるのだ。

だが、わしには大魔法使いという自負があった。どのような呪いがこようが防いでみせると、ランツに豪語していた。

大雑把な性格のランツも、大魔王の呪いなど気にかけてもいなかった。

しかし、わしは呪いを防げず……

呪いは発動して……

ランツへと向けられた呪いはすべて、形代によってナラカに移ったのだ。

トゥルクのタブールの王宮の第二庭園で、わしらはケルベゾールドと戦った。王宮の人間はガルバが避難させたので、遠慮なく、派手にランツは戦った。

ナラカの張った聖なる結界に大魔王を閉じ込め、事前にわしとナラカが張っておいた防呪魔法陣・魔除け・魔法道具で大魔王の呪いへの対抗手段もばっちりな状態で、大魔王の使用する魔法は全てわしが防ぎ、ランツが暴れやすい状態を整えての戦いだった。

ケルベゾールドの憑代を両断した後、ランツはわき目も振らず、塔を目指した。

全力で駆けゆくその背を見つめ、わしは安堵の息をついた。大魔王を倒してもランツに変化はない。呪いは防げたのだ、と。

ランツが目指す塔には、囚われの美姫がいるのだ。国を守る為、憑代に操（みさお）を渡し、きゃつの邪悪な魔法によって淫婦にしたてあげられたエリューズ姫が……

それより十日ほど前、王宮より逃れてきた女官が勇者にすがり、涙ながらに頼んだ。囚われの姫君をお救いください、と。

婚前交渉が死罪となる厳しい戒律のあるこの国で、エリューズ姫は国を焼こうとしていた憑代の意を変えさせる為、自らの体を魔族に差し出し、大魔王の情婦となった。王族として国を守る為に、死に値する罪を受け容れたのだ。美しく真に気高い女性の話にランツは心動かされ、彼女の絵姿にみとれ、そして……

千里眼の魔法で彼女を見た瞬間、ランツは恋に堕ちた。

大魔王との戦いを前に、わしは、一度だけ、千里眼の魔法で彼女の姿を捉えるのに成功したのだ。

姫は……大魔王に命じられ、人外のものどもと交わっていた。豚やらネズミやら低俗な獣に憑依した魔、ツタ状の植物、巨大なカエルのようなモノ、光輝く鉱物、意をもって動く粘着質の水……知性の低そうな魔どもが、次々に姫を襲う。

大魔王にかけられた呪によって、姫の体は淫らに輝き、憂いのこもった美貌は美しくなっていった。彼女は休む事も許されず、人外のもの達と交わり続けていた。

凌辱につぐ、凌辱……

しかし、彼女は疲れた様子を見せようとはせず、頭を下げないのだ。王族として凛とした態度をとり続け、自分を組み敷くバケモノどもに媚を売るようなことはせず、巧みな愛撫をしかけ逆にバケモノどもを翻弄していた。

何とも……凄絶な美だった。

わしの目は水晶珠に釘付けとなった。穢される度に、姫は、更に美しく気品にあふれてゆく。何ものにも冒されぬ、強い魂がそこにはあった。

これほどの女性を……わしは見たことはなかった。

「俺の女だ……」

わしの水晶珠を覗きこんでいたランツが、両手を握り締め、叫んだ。

「この女が、俺の運命の女だ！　俺の子を生む女だ！」と。

わしは……

何も言わなかった……

わしとて姫の美しさに心奪われ惹かれていた……

わしも、姫に恋をしたのだ。彼女への思いは、生まれた瞬間に、捨てるべき思いとなったが。

だが、それはいい。それは耐えられる。しかし、わしは……

己が恋が終わった事を、むなしさと共に認めねばならなかった。

その日から、ランツはただ一点を見つめ、戦った。

大魔王を倒し、姫を救う事だけを望んで……

ともかくも……

ランツは憑代を斬った。

大魔王が今世から消えれば、誇り高き姫は大魔王の呪縛より解放される。となれば、これ以上、生き恥はさらすまいと、自ら命を絶とうとするに決まっておる。ランツはエリューズ姫を救うべく、一直線に塔を駆け昇って行った。その最上階に姫は幽閉されておるのだ。

魔法で上階まで送ってやろうかと思っていたわしは、小さく吹き出した。ほんに直情的な男じゃ。その純情を共にからかおうと思い、わしは背後を振り返った。わしとランツの後ろに立ち、結界を維持していた者の顔を見ようと思って。

しかし……

そこに、ナラカはいなかった。

ナラカが佇んでいた場所に、闇色に染まった黒きものが影のように佇んでいたのだ。右手に杖を持っているように見える。それはわしに対し軽く左手を振り……そして、消えた……

跡形も残さず、消えてしまった……

見渡したが、何処にも生意気な義弟の姿はなかった。あの影は……やはり……

茫然としていたわしの心に思念が伝わってきた。わしのやった杖を媒介に、わしの杖へと、ナラカの奴がメッセージを残していたのだ。

《申し訳ありません、カルヴェル。あなたがこのメッセージを聞いているという事は、私が失敗したという事。未熟な私にはケルベゾールドの呪は防げなかったようです。ですが、形代で呪いはランツから私に移ったのだから、最悪の事態は避けられたと言えるでしょう。どうか、カルヴェル、彼がエリューズ姫と結ばれ、勇者の家系が続くのを見届けてください。彼はこの世にかけがえのない存在……勇者なのです。彼の身に何かがあれば、侯爵家に世継ぎがいない現在、世界は破滅へと向かってしまいます。何があっても、彼の心

と体を守ってください。彼の呪いを私が肩代わりしたなんて、絶対に教えてはいけません。教えたら、あなたを怨みます。私はかねてよりの計画通り、殉死を装って出奔したのです。そう伝えてください。もしも、私の死体が転がっているようなら、お手数ですが跡形も無く消し去ってください。挨拶すらせず立ち去ったのは時間が経つとこの辺も人目につくから……殉死を装う為、早々に立ち去った事にするのです。ガルバにも、本当の事は教えないでください。私を守りきれなかったのは自分のせいだと、そう思い込む性格ですから。ガルバにはサティーを守って欲しくて伴わずに出奔したのだと伝えてください、頼みましたよ》

わしは、震える右手で杖を握り締めた。

ランツにかけられた呪いを、ナラカが肩代わりした？

その呪い故に、ナラカは今世から消えてしまったのか？

わしの準備した防呪など……何の役にも立っておらなんだのだ。

何が大魔法使いじゃ……

わしは……愚か者の役立たずじゃ……

《カルヴェル……嫌な役目を押し付けてしまって申し訳ありません。でも、どうか許してください。私はこの世界を守りたいのです。あなた方さえ生きていてくだされば、私は満足なのです》

嘘つき……め。

おぬしは戻りたかったはずじゃ……インディラに。妹の住む国に。

そして、ガルバと共に生き続けたかったはずじゃ。なにゆえ、こんな時まで嘘をつく。

《愛しています、カルヴェル……》

その言葉を最後に、ナラカの思念は途絶えた。

最後の最後まで『嘘』をつきおって……

わしはうつむき、目頭を押えた。泣くわけにはいかなかった。間もなくランツがエリューズ姫と共に戻ってくる。ナラカの命令に服し、王宮の人間を避難させていたガルバももう現われよう。

ナラカはわしを共犯者に選んだのだ。あやつの願い通りにしてや

るのが……わしにできるせめてもの償いじゃった。

ナラカの出奔を聞いて……

ガルバは真っ青となって姿を消した。主人の姿を求めに走ったのじゃ。だが、幾ら探そうとも、王宮にもタブールの街にもナラカは居ない。いずれは絶望がガルバを捕らえるであろう。

ランツはわしの顔をジーッと見続けていた。その腕の中には意識のないエリューズ姫が居た。ランツのマントを借りて裸体を隠して。やつれたその横顔は、胸をつくほどに美しかった……

ランツに感情を読まれぬよう、わしは魔法にて己が心に精神防壁（プロテクト）をかけていた。不自然にならぬよう、偽りの記憶と感情もそこに散りばめて。大魔王を倒した達成感と友との別離を惜しむ感情、それ以外はランツは感じられないはず。わしの絶望も後悔も自身への怒りも……ランツは共感できぬはず。

ランツは何も言わない。ただわしをジーッと見つめるだけじゃった。その視線が辛かった……いたたまれなくなって、わしは、

「あやつが居らんと、寂しゅうなるの」と、口にしてうつむいた。

「……そうだな」

と、だけランツは言った。

わしの異常を、ランツは気づいていた。だが、何も言わなかった。沈黙するならそれなりの理由があるだろうと、察してくれたのだ。

わしの顔を立ててくれたのだ……

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　5話

その年の内に、エウロペでランツはエリューズ姫と婚姻を結んだ。大魔王を討伐した勇者にして（亡くなった兄より）爵位を継いだ侯爵のランツ、トゥルクの姫君。高貴な二人の婚姻じゃ、本来ならば国を挙げての婚礼となるところじゃったが、式はたいへん質素で招待客もわずかの地味なものとなった。

姫の希望だった。嫁ぐ前に処女を捨てた姫を、トゥルクは王家の恥とみなし、姫を絶縁していた。姫は名を『エリス』と改め、過去を全て捨てランツの妻となる事を誓われた。

わしは、エリス殿の乳兄弟のもと女官と一緒に、新婦側の列席者として式を見守った。新郎側にしたところで国王代理の使者を除けば、貴族はランツと気心の合う軍人達が五人ほどいるだけで、後は不良仲間ばかり、席は余りまくっていた。が、姫側はわしともと女官の二人しか居なかった。

式前にそこに座っていただく理由がないと戸惑う姫に、わしは答えた。お美しく気高きエリス殿を救う為に、わしもランツと共に大魔王と戦った。花婿の座はランツに譲ったが、素晴らしい女人とお近づきになりたい気持ちは止まぬ。どうか友として認めてくださらぬか、と。涙をこらえ、小さく頷かれた姫は、とても美しかった。惚れ直してしまうほどに。

ランツとエリス殿はとても夫婦仲がよかった。

待ちに待った運命の女をランツは宝石のように扱い、姫も魔に穢された身を気にせず愛しんでくれるやさしい勇者を愛した。

間もなくエリス殿は身ごもった。待望の子供が生まれるのだ。会う度に、ランツのデレデレ顔はひどくなり、エリス殿の笑みは幸福に満ちていった。

けれども……

山頂のわしの城に、ある夜、突然、『勇者の剣』が現われた。魔法研究中だったわしは、持ち手のそばを離れ勝手に移動魔法でやって来た剣に驚いた。

わしは心話で剣の心を読み……すぐに剣と共にランツのもとへと魔法で移動した。

剣の思考は、わしに『救い』を求めていた。

予定月よりも一ヶ月早くエリス殿は、女児を出産した。

そして、産後間もなく、ランツに男子を残せないのを悔やみながら、エリス殿は短い生涯を終えられたのだった。

魔王の情婦であり続けた一年半に渡る荒淫な日々がエリス殿の体を蝕んでいたのであろう。その体の衰えをおして、エリス殿はランツの為に子を残してくださったのだ。

『勇者の剣』がわしに伝えたのは、ランツの嘆きっぷりだ。遺体に泣いてすがり、誰にも彼女を触れさせようとせず、ランツを慰め力づけようとした『勇者の剣』に対し消えろと怒鳴りつけ、周囲から人を追い払い、片手剣を持って彼女の部屋に閉じこもってしまったのだとか。

ランツは半ば狂っていた。エリス殿の遺体を抱いていた奴は、移動魔法で現われたわしに斬りかかって来た。エリスは誰にも渡さんと言って。

血走った目のランツが、無茶苦茶に片手剣を振るう。

そのまま数十分……

結界と剣技で、奴が倒れるまで相手をしてやった。

ランツは床の上に仰向けにひっくりかえり、おいおいと泣いた。

亡くなった妻の名を繰り返し呼んで。

子供（ガキ）のように泣き続けた。
涙が止まるのを待ってから聞いてみた。
赤子は元気なのか？　と。
「知らん」
と、ランツは答えた。赤子なんて見たくもない、そうも言った。
赤ん坊を産んだせいで、エリスは死んだんだと憎々しげに。
わしは勇者を蹴り飛ばし、移動魔法で無理やり赤子の部屋へと連れて行った。
乳母に抱かれた赤ん坊は、たいへん小さかった。手足にはほとんど肉がついておらず、そこの肌は老人のようにたるんでいた。栄養が足りぬまま、月足らずで生まれたせいだ。
けれども、穏やかに眠る赤ら顔は、たいへん可愛らしくいとけなかった。
「よく見ろ、馬鹿者」
勇者の首根っこをおさえてむりやり顔をあげさせ、わしは言ってやった。
「エリス殿は、ここに居るわ」
ランツは赤ん坊を見つめた。ひゅーひゅーと小さな呼吸音をあげ、ぴくぴくと小さく動く弱々しい生命をしばらく無言のまま見つめ……
必死に生きる小さなものとランツは共感できたのであろう、乳母ごと赤ん坊を抱きしめ、それから、また、大声で泣き始めた。『エリス』と吠え、亡くなった妻を悼んで。しかし……その目は逝った死者ではなく、かよわい赤ん坊を映していた。
部屋を揺るがすような泣き声に驚き、赤ん坊も力なく泣いた。二人の泣き声が、部屋中に響き渡った。

「すまん、カルヴェル……」
だいぶ時間が経ってから、ランツは謝った。勇者殿に謝られるのは初めてかもしれん、わしは笑みで応じた。

「悪かった、マーガレット……ありがとな」
ランツは『勇者の剣』を抱きしめた。

皇太子の剣術指南兼教育係などという、およそ『らしくない』仕事をランツが引き受けたのも、エリス殿の忘れ形見サリア殿の為じゃった。
サリア殿やいずれ生まれる孫の為にもエウロペを住み易い国にする、勇者はわしにそう言った。
不良時代の仲間やボッチェ達ゴロツキを舎弟として屋敷に迎え、そやつらを皇太子の遊び相手兼王侯貴族の横暴に対し鉄槌を下す私設自警団員ともしていた。そして、皇太子を下町に連れだし、街に生きる人々の声を聞かせ、国のあるべき姿を教えていた。
その背には常に友――『勇者の剣』があり、聖なる剣はランツの心と体を守り続けた。

わしは忙しかった。
忙しすぎて、あまり俗世とは関われなかった。ランツにも一年に一度会えるかどうかの状態が十年以上続いた。
エウロペのとある山を買い、その頂上に魔法で城を造り、一年の大半はそこに籠もって研究に没頭していた。
来る日も来る日も、ランツが斬った憑代の事を考えていた。トゥルクの東面将軍であり神官戦士だった、中級までの攻撃・補助魔法を使えた男……憑代が残した蔵書を読み漁り、日記・手紙も集め、憑代となる以前の男を知る人物にはかたっぱしから会い、奴の魔法の癖、得意な系統を調べ、推理した。大魔王の憑代が、一体、どんな呪いをナラカにしかけたのか、を。
それは広大な砂漠を歩き、たった一個の小石を探すような、途方もない作業であった。邪法は何万とあり、オリジナルな魔法であれ

ば無限に造れる。
けれども、わしは成し遂げねばならなかった。
ナラカが生きているのか死んでいるのか、どのような苦しみを味わったのか或いは味わい続けているのか、知る義務があった。
かなう事なら呪からナラカを解放し、彼を取り戻したかったが……夢は見ぬようにした。死亡している確率の方が高かったゆえ。
呪を研究すると同時に、世界各地の防呪を調べ、魔法道具（マジック・アイエム）の収集もこなした。次代の勇者を呪から守る為の準備であった。
世界各地の豪傑、大魔法使い、学者、遊び人と交友を持ち、わしは世界各地に茶飲み友達をつくっていった。
ケルティのアジ族の王アジクラボルト殿、シャイナ一（いち）の武闘家ユーシェン殿とも、そうして知り合った。

十三年後、わしはナラカにかけられた呪をほぼ突き止めた。
魔法陣の内の者を魔界に封じる呪縛。
過去見で繰り返し確認した。憑代は目には見えぬ魔法陣を、あの場所に事前に用意していた。自分をその中心に置いて。それに気づかずランツが魔法陣を踏んで奴を斬ったゆえ、呪は発動したのだ。
魔族の棲まう国――魔界。瘴気に満ちた世界になど召喚されたら、人は魔の毒に穢され瞬く間に命を堕とす。
けれども、ナラカは生身ではなく、魔法陣の呪と共に魔界に飛ばされた。しかも、その呪はランツを魔界に封印する目的のもの。『勇者の剣』を持った勇者に魔界で暴れられる事態は、何としても避けるであろう。
つまり、魔界に堕ちた勇者をただ閉じ込めておく事を望むのなら……憑代は結界の内の時を『停滞』させるはず。勇者の動きを奪う為に。
魔界に封じられたナラカは、時が流れぬおかげで、『まだ死んでいない』可能性があった。

わしは更に研究を進め、大魔王との決戦から十七年してようやく、ナラカの一部を今世に呼び戻す事に成功した。と、いっても影（精神）だけだったが。

「カルヴェル……？そこにいらっしゃのは、もしや、カルヴェルですか？」

魔法陣の中にたたずむ者は、昔と変わらぬ姿だった。ナラカは探るようにわしを見つめた。わしは五十のジジイとなっていた。

「このバカ義弟めが。わしに内緒で形代なんぞ、体にかけおって」

目に涙をためながらわしはナラカを睨んだ。

「喜べ、ナラカよ、ランツに娘が生まれた。サリアという御名で、サリア殿も婿を取り子を成してくれた。そちらも女児じゃ。サリア殿は心臓に病があるゆえ、次の子は無理じゃろうが、勇者一族の血は残してくれた。おぬしが守った世界は続く。果てる事なく、な」

手を伸ばせば触れ合える距離にありながら、見つめあう事しかできなかった。ナラカは魔法陣の中心円から指一本出す事ができず、わしも魔法陣の中に入れない。二人の間には目に見えない強力な結界が張られている。

しかし、心は繋がっていた。わしらは互いの姿を目に映し、笑みを浮かべ合った。

わしはナラカに説明した。生き返ったわけではなく、魔法陣に囚われたままの身の上である事を。

大魔王の呪は、発動してしまった後では無限の守護の力を有する『勇者の剣』ですら祓えぬ。憑代から大魔王へと術師が変わってしまうからだ。

本拠地（ホームグラウンド）にいる大魔王の能力は、この世の神に匹敵する強大さ。対して、魔界では神族の加護を借りられず、わしの魔力も十分の一以下となる。魔界で大魔王と戦っても勝機はなかった。

わしにできたのは、呪の一部に穴を開ける事だけ。七百年前より

大魔王が今世に開き残してきた数々の次元通路、それとナラカの呪縛されておる魔法陣を繋いだのじゃ。肉体は無理だったが、精神だけはその次元通路を通し、今世に呼び寄せられるようになった。しかし、不安定な存在の為、ナラカの魂は一箇所にとどまれず、大魔王が開いた百以上の異次元通路の上を彷徨う身となった。

ナラカを大魔王の呪から完全に救う手立ては一つ。

待つ事だけじゃった。

大魔王が勇者に新たな邪法を今世で仕掛ければ、前の憑代の邪法に上書きされて邪法は発動する。つまり、前回の邪法は無効化（リセット）されるのだ。魔法陣は消滅し、ナラカは魔界より今世に戻ってこられるのだ。

ナラカは生きかえれるのだ……

だが、それは、新たな呪が新たな勇者にかけられることを意味した。わしはナラカに、共に防呪の研究をして欲しいと願った。次代の勇者に、わしらと同じような悲劇を味わせぬように……

ナラカは快く承諾してくれた。

わしは、精神だけとはいえ今世に戻って来たナラカを、ランツに引き合わせた。ナラカの魂がその時あった、ペリシャの砂漠へと移動魔法で案内して。

すっかりジジイ顔になったランツは事情説明の途中であったわしをぶん殴って砂の上に転がしてから、ナラカに吠えた。馬鹿だの、でしゃばりだの、よけいな事しやがってだの、クソったれだの、イ●ポだの……

ナラカはツーンとそっぽを向いて、その罵声を聞き流していた。で、勇者の息が切れるのを待ってから、にこやかに微笑んだのだった。

「あなた、絶対、若死にするタイプだと思ったのに、意地汚く生き延びていてくれて本当に良かった。あなたのみっともないジジイ顔

を見られて、得した気分です」
　ランツはぜいぜいと息を吐きながら、わしをジロリと睨みつけた。
「俺は、魔法はさっぱりわからん。カルヴェル、この馬鹿の世話はおまえに任せた。二人でグルになって俺を騙したんだ、最後までおまえが責任を持て。こいつを必ず救え、わかったな」
　噛み付いてきそうな迫力じゃった。
　わしは正直に、わしではナラカは救えぬと言った。しかし、ナラカが今世に戻るのを、責任をもって見届けると約束した。延命の邪法を用いてでも、生き続けると約束したのだ。
　ランツは、なら許してやると偉そうに答えたのだった。

　魔法研究に没頭していたわしは、現実にあまり注意を払っていなかった。
　それ故、愛すべき者達が不幸に陥っても、知らずにいた。
　ケルティの部族王アジクラボルト殿の時も、そうじゃ。魔法道具を求めてケルティを訪れたわしを、あの男、気持ちよく歓迎してくれた。酒好きの女好き。ランツによく似ていたが、族長として一族を束ねていたアジクラボルト殿の方が万年子供のランツよりずっと大人で礼儀も心得ていた。ほんによい茶飲み友達じゃったが……気づいた時にはあの男は処刑され、家族は殺され、或いは行方不明となっていた。自分や家族に何があっても放っておいてくれとアジクラボルト殿に頼まれていたゆえ、わしは何もしなかった。託されていた『極光の剣』の封印を保ち続けただけじゃった。
　そして、ナラカの妹御……
　ナラカの殉死後、英雄ナラカを悼む国民の声に負け、摂政である宰相が、ナラカの妹のサティーを幼くして国を継いだ新王の第一夫人としたのは知っていた。国王と第一夫人の間に王国の世継ぎが生まれた事も知っていた。主人（ナラカ）を失ったガルバがナラカの妹に仕えていたのも知っていた。

けれども、第二夫人とその一族の陰謀によりナラカの妹が亡くなり、その息子のナーダが大僧正候補となるという名目で王宮を追われたと知ったのは、ナーダの出家後、半年も経ってからじゃった。又、ナラカの妹と甥を守る為、ガルバは全てを投げ出し、妻子をも犠牲にしたようだった。

その事をナラカにわびると、

「後宮の中の事では、気づけなくても仕方ありません。あそこは防呪結界やらいっぱいありますしね」

と、ナラカは苦い笑みを浮かべつつ、尋ねてきた。

「ガルバはどうしています？」

ナラカの甥を『御身様』と呼び忠義を尽くしているようじゃと答えると、ナラカは嬉しそうに笑った。

「それならいいです。僧侶となった甥っ子に変わらぬ愛を注いでくれているのなら……ガルバが一緒なら、多分、その子、不幸ではありませんよ」

ナラカは心話で、大僧正と連絡をとった。だが、呪に囚われた自分の存在を世に広める気はないらしく、ガルバにも甥っ子にも生存を知らせようとはしなかった。

わしとナラカとランツは、ランツが亡くなるまでの数年間、何回も宴席をもうけてバカ騒ぎをした。肉体の無いナラカは酒を飲めなかったが、そんな事はおかまいなし酒好きのナラカにみせびらかすようにランツは浴びるように酒を飲んだ。悔しかったら、とっとと今世に戻ってきやがれと笑いながら。

会う度に、ランツはわしを遊びに誘った。ナラカを取り戻すまではわしは忙しすぎ、取り戻してからもやる事が多すぎた。わしは一度も、誘いにのらなかった。ランツは目に見えてがっかりしていた

が、無理強いはしなかった。
結局、ランツの生涯において、あの絶倫さにつきあえたのは、わしとエリス殿だけだったのだ。

ランツは腎臓の病で亡くなった。
異次元で探し物をしていたわしは、あやつが重態となった事も知らず、最後の別れすら言えぬままその死を受けれいれねばならなかった。
ランツの娘婿のヤンセンが魔術師協会に依頼して、わしに心話でのメッセージを投げてくれていた。が、葬儀には行かなかった。骸は骸。動き回りもしゃべりもしないランツを見送ったとて、おもしろくもない。
心に穴が開いたような気分だった。
何もする気にならなかった……
だが、わしには使命がある。魔法書を開き、研究に没頭しようとした。じゃが、幾ら時間をかけても、何の進展もなかった。無駄な時間ばかりが過ぎていった。
わしはナラカの元へ向かった。同情されるのは御免だったが、一人で居るのもむなしすぎた。口の悪い義弟が親愛の情をこめて故人の悪口をまくしたてるのを肴に、わしは酒をくらいランツを送った。
ランツは五十代で亡くなった。
絶倫のツケを払ったとも言える。好き勝手に生き、そして、死んだのだ。ランツの生涯は満ち足りていたのだ。嘆く必要はない。そう自分を慰めた。
生前のランツと最後に会った時、わしは約束をしていた。
ランツの跡を継ぐ者を守る、と。
侯爵家に男子がおらぬ為、ランツは三歳の孫娘を『勇者の剣』の守り手に指名する気でいた。サリア殿の次女じゃ。心臓の病をおしてサリア殿が生んだ二番目の子は、たいへん健康で外遊びが好きな

……エリス殿によう似た可愛い子じゃった。

ランツは、エリス殿の血を引く孫娘を、『勇者』にしたくなかった。武人として『男』として生きさせるのも嫌だが、なによりも大魔王を討たせたくなかったのだ。大魔王の呪いが孫娘にかかる事を、ランツは何より恐れていた。

その孫娘の名は……セレスというた。

わしは、セレスの父ヤンセンの頼みを聞き、セレスの神聖魔法の教師役を引き受けた。ランツの孫娘は十二歳に育っていた。

実に愛らしい美少女であった。髪と目の色はランツに、面差しはエリス殿に似ていた。しかし、性格はお二人にまったく似ておらず、生真面目で融通がきかない正義感の塊。正義を愛し悪を憎む、典型的な勇者タイプであった。

何ゆえ神聖魔法を習いたいのか？　と、問うと、神聖魔法を覚えて聖騎士となりたいのですと、セレスははきはきと答えた。国王陛下を守る盾となりたいのだと。

エウロペの現国王は皇太子時代に、ランツから良い事も悪い事も教わった男、名君との誉れも高い賢王じゃ。セレスは女の自分を勇者として認めてくれた国王を尊敬し、忠義を尽くしたいと思っていた。

セレスはわしの命じた事ならば、何でも一生懸命に果たそうと頑張った。からかわれているとすぐにわかるような課題すら、言葉通りに真面目にやり遂げようとした。祖父の親友で英雄であるわしが騙すはずがないと、思い込んでいたのだ。お嬢様育ちとはいえ、おっとりしすぎていた。人を疑う事をしらんでは、世に出てから詐欺にあうぞ。

又、女の身で『勇者の剣』の守り手となった為に苦労をしてきたらしく、女の身を恥じながら、女の癖にと侮られぬよう人一倍努力する……そんな子だった。

わしは、セレスを愛しく思った。ランツとエリス殿の孫で、勇者らしく生きようと肩肘をはっている可憐な男装の美少女。その人生に闇を近づけたくなかった。この子が『今世の勇者』であるうちに、ケルベゾールドが復活しない事をひたすら祈った。

セレスの姉が男子を産み、その子が『勇者の剣』に認められればセレスの剣の守り手としての任務は終わる。

セレスが華として美しい時代におなごの生に戻れる事を、わしは密かに祈り続けた。

けれども、四年後、大魔王は復活してしまった。

力を求め、自分の体を憑代にしたがる馬鹿は後を絶たぬ。

エウロペ国王はセレスに勇者一族の義務を果たすよう命じ、近衛兵となっていたセレスは主命を受け、勇者として大魔王を討つ事を誓い、『勇者の剣』をその手に持った。

世に『勇者の剣は女を嫌う』との風評がある。その噂を流したのは二代目勇者の従者シャダム殿であった。シャダム殿は根も葉もないところからその噂を生み出したのだが、実は的を射ていた。

『勇者の剣』はおなごが嫌いであった。初代勇者ラグヴェイ以降、数多くの『今世の勇者』が剣の持ち手となった。剣と共に生き死地を乗り越えてきた持ち手達も、戦いの日々が過ぎれば日常へと戻り、剣を手放し、恋人や妻へ愛情を捧げる。

女は剣士の腕を鈍らせ、理性を奪い、時に心まで狂わせる。あのランツとてエリス殿を失った時、狂気へと走りかけたのだ。勇者と自分との絆を穢すものとして、剣はおなごを嫌ってた。

その剣とセレスは仲ようならねばならなかったのだ。

エウロペ国王から、セレスの従者となってくれるよう、何度も依頼の手紙がきた。が、無視した。

わしが共に旅をしては、セレスも従者達もわしを頼るであろうし、そうとなっては彼らの成長は見込めぬ。

殊にセレスは『勇者の剣』に気に入られ、剣より力を借りねばならぬ身の上。オカマでスケベなあの剣が、女の勇者を好くわけがない。おなごであるというだけで、既に剣から嫌われているのだ。セレスが変わらねば、『勇者の剣』は重たいだけのナマクラであり続けるだろう。

それでは、ケルベゾールドに勝てん。

呪うんぬん以前の問題じゃ。剣を振るえぬまま、セレスはケルベゾールドに殺されてしまうじゃろう。

セレスの従者には、エーゲラ一の戦士と大僧正候補のナラカの甥がなった。後にシャイナ一の武闘家ユーシェン殿の末子と、セレスの暗殺者であった東国忍者が加わった。

わしは旅を影ながら見守った。

セレスが旅を始めてすぐの頃は行く手を先回りし、魔族どもを内緒で全て葬ってやっていた。魔族相手にまっとうに戦えるのが、ナーダしかおらんかったからじゃ。『虹の小剣』と『エルフの弓』を貸し与え大魔王教徒を相手にセレスに戦闘経験をつませてから少しづつ小物魔族を残してゆくようにし、徐々に強い敵とあたらせていった。

時には手助けをし、時にはわざと波風を立て、時にはからかい、わしは彼らの成長を促した。

彼等が大魔王との戦いで生き残れるように……

セレスが『勇者の剣』をうならせるほどの剣技を身につけ、『勇者の剣』と心通わせ合えるように……

魔族に侵攻される国、蹂躙される人々、魔に堕落しつつある心弱き者……手を伸ばせば救えるであろうものを全て見捨てて……

わしは、勇者一行の成長を待った。

そして、ナラカとナラカを介して知り合ったインディラ教大僧正と共に考えた。憑代が仕掛けてくる呪をいかにして防ぐのか……

今世の勇者を守る手立てを考え続けたのじゃ。

白魔法系の防呪の他に形代も使うとわしが言うと、ナラカも大僧正も反対した。が、わしの決心がどうあっても変わらぬとわかったので、最後には折れてくれた。

ナラカは己の経験から、形代について助言をしてくれた。

「呪いには、何処そこの誰々を呪うというような具体的な指示が施されています。呪を向ける相手の条件づけ、たとえば『勇者』、『自分を殺した者』、『金髪』、『××という名前』、『×月×日生まれ』などなど。ですから、形代の術師はいずれかけられる呪の条件づけを事前に予想し語句変換の指示を形代に与えておくのです。セレス様の呪いを肩代わりするのなら『女』を『男』に、『金髪』を『白髪』に、『勇者』を『大魔法使い』に変換する必要があります。他にも思いつく限りの語句変換を形代に与えてください。呪の条件づけを全て変換できれば呪いはあなたへと向かいます。けれども、あなたに合致しない条件づけが一つでも残っていたら、形代は発動すらしません。呪いはそのままセレス様に向かってしまいます」

ナラカとわしは大魔王の憑代となった男の情報を集め、性格を分析し、どんな邪法をしかけてくるか予想した。

わしはセレスに会う度に形代の魔王を、こっそりかけなおし、大魔王の呪に備えた。

大僧正は、わしが消えた後の始末を引き受けてくれた。
そして、ナラカは……

「今世に戻った後、あなたが何処にもいなかったら、私は私のプライドにかけて必ずあなたを見つけだし取り戻します。あなたが死んでいたら、邪法を使ってでも生き返らせます。私が今世に戻るのは、カルヴェル、全て、あなたの為です。あなたのいない世界なんて、意味がありません」

そう言ってから、ナラカはにっこりと微笑んだ。

「愛しています、カルヴェル」

わしは眉をしかめた。嘘つき、め。きさまが愛しておるのはわしではなかろうに。

だが、ナラカは、ガルバの元へは戻らぬ気だ。甥とガルバの絆を壊したくないそうだ。ガルバが亡くなる前には顔を見せるとは言っていたが。

明日、セレス達は大魔王の居城に乗り込む。わしは早ければ明日、今世から消える。ナラカとこうして会うのも、これが最後かもしれぬ。

勇者が大魔王を倒し、ナラカが今世に戻るのも、もう間もなく……

わしは、この時を、ただひたすら待ち続けてきた。ランツが大魔王を倒した時から、ずっと……

愚かであった過去の自分を償う為に……

今度こそ、わしが勇者を守るのだ。

「ナラカよ、見ていてくれ。わしは今世こそ、勇者を守る。勇者にも従者にも光の道を歩ませてやるわい」

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　6話

長い冬が終わり、シベルア高原には春の息吹が満ち溢れていた。青々と茂る若葉、風に靡く色鮮やかな花達。澄んだ青空の下には緑の楽園があった。

しかし、その美しい景色は……全て偽りだった。

獲物を誘い込む為の見せかけの自然だ。

高原を覆っていた幻術が解かれると、そこは……瘴気の充満した死の土地と化した。草木一本生えていない荒涼たる岩場が果てなく続き、そして……

その中央に、異質な巨大なものが浮かんでいた。

それは天に向かって聳え立つ、巨大な黒い城だった。少なく見積もって二十階層はある。山のように巨大なそれは、魔法で造られた建築物だ。

魔法城は、繋ぎ目の無い滑らかな黒の巨大一枚岩をくりぬいて造られており、黒水晶のようにきらめいていた。

女勇者セレスは、目の前に聳えるものを見上げ。腰まである金の髪をうなじで一つに束ね、白銀の鎧をまとい、身の丈ほどもはる巨大な大剣を背負う可憐な乙女。

あの黒い城が旅の終着点だと仲間より教えられ、今世の女勇者は感無量となっていた。

大魔王ケルベゾールドの憑代の居城に辿り着いたのだ……

セレスは感極まってこぼれそうになる涙を必死にこらえた。エウロペから始まり、シルクド、シャイナ、ジャポネ、再びシャイナ、インディラ、ペリシャ、トゥルク、エーゲラときて一端エウロペに戻った後、北方へにやって来たのだ。ケルティ、バンキグ、シベルアへ、と。

セレスの脳裏に救えなかった人々、荒れた国、流された血が過ぎっていった。いたらぬ勇者である自分を恥じ、ひたすら努力を続け、

ついに……使命を果たす時を迎えようとしているのだ。ケルベゾールドを倒して魔族を祓い、世界に平和を取り戻すのだ。

セレスのすぐ後ろには東国の少年シャオロンが居た。少年は両腕に『龍の爪』を装備し、東国風の道着を着ていた。冬が明けたばかりのシベルアでは少々寒かったが、決戦に備えて気持ちをひきしめる為に故国の衣装に身を包んだのだ。少年もセレス同様、城を見上げていた。

昨晩のうちに、シャオロンは父母と四人の兄、村人の霊達に、大魔王の城に乗り込む事を報告していた。村を滅ぼした大魔王四天王サリエルは既に消えた。しかし、敵討ちは、ケルベゾールドの消滅を見届けるまで終わらない。シャオロンは霊達を思い、自分に右爪を託した古の神官や旅の途中で出会った過去の英雄――シャダムとゲラスゴーラゴンに従者に恥じぬ働きをする事を誓うのだった。

シャオロンの横に、忍者ジライが静かに佇んでいた。覆面に黒装束の、いつもの姿で。彼は周囲に視線を走らせ、気配を読み、伏兵の有無を探っていた。敵の襲撃があれば真っ先に動いて、セレスを守る為だ。

刹那、刹那を生きているジライには、魔族への憎悪はなかった。魔に部下を殺され体を盗まれかけた経験を忘れたわけではない。しかし、サリエルやウズベルが消滅した時点で、魔への意趣返しは終わっている。主人（セレス）と自分に火の粉がふりかからない限り、魔族など眼中になかった。存在していようが消滅しようが、どうでも良いのだ、主人さえ守れれば。

ジライよりわずか後方に、武闘僧ナーダが居た。最後の戦いを前に死をも覚悟して、ナーダは僧形に戻っていた。北方に来てから伸ばしていた髪を剃って頭を丸め、武闘僧の短い僧衣を着て、神獣クールマのこうらより造られた神聖防具を両腕、両脚に装備している。

幻術を解いて大魔王の城を視覚可能にしたのも、聖なる結界を張って勇者一行を瘴気から守っているのもナーダだ。彼の魔法のおかげで、セレス達は大魔王の城に乗り込めるのだが……ナーダは不機

嫌だった。大魔王との最終決戦に進めるのは、自分一人の働きではないとわかっているからだ。大魔王の居城は強大な魔力に覆われている。城ごと大魔王をこの地に縛っている結界だ。誰が張ったものなのか、ナーダにはよくわかっていた。こんな強力な結界を張れる人間は、あの老人しか居ない……だから、不機嫌なのだ。

ナーダの左斜め後ろに、赤毛の傭兵アジャンが立っていた。『勇者の剣』より更に大きな大剣『極光の剣』を背負い、肩当と胸当てだけの鎧をつけ、炎のごとく赤い髪を風に靡かせている勇ましい姿で。

この世の神秘を見通せる彼は、周囲に充満している瘴気の出所が目の前の城だと気づいていた。城から煙のように周囲に広がってゆく瘴気を目で追いながら、アジャンは口元に笑みを浮かべていた。あの城の中には間違いなく大物がいる……強大な敵を前にアジャンは武者震いすら覚えていた。早く戦いたい、戦って強敵を倒したくてたまらないのだ。

優秀なシャーマンである彼は、今までその肉体を何度と無く魔族に狙われた。しかし、『極光の剣』を得た事によって先祖の霊の守護を受ける身の上となった。もはや邪なものは彼に手出しをできない。大魔王とて恐れる必要はない。

ナーダの部下の忍者達が、この高原の周囲を封じているので、旅人が紛れ込んでくる事もない。

これから、心置きなく、大魔王と戦えるのだ。

「む？」

まずは忍者ジライが、続いて赤毛の戦士アジャンが気づいた。城の前の空間にゆらぎが生じた事に。二人の戦士はすばやく迎撃の体勢を整えた。

だが、現われたものは魔族ではなかった。

「あら？」

女勇者セレスが目を丸くする。

移動魔法で現われ、宙に浮かんでいる人物は、白髪、白髭、黒の

ローブの老人……当代随一の大魔術師カルヴェルだったのだ。人の良さそうな笑みを浮かべ、老人は一行に対し杖持たぬ左手を振った。
「遅かったの、待ちくたびれたぞぃ」
「お師匠様」
セレスは、神聖魔法の師の元へと駆け寄った。
「一体、どうなさったんです？　何かご用ですか？」
私達、これから大魔王の城に乗り込むのですけれど……と、最後の方は語尾を濁らせ、女勇者は小首をかしげた。
「借りを返してもらいたい」
「え？」
「セレス、おぬしは、わしに借りがある」
「え？　え？　え？」
「ケルティで移動魔法で運んでやって謝礼じゃよ。あの時、おぬし、セクシー・ポーズで払うと言うとったが、わしゃ、まだ満足のゆくポーズを見せてもらっとらんぞ」
セレスはハッとして口元を覆った。
「すみません、そうでした。でも、あの、今、そんな悠長な事してる場合じゃありませんので、お師匠様、それは、又、日を改めて……」
老人はかぶりを振った。
「セクシー・ポーズはもう良い。おぬし、才能ないからのう。謝礼は他のもので払ってもらう」
「はあ。今、払えるものなのですか？」
「うむ。今でなければいかん。ちょいとした頼みごとを、今、聞いてもらいたいのじゃ」
ニコニコ笑う老人。思わず、セレスは逃げ腰となった。こういう顔と態度の時、カルヴェルは何かよからぬ事をたくらんでいる可能性が高いのだ。
「私にできる事でしたら……」
ためらいがちなセレス、何事かと様子を窺う従者達。彼らの顔を

見渡して、カルヴェルはにっこりと笑った。

「わしを、おぬしの従者に加えてくれんかの」

「へ……？」

あまりのショックに、勇者一行の目は点になった。

エウロペを旅立つ前、つまり、二年以上前から、何度もセレスはカルヴェルに従者となって欲しいと頼んできた。けれども、その度に老人は、願いを無視するか、『わしをうならせるセクシー・ポーズができたら、従者になってもよい』などとふざけたりしていた。

そんな状態が続いたので、旅の途中からセレスはカルヴェルを仲間に誘う事は諦めていた。理由こそ話してくれないが、何か事情があって従者に加わってくれないのだろうと、自らを納得させて。

しかし……

「従者になりたいんですか？」と、セレス。

「うむ」と、老人は元気良く答えたのだが。

「ふざけるな！」

赤毛の戦士が声を荒げた。

「てめえ、このクソじじい！　何をたくらんでやがる？　最後の最後、土壇場になって従者になるだぁ？　これまでさんざん好き勝手やって、この馬鹿女のお守りを俺達に押し付けてきやがったくせに！」

「……馬鹿で悪かったわね」

ぷぅ～と頬をふくらませて、セレスが仲間を睨む。しかし、赤毛の傭兵はセレスを無視して、老人に詰め寄った。

「理由を言え、ジジイ！　何で今更、従者になるんだ？」

カルヴェルはホホホと笑い、魔法使いの杖の杖頭で背後の城を指した。
「目的はお宝探しよ」
「は？」
またもや勇者一行の目は点となった。
「あの城の中はの、実はお宝の宝庫なのじゃ。ケルベゾールドの憑代が収集した古今東西の魔法道具やら魔法書がわんさとあり、聖なる武器もありそうじゃて。目の保養がしたいのよ。むろん、どさくさ紛れに、持ち主のはっきりしないお宝を懐にしまってやろうかとも思っているがの」
「お宝探し……」
茫然としていた女勇者の顔が、むぅ～としかめられ、それから慌ててハッと目を見開く。利己的な理由で同道したいという師の願いに怒りを感じたものの、すぐに今のは冗談で本当はちゃんとした理由があるのでは？　と、思い直したのだ。それに、すちゃらかな性格ではあるが、カルヴェルは大魔術師。魔法使いが欠けている勇者一行には、必要な戦力だ。同道してもらえれば非常に助かる。
「……私は構いません。お師匠様がご一緒してくださるのなら、百万の味方を得たも同然ですから」
セレスは背後の仲間を振り返り、同意を求めた。
「お師匠様に同道してもらって、構わないわよね？」
「あ、はい！　セレス様！」
と、シャオロンは元気よく答え、カルヴェルに対しぺこりと頭を下げた。シャオロンはセレスもアジャンもナーダもジライも尊敬しているが、セレスの師で今までも陰ながら勇者一行を助けてくれたカルヴェルも心から尊敬していた。少年は老人の同道を心強く思った。
「異論などあろうはずがございませぬ」
ジライは覆面から笑みを覗かせ、もみ手となっていた。世界各国の歓楽街で伝説を残しているカルヴェルを、忍者は慕っていた。機

会があればそのお教えを受けたいと、ずっと願っていたのだ。
「私達が反対しても、うむを言わさずついて来る気なのでしょ？
なら、反対するだけ無駄というものです」
ナーダは、嫌だ嫌だと言わんばかりに頭を振った。カルヴェルが何らかの形で介入してくるだろうとは予想していたことだが。大魔王をこの地に縛る結界を張ったのは老魔術師だ。あの結界が無くなれば、ケルベゾールドは別所に逃げてしまう。老人の機嫌を損ねるべきではない。
それに、幼い頃から先代勇者一行を憎んできた癖がぬけず、カルヴェルと顔を合わせるとつい反発してしまうものの……もはや憎悪はなかった。仲間として協力し合う事は不可能ではない。悪ふざけが好きな老人の性格は、好きになれなかったが。
「ケッ！　ついて来るんなら、今までサボってきた分、きっちり働きやがれ！」
アジャンは赤い髪をボリボリと掻き、老人を睨みつけた。どうもカルヴェルは苦手だった。出会った時から何か嫌だったのだ。妙に知ったかぶりで、ちゃらんぽらんで、笑ってばかりいる老人にはムカつく。この老人が亡き父の友人だろうが、故国の後見人だろうが、気に入らんものは気に入らんのだ。
当代随一の大魔術師なんぞ、無視だ。戦闘では、勘に頼っていつも通りやる。好き勝手に動いてやる……アジャンは密かに心を決めていた。
アジャンの容赦のない視線に対し、老人はうむうむと頷いてみせ、にっこりと微笑みを返した。
「勇者の従者としてきっちりと働いてやろう。城の下層部におる雑魚魔族は全てわしに任せよ。わしの魔法で、一掃してやるわ」
他の者が同じ台詞を口にすれば、自信過剰な無謀発言という事になる。けれども、言ったのは大魔術師カルヴェルなのだ。下級魔族が千いようが万いようが、老人は言葉通りに魔族を葬るだろう。
「おぬしら木っ端には構うな。大魔王戦に備え、体力を温存しておお

け。大魔王戦は、今までの四天王戦とは比較にならないほど厳しくなるぞ。ナーダ、おぬしはわしと共に物理・魔法障壁を張る係じゃ。神聖魔法は使うな。負傷者がでた時の為に魔力はとっておけ。なにせ、わしゃ、あらゆる魔法が使える大魔法使いじゃが、回復魔法だけはへっぽこいからの。怪我人は、おぬしに任せる」

ナーダは、はい、はいと、なげやりに返事をした。

「大魔王の攻撃は凄まじい。攻撃力だけ見れば、魔族は神族を凌駕しておる。神族の御力をお借りしたとて、あやつの破壊本能を抑えきれぬ。全ての攻撃を封じるのは無理じゃ。きゃつの放つ攻撃の嵐をかいくぐり、セレスは剣の届く距離まで行かねばならぬ。アジスタスフニル、シャオロン、ジライよ、おぬしらが突破口を開き、セレスを守護し、大魔王の元へと導いてやるのじゃ」

頷くシャオロンとジライ。

アジャンがフンとそっぽを向く。

「こころおきなく戦うがよい。おぬしらの背中はわしが守ってやるゆえ」

セレスの顔に微笑が浮かんだ。

仲間になってくれるのなら、もっと早くになって欲しかったが……カルヴェルが同道してくれるのは正直に言って嬉しかった。

絶対、大魔王に勝てる……

カルヴェルが共に戦ってくれるのなら、誰一人失う事なく、大魔王に勝利できる……

そう確信できた。

「さあ、みんな、行くわよ。大魔王を倒して、地上に平和を取り戻しましょう！」

女勇者セレスの声が、死の大地に響き渡った。

彼らの前では……

大魔王の黒き城が静かに一行を待ち構えていた……

セレスが憑代を斬って邪法を発動させるのは、これより十七時間後……

『清らかな身でありながら、子を宿しはぐくめる者』という条件づけがあったその呪を、大魔術師は肩代わりしてやれず……

女勇者は呪いを受けた。

ケルベゾールドの憑代であった男はセレスの子宮で眠りにつき、百日後にセレスの体を乗っ取って今世に復活する。それは大魔王の復活をも意味した。

だが、邪法は魔族が人に与えた邪悪な魔法。邪法には必ず術師を破滅へと導く道がある。

今世の憑代を熟知していたカルヴェルと邪法に詳しいジライの二人が、邪法を解く術を見つけてくれた。子宮に宿る憑代の精気を精気で上回れば、憑代の魂は散じ、呪は無効となるようなのだ。

おそらく、千人の精気があれば勝てると、カルヴェルは言った。

つまり……

百日のうちに千人の男と交わり、その精気を体内に取り込まねばならないのだ。

自分が命を絶っても呪い自体は別所に移って憑代と大魔王が百日後に復活してしまうとあっては、呪を無効にする為に動くしか道は無い。

セレスは泣く泣く運命を受け入れ、最初の相手を――処女を捧げる相手を仲間から選んだ。

その男性は……

旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊　6話（後書き）

『旅のはじまり＊　カルヴェル　＊』　完。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は……

＊　十八歳以上で男女ものの１８禁話でもＯＫという方　＊
ムーンライトノベルズの『女勇者セレス――千人斬り事始め編』をご覧ください。
セレスが最初の男性に選ぶのは誰か？　アジャン編・シャオロン編・カルヴェル編・ナーダ編・ジライ編の五通りの未来。
誰を選ぶかによって、セレスの未来は大きく変わります。
（ナーダ編は、もちろん、シリアスな話ではありません……）。

＊　十八歳未満の方、男女ものでも１８禁はパスという方　＊
このまま『小説家になろう』で。
『女勇者セレス――千人斬り事始め編』の終了後、こちらに戻ってきます。
次回は『終わらない伝説』。舞台はシベルア。
『カルヴェル編』のつづきですが、そちらを読まなくても話が通じるようにします。

『終わらない伝説』をもって、『女勇者セレス』のメイン・ストーリーは終了します。

終わらない伝説　1話

「さすがお師匠様！　私が眠っている間に『千人斬り』を終わらせてくださるなんて！　しかも、たったの十二日で……あああああ、ありがとうございます、お師匠様！」

両手を顎の前で組み合わせて瞳をうるうると潤ませているのは、今世の女勇者セレスだ。『勇者』とは思えないほど、たいへん肌の露出の多い格好だったが。

それと対しているのは白髪白髭の黒のローブの老人――当代随一の大魔術師カルヴェルだった。

「それだけではないぞ、セレスよ」

老人はニマニマと笑い、女勇者の耳元で囁いた。

「わしの術によって、おぬしの処女は守り通した。おぬしは処女のまま、千人の男の精気を体内に取り込み、大魔王の憑代を滅ぼしたのじゃ」

「え？」

「つ・ま・り、純潔は無事。ぴっちぴっちの処女のままじゃよ。操（みさお）は好きな男が出来た時に捧げるが良い」

セレスの頬がポッと赤く染まった。

今世に何度と無く召喚される魔界の王ケルベゾールド。

女勇者セレスは、大魔王ケルベゾールドをその身に宿していた人間――憑代を、その居城にのりこんで『勇者の剣』で斬り裂いた。

憑代の肉体が息絶えた事で、大魔王は地上との縁を失い、今世に留まれず魔界へと戻って行った。

しかし……

大魔王の憑代は、自分の死によって発動する呪の罠を仕掛けていたのだ。

それは……

死者の復活……

女の子宮に己が精気を宿らせ、百日後に、宿主の肉体を奪ってこの世に復活を果たす邪法であった。

そうと知って、セレスは真っ青となった。

憑代は生き返れば、再び大魔王を召喚するだろう。しかも、肉体を奪われた時点でセレスが死亡してしまうので、その時、この地上に『勇者の剣』の振るい手はいないのだ。百日後では、セレスの甥のグスタフはまだ五才……大剣を振るえるはずもなく、世界は滅亡へと向かってしまう。

更に、この邪法、この世から女性がいなくならない限り有効という性質の悪いモノだった。宿主が死ねば最も近くにいる他の女性に移り、その女性が死ねば更に他の女に移り……と、死者が復活を果たすまで呪に終わりはない。セレスが自ら命を絶ったところで、全てを終わらせる事はできなかった。

大魔術師カルヴェルと邪法に詳しい忍者ジライが、憑代の残した日記などを調べ、邪法を祓う術を見つけてくれた。

それは……

百日以内に、千人斬りを成し遂げる事……

それしかないのだと……

セレスの子宮に宿っている大魔王の憑代の精気は、彼自身の魔力と交わり数百人の男の精気並の強さになっていた。おいそれと消えるものではないが、その精気を薄れさせる事ができれば、死者の復活の邪法も効力を失い、憑代の魂も個を保てずに散じる。

ゆえに、精気をもって、精気を征するのだ。

百日のうちに千人の男と交わり、千の種類の精気を体内に取り込めば勝てる！……カルヴェルはそう言った。

憑代は子宮に宿ってはいたが、精気の影響は全身に及んでいる。

千の精気は直接子宮に入れなくてもよいともカルヴェルは言った。
精気は体内に入りさえすればいいので、口でも尻穴でも、それこそ鼻の穴を使用して吸収するのでも構わないと。
で……
世界平和の為、セレスは泣く泣く運命を受け入れ、千人斬りの決意をした。
そして、最初の相手を……処女を捧げる相手を仲間から選んだ。
その男性が、カルヴェルだったわけだ。

亡き祖父の親友で当代随一の大魔術師、魔法の師匠であるカルヴェルを、セレスは最初の男に選んだ。
と、言っても、老魔術師を男性として愛しているわけではない。
かつて、セレスはカルヴェルの下で修行し、たった一ヶ月で神聖魔法の初歩を習得した。魔法に縁の無い人間が初級だけでも魔法を会得するには、普通は、半年から一年かかるものだ。カルヴェルの師としての桁外れに優れていたのだ。
そこで、セレスは、今回の難事を、カルヴェルの師としての才に頼って乗り切ろうと思ったのだ。カルヴェルに女の道を教えてもらえば、千人斬りも何とかこなせるのではないかと期待して。

けれども、その期待は良い意味で裏切られた。

カルヴェルにHな格好をさせられ、恥ずかしいところをいっぱい触られ、羞恥のあまり失神した経験こそ辛かったものの……
それから十二日間、セレスは意識なく眠り続け……
目覚めた時には、何と、千人斬りが終わっていたのだ！
処女のままで！

目覚めた時、セレスは森の中に居た。
千人斬りが終わると同時に、大魔王の憑代の城の崩壊が始まったのだそうだ。セレスや従者達それにナーダの部下の忍達は、カルヴェルの移動魔法で山を二つ越えた場所にある森の中に瞬く間に運ばれたので、かすり傷一つ負わずに済んだとの事だ。
セレスが一番最初に見たのは、カルヴェルの笑顔だった。ニコニコニコと、いつものように優しく笑う魔法の師。
「ぐっすり眠れたかの？　悪い夢は見なかったか？」
と、尋ねられ、セレスは覚醒しきっていない頭をかしげ、しばらく考えてからかぶりを振った。
「よくわかりません……」
「わからぬのなら、それはそれで良い」
そう言った師の顔は、何処となく寂しそうだった。
「おはよう、セレス。よう目覚めたの。全ては終わった。おぬしの前には光の道が開けておる。安心して進むが良い」

「何で、私……こんなHで変な格好をしてるんです？」
お師匠様の趣味ですか？　と、セレスは師を上目遣いに睨みつけた。
目覚めた時には朦朧としていた意識も、今ははっきりしている。セレスは自分の格好に気づいた途端、顔を真っ赤にし、慌てて両腕で豊満な胸を隠し、その場に座り込んだ。
乳首だけを覆う胸当てと、股間だけを隠す下着。その上にトゥルク風の半透明なベールを何枚か羽織っただけの姿。ほとんど裸だ。
「私の神聖鎧は……？」
「それなんじゃが……すまぬ、セレス」
老人はぺこりと頭を下げた。

「城の崩壊が突然始まったのでの、人間を運ぶだけで精一杯じゃった。おぬしの神聖防具は、荷物と共に瓦礫の下じゃ」

「そうですか……」

聖騎士叙勲の祝いとしてカルヴェルから贈られた白銀の鎧。装備者の成長と共に大きさが変わってゆく聖なる防具を、十二の年からずっとセレスは纏ってきたのだ。それが瓦礫に埋もれてしまっただなんて、友人がいなくなったように思え、寂しかった。

それに、荷物には大切なものがあった。北方諸国の通行許可書はもちろん、ケルティ、バンキグで知り合った人々から送られた友情の証……それと、セレスにとってはご先祖様の肖像画と同じくらい大切だった絵。その全てが瓦礫の下なのか……

「今、分身に魔法をかけさせておる。時をほんのちょいと戻して、崩れる前の城からおぬしらの荷物を物質転送させる魔法を、の」

「え？」

カルヴェルはにんまりと笑った。

「大掛かりな魔法じゃて、ちと時間がかかるが、明日の朝にはおぬしらの荷物、手元に戻せるじゃろ」

セレスの顔がパッと明るく輝く。

「ありがとうございます！　さすが、お師匠様！」

そうと聞いて安心したものの、セレスは立ち上がれなかった。こんなHな下着しかつけていないのだ。恥ずかしくって、動けなかった。

パサァァと上から降って来たものが、上半身を覆った。毛皮の長衣（コート）だ。見上げると、苦虫を噛み潰したような顔の赤毛の傭兵が佇んでいた。その背には『極光の剣』があった。

「アジャン……ありがとう」

毛皮の長衣に袖を通しながらセレスがそう言うと、赤毛の戦士の顔がカァァァッと紅潮した。しかし、彼は何も言わず、口をへの字にしたままそっぽを向いた。

変なの、何で赤くなるのかしら？　と、思うセレスの視界の端に

東国の少年が映った。顔を向けると、偶然、目が合った。シャオロンは木の陰に隠れて、セレスの様子を窺っていたのだ。背にはいつも通り『龍の爪』入りの革袋を背負っている。

「シャオロン」

と、声をかけると、少年は顔中を真っ赤に染め、セレスに背を向けダーッ！と走り出してしまった。森の中を何処までも何処までも走って行く。

「ちょっと、シャオロン！」

立ち上がり追いかけようとしたセレスを、背後から何者かが止める。両肩を掴まれ、動きを奪われたのだ。

「なりませぬ。セレス様は素足にございます。ここは森、下生えの蔓や岩も多うございます。かような地を走られては、セレス様の貴いおみ足が傷ついてしまいまする」

背後から耳元でそう囁いた人物が誰かは、振り返らなくてもわかった。耳にふぅ～と息をふきかけられ、セレスの全身にぞわぞわと鳥肌が立った。

仕返しとばかりに背後の人物――忍者ジライに肘鉄をお見舞いし、セレスは叫んだ。

「じゃあ、あなたがシャオロンを連れ戻して来て！」

「……承知」

しばらくの間、うずくまり腹部を押さえてぶるぶると震えてから、覆面に黒装束の忍者はすばやい体術で姿を消した。木の上にでも飛び移ったのだろう。

溜息をつき、セレスはシャオロンが走って行った方角を見やった。

「あら？」

武闘僧ナーダが居る。かなりセレスから離れた所で木々の間に座り、座禅を組んで、ぶつぶつと何かつぶやいている。お経を唱えているようだ。彼の側の木の幹には『勇者の剣』がたてかけられていた。意識のなかったセレスに代わって、ここまで運んでくれたのだろう。

「ねえ、ナーダはあそこで何してるの？」
まだ背後に佇んでいるアジャンに尋ねたのだが、アジャンは答えない。変な顔で、じろじろとセレスを見つめるばかりだった。
何か……
アジャンも、シャオロンも、ナーダも変だった……
「お師匠様ぁ」
師に救いを求めたのだが、老魔術師はいつも通り宙に浮遊魔法で浮かびながら、ホホホホホと笑ってばかりだ。何も教えてくれない。
「青春じゃのう」
杖頭で自らの額をコツコツと軽く叩き、老人は楽しそうにセレスと仲間達を見つめていた。

忍者ジライが何処からか調達してきてくれた履物は、踵の高い黒のブーツで森向きの履物ではなかった。が、贅沢も言っていられない。膝までの毛皮の長衣で裸体を隠し、黒のブーツを履いて、セレスは精神を集中した。
彼女の求めに応じ……
彼女の右手に大剣が現われた。持ち手の呼び声に応じ現われたその大剣は、大魔王を葬れる唯一の武器『勇者の剣』。ナーダの側から剣は空間を渡って飛んできてくれたのだ。剣がまだ女勇者を主人と認めてくれている証拠だ。
セレスはにっこりと微笑みを浮かべ、仲間を見渡した。ナーダの部下の忍達の姿はない。別所に移ったのか隠れているのかはわからないが、見える所にいるのは馴染みの五人だけだった。
赤くなってもじもじしているシャオロン、シャオロンが照れて逃げ出さないように見張っているジライ、そっぽを向いているくせに気づくとセレスをじろじろと見つめているアジャン、座禅をやめようとしないナーダ、そして、ニコニコ笑っているカルヴェル。
何か変だったが、ともかくも、全て終わったのだ。大魔王を倒し、

この世に平和を取り戻したのだ。
「お師匠様、私達をシベルアの王宮に送ってください。大魔王討伐に成功した事を皇帝陛下にご報告しなくては」
「……その格好で王宮に行くのかの？」
指摘されて、セレスは頬を染めた。毛皮の長衣の下は、紐の下着とベールのみ。ほぼ裸だ……とても、人前に出られる姿ではなかった。
「すみません、その前に、物質転送で何か服をください」
「ホホホ、焦らずとも明日には荷物が戻るわ。せっかくエロっぽいのじゃ、しばらくそのままでいよ」
「お師匠様！」
「それに、王宮への報告ならば終わっている」
「え？」
「おぬし、十二日間も眠っておったのだぞ。その間に、わしが分身を送ってちょちょいと報告しておいたわ」
「そうなのですか、ありがとうございます。でも、勇者である私が直接ご挨拶に伺うのが礼儀かと存じますが」
「いや、それは……」
と、ジライが口をはさむ。
「いえ、その……セレス様は速やかにエウロペに戻られた方がよろしいかと……」
「何で？」
「何でって……そのぉ……シベルアでは」
覆面の忍者は、困ったように視線を彷徨わす。
「いろいろと噂になっておりますゆえ……」
「噂？　どんな？」
きょとんと目をしばたたくセレス。
良からぬ噂など主人の耳には入れたくない。困惑しているジライに代わり、カルヴェルがあっ軽く言う。
「千人斬りの噂じゃよ」

「え？」
「おぬし、十二日間に、千人の男の精気をその身に取り込んだのじゃぞ。来る男、来る男、皆、骨抜きにして、の。おぬしは男好きのド淫乱、公衆便所の、稀代の淫婦と、シベルア国中で噂となっておる」
カルヴェルはホホホホと愉快そうに笑った。
「シベルアの王宮に行こうものなら、ゴシップ好きの貴族どもの餌食じゃて。どーやって千人の男と寝たか根ほり葉ほり聞かれ、果ては犯らせろと迫られるに決まっておる。王宮中の男に襲われかねん」
「……」
セレスはポカーンと口を開き……
それから、ぶるぶると震えだした。
「私……この十二日間、何をしていたのでしょうか？」
「覚えてないのか？」
と、横から赤毛の戦士が尋ねる。
「ええ、まったく……何も覚えていないわ」
と、涙目となりながらセレスが答える。
アジャンは複雑な表情でセレスを見つめ、チッと舌打ちをした。
悔しそうとも残念そうともとれる顔で。
「ねえ、アジャン、私、今まで何をしてたの？」
「……」
赤毛の戦士はチラッと大魔術師を見た。が、老人は楽しそうにホホホと笑うばかりで、何も言わない。赤毛の戦士はボリボリと頭を掻いてから口を開いた。セレスの顔を見ないようにそっぽを向きつつ。
「おまえさんは、千人の男のをくわえたり、でっかいオッパイに挟んだり、手でしごいたりして、次々に男どもをイかせまくってたんだよ」
「は？」
「クソ忍者が外で集めてきた男どもをジジイが移動魔法で城に運ん

で、おまえが日がな一日、男どものミルクを飲めるようにしてやってたのさ。一日、八十人から百人の男のを飲んでたぜ」

「……嘘」

「嘘なもんか！　ともかく、すげぇ性技（テク）でこの俺ですら四分でイかされちまった。艶っぽく笑う顔が、これが、又、色っぽくって……」

ちくしょう！　と、アジャンは地面を蹴った。馬鹿にしきってきた処女のセレスに。色事で良いようにあしらわれたのが本気で悔しかったのだ。おかげでこの十二日の間、アジャンは悶々と過ごしていたのだ。

もう一度、セレスと寝たい……

次こそは、自分がイく前に彼女をイかせたい……

あの妖しく微笑む顔を自分に向けさせたい……

魅惑のサファイアの瞳に、自分一人だけを映させたい……

そう思いながら。

「おまえがあんまり色っぽいもんだから」

アジャンはビシッ！　と、シャオロンを指さした。東国の少年は顔を真っ赤に染め、うつむき、もじもじと手をこすり合わせていた。

「童貞のシャオロンなんざイチコロだったし」

次にアジャンは、遠くで座禅を組んで己の世界に浸っているナーダを指さした。

「クソ坊主は座禅三昧だ！　女性に欲情したのが恥ずかしいんだとさ！　しかも、その相手がおまえじゃな！」

アジャンは胸をかきむしった。

「俺だって、むちゃくちゃ悔しいぜ！　ああ、ったく、よぉ！」

赤毛の戦士は茫然としているセレスを無視し、老魔術師を睨んだ。

「やい！　ジジイ！　てめえ、何しやがったんだ！　何の魔法をセレスに使ったんだ！　教えろ！」

老人はホホホホと笑った。

「千人斬りが早く終わる魔法よ」
「ちゃんと説明しろ！」
「ん、まあ、眠っている間に、体が勝手に動いて、巧みな性技で男を翻弄する魔法といったところか」
「眠っている間？……じゃ、あの時、セレスは眠ってたのか？」
「うむ。じゃから、あの時の記憶が今のセレスには全くないのよ。あれは魔法で目覚めた聖なる淫婦。巧みな性技と男心をくすぐる微笑みで、数え切れぬ男達を昇天させた伝説の美姫じゃ。あの方は千人斬りを果たす為だけに、今世に現われてセレスに憑かれた。セレスの代わりに事を成し遂げられた今は、静かな眠りについておられる。おぬしがいかに愛しく思おうとも、セレスの体を動かされていた方は、この地上には、もはや居られぬ。もう二度と会えぬのじゃ」
愛しい……？
アジャンの顔がボッと火を噴いた。
「俺が何時、ンな事、言った！　俺ぁ、ただ、再戦したいだけだ！　今度こそ、俺がセレスをイかす！」

「あぁ～ん」
怒鳴るアジャンの横で、セレスが両手で顔を覆い、嫌々と首を振った。
「そんな……そんな恥ずかしい事を私がしてただなんて……千人の男の人のアレを……アレを口に！」
「馬鹿、今更、何、うろたえてやがる。千人斬りをやると決めたのはおまえだろうが。触らんで達成できるとでも思ってたのか？」
「思ってなかったわよ！　口だけでやり通せただなんて、すっごい幸運なんだってわかってるわよ！　でも、でも……」
セレスは泣きながら、かぶりを振った。
「いやぁぁぁ、男の人のアレを千人分もくわえただなんて！　しかも、それがシベルア国中の噂になってるですって……」

泣きじゃくるセレス。
「もう駄目！　そんなはしたないことをしたんじゃ、私、もう人前に出られない！　それに……それに……お嫁にだって行けないわ！」
女勇者のそばに駆け寄り、東国の少年がおろおろする。抱きしめるのは恐れ多い。でも、このまま涙を流させているのも辛い……
少年は声をはりあげた。
「セレス様は正義の為にやったんです！　誰が何と言おうが気にしちゃいけません！　堂々となさっていればいいんです！　それに……それに……大丈夫です！　セレス様、えっと、そのぉ……いざとなったらオレが責任をとってセレス様を、お、お、およめ、およめさんに！」
と、ガッツポーズをとる少年。
その後頭部をガシッと殴りつけてから、忍者はセレスの背後に回りこんだ。
「嫁入り先の心配ならば、当分、無用かと。甥御様がご成長なさるまでセレス様は嫁げませぬゆえ、結婚は早くても十年後でしょう。人の噂も七十五日。セレス様が結婚可能になられる頃には、色情狂の噂など影も形も……」
ぐぼっ！
肘鉄の後に回し蹴りを頂戴し、忍者の体はゴロゴロと森の中を転がっていった。
「おまえ、あの変態忍者のもくわえたんだぜ」
「……アジャン」
「それだけじゃねえ、千人目の最後にゃ、そこのジジイのを舐めたんだぜ。美味かったか？」
「覚えてないって言ったでしょ！」
「覚えてなくたって、やったもんは、やったんだ！　現実は変わらねえよ！　ケッ！　悪い噂ってのは広がるのが早いからな。今頃、北方中が『好きもの女勇者』の噂でもちきりだろうぜ。国境封鎖ものりこえて、エウロペまで伝わるんじゃねえか？」

「そんな……」
セレスの顔からサーッと血の気が引いた。再び顔を両手で隠し、セレスはぺたりと座り込んだ。
「もう嫌……恥ずかしい……死んじゃいたい」
「死ぬだなんて！　そんな事、おっしゃらないでください、セレス様」
何とか元気づけようと、シャオロンがセレスを慰める。
「あの時も、今も、セレス様は素敵です！　それに、セレス様は女勇者様なんだし、えっと、世界平和の為なら何をしてもいいはずですし、そのぉ、オレはセレス様が頑張られたのよくわかってますし、それと、あの……アレ、本当に気持ちよかったです」
しかし、言っていることは支離滅裂だった。シャオロンもかなり取り乱していた。
「お取り込み中、たいへん申し訳ありませんが、少々、お時間をいただけますか？」
と、声をかけてきたのはナーダだった。セレスが気づかぬ間に、座禅を終わらせて側に来ていたようだ。
何事かと顔をあげると、やつれた顔のナーダがインディラ式の拝礼をとって立っていた。互いの両手分くらい離れた距離で。
「大魔王を倒し、無事、勇者としての使命を終えられた事、心よりお祝い申し上げます。千人斬りも終了まで見届けたことですし、私の従者としての役目は終わりました。ここでお別れしましょう。私、このままインディラに戻ります。どうぞ、お元気で……」
「え？」
驚き、セレスが立ち上がると……
ナーダは一歩、後退した。
セレスが一歩、歩み寄るとナーダは一歩下がり……二歩歩み寄ると二歩下がり……三歩歩み寄ると三歩下がり……セレスが駆け出すと、ナーダは器用にも後ろ足で駆け出した。
「ナーダ！」

「側に来ないでください！　私はもうこれ以上、堕落したくないんです！」

「堕落？　堕落って何よ！」

「僧侶には女戒というものがあるんです！　女犯（にょぼん）を犯したら僧をやめなくてはなりません！　口にとはいえ……自ら女体に精を放ってしまっただなんて……あなたに欲情してしまっただなんて、これを堕落と言わずして何と言うのです！　私は総本山に戻り、精進潔斎をして、大僧正様の下で修行をし直します！　心を入れ替えて己を鍛え直すのです！」

セレスはムカァァと怒りで顔を赤く染めた。

世界平和の為、やりたくもない千人斬りをやろうと決め、（眠っている間に）頑張った（らしい）のに……バイ菌扱いされて避けられるなんて、あんまりだ。

「帰りたい奴は帰らせればよろしゅうございましょう」

セレスのすぐ側の大木の、セレスの肩ぐらいの高さの低い枝の上に忍者ジライが座っていた。ジライは横目でじろりと武闘僧を睨んだ。

「達者での、ナーダ。いろいろと世話になったな。名残は惜しいが、大僧正候補のおまえと俗人の我らではこれからは住む世界が違う。生きているうちに二度と会う事もあるまい。せいぜいご立派な大僧正となる事だな」

そう言ってツーンと顔をそむけた忍者を、ぐっと喉を詰まらせて武闘僧が見つめる。言いたい事はあるものの、言っても無駄なので口にしない……そんな感じだ。

終わらない伝説　2話

忍者はひらりと枝から下り、セレスの前に跪いた。
「セレス様、ご命令とあらば、このジライ、あなた様をお連れして逃げまするぞ」
「は？」
何のこと？　と、戸惑うセレスにおかまいなく、忍者は滔々と語り続けた。
「セレス様の御為とあらば、このジライ、何でもいたします。通行書の偽造、資金調達もお手のもの。悪い噂の流れてこない遠い地まで行きましょう。セレス様がお心安らかに暮らせる土地は必ず何処かにございます。アフリ大陸でも新大陸でもご一緒いたします」
「あ！　それなら、オレも！」
シャオロンが走り寄って来た。
「オレもどこだろうとお供します！　セレス様の為なら、オレ、何でもやって頑張ります！」
「シャオロン……あなたまで何を言っているの？」
セレスは少年をたしなめるように見つめた。
「あなた、大魔王を倒した後は、シャイナに帰ってご家族と村の方々のお墓を作り直すって言ってたじゃない。それに、お父様の跡を継ぐ為に格闘の修行もするんでしょ？　それから、左手用の『龍の爪』をジャポネの社（やしろ）に返しに行くのよね？」
「あ……」
「私に付き合っている暇なんて無いんじゃ？」
「……そうでした」
がっくりと肩を落とす少年。
その横で、忍者は上機嫌だった。
「その点、私には何の縁故（えんこ）もございませぬ。私めは魔族への復讐の為、里を捨てました。抜け忍となった以上、もはや里には戻れませ

ぬ。どうか、生涯、あなた様のお側に侍り、お仕えする事をお許しくだされ」

「でも、あなた、妹さんが居たわよね？」

「アレは里に居ります。抜け忍が近寄っては反って迷惑となります。アレにとって私は死んだも同然」

暗い話のはずが、忍者は覆面からニコニコ笑顔を覗かせていた。

「私がセレス様にお仕えするのに、何の障害もございませぬ。後はセレス様のお気持ち次第。さあ、さあ、いかがにございます？」

セレスは鼻じろんだ。

忍者は笑顔で迫って来る。

正直に言って、やたら背後をとりたがる忍者にず～～～と側に居られるのかと思うと、うっとーしかった。しかし、彼を勇者一行に招いたのは自分なのだ。最後まで責任をとるべきだろう……そう思い、セレスは溜息をついた。

「わかったわ、ジライ。あなたが他にしたい事ができるまで、今まで通り私の側に居ていいわ」

「おおおお！」

忍者は感激の涙を流した。

「セレス様にお仕えする事が、私にとって無上の喜び。他にやりたき事など、あろうはずがございませぬ♪」

セレスの右手をとってスリスリと頬擦りをしているジライを、シャオロンは羨ましそうに見つめ、ナーダはしかめっつらで見つめていた。が、最後には忍者は、鳥肌を立てた女勇者に蹴っ飛ばされてゴロゴロと転がってゆく運命だった。

「で、おまえさん、どーするんだ？　クソ忍者と手を手を取り合ってトンズラこくのか？」

ニヤニヤ笑いながら尋ねてきた赤毛の戦士に、セレスはかぶりを振って答えた。

「何もかも捨てて逃げられたら楽よね……恥ずかしくって人前になんか出たくないもの……でも、そういうわけにもいかない。シベル

アの王宮へ行くのはやめるけど、エウロペには戻らなきゃ」
赤毛の戦士は嘲笑を浮かべた。
「さすが、お偉い勇者様は違うな。何があっても勇者としての使命を貫き、王国に仕えるってわけか」
「今世の勇者ですもの、当然でしょ？　あと、あなたの為にもエウロペに行かなきゃね」
「ん？」
セレスは両手を腰にあて、長身の傭兵を見上げた。
「エウロペに行かなきゃ、あなた、大魔王退治の成功報酬を国王陛下からいただけないでしょ？」
「……まあ、そうだが……」
「じゃ、なるべく早く戻りましょ」
「……」
「二年間、付き合ってくれてありがとう」
セレスはにっこりと微笑んだ。
「私、考えなしのバカで、最後まであなたを怒らせてばかりだったけれど……あなたと一緒に旅ができて良かったわ。今まで気づきもしなかったことが、ほんのちょっとだけどわかるようになったもの。ありがとう、アジャン……本当にどうもありがとう」
「……」
「あなたとも、もうすぐお別れね」
セレスはうつむいた。
ナーダとはこの地で別れ、シャオロンは近いうちに故郷に戻る。
『大魔王を倒す』という使命を果たした以上、共に生きる意味はもはやない。これからは、それぞれ自分の人生を歩むのだ。

アジャンは眉をしかめた。侯爵令嬢のセレスと一介の傭兵の自分。エウロペで別れれば、二人の人生は二度と交わらないだろう。
二度とセレスに会えず……

二度とセレスを抱けないのだ……

アジャンは胸の奥に痛みを感じた。

別れが決まってから、彼は初めて己の感情に気づいた。世間知らずで、純粋で、怒りっぽくて、涙もろい、正義感にあふれるやさしい女勇者を……自分はずっと見続けたかったのだ。

セレスにイかされて悔しかったのも、愛しい女を前に手も足も出せなかったのが悔しかったので……

「……セレス」

「なぁに？」

澄んだサファイアの瞳が、まっすぐにアジャンを見つめている……思いを口にのぼらせたかった。

この瞳と別れ生きていかなければいけないなど、あまりにもむなしい。

しかし……赤毛の傭兵は己の感情を殺した。

今更言ったところで、どうにもならない。

手遅れだ……

そう諦めて、いつも通りの軽口をたたいた。

「……俺と別れられりゃ、せいせいするだろ？　嫌味を言われないですむもんな」

「ん、もう！　あなたってば、いつもひねくれた事ばっかり言うんだから！」

「ケッ！　けどな、もうしばらくは俺ぁ、おまえから離れられれん。こっから移動魔法で一気にエウロペじゃ、北方諸国に対しカドが立つ。おまえさんは、悪い噂に満ちたシベルアから、バンキグ、で、ケルティを通ってようやくお国に帰れるわけだ、わかってるよな？」

「……そうね。特別に通行許可書を発行してもらったんだし、ちゃんと手続きを踏んで帰国しなきゃ、失礼よね」

「俺らが国境を無視して一気にエウロペへ戻っちまったら、南への信用は地に落ちる。俺らが悪しき前例となって、今後、通行許可書は南に二度と発行されない事になりかねん」

「……わかったわ、ちゃんと国境を越えるわ」
「ま、エウロペまで無事に辿りつけるたぁ、思えねえがな。やりマ●女勇者を狙って、強姦魔どもが街道でわんさと待ち構えてるだろうしよ！」
「あなたねえ！」
「アジャン！　『やりマ●』とは何じゃ！　セレス様は千人斬りでマ●コはご使用になられなかったぞ！　『やりマ●』という表現は当てはまらぬ！　色狂いとか好色一代女とか他に適切な表現が」
横から口をはさんだ忍者は言いたい事を最後まで言えぬまま、セレスのパンチをくらって宙を舞って行った。
セレスがキッ！　と、アジャンに噛み付く。
「どーして、あなたって、そんなに下品なのよ！」
「悪かったなあ、俺ぁ、生まれからして卑しいんでね」
「卑しくなんかないでしょ、アジの王族だもの」
「ケルティの部族王なんざ、エウロペの閑村の村長と変わらん。貧乏人さ」
「私が問題にしているのは、あなたの品性よ！」

ぎゃいのぎゃいのと言い合う二人。
それを見せつけれているシャオロンは、おろおろするばかり。
ナーダは頭痛を堪えて、額に手を当てた。
本日何度も転がっている忍者は、もう復活し、木の上から二人の口喧嘩を見物していた。
「お？」
それまでニコニコ笑って傍観者を決め込んでいた老魔術師が、ふいに真面目な顔となった。魔力で何かを感じ取ったようだ。南西をみやり、低くうめく。
「こりゃ、又、どうして……？　うむぅ……自力でやらんかったのがマズかったのか、たまたま、そういうタイミングだったのか……」

老人は顎の下に手をあて、首をひねっていた。
「何か？」と、ナーダが尋ねる。
「いや、まあ、ちょっとのぉ……」
老魔術師は白い顎鬚を撫でた。どう言おうか？　と、迷っている間に、一行のもとにインディラ忍者が現われる。僧侶専用の遠話用の魔法道具（マジック・アイテム）――掌サイズの神像を携えて。千人斬りの間、『私めは枯れた老人ですゆえ』と言って外回りの仕事に回っていた老忍者ガルバだ。
「失礼いたします。御身様、大僧正様からの緊急連絡にございます」
「大僧正様から？」
寺院間で神像を使用した連絡をとりあう事はよくある。しかし、インディラ教が異端とみなされている北方では、インディラ神の御力にすがる魔法の使用は危険だ。使用している姿を発見されれば、邪教の使徒として火あぶりにされかねない。
『北方では神像の使用は極力、控えよ』と、ナーダに助言したのは、他ならぬ大僧正なのだ。よほどの緊急事態に違いない。
ナーダは顔をひきしめて神像を手に取り、呪文を詠唱しつつ、瞼を閉じた。
ただならぬ雰囲気だったので、セレスもアジャンも口喧嘩をやめた。
全員の注目を浴びていた武闘僧は……
「え？」
他の者の耳には届かぬ声に驚き、顔を真っ青とした。
「それは……何かの間違いでは……？　え？　間違いない？　はあ……はい……あ？　いえ、わかりました……」
魔力を高めるのを止め、ナーダは糸目を開き、全員の顔を見渡した。途中、カルヴェルの顔に視線を止めたのは、『あなたはこの事をご存じなのでしょう？』と、非難する意味をこめていた。
「さきほど、インディラ神より託宣が下りました」
武闘僧は咳払いをした。

「アフリ大陸に大魔王ケルベゾールドが現われた……と」

（……）

「え？」

「もう一回、言いましょうか？　アフリ大陸に大魔王ケルベゾールドが現われたそうです。託宣の内容は、それだけだそうです。いかがなさいますか、女勇者様？」

「いかがって……どーしてよ！　十二日前、ケルベゾールドを斬ったばっかりよ！　憑代の呪いだって今日祓えたばっかりなんでしょ？　なのに、どーして！」

「私が知るものですか！　大僧正様からのお言葉は、あとは、『邪悪を討つべく、今しばらく今世の勇者と行動を共にせよ』……それだけでした」

　あああああ、総本山に帰って修行し直したかったのに……と、嘆くナーダ。

「邪悪が現われたのなら、退治すべきですよ、セレス様！」

　と、両手を握り締めて、シャオロンが身を乗り出す。

「世界平和の為、お供します！」

「私めは、先程、ご許可をいただけましたので、生涯、セレス様の下僕。どこへなりともお供いたします」と、ジライ。

「お師匠様……」

　何がどうなっているのか、さっぱりわからない……女勇者はすがるように、魔法の師を見つめた。

　老人は明るく笑った。

「すまぬ。わしも何故かはわからぬ。おぬしに眠らせたまま呪を祓

わせたが為、中途半端に大魔王の影響が今世に残ってしまったのか……それとも、ほんに偶然か、わからん。おぬしも知っての通り、ケルベゾールドは、闇の聖書を読み解いた者によって今世に召喚される。今世に現存し闇に生きる者が手にできる聖書は二冊……この前の憑代は討たれた時に持っておらんかったしのう。闇の聖書を読み解くまで、普通は何十年もかかるものじゃが、ついさっき、たまたま、暗黒魔法の天才が手にしてケルベゾールドを召喚してしまったのかもしれんな」

「そんな……」

「憑代のおぬしへの呪が生きている間は、次のケルベゾールドは召喚できぬ仕組みじゃ。ほんに、タイミングの問題だったかもしれん。千人斬りの終了がもっと遅ければ、大魔王教徒どもが血で血を洗う争いをして奪い合っている闇の聖書は、他の所有者の手に渡っておったかもしれんしのう」

「本当に……復活しちゃったんですね……ケルベゾールド」

がくっと肩を落とすセレス。

「実はの、わし、こういうモノをエウロペの国王陛下からお預かりしておったのだ。おぬしが必要とするようならば、渡してくれとのことでの」

そう言って大魔術師が懐から取り出したものは、共通語で書かれた書類だ。セレスは『勇者の剣』を木にたてかけ、書類を受け取った。

『女勇者一行の入国を認める』と、記されたそれには、アフリ大陸最北端の国エジプシャンの国王の印璽が使われていた。入国審査後、通行許可書を発行するとも記されている。

「エジプシャンの入国許可書……どうして、そんな書類を……？」

「どうしてって……おぬしが頼んだのであろうが。昨年の晩夏の頃じゃ。ケルベゾールドの本拠地探しで、北方かアフリ大陸へ行きたいとエウロペの国王陛下に頼んだであろう？」

「あ、ええ、たしかに」

「国交の無いアフリ大陸との交渉に、国王陛下も難儀しておられたろう？　海運国エーゲラやアフリ大陸と縁深いトゥルクを頼られたりして」
「それは、そうですが、でも、それって、昨年の九月の事……その後、秋に、私達、北方諸国に向かったのに……」
セレスは書類発行の日付に眉をひそめた。
「この書類、今年の二月に発行されてます……」
ちょうどバンキグで武術大会をしていた頃だ。
老人はホホホホと愉快そうに笑った。
「アフリ大陸の人間に、ユーラティアスの国々の常識を押しつけてはいかん。あちらは何でも、のんびりしておるのよ」
「はあ」
「じゃて、一度、機会を逃すと、次に許可が下りるのは何時になるかわからん」
「え？」
「セレス、書類をよう見てみい」
セレスは上から下まで書類をよく見て……真っ青となった。
この書類は発行より三ヶ月有効と記されてあり、有効期限は……今日までだったのだ。
「すぐに！　すぐに行かなくっちゃ！　あああああ、でも！　国境も越えないと、北方諸国とエウロペの関係がますます険悪に～～～～！」
セレスは魔法の師匠の師匠の肩をがしっ！　と、掴んだ。
「お師匠様！　今、何時です？　お昼過ぎ？　なら、間に合いますね！　お師匠様の魔法で私達をまずシベルアとバンキグの国境へ送ってください！　そこで、事情を説明して手続き省略で国境を越えたら、次は、直接、バンキグ国王ルゴラゾグス陛下のもとへ送ってください！　一流の戦士のあの方なら、大魔王復活をお知らせしたら、超法規で国境を越えるのも許してくださいます！　それが終わったらケルティのハリハールブダン上皇のもとへ！　その後、エー

ゲラとエジプシャンの国境まで送ってください！　お願いします！」
「送るはいいが……おぬし、その格好で行くのか？」
ハッとして、慌ててセレスは胸を隠すように両腕を組んだ。毛皮の長衣の下はほとんど裸のような姿なのだ。こんな格好で人前に出たら、露出狂と思われかねない。
「ちと待て。おぬしの家からなんぞ、適当に服を運ぶ。三日分でいいな？　見立ては、おぬし付きであったメイドにでも頼むわ」
「……すみません、お願いします」
老人がすばやく呪文を詠唱すると、ポンと白い煙が老人の周囲に広がった。分身魔法だ。魔法によって創られたカルヴェルそっくりな老人は移動魔法で消えた。エウロペのセレスの生家に向かったのだろう。
「セレス……大魔王退治に行くのなら、俺も同行する」
胸元に手を当てて己を指差す赤毛の傭兵。
女勇者は驚き、仲間を見つめた。
「いいの、アジャン？　あなたが同行してくれたら、とても心強いけれど……あなた、ユーラティアス大陸での私の護衛だけを依頼されてるんでしょ？　新たに契約を結び直さなきゃ、アフリ大陸に行ってもタダ働きよ」
「……わかってる。けど、金よりも俺にとって、もっと大切なモノが一緒に行けば手に入る」
「……お金よりも大切なもの……？」
「一緒に行ってもいいか？」
「ええ！　ええ、もちろんよ、アジャン！」
セレスは両手を組み合わせ、感動した。無報酬でアジャンが正義の為に働いてくれるだなんて夢みたいだ！　と、思った。
だが、むろん……そんな目的で、赤毛の傭兵が動くわけがない。
「おい、ジジイ！　大魔王の憑代ってのは、毎回、勇者への呪いを準備してるんだよな？」
「うむ」

そうと聞いて、アジャンは己の左の二の腕をパァァンと叩き、気合をつける。
「よし！　リターン・マッチだ！　今度こそ先にセレスをイかせてやる！」
「は？」と、セレス。
「覚悟しとけよ。次の千人斬りじゃ、そう簡単には俺ぁ、イってやらんからな！」

「千人斬り……」

ズズ～～ンと暗くなるセレス。ポッと頬を染めるシャオロン。やっぱり総本山に帰ります！　と、ごねるナーダ。往生際が悪いとナーダを蹴飛ばすジライ（そのジライを『この不心得者めが！』と必死に止める老忍者）。やる気満々のアジャン。
彼らを見渡し、老魔術師カルヴェルはホホホホと笑った。
大魔王の憑代が死と引き換えに仕掛けてくる呪いは、実は、毎回、変わっている。新たな憑代は、別の呪いを使用するはず。千人斬りも聖なる淫婦エリスの召喚もありえない話だったが……
黙っていた方が面白そうだから内緒にしておこうと、カルヴェルは決めた。
小さな旅行鞄を持って、カルヴェルの分身が戻って来る。分身はセレスに鞄を渡すと、光となり、消滅した。
「着替えてきます！」
鞄を持って走り出したセレスの背に、老魔術師が声をかける。
「わしゃ、エジプシャンの国境を越えるところまで見届けたら帰るわ。セレスよ、わしが従者でおるのはそこまでじゃ。それから先、わしに何ぞ、頼みごとがある時は、当代随一の大魔術師へのそれなりの報酬を払うように」

「お師匠様は一緒に行ってくださらないのですか？」
「うむ。野暮用があっての」
老人は、ただニコニコ笑うだけだった。
何故、同行しないのか、その理由を話す気はない。
今のところは……。
セレスが大魔王を倒してくれたおかげで、魔界に囚われていた義弟が今世に戻ってこられたのだが……
その体は闇に蝕まれていた。
『又、勇者を救えなかったんですか……二度も大魔王にだしぬかれるなんて、まったく、あなたって人は……。当代随一の大魔術師とふんぞりかえってるくせに、無能なんだから……大無能師カルヴェルって呼称を変えたらいかがです？』
と、呼吸さえ苦しいくせに毒づく義弟を、インディラ教総本山の奥の院で癒しているのだ。大僧正が治癒を行い、カルヴェルの分身が浄化魔法を担当して。しかし、分身の少ない魔力に浄化を任せておくのはいかにも心もとない、危険な状態に義弟はあった。
今世に連れ戻せた義弟を、魔に堕とすわけにはいかない。しばらくは総本山に籠もり、つきっきりで義弟に浄化魔法をかける必要があった。
カルヴェルは呪文を低く詠唱し、形代（かたしろ）の邪法を己にかけ直した。
前回、かけた邪法よりも念入りに。セレスが大魔王を斬った時に発動する呪は、これで代わって受けてやれるはずだ。
今度こそは……
前回は『清らかな身でありながら、子を宿しはぐくめる者』という条件が合致せず呪いの肩代わりはできなかった。が、今度はうまくいくだろう、
と、いうか、うまくいかなければマヌケすぎる、カルヴェルは内心、己を嘲笑った。
カルヴェルが確実に今世に留まっていられるのは、セレスがアフリ大陸で大魔王を葬るまで、だ。

それまでに、何としても、口の悪い義弟を助けなければ……カルヴェルは決意を新たにした。

「アフリ大陸を旅するうちに、悪い噂も消えましょう。物見遊山気分でゆっくり行きませぬか？」と、ジライ。
「駄目！　大魔王は見つけ次第、倒すのよ！」
「悪名が高すぎて、ユーラティアスから離れる女勇者か……夜逃げみたいだな」と、アジャン。
「失礼ね！　違うわよ！」
「セレス、言っておきますが、アフリ大陸では北部と東部沿岸地域でしか共通語は通じません。西と南はユーラティアスの人間には未踏の土地です。どんな言語が使われているのか見当もつきません」と、ナーダ。
「え？　又、会話で苦労するわけぇ？」
「セレス様、オレ、がんばりますね！」と、シャオロン。
「ありがとう……私も頑張るわ」

かくして、女勇者一行の旅は続く……

終わらない伝説　2話（後書き）

『終わらない伝説』　完。

＋　＋　＋　＋　＋

『女勇者セレス』メイン・ストーリーはこれにて終了です。

ご愛読ありがとうございました。

＋　＋　＋　＋　＋

こうして完結を迎えられ、感慨ひとしおです。

八年前にワーブロで最初に書いたのは『女勇者セレス――千人斬り事始め編』でした。

相手が変われば物語も変わるの、５通りのH話。それを成り立たせるべく創った個性的な従者と怒りん坊でだまされやすいまじめな女勇者をたいへん気に入り、その後、『女勇者セレス』と夢シリーズを書き始めました。

序盤、アジャンに下品なセリフが多いのは、H小説の名残です。ナーダとジライの性癖も、H小説が最初にありきだった為です。

書きあがっていた物語を書き直して『小説家になろう』で発表しようと決めてから、夢シリーズと『千人斬り』とラストをどうしようか悩みました。Hな話をとりのぞいて、全年齢対象の話だけを発表する方が良いのではないか、と。

しかし、Hを前提に作られたちょっといびつなストーリーはうま

く修正ができませんでした。又、Hを除くとキャラの魅力が生かせないとも思えました。

結局、『ムーンライトノベルズ』という女性向けの十八禁の発表の場があるということに甘えさせていただき、『小説家になろう』と『ムーンライトノベルズ』をいったりきたりする形で『女勇者セレス』は発表させていただくこととしました。

『小説家になろう』だけで物語が成り立っていない事を、この場をもって、十八歳未満の方に謝罪いたします。『小説家になろう』の話だけでストーリーがわかるようにと意識しましたが、読めない話を作ってしまってすみませんでした。

＋　＋　＋　＋　＋

●『女勇者セレス』シリーズのこの後の予定

＊この後に、番外編をアップしていきます（不定期）
初代『白き狂い獅子』とジライの話、
従者の任を終えた後のシャオロンの旅、
ナーダとガルバの話、
悪夢から悪夢へのアジャンの話、
セレスとカルヴェルの話、
後、Y様の独白などを……予定。
活動報告の方に以前書いた性別逆転話は、いまいちおもしろくならないので止まってます。書けましたら、それも。

＊『姫勇者ラーニャ』の連載始めます（8月15日以降）
『女勇者セレス――千人斬り事始め編』のジライ編の後の話。
『旅のはじまり　＊　カルヴェル　＊』→ジライ編→『姫勇者ラ

ーニャ』の流れ。
『終わらない伝説』から始まる未来とは別の未来ということで…
…すみません、ややっこしくて。
セレスとジライの娘のラーニャが主人公です。二人の子供なのに、何で『姫』なのかはご覧になってのお楽しみということでｗ　こちらも不定期連載となります。

＊『女勇者セレス――夢シリーズ』
『女勇者セレス――千人斬り事始め編』でセレスが誰を選ぶかによって変わるナーダとジライの未来（８月１５日より開始）。

よろしかったら、このキャラクター達の冒険や恋愛にもう少しだけおつきあいください。

ご感想等、いただけると嬉しいです。励みとなります。

桜花　1話（前書き）

初代『白き狂い獅子』とジライの話です。男性の同性愛を含む性的描写が多めです。子供時代のジライが出てくるので、痛い話でもあります。

その手の話をご不快に思われる方は、この次の「風花」からご覧ください。そちらは大魔王討伐後のシャオロンの旅を描きます。

桜花　1話

初めて会った時、こりゃ、イかれてると思った。

そのガキは、乱れた前髪で顔の右半分を隠していた。出している左目は、死んだ魚のようで何処を見てるかわからなかった。白髪・白い肌の痩せた異形。覇気のねえ、気色の悪いガキだった。

俺は『白き狂い獅子』の異名を持つ、忍の里一の剣士だ。

暗殺や窃盗なんかの隠密活動の仕事には、まっとうな黒装束を着る。

だが、陽動や扇動、恐喝、拷問の仕事の時は、上役から文句を言われねえ限りは真っ白な忍者装束を着た。目立つからだ。標的とされ、憎まれ、より多くの敵に囲まれるよう、俺は白装束を着た。

俺は乱戦が大好きだった。

抜刀術、剣術、体術、忍術、忍法を取り入れた俺の剣は、まっとうな剣士――サムライにゃ見切れん奇抜な剣となっている。

目立つ白装束で若い頃から俺は、剣豪と名高いサムライどもを葬ってきた。

おかげで、俺の素顔も名前もまったく知られちゃいねえが、『白き狂い獅子』の名はジャポネ中に知れ渡っており、『白き狂い獅子』を指名しての里への依頼もかなりの数だ。『白き狂い獅子』の名は、里の殺しの技術の高さの象徴のようになっていた。

対外的には、俺ぁ、里を代表する有名人なんだが……

里では、俺は一介の下忍に過ぎなかった。里の掟と生まれのせいで、中忍にすらなれなかったのだ。

不惑が近づき現役でいるのがそろそろ厳しくなってきた時、今ま

での功績に報いると頭(かしら)から屋敷と道場が与えられた。俺にとっちゃ初めての財産といえるシロモノだ。中忍以上にならにゃ、家なんざ持てない。俺が拝領した屋敷と道場は、クソ余ってる頭の土地の桜林の側に建てられたものだった。

その時、『上忍扱いとする』というお墨付きもいただいた。

ご褒美だって綺麗ごとを言ってたが、ようするに手が足りなくなったってことだ。

この里の上忍は八、中忍は四十八と枠が決まっている。家や土地や部下の下忍を抱える権利を持つ上中忍は、里の命令に服し、里から命じられる仕事を一定数こなす義務があった。義務は上忍ほど重く、その義務を上忍は本人がこなしてもいいが、たいていは抱えている手下――中忍・下忍にさせる。

『上忍扱いとする』というお墨付きは上忍並みの仕事数を俺に振ってこったし、屋敷だけじゃなく道場まで付けたって事は俺が老いぼれる前に剣を里の者に教えとけってこった。

無茶言ってくれる。

けど、まあ……

今まで上中忍にピンハネされてた報酬が丸々入るようになるわけだし、狭い板の間の相部屋から解放されるのは喜ばしいことなんで、俺は頭からの条件つき報奨をありがたくいただいた。

上忍の仕事数をこなすにゃ、いくら俺が優秀だからって一人じゃ無理だ。部下をいっぱい抱えて部下にやらせるか、優秀な部下を育てて他の中上忍に貸与する事で年間一定数の仕事を肩代わりしてもらうか、義務となる仕事数の代替の金子を払って一定数を免除してもらうかだ。

多少の準備金は貰えたし、最初の一年は割り振られる仕事を十分の一にしてもらえるってこったので、まずは道場を軌道にのせる事にした。

俺はヘボには教える気はなかったので、里の中からマシな奴等をかき集めて試験(テスト)をし、その中のそこそこ使える坊主を二人だけ内弟

子とした。
ヤマセとホシノだ。
他にもマシな奴はいたんだが、残念ながら、持ち主の中上忍と値段交渉がうまくいかなかった。買えなかった奴らにゃ、『俺が里に居る時、指南料持ってくりゃ稽古つけてやる』と、言って元の持ち主に戻した。指南料なんざ微々たるもんだが、道場の構えがあるのに弟子とらなきゃタヌキ親父（頭）がうるさいからな。
結局、俺は、ガキ二人だけを抱えて、上忍並みの仕事をこなさなきゃならなくなった。仕方ねえんで、毎年、仕事数をかなりの数、免除してもらっている。だもんで、外でけっこうヤバい仕事こなしてるのに、免除金の支払いにほとんどが消えちまう。
働けど働けど、我が暮らし楽にならざりきって奴だ。あのタヌキ親父（頭）の手の内で、いいように使われてるってのはわかったが……
屋敷が持てる身分を守り通す為に、俺は真面目にお仕事を続けた。
それから十年。拾った頃はガキだった二人も、いっぱしの忍となった。
ヤマセは中忍（師匠の俺が下忍だってのに妙な話だ）、ホシノは頭直属の暗殺部隊のエースとなっている。
二人を比べると、剣の才は弟弟子（おとうとでし）のホシノが圧倒的に秀でている。天才と言っても良い。ホシノは目にも留まらぬ早業で刀を抜く。抜刀術の才は師の俺を越えている。けど、人間的には問題のある奴だ。冷淡で冷酷、陰気な皮肉屋だ。俺ともヤマセともまともに口をきかず、殺人剣の鍛錬と暗殺の仕事に明け暮れていた。
ヤマセの剣の才は、ホシノよりかなり劣る。並の忍よりは上手い程度だ。だが、頭が良い。引き取ったのも、いろんな流派の剣法の型を会得してたからだ。おまけに要領が良く、世渡り上手。里の上層部にゴマすりまくって、二十そこそこで中忍になりやがった。け

ど、前任者から受け継いだ財産も家も全部叔父に譲っていて、その分負うべき義務も叔父に押しつけ、『中忍』の肩書きだけを持って気ままに俺の下に暮らしている。俺の義務を代わってこなしてくれたり（自分でやってもいたが、叔父に押し付けてる時もあった）、里のガキどもを集めては定期的に剣術教室を開き剣の才ある奴を探してくれたりと、実に使える弟子だ。俺はヤマセを道場の師範代にした。

色黒で陰気で無愛想なチビのホシノと、ひょろながで人あたりのいい商家の息子みたいなヤマセ。二人の優秀な弟子のおかげで、免除してもらう仕事数も減って、俺の生活にも多少、余裕ができてきた。

そんな頃だった、俺があいつに出会ったのは。

その妙なガキを、俺に引き合わせたのはヤマセだった。

白髪、白い肌の、無表情の痩せたガキ。

喜怒哀楽の表情を浮かべねえ、うすぼんやりとした顔は気色悪かった。

けど、ヤマセの見立てなら間違いない。キ印だろうが何だろうが、剣の才があるのは確かだ。才ある奴に剣を教えるのもお仕事だ。俺は、ガキに、週に三日、道場に通うように命じた。

俺の命令は上忍の命令同然の強制力がある。不承だろうが、上役が中忍なら絶対、逆らえない。上忍でも確たる理由がなきゃ、『忍者の戦闘力を増強する指南』を掲げる道場主の命令のが優先される。

それからジライは俺の道場に通うようになった。

で、しばらく道場に通わせてみりゃ、確かに筋が良い。教えられた事をすぐに吸収し、めきめきと腕をあげていった。悪かなかった。

だが、どうしても、俺は奴が気に入らなかった。

命じられた事を命じられた通りに、奴は、黙々と練習する。命じた奴が席を外そうが、ぶっ倒れるほどに暑い日中だろうが、お構いなしだ。いっさい手抜きをしない。

剣術が好きな剣術馬鹿がそうなら（要領の悪さは面白くねえが）構わねえんだが……奴は死んだ魚みてえな濁った目で、ただ命令に従うだけだ。

自分の意志のねえ、傀儡（くぐつ）だ。

ゾッとした。

この里にゃ、俺を含めイかれた奴は多い。けど、俺ぁ、好きでイかれてるんだ。年端もいかねえガキが自分の意志で傀儡になりきるなんざ、ありえねえ。

何処の馬鹿がこいつの主人だ？　誰がこいつを傀儡に育ててるんだ？

道場でヤマセに尋ねると、奴は厭きれたような顔で俺を見上げた。

「七つの子供ですよ。まだ、どこの部隊にも所属してるわけないじゃないですか。直接の上司はいません」

「今は、何処に飼われてる？」

この里ではガキは五才まで保育所で養育され、その後は、親類縁者か、使いっぱしりや弟子を欲しがってる奴に引き取られる。そこでガキはエサを与えられ忍術を仕込まれる。そうやって、中上忍はてめえの部下、或いは召使を得ているのだ。引き取るにはは五年分の養育費を頭に払わにゃならんので、毎年、けっこうな数が売れ残り、頭直属の養成所行きになってはいるが。

「あいつが何処の家に居るのかなんて、一目見りゃわかるでしょ」

ヤマセはやれやれと頭を振り、俺の正気を疑うような目つきをしやがった。くそ生意気な弟子だ。

「異形の館ですよ。白子の行き先なんざ、決まってるじゃないですか」

そうと聞いて、俺はあいつ（ジライ）への関心をすっぱり捨てた。

はっきり言う。俺ぁ、異形部隊が大嫌（でえきれ）ぇだ。醜い外見も嫌いだが、

それよりも、誰にでも媚へつらう卑屈な態度が好かなかった。いつも日陰でうじうじしやがって、呼ばれりゃ誰の足の裏でもケツの穴でも舐めてでも相手の機嫌をとろうとしやがる。その上、異形部隊は、仕事となりゃ、日頃のうっぷんを晴らすかのように、敵をズタボロに引き裂く。慈悲の心なんざ俺も持ち合わせちゃいねえが、異形部隊はいつもやりすぎる。不愉快だった。

異形は、生涯、出世の望みのない下忍で、あのゴウツクで残忍な頭の直属の特殊部隊にいなきゃならねえ。

生まれつきの欠陥のせいで中忍にすらなれなかった俺と、異形部隊は立場が似てる。だからこそ、一層、気にいらねえ。

最下層の立場でいつ切り捨てられるかわかんねえのなら……

切り捨てられねえ実力をつけりゃいい。役に立つ駒だ、捨てるにゃ惜しいと、上役に思わせりゃいい。己を鍛え上げ、突出した強さを持ちゃいいんだ。んでもって、捨て駒に使われないよう、上役をよく観察し、場合によっちゃ相手を操って自分に都合のいい状況をつくりあげりゃいいんだ。

俺は戦う前から、勝負を投げるようなクズは大嫌ぇ(でえきれ)だ。異形部隊に育てられりゃ、まともに育つはずがない。憐れとは思った。が、そこまでだった。白子のガキ――ジライなんざ、頭からすっぱり切り捨てた。

ジライは異形の館から、週に三日、道場に通って来た。

内弟子のヤマセやホシノ、それに通いの他の弟子達が、奴にちょっかいを出しては物陰につれこんでゴソゴソやってたが、どうでもいいので放っておいた。稽古の時間には遅れさせるなとだけ注意した。

そのまんま何もなけりゃ、二、三年ヤマセに指導をさせ、一、ニ

年、俺が直に剣を教えてそれで終わりのはずだった。ジライとは縁が切れたはずだった。

けど、俺はあいつを内弟子に引き取るはめとなった。

他でもない、俺のせいで。

俺ぁ、昔から、刀剣類には目がなかった。

片刃でも両刃でも、長剣でも短剣でも、槍だろうが薙刀だろうが、殺傷力のあるものなら何でも好きだ。

でも、やはり、一番はジャポネ刀だ。

触れるものを真っ二つにする、あのギラリと光る禁欲さがたまらねえ。名のある刀は、見てるだけでいい。イけちまう。

つっても、実用武器だけだ。刃をつぶした美術品にゃあ興奮しない。

下忍として相部屋の板の間で暮らす身の頃は、持てる刀の数に限りがあった。他の私物を極力持たないようにしたって大刀、脇差、短刀合わせて十が限度だった。

だもんで、上忍扱いのお墨付きをもらい、家を持てる身分になってからタガが外れた。

なにせ部屋が十もあるんだ。道場の裏手には小さいながらも蔵まである。武器を百も千も収納できるはず。

仕事で里を離れる度、俺ぁ、二、三日余計に外に留まった。趣味の為だ。

まずは、今まで名刀と目をつけてたものを片っ端から盗んだ。その後も、名刀の噂を聞いてはこっそりそれを拝みにゆき目にかなった時には周到な計画をたて盗みまくっている。

盗術の腕も、俺ぁ、里では一、ニを争っている。押し込みのような下手な真似はしねえ。気づかれぬようこっそりと、時には偽モノとすりかえたりして、外で騒ぎとならぬようお宝を増やしていった。

武器の収集は三度の飯よりも酒よりも好きだった。けど、ヤマセ

に言わせりゃ俺は本当の収集家ではないらしい。収集してきたモノを適当にしまっていたのがマズかったらしい。

『本当の収集家なら、集めた刀剣をいっしょくたにして納戸や押入れに放り込むものですか。何時何処で盗んだ何という武器かわからなさすぎるモノが多すぎます。だいたい、師匠、盗んで数を増やすばっかりで、手入れすらしないじゃないですか。たま～に気が向いた時に抜いて悦にいってるだけ。私がいなきゃ、数多くの名刀が雲って錆てましたよ、まったく、もう』

もっと私に感謝してください、と、男の癖に几帳面で重箱の隅をつっつくのが趣味な内弟子がうるさいので……

一年に一回、俺は収集した武器のうち、やっぱあんま気に入らない出来のヤツや、銘がわからないモノや、自分じゃ扱えない武器を、気前良く弟子どもにくれてやる事にした。

内弟子が管理している武器を減らしてやろうってな、師匠のやさしい思いやりだ。もっとも、くれてやる数より、毎年、盗んでくる数のが多いので、ヤマセのガミガミはおさまりゃしねえんだが。

毎年恒例の武器の振る舞い会にゃ、通いの弟子を全部を呼びつける。任務で里を離れている者を除く全員が集まるのだ。

だから、ジライもそこにいたわけだ。

記録好きのヤマセは今まで誰が何振りもらったとかちゃんとわきまえてるんで、不公平感がないよう刀は分けられる。まあ、年長者のわがままが、結構、通るんで、ガキに回ってくるのは余りモノと相場が決まっていたが。

しかし……

ジライは、あの刀を抜いちまったんだ。

何処でどうやって手に入れたのかは忘れちまったが、ともかく凄い名刀のはず（それだけは覚えていた）で、五年前にヤマセが押入れから発掘してからというものの、毎年、この里の人間に試してもらってるんだが、誰一人、鞘から抜けなかったあの刀を……

ジライが抜いたのだ。あの何処を見てるのかわからねえ、うつろ

な顔で。
冴え冴えとした刀身を目にした時、ぞくぞくした。五年以上、抜かれた事もなかったってのに……刃身には曇り一つなく、刃は研ぎ澄まされていた……
振ってみろと命じると、ジライは刀を正眼に構え、素振りをした。奴が刀を振った瞬間……雨が降った。刀身から、水飛沫が生まれたのだ。
間違いなく、魔法剣だ。
ジライから奪って振ってみたが、俺が持っても雨は降らなかった。その場にいた他の奴等でも駄目だった。ジライだけが、剣より魔力を引き出せるのだ。

その日のうちに、俺は頭（かしら）にかけあい、ジライの身を預かる事にした。異形部隊が頭の抱えだからだ。ガキの値段にしちゃ高かったが、言い値で、俺は頭よりジライを買い取った。
異形部隊じゃ、ジライをまともに育てられるはずがねえ。苛め殺しかねない。だから、預かる事にしたんだ。
本音を言えば、ジライなんざどうでもよかった。
だが、ジライの抜いたあの名刀は……息を呑むほどに美しかった。見ただけで欲情しちまった。
けど、口惜しいが、俺には扱えねえ。あの刀の美を堪能するには、持ち手が必要なんだ。
あの刀の為だけに、俺はジライを育てる事にした。

俺は晩酌のかたわらに、新たな内弟子を相手に『弟子入りを認める』、『へへー』ってヤツ、よくある師弟の形式美をやっていた。
ジライは俺の前に正座して、膳をはさむ形で俺と対面していた。いつもと同じうすぼんやりと顔で俺の話に耳を傾けていた。

頭に貸し出し中のホシノは外の仕事で里を離れていたので、ヤマセだけが俺の横に座り、兄弟子として儀式を見守っていた。

「今日から、おめえは俺の預かりとなった。おめえは俺に買い取られたんだ。剣の腕を磨いて、名刀にふさわしい男になってみせろよ」

ジライは無言のまま頷いた。

「暮らし向きのことは、このヤマセに聞け。おまえは内弟子の中の一番下だ、兄弟子には逆らうなよ」

又、無言で頷く。

「もう一人の内弟子ホシノは、おめえも知ってるだろうが、頭直属の暗殺部隊の一員だ。俺が言うのも何だが、ぶち切れてる男だ。用が無い時は近寄らないようにしろ」

これに対しても、無言で頷く。

「この屋敷には、俺とヤマセとホシノの三人だけだ。嫌いなんで、端女（はしため）は置いてない。家事や雑用は、今までは、ヤマセが通いのガキどもに手伝わせてやってた。これからはおまえの仕事の一部だ。きりきり働けよ」

やはり、無言のまま、ジライが頷く。

こんな調子がずっと続いた。

何か……

話しているうちに……

だんだん苛々してきた。

何を言ってもジライは頷くだけだ。

剣の才を認められて嬉しいとか、内弟子に昇格できて嬉しいとか、異形の館から出られて嬉しいとか、人間らしい感情は、一切ない。

ぼんやりした顔で、頷くだけ……

生気なさすぎだ。

名刀の為とはいえ、剣で身を立てる気もない、うすのろを高い金で買ったのかと思うと……

腹が立って……

頭に血がのぼって……

で、俺はキれたらしい。

気づいた時には、俺はヤマセに羽交い絞めにされていた。大柄でガタイのいい俺を、ひょろ長のヤマセがよく押さえられたもんだ。

「師匠(せんせい)～、子供相手に、空を飛べとか、地面に潜れとか、何むちゃ言ってるんですか～」

「このガキ、頷きやがったんだ！　俺がやれって命じたら、頷いたんだ！　できもしねえのに！」

「だからって、杯投(さかずき)げつけて、額を割る事ないでしょうが」

そう言われて初めて俺は……

伸びすぎの右前髪を掻きあげ、ジライが額を押させてうつむいているのに気づいた。膳も蹴っ飛ばしたみたいで、銚子も皿も中身も畳の上に散らばっている。

又、俺は……やっちまったらしい。理性を失って暴力に走るのは、俺の悪い癖だ。酒が入ると、特にやっちまいやすい。

けど、それも、これも……

このガキが悪い！　何でもかんでも頷く、このガキが！

「……申し訳ございません……やります……」

細い声が聞こえた。それがジライの声だと気づくまで数秒かかった。半年以上、こいつに剣を教えてきたが、まともに声を聞いたのは、初めてだった。

「今はできないことも、必ず、覚えます……どうか、お怒りを静めください……愚かな白子に道をお示しください……お心にかないますよう、できるようになるまで励み、必ずやお望みをかなえます……」

俺は顔をしかめ、ヤマセと顔を合わせた。

ヤマセも気分悪そうに、眉根を寄せている。

ジライの台詞には反吐が出そうだった。何処の馬鹿だ、ガキにこんな口上を覚えさせた奴は。

この白子は、命じられた事を命じられた通りにやるよう仕込まれているのだ。それが実行不可能な命令であっても、反抗は許されなかったのだろう。

「へっ！　何、ムキになってやがる、バーカ。冗談だよ、冗談に決まってるだろ」

ヤマセの手をふりほどき、俺はジライの顎を取って顔をあげさせた。

「手ェ、どけな」

ジライは言われた通り、傷口から手をどけた。流れ出た血は多いが、さほど深い傷じゃねえ。痕も残らないだろう。

傷よりも、ジライの目が気になった。俺への恐れも敬意も媚びもない、何の感情もこもっていない目で俺を見つめている。

胸糞悪かった……

「……怪我させて悪かったな。話は終わりだ。ヤマセに手当てしてもらって部屋に案内してもらえ。今日はもう寝ちまっていいぞ」

「はい……」

「畳部屋を一人で使えるんだ。ちったぁ、嬉しそうな顔をしやがれ。どーせ、今まで土間か廊下で寝起きしてたんだろ？」

「え？」

ほんの少し、ジライの顔が変わった。まあ、無表情は無表情なんだが。どこがどう違うってはっきりは言えねえが、とまどっているように見えた。

「畳部屋に一人……？」

「ああ、言ったろ、この屋敷、おまえを合わせても四人しかいねえんだよ。部屋はクソ余ってる。下忍のくせに一人部屋なんざ、夢みたいだろ？　ありがたく使え、ガキ」

「一人……？」

ジライが声を震えさせながら尋ねてきた。

「……一人で寝ていいの？」
「あん？　一人じゃ眠れないのか？　誰か一緒に寝てもらいたいのか？」
ジライは急いでかぶりを振った。
「一人で寝たい……」
「じゃ、そうしろ。ヤマセ、後は頼んだ」
「はい。師匠、これどうぞ。もう大人なんだから、ご自分の後始末ぐらい、ちゃんとしてくださいね」
ヤマセがにっこり笑って、雑巾を手渡しやがった。何時の間に持って来たんだ？　いや、持って来たんなら拭いてから出てけよ、クソ弟子。
それでは♪　と、妙にご機嫌な顔でヤマセはジライを連れて部屋を出て行った。
引っくり返った膳の始末なんざ、弟子の仕事だ。一応、酒が染み込んだ畳の上には雑巾を置いといた。が、後は知らねえ。転がっていたスルメを拾って、齧りついた。
で、気づいた。ヤマセがホクホクしている理由に。
ヤマセは稚児趣味だ。最初、剣術教室で、ジライに目をつけたのも、多分、ジライの面（ツラ）が良かったせいだ。まあ、すぐに剣術の才もあると見抜き、俺にご注進してきたわけだが。
そういや、ヤマセもホシノも通いの弟子どもも、ジライをしょっちゅう物陰に連れ込んでいた。あんなウスノロそうなガキの何処がいいんだか、俺にゃわからんが……やっぱ面（ツラ）か？
里じゃ、造作の良い子供は諜報部隊預かりとなる。潜入潜伏活動要員として、里の他の連中から隔離された場所で育てられる。
つまり、諜報部隊以外の奴は、美童に手を出すどころか、その顔を拝む事すらできないのだ。見目の良い子供は里じゃ高嶺の花だ。だから、あいつら、手近なジライを使うのだろう。
けど……俺にはよくわからねえ。色事ってのは、男女でやるもんだ。ジライと犯るぐらいなら端女と遊んだ方がマシじゃねえか？

端女に誰かの種がつきゃ、里の人間が一人増える。精液を無駄にするヤマセ達の気持ちは、俺には一生わかりそうになかった。

「でれでれ鼻の下伸ばしてやがったしなあ、怪我の治療だけじゃ終わらねえな……ったく、酒臭え」

その時、俺が気にしていたのは、何時、ヤマセが戻ってくるか？だけだった。

「……とっとと戻って、部屋を片付けやがれ」

ジライは家事が下手だった。と、いうか、家事全般の手順をまるで知らなかったそうだ。前の家じゃ仕込まれなかったらしい。端女がいねえこの家じゃ、家事は弟子どもの仕事だ。叩き込めと、ヤマセに命じたところ、ジライは三日で使い物になるようになった。

料理を除いてだが。

ヤマセによると、ジライは味覚音痴だそうだ。

奴に味付けさせた味噌汁は味噌の塊、漬物は塩の塊、そのくせ生煮えの煮物にはダシが入っていなかったそうだ。その人間の食い物と思えない料理をジライは表情も変えずに食ったのだと、ヤマセはこぼしていた。

一ヶ月後、どうにか人並みの料理の腕となった。が、それは奴の味覚がまともになったのではなく、料理ごとのヤマセの味付けをそのまんま暗記したに過ぎなかった。

家事の合間に、剣や忍術の修行をさせた。だが、俺はほとんど指導してやらず、ヤマセに任せた。俺には外向きの仕事が山ほどあるし、里にいる時は通いの弟子どもの相手もしてやらにゃいけねえ。好き勝手やってるわりにゃ真面目にお仕事してたんで、忙しかったのだ。ガキなんぞに構ってる暇はなかった。

ジライは無口で、居るのか居ねえのかよくわからねえガキだった。空気に溶け込む能力は忍としちゃ将来有望って事なんだろうが、俺は好かなかった。

気が向いた時に、刀を持って来させ、素振りをさせた。見るたんびに、切れ味のよさそうな華麗な美しい刃に、うっとりしちまう。馬鹿ガキも、しょうがねえから飼ってやろうかって気になる。

それ以外じゃ、俺にとって、うっとーしいだけの存在（モノ）だったが。

晩酌の時間、ジライは膳を運んできちゃ、障子の前に控えてちょこんと座っていた。ご主人様を待つ犬みたいに、俺のお言葉を待っているのだ。

側に居られると酒がマズくなるんで、俺はいつも、

「もういい。おめえは部屋に帰って寝ちまいな」

と、さっさと追い払っていた。

その度に、ジライはでっかい目で、探るように俺を見やがった。

「……もうご用はないんですか？」

「ねえよ」

「……」

何か言いたそうに、微かに眉や口元を動かす。が、何も言わない。

深々と頭を下げて、ジライは自分の部屋に戻って行く。

無口で無表情のガキは、本当にうざったかった。

内弟子にしたものの、俺はずっとジライを放っておいた。もうちょっとデカくなってから、本格的に剣を教えりゃいいやと思ってた。

あの日までは……

桜花　2話

ジライを内弟子にして二ヶ月経った頃の事だった。
外の仕事が思いの外に早く終わり、俺は予定よりも三日早く夜半に里に戻った。
いつもは仕事の後、外で二、三日、趣味の窃盗をする俺だが、目星をつけてた評判の名刀が遠目にも大ハズレとわかったんで、めずらぁしく真っ直ぐ帰って来たんだ。
帰宅した俺を、玄関で三つ指ついてヤマセとホシノが出迎える。
師匠のお出迎えは、弟子の義務だ。しかし、一匹足りない。
ガキはおネンネしている時間ではあったが、真冬の寒空の下、疲れて帰ってきた師匠を無視してぬくい布団の中で寝こけてるなんざ許せねえ。ジライを叩き起こせと、俺はヤマセに命じた。
ヤマセはいつも通りのへらへら面(ツラ)で、
「ジライは夕方から発熱して寝込んでます。休ませないと明日の稽古に障りますんで、勘弁してやってください」
と、言い、女房みたいに、風呂にします？　それとも軽く何かこしらえましょうか？　燗をつけましょうか？　なんて聞いてきた。
ジライが病と聞いて、俺ぁ、気まぐれを起こした。いつもはほったらかしだから、たまにゃあ師匠らしい事してやろうと、その程度の思いつきだ。
「んじゃ、見舞うか」
そう言って廊下を歩き出した俺の前に、ヤマセが回りこむ。
「見舞いなんて大袈裟ですよ。熱ってたってそれほど高くありません。まだ子供なんで、体が出来てないだけですよ」
「何だ、てぇしたことねえのか」
「はい」
「なら、説教だ。動けるのに師匠のご帰宅に寝こけてるんなら、ビシッと躾けてやらにゃあな」

そのままズンズン進んで行こうとする俺の左腕を、ヤマセが掴んだ。
「師匠(せんせい)～、放っといてあげてくださいよ。子供は寝るのが仕事なんだから。お説教なら明日、起きてからでもいいでしょ？」
「……」
俺はヤマセをジロリと睨んだ。
「おめえ、なんか変だな？」
「え？　そうですか？」
「何で俺を足止めする？」
「足止めぇ？　嫌だなあ、人聞きの悪いこと言わないでくださいよ」
そこで、癇に障る笑い声が響いた。ホシノだった。俺達の後ろについてきた男は、口の端を歪めて暗い笑みをつくっていた。
「師匠(せんせい)、ジライは部屋に居ませんよ」
「ホシノ！」
ヤマセが弟弟子(おとうとでし)を睨みつけた。だが、己の剣の才に奢り兄弟子を見下しているホシノは、お構いなしに言葉を続けた。
「師匠、ジライはキリュウの寝所に居ます。兄弟子が、あいつをキリュウに売ったんですよ」
「売っただぁ？」
「いえ、そういうわけではなく……」
俺の剣幕に驚き、ヤマセが奴らしくもなくしどろもどろに弁解する。
「キリュウ様が是非にと望まれたので……ジライも否とも言わなかったので……今宵一晩、お相手を務めて来いと……送り出した次第で……」
キリュウは頭領の弟、上忍だ。中忍のヤマセは、命令に否と言えない立場ではあったが……
「今宵一晩だけぇ？」
ホシノが高らかに声をあげて笑った。
「『今宵一晩だけ』が、もう何晩続いているんですかねえ、兄弟子

？」
「ホシノ！」
「師匠が里から離れる度に、ジライは毎晩、あっちこっちの寝所に行ってますよ。兄弟子の命令で、ね。先方からの謝礼で、兄弟子の懐はさぞ膨らんでいるでしょうよ」
俺はヤマセを睨んだ。ヤマセは完全にビビリまくっている……
「今の話……本当か、ヤマセ？」
「師匠……私は……」
「おめえ、俺に内緒でそんな副業をしてたのか？」
「いえ、その……」
「俺ぁ、ジライに剣を教えろとおめえに命じたんだ。男娼にしろとは言ってねえぞ」
「違います！　私が仕立てたわけじゃない！」
「ほう？」
「もともと、あいつはそうだったんです！　異形の館に飼われていた頃から、お声がかかりゃ何処にも行く男娼まがいの事をしてたんです！」
「で？」
「……師匠があいつを内弟子にひきとられたので……それまでのお得意様が……師匠がその手のことお嫌いだって、ご存じだったんで……それで……私に手引きを頼んでこられたのです……師匠の不在中、ジライを貸すように、と」
「俺が嫌いな『その手のこと』って何だよ？　具体的に言え」
ヤマセはぐっと喉をつまらせてから、顔中を歪めた。
「……色事です」
「ふぅ～ん」
俺はボリボリと頭を掻いた。
「なるほど。無茶ふってきたのが上忍なら、おめえは嫌とは言えねえよな」
「そうです！　そうなんです！」

「けどなあ」
俺は張り手でヤマセを吹き飛ばした。
「ぐぅっ！」
廊下に倒れたヤマセ。その腹を何度も蹴り飛ばした。
「てめえ、俺の弟子じゃなかったのか！　キリュウ達に無理難題ふっかけられたんなら、俺に報告するのが筋だろうが！」
「ぐぇ」
うめいていたヤマセの胸倉をつかみ、上半身を起こさせた。
「いつから売ってる？」
「……あいつが、ここに来て八日後からです」
「俺が里を出る度に、売ってるのか？」
「……はい」
「どういう仕組みだ？　どこぞから声がかかってから売るのか？」
「最初のうちはそうでしたが……途中から……事前に希望を伺っておいて……師匠が里を離れると決められた日から、私から先方に連絡をとり……私が期日を決めてました」
「客は上忍だけなんだな？」
「いえ……」
苦痛に顔を歪ませながら、ヤマセが言う。
「金を積んだ中忍にも……売ってました」
俺は胸倉をつかんだまま、ヤマセの左頬をぶん殴った。
「胸糞悪い！　弟弟子の体を売るのが兄弟子の役目か？　あん？　そう思ってるんなら……残念だが、てめえとは今日が限りだ。破門する」
「……師匠」
「俺はな……おめえの小狡いところも含めて生意気な性格が好きだ。出来のいい頭も気に入っている。剣の才はそれほどじゃねえが、おめえは人に教えるのがうまい。里で後人の指導に当たるにはうってつけだ。いずれはこの道場、おめえに任せようと思っていた。だがな……」

「……」
「俺は仲間をてめえの道具としか思わねえクズは、大嫌ぇなんだよ！　ジライは俺の弟子だ！　おめえにとっちゃ弟同然のはずだ！　あいつが色狂いの白痴でも、おめえは守ってやる立場だろうが！　売って私腹を肥やすたぁ、どういう了見だ！」
「……」
ヤマセは真っ白になった顔をぶるぶると震わせた。
「すみません……師匠……」
「あん？　何がだ？」
「私が間違っていました……」
「何が？」
「売ったのは間違ってました……あいつを弟分として認めてなかった……改めます……ジライにも謝ります……それと、師匠……内緒で勝手した事も謝ります……手に余る事になる前に……師匠の顔を潰さずに済むよう……包み隠さず何でも報告します……許してください」
「へ！　二度目はねえぞ！」
「……はい」
「下がれ、今はてめえの顔は見たくねえ」
俺はヤマセを突き放した。よろよろと奴は立ち上がる。
「手当てはいるか？」
「……自分でできます。申し訳ありませんでした」
ヤマセは体をひきずるようにして、自分の部屋へと戻って行った。
「兄弟子がジライを売りたくなったのも、わからないでもありませんがね」
両腕を組んだホシノがボソボソと呟く。
「通いの弟子だった頃から、ジライの奴、誘われれば誰のでもくわえてましたから。あいつ、年のわりにはうまいんですよ。里一の房中術の使い手カサギの仕込みだし、数をこなしてますからね」
「……ホシノ」

「放っておいたって、師匠の不在中、あいつ誰かの寝所に行ってますよ。タダで犯らせるぐらいなら、金品貰って儲けた方が良かないですか？」

俺はホシノをジロリと睨んだ。

「てめえは、何時から、ヤマセの副業に気づいていた」

「今日、気づいたんですよ。今日に決まってるでしょ？」

ホシノは歪んだ笑みを見せた。

「俺は師匠の教えに忠実ですから。兄弟子の間違いに気づいてすぐにお知らせしました」

「下手な嘘つくんじゃねえ！」

「むろん、そうじゃないかって、前々から思ってはいましたよ。けど、俺は屋敷に居ない事の方が多いですし……確証がなかったんです。推測だけでお話できるような内容じゃなかったんで、ね」

ニヤニヤとホシノは笑ってやがる。この嘘つきめ！

「確証なんざいらねえよ。次からは、兄弟子がどっかおかしいと思ったら、すぐに俺に報告しろ。いいな」

「承知」

ジライとは違った意味で、ホシノはムカつく野郎だ。自分の殻にこもりやがって誰ともまともに会話しないくせに、たまに口を開きゃ皮肉しか言わねえ。今日俺にジライの事を教えたのだって、忠義心からでも、同情からでもない。このタイミングで言えば、短気な俺はヤマセをぶん殴る。だから、教えたんだ。俺は知ってる。こいつは、苦痛にのたうちまわる奴を見るのが好きなんだ。一番、好きなのは死体を見る事で、ほっとくと何時間でも死体の側に居る。悪戯するとかそんなんじゃなく、ただ見てる。ガキの頃からそうなんだ。その異常ぶりは、暗殺部隊の中でも浮いているらしい。抜きんでた実力のせいで、煙たがられながらも、部隊で重宝されているようだが。

「……ジライが戻ったら、俺の部屋に来させろ」

「はい、師匠」

俺はホシノの顔を見ないようにして、その場を離れた。

ジライが戻った時には、夜空は明るくなっていた。

「……ただ今、戻りました」

障子を閉め、ジライがお辞儀をする。忍装束に覆面姿だ。そういやあ、こいつ皮膚が弱いんで、直射日光が浴びられないんだった。長時間、日の光の下にいたらヒブクレができちまうとか。だから、夜だろうが、外出時には必ず覆面をつけるんだっけな。

「覆面外して、面（ツラ）を見せな」

吐く息が白い。

肌襦袢の上に綿入れ半纏じゃ寒かったが、ぶるぶる震えるのもみっともねえ。

寝床であぐらをかいている俺に頷きを返し、ジライは命令に従った。

白髪と痩せた白い顔。何処を見てるんだかわからねえ、うつろな目が露となる。

俺はクンと鼻を鳴らした。真新しい匂いがする……

「火鉢に炭を入れろ」

俺の命令にジライが頷く。

「で、終わったら脱げ。全部だ」

その命令にもジライは頷くだけだった。

俺の枕元の火鉢に炭を置くと、ジライは障子の前に戻ろうとした。

「てめえの為につけたんだよ、そこで脱げ」

俺の言葉に従い、ジライは火鉢のそばで忍者装束を解いてゆく。

まるでただ着替えるみたいに、さっさと。

上衣を半ばまで脱いだだけで、わかった。

「……やっぱりな」

俺はジライの白い体をじろじろと眺めた。手首にはくっきりと縄の痕が残っていた。が、前はそれほどでもない。火傷の痕が幾つかあるだけだ。

ジライは全部脱ぎ、脱いだものをきちんと畳んで畳に置いた。その顔はいつもと同じ無表情。

「背中をこっちに向けろ」

すぐにジライが命令に従う。吊るされ、鞭打たれたことは一目でわかる。赤く腫れ上がった背中には生々しい鞭の痕が幾つも刻まれ、血がにじんでいた。

キリュウは、血に飢えた本物のSだ。性的な嗜好で暴力を好む輩とは違う。鞭や刃物で獲物を嬲り殺すのが趣味ってな危ない奴で、怒りに任せて何人も部下を責め殺している。反吐がでるほどの、最低野郎だ。拷問のエキスパートなんだが……俺は大嫌ぇだ。いつもうすらわらいを浮かべてるあの顔を見ると、ぶん殴りたくなる。頭の弟じゃなきゃ……上忍じゃなきゃ……ぶっ殺したっていいと思う。

「背中の傷……キリュウがやったんだな？」

「……」

「答えろ、キリュウの仕業なんだろ？」

「……」

ジライは答えない。背筋を伸ばし、俺に背中を見せているだけだ。つまり、口止めされてるわけだ。

俺には何も言うな、と。その命令を忠実に果たしてるんだ。

「もういい。こっち向け、ジライ」

白い顔が振り返り、姿勢を直す。何の感情も浮かんでいない顔が、気味が悪かった。俺を恐れてもいない。責められてるのに動じてもいない。背中がそれじゃ脱ぐのだって痛かったろうに、苦痛の表情すら浮かべなかった。

こいつの頭の中は……死んでるんだ。

「ジライ、よく聞け。おめえは、俺の弟子だ。そうだよな？　そうだってわかってるのなら頷け」

ジライは小さく頷いた。
「おめえは、俺の命令に従わなきゃいけねえ。弟子は師匠の言葉に従うもんだ。そうだろ？」
ジライは、又、頷いた。
「俺は、おめえを、頭から買ったんだ。おめえは俺のもんだ。他のどいつが何言おうが、聞き流せ。おめえは俺の言葉に従ってりゃいいんだよ」
「……」
「わかんねえか？　命令にはな、優先順位ってもんがあるんだよ。この里に住む以上、おめえの一のご主人様は頭（かしら）だ。そいつは間違いない。で、第二のご主人様はこの俺よ。俺ぁ、下忍だが、頭より『上忍扱い』のお墨つきをもらっている。俺の上には頭しかいねえ。俺に命令できる人間は頭しか居ないんだ」
「……」
「いいか、ジライ、キリュウは上忍だが、おめえの上司じゃねえ。あいつが何言おうが、俺の命令に反することなら無視していいんだよ。あいつの言葉より、俺の命令のが優先されるんだ。わかるか？」
「……」
ジライは小さく頷いた。
「教えろ、その傷、キリュウがやったんだな？」
「……」
ためらいがちに、小さく、ジライは頷いた。
「あのクサレS！」
俺は拳で自分の腿を殴った。
「俺の持ち物を傷モノにしやがって！」
「……お見苦しい姿で、申し訳ありません……」
「あん？」
ジライは何処を見てるんだかわかんねえボーッとした顔のままだ
……
「明日には綺麗になります……今夜のキリュウ様のお遊びの後、大

魔王教徒の神官に傷を消してもらう事になっています……今日一日だけ、この汚い姿をお許しください……」

「今夜の遊びってのは何だ？」

「キリュウ様の二日にわたるお遊びにおつきあいするよう、兄弟子に言われています……昨晩の趣向は鞭と炙り……今夜は刃物。更に傷が増え、皮膚がはがされ、みっともない姿となりますが……帰る前には怪我は消してもらえます。師匠の持ち物にふさわしい姿に戻れます。どうか……今日一日だけご容赦ください」

「あのクソ野郎……」

俺は寝床から立ち上がり、ジライの両肩をがっしりと掴んだ。

「胸糞悪い！　断れ！」

「え？」

「ンな変態遊びに付き合うことはねえ、断っちまえ！」

「……断る？」

大きな黒の瞳を開き、ジッと俺を見つめるジライ。

「遊びを断る……？」

「アン？　嫌なのか、遊びは納得ずくで、おめえも楽しんでるから、今夜も行きたいのか？　だったら、止めねえよ、行けよ。行って、二度と帰ってくるな！　ンな変態はいらねえ！　てめえなんかキリュウに売ってやる！」

「……行きたくない」

「なら、行くな！」

「……良いの？」

体を小刻みに揺らし、真っ直ぐにジライが俺を見つめている。

「断っても……良いの？」

顔はあいかわらず無表情だが……

でっかい黒目から、一筋涙がこぼれ落ちた。

「断っても……仕置きされない？」

「……」

俺はジライの小さな痩せた体を腕に抱いた。本当は背中を抱いて

やりたかったが、腫れあがったひどい有様だったんで、肩を抱くにとどめた。
「ああ、おめえは俺のモノだ。俺の許可がなきゃ、誰も手出しできねえ。仕置きなんざ、させねえよ」
「……」
ジライの頬をポロポロと涙が伝わっていくのが、わかった。ジライは体を震わせ、俺にしがみついてきた。

こいつにも……感情はあったんだ。

ジライをうつぶせに布団に寝かせ、背中の手当てをしてやった。ともかく、全部、話を聞く事にした。
「俺は嘘つきは嫌いだ、隠し事されんのも嫌いだ、戦わねえで逃げる奴も嫌いだ、奇麗事ばっか言って何もしねえ奴も嫌いだ、仲間を仲間と思わねえクズも嫌いだ、てめえで考えねえで人の言いなりになってるだけの能無しも嫌いだ、それから……ああ、いいや、思いついたら、又、教えてやる。ともかく、俺は、嫌いなモノがいっぱいある。おめえは、俺の持ち物になったんだから、俺を苛々させるような奴にはなるな。わかったな?」
ジライが小さく頷く。
「じゃ、全部話せ。今までどうやって生きてきたか。俺は部下の事情は把握しときたいんだ。隠し事はするなよ」

ジライは何度もつっかえ、首をかしげ、話しづらそうに自分の過去を語った。
『仕込まれた下僕の言葉』以外、敬語がうまく使えないってんで、素の口調でいいから話せと先を促した。

口下手のジライから聞いた話は……

嫌んなるくらい、気色の悪い話だった。

この里じゃ、どの子供も、ろくな育てられ方をしない。くノ一の子、孕んだ端女が産んだ子供、さらってきた子供は、いっしょくたに保育所につっこまれ、物心つく前から体質を改善させられ、肉体鍛錬をさせられ、知識を叩き込まれる。ひよわだったりお頭が足りなかったりした子供は、どんどん処分されてゆく。

六つになってからは、買い手がついた奴は新しい家で下忍となるよう更に仕込まれ、売れなかった奴等は養成所に入れられる。どっちにしろ、生命剥奪権を大人に握られての教育を受けるんだ。

この里のガキどもは、みんな、不幸だ。ジライだけが迫害されているわけじゃない。しかし……

保育所では見目のいい子供は特別待遇でいい目をみ、次に男、その次が女、異形はその頃から最下層の者として扱われる。異形でありながら美形のジライは、そんなガキどもの中で複雑な位置に居た。大人も扱いに困り、授業にあわせ、美しい子供のグループと異形のグループの間を行ったり来たりさせたみたいだ。ジライは両グループから仲間はずれにされ、一人ぼっちで暮らしていたらしい。

異形の館に引き取られてからは、義兄達の性的玩具にされ、ろくに忍術も教えてもらえず飼い殺しの状態だったようだ。逆らえば仕置きで半殺しの目に合わされるので、反抗心を押さえ、ひたすら従順な奴隷となるよう心がけていたと、そういう意味の事をジライは言った。

唯一、幸いだったのは、房中術の師がカサギだった事だろう。諜報部隊でも重鎮のあの男はこの里の人間にしちゃまともな男で、ガキの体がきちんと成長しない限り、誰が何と言おうが本番ＯＫの許可は出さない。房中術の秘術を使って仕込めば五つのガキの尻の穴でもアレが挿入可能な大きさに広がるらしいが、異形で美童のジラ

イは、将来、どっかデカい所（たとえば、インディラ忍者の巣のインディラの王宮や寺院）で使い道があると踏んで無茶使いをさせないよう異形の館に通達していた。

中忍のカサギを恐れ、異形どもはジライを『おしゃぶり専門の玩具』として扱ったようだ。

で、美童好きの中忍や上忍から誘いがかかると、異形どもの命令で、『おしゃぶり専門』の男娼としてそいつら寝所に行かなきゃいけなかったらしい。

が、ジライは呼ばれるのは嫌ではなかったと言った。

「異形の館には、入れ代わりに十人以上、大人達が居たもの。一晩で、一人か多くても三人を相手にするだけで済んだから……誰かに呼ばれるのは好きだった。楽だったから……。変な趣味の人が多かったけど」

「キリュウとか？」

「……前はキリュウ様に呼ばれるのは好きだったんだ。オレを裸にして舐め回すだけで、くわえろとか命令しなかったし……嫌な事しなかったし……オレの事……かわいいって言ってくれたし」

「かわいい？　おめえ、野郎にかわいいって言われて嬉しいのか？」

「うん……キリュウ様は、一度も、オレの事、醜いってののしらないんだ。気持ち悪いとか、おぞましいとか、見てるだけで吐き気がするとか……そんな風に言わなかったんだ」

「……誰が、おまえにそんな事、言った？」

「みんな……言うよ、オレは醜いって……ジジイみたいな髪の気持ち悪いガキだって……」

「白いだけじゃねえか、くっだらねえ。おめえ、とびっきりかわいい顔に生まれてきてるんだぞ、美少女もうらやむような美童にな」

「でも、白いもの……」

そう言ってジライがションボリと頭を下げる。周りから『醜い』って言われ続けたせいで、本人まで自分はそうなのだと思い込んでいるのだ。

「やさしい言葉をかけてくれるから、キリュウが好きだったのか？」
「……お菓子もくれた」
「菓子？」
「最初が干菓子で、次が饅頭で、三度目が羊羹……オレ、それまで甘い物、食べた事なかったんだ。すごく美味しかった。だから、四度目に呼びだされた時も、喜んで行ったんだ。キリュウ様がわしが好きかって聞くから頷いたんだ……そしたら、キリュウ様、嬉しそうに笑って、オレの愛を確かめるんだって言って……縛られて吊るされて……鞭で……。やめてってお願いしたり、泣くと、キリュウ様が怒るんだ。わしへの愛があれば我慢できるはずだって」
「あの変態！」
「それに、殴るのはオレのためなんだって……愛の教育だって。忍たる者、何時、いかなる時も感情に溺れてはいけないから、痛がったりしちゃいけないんだ……何も感じちゃいけないんだって……言われた」
「な、わけねえだろうが！」
「オレの白い肌には血が似合うって言ってた……綺麗だって、キリュウ様が傷口を舐め回して……そのうち、オレ、気絶しちゃって……目覚めたら布団の中に居た。体中が痛んだけど、どこにも傷はなかった。今なら、わかる。オレが寝てる間に、大魔王教徒の神官の治癒魔法でもとどおりの見た目にされたんだって。だけど、その時はわけわかんなかった。震えてたらキリュウ様が笑いながら言ったんだ、怖い夢でも見たのかね？　かわいそうに、大好きなお菓子でも食べて落ち着きなさいって……見た事もない西国風のお菓子をくれたんだ。でも……何も味がしなかった。行く度にキリュウ様は今もお菓子をくださるけれど……甘くも何ともない、ただの塊なんだ」
　こいつの味覚障害の原因はキリュウだったのか。
　慕いかけていた相手に折檻されたショックと、『何も感じるな』と言われた事が暗示になったのが原因ってところか。
　ジライは逐一克明に誰とどんな遊びをしてきたのか、どんな会話

をしたのかを俺に話した。
何でも、何時何処で誰と犯ったかしつこく聞いてくる嫌な義兄が居たそうだ。答えられねえと、そいつに仕置きされるんで、情事を可能な限り覚えるようにしてきたんだそうだ。
道場に通い始めた時は、来るのが嫌でしょうがなかったとジライは言った。
奉仕をしなきゃいけない人間が増えたからだ。兄弟子達の性的な要求に対し、ジライは全部、応えたそうだ。拒めるとは知らなかったようだ（まあ、嫌って言ったところで無理やりやらせる奴もいたろうが）。
だが、内弟子となれたのは嬉しかったらしい。ここには、夜の相手をしろって要求する奴がヤマセとホシノの二人しかいないし、その上、自分の部屋があって、夜、一人で眠れる。酒臭い息を吹きかけられる事も、ごつごつとした気持ちの悪い指で撫でられることもなく、一晩中遊びにつきあえと命じる大人もいない。一人で眠れるのが嬉しいと……感情が麻痺しちまった無表情でジライは言った。
剣術は好きか？　と、聞くと、ジライは首をかしげ、わからないと答えた。
「ここは剣の修行をする場所だ。おめえの避難所じゃねえんだよ。いいか、ジライ、おめえは強くなれ、俺の為に、だ」
「師匠の為……？」
「そうだ。俺ぁ、おめえに住む場所を与え、エサもやる。スケベどもの誘いも、できるだけ断ってやる。そのうち、剣や忍術も教えてやる。どうだ、有難いだろう？」
ジライは頷いた。
「なら、恩を返せ。おめえは強くなれ。そんじょそこらの強さじゃ駄目だ。超一流の剣の使い手になれ。あの名刀にふさわしい人間になって、俺の手足となって働け」
ジライは頷いた。
「おめえはご主人様の俺の期待に応える為に生きるんだ、いいな、

わかったな？」

桜花　3話

「あいつが内弟子になってから、道場の裏で二回、台所で三回、納戸で一回、ジライの部屋で五回、おめえの部屋で二回、可愛がってやったんだって？」

「師匠（せんせい）～、もう勘弁してくださいよ」

ヤマセは情けない顔で、頭を下げた。

「私は心を入れ替えました。兄弟子の立場を笠に着て、迫ったりしません。上忍からのお誘いも丁重にお断りします。だから、もう許してくださいよぉ～」

「あいつなあ、日付も覚えてるんだぜ。おめえが何って言って口説いたか、何処をどう触ったのかも、全部、覚えてた」

「師匠～」

「通いで道場に来てた頃の事も克明に覚えてた。おめえやホシノ、兄弟子達、誰のを何時何処でしゃぶったか教えてくれたぜ。日付や経緯だけじゃねえ、わかる限りの相手の身体的特徴や癖、そん時の会話も覚えてた」

「止めてくださいよ、そんな話」

「馬鹿。おめえ、この話、聞いて何とも思わねえのかよ」

「へ？」

「あいつはなあ」

俺はボリボリと頭を掻いた。

「ものすごく記憶力がある。鍛えりゃ、諜報員として充分、使い物になる」

「あ！」

それでこんな話をしてるのかと、ヤマセはポンと手を叩いた。

「おめえ、あいつのそっち方面の才も伸ばしてやれ」

「はい」

「受講料取っていいぜ。あいつの勉強を妨げない時間なら、手を出

してもいいぜ」
「へ？」
ヤマセはきょとんとした顔をした。
「……良いんですか？」
「ああ」
俺は頷いた。
「あいつはあの外見だ。俺もいつも里に居るわけじゃねえし……どうしたって助平な大人どもにいたぶられる運命なのさ」
「まあ……そうなると思います。私じゃ庇ってやるのも限度がありますしね」
「だから、犯らせろと言ってきた奴にゃあ、師匠の許可を貰って欲しいと頼めと教えた。自分は師匠の所有物だから勝手な真似はできないんだと。俺をおっかねえと思ってる奴は、それで引き下がる」
「はあ」
「けど、いくらお墨つきがあったって、俺ぁ、下忍だ。俺なんぞ鼻にもかけねえ、お偉い方々もこの里には居る。そういう奴等の誘いには応じとけと言っといた」
「あら」
「だって、そうだろ？　里の中上忍を怒らせるのは、後々のことを考えりゃマズい。馬鹿はある程度おだてて機嫌とって、敵に回らせねえ。それが忍の処世術ってもんだ」
「たしかに」
「けど、タダで犯らせる事はねえ。交換条件として技を教われと命じた」
「技を？」
「ああ、俺ものぐさな上司だ。教える手間が省ければ、楽ができるって喜ぶような奴だ。技を教わって寝る分には後で師匠に怒られずにすむから教えてくださいと、助平に媚びろと言っといた」
「……つまり、ジライを育ててくれる人間に対しては、師匠は寛大になって、ジライに手を出すのも目こぼすという設定なんですね」

「そうだ」
「なるほど。どうせ犯られるのなら、相手を利用してやれって事ですね」
「……望まない従属を強いられた場合」
俺は顔を歪めた。
「それがいつ終わるかわからねえ不安と、絶対者に何もできない無力感ほどやりきれないもんはねえ」
昔の記憶がよみがえりかける。あの頃、俺には何もなかった……ただ、ただ、支配されるだけだった。あんな屈辱の日々、二度と、御免だ。
「反抗できず無理やり犯されるんじゃねえ。自分を育てる為に相手を利用し、肥やしにする。そう思えば嫌な事も耐えられるし、それで、本当に強くなっちまえば弱者の支配なんざ受けずにすむようになる。簡単な話だ、強くなりゃ、いいんだよ」
「師匠……」
「その説明でジライも納得した。だから、遠慮はいらねえ。暗記術や諜報術を教える時にゃ、あいつに手を出していいぞ」
「……」
ヤマセはしばらく無言で俺を見つめ、それから口元に笑みを浮かべた。
「……師匠に拾われて本当に良かった」
「あん？」
「拾われてなきゃ、私みたいな中途半端な実力の忍者、とっくの昔にあの世に逝ってます。師匠は一度拾ったものは、とことん育ててくれる。感謝してます」
「へ！　おだてたって何も出ねえよ！　俺ぁ、自分が楽したいから部下を育ててるだけだ」
「部下の方も、あなたの庇護下で好きに生きてるんだからお互い様です」
ニコニコとヤマセが笑う。

「ジライには色事ぬきで、いろいろ教えてやりますよ。兄弟子としてね。あいつが、ど～～～～しても、礼がしたいって身を投げ出してくるのなら、まあ、拒みませんけど」

ヤマセが小狡く笑う。

「美童には目がありませんから」

「……あいつ、外見の劣等感強いぜ。醜い白子ってさんざんのののしられてきたらしい」

「白子でも何でも可愛いのにねえ」

「落としたきゃ、褒めて褒めて褒めまくるんだな。可愛いって褒めてやりゃ、おめえとも寝てくれるかもよ」

「だと、良いですねえ。事あるごとに言ってみることにします」

ジライは、ヤマセから暗記術や諜報術それに泳法（直射日光を浴びられないジライは泳ぎの経験がなくカナヅチだったらしい。それに気づいたヤマセが夜明け前や夕方、時には夜にジライを川に連れてって泳ぎ方を教えたのだ）を、ホシノからは暗殺術を学んだ。

手裏剣、暗器、毒薬、忍法、体術、拷問、房中術……忍者として生き延びてきた野郎どもは、必ず何らかの得意技を持っていた。頭の良いジライは、寝る相手から技を教わり次々に吸収していった。

俺はしょっちゅうジライに聞いた

剣術はおもしろくなったか？

生きているのが、ちったぁ楽しくなったか？と。

その度にジライは神妙な顔で答えた。

『剣術は好きです。早く立派な剣士になって、師匠の為に働きます』

と。

「もうすぐ一年ですね……」
酒の相手をさせていたヤマセがそう呟いた時、俺には何が一年なのかわからなかった。ヤマセは不満そうに唇を尖らせた。
「師匠がジライを引き取ってから、一年、経つんですよ」
「ああ……そうか、そうだな」
ヤマセはずっとジライに剣や基本忍術、暗記術を教え続けていた。良い兄弟子役をやっている。
「あいつ、最近、かわいくなってきましたよね？」
「そっか？」
「そうですよ。誰が相手でもまっとうな受け答えができるようになったでしょ？」
「けど、あいかわらず表情がないぜ」
「それがそうでもないんですよ。もしかしたら、私に対してだけかもしれませんが……二人っきりの時に、はにかむように弱々しく笑いかけてくる事があるんです。もう可愛くって」
「ふぅ～ん」
「アッチの方は……そのぉ、自粛してるんですけどね……やっぱ兄弟子ですし……。でも、前はどんな愛撫をしても無反応だったのに、今は、ちょっと手が触れたとか、ふとした時に、顔を赤くして俺から視線を外すんですよ。照れてるんじゃないかな……。すっごく可愛いんですよ」
「……」
恋は盲目たぁ昔から言うが……
馬鹿か、こいつ。
八っつのガキの房中術に踊らされやがって……ジライはこの里一の房中術の使い手のカサギの弟子なんだぞ。ンな媚態、房中術にきまってるじゃねえか。こいつ、俺より頭いいのに、何でわからねえんだ？
けど……
「一年か……」

俺は酒を飲み干し、息を吐いた。

翌日の夕方、俺はヤマセに適当な用事を言いつけた。で、ヤマセを出かけさせてから、ジライの部屋に押しかけ、奴をつまみあげ庭に叩き落とした。

それから、茫然としている奴めがけ、私物を投げつけてやった。冬の夕暮れとはいえ、まだ陽射しは残っている。普段は神経質なほど日の光を避けているジライも、今は顔を布で覆おうとおせず、息をのんで俺を見つめていた。

俺は縁側に佇み、庭の、今は裸の桜林の前でへたりと座り込んでいるジライを見下ろした。

「てめえは、今日を限りで破門だ」

「師匠……？」

「今日中に、前の家に戻れ。わかったな」

「師匠……どうして？」

ジライは土下座し、地面に頭をこすりつけた。

「ごめんなさい！　お許しください！　何でも師匠の言うとおりにします！　何でもします！　ここに置いてください、お願いします！」

「前に言ったはずだぜ、ジライ」

俺は冷たく言ってやった。

「ここは剣の修行をする場所だ。おめえの避難所じゃねってな。この一年、おめえは何をしてた？」

「剣の練習をしました！　師匠の為に！　師匠の手足となって働ける剣士を目指して練習しました！」

ジライは顔をあげた。顔に表情を浮かべるのはあいかわらず下手くそだが、その分、目が必死だ。何とか許しを得ようとしている。

「この一年、俺ぁ、何度か聞いたよな。剣術は面白いか？　とか、生きているのがちったぁ楽しくなったか？　とかな。おめえ、いつ

も剣は好きだって答えたな」
「はい。剣は好きです」
「何処がどう好きだ？」
「……一瞬で勝負が決まるところが好きです」
「ほぉ？」
「さまざまな剣の型があり、学んでも学びきれないほど剣の道は奥深く……」
俺は刀掛けに残っていた奴の刀を掴んだ。あの雨を降らす美しい刀だ。鞘に収まったままのそれを、奴めがけて投げつけてやった。
「馬鹿野郎！　この俺までもが、てめえの下手くそな嘘に騙されると思ったのか！」
顔を両手で覆い、ジライがうつむく。どっか切れてるかもしれないが、構わず俺は怒鳴り続けた。
「てめえは剣なんざ、どーでも良いんだよな、あん？」
「……」
「好きもへったくれもねえ。俺に気に入られる為だけに剣を学んでるだろうが。俺がやれって命じたからその通りにやってるだけじゃねえか」
「……」
「言ったはずだ。俺ぁ、嘘つかれんのが大嫌ぇだってな！　何が剣の道は奥深いだ、胸糞悪い！」
「すみません……」
ジライは身を震わせていた。
「さっき言ったのは建前です。でも……オレ、剣を習うのは、本当に、好きでした……剣を極めれば、オレでも……師匠のお役に立てるって……思ったから」
ゆっくりと、ジライが、額に青痣のできた顔をあげた。
「オレは早く師匠の手足となって働きたい……オレは師匠のモノだから……師匠のお役に立ちたい……オレ、師匠に会えて初めて生きてて良かったと思った……お願いします、師匠、捨てないでくださ

い……師匠に捨てられたら、オレ、もう生きていられない……前の家には死んでも戻りたくない……お願いです……師匠……師匠」

白い顔を強張らせ、ジライは俺だけを見つめて両の目から涙を流した。細い体は小刻みに震えている。

俺は大きく溜息をついてみせた。

「……じゃ、おめえ、俺が明日くたばっちまったら、どうするんだ？」

弾かれたように、ジライが目を見開く。

「俺ぁ、もう五十だ。日々衰えゆく肉体をひきずって、外で危ないお仕事をしてるんだぜ。明日にもくたばるかもしれねえ。明日は無事でも明後日は駄目かもしれねえ。しばらくは良くても、一年後には俺はあの世かもしれん」

「師匠……」

「不死身の人間なんざいねえ。人間はいつか死ぬ。ましてや、俺達は忍者だ。常に死の危険と隣り合わせだ。確実な時は、刹那、刹那しかねえ」

「……」

「だから、その時々を無駄にしちゃいけねえんだ。今、この瞬間をてめえの為に生きないでどうする？　未来につなげる生き方しねえのは馬鹿だ。いいか、ジライ、俺ぁ、俺の都合でおめえを育ててきた。最初はその刀の為だった。次にゃ、育てる以上、優秀な部下が欲しいと思った。おめえを俺の手足としたいってのは、俺の望みだ。俺だけの、な」

「……」

「おめえは俺の命令を聞いた上で、自分の望みの為に生きるんだ。そうじゃなきゃ、クソだ。他人の命令を聞くだけの奴は、自分の命を他人に丸投げして逃げてるも同じ。そういう奴も嫌いだって、俺は言ったよな！」

「……はい」

「おめえは、ひきとった時から変わっちゃいねえ。おめえはよぉ、

からっぽなんだよ」
「……」
「何も望んでいない。何も欲していない。ただ生きて、命じられた事を命じられた通りやるだけだ。それじゃ、人間じゃねえ。傀儡だ。おめえが一人前の年になってから傀儡の生き方を選ぶってのなら俺も止めねえよ。けど、己を殺し、忍に徹しきるのは、十年早ぇよ」
「……」
「忍ってのはな、ある程度は己を殺せなきゃ、話にならん。我の強い忍なんざ、いずれ潰される。だがな、命じられた事を命じられた通りやるだけでも駄目だ。他人にいいように利用され、その挙句、捨て駒とされかねん。嘘でもいい。おめえ、欲を持て。欲望のねえ奴は大成しねえよ。俺の弟子でいたいんなら、生き延びる目標を立て、どうすりゃ目標が達成できるのか自分の頭で考え、突っ走れ」
「……」
「おめえが傀儡の生き方を捨てて、人間になるってのなら、もう一回、拾ってやる。内弟子として飼ってやるよ。さあ、ジライ、考えろ。俺の下にいたいのなら、人間になれ。おめえは俺の下でどう生きたい？　おめえの望みは何だ？」
「望み……」
ジライは真っ直ぐに俺を見あげてくる。
「オレ……本当に、師匠のモノになれて嬉しかったんだ……師匠の為にやってるんだって思えたから……剣術修行も楽しかった……でも、」
大きな目が悲しそうに俺を見る。
「……師匠の手足となって働く事を望んじゃいけないんでしょ？」
「ああ。その望みを捨てろたぁ言わねえが、中心にすえちゃ駄目だ。他の望みを持て」
「……望み……」
「よく考えろ。思い出せ。何かあるはずだ。産まれてからそこまで育つまでに、何かあったはずだ。何かほしいものがあるだろうが」

「……」
「何でもいい。思いついたことを言ってみろ」
ジライが口を震わせる。すごく何かを言いたそうなのだが、それを口にするのをためらってる感じだ。
「欲しいものねえのかよ？　何かあるだろう？」
「でも、……」
「でもじゃねえ！　あるんなら言えよ、何が欲しい？」
「……が欲しい」
「ん？　聞こえねえ、もっと大きな声で言え」
ジライが顔を歪めたので、俺は驚いた。こいつが顔の筋肉を大きく動かすのは、めったにないんで。
「……黒髪が欲しい……」
絶望に顔を歪め、ジライが俺を見つめてくる。
「……みんなと同じ色の肌になりたい」
「……」
「……醜くない体が……欲しい」
「ああ、それは」
俺は庭に下り、ジライの背に手を回し細い体を抱きしめた。
「そいつは……無理だ。生まれつきのものは、どうあがいたって変わらねえ……」
「うっ」
「無理なんだよ、ジライ」
肩をふるわせ、ジライが忍び泣く。
「誰だってそうさ。俺もな……。生まれつきの欠陥のせいで、俺ぁ、出世できなかった。生涯、下忍さ」
「……」
「おめえは、生涯、白子のまんまだ。現実を受け止めろ。そして、負けるな。白子でも何でも、おめえは俺の弟子になったんだ。俺のモノにふさわしい、価値ある男になるんだ」

ヤマセが帰って来たら、やかましくなった。ギャアギャアと俺を責めながら、ヤマセはジライを自分の部屋の布団に寝かせ奴の額を冷やした。説教するにしても頭を狙うのは馬鹿だ、馬鹿力の俺にやられたら死ぬことだってありうるんだ、少しはモノを考えろ、こんなかわいい顔を痛めつけるなんて信じられない……まあ、そんな事を俺に早口でまくしたてながら、見え方が変になったり頭痛がひどくなったら早めに知らせなさいとジライに優しく声をかけていた。

額の上に濡れた手ぬぐいをのせて寝てるジライの枕元で、俺ぁ、あぐらをかいて座っていた。

ヤマセが桶の水を替えに部屋を出た時、天井を見上げているジライに俺は聞いた。

「生きるためにずっと持っている望み……難しい言葉でいやあ、宿願って言うんだがな、俺の宿願、知りたいか？」

ジライの目が動いて、俺を見る。

「はい、教えてください」

「俺の宿願はな……」

俺はにやりと笑った。

「世界中の名刀を全て盗む事だ」

「え？」

ジライの目がびっくりと開かれる。

予想通りの反応だ。

おかしくなって俺は声をあげて笑った。

「くっだらねえだろ？　けど、良いんだ。まだ見ぬ名刀を手に入れたいから、俺ぁ、ふんばれる。死地から舞い戻ろうと必死になれる。宿願ってのはな、生きる希望につながりゃ何でもいいのさ。ハタから馬鹿に見えようとも、な。本人がよければいいのさ」

「……」

「たとえば、ヤマセなんざ、ありゃ、美童好きだからな、美童千人斬りとか、きっとそんな宿願を」

「人を変態みたいに言わないでください」
お！
て、こら、蹴るな、師匠を！　馬鹿弟子！
「あいにく手がふさがっていますので」
桶をジライの枕元に置いて、ヤマセが俺をジロリと睨む。
「師匠～、何度、言えば覚えてくれるんです？　私のは幼児愛好でも少年愛好でもなくて、稚児趣味なんです」
「一緒だろ、変態」
「全然、違います。稚児趣味は年少者を教え導く事に趣があるんです。精神的な交わりこそ主で、肉体的交わりは過程であり表面にすぎないんです」
「のわりにはジライにゃ手を出してたじゃねえか」
「……まだ私も若いので肉欲に負けてたんですよ。でも、今は年長者の心構えをもってジライを導いています」
「へぇぇ」
疑りの目を向ける俺の横で、寝たままのジライが微かに口元をゆるめていた。
何を宿願にすべきか考えてみますと、小さな声で奴は言った。

剣の道を極めること。
誰にも支配されずにすむ実力を身につけること。
その二つを生きる目標とすると、ジライは俺に誓った。

それから、たった三日でヤマセは沈没した。
趣味に反する事をしたと言って、かなり落ち込んでいた。
詳しい事は聞けなかったが、ジライに誘惑されフラフラと手を出しちまったらしい。
色事絡みの話は俺が大嫌ぇなんで、二人ともおおまかなことしか

報告してこなかった。ようするに、ジライはヤマセに里の男どもの橋渡し役を再開してもらったらしい。

何者にも支配されない実力を一日でも早く身につけようたって、世慣れぬガキのやれる事なんざ、稽古をして体を鍛える事ぐらいだ。だが、そんだけじゃ足りねえと思って、ジライはヤマセを頼ったのだ。

ヤマセは中忍だし、人あたりがいいくせに抜け目のない奴だから、里の上層部の覚えもめでたい。

誰と寝りゃ効率よく自分を育てられるのか教えて欲しいとジライはヤマセに相談し、今後の協力を前提に、美童好きのヤマセのをむりやりくわえてイかせたらしい。ガキに強姦されたのかよと馬鹿にしたら、仕方ないでしょと顔を真っ赤にしてヤマセはうつむいた。あんなかわいくお願いされちゃ断れませんよ、と。

ヤマセの頭の中には里中の人間の情報（データー）がある。

ジライにとって有益な人間が誰かは、ヤマセが判断する。

教わっておくべき技術を持った者、或いは支援者（パトロン）向きの里の重鎮、或いは羽振りがよく金品や巻物を貢がせるのに向いた人間……

そいつらの性格や嗜好までヤマセから教わってから、ヤマセの橋渡しで相手のもとへゆき、相手に気に入られる言動をとり、房中術の手管を持って自分に夢中にさせる……

ガキらしくねえ発想だったが、ようは最終的に強くなりゃいいんだ。俺はジライの選んだやり方にケチをつけなかった。

更に数日後、仕事から帰って里に戻って来た俺に、ヤマセが真っ青な顔でたいへんだと焦りまくって報告に来た。

天地が引っくり返ったみたいに騒ぎやがるから何かと思えば……ジライに会ってわかった。しゃべり方がコロっと変わっていた。

何つうぅか、ジジィくせえような？　芝居がかったような？　古語調でしゃべるようになってた。

かわいくない！　と、頭を抱えてわめくヤマセの横で、ジライは『私（わたくし）も剣士のはしくれ。剣士にふさわしき格を身につけたく思い、言葉より改めました』とか何とかテキトーなことを言ってた。

んでもって、仕事で又、外に出て帰ってきたら、ヤマセの野郎、頬を染めて、『子供が古語調で話すのって、妙に色気があると思いません？』とか言うようになっていた……本当に、馬鹿だ、ヤマセは。

ジライは、俺にだけは何故、口調を変えたのか正直に理由を話した。

ジライの変身に一役買ったのは、ホシノだった。

ホシノは、あの日――俺がジライに破門を言い渡した日、屋敷に居た。あの野郎が物陰から俺とジライを覗いていたのは、気づいていた。が、放っておいた。聞かれて困るような話ってわけでもなかったからだ。

それで、あいつがジライに同情したとも思えないんだが……性交抜きで、ジライを部屋に招き入れるようになった。

ホシノと何を話している？　と、聞くと、さまざまなご助言をいただいておりますと、ジライは答えた。

そのしゃべりもホシノの助言か？　と、聞くと、さようにございますとの答えが返った。

「私は未だに、夜、よくうなされております。義兄やキリュウ様達との遊びを夢に見るのです。夢の中で指一本動かせず、殴られ、蹴られ、刃物で切られ……数え切れぬほど死にました。先日、ホシノ兄弟子は悪夢にうなされていた私を起こされ、おっしゃったのです。『恐怖にうち勝つには、まず形から入れ』と」

「形から入る？」

「はい」
ジライが涼しげに微笑む。
「大人どもに弄ばれていた無力な自分を捨てろと、おっしゃいました。他人になりきれば恐怖も消える、もとの自分に押し付け忘れられる……と」
「ふん？」
「なるのならば、絶対者。強者になりきらねば駄目だとおっしゃったので……最初、師匠の真似をしようとしたのですが……兄弟子に『馬鹿』と叱られました。下忍が師匠になりきったら、他の中上忍に殺されるぞ、と」
……どういう目で俺を見てるんだ、あの野郎。
「じゃ、おめえのそのジジくさいしゃべり、誰の真似だよ？」
「誰ということもございませぬが……口癖や話し方は先代の頭（かしら）のものを参考にしております」
「先代の頭？　なんで、また？」
「……兄弟子がそうせよとおっしゃったのです。先代はキリュウ様の父御にございますゆえ」
なるほどな。キリュウの親父の口真似をしろって事か。形だけでも、キリュウの上に立っている気になれるように。
「今は師匠にお仕えしている身ゆえ丁寧な口調で通しておりまするが、偉くなったら先代そっくりなしゃべりをする所存にございます」
「先代ねえ……自称が『我』だったな。まあ、おめえがべらべらと、おとっつあんみたいなしゃべりをすりゃあ、キリュウも嫌だろうぜ」
ジライはにっこり笑った。
表情をつくってるのかもしれなかったが、笑えるようにはなったわけだ。
「兄弟子は『形から入る』事を、ホオジロじいさんという方から教わったそうです。兄弟子がよく口にする御名ですが、前の家の指導者の方にござりますか？」
「……まあ、そんなものだ」

いけすかねえ性格ではあるが……
ホシノは憐れな男だと思う。
俺が拾った時には、あいつはもう壊れていた。
殺人剣に精進する事にしか興味のない人間になっていた。
何で壊れたかは、引き取る時に、知った。
一人、二人と、仲間が死んでゆく日々の中……ホシノは恩人を殺した。自分達を庇い、導き、守ってきてくれた、世話役の老人を殺した。殺せと飼い主に命じられたからだ。
だから、あいつは、殺人を続けねばならなかった。生き延びちまった以上、それ以外は許されないと……そう思い込んでいるのだ。
人殺しを極める事だけを願った奴は……人間が無くしちゃいけないものを捨ててしまった。でもって、捨てた事を後悔しないよう己を偽り続けていた。
何のこたぁねえ、奴も『形から入っていた』のだ。

ジライはよくホシノの部屋に居るようになった。
ホシノもジライの存在を許した。
二人は何を話すでもなく、何をするでもなく、同じ時を共に過ごした。
どこか通じ合うところがあったのだろう。

そして、ジライを引き取ってから二年とちょっと経った冬のある日……
俺とジライに又、転機が訪れた。

桜花　4話

「カサギからの連絡です。明日の夜十九時より、お頭（かしら）の屋敷で房中術訓練を行う。今日と明日時間までは、鍛錬は体力維持に必要な最低限にとどめ、精のつく物を食べさせ、充分な休息をとらせておくこと。当日は、体を清潔にさせた上で屋敷に向かわせるように。以上です」

「頭ん所で房中術訓練？」

俺は遅い朝飯を食っていた。時刻はもう昼を過ぎていたが……明け方に里に帰って来たので、今さっき起きたところなんだ。味噌汁がうまい。

「てぇと、それは、つまり伽（とぎ）か？」

「はい」

給仕役のヤマセは浮かない顔をしていた。

「ジライの初物……俺にやらせろと、お頭がねじこんだんですよ」

「ふん？」

俺は、タクワンをかじり、飯をかきこむ。

ジライの肉体は尻を使った性交も可能になったって、カサギが判断したのだ。まあ、突っ込まれる方が直腸破裂で死んじゃ洒落にもならねえからな。そのへんのカサギの判断は適確なはすだ。しかし……

「初物好きとはいえ、よくジライに手を出す気になったもんだ。あのタヌキじじい、異形が大嫌ぇなのに」

「ジライがカスミの子供だからです」

二杯目の飯をよそりながら、ヤマセが重苦しい溜息をつく。

「お頭がカスミとの間に生まれた娘を溺愛してるって、聞いた事あります？」

「ああ。そんな噂、ちらっと聞いたな。まだ三つだってのに、娘を保育所からひきとって、屋敷に乳母をおいて育ててるんだろ？　こ

の世のものとは思えない愛らしい女の子だそうだな」
「……お頭の子供、里に三十人以上いるってのに、えこひいきですよね」
「まあ、カスミは別嬪くノ一だしな、あのジジイも顔だけはいい。二人の子なら、相当だろうな」
「……そんなの、ジライを見りゃわかるでしょ？」
「ん？」
「お頭とカスミの最初の子がジライですから。お頭が掌中の珠として育ててる子は、ジライの妹ですよ」
「へぇぇ」
ヤマセが俺をジロリと睨む。引き取った時にいろいろ書類を見たよ、俺も。けど、俺がどーでもいいこたぁすぐに忘れる奴だって、わかってるだろうに。ヤマセ、おめえやホシノの両親も覚えてねえよ、俺は。
頭が実の父ってことは、あのキリュウは叔父か。甥を責め殺そうとしてたわけか、キリュウは……。やっぱ、腐ってやがる、この里。
「ジライが六つになった時に保育所から引き取らなかったくせに……今更……。掌中の珠があんま可愛いモノだから、頭はジライに興味を持ったんです。父親の特権だって、初物食いをゴリ押ししたんです」
ヤマセに茶碗をつきつける。俺を睨みながら、奴は三杯目をよそった。
「絶対、手酷く扱うに決まってます。お頭は異形が大嫌いですから……醜い白子ってののしるでしょうし……」
「白子は白子だ。言われてもしょうがねえだろ」
「だけど、師匠（せんせい）、初めての相手がお頭じゃかわいそすぎます。お頭が見下した相手をどう扱うか、師匠ならよくご存じでしょうが！」
ギロリと睨んでやったので、ヤマセは言い過ぎたと気づき、すみませんとしゅんと頭を垂れた。
「頭が男として最低なのは、俺ぁ、よく知っている。けど、心配い

らねえよ。おめえが思っているほど、ジライはヤワじゃねえ。変態どもの魔羅をさんざんくわえてきたあいつだ、頭相手だろうが乗り越えるさ」

「……でも、どうせなら、少しでもいいから良い思い出にしてあげたかったんです」

ヤマセは悔しそうに拳を握り締めた。

「カサギなら良かったんです。あいつなら……うまくやってくれるはずだった。ジライは、今まで、私達馬鹿な大人のせいで、ひどい目ばかりに合ってきた。性交にろくな思い出がない。だから、初めての時ぐらいは優しくやってくれって……カサギに頼んでおいたのに」

「ヤマセ……」

もしかして、こいつは……かなり本気で純粋にジライに惚れているのだろうか？

「お頭じゃ何をするかわかりません。キリュウ様なみにひどい事をするかも……」

かもな……

キリュウとは嗜好が違うが、頭も色事に関しちゃクズだ。

俺は若い頃の嫌な体験（コト）を思い出した。

だが……

だからって、俺に何ができる？　あの助平ジジイがその気になってるんだ。邪魔なんかできない。できる事と言やぁ……

「！」

閃いた。

俺は箸を持った手で自分の膝を叩いた。

「良し！　わかった！」

立ち上がった俺を、ヤマセがいぶかしそうに見つめる。

「初物食いは、肉親だけの特権じゃねえ。師匠の俺にだって権利はあるはずだ」

「……へ？」

ヤマセはマヌケな顔になった。
「まさか、師匠……ジライに手を出されるおつもりなんですか？」
「そのまさかよ。ヤマセ、奴を風呂に入れてピカピカに磨きあげて来い。今夜、俺があいつの初物を奪ってやる」
「そんな！　無理ですよ！　師匠！」
「無理じゃねえよ。俺ぁ、まだ現役だ」
「嘘でしょ。見栄はらなくてもいいのに。師匠、もう五十過ぎじゃないですか」
「うっせえな。やりゃできるよ」
「師匠、房中術、苦手なくせに」
「房中術なんて、どってことねえよ。舐めてさすってアヘアヘして、スゴバコやって終わりだろ？」
「ンな情緒のない……」
「ジジババだって犯ってるんだ。俺だってできるよ、心配すんな」
「けど！　お頭にバレたらどうするんです？　お頭のお楽しみの前日に、他の奴が手をつけただなんて……。バレたら、ただですむわけがない。師匠といえども」
「ヤマセ」
俺はヤマセを睨みつけてやった。
「ジライは、いずれ俺の手足となる奴だ。その為に手間隙かけて調教している。もとを取る前に潰されねえよう、俺が寝といてやるんだよ」
「師匠……」
ニヤリと俺は笑った。
「頭の前に俺が手垢をつけてやるんだ。俺と犯りゃ、良い思い出になるってもんよ」
「……」
ヤマセはあきれたような顔をし、それから諦めの表情をつくった。何を言っても説得はできないと、わかったらしい。
「まあ、すっごく良い思い出になるでしょうね。あいつ、師匠を神

様のように崇めてるから」
　ヤマセはニッと笑った。俺を小馬鹿にするように。
「でも、師匠、ド下手くそですよね？　現役だって威張ってましたけど、ず～～～とご無沙汰なんでしょ？　私が弟子になってからなまめいた話なんざ一回もなかったし、外じゃもっぱら名刀盗みだもの。最後に犯ったのなんて、三十年以上、前なんじゃないんですか？」
「馬鹿野郎。そこまで昔じゃねえよ」
「あ～あ、初めてなのに、肉体的には辛い思い出として記憶に残るのか……ジライもかわいそうに」
「なにを！」
「艶本貸してあげます。枕絵も。付け焼刃じゃあんま効果がないでしょうが、やらないよりはマシです。夜までお勉強なさってください」
「いらねえよ、くそ馬鹿弟子！」

「今宵、とっ……伽を、つとめさせて、いただきます」
　障子の前で三つ指ついてかしこまるジライ。肌襦袢しか身につけちゃいねえ。冬だってのに、寒そうだ。
「こっち来い、ジライ」
「は、はい」
　ジライはガチガチに緊張していた。ぎくしゃくと頭をあげ、操り人形みたいにカクカクした動きで寝床まで進もうとして、途中で足をもつれさせてコケていた。
「何やってんだ、マヌケ」
　その体を抱え起こしてやると、ジライは顔をカーッと赤く染めて俺を見つめた。
「……申し訳ございません」
「どうした、タコみてぇな顔してるぞ」

「は。見苦しきモノをお見せし、申し訳ありませぬ」
「別に見苦しかねえよ、これはこれで可愛い」
ジライは更に顔を赤くした。
「お戯れを……」
「ふざけちゃいねえよ。普段の澄ました顔も、まあ、綺麗だが、あたふたうろたえている今のおめえの方がずっといい。可愛いぜ、ジライ、喰っちまいたいほどだ」
「あ、……ありがたき、お言葉……」
「けど、何で硬くなってるんだよ、房中術はお手のもんなんだろ？」
「はい……六つ前からカサギ様に仕込まれております」
「だろ？　色事は、絶対、おめえの方が俺よりうまい」
「そんな……」
「ヤマセから聞いてるだろ？　俺ぁ、ド下手くそだ。あんま経験ないからな。おめえが先導（リード）しなきゃうまくいかねえって、兄弟子が教えたんじゃないか？」
「さようにござります……ですが、」
ジライが恥ずかしそうに、うつむいた。
「……駄目なのです。あ、頭に血が上り、心の臓が早鐘のごとく鳴っております……頭が真っ白で……房中術の手管が……なに一つ思い出せません」
「何でだ？」
「師匠と、かようなコトになろうとは……露も思っておりませんでしたゆえ……恐れ多くて……」
ジライは真っ赤な顔でうつむいている。房中術の演技にしちゃ、妙だ。本当に緊張してるのか、こいつ。
「ふぅ～ん。ま、いいや。下手くそ同士、気長にやろう。夜は長いんだ」
俺は寝床の上に胡坐をかき、ジライを膝の上にのせて座らせた。行灯の灯が俺達を照らす。邪魔な前髪を掻きあげ、普段、隠れている右の目をじっくりと眺める。

「おめえ、両目出してる方が可愛いぞ」
「はあ」
ジライが困ったように俺の視線を避ける。
「……なあ、俺と犯るの嫌か？」
「いいえ！」
ジライは強い口調で否定した。
「嬉しゅうございます。ただ……穢れたおぞましき白い体を、その貴いお手に触れていただくのが、たいへん申し訳なく……」
「くだらねえ事、言うな」
「……」
「おめえの事は全部承知している。承知した上で寝るんだ。グダグダぬかすな」
ジライの大きな目が、嬉しそうに俺を見る。目には、うっすらと涙が浮かんでいる。
「はい。もう決して……いたしませぬ」
「もうちっと顔をあげろ、ジライ。口を吸わせろ」
「は、はい」
ジライが口を開く。そこに舌を入れて適当に舐めていると、おそるおそるジライが舌を絡めてきた。俺の舌を強く吸い、舐め返してくる。なるほど……確かに、ジライの方が上手い。
「はぁぁ……」
瞳をうるませ、ジライが俺を見つめる。
「夢のようにござります……お慕いしてきた師匠と接吻できるなんて……醜きこの身に触れていただけるなんて……身に余る幸せ……いっそ、このまま死んでしまいたい……」
「何、馬鹿言ってやがる。口吸いで終わりじゃねえんだぞ」
「あぁ……」
「最後までやるんだ、わかってるんだろうな？」
「……はい」
ジライはうっとりとした幸せそうな顔で俺を見つめた。

「……師匠のモノにしていただきます」
「おうともよ」
俺はにやりと笑った。
「忘れるなよ、ジライ。おめえの初物は俺がいただく。俺がおめえの最初の女になるんだよ」

十才の子供が相手だ。
本番ったって形だけだ。一応、真似事だけはさせたが、むろん、うまくいかなかった。
「もうちっと大きくなったら、やり直そうな」
「はい」
触れ合う肌と肌が温かい。
布団をかけ、ぬくぬくと俺達は抱き合っていた。
ジライの頬に口づけしてやる。あいつの目線が何処に向いてるかはバレバレなんで、それから、ぎゅっと抱きしめてやった。普段、サラシに巻いてるが、俺のはデカい。年とってだいぶ垂れたものの、まだけっこう張りがある。息苦しいだろうにジライはスリスリと俺の胸に顔をなすりつけてくる。オッパイ好きなんて、やっぱガキだな。
今もジライは耳まで真っ赤だ。俺とやってる間、ずっと興奮してた。のぼせてぶっ倒れるんじゃないかと思ったが、どうにか最後まで正気を保てたようだ。俺はできるだけ優しい声をつくって言ってやった。
「どうだ、俺のモノになった気分は？」
「最高にございます。誰かと触れ合って気持ち良く思えたのは、初めてでございます……」
「そっか？　こんなごっついババアが相手なのに？」
「師匠はお美しいです」
胸から顔をあげたジライは、半ば夢の中に居るかのような顔だっ

た。

「師匠は生命力に満ち溢れていて……その躍動感あふれるお姿を目にできるだけで、私は幸福でした。師匠は、この世の誰よりもお美しく、お強く、貴いお方……ずっとお慕いしていました」

「ありがとよ」

俺はジライの頭を撫でた。世辞ではなく、多分、こいつの目には本当に俺はそう見えているのだろう。恩人の俺を、こいつは女神のように崇めている。

だが、本物の俺は……醜女の大女だ。

俺に房中術の手ほどきをした野郎が、俺の顔を見るとあまりの醜さに眩暈がして萎えちまうってこぼしたほどの……みっともねえ外見だ。

眉は太く濃く、鼻は潰れていて不恰好なまでに大きく、ぎょろりとした眼は荒々しく、唇はぶ厚く、口はだらしなく横にひらいている。顔は角ばってて、怒り肩、同い年の男より遥かにデカい背。

くノ一として使いものにならん、生きている価値もないと、ガキの頃はさんざんのしられた。その頃の俺は今より前向きだったんで、見目がマズいんなら忍の技で生きりゃいい、そう思って体を鍛え、必死に剣の腕を磨いた。

強くなりゃ道が開けると、信じていた。

やがて、里一番の剣士となり、実戦部隊に入った。普通、男より体力の劣る女は実戦部隊に配属されない。けど、俺は並外れて強く腕力も体力もあったんで、特例となった。俺は華々しく活躍し、注目を集めたいが為に白装束を着て『白き狂い獅子』の名をジャポネ中に広めた。

だが……

そこでも、俺は生まれながらの欠陥のせいでつまずいた。

この里じゃ……女は半人前扱いだ。

生涯、下忍のままなんだ。

俺よりも、お頭（ツム）も忍者の技量も遥かに劣る野郎ばかりが、出世し

てゆき……

女って理由だけで俺は……

馬鹿どもの下で働き続けねばならなかった。そして、なまじ優秀な忍であったが為に、頭に目をつけられて……。

生まれつきの欠陥のせいでひどい目に合ってるって点で、俺とジライは似ている。片や美童、片や醜女ではあるが。

こいつが優秀な忍者に育ちゃ、痛快だ。できりゃ、俺を越える忍者がいい。甘ったれた常人の男どもなんざ、足元にも寄せ付けないような、な。

異形も女同様、生涯、下忍が原則だが……こいつは俺の配下になったから、異形部隊には配属されねえ。俺がうまいこと根回しして細工すりゃあ、中忍、上忍と出世させられるかもしれん。

そのうえ、こいつは頭の胤（たね）。圧倒的に抜きんでた里一番の忍となれば……誰もがこいつを無視できなくなる。

他にろくな奴がいなきゃ……

実力第一の頭は、こいつを次期頭領に選ぶ。外見は目をつむって選ぶはずだ。

異形が次期頭領になる……

想像するだけで、わくわくした。

この里のくだらねえ掟のせいで辛酸をなめてきた俺が、同じように虐待されてきたこいつを次期頭領にすえるのだ……

良い夢だ。宿願の二つ目にしよう。

かなわなきゃかなわないでいい。夢ってのは生きる活力だ。この夢を見続けられりゃ、俺は死地からずっと帰ってこられるかもしれん。

この良い夢の為にも、ジライをきっちり育てにゃならねえ。

あのタヌキじじいにジライを潰させるもんか。

「ジライ、頭は、知っての通り、里の指導者としては悪くない男だ。だが、性交に関しちゃ最低よ。目についた奴は女も男も手当たり次第。初物好きだわ、手篭めが趣味だわ、穴とみりゃつっこむわ、折

檻責めが好きだわ……ようするにSの助平だ。おまけに異形を嫌い、見下している。異形の館に居たからおめえ知ってるだろ、あのタヌキが、暇つぶしに異形呼び出してはいたぶってたの？」

「はい……」

「明日、おめえは手酷く扱われる。痛くて、辛くて、みじめで、気持ちが悪い事だけを、さんざんやられるだろう」

「カサギ様からお頭様の性嗜好は伺っております……覚悟はできています」

「我慢しようと頑張ったって無駄だぜ。あのジジイ、色事じゃ、相当の達人（テクニシャン）だ。おめえはあいつに良いように扱われ、流され、ひぃひぃ泣かされる。それにおめえが大嫌いな『白子』って言葉、さんざん言われるぞ。あの野郎、おめえが嫌がってるってわかりゃ喜んで責めてくる。精神的にもあいつに犯されるわけだ」

「……」

「抗いきれるわきゃないんだから、意地を通そうとはするな。幾らでも流されてこい。あいつに何をされようが、何を強制されようが、何を言わされようが、気にするこたぁない」

「……」

「あいつとの事はその場限りで終わる。覚えておけ」

「……」

「そっから離れたらされた事なんかすっぱり忘れちまいな。何時までもひきずるなよ。あのくだらねえジジイをてめえの中心には置くな。どんな事をされようがおめえは変わらねえ。あいつの影響なんか、すぐに消えちまう。絶対だ。なにせ」

俺はニヤリと笑った。

「おめえは、今日、俺の色に染まったんだからな」

「師匠……」

「おめえは、俺の男だ。な、そうだろ？」

「はい」

「なら、おめえの心の一等良い場所は俺のモノだ。頭なんざ、心の

中に置くなよ。それが情婦（いろ）への礼儀ってもんだぜ」
ジライが泣き笑いのような表情となった。
「あぁ……師匠……師匠への思い、言葉では言い尽くせませぬ……お慕い申し上げております……この世の誰よりも……師匠は素晴らしきお方です」
「へへ、可愛いなあ、ジライ。口を吸わせろ」
口を重ねるとジライは恍惚とした表情となり、うっとりと瞼を閉ざした。

桜花　5話

二日後の朝、ジライは頭の屋敷から戻った。黒装束に覆面。外出時のいつもの格好で俺の部屋に報告に訪れたあいつは、平静を装うとしていた。何もない振りをしようとしていた。

覆面を取れと命じると、あいつは、ためらいながら命令に従った。疲れきった白い顔が現われた。額当てで前髪は後ろに流されているので両の目が出ているのだが、その目はうつろで、心なしか頬までやつれてみえる。

頭（かしら）がどんな風にジライを扱ったのか、俺にはわかる。

俺にはよくわかるんだ……

腕に抱いて口づけしようとすると、ジライは抵抗した。本気で抵抗した。俺の腕をはねのけようと暴れ、必死に顔をそむけ、俺から逃げようとした。

「なりませぬ！」

だが、俺から逃げられやしない。俺ぁ、怪力だからな。

「おやめください！　触れてはいけません！」

「やだね」

「お許しください！　口は駄目です！」

「俺は口が吸いたいんだ。させろ」

「あぁ……後生にございます……どうか……どうか……」

「駄目だ」

唇を近づけると、ジライは狂ったように頭を振った。

「いやぁっ！」

目をつぶり、ジライが必死に首を振る。

「駄目ぇ！　やめて！　いやぁ！」

古語調でしゃべる余裕もなくなってる。手足をじたばたさせ、ひたすら逃げようとする。

「放して！　放してぇ！　いやぁ！」

俺はジライの頬を軽く叩いた。
ハッとして俺を見つめ、それでもジライは弱々しく頭を振り続けた。
「口はダメ……お願いだから、口はやめて……」
「何で嫌なんだ、ジライ？」
「……」
「言ってみろ」
「……汚いから」
ジライはでっかい目を大きく見開いた。
「オレの口……すごく汚いから……だから」
ポロポロと涙が頬を伝わっていく。
「接吻しちゃダメだよ……オレなんかを触ったら、師匠が汚れちゃう……」
多分、おのタヌキじじいのお決まりのコースをやられたんだ。縛られ、叩かれ、罵倒され、あいつが出したものを全て飲み込まされ……とどめに尻にぶちこまれていたあいつのを舐めさせられたのだろう。
初めて尻を使われたショックはそりゃあるだろうが、ジライは六つの頃から変態どもの相手をしてきたんだ。初心（うぶ）な処女とは違う。肉体的な辱めには慣れてるはずだ。
こいつが、これほど傷ついている理由は……
「やめて……師匠は綺麗なんだから……師匠は醜い白子なんかとは全然違う……師匠はおぞましいオレと同じじゃない……綺麗なんだ。口づけなんかしちゃダメだよ。師匠は美しくて強くて明るくて……お日様みたいなんだ……。オレに師匠を汚させないで……」
あの助平ジジイ……
聞かせやがったな、こいつに。三十年近く前に、俺が頭の性奴隷をやってた事を。
種をバラまくのが趣味だったあの野郎は、俺と子供をつくりたがった。里一番の剣士で怪力の俺なら、優秀な跡取りがつくれるかも

しれんと考えたわけだ。
否も応もねえ、子づくりは命令だ。
下忍の俺は従うしかなかった。
そのくせ、Sのあの野郎は……
俺で、さんざん遊びやがった。
毎回、縄やら鎖で身動きとれねえように縛られ、面にはマスクを付けられた。筋肉質でぶかっこうだが体は使いようはある、しかし、醜い面は見たくないと言いやがった。
ろくすっぽ息もできねえ皮製のモノですっぽり頭全体を覆われた事もあった。遊び慣れしてるあいつは、ヤバくなる前には拷問同然のしめつけをやめる。そして、俺の体力が回復すると、又、責めてくる。いっその事、あいつが失敗して、俺を責め殺してくれりゃいいのにと責め苦の中で俺は自分の死を願っていた。
頭にとっちゃ、俺とのことは、種まき半分、里一番の忍を精神的にも肉体的にも屈服させる遊び半分ってとこだった。
三ヶ月ほど、俺は頭のお気に入りのオモチャだった……
昔、俺をどんな風に扱ったか、それに俺がどう反応したかを、頭はジライに話したんだ。ジライが俺を精神的支柱にしている事を見抜いて。
で、俺への侮辱を口にしろと命じたんだろう。『師弟そろって豚奴隷』とか、そんな俺らを馬鹿にしきったような言葉を……。
ジライのこった、抵抗したろう。俺を崇めているあいつに俺の悪口が言えるわけがない。辱められ、体を痛めつけられても、言うまいと頑張ったろう。それが頭の嗜虐性を煽り、より一層ひどく責められ……最後には言わされちまったんだ。だから、こんなに傷ついているんだ。
今のこいつには何もない。
大事なものは、みんな、頭に奪われたからだ。
俺にも覚えがある。
自分が汚らしく思え、なさけなくて、生きているのも嫌なのに…

…何もできない。何をする気力もわかない……ただ、ただ、疲れきっていた時が、俺にもあった……

俺は軽くジライの頬に口づけた。

ジライがぶるぶると頭を振り続ける。

「ダメ……やめて……汚れちゃう……汚れちゃうよ」

「馬鹿野郎。俺ぁ、汚れねえよ」

「だけど……オレ……汚いんだ」

「汚かねえよ」

「本当だよ……本当に、オレは……」

「ジライ、オレぁな……おめえが、あの助平にどんな風に扱われたかわかってる。何を聞かされ、どんな事を無理やりやらされたかもわかってる。わかっていて言ってるんだ、俺は汚れない」

奴の肩をがっしりと抱いた。

「おめえもだ。あのタヌキにされた事なんて、どって事ねえ。房中術の訓練を受けた。ただ、それだけだ。そんなんで、おめえは汚れない。絶対だ」

「……」

「俺を信じろ。あのジジイなんかじゃ、俺達は汚せねえよ」

俺はジライの唇に自分のモノを重ね、舌を入れべろべろと舐め回した。ヤマセに下手くそと馬鹿にされそうな口づけだった。が、気にせず、歯茎や歯、舌なんかも舐めてやって、あいつの唾を飲み込んでやった。

ジライは、くしゃくしゃに顔を歪めた。

やがて、ジライは涙を流しながら、俺の背に両手を回し、口づけに応えてきた。

俺達は、そのまんま、しばらく口づけを続けた。

で……

俺とジライは、すっかりデキあがっちまったわけだ。

この頃から、俺は外の仕事にジライを連れてゆくようになった。他の奴と組んでの仕事の時は、師弟関係を貫き通した。が、二人っきりの仕事の時はけっこうハメを外した。任務終了後、二、三日、物見遊山でフラフラしたり、俺の趣味の武器窃盗に付き合わせたりってな具合で。

白子の子供は目立つ。けど、そもそも、男装の大女の俺だって目立つんだ。気にしたってしょうがねえ。人目なんぞ、どうにかごまかせるもんだ。ジライはカツラを被り、肌に染め粉をつけて、外の世界を嬉しそうに歩いた。

だが、むろん、遊び（デート）の為だけに連れ歩いたんじゃねえ。少しでも多くの任務を経験させたかったんだ。俺が元気なうちに、忍の生き方、命のやり取りの重さ、共に戦う仲間の大切さを、あいつに叩き込みたかったんだ。

外の世界の通俗小説じゃ、『男と女が結ばれました、それから二人は仲良く暮らしました。めでたしめでたし』な話がゴロゴロしてる。

けど、両思いの恋人ができたからって、それで終わりじゃねえ。恋人と過ごす甘い一時ってのが増えただけで、俺とジライの現実は変わらなかった。

変わったことといや、俺が仕事にジライを連れ出すようになった事、それとジライが男どもの寝所に行くのは俺が里にいる時となった事ぐらいか。それ以外の時は、俺と一緒に外で仕事してるんだから、まあ、そうなって当然か。

頭が良いジライは本番解禁になってから、なかなか男どもの誘いにのらなかった。相手が渇望感を募らせるほど自分の価値が上がる。主導権を握れる状態を待ってから、求めに応じていたようだ。その焦らしのテクニックはカサギに習ったらしい。

『白き狂い獅子』の持ち物である事のアピールも忘れず、大人ども

がいきすぎた遊びをしないようヤマセと二人でいろいろ調整もしてるらしい。危なくなったら俺の名で切り抜けろとは言ったが、色事が苦手な俺が手伝える事はほとんどなかった。

ジライは里に戻る度、ヤマセに援助交際（エンコー）相手を決めてもらい、時間の調整がつくと、出稽古と称して外泊した。

出稽古に出かけるジライをつかまえて、唇にチュッと軽く口づけをすると、ジライはうっとりと瞳をうるませ、幸せそうに微笑んだ。

ジライが部屋を出てから、ヤマセが面白くなさそうに唇を尖らせる。

「ちょっとは人目を気にしてください、イチャイチャするのは二人っきりの時だけにしてくださいよ」

「へへへ、妬けるだろ？」

内弟子の前じゃ格好つける必要もないので、俺はおおっぴらに年端もゆかぬ恋人を可愛がっている。

「今夜は、あいつ、コウヅケの所です。コウヅケが所蔵している古い忍法の巻物を見せてもらうんだとか」

「ふぅ～ん」

ヤマセはジライが何時、何の為に、誰の所に泊まるのか、逐一、俺に報告してくる。ジライの身を案じ、俺に気をつかっているわけだ。

「おめえも、結構、いじらしいなあ」

「何、心にもない事、言ってるんです」

「最近、ジライとやってるのか？」

「……ええ、そこそこ」

ヤマセは大きく溜息をついた。

「里に帰れば義理堅く向こうから誘ってくれるんで……予定がこんでない時に相手してもらってます」

「好かれてるじゃねえか」

「律義なだけですよ。貸しをつくったまんまは、気持ち悪いんだそうです」
「あいつ、今のおめえは嫌いじゃないみたいだぜ」
「……好意は持ってくれてるとは思いますが、しょせん、私なんて、師匠のオマケですから。あいつの心には師匠しか居ないと思うなあ……。ああ、あと、ホシノ。あいつ、ホシノは好きなんですよね。もちろん、師匠への気持ちの何百分の一の好意でしょうが」

ホシノはずっと、ジライに暗殺術を教え続けていた。
自分で考えた新しい暗殺手管を教え、効率よく人を殺す手段をジライに考えさせていた。

ホシノは、何もかも捨てたがっていた。奴の剣の道には人らしい情は邪魔だったので。
ジライは、からっぽのくせに、俺の命令に従って人間らしく生きようとしていた。
ホシノはジライのからっぽさを羨み、ジライは余計な感情を持つまいとするホシノの側が居心地良かったのだ。
二人は似ているようで、根本が違った。だから、惹かれあい、互いを求め合ったのだろう。

ジライが十一の秋……
ホシノが死んだ。
六人一組の仕事を終えての撤退中、敵に囲まれ……
仲間を逃がして、数の勝る敵を一人で葬り続け……
最後には爆死したのだ。大量の火薬で派手な花火をあげ、かなりの数の敵を巻きこんで果てたそうだ。

奴の死を報告に来た同僚は悔しそうに俺に言った。上役の中忍に殺されたようなものだ、と。退路を確保すべき上役が何もせずに先に一人で撤退したため、ホシノと同僚四人は敵の真っ只中に置き去りにされたのだ。ホシノは『おまえらが居ては邪魔だ』と、仲間を逃がし、派手に立ち回って敵をひきつけ……そして……。

暗殺部隊の持ち主である頭は、『能無し』とその中忍から役職を取り上げて処分したらしい。ジライの義兄の一人、次期頭領候補の一人だったが、その辺に頭は情を、全然、絡めない。しかし、処分するのならもっと前にして欲しかった……

「俺ぁ、底辺から自分で這い上がれねえカスなんざ、どうでもいい。弱い奴は弱いから死ぬのさ。戦いを放棄して逃げた奴なんざ、死んで当然さ。その点じゃ、里のやり方は間違っちゃいねえ。けどよ……生きる努力をしてる奴がくだらねえ奴に潰されるのは我慢ならねえ」

俺は空っぽの骨壺を握り締めた。

「この里は、くだらねえ掟だらけの、くだらねえ里だ！　馬鹿を中忍にすんじゃねえ！　部下の命を預かれねえ奴を出世させるな！　ちくしょう！」

「……師匠のおっしゃる通りです」

内に怒りを秘めたジライが静かに呟いた。

「仲間を生かせぬ忍など、三流もいいところ……。自らが捨石となって死ねば良かったのです」

結局、ホシノは捨て切れなかったわけだ。

捨てたくてしょうがなかった、人の情ってやつを……

仲間を庇って爆死なら……さぞ満足だったろう……

前の家で手をかけたホオジロじいさんのもとへ、奴は逝けたのだろうか？

死骸がありゃジーッと何時間も見つめていたあいつは、同じものになれて、ようやく心安らかになれたのだろうか？

屋敷は広くて部屋数が余ってたんで、俺はホシノの部屋をそのまんまにしておいた。

部屋のホシノの位牌にゃ、毎朝、線香が供えられていた。ヤマセは豆に掃除をし、花や果物も供えていた。仲の悪かった弟弟子（おとうとでし）だってのに、人の良い奴だ。

ジライは主人の居なくなった部屋に入り浸っていた。俺に断ってから、ホシノの遺品の暗器を自分のものとし、ホシノの書き残したものを見て暗殺技術を磨こうと修練を続けていた。

そして、徐々に、ジライはホシノに似ていった。俺やヤマセ以外の者に対しては、冷淡で冷酷、皮肉屋な態度をとるようになった。ホシノから形から入ることを教えられたジライは、ホシノの強さを求め、ホシノを真似しだしたのだろう。

ホシノを失って俺は痛烈に思い知らされた。

『白き狂い獅子』なんて異名をもらって、数多くの任務をこなしてはきたが……

俺は無力だ。

『上忍扱いとする』ってお墨付きをもらったところで、正式な役職についていない俺には里を動かす権限などまるで無い。馬鹿どもの決めた事に、諾々と従って生きるだけなんだ。

女の俺じゃ、里は動かせねえ。何一つ変えられねえんだ。

そして、俺は老いを意識し始めた。

年々、動きが悪くなってきてる自覚はあったんだが……ホシノが亡くなった頃から、ガクッと俺の体力は衰え始めた。

あんまり時間がねえことは、俺が一番わかっていた。

だから、俺は……

自分の夢の為に、恋人を捨てた。

ジライが十二の春……

俺は奴をインディラから来た魔薬指導員のグジャラって男に預け、薬漬けにさせた。グジャラはジライを頭から借りた屋敷の地下牢に閉じ込め、朝な夕な抱いて肉欲に溺れさせた。

ヤマセは怒った。止めさせてくださいと、本気で俺にくってかかった。

けど、ヤマセは……俺って人間をよく知ってるんで、俺が押し殺していた感情を敏感に感じ取っちまいやがった。苦しそうな顔で奴が『他に方法はなかったんですか？』って聞くんで、嘘ついた。無かったって。他にも方法は、あるさ、むろん。だが、悠長に見守ってやるなんて事ぁ、無理だ。俺にゃ時間がない。性急な結果が欲しかった。

ヤマセは泣きそうな顔になったが、もうそれ以上、何も言わなか

った。

ジライには、徹底的に欲がない。

金にも物にも出世にも己の命にすら関心がない。俺を恋い慕ってはいたが、俺が前に手酷く拒絶したんで、俺との関係を刹那、刹那のものと思い、その瞬間だけを楽しもうとしていた。いつ捨てられても耐えられるように、あいつは俺にすら執着を抱いていなかったのだ。

己を捨てきれるのは忍にとっては美徳ではある。しかし、それは上役にとって都合のいい美徳に過ぎない。

欲望も妄執も知らなきゃ、他人の欲望を理解できない。相手の望みを察し、いち早く動き相手の心をつかむからこそ、人心が掌握できるというものを。

このまんまじゃジライは、上役にいいように使われる下忍にしかなれない。利用された挙句、捨て駒とされかねないような……

欲望をあいつの体に教えるしかなかった。

てっとりばやく欲を持たせる為に、俺はジライを魔薬指導員に預けた。

ジライは不感症だ。

ガキの頃から変態どもの相手をし、性処理に使われてきたせいで、性交に興奮を覚えない性質になっていた。こすりゃ勃つし精も放てたが、性欲ってものがまるでなかった。

俺が触れてやりゃ悦びはするが、それは対等な人間として扱われる事を精神的に喜んでいるにすぎない。あいつの体は肉体的快楽を感じないのだ。

『俺の一族には、さまざまな秘伝の調合がありましてね。たいていのご要望には応えられます。重度の不感症でも魔薬と性技で治せますよ、魔薬中毒にしないで、ね。治せはしますが……あなたの可愛いお弟子さん、代わりに色狂いになっちまいますよ。良いんですか？』

魔薬指導員は、浅黒い肌の気障ったらしい若造だった。やたらもったいぶるいけすかねえ男だったが魔薬の本場インディラから来た男だ、他の誰に任せるよりも確実だ。魔薬無しでも感じるようになるまで調教したら返してくれと、俺は依頼した。

ジライは魔薬指導員の下に二週間いた。

戻って来たあいつは、ボロボロだった。

指導中の経過は聞いていた。感覚が鋭敏になる魔薬で肉体を改造された後、媚薬と性技で快楽に溺らされ、ジライは理性を失った。グジャラに悦んで抱かれていたらしい。

突然、快楽を与えてくれる主人がいなくなった深い喪失感、色狂いとなった自分への嫌悪感、忍である事を放棄していた罪悪感、あさましい姿を俺に見られる恥辱と恐怖……いろんな感情に苛まれていた。

実に……人間らしい顔をしていた。

そんなあいつを俺は抱いた。ヤマセにやらせて、横で見たりもした。

それでも、忍か？　と、叱咤しながら。

異形の館に住んでた頃の話を持ち出し、そこへ戻りたいのかと責めた。

ただ嬲られるだけの玩具に戻りたいのか？

誰にも支配されない実力を身につけるんじゃなかったのか？

戦わずに、このまま逃げるのか？と。

ジライは少しづつ自分の体を制御してゆき……やがて、精神力で肉欲を制御できるようになった。

欲望は、時に人から冷静な判断力を奪い、時に破滅へと落ちる事すら快楽と感じさせ、時に果て無い底なしの沼のように人を溺れさせる。

欲望を知ったジライは、他人の欲望を煽る術を覚えた。

カサギから習っていた房中術に、実が入って、一層、磨きがかかったと言うべきか。

悪魔的な媚態と性技でより多くの男達を操るようになったと、ヤマセは言った。子供なので恋愛の機微にはうといですが、まあ、それはご愛嬌ですね、とも。

その年の夏はホシノの新盆だった。が、奴は来なかった。未練なく今世から、奴は消えたのだ。

「さすが、兄弟子。潔い……」

と、ジライは寂しそうに新盆の祭壇を見上げ、その日を境にヤマセは弟弟子の位牌を片付けた。

どうせ死ぬなら、俺もそうありたい。

生きてるうちにやれるだけやって、それで駄目ならしょうがねえ、すっぱり死ぬ。

それが忍者ってもんだ。

俺は俺の夢を自分の胸の内にだけ秘め、ジライにゃ何も話さなかった。俺の夢を知りゃ、あいつは必死に応えようとする。真面目なあいつは、ガチガチに硬くなりかねない。初夜の時のように。

一人で未来を夢見て、俺ぁ、上忍ども相手にやれる事をやり続けた。

ジライは俺を敬い慕い続けた。が、無邪気に甘えてくる事はなくなったし、俺の前で涙を見せる事もなくなった。
精神的に自立したのだ。

十四の夏から、ジライの姿は屋敷から消えた。暗殺技術の高さを買われ、貸し出し(レンタル)って形で頭直属の特殊部隊配属となったのだ。独立遊撃員で、主な仕事は暗殺。
で、優秀だったんで、ほぼ出ずっぱりになった。ジライの活躍は逐一ヤマセが教えてくれた。

年に数日だけジライは里に戻り、その度に必ず手土産を持参して俺の元を訪れた。奴が盗んだ刀剣類は、どれも俺をほれぼれさせる出来だった。
俺はめったに外に出なくなっていた。ジライの貸し出し(レンタル)料代わりに、俺の義務がほぼ免除となったからだ。隠居ババアになった俺は里でのんびり道場主なんかをやっていた。ヤマセを顎で使って。
売れっ子暗殺者になりつつあったジライと、中忍のくせに小狡く役目を叔父に押し付けて俺ン家で家事ばっかやってたヤマセと、俺ぁ、よく酒を飲んだ。
つっても、ジライにゃ、あんま美味い酒は飲まさなかった。訓練を積んで味覚はだいぶ回復したものの、あいかわらず味の良し悪しがわからねえんだ。
「師匠から頂戴する酒は、何でも美酒でございます♪」
と、可愛い事を言ってはくれたが、何を口にしても美味い不味いがわかんねえ奴が相手じゃ、奢り甲斐がなさすぎる。食に執着のねえジライは、いつまでたっても、痩せっぽちだった。

けど、忍者としては抜きんでていて、十六の正月には中忍に昇格した。俺も事前に上忍どもを相手に根回しをしてはいたが、昇格はジライ自身の手柄だ。

異形でありながら、たった十六で中忍になるとは……俺の予想を遥かに上回る優秀な忍に育っていたのだ。

後はジライを上忍にできれば、いいんだが……

上忍の枠は八と決まっている。狭き門な上に、上忍は管理職。本物の上忍には、俺みたいに第一線で働き続ける奴はいない。現在、脂がのっているジライを実戦から遠ざける愚を、頭はすまい。

俺が生きているうちに上忍にするのは無理だろうが、継嗣のない上忍の直属の部下にでもしてやりゃいずれはその地位が転がりこんでくるかもしれんし、頭がポックリ逝ってくれたらいきなり頭領の座が降ってくるかもしれない。

状況を見つつ、どう援助すればいいか俺は考えた。

後もう少し……だった。

桜花　6話

ふと目を覚ますと、ヤマセとジライの会話が聞こえた。廊下で小声で話してるみたいだ。

「ありがとう。ジライ。これで、一ヶ月はもつ。本当に、おまえには何と言って感謝してよいやら」

「何をおっしゃられます、兄弟子。私の方こそ、何のお役にも立てず、いつも申し訳なく思っております。それから、これもお納めください」

「これは……！　駄目だ、ジライ、こんなには受け取れない。少しは自分の為にとっておきなさい」

「いいえ。どうぞ、お納めください。もう部下への給金は払いましたし、武器も新調いたしました。他に金子（きんす）の使い道などありませぬゆえ」

「しかし……」

「師匠（せんせい）の為に、お役立てくだされ」

「……すまない……ありがとう、ジライ」

次に目を覚ますと、枕元にジライが座っていた。黒装束姿だが覆面はしていない。けど、額当てはしている。昔、両目が出てる方が可愛いぞって俺が言ったもんだから、こいつ、俺の前じゃ額当てをして長い前髪を後ろに流すようにしているんだ。

「……よぉ」

声をかけると、ジライは静かに笑みを浮かべ、俺に敬意を表して頭を下げた。

「……又、麻薬を持って来てくれたのか？」

「土産はそれだけではございませぬ。ご覧あれ、名匠オサフネの作、ハガネの焼刃の光沢も美しき一品……」

刀の説明をしながら、自分の二刀の横に置いていていた刀を恭しく俺に向けて捧げ持つ。鞘は黒漆に金龍の柄。ちょいと派手な飾り金具がついている。俺は口元をほろこばせた。
「よさげだな」
「抜いてご覧にいれましょうか？」
布団から体を起こせない俺を気遣っての申し出だ。
「いや。いいや……。後で自分で見る。その辺に置いといてくれ」
「承知」
腹が痛ぇ……痛み止めの麻薬の量は日々増えてるってのに、効果はどんどん薄れている。俺の体の中はもうボロボロだ。年のせいと酒のせいだ。肉体自体の衰えは、大魔王教徒の神官でも癒せない。死ぬ運命の人間は、悪あがきしないで死ねってこったな。
「なあ、ジライ」
「はい？」
「……もう、刀も麻薬もいいや。もう持って来るな。この体……近いうちに処分する」
「……」
ジライは瞳を細めた。
「……さようにござりますか」
「おめえとは、多分、今日が今生の別れだな。おめえ、どうせ、明日には里を発つんだろ？」
「いえ。本日、夜半に出立いたします」
「へへへ、人気者はつれぇなあ……いや、逆か。嫌われ者だから里を追われるのか」
俺はニヤリと笑みをつくった。
「ヤマセから聞いたぜ、頭（かしら）の掌中の珠の初物を、いただいちまったんだって？」
ジライは片眉をしかめた。
「アスカの事にございますか？」
「そうだ、頭がちぃちぇ時から手元において可愛がってた娘のこっ

たよ。あのジジイ、悔しいだろうな。おめえに娘の初物を横取りされて、しかも、おめえを殺せないときてるんだから。おめえは一人で二十人分ぐらいの働きをする。腸が煮えくり返るほどおめえが憎くても、算盤がたつあのジジイがタダでおまえを殺すはずがない」

「頭よりお叱りの言葉をいただき、相応の償いをせよと仕事を三つ押しつけられました。幸いな事に、懲罰はその程度ですみました。アスカも軽い仕置きですんだようです」

「ヤマセの野郎、おめえが重い罰をくらうんじゃねえかって、この前までハラハラしてたんだぜ。だが、今は溜飲が下がったろうぜ。おめえが頭のお気に入りを傷物にして復讐を果たしたのは痛快だって言ってたからな」

「……兄弟子は誤解なさっておられます」

「誤解？」

「私はただ、アスカの求めに応じただけ。アレを辱める意図はありませんでしたし、ましてや、頭に復讐する為にアスカを抱いたのでもございませぬ」

ジライは口元にやわらかな笑みを浮かべた。

「アスカは父母を同じくする私の妹……緑なす黒髪の、それは美しき妹にございます。私めの宝です。アレの望みならば可能な限りかなえてやる所存でおりましたが……まさか、まだ処女だったとは。さすが我が妹、騙しの技は私に劣りませぬ」

……自己投影だな。まっとうな外見に生まれた妹を愛する事で、白子の自分を慰めているんだ。劣等感の強さは変わらねえなあ、こいつは。

ジライが頭のお気に入りの処女を奪っちまったせいで、俺の計画はパーになった。金や収集した武器をバラまいて上忍どもの機嫌をとり、上忍のコマキにも賄賂を渡し話はつけていたんだ。コマキが里に編成変更を申し出、中忍のジライを直属とし、ジライを跡取りとする。そういう筋書きでいくはずだったんだが……コマキの野郎、ぶるっちまって話を白紙に戻しやがった。

他の上忍で継嗣も養子もなくジライに執着を抱いているのは、キリュウぐらいしか居ない。あんなドS変態が上司になったら、ジライは一月ももつまい。責め殺されてあの世ゆきだ。

こうとなっちゃ、どこぞの上忍の跡取りにするのは無理だ。頭の怒りが静まるまで最低でも二、三年はかかる。数ヶ月ぐらいなら麻薬を使ってだまし生きられるが、あと数年なんて無理だ。ジライの未来が確かになるのを見届けてから死のうと思った。が、もういいや。こいつは非凡だ。ほっといたって、いずれは、この里の頂点に立つだろう。

ジライが次期頭領となりゃ、ヤマセが参謀となって助けるだろう。俺の前じゃ善良そうな面しか見せねえが、ヤマセは裏で細工をするのが得意な腹黒い男だ。単純な頭のジライの足りねえところは、兄弟子が補うだろう。

諜報部隊の要となったカサギも、ジライを支持するだろう。ジライを使い捨てる気で房中術指導を始めたカサギも、俺の元で頭角を現したジライに驚き、奴が中忍に出世した時には心からの賛辞を送ってくれた。ジライが有能であり続ける限り、異形など気にせず味方してくれるに違いない。

後は……

「なあ、ジライ、おめえ、友達はいるか？」

「友？」ジライは首をかしげた。

「友とは友好関係にある対等な人物の事でございましょう？　居るわけございませぬ。私の周囲には上役と部下しか居りませぬゆえ」

「上役でも部下でもいいや。気の合う奴は居るか？」

「気の合う？」

「……戦場で背中を預けられる奴さ」

「ああ、それならば居ります」

ジライはニッコリと笑みを浮かべた。

「何人も……」

「どんな奴等だ？」

「どんな……？　むぅ、直接の部下ではありませんが、片腕ながら幻術の才を磨き、異形部隊で活躍している男とか。前々から頭の良い男だと目をかけてやっていたのですが、先日、そやつ、女の弟子をとりたいので頭への口ぞえを頼みたいと申してきました。師匠の弟子である私がおなごを蔑視しておるはずがないと見込んで頼むのだとも申しておりました。才があればおなごも実戦部隊に配属してゆき、能力に応じた評価をすべきだと考えているようでした」

「……何てぇ名の奴だ？」

「ジャコウです。他にもガンケイという面白い奴がおります。そやつ、私の房中術にはまっており、許してやると獣のようにこの身にしゃぶりついてくるのですが」

ジライは小さく笑った。

「『天啓が下った！』が口癖の発明好きで、一度、良い案が閃くと、私を裸に剥いた後でも事が及ぶ前でも、もう私など眼中にないのです。発明バカです。そのくせ造るモノは珍奇なモノばかりで、大半がクズなのです」

楽しそうにジライが部下の事を語る。やはり、何も心配する事はなかったのだ。こいつの側には、こいつを支える人間がついているのだ。

「……何かにのめってる奴ぁ、俺も好きだぜ」

「そやつ、このまえ、ようやく使えそうな武器を造りました。からくり式の巨大な卍手裏剣です。人の頭ほどの大きさの手裏剣なのですが、からくりで小さくでき、普段は掌ほどの鉄の塊にしておけます。携帯に便利です」

「ほう」

「金具が硬すぎるので改良するよう命じておるところです。扱いが少々難しいのですが、もう少し自在に扱えるようになったら、師匠にご覧にいれ……」

ジライは口をつぐんだ。その手裏剣をジライが自在に扱えるようになる頃にゃ、俺はこの世に居ないんだ。

「……手裏剣より刀のほうが俺は好きだ」
畳の上のジライの刀へと視線を向けた。ジライ以外、鞘から抜けない魔法剣。こいつが振ると刀身から雨が降る……不思議な刀だ。
「久々に見せてくれよ、『小夜時雨（さよしぐれ）』を」
十年と五ヶ月前、何処で手に入れたのかも何って名前かもわかんなくなっていたこの名刀を、俺はジライに持たせ、抜けと命じた。ジライは何も考えずにこの刀を鞘から抜いた。俺はこの名刀の美しさに魅入られ、刀を振るわせる為だけにジライを手元に置く事にした。
この刀が、俺達を結びつけたのだ。
ジライは己が運命を変えたこの刀に感謝の念を抱いている。『小夜時雨』って名前をつけ大切にしている。
随分前、振れば雨が降る魔法剣の本当の名前を、ヤマセが調べてくれた。『小夜時雨』は三代目勇者の従者であるサムライが所持していた聖なる武器だったのだ。言われてみりゃ、そんなモノを盗んだ記憶もあった。
けど、俺やジライにとって、この刀は『小夜時雨』だ。それ以外の名前なんか、嘘くせぇ。だから、ジライにゃ、この武器の本当の名前を教えていない。
ジライは頷き、『小夜時雨』を手に立ち上がる。
「雨は、今、邪法にて封じてあります。邪法、解いた方がよろしゅうございますか？」
「……そのまんまでいいや。障子を開けて、縁側で振ってくれ」
「承知」
ジライが俺の言葉に従う。
障子の先には……
一面の桜……
庭には、満開の桜が咲き乱れている。
日の光が縁側まで差し込んでいるってのに、ジライは覆面をつけない。素顔のままで『小夜時雨』を抜刀し、宙を切った。

あぁ……風に舞う桜の花びらが……『小夜時雨』が散らす雨のようだ……

『小夜時雨』の刀身には、赤黒い血文字が書かれていた。が、そんな呪など屁でもねえな。『小夜時雨』は冴え冴えと輝いている……

綺麗だ……

目から涙があふれた……

この頃、時々、夢を見る。

育たなかったガキの夢を……

頭に弄ばれた三ヶ月、それから腹がへこむまでの八ヶ月、俺ぁ、忍者じゃなかった。妊娠したくノ一どもと共に保育所の片隅で暮らしながら、俺は毎日、苛々していた。ガキ共の姿を見る度に、ガキ共の声が漏れ聞こえる度に殺意を覚えるほどに。

筋肉を衰えさせたくねえ、早く仕事に復帰したい……それぱっかを考え、腹の中のやっかいものを怨み、消えちまえと思っていた。

そして、身二つになって間もなく……俺の願いは叶った。

突然、呼吸を乱し、高い熱を出して……幼い命は消えた。

あっけなく……半日で……

頭は『出来損ないが、出来損ないを産みおって』と、ガキの骸に唾を吐きかけた。

俺は……

何も感じるものかと思った。赤子は弱いから、簡単にくたばったんだ。弱い奴が自分の弱さのせいで死ぬのは仕方ねえと思おうとした。

けど……本当は……

あの時、頭をぶっ殺して、赤子を抱いて俺も死にたかった……

生まれたばっかの子供を、一人であの世に逝かせたくなかったん

だ……

ヤマセが薬の時間だと言って入って来た。

「粥も食べてくださいね。今日は味付けを変えてみましたから、少しでもいいから口に運んでください」

『お墨付き』は一代限りだが、頭とはもう話がついている。屋敷も道場も頭の所有に戻るものの、多数の流派の剣を会得しているヤマセはこのまんま道場主として屋敷に残る。まあ、空き部屋に頭の部下を住まわせるってこったから、端女も置いてここもけっこうな大所帯となるだろう。

先月、正式に俺の跡を継いで道場主になったってのに、ヤマセには威厳のかけらもねえ。家事ばっかやって、暇さえありゃ俺の世話ばかり焼こうとする。

『小夜時雨』を鞘に収めたジライに、俺は聞いた。

「ジライ。俺ぁ、ヤマセにはこの道場を残してやったが、おめえにやれる金目のモノは何もねえ。いろいろ売り払っちまったんでな……代わりといっちゃ何だが、俺の異名、継いでくんねえか？」

「『白き狂い獅子』の御名を……私が？」

「俺がぶっ倒れてから、俺指名の仕事、代わりにやってくれてたんだろ？　なら、そのまんま、本物になっちまえ」

俺はニヤリと笑った。

「おめえにぴったりの異名だと思うが、どうだ？」

ジライは縁側で三つ指をつき、かしこまった。

「最高の贈り物にございます……ありがたく頂戴いたします。名に恥じぬよう、一層、精進し、『白き狂い獅子』異名が二つとない恐怖の名に高められますよう務めます」

おや？　ジライの目が光っているように見える。見間違いか？

俺の前で泣かなくなって久しいもんな……

「じゃ、『白き狂い獅子』ご指名の仕事はおめえに回すよう、頭に

伝えておくぜ」
「心得ました……それではお名残惜しゅうございますが、私はこれにて……」
頭をあげ、ジライがまっすぐに俺を見つめる。
ひたすら真っ直ぐに……
俺だけを見る。
笑いかけてやると、切れ長の瞳が細められ、静かな笑みがつくられた。穏やかな、諦念の笑みだった……

介添えを受ける弱った姿を、弟子（ジライ）にゃ見られたくない。
俺の心中を察し、ジライは出て行ってくれたのだ。

ヤマセにそのままにしといてくれって言って、障子は開けといてもらった。

舞い散る桜を見ていると、頬がゆるむ。
ジライにも会えたし、異名も継いでもらえた。
後はすっぱり逝くだけだ。

桜が残っているうちに……
この体、処分しちまおう……俺はそう決めた。

桜花　6話（後書き）

『桜花』　完。

＋　＋　＋　＋　＋

師匠が存命ならば、ウズベルを倒した後、処刑されるだけだとわかっていてもジライは忍の里に戻っていたでしょう。

いや、そもそも、師匠がいれば女王様趣味に走らなかったし、『白き狂い獅子』の名を継いでいなければ獲物を弄びすぎる悪い癖もつかなかったし……で、セレスは十三話で暗殺されてしまうのですね。あの時、『勇者の剣』はセレスの手元に無かったし。むぅ。

ジライが抜け忍となってしまったので、師匠の夢は叶いませんでした。が、きっと、あの世で、しょうがねえなあと豪快に笑い、仲間の仇をとったジライを誇らしく思っている事でしょう。

弟弟子が消えた後も、ヤマセは里の上層部に喰らいついて表面上はのどかに過ごしています。師匠の教えを彼なりに貫く為に、陰謀をめぐらせながら。

ジライに多大な影響を与えた師匠を描けて、とても嬉しいです。道徳的には問題のある話ですが、最後までのおつきあい、ありがとうございました。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は『風花』。大魔王討伐後のシャオロンの旅の話です。

風花　1話（前書き）

この物語は、『女勇者セレス――千人斬り事始め編』の『アジャン編』、『ジライ編』、『カルヴェル編（＋終わらない伝説＋夢シリーズの夢の名前）』後の、いずれかのシャオロンです。『カルヴェル編』の後ならば十六歳、そうでなければ十四歳です。どちらでも通用するようにシャオロンの描写はボカしています。

『シャオロン編』のつづきならば傍らにセレスがいるので、これはそれ以外の結末から続く話です。

風花　1話

目を開けるとそこには……

懐かしい景色が広がっていた。

夏の青空の下、周囲は緑の畑。畦道の先に石壁に囲まれた家々が見えた。村だ。奥にはなだらかな丘がありその上にインディラ寺院がある。

今、見ればそれほど大きな村ではない。けれども、子供時分には、そこは、学問所もあり、雑貨屋や食品店もあって生活の全てを揃えられる『都会』だった。兄さん達と一緒に空の荷物入れを背負ってこの隣村まで行き、ふくれあがった荷物を背負ってオレ達の村まで帰るのも修行の一つだった。

「シャオロン？　おまえ、シャオロンじゃないか？」

畑で腰をかがめていた男が顔をあげてこちらを見ている。よく日焼けした、固太りの男だ。

「俺だよ、俺。チンツォ」

「チンツォさん？」

驚いて、よく相手を見つめた。やさしそうな眉にも丸い目にも見覚えがあった。学問所で同じ教室に通った三つ年上の先輩に間違いない。さほど大きくない村の学問所なので、教室は二つしかなく、三つ年上のチンツォさんはオレの同級生だったのだ。

「おひさしぶりです、すっかりご立派になられて」

「それはこっちの台詞だ。大きくなったなあ。で、これから村か？」

「はい。村長さんにご挨拶に」

「俺も行く。おぉい、ちょいと村に戻る」

畑の中から体を起こした女性があいよと返事を返し、ぺこりとオレに頭を下げる。
「西隣の村からもらったばっかなんだ、カカアだ」
そう言うチンツォさんは、ニヤケていた。
健康そうな女性だ。オレは先輩の奥さんに対し、丁寧に挨拶を返した。
手ぬぐいで汗をふきふき畦道にやって来たチンツォさんが、オレにではなく、オレの背後の方に頭を下げる。そこには白髪・白髭の黒のローブの方がいらっしゃるのだ。
「はじめまして。シャオロンのおさななじみのチンツォです」
「わしはシャオロンの従者仲間、カルヴェルと言う」
そう言って、カルヴェル様はホホホと笑われた。
チンツォさんが丸い眼を一層、丸くする。
「カルヴェル様って、あの大魔術師の？」
「いかにも」
「すっげぇ、本物か～！」
チンツォさんが興奮し身を乗り出す。
「カルヴェル様が移動魔法でシャオロンをここまで運んだんですか？」
「さよう」
カルヴェル様はニコニコ笑っている。
「どっから運んだんです？」
「うん？　クリサニアからここまでじゃが」
「すっげぇ！　西のはずれのエウロペから東のはずれのシャイナまでかぁ！　馬で旅しても三月の距離を一瞬で！　本の通りだ！　さすが大魔術師様！」
「ホホホホ。それぐらいちょろいわ」
握手してください！　後で書（サイン）もらえますか？　と、興奮するチンツォさんにカルヴェル様は鷹揚に応えていた。
本？

「お会いできて光栄です、カルヴェル様！　俺、『女勇者セレス』のファンなんです！　あ、俺だけじゃありません、村のみんな、そうなんですよ」
「……『女勇者セレス』、読んだんですか？」と、びっくりしてオレが聞くと、
「あったりまえだろ。ユーシェン様の息子が、勇者の従者になったんだぜ。ずぅっと、村中で、おまえの活躍をおっかけてたよ」
シャイナ一の武闘家だった父さん。父さんやお弟子の方々は、この隣村の方に慕われていた。昔、盗賊団を退治して、その後、拳法をみなさんに教えていたんだ。
「ユーシェン様達があんな事になってしまって……たった一人だけ生き残ったおまえが女勇者様の従者になって旅立ったって聞いて……みんな、心配してたんだよ」
「すみません……ご心配をおかけしてしまって」
「こっちこそ……何もできなくて、すまなかった」
そう言ってから、チンツォさんがニッと明るく笑う。
「『女勇者セレス』、学問所で買ってみんなで回し読みしてるんだ。一冊じゃ間に合わないから、各巻五冊づつ買ってる」
「五冊も……」
「けど、十五巻だけは十冊ある。みんなが何度も読み返すから、十冊ともボロボロなんだぜ」
「十五巻……」
『女勇者セレス』は北方に行くまではオレも読んでいた。
十五巻の巻名は『死の荒野』。大魔王四天王サリエルと魔族に大魔王教徒、それに東国忍者を交えた戦いの巻。
シリーズ中、最も戦闘場面が多く、人気の巻だ。
東国の格闘家の少年シャオロンの見せ場も多い。
何度も何度も読み返したから、オレのもボロボロだ。
うっかり涙を落しちゃったのも、一回や二回じゃないし……
でも……

「あの本、全部が全部、本当の事じゃありませんよ？　鵜呑みにしちゃダメですからね！　現実通りのこともありますけど、結構、作者が想像を交えてるんです。それに、話を面白くするように何事も大袈裟に書いてますから……オレ、サリエル相手にあんな格好いい見栄きってないし、むちゃくちゃに戦ってただけだし……」

「けど、おまえが退治したんだろ？」

チンツォさんがやさしそうに微笑んでいる……

「ユーシェン様とタオ達の体をのっとってた魔族を浄化したの、おまえだろ？」

「……」

オレは頷いた。

チンツォさんは大きい手でオレの頭をポンポンと叩いた。

「すげぇよなあ、あのチビで泣き虫だったシャオロンが……魔族五体倒して、見事、仇をとったんだもんな。おめでとう、シャオロン。無事、帰って来てくれて嬉しいよ」

チンツォさんの手はとても大きく、まるでヤン兄さんに頭を撫でられているようだった。

目の前にいる大人が、同じ教室にいた先輩かと思うと不思議だった。

月日が流れたんだなあと実感した。

村中のみんなが歓迎してくれた。

村長さんにご挨拶をしてからオレは、一升ほどの酒樽に線香一束、干菓子と陶器の器を三十買った。背の荷物入れに全部入れて背負い、その荷物入れに『龍の爪』の入った革袋をしっかり固定すると、オレはカルヴェル様と共にオレの村へと向かった。

移動魔法で隣村のそばに送ってもらったのは、オレ村のあった場

所がどう変わっているかわからないからと、供物を隣村で揃えたかったからだ。品切れで物が買えないようなら、一端、大きな街に運んでやろうとのカルヴェル様のお言葉に甘えさせてもらった。できるなら、オレの村のみんなが馴染みだった隣村で、みんなのモノを買いたかったから。

街道から横道に入り、しばらく進むと村への道は無くなった。道があった場所には草がボウボウに茂っていた。道悪なことをわびると、カルヴェル様は『わしには関わりないことじゃ』とホホホと笑われた。カルヴェル様は空中浮遊の魔法でオレの後ろをついてきている。

供物を背負い自分の足で村まで行きたいというわがままにも、つきあってくださっているんだ。

昔、隣村で買ったものを背負って兄さん達と、冬が終わり春となる前に学問所から村に帰る為にテジュンやレンやタオ兄さんと通った道。

そこを通る者は、もう誰もいないのだ……

最初は草を踏み分け進んだけれども、途中からは右手用の『龍の爪』だけを装備して草を刈って進んだ。『龍の爪』を草刈り鎌の代わりにするなんて恐れ多いんだけど、暗くなる前に村まで行きたかったんだ。

村があった場所では、丈の長い草が風に靡いていた。

歩数で、この辺がテジュンの家、あっちがレンの家、ウォンさんの家はここかと思いながら村の奥へと進む。

丘にのぼった時には、さすがに視界が涙に滲んだ。

何もなかった。
青々と茂る草以外……

父さん……
母さん……
ヤン兄さん……
フェィホン兄さん……
ティエンレン兄さん……
タオ兄さん……

オレは瞼を閉じ、静かに合掌した。

墓地も草に埋もれていた。
『龍の爪』を振るって草を刈る。
すぐに、おや？　と、思った。
墓……と、いうか、盛り土をしただけのものなんだけれど……数が合わない。
多すぎる……
以前からあった二つの墓の近くに、セレス様やナーダ様やアジャンさんそれに隣村の人達に手伝っていただいて、母さん達の亡骸を埋めた。十二人、埋めた。
草を刈り終えて、数を数える。
墓は二十九あった……

オレの村の全員の墓がそこにはあった。

ただ、合掌するしかなかった。

サリエルの部下に殺され、魔族に肉体まで奪われた十五人。父さん、四人の兄さん達、リーさん、ウォンさん達。

遠い異国の空の下にいたオレの代わりに、無念の最期を迎えた魂に安らぎの場を与え追悼してくださったのは、きっと……

隣村の方々……

母さん達を埋めた時、シャイナ教式の埋葬は知らないと、インディラ教徒である事を気にして隣村のみなさんは力仕事しかしなかった。

多分、わざわざシャイナ教の神官を招いて墓を築いてくれたのだろう。

草の茂り具合からいって、少なくとも一年以上前に……

父さんやお弟子の方々は、昔、隣村を盗賊団から守っている。拳法をみなさんに教えてもいた。

父さん達は、この地で愛され慕われていたのだ……

「カルヴェル様……」

「何じゃ？」

ふわふわと宙を舞って来た方に、オレは深々と頭を下げた。

「すみません、墓を作り直すのはやめます」

「ふむ」

従者の任を終えたら、父さん達の眠る場所をつくろう、略式で埋めてしまった母さん達をきちんと葬り直そうと、思っていた。

ずっと、思っていた。

『墓をつくるのなら、わしにも手伝わせてくれ。ユーシェン殿は茶飲み友達の一人じゃった。わしも、お別れがしたい』と、カルヴェル様はおっしゃり、埋葬や祭祀に必要なモノがあれば何でも転送魔法で準備しようとまでおっしゃってくださった。

けれども、この場所には思いがこめられている。

あの時のオレの思いと、隣村のみなさんの思い。

それを、壊すべきではないと思う。

「今、大急ぎで祭壇つくって鎮魂の祭祀をします。後、ちょっとだけお待ちください」

「急がずともよい。おぬしの好きなようにせよ。わしゃあ、待つのは苦ではない。線香の一本でも上げさせてもらえればよいわ」

「で、おぬし、これからどうする？」

祭祀が終わり、日が陰り始めた頃、カルヴェル様がそうおっしゃった。

オレは二十九の墓を眼に映しながら、答えた。

「今日はここに泊まって、明日、改めて隣村にご挨拶に伺います」

「その後は？」

「ジャポネに向かいます」

目を木の幹の側に置いた革袋へと向けた。中には『龍の爪』の両爪が入っている。

「龍神湖へ行きます。古えの神主さんに、左手用の『龍の爪』をお返ししなきゃ」

父さん達の仇そして大魔王ケルベゾールドを倒すまでの間という約束で、お借りしたものだ。返しにいかなくては。

「したら、後日、龍神湖まで移動魔法で送ってやろうか？」

そう問われ、首をひねった。

目的を果たした今、少しでも早くお借りしたものはお返しすべきだろう。

オレの村からジャポネの龍神湖までは、そうとう離れている。セレス様のお供をしていた時は、馬と船の旅で二ヶ月以上かかった。もちろん、魔族や大魔王教徒を退治したり、王侯貴族の方々のお招きに応じたりしてなので、直行したわけじゃない。けど、馬がなければ二ヶ月では厳しいだろう。

田舎のこの村から街道を通ってシャイナを旅し、船でジャポネに渡り、樹海の先にある霊山フジにある社に行くとなるとどれぐらいかかるのか見当もつかなかった。

オレはずっと守られてきた。セレス様に、アジャンさんに、ナーダ様に、ジライさんに、カルヴェル様に……

子供のオレは、みなさんの後を追い、ついて行くだけだった。旅の行く先を決めてもらい、馬を買ってもらい、宿を準備してもらい、食事も衣服も生活に必要なモノも全部与えてもらい……

格闘を、体術を、生きていくうえで必要なことを、言語を、知識を教えていただいて……

ただついて行くだけだった。

「お心遣い、ありがとうございます、カルヴェル様。でも、」

移動魔法で送ってもらえば、一瞬だ。目をつぶって開けば、そこはジャポネの龍神湖だろう。

けど、それは失礼なような気がした。

ただ守られているだけの子供が、『龍の爪』の振るい手なんて変だ。

せめて、真龍の元にお礼に伺う時までには、恥ずかしくない人間になりたい。大人の男になっていたい。

「すみません、オレ、歩いて行きます。自分の足で樹海を乗り越えて、お社まで行きたいんです。そうしなきゃ、いけないと思うんです」

「さようか」

ご好意をお断りして申し訳なかったのだけれど、カルヴェル様はニコニコ笑っていた。嬉しそうにみえる。

「ならば、わしともここまでじゃな。達者での、シャオロン。おぬしの無事な旅と、すこやかな未来を祈る」
「カルヴェル様……今まで本当にありがとうございました！　オレがここまでこられたのも、カルヴェル様やセレス様達のおかげです！」
「うむうむ」
カルヴェル様がホホホホと笑われる。この変わった笑い声を聞くのも、今日が最後か。
「龍神湖に行った後はどうする？」
そう問われ、オレは夢を口にした。
「ペリシャに向かおうかと思います。シャダム様に、バンキグでの事をご報告したいので」
「なるほど」
「それを終えたら……武者修行の旅をしたいです。オレ、まだまだ未熟ですから……シャイナやインディラのいろんな流派の格闘を学びたいんです」
「うむうむ」
「修行に終わりなんてない……シャイナ一の武闘家と称えられた父さんも、ずっと己を鍛え続けていました。オレなんか父さんの足元にも及ばないひよっこですが、いつかは父さんのようになりたいんです……舞のような美しい武を極めたい」
「うむうむ」
「オレの拳の道が見極められたら……この地に戻って、ここで鍛錬を続けようと思います」
「そうか、いずれはここに戻るのか」
「はい」
オレは笑みを浮かべた。
「父さんが亡くなった今、オレがこの村の村長ですから。皆の元にちゃんと帰りますよ」
何年かかるかわからないけれど、絶対……

オレはここに戻り……ここで生きる。
「わしゃあ、まだまだ死ぬ気はないでの、当分、世界をフラフラする」
カルヴェル様はニコニコと笑っていた。
「たまにここにも遊びにこようと思う。おぬしがおらん間はユーシェン殿の墓と語らっておるわ。おぬしが戻って来る日を楽しみにしていよう」

焚き火を焚き、夜空を見上げる。
セレス様達とここで三夜を過ごしたはずなのだけれども、どんな風に過ごしたかはあまり覚えていない。
満天の星を見つめ、せわしくなく虫たちの鳴き声を耳にし、目を閉じる。
覚えているのは……
青い瞳。
せつなそうな……
悲しそうな……
泉よりも、尚、澄んだその瞳が、ずっとオレを見ていた。たった一人生き残ってしまった子供を、ずっと心配そうに見守ってくれていた。
「セレス様……」
オレの声を耳にしてくれる者は誰もいない。
オレは一人だった……
こんな風に一人で夜を過ごすのは、生まれて初めてだった……

旅に出たいと言うオレに、隣村の村長さんはいろいろ教えてくださった。
勇者の従者としてではなく、シャイナ国民として他国へ行くのな

ら手続きが必要なのだそうだ。
村長さんとかインディラ寺院の僧侶様とか身元の確かな方に手紙を書いてもらい、それを持って街の役場に行って書類にしてもらって、シャングハイの出入国管理所で許可をもらって初めてジャポネ行きの船に乗船できるのだそうだ。
農民の旅にはかなり厳しい制限があるけれども、オレは武闘家ユーシェンの息子、手続きはさほど難しくないはずだと村長さんはおっしゃった。皇帝陛下の御前試合で十連覇した父さんは報奨として、末代までの、村のあった場所の所有と納税義務の免除の権利をいただいている。納税義務の無い子供の出国ならば、たいした審査もないはずだと。
オレは村長さんにお礼を言って手紙を受け取り、金子（きんす）を預けた。
村に何かあった時には使って欲しいと。
額の多さに村長さんは驚いていたが、エウロペの国王陛下からいただいた、勇者の従者への報奨金だ。オレにとっては、天から降ってきたようなお金だ。隣村の為に使ってもらえるのなら、その方がいいと思う。中から三分の一だけ抜いて旅の間にアジャンさんから渡してもらっていた護衛料に足したから、路銀は充分なはずだ。
オレが帰って来るまで預かっていようと義理堅くおっしゃる村長さんにお別れの挨拶をし、一人、龍神湖への旅に出た。

風花　2話

甘かった……

オレは自分の甘さを嫌というほど噛み締めた。

勇者の従者というものを、オレは甘く見ていた。

ご立派なのは女勇者のセレス様であり、大僧正候補のナーダ様であり、両手剣の達人のアジャンさんであり、忍の里一の忍者のジライさんであり、大魔術師のカルヴェル様であり、オレなんかオマケだったはずなのに……

昔から、大魔王退治に加わった従者は『英雄』と称えられてきた。セレス様のお話でその事は伺っていたし、アジャンさんもそういえば言っていた『金と名声の為に従者になったのだ』と。

『勇者の従者』とは比類なき豪傑……のようなイメージが世間に定着しているのだ。超一流の戦士、超一流の魔法使い、超一流の聖職者……ともかくも立派な人物……と、世には信じられているのだ。

通行書を見せると、どこでも騒動になった。皆、目の色を変えてオレに群がる。

正体を隠していても見知らぬ人から『シャオロンさんですよね？』と声をかけられてしまう。街道でも、街中でも、店先でも、宿屋でも、オレは注目の的となってしまった。

『女勇者セレス』にオレの容姿の描写があるせいだろうか？　あれ

は美化しすぎなんだけれども……『かぼそい』、『小柄』、『少女めいたやさしい顔立ち』、『首の後ろで一つに束ねた黒髪』、『つぶらな黒い瞳』、『眉は細く鼻も口元もかわいらしく』、『溌剌とした健康的な美しさ』、『道着姿』、『龍の爪入り革袋を背負う』……。

冒険読本の登場人物の一人で、東国シャイナ出身の従者。すっかり忘れてたけれど、オレはシャイナやジャポネでは人気者だったんだ。

周囲を見知らぬ人達に囲まれた時、何度か財布を盗まれかけた。でも、アジャンさんにスリから身を守る方法を幾つか教わっていたので、大事にはならなかった。金袋に鈴をつける、金袋を何重にも体に結びつけておく、金目のものは分散して持つ、普段使い用の金袋には小銭しか入れないなどなど。

アジャンさんは、大金を持ってる時は決して気をぬくなと言っていた。靴底やベルトの内側に隠す方法や衣服に縫いつける方法も教えてくださった。『スリや追いはぎはチョロそうな奴を狙う。女子供も狙われやすい。格闘家らしく、少しでも強そうにみせかけ、気合で盗人をおっぱらえ』。

眠る時も体に巻きつけておき、人に預ける時はその人の目の前で金額を数えて幾らあるか文字にして残しておく。

従者騒動のおかげで人に囲まれすぎ、オレは始終周囲に注意を払っていなければいけなかった。

なるべく目立たない恰好をした。でも、関所や役所では通行書を見せないわけにはいかない。役人からその上司、更には県令様までもがオレを館に招待したがった。

断りきれずに応じると、とても疲れることになる。

歓迎の宴が開かれ、招待主は、オレに演武を求め、旅の冒険譚をねだり、書を願い……。

『英雄』とおだてる方、この子供が何で『英雄』なんだ？　とオレに疑惑の目を向ける方、珍獣を見るような目を向ける方、オレを女と間違えてるのかベタベタしてくる方……

手合わせを願われる事も多かった。招待主本人と戦う事もあったけれども、だいたいはその人物が見込んだ武人との戦いとなった。挑戦者が十人なんてこともあった。

オレはあいかわらず痩せていて、腕力も弱いままだ。何かの間違いで『英雄』となってしまった子供に勝ち、自分こそ『英雄』となりたいと、皆、思っていたのだろう。オレを見下し、意気揚々と挑んでくる方がとても多かった。

オレは修行中の未熟な身であり、魔族相手に戦えてこられたのも『龍の爪』に助けられたからこそと断った上で、ユーシェンの息子として勝負に応じた。よほどの事情がない限り、挑戦は断らなかった。

『龍の爪』を装備して闘う時もあれば、外して闘う時もあった。

武者修行を望んでいたオレにしてみれば、対戦相手にことかかない状況は本来は喜ぶべき事なのだけれども……

残念なことに、闘うべき戦士はめったにいなかった。何々流の師範とか砦一の使い手とか何々軍仕官とか肩書きは立派でも、闘ってみると、攻撃の組み立てが稚拙だったりした。アジャンさんのような奇抜な攻撃をしかけてくる方も、ナーダ様のような多彩な攻撃をしかけてくる方もおらず、彼等の動きは止まって見えるほど遅すぎた。

筋肉隆々な対戦相手との素手での対戦でも、怖くなかった。相手の拳をくらえば一撃でオレは沈みかねないが、避けきれればどんな攻撃も怖くない。腕力がないオレの攻撃でも重ねて当ててゆけば相手にダメージを与えてゆける。オレの動きについてゆけず、疲れて対戦途中でヘバってしまう情けない方もいた。

父さんや兄さん達、村のみんなや、ナーダ様とインディラの武闘僧の方々を見てきたオレには、街一の使い手とかは信じがたい実力だった。この程度の腕で道場が持てるのかと……驚くばかりだった。

「『勇者の従者シャオロン』だな？」

街道で声をかけられた時は、うんざりした。

又か、と。

髪を三つあみにし、衣装もただの袍にあらため、『龍の爪』の入った革袋も荷物入れの中にしまっているのに、何故、わかってしまうのだろう？　ジライさんから変装術を習っておけば良かったと、つくづく後悔する。

「俺の名はリューハン。南拳の流れを組む者だ。お手合わせ願いたい」

相手はまだ若い。背もさほど変わらないし、体型も同じようなもの……目は丸く頬はふっくらしている。年下かもしれない。背には不釣合いなほど大きな荷物があった。買い付け帰りの商人にも見える。

「申し訳ありません、お断りします」

オレは丁寧に断った。が、これで引き下がってくれる人は滅多に居ない。リューハンもオレの後を追っかけてきて、歩調をオレに合わせる。対戦に応じるまでずっとまとわりついてくるだろう。

「待てよ、頼む、俺と対戦してくれ。なあ、それほど時間はとらせない。十分だ！　十分あれば俺が勝ってみせる。すぐに勝負をつけてやるからさ」

どうして、みんな、こうも自信過剰なのだろう？　相手の実力をきちんと測る前に、五分で倒すだの、十分で終わらせるだの……対戦しないうちにそんな事を言い切る神経が信じられない。

アジャンさんなら言うかもしれないけど……相手を怒らせる為に『三分でカタをつけてやる』と挑発して、カッとなって挑んできた

相手を瞬殺して『すまん、一分もかからなかった』とかニヤリと笑って言いそうだ。
「日が陰るまでに次の宿場町に行きたいんです。お相手をしている暇はありません」
「じゃ、街についたらやろう。宿についたらで、俺は構わないから」
あなたが構わなくてもオレが構う。まったく、もう……。
「街の何処で対戦するって言うんです？　この先の街にお知り合いの道場でもあるのですか？」
「そんなものあるかよ。俺はウンナン出身だ。北に知り合いなんかいねえよ」
「ウンナン……」
懐かしい県名に思わず足が止まった。
その県名にオレが反応するのを、相手は見通していたんだ。
「オレが前に通っていた道場は『死の荒野』のすぐそばなんだ」
オレが振り返ると、リューハンはニィィッと口を広げて笑った。
「『女勇者セレス』の十五巻、俺、百回以上読んだんだぜ」
「あれは……娯楽本です。現実とは違います」
「けど、シャイナイ一(いち)の武闘家ユーシェンを倒したのは、息子のあんただ」
「オレの実力じゃありません」
きっぱりとオレは答えた。
「『龍の爪』の力のおかげです。相手が魔族だったから倒せたんで、父が人間のままだったのなら百遍やったら百遍ともオレが負けますよ」
「そうだろう？　そうだと俺も思うよ」
リューハンはニカッと笑った。
「でも、あんたは勝った。大切なのはそこなんだよ。腕力のない人間が、戦い方次第では拳法の達人に勝ってしまう。俺の目指している拳はそれなんだ」
リューハンは右袖をめくり、ちからこぶをつくってみせた。オレ

が言うのも何だけど……格闘家にしては細い腕だ。
「遺伝だか体質だか知らねえけど」
リューハンは苦笑を浮かべる。
「いくら鍛えても駄目なんだ。これ以上、筋肉がつかねえ」
「それは……」
オレは共感を覚えながら、言葉を続けた。
「もう少し大きくなれば……」
リューハンはムッとしてオレを睨んだ。
「なるかよ、俺、二十越えてるんだぞ」
「二十？」
びっくりした。小柄だし、年下かと……
「俺ぁ、童顔の、痩せっぽちの筋肉の小男だ。けど、俺の三倍はある熊男を倒した事もある。俺とやりゃあ、あんたも楽しめると思うぜ」
自信たっぷりに笑うその顔は……何となくだけど、アジャンさんを思い出させた。外見は全然似てないけど。
憎めない。
自然と笑みがこぼれた。
「わかりました、対戦しましょう」
「おお？　やった、あんた、話、わかるな。どっか広い所でやるか？　まあ、俺は街に着いてからでも、本当、構わないんだぜ、部屋の中でも道端でも屋根の上でも」
「は？」
重たそうな荷物を背負ったままなのに、リューハンは右足を曲げてあげ、左足だけで佇んだ。まったく揺らぎのない姿勢で。
「南拳は、ぴょんぴょこ飛び跳ね回る北拳とは違う。足が立つ場所さえありゃ、何処でだって戦える。小船の上でも塀の上でも屋根の上でも、な」
跳躍や蹴りを技に多く組み込んでいる北拳は広い場所でなければ、技の大半を封印しなければいけないと言われている。父さんの拳法

も基本は北拳だ。しかし、いかなる場所でいかなる敵とも戦える…
…それが父さんの拳法だ。
「狭い宿屋で家具も壁も床も壊さずに闘えるんですか？」
「俺はできる。けど、あんたが出来るかどうかは俺は保証しない」
リューハンは自信満々の顔でオレに言う。
「こうしないか？　宿屋の大部屋を二人で借りる。で、対戦だ。宿屋のモノを何か壊したり汚したら、やった方が弁償する。攻撃をすかされて勢いあまって何か壊したら壊した奴が払う、拳をくらって受身をとれず何か壊したら拳をくらった方が払う。拳の勝負と弁償額の勝負の二本立てだ、おもしろそうだろ？」

宿屋の離れを借りきる頃には、リューハンとすっかり意気投合していた。
鋼鉄のように頑丈な体、筋肉隆々たる腕や脚。それは、格闘家として理想型の一端であることは間違いない。
しかし、武闘の道は奥深くそして広い。
痩せた体で、腕の力や脚力に欠けていても武を極められる。リューハンはそう考えていた。
オレも、同じ考えだった。

宿屋の離れは十六人用の長方形の相部屋で　八つの寝台が左右の列に別れて並んでいた。床も壁も木製の安っぽい造りで少し強く踏むだけで穴を空けてしまいそうだ。
互いの荷物を部屋の端に置き、準備を整える。道着に着替えたオレ。リューハンはずっと体の慣らしをやっていた。
拳を構え対峙した。左右の寝台の列の間の細長く狭い通路で向き合っているのだ。
オレは『龍の爪』は付けていない。こんな狭い場所で爪武器をつ

けたら何かを壊してしまうだろうし、素手のリューハンに対し対等じゃなくなってしまう。

腰をややかがめ、両脚を大きく開いて右手を上に左手を下に向けて拳を構えるオレ。

足をあまり開かず膝を曲げ、背はほぼ直立で、拳を構えるリューハン。

南拳の使い手との対戦は初めてではなかった。が、リューハンは隙なく、しなやかに立っている。綺麗な型だと思う。

オレは摺り足でジリジリと距離をつめていった。

さて、どうしかけるか……

オレの拳には威力がない。素早さと目の良さを生かして相手の攻撃を避け、同じ箇所に攻撃を重ね当てる事で今までどうにか闘ってきた。しかし、自由に動き回れない狭い場所では相手の攻撃を避けようにも、場所がない。やれる事は限られる。

こんな場所での対戦相手がオレと同じ腕力のない人間だったのは幸いだろう。拳の全てを避ける必要はない。多少喰らっても大丈夫だ。相手の拳や蹴りを受けてからの反撃も可能だろう。

リューハンは悠然と構えている。こちらの出方を見ているのだ。

ならば、様子をみようと、オレは一気に距離をつめ、掌を突き上げた。

しかし……

「え？」

突こうと思ったと瞬間、リューハンが見えなくなる。

視界が大きな布で覆われてしまったのだ。

何だ？　と、思う間もなく、左頬に痛烈な痛みを感じ、右列の寝台の上に倒れていた。

蹴られたのだ。

オレは寝台の上を後転し、上半身にかぶさっていたものを投げ捨て、その場からすぐに動いた。

寝台に鋭い突き。

オレの後を追うように、リューハンの両の拳が宙をつく
寝台の上に足をついて立ち上がろうとすると、リューハンがニヤリと笑った。
「はい、シーツ1」
リューハンは顎でオレの足元をしゃくった。
オレは靴を履いたまま、寝台の上に立っている……靴の裏で宿の備品を汚してしまったのだ。
一瞬、動揺してしまったオレはリューハンに簡単に距離をつめられてしまった。
足場の悪い寝台の上でオレとリューハンは、拳と蹴りの応酬をする。腰を落としてしっかりと踏ん張るリューハンの姿勢は、寝台の上でも揺らぎをみせない。すばらしい平衡感覚だ。
その上……
「はい、シーツ2、毛布3」
体勢を整える為に寝台の上を移動すると、いちいちリューハンは大きな声で指摘する。オレの靴が何に足型をつけたのかを。
一度だけにやりと笑って、リューハンは高い蹴りを放った。後方に飛び退ったオレの目にリューハンの右の足が見えた。素足だ。対戦前に靴を脱いでいたのだ……
寝台の上で闘えば闘うほど、オレの弁償するモノが増えてゆくわけだ……
寝台から下りると、又もや、視界が布で覆われる。
毛布だ。
さっきもこれを顔に投げられ、視界を奪われたのだ。
だが、この後の拳は後方に飛び、綺麗によけた。攻撃が来るとわかっていれば、避けられる。オレは毛布を投げ捨て、リューハンと拳を交わし、受け流した。
リューハンに対し、汚い！　と、思う気持ちもあった。しかし、今日の対戦は、約束事の決まった試合ではない。周囲のものを利用してはいけないという決め事（ルール）はなかった。ならば、なにをしても間

違ってはいない。オレの失敗を指摘して平静さを失わせるのも、心理戦だ。上手な戦い方だ。

ジライさんは虚をつく戦いが得意だった。

ナーダ様も正面から堂々と戦う事を好まれながらも、必要ならば策を弄し敵を罠にはめていた。

アジャンさんも敵を見極め、敵の意表をつく攻撃をしろと言っていた。

恥じるべきは……冷静さを失い、己の拳を振るえていない自分自身だ。

リューハンは彼の流儀で、正しく闘っている。

オレはオレの闘い方で勝てばいいんだ。

落ち着いて見れば……

リューハンの拳は早いけれども……

目で追えないほどじゃない。

それに拳や蹴りの攻撃は軽いし、組み立ては型どおりで単調だ。

防ぎやすいし、読みやすい。

ナーダ様との稽古より遥かに楽だ。素早さではオレはナーダ様には勝っていたけど……ナーダ様はオレの動きを読み、その場その場に応じた適格な対応をする。よほどの事がない限り、一本も取れなかった。オレが無茶な姿勢から甘い攻撃をすると、それをとがめるかのようにナーダ様はたやすく避けて重く鋭い拳や蹴りを放ちオレの前でぴたりと止めた。くらったらオレが再起不能になっちゃう攻撃を綺麗に寸止めしてくださっていた。

相手の動きの流れを読み、次に手足をどう動かすつもりなのか先読みする……

右の正拳づきがくるのがわかった……

リューハンの右の拳を避け、彼の右腕をつかんで固定し、すかさず腹に拳を叩き込んだ。

「ぐっ！」

よろけたところを二発、三発と入れていく。

相手が首筋をみせたところで、手刀をそこへ振り下ろした。
あっけなく……リューハンは床に沈んだ。
気を失ったのだ。
オレの勝ちだ！
「……」
オレはうつ伏せに床に倒れこんだリューハンの首を、ちょっとだけ動かしてみた。
完全に白目をむいてる……
「……」
えっと……
これ……大丈夫……だよね？
ナーダ様直伝の手刀、初めて人に使ってみたんだけど……気絶させて、意識を奪うやつ……
打ちすえた箇所は間違ってないはずだ……
でも……
リューハンはぴくりとも動かない……
「……」
オレは急いで離れを飛び出し、宿屋の本館へと向かった。医者を呼んでもらう為に。

「完敗だ」
寝台で目覚めてすぐ、リューハンは参ったと頭を下げた。
オレは苦笑いを浮かべ、宿屋のご主人から渡された請求書を見せた。
『洗濯代　毛布5、シーツ6』
「場所を利用しての戦いはオレの完敗です」
オレはリューハンに対し、参りましたと頭を下げた。

シャングハイまでオレはリューハンと旅をした。
南拳の拳法着を借り、リューハンの弟弟子に変装して。泥で顔を汚す事も、たまにやった。
リューハンと一緒になってから、驚くほど旅は順調になった。『シャオロンさんですね？』と、声をかけられることも、身動きできなくなるほど周囲を囲まれる事もない。通行書を見せない限り騒動は起きなかった。
「だから言ったろ？」
リューハンが得意そうに笑う。
「俺らが探していた『英雄』は、一人旅の束髪の顔のいい少年だ。あんた、袍を着て誤魔化そうとしてたけど、そんなんじゃ格闘家は騙せないよ。身のこなしが良すぎるから、動きを見れば、何か武術をやってるってバレバレだ。変装の為に着替えるんなら、あんたが絶対、着ない服がいいんだ」
父さんは北拳の流れを組んでいる。息子のオレが南拳の稽古着を着るなどありえない事だ。
「ま、女拳法家の服でも良かったんだけど」
へへへとリューハンが笑う。
「それはそれで目立って困ったろう。美少女格闘家なんて。気色悪いおっかけにつきまとわれかねないよな」
リューハンは軽口好きの明るい性格だった。オレより年上なんだけれども、とても気安く、同年代の友のように思えた。あてのない武者修行の途中だったリューハンは、ジャポネに向かう俺の為に共にシャングハイを目指してくれたのだ。そのことを礼に述べると、
「良いってことよ。北拳に興味があったから北を目指してたけど、別に急ぐ旅じゃなかったし。シャングハイにゃ拳法道場がいっぱいある。尊敬できる師に出会えるかもしれない」
道中で、二人で組み手をし、互いの技を教え合ったりした。どちらも師でどちらも弟子だった。逆立ちして人差し指一本で立てるリューハンの平衡感覚には脱帽ものだし、そこにあるものを何でも利

用し何でも武器とする柔軟性には見習うべきものが多かった。
「なあ、シャオロン、あんた、いつか故郷の村に帰るんだろ？」
何時になるかわからないけれど自分の拳の道が見えたら帰ると答えると、
「したら、その時、オレを弟子にしてくれよ」
と、頼まれた。未熟なオレが弟子なんて……それに、リューハンだって自分の拳の道を探しているのに、何でオレなんかの弟子に？
自分で拳を極めて道場を開けばいいじゃないか。
「いやだ。あんたの弟子がいい」
リューハンはニッと笑った。
「御前試合十連覇でユーシェンが皇帝陛下からいただいた権利は、息子のあんたが継ぐんだろ？　いざという時に皇帝陛下の為の拳となる約束の下に、武闘家ユーシェンとその家族及び弟子は末代まで、土地を所有し納税の義務を免除されて暮らせるんだ。土地も家も持たない貧乏格闘家には、夢のような暮らしさ」
半ば冗談、半ば本気でリューハンは言う。
「あんたの拳と俺の拳は似ている。互いに精進し切磋琢磨してりゃ、互いに拳の理想の型が見えるかもしれないぜ？」

シャングハイでリューハンと別れた。
変装用にやるよと言われ、南拳の拳法着はいただいてしまった。
お礼に……と、言っても渡せるものが無かったので、代わりにオレの道着を一揃え渡した。
変装用にするわ、と、ケラケラ笑ってリューハンはオレの道着を背の荷物入れにしまった。

わざわざ港までついて来てくれたリューハンは、煩雑な出国手続きの間もそばにいてくれた。

リューハンに見送られ、オレは船に乗り、ジャポネを目指した。

風花　3話

ジャポネに着いたオレは不本意ながら馬を買った。

シャングハイでジャポネ通の旅人に聞いたのだ。霊山フジへの案内人は、春から秋までしか仕事をしないのだそうだ。

考えれば当然だ。凍える雪の中、樹海を抜けたいなんて酔狂な客がいるはずがない。案内人だって嫌だろう。ただでさえ樹海は危険なのに、寒さが重なったら凍死の危険まで増える。対策用の装備も増えてしまうはずだ。

霊山の近くの村に向かうまで、オレは気が気でなかった。

方向感覚を狂わす暗く深い樹海を、案内人無しで越えるなんて、不可能だ。むろん、アジャンさんは別だけど……。オレにもそこそこ霊的な力があるけど、アジャンさんのような自分の進むべき道がわかるなんて能力、オレにはない。

夜はジャポネ式の宿屋に泊まった。

東国風の寝巻きを着て、畳部屋で、布団に入るといろんな事を思い出してしまう。

セレス様はジャポネ式の枕がお嫌いだった。

結った髪を崩さないように、ジャポネ人は頭ではなく首に硬い枕を当てて眠る。

使うと頭が痛くなるのよと苦笑を浮かべて、ジャポネ式枕をよけて、畳んだ衣服を枕代わりにしてセレス様は眠った。

でも、枕なんて、いつも、眠って数分までしか使ってなかった。

ジャポネでは、夜のセレス様はひどい暴れん坊だった……
いろんな事を思い出しすぎて、頭に血がのぼって……
いけないなあと思いながら、布団の中でゴソゴソしてしまった。

あの頃、オレ、ガキで本当に良かったと思う。
今のオレじゃ……セレス様と同じ部屋で眠るなんて無理だ。警護なんて、絶対、できない。

暗闇の中、天井を見上げてるうち、思い出した。
そういえば、夜のお話もジャポネから始まったのだ。
セレス様は歴代勇者様と従者様達の物語をオレに聞かせてくださった。ご先祖様の活躍を話せるのが、嬉しくって嬉しくってたまらないって感じだった。
二代目勇者一行の話もジャポネで伺ったのだ。
シャダム様とゲラスゴーラグン様がユーリア様のことで激しく意見を戦わせ死ぬまで対立したと聞いた時、悲しくなった。
その頃は、真実など知らなかったけど……
共に戦い助け合った仲間が死ぬまで敵対し分かり合えなかったなんて、悲しすぎると思った。
セレス様やアジャンさんやナーダ様と敵対するのも嫌だったし、お三人が敵対する姿も絶対、見たくないと思った。
ずっと、皆、仲間で笑い合っていたいと思った……

しんと静まり返った部屋に聞こえるのは、オレの息だけ。
夜の闇の中、オレは一人だった……

「聞けませんな」
囲炉裏端に座る、髭面の男性達。五人いる。その中の一番年配の男――案内人の胴元が渋い顔でこう言った。
「もう十一月も終わりです。我等の仕事はお山が冬支度を整える前までと、昔から掟で決まっております」
「掟ですか……？」
胴元は頷く。着物の上に獣の皮のチョッキをまとった、猟師みたいな格好をしている。彼等は半猟半農で霊山のそばに暮らし、求めがあれば案内人の仕事を副業でこなしているのだそうだ。小さな村には粗末な家々が並び、暮らし向きが決して豊かではない事がわかる。案内の報酬は彼等にとって結構な収入になっていることだろう。しかし……
「冬は我等は樹海にすら入りません。冬には龍神様が霊山をお散歩なさる。人はお山に近づいてはならぬのです」
それは違う……
オレは知っている。
龍が教えてくれたのだ。
龍神湖に眠る龍は決して目覚める事はない。そして決して眠る事なく、水底で半睡しているのだ。
龍が半睡し続ける限り、この国ジャポネは緑豊かな豊穣の国となる。けれども、龍が真に目覚め、龍神湖より離れる時、この国は水中に沈む運命にあるのだ。
龍が動けばジャポネは滅びるのだ。散歩するなどありえない。
しかし、ニ百年以上も道案内人をつとめてきた一族に、あなた方が守っている掟は何の実もないものですと教えても無意味だ。龍と共感して知った知識では、証拠など何一つない。間違いを指摘したところで、相手の機嫌を損ねるだけで、道案内などしてもらえないだろう。
「あなたが『龍の爪』の今世の所有者である事も、尊きリンチェン様のご子孫である事も重々、承知しております。龍神様にお爪をお

返しにいらしたのだというご事情も、よくわかりました。しかし、我々はもう龍神様のお怒りを買いたくはないのです。どうか、春までお待ちください。春になればお社までご案内いたします」

春というのは早くて三月半ばの事なのだそうだ。がっくりと力が抜けた。

意地を張らず、カルヴェル様にお願いして龍神湖に運んでもらえば良かったのかもしれない。そうすれば八月に左手用の『龍の爪』をお返しできたのに。来年春まで龍をお待たせしてしまうなんて、申し訳ない。

「×××、××××リンチェン×××××××。×××××××××××××××、××××××××××××××

後半は掌を相手側に向けて聞いた。髭ばかり目立つけど、目は大きい。二十にもなっていないかも。若い男は愛想のない顔で答えた。
「アキフサ」

アキフサの案内で翌日、オレは案内人の家を離れ、樹海に入った。馬は胴元の家に預けた。
旅立つ前、案内人の胴元が共通語を話せないアキフサの代わりに、樹海を進む上での注意点をいくつか伝えた。
「樹海では獣除けの香を衣服に焚きこめ、野営時には火にくべます。薄荷をもとにした少々刺激の強い匂いがしますが、無害ですので、匂いにお慣れください」
「わかりました」
「これからの季節、餌が足りず、獣達は飢えます。樹海の中での狩りはお慎みください。ただでさえ少ない餌を、本来、そこにいない者が奪ってはいけません」
「承知しました」
「それと、これは必ず守っていただきたいのですが……」
胴元はチラリとアキフサを見つめた。
「災厄に見舞われましたら、あなたがたは表道を通ってはなりません。来た道とは違う道を通って、この村以外の地へ行き、そして、二度とこの村に来ないでいただきたい」
「え？」
「後日、文にてご連絡いただければ、馬は人づてにお返しいたします。ですが、決して、あなたもアキフサも、村には戻らず、村人と接触しませんよう願います」
「……どういうことですか？」
案内人の胴元は、暗い顔で答えた。
「我々フジの案内人の一族は、龍神様の恩寵を失った一族と言われています。遠い昔、我等は龍神様のお怒りを買いました。二度と龍

神様のお心にかなわぬ事をすまいと我等は誓っております。アキフサは禁を破ってでもお爪を龍神様にお返しすることこそが龍神様へのご奉公とかたくなに信じておりますゆえ、こたびの旅立ちを許しましたが……あなた方が龍神様のお怒りに触れ穢れた時は、それはあなた方の罪、我等にその罪を及ぼさないでいただきたい」

「あちらでなにか災いがあったら、ここに戻って来てはいけないのですか？　オレだけでなく、この村のアキフサまで？」

胴元は頷いた。

「アキフサは穢れたら帰らぬ覚悟です。それゆえ、あなたを龍神湖にご案内する事を許したのです」

びっくりした。

冬に霊山に向かうのが、そんなたいへんな事とはオレは知らなかった。

そんなだいそれた事とは知らず願いました、ご迷惑はおかけしたくない、春まで待ちますと言うと、胴元はアキフサとしばらく話し、苦笑を浮かべてオレに言った。

「『借りたものをすぐに返すのが、人間の礼儀だ。おまえが行きたくないのなら、その爪を持って、俺が一人で龍神湖へ返しに行く』と、言っています。こいつは頑固な奴で……。言い出したら聞きません。アキフサに対し悪いとお思いでしたら、もしもの時はアキフサを見捨てず下男にでもお雇いください」

オレは恐縮しながら、もしもの時は責任をもってお預かりますと答えた。

「ありがたい。これで安堵して見送れます。どうかアキフサを……私の末の弟をよろしくお願いします」

山のような荷物を背負うアキフサの後を、オレはついて歩いた。

樹海には、日の光がほとんど差し込んでこない。奇妙な形にねじれた木が絡み合い、天を覆っているからだ。足元がぐちゃぐちゃに

ぬかるんでいて歩きづらかったが、アキフサはひょいひょいと軽々と進んでゆく。重い荷物をまったく苦にせず。

前に来た時は寝る前に蚊帳を張ったが、アキフサは簡単な天幕のようなものを張った。火を起こし、香を焚く。竹筒にいれてきた水と持って来たオニギリで食事をする。わかりやすい共通語でゆっくりと話しかけてみた。が、アキフサは無視して黙々と食事をしていた。

アキフサは長い箸で火の中から熱を帯びた小石を取り出し袋に包んで、自分の分を作り、オレに渡す分までを作った。身振りで懐に入れろというアキフサにオレは頷きを返した。懐炉だ。ケルティで同じようなモノの取り扱い方を、ジライさんから教わったから知っている。

「ありがとう」

アキフサは何も言わず、さっさと天幕に入った。

懐炉を抱いて、寝袋に入り体をくっつけあうと、暖かかった。

アキフサはいつもムスッとした顔をしていてしゃべらない。嫌われているのだろうか？　言葉が通じないから話すのが面倒なだけと思いたいが。

オレのせいでこの人は故郷の村に二度と帰れなくなるかもしれないのだ。申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、謝るのは間違っている、この人の好意を無にしてしまう。

だから、感謝の気持ちだけを伝える事にした。

「案内、ありがとう、ございます。感謝　してます」

わかりやすいように単語を区切って伝えた。アキフサから返事はなかった。が、構わなかった。

「おやすみなさい。明日も、お願い、します」

三日後、樹海を抜け、野原に出た。

常緑の多年草のみが残る野原が遠くまで続き……

北に霊山が天へとそびえ、その山裾の東には日の光にきらめく大きな湖が見えた。深い蒼の湖――龍神湖だ。
目がどうしても湖へと向いてしまう。
帰って来たのだ……
オレの胸はたまらなく熱くなった。
心が妙に浮き立っている……
これはオレの感情なのだろうか？　それとも……？
オレの横でアキフサが湖へと合掌していた。
そういえば、ナーダ様もやっていた。
人よりも神に近きもの、神獣である龍。そのすまう湖を称えて。
オレもアキフサに倣って、湖へと手を合わせた。

それから、オレ達は山裾の社を目指したのだけれども……

歩いているうちに、ゾクゾクッと悪寒が走り……
次第に体が重くなり、頭が猛烈に痛くなり、気が遠くなってゆき……

何か大きな光を見た気がした……
目もくらむまばゆい光を……

で、気がついた時には、オレは寝袋の中にいた。

天幕の中だ。
辺りが薄暗い。

寝袋から出ると、すぐそばに旅の間ずっと背負っていた革袋があったのでそれを手に、外に出た。
焚き火の前のアキフサが振り返った。
西からの夕日にアキフサの顔が赤く染まる。
「シャオロン」
アキフサが笑う。笑った顔、初めて見た気がした。いつも不機嫌そうな顔で、自分の仕事を黙々とこなしていたから。
場所は……野原の外れのようだ。遠くに霊山と湖が、すぐそばに樹海の入口へとつながる丈の低い木の林が見える。
「水」
オレはアキフサの横に座り、竹筒を受け取って喉を潤した。
オレは倒れたのだろうか……？
それとも、前、来た時みたいにトリップ状態になってしまったのだろうか？
あの時、オレは龍と交信し、それから古えの神主さんに憑依されたアジャンさんと格闘で闘ったんだ。古えの神主さんは、格闘の達人だった。あれほど強い人は……父さんかナーダ様ぐらいしか知らない。
ひと心地ついてから、オレは革袋の口を開けてみた。
袋に固定されてしまわれている、鋭く光る五本の銀の爪と黒い小手。二つあったはずのモノが片方ない。
左手用『龍の爪』が無くなっている。
「カンヌシさま、きた」
「え？」
アキフサはオレを指差した。
「カンヌシさま、左、ツメ、まんぞく。おまえ、まぞく、ツメ、コロす、した。まぞく、きえる、リュウ、よろこぶ、した。ありがとう、シャオロン、うけとる、左、ツメ」
アキフサはずっとオレを指差し続ける。
「ありがとう、まぞく、コロす。ミギ、ツメ、持つ、つづける、ゆ

るす。おまえ、こども、まご、ずっと」
アキフサが何を言おうとしているのか、だいたいわかった。
多分……オレの体に古えの神主さんが憑依したのだろう。古えの神主さんは左の『龍の爪』を受け取り、リンチェン様の子孫であるオレの一族にこれからも右の爪を託すとおっしゃったのだろう。

汝、魔を憎み、龍と共鳴し、戦えるか？
汝、我が爪を己が爪とし、魔族を切り裂けるか？

龍の思念が心に甦る。右爪をもって邪悪と戦い続けよと……龍も古えの神主さんも望んでいるのだ。

左の爪はどこへ行ったのだろう……？
社に納められたのか……
神主さんの魔法で異次元へいったのか……
龍のもとへ返ったのか……

自分の左手を右手で握った。
この手が『龍の爪』を装備する事は、もう二度とないのだ。
そう思うと、とても寂しかった。
父さんや兄さん達を魔の呪縛から解放したのは、左側の爪だったのだ……

肝心な時に意識がなかったのが残念だ。どんな風に爪は消えたのだろう。

アキフサに聞こうにも、どう尋ねたら良いのかわからなかった。簡単な単語だけで事情を聞くのには無理がある。

どうしようかと首を傾げているとオレが口を開くよりも前に、アキフサが言った。

「シャオロン、聞け」

命令だ。しかし、言葉とは逆に、アキフサは急に地面にしゃがみ土下座した。

「ありがとう、シャオロン、わざわい、ない。おまえ、ありがとう、俺、みんな」

「え？」

「おまえ、センセイ」

「え？」

「俺、つれてけ」

「え？」

アキフサは顔をあげ、まっすぐにオレを見つめた。

「俺、デシ。一生、おまえ、センセイ、行く、いっしょ」

「あなた様こそ、我が一族の救い主です」

案内人の胴元は囲炉裏端で、オレに深々と頭を下げていた。オレの後ろにいるアキフサも同じように頭を下げている。

龍神湖以後、弟子になると言ってアキフサはきかないのだ。が、オレはジャポネ語を話せないし、アキフサはシャイナ語はもちろん共通語すらほとんど話せない。何故、弟子になりたいのかさっぱりわからないまま、樹海を抜け、アキフサの一族の村に戻ってきたのだ。

共通語が話せる案内人の胴元は、アキフサから事情を聞くと、オレに対し平身低頭をした。

「我々フジの案内人の一族は、その昔、龍神湖そばの社の神主職を務めておりました。龍神様はご先祖様を愛され、一族は富貴を約束

されていました。常に富と共にあり、土地は豊かで、子宝にも恵まれました。しかし、インディラ信仰が広まった時代、世が龍信仰を忘れてゆくにつれ、我々の先祖は愚かにも龍信仰を失っていきました。五百年前には社の神主を選ぶ事すらやめてしまったといわれています。その後、一族は没落の一途を辿り、そして、今のありさまです。二百年以上も前から、我々は痩せた土地に暮らす、貧民となっています」

胴元はぴったりと額を床につけるように、頭を下げている。

「贖罪の為に、毎年、我々はフジを訪れてきました。しかし、龍神様の尊いお姿を見ることも、神のお声を聞く事もありませんでした。贖罪は二百年以上、続けてきましたが、今まで、何のしるしもなかったのです。ところが、」

胴元は顔をあげた。

「アキフサが言うには、古代の神主様が……我々のご先祖様が、あなたに降りられたのだとか！」

えっと……

「ええ……記憶にはありませんが、アキフサがそう言っていました」

「めでたい！」

胴元の髭だらけの顔が破顔する。

「我等は神主様からお言葉をいただきました。龍信仰を失った愚を土下座して詫びたアキフサに、古代の神主様は我等には神主の資格はないが、『龍の爪』の所有者と共に生きれば道は開けるとおっしゃいました。栄光を取り戻せる道をお教えくださったのです」

「え？　そうなんですか？」

「正確には『龍ノ器ニアラズ。龍ノ声を聞ケヌ者ヨ、龍ト共にアリタクバ爪ト共ニ生キヨ』っとおっしゃったとか」

古代ジャポネ語なんて、さっぱりわからない。

龍が人間世界の富貴に関わりがあるとはオレには思えないんだけれども……

でも、アキフサが『龍の爪』の所有者と運命を共にしなければい

けないと思い込んでいる事はわかった。
龍の許しを得る為に。
「今世の英雄シャオロン様、そういったわけなのです。アキフサの望みは我等一族の願い。すみませぬが、アキフサを一緒につれてってくれませんか？」
「でも……」
「シャイナ語どころか共通語すらろくに話せませんが、決して馬鹿ではありません。格闘はまったくの素人ですが、お山歩きで鍛えられた健脚です。けっこう素早いし腕力もあり丈夫です。どんな修行にも耐えます。どうか弟子にしてやって下さい」
オレは期待に鼻を膨らませている胴元と、ずっと頭を下げているアキフサを順番に見つめた。
オレの弟子になる事が本当に贖罪になるのだろうか？
いや、たとえ、それが本当だとしても……
弟子は取れない。
「それはできません。オレは、まだ修行中の身なんです。弟子なんか取れませんよ」
「なら、下男で構いません。あなたの側に置いてくださるのでしたら、もう何でも。どうかお願いします」
胴元は又、頭を深く下げた。
「後生です、どうか……」
困った。
己の進むべき道も決まっていないのに、弟子を取るなんてできない。かといって、下男に迎えるのも……間違っている気がする。
「……三年待ってもらえませんか？」
オレは二人を見渡した。
「オレはまだ『龍の爪』にふさわしくない未熟な人間です。時間をください。もう少し成長してから、あなたの弟のアキフサを弟子に迎えたい。オレ、ここにしばらくとどまってアキフサに拳法の基本の型を教えます。三年の間にオレは修行を積みますから、アキフサ

もオレの教えに従って肉体の鍛錬を続け共通語とシャイナ語を勉強しておいてください」

「三年待って、か」

オレが話し終えると、リューハンはケラケラと笑った。焦らし女のセリフみたいだな、と。

オレがジャポネに行っている間、リューハンはシャングハイの道場を転々としていたのだそうだ。今はフォユェン師の道場に身を寄せているのだとか。軽妙な見せ技と多彩な蹴り技で対戦者を翻弄し確実に攻撃を叩きこむ、実戦的かつ優美でスピーディな拳法を学んでいる。

シャングハイの街で再会したオレ達は、オレの宿にある食堂で夕食をとっていた。

「三年経ったら、アキフサって奴を迎えに行くのか？」

「ええ。オレが弟子を取るなんて、おこがましいですが……彼が格闘家となる手助けはしたいです」

龍神湖で一体何があったのかは、共通語が話せないアキフサに代わり、フジの案内人の胴元が教えてくれた。

オレの体に憑依した古えの神主さんは、左手用の『龍の爪』を装備し舞を舞った。大地をしっかり踏みしめた美しい所作の舞だったとか。龍への奉納舞だが、踊ったのは格闘の達人の神主さんなら、演武のようなものだったのではないかとオレは思う。その踊りにアキフサがみとれている間に、『龍の爪』の輪郭は次第に薄れゆき、最後には空に飲まれ消えてしまったのだそうだ。左手用の『龍の爪』はオレが手がけた魔族達の数に満足し、龍のもとに返ったのだろう。神主さんもオレから離れ、アキフサは意識を失ったオレを介抱してくれていたのだ。

アキフサはあの舞を踊りたいのだ。『龍の爪』の所持者と共にあれば、あの踊りを舞うにふさわしい人間になれる……その時が一族

が龍から許される時なのだ……彼はそう信じている。
　憑依されていた間の記憶がオレには無いと知っても、アキフサの決意は変わらなかった。オレと共にあればあの舞の境地に達せられる、絶対、舞えるようになるのだと目を輝かせるアキフサを見ると、できるかぎりオレも手伝ってあげたくなる。神主さんが舞ったという舞、オレも見てみたい。
「で、定住か？　アキフサと故郷の村で修行するのか？」
　リューハンの問いに、オレは首を傾げた。
「まだ決めてませんが、三年経ったら、そうしようかと思ってます」
　オレは正直に答えた。
「指導するのなら、できる限りきちんとしてあげたいですから。それに、三年しかないと腹をくくった方が、きっと、オレ、必死に学べると思います。いろんな技を真剣に学んできます」
「武者修行、どっち方面を回るんだ？」
「まずはペリシャに向かいます。と、言っても、武者修行じゃないですよ。ご恩のある御方に、従者の旅のご報告に伺うんです。その後は、インディラでしばらく修行をし、それから徐々に故郷を目指しいろんな道場を訪ねて旅をしようかと思っています」
「そうか。じゃ、西方面だな」
　リューハンはニッと笑った。
「じゃあ、俺、シャングハイを中心に東で修行するわ。あんたが習わない流派は、俺が代わりに勉強しとく。又、いろいろ、教え合い、習い合おうぜ」
「え？」
「三年経ってあんたが故郷に帰る時、俺も一緒に行く。あんたの拳法道場に入門する」
「本気……ですか？」
　リューハンは頷いた。
「弟子入りするって、前から言ってるじゃないか」
「道場なんてないですよ、オレの村、みんな焼けてしまいましたか

ら」
「じゃ、建てるのを手伝う。あんたとアキフサと道場も住む所も一緒に建てるさ。放浪していろんな流派と触れ合うのも修行だが、気の合う奴等と切磋琢磨するのも修行さ」
「そうですね」
「なあ、シャオロン」
急に真面目な顔となって、リューハンは言う。
「これだけは譲れないんだが……」
相手の真剣な顔にひきこまれ、オレも表情をひきしめる。
「何でしょう？」
リューハンはズズイと顔を近づけて来る。
「一番弟子は俺だからな」
「え？」
「俺のが先に弟子入り志願したんだ。アキフサを一番弟子にしたら、許さないからな」
「……」
真面目な顔で何を言うかと思えば……
オレはおかしくなって、声をたてて笑った。
変な話だ。
まだ自分の拳の道も見えていないのに……
道場もないのに……
入門許可すらオレからは与えてないのに……
オレにはもう未来の弟子が二人もいるのだ。
『さすがね、シャオロン！』
セレス様ならきっとそう言ってくださるだろう。
リューハン達と村に帰り……
家や道場を建て、新しい村を作るのだ。
新しい拳の道を極めていくのだ。
「その日を迎えるまでに俺も準備を進めておくよ。自給自足ができるようになるまで、当分、持ち出しばかりになるだろうしなあ。ニ

～三年分の食い扶持稼ぎとか、まあ、いろいろやっとく。あんたもしっかり、やることやっとけよ」

風花　4話

夢を見た……

オレは必死に山を駆け下りていた。
下生えの草や木の根に足を取られ、何度も、何度も、転んだ。
むちゃくちゃに枝や草をかきわけて進んで、あっちこっち切り傷だらけになっていた。
だが、構わず、進んだ。
見えたのだ……山から……
山裾のオレの村からあがる黒い煙が……
気ばかり焦るが、村は一向に近づかない。
父さん！
母さん！
ヤン兄さん！
フェイホン兄さん！
ティエンレン兄さん！
タオ兄さん！
オレの声が山に響き渡る。
けれども、山道はどこまでもどこまでも続き、果てがない。
いつまでも村に辿りつけず、泣きながらオレは山を下り続ける……

夢を見た……

村は燃えていた……
十軒の家が全て……

赤らかな炎に包まれていたのだ。
オレの喉がふるえる。
何かを叫んでいるんだけど、自分でも何って言ってるんだかわからなかった。
必死に叫んで見回した。
誰か……誰かいないのか？
父さん、母さん、兄さん、テジュン、レン、チュンランさん、リーさん、ウォンさん……
誰か……
その時、オレの視界に人の姿が映った。
生きている！
顔は見えない。だが、オレの村の仲間だ。燃え盛る炎の側からその人が駆けて来る。
オレも泣きながら、その人へと走り、手を伸ばした。
手と手が触れ合おうとした時……
その人は地面に倒れた。
そして、二度と動かなかった。
半ば炭化した遺体となって……

夢を見た……

燃えている……
オレの家が……
家の周りを大魔王教徒が囲んでいる。
刃物を持った男達が、父さんや兄さん、村のみんなを切り刻む。
サリエル様に捧げる材料にするのだと言って。
やめろと叫んだが、オレの声は届かない。
走っても一向に前に進まない。

父さん達が血まみれになっていくのに、オレは何もできない。
『まだ生き残りがいやがったのか』
背後からの声……
背に激痛が走り……
血が舞い上がった。
オレは地面に倒れた。
這って逃げようとすると……
何度も何度も……
刃が振り下ろされてきた……
見たこともない……知らない男達が……笑いながらオレに剣を振り下ろす……
オレを切り刻んでゆく……

悪夢から目覚めると、いつもひどい汗をかいていた。
村に戻ると決めた日から、悪夢の回数は増えていた。
三日三晩続けて、あの日の夢を見る事すらあった。

もう二度とオレは……
後悔したくない。
二度と村を……
オレと共に生きる者を失うものか……

村長としてオレが、皆を守るのだ……
絶対に……

ペリシャのシャダム様の墓前で、バンキグでの事をご報告した。
ゲラスゴーラグン様の霊はオレの記憶を読み、涙を流しお喜びになった。
ユーリア様が魔に堕したのは仲間を守る為であり、シャダム様が生涯ユーリア様を非難し続けたのはユーリア様に心を操られていた為と知って、ゲラスゴーラグン様は心の憂いを無くされ、後に喜びの野に旅立たれたそうだ。
バンキグではルゴラゾグス国王がユーリア様の名誉を回復してくださったし、インディラ寺院もユーリア様の真実を広めてくださっている。シャダム様とユーリア様の間に恋愛感情が芽生えていた事は秘めてだけれども。
オレはシャダム様に感謝の気持ちをお伝えした。
シャダム様とお会いした時、オレはセレス様のお心を疑い、未熟な自分など従者として側にいる必要などないと落ち込んでいた。そんなオレにシャダム様がおっしゃったのだ。
《勇者の従者よ……そなたの心には迷いがある。勇者と仲間への不信がある。だが、それは愚かしい感情だ。俺のようにはなるな。信じるのだ。戦士としての技量、魔力、知謀など、勇者の従者にとって、それほど重要ではない。共に戦う仲間を信じよ。友が闇に堕ちたように目に映ったとしても、信じ続けるのだ》
オレはシャダム様のお言葉を支えに旅を続けた。ケルティでアジャンさんが一行を離れた時も、バンキグでジライさんが魔に憑依された時も、シャダム様のお教えがあったから信じる事ができた。信じた通りだった、アジャンさんもジライさんも闇に堕ちたりはしていなかった。
信じ続けて良かった……本当に、そう思った。
全てシャダム様のおかげだった。
《ゲラスゴーラグンに伝えてくれ……友を信じなかった愚か者が詫びていたと……》
辛そうだったシャダム様の思念が心に甦る。

「ゲラスゴーラグン様は、シャダム様のことを『我が友よ』と呼んでおられましたよ、『安らかに眠れ、我が友よ』って」

最後まで、シャダム様のお姿は現われず、思念も一度も感じられなかった。

ゲラスゴーラグン様との和解がなり、シャダム様はこの墓所で安らかな深い眠りにつかれたのだろうか？

それとも、大魔王と共に今世から消滅したユーリア様の為に、ユーリア様と縁のある地に旅立たれたのだろうか？

オレはシャダム様の墓所に深々と頭を下げ、イスファンの都へと戻って行った。

それから、オレはインディラに向かい、ちょっとズルい事をした。

勇者の従者の経歴を表に出して、首都ウッダルプルのインディラ寺院のジャガナート僧正に面談を求めたのだ。三年しかないのだ、修行するのなら一流の方の所でしたい。

ナーダ様の武闘の師であった僧正様のご紹介で、オレは山奥の道場に一年近くこもった。

むろん、インディラ武闘は一年で学びきれるようなものではない。肉体の鍛錬と気の充実そして精気の循環を一体化した医療とも深く結びついた武術の片鱗を学び、武闘の型を覚え、技量の高い方々と組み手をし、毎日、充実した日々を送った。

それから、シャイナへの旅では名だたる武闘家の道場を訪れてはお教えを乞いと、時間をかけ非常にゆっくりと、オレは故郷へと向かい……

残り一年となってから、オレは修行よりも、むしろ村長として生きる術（すべ）を探し始めた。

隣村を何度も訪れ、村長さんに村おこしの相談をした。（魔力ではなくお札や魔法陣で）魔族よけの結界を張れるようになろうとシャイナ教団に勉強に通ったり、独学で法律の勉強をしたり、緊急

時に村の外に連絡をとる方法を模索したりもした。
道場だけは丈夫な造りとしたかったので、大工の方を招き図面を引いてもらった。そして、夏からオレは村に道場とオレの家を建て始めた。隣村の青年団の方々が畑仕事を交替で休んで、力を貸してくださった。リーダーのチンツォさんが皆に働きかけてくださったのだ。本当にありがたかった。
アキフサ宛に、隣村の方のご協力をえて故郷の村に家を建て始めていると近況を知らせる手紙を送ると、ニヶ月もしないうちにアキフサと何故かリューハンまでオレの村にやって来た。
オレはびっくりした。何から聞いていいのかわからなかった。どうして、ここに？　なぜ、二人で？
「村づくりの手伝いに来た」
と、発音が少し変だけれども、アキフサはシャイナ語をしゃべった。
「弟子にしてくれるのは、約束の日まで待つ。でも、村は俺の村にもなる。働きたい。力仕事をまかせてほしい」
アキフサはにっこり笑った。
「ここ二年近く、俺、たまにアキフサに拳の修行をつけに行ってたんだよ」
と、リューハンが言う。
「フジの案内人の一族だってあんたが言ってたから、居場所は調べりゃすぐにわかったからさ。兄弟子として弟弟子を、指導してやってたわけよ」
リューハンはジロリとオレを睨んだ。
「しかし、あんた、薄情だよな。アキフサにはニ年半ちょっとで十八通も手紙を送ったくせに！　俺には何の知らせもなし！　不公平だ！　俺は一番弟子だぞ！」
アキフサの所に稽古をつけに行ってた時に手紙がきたから良かったけどさとブツブツと恨み言を言うリューハンに、オレは笑ってしまった。

「放浪中のリューハンにどうやって手紙を送るんだよ。住所不定のくせに」

三年よりも前に、オレには村で共に生きる仲間ができた。

秋にはオレの家と道場が完成し、オレ達は三人で仲良く雑魚寝をして暮らした。

あの日の悪夢は、尚も、続き、時々、オレは夜中に大声をあげて二人を起こしてしまった。

血の気がひいた顔でぶるぶる震えるオレを、毎回、リューハンやアキフサが慰めてくれた。

『俺達を守らなきゃいけないなんて、そればっか考えるなよ。俺達だって、あんたを守ってやるからさ』

『村はみんなのもの。みんなで守る。一人で背負うの、良くない』

二人の言葉は涙が出るほど嬉しかった。でも、だからこそ、一層、あの日の悲劇を繰り返さない為にはどうすればいいかオレは考え続けた。

冬にはリューハンとアキフサの家もでき、リューハンの知人の弟子入り志願の男が五人も来て、村はどんどん賑やかになっていった。

来る者拒まず……と、いったわけではなかったけど、リューハンの知り合いは、皆、きさくで気持ちのいい方ばかりだったので、お断りする理由もなかったのだ。

ただ……みんな、年上だという事だけがちょっとだけ気になった。
髭面のわりに意外に若かったアキフサも二十を越えた。十代なのはオレだけだった……

正直に言えば、オレにはまだ自分の拳の道が見えなかった。
父さんから教わった拳法を基に、ナーダ様の教えとアジャンさんの助言、勇者の従者として戦い続けた経験、インディラやシャイナの格闘家の方々から学んだ事を、消化している段階だ。
こんな未熟な奴が師を名乗るなんて恥ずかしかったが、仲間と共に高めあい、助け合い、道を探してゆく生き方もありだと思う。
いつか『武闘家ユーシェンのように』なれる日を信じて……進んでいこうとオレは思った。

「シャオロン、あれがいい、あれに決めろ」
前から来る女性を指差し、アキフサが大声をあげる。着ぶくれした、たいそうふくよかな女性だ。
「アレ、おすすめ。絶対、当たり。良い畑」
女の人露骨に嫌そうな顔をして、オレ達を避けてそそくさと歩き去って行った。
「あああ……行っちゃう。声、かけないのか、シャオロン、もったいない」
オレは溜息をついた。
道行く若い女性を見てはアキフサはオレに『あれがいい』『あれに決めろ』と言ってくる……
往来で大声で言って良いことじゃないだろうに、まったく……
「おまえ、どこ見て言ってるんだよ、あんな××、いくらシャオロンががっついたガキっだって、アレじゃ勃たねえだろ」

リューハンが女性に対し失礼な評価をし、オレに対し下品な決めつけをする。せめて小声で言ってくれればいいのに、二人とも声が大きい。

行きかう旅人達が、ジロジロとオレ達を見ている。

「女は尻。デカい方がいい。いっぱい子供が産める」

少し訛りのあるシャイナ語でアキフサが言う。

「早く子供をつくれ、シャオロン。俺の夢は、おまえの血に、俺の血が交わること。『龍の爪』の使い手の血に俺の血が入れば、一族に栄光が戻る」

三年の間に、アキフサが行き着いた結論がそれだった。『龍の爪』の持ち主と、神主さんの舞を会得したアキフサの子が結ばれる事こそ、龍の願いにかなうと信じているのだ。

その為の準備もしていた。まだ神主さんの舞は踊れないけれども、リューハンの紹介で彼のウンナンの道場での妹弟子にあたる女性と結婚しシャイナ国籍を取得していたのだ。オレの村で暮らしやすいように。

「おまえが世話したくなるのもわかるけどさ。英雄でシャイナ一の美少年って売りだったくせに、その年で恋人の一人もいないなんて情けない」

リューハンがやれやれと、大きく息を吐いた。

「三年の間に準備しとけって言ったのに」

「すみませんねえ、情けない英雄で」

「色を好めよ、英雄なんだから」

オレは歩をゆるめず、まっすぐに歩いて行った。

村長としては、喜ぶべき事なのだろう。村に骨を埋めるつもりで、二人が家族を持っていてくれたのだから。

リューハンも、シャングハイの医家の娘さんと結婚していた。

『夫を全然尊敬しなかったもんで、婚家から追われた女なんだ。二度目の結婚だから実家は結構な持参金というか縁切り金付けてくれたし、しかも、医術の心得まであるんだぜ、俺の女房。最高だろ？

村の中に医者代わりになる女がいりゃ、心強い。我が強くて頑固で××でも、目をつむらなきゃな』

しょっちゅう奥さんの悪口を言うけれど、夫婦仲はとても良いようで、来年にはリューハンは父親になるそうだ。

アキフサも、これからリューハンの妹弟子相手に頑張るのだそうだ。

二人はこれからシャングハイに向かう。妻を迎えに行くためだ。

『子供が生まれるまで実家にいろって言ったんだけどさ、こっちは何もないから。けど、ほっとくと俺が馬鹿しそうで心配だから早めに来たいんだって、まいったよなあ』

と、リューハンはのろけていた。安定期にゆったりとした行程で村への旅をすると、帰りは遅くなるとリューハンは言っていた。

アキフサの妻も、今はリューハンの奥さんの元にいるそうだ。

『俺があいつより強くならなきゃ犯らせないって言ってる。でも、それ、十年かかる。もしかしたら、もっとかかる。だから、俺、口説いてくる。未来を買ってくれとお願いする。リューハン夫婦と旅して、俺も子作りしてくる』

二人はオレに手を振って別れ、街道を進んで行った。オレは横道に入り、林の中を歩いて行く。

見上げれば、空は晴れていた。が、吐く息は白い。

オレはこれから、『弟子入り志願者』という事にしてある人に会う。カルヴェル様の紹介なのだ。

「大地に根ざした生き方をしたいと言ってのう、わしの城で暮らすのは嫌じゃと言っておる」

三日前のことだ、村で建築用木材を運んでいたオレの前にカルヴェル様が移動魔法で現われ、弟子をとって欲しいとおっしゃったの

は。
「わしの古い知り合いの子供なんじゃが……すまんが、おぬしの村に住ませてやってくれんか？　格闘は素人じゃし、シャイナ教徒でもないんじゃが」
「信教はこだわりません。オレはシャイナ教徒ですがリューハンもアキフサもインディラ教徒です。武を極める志さえあれば、どなたでも……」
「ふむ。その志は、多分、無い」
「え？」
「じゃが、便利な奴なのじゃ、そやつ、移動魔法が使えるで、の」
カルヴェル様がホホホホと笑った。
「ペリシャからエウロペまで跳んで、魔力が枯渇せなんだ強者（つわもの）じゃ。村に置いておけば、何かの時、外への連絡役を務めてもらえるぞぃ」
「……」
「移動魔法で、里の者を連れて逃げる事もできよう。何ぞあっても、里が全滅などありえぬ」
それは、そうかもしれない。移動魔法の使い手がそばにいてくれれば、大魔王教徒の襲撃で村が滅びる事はなくなるだろう。夢のようだ。でも……
「又、ペクンで政変が起きた時におぬしが皇帝陛下のもとにすぐ馳せ参じられるという利益（メリット）もある」
「ペリシャからエウロペまで跳んだだなんて……宮廷魔法使い並じゃないですか、それ。そんな凄い魔法の才のある子が、何でオレの村なんかに……？」
「魔法使いにはなりたくないそうじゃ。それに……」
カルヴェル様の笑みに苦いものが混じる。
「ちょいとこみいった事情があっての、人の多い所では暮らせぬ子なのじゃ」
オレは肩にかついでいた木材を下ろした。片手間に耳を傾けるような話ではないと判断して。

「弟子にせずともよい。村の片隅に住む場所を与えてやってくれんか？」
「ああ、それなら構いませんよ」
オレはカルヴェル様に笑みをみせた。
「弟子として迎えるのなら、ある程度、体術ができる方でなければ困ります。でも、お預かりする分には条件はありません。カルヴェル様のご紹介の方でしたら、信用できますし」
「おお、すまぬ、感謝するぞ、シャオロン」
「その方のお名前は？」
「マルヤム」
「異国の方ですか？」
「うむ。ペリシャ人じゃ。ここに住む為の書類上の手続きはわしがやっておく。で、そうじゃのう、他の者にひきあわせる前に、おぬし、二人っきりでマルヤムに会うてみてはくれまいか。ちょいと複雑な子での、おぬしにも先に有る程度心構えをもってもらいたいのじゃ」
何か……たいへんそうな相手だけれども……カルヴェル様がオレを見込んで頼まれたのだ。ご期待には応えたい。
「わかりました、いつ、どこでお会いしましょうか？」

寒いなあと思っていたら、風にのって冷たいものがオレの頬に当たった。
風花だ。
ちらちらと、白いモノが宙を舞っている。
オレは先を急いだ。
この先のつきあたりの、無人のシャイナ教の社の前で、約束の方に会う。冷える場所でお待たせしては、申し訳ない。
遠くに人影が見えた……と、思った時には硬直してしまった。
「え？」

社の前にいる人間は、全身が黒づくめだった。
黒いチャドル、更には頭からベールを被り網のマスクで目や顔を隠す徹底ぶり……
間違いなく、ペリシャ教徒の女性だ……
それはさすがにマズいだろう！　オレは慌てた。
ペリシャ教の戒律は厳しく、女性は夫と親族以外の男性には素顔を見せてはいけない事になっている。戒律を破れば、破った女性だけではなく、戒律を破らせた男性にも罰が下される場合があるのだ。背中に鞭打ちなんてのは軽い罰で、目をつぶすとか、手を斬り落すとか……場合によっては命を奪うとか……
村はまだつくりかけなのだ。今、建っているのはオレの家兼道場一軒とリューハンとアキフサの家だけで、五人の新弟子の方はオレの家で雑魚寝しているのだ。ペリシャ教の女性が寝泊りできる場所などない。
これは無理だ！　断ろうと思い、歩を進めると、
「シャオロン？」
鈴をころがすような声がした。
「おまえが、シャオロンね？」
ペリシャ教の女性がオレの方を向いていた。
「マルヤムさんですか？」
「ええ、遅かったわね、私、待ちくたびれて凍えてしまうかと思ったわ」
オレに対しまったく物怖じていないし、初対面の男性を平然と呼び捨てにしている。他人に命令するのに慣れた貴族の女性のように思われた。
「すみません、マルヤムさん、あなたをお預かりするよう、カルヴェル様からお話を伺っていたのですが」
「そうよ。しばらく世話になるわ」
そう言って……
何を思ったのか、目の前の女性はベールを外し、更に黒いチャド

ルを脱ごうとし始めたのだ。
「ちょっ！　ちょっと待ってください！　駄目ですよ！　こんな所で！」
「え？」
急いでオレは女性に背中を向けた。
「オレ、むこう向いてますから！　ちゃんと素顔を隠してください！」
素顔を見たせいで処刑なんて御免だ！　絶対、振り返るものかと思ったのだが。
「マヌケ」
辛らつな口調で女性が言う。
「おまえ、カルヴェル様から何も聞いてないの？　私はペリシャ教徒ではなくてよ」
「え？」
「父はそう。でも、母は改宗を拒んだのよ。ペリシャ教ではペリシャ教徒同士の婚姻しか認めていないの。公式には、私は生まれていない姫なのよ」
姫？　今、さらっと、姫って言った、この方？
「こちらを向きなさい、シャオロン」

風が吹いた。

晴天に、雪が舞い落ちる。
風に乗って舞う、白く美しくはかないもの。
風花を踊らせる風が、白銀のしなやかな長髪を靡かせる……

女性が微笑む。

右の瞳は茶色で、
左の瞳は……泉よりも、尚、澄んだ……青の瞳だった。

左右で色の違う瞳が細められ、笑みが形づくられる。

微笑むだけで、高貴で冷淡そうな美貌が、とても愛らしものに変わった。

「チャドルやベールをつけていた理由、わかったかしら?」

オレは頷きを返した。
けれども……
喉がつまって声が出ない。

風が吹き、風花が舞う。

オレは長いこと、その場に佇んでいた。
目の前の女性を、ただ、見つめて……

風花　4話（後書き）

『風花』　完。

＋　＋　＋　＋　＋

真面目で何事にも真剣なシャオロンに本編で望んでいたことを成し遂げてもらおうと、『風花』を書き始めました。村のみんなの墓を作り直すこと、ユーシェンのような武闘家となるべく修行をすること、左手用の『龍の爪』を返しに行くこと。

又、バンキグでの事を報告したいだろうし、シャダムの言葉が支えになったと感謝の気持ちも伝えたかろうと、ペリシャにも足を運んでもらいました。シャダムはもうそこには居ないのですが、なすべきことをなし、シャオロンは満足したと思います。

何をするでも、アジャンさんはこうだった、セレス様とはこんな事をした、ナーダ様からこんなお教えを受けたと、勇者一行とのことを基準に物事を考えてしまうシャオロン。

新しい村ができ、そこで仲間や不思議な女性マルヤムと暮らすうちに、セレス達との事は大切な宝石のような思い出となっていくと思います。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は『落日』。ナーダとガルバの話です。が、先に『姫勇者ラーニャ』の方を更新しますので、『女勇者セレス』の更新は少し先の事となります。

落日　1話

「ガルバ」

御身様のお声だ……

返事をして、急ぎお側に駆けつけねば……

「ガルバ……」

御身様、いずこに……？
闇ばかりで何も見えませぬ。

お許しください……
喉がまったく動かぬのです。
お声にお答えせねばと気ばかり焦っておるのに、まったく……

主人をお待たせするなど、忍者としてあるまじき失態。
すぐにも……すぐにも向かわねば……

わしが行かねば……

御身様が泣いてしまう……

涙を隠され、声を殺し、壁に向かって……
誰にも知られぬよう……
静かに泣かれるのだ。

早く行かなくては……
お母上様はもはや御身様のお側におられないのだ……

御身様……お許しください……
いましばらくお待ちください……
必ず御身様のおそばに参ります……

このガルバ、決して御身様をお一人にはいたしませぬ。
影として、常に御身様のおそばに……

＊　＊　＊　＊　＊

「利発で気の難しいお方だ。失礼のないように気をつけよ」
マンガラ叔父御が大きくため息をつく。おまえなどご挨拶に伺うだけ無駄だがなと、その声には諦めの響きがあった。兜と口布の下の顔にも、諦めの表情が浮かんでいることだろう。
四十二代様となられる若君は、世に神童ともてはやされている。

美しく聡明で、貴き母君とラジャラ王朝王族の父君との間に生まれた、真に高貴なお方。

むろん、貴いのは母君の血。古えの時代、神々よりこの地を統べるのを許された正統なる王朝の血。ラジャラ王朝など歴史の浅い新興国、父君の血は若君の高貴さに花を添える程度のものでしかない。

若君こそが我等の真の主君となるであろう……大人達は誰もそう信じているようだった。若君が成人された暁には、我等一族が代々お預かりしていた財をお返しし、我等が尖兵となってラジャラ王朝に戦を起こし、この国の真の王となっていただくのだ、と。

マンガラ叔父御は我が忍者一族の現頭領。我らの希望の光である若君に優秀な『影』をつけたいと既に八人も推挙しているのだが……叔父御の選ばれた『影候補』は誰一人、若君はお気に召さなかったのだそうだ。

オレの叔父や従兄弟達で、皆、たいへん優秀な忍なのに……顔が嫌だの、声が気持ち悪いだの、体型が変だの、陰気な性格が嫌いだの、七歳の子供の『影』に二十五歳を選ぶとはふざけてるもっと若いのにしろだの、実にとるにたりぬ理由で失格とされたらしい。

四十二代様の影は身内から出さねば恥とマンガラ叔父御は考えていた。が、身内にはもはや適当な者はもいない。他家に若君の影の座を譲るなど、叔父御にはさぞ耐えがたい屈辱だろう。

この前、若君が『若い者がいい』とおっしゃった言葉を受け、最後の意地とばかりに叔父御は自棄になってオレを連れて来たのだ。

影は……いざという時に主人の盾となれるよう、いついかなる時も陰より主人を守り、常に主人につき従う特殊な護衛忍者。

真に優秀な忍者しか、影にはなれない。

忍者修行中の子供が影なぞ……ありえぬことだと思うのだが。オレがダメなら、身内に男はもういない。残りの男は、皆、若君より年下になってしまう。

「こんどは、また、えらく若いのを連れて来ましたね」
本館の中庭を散策中のところを、叔父御と二人並んで片膝をついてお邪魔した。若君の護衛の一族の者が、少し離れたところから様子を窺っている。
若君は青を基調とした衣装に身を包まれていた。
お噂通り、たいへん美しい方だ。
たいそう色が白く、形のいい眉を不機嫌そうにしかめ、赤い唇からため息を漏らしながら、こぼれそうなほど大きな瞳で侮蔑をこめて忍者装束のオレ達を見つめておられる。
「あなた、いくつです？」
「八つにございます」
オレの答えに、若君は唇をとがらせる。
「子供じゃないですか」
そう言う若君は七つなのだが、このお方は並みの子供ではない。宗教から哲学、史学、律法の学問を修められ、現在は医学を学ばれているると聞いている。
「ああ、わかりました。あなた、天才忍者なのですね。まだ子供だけれども、大人を凌駕する忍術の申し子なのですね。だから、私の影に名乗り出たのでしょ？」
「いえ、若様、こやつはそのような者ではなく」
「黙りなさい、マンガラ」
叔父御をジロリと睨んでから、若君は跪くオレを見下ろされる。
「私はこの子に質問しているのです。主人からの質問に即答できない影ならば、私はいりません」
忍者頭である叔父御を圧倒する気品。この方は真に高貴な方なのだと、オレは思った。
「ねえ、あなた、答えなさい、あなた、天才忍者なのでしょ？」
「いいえ」
オレはきっぱり答えた。
「オレは突出したところのない、平々凡々な忍者です。仲間うちで

も、とりたてて強くなく、とりたてて弱くもありません。この年頃に覚えておくべき術は全て会得してますが、『影』の大任を担えるわけもない実力です」

「正直ですね……それは美徳と褒めてあげましょう。しかし、」

若君はますます不機嫌そうに、少女のような顔をしかめた。

「そんな半人前が私の影など、おこがましいのではありませんか？」

「まったくもってその通り。オレもそう思います」

オレは正直に思いを伝えた。

「なれど、主君に仕え忠義を尽くすのがインディラ忍者の道。主人のおそばにはべる機会があれば、喜んでその幸運を受け入れます。及ばぬ実力は日々の修行をもって、埋めてゆきたく思います」

「私に仕えながら修行を積む？　本気ですか？　へっぽこ忍者のあなたが『影』となったら、私、暗殺者に殺されてしまいます。無能な影など何の役にも立ちません」

「いいえ、若様、オレは決して若様を死なせません」

オレは絶対の自信をこめて言った。

「防げないと思ったら、この身をもって太刀を受けます。オレ、素早さだけは自信がありますから」

若君は奇妙なモノを見るようにオレを見つめられる。

「あなた、馬鹿でしょう？　影のあなたが私の身代わりに死んでしまったら、その後、私も殺されちゃうじゃないですか」

「いいえ、若様は大丈夫ですよ」

オレは笑った。

「オレみたいな半人前のへっぽこが『影』なら、マンガラ叔父御は必ず一族の手だれ達を若君の護衛として付き従えさせます。お側のオレが最初の一太刀さえ防げれば、後は他の者が若様をお守りするでしょう」

「その護衛達で私の警護が足りるのなら、あなたが私のそばにいる意味などないではありませんか」

「御身をお守りするという意味においては、当分は、さようにござ

います。なれど、オレは『影』となれましたら、生涯を若様に捧げる覚悟。お役目外の時間に修練をつみ、若様にふさわしい忍となるよう努めます。生ある限り、若様が病める時もすこやかなる時も、良き時も苦境におられる時も、たとえ咎人となって国を追われる事となりましても、おそばにおりお仕えできるように」

若君がまじまじとオレを見つめる。

「それが『影』となった忍の生きる道にございますれば」

若君はしばらくオレの顔を見つめ、それから小さくふきだし、楽しそうに声をあげて笑われた。

「あなた、エウロペ式婚姻の宣誓の言葉って知ってます？」

「いいえ」

オレは頭を掻いた。

「存じません。申し訳ございません、不勉強で。調べておきます」

「是非、そうしてください」

口元を押さえ尚も笑い続けながら、若君は視線を叔父御へと向けた。

「気に入りました。『影』はこの子にします」

「まことに？」

叔父御は驚いて目を丸める。

「むろん、当分は試験期間ですがね。マンガラ、今日からこの子はこの屋敷に置きなさい。私の『影』の役は一日最低二時間は務めさせ、残りの時間、この子が私の『影』となるのにふさわしい教育をほどこしなさい。この子用の優秀な教育担当官もこの館に派遣するのですよ」

「心得ました」

「少し席を外してください。この子と二人で話がしたいので」

「は」

マンガラ叔父御がすばやい体術で姿を消す。若君の護衛の忍者は距離をとってだが、お側にいる。インディラにおいて高貴なるお方が一人っきりになれる時は一瞬たりともないのだ。

「あなたが楽しい子だから、つい、うっかりしました。兜と口布を取ってください」
楽しい子？
クソ真面目でおもしろみのない奴と、仲間うちで言われているオレが？
「私、審美眼が厳しいんです。あなた、醜かったら、悪いけれど、私の前では生涯、素顔を隠してください」
オレはお言葉に従い、兜と口布を外した。
「おや」
若君がオレへと顔を近づけてくる。お美しい顔が目の前にある。
「あなた……女の子だったんですか？」
ムッとして若君の綺麗なお顔を見つめた。
「男にございます。申し訳ございません、チビで」
「ああ、そうですか、それは失礼。背ではなく顔が……とてもかわいいので女の子かと」
かわいい？
色黒のこのオレが？
「若様こそ、少女のようにお美しいかと思いますが」
「そうですね」
若君がフフンと笑われる。
「私ほど美しい子供は、この国には他にいないでしょうね」
自信たっぷりにおっしゃるが、おかしな気はしない。そう思われるのも当然のお顔をなさっておられるのだから。
「それはそうでしょう。若様はインディラ一（いち）です。賢く、お美しく、高貴なお方なのですから」
若君はまた、吹き出された。
「お追従はうんざりなんですが……あなたのは、いいですね。感情のこもってない声で、当たり前のように言うなんて……」
「事実を口にしただけですので」
「ああ、もう。あなた、顔も中身も、本当、かわいいですね」

何でそんな事をおっしゃるのかはさっぱりわからなかった。が、若君がご機嫌そうなので、わからなくても構わないと思った。
「あなた、名は？」
「ガルバと申します。若様」
「ガルバ……」
ニコニコと笑いながら、若君がオレを見つめる。
「ガルバ、あなたに最初の命令を与えます」
「はい」
「その『若様』って呼び方、やめなさい」
「は？」
「年若い継嗣だから『若様』とか……センスなさすぎです。私にふさわしい呼び方に改めなさい」
えっと……
お名前に『様』づけしてお呼びするのも……センスがないとおっしゃられそうだ。
オレは頭をひねった。
「四十ニ代様……？」
若君の顔から、一瞬で笑顔が消える。
「本気でそう呼びたいのですか？」
先ほどまでの笑顔が嘘のような、険しいお顔だ。
「あなたも一族の他の方々同様、私を祭り上げたいのですか？　というの昔にこの地から消えた王家を復古しろと？　私にラジャラ王朝への謀反人になれと言うのですか？」
ご不快そうな内面が言葉より伝わる。
オレは首をひねった。
一族の大人達は、若君こそがインディラの真の支配者たるべき方だと言っていた。だから、そういうものなのだと思っていたが。
「オレ個人の望みなどありません。『影』となった今日から、若様の望みをかなえる事だけがオレの望みとなりました。若様がなさりたいのなら古代王朝を復古なさればよろしいですし、望まれぬのな

ら叔父御達配下の忍の願いなど捨ておかれればよろしいかと思います。オレは若様がどのような道を選ばれようとも、若様を信じ、ただついてゆくだけでございます」

若君のお顔に……

再び、笑みが戻った。

ああ、綺麗だとみとれてしまう……

「『若様』はやめなさいと言ったのに……」

「申し訳ございません」

オレは右へ左へと首を傾げた。

「あの……その……たいへん申し訳ないのですが……オレ、あなた様の影として、技ばかりではなく中身までも足りなさ過ぎるようで……その、センスの良い呼称というものがさっぱり思いつきません。お許しください」

後方へと跳び退り、距離をとってからオレは若君に平伏した。

オレの頭上より若君の声がする。

「まあ、いいでしょう。あなた、忍者として私に仕えるのだから、その他の事で多くは期待しない事にします」

「恐れ入ります」

「呼称……私が考えましょう」

「まことにありがとうございます」

「そうですねえ……あなた、さっき『御身をお守りする』って言いましたよね」

言っただろうか？　覚えが無いが、言ったような気もする。

「それでいきましょう、ガルバ、あなたは今日から私を『御身様』と呼ぶのですよ。私を『御身様』と呼べるのはあなただけ。あなただからこそ、その呼び名を許します」

＊　＊　＊　＊　＊

殿下が、静かな眼差しで床に倒れた者を見つめておられる。
怒りも恐怖も嫌悪も興奮も、何もない。ただ、そこにあるものを見つめていらっしゃる。
わしの刃にかかって果てた暗殺者。その汚き血が床に広がる。
「申し訳ございませぬ。お目を穢しました」
高貴なる方の目に触れぬよう、陰で内々に処理すべきものを……しくじった。
後数秒遅かったら、殿下のお命は消えていた。
このようなお側にまで、暗殺者を接近させてしまうとは……
護衛の数が足りなさすぎる。
配下の忍者は残るは八人。
もはやなりふりなど構っておられぬ。何としてもサティー様と殿下をお守りせねば……
護衛の数を増やすのだ。御身様の昔のお知り合いに恥を忍び、お頼みしよう。寺院の忍をお借りし……里の一線を退いた者や年少者も使うていこう。
「母上の忍だな？」
「さようにございます……」
初めて……殿下にお声をかけていただいた。
後宮に殿下がお生まれになったその日から、わしは陰ながら殿下を見守り続けていた。
わしがおそばに居たが為にサティー様にあらぬそしりがあってはならぬと、妻に許しを得て、後宮にふさわしい肉体へと変えてはある。
だが、それでも、闇に生きる忍が表の世界の主人の前に姿を見せるなどあってはならぬこと。
サティー様の前にもなるべく顔を出さぬようにし、殿下にはその存在すら気づかれぬよう心がけた。
だが、それも、仕舞いだ。

「殿下、本日よりお母上様と同じお部屋にお過ごしくださいますようお願いいたします」
殿下がジッとわしをお見つめになる。
御身様にもお母上様にも外見は、まったく似ておられぬ。目の細い端正な顔立ちは、父王の外見を継いでおられる。残念なことに、あの不甲斐ない不人情な男によく似ておられる。あの男さえもっとしっかりしておれば第二夫人の一族が増長することもなかったろう……後宮を牛耳った第二夫人はサティー様と殿下を軟禁し、王国の世継ぎである殿下のお命を狙い続けている。後宮の者も表の王宮の者も第二夫人の一族を恐れ、誰一人、味方をせぬ。皆、お二人が暗殺される日を待っておるのだ。
「母上と僕が一緒にいた方が、警備に都合が良いのだな？」
「さようにございます」
「ならば依存ははない。しばし待て、支度をする」
六つとは到底思えぬ言葉使いでおっしゃると、殿下は、衣装部屋に向かわれようとした。慌てて先に回って、お止めした。
「御自らお支度など……私めがいたします」
「何をくだらぬことを言う」
フッと口元に笑みを浮かべられる。たいそう冷めた、大人びた笑みだ。
「僕の護衛は、今、おまえしか居ないのだろう？　何時、どんなことがあるかわからぬのだ。おまえは手を塞ぐな。僕を守れ」
「承知いたしました」
冷静な状況判断だ。
ほんに聡明な御子だ。
賢く武芸にも芸術にも才のある殿下のもとには、昨年まで数多くの教師がはべっていた。王国の世継ぎにふさわしい一流の教育が施され、侍女達が先を争ってお世話をしていたものを……
今は誰一人おそばに居らぬのだ。
殿下の護衛を務めていたわしの配下の者とて……もはやお側に居

らぬ。皆、忠実に役目を果たしてくれたゆえ……
衣装部屋で迷いなくご衣服を選んでゆかれる殿下に、心が痛む。何処に何が入っているのかご存じなのだ。お一人で着衣も脱衣もなさっておられるのだ。
「昨日まで僕のそばに居た二人の忍の名を教えて欲しい」
衣装を選ばれながら、殿下がわしに問われる。
「何という名だったのだ？」
過去形だ。気づいておられるのだ。昨日までそばにいた者らが消えた理由を。
「忍に名などありませぬ」
「人としての名ならあったはずだ」
殿下は手を止められ、わしの方へと向き直られた。
「僕の為に命をかけてくれた忠義の者の名を、知らずになどおけるものか。弔いたいのだ、申せ」
「不要にございます。忍に信仰などございませぬ。主人の為に生き、主人の為に死す。ただ、それだけにございます」
「おまえ達は僕の為に全てを捨てて仕えている。その忠義に報いるには、僕は死なずに成人し良き王となるしかないと思う。皆が笑って暮らせるような国の王となりたい。国というものに犠牲はつきものではあるが、何を踏みにじり何の上に築いた王国なのかを僕は知っておきたい」
「殿下……」
「二人の名を教えて欲しい」
わしが口にした名を、殿下は噛み締めるように何度か口にし手のものをいったん置き、合掌をされた。
殿下の祈りが終わるのを待ってから、お声をかけた。
「忍の死など、あまりお気にかけられますな。部下の死の責は忍者頭たるわしが負うものにございます。皆、使命を果たせた事を喜んで逝きました。殿下やお母上様をお守りできた自らを誇りと思うて迎えた死にございます。あれらは、あなた様のお心を痛める為に逝

ったのではございませぬ」
「そうか」
ご衣裳を手にされた殿下がわしを静かに見つめられる。
「おまえ、名は？」
「ガルバにございます」
「そうか……」
殿下は静かに微笑まれる。
「母上からその名を聞いたことがある。おまえは伯父上の影であった忍だな。インディラ一（いち）の忍だ」
「昔のことにございます、もはや老いぼれました」
「まだ、老人と言う年でもあるまいに」
殿下がお声をあげて笑われる。楽しそうな殿下を拝見するのは久しぶりだ。
「ガルバ……おまえが忍者頭として部下の死を一人で負うというのなら、おまえに守られている母上と僕でおまえの心の痛みを負おう」
「殿下……」
「おまえ達の忠義にはいつも感謝している。これからも僕と母上を守っておくれ」

あなたの忠義にはいつも感謝しているのですよ。これからも私を守ってください。

「御身様……」

慌てて口を塞いだ。
そう呼びお慕いし仕えていた方は……
不忠のわしをとうの昔にお見限りになられたのだ。

「御身様……？」
いぶかしそうに殿下が眉をしかめられる。
「何でもございませぬ……ふと口にしただけで……」
「御身様……か」
殿下がやわらかな笑みを浮かべられる。
「殿下よりも、良いな。おまえ、今日から僕をそう呼べ」
「とんでもございません。王国の世継ぎであるお方を軽々しく」
「構わぬだろう、僕が許しているのだ。僕と母上の最後の忠義の家来であるおまえ達忍者……その頭領であるおまえに、今の僕は何一つ報いてやれない。だから、僕への呼称を与える。僕を『御身様』と呼べるのはおまえだけだ。おまえにだけ許す。『御身様』と呼べ」

落日　1話（後書き）

ナーダとガルバの話の予定でしたが、ガルバと二人の御身様の話となりました。

以後、どちらの『御身様』について語っているのかわかりづらい箇所もあります。ガルバの頭の中では両者はきちんと区別されている為、あえて名を使わず御身様と全て表現します。ナーダの話の中で『昔、御身様が何をした』のようにガルバが思い出している時はナラカの事を語っています。

落日　2話

「ほんとうに……あなたはかわいい。大好きですよ、ガルバ」
と、御身様がおっしゃったのは何時だったか。

「うっとうしいからまとわりつかないでください。あなたなんか嫌いです」
と、御身様がおっしゃったのは何時であったか……

「あなただけですよ、誠実に私に接してくれるのは……あなたが共に生きていてくれてるから私は光の道を歩めるのです」

「あなたはすぐに嘘をつく。それが私の為の嘘であっても……不快なのです。子供扱いするのはやめてください。私と共に生きたいのなら、ありのままの真実を私に見せてください」

＊　＊　＊　＊　＊

マンガラ叔父御が捕縛された。
叔父や従兄弟等も数多く縄についた。
ラジャラ王朝への謀反嫌疑ではない。
貨幣偽造疑惑だ。オレの親族全てが偽貨幣に関わったと疑われている。
何故、そんなことになったのか、さっぱりわからない。そんなチ

ャチな犯罪、叔父御達がするはずない。
オレの忍術の師であった従兄弟も引っ立てられていった。彼の持ち物は全て押収され、同じ屋敷にいたオレの部屋は隅々まで暴かれた。針の一本も見逃さぬほど完璧に。

マンガラ叔父御も従兄弟も御身様の護衛であった者らも、皆、屋敷から連れて行かれた。
残った忍者はオレだけだ。

御身様の『影』となった時、いざという時は若様の影であるおまえが継げとマンガラ叔父御より託されたものがあった。
だが、それは、今は、この世のどこにも存在していない。
オレの頭の中には、封印された記憶がある。御身様が受け継ぐべき莫大な富が眠る地の地図、宝物庫への百にも渡るさまざまな罠の解除法、鍵の製造法。その全てをオレは知っている。
知っているのだが、呪で記憶を封じられている為、今は思い出せない。
その記憶を解く方法は、マンガラ叔父御と御身様とお母上様だけがご存じだ。お三人から解呪いただけぬ場合は、オレが十五となった時にその記憶は甦る事となっている。

「古代王朝の末裔が持つ莫大な遺産が欲しいのでしょう」
茶（ティー）を口にしながら、御身様がおっしゃる。
「不正な手段で得た富として押収するか、偽貨幣同様の偽の黄金宝石として証拠品として扱いラジャラ王朝の宝物庫にでもしまっておくつもりなのでしょう」
「なんでそんな……」

「ラジャラ王朝は私という存在が目障りなのです。国を動かせるほどの莫大な財産を持つ、王位継承権のある神童……そんな者がいては国はやすまりません。私が成人する前に、私を殺すか……無力化したいのですよ。今までも、父上の官位を奪ったり、難癖つけて両親の財を没収したりえげつないことをしてきましたからね」

身内のおもだった男達が捕まったというのに、オレは今日も今日とて御身様と同じテーブルにつき茶の相伴に預かっていた。

『影』となった翌日からこうなのだ。

早く一人前の忍者となる為にオレは一日の大半を忍術修行に費やし、毎日最低二時間は『影』として働くことになっていた。

二時間は御身様にご奉公するはずなのだが……

まったく『影』らしいことはしてきていない。御身様のご希望で、同じテーブルに招かれ御身様と同じ食事や菓子を口にするか、演劇・音楽・絵画の鑑賞におつきあいするだけ……

御身様曰く『主人の好みを把握させる為の学習です』だそうなのだ。オレは、目にしたことすらない高級料理や外国料理や珍味とされる変わった食べ物を食べ、一流の芸術というものに触れた。

はたから見れば、オレは忍ではなく、おいしいものを食べさせてもらい、芸術を鑑賞させてもらっている、御身様お気に入りの『話し相手』だ。

だから、この度の逮捕劇でも軽視され捨て置かれたのだ。十にもならぬ子供ということも、むろんあるが。

オレはオレ用に用意された西国風の焼き菓子を口に運んだ。

不安でたまらなくって、モノの味がよくわからない。頭から切り離し、舌だけは何とか働かせたかったが無駄だった。口の中でとろけてゆく、口どけの良さぐらいしかわからない。

「叔父御達はどうなってしまうのでしょうか？」

「拷問死か獄死でしょう。少なくとも、マンガラは生きて外界には戻れぬでしょうね」

「え……？」

「ラジャラ王朝の真の狙いは、私の力を削ぐ事です。貨幣偽造疑惑に後から山のような余罪をつけて、古代王朝のお宝の在り処を白状させるまで彼らを拘束し続けるでしょう」
「叔父御は拷問になど屈しません。魔法でも薬品でも自白せぬよう自らを改造してあるはずです。御身様の財産を他の者になど渡しはしません」
「ええ、だから、『生きては戻れない』のですよ、彼は」
御身様が重いため息をつかれる。
「逮捕者の中に、マンガラ以外、遺産の在り処を知っている者はいません。他の者は白状したくても出来ないのです。死ぬまで牢に拘束され拷問され続けるだけです」
オレの内心を察してくださったのだろう、御身様がいたわるようにオレを見つめる。
「この逮捕劇……あまりにも迅速かつ逃げ場を奪う巧妙なものでした。おそらくあなたの里の中に、ラジャラ王朝への内通者がいるのでしょう。マンガラ達の周囲に貨幣偽造の証拠となるものをばら撒き、彼等の動きを密告していた者が……。ガルバ、あなたは、今、何があっても里に帰ってはいけませんよ。マンガラの甥であるあなたから何らかの情報を得ようともくろむ輩もいるでしょうし」
「里になど戻りません。オレは御身様の影ですから、常におそばにおります」
御身様が静かに微笑まれる。
「あなた……自分の望みは私の願いを叶える事だって、前に言ってましたよね？」
「はい」
「あなたの記憶の封印を解いてもいいですか？」
「はい、御身様のお望みとあらば」
「あなたが古代王朝の遺産の在り処を思い出してくれれば……マンガラ達を救えるでしょう」
救う？

「ラジャラ王朝に遺産の譲渡を約束し、彼等の助命を乞います」
何を……
おっしゃっておられるのだろう御身様は？
オレは首をひねった。
「叔父御達の助命嘆願など必要ありません」
御身様が眉をしかめられる。
「御身様の財を守って死ぬのです。皆、喜んで死ぬでしょう」
「無駄死にです」
御身様が吐き捨てるようにおっしゃる。
「私には古代王朝を復古する意志はありません。過去の遺産もいりません。私が何の価値も見出していないものの為にマンガラ達を犠牲にするなど耐えられないのです」
なるほどと、オレは頷いた。
「わかりました。御身様がご必要とされぬのでしたら、財はそのまま次代様にお渡しします」
「ガルバ……」
「御身様でなくとも良いのです。この地の王となる御意志をお持ちの方が現われた時に、我等がお預かりしてきた財をお渡しできれば」
「なぜ……わかってくれないのですか」
御身様が悲しそうにオレを見つめられる。
お美しい顔が曇るのは、オレもつらい。
けれども……御身様のお望みがオレには理解できない。
なぜ、叔父御達の為に何百年も前からオレ達の先祖が守り続けてきた財を捨てようなどとお考えになられるのだろう？
忍など、主人を庇って死ぬ為にいるのに。
「……私に彼等を見殺しにしろと？」
「捕まったのは叔父御達の責です。御身様が気に病まれる理由がわかりません」
「……あなたの記憶をむりやり甦らせることもできるのですよ」
きつい眼差しで、御身様がオレを睨む。

「子供のあなたは魔法に対抗する術を知らないでしょ？　口を閉ざしても、無駄です。魔法にはあなたの頭の中をあらいざらい暴く方法もあるのですよ。あなたなど捕まったらその日のうちに」
「ならば、死にます」
御身様が大きく瞳を見開かれ、オレを見つめる。
信じられないものを見るかのように、オレを見つめる。
「大丈夫です。御身様、叔父御に抜かりはないでしょう。オレが死した場合、別の方法で財宝の隠し場所を知らせる術も用意してあるはずです。御身様が必要とされる時があれば、必ず、お手元に渡るように」
「自害など許しません！」
御身様がお声を荒げられ、両手でテーブルを叩かれて立ち上がられる。
驚いた。
御身様が声を荒げるなど……
初めてではないか……？
「ガルバ……あなたは私の影です！　私にとって大切なただ一人の……。あなたの死など私は望んでいない！　自ら命を絶つなど絶対に許しません！」
「わかりました、お言葉通りにいたします」
オレはテーブルを離れ、床に平伏した。その方が良いと思ったからだ。
「オレの存在が御身様のご負担とならぬ限り、決して自ら命を絶たぬと約束いたします」
「それはつまり……自分が私の負担となっていると判断したら、自害するということですね」
「はい。主人の為に働けぬ忍など忍ではありません。御身様の重荷となるぐらいならば死にます」

オレが床に頭をつけている間、長いこと、御身様は無言でたたずんでおられた。視線を感じられたから、ずっとオレを見ておられたのではないかと思う。

かなりな時が流れてから御身様は静かにおっしゃった。

「……父上と母上のお顔を見て来ます。あなたは、今日はもう下がってください」

ご両親のご許可をいただいてからその日のうちに御身様は、ラジャラ王朝国王宛に父上の名で手紙を送られた。

妻(さい)一族の忍者の助命を願い、第一子がインディラ教への入信を望んでいるという手紙だ……

御身様はご出家の意志をお伝えになったのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

御身様は、聡明なだけではなくたいそうおやさしい御子だった。

暗殺者に狙われ、飲食すらままならぬ日々。お二人用に届く食事には、必ずといっていいほど毒が混入されていた。

しかし、代わりとなる飲食物を持ち込もうにも王宮付き忍者どもが、出入の度にサティー様付き忍者の身体検査をしおる。飲食物の持ち込みは一切、認めぬ姿勢だ。

忍者丸などの非常食を体内に隠し持ち、鳥寄せで呼び寄せた鳥を狩り、庭園の植物を集め、後宮より水や食料を盗み……

それでも足りず、忍の技で表面だけは清めた不浄なものを差し出したのだが……

お二人のご健康を保つにはほど遠い量のものしかお運びできなかった。

常に乾き飢えておられたであろうに、御身様は泣き言は一切申されず、わしの用意したものを何であれ口に運んでくださった。

不甲斐ないわしに常にねぎらいの言葉をおかけくださり、ご自分のモノを残されお母上様へ差し上げようとする。

御身様のご不幸に心を痛めるサティー様には『悪い事ばかりではありません。母上とたくさんお話ができ、母上と同じ寝台で休めるのです。母上と同じ時を共に過ごせて僕は幸せです』と、おっしゃりお母上様を慰めておられた。その時は、ほんに目頭が熱くなった。

このようなお優しい御子様が、何故、きらびやかな後宮で、痩せ衰えゆき、体をぬぐう水すらなく皮膚病を患われ、苦しみ続けねばならぬのだ……

第二夫人を、その一族を、彼等におもねる全ての愚昧なる輩を、サティー様を顧みぬ国王を、わしは憎んだ。

お二人をさらってでも後宮から連れ出したかった。

わしやわしの配下の忍だけでは、広大な王宮からお二人を無事に連れ出すのは無理ではあったが……王宮づき忍者や精鋭の兵士達、その全てを敵に回しては護衛など不可能だ。

しかし……このままお二人が弱り死に近づいてゆかれる姿をただ見ているだけなど耐えられない。

一か八かの賭けで強硬突破をと考えたこともあった。けれども、逃げて……その後、どうする？

王子と夫人が国王の許可なく後宮を離れれば……謀反の意志ありと、逆賊として追われかねない。

王宮を離れるには正統な理由をもって、正式な手続きを踏む必要があるのだ。

何度となく、サティー様は国王陛下に手紙を送られている。病気

療養を理由に保養地に下がりたい、御身様をインディラ寺院で学問修行をさせたい等々……母子で後宮より離れるご許可をいただこうとしておられた。しかし、その手紙は侍従長ら第二夫人の手のものによって握りつぶされ、国王のもとへは届いていない。

恥を忍び外部にも助けを求めている。ウッダルプル寺院副僧正のジャガナート様はわしに配下の忍を多数貸してくださり、国王との面談の場をつくろうとしてくださいっている。しかし、王宮ばかりか寺院からも妨害を受けているようだ。ウッダルプル寺院の現僧正は第二夫人の身内。ジャガナート様は目の上のコブが邪魔で動けぬ、まずはそちらを潰すと、おっしゃっていたが……

勇者ランツ様と大魔術師カルヴェル様にも助けを求める手紙を送った。

ランツ様はインディラ王宮では、たいへん評判がよくない。先代国王がランツ様にとって『嫌いな相手』だった為だ。ランツ様は最後まで国王とまともに口もきこうともせず、それを不敬と咎める者を黙らせる為に『勇者の剣』を振るい王宮を破壊したのだ。

あの時はランツ様が王宮を破壊するそばからカルヴェル様が修復魔法をかけてくださったので大事とはならなかったが……貴族や軍人に多数の怪我人が出ていた。

勇者と従者であるお二人が再び王宮に現われ暴れてくだされば……或いはこの深刻な状況も打破できるのではないか？　そう思い、エウロペのお二人には何度も手紙を送った。ひとづてに差出人の名前を変えて出してもらったこともある。だが、わしの手紙がお二人のもとへ届いているかは定かではなかった。王宮付き忍者も第二夫人一族の配下の者どもも、わしの手紙は何としても潰そうとやっきになっておるし……

魔術師協会に頼もうにも、カルヴェル様が協会に属していない為、伝言は断られた。

「ランツ様は何に怒られたのだ？」
お母上様と共に床についておられる御身様が、わしに問われる。
「おじい様は失礼なことをランツ様におっしゃったのか？」
薄いカーテン越しに、寝台の上に座る御身様のお姿が見える。娯楽に乏しい生活の中で御身様はよくわしの話をねだった。勇者一行がどのような冒険をし、どのように厳しい状況を切り抜け生き抜いてきたのかお知りになりたがった。
「前にお話しいたしましたでしょう？　ランツ様は共感能力（エンパシー）者でございます」
「他人の心がわかる方なのであったな」
「はい。ランツ様は初対面でその方のひとなりが、ほぼ、おわかりになります。相手が表面上は礼儀正しくしていても、内で何を考えているかランツ様は感じ取ってしまうのです。不快、悪意、敵意、蔑視、残忍さ、小心な性などを」
「そうか」
御身様は少し残念そうにおっしゃった。
「おじい様はあまりご立派な人物ではあられなかったのだな」
そう。御身様を恐れ、御身様を暗殺するか御身様の力を削ごうともくろんだ小心者じゃ。あやつのせいで、わしの身内は不当に逮捕され、その大半が獄死し、御身様のお慈悲で救われた者らも二度と忍として働けぬ体となっていた。
現国王はあの親よりはマシな男かと思ったが……クズの血が濃いようだ。第一夫人のサティー様を軽んじ、世継ぎの王子の御身様を顧みぬのだから。
あまり御身様のお心を痛めるのも忍びない。わしは当たり障りのない説明をした。
「勇者を歓迎する場において、先代国王は内心、ランツ様をいけ好かぬと思われたのでしょうな。しかし、それはあくまで個人的な思い。国王の義務として表面上は礼儀正しく、勇者をお迎えになったのでしょう。ただ……相手は共感能力者だったのです。ランツ様は

正直ではない先代国王に反発されたのでしょう」
「そうか。国王たる者、好悪の感情で物事を進めてはいけない。おじい様はその点は間違っておられなかったのだろう」
少し安堵したようにおっしゃってから、御身様は言葉を続けられた。
「だが、嘘はよくない。どのような場面であれ、人と人との間に偽りがあってはならない。真心をもって人と接していれば、いつかはわかりあえると僕は信じている」
真心をもって人と接していれば、いつかはわかりあえる……か。
そうであればよかった。
世の中が御身様の信じている通りの世界であれば……
「ガルバ……願いがある」
「何なりと、御身様」

「おまえだけは嘘をつかないでおくれ」

「耳に心地よいことばかり口にし僕を褒め称えていた者達は、皆、僕と母上のもとから去って行った」
御身様……
「人間は弱い。欲にまみれ、権力に屈し、いともたやすく正義を捨ててしまう。しかし、そうでない人間もいる。おまえ達がそうだ。王宮中が敵にまわっているというのに、おまえ達は僕と母上に仕えてくれている。忠義の部下だ。おまえ達がいるから僕は絶望せず生きてこられた。人の誠意を信じる気持ちを持ち続けられた」
それは……
「おまえの口から嘘偽りは聞きたくない。常に真実を口にして欲しい」
しかし……

「恐れながら、まったく嘘をつかないのは無理だと思いますよ、殿下」

と、言ったのはわしの横に控えていた者……

「俺の父は馬鹿正直でクソ真面目な男ですが、任務上、しょっちゅう嘘をつきますし、殿下やお母上様、俺達部下を庇う為、これからも嘘をつき続けると思います。忍者は生き延びるために何でもするんです。作戦上、敵をだます事もあります」

わしの長男アシダ……十四となったばかりのひよっこ忍者だ。だが、年が近い為か御身様はわしの次にアシダを目にかけてくださっており、その言葉に耳を傾けてくださる。

「アシダ、おまえの言葉はもっともだ。生き延びる為には時には嘘も必要であろう」

そこで御身様は何かを考え込まれるように間をおき、こうおっしゃった。

「言い直そう。ガルバ、僕が求めた時は、僕に常に真実を伝えて欲しい」

薄いカーテン越しに、御身様がまっすぐにわしを見つめておられる。

「今、僕と母上が置かれている状況がたいへん過酷である事は、僕にもわかっている。おまえがさまざまな手段を用い、僕等を救おうとしている事は察している。それが現在、残念なことにあまり芳しくないことも理解できている」

「御身様……」

「全てを話せと言っているのではない。僕等が事情を知らぬ方がおまえがうまく動ける事もあろう。だが、僕が知りたいと思った事は、話せぬ場合を除き真実を伝えて欲しい」

「……」

「今はまだ無力な子供だが、僕は王となる運命にある。ただ守られているだけのひ弱な存在であってはならぬと思う。どのような運命も受け入れ、乗り越えてこそ王となる資格があるのではないか？」

わしは平伏し、承知の意思を伝えた。

その約束を、自分は破るであろうと思いながら……

落日　3話

お母上様を亡くされてから今日で二週間。

サティー様が息をひきとられた時、御身様はお母上様のお体に泣いてすがられた。国王の第一夫人である貴いお方が医師にも診てもらえず、病でお亡くなりになられたのだ。

御身様のお嘆きは激しく、わしは我が身を不甲斐なく思いながら、ただ、ただ、お慰めするだけだった。

涙が枯れてからは御身様は放心状態となられた。何も見ず、何もおっしゃらず、何も聞こうとはせず、ただ壁に向かっておられた。お口元に運んでも、水も食べ物も飲み込もうとしてくださらない。仕方なく、ご無礼を謝った上で無理やりお食事をさせた。

心の支えであられたサティー様を失われ、生きる気力を無くされてしまったのだ。

このまま魂が失せてしまうのではないかと、わしは不安だった。

けれども……

サティー様がお亡くなりになられた事で、ようやく状況が動いた。

ウッダルプル寺院副僧正ジャガナート様は、サティー様の葬儀の場で国王と話す機会を得たのだ。あのバカ王はやっと御身様のもとに足を運び、実の母の葬儀にも出席できぬほどやせ衰えた世継ぎの王子の姿を目にしたのだった。

国王の指示で、御身様は離宮に移された。離宮を詰めるのは、ジャガナート副僧正様達武闘僧十人と寺院つき忍者二十名。

王宮の者は誰もいなかった……

ここならば、お命を狙われずにすむのだ……

わしはジャガナート様に平伏し、御身様をお救いくださった事を感謝した。

僧侶様達の治癒魔法で、御身様の体と心の傷が癒される。

あばら骨が浮き出た御身様のお体は、細く小さくとても七つに見えなかった。僧侶様達はおいたわしいと嘆き、心をこめて御身様のお世話と治療をしてくださった。

御身様は少しづつわしや副僧正様とお話をするようになられ、自らお食事をとるようになられた。

これで何もかもよくなってゆくと、わしは思ったのだが……

お母上様のご遺言に従い出家をしたいと……御身様はおっしゃったのだ。

わしはお考えを改めていただけるよう懇願した。けれども、御身様の御意志は固く、ジャガナート副僧正様までもが御身様は出家なさるべきだとわしに説く。有力貴族の後ろ盾のない御身様を、第二夫人一族は何としても排除しようと目論むだろう。あの一族と王位を競ったところで勝ち目はない。つまらぬ争いで主人を死の危険に晒すのかとジャガナート様はわしをたしなめられた。

大僧正様は御身様を大僧正候補として迎えようとおっしゃってくださっているとか。

御身様が尊き御子であった為、寺院が御身様の出家を乞うたという形として寺院で保護してくださるのだそうだ。

わしは……

己が許せなかった……

正統なる王位継承者である御身様……
失われた古代王朝の当主であり、ラジャラ王朝の第一王子であった御身様こそ……
この地を統べるべきお方だった……
真の王にふさわしいお方だったのだ……

御身様が王となる日を信じ……
わしは全てを捧げた……
部下に死ねと命じた……
家族を犠牲にした……

だが、わしは何も成し遂げられなかったのだ。

数多くの屍を築き、
御身様とサティー様をただ苦しめただけだった。

わしが入室した時、御身様はお一人だった。
寝台の端に腰かけられ、落日の日が差し込む窓に背を向け、すぐそばの壁へと顔を向けておられる。

お一人の時は、たいていこうだ。
ふいに涙を流しても、人に見られずにすむようになさっているのだ。
誰にも知られぬよう、声を殺し、壁に向かって、静かに泣かれる姿を……
物陰から、わしはもう何度も目にしていた。
御身様がやつれた顔をわしへ向けられる。
まだひどく痩せておられるが、お顔の色はだいぶ良くなった。
わしは寝台の側に片膝をついて跪いた。
「お呼びで？」
「うん」
御身様が穏やかな声でおっしゃる。
「おまえも知っての通り、明日、僕はジャガナート副僧正と共に王宮を去る。輿にて……総本山を目指すことにした」
靴を脱ぎ、己の足で寺院まで歩くのが正式な出家の作法。
御身様は輿に乗ることをひどく嫌がっておられた。どうも、僧侶様のどなたかが、町の噂をお耳に入れてしまったようなのだ。
『第一王子は重い病にかかり、足は萎え、頭も熱でおかしくなった。廃嫡される日も近い』。
第二夫人の一族の者が流した中傷だ。出家に追い込まれた上、そのような噂……根も葉もない噂に御身様は憤っておられた。確かに、今、足が少々ご不自由だが、それは栄養不足であった為。一時的なことだ。
嫡子に不適切だから廃嫡されるのではない……悔しそうに御身様は身を震わせておられた。
しかし、御身様は冷静な御子だ。ジャガナート副僧正様に『その弱った足で総本山を目指せば何日かかると思う？』と問われ、『その間、護衛の者も共に歩かせるのか？』、『暗殺の恐れはまだ消えていない。わざわざゆっくり進み、殿下をお守りしたいと思う者達を危険に晒したいのか？』と諭され、お考えを改められたようだ。

「ようご決断なさいました。その方が御身様のお体の為と心得ます」
「つまらぬ意地を張っても仕方ないからな。俗世を捨てる者が俗世での評判を気にするなど愚かしい」
「お察しいたします……」
御身様は鷹揚に頷かれてから、口元に微かな笑みを浮かべられた。
「おまえとは今日を限りで別れたい」

「長きに渡るおまえの奉公には母上も感謝されていた。今日までありがとう、ガルバ。おまえには心から感謝している。おまえやおまえの部下達が望んだ王となれなかった事だけが心残りだが、おまえは解放されたのだ。もう僕の護衛を務める必要はない。忍者頭としてではなく父としてアシダの元へ戻ってやっておくれ」

＊　＊　＊　＊　＊

「馬鹿なことを言わないでください、僧侶に影などいりません」
御身様が呆れたようにオレをご覧になる。
「僧侶は俗世の垢を全て拭って信仰の道に入るのですよ。私物など一切持てません。当然、部下など抱えられないのです」
「御身様がお嫌でもオレはついてゆきます」
オレは御身様の前に平身低頭した。
明日、御身様は屋敷を離れ、総本山でご出家なさる。何の疑問もなくオレは御身様についてゆくものと思い込んでいた。旅支度も整っている。
まさか、この屋敷に残れなどとご命じになられるとは思わなかった。
「どうぞ生涯、オレをおそばに置いてください。主人が死なない限

り、一度、決めた主人の元を離れない。それが忍者の生きる道です」
「……駄目です、あなたはこの屋敷に残って、私の代わりに私の父母を守ってあげてください。おひとよしで涙もろいどうしようもない両親ですけれどね。悪意を信じようとしない子供のような人達……やさしいのだけが取り柄です。きっと、あなたを可愛がってくれますよ」
「申し訳ございません。御身様、ご期待にはそえません。オレは御身様と共に生きると誓いました。オレにはもはや他の道はありません」
オレは頭をあげ、御身様を見つめた。必死だった、捨てられてなるものか。
「どうあってもここに残れとおっしゃるのなら……自害いたします」
御身様が瞳を見開き、オレを見つめられる。
オレは卑怯だ。
わかっている。
御身様は配下の者が自分の為に死ぬ事をひどく嫌がられる、お優しい方だ。
自害すると脅せば、御身様はオレを連れていかざるをえない。そうとわかっているから、オレは自殺すると言っているのだ。
「御身様、オレは誓いました。生ある限り、若様が病める時もすこやかなる時も、良き時も苦境におられる時も、たとえ咎人となって国を追われる事となりましても、おそばにお仕えするって！　知らずにしたことですが、エウロペの婚姻の儀式と同じくらい真剣に誓ったのです！　生涯、お仕えすると！　叶わぬのなら、死ぬしかありません！」
それでも、御身様がオレを拒まれたら……言葉通り死ぬだけだ。
主人を失った忍者など、生きている意味などない。
「御身様の影として生きられぬのなら死にます。御身様がオレの全てなのです」
「……」

御身様は大きくため息をつかれた。
「本当に、もう……あなたって馬鹿で馬鹿でしょうがないですね……」
「すみません」
「僧侶に私兵を持てだなんて……出家前から堕落を勧めるだなんて……魔族みたいですね、聖職者を誘惑するなんて……」
「そんな！　オレはただおそばにいたいと！　ただ、それだけを！」
「許されざることなのです。あなたを部下にし続けるのは」
そんな……
うちのめされたオレを見て、御身様がクスリと小さく笑う。悪戯を思いつかれた時のように。
「しかし、まあ……馬鹿なあなたの婚姻の宣誓を受け入れちゃったんですものね。生涯、面倒みてあげればいいんでしょ？　連れてってあげます。だから、もう死ぬだなんて脅かさないでください」
「御身様！」
オレの目から熱いものが次から次へとこぼれてゆく。
お側を離れずにすむのだ。
嬉しくって、嬉しくって……
涙が止まらなかった。
御身様は九つにもなって大泣きなんて恥ずかしい人ですね、と笑いながら、涙と鼻から垂れたもので汚れたオレの顔を布で拭ってくださった。
「……考えてみれば、私、出家してやるんだから、後は好き勝手にしてもいいはずですよね」
オレが泣き止んだ頃、御身様は何かを思いつかれたのか、冷たい笑みを浮かべられた。
「マンガラ達八人を殺し生き残った五人も半身不随にしておきながら、天下のラジャラ王朝だって言いましたもの、『生存者は恩赦にて返してやったのだ、文句を言うな』って。僧侶になってやるのです……後は文句は言わせません」

「御身様……？」
御身様のお顔には、殺気のような迫力を漂っていた。が、表情は、ふっと変わり、オレにやわらかな笑みを見せてくださる。とても綺麗な笑顔だ。
「あなたは私の『影』です。『死が二人を分かつまで』共に生きましょう」
「はい！　御身様！」

＊　＊　＊　＊　＊

「嘘つき！」
御身様が両手をめちゃくちゃに振るわれ、わしを殴る。
「おまえ、僕に言ったではないか！　アシダは生きていると！」
わしを殴られる度に、痩せ細った体がふらめく。
「重傷で……もはや忍としては働けない体となったが……生きているって！」
両の目から涙をこぼし、御身様が泣きながら、わしを打つ。
「嘘つき！　嘘つき！　嘘つき！」
ああ、そのように力まかせに殴られては、お骨まで弱くなっておられるのに……
申し訳なく思いながらも、わしは御身様を腕に抱き押さえつけた。このままわしを殴り続けては御身様がお怪我をしてしまう。
「放せ！　おまえなんか嫌いだ！　大嫌いだ！　この嘘つき！」
「……申し訳ございません」
「僕には嘘をつかないって、おまえ、誓ったくせに！　僕はあの時、真実を教えて欲しいと頼んだ！　僕を庇ったアシダがどうなったのか！　おまえはアシダは生きていると言ったではないか！」
どうして真実など告げられよう……アシダは御身様を庇い、暗殺

者の刃を代わってその身で受けたのだ。
御身様の目の前で……
最後の力で御身様を隠し扉の内に逃したアシダは……その身を盾として扉を守り……死して尚、扉を塞いでいた。
忍として天晴れな最期……
わしは息子を誇りに思った。
そして、我が妻シータルも……
二人とも御身様とサティー様を身をもって守り通してくれたのだ……

寺院から借りた忍に妻子の遺体の処理を頼み、隠し扉の内でアシダの名を呼び泣き濡れていた御身様をお迎えした。
御身様がわしの前で激しく泣かれたのは、あれが最初であった。
泣き言も言わず気丈にふるまわれていた御身様が、あの時は年相応の子供に戻っておられた……
アシダは死んだなどと……お教えするわけにはいかなかった。
「僕はアシダまで……殺してしまっていたなんて……おまえにはアシダがいると思ったから……おまえには帰る家があると思っていた……だから、僕は……」
「御身様……」
「僕が死ねば良かった！」
「御身様！」
「僕のせいで何人死んだ？　僕の為に死んだ忍は、知っているだけで十六人だ！　僕の知らないところで、もっと死んでいるだろう！　国王になれぬ役立たずの為に……犬死にだ！」
「それは違います、御身様！」
「暗殺者が最初にやってきた時に死んでいればよかった！　そうすれば、皆、死ななかった！　おまえの忍も！　アシダも！　母上も！　みんな、僕のせいで……」
「違うのです、御身様」
腕の中で暴れらる御身様を、わしは抱きしめた。

「お母上様をお救いできなかったのはこのガルバの罪……護衛の任務もまともにこなせない、情けなき忍であった私めが悪いのです」
「違う！」
「違いません。申し訳ございません、御身様、大事なお母上様を御身様から奪ってしまいまして……」
「違う……」
御身様の動きがやまれる。
「おまえはよくやってくれた……おまえのせいではない……」
「配下の忍の死の責は忍者頭たる私めが負うものだと、前にお教えいたしましたな。アシダも他の者も、皆、死すとも悔いのない人生を送れました」
「嘘だ……」
「嘘ではございません」
御身様の細い体を抱く手に、わしは力をこめた。
「お守りしようと決めたお方を守り通すことこそ、インディラ忍者の忍道。皆、満ち足りて逝ったのです……」
「嘘だ……」
「御身様が国王陛下となられるかなられぬかなど大きな問題ではないのです。あなた様の命をお守りすることが皆にとっての『生きる意味』だったのです。皆、使命が果たせたのです」
「……おまえの言う事なんか信じない」
「嘘ではありません。私はそう信じ、生きてまいりました。死ねと命じた私の言葉に従い、皆、喜んで御身様をお守りする道に殉じたのだと」
「そんなのは、おまえの勝手な思い込みだ……」
「生涯を主人に捧げ、お守りするのが我等忍者の喜びなのです」
「おまえ達の忠義なんて、僕は欲しくない」
「御身様……」
「僕は出家するのだ。全ての私物は捨てる。母上の遺品も全て……忍であるおまえもだ」

「私めはもう要らぬ……と？」
「そうだ。僕はもうおまえなど要らない。おまえは、伯父上の所へ行ってしまえばいいんだ。あの人がおまえの本当の主人なのだから」
泣きながら御身様がわしを睨まれる。
亡くなる前のサティー様とわしが秘密に交わしていた会話を漏れ聞いて、御身様は知ってしまわれたのだ。
大魔王戦で殉死したと世に信じられている伯父上様が、ご生存であることを。
総本山の生活を厭い、出奔されたのだということを。
現在も、御身様が総本山に大僧正候補としていらっしゃったのなら、あの奸婦一族とて、ここまで後宮をほしいままにできなかったろう……寺院の権威を恐れ……
御身様のお怒りは深い……伯父上様を尊敬し心の支えとしていた自らを怒りの対象として……
そして……
このわしも……
「行ってしまえ……おまえの顔なんか、見たくない。忍など、もういらない……」
御身様の目から再び大粒の涙がこぼれる。
「もう誰も……僕の為に死んでほしくない……僕は……配下の忍の忠義に応えられなかった無能者だ……主人の資格などない」
わしは腕の中の小さな御身様を見つめた。
お母上様を亡くされ……王子の位を無くされ……王となるという矜持も失い……楽しかった子供時代は過ぎ去り……お体も損ね……尊敬する伯父上様像は地に落ち……信じていたわしにも『嘘』をつかれて裏切られ……
何もかも無くされ、深く傷ついておられるお気の毒な御方……
まだ七つだというのに……全てに絶望なさっておられる。
こんな御身様のおそばを離れられるものか……
決して、お一人になどするものか……

「ならば……自害いたします」
御身様が驚いて顔をあげられ、わしを見つめられる。
わしは卑怯だ。
わかっている。
御身様は配下の者の死を自分の責と感じられる、お優しい方だ。
自害すると脅せば、御身様はわしを捨てられなくなる。そうとわかっているから、わしは自殺すると言っているのだ。
実に最低な男だ……
「御身様……私の側にはもう誰もおりません……妻シータルもアシダも……部下も全て……失いました。私にはもはや忍道しかございませぬ。主人が死なない限り、一度、決めた主人の元を離れない。生涯を主人に捧げる……。御身様にお仕えできぬのであれば、もはや生きる意味などございませぬ」
「馬鹿……」
「忍道さえ貫ければ……私は己を不甲斐なく思いこそすれ、生きてゆけます。死ねと命じて逝かせたアシダ達の死を負ってゆけます……御身様の元で生涯、御身様をお守りし続ける事さえできれば……」
動きたそうなので少し腕をゆるめてさしあげると、御身様はわしの顔へと右手を伸ばされた。御手が届きやすいようにと、少しかがんだ。
「私をあわれとお思いでしたら……どうぞ生涯、おそばにお置きください。かなわぬのなら自害して、お守りしきれなかった罪をお母上様に詫びて参ります」
御身様がわしの右頬に触れられる。
わしの頬を伝っているものを……拭ってくださったのだ。
ご自分のお顔は拭こうともなさらないのに……
「……伯父上を探しに行けばいい。この世界の何処かにおまえの本当の主人がいるではないか」
「御身様……私は『影』の資格を自ら捨て、真の主人に見限られたのです。そんな不忠者が、どうして、訪ねて行けましょうか」

「……新たな主人を持つのではダメなのか？」
「私は……御身様の伯父上様、お母上様、そして御身様にお仕えしてきました。しかし、忠義が足りず、伯父上様には捨てられ、お母上様はお守りしきれませんでした。せめて、御身様お一人には忍として正しくご奉公したいのです。御身様以外の主人など考えられません。新たな主人など欲しくありません……」
「でも、僕は出家するのだ」
御身様が悲しそうに、細い瞳を一層、細められる。
「部下を持つなど許されない」
「大僧正様におすがりくださいませ。あの尊き御方でしたら、御身様が私という忍者を抱える事をお許しくださいます」
「本当に……？」
「はい」
本当だ。大僧正様は世のならわしにも寺院のきめごとにも拘泥なさらない御方。人が人らしく生きることを常に第一とお考えになられる。昔も、御身様がわしという部下を抱える事をお許しくださった。この度も、同様にお許しくださるだろう。
「むろん、今まで通りとはゆきません。お会いできる場所もお会いできる時間も、限られるようになります。ですが……私は御身様の部下であり続ける誇りを持てます。御身様もいざという時、いつでも私を使えるのです」
「……おまえの言うことなど信じない」
わしの左頬もぬぐい、御身様がおっしゃる。
「おまえは嘘つきだ。僕に仕える為ならば、おまえは平気で嘘をつく」
「これは嘘ではございません、御身様」
「信じない。だから……」
わしの両頬をぬぐってから、御身様は静かに微笑まれた。
「ジャガナート副僧正をお呼びしておくれ。あの方に相談をしてから、大僧正様にお願いするかどうか考える。大僧正様からのご許可

がいただけるまで、この件は保留だ」
「御身様……」
せっかくふいてくださったのに、新たな熱いものがわしの頬を伝わる。
「私を……御身様の忍としてこれからも使ってくださるのですね？」
「大僧正様のご許可がいただけたらだ」
御身様が、又、頬を拭いて下さる。
「僕は嘘つきは嫌いだが……僕の部下になれなければ死ぬと言うのなら、捨てては置けない」
「ありがとうございます！　御身様！」
「あ、こら、泣くな。キリがない」
御身様の笑みが少しだけ楽しそうなものになる。
「このガルバ、決して御身様をお一人にはいたしませぬ」
二度と離すものか……
お慕いする御身様を……
お一人で行かせてなるものか……
「影として、常に御身様のおそばに……」
「嘘つき」
御身様が小さく笑われる。
「さっき、おまえ、言ったではないか。総本山に行ったら、今まで通りにはゆかないと。会える場所も時間も限られるって……おまえは嘘つきで泣き虫で、本当にしょうがない奴だ。仕方がないから、僕が生涯、主人でいてやる。大僧正様が忍を持ってはいけないとおっしゃるのなら、内緒で主人になっていてやる。だから、死ぬな。決して自ら命を絶つな。おまえの死など、僕は見たくない」

落日　4話

御身様にお会いする度に嬉しくなる。
御身様は、すこやかに、どんどん大きくなってゆかれる。
ずっと心配だったのだ。体の基礎がつくられる時期に、御身様はろくな食事ができなかった。年よりも二才ぐらい幼く見えるほど、小さく痩せておられたのだ。
それが……
今では、チビなわしなど、御身様の前では子供のようだ。御身様はたいそう筋骨逞しい、大男となられた。
僧侶様方の治癒魔法のおかげなのだろう。幼少時の不利（ハンデ）はなかったことになり、御身様は正しく成長なされたのだ。

総本山から指定された時間・指定された場所で、わしは一月に一度、御身様と面談する事を許されていた。
今日は武闘僧の鍛錬場の近くの森の中で、御身様とお会いしている。
御身様は信仰においても学問においても魔法においても芸術の面においてもたいへん優秀な御子であったが、今、もっとも時間を割いて修行なさっているのは格闘。御身様はインディラ教団一の武闘僧を目指されておられるのだ。

「ムジャと申します。以後、お見知りおきを」
わしが連れてきた忍に対し、御身様が鷹揚に頷かれる。
「ナーダです。会うのは初めてですが、あなたの話はガルバから聞いています。ムンバディーの少年盗賊団の頭目だったのでしょう？幼い子やハンデのある子も等しく抱えていた親分肌の頭目だった

そうですね」
お恥ずかしいとムジャが恐縮して髪を掻く。
今日の御身様はご機嫌うるわしいようだ。
良かった。
顔合わせという名目で、ムジャを連れてきて正解だった。
わしと御身様が二人っきりだったならば、この前のことで御身様はネチネチとわしに嫌味を言われたに違いない。
たしかに、大僧正様や副僧正様、侍僧の方々もおられたあの場で、わしが泣いたのはまずかった。
じゃが……
たまらなく嬉しく興奮してしまったのだ。
御身様のお声が変わられていて……
その一つ前の面談の時、御身様のお声は枯れたようになっていた。
大人の声へと変わる時期にきていたのだ。
それが……
一ヶ月ぶりにお会いしたら……
耳に心地よく響くおやさしい低い声になっていたのだ。

『ガルバ』

もはや生きて二度とお会いできぬであろう方と……
そっくりなお声になられていたのだ……

名を呼ばれただけで心が震えた。
頬を涙が伝わっていった。

話し方もよう似ておられる。総本山にあがってから、御身様の話し言葉は変わった。自らを『僕』ではなく『私』といい、わしにすら丁寧な口調で話しかけられるようになっている。

『どうしたのです、ガルバ、突然、泣き出して？　何処か痛めたのですか？』

その話し方もお声も……

御身様そのものだった……

『御身様が大人になられたのが嬉しくてたまらぬのです』

そう答え感涙し続けるわしを、御身様はずっとほっそりとした目で睨んでおられた。子供扱いをされるのがお嫌いなのだ。

大僧正様がわしの情の深さを褒めてくださったので、あの場では御身様は何も文句は言われなかった。が、相当、怒っておられるはずだ。来月のウッダルプル支部での警護の打ち合わせが、わしのせいで、さっぱりできなかったからだ。今日はきちんと話をいたそう。

＊　＊　＊　＊　＊

御身様はお美しく、賢く、とても優秀な御方だ。

年配の僧侶様方も、御身様のさわやかな弁舌の前には言葉を無くされる。御身様は寺院での決め事など意にもかけず、お心のままに

暮らしておられる。
御身様は入信の折、大僧正様とお話をされ、髪をそらせぬ事や俺という部下を抱える事を条件つきで認めていただいた。大僧正様のご許可を貰い続ける為に、御身様は難しいご勉学をして命題をこなさねばならぬようだったが、御身様ならばたやすいことだろう。
御身様ご出家とあわせ、俺は寺院付き忍者の教育機関に預けられた。俺が御身様の影である事は伏せていたが、大僧正様の口利きで外部からやってきた俺をやっかむ者も少なくなく、あまり居心地のいい場所ではなかった。が、些細な事は気にせず学べる事は全て学びとろうと頑張った。御身様の『影』として、優秀な忍になる為に。
十五となり教育機関を離れてからは、総本山の俗人用の房にすまわせてもらっている。月の半分を総本山の忍者の方々のお仕事を手伝うことを条件に、お借りしているのだ。
御身様は時々、俺の房に姿をお見せになる。御身様は移動魔法というものを会得されており、総本山の最奥からオレの房へと一瞬でおいでになる事ができるのだそうだ。
そこで俺とたわいもない話をされて帰られる事もあれば、俺を連れて外へ繰り出す事もあった。
御身様はお酒と賭け事と色遊びが大好きだった。全て僧侶には禁忌だったが、御身様は普通の人間とは違う。御身様は何をなさってもよいのだ。教義として堕落とみなされる行為をしても、神のお怒りを受ける事はない。素晴らしき御方なのだから。
財布をお預かりしている俺にも、御身様はいろんな遊びを体験させ、酒の相手を務めさせた。主人の好みを把握しなさいとおっしゃって。

その日、御身様は俺の房で愚痴をこぼされていた。御身様の周囲におられる高僧の方々は、さして能力もなく信仰心にも欠けるくせに、形ばかりを気にするのだそうだ。有髪で外へよく遊びに行かれ

る御身様を、不信心と責めるのだとか。
「ほんに不信心ならば、僧侶魔法が使えなくなるのにございましょう？　御身様は魔法においても他をよせつけぬ実力にございます。御身様の信仰心はインディラ神も大僧正様もご存じにございます。わかるべき方がわかっていてくださるのですから、それでよいではないですか。小物の声などお聞き流しなさいませ」
「あなたは、どう思ってるのです？」
「宗教のことはよくわかりません。でも、御身様のことならばわかります。御身様は何事においてもこの世で一番です。信仰心においても、そうだと思います」
御身様が楽しそうに笑われる。
「ほんとうに……あなたはかわいい。大好きですよ、ガルバ」
少しご機嫌が直った御身様が伸びをし、俺の寝台の上に体を倒される。入信してから剃らぬ代わりに伸ばされている黒髪が、寝台の上に広がった。御身様はそこらの女よりずっとずっとお美しい。僧衣をお召しでなければ、天女が俺の寝台で寝ていると錯覚してしまいそうだ。
俺の房には、家具は備え付けのものしかない。寝台と粗末な机と椅子が一脚のみ。椅子は背がいびつなので、御身様のお体を休めていただくには寝台が最適かと、毎回、そちらを長椅子代わりにしていただいている。
「あなたの匂いがしますね……」
と、寝台に寝そべった御身様がおっしゃったので、俺は慌てた。忍者にふさわしいよう、体臭が濃くならぬように飲食にも気をつけているのだが……
「申し訳ございません、臭かったですか？」
「そんな事はありません。落ち着きます」
はあ……
御身様は撫でるように俺の布団を触られ、枕元に俺が置いておいた手帳を手にされた。

「あ！　それは……」
止める間もなく、御身様が手帳を開かれてしまう。
御身様にご覧になっていただくモノでもないのだが……
ページをめくられ、御身様の眉が少しづつ険しくなってゆく。せっかく、ご機嫌が少し直られたのに……
「何ですか、これは？」
上体を起こされた御身様が、床に跪く俺に向かって開いた帳面を見せる。
「日付に店の名前と女性の名前……店は娼館の名前ですよね。十ページにもわたるこの記録……しかも、全ての女性の後には×印……何なんです、これは？」
御身様が不快そうに俺を見つめておられる。
「あなたの武勇の記録ですか？」
へ？
「ずいぶん数多くの女性と仲良くしているのですね。しかし、×印とは……。失礼ではありませんか？　女性の具合が多少悪くても、楽しい時を共に過ごしたのなら大目に見て良い思い出とすべきではありませんか？」
「それは誤解です、御身様」
俺は慌てて手を振った。
「それは御身様のご成果の記録にございます」
「え？」
「最後のページをご覧ください。まだ〇も×もつけていないページです。今月のことにございますから、店の名も女の名もご記憶にございましょう？」
御身様は最後のページをご覧になって眉をしかめられる。
「私が総本山を脱走して遊びに行った娼館ですね……確かに。女性の名前は覚えてませんが……」
「御身様が買われた女達です」
「……この手帳、見たところ×しかないみたいですけれど、何の印

です？」
「さようにございます。残念ながら×しかないのです」
俺はため息をついた。
「御身様のお種のついた女は今のところ一人も……」
「は？」
「御身様のお手がついた女のその後は、このガルバぬかりなく調べております。情報屋から情報を買い、小金を握らせ周囲の者から話を聞き、その前の月のものの日から計算し、妊娠の可能性のある女には監視もつけたのです。が、残念ながら、どの女も不作で……。御身様のお種がついたならば身請けして、身二つになるまで面倒をみてやろうと思っておるのですが」
古代王朝の遺産は、今、俺の管理下にある。御身様の為ならば、そこから金を使っても問題ない。何十人でも何百人でも御身様の御子（の可能性のある子・妊娠時期が合致し且つ成長後に御身様のお子とわかる身体的特徴がでねば正式なお子様とは認められぬが）を養育できるであろうに。
御身様は変な顔で俺を見つめられた。
「……あなたが私の情事の場もデバガメしていたのは知っていましたが……」
「デバガメとはお言葉が悪い。陰から護衛をつとめていただけにございます」
「私が女性を孕ませればいいと思って、覗いていたわけですね」
「むろん、期待しておりました」
御身様のお美しい瞳が、嘲るように俺を見つめる。
「案外、つまらない男だったのですね、あなた」
「はあ……申し訳ございません」
「そんなに、四十三代様が欲しいのですか？」
「それはもちろん！」
俺は大きく頷いた。
「御身様の血を引く御子が四十三代様になられれば、それは、もう

最高にございます。なれど、まだご実家のご両親様はご健在にございますし、このまえ妹姫もお生まれになられましたし、必ずしも御身様の御子が四十三代様になられるとは限りませぬ」

「……そうですね」

「四十三代様になられるかどうかなど、今はさして問題としておりません。花街のおなごは孕んだとわかると、たいてい、すぐに堕ろしてしまいます。御身様の血を引かれるおかわいらしい命が、闇に消えるなど我慢できませぬ。この世に生まれていただかねば……」

「……四十三代になれない子でも、生まれて欲しいですか？」

「当然です。俺の大事な御身様の御子ならば、大切に見守りお世話したい」

「私の子ゆえ愛しい……と？」

「はい」

御身様の表情が多少、和らぐ。俺の言葉の何かがお気に召さなかったようだったが、今ので少しご機嫌が直ったようだ。まだ、すっかりではないが。

「ねえ、ガルバ……私、知っていたんですよ、最初から」

御身様が寝台を離れ、床に跪く俺のもとへとゆっくりと歩み寄ってくる。

「女性を抱く私をあなたが物陰から見ていた事を……」

俺のすぐそばで立ち止まり、御身様の右手が俺の顎をとらえられる。

「あなたの目を感じる度に、私は興奮しました」

「はあ……」

「あなたが見てくれていると思ったから、激しく燃え上がったのです……あなたは、どうでした？」

「どうとは？」

「私の痴態を見て、感じませんでしたか？」

「感じる？」

何を？

御身様はクスッと小さく笑い、身をかがめお顔を近づけてこられた。
「欲情しなかったかと聞いているのです」
欲情？
御身様に？
そんな恐れ多い！
「そんな無礼なことはしてません！」
顔がカーッと熱くなった。
「俺は忍者です！　護衛をするお方が何をなさろうがどんなお姿だろうが感情は絡めません！　有事にはすぐに動けるよう冷静に辺りを伺い控えているだけです！」
「まったく、もう……あなたは……」
御身様の綺麗なお顔がどんどん近づいて来る。
体が強張った……
「嫌になるぐらい鈍いんだから……」
御身様の息が俺にかかる。
「誘ってるのに……全然、気づいてくれないし……」
御身様は微笑を浮かべられた。
「初めて会った時から、私はあなたが好きなのに……」
「それは、俺も……」
「同じですか？」
からかうように笑い、御身様が唇を俺のものに重ねてきた。

頭が真っ白となった。

「ずっと、こうしたかったんです……許してください」
少し寂しそうに笑われてから、さっきより深く御身様は俺の口を吸った。

頭がガンガン鳴った。
何が起きているのか、さっぱりわからない。
ただ目を見開いて御身様を見つめるだけだ。

御身様の手が俺の体に触れる。ざわりとした感覚が全身を駆け抜ける。

「あなたが欲しいのです……ガルバ……私のものになってください」

「俺はずっと……御身様のものです」
御身様に触れられると体中が熱くなる。頭もボーッとしてくる。
だが、お伝えすべきことはお伝えしなければ……

「ですから……お気兼ねなく、この体を性欲処理にお使いください。御身様のご命令とあらば、俺は、どのような役目も果たします」

御身様の動きが止まる。

床の上に倒した俺の体の上に覆いかぶさるようになっている御身様が、瞳を細め、俺を見つめる。

「私の為なら……望まぬ奉公もしてくれるというわけですね」
「房中術はあまり得意ではありません。御身様を楽しませられぬかもしれませんが、それでも、よろしければ……」
「よろしくなんかありません」
御身様は俺からツンと顔をそむけ、立ち上がられた。
「……犯る気が失せました」
「……俺のせいですか？」
俺をキッ！　と、見つめ、御身様が涼しげな声でおっしゃる。
「いいえ、悪いのは私です。あなたは忍として私に仕えているんですよね。そういう約束でしたものね、よぉぉぉく覚えていたのに、くだらぬ願望を抱いた私が悪いのです。あなたはまったく悪くありません」
あああああ、怒っておられる。これは完全にご機嫌斜めの時のお声だ。
「むしゃくしゃするから花街へ行ってきます」
「ならば、よろしければお供を……」
「駄目です」
御身様の顔に酷薄な笑みが浮かぶ。
「あなたは今日は留守番です。私、変装して娼館に行ってあなたには絶対バレない形で種をふりまいてきます。ニ、三人、買って来ましょうかね」
そんな……
金袋をお渡ししながら、俺は最後のお願いをしてみた。
「お戻りになられてから、どの店の誰を買ったかを教えていただくことは……」
「絶対に教えてあげません！」
珍しく語調を強め、子供のように私に舌を出してから、御身様がお姿を消す。移動魔法で何処かへ行かれてしまったのだ。
俺は御身様の消えた宙を見つめ、大きくため息をついた。

＊　＊　＊　＊　＊

優秀な武闘僧となられた御身様を教え導ける方など、もはや総本山にはいない。

来月から御身様はウッダルプル寺院支部で過ごされる。教団一の武闘僧ジャガナート僧正様のお教えを乞う為だ。

それにあたり、わしら御身様の忍は、初めて御身様護衛の任を務める事となった。

ウッダルプル寺院支部は王宮の近くにある。

奸婦一族は未だに御身様のお命を狙っておるやもしれぬのだ、我等一丸となって虫一匹御身様に近づけさせぬ覚悟で護衛を務めねば。

わしが育てた忍達の、初にして、重要な、主人の為の仕事だ。

あの日……

入信の為、総本山に登られた御身様は大僧正様へのご挨拶を終えられてから、俗人用の宿房で待っていたわしの元へお姿を見せてくださった。

髪を剃り、僧侶の衣をまとったその姿を目にした時は……息が詰まって涙が流れた。

貴き王子であった御身様はもうこの世の何処にもいないのだと思うと、お守りできなかった自分がたまらなく許せなかった。

『喜べ、ガルバ。大僧正様はおまえを部下にしてよいとおっしゃった。僕の部下である事を名乗るのは禁じるが、僕の為に生き僕の為に働く事を許す。連絡手段も後ほど僧侶様からご指示があるだろう。一月に一度は必ず、面談もさせてくださるとのことだ』

『ありがたき幸せ』
『主人として、おまえに命令を与える』
わしはかしこまり、御身様の前に平伏した。
『おまえ、母上の遺産の管理していると言ったな？　ご先祖様からずっと受け継いできた莫大な富があると』
『はい、お預かりしております』
『その遺産の一部を使うことは可能か？』
『はい』
『ならば、新たにつくってほしいものがある』
『かしこまりました、何なりと』
『忍者軍団をつくってほしい』
『忍者軍団……？』
『うん』
御身様が微笑まれる。
『有事には僕の手足となって働ける忍者軍団だ。どのような組織にするかも人選もおまえに任せる。おまえの働きよいように忍者軍団をつくり、おまえはその組織の忍者頭となっておくれ』
ほんに……おやさしい御方だ。
御身様はそんなものなど必要としておられぬだろうに……
忍者軍団を……わしの為に与えようとお考えになったのだ。
アシダも妻も全ての部下も失った私の寂しさをまぎらわせようと……
御身様に会うこともままならず、忍らしい役目もなくなるであろうわしの為に……仕事を与えてくださったのだ。
『承知いたしました。御身様のご期待にそえるよう、すぐにも優秀な忍者組織をつくりましょう』
と、お約束したのだが……
わしの忍者軍団が機能し始めたのは先日のこと。

十年近くかかってしまった。
その不手際を何度もわしは御身様にお詫びしたのだが、御身様は、『あなた、嘘つきですもの。あなたの『すぐにも』なんて言葉、最初っから信じてませんでしたよ。私が俗世に用があるなんて滅多にないことなんですから、働き時はどうせ先ですよ。あなたが納得いく形で、じっくりと彼等を育てあげてください』
と、その都度、笑顔でおっしゃる。それどころか、わしの組織をとても気に入いってくださり、月に一度の面談の度にどのような現状かを尋ね、こうしてはどうかと組織について考えてくださった。
わしは……
ムンバディーでムジャ達浮浪児盗賊団を拾い上げたのを皮切りに、各地で人買いから子供を買ったり、浮浪児を家へ連れ帰りして、子供を集め、忍者教育を施したのだ。
ズブの素人の子供の面倒をみて、一から忍者修行をつけ、それで忍者軍団をつくろうというのだ。時間がかかって当たり前……
即戦力となる忍者を雇うはずが……ムンバディーでムジャらを目にしたせいで、予定が狂ってしまったのだ。

ムジャ達は、家族に捨てられ、或いは親を見限り、子供同士身を寄せ合って暮らしていた。痩せ細り薄汚れた彼等は、大人どもに憎悪の目を向けながら、子供同士互いに庇い合っていた。
ムジャの仲間の一人がわしの財布を盗もうとしたのが、きっかけだった。わしが軽々とその小僧を捕まえると、まあ、次から次にわくわわくわ、子供達がわしへと襲いかかってきたのだ。
仲間を取り戻そうと挑んでくる子供達を相手にしているうちに……せつなくなった。
子供達は自らが傷つくことを恐れていなかった。大切な仲間を取

り返そうと、勝てぬ勝負と知りながら挑んできたのだ……ただ必死に……

まったく似ておらぬのに……

子供達が御身様に見えた。

愛するお母上様を守ろうと必死だった御身様に……。

捨て置けぬと思った。

だから、子供達のボスであったムジャと話をした。

このまま街で犯罪者として暮らしていても未来はない。いずれ縄につくだけだ。だが、正道に戻ろうにも親もなく学もなければ無理であろう……今までの生活を捨て、わしと共に生きてみないか？わしは、わしの主人の為に働く忍を探している、おまえ達が忍となり修行をつむのなら住む所も食べるものも与えようと、そうわしは提案した。

それに対し、ムジャは否と答えた。仲間の中にはハンデのある者もいる、盲目の者も、片足の者も、知恵遅れの者も……そうでなくとも、忍術修行などに向かぬ者もいる。運動が苦手な者も。全員を連れて行ってくれるのなら話にのってもいい、だが、忍者向けの人間だけならば御免だ。望む者を伴うのは構わないが、リーダーである自分はここに残る、と。

何とけなげで、いじらしい……

そうと聞いて……完全にわしの理性のタガは外れた。

全員を引き受けると答えたのだ。

忍者に向かぬ子供には必ず養子先や徒弟先を見つけてやると約束して。

ムジャの盗賊団の三分の一が、忍者修行より脱落した。十三人の子供の落ち着き先を見つける為に、インディラ寺院やら知り合いを頼って頭を下げまくるはめとなったが……後悔はない。ムジャらを部下として迎えられてほんによかったと思っている。

じゃが……ムジャの馬鹿めが……

御身様が高貴なご身分に関わらず会話をしやすい相手だと思い、調子にのって話題をふるからこうなるのだ。

ムジャが助けを求めるようにわしに何度となく視線を送ってきたが、無視した。というか、わしとてどうにもできん。もう護衛の打ち合わせは終わった。話題の変えようがない。

既に御身様は……三十分以上、大僧正様について滔々と語られている。

どのようなお教えを受けてきたか、どのように接していただいてきたか、大僧正様のご趣味は何だ、日課は何だ、口癖は何だ、何時に起きて何時に眠るのか……話はどんどんどうでもいい方向に転がっている。

大僧正様の素晴らしさを話せる相手ができて嬉しくてたまらないのだ。わしにはもう語り飽きておられるゆえ。

大僧正様がご立派な御方である事は否定せぬ。寺院の決め事になど拘らぬ真の慈悲の道を心得た方だと、昔、御身様も褒めておられた。

しかし……御身様が思うておるような善人とはわしには思えぬ。もっと得体の知れぬ……人離れした存在なのだ。お人の良い御身様にはそれがわかっておらぬのだ。

後宮で傷ついた御身様を癒してくださったのはあの御方だ。その点においては、深く感謝しておる。御身様がすこやかに大きゅうなれたのは大僧正様のおかげ。

しかし、あの御方に深く傾倒してゆく御身様には、不安を感じずにはいられなかった。

あの御方は、御身様の味方というわけではない。あの方は万人を愛されている。サティー様を殺し御身様を辱めた奸婦一族すら大僧正様は愛しておられるだろう。

御身様の為には戦ってくださるまい。
いずれ、わしは、御身様の為に、第二夫人とその一族を葬る。その時、大僧正様がどう動かれるかが読めず、不安だ。邪魔はされぬとは思いたいが……
御身様は還俗などしないとよくおっしゃる。しかし、わしにはわかっている。御身様の本当の願いは『良き王となる』事。大僧正候補というお立場上、今は本音をのみこまれておるだけ。
御身様こそがこの国を統べるべき、真の国王……
御身様がインディラ国王に即位できる道筋を、わしがつくっておいてさしあげねば……

人の気配の接近。
わしとムジャが懐に手を入れ武器を構える。
同じ方向を見ていた御身様が、わしらを制するように手をあげられた。
「後ほど、ここで会う約束をしている者です。待ちきれずに早めに来てしまったのでしょう」
忍と同じくらい周囲の気が読めるとは……
御身様は相当お強くなられておるようだ。
しかし……
「打ち合わせもすんだし、今日はここまでにしましょうか。出立の三日前に、又、総本山に来てください」
「承知いたしました」
深々と頭を下げるわしらに頷きを返し、御身様が立ち上がり気配の主の元へと歩いて行く。
そっと後を追い物陰から見れば……予想通りの光景があった。見たくもないものが目に入ってくる。
待ち合わせの相手は御身様より若い、顔立ちの整った僧侶だった。
その男を腕に抱き、御身様が相手と唇を合わせておられた。

ムジャが肩をすくめる。
主人の趣味にとやかく言う気はないという態度だ。
わしとて、そうは思うのだが……
もったいないと思うてしまう。

御身様はお若いのだ。
若い肉体をもてあまされているのだ。
女のいない総本山では、男色に走るのは仕方ない事なのかもしれないが……

御身様のように外で女を抱いてくだされればよいのに……

御身様の子種が男の体に無駄に注がれてしまうのが、わしは残念でならなかった。

落日　5話

大魔王ケルベゾールドが復活した。

大僧正候補である御身様が、インディラ寺院の代表として従者候補となるのは当然のこと。
寺院の中で最も優秀な僧侶は御身様。
最も尊き御方は御身様なのだから。

エウロペの勇者のもとへ向かう御身様に、陰ながら付き従った。

嬉しかった。
旅の間、配下の忍として御身様の為に働ける。
毎日のようにそのお顔を目にできる。
影として常に物陰から護衛できる。

生きていて良かったと、思った。

＊　＊　＊　＊　＊

御身様が総本山から移動魔法で向かった先は、エウロペの首都クリサニアの下町だった。わしと御身様の名代の方を連れての移動だ。
従者候補である御身様が王宮に自ら顔を出さず、名代をたてられ

るのには、むろん理由がある。
エウロペ国王の前に顔を出すのはまかりならぬと、総本山の高僧の方々にきつく命じられたからだ。有髪の御身様が人前に出ては教団の恥とお考えなのだ。
髪を剃る気などない御身様は、ご友人のジャガナート武闘僧を名代に立てられた。ご自身は当分、クリサニアの安宿にご滞在のご予定だ。王宮にあがれない以上、仕方ないですよね、と、御身様は、花街と賭場を巡るご予定をたてていらっしゃった。
お二人が安宿でお話をしている間、お口をお慰めするものを至急捜し、お運びした。エウロペ産のワインとチーズに燻製肉。名店と評判の店は事前に調べておいたので、さほど時間をかけずに用意できた。
御身様は舌鼓をうち、俺を褒めてくださった。俺に味覚修行をさせておいて良かったと上機嫌だ。御身様のお好みの味はおおよそわかる。これからは各地の名産品をよく吟味した上でお出ししてゆこう。
ジャガナート武闘僧の分もご用意したのだが、
「わしはナラカ様ほど精神力が強くないのでな、僧侶の禁忌は破らないようにしておるのだ。気持ちだけありがたくいただく。わしの分まで美味そうなものをすまなかったな、ナラカ様の影殿」
と、おっしゃられジャガナート武闘僧はがっはっはっはっはと豪快に笑われた。下賤な忍者まで人扱いしてくださる気持ちのよい方のようだ。御身様の後輩らしいが、御身様が友人として遇しておられるのもわかる。
「魔法道具（マジック・アイテム）、ありがたくお借りします」
ジャガナート武闘僧は御身様から渡されたアイテムを幾つか、懐にしまわれた。
「助かります。私はナラカ様もご存じの通り、魔法の方はさっぱりにございますから」
御身様への連絡用、盗聴用、姿隠し等隠密活動用アイテムなどだ。

御身様の名代として王宮にあがるジャガナート武闘僧の為に、御身様がご用意した物だ。
「ジャガナート、頼みましたよ。勇者の人なりをあなたの目でよく観察し、くだらぬ男だったら、相手をうまく誘導して怒らせ、インディラ寺院からの従者などいらぬと断らせてください」
「はい、はい、それは、もう、わかっておりますとも。総本山の人気者（アイドル）のナラカ様をめったな男にはお預けできませんからな」
と、言ってから、又、豪快に武闘僧は笑われた。

ジャガナート様が王宮に向かわれると、御身様は俺に向かいの席に座れとおっしゃった。先ほどまでジャガナート武闘僧が座っておられた席だ。
まだ残っていた酒を、わしの分だと杯に御身様御自ら注いでくださる。ありがたくて恐縮した。
御身様と差し向かいで酒を交わし、ツマミを口にする。
「……昔に戻ったみたいですね」
俺と同じことを御身様もお考えだったようだ。
御身様のご実家で、俺はよく御身様のお食事やお茶のご相伴に預かった。
御身様がにっこりと微笑んで酒を口に運ばれる。
「毎日、こんな風に過ごしたいですよね」
「ですなあ」
「……大魔王戦が終わったら、殉死したって事にして出奔しちゃいましょうか？」
「総本山を離れられるのですか？」
「大僧正様は素晴らしいお方ですけど……戒律好きだらけの居心地の悪い場所ですものね、あそこ。僧侶ナラカは死んだってことにして、あなたと二人、世界中を遊び歩けたら楽しいでしょうね」
「御身様のお望みとあらば、俺はどこへなりともお供いたします」

御身様と二人の旅を想像しながら俺は答えた。御身様のおっしゃる通り、この上なく楽しいものとなるだろう。御身様と二人っきりで過ごせるなど。

「俺は御身様の『影』です。どこまでもお連れください」

御身様が俺を見つめられる。

うっとりするほどお綺麗なお顔。たいへん賢く、信仰にも篤く、魔法も大魔術師並のご実力で、芸術面にも才があり、棒術も達者。何もかもが優れておられる俺の御身様。

このお方の影である事が俺の誇りだ。

生涯をかけてお仕えすべき主人として、このお方以上の者がこの世に存在するはずがない……

御身様が寂しそうに微笑まれる。

「冗談ですよ……そうしたいのは山々ですが、私は大僧正候補です。ちゃんと総本山に帰りますよ」

冗談と聞いて、少しがっかりした。御身様と何処までも行けたら、さぞ幸福だろうに……

「インディラにはサティーもいますしね……国を捨てるわけにはいかないでしょう」

十三も年の離れた妹君を、御身様はたいへん愛しておられる。ご両親が事故でお亡くなられたので、唯一のお身内だからだろうか。しかし、直接、会話をかわされたことはない。聖職者の御身様は、勝手にご実家に戻る事ができない。花街へ行くぐらいならば、妹君に会いに行かれればよいのにと思うのだが、一度も、御身様はご実家に帰られない。俺から妹君のお話を聞くのを楽しみにされているだけだ。

「それに、あなたも……」

御身様が意地の悪い顔をなさる。

「インディラにはかわいい妻子がいますものね。私にくっついて世界を歩きたくないでしょう」

御身様はずっと根にもっておられる。俺が幼馴染のくノ一と結婚

していた事を知ってから。いわゆるデキ婚なので恥ずかしかったこともあるが……俺の結婚のような瑣末なこと、わざわざご報告するまでもないと思っていたのだ。

俺に妻子があると知ると、御身様は烈火のごとく怒られ、妻子を見せろと無理やり俺を案内させた。妻シータルと息子アシダ。まだ赤子のアシダをご覧になった時の御身様は、とてもやさしいお顔をなさっておられた。

「シータルには伝えてあります。御身様の御用と家族、二つが並び立たなくなった時は、家族を捨て御身様の御用をとると。ですから、御身様、旅立たれる時は、何のお気兼ねもなく、俺をお連れください。どこへなりともご一緒いたします」

「旅立ちません」

「わかりました。ですが、気が変わられた時には、お忘れなくこのガルバを」

「旅立たないって言ってるでしょ。　私のわがままであなたの家庭を崩壊させるほど、そこまで非常識な男ではありませんよ、私は」

＊　＊　＊　＊　＊

ほんに御身様はまめな御方だ。

総本山を出立する前々日、わしの配下の者達との顔会わせの時だ。一人一人に声をかけられ名を問い、お言葉をかけてくださったのだ。しかも、全員に対して違う言葉を。前にわしから聞いた話をよう覚えておられ『手裏剣が得意なのだそうですね、警備をお願いします』だの『仲間うちで一番足が速いそうですね、今度、その実力をみせてください』だのそれぞれの個性にあわせ言葉をかけてくださった。

ご記憶にない者に対しては『得意技は何です?』と、尋ねられ『

×××なのですね、わかりました。覚えておきます。×××をもって私に仕えてくれることを期待します』だの相手の心をくすぐるような事をおっしゃる。

道具として扱われる忍者にとって、個を認めてもらう事ほど嬉しい事はない。

皆、主人からの一言をたいへん喜んで聞いていた。

二人っきりになってから、御身様に部下に代わって礼を述べると、御身様は当然のことをしただけだとおっしゃった。

「これから私の為に働いてもらう者達です。挨拶をするのは当たり前ではありませんか」

世の中のほぼ全ての主人はそんな事はしないのですよ……忍者など使い捨ての駒なのですから。

「大魔王討伐の旅に出るのです……全員が生きて帰れるとは思えません。私の為に働き、私の為に死んでくれる者達を心に刻み込んでおきたかったのです」

ああ……御身様は、まだ……

幼い日々の事をご記憶なのだ。

御身様を庇い亡くなった忍達の事を、ずっと気にかけてくださっていたのだ。

アシダの事もお忘れなく、ずっと……

「あのランツ様の孫で女の勇者……私もあなた方も、無駄死にならないといいんですけれどねえ」

伯父上様のご生存を知られてから、御身様は伯父上様同様に慕っていたランツ様勇者一行を嫌われるようになられた。ランツ様らが、伯父上様の出奔をお止めせなんだからだ。捨てられたわしには同情してくださっているようだが。

『伯父上への忠誠心なんて捨ててしまえばいいのに……』

と、以前、御身様が不愉快そうにおっしゃられた事がある。

『己が楽しみの為に義務を放棄するような不真面目な人間で、しかも、あなたを見捨てた、情の無い男です。慕う理由がさっぱりわかりません』

わしは御身様ただ一人の忍ではない自らをお詫びした上で、お許しをいただくべく頭を下げた。

『主人が死なない限り、一度決めた主人に忠義を尽くす……それがインディラ忍者の忍道なのでございます。伯父上様がお認めにならなくとも、私は生涯あの方の忍……そして、御身様の忍なのでございます』

わしは主人を一人と定められぬ、情けなき忍だ。

せめて、働きだけは一人前とならねば。

「御身様」

わしは御身様に対し、平身低頭した。

「大魔王討伐の旅の間、このガルバ、配下の忍達と共に御身様の耳目手足となり、御身様のお命を守る盾となり、旅をお助けいたします。どうぞ我等をお心のままにお使いください」

「それにあたって条件があるのですが……」

「何なりと」

「顔をあげてください、ガルバ」

床に跪くわしの前に御身様はたたずまれている。

「私をよく見てください」

お言葉に従う。筋肉隆々たる逞しいお体、両腕・両脚にはインディラ一(いち)の武闘僧の証の装甲。知的な思慮深い、端正なお顔。ほんに大きゅうなられた……あの小さかった御身様が……

「私、もう二十八なんです。いい大人なんです、知ってますよね？」

「はい、それは、もう」

「なら、私を子供扱いしないでください、絶対に」

「はあ」

「私を傷つけまいと、嘘をつくなんてもっての他ですよ。報告は正確に、隠し事は無しで、悪い情報も私に伝える。いいですね？」

「承知いたしました」
「この約束を破ったら……今度こそ許しませんよ」
御身様がジロリとわしを睨まれる。
「あなたはすぐに嘘をつく。それが私の為の嘘であっても……不快なのです。子供扱いするのはやめてください。私と共に生きたいのなら、ありのままの真実を私に見せてください」
「御身様……」
「私はもう無力な子供ではありません。大僧正候補で、インディラ一(いち)の武闘僧なのですよ。私の為に働いてくれるあなた方だって守れます。ガルバ、あなたが私を守ってきてくれたように、これからは私にもあなたを守らせてください。いいですね？」

＊　＊　＊　＊　＊

大魔王討伐の旅が終われば、日常に戻る。
四六時中、御身様のお側に仕える事は再びかなわなくなる。
大僧正候補である尊い御身様と汚らしき忍者では、生きる世界が違う。

お側に仕えられなくなるのは寂しいが……
だが、それでも……
旅が無事に終わる事を……
御身様が英雄としてインディラに凱旋なさる事を……
祈り続けていた……

＊　＊　＊　＊　＊

何故？
何故？
何故？

大魔王を討伐したというのに……

何故、御身様は何処にもおられぬ？

王宮にもタブールの街にも御身様はいらっしゃらない。

何処にもお姿がない……

移動魔法で遠所に行ってしまわれたのか……？

大魔王戦で殉死したと装う為に迅速に……

御身様……

何故、俺を……

置いてゆかれたのだ……

俺のせいなのか……？

『おぬしには妹に仕えてもらいたいそうじゃ……おぬし、インディラに愛妻と三つになる息子がおるであろう。仲よう暮らして欲しいと言うておったわ』

俺が御身様の影にふさわしくない男となったから……
家族という重荷を持つようになったから……
連れてゆけぬと……そう思われたのか……

お優しい御身様は家族を持ちの俺に情をかけられ、インディラに残そうとしたのか……

俺のせいなのか……

＊　＊　＊　＊　＊

臓腑の病……？
治癒不能……？
食事の後、胃がもたれるとは思った。時々、腹も痛んだ。

しかし……
どうも、かなり重い症状のようなのだ。
タチの悪い腫瘍ができており、治癒魔法でそれを取り除いてもすぐに再生してしまうのだそうだ。しかも、治療を行えば脊髄損傷の危険もあるという病状……

主人の為に働けぬ忍など忍ではない。

御身様には病のことはご報告しなかった。
ムジャらにも口どめした。わしの病のごとき瑣末なことお耳に入れる必要もない。御身様はお忙しいのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

生きる屍のようだと、シータルが俺を心配する。
元気に遊びまわるアシダを見ても、むなしさが募るばかりだ。
シータルは自分達の事など気にせず御身様を探しに行って欲しいと、俺に願った。
だが、俺はかぶりを振った。
御身様は……影にふさわしくなくなった俺を、俺の為に捨てられたのだ。探しに行っては怒られるだろう。ご迷惑に思われるだけだ。

サティー様は俺を憐れんでくださった。
『お兄様はとても賢く深慮なお方です。あなたを私の護衛にと決めたのにも理由があるはずです。ねえ、ガルバ、俗人の私やあなたで

は、どれほど考えようともお兄様のお心はわからないと思うのです。お兄様が戻られるまで私と共に生き、一緒にお帰りを待ってくれませんか？　お兄様のご予想通り、絶対、私にはあなたの護衛が必要となるはずですから』

御身様との手紙の橋渡し役だった俺。既知の俺のフヌケぶりをみかねたのだろう、サティー様は俺を自分の『影』にとりたててくださった。

間もなく、ラジャラ王朝より、大魔王戦で殉死した英雄の妹サティー様を新王の第一夫人に召したいとの話がきた。

サティー様より七つ下の子供との婚姻だが、第一夫人ならば正妃、御身様の妹御の高貴さを損なわぬ結婚だ。

それは古代王朝とラジャラ王朝との婚姻でもあった。

お二人の間に男子が生まれたならば、四十三代様でありながらラジャラ王朝国王となる可能性もある。

ラジャラ王朝を打倒することなく、この国の真の支配者たる血の者が王となるのだ。

これ以上の理想の結びつきがあろうか……

お供することを決め、シータルの許しを得てから去勢した。後宮付きの忍者は、くノ一か男ではない忍と決まっているからだ。

そんな決め事は有名無実でしょうにと、サティー様は俺の行動に心を痛められた。

実際、男性のままの後宮付きの忍者も多い。

しかし、俺は……

俺がお側にいることで、サティー様にご迷惑をおかけしたくなかった。サティー様のお側に夫たる国王以外の男性がいてはいけない。

サティー様がお子を宿した時に、あらぬ噂で、サティー様を辱め

たくない。

もう二度と……

主人にふさわしくない忍にはなるまい……

俺は、そう心を決めたのだ。

すっかり弱体化していた古代王朝の忍者一族は、サティー様の影の俺を頭領と定めた。

マンガラ叔父御の死後に幾つかの勢力に別れ抗争を繰り返した為、一族は数を減らし、忍としての質も低下していた。しかし、サティー様が子をなし、その子が国王となれば何百年にわたる一族の宿願がかなうのだ。

一族には活気が戻り、シータルの実家が中心となって、サティー様の為の忍者軍団が組織されていった。

＊　＊　＊　＊　＊

夢を見る。

大魔王討伐の旅の夢だ。

若い頃に比べ衰えた体を嘆きながらも、御身様に仕えられる喜びにうちふるえ、夢中で働いた日々……

神というものを身近に感じた事など今までなかったが……

神がおわすような気がした。

大魔王討伐の旅は……
死の前のわしへの最後の褒美だったのだ……

死なせてしまった配下の者達には申し訳なかったが……

だが、それでも……

御身様のおそばに仕え……
御身様のお声を聞き……
御身様と共に戦い……
御身様と同じ時間が過ごせたのだ……

幸福だった……

＊　＊　＊　＊　＊

御身様のお声が聞こえる……

わしが良い働きをすると、御身様は満足そうに微笑まれた。

『あなたの忠義にはいつも感謝しているのですよ。これからも私を

守ってください』

『さすがは、もとインディラ一（いち）の忍ですね、よい仕事をするではありませんか』

始終お側に控え忍として働こうとすると御身様は……

喜ばれた。

『あなただけですよ、誠実に私に接してくれるのは……あなたが共に生きていてくれるから私は光の道を歩めるのです』

怒られた。

『だから、その超過保護はやめてください！　私、もう三十なんですよ！　うっとうしいからまとわりつかないでください！　あなたなんか嫌いです！』

御身様の泣き顔も笑い顔も怒った顔も……

わしにかけてくだすった情も……

全て覚えている……

御身様……

御身様のお声が聞こえる……

返事をして、急ぎお側に駆けつけねば……

御身様、いずこに……？
闇ばかりで何も見えませぬ。

お許しください……
喉がまったく動かぬのです。
お声にお答えせねばと気ばかり焦っておるのに、まったく……

主人をお待たせするなど、忍者としてあるまじき失態。
すぐにも……すぐにも向かわねば……

わしが行かねば……

御身様が泣いてしまう……

涙を隠され、声を殺し、壁に向かって……
誰にも知られぬよう……
静かに泣かれるのだ。

早く行かなくては……

お母上様はもはや御身様のお側におられないのだ……

御身様……お許しください……
いましばらくお待ちください……
必ず御身様のおそばに参ります……

「頭領！」
ムジャの声だ……
ぼやけた視界に、だらだらと涙を流すムジャが見える。忍のくせに泣くなどだらしがない。
「頭領、お気を確かに！……様がいらしてくださいましたよ！」

誰……が、いらした……？

歪んだ視界に……

そこに居るはずもない御方の姿が見えた……

御身様……

ああ、これは夢だ……

御身様が微笑んでおられる……

わしのもとに御身様がいらっしゃるなどありえぬこと……

これは、夢だ……

現実ではない。夢だ……

だが、良い夢だ……

最期に御身様のお顔が拝見できたのなら……

御身様の口が動く。

何かをおっしゃっておられるようなのだが、その声が耳に届かない。

お答えしたいのだが、ひゅーひゅーと息が漏れるだけで言葉が出ない。

御身様の青い瞳を見つめた。

言葉にできずとも……

御身様ならばわかってくださるだろう、わしの忠義を……

何なりとご命じください……どのような役目も果たします。

影となったその日から、御身様のお望みをかなえる事だけがわしの望みとなりました。
御身様のご期待に添えるよう、このガルバ、働いてみせましょう……

視界を闇が覆う……
御身様のお姿までもが闇の中へ消えゆく……

御身様……

このガルバ、決して御身様をお一人にはいたしませぬ。
影として、常に御身様のおそばに……

落日　5話（後書き）

『落日』　完。

＋　＋　＋　＋　＋

最後に来た御身様がどちらの御身様かは、何の話のつづきかによって変わります。しかし、どちらの御身様であっても、その再会は、ガルバにとっては同じ。歓喜の再会です。

ガルバの初登場は『死の荒野5話』。当初は、これほど目立つ予定ではありませんでした。ナーダの部下でナラカのもと部下、先代勇者一行の旅を助けていた……ぐらいの設定しかなかったのです。が、『御身様命』の姿がかわいく、そのかわいいシーンを描きたくて出番をどんどん増やしてしまいました。忠義の忍者は私的には萌えツボなので……。技に溺れる冷酷な一匹狼な忍もツボなんですが。

ガルバはナラカに対しては盲目的な忠義心を抱いていて、『御身様のなさる事はなんでも正しい』と信じていました。ナラカが悪事に走っても信じております！　と、ついてゆくような。ガルバが純粋な敬意をずっと捧げてくれていたから、根は結構悪どいナラカも『善の僧侶』を演じ続けられました。

一方、ナーダはいかに大きくなろうとも、ガルバにとって『お守りすべき尊き子供』でした。あれこれ世話をしてしまうのも、還俗させ王位に就かせようと画策したのも、全てナーダの為。ナーダは本当は王位を継ぎたいのだと思い込んでいます。そのくせ、自分こそ最もナーダを理解していると信じている困ったおじいさんです。

ナーダは自分の性格を汚れていると思っており、ガルバの事を忍

者にしては人情家のおひとよしと思っています。ガルバは自分を非情で冷徹な汚らしい忍と思っており、ナーダの事をお人がよすぎると思っています。似たもの主従です。

＋　＋　＋　＋　＋

次回は『悪夢』。悪夢から悪夢へのアジャンの話です。

悪夢　1話（前書き）

この話は『女勇者セレス』の『勇者の家　後日談　セレス&アジャン』の後、『女勇者セレス――夢シリーズ』の『夢と現実』前の話です。

悪夢　1話

夕日に染まった草原に、アジンエリシフがたたずんでいる。
茜色の世界の中、ジンエリシフの髪が一層、赤く見える。

「おいで、××××××××」

アジンエリシフが俺へと左手を伸ばす。
母さんのようだ。
まだ小さいアジャニホルトを、右腕に抱きかかえている。
アジンエリシフのアンダードレスにはアジフラウがまとわりついている。アジンエリシフのドレスの裾をつかみ、アジフラウは左手の指をおしゃぶりしていた。

「帰ろう、××××××××。父さんも母さんも待ってるよ」

アジンエリシフが俺へと笑いかける。
溌剌としたアジンエリシフ。
陽気で勝気でやさしくて……
誰よりも美しい……俺のアジンエリシフ……

俺は右手を伸ばした。

とても近くにアジンエリシフの左手はあるのに……

俺の右手はアジンエリシフに届かない……

決して、彼女の手を握れない……

手をつなぎ、皆で家に帰ることなど……

俺にはできないのだ……

＊　＊　＊　＊　＊

「あたしだって鬼じゃないさ。利子の五万を返してくれりゃあ、三日、待ってあげるよ。返すもん返してもらえりゃあ、文句はないからね。五千しかない？　馬鹿言っちゃいけないよ、なら、やっぱり、あたしの言う事を聞いてもらおうか。あんたの借金ニ百ニ十万、『ミモザの家』が肩代わりしてくださるとさ。今日からあんたは『ミモザの家』の専属娼婦さ、隣の部屋の男達についていきな。借金がなくなるまで、毎日、とれるだけお客をとるんだね。　鬼？　悪魔？　馬鹿言っちゃいけないよ、借金を返済しないあんたの方が『鬼』だし『悪魔』だよ。逃げようたって無駄だよ。隣の部屋には屈強な男達が控えてるって言ったろ？　それに、あんたのかわいい弟のところにもガタイのいい男が二人ほど詰めてるからね。あんたが逃げたら、あんたのかわいい弟はあの世逝きさ。そう、そう、そうだよ。

聞き分けのいい子はあたしは好きだよ。手下どもに乱暴なこともさせないさ。ほんの二百二十万だ。毎日、四、五人客をとりゃあっという間さ。すぐに返済できるよ」

あばたと皺だらけの醜い顔を一層、しかめ、老婆は廊下へと消えてゆく女の背を見送った。

扉が閉まると、老婆の口からため息が漏れた

「馬鹿な女だよ。手を切れって、あたしゃ半月前に言ったのに」

でっぷりと太った体を揺らし、老婆はテーブルの上の表の商売の品――占い師用の水晶珠を両手でこすった。

「あの女の未来にはもう『破滅』しかないよ。うちの店の利率がおかしいことだって、ちゃんと教えてやったのに。どうしても金がいる……必ず返すから用立ててくれだなんて……何で、男のそんな言葉に騙されるのかねえ」

「あの女、『弟』の為に金を借りたみたいだが」

部屋の奥の黒いカーテンが開き、背の高い美丈夫が現われる。背には大剣、腰には片手剣にナイフ。身なりより傭兵とわかるが、ただの傭兵とは思えなかった。見事な赤い髪や緑の炯眼、筋骨逞しい肉体、野性美あふれる外見は、そこにいるだけで女心を乱す色事師のようだった。

「本当の『弟』じゃないな？」

老婆はフンと荒い鼻息をついた。

「本当の姉弟なら、何だってぇんだい？　見ず知らずのあの女の借金を肩代わりしてやろうとでも？」

「場合によってはな」

男はニヤニヤと笑いながら、老婆の触れる水晶珠を覗き込む。

「知ってるだろ？　俺がうるわしい姉弟愛が好きなのを。馬鹿な弟の為に身を売る姉って聞くだけでグッとくる」

「病気もちが」

ケッ！　と毒づき、老婆が赤毛の男を睨みつける。
「偽の姉弟だ。駆け落ち者だよ。『弟』はどこぞのボンボン、あの女はそこの召使（メイド）だったのさ」
「まあ、そんなこったろうとは思った」
曇りのない水晶珠を見つめ、赤毛の傭兵は瞳を細めた。
「あの女……まるっきり『女』だったしな。『姉』らしい雰囲気がなかった」
「ちょっと、やめとくれ。あたしの商売道具にあんたの息をふきかけないどくれよ」
赤毛の男は覗き込むように水晶を見つめていた。
「どう見ても、ただの水晶だ。これのどのへんが『破滅』なんだ？」
「これはあたしの目だ。あたしの為の水晶なんだよ。あんたが見ても、何にも感じるもんか」
「インチキくさいな」
「占いなんざ、半分以上インチキさ。あたしの目に見えるのなんざ、ほんの一場面。こういう意味かと解釈してお客に伝えているだけだもの」
上体を起こした大男に、老婆がやれやれと肩をすくめた。
「鍛えりゃあんたの方が、ものの見える占い師になれるよ。あんた、高位のシャーマンだもの。相手の過去も、先に広がる幾通りの未来も、全て見えるようになるだろうさ」
「シャーマンじゃない、俺は傭兵だ」
男はニヤリと笑って、老婆に尋ねた。
「で、俺の未来はどうなってる？　あいかわらずか？」
たまには見料を払ったらどうだいとぶつくさ文句を言いながら、老婆が水晶珠を静かに撫で、瞳を細めた。
「あいかわらずだね……『悪夢』。あんたの通ってきた道にも行く先にも、『悪夢』しかない」

占い師用の部屋の奥が、老婆の生活空間だった。黒いカーテンをめくった先には大きなテーブルがあり、その上には金袋が五つ置かれ、開いたままの二冊の帳簿が載っていた。老婆は席に着き、ふいの来客で中途となっていた作業を再開した。金袋を開き、中身の金子を正確に数え、帳簿につけてゆく。

赤毛の傭兵は両腕を組んで壁を背に佇み、老婆の手元を見つめていた。わずかな数え間違いもごまかしもされないように。四つの金袋を数え終えたところで、老婆は息をついた。

「たしかに百万ゴールド。あんたはこれで十五年先まで礼金を先払いしたことになる」

老婆はムスッとした顔で、領収書を書く。

「もういい加減にしたらどうだい？　あたしが十五年以上、生きるとでも？」

渡された領収書を懐に、男がニヤッと笑う。

「生きるだろう？　憎まれてる方が長生きすると世に言われているじゃないか」

「ハン！　あたしみたいな親切な女をつかまえて憎まれ者とは言ってくれるじゃないの。あたしがいなきゃ、あんたなんざおっちんでたじゃないか」

「わかってる。だから、戸籍取得の礼金を払い続ける。あんたか俺が死ぬまで年収の半分か百万ゴールドを毎年払う契約だ。大魔王退治が終わったら数年分、まとめて礼金を払ってやる」

「……あたし、もう七十なんだよ。いい加減におしよ、馬鹿」

「あんたが裏の裏の仕事をやめん限り、礼は返し続ける」

表の商売――占い師。

裏の商売――高利貸し。

老婆にはその二つの仕事以外にもう一つの仕事があった。出費ばかりがかさむあまり儲からない仕事だ。

「あんたは脱北者の世話人だ……あんたがその稼業をやめない限り、俺は礼金を払い続ける。あんたなら、俺の金をうまく使ってくれる

だろうからな」

老婆が使っている用心棒も下働きの女も、隣国ケルティからエウロペに不法に国境を越えて来たケルティ人だ。

越境者に住む場所と食事を与え、戸籍を与え、言語を教え、職を斡旋する組織のリーダーがこの老婆なのだ。

今では組織の運営は、南に馴染んだ越境者達に任せ、老婆は出資者（サー）に徹しているのだが。

「同胞を助けたきゃ、直接あっちに金を渡しゃいいのに……」

ブツブツ文句を言う老婆に、男はニヤニヤ笑うだけだ。

「俺は奥ゆかしい男だからな……表に出たくないのさ」

「お天道様がひっくりかえるような世迷言を言うんじゃないよ、馬鹿」

あんたが奥ゆかしい善人なら、あたしゃこの世を救う聖女様さと、毒づきながら老婆は残っていた五つ目の金袋を数え始めた。

もう十三年前のことだが、老婆はこの男に戸籍を与えていた。八十年近く前にエウロペで亡くなったケルティ人、アジクレボス。実在した男の記録をちょっといじり、その曾孫であるという戸籍を作ってやったのだ。

当時、国境そばの村ライカに住んでいた老婆は、吹雪き舞う夜に突然、訪れてきたこの男を――その頃は、十三歳の少年で体中に防寒服代わりに毛皮やら布をまきつけた珍奇ないでたちだったのだが……一目見ただけで何者か知った。

『あんたが助け手だな？』

ケルティ語でそう尋ねた少年を老婆は家の中に入れ、暖炉にあたらせ、着替えを与えた。家には越境者用に用意した服がけっこうな数あったので、少年に合う服もあった。

少年は、何年も風呂に入っていなさそうな薄汚れた肌をしており、赤毛も鳥の巣のようではあった。が、身なりさえ整えれば男娼街に立てそうな派手な顔だちをしていた。

だが、老婆が一番、気になったのは、その緑の瞳だった。鷹のように鋭いその眼には、絶対者の鋭さがあった。

老婆にはわかっていた。この少年は上位者なのだ。微弱なシャーマン能力しかない自分よりも、より高位な存在。尊敬すべき相手は家に迎え入れる……エウロペに住もうが、ケルティのシャーマンの掟を老婆は忘れていなかった。

『こんな雪の中、国境を越えて来るとはねえ……あんた、案内人は？』

と、老婆がケルティ語で尋ねると、かじかんだ手をこすっていた少年がかぶりを振った。

『いない。一人で山を越えてきた』

『ケルティからここまで一人で？　よくもまあ……死ななかったもんだ……けど、じゃ、あんた、誰にあたしの事、聞いて来たんだい？』

『誰にも何も聞いていない。国境を越えたら、足が勝手にこの家に向いた』

『精霊のお告げってわけか』

老婆は笑いながら、少年にあたたかなスープを渡した。

『精霊界にまで知られてるとは、あたしの商売も有名になったもんだ』

『あんた……何者だ？』

『おや、あんたの精霊はそこまでは教えてくれなかったのかい？』

少年は、スープの器を両手で持ち、暖をとった。

『俺は自分の進むべき道がわかる。どちらへ向かえばいいのかはわかる。だが、そこに何があるのかはわからない』

『いまいち役に立たない精霊をつけてるもんだ』

老婆は肥え太った体を大袈裟に揺らし笑った。

『あたしゃ、人買いだよ』
『人買いか』
恐怖も驚きも嫌悪もなく、少年が淡々と尋ねる。
『商売品は、ケルティからの越境者か？』
『そうだ』
老婆は少年の手のスープ皿を見つめた。手をあたためる為だけに使い、少年は一向にそれを口にしようとしない。飢えてもいるだろうし、体も冷えているだろう。だが、見ず知らずの人間が与えた食料を、不用意に口に運ぶような愚行をする気はないのだろう。
『あたしゃ、越境者に住む場所と食い物を与えてやる。一週間は客人として遇し、タダで面倒をみてやる。だけど、そっから先は一人で生きてもらわなきゃね、あたしゃ、慈善家じゃないんだから』
『右も左もわからない、南の言葉も知らない同胞を放り出すのか？』
『あたしのところに残りたい奴は残らせてやるよ。こっちの言葉を知りたきゃ、教えてもやる。けど、それも三ヶ月内だ。ここに滞在した日数分かかった金を、三ヶ月内にあたしに払えりゃ、それでよし。餞別をつけてあたしゃ旅立ちを見送ってやるよ。そん時、契約を結んでくれるんなら戸籍だってくれてやるさ。けど、三ヶ月たっても自立できない馬鹿なら……仕方ないから職場を斡旋してやって、自分で生きてもらうのさ』
『斡旋する仕事は、お貴族様の奴隷やらペット、ヤクザ組織の下働きやら肉体労働者、娼婦あたりか？』
老婆は肩をすくめた。
『馬鹿でもやれる仕事を斡旋してやるだけさ』
老婆はスプーンを持ってきて、少年の皿のものをすくって自分の口に入れた。中にあやしいモノは入っていないことを、自ら食べて示したのだ。
『食べな。毒も眠り薬もしびれ薬も入ってないよ。トアの神の名にかけて誓う。一週間は、あんたはあたしの客人だ』
老婆が彼女の部族神の名を出したので、多少ではあったが、少年

の警戒心がやわらぐ。少年は緑の目でジロリと老婆を睨むと、だいぶさめてしまったスープを口に運んだ。
『しばらく世話になる。三ヶ月以内には出てくから、こちらの言葉を教えてくれ。その時、戸籍も頼む』
『いいよ。あたしはこっちじゃ、ドロテで通っている。あんたの名は？』
赤毛の少年は布を巻いた自分の左の手を見つめながら、小さな声で言った。
『……アジャンだ』

赤毛の戦士アジャンは、老婆が世話をした越境者の中の、成功者の一人だ。
戸籍取得の礼金を毎年払っているだけではない。十五年先まで先払いをしているのだ。その経済力においても、義理堅さも、他の越境者から抜きんでている。
アジャンは、高額な価格で自分を売れる、名の知れた傭兵だ。エーゲラでは女王の私兵として活躍し、エーゲラ一（いち）の戦士の称号を貰っている。
現在は、女勇者セレスの従者として、シルクド、シャイナ、ジャポネ、インディラ、ペリシャ、トゥルク、エーゲラとユーラティアス大陸の主たる国々で魔族を討伐し、武勇を広めている。大魔王四天王のうちの三人までも女勇者一行は葬っているという評判だ。
大魔王討伐の旅が終われば、赤毛の戦士アジャンは英雄となる。比類なき戦士としてみなされる。しかし……
「女勇者様はこれからどうするんだい？」
老婆――ドロテが数え終えた金を袋に戻しながら、アジャンに尋ねる。
「ケルティに行くのかい？」
ユーラティアスで女勇者が未踏の国は、後三国。ケルティ、バン

キグ、シベルア。北方に存在している三国は同盟を結び、三国以外の国々を敵視し国境を閉ざしている。もう百年近く、北方と南の諸国との交流はないのだ。

北方諸国に入国するには北より通行許可書を発行してもらう必要があった。が、この百年、数えるほどしか許可書は発行されておらず、先代、先々代の勇者一行にすら許可書は出ていないのだ。

「行けるわけがない」

アジャンが鼻で笑う。

「北方が南に通行許可書を発行するものか」

自信たっぷりにそう答える男に、老婆はため息をついた。

「あたしも、ありえないとは思うんだけどね……世の中、ありえないことが起きちまうものさ。先祖から代々受け継いできたケルティの土地は、シベルアからの『ありえない侵略者』によってのっとられちまったんだからね」

「ありえんものは、ありえんさ。多分、アフリ大陸行きか、ユーラティアス巡回のやり直しになると思う」

「だと、いいね」

ドロテが預り証二十五万ゴールドと書いた紙を、アジャンに渡す。アジャンは戸籍取得の返戻金の他に、老婆に金を預けてもいた。

常に身軽に動けるよう、赤毛の戦士は手持ちには非常用の金袋しか持っていない。老婆以外の複数の金貸しにも金を預けているようだ。

有事に頼りとなる金を分散して、他人に預けているのだ。

「ありえないことが起きたら、どうするのさ？　奇跡的に許可書が発行されて、女勇者一行はケルティに向かうかもしれない」

「なら……従者をやめるだけだ」

預かり書を懐にしまい、赤毛の戦士は席を立った。

その顔に自嘲の笑みを浮かべながら。

「『英雄』の称号を貰えんのはもったいないが、『破滅』するよりはマシだからな。ケルティに戻ったら、俺は俺でなくなる……復讐

の為に生きねばならなくなる」
「『破滅』の方がマシかもしれないよ？　何度も言うけど、南にいたら、あんたの未来には『悪夢』しかない」
老婆はもう一冊の帳簿も閉じ、赤毛の戦士を見つめた。
「『悪夢』から『悪夢』へ。あんたは終わる事のない『悪夢』に溺れ、狂ってゆくだけだ」
「『破滅』よりはマシさ」
同じ言葉を繰り返し、赤毛の戦士は老婆に軽く手を振った。
「邪魔したな……大魔王を討伐したら、又、来る……或いは、従者を首になってから何処ぞで小金を稼げたらだな」

悪夢　2話

《開ケルナ……》

俺は森を走っていた。
薄暗い森の中を、ただひたすら家を目指し走っていた。

《開ケルナ……》

そこに……アジンエリシフが居るのだ。

病に伏せている母さんを守る為……
俺とアジャニホルトとアジフラウを少しでも遠くに逃す為……

彼女は片手剣を持って、家に籠もった。

父を売ったアジの男どもから、アジの誇りを守る為に……

《開ケルナ……》

アジャニホルトとアジフラウは森に隠してきた。

急がねば……

早く戻らなければ……

アジンエリシフが……

《開ケルナ……》

森の先に村がある……
俺の家はその外れだ……
家の中にはアジンエリシフが……

《開ケルナ！》

＊　＊　＊　＊　＊

「アジャン！」
激しく扉を叩く音。
赤毛の戦士アジャンはむっくりと寝台から起き上がった。
尚も廊下から扉を叩く音がする。

寝起きのところに耳に不快な音。最低な気分のまま、赤毛の戦士は扉を開けた。

「朝っぱらから、っせぇぞ、クソ坊主、何の用だ？」

廊下にはアジャンよりも更に大柄な男と、侯爵家のメイドがいた。筋骨逞しい大男――武闘僧ナーダはあきれたように糸目を細めた。

「朝？　知りませんでした、正午から二時間過ぎても、あなたにとってまだ朝の時間なのですね」

ボリボリと赤毛を掻く男を見つめ、やれやれと僧侶は頭を振った。

「時間感覚が狂うぐらいなら早寝をしなさいな。朝までセレスん家の侍女とベッドで励んでるから、馬鹿な勘違いをするんです」

頭痛を覚え、アジャンは額を押さえた。

「用があるならとっとと言え……ないなら失せろ。俺は寝直す」

「用事があるから起こしたのです。急用です。アジャン、あなたに来客です。とても愛らしい赤子を抱いた十代後半の女性が大事な話があるとあなたに面会を求めて来たそうですよ」

そうですよね？　と、問われ、侯爵家のメイドが小さく頷きを返した。

「二階の東の客間にお通しいたしました」

「彼女、五分以上、あなたを起こしていたんですよ。あなた、あなた付きのこの方に就寝中は絶対に入るなって命じてるんですって？　寝ボケて襲うとでも恐れてるんですか？　いぎたないあなたせのせいで、かわいそうにこの方、声が枯れちゃったんですよ。見兼ねて仕方なく、私があなたをお起こししたわけです。結婚話だか別れ話だか養育費請求だか知りませんが、セレスが王宮から帰ってくる前に話をすませておいた方がよろしいかと思いますが？」

客間の女性を見て、赤毛の傭兵は口元を綻ばせた。

立派なソファーに腰を下ろすのをためらったのだろう、女性は窓辺に佇んでいた。栗色の髪の、小柄なかわいらしい女性だ。麻の、

粗末だが、清潔感あふれる服をまとっている。
「ミーリアか……大きく、いや、別嬪になったものだ」
「お久しぶりです、アジャンさん……」
女性が嬉しそうに小走りに近寄って来る。その腕にはまだ四～五ヶ月の赤ん坊がいた。
「結婚したのか？」
赤毛の戦士は、瞳を細め、彼にしてはやさしく女性の手の中の赤子に微笑みかけた。
「はい……ニ年前に。どうにか父を安心させてやれました。この子は、ノルンと言います」
「ノルンか……」
赤ん坊を抱き直す女性を、赤毛の戦士は笑みと共に見つめた。
「抱いてもいいか？」
「はい」
にっこりと微笑む女性から赤子を手渡され、大柄な男はその腕の中に小さな命を抱いた。危なげなところは全くない。赤子の世話に慣れた手つきだ。軽く揺すってあやしてから、アジャンは赤子を母親の手に返した。
「可愛い子供だ、良かったな、サイスにまったく似ていなくて」
「まあ」
女性はフフフと笑い、悪戯の共犯者を見るように赤毛の戦士を見つめた。
「良かった、アジャンさんがいらしてくださって。不安で卒倒しそうだったのですよ。こんなきらびやかなお部屋で待たされるなんて夢にも思ってませんでした」
赤ん坊を抱く女性は、豪奢な調度品の並ぶ客間を苦笑まじりに見渡した。
「街の噂で、勇者様の従者様として侯爵家にご滞在と伺って、いてもたってもいられず裏口からお訪ねしたのですが……私のような身分の者が、まさかこのようなお部屋に案内されるなんて……」

「この家の人間はおかしいんだ、気にするな」
と、言ってから赤毛の戦士はニヤリと笑ってソファーを顎でしゃくった。
「絹張りだぞ。スプリングもいい。滅多に腰を下ろせるもんじゃないんだ、座っとけ」
「でも……粗相があって汚してしまったら……とても弁償できないし」
「ああ」
アジャンは再び赤ん坊をひょいと母親の手から奪った。
「抱いててやるから、座っとけ。記念だ」
「まあ」
小さく笑ってから、女性はおどけたように赤毛の戦士に頭を下げた。
「では、お言葉に甘えてありがたく……」
ソッと腰を下ろした女性は、ホウとため息をついた。
「雲の上にいるみたい。お貴族様のものは、やっぱり家具一つとっても違うものですね。これが本当のソファーなら、うちのなんかボロ布の塊だわ」
「もっと深く腰かけろ。緊張しっぱなしだったんだろ？」
「こんなソファー、座ったって緊張しどおしですよ、疲れなんかとれません」
フフフと笑って、女性は懐から取り出した金袋をソファーの前のテーブルに置いた。
「うちのボロ布椅子の方が落ち着きます。すぐにも帰りますよ、これをお渡ししたら……。アジャンさん……父がアジャンさんよりお預かりしていたモノ、お返しいたします。長い間、ありがとうございました」
「なに？」
赤毛の戦士に対し、女性は寂しそうな笑みを見せた。
「父は、先月の初めに亡くなりました」

「サイスが？」
女性は頷き、ソファーから立ち上がった。
「積荷の事故で……頭を打って、そのまま……」
「そうか……」
赤毛の戦士は静かに頭を垂れた。
「殺しても死にそうにないタフな男だったが……あっけないものだな。お悔やみ申し上げる」
「ありがとうございます。父はいつもあなたに感謝していました。父が第二の人生を歩めたのは、あなたのおかげです。本当にありがとうございました……」
「礼を言われるほどのことはしていない……」
赤毛の戦士は眉をしかめた。
「金を預かってもらっていただけだ……」
「必要な時いくらでも中身を使っていい、返せる時に中身を戻してくれればいいって条件で？　五年間、一回も返せともおっしゃらずに？」
「……使うアテが無かっただけだ」
「そのお金のおかげで、両足を失ったもと傭兵の父が小さいなりにも自分の店が持てたのです。ありがとうございます。半年前にようやく……元金に戻せたと、喜んでいたんですよ」
「サイスには昔……世話になったんだ。右も左もわからん小僧に、傭兵業を教えてくれた。契約の仕方も接客の仕方も、みな、あんたの親父が教えてくれた。その金はその礼だ。馬鹿正直に言っても、あの男、受け取ってくれんから『預ける』って言っただけだ。俺にとっては、もう無くなった金だ。ミーリア、持っていてくれ。その金が、いざって時、おまえを守るだろう」
「いいえ、アジャンさん、受け取れません。そのお金は傭兵のあなたが、傭兵の父に預けたものですもの」
女性はにっこりと微笑んだ。
「お返しいたします。父の跡をついだ、私の亭主、やり手なんです

よ。収入もぐんぐん伸びています。そんなはした金、もういりませんわ」

「はした金か」

女性は悪戯者っぽく笑い、赤毛の戦士の腕から赤子を受け取った。

「あまり格好いいことばかりなさるから、馬鹿な小娘があなたにのぼせちゃったんです。そんなお金持ってたら、私、昔みたいにあなたにフラフラまどいかねませんもの。いりませんわ。私、貞淑な妻でいたいんです。それに、あなたに振られるのは、もうこりごり」

裏口まで母子を送った赤毛の戦士は、彼女の姿が見えなくなるや屋敷の方角へと振り返り、庭の木の陰の大男を睨みつけた。

「いい趣味じゃねえか、クソ坊主。覗きは楽しいか？」

「別に覗いていたわけじゃありませんよ」

悪びれた風もなく武闘僧ナーダが、赤毛の戦士アジャンへと近づきゆく。

「『三十人殺しのサイス』のお嬢さんを拝見したかったので、裏口付近で武闘の鍛錬を積んでいただけです」

「何故、その名を知ってる？」

赤毛の戦士の炯眼に、怯える様子も見せずナーダは答えた。

「お嬢さんご本人が侯爵家の召使に父親の名を告げたのです。あなたへの面会を求められた時に、ね。自分は赤毛の戦士アジャンの傭兵仲間サイスの娘だ、借金を返済に来たってね。まあ、もっとも『三十人殺し』の娘だとまでは名乗りませんでしたけれどね」

「ちょいと前の傭兵の噂までご存じたぁ、さすがだな、大僧正候補様」

赤毛の傭兵がフンと鼻で笑う。

「総本山にこもりっきりだった世間知らずのくせに、普通は知ってるはずないことを、たまぁによくご存じだったりする」

「傭兵に関しては、前に、調べましたからね。あなたが私と一緒に

従者候補だった時代に……『三十人殺しのサイス』は、たった一人で、盗賊団からシルクド貴族の子息を助け出した方。一昔前、有名だった傭兵です。あなたに傭兵のイロハを教えた、先輩ですよね。怪我で引退した恩人に、あなた、お金を貸していたのですか」

ケッ！　と、毒づいてから、赤毛の傭兵は不機嫌そうに大男を見つめた。

「てめえ、ミーリアが訪ねて来た理由知ってたくせに、養育費だの何だの言いやがったのか」

「脅した方が寝起きがいいかと思って」

肩をすくめてから、武闘僧は両腕を組んだ。

「しかし、彼女、どう見ても、まっとうなご家庭の若奥様でしたね。つつましい家庭でつつましく生きていらっしゃる主婦の鑑。とても、あなたに数先万も貢がせてる女性には見えませんでした」

「なに……？」

「彼女に使ったわけではありませんね。あなたが、大金を貢いでいる相手は誰なのです？」

睨みつける赤毛の戦士に対し、武闘僧は涼しげな顔で言葉を続けた。

「勇者一行の従者たる者、身奇麗でいてもらわなくては困ります。清廉潔白とまでは求めませんけれどもね……いかがわしい商売をされていたり、魔薬や犯罪に手を染められていてはたまったものではありません。同じ従者の立場の私まで世間から白い目で見られてしまいますから。だから、従者候補の頃から、あなたの身辺は洗わせてもらっていました」

「……」

「……あなたの経歴からして、合ってないんですよ。収入と支出、そして貯蓄のバランスがね。たいへん強欲でお金にうるさいくせに、あなたの周囲には金の匂いがない。エーゲラの女王陛下からいただ

いた報酬で、それこそ豪邸が建てられたはずですのにね。賭け事をなさってるわけでも、女性に貢いでいるわけでもないのに、何で貧しいままなのでしょう？　いくら調べさせてもわからないのですよ」
「俺が金を何に使おうが、俺の勝手だ。おまえには関わりない」
「まあ、そう答えるだろうと思ってました。勇者の従者としてふさわしくない事をなさってるのでなければ……何にお金を使われても構わないんですがね……モヤモヤするんですよ。おおまかにでいいから、教えてくれません？」
「黙れ」
「……仕方ないですね」
武闘僧はニヤリと口元に笑みをつくり、わざとらしい明るく言う。
「勝手に推測します。あなたは、傭兵仲間を助けている篤志家なのだと」
「は？」
「先程の女性の身なりからいってもあの女性の父親に渡したお金は、あなたの懐具合からして微々たるものでしょう。ということは、あなたの使途不明金の大半は他の事に使われたわけです。負傷等の理由で引退を余儀なくされた仲間に、無利子無担保で金銭的援助をしまくっている慈善家なのではないかという推測もできちゃうんですよ」
「は？」
「美談ですね、格好いいですね、赤毛の戦士アジャン。困っている昔の仲間を助けている善人なのに、そんなことはおくびにも出さず自分はお金に汚い悪党だって悪ぶってるんですから」
「は？」
「この推測……セレスに話してあげましょうか？」
「なに？」
ニコニコニコとまるでカルヴェルのように笑いながら、ナーダが言う。
「喜ぶでしょうねえ、セレス。あなたが、慈悲の心をもって傭兵仲

間を助けてるって知ったら、大はしゃぎでしょう。お金にうるさいのも、困っている方を一人でも多く助ける為だったのですものねえ」

「ふざけるな」

赤毛の戦士は自分よりも体格の良い武闘僧を胸倉をつかみ、睨みつけた。

つかまれている方は、あいかわらず涼しい顔だったが。

「あの女によけいな事を言うな！　俺はそんな事には金は使っとらん！」

「でも、犯罪がらみでもないですよね？」

「知るか！」

「あ～あ、そうですか。わかりました、恥ずかしくって認められないんですね。あなたは、困っている昔の仲間の為に、稼ぎの全てをつぎ込んでしまう聖人級のおひとよしの善人だもの。善行を口にできないんですよね。あなたに代わって私がセレスに話しといてあげましょう」

「ナーダ！」

そこで武闘僧は表情を改め、真面目な顔をつくった。

「これだけ正直に答えてくだされば、もう追求しません……天地神明に誓って、恥ずべき犯罪には関与してませんよね？」

確認の為に問うように、武闘僧が尋ねる。

赤毛の戦士はいまいましげに舌打ちを漏らした。

「どこの神に誓えと言うのだ、俺には神などいない」

「では、あなたの良心に誓ってください」

「俺は……己に恥じる事なく生きている。金に関しても、そうだ」

「……」

武闘僧は肩をすくめた。

「ま、いいでしょう」

赤毛の戦士の手を強引に払い、武闘僧は静かに微笑んだ。

「私は……信仰を貫き通した上で、天下にも自分にも恥じない信念があるのなら、人間界の決め事などいくら破っても構わないと思っ

ています。善人に迷惑をかけないという条件つきですけれどもね……あなたがエウロペの法律を遵守してないのだとしても……これから少々物騒なことをなさるおつもりでも……勇者の従者たるあなたが信念をもってとる行動ならば、認めましょう。何かあっても、仲間としてうまくごまかしてあげます」

「きさま……」

赤毛の戦士がジロリと睨む。

「何を知っている？」

「さあ？」

武闘僧はにっこりと微笑んだ。

「そろそろ王宮からセレス達が帰ってくるんじゃないんですか？私の口は塞げても、この屋敷の侍女達の口は無理です。赤子を抱いた女性があなたを訪ねに、この屋敷にやって来たんです。セレスが誤解して騒ぎ出す前に、言い訳を考えておいた方がよくないですか？　それとも、やはり篤志家ってことにします？」

悪夢　2話（後書き）

「極光の剣　3話」で、本人も言ってますが、ナーダはアジャンをケルティィからの越境者であろうと予想していました。ケルティィに向かう事になれば面倒な事になるだろうとも思ってました。が、アジャンは腹をわって話してくれる気はないのだなと、この時はあっさり引いています。この後、ナーダにも心境の変化があって人との絆にこだわりだすのですが。

悪夢　3話（前書き）

この話は『女勇者セレス――夢シリーズ』の『夢と現実』の直後の話です。

悪夢　3話

《開ケルナ……》

森は深い……。
俺はまだ家に辿りつけずにいる。

《開ケルナ……》

急がなければ間に合わなくなるというのに……

《開ケルナ……》

間に合わない……
だが……
何に？
家に辿りつけねば、俺は何に間に合わなくなるというのだ？

《開ケルナ……》

吹き荒ぶ雪が見える……
目も開けていられないほど、激しい雪嵐。頬を叩きつける風が、

刺すように痛く冷たい……
俺の腕の中には冷たくなった骸がある。
俺は間に合わなかったのだ……
最愛の弟アジャニホルトは死んだ……
俺が逃げるのをためらったからだ……
俺が来るのが遅すぎたのだ……
アジャニホルトは吹き荒ぶ雪の中、帰らぬ俺を待ち続け……冷たい骸となった。

俺は……
思い出してしまったのだ……
シルクドで……
魔族に術をかけられ……
封じていたアジャニホルトの死の記憶を甦らせられてしまったのだ……

《開ケルナ……》

これは夢だ……
俺は過去の夢の中にいる……

家に戻ってはいけないのだ。

自宅の扉を開けてはいけない。
開ければ、俺は思い出してしまう。

扉の向こうの光景を……

俺が間に合わなかったせいで、アジンエリシフがどうなったのかを……

俺は思い出してしまう。

思い出せば、破滅だ。

俺は俺でなくなる。

血の掟に従い……俺は剣をとらねばならなくなる……

家族を殺した者どもに復讐を果たさねば……

皆、殺すのだ……

殺してやるのだ……

俺の心は……そう望んでいる……

＊　＊　＊　＊　＊

悪夢の後に訪れる現実もろくなものではない……赤毛の戦士アジャンは怒りをおさえられなかった。

暗い顔で説明を続ける武闘僧を殴り飛ばし、『御身様に何をする！』と、とりみだす老忍者ごとその場に見捨てて、赤毛の戦士は侯爵家へと走った。

「アジャン！」

「アジャンさん！」

アジャンが侯爵家より与えられた部屋に辿り着く前に、召使から彼の屋敷への帰参の報告を受けた女勇者セレスとシャオロンが駆け寄って来た。

背に大剣を背負い、『聖王の剣』を佩いたいつも通りの姿。怪我をしているようにも見えない。セレスが嬉しそうに仲間へと微笑みかける。

「良かった、無事だったのね、心配したのよ、アジャン」

セレスのそばの東国の少年も、嬉しそうな顔をしていた。強力な守護者が戻って来てくれた事に安堵しているのだ。この三日、セレスの護衛を務めていた従者は、少年一人だけだったのだ。

まったく歩調を緩めず足早に部屋に向かう赤毛の戦士を、二人は必死に追いかけた。

口を閉ざしたままの仏頂面。赤毛の戦士の機嫌が悪い事は誰の目にも明らかではあった。だが、セレスにはどうしても聞きたい事があった。

「ナーダとジライは……？　無事なの？」
赤毛の戦士はぶっきらぼうに答えた。
「ナーダはじきに戻るだろう。クソ忍者は知らん」
「ジライの行方はつかめなかったのね……？」
赤毛の戦士は立ち止まり、女勇者をジロリと横目で睨んだ。
「知らんと言っている」
「そう……わかったわ。ありがとう、二人の行方を追ってくれて……それで、あの、後でででいいんだけど……さきおとといの夜、庭で何があったのか教えて。約束したわよね？　全部話してくれるって。何でナーダとジライがいなくなったのか……」
「知らん！」
屋敷を揺るがしかねない大声に、セレスとシャオロンがひるむ。
「知りたきゃナーダに聞け！　俺には話すことなど何もない！」
「でも、あなた……全てが終わったら話してくれるって」
「知るか！」
眼だけで相手を殺しかねない凄まじい形相……
怯える二人を廊下に残し、赤毛の戦士は部屋へと進む。
そして、自分用の部屋に入ると、内面の怒りを撒き散らすかのように派手な音を響かせ、扉を閉ざしてしまった。

赤毛の戦士は、まず室内を見渡した。掃除の行き届いた部屋に、寝台、テーブル、ソファーなどの調度品。三日前から変わっている様子はない。
室内には彼しか居ない。彼専用の侍女も、今は中に入っていないようだ。
まっすぐにクローゼットまで進み、赤毛の戦士は中を改めた。そこには、旅用の、彼の荷物が入っているのだ。着替えや武器、金袋、宝石袋、証文など、彼にとって必要なものが入った革袋だ。
「それには、手をつけておらぬ」

突然かかった、背後からの声。
赤毛の戦士は振り返り、背の大剣ではなく腰に佩く『聖王の剣』を抜いた。狭い室内で戦うには、片手剣の方が適していると判断したのだ。
覆面に黒装束。背には忍刀、腰には大小の二刀を差した忍者ジライが、壁のそばに両腕を組んで佇んでいた。
「……よくも俺の前に顔を出せたもんだな……命が惜しくないと見える」
「我を殺る気か？」
「ったりまえだ、馬鹿！」
突くように斬りかかった赤毛の戦士の頭上を跳び越し、忍者は相手の背後をとって腰の『ムラクモ』を抜刀する。
素早く斬りかかってくる忍者の刀を、受け、流し、アジャンは舌打ちを漏らした。
体が重いのだ。
動きが常より遅い。
反応が遅れる。
だが、それは、相手も同様だった。
「どうもいかんな」
雨を降らす刀を振るいながら、忍者が苦笑を漏らす。思うように動けぬ、と。
右手のみで刀を持ち、左手を懐に入れるジライ。
警戒し、赤毛の戦士は後方に飛び退った。
忍者は左手を突き出し、掌のものを赤毛の戦士に見せつけた。油紙で包まれた、しかし、衝撃で中身が飛び散る丸い玉……見た目からは中が何かはわからなかったが、火薬玉ということはあるまい。煙玉か、目潰しか、眠り粉もしくはしびれ粉入りかのいずれかだろう。
「動けばこれを床に投げつける」
「くっ」

「少しは人の話を聞け。さきおととといから今日までのこと、口裏を合わせておかずとも良いのか？　きさま、ナーダと話しておらんようだが」

赤毛の戦士はカッとなり声を荒げた。

「クソ馬鹿女には、てめえらが、好きに話しゃいいだろう！　俺は何があったのか知らんのだ！　話しようもない！」

さきおととといの月の明るい夜のことだった。

セレスの屋敷の庭で、侯爵家の侍女と楽しい一時を過ごしていたアジャンは周囲に殺気を感じた。自分ではなく、他の誰かを狙う敵が庭に複数あった。

女を屋敷に戻らせ、戦いの気に満ちた場所へと向かうと……

忍者ジライが、同じ黒装束に覆面の忍者達と戦っていた。抜け忍ジライへの、忍の里の追い忍の制裁のようだった。

だが、弱い。

ジライ一人で困るような敵ではなさそうだったが、その場まで行って何もしないで帰るのもしゃくだったので、アジャンは、そばにいた忍を斬った。

『よせ、アジャン！　斬るな！』

と、ジライは叫んだ。

が、気にせず、アジャンは二人の忍のとどめをさし……

その後、眠りに落ちた。

先ほど、ナーダとその部下の老忍者に起こされるまでアジャンはずっと眠っていたのだ。

見たくもない夢。

繰り返される悪夢。
ずっと夢を見続けていたかどうかは、アジャンにもわからなかった。が、嫌な夢から覚め、教えられた現実は悪夢を凌駕する内容だった。

『この三日、あなたのその体をジライが使っていました。敵の邪法によって、あなたの体にはジライの魂が宿り、ジライの体には……今の彼とは違う魂が入っていたのです。先ほどジライが邪法を破ったので、めでたく二人とも元に戻れたわけですが……アジャン、あなたがシャーマン体質で良かった。ジライの魂が内に入り込んできた時にあなたが眠りについてくれたおかげで、二人とも無事だったんです。一つの肉体に確たる自我が二つあれば、反発しあい、喰いあう場合（ケース）もありますからね。あなたが他の魂を受け入れられる優秀な器で本当に良かった』

三日の間、ナーダはジライの肉体と行動を共にし、アジャンの肉体で目覚めたジライは二人の行方を追う為だと言ってセレスから情報収集資金を貰って後を追って合流し、ジライの肉体に邪法を解かせたのだそうだ。
ナーダは何か気がかりなことがあるのか、塞ぎこんだ顔をしていた。が、怒りまくるアジャンを見つめ、『まあ、事故みたいなものですけれど……タダ働きではあなたも業腹でしょうから、三日間のその肉体の使用料、ジライに代わって私が払ってさしあげましょうか？』などと冗談を言う不真面目さは健在だった。
アジャンは怒りを込めて武闘僧を殴り飛ばし、見知らぬ粗末な建物から飛び出し、街へ出て侯爵家へと戻ったのだった。

「きさまにこの体を乗っ取られていたのかと思うと……けったくそ悪すぎて虫唾が走るぜ」
「阿呆。自業自得じゃ。我は手を出すなと言うたのに、勝手に関わってきたおまえが悪い」
「それが迷惑をかけた仲間への謝罪の態度か？」
「きさまが、最後の忍を斬らねば邪法は発動しなかったのだ。きさまこそ、迷惑をかけて申し訳ございませんでした、と、我に謝る立場であろうが」
「何を！」
怒りの余り前に踏み出した赤毛の戦士に、忍者は掌の玉を見せつけ牽制する。
「安心せい。頼まれても、きさまの不器用な体など二度と使わんわ。図体ばかりデカくて動きはもっさりしておるわ、天井からぶら下がれんわ、錠前も開けられんわ、目潰しを堪えて目を開けてもいられんわの役立たず。毎日、四時間寝なければ動けんなど、効率も悪すぎじゃ」
「人の肉体を無能みたいに言うな！　クソ忍者！」
「無能とまでは言わんが、使えん肉体であった」
「てめえ！　やはり、ぶっ殺す！」
「勝負をしたいのなら、受けてやってもいいが……せめて三日後にいたそう。我が肉体もおまえのものも、本来の動きをしておらぬ。この三日、我等は自分の肉体を使えずにいた。まともに動けるようになるまで数日かかるだろう」
チッと舌打ちを漏らし、赤毛の戦士は聖なる武器を鞘に戻した。
「三日後にてめえをあの世に送ってやる」
「できるものならな」
忍者はフフフと笑う。
「今回のことだが……きさまの体を我が使っていたこと、セレス様に話しても構わぬか？」
「ンな気色の悪い話、広めるんじゃねえ！」

「承知した。ならば、我とナーダで適当な話をでっちあげるわ。きさま、後で文句言うなよ？」
「この三日のことなど、俺は知らん！　知らんことは話さん、それだけだ！」
ジライも『ムラクモ』を鞘に収めた。が、素早さを身上とする忍者の彼が、なかなかその場を動こうとしない。
相手の視線に、赤毛の戦士は苛立ちを覚えた。
「まだ何か用か、クソ忍者？」
「アジャン」
「何だ？」
「我はこの三日、その体を使わせてもらった。が、それだけだ。きさまの荷物には指一本触れておらんし、きさまの脳を読んでもおらん。魔力がないゆえ読めなんだということもあるが……きさまの領域は侵しておらぬ」
「……」
「我はきさまなぞには関わらぬ。我はきさまなど知らぬわ」
忍者が左手をあげ、掌のものを床に叩きつける。
赤毛の戦士は顔を覆い、目を閉じた。
が……
衝撃は訪れず、周囲の空気に濁りもない。
赤毛の戦士が警戒しつつ目を開いた時には、黒装束の忍者の姿は部屋にはなく、床の上には潰れた油紙が転がっていた。中から何かが出たような形跡はない。最初から中身は空だったのだろう。
赤毛の戦士は髪を掻き、床の上のものを靴底で踏みにじった。

アジャンは、シルクドとインディラで魔族に体を奪われていた。
魔族はアジャンの肉体を勝手に使おうとしたばかりか、脳を読み、感情や記憶を暴こうとした。
心に封じていた記憶や思いにも、無遠慮に触れようとしてきたの

だ。
アジャニホルトの死の記憶を甦らせられたのも、その時だ。
実に……不快な体験だったのだ。

それと同じ体験を、忍者ジライもシャイナでしたのだと聞いている。
四天王サリエルに肉体を奪われ、勝手に心も記憶も読まれ脳を共有され……サリエルが自分の肉体を使って部下を斬る様を見せつけられたのだそうだ。

内面には触れていない……
あそこまで下種な真似は自分はしていない……
荷物を勝手に開き、過去や秘密を暴こうともしなかった……
忍者はその事を伝えたかったのだろう。

赤毛の戦士は寝台を見つめた。

今日も、又、悪夢を見るだろう。
アジャン自らが封じた記憶。
甦えらせろと記憶はわめき、暴れている。

しかし……

心の内に封じているものは、今回も暴かれずにすんだ。

ならば、封じ続けるだけだ……

正気を保って生きていく為に。

復讐心に憑かれ、己を失わぬ為に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4218s/

女勇者セレス

2011年10月14日00時34分発行